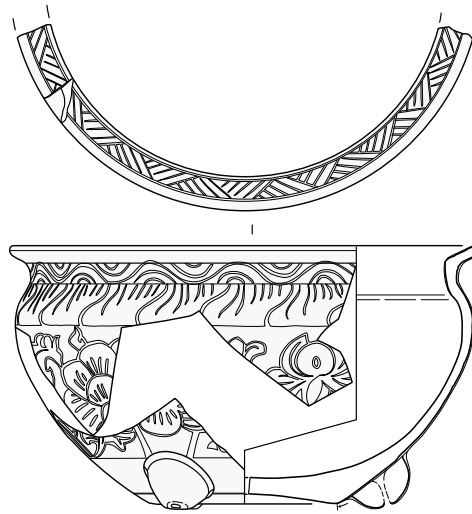


は ん ざん ばる  
平安山原A遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度） —



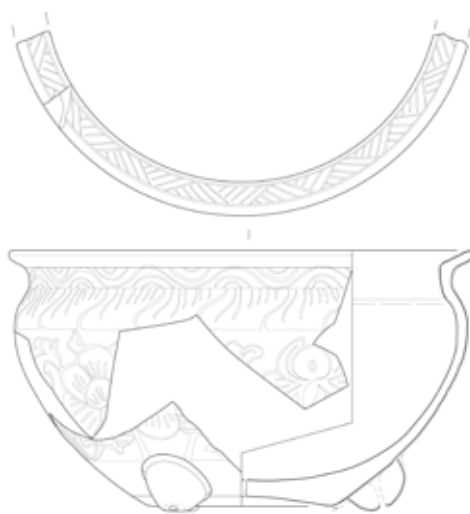
青磁香炉 (18 ~ 19c)

2016 (平成28) 年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

は ん ざん ばる  
平安山原A遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度） —



青磁香炉 (18 ~ 19c)

2016 (平成28) 年3月

沖縄県 北谷町教育委員会



# はじめに

本報告書は、桑江伊平土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査として、平成19年度から23年度にかけて調査区を分割し、記録保存を行った平安山原A遺跡発掘調査についての成果をまとめたものです。

本遺跡は、平成15年3月に返還された在沖米軍基地キャンプ桑江北側地区について、返還前に実施した試掘調査によって発見された異なる時代の痕跡が重複する遺跡です。

弥生時代に相当する貝塚時代後期の頃は、隣接する他遺跡との関連を示す土器や石器等の遺物の出土とともに埋葬地であったことが判明し、被葬者には先史時代に見られる習俗の抜歯が認められております。

近世以前の集落は、建物等の柱穴群や耕作地に伴うものと見られる石列や溝、さらに、集落の外れから、刀子が刺さった状態の20代前半の成人女性と推測される埋葬人骨が発見されました。

1945年の米軍沖縄上陸後、数年間のうちに行われた基地整備の造成によって地中に埋もれた旧平安山集落跡では、近世から近代にかけて様々な時代背景による集落形成の規制や計画性、耕作地との区割、屋敷跡など平安山祝女殿内を中心としたムラの痕跡がありました。

その中には、綱引きが行われた道やその際に東西に分けた道、屋敷に伴う井戸や排水溝など、出土品からは証言や現存する企業の記録から浮かび上がる暮らしぶりが窺えます。

本発掘調査によって得られた成果は、先史時代から現代に至る本町の歴史・文化についての文化財調査、地名調査、町史編纂の成果を結びつけ、裏付けるものであります。

このことは、町民はもとより多くの方々に本町の歴史や文化を実感し、理解する資料の一助となれば幸いです。さらに、本町においては、現在、町立博物館建設を進めており、開館された暁には、さらに活用され町民の心の豊かさと魅力あるまちづくりに繋がるものと考えております。

末尾になりましたが、様々なご指導やご助言、ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成28年3月

北谷町教育委員会  
教育長 川上 啓一

# 例 言

1.本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成19年度、21年度～23年度に実施した「平安山A遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。

2.本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図(昭和54年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。

3.遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。(敬称略)記して感謝申し上げます。

脊椎動物遺体 樋泉 岳二 (早稲田大学教育学部)  
 貝類遺体 黒住 耐二 (千葉県立中央博物館)  
 人骨 藤田 祐樹 (沖縄県立博物館・美術館)  
 石質 大城 逸朗 (おきなわ石の会)  
 堆積学 松田順一郎 (史跡鴻池新田会所管理事務所)

4.樋泉岳二氏・黒住耐二氏・藤田祐樹氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。

5.放射性炭素年代測定 パリノ・サーヴェイ (株)

鉄製品分析 株式会社文化財サービスに依頼した。

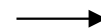
6.本報告書の編集は、土岐耕司の協力を得て、島袋春美が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第I章 第II章 第III章 第1節	松原 哲志
第III章 第2節 第5節 (24)	山城 安生
第III章 第3節2 (9) 第5節 (3・18・19・28・29) 第V章 第4節	島袋 春美
第III章 第5節(10～15)	比嘉 優子
第III章 第3節2 (7・8・10) 第5節 (20～23・27)	上地千賀子
第III章 第5節 (4・16・17)	呉屋 広江
第III章 第5節2 (1・2・5～9)	北條 真子
第III章 第2節 第3節1・2 (1～6) 第4節 第5節 (25・26) 第V章 第1～3節	土岐 耕司

7.本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。

・注記 HA ①地区 (平安山原A遺跡 H19 年度調査)

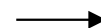
遺跡名	袋台帳番号	地区	グリッド	遺構名	層位	取上日
⑥平A	台15	B4	L16	0025SD		08.02.13



⑥平A台15,B4L16,  
0025SD- 08.02.13

・注記 HA ②地区 (平安山原A遺跡 H21 年度調査)

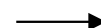
遺跡名	取台番号	グリッド	遺構	層位	取上日
⑭平A	839	B-20	加屋敷		H220112



⑭平A台839,B-20  
加屋敷, , H220112

・注記 HA ③地区 (平安山原A遺跡 H22 年度調査)

遺跡名	台帳番号	グリッド	遺構番号	層	調査日
⑰平A	764	C12	S-8	暗褐色砂質土	100122



⑰平A -764,C12,  
S-8, 暗褐色砂,100122

・注記 HA ④地区 (平安山原A遺跡 H23 年度調査)

遺跡名	台帳番号	グリッド	遺構番号	層位	調査日
⑰平A	2066	E18	S-8	Ⅲ層	100122



⑰平A 2066,E18  
Ⅲ層,H23.12.06

・遺構記号

性格	溝・河川	土壌	柱穴	石列	貝集積	攪乱	その他
遺構記号	S D	S K	P	S L	S S	S Z	S X

8.本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なる。

(伊礼原D遺跡(2013)例言(沖縄・九州時代区分対象表)参考)

9.本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会が保管している。



HA①(手前側)と伊礼原D遺跡(奥側)(北西より)



HA① 完掘全景(南西より)



HA②と北谷の市街地（浜川方面を望む）



HA② 1 面目 祝女殿内屋敷跡周辺（南西より）



祝女殿内 屋敷跡 (北西より)



屋敷跡 検出作業風景



井戸 01 断割状況 (南西より)



II層盛土上に構築された上水路 (西より)



バショウ葉脈痕のあるコンクリート蓋





アガリミチ付近 (南西より)



三良又吉小・照屋先生 屋敷付近 (西より)



照屋先生 屋敷跡の収納坑 (北東より)



砂層出土人骨と調査区壁面 (北西より)



2 面目ピット群 検出状況 (南東より)



HA③と北谷の市街地（嘉手納基地方面を望む）



HA③と北谷の市街地（役場方面を望む）



自然流路 完掘全景 (西より)



蒲伊礼小 屋敷跡 (南西より)



屋敷間を走るワキミチ 2 (南より)



大屋 屋敷跡 (西より)



II層上から掘り込まれる戦前遺構 (南西より)



HA④と北谷の市街地（美浜方面を望む）



HA④-4・5区1面目 完掘（北より）



HA④ 主要部完掘全景 (北西より)



HA④ 遺構密集地区 完掘 (北西より)



HA④-1 ~ 3区 完掘 (北西より)



HA④-11区 完掘 (南東より)



HA④-12区 自然流路完掘 (北より)



人骨 12 検出 (南西より)



刀子が生刺された状態 (北東より)



人骨 11 検出 (北東より)



人骨 01 検出 (北西より)



人骨 02 検出 (西より)



人骨 03 検出 (南西より)



人骨 04 検出 (南西より)



人骨 05 検出 (北西より)



人骨 06 検出 (北西より)



人骨 07 検出 (南より)



人骨 08 検出 (西より)



HA② 磨製石斧 出土状況



HA② 磨石 出土状況



HA④ 鉄刀 出土状況



HA① 青磁碗 出土状況





HA① ウマ下顎骨 出土



HA① イノシシ or ブタ下顎骨 出土



HA④ ウシ頭骨 出土



HA① 簀 出土



HA② 陶製煙管・骨製筭 出土



HA④ 石製煙管 出土



HA② 沖縄産陶器・靴底 出土



HA②「北谷」陶製章 出土



碗



小碗



皿



卷首図版 13 本土産磁器（近代）・沖縄産無釉陶器

鉢・壺・甕類他



壺・甕・瓶類他



碗①



碗②



小碗・急須



皿・酒器・火取・杯



鍋・火炉・香炉



瓶・灯明具



卷首图版 15 煙管·簪



石斧



敲石・磨石・クガニ石



砥石



牛乳瓶 (左3点:5勺スクルー瓶、最右:1合瓶、S=1/2)



美顔水【桃谷順天館】

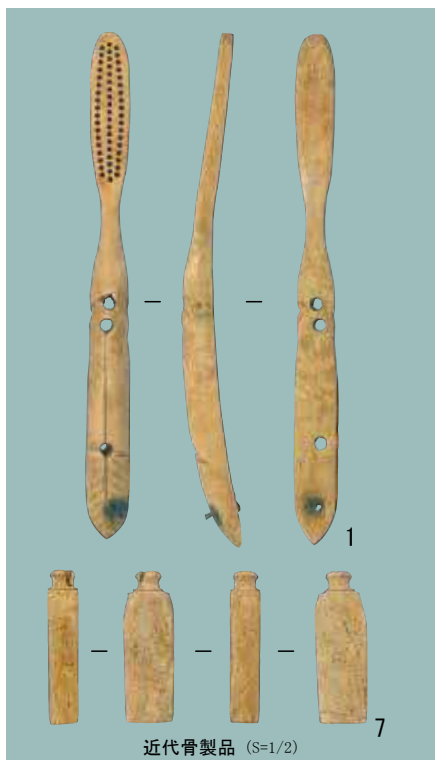
メヌマポマード【井田京栄堂】

バニシングクリーム【ウテナ】

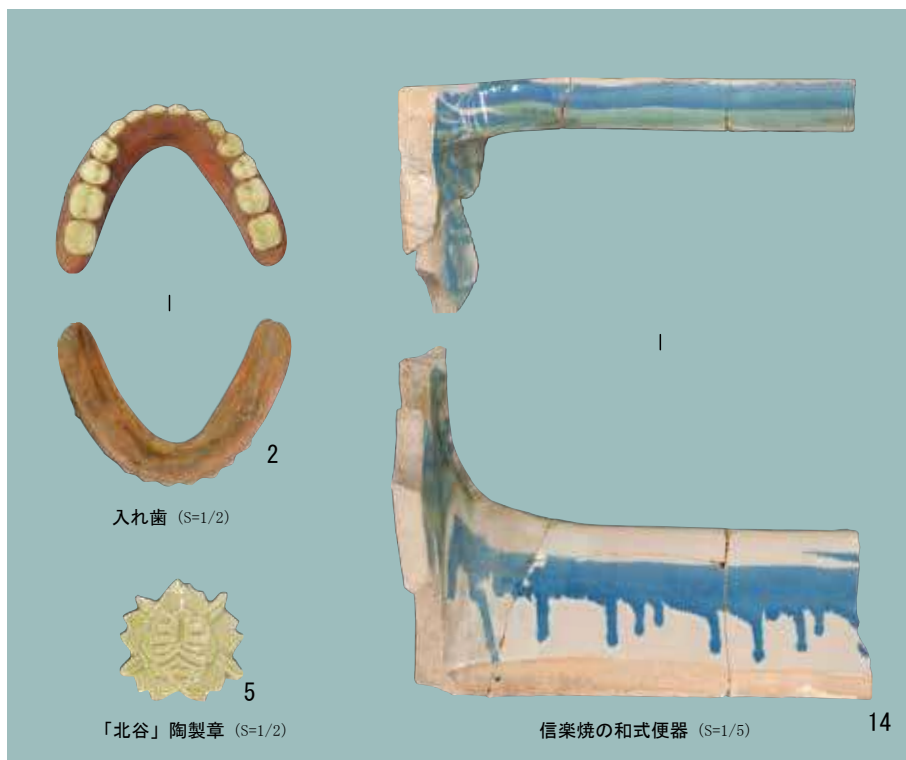
不明【平尾分店】

味の素【鈴木商店】

底面にエンボスのある瓶 (S=1/2)



近代骨製品 (S=1/2)



入れ歯 (S=1/2)

「北谷」陶製章 (S=1/2)

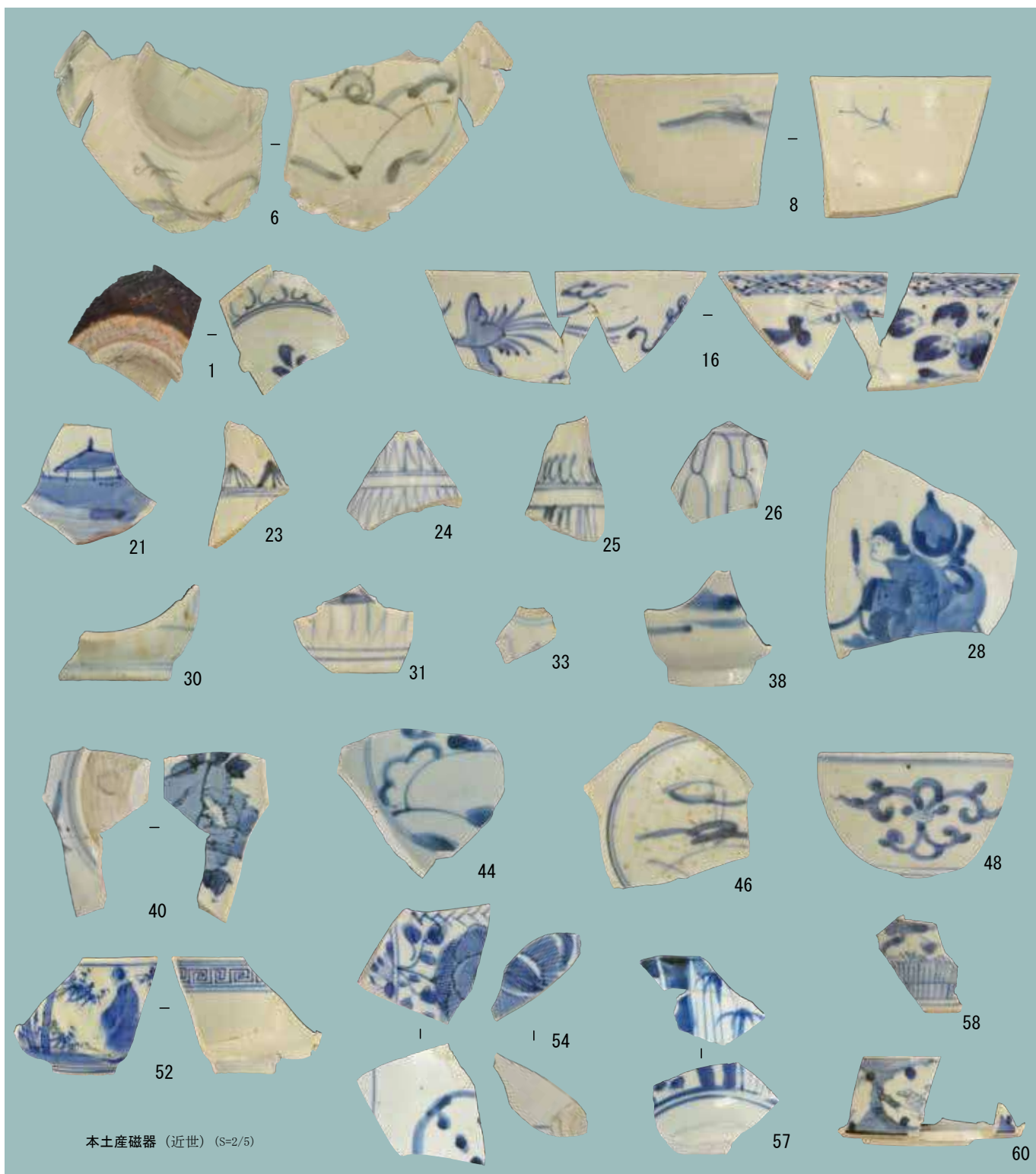
信楽焼の和式便器 (S=1/5)

14



卷首図版 18 本土産磁器 (近代) (S=1/3)

(番号は図番号と一致)



卷首図版 19 近代玩具・本土産磁器 (近世)

(番号は図番号と一致)





卷首図版 20 本土産陶器 (近世) 1 (S=1/3)

(番号は図番号と一致)



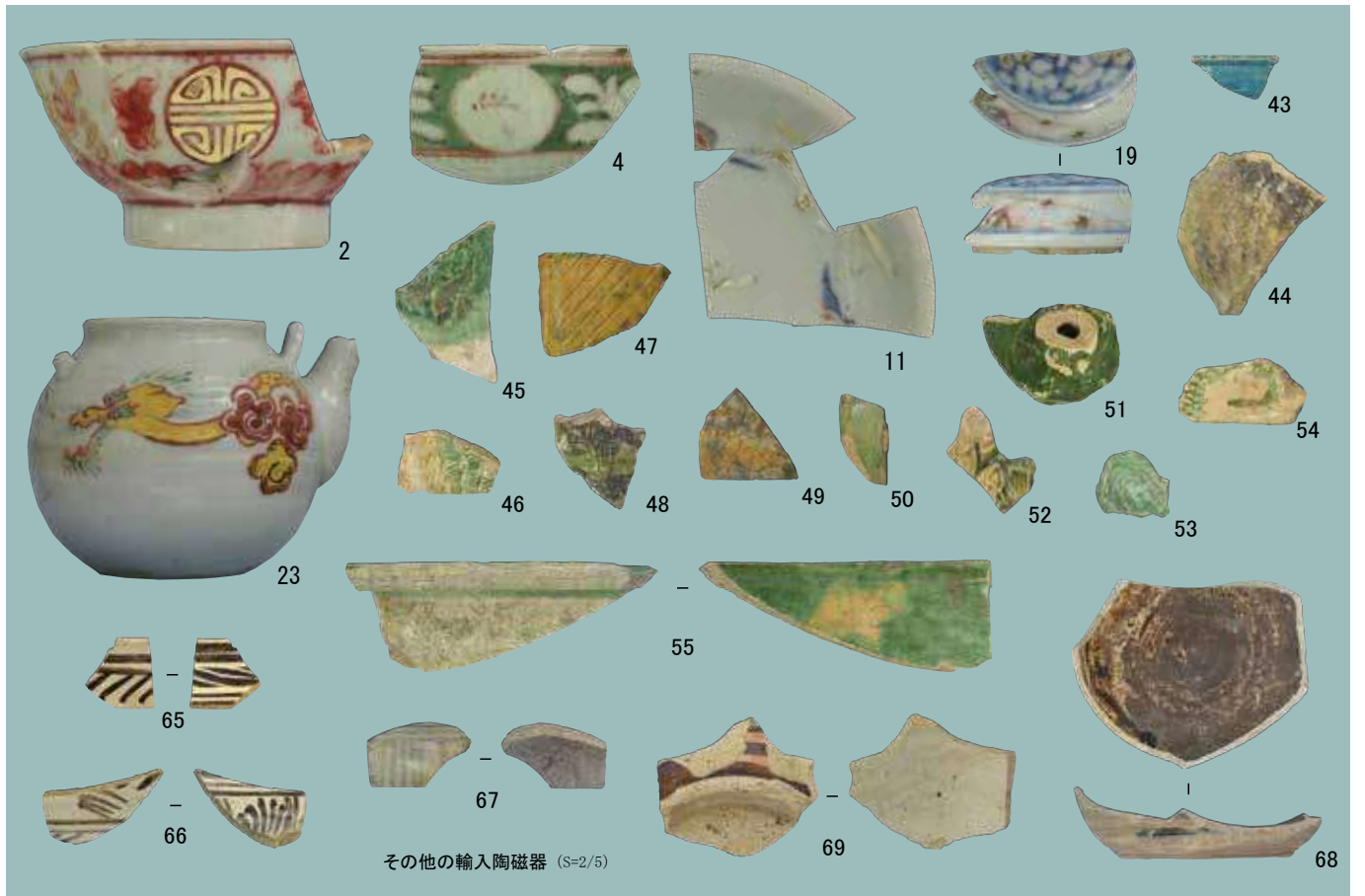
本土産陶器（近世）2（63・65はS=1/4、それ以外はS=1/3）



染付（S=2/5）

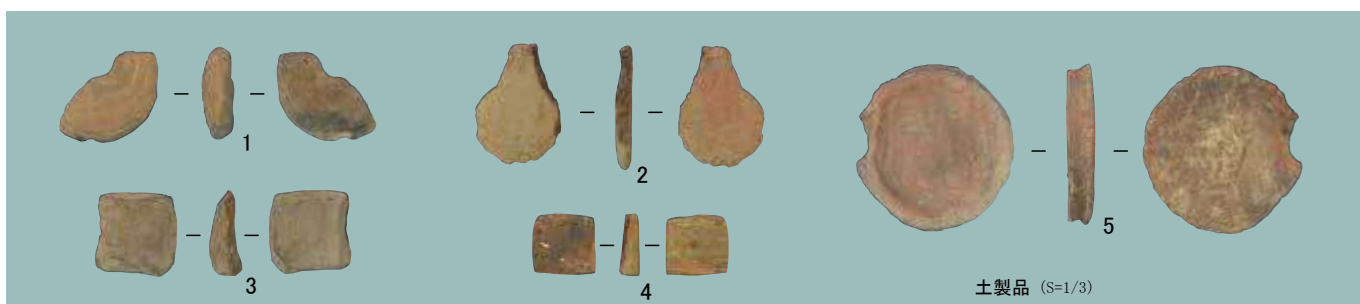
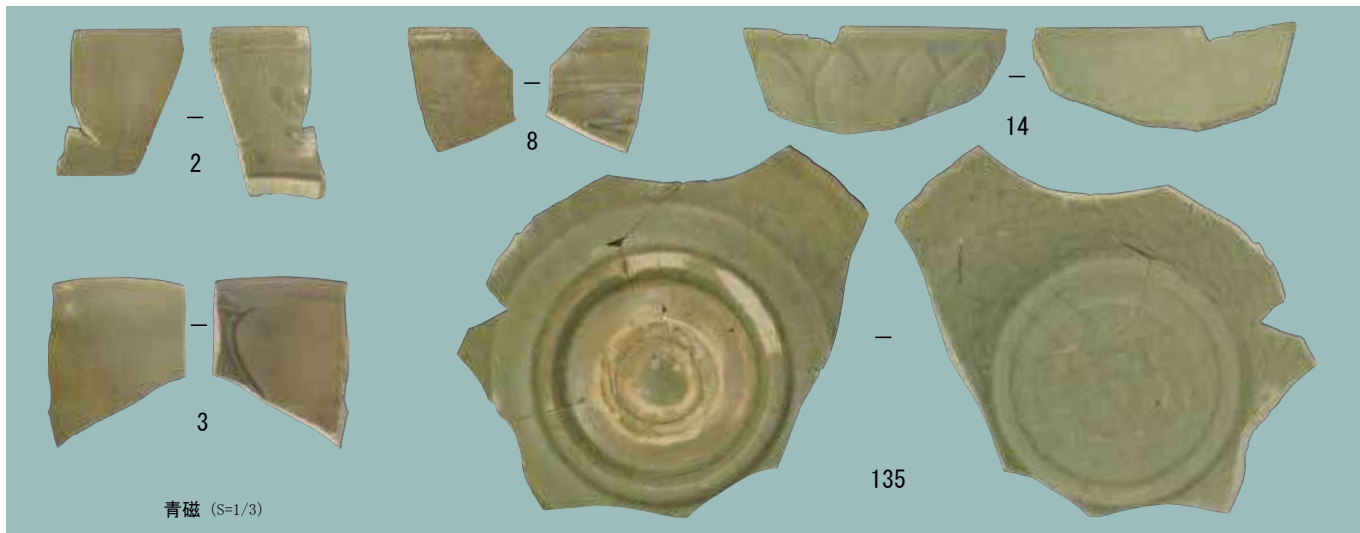
卷首図版 21 本土産陶器（近世）2・染付 1

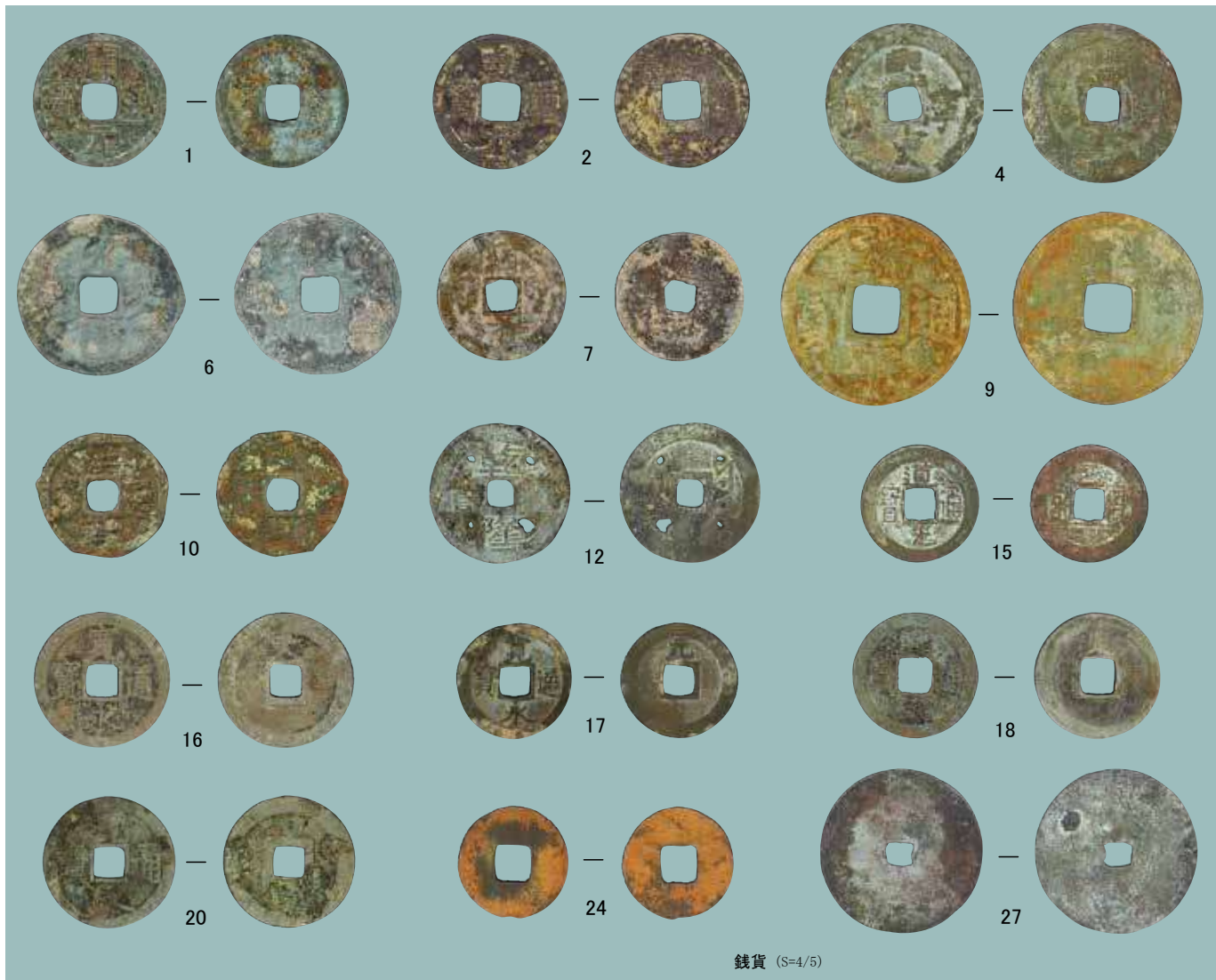
（番号は図番号と一致）



卷首図版 22 染付 2・その他の輸入陶磁器

(番号は図番号と一致)

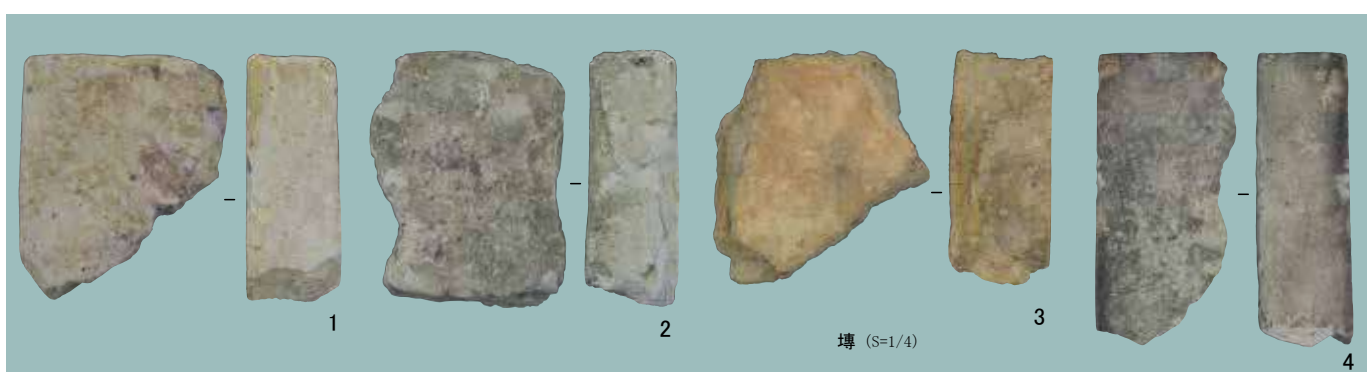




銭貨 (S=4/5)



硯 (S=2/5)

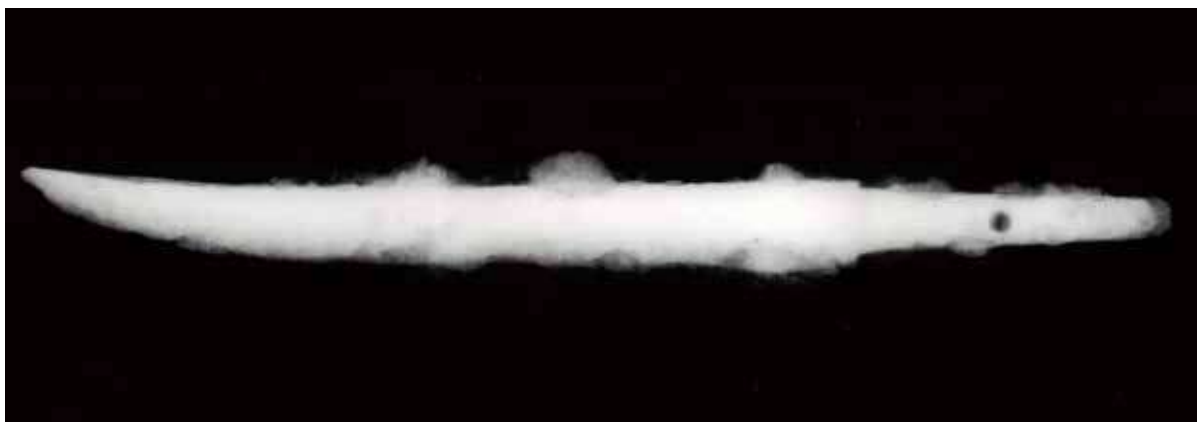


埴 (S=1/4)



鉄製短刀 (S=2/5)

1



鉄製短刀のX線写真 (S=2/5)



鉄製刀子 (S=2/5)

2



背骨に刺さった状態の刀子 (近景)



卷首図版 26 貝製品 (S=1/2)

(番号は図番号と一致)



卷首図版 27 貝類遺体 1 (巻貝)

(番号は第 129 表と一致)





卷首図版 28 貝類遺体 2 (巻貝)

(番号は第 129 表と一致)



卷首図版 29 貝類遺体 3 (巻貝)

(番号は第 129 表と一致)

〈巻貝〉

ユキノカサ科 (2 リュウキュウウノアシ) ヨメガカサ科 (3 オオベッコウガサ) ミミガイ科 (4 イボアナゴ、5 マアナゴ) リュウテン科 (7 チョウセンサザエ、8 チョウセンサザエの蓋、9 ヤコウガイ、10 ヤコウガイの蓋、11 カンギク、12 カンギクの蓋、13 オオウラウズ、15 リュウテン、16 コシダカサザエ) ニシキウズ科 (17 ムラサキウズ、18 ニシキウズ、19 ギンタカハマ、20 コシダカギンタカハマ、22 サラサバテイラ、23 オキナワイシダタミ、24 ムラサキイチモンジ?) アマオブネ科 (26 イシダタミアマオブネ、27 ヒメイシダタミアマオブネ、28 キバアマガイ、29 リュウキュウアマガイ、30 アマオブネ、31 マルアマオブネ、32 オオマルアマオブネ、33 アラスジアマガイ、35 ニシキアマオブネ、38 カノコガイ、39 ニセヒロクチカノコ) オニノツノガイ科 (41 オニノツノガイ、42 コオニノツノガイ、43 メオニノツノガイ、45 クワノミカニモリ、46 カヤノミカニモリ) フトヘナタリ科 (51 センニンガイ、52 マドモチウミニナ、53 フトヘナタリ) ウミニナ科 (54 リュウキュウウミニナ) ゴマフニナ科 (60 ゴマフニナ) スイショウガイ科 (62 ムカシタモト、65 ネジマガキガイ、66 マガキガイ、67 イボソデ、68 マイノソデガイ、69 スイショウガイ、70 アツソデ、72 クモガイ、74 スイジガイ、75 オハグロガイ、76 ベニソデ) ムカデガイ科 (78 リュウキュウヘビガイ、79 フタモチヘビガイ) タカラガイ科 (80 キイロダカラ、81 ハナピラダカラ、82 ナツメモドキ、83 コモンダカラ、84 ハナマルユキ、85 ヤクシマダカラ、86 ホソヤクシマダカラ、90 ヒメホシダカラ、91 ホシキヌタ、95 ハチジョウダカラ? (幼貝)、96 ヤナギシボリダカラ) タマガイ科 (99 トミガイ、100 ヘソアキトミガイ、101 シロヘソアキトミガイ、102 リスガイ、104 ホウシュノタマ、105 コハクダマ、107 アラゴマフダマ) ヤツシロガイ科 (108 イワカワトキワ、109 ウズラガイ、110 スクミウズラ) フジツガイ科 (111 ミツカドボラ、112 サツマボラ、113 シノマキ、115 シオボラ、116 オオゾウガイ、117 ホラガイ、119 フジツガイ) オキニシ科 (120 オキニシ、121 シワクチナルトボラ、122 オオナルトボラ、123 シロナルトボラ、125 イワカワウネボラ) トウカムリ科 (126 アメガイ、127 ヒナヅル) アッキガイ科 (128 ガンゼキボラ、131 シラクモガイ、132 ツノテツレイシ、133 ツノレイシ、134 レイシ類、135 ムラサキイガレイシ、136 アカイガレイシ、137 シロイガレイシ、138 ハナワレイシ、139 レイシダマシモドキ、140 コイワニシ、141 キイロイガレイシ) オニコブシ科 (143 オニコブシ、144 コオニコブシ) フトコロガイ科 (145 フトコロガイ) オリイレヨフバイ科 (147 ヒメオリイレムシロ、148 イボヨフバイ、149 アワムシロガイ、150 オリイレヨフバイ) エゾバイ科 (151 シマベッコウバイ) イトマキボラ科 (153 イトマキボラ、154 ヒメイトマキボラ、155 ナガイトマキボラ、156 リュウキュウツノマタ、157 ツノマタモドキ、158 マルニシ、159 チトセボラ) ショックコウラ科 (162 ヒメショックコウラ) マクラガイ科 (163 サツマビナ) ミノムシガイ科 (166 オオミノムシガイ) フデガイ科 (167 イモフデ、168 チョウセンフデ、169 オオオビフデ、170 ヒメチョウセンフデ、171 コガネヤタテ、172 シロオビヤタテ) イモガイ科 (173 マダライモ、174 サヤガタイモ、177 シロマダライモ、178 キヌカツギイモ、179 ハナイモ?、180 イボシマイモ、181 ヤセイモ、183 ヤナギシボリイモ、184 サラサミナシ、185 カバミナシ、187 ナガサラサミナシ、190 ハイイロミナシ、191 ヤキイモ、192 サラサミナシモドキ、193 アジロイモ、194 タガヤサンミナシ、197 ツボイモ、198 ニシキミナシ、199 アンボイナ、200 ナンヨウクロミナシ、201 ミカドミナシ、202 アカシマミナシ、203 ゴマファイモ、204 コモンイモ、208 クロザメモドキ、209 アンボンクロザメ、210 クロフモドキ、213 中形イモ) タケノコガイ科 (217 タケノコガイ、218 リュウキュウタケ) タマゴガイ科 (219 カイコガイ) ナツメガイ科 (220 ナツメガイ) タニシ科 (221 マルタニシ) ヤマタニシ科 (222 オキナワヤマタニシ) トウガタカワニナ科 (224 トウガタカワニナ ※ a は幼貝、225 ヌノメカワニナ、227 ヨシカワニナ?、228 スグカワニナ) カワニナ科 (230 カワニナ) アフリカマイマイ科 (231 アフリカマイマイ) ナンバンマイマイ科 (232 シュリマイマイ、236 カツレンマイマイ) オナジマイマイ科 (238 パンダナマイマイ、239 オキナワウスカワマイマイ)

(番号は第 129 表と一致)

巻貝・陸産貝名称 (巻首図版 27 ~ 29)



卷首図版 30 貝類遺体 4 (二枚貝)

(番号は第 129 表と一致)



巻首図版 31 貝類遺体 5 (二枚貝)

(番号は第 129 表と一致)

〈二枚貝〉

フネガイ科 (1 エガイ、2 フネガイ、3 クロミノエガイ、4 オオミノエガイ、5 オオタカノハ、6 ベニエガイ、7 オオカリガネエガイ、8 ハイガイ、9 リュウキュウサルボオ) イガイ科 (11 リュウキュウヒバリ) ウグイスガイ科 (12 クロチョウガイ、14 ミドリアオリ) シュモクアオリ科 (15 シュモクアオリ、16 カイシアオリの一種) イタヤガイ科 (17 リュウキュウオウギ) ミノガイ科 (18 ミノガイ) ウミギク科 (20 メンガイ類) イタボガキ科 (21 オハグログキ、22 オハグログキモドキ、23 ノコギリガキ、24 シロヒメガキ、25 シマガキ) ツキガイ科 (27 ツキガイ、28 クチベニツキガイ、29 ウラキツキガイ、30 ヒメツキガイ、31 カブラツキガイ) ベッコウガキ科 (a シャコガキ) キクザル科 (34 カネツケザル、35 ケイトウガイ、36 シロザル、37 キクザル類) ザルガイ科 (38 リュウキュウザルガイ、39 カワラガイ、40 オキナワヒシガイ、41 オオヒシガイ、43 リュウキュウアオイ) シャコガイ科 (44 オオシラナミ、46 ナガジャコ、47 ヒレジャコ、48 ヒメジャコ、49 シャコガイ類、51 シャゴウ) バカガイ科 (52 リュウキュウバカガイ、53 タママキ、54 ユキガイ) チドリマスオ科 (56 イソハマグリ、57 クチバガイ類、58 ナミノコマスオ) ナミノコガイ科 (59 リュウキュウナミノコ) ニッコウガイ科 (60 ニッコウガイ、61 ヒメニッコウガイ、62 ミガキヒメザラ、63 アマサギガイ、64 リュウキュウシラトリ、66 ヌノメイチョウシラトリ、67 サメザラ、68 モチヅキザラ) アサジガイ科 (69 サメザラモドキ) イソシジミ科 (70 リュウキュウマスオ、71 マスオガイ) シジミ科 (72 シレナシジミ) マルスダレガイ科 (73 ヌノメガイ、74 オオヌノメガイ、75 アラヌノメガイ、76 カノコアサリ、77 ホソスジイナミ、78 アラスジケマン、79 ユウカゲハマグリ、80 ウスハマグリ類、81 ケショウオミナエシ、82 オイノカガミ、83 ダテオキシジミ、85 リュウキュウアサリ、86 ヒメアサリ、87 スダレハマグリ、88 トウドウマリハマグリ、89 ハマグリ類似種、93 オミナエシ、94 レモンハマグリ?、95 マルオミナエシガイ) トマヤガイ科 (98 トマヤガイ)

(番号は第 129 表と一致)

二枚貝名称 (巻首図版 30 ~ 31)

# 本文目次

はじめに

例言

巻首図版

第Ⅰ章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 層序	14
第3節 近現代の遺構と出土遺物	35
第4節 近世以前の遺構	60
第5節 近代以前の出土遺物	81
第Ⅳ章 科学的分析	396
第1節 平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要	396
第2節 平安山原A遺跡の調査で得られた貝類遺体	408
第3節 平安山原A遺跡より出土した人骨について	424
第4節 平安山原A遺跡の自然科学分析	432
第5節 平安山原A遺跡ビーチロックの年代測定	439
第6節 平安山原A遺跡鉄製品分析結果報告	442
第Ⅴ章 まとめ	444
第1節 遺物・遺構が示す近代化	444
第2節 戦前の平安山ノロについて	453
第3節 各期遺物の平面分布の検討	455
第4節 出土遺物のまとめ	463

CD収録

- ・平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の同定結果
- ・平安山原A遺跡遺物台帳

## 図版目次

巻首図版1 平安山原A遺跡(HA①地区)遠景	巻首図版17 ガラス瓶・近代骨製品・近代日用品
巻首図版2 平安山原A遺跡(HA②地区)遠景	巻首図版18 本土産磁器(近代)
巻首図版3 平安山原A遺跡(HA②地区)	巻首図版19 近代玩具・本土産磁器(近世)
巻首図版4 平安山原A遺跡(HA②地区)	巻首図版20 本土産陶器(近世)1
巻首図版5 平安山原A遺跡(HA③地区)遠景	巻首図版21 本土産陶器(近世)2・染付1
巻首図版6 平安山原A遺跡(HA③地区)	巻首図版22 染付2・その他の輸入陶磁器
巻首図版7 平安山原A遺跡(HA④地区)	巻首図版23 青磁・円盤状製品・土器・土製品
巻首図版8 平安山原A遺跡(HA④地区)	巻首図版24 銭貨・硯・埴
巻首図版9 人骨12(HA④地区)	巻首図版25 鉄製品
巻首図版10 IV層中で検出された人骨	巻首図版26 貝製品
巻首図版11 IV層中で検出された人骨・遺物出土状況	巻首図版27 貝類遺体1(巻貝)
巻首図版12 遺物出土状況	巻首図版28 貝類遺体2(巻貝)
巻首図版13 本土産磁器(近代)・沖縄産無釉陶器	巻首図版29 貝類遺体3(巻貝)
巻首図版14 本土産陶器(近世)・沖縄産施釉陶器	巻首図版30 貝類遺体4(二枚貝)
巻首図版15 煙管・簪	巻首図版31 貝類遺体5(二枚貝)
巻首図版16 石器	

図版1	整理作業風景	5	図版55	瓦質土器(b)	173
図版2	遺跡外観(浜川方面より)	13	図版56	その他の不明陶器	175
図版3	遺跡外観(美浜方面より)	13	図版57	本土産磁器(近世)1	181
図版4	祝女殿内屋敷	33	図版58	本土産磁器(近世)2	183
図版5	収納坑内遺物	43	図版59	本土産磁器(近世)3	184
図版6	HA② 埋甕内食料残滓 検出(東より)	43	図版60	本土産陶器(近世)1	191
図版7	HA③ 埋甕内食料残滓 検出(南西より)	43	図版61	本土産陶器(近世)2	193
図版8	1面目 遺構共伴遺物	44	図版62	本土産陶器(近世)3	195
図版9	近代金属製品	46	図版63	染付1	209
図版10	ガラス瓶	51	図版64	染付2	211
図版11	近代円盤状製品	51	図版65	染付3	213
図版12	近代骨製品	52	図版66	染付4	215
図版13	近代日用品	54	図版67	染付5	217
図版14	石臼・軽石製品	56	図版68	染付6	219
図版15	瓦	58	図版69	染付7	221
図版16	瓦二次製品	59	図版70	染付8	223
図版17	S-11検出状況(北東より)	60	図版71	青磁1	239
図版18	S-11とS-640立地状況(南西より)	60	図版72	青磁2	241
図版19	石列・自然流路検出状況(南西より)	63	図版73	青磁3	243
図版20	024SD土層断面(南西より)	63	図版74	青磁4	245
図版21	SD1・2完掘状況(南西より)	64	図版75	青磁5	247
図版22	SD31～34完掘状況(南東より)	65	図版76	青磁6	249
図版23	SD60・61検出状況(北東より)	66	図版77	青磁7	251
図版24	005SL 上 貝集中部 検出状況(西より)	66	図版78	青磁8	253
図版25	埋葬犬骨検出状況(南より)	68	図版79	青磁9	255
図版26	本土産磁器(近代)1	91	図版80	青磁10	257
図版27	本土産磁器(近代)2	92	図版81	白磁1	261
図版28	本土産磁器(近代)3	93	図版82	白磁2	263
図版29	本土産磁器(近代)4	94	図版83	白磁3	265
図版30	本土産磁器(近代)5	95	図版84	白磁4	267
図版31	本土産磁器(近代)6	96	図版85	その他の輸入陶磁器1	275
図版32	本土産磁器(近代)7	97	図版86	その他の輸入陶磁器2	277
図版33	本土産陶器(近代)	99	図版87	中国産褐釉陶器1	287
図版34	沖縄産施釉陶器1	115	図版88	中国産褐釉陶器2	289
図版35	沖縄産施釉陶器2	117	図版89	中国産褐釉陶器3	291
図版36	沖縄産施釉陶器3	119	図版90	中国産褐釉陶器4・東南アジア産褐釉陶器	293
図版37	沖縄産施釉陶器4	121	図版91	タイ産褐釉陶器・半練土器	295
図版38	沖縄産施釉陶器5	123	図版92	カムイヤキ1	299
図版39	沖縄産施釉陶器6	125	図版93	カムイヤキ2	300
図版40	沖縄産施釉陶器7	127	図版94	土器1	311
図版41	沖縄産施釉陶器8	129	図版95	土器2	313
図版42	沖縄産無釉陶器1	141	図版96	土器3	315
図版43	沖縄産無釉陶器2	143	図版97	土器4	317
図版44	沖縄産無釉陶器3	145	図版98	土器5	319
図版45	沖縄産無釉陶器4	147	図版99	土器6	320
図版46	沖縄産無釉陶器5	149	図版100	土製品	322
図版47	沖縄産無釉陶器6	151	図版101	簪	324
図版48	沖縄産無釉陶器7	153	図版102	銭貨	329
図版49	沖縄産無釉陶器8	155	図版103	円盤状製品1	335
図版50	沖縄産無釉陶器9	157	図版104	円盤状製品2	337
図版51	陶質土器1	163	図版105	硯	339
図版52	陶質土器2	165	図版106	煙管	345
図版53	陶質土器3	167	図版107	滑石製品・石製品・石板	346
図版54	瓦質土器(a)	171	図版108	羽口・鉄滓・炉壁	349

図版109	埴	350	図版127	脊椎動物遺体1(上段:魚類、下段:ウミガメ類・ジュゴン・ハクジラ類・ヘビ類)	404
図版110	鉄製品	351	図版128	脊椎動物遺体2(上段:ネズミ科・ウサギ科・ネコ・イヌ・イノシシ/ブタ・ウシ、下段:ブタ・イノシシ/ブタ)	405
図版111	石器1	363	図版129	脊椎動物遺体3(上段:ブタ・イノシシ/ブタ、下段:ヤギ)	406
図版112	石器2	365	図版130	解体痕のある脊椎動物遺体(上段:ブタ、下段:ブタ・ヤギ)	407
図版113	石器3	367	図版131	11号人骨の出土状況	427
図版114	石器4	369	図版132	3号人骨の頭骨(左:正面、右:左側面)	427
図版115	石器5	371	図版133	7号人骨の頭骨(左から正面、左側面、上面)	428
図版116	石器6	373	図版134	11号人骨の頭骨(左から正面、右側面、上面)	428
図版117	石器7	375	図版135	12号人骨の頭骨(左から正面、左側面、上面)	428
図版118	石器8	377	図版136	12号人骨の出土状況	429
図版119	イトマキボラ製品	380	図版137	刀子と椎骨の位置関係	429
図版120	ゴホウラ・アツソデガイ	380	図版138	刃物を伴う成人女性	429
図版121	スイジガイ(穿孔貝)	385	図版139	平安山原A遺跡の種実遺体	438
図版122	貝製品1	387	図版140	下層確認状況	441
図版123	貝製品2	389	図版141	鉄刀の顕微鏡組織・EPMA調査結果	443
図版124	貝製品3	391	図版142	壺内検出ブタ油(1.5kg)	476
図版125	貝製品4	393			
図版126	骨製品	395			

## 挿図目次

第1図	北谷町の位置	6	第33図	2面目 検出遺構配置図	61
第2図	北谷町周辺の地形分類	9	第34図	005・006・008SL、021～025SD	63
第3図	北谷町周辺の地層地質分類	9	第35図	SD1～3	64
第4図	北谷町の位置と遺跡分布	11	第36図	SD31～34	65
第5図	グリッド設定	13	第37図	SD60・61	66
第6図	平安山原A遺跡の位置	13	第38図	出土人骨	67
第7図	層序1(HA①地区)	15	第39図	人骨出土グリッド平面分布	67
第8図	層序2(HA②地区)	17	第40図	人骨密集範囲詳細図	68
第9図	層序3(HA③地区)	19	第41図	埋葬犬骨	68
第10図	層序4(HA③地区)	21	第42図	遺物分布変遷	82
第11図	層序5(HA③地区)	23	第43図	遺物接合状況 平面分布	83
第12図	層序6(HA④地区)	25	第44図	本土産磁器(近代)平面分布	87
第13図	層序7(HA④地区)	27	第45図	本土産磁器(近代)1	91
第14図	1面目 戦前平安山集落 検出遺構配置	31	第46図	本土産磁器(近代)2	92
第15図	1面目 祝女殿内屋敷 平面図	33	第47図	本土産磁器(近代)3	93
第16図	1面目 井戸(1)	37	第48図	本土産磁器(近代)4	94
第17図	1面目 井戸(2)	38	第49図	本土産磁器(近代)5	95
第18図	1面目 井戸(3)	39	第50図	本土産磁器(近代)6	96
第19図	1面目 石組遺構(1)	39	第51図	本土産磁器(近代)7	97
第20図	1面目 石組遺構(2)	40	第52図	本土産陶器(近代)平面分布	98
第21図	1面目 石組遺構(3)	41	第53図	本土産陶器(近代)	99
第22図	1面目 遺構共伴遺物	44	第54図	イチチン文様の変遷	105
第23図	近代銭貨	45	第55図	碗屋敷別 分類比較	106
第24図	近代金属製品	46	第56図	沖縄産施釉陶器 平面分布	107
第25図	ガラス瓶 拓本	49	第57図	沖縄産施釉陶器1	114
第26図	近代骨製品	52	第58図	沖縄産施釉陶器2	116
第27図	近代日用品	54	第59図	沖縄産施釉陶器3	118
第28図	石臼・軽石製品	56	第60図	沖縄産施釉陶器4	120
第29図	瓦 平面分布	57	第61図	沖縄産施釉陶器5	122
第30図	瓦	58	第62図	沖縄産施釉陶器6	124
第31図	瓦二次製品	59	第63図	沖縄産施釉陶器7	126
第32図	S-11・640	60	第64図	沖縄産施釉陶器8	128



第65図	沖縄産無釉陶器(碗)平面分布	133	第119図	白磁3	264
第66図	沖縄産無釉陶器 平面分布	134	第120図	白磁4	266
第67図	沖縄産無釉陶器1	140	第121図	白磁 平面分布1(元・明初/明)	266
第68図	沖縄産無釉陶器2	142	第122図	白磁 平面分布2(清/不明)	267
第69図	沖縄産無釉陶器3	144	第123図	その他の輸入陶磁器1	274
第70図	沖縄産無釉陶器4	146	第124図	その他の輸入陶磁器2	276
第71図	沖縄産無釉陶器5	148	第125図	褐釉陶器 平面分布	285
第72図	沖縄産無釉陶器6	150	第126図	中国産褐釉陶器1	286
第73図	沖縄産無釉陶器7	152	第127図	中国産褐釉陶器2	288
第74図	沖縄産無釉陶器8	154	第128図	中国産褐釉陶器3	290
第75図	沖縄産無釉陶器9	156	第129図	中国産褐釉陶器4・東南アジア産褐釉陶器	292
第76図	陶質土器 平面分布	161	第130図	タイ産褐釉陶器・半練土器	294
第77図	陶質土器1	162	第131図	カムイヤキ1	298
第78図	陶質土器2	164	第132図	カムイヤキ2	300
第79図	陶質土器3	166	第133図	カムイヤキ 平面分布	301
第80図	瓦質土器 平面分布	169	第134図	底部分類別出土量	304
第81図	瓦質土器(a)	170	第135図	後期土器 平面分布	304
第82図	瓦質土器(b)	172	第136図	グスク土器 平面分布	308
第83図	その他の不明陶器	175	第137図	土器1	310
第84図	本土産磁器(近世)平面分布	177	第138図	土器2	312
第85図	年代別碗・小碗出土量	177	第139図	土器3	314
第86図	肥前系碗文様別構成(17C)	177	第140図	土器4	316
第87図	主要器種生産年別出土割合	177	第141図	土器5	318
第88図	本土産磁器(近世)1	180	第142図	土器6	320
第89図	本土産磁器(近世)2	182	第143図	土製品	322
第90図	本土産磁器(近世)3	184	第144図	簪 平面分布	323
第91図	生産年代及び生産地別出土数	184	第145図	簪	324
第92図	本土産陶器(近世)平面分布	188	第146図	銭貨 平面分布	326
第93図	本土産陶器(近世)1	190	第147図	銭貨	328
第94図	本土産陶器(近世)2	192	第148図	円盤状製品 平面分布	330
第95図	本土産陶器(近世)3	194	第149図	種類別使用部位	332
第96図	染付 平面分布	199	第150図	種類別計測値散布図(胴部)	332
第97図	染付1	208	第151図	種類別計測値散布図(底部)	332
第98図	染付2	210	第152図	円盤状製品1	334
第99図	染付3	212	第153図	円盤状製品2	336
第100図	染付4	214	第154図	硯の部位名称	338
第101図	染付5	216	第155図	硯	339
第102図	染付6	218	第156図	煙管 平面分布	340
第103図	染付7	220	第157図	煙管	344
第104図	染付8	222	第158図	滑石製品・石製品・石板	346
第105図	青磁 平面分布1(宋/元・明初)	236	第159図	羽口・鉄滓・焼土・炉壁 重量平面分布	348
第106図	青磁 平面分布2(明/清)	237	第160図	羽口・鉄滓・炉壁	349
第107図	青磁1	238	第161図	埴	350
第108図	青磁2	240	第162図	鉄製品	351
第109図	青磁3	242	第163図	石器 平面分布	352
第110図	青磁4	244	第164図	石斧(完形)長さ×幅の相関	353
第111図	青磁5	246	第165図	石斧 平面分布	355
第112図	青磁6	248	第166図	敲打器類サイズ比較	356
第113図	青磁7	250	第167図	砥石時期別 石質使用状況	358
第114図	青磁8	252	第168図	石質組成(%)	360
第115図	青磁9	254	第169図	器種別石質比率	360
第116図	青磁10	256	第170図	石器1	362
第117図	白磁1	260	第171図	石器2	364
第118図	白磁2	262	第172図	石器3	366

第173図	石器4	368	第192図	祝女殿内屋敷の便所	449
第174図	石器5	370	第193図	祝女殿内屋敷不明建物付近	455
第175図	石器6	372	第194図	遺物 時期別平面分布	456
第176図	石器7	374	第195図	青磁 時期別平面分布	457
第177図	石器8	376	第196図	白磁 時期別平面分布	458
第178図	貝製品 平面分布	379	第197図	染付 時期別平面分布	458
第179図	ヤコウガイの部位の分類	381	第198図	脊椎動物骨 種別平面分布	459
第180図	民俗例	385	第199図	貝製品 種別平面分布	460
第181図	貝製品1	386	第200図	沖縄産陶器・本土産磁器 平面分布	461
第182図	貝製品2	388	第201図	各屋敷における碗・小碗・皿の産地比率	461
第183図	貝製品3	390	第202図	沖縄産無釉陶器(播鉢)平面分布	462
第184図	貝製品4	392	第203図	沖縄産施釉陶器(碗)平面分布	462
第185図	骨製品	394	第204図	中国産磁器 時代・窯別出土量	465
第186図	骨製品 平面分布	395	第205図	青磁 時代別変遷	466
第187図	平安山原A遺跡における層準・地区別の脊椎動物遺体の組成(NISP比)	403	第206図	白磁 時代別変遷	468
第188図	平安山原A遺跡 貝類遺体分析地区名	422	第207図	染付 時代別変遷	469
第189図	優先種のサイズ組成変化	423	第208図	沖縄産施釉陶器 分類	470
第190図	下層確認トレンチ	441	第209図	時代別出土遺物変遷	471
第191図	下層確認箇所	441	第210図	型紙地紋 地区・屋敷別比較	475
			第211図	円盤状製品 遺跡別比較	476

## 表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	10	第31表	碗IV類(屋敷別)出土量	107
第2表	基本層序土層注記一覧	29	第32表	沖縄産施釉陶器 観察一覧	108
第3表	検出された平安山の屋敷	31	第33表	播鉢(口縁・頸部)分類	131
第4表	1面目 井戸一覧	39	第34表	沖縄産無釉陶器 出土量	134
第5表	1面目 石組遺構一覧	42	第35表	屋敷別 遺物出土量	134
第6表	1面目 遺構共伴遺物 観察一覧	44	第36表	沖縄産無釉陶器 観察一覧	135
第7表	近代銭貨一覧	45	第37表	沖縄産無釉陶器(播鉢)観察一覧	138
第8表	近代金属製品一覧	48	第38表	陶質土器 観察一覧	159
第9表	主要なガラス瓶一覧	50	第39表	陶質土器 出土量	161
第10表	近代円盤状製品 観察一覧	51	第40表	屋敷別遺物 出土量	161
第11表	近代骨製品 観察一覧	52	第41表	瓦質土器(a)出土量	168
第12表	石臼 観察一覧	55	第42表	瓦質土器(a)観察一覧	168
第13表	瓦 出土量	57	第43表	瓦質土器(b)出土量	169
第14表	瓦二次製品 出土量	59	第44表	瓦質土器(b)観察一覧	169
第15表	瓦二次製品 観察一覧	59	第45表	その他の不明陶器 出土量	174
第16表	人骨出土地点	68	第46表	その他の不明陶器 観察一覧	174
第17表	土坑・ピット一覧	69	第47表	本土産磁器(近世)出土量	177
第18表	遺物 出土量	81	第48表	本土産磁器(近世)観察一覧	178
第19表	産地別 出土量	83	第49表	本土産陶器(近世)観察一覧	186
第20表	型紙文様別 出土個体数	84	第50表	本土産陶器(近世)出土量	189
第21表	銅版転写文様別 出土個体数	85	第51表	内野山産碗使用釉薬別出土量	189
第22表	本土産磁器(近代)出土量	86	第52表	染付碗分類	196
第23表	技法別 出土量	86	第53表	染付皿分類	198
第24表	屋敷別 主要器種出土量	87	第54表	染付碗 出土量	199
第25表	本土産磁器(近代)観察一覧	87	第55表	染付皿 出土量	199
第26表	皿技法別 出土量	90	第56表	染付(その他)出土量	200
第27表	産地別器種 出土量	98	第57表	染付(碗・皿)観察一覧	200
第28表	本土産陶器(近代)観察一覧	98	第58表	染付(その他)観察一覧	206
第29表	沖縄産施釉陶器 出土量	106	第59表	青磁(碗・皿)観察一覧	228
第30表	屋敷別 出土量	106	第60表	青磁(その他)観察一覧	233

第61表	青磁(皿)出土量	235	第107表	砥石 観察一覧	359
第62表	青磁(その他)出土量	235	第108表	大形イモガイ大きさ(殻径)別出土量	378
第63表	青磁(碗)出土量	236	第109表	貝輪・円盤・巻貝・札状 観察一覧	378
第64表	白磁 出土量	266	第110表	貝製品 出土量	379
第65表	白磁 観察一覧	268	第111表	ゴホウラ・アツソデガイ製品・素材貝 観察一覧	380
第66表	その他の輸入陶磁器 出土量	272	第112表	ヤコウガイ未製品・自然貝分類出土一覧	381
第67表	その他の輸入陶磁器 観察一覧	273	第113表	ヤコウガイ環状・匙 観察一覧	381
第68表	褐釉陶器 出土量	281	第114表	ホラガイ・ヤコウガイ容器 観察一覧	381
第69表	中国・東南アジア産褐釉陶器 観察一覧	282	第115表	螺蓋製利器・貝刃・貝包丁 観察一覧	382
第70表	タイ産褐釉陶器・半練土器 観察一覧	285	第116表	二枚貝有孔製品 観察一覧	382
第71表	カムイヤキ 観察一覧	297	第117表	二枚貝有孔製品(孔位置)出土量	383
第72表	カムイヤキ 出土量	301	第118表	二枚貝有孔製品(重量別)出土量	383
第73表	土器全体 出土量	302	第119表	ヤコウガイ貝匙(腹面)観察一覧	383
第74表	後期土器(口縁部・胴部)観察一覧	303	第120表	タカラガイ製品出土量	384
第75表	くびれ平底 底径・底厚の関係	304	第121表	タカラガイ製品 観察一覧	384
第76表	後期土器(底部)観察一覧	305	第122表	マガキガイ製品 観察一覧	384
第77表	グスク土器(胴部)胎土分類別出土量	307	第123表	巻貝粗孔製品 観察一覧	385
第78表	グスク土器(口縁部・胴部)観察一覧	307	第124表	骨製品 出土量	394
第79表	グスク土器(底部)観察一覧	308	第125表	骨製品 観察一覧	394
第80表	先島系土器 観察一覧	309	第126表	平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧	397
第81表	土製品 出土量	321	第127表	平安山原A遺跡における脊椎動物遺体の組成(NISP)	398
第82表	土製品 観察一覧	321	第128表	平安山原A遺跡におけるリュウキュウシラトリとマガキガイの頻度	409
第83表	簪 出土量	323	第129表	平安山原A遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型	410
第84表	簪 観察一覧	325	第130表	平安山原A遺跡から得られた貝類遺体の同定標本数	412
第85表	銭貨 出土量	326	第131表	平安山原A遺跡出土人骨の四肢骨計測値	430
第86表	銭貨 観察一覧	327	第132表	平安山原A遺跡出土散乱人骨一覧	431
第87表	円盤状製品 出土量	330	第133表	平安山原A遺跡の放射性炭素年代測定結果	433
第88表	屋敷別遺物 出土量	331	第134表	平安山原A遺跡の暦年較正結果	433
第89表	円盤状製品 観察一覧	333	第135表	平安山原A遺跡の種実同定結果	435
第90表	硯 出土量	338	第136表	平安山原A遺跡の主な種実遺体の計測値	437
第91表	硯 観察一覧	338	第137表	放射性炭素年代測定結果	439
第92表	煙管 出土量	340	第138表	暦年較正結果	440
第93表	煙管 屋敷別出土量	341	第139表	各屋敷出土のガラス瓶	461
第94表	羅宇煙管(雁首)観察一覧	343	第140表	遺跡別主な遺物 出土量	463
第95表	羅宇煙管(吸口)観察一覧	343	第141表	砥石 遺跡・石質別出土量	464
第96表	延べ煙管 観察一覧	343	第142表	中国産磁器 時代・器種別出土量	465
第97表	滑石製品・石製品・石板 観察一覧	346	第143表	馬蹄形焔炉 出土遺跡一覧	475
第98表	鍛冶関連遺物 出土量	348	<b>CD収録</b>		
第99表	埴 観察一覧	350	第144表	平安山原A遺跡から採集された魚類遺体の同定結果	
第100表	鉄製品 観察一覧	351	第145表	平安山原A遺跡から採集された両生類・爬虫類・鳥類遺体の同定結果	
第101表	石器 出土量	352	第146表	平安山原A遺跡から採集された哺乳類遺体の同定結果	
第102表	石斧 形態別分類	353	第147表	平安山原A遺跡遺物台帳(HA①・HA②・HA③・HA④)	
第103表	石斧 観察一覧	354			
第104表	敲石・敲石兼磨石・磨石 観察一覧	356			
第105表	グガニ石 観察一覧	357			
第106表	砥石形態別 使用面比較	358			

# 第 I 章 調査経緯・経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存目的の緊急発掘調査成果をまとめたものである。

平安山原 A 遺跡は、平成 15 年 3 月に返還された在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）内に位置し、平成 7～9 年度<sup>註1</sup>及び平成 20 年度<sup>註2</sup>に行った試掘調査で発見された「周知の埋蔵文化財」である。試掘調査の経緯等についてはここでは割愛し、緊急発掘調査に至った経緯を以下に記述する。

キャンプ桑江北側地区は本町でも数少ない平坦地であり、かつ、地理的に本町の中心部であることから、返還以前から町の中核ゾーンとして職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた<sup>註3</sup>。国道 58 号に東接する同地区は国道よりも地盤が低く、大雨時に度々冠水していたことから、左記現象を解消するため盛土による造成工事が計画された。事業地内の造成高は一様でないものの、埋蔵文化財に悪影響を及ぼす規模であった。

平成 11 年 9 月 14 日から平成 12 年 10 月 27 日にかけて、政府関係機関、沖縄県並びに北谷町による「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議（以下「連絡会議」という。）」が延べ 10 回開かれた。これらの会議を経て、同地区における埋蔵文化財は造成工事に先立ち緊急発掘調査を行う方向となった<sup>註4</sup>。

平成 15 年 3 月 15 日には「桑江伊平土地区画整理事業」が事業認可され、平成 16 年 10 月 27 日、北谷町教育委員会は桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取扱について北谷町と協定を締結。平安山原 A 遺跡の規模、職員体制等から分割して調査を行うことにした（平成 19 年度から 23 年度にかけ計 5 回実施）。

町教育委員会においては、専門員の事務負担量が著しく増大していたため、発掘調査に係る諸作業の軽減を図る目的で、現地調査の測量、発掘作業員の手配等を民間業者に委託した。文化財保護法に係る諸手続きは下表のとおり。

遺跡名 調査区名	項目	文書番号 / 年月日	文化財保護法
平安山原 A 遺跡	発掘通知 発掘通知（進達） 土木工事等について（通知）	北区 18 第 3521 号 / 平成 18 年 8 月 28 日 北教社 18 第 1849 号 / 平成 18 年 9 月 14 日 教文第 1034 号 / 平成 18 年 10 月 2 日	94 条第 1 項
平安山原 A 遺跡 （その 1）	着手届	北教社 19 第 3566 号 / 平成 20 年 3 月 25 日	99 条第 1 項
	終了報告	北教社 20 第 988 号 / 平成 20 年 6 月 27 日	
平安山原 A 遺跡 （その 2）	着手届	北教社 21 第 2402 号 / 平成 21 年 10 月 27 日	
	終了報告	北教社 21 第 2402 号 / 平成 22 年 3 月 16 日	
平安山原 A 遺跡	範囲等変更（報告） 範囲等変更（回答）	北教社 22 第 1100 号 / 平成 22 年 6 月 21 日 教文第 635 号 / 平成 22 年 6 月 30 日	
平安山原 A 遺跡 （その 3）	着手届	北教社 22 第 1129 号 / 平成 22 年 6 月 24 日	
	終了報告	北教社 22 第 2537 号 / 平成 22 年 10 月 6 日	
平安山原 A 遺跡 （油分その 2）	着手届	北教社 22 第 1129 号 / 平成 23 年 1 月 5 日	
	終了報告	北教社 22 第 2537 号 / 平成 23 年 3 月 16 日	
平安山原 A 遺跡 （その 4）	着手届	北教社 23 第 1926 号 / 平成 23 年 8 月 16 日	
	終了報告	北教社 23 第 4496 号 / 平成 24 年 2 月 29 日	

## 第2節 調査体制

事業主体	教 育 長	瑞慶覧 朝宏 (平成19年度)
	同	比嘉 秀夫 (平成21～23年度)
	同	川上 啓一 (平成27年度)
事業総括	教 育 次 長	謝花 良継 (平成19・21年度)
	同	大城 操 (平成22・23年度)
	同	佐久本 盛正 (平成27年度)
	社会教育課長	大城 操 (平成19・21年度)
	同	知念 喜忠 (平成22・23年度)
調査総括	同	比嘉 敬文 (平成27年度)
	文 化 係 長	中村 愿 (平成19年度)
	同	嘉陽田 朝栄 (平成19・21～23年度)
調査担当	同	米須 健 (平成27年度)
	主 任 主 事	山城 安生 (平成19・21～23・27年度)
	同	東門 研治 (平成19・21～23・27年度)
	同	松原 哲志 (平成19・21～23・27年度)
	同	島袋 春美 (平成27年度)

### 資料整理作業員

(平成27年度)

嘱託 上地 千賀子、上間 真寿美、大城 光、金城 綾乃、呉屋 広江、佐久間 クリエ、曾木 菊枝  
 知念 栄子、照屋 元子、富平 砂綾子、西原 美草、東 順子、比嘉 優子、山城 小百合  
 臨時 新川 弘美、池原 辰樹、泉 恵子、伊波 弘子、大城 明香、崎濱 あすか、知花 良枝、照屋 朝子  
 仲里 亜希子、仲宗根 円華、仲宗根 学、仲村渠 恵子、仲村渠 容子、又吉 朋子

### 調査指導及び助言 (敬称略、所属は当時)

沖縄県教育庁文化財課	島袋 洋、田場 直樹
沖縄県立博物館・美術館	藤田 祐樹、片桐 千亜紀、山崎 真治
奥松島縄文村歴史資料館	岡村 道雄
鹿児島大学埋蔵文化財センター	新里 貴之
史跡鴻池新田会所管理事務所	松田 順一郎
樹昌院	喜瀬 了心
千葉県立中央博物館	黒住 耐二
北谷町文化財調査審議委員	知念 勇、大城 逸朗、高江洲 敦子
東京大学大学院新領域創成科学研究科	辻 誠一郎
琉球大学医学部	土肥 直美
早稲田大学教育学部	樋泉 岳二
佐賀県立九州陶磁文化館	大橋 康二

### 聞き取り調査協力

旧平安山集落 照屋 文吉 (大正9年生)、玉城 清松 (昭和10年生)

委託業務

年度	内容	委託名称	受託業者（当時）
H19	発掘調査 700㎡	平安山原 A 遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託	国際航業(株)
H21	発掘調査 2,400㎡	平安山原 A 遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）	(株)パスコ 沖縄支店
H22	発掘調査 3,500㎡	平安山原 A 遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託（その3）	(株)埋蔵文化財サポートシステム
	発掘調査 400㎡	平安山原 A 遺跡（油分地区）埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）	(株)アーキジオ沖縄
H23	発掘調査 3,700㎡	平安山原 A 遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託（その4）	(株)アーキジオ沖縄
H25	保存処理 1 点	金属製品保存処理業務委託	(株)文化財サービス
H26	年代測定 7 点	平安山原 A 遺跡ビーチロックの放射性炭素年代測定業務委託	パリノ・サーヴェイ(株)
	科学分析 5 点	平安山原 A・B・C 遺跡の自然科学分析業務委託	パリノ・サーヴェイ(株)
H27	保存処理 1 点	金属製品保存処理業務委託	(株)文化財サービス

### 第3節 調査経過

#### 発掘作業

平成 19 年度（平成 20 年 1 月 7 日～ 2 月 29 日）

1 月 7 日から草刈り、磁気探査を実施。異常点が認められるも不発弾等の危険物は無く表土掘削に着手。隣接地には別事業の調査区（油分地区）が接し、土中に包含される油臭・油分処理を行いつつ発掘調査を実施していた。両調査区における雨水・湧水が一緒くたになるため、油分地区とまとめて排水処理を行う。10 日、表土下 1 m の経層探査中に不発弾（105mm 榴弾砲 2 発、同葉莢 2 個、爆薬 2 箱）を確認。11 日、陸上自衛隊が処理のため来跡（2 月 13 日回収）。15 日から作業員を投入し自然流路と石列を検出。22 日には高所作業車を用い全景撮影、以後、図化作業と並行して流路埋土の掘削を行う。流路は概ね上層がカワニナを含む粘質シルト、下層は枝サンゴを含む粗砂を呈し、下層出土の遺物から埋没期はグスク時代以降と想定された。また、層理面から下層にかけて杭痕が見られ、上層の堆積に人為的関与が窺えた。流路底面には一見コンクリートと見紛うビーチロックが広がっており、下層調査の結果、調査区全体に広がっていることを確認。2 月 18 日に完掘状況を撮影。調査期間中、管理濃度を超過するヘキサンが度々確認され安全管理上作業を中断することもあったが、29 日には現地調査を完了し 19 年度の調査を終えた。

平成 21 年度（平成 21 年 10 月 1 日～ 2 月 25 日）

10 月 13 日から草刈り、16 日から磁気探査を開始。異常点が多数認められるも不発弾等の危険物は無く、21 日から表土掘削に着手。遺構面よりも深く攪乱されている個所は重機で攪乱土を除去しつつ、28 日から作業員を投入し戦前の遺構検出を行う。屋敷に伴う石積み・石列等は部分的に崩壊しているものの、配置、形状が判る状態であった。11 月 9 日には旧平安山集落出身者を遺跡に招いて聞き取りを行い、当時の様子について貴重な言質を得る事が出来た。12 日、ノロ殿内跡から底部に「平」と墨書された磁器が出土。平安山ノロの祭祀具と想定された。その他屋敷跡からは中身の入った壺や柳行李が出土する等、戦災を避けるため埋納された遺物が多数出土した。12 月 14 日にはラジヘリを用いて検出状況の全景撮影を実施、翌 15 日には写真測量及びレーザー測量を行う。4 日に続き 16、17 日に人骨を検出。以後人骨の出土は相次ぎ、最終的には 11 号まで確認。土肥氏、藤田氏を適宜招聘し指導助言を受け、これらの人骨は貝塚時代後期のものと判断された。1 月 20、21 日に高所作業車を用いて写真撮影。ノロ殿内を始めとする居住域は近世から間断なく機能しており、時期毎の分層は困難であった。また遺構が多く調査に時間を要したため、1 月 29 日に改定契約を行い 2 月 25 日まで工期を変更した。2 月 11 日からは図化を終えた石積み等を除去。24 日には井戸 2 基を半裁し、底面でビーチロックを確認した。25 日には重機により下層確認を行い 21 年度の調査を終了した。

平成 22 年度 (HA ③：平成 22 年 8 月 19 日～2 月 21 日、油分 2：平成 22 年 10 月 15 日～11 月 12 日)

平成 22 年度は 2 カ所にて調査を行った。先に着手した HA ③は、平成 20 年度の試掘調査で遺跡の範囲変更が行われた箇所である。赤土等流出防止に係る許可後の 9 月 27 日から調査始動。まず残土置き場確保のため、調査対象地に残る基地建設後の盛土を掘削し、その土砂で 21 年度の調査区を埋め戻した。掘削深度は基地機能時の地盤高までとし、埋め戻しの際は深度 30cm 毎にタイヤローラーで転圧し、締固め検査を実施した。10 月 4 日に表層探査、16 日に経層探査を行い、埋設管や葉莢、鉄クズ等を確認。沖縄防衛局との協議により、これらは局で撤去することとなった。11 月 1 日人力掘削開始。戦前の包含層掘削、遺構検出を行う。12 月 4 日遺構検出状況をラジヘリにて撮影。以後、図化作業と並行して遺構掘削を行う。2 月 4～5 日、ラジヘリにて全景撮影。6 日から下層確認調査を行い、21 日に HA ③の調査は終了した。

油分 2 は、沖縄防衛局による油分含有土壌の改良工事と並行して行われていた文化財調査 (油分 1) の追加調査である。油分 1 では、安全管理上の観点から油分の含有深度内で発掘調査は実施せず、土壌改良後の土砂から遺物採集のみ行った。工事による掘削深度の浅い箇所では遺構が残存したため、急遽区画整理事業の一環で油分 2 の調査を実施した。包含層及び遺構検出面は工事で削平されていたため、10 月 18 日に高所作業車を用いて調査前状況の撮影を行い、直ぐさま図化作業に着手。遺構は、切り合いや埋土の濃淡から概ね 3 時期が混在し、遺構内から青磁、染付、本土産磁器、沖縄産施釉陶器等が出土した。11 月 1～3 日に完掘状況を撮影、下層確認後、12 日に油分 2 の調査を終了した。

平成 23 年度 (平成 23 年 7 月 19 日～1 月 31 日)

23 年度は工事に追われながらの調査となった。7 月 20 日、前年度とは異なる土壌改良工事が間近に控えている調査区南側の作業方針について工事関係者と現地調整。調査面積は小さく遺構も希薄であり、29 日には下層確認まで終え現場を引き渡した。他地区は 8 月 16 日から表層探査、23 日から確認探査を行う。探査では、81mm 迫撃砲弾 1 発、小銃弾・機関銃弾計 600 発以上、砲弾葉莢 16 個が断続的に発見され、全て自衛隊及び警察が回収した。29 日表土掘削開始。31 日、調査区西側に設置されるボックスカルバートの影響範囲について工事関係者と現地調整。西側を優先的に調査し、10 月中旬に現場を引き渡すこととした。9 月 8 日から作業員を投入。西側においては、10 月 7 日戦前遺構完掘、25 日グスク～近世遺構を完掘し現場を引き渡した。11 月 11 日、現場への迂回路完成を受け未調査地に着手。磁気探査中、油臭に伴ってドラム缶や英語表記の空き缶等が多量に発見され沖縄防衛局に確認を依頼。関係部署も交えて調整し、遺構も残存していないことから現地を防衛局へ引き渡した。この間、細切れになっている他調査区も段階的に調査を進め、11 月下旬には戦前の調査を概ね終了。グスク～近世は遺構が多く天候不順により調査に時間を要したため、1 月 6 日改定契約を行い 31 日まで工期を延長。遺構には特異な埋葬人骨が出土。関係者を招き指導助言を得た。28 日には完掘全景を撮影後、下層調査を実施し調査終了。これにより 23 年度の調査及び平安山原 A 遺跡の全ての現地調査は終了した。

## 整理作業

平成 27 年度

出土遺物量は、標準的な遺物コンテナ (60cm × 40cm × 10cm) 700 箱、土嚢袋 179 袋であった。整理作業は現場作業の雨天時を利用して遺物の洗浄・乾燥及び脆弱遺物の強化を行い、本格的な作業は現地調査終了後の平成 27 年度から開始。出土遺物はナンバリング後、分類接合作業を行い主な資料を実測、デジタルトレースした。現場作業時に手実測、CAD 化された遺構図等は、イラストレーターデータに変換後デジタルトレースを行った。報告書掲載写真はデジタルカメラ (1200 万画素) で撮影したものを使い、35mm フィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。現場作業中に採取した炭化物等の理化学分析や保存処理は専門機関へ業務委託し、陶磁器・土器や石器、人骨等の同定は有識者へ依頼した。

註 1 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—』

註 2 北谷町教育委員会 2011 『平安山原地区試掘調査—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—』

註 3 返還に先立つ平成 10 年 3 月には、共同使用という形態で北谷町役場新庁舎がキャンプ桑江北側地区内に建設されている。

註 4 伊礼原遺跡 (当時は伊礼原 A 遺跡、伊礼原 C 遺跡と呼称) は現地保存し、平成 22 年 2 月 22 日に約 17,000m<sup>2</sup>が国史跡に指定された。



土器接合・分類



遺物ラベル分類・整理



動物骨分類



遺物実測



遺物写真撮影



遺物集計表入力



デジタル図版作成



原稿編集・校正

図版1 整理作業風景



## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### (1) 北谷町の位置と概要

北谷町は沖縄島中部の西海岸、県都那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西は全域が東シナ海に面し彼方に慶良間諸島が眺望される。町の総面積は13.93km<sup>2</sup>で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心(北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒)に町役場は位置する。

2015(平成27)年12月末現在の人口は約29,093人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業開始前(平成15年12月末)の26,358人に比べ2,735人増え、約1割増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれている。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体で(町総面積における軍用地の比率は52.3%)、基地の殆どは利便性に富む国道58号沿いの平地に集中している。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と海岸低地や埋立地の広がる西海岸地域の狭小な町土で、まちづくりや生活環境整備が行われている。

産業は、西海岸地域を中心に第三次産業の割合が大きく今後の伸びも予測されている一方、第一次・第二次産業は減少傾向にある。現在は、都市との共生・交流を目指したフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

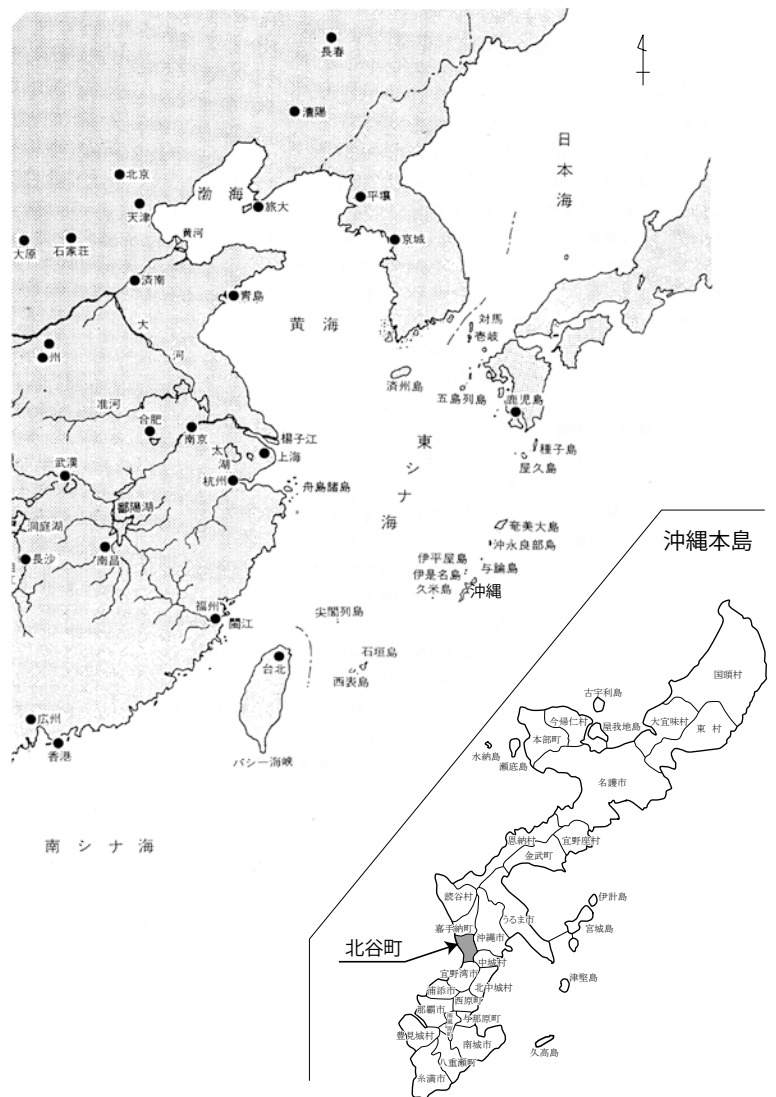
交通網は、那覇市から本島北部へ延びる主要幹線道路の国道58号が西海岸側を縦断し、町域北側より県道23号線・24号線・130号線がそれぞれ国道58号以东へ延び、概して交通の便に恵まれている。近年では、国道58号渋滞緩和のための道路拡幅や県道24号線のバイパス整備が進められている。

#### (2) 自然的環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し、四季を通して温暖である。年平均気温は22度程度、年平均湿度は77%前後で、冬の期間が極めて短い。年降水量は2,000から3,000mmと多雨で、特に5月中旬から6月下旬の梅雨期と8～10月の台風期に集中する。

本町の地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断層を大きな境とし、東高西低の様相を呈している。東・南部では標高100m以上、100～50m、50～30mの段丘地形が見られ、侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形を成し、北部では、洞穴やドリーネ・石灰岩堤・石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。西部には低地及び海浜が見られ、海岸低地のほとんどは埋立地や人工ビーチとなっており、僅かに自然海浜が残る。主な河川には、白比川・普天間川の二級河川があり、東シナ海へ向け西流している。

表層地質は、基盤の第三期中新世末から鮮新



第1図 北谷町の位置

世の島尻層群を第四期更新世の琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は非石灰質の国頭礫層くにかみと石灰質の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄本島北部、後者は中・南部に分布する。本町は国頭礫層の南限となり、基盤の影響を受けて酸性化した土壌（国頭マーヅ）が確認される。水理地質は、基盤のシルト質粘土層が不透水層となり、これを不整合で覆う琉球石灰岩層中の砂質石灰岩が本町一帯に分布している。石灰岩層は多孔質で透水性がよく、帯水層となり不整合部の各所で湧出している。

植生は、沖縄島北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域となっている。森林は、嘉手納基地内やその周辺・庁舎北側の丘陵地・北谷城周辺、河川流域に比較的良好に残るものの、その割合は町土の7%と決して高くない（2006年4月現在）。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に、鳥類4目9科14種、爬虫類1目4科6種、両生類1目3科3種、大型土壌動物14目1,411種の個体が確認されている。また、2000（平成12）年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリイオオコウモリ、鳥類のミフウズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海域・汽水域・河川域で多様な水棲動物が確認されている（北谷町教育委員会，2005）。

## 第2節 歴史的環境

本町では、平成28年1月現在で54遺跡が確認されている。以下に各時代の歴史的環境を概観する。

### (1) 先史時代

先史時代に属する遺跡は主に西海岸に集中している。町内最古の遺跡（旧石器時代）である鹿化石出土地と桃原洞穴遺跡は、町東側の台地上に位置している。桃原洞穴遺跡からは化石人骨（約16,000年前）が発見されたとされているが、近年の研究では中世または近世初めの可能性が指摘されている。

貝塚時代前Ⅰ～Ⅴ期（縄文時代相当期）の主な遺跡には伊礼原遺跡・伊礼原E遺跡・砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡が挙げられる。伊礼原遺跡は本町のほぼ中心に位置し、ウーチヌカーと呼ばれる湧水を源とする低湿地区と砂丘区からなる、貝塚時代前Ⅰ期から戦前に至るまでの複合遺跡である。低湿地区では古環境の復元が可能な程の植物遺体や、県内最古となる竈を伴う貯蔵穴が発見された。砂丘区では高波によって砂丘と居住地が侵食され、その後の砂丘の回復と共に居住域が拡大していく様子が確認された。出土遺物は、約7,000～6,000年前の爪形文土器から戦前までの長期に亘り、なかには九州の曾畑式土器や糸魚川産のヒスイ等、海を渡ってもたらされた遺物も確認された。この様に重要な発見が相次いだことから、本遺跡は2010（平成22）年に国史跡に指定されている。伊礼原E遺跡は伊礼原遺跡の南に位置し、貝塚時代前Ⅳ期頃に遺跡の西側が津波により侵食され、伊礼原遺跡同様、自然災害に見舞われていたことが判明した。砂辺貝塚とクマヤー洞穴遺跡は本町の北西に位置し、前者からは前Ⅳ期の方形状住居址が、後者からは前Ⅴ期の改葬人骨が検出されている。

貝塚時代後期（弥生～平安並行期）からグスク時代の代表遺跡には小堀原遺跡と後兼久原遺跡が挙げられる。前者は町役場の北西100mに位置し、県内最古の年代値（10～12世紀）を示す大麦・稲・アワが発見された。後者は町役場建設の際に緊急発掘調査が行われ、12世紀初頭の住居と高倉がセットで検出されたほか、同時期の畠址や埋葬人骨が発見された。両遺跡は、狩猟採集社会（貝塚時代）から農耕社会（グスク時代）への移行期に当たり、グスク時代の成り立ちを考える上で重要な遺跡である。

### (2) グスク時代・古琉球

本町におけるグスク時代の代表的な遺跡には北谷城が挙げられる。町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地する北谷城は本町で唯一残存するグスクで、発掘調査成果から12世紀に始まり、14世紀後半から15世紀中頃に石垣が構築され、15世紀後半に終焉を迎えたと考えられている。北谷城に関しての明確な記録はなく、金満按司や大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝えられているが伝承の域を出ない。その他の言い伝えとしては、1609年の薩摩侵攻時に雍肇ようしょうほう豊佐敷こうどく興道が北谷城に守備隊として配されたが、首里陥落の報を聞き自刃したという話が残っている。

「北谷」とは、いつからそう呼ばれるようになったか定かではないが、嘉靖年間（1522～1566年）の愈姓大家家譜中に「北谷間切平安山地頭職」の文字が見られることから、古琉球には北谷という地名が存在していたようである。また、1577年に琉球国王が地方役人に給した辞令書に「きたたんまきり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。その後「きたたん」は「きちゃたん」から「ちちゃたん」へと少しずつ言語上変化し、現在の「ちゃたん」となっている。

### (3) 近世

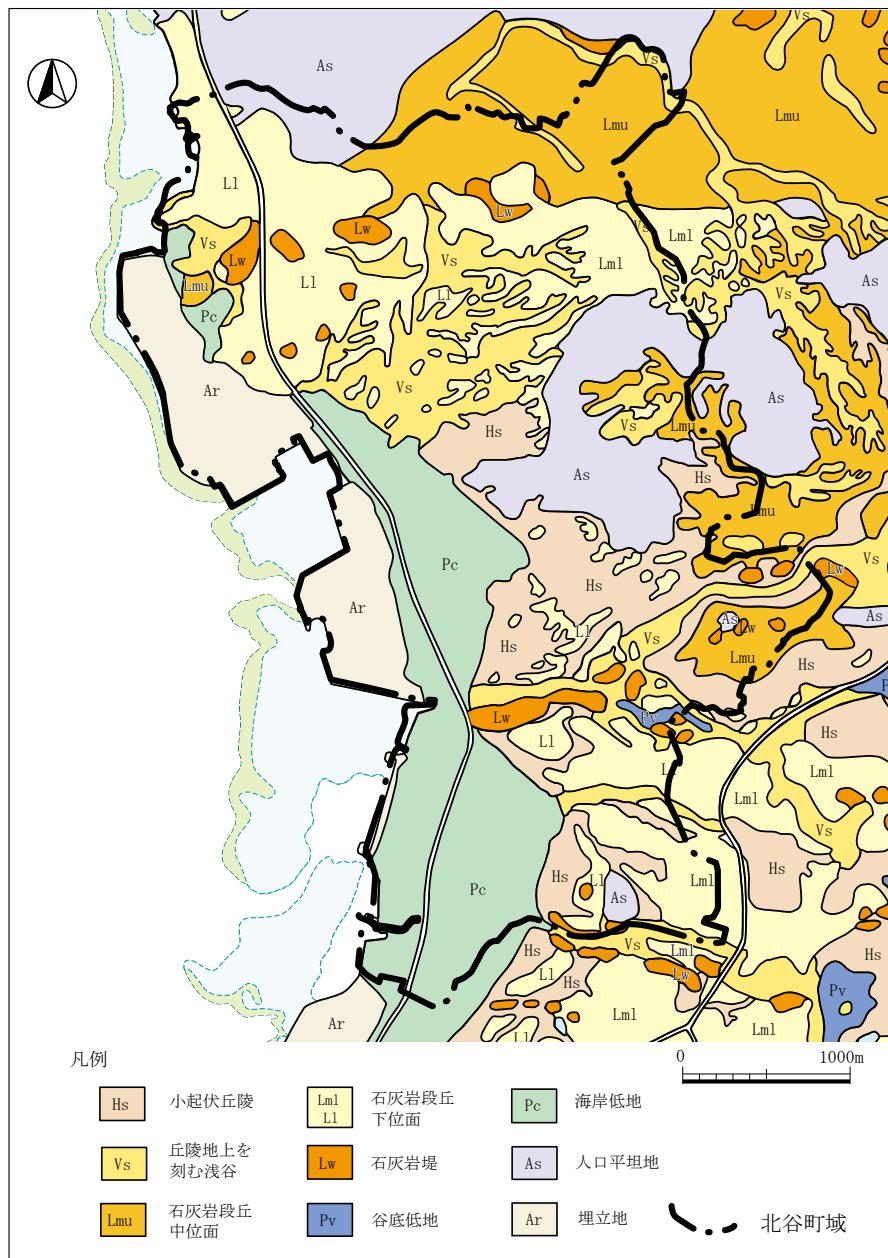
1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷・くわい（現在の桑江）・平安山・すなへ（砂辺）・野国・屋郎（屋良）・賀手納（嘉手納）・山内・あきな（安仁屋）の9つの村があったことが分かる。1660～1670年代には間切の分割・新設に伴って、山内が越来間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢・伝道・伊礼・浜川・野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半になると首里の士族層が地方へ下り、屋取として生活し始める。北谷は屋取が多い地域で、上勢頭古墓群や大作原古墓群は屋取集落の人々によって作られたものである。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号が座礁する事件が起こる。北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護したほか、ジャンク船を建造・提供するなど、当時異国船打払令が発令されていた日本において異例の対応を取った。この事件後、英国では琉球人のことを「善きサマリア人」と称すようになった。この事件をきっかけに2000年の沖縄サミットでは英国のブレア首相（当時）が北谷町を訪問し、その後、北谷・英国間での語学留学が開催されるに至った。インディアン・オーク号座礁地では、当時の積み荷の一部が今も海底に残され、海底遺跡として位置付けられている。

### (4) 近代・現代

1908（明治41）年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村きたたにむらとなった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土と化し、沖縄戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇秘匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全域が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、1948（昭和23）年には北谷村と嘉手納村に分村し、1980（昭和55）年には北谷村から北谷町へと町制移行した。県下でも近代化に積極的だった平安山集落もその面影はなくなり、キャンプ桑江北側返還の2003（平成15）年までバスターミナルや作業ヤードであった。その影響か、地中には油分等の汚染物質が含まれ、2004（平成16）年・2010（平成22）年には土壌改良工事が沖縄防衛局により実施された。その後も汚染箇所が確認され、2015（平成27）年現在未だ処理継続中であり、まちづくりに少なからぬ影響を与えている。

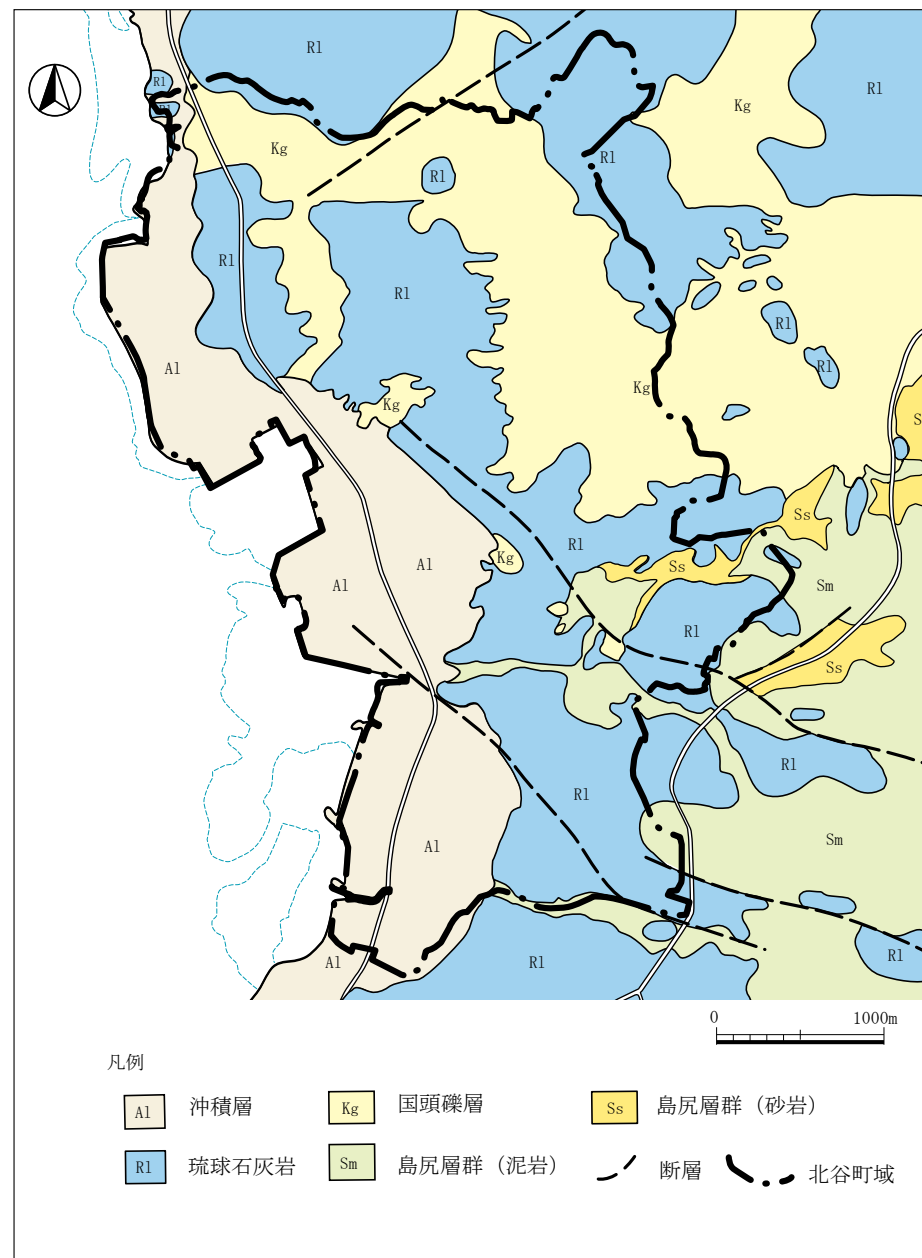
#### <引用・参考文献>

- 北谷町役場 1986 『北谷町史 第2巻 資料編1 前近代・近代文献資料』
- 北谷町教育委員会 1994 『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』北谷町文化財調査報告書 第14集
- 北谷町役場 1994 『北谷町史 第3巻 資料編2 民俗下』
- 沖縄県立博物館 2002 『沖縄県立博物館復帰30周年記念特別展 港川人展～元祖ウチナーンチュ～』
- 北谷町教育委員会 2005 『北谷町史 第1巻 通史編』
- 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第23集
- 北谷町教育委員会 2006 『北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』北谷町文化財調査報告書 第24集
- 北谷町教育委員会 2007 『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—』北谷町文化財調査報告書 第26集
- 北谷町教育委員会 2008 『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書 第27集
- 北谷町教育委員会 2010 『伊礼原E遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（平成16・17年度）—』北谷町文化財調査報告書 第31集



第2図 北谷町周辺の地形分類

上図は『土地分類基本調査 沖縄本島北部 5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレース



第3図 北谷町周辺の地層地質分類

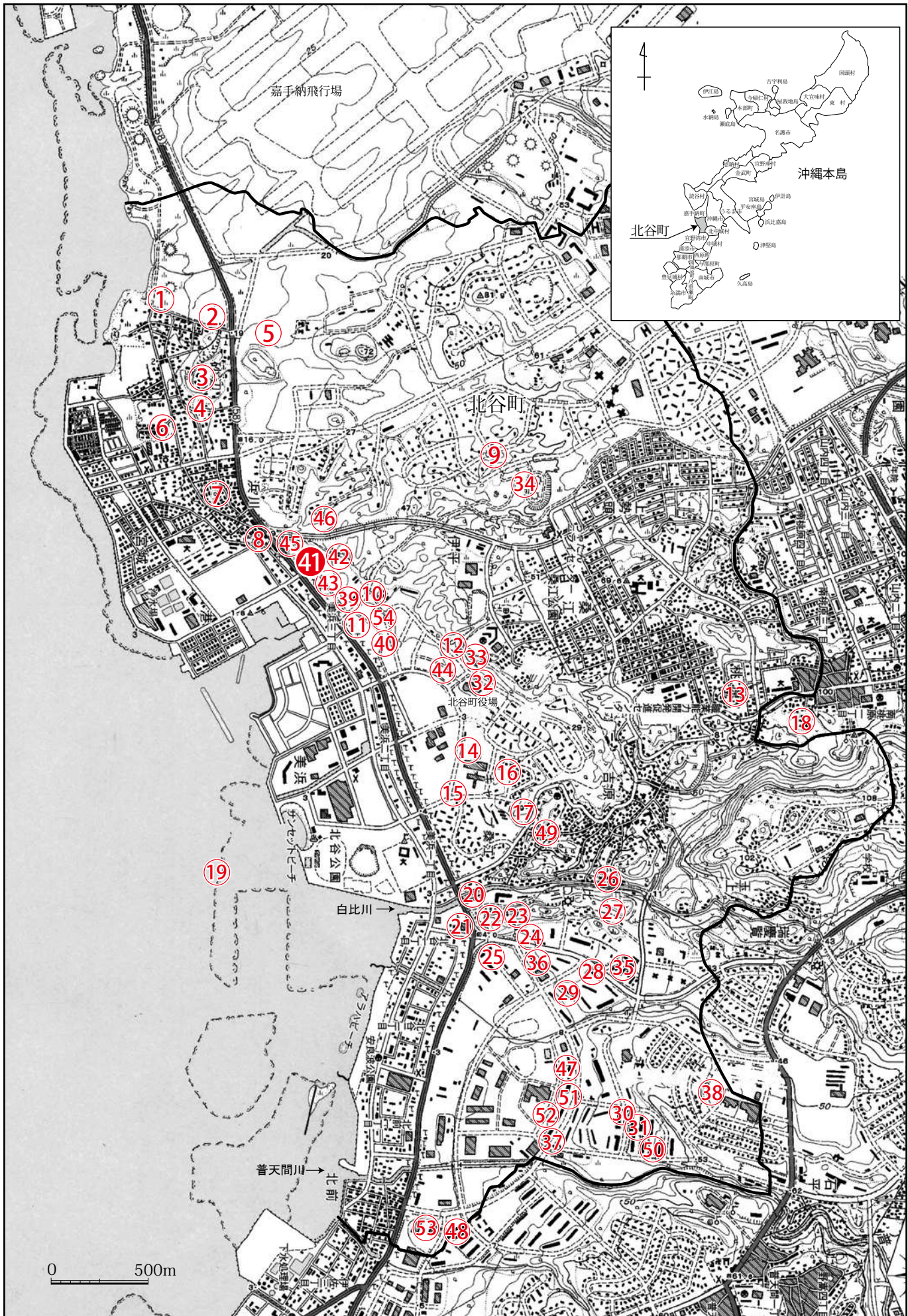
上図は『土地分類基本調査 沖縄本島中南部地域 5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレース

第1表 北谷町遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前Ⅳ期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前Ⅳ期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	貝塚前Ⅴ期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前Ⅱ期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	貝塚前Ⅴ期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	字浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・ 下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前Ⅰ期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚Ⅰ～Ⅴ期・晩期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	字吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	貝塚前Ⅱ期	字北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	字大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山(ちょうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前Ⅴ期	字北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	字桑江後兼久原、字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	字北谷塩川原
37	稲干原(んにふしばる)遺跡	貝塚後期	字北前稲干原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	字北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	字伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前Ⅱ期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	貝塚後期～近世	字桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	貝塚後期・近世	字伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	貝塚前Ⅴ期	字北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前Ⅰ期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	字伝道原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原(たかふしばる)水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	字北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前Ⅲ期～貝塚後期	字伊平伊礼原

註：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

\*番号は第4図と一致



第4図 北谷町の位置と遺跡分布

# 第Ⅲ章 調査の方法と成果

## 第1節 調査の方法

### 調査区及びグリッド設定

延べ 15,000㎡にも及ぶ平安山原 A 遺跡は、うち約 5,000㎡が油分に汚染されており、調査区設定においても過分に影響を受けた結果、特に HA ④は調査区が細切れとなった。グリッドの設定は、1 辺 100 m の大グリッドで区画整理事業地全体を覆い、大グリッドの中に 1 辺 5 m の小グリッドを設け、それを個々の調査区に落とし込むことを基本とした。任意のグリッドのためグリッドラインと東西南北の軸はリンクしない。グリッド名称は、大小ともグリッドの北西隅を基準に、南東へ 01 ～ 20、南西へ A ～ T とした（第 5 図）。本書での調査区は、大グリッド A2 ～ A4 及び B2 ～ B4 の範囲内に位置している。

### 表土掘削

調査区の設定後、磁気探査を実施し機械力を用いて表土掘削を行った。磁気探査では、米軍に帰属する不発弾等が認められた。これらを除きつつ、0.8㎡のバックホウと 10 t ダンプにて米軍基地建設時の造成土・確認調査時の埋土・沖縄防衛局による土壌改良土を掘削・運搬した。

### 包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鍬、ねじり鎌を用いて掘削した。出土遺物は層位・グリッド毎に取り上げ、特徴的な遺物や一括遺物については実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土はベルトコンベアを使用して場外搬出し、バケット容量 0.3㎡級のバックホウと 4 t ダンプを用いて残土置き場へ運搬した。

### 遺構掘削

土坑や柱穴は基本的に長軸で半截し、溝は規模に応じて数箇所の土層観察用畦を残し掘削した。掘削には移植ごてやスプーン等を用いつつ、遺構内遺物を傷つけないよう必要に応じて竹串や竹べら等を用いた。一部の遺構埋土については、今後の分析資料用サンプルとして採取した。

### 記録作業

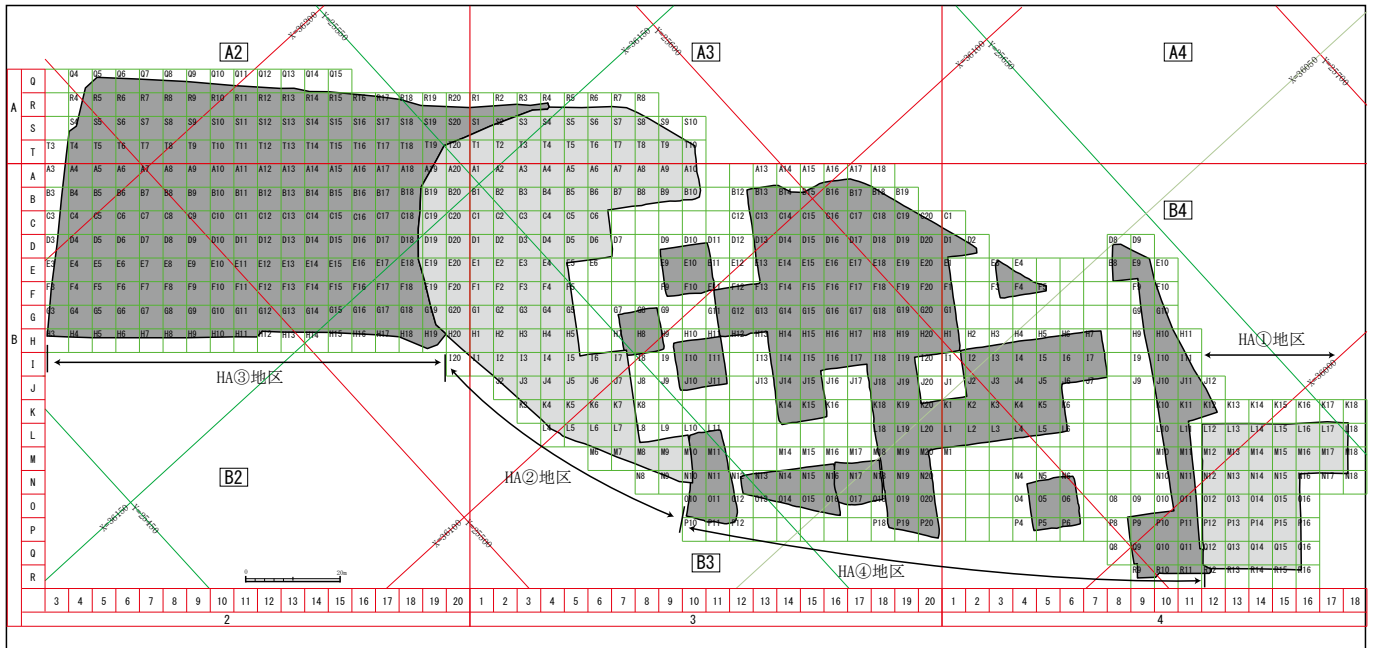
実測は主に平面図をトータルステーションで、壁面図を手実測で行った。写真撮影は、35mm（カラーリバーサル）及び 6 × 7 のフィルムカメラ（カラーリバーサル・モノクロネガ）と、500 ～ 1000 万画素のデジタルカメラを使用した。遺構検出時と完掘時にはブーム式の高所作業車 24 m を適宜使用し、全景の撮影を行った。

### 年代測定・自然科学分析

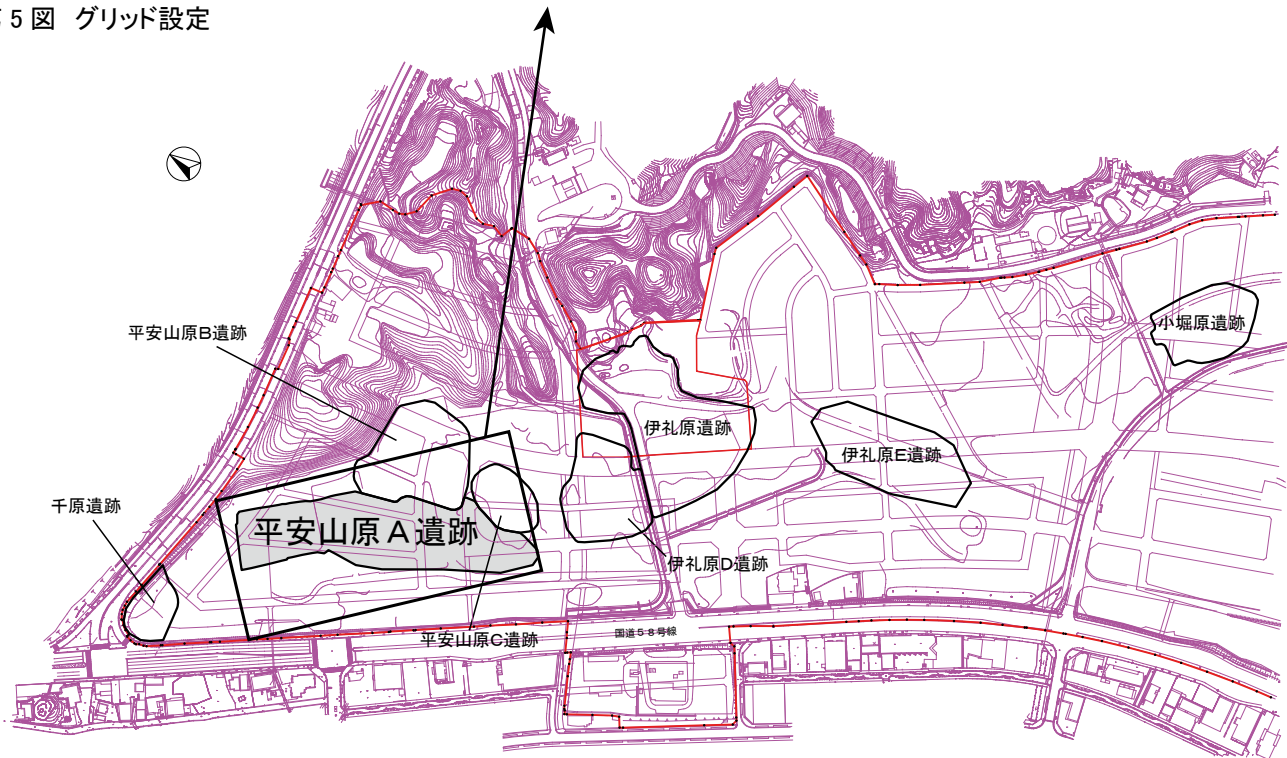
年代測定では、HA ④のビーチロック直上から採取した貝類 7 点を、自然科学分析では、HA ②から採取した炭化物（豆類）の同定を専門機関に委託した。分析結果は第Ⅳ章第 3 節を参照。

### 整理作業

洗浄済み遺物の注記後は、分類・接合を行い、復元可能な資料については焼石膏を用いて復元を行った。復元した資料は土器 10 点、沖縄産無釉陶器 1 点の計 11 点である。接合後の資料は特徴的な遺物を抽出し、実測・デジタルトレース（Illustrator CS）を行った。写真撮影では 1200 万画素のデジタルカメラを用い、Photoshop CS を使用して背景処理等を行った。



第5図 グリッド設定



第6図 平安山原A遺跡の位置



図版2 遺跡外観 (濱川方面より)



図版3 遺跡外観 (美浜方面より)



## 第2節 層序

今回報告する平安山原A遺跡は、計4次の調査（HA①～HA④）に区分されるが、平面的にはほぼ隣接していると言って良い。総面積10,700㎡にわたるため、遺跡の土層堆積は俄かには一律できるものではないが、基本層序として4大別した。以下、各層について記述し、詳細は第7～13図及び第2表に示す。

### 第Ⅰ層 戦後の造成土

概念的には1945年の米軍上陸以後の土層を第Ⅰ層として一括した。各層を大別すると、①キャンプ桑江返還（2003年）以降の造成土（汚染土壌の入替土を含む）、②キャンプ桑江内バスターミナル造営に伴う大規模な盛土・整地土、③1945年の米軍上陸直後の活動に伴う土層、とすることができる。②については、1948年の資料において既に「Motor Pool」として整備されていることが確認されている。戦後3年という短期間のうちに、現在とほぼ変わらぬ平坦地形が米軍によって形作られ、以後度々部分的な整地がなされたようである。これらの層上面から深く掘り込まれる工事攪乱や廃棄坑等も多数認められた。③はⅡ層直上層とも換言できる。Ⅱ層上面には戦前平安山集落（1面目遺構）が構築されていたが、米軍によって直接的な集落破壊がなされたことにより、戦前集落に共伴する多くの遺物を包含する結果となった。そのため、第Ⅰ層についての厳密な定義は、米軍による集落破壊がなされて以降、ということになる。

### 第Ⅱ層 戦前の表土～近世の遺物包含層

戦中まで存続した平安山集落は、近代に入ってから再構成されたものと思われ、その大きな契機となったのが1899（明治33）年から始まった土地整理事業であると考えられる。道路の形成やそれに伴う屋敷割りを行う前に、居住地域の広範囲に盛土を施しており、この盛土は旧北谷村内でも平安山集落や隣の伊礼集落に限られた特有の行為であるという。また、集落範囲には元々大きな自然流路（S-640）が存在していた。この自然流路の埋め立ては近世の頃から段階的になされており、近代に至って平坦化が完了する。集落の居住域においては、これらの人為堆積層を第Ⅱ層として一括した。周辺土壌がその供給源と考えられるが、Ⅲ層以下の遺物包含層を激しく攪乱・削平したことにより、Ⅱ層から出土した遺物は新旧入り乱れる状況となっている。また居住域の外側は、近世から引き続き耕作域であったことが予想される。近代～近世の年代観が考えられるため、この耕作土壌にも第Ⅱ層を充てて一括した。

### 第Ⅲ層 近世前半～グスク時代の遺物包含層

Ⅱ層よりも古相を示す遺物包含層（近世前半～グスク時代）を確認し、これを第Ⅲ層と設定した。分布範囲は広くなく、HA①・②・④の一部に限られる。全面に残存しない理由の1つに、後代の攪乱・削平行為があったことが予想されるが、Ⅲ層が検出されない区域においても同時期の遺物出土が決して少なくないということが、その傍証になる。一方、Ⅲ層の残存が比較的多かったHA④での土層観察によると、同層は非常に細かく分層され、遺構の掘り込み開始面も一律でないという知見が得られている。

### 第Ⅳ層 貝塚時代以前の砂層

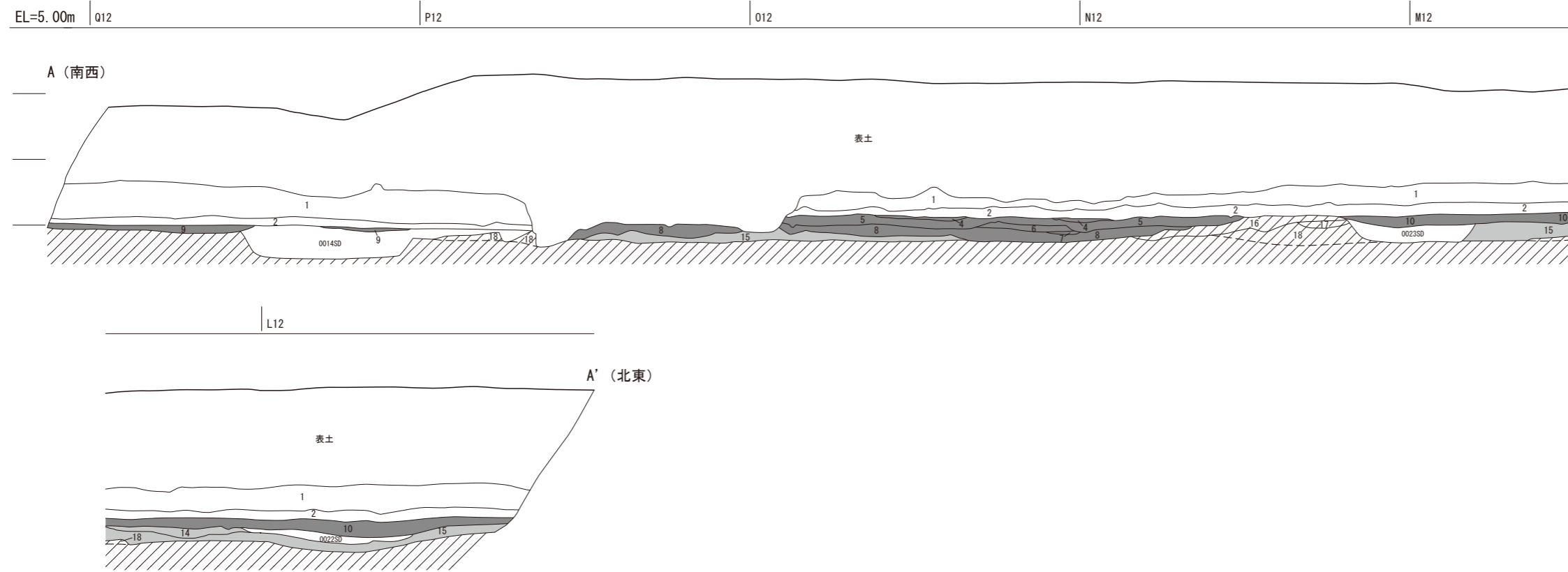
Ⅱ・Ⅲ層の除去後に検出された砂層を、第Ⅳ層として一括した。殆どは風成砂丘であるが、低標高のHA①においては互層状の水成堆積が認められ、HA③北側においては傾斜上方からの供給された可能性のある赤味がかかった粗砂が多くなる。このⅣ層上面において非砂土壌の埋土をもつ遺構群（2面目遺構）を認識することができ、各遺構の調査を行っている。従って、同一遺構面で検出された遺構であっても、Ⅱ層直下のものとⅢ層各層直下のものが混在することになる。また、Ⅳ層の掘削を進めると、掘り込みプランを認識できない人骨が多く見つかった。後代の激しい攪乱を受けていることもあり詳細は不明とせざるを得ないが、同層上面から掘り込まれて埋葬されたものと思われる。同層上位レベルにおいては、グスク～貝塚時代後期の遺物も多く得られている。

### 各面遺構の呼称・取扱いについて

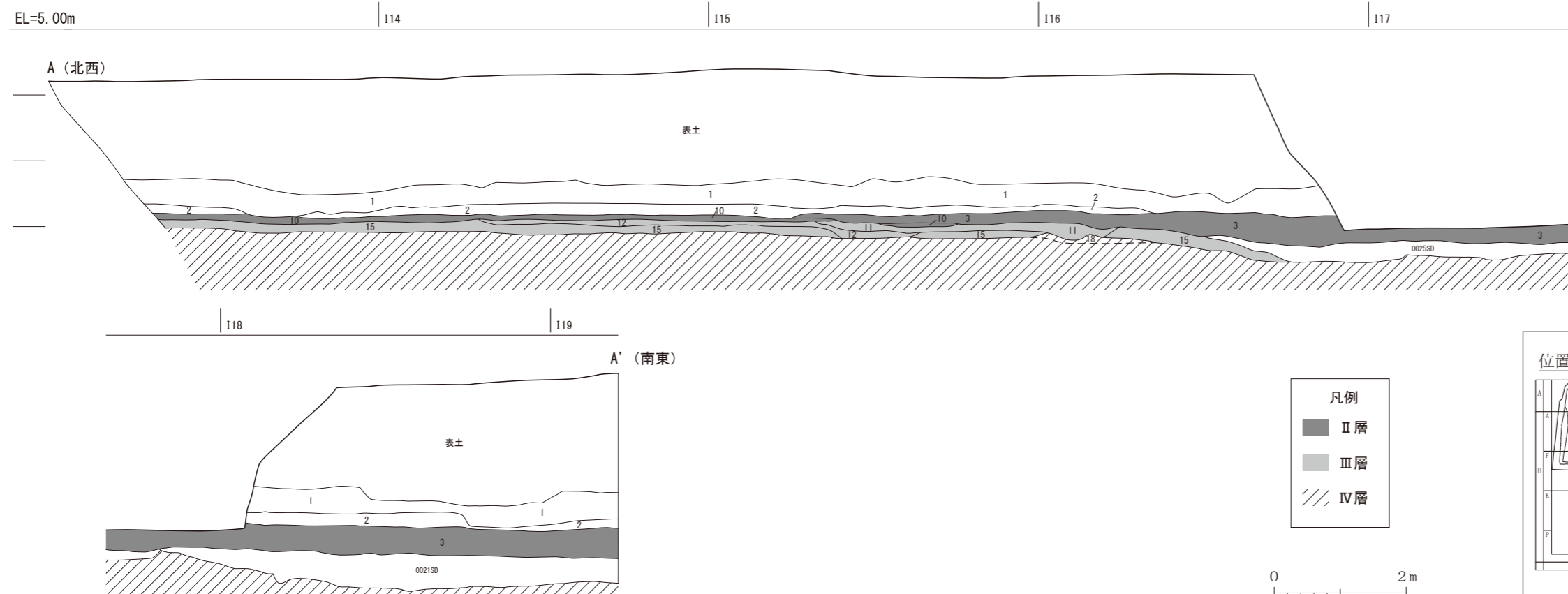
上記のように、遺構検出調査面としては2面であるにも関わらず、遺構の帰属時期は少なくとも3時期以上となっている。また、自然流路等については、その形成と埋没にかなりの時期差が生じる場合が普通であり、例えばグスク期に形成された流路からの出土遺物が近代のものだった、というのはこのことによる。遺物出土状況をより効果的に把握するために、以下のように整理し、数量表等に反映した。

- Ⅱ層遺構 : 第1面（Ⅱ層上面）で検出した遺構。近代に帰属する。
- Ⅲ層遺構 : 第2面（Ⅳ層上面）で検出した遺構の中でも新しいもの。概ね近世後半に帰属する。
- Ⅲ層下遺構 : 第2面（Ⅳ層上面）で検出した遺構の中でも古手のもの。グスク時代～近世前半に帰属する。

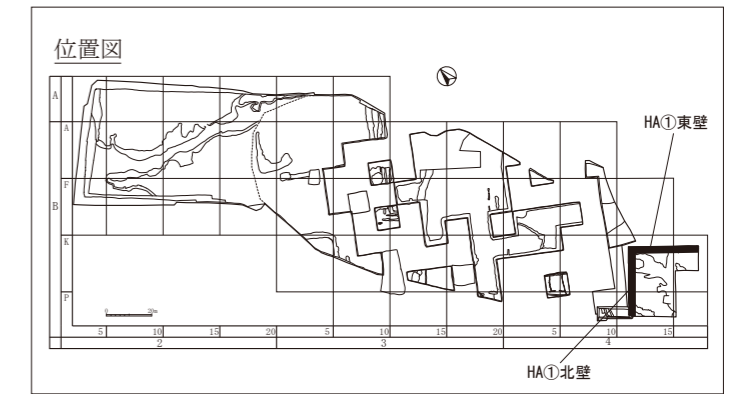
<HA① 北壁>



<HA① 東壁>



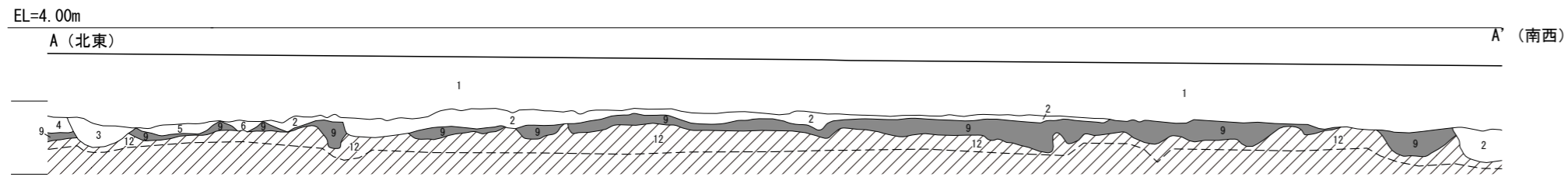
- 凡例
- II層
  - III層
  - /// IV層



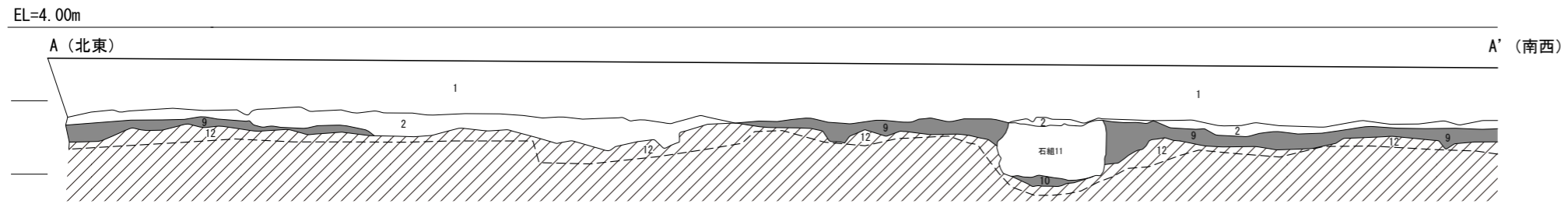
第7図 層序1 (HA①地区)



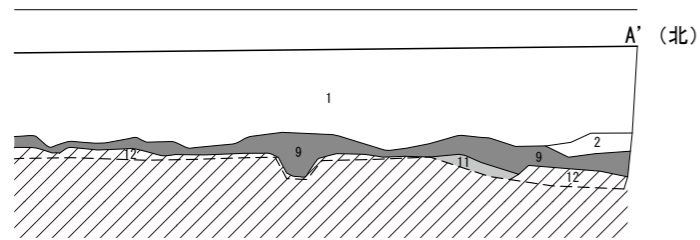
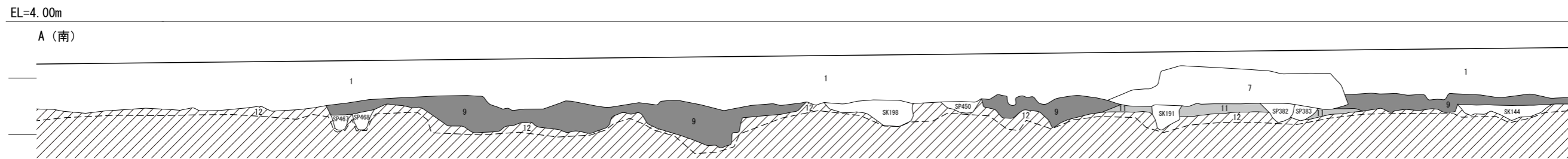
〈HA② 南壁 1〉



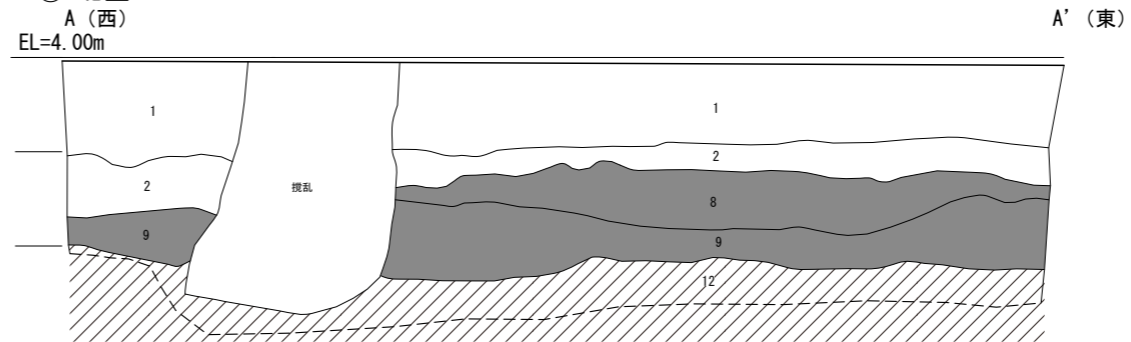
〈HA② 南壁 2〉



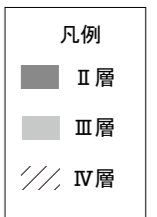
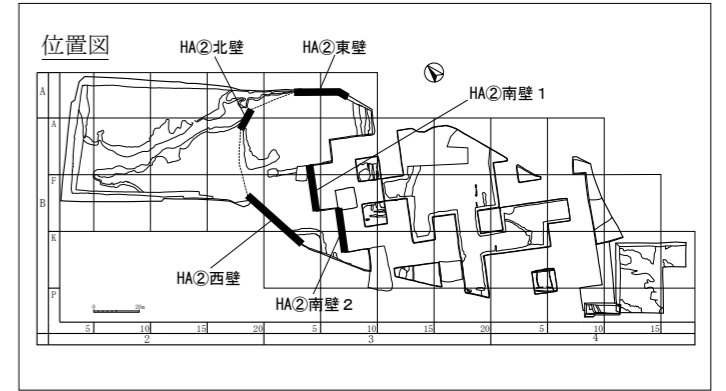
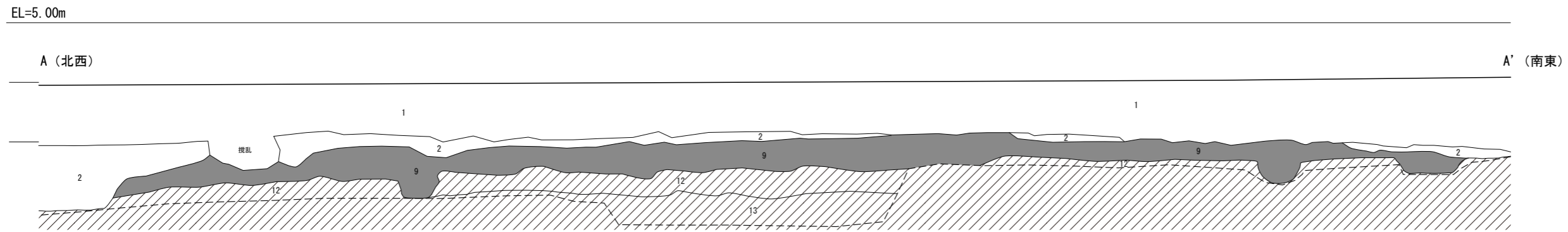
〈HA② 西壁〉



〈HA② 北壁〉



〈HA② 東壁〉

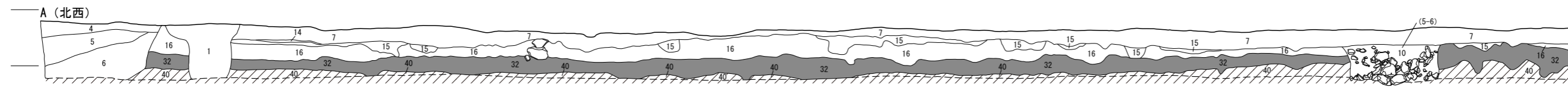


第8図 層序 2 (HA②地区)

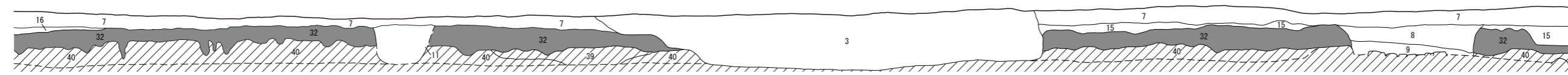


〈HA③ 東壁〉

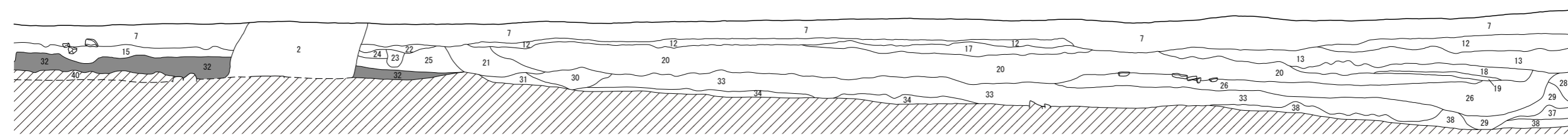
EL=5.00m | R6 | R7 | R8 | R9 | R10



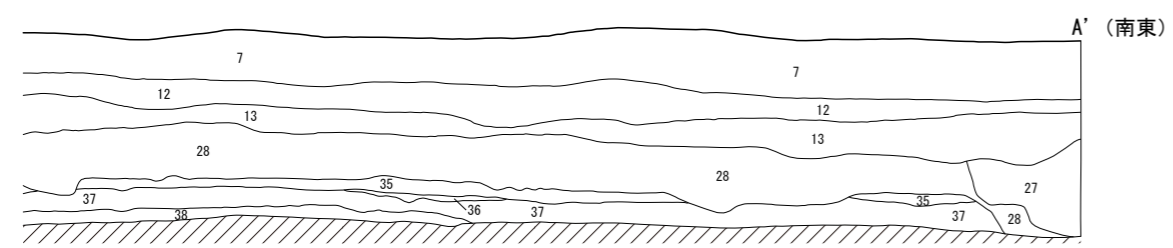
EL=5.00m | R11 | R12 | R13 | R14 | R15



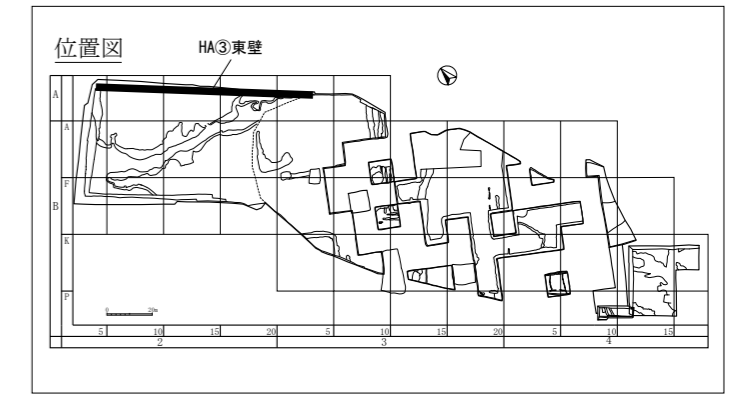
R16 EL=5.00m | R17 | R18 | R19 | R20 | R1



EL=5.00m | R2 | R3



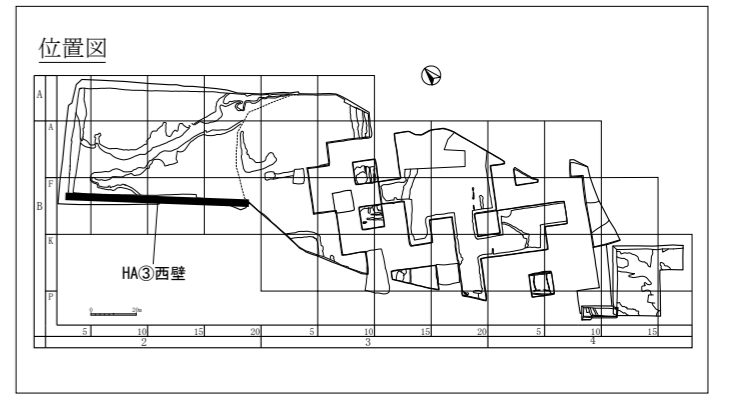
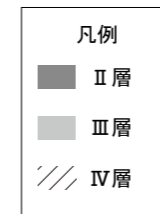
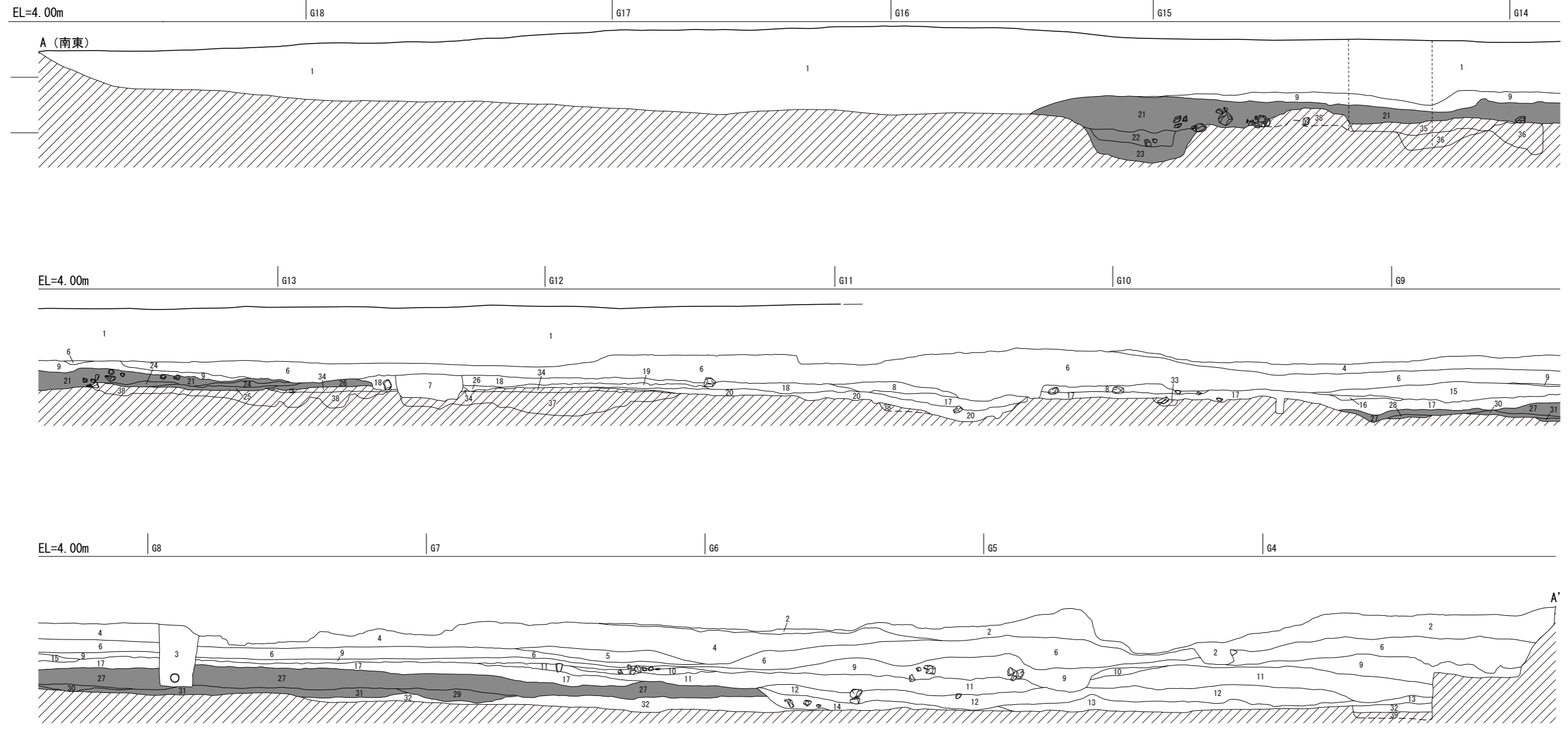
- 凡例
- II層
  - III層
  - /// IV層



第9図 層序3 (HA③地区)



<HA③ 西壁>

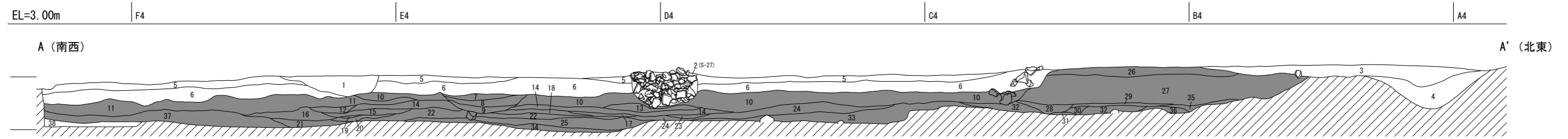


第10図 層序4 (HA③地区)

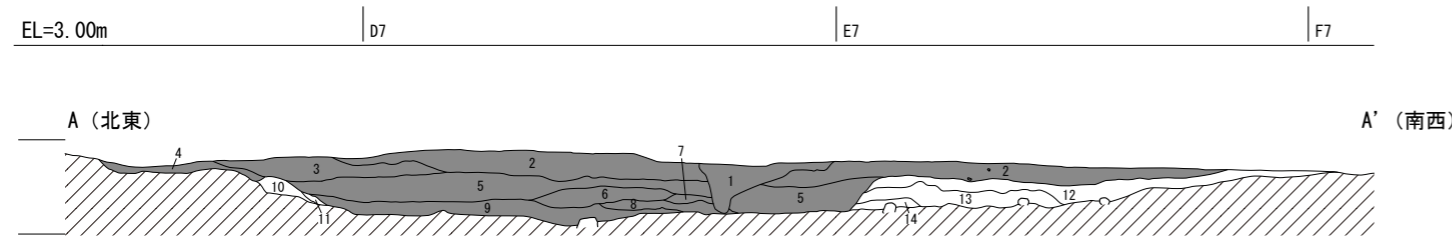




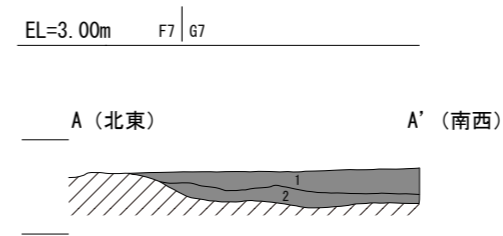
<HA③ S-640ベルト 1>



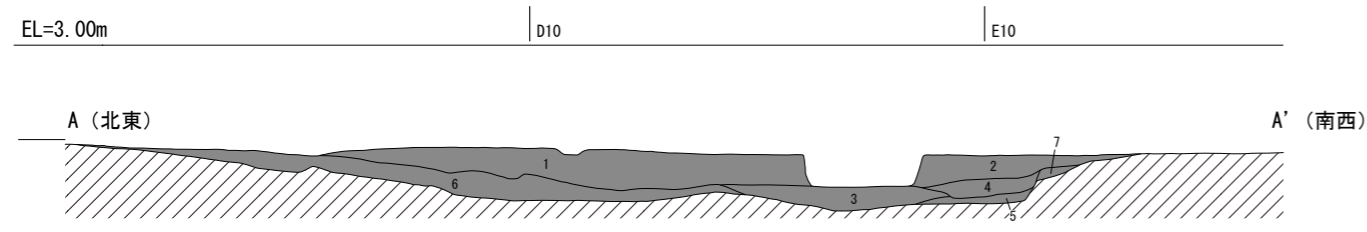
<HA③ S-640ベルト 2>



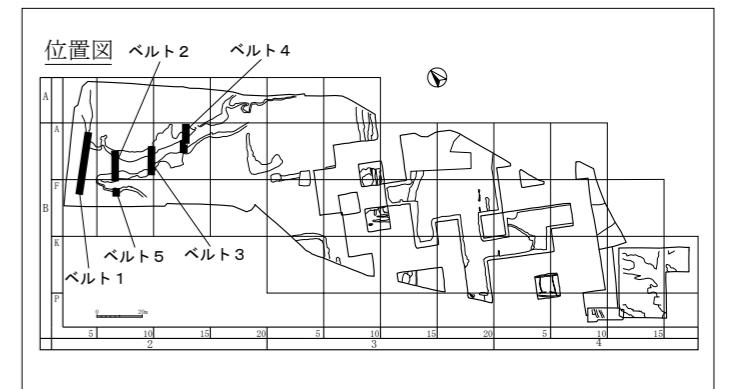
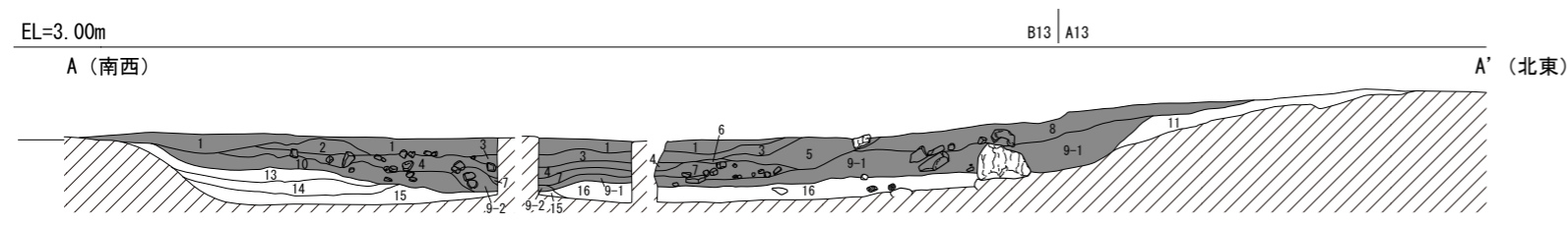
<HA③ S-640ベルト 5>



<HA③ S-640ベルト 3>



<HA③ S-640ベルト 4>

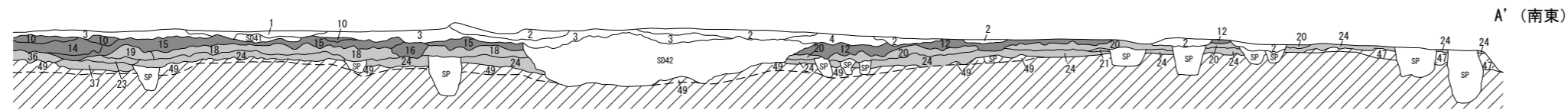
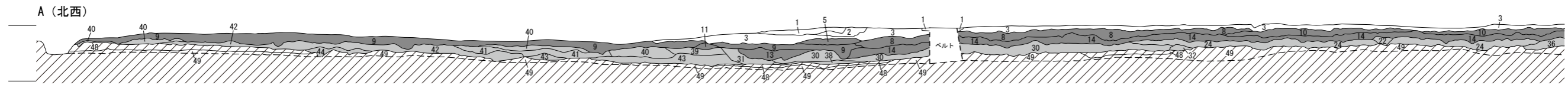


第 11 図 層序 5 (HA③地区)



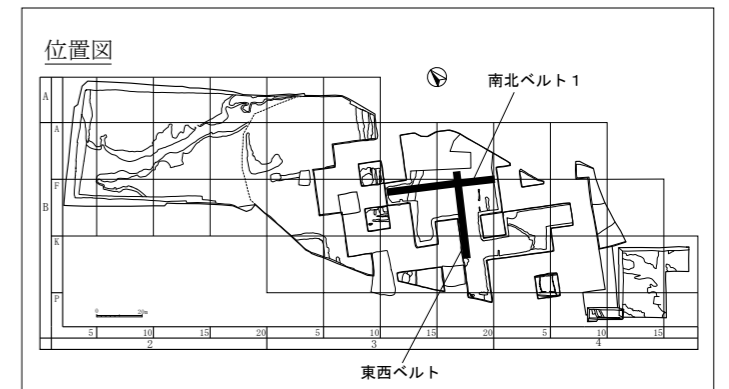
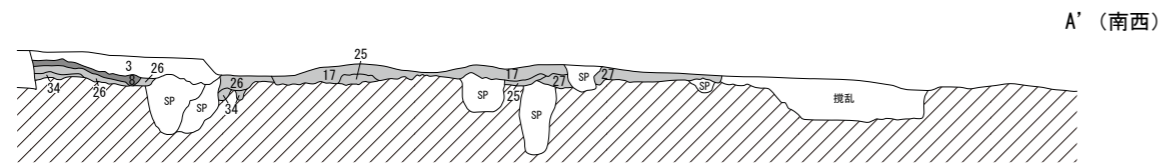
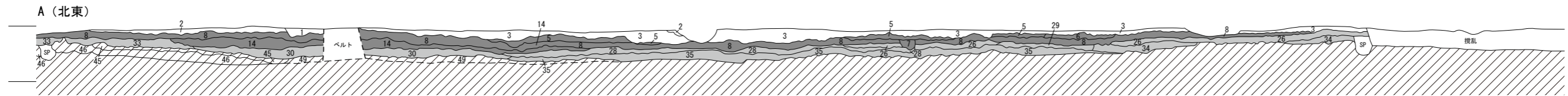
<HA④ 南北ベルト1>

EL=4.00m



<HA④ 東西ベルト>

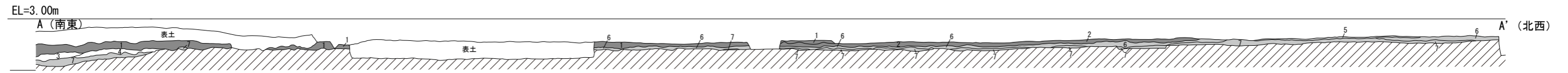
EL=4.00m



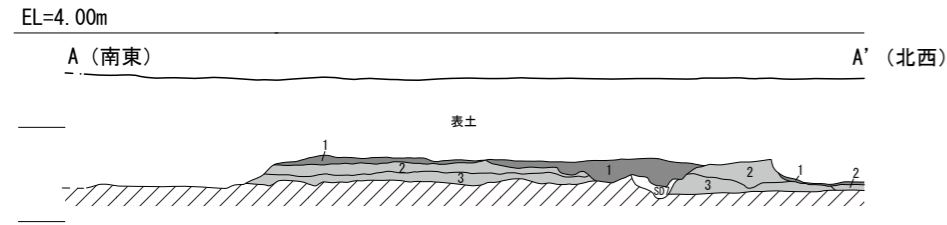
第12図 層序6 (HA④地区)



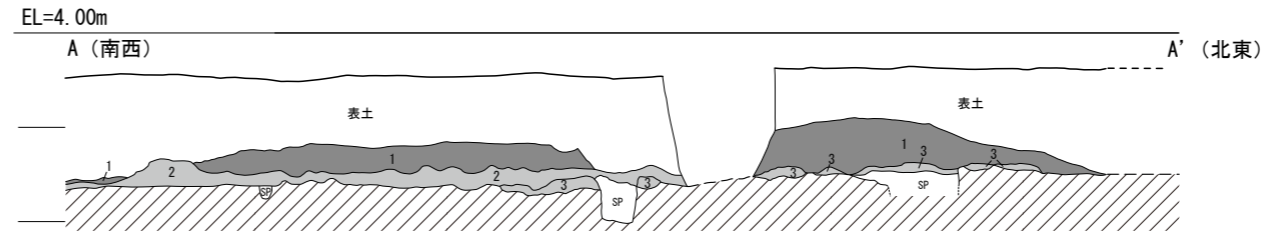
<HA④ 南北ベルト 2>



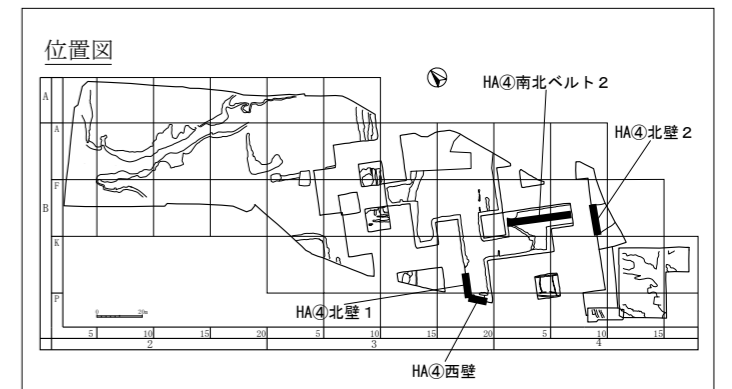
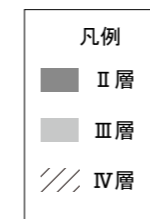
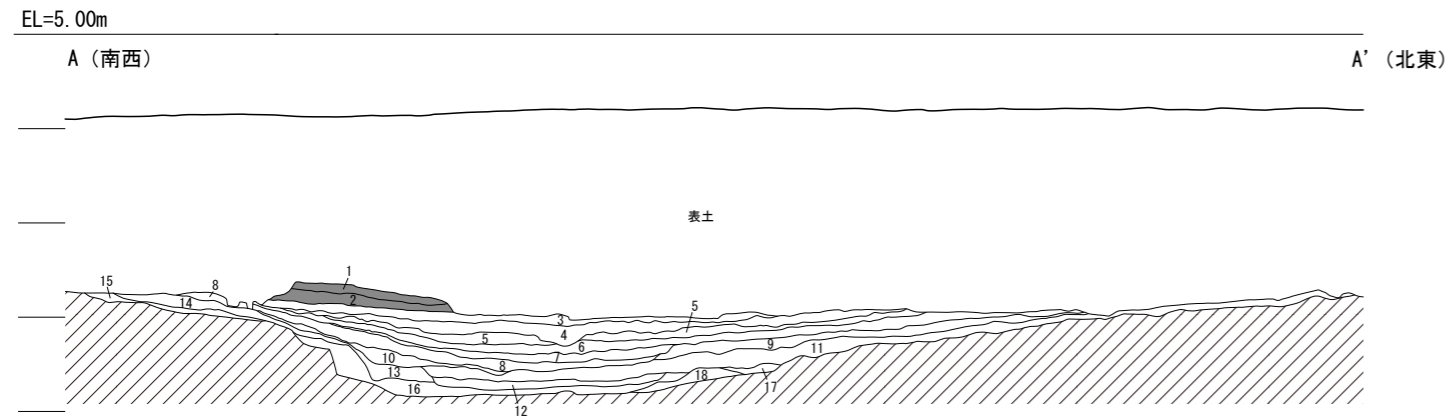
<HA④ 西壁>



<HA④ 北壁 1>



<HA④ 北壁 2>



第 13 図 層序 7 (HA④地区)



HA ① 基本土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
I	1	暗灰黄色粘質シルト 2.5Y4/2	
	2	粘-ア 褐色シルト 2.5Y4/3	
II	3	暗灰黄色粘質シルト 2.5Y4/2	炭化物少量、切子を均質に含む。
	4	暗粘-ア 褐色粘砂 2.5Y3/3	黒褐色土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	5	粘-ア 黒色粘質シルト 5Y3/1	粗砂・粘-ア 色土粒・小型陸棲貝少量。
	6	粘-ア 褐色中砂 2.5Y4/3	黒褐色土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	7	粘-ア 黒色粘質シルト 5Y3/1	粗砂・粘-ア 色土粒少量。
	8	黒褐色粘砂 2.5Y3/2	小礫少量。
	9	粘-ア 褐色粘砂 2.5Y4/3	貝片・枝 <sup>ワ</sup> ゴ少量、鉄分が沈着。
	10	黒褐色粘質シルト 2.5Y3/2	切子を均質に含む。
III	11	粘-ア 褐色中砂 2.5Y4/3	黒褐色土 <sup>ア</sup> ロク・ <sup>ワ</sup> ゴ 礫少量。
	12	粗砂 2.5Y5/4	<sup>ワ</sup> ゴ 礫少量。
	13	粘-ア 褐色粘砂 2.5Y4/4	明黄褐色砂・にぶい黄褐色砂・黒褐色シルト中量。
	14	黄褐色粘砂 2.5Y4/4	陸棲貝少量。
	15	にぶい黄褐色粘砂 10YR6/4	海産貝・枝 <sup>ワ</sup> ゴ 多量。
IV	16	暗灰黄色粘砂 2.5Y4/2	貝片・枝 <sup>ワ</sup> ゴ・ <sup>ワ</sup> ゴ 礫多量、南ほど黒味を増す。
	17	粘-ア 褐色粘砂 2.5Y4/3	貝片・黒褐色土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	18	にぶい黄褐色粘砂 10YR6/4	海産貝・枝 <sup>ワ</sup> ゴ 多量。

HA ② 基本土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
I	1		造成土。
	2	暗褐色砂質土 10YR3/4	小礫・貝片多量。
	3	灰白色砂 7.5YR8/1	ケ-ア <sup>ノ</sup> 敷設時の入れ砂。
	4	黄褐色粘質土 10YR5/6	
	5	灰白色砂 10YR8/2	ケ-ア <sup>ノ</sup> 敷設時の入れ砂。
	6	灰白色砂 2.5Y8/1	ケ-ア <sup>ノ</sup> 敷設時の入れ砂。
	7	にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3	2層との互層をなす。
	8	灰黄褐色砂質土 10YR4/2	初 <sup>チ</sup> 多量、小礫・貝片微量。
II	9	褐色砂質土 10YR4/4	小礫・貝片微量。
	10	黄褐色砂質土 10YR5/8	粗砂・小礫・枝 <sup>ワ</sup> ゴ少量。
III	11	浅黄褐色砂 7.5YR8/4	貝片・枝 <sup>ワ</sup> ゴ 微量。
IV	12	明黄褐色砂 10YR7/4	
	13	明黄褐色砂 10YR6/6	

HA ③ 東壁 基本土層注記

層	色・土質		特徴	
大別	細分			
I	1	褐色粘質土 7.5YR4/4		
	2	黄褐色砂質土 2.5Y5/4	埋設管擾乱。	
	3	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	コ-ル <sup>ル</sup> 多量。	
	4	黄褐色粘質土 10YR8/6	コ-ル <sup>ル</sup> 多量。	
	5	黄褐色粘質土 10YR5/6	小礫・貝片少量。	
	6	明黄褐色粘質土 10YR7/6		
	7	明褐色粘質土 10YR6/6	炭化物・砂礫少量。	
	8	黒褐色粘質土 2.5Y3/2	橙色砂粒中量。	
	9	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	炭化物・橙色砂粒微量。	
	10	暗褐色粘質土 7.5YR3/4	礫・炭化物多量。S-6 破却痕。	
	11	黒灰色粘質土 7.5YR4/1	礫多量。	
	12	明黄色褐色粘質土 2.5Y6/6	炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク・礫少量。	
	13	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/4	タ <sup>タ</sup> 等 <sup>等</sup> のゴミ多量。	
	14	褐色粘質土 10YR4/4	炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。	
	15	にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3	炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。	
	16	黄褐色粘質土 10YR5/8	炭化物微量。	
	17	暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2	礫少量、炭化物微量。	
	18	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	炭化物・橙色砂粒微量。	
	19	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/4	礫多量。	
	20	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	炭化物・ <sup>レ</sup> ガ片・礫少量。	
	21	褐色粘質土 10YR4/4	炭化物・橙色砂粒微量。	
	22	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/4	橙色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。	
	23	褐色粘質土 10YR4/4	炭化物微量。	
	24	黄褐色砂質土 10YR5/6	白色砂粒多量。	
	25	黄褐色粘質土 10YR5/6		
	26	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	礫少量、炭化物微量。	
	27	褐色粘質土 10YR4/4	炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。	
	28	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク多量。	
	29	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	白色砂粒少量、炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク少量。	
	30	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	貝片少量、炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。	
	S-35	31	褐色粘質土 10YR4/4	橙色砂少量、炭化物微量。
		32	明褐色砂質土 7.5YR5/6	白色砂粒多量。
	II	33	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/4	炭化物・橙色砂 <sup>ア</sup> ロク・白色砂粒少量。
		34	褐色粘質土 10YR4/6	橙色砂 <sup>ア</sup> ロク少量、炭化物微量。
		35	暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク多量、炭化物微量。
		36	暗灰黄色粘質土 2.5Y4/2	炭化物・褐色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。
		37	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	白色砂粒多量、炭化物・褐色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。
		38	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/6	白色砂粒多量。
39		明黄褐色砂 2.5Y7/6		
40		明黄褐色砂 10YR7/6		

HA ③ 西壁 基本土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
I	1	淡黄色砂質土 2.5Y7/6	礫・暗褐色土 <sup>ア</sup> ロク多量。
	2	黄褐色粘質土 10YR7/6	コ-ル <sup>ル</sup> 多量。
	3	黒褐色砂質土 2.5Y3/1	埋設管擾乱。
	4	灰色砂質土 10Y6/1	礫多量。
	5	明褐色粘質土 7.5YR5/6	礫・褐灰粘質土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	6	黒褐色粘質土 10YR3/1	褐色土 <sup>ア</sup> ロク・褐色粘土 <sup>ア</sup> ロク・礫を多量。
	7	黒褐色粘質土 10YR3/2	礫・暗粘-ア <sup>ノ</sup> 粘土 <sup>ア</sup> ロク多量。
	8	黒褐色砂質土 2.5Y3/2	にぶい黄褐色粘土 <sup>ア</sup> ロク多量、礫少量。
	9	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/4	赤褐～黒褐色粒多量。
	10	にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4	砂質土 <sup>ア</sup> ロク多量。
	11	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/6	にぶい黄褐色粘土 <sup>ア</sup> ロク多量、炭化物微量。
	12	暗灰黄粘質土 2.5Y4/2	白色粒多量、礫・貝片少量。
	13	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	白～褐色砂多量、炭化物微量。
	14	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	白色粒多量、炭化物・礫少量。
	15	褐灰色粘質土 7.5Y4/1	礫・明褐色粘質土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	16	にぶい黄褐色粘土 10YR6/4	明赤褐色粘土 <sup>ア</sup> ロク多量。
	17	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	白色粒多量、炭化物・礫少量。
	18	黒褐色粘質土 2.5Y3/2	白色粒多量、礫・暗粘-ア <sup>ノ</sup> 色粘土 <sup>ア</sup> 少量。
	19	暗粘-ア 色粘土 5Y4/3	所々褐色に変色する。
	20	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	明黄褐色砂質土 <sup>ア</sup> ロク多量、小礫少量。
II	21	黒色粘質土 10YR2/1	礫・暗粘-ア <sup>ノ</sup> 色粘土 <sup>ア</sup> ロク多量、炭化物・貝片少量。
	22	粘-ア 黒色粘質土 5Y3/1	灰粘-ア <sup>ノ</sup> 色砂質土 <sup>ア</sup> ロク・淡黄色砂 <sup>ア</sup> ロク多量、礫少量。
	23	淡黄色砂質土 2.5Y8/4	粘-ア 黒色粘質土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	24	灰黄褐色砂質土 10YR4/2	炭化物・貝片・暗粘-ア <sup>ノ</sup> 粘土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	25	にぶい黄褐色砂質土 10YR6/3	細砂・貝片多量。
	26	黒褐色粘質土 2.5Y3/1	暗粘-ア <sup>ノ</sup> 色粘土 <sup>ア</sup> 多量、礫少量。
	27	褐色粘質土 10YR4/4	白色粒多量、炭化物・貝片少量。
	28	黄褐色粘土 2.5Y4/1	全体に鉄分酸化変色部分あり。
	29	灰色粘質土 5Y4/1	白色粒多量、炭化物・貝片少量。
	30	暗粘-ア 褐色砂質土 2.5Y3/3	白色粒・粗砂多量、鉄分酸化変色部分あり。
S-640	31	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	白色粒・礫少量、鉄分酸化変色部分あり。
	32	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	白色砂少量、炭化物微量。
	33	黄灰色砂質土 2.5Y4/1	明黄褐色砂質土 <sup>ア</sup> ロク多量。
	34	にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4	細砂多量。
	35	にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3	淡黄色砂質土 <sup>ア</sup> ロク・黒色粘質土 <sup>ア</sup> ロク・礫多量。
	36	淡黄色砂質土 2.5Y8/4	黒色粘質土 <sup>ア</sup> ロク・灰黄褐色砂質土 <sup>ア</sup> ロク多量、貝片少量。
	37	暗粘-ア 褐色砂質土 2.5Y3/3	貝片・炭化物少量。
	38	明黄褐色砂質土 2.5Y6/6	貝片・粘-ア 褐色砂質土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	39	灰色砂 7.5Y6/1	貝片少量。

HA ③ S-640 ベルト 1 土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
I 相当	1	黄褐色粘質土 2.5Y5/6	橙色砂 <sup>ア</sup> ロク多量。
	2	黒褐色粘質土 10YR3/2	礫多量。
	3	暗褐色砂質土 10YR3/4	礫少量。
	4	にぶい黄褐色砂質土 10YR7/4	暗褐色砂質土 <sup>ア</sup> ロク・貝片・白色砂多量。
	5	黒褐色粘質土 10YR3/2	白色砂・炭化物少量。
	6	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物微量。
	7	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	白色～褐色砂・礫多量。
	8	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/6	6層土 <sup>ア</sup> ロク多量、白色砂少量、褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物微量。
II 相当	9	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	白色・褐色砂少量。
	10	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/6	白色砂少量、褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物微量。
	11	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	白色・褐色砂多量、炭化物微量。
	12	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	白色・褐色砂少量。
	13	黄褐色砂質土 2.5Y5/4	白色砂・貝片多量。
	14	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	白色砂多量。
	15	黄褐色砂質土 2.5Y5/3	白色砂少量、褐色砂・炭化物微量。
	16	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	白色砂 <sup>ア</sup> ロク少量。
	17	黄褐色粘砂 2.5Y5/4	
	18	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	白色砂多量。
	19	にぶい黄色粘砂 2.5Y6/3	白色砂多量。
	20	にぶい黄色粘砂 2.5Y6/4	白色砂少量。
	21	黄褐色粘砂 2.5Y5/4	15層土 <sup>ア</sup> 少量。
	22	黄褐色粘砂 2.5Y5/4	白色砂少量、炭化物微量。
	23	にぶい黄色粘砂 2.5Y6/3	白色砂少量、炭化物微量。
	24	黄褐色砂質土 2.5Y5/3	白色砂少量、炭化物微量。
	25	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	白色砂・粗砂 <sup>ア</sup> ロク少量、炭化物微量。
	26	黄褐色粘質土 10YR5/6	白色砂・炭化物・貝片少量。
	27	褐色砂質土 10YR4/4	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物少量。
	28	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/3	白色砂少量、炭化物微量。
29	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	貝片・明黄褐色砂 <sup>ア</sup> ロク多量。	
30	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3		
31	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・白色砂少量。	
32	粘-ア 褐色砂 2.5Y4/4	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・白色砂多量。	
33	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	貝片少量。	
34	黄褐色砂 2.5Y5/4		
35	粘-ア 褐色砂 2.5Y4/3	白色砂多量。	
36	明黄褐色砂質土 10YR7/6	粘-ア 褐色砂 <sup>ア</sup> ロク多量。	
37	暗粘-ア 褐色粘質土 2.5Y3/3	白色砂少量、炭化物微量。	
II 以前	38	灰色砂 7.5Y6/1	貝片少量。

HA ③ S-640 ベルト 2 土層注記

層	色・土質		特徴	
大別	細分			
II 相当	1	黒褐色粘質土 2.5Y3/2	褐色粘土 <sup>ア</sup> ロク少量。	
	2	にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3	白色砂・貝片微量。	
	3	褐灰色砂質土 10YR4/1	黄色砂・貝片・炭化物微量。	
	4	褐灰色砂質土 10YR4/1	黄色砂 <sup>ア</sup> ロク少量。	
	5	黒褐色砂質土 7.5YR3/1	貝片・小礫少量。	
	6	黄灰色砂質土 2.5Y4/1	白色砂・貝片微量。	
	7	黄灰色砂質土 2.5Y4/1	白色砂・貝片少量。	
	8	暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2	白色砂・貝片少量。	
	9	黒褐色砂質土 2.5Y3/1	貝片・炭化物少量。	
	10	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	貝片少量。	
	II 以前	11	暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2	貝片微量。
		12	暗粘-ア 褐色砂質土 2.5Y3/3	貝片・淡黄色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物少量。
		13	粘-ア 褐色粘砂 2.5Y4/3	貝片・ <sup>ワ</sup> ゴ 片微量。
		14	暗灰黄色粘砂 2.5Y4/2	貝片・炭化物微量。

HA ③ S-640 ベルト 3 土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
II 相当	1	暗褐色砂質土 10YR3/4	貝片・白色砂少量、褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物微量。
	2	暗褐色砂質土 10YR3/3	白色砂多量、褐色砂 <sup>ア</sup> ロク・炭化物微量。
	3	暗褐色砂質土 10YR3/4	白色砂・貝片多量。
	4	暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2	白色砂多量、貝片微量。
	5	暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2	白色砂多量。
	6	暗褐色砂質土 10YR3/4	貝片少量、炭化物・褐色砂 <sup>ア</sup> ロク微量。
	7	黄褐色砂質土 2.5Y5/4	白色砂多量。

HA ③ S-640 ベルト 4 土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
II 相当	1	黒褐色砂質土 10YR3/1	褐色砂・貝片少量。
	2	暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2	貝片・褐色砂 <sup>ア</sup> ロク少量。
	3	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	<sup>ワ</sup> ゴ片・貝片・褐色砂少量。
	4	暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2	礫多量、貝片少量、炭化物微量。
	5	暗粘-ア 褐色砂質土 2.5Y3/3	炭化物・貝片少量、礫微量。
	6	黒褐色砂質土 2.5Y3/2	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク少量、貝片微量。
	7	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	礫・貝片少量。
	8	暗粘-ア 褐色砂質土 2.5Y3/3	炭化物・貝片・礫少量。
	9-1	黒褐色粘質土 10YR3/1	炭化物・貝片・褐色砂少量。
	9-2	黒褐色粘質土 10YR3/1	礫多量、炭化物・貝片・褐色砂少量。
II 以前	10	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/3	貝片少量。
	11	粘-ア 褐色砂質土 2.5Y4/4	貝片少量。
	12	黄褐色砂 2.5Y5/4	褐色砂 <sup>ア</sup> ロク多量。
	13	黄褐色砂 2.5Y5/3	褐色砂多量。
	14	暗灰黄粘砂 2.5Y5/2	灰色粘土 <sup>ア</sup> ロク多量。
	15	黄褐色粘砂 2.5Y5/4	
	16	黄褐色粘砂 2.5Y5/4	貝片微量。

HA ③ S-640 ベルト 5 土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
II 相当	1	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/4	白色砂・貝片少量。
	2	粘-ア 褐色粘質土 2.5Y4/6	粘-ア 褐色土 <sup>ア</sup> ロク・貝片・小礫少量。

HA ④ 南北ベルト 2 基本土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		
II	1	黒褐色粘質土 10YR2/2	切子・炭化物・焼土多量、暗粘-ア <sup>ノ</sup> 褐～褐色粘質土 <sup>ア</sup> ロク少量。
	2	黒褐色砂質土 10YR2/2	切子・炭化物・焼土多量、暗粘-ア <sup>ノ</sup> 褐～褐色粘質土 <sup>ア</sup> ロク少量。
流路	3	黒褐色粘質土 2.5Y3/1	粗砂多量、軽石ごく微量。
	4	黒色砂質土 2.5Y2/1	粗砂多量、軽石ごく微量。
III	5	黒褐色砂質土 10YR3/2	斑鉄多量、暗粘-ア <sup>ノ</sup> 粘質土 <sup>ア</sup> 少量。
	6	黒褐色砂質土 10YR2/3	炭化物・焼土・貝片多量、黒褐色砂質土少量。
	7	にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4	褐色砂質土少量、軽石・炭化物ごく微量。

HA ④ 北壁 2 基本土層注記

層	色・土質		特徴
大別	細分		







第3表 検出された平安山の屋敷

屋敷番号	屋号	屋号(ヨミ)	名字	戦中の家族数	戦時の死者	日本兵の寄宿	証言記録
24	祝女殿内	ヌンドウルチ	島袋	10	2		屋敷は広く果物が沢山実っていた。
20	祝女殿内小	ヌンドウルチグラー	島袋	5	2	○	
25	蒲伊礼小	カマーイリーグラー	島袋	4	0		
37	大屋	ウフヤ	島袋	5	0		祝女殿内から嫁いで来た人がノロであった。
38	道端大屋小	ミチバタウフヤグラー	島袋	2	1		
28	小渡小	ウードウグラー	小渡	4	2		
27	瓦屋又吉小	カーラヤーマテーシグラー	又吉	5	5	?	瓦葺の大きな家だった。米軍上陸直前の爆撃で家が吹っ飛んだ。
26	名嘉座	ナカザ	名嘉座	3	0		米軍上陸直前の爆撃で家屋が焼失。
19	東大屋小	アガリウフヤグラー	島袋	1	0		米軍上陸直前の爆撃で家屋が焼失。
18	西大屋小	イリウフヤグラー	島袋	5	0		他所の土地に家を建てて住んでいた。
17	照屋先生	ティーラシンシー	照屋	8	1	○	米軍上陸直前の爆撃で家屋が焼失。
30	三良又吉小	サンダーマテーシグラー	又吉	5	1		
39	仲村渠	ナカンダカリ	仲村渠	-	-		既に大阪に移転していた。
40	後ヌ比嘉小	クシヌヒジャグラー	比嘉	3	0		

※参考資料：『北谷町史 第五巻(上)(下) 資料編4・北谷の戦時体験記録』(1992北谷町役場)



平安山 屋号地図 『北谷町の地名』(2006北谷町教委)より ※遺構図との方位は異なる



第14図 1面目 戦前平安山集落 検出遺構配置 (S=1/500)





アサギ・母屋の雨端 (南東より)



井戸・洗い場 (南東より)



上水路・風呂場付近 (北西より)



蓋除去後の上水路 (北西より)



排水路 01・貯水池 01 (北西より)



ウーフル (北東より)



畜舎床面付近 (北東より)



畜舎基礎部分 (北東より)



畜舎裏の貯水池 02 (北より)



風呂場 (北東より)



不明建物 (南より)



貯水池 03 (西より)



豚骨廃棄土坑 (東より)



貝溜り範囲 (北西より)



SD07 下位石列検出 (北西より)

図版 4 祝女殿内屋敷



第 15 図 1 面目 祝女殿内屋敷 平面図 (S=1/200)



## 第3節 近現代の遺構と出土遺物

本節では、第1面で検出された集落遺構群及びそれに付帯する遺物を取り扱う。遺構は埋立・盛土層であるⅡ層上面に構築され、概念上は近代以降に限られる。しかし大型溝の一部（SD42）については、それ以前から継続使用されていた可能性もある。遺物はガラス瓶やプラスチック製品等、考古学的には非常に新しいものが多く含まれるが、いずれも戦前集落における生活状況を如実に物語る貴重な資料と考え、紙数を割いた。1945（昭和20）年4月の米軍上陸侵攻と同時に、米軍によるモノの流入も始まるが、原則としてこれらは、検出された集落とは無縁のものとして除外している。

当該期の成果を整理するにあたっては、米軍によって撮影された空中写真や、当時実際に暮らしていた方々の証言等の記録類が豊富にあり、大いに参考になった。また、ガラス瓶等の当時の販売商品についても、現存する企業等が各々開示している情報の中に、当時の社会背景を知る手がかりが残されていたため、時間の限りその収集に努めた。

### 1. 戦前の字平安山集落跡

Ⅰ層直下において、米軍による接収まで存続していた平安山集落の明瞭な痕跡が検出された。当時の空中写真や諸記録を加味して調査・整理作業を進めた結果、生活道路の配置や屋敷区割がおおよそ判明し、その形成開始にあたって以下のような規制や計画性を読み取ることができた。A.「祝女殿内（ヌンドウルチ）」屋敷を中心にして主要道路が交差している、B.「サカイミチ」以北にのみ屋敷割が認められる、C. 自然流路を平坦化して「ウラミチ」を構築している。それまで近世的村落として存在していた平安山集落は、近代に入るとこのような都市計画に則って再構成されたものと考えられる。1889（明治22）年に敷地・家屋制限令が撤廃されたこと、或いは1899（明治32）年から土地整理事業が実施されたこと、が大きな契機となったとするのが妥当であろう。

#### （1）道路跡（第14図）

生活道路の位置を推定するにあたっては、a. 排水や区画のための溝、b. 各敷地外縁に伴う石列・石塀などの痕跡、c. 踏み固めに伴う硬化面範囲、をその根拠とした。諸記録によると、「ナカミチ」と呼ばれる集落の幹線をなした道路があったことが分かっており、この「ナカミチ」と直交・平行する道路も数箇所確認された。以下に各道路を報告するが、「ナカミチ」以外には伝わる名称がなかったため、便宜上仮称する。

【ナカミチ】：北西－南東に走り、後述する「アガリミチ」「イリミチ」がこれに直交する。この交差部分に「祝女殿内」屋敷が構築されており、戦前平安山集落の中心がこの交差部分部であったと考えられる。「祝女殿内」前の石列や、「名嘉座」前のSD02、「蒲伊礼小」前のS-62、「畠01」前の土坑02をもって認識され、所々に硬化面が残存する。【アガリミチ・イリミチ】：「ナカミチ」に直交する道路で、「ナカミチ」を境に北東側を「アガリミチ」、南西側を「イリミチ」と仮称する。これらの道路を境にして、「メーバー」・「クシペー」といった集落の組分けがなされたという。「アガリミチ」は、「祝女殿内」横の石列や硬化面範囲によって位置が推定された。現場では側溝の痕跡と思われるもの（SD03）も認識されたが、図化不能なほど不明瞭であった。「イリミチ」は「三良又吉小」沿いの石列（石塀の破却痕か）によって推定された。【ウラミチ】：丘陵側で「ナカミチ」に並走しており、これは近世以前に存在した自然流路（S-640）の流筋にほぼ一致した。この自然流路の平坦化完了は近代に入ってからと考えられるが、整地前の段階から「道」のような機能をもっていたことは予想される。今回報告する道路跡の中では最も検出部分が広く、隣接する平安山原B遺跡（2015北谷町教委）では「サーターヤー」付近まで残存していることが報告されている。方向や道幅は、HA③S-8・20・28によって認識される。【サカイミチ】：平安山集落の屋敷群は、この道を境にして北西に広がる。HA④SD11・12・41・42によって認識される。SD41は「サカイミチ」から離れたところで不整な「コ」の字形を呈するが、これも戦中の空中写真に写っている畠（？）の平面形と合致することが判明した。SD42は幅・深さともに規模大であり、包含される遺物も年代幅が広いと、この溝は近世から存在していた可能性があり、戦前集落形成の基点となったとも考えられる。米軍上陸の段階でも、溝は開口・機能しており、埋土の大半が新しい。その他の道路や区画溝：屋敷間を走る道路はさらに2条想定され（「ワキミチ1」・「ワキミチ2」）、いずれも諸記録と合致した。「ワキミチ2」には明瞭な硬化面範囲が検出されている。また各屋敷外縁には、素掘りの幅広な溝（HA②SD01・02・05、HA③S-12・16、HA④SD51）が認められる。これらの溝の検出状況や埋土の様相からすると、一部の溝については、多少窪んでいたにしても、積極的に排水機能を果たしていたとは考えにくい。新しい集落を造るにあたって、屋敷割りを行うために粗掘りした溝を含んでいる可能性も提起しておく。

## (2) 「祝女殿内」屋敷 (第 15 図、図版 4)

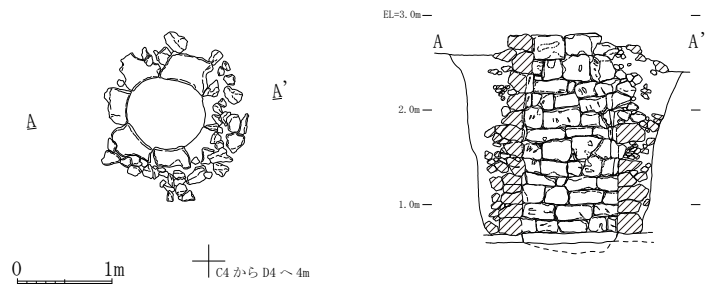
「祝女殿内 (ヌンドウルチ)」は「平安山ノロ」を輩出する家であり、このノロは平安山・浜川・砂辺・桑江・伊礼の 5 集落の祭祀を管轄していたという。この屋敷が集落形成にあたって核的存在であったことは想像に難しくなく、主要道路の交差部に立地する。旧暦 6 月 24 日のカシチーには「祝女殿内」の家の前で、メーバー・クシペーに分かれた綱引きが競われたという。1944 (昭和 19) 年、沖縄守備軍が設立され、それに伴って北谷村にも日本軍が駐留することとなった。その際、村内の大きな民家には上等兵が寄宿したとのことである。この「祝女殿内」屋敷に関わる直接の証言記録はないが、当屋敷への日本軍兵の寄宿があった可能性は十分ある。配給食糧に乏しい日本兵が、当屋敷の広い庭に突っ立っていた果物を食べ尽してしまったという話も残っている。

**屋敷入口:**入口は集落の主要道路である「ナカミチ」に面している。通常、沖縄における家の正面は南向きとされるが、伊平ではヒツジ (西南)・サル (西南西)・トウイヌファ (西) の向きが、風水上良しとされていたとすることで、当屋敷の入り口も南西を向いている。前庭部には住人の日常通用痕跡と思われる硬化範囲や、ビローの樹根もそのまま見つまっている。**居住施設:**右側に「アサギ」、正面に「母屋」が配置されるが、残念ながら本屋敷を構成する建物の中では最も残存状態が悪く、それぞれ雨端の痕跡が局所的に残る程度である。母屋左方には貯排水施設が認められるため、この付近が台所であったことが想像できる。母屋裏には貝溜り範囲が認められ、多くの人工遺物がともに廃棄されていた。古い段階ではクムイ状になっていたようである。**井戸:**入口右手に石組の井戸 (井戸 01) が検出された。屋敷外で見つかった他の井戸に比べると、造りの良さに格段の感がある。洗い場・溜枡・上水路・貯水池が連結した大掛かりな仕組みとなっており、これら全ての内底面に漆喰が施される。上水路は屋敷入口通路を横断するように 13m 以上伸びており、バショウ葉脈痕のあるコンクリート材で蓋をしている。**ウーフール (豚小屋兼便所):**母屋左横に 4 基のフールが L 字連結されていた。構造上の違いから増築 (即ち豚の増頭) があったと思われる。各フールには餌棚が設けられており、うち 2 カ所が陶器鉢 (第 22 図 2・3)、1 カ所は木製であった。一部には、和式便所の体をなしている箇所も認められた。コンクリート製の方形板に楕円形の穴が刳り貫かれた格好で、直接肥溜めにつながっている。方形板の四隅には柱痕があり、屋根があったヤーフールであったことが予想される。1943 (昭和 18) 年の新聞記事に、平安山集落は改良便所の推進に励み成功した、との内容が載せられており、この推進運動の一端を示しているものと思われる。また、フール前には「豚骨廃棄土坑」が検出されている。**畜舎:**ウーフールの手前には 3 部屋に分かれる建物があり、床面は漆喰貼りされていた。庭側に礎石列、間仕切り部分には礫敷きの基礎が残っている。部屋によって床面下の構造が異なっているため、こちらも増改築があった可能性が考えられる。配置や構造から、豚以外の家畜小屋や倉庫の用途が考えられ、建物裏には石組の貯水遺構 (貯水池 02) も備えられている。**不明建物・風呂場:**入口左手には大きな方形建物が検出された。床をなす漆喰面には「十二月廿七日」の線刻がある。外周には 6 本の石製柱の残骸が、床面隅にはバショウ葉脈痕のあるコンクリート製の箱のようなものが残っていた。丁度この付近で上水路蓋が途切れ、汲水が可能な形となっている。上水路を挟んだ向こう側にもステップや溜枡があり、燃焼痕跡も認められたため、「風呂場」を想定している。各家庭における風呂入浴は、昭和に入ると全く珍しいということではなかったようであるが、水汲み自体は難作業であった。井戸から上水路を連結させることで、容易な汲水が可能となったことが予想される。排水先には貯水池 03 が構築されている。**排水溝:**隣家「蒲伊礼小」との境界には深い素掘り溝 (SD07) が検出された。貯水池等からの最終排水先であると考えられる。当初検出した部分を完掘し、完全に砂層が露出したところからも石列 (石垣?) が検出されたことから、この溝は前代に既に存在していた可能性もある。

## (3) 井戸 (第 16 ~ 18 図、第 4 表)

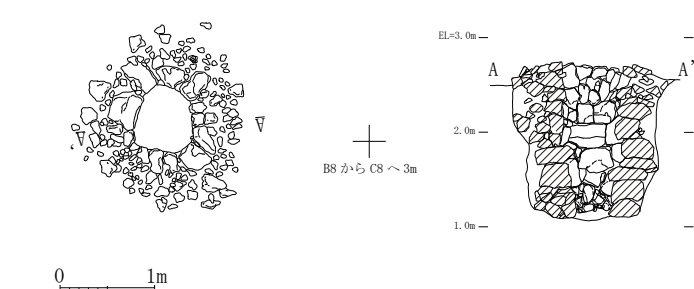
10 基の井戸を検出した。埋没状況や出土遺物から、「ナカミチ」沿いの敷地に構築される 5 基 (井戸 01 ~ 03、S-2・4) 及び最北で検出された S-9 については、米軍上陸時まで開口・機能していた。井戸 01 (祝女殿内) は最も精緻な造りであり、砂層下のビーチロックを少しだけ掘り込んで底面としている。隣接する「大屋」の S-2 と「蒲伊礼小」の S-4 は、使用礫サイズ・組み方・断面形状・付属施設に至るまで酷似している上、「ナカミチ」に対しての位置関係にも何らかの規則性が感じられる。「名嘉座」では、井戸 03 から 2m 強離れた場所で、上部の礫が意図的に抜かれた井戸 04 が検出されている。何らかの理由で井戸 04 を廃止し、井戸 03 を新設したものと考えられる。「ウラムチ」以北では 4 基の井戸 (S-6・9・40・65) が見つかっており、前述 S-9 を除いた 3 基については、米軍上陸時には既に廃止されていたと考えられる。「ウラムチ」東沿いにあった「仲村渠」は、戦時前には既に大阪へ移転していたという。

井戸 01 (祝女殿内内)



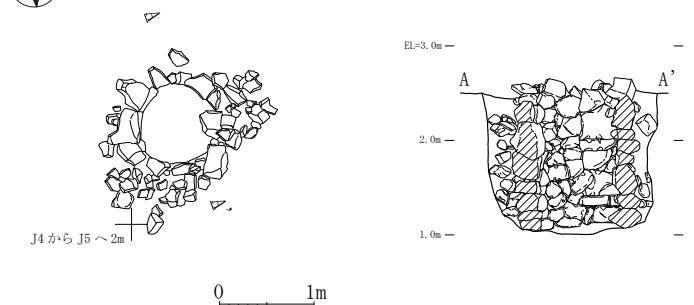
井戸 01 (南東より)

井戸 02 (畠 01 内)



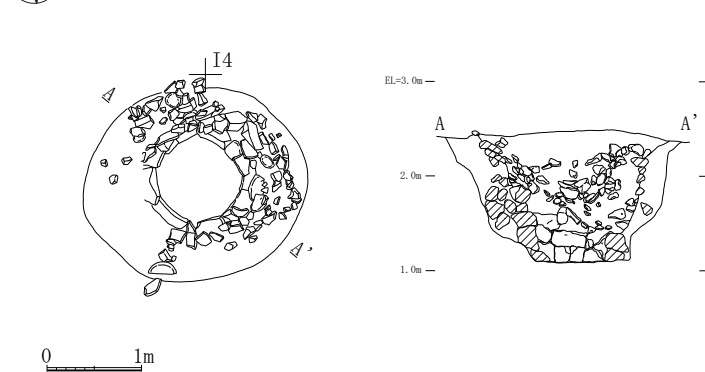
井戸 02 (西より)

井戸 03 (名嘉座内)



井戸 03 (南東より)

井戸 04 (名嘉座内)

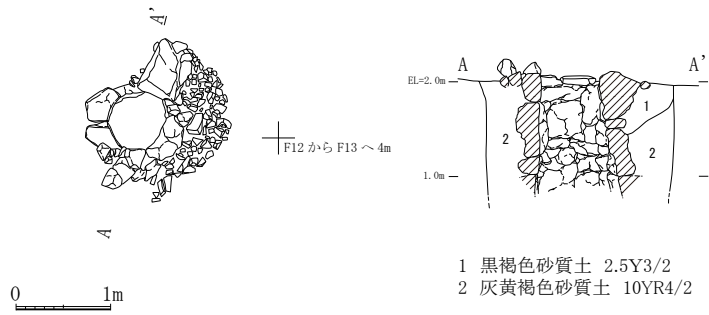


井戸 04 (北より)

第16図 1 面目 井戸 (1) (S=1/80)

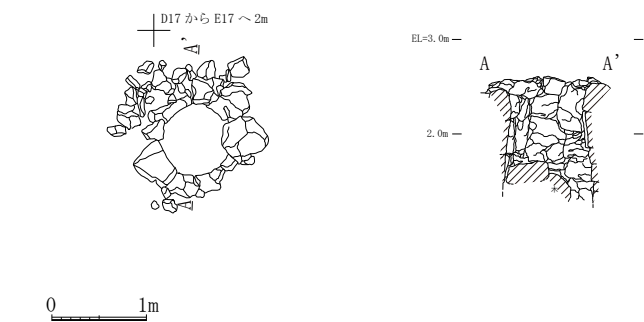


S-2 井戸 (大屋内)



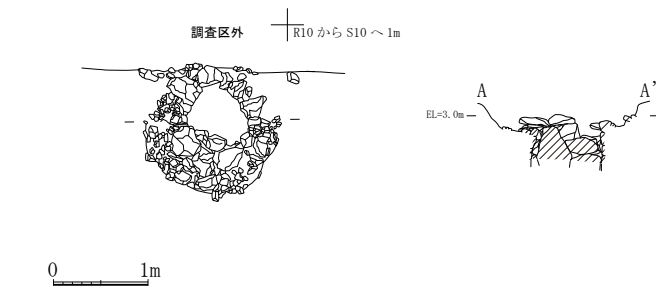
S-2 井戸 (南より)

S-4 井戸 (蒲伊礼小内)



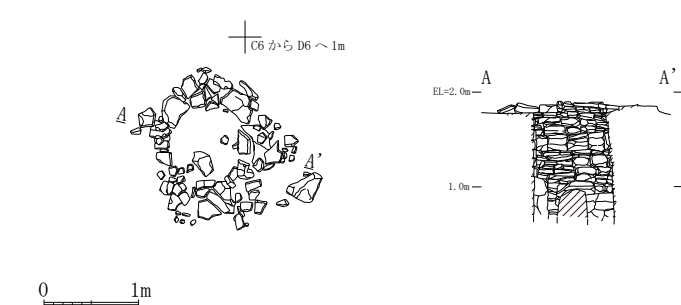
S-4 井戸 02 (東より)

S-6 (ウラムチ以東)



S-6 (南より)

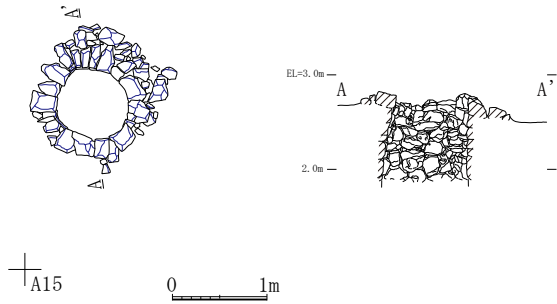
S-9 (ウラムチ以東)



S-9 (南より)

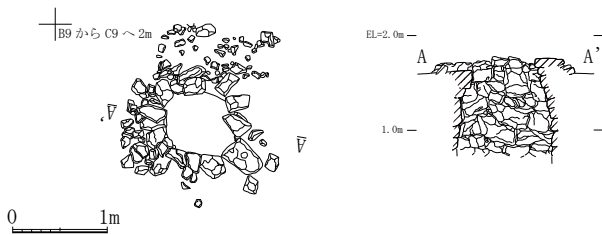
第17図 1 面目 井戸 (2) (S=1/80)

S-40 (ウラミチ以東)



S-40 (北西より)

S-65 (仲村渠内)



第4表 1 面目 井戸一覧

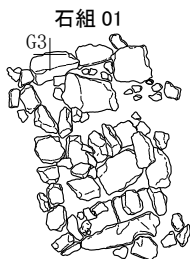
遺構名	屋敷名	断面形状	廃絶理由	備考
井戸 01	祝女殿内	上位がやや窄まる	米軍接收	洗い場等あり
井戸 02		僅かに上位が開く	米軍接收	石組が粗雑
井戸 03	名嘉座	ほぼ筒状	米軍接收	
井戸 04	名嘉座	不明(上位が開く?)	造り替え?	粘土による目詰め
S-2 (井戸)	大屋	上位がやや窄まる	米軍接收	洗い場等あり
S-4 (井戸)	浦伊礼小	上位がやや窄まる	米軍接收	洗い場等あり
S-6		不明(上位が窄まる?)	不明	
S-9		ほぼ筒状	米軍接收	板状礎使用
S-40		上位がやや窄まる	不明	
S-65	仲村渠	上位が窄まる	居住停止?	写真なし

第18図 1 面目 井戸 (3) (S=1/80)

(4) 石組遺構 (第19～21図、第5表)

ここでは、石組を内壁に巡らせる遺構のうち、屋敷内の他施設(上水路・排水路等)との関係が明瞭でないもの31基を一括し、うち残存状態の良い21基の実測図・写真を掲載した。「底」があるものとなないものに大別されるが、換言すればこれは遮水性の有無とも言える。平面形は、長方形・円形・楕円形に分かれる。長方形で内底面の目詰めが丁寧なものほど、米軍上陸時まで開口していたものが多い。円形のものには井戸を転用したようなものがみられる。楕円形のものには例外なく「底」がなく、屋敷の配置にもうまく嵌らないため、前代の構築物である可能性が高い。このような石組遺構の用途として、これまでは肥溜め(シーリ)を想定することが多かった。しかし、北谷の諸記録によると、戦前に各屋敷で雨水を溜めたものを「クムイ」と呼んでおり、同様の機能を持たせたものである可能性もある。ここで根菜等の下洗だけでなく農具や足も洗ったそうで、年に一回、日照りを見計らって底の泥を浚って清掃したという。

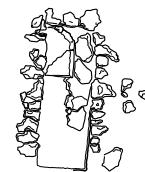
石組 01



石組 02



石組 03



石組 01 (南西より)



石組 02 (南西より)



石組 03 (北東より)

第19図 1 面目 石組遺構 (1) (S=1/80)

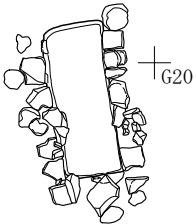


石組 04



† K8 から L8 へ 3m

石組 05



† G20

石組 06



J4

0 1m



石組 04 (西より)



石組 05 (北東より)



石組 06 (南東より)

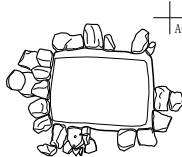


石組 07



† B6 から C6 へ 4m

石組 08



† A6 から A7 へ 3m

石組 12

† C16 から D16 へ 2m



0 1m



石組 07 (南西より)



石組 08 (南西より)



石組 12 (北西より)



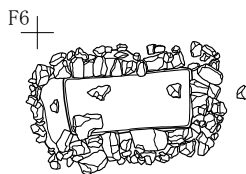
石組 13



0 1m

† E11

石組 14



F6

石組 15



† G5 から G6 へ 2m



石組 13 (北より)



石組 14 (東より)

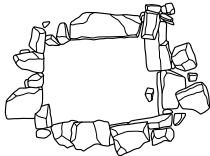


石組 15 (東より)

第 20 図 1 面目 石組遺構 (2) (S=1/80)



石組 16

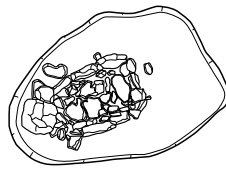


F11



石組 16 (北東より)

石組 18



A8 から B8 へ 2m



石組 18 (東より)

石組 19



C17 から D17 へ 4m

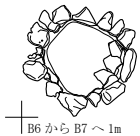
0 1m



石組 19 (南東より)



石組 23



B6 から B7 へ 1m

0 1m



石組 23 (南西より)

石組 24

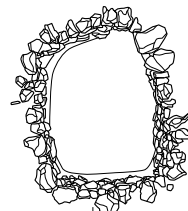


K3 から K4 へ 3m



石組 24 (南東より)

石組 26



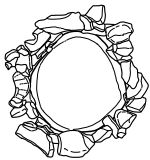
F13 から G13 へ 4m



石組 26 (南東より)



石組 27



G20 から G1 へ 2m

0 1m



石組 27 (南より)

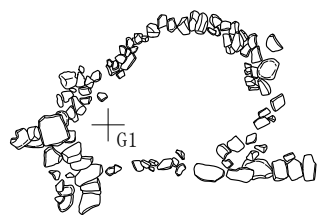
J3

石組 29



石組 29 (南東より)

石組 30



石組 30 (東より)

第 21 図 1 面目 石組遺構 (3) (S=1/80)

第5表 1 面目石組遺構一覧

整理番号	平面形	遮水底	構造・材料	備考	旧遺構名
石組 01	長方	○	石材は全面平らな砂岩、セメント・漆喰で目詰め。	底面にバケツあり。ステップあり。	アタンガー 01
石組 02	長方	○	石材は石灰岩・サンゴ、粘土で目詰め、漆喰を貼る。		アタンガー 02
石組 03	長方	○	石材は石灰岩・砂岩・サンゴ、全面にセメントを貼る。	セメント製蓋板あり。	アタンガー 03
石組 04	長方	○	石材は石灰岩・板状砂岩、セメントを貼る。	不発弾発見。導水路あり？	アタンガー 04
石組 05	長方	○	石材は石灰岩、粘土で型を作り全面に漆喰を貼る。		アタンガー 05
石組 06	長方	○	壁石材は石灰岩・砂岩、漆喰が残る。底石材は平らな砂岩、粘土で目詰め。	上半に激しい削平を受ける。	アタンガー 07
石組 07	長方	○	石材は石灰岩、粘土で目詰め、全面にセメントを貼る。		アタンガー 09
石組 08	長方	○	壁面は砂岩と石灰岩の自然石を使用。粘土を全面に貼り、薄く漆喰を貼る。		アタンガー 11
石組 09	長方	○	壁石材は石灰岩・サンゴ、粘土で目詰め。底石材は平らな砂岩、漆喰を貼る。		アタンガー 12
石組 10	長方	○	壁石材は石灰岩・砂岩、粘土で目詰め、漆喰を貼る。		アタンガー 14
石組 11	長方？	○	壁石材は石灰岩、粘土で目詰め、漆喰を貼る。	調査区壁面での検出。	アタンガー 17
石組 12	長方	○	—	鳥獣骨多数出土。	S-5
石組 13	長方	○	—		S-21
石組 14	長方	○	—	ステップあり。	S-25
石組 15	長方	○	—		S-26
石組 16	長方	○	—		S-38
石組 17	長方？	○	—	崩壊著しい。	S-47
石組 18	長方	○	—		S-49
石組 19	長方	○	—		S-692
石組 20	長方？	？	石材は石灰岩・砂岩、粘土で目詰め、漆喰を貼る。	崩壊著しい。	アタンガー 08
石組 21	長方	？			S-53
石組 22	円	○	石材は石灰岩、一部粘土を確認。	井戸の転用か。	アタンガー 06
石組 23	円	○	壁石材は石灰岩・砂岩。底石材は平らな砂岩、粘土で目詰め。	井戸の転用か。	アタンガー 10
石組 24	長方	×	壁石材は石灰岩・サンゴ・砂岩。		アタンガー 15
石組 25	長方？	×	壁石材は石灰岩・サンゴ・砂岩。	崩壊著しい。前代のものか。	アタンガー 16
石組 26	長方	×	—		S-18
石組 27	円	×	壁石材は石灰岩・サンゴ・アワ石・砂岩。	SD04 と関連した井戸か。	アタンガー 13
石組 28	円？	×	—	崩壊した井戸か。	S-30
石組 29	楕円	×	壁石材は石灰岩・砂岩。		SX01
石組 30	楕円	×	壁石材は石灰岩・砂岩。		SX02
石組 31	楕円	×	壁石材は砂岩。		SX03

### (5) 収納坑 (図版 5)

「照屋先生」敷地内から、壁を木板・鉄製部材で補強した土坑が検出された。土砂によって押し潰されていたため、収納物それぞれの正確な配置は定かではないが、木桶や柳行李の中から様々なものが見つかった。油壺：木製栓で封をされた甕(有頸壺)内部には、その半ばまで白い物質が固結した状態で残存していた。正月などに豚を潰した際に得られた豚脂(ラード)ではないかと思われる。木製栓及び甕については実測図を掲載した(第22図4・5)。重箱(漆器)：赤色の2段重と思われる。蓋には説文解字で書かれた「中頭郡教育功労者表彰記念 中頭郡教育会」の金文字が確認でき、屋号の通り居住者が教育者であったことが分かる。『町史4』にも明治後期のものとして、北谷小学校第6代校長・長峰朝栄氏とともに撮影された照屋直助氏の写真が掲載されており、直助氏は1943(昭和18)年までの10年間平安山区長も務めていた。また底面には「六十周年記念」「北谷校」という黒文字と、「琉球浅田製」との金文字が確認された。北谷小学校設置60周年が1942(昭和17)年であり、その時に記念表彰されたものと推察する。また「琉球浅田製」の文字については、戦前沖縄の有力な漆器製造販売業者である浅田漆器店によるものであろう。重箱内からは猪口が1点出土している(第22図6)。椀(漆器)：かなり脆弱な状態ではあるが、赤椀が数点重ねられたものが2組、木箱に収められていた。椀と蓋のセットかもしれない。丸盆(漆器)：黒塗りの丸盆で、これもまた脆弱な状態であった。「税納」の文字がみられるため、これも何かの記念品と考えられる。小碗(磁器)：桶の中から9点見つかっており(第22図7～11)、数点ずつ重なっていた。このうち3点は口縁部に緑色の2本線が入った国民食器である。ビーズ：黄色の大玉(径10mm弱)3点と赤色の小玉(径約5mm)6点以上が見つかった。材質は判然としないが、セルロイド製であろうか。黄色玉は穿孔部分が中心からかなりずれているが、赤色玉は中心を通過しており、例外なく割れている。衣類：柳行李の中に、衣類と思われる布が収められていた。劣化が著しい。薄い布を重ねた中に綿状の層があるため、防寒着のようなものかと思われる。緑青の吹いた銅製のボタンや、飾緒のような太糸も認められた。地下足袋：親指とそれ以外で二股に分かれており、ゴム底に波形の滑り止めがある。劣化が著しい。当時の照屋家では年長の男子3名は徴兵され、ご当主及び年少男子2名は福岡に疎開していた。残された母娘2名でこの土坑を掘ったとは考えにくく、父の疎開前に構築され、思い出の品等を埋匿したことが予想される。戦時の供出命令は厳しく、食糧はおろか衣類やカンザシまでがその対象となったというが、この土坑に収められた物品は供出を免れた結果となった。



油甕検出 (北より)



重箱内猪口検出 (北より)



重箱検出 (北より)



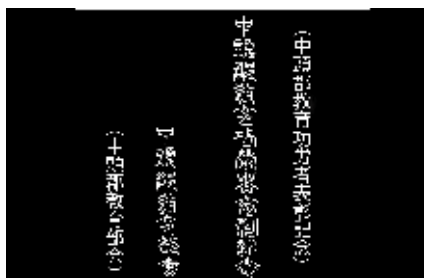
漆器碗検出 (西より)



桶内小碗検出 (西より)



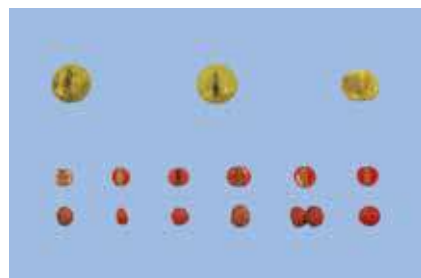
ビーズ検出 (北西より)



重箱の文字①(画像処理)



重箱の文字②(画像処理)



黄色・赤色ビーズ



柳行李の蓋の一部



衣類の一部



地下足袋裏側

図版 5 収納坑内遺物

### (6) 食料残滓の廃棄痕跡 (図版 6・7)

各屋敷から食料残滓の廃棄痕跡が検出されており、いずれもこの箇所が建物の外側であることの傍証である。埋甕に残滓廃棄したものも 2 基見つかっており、うち 1 基からは炭化したトーマミ (ソラマメ) も見つかった。終戦の年はトーマミが豊作であったという。いずれの甕も歪んでいることから、焼成過程での失敗品を利用した可能性が指摘できる。「蒲伊礼小」屋敷で検出されたものを実測・図示した (第 22 図 1、図版 7)。



図版 6 HA② 埋甕内食料残滓 検出 (東より)



図版 7 HA③ 埋甕内食料残滓 検出 (南西より)



第22図 図版8 1面目遺構共伴遺物 (S=1/5、2/5)

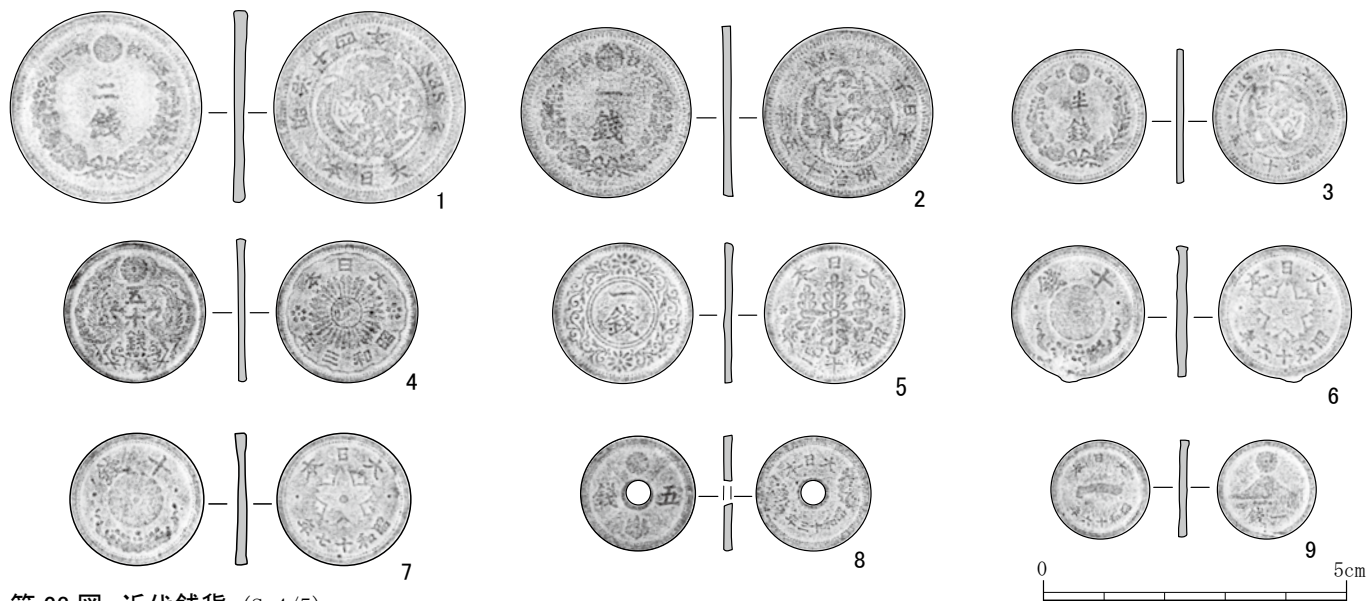
第6表 1面目遺構共伴遺物 観察一覧

第図・図版	図番号	種別	器種	口径・底径・器高	観察事項・備考等	出土層敷・地点名称
第22図 図版8	1	沖縄産無釉陶器	甕	- × 25.8 × (30.2)	胴：張り出し弱。平底。立ち上がりやや直削り。内：吹痕・石灰付着。歪み顕著。炭化物遺存。	浦伊礼小・S-14
	2	沖縄産施釉陶器	鉢	26.2 × 9.8 × 12.3	口：外反L-1.5。底：蛇目。畳：丸付。白化粧あり、外黒釉、内透明釉。内側に餌の痕跡残る。	祝女殿内・フル2 (餌棚)
	3	沖縄産無釉陶器	鉢	27.6 × 12.1 × 13.4	口やや内彎・口唇舌状。胴：やや張る。上げ底。外：圏線+波状文+墨書。	祝女殿内・フル4 (餌棚)
	4	木製品	栓	(8.2 × 6.6 × 3.5)	油囊の蓋。	照屋先生・取納坑 (桶1)
	5	沖縄産無釉陶器	有頸壺	11.4 × 14.6 × 34.3	口：外反・肥厚・口唇舌状。肩：張り出す。底：立ち上がり削り。外：肩部に圏線+細沈線(弧状)。豚脂遺存。	照屋先生・取納坑 (桶1)
	6	本土産磁器	小盃	6.3 × 2.5 × 2.7	型作り。吹き付け(青・3単位)。瀬戸美濃。	照屋先生・取納坑 (重箱)
	7	本土産磁器	小碗	8.1 × 3.0 × 4.7	ゴム判。吉祥文(松竹梅・絵巻に鶴、赤青緑黒)。瀬戸美濃。同型が3点出土。	照屋先生・取納坑 (桶2)
	8	本土産磁器	小碗	8.0 × 3.2 × 4.6	手描き。菊花文(赤青緑)。瀬戸美濃。	照屋先生・取納坑 (桶2)
	9	本土産磁器	小碗	8.0 × 3.0 × 4.6	ゴム判。飛鶴文(青・3単位)。瀬戸美濃。	照屋先生・取納坑 (桶2)
	10	本土産磁器	小碗	7.9 × 3.0 × 4.7	ゴム判。蛸唐草文・四花卉文(青・4単位)。瀬戸美濃。	照屋先生・取納坑 (桶2)
	11	本土産磁器	小碗	7.8 × 3.0 × 4.4	口縁部に2条圏線(緑)。国民食器。瀬戸美濃。同型3点出土。	照屋先生・取納坑 (桶2)

## 2. 出土遺物

### (1) 近代銭貨 (第 23 図、第 7 表)

明治期以降に铸造・使用された銭貨は 15 点確認されており、いずれも集落の居住域から出土している。銭貨製造年代の社会背景から、概ね 3 時期に分類された。1 期：1871 (明治 4) 年の新貨幣条例に基づいて発行された初期貨幣、2 期：1897 (明治 30) 年の貨幣法制定により、同一貨幣単位あたりの価値が半減した時期の貨幣、3 期：1938 (昭和 13) 年公布の臨時通貨法により発行された臨時補助貨幣。1 期貨幣には半銭・1 銭・2 銭 (計 4 点、いずれも銅貨) があり、半銭貨幣は 2 期 1 銭貨幣とほぼ同じ規格となっている。2 期貨幣には、1 銭青銅貨 3 点と 50 銭銀貨 1 点がある。3 期貨幣には、アルミ貨 (1 銭 2 点と 10 銭 4 点) とアルミ青銅貨 (5 銭 1 点) があり、軍事物資における銅の需要の高まりが看取される。



第 23 図 近代銭貨 (S=4/5)

第 7 表 近代銭貨一覧

第図	図番号	貨幣名称	製造期間	製造年	出土屋敷・遺構	径 (cm)	重さ (g)	備考	時期
第 23 図	1	2 銭銅貨幣 (龍)	1873 ~ 1884	1881 (明治 14)	大屋	3.2	13.7		1 期
第 23 図	2	1 銭銅貨幣 (龍)	1873 ~ 1888	1882 (明治 15)	祝女殿内	2.7	6.8		
第 23 図	3	半銭銅貨幣 (龍)	1873 ~ 1888	1885 (明治 18)	SD41	2.2	3.4		
		半銭銅貨幣 (龍)	1873 ~ 1888	明治 10 年代	大屋	2.2	3.1		
第 23 図	4	50 銭銀貨幣 (鳳凰)	1922 ~ 1938	1928 (昭和 3)	祝女殿内	2.3	4.9		2 期
		1 銭青銅貨幣 (桐)	1916 ~ 1938	1924 (大正 13)	蒲伊礼小	2.3	3.3		
第 23 図	5	1 銭青銅貨幣 (桐)	1916 ~ 1938	1937 (昭和 12)	大屋	2.3	3.6		
		1 銭青銅貨幣 (桐)	1916 ~ 1938	?	大屋	2.3	3.5		
		10 銭アルミニウム貨幣 (菊、1.5g)	1940 ~ 1941	1941 (昭和 16)	祝女殿内	2.1	1.4		3 期
第 23 図	6	10 銭アルミニウム貨幣 (菊、1.5g)	1940 ~ 1941	1941 (昭和 16)	蒲伊礼小	2.3	1.5		
第 23 図	7	10 銭アルミニウム貨幣 (菊、量目変更 1.2g)	1941 ~ 1943	1942 (昭和 17)	蒲伊礼小	2.2	1.2	湾曲	
		10 銭アルミニウム貨幣 (菊、量目変更 1.2g)	1941 ~ 1943	1942 (昭和 17)	蒲伊礼小	2.2	1.2	湾曲	
第 23 図	8	5 銭アルミニウム青銅貨幣	1938 ~ 1940	1938 (昭和 13)	祝女殿内	1.8	2.8	円孔	
第 23 図	9	1 銭アルミニウム貨幣 (富士)	1941 ~ 1943	1941 (昭和 16)	大屋	1.6	0.7		
		1 銭アルミニウム貨幣 (富士)	1941 ~ 1943	1941 (昭和 16)	蒲伊礼小	1.6	0.6		

### (2) 近代金属製品 (第 24 図、図版 9、第 8 表)

銭貨以外の金属製品を一括した。一覧表の材質については、あまり厳密ではない。磁力をもち赤錆がないものを「ステンレス」とした。「銅」としたものには真鍮等の合金も含んでいる。

○農具・馬具 鋤：幅の広いものと狭いものがあり、いずれも平鋤である。刃幅いっぱい厚い耳がついており、近代沖縄通有の形と言える。幅広のものは多少損耗の程度差があるものの、同じ規格品と思われる。ヘラ：刃部が長くて長方形なものと比較的短くて先細りするものがある。両者の基部の作りに明瞭な差はないが、柄の形状には違いがあった可能性は残る。3 の基部には僅かに木質の柄が残存している。斧：刃 (ハー)・刃を差し込む台木 (カブ)・台木に差す柄 (ウィー) からなる、沖縄で古くから使われてきたタイプのもので、山仕事の代表的な道具である。刃は短く厚手で、台木に差す部分は片側のみが凹型になっている。押切：木台と 2 枚の刃からなる、藁や干草を押し切る道





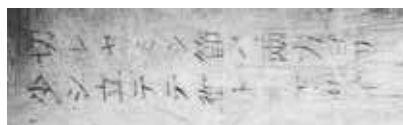
第 24 图 · 图版 9-1 近代金属製品 (S=1/4)



ステンレス包丁 (S=1/4)



包丁刃部の線刻 (上・下)



帝国在郷軍人会徽章 (S=2/3)



銀メッキスプーン (S=1/3)



折畳式ナイフ (S=2/3)



筆筒帯金具 (S=1/4)

図版 9-2 近代金属製品 (個別写真)



図版 9-3 近代金属製品 (農具)



図版 9-4 近代金属製品 (工具・部材)



図版 9-5 近代金属製品 (日用品)



図版 9-6 近代金属製品 (小型製品)

具である。木台に固定する方の刃が確認された。刃渡り 27cm を測る。蹄鉄: 22 点出土している。先端が上方に折れ、両側に鋌穴が穿たれる。鋌が残っているものもある。サイズには大小が認められた。

○工具 鷹口・手鉤・ペンチ・レンチ・差し金・鑿・鉋: といった、多種多様な道具が確認できた。

○部材 レール: 県営軽便鉄道のものと思われる平底レールが出土した。高さ 45mm、頭部幅 20mm、底部幅 43mm、残存長 270mm である。端部側面に連結用の 2 穴があり、反対側底面にある互い違い 3 穴部分から先は欠失する。意図的に分割したものであろうか。犬釘 (レール釘): 頭の形は楕円形のものが多く、長さは 8 ~ 11cm とバラつく。

○調理・食膳具 菜切り包丁 (図版 9-2): ステンレス製で全く錆びておらず、木製の柄も含めて残存状態は非常に良好である。刃は非常に薄い。かなり使い込んでいたようで、刃部には研ぎによる損耗が認められ、柄には補強のための針金が巻かれている。刃の平 (ひら) には、「日満 神徳 登録 STAINLESS STEEL」「切レヤミシ節ハ両方ヨリ少シ立テテ 御トギ下サイ」との線刻が施される。銀メッキスプーン (図版 9-2): ログマークとデザインから、【Wm.Rogers】製

「COTILION (1937年モデル)」のアイスティー／パフェスプーンである。祝女殿内屋敷から出土した。

○日用品その他 鋏：指掛けがある理容鋏2点、U字型の握り鋏(和鋏)1点を含む。 折畳式ナイフ(図版9-2)：縦折真鍮柄の折り畳み式のものが2点認められた。それぞれに線刻で「登録商標 肥後守」「登録 加東守」とあり、いずれもこの線刻内容から、1910(明治43)年以降の製造であることが分かる。 飾り金具(図版9-2)：彫金した薄い銅板を組み合わせたものが、木板に打ち付けられた状態で出土した。主釘を板の裏側で開き折りし、その部分に釘隠しの花紋があしらわれる。筆筒の帯金具と思われる。 花瓶：銅製耳付で、胴部に横位に展開する細かな陰刻文様を施す。高級品と思われるが拉げており、詳細不明である。 徽章(図版9-2)：帝国在郷軍人会(1910年発足、1914年に海軍が加わる)のもので、43×28mmを測る。銅製で、剣と碇があしらわれるので海軍のものであろうか。中央に取り付けられるはずの星形部(別部品)は欠失し、径2mmの孔の中に銅製針片が残存していた。裏面には文字がなく、中央上下にバネピンの金具痕が残る。

第8表 近代金属製品一覧

大別	種類	細別	材質	点数	備考	第図	図版	整理番号
農具 馬具	鎌(くわ)	平、幅広	鉄	5		第24図1	図版9-1-1	1~5
		平、幅狭	鉄	1		第24図2	図版9-1-2	6
	ヘラ	長	鉄	1	木柄の一部が残存	第24図3	図版9-1-3	7
		短	鉄	3		第24図4	図版9-1-4	8~10
	鎌(かま)	草刈鎌	鉄	14	基部形状2種あり	第24図7	図版9-1-7	11~24
		稲刈鎌	鉄	1				25
	斧(おの)	刃	鉄	1		第24図5	図版9-1-5	26
	鉋(なた)		鉄	1	口輪あり		図版9-3-1	27
	山刀?		鉄	1	小型、長い中子に穿孔あり		図版9-3-2	28
	鋏(はさみ)	刈込鋏	鉄	1	刃の片方のみ		図版9-3-3	29
		植木鋏	鉄	1			図版9-3-4	30
	押切(おしぎり)	固定刃	鉄	1	可動金具付		図版9-3-5	31
蹄鉄		鉄	22	サイズ・形状が多様	第24図8・9	図版9-1-8・9	32~53	
工具	鳶口(とびくち)		鉄	1	木柄の一部が残存		図版9-4-1	54
	手鉤(てかぎ)		鉄	2				55~56
	ペンチ		鉄	1			図版9-4-2	57
	レンチ		鉄	1			図版9-4-3	58
	差し金		ステンレス	1	目盛あり		図版9-4-4	59
	鑿(のみ)		鉄	1			図版9-4-6	60
	鉋(かんな)	刃	鉄	1			図版9-4-5	61
	不明工具		鉄	1	端部リング状・尖状			62
部材	レール	平底レール	鉄	1	底面にも穿孔し分割したか	第24図10	図版9-1-10	63
	釘(くぎ)	丸釘	鉄	多数				
		和釘	鉄	5				64~68
		犬釘	鉄	7			図版9-4-7・8	69~75
鋸(かすがい)		鉄	6	断面円形と方形あり			76~81	
調理具 食膳具	包丁	菜切(薄刃)	ステンレス	1	完品、線刻あり		図版9-2	82
			鉄	4	中子付を一括			83~86
	栓抜き	王冠抜き	鉄	4	全て同型		図版9-6-1	87~90
	お玉杓子	掬部	アルミ	1	柄部を欠損			128
	鍋(なべ)	シンメーナービー	鉄	1	口縁部破片(復元径約66cm)	第24図6	図版9-1-6	91
		蓋	鉄	1	青色に塗装			92
		蓋つまみ	銅	1				93
		取っ手	鉄	2			図版9-5-1	94~95
スプーン	アイスティー／パフェ用	銀メッキ	1	柄に装飾・ロゴマークあり、アメリカ製		図版9-2	96	
日用品 その他	鋏(はさみ)	理容鋏	鉄	2			図版9-5-2	97~98
		握り鋏(和鋏)	鉄	1			図版9-5-3	99
		その他	鉄	5			図版9-5-4	100~104
	指貫(ゆびぬき)		銅	1			図版9-6-2	105
	ピンセット	先丸	銅	1			図版9-6-6	106
	毛抜き		銅	1			図版9-6-5	107
	ナイフ	折畳式	鉄・銅	2	縦折柄、線刻あり		図版9-2	108・109
		小型	鉄・銅	1			図版9-5-5	110
	ボタン	シャンクボタン	銅	2	桜柄		図版9-6-3・4	111・112
	ベルト	バックル	鉄	1	朱色の革部分が僅かに残る			113
			銅	1			図版9-6-7	114
	がま口		銅	1				115
	カンテラ	蓋	鉄	1				116
		取っ手	鉄	1				117
	竿秤		鉄・銅	2	大小あり		図版9-5-6	118・119
	蔵錠	各部位	銅	3			図版9-6-8・9	120~122
	壁掛フック		鉄?	1	鉋穴あり		図版9-6-10	123
	飾り金具	筆筒帯金具	銅	1	板材に打ち付けた状態		図版9-2	124
	花瓶	耳付	銅	1	陰刻模様あり、拉げている			125
	瓶蓋	ボマー下瓶	非鉄	1	打刻文字あり			126
不明		非鉄	1	「HaKutaka」			127	
徽章	帝国在郷軍人会	銅	1	「☆」欠損、裏面文字なし		図版9-2	129	

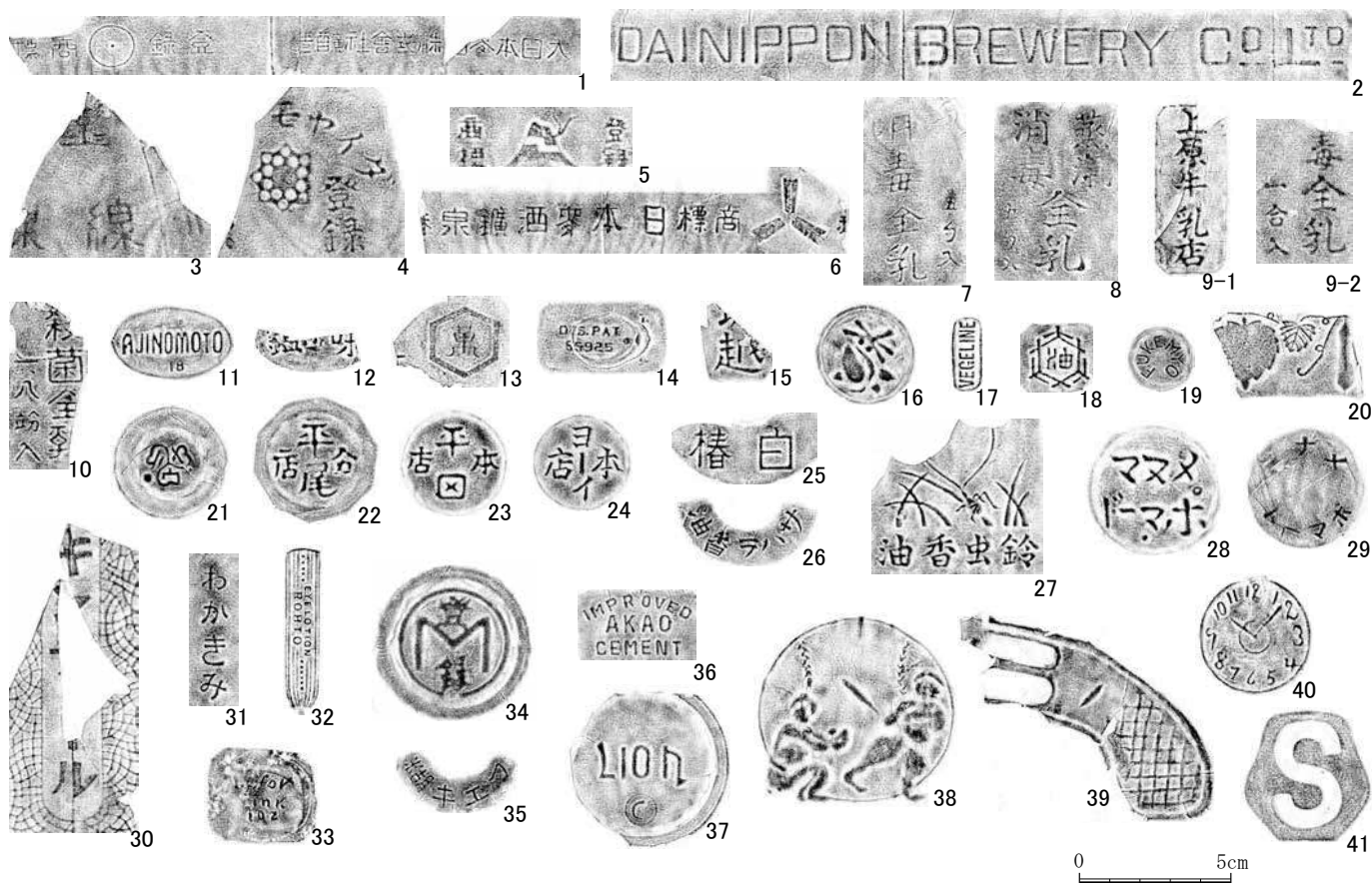
(3) ガラス瓶 (第25図、図版10、第9表)

市販商品容器としての「ガラス瓶」を一括した。以下に、エンボス等から来歴が判明した主要な物品を報告する。

○飲料・調味料 **ビール**：【大日本麦酒】(1906～1945) 製品が数点確認された。大正初め頃まで製造されていたコルク栓型でキックをもつものも1点含まれるが、それ以外は全て王冠栓と思われる。 **サイダー**：「金線サイダー【金線飲料→日本麦酒鑛泉】」(1899～1933)・「ダイヤモンド印サイダー【布引鑛泉所】」(1899～)・「三ツ矢サイダー【日本麦酒鑛泉】」(1921～1933)。その他、珍しいものとして「別府鑛泉サイダー」の破片が1点認められた。 **牛乳**：容量が5勺・1合(18匁)のものがあり、口部が確認できるものは全てスクリュウ口である。1合のものには「上原牛乳」のエンボスが確認できる。 飲料としては他に**ワイン・ラムネ**が数点認められた。 **化学調味料**：「味の素【鈴木商店】」が4点あり、瓶の形状から1928～1940年頃の製造品である。全て祝女殿内屋敷からの出土であった。同じ形状で底面に右書き「味の鑑」と陽刻される瓶もあり、当時多く流通した類似品と考えられる。 **醤油**：「亀甲萬醤油【野田醤油醸造】」(1931～)は、ロゴ部分の破片資料である。

○化粧品・薬品等 **化粧水**：「ホーカー液【堀越嘉太郎商店】」(1909～)、「白色美顔水【桃谷順天館】」(1914～)。この他来歴不明のものが数点認められた。 **クリーム・髪油類**：「バニシングクリーム【久保政吉商店(現ウテナ)】」(1928～)が最も多く得られており、所謂統制陶器瓶も1点含まれる。次いで多いのが、底面に「平尾分店」のエンボスがある十角形白色瓶とその類似品である。この他、【平尾賛平商店】の「レートフード(1915～)」・「レートメリー(1918～)」、「ヘチマクリーム【天野源七商店(現ヘチマコロソ)】」(1915～)、「メヌマポマード【井田京栄堂】」(1918～)、「鈴虫香油【島村商店(現シマムラ)】」(1912～)。また、これらに類似した瓶が数多く得られている。 **白髪染め**：「わかきみ」。裏面に「定量線」のエンボスあり。 **目薬**：1931年に発明された両口点眼瓶が3点あり、うち2点は【信天堂山田安民薬房(現ロート製薬)】製。 **除虫剤**：「キンチョール【大日本除虫菊】」(1934～)。 **常備薬**：「神薬(製造元不明)」(1877～)。

○文具 **インク瓶**：【セーラー】(1911～)、被熱による変形が著しい。【丸善】(1898～)、底面に「登録 M」のエンボスあり。その他来歴不明のもの数点あり、靴型瓶のものは「チャンピオンインキ【篠崎インキ】」か。 **糊**：「フエキ糊」(1898～)の他に、所謂「アラビア糊」の瓶が1点得られている。 **接着剤**：「IMPROVED AKAO CEMENT」のエンボスあり。



第25図 ガラス瓶 拓本 (S=2/5)

# 第9表 主要なガラス瓶一覧

大別	細別	整理番号	高さ・口径・底径	瓶色	胴部横断面	合せ痕	蓋種	エンボス・製品情報・その他	第25図	図版10	
飲料	ワイン	3	—・—・73	薄緑	円	×		Eなし。ブルゴーニュ型、キックあり。		①-1	
		4	—・—・64	茶	円	×		Eなし。ボルドー型、キックあり		①-2	
	ビール	46	—・—・65	茶緑	円	○		コルク 側E:「大日本麦●株式会社醸造」他。ビール(1906~大正)、キックあり。	1	①-7	
		93	—・—・68	茶	円	○		側E:「DAINIPPON BREWERY」他。底E:「14☆4」。ビール(1906~1945)。	2	①-3	
		251	233・—・62	茶	円	○		王冠 Eなし。		①-4	
	サイダー	48	—	緑	円	○		側E:「金線」。金線サイダー(1899~1933)	3		
		49	—	緑	円	○		側E:「ダイヤモンド」。「登録」とロゴ。ダイヤモンド印サイダー(1899~)。	4		
		50	—・—・65	緑	円	○		側E:「商標日本麥酒醸造●●」とロゴ。三ツ矢サイダー(1921~1933)。	6	①-5	
	ラムネ	95	—	緑	円	?		側E:「登録」・富士山のロゴ・「商標」。別府銀泉サイダー。	5		
		5	—・—・50	薄緑	円	○		ビー玉 Eなし。胴部くびれ部上片側だけに凹みあり。		①-6	
52		127・—・44	透明	円	○		スクリュー 側E:「五勺入」「消毒全乳」。概ね大正期規格瓶。	7	①-9		
53		130・29・40	透明	円	○		スクリュー 側E:「蒸溜消毒全乳」「五勺入」。概ね大正期規格瓶。	8	①-10		
51		—・—・53	透明	円	○		側E:「●●●毒全乳」「一合入」「上原牛乳店」。昭和期規格瓶。	9	①-8		
牛乳	99	—	透明	?			側E:「殺菌全乳」「一八勺入」。上げ底。	10			
	100	—	透明	円	?		側E:「●●●全乳」「●●●本日本誌」。99と同一個体か。				
	54	84・21・47×25	透明	長十角	○		半スクリュー 底E:「AJINOMOTO」「18」。味の素(1927~1940頃)。	11	①-11		
	225	—・21・—	透明	?	○		スクリュー 底E:「味の素」。	12			
	98	—	薄青	?	?		側E:六角形に「萬」。亀甲萬壽油(1931~)。	13			
調味料	化学調味料	9	120・20・44×29	薄白	長方	×		Eなし。		②-3	
		10	120・20・44×29	透明	長方	×		Eなし。9と同形状同じ。		②-2	
	乳液?	11	95・15・45×21	透明	長方	○		スクリュー 底E:「DES.PAT」「85925」。シミ消しクリームか。	14	②-5	
		203	112・20・47×31	透明	楕円	○		側:横側面に縦凹線、底E:「20」。銀化。		②-4	
		64	—	透明	?	?		側E:「●●●越」。ホーガー液(1909~)。	15		
		228	—・—・48×33	透明	楕円			側E:「FOOD」「●●●下」。底E:「H」と「S」の組合せロゴ。レートフード(1915~)。			
		14	94・20・42	透明	方	×		肩:花状加工。底E:「●●●」。		②-6	
		96	91・21・32	透明	円	×		底E:「桃」・トンボのロゴ。美顔水(1914~)、いかり肩。	16	②-7	
		69	45・—・—	白	円	?		スクリュー 側E:「VEGELINE」。底E:「●●●INE.F●●●」。	17		
		70	47・—・—	緑白	円	○		スクリュー 側E:「ヘチマ瓶」。底E:「第三六●●●」。ヘチマクリーム(1915~)。	20		
72	—・—・37	白	円	○		スクリュー 底E:「ウテナのロゴ」。パニシタクリーム(1928~)。	21				
化粧水	化粧水	75	—・—・40	白	十角	×		スクリュー 底E:「平田本店」。74に酷似。	23		
		76	62・37・40	白	十角	×		スクリュー 底E:「ヨーイ本店」。74に酷似。	24		
	79	40・—・—	白	円	○		スクリュー 側E:「油」。上げ底。	18			
	87	35・44・43	薄白	瓜割	×		スクリュー Eなし。		②-10		
	139	—・—・55	透明	円	○		スクリュー 側:点線格子柄。底E:「意匠登録」。		②-11		
	223	61・—・53	緑白	円	○		スクリュー Eなし。		②-9		
	71	44・37・23	白	円	○		スクリュー 底E:「FUKEMYO」。	19	③-10		
	73	61・—・39	白	円	○		スクリュー Eなし。レートメリー(1918~)。		③-9		
	74	64・38・40	白	十角	×		スクリュー 底E:「平尾分店」。	22	③-2		
	化粧クリーム	化粧クリーム	77	68・35・39	白薄緑	十角	×		スクリュー Eなし:74に酷似。		③-1
78			41・39・46	白	円	○		スクリュー 側:4単位長方枠内に点線。		③-3	
80		35・39・49	白	円	×		スクリュー 側:全面多条のタテ線。		③-13		
81		35・—・55	白	円	○		スクリュー 側:全面多条の斜線。		③-14		
83		43・31・25	白	円	×		スクリュー 肩:波形加工。		③-11		
85		45・33・40	白	六角	○		スクリュー Eなし。		③-12		
88		56・34・30	薄白	瓜割(楕円)	○		スクリュー Eなし。		③-6		
89		58・—・36	白	楕円	○		スクリュー Eなし。		③-7		
127		53・—・38	白	円	○		スクリュー 底E:「ウテナのロゴ」。パニシタクリーム(1928~)。		③-8		
精油・香油		精油・香油	56	—	透明	円	○		側E:「白梅」。底E:不明模様。いかり肩、上げ底。	25	
	55		59・19・32	透明	円	○		側E:「サハラ香油」。いかり肩。	26	②-12	
	65	—・—・38	透明	円	○		側E:「鈴虫香油」と虫・草柄。底E:「花文」。鈴虫香油(1912~)。	27	②-8		
	236	170・17・62×34	透明	長方	○		スクリュー Eなし。		②-1		
	67	50・48・55	白	円	×		スクリュー 底E:「メヌマボマード」。メヌマボマード(1918~)。	28	③-5		
整髪料	整髪料	68	34・45・50	白薄緑	瓜割	○?		スクリュー 底E:「メナミ」。「ボマード」。	29	③-4	
		59	—・—・20×13	紺	長八角	×		側E:「●●●薬」「●●●製」。神薬(1877~)。			
	薬品	薬品	7	178・41・70	透明	円	○		底E:「T」と「G」の組合せロゴ。口~肩20mm。		④-1
			8	99・33・51	透明	円	○		Eなし。口~肩20mm。		④-4
		24	113・29・38	茶	円	○		Eなし。いかり肩、口~肩14mm。		④-5	
25		64・23・32	茶	円	○		Eなし。いかり肩、口~肩16mm。		④-8		
26		54・24・36	茶	円	○		底E:○に「中」。いかり肩、口~肩16mm。		④-9		
27		41・21・25	茶	円	○		スクリュー 底E:「H」と「A」の組み合わせロゴ・「8」。プリキ蓋付、内容物残存、上げ底。		④-13		
28		49・18・25	茶	円	○		スクリュー 底E:「81-04」「6 10 9」と不明ロゴ。丸肩。		④-12		
29		64・17・23	茶	方	○		スクリュー 底E:「ABBOT」。六角形に「F」「AB」。側面2か所に3重線、内容物残存。		④-11		
30		48・20・23	茶	方	○		スクリュー 底E:「7 (OD) 4 8」。プリキ蓋付、中身なし、O-1社製瓶。		④-10		
31		76・18・28	透明	円	○		スクリュー 底E:「T C W CO」「4 S 114」「USA」。T.C. Wheaton社製瓶(1901~1960)、丸肩。		④-2		
薬品	薬品	32	65・19・28	暗透明	円	○		Eなし。いかり肩、口~肩18mm。		④-3	
		33	58・20・28	暗透明	円	○		Eなし。いかり肩、口~肩15mm。		④-7	
	34	55・23・30	透明	円	○		Eなし。いかり肩、口~肩17mm。		④-6		
	35	55・15・18	透明	円	○		Eなし。口~肩17mm。		④-18		
	36	52・13・22	透明	円	○		Eなし。口~肩17mm。		④-14		
	37	46・17・21	暗透明	円	○		Eなし。いかり肩、口~肩20mm。		④-15		
	38	46・11・15	ごく薄緑	円	○		Eなし。口~肩12mm。		④-16		
	41	42・13・16	緑	円	○		スクリュー 底E:「OD」「2」。なで肩、O-1社製瓶。		④-17		
	12	88・17・45×31	透明	楕円	○		側E:「大」と目盛り。		⑤-2		
	医療用	医療用	13	110・18・52×33	透明	楕円	○		側E:「100」と目盛り。		⑤-3
57			82・15・25	透明	円	○		側E:「わかきみ」「定量線」。なで肩。	31	⑤-4	
目薬		45	76・15.4・—	薄茶	長方	○		両口点眼 表裏:7本線。		⑤-10	
		58	75・15.5・—	薄紺	長八角	○		両口点眼 側E:「EYE ROTION」「ROHTO」。【信天堂山田安民薬房】(1931~)。	32	⑤-9	
		47	—	茶	長方	○		側E:「キン○○●ル」「●●●CHOL」。キンチュール(1934~)。	30		
文具	インク	19	58・23・50	ごく薄緑	円	○		側E:格子柄。円錐状、肩3重円。		⑥-5	
		20	54・25・42	透明	円	○		Eなし。肩3重円。		⑥-2	
	21	49・21・42	透明	円	○		Eなし。肩と瓶が円状。		⑥-3		
	22	50・21・38	透明	円	○		Eなし。肩と瓶が3重円。		⑥-4		
	23	37・23・45	ごく薄緑	だるま	○		Eなし。靴型瓶、藤崎インキ製造・チャンピオンインキか。		⑥-7		
	62	63・28・53	透明	円	○		底E:「登録」「M」。【丸善】(1898~)。	34	⑥-1		
	63	53・23・36×34	透明	長八角	×		底E:「●●●lor」「ink」「●●●oz」。【セラー】(1911~)、熱変形、側面六角形。	33	⑥-6		
	61	—	薄青	円	?		底E:「フエキ欄」。フエキ欄(1898~)、上げ底。	35			
	42	77・16・32	緑	八角	○		スクリュー Eなし。アラビア欄か。		⑥-11		
	接着剤	接着剤	181	41・22・26	透明	円	○		側E:「IMPROVED AKAO CEMENT」。いかり肩。	36	⑥-10
60			—	茶緑	円	?		底E:「LION」と丸に「C」のロゴ。【ライオン】(1891~)。	37		
日用品	日用品	18	30・58・62	ごく薄緑	円	○		スクリュー Eなし。靴型?		⑥-8	
		92	84・28・36×20	透明	長楕円	○		スクリュー 側E:「野球(打者)と捕手」柄。	38	⑥-15	
不明	金平糖?	94	—	透明	?			拳銃をかたどる。	39	⑥-14	
		43	55・9・20×8	透明	長八角	○		スクリュー Eなし。銀化・剥落著しい。		⑤-7	
	44	67・7・12×8	薄紺	長八角	○		スクリュー Eなし。		⑤-8		
	66	—	透明	紡錘	○		側E:懐中時計柄。時計の針は10:08を指す。	40	⑥-13		
	91	54・16・23×15	透明	長方	○		側E:「太子」「S」の除刻。側面六角形。	41	⑥-12		
	16	40・43・30	透明	円	×		半スクリュー Eなし。胴部中央が最大径となる。		⑤-5		
	17	50・—・36	透明	円	×		半スクリュー 肩:波状加工。底E:「花文」。		⑤-6		
	40	94・7・15	透明	円	○		スクリュー 底E:「HALCO」「1」。プラスチック蓋付。		⑤-1		
	39	47・10・24	透明	円	○		側E:不明ロゴ。肩と瓶が2重の円状。		⑥-9		

表中凡例：図版の番号は各写真の左上から始まり、上段(奥)左→右、次段左(手前)左→右・・・の順。Eはエンボスの略。【 】は製造者(社)。



①(飲料・調味料)



②(化粧品 - 透明系の瓶)



③(化粧品 - 白色系の瓶)



④(詳細不明薬品瓶)



⑤(医療用・目薬等)



⑥(日用品その他)

図版 10 ガラス瓶

### (4) 近代円盤状製品 (図版 11、第 10 表)

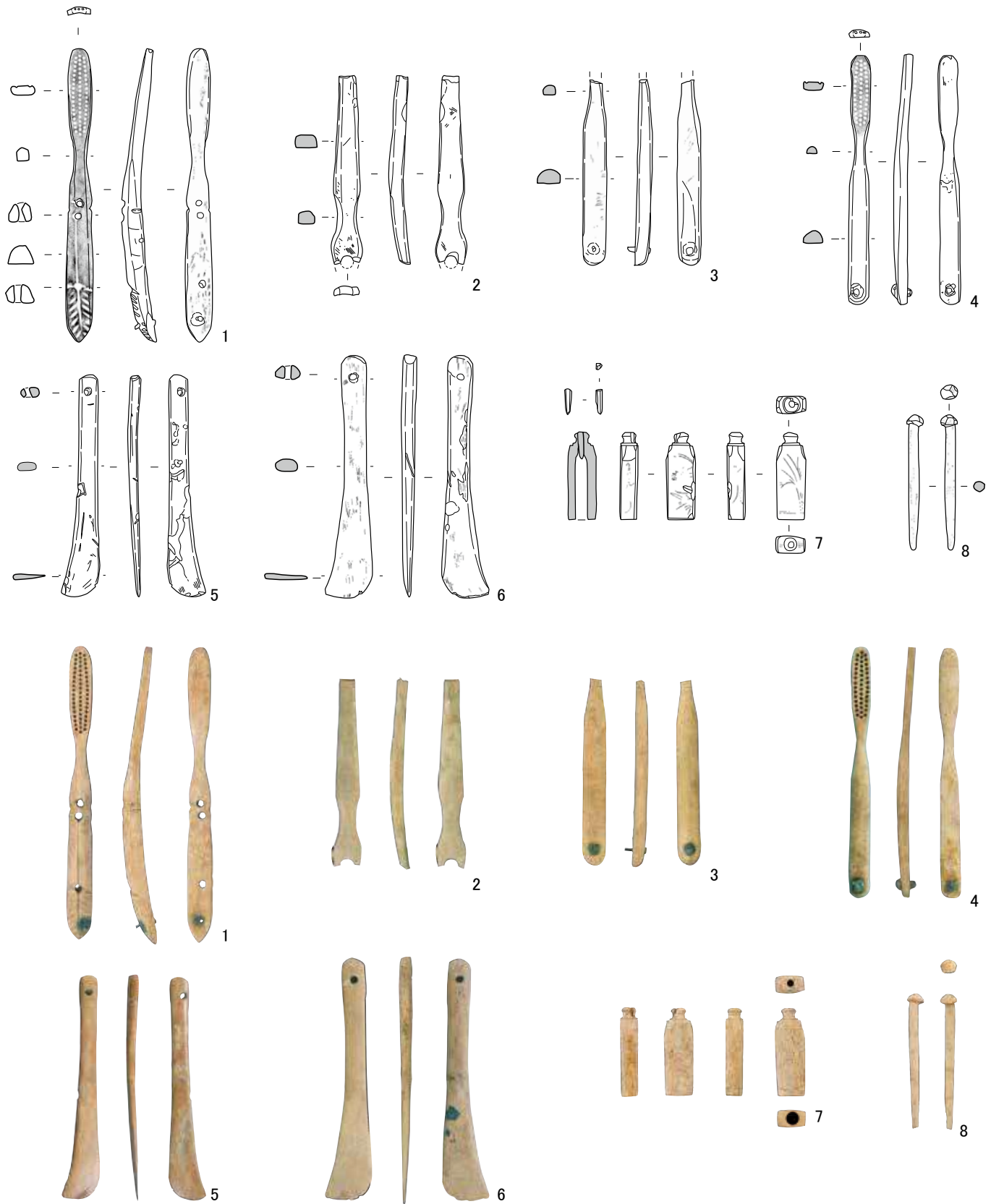
縁辺を打ち欠き、或いは研磨して円盤状にしたもののうち、近現代の産物と判断したもの及び石製のものを一括した。陶磁器片を加工した同様の製品については次章にて報告するが、これらの用途は石蹴りやおはじきといった遊びに関わるものとされる。戦前の記録でも、「甕(カーミ)の破片を丸くして遊んだキリトウガシェー(石けり)」をして遊んだ、という証言が『上勢誌』に残っている。

第 10 表 近代円盤状製品 観察一覧

図版	図番号	素材	縦	横	厚	重さ	観察事項	出土屋敷・地点
図版 11	1	ガラス	4.8	4.6	0.9	25.0	緑色瓶底部を転用。片面は平坦、もう片面は凸面を呈す。周縁は細かく打ち割り、部分的に研磨痕あり。	大屋
	2	ガラス	2.4	2.3	0.2	2.0	薄緑色の板ガラスを転用。	祝女殿内
	3	タイル	4.3	4.2	1.1	22.2	白色タイルを転用。裏面には規則的な凹凸あり。周縁は丸く打ち割る。一部欠損。	大屋
	4	コンクリート	5.6	5.2	1.6	82.2	表面は灰色のセメント質で、平行する凸線あり。	蒲伊礼小
	5	石	5.0	4.8	1.4	54.7	表裏面に擦痕あり。周縁は打ち割りと研磨痕あり。	畠 01
	6	石	7.0	4.2	1.1	53.0	石英粒を含む石灰岩。半欠。	大屋



図版 11 近代円盤状製品



第26図・図版12 近代骨製品 (S=2/5)

第11表 近代骨製品 観察一覧

第図 図版	図番号	器種	長	幅	厚	観察事項	出土屋敷・地点
第26図 図版12	1	歯ブラシ	13.4	0.6~1.3	0.4~0.8	後方に大きく反る。先端に3孔あり。植毛部直下に括れ。柄断面は蒲鉾状。柄尻に鋸。柄に穿孔・沈線・刻み。植毛3列。	東大屋小
	2	歯ブラシ	(8.6)	0.8~1.4	0.4~0.6	後方に反る。植毛部欠失。柄下方に括れ。柄断面は蒲鉾状。柄尻に径5mm孔。	ウラミチ (S-20)
	3	歯ブラシ	(8.5)	0.5~1.1	0.4~0.6	植毛部欠失。植毛部直下に括れ。柄断面は蒲鉾状。柄尻に鋸。	ナカミチ (S-3)
	4	歯ブラシ	11.4	0.5~0.9	0.3~0.7	先端に3孔あり。植毛部直下に括れ。柄断面は蒲鉾状。柄尻に鋸。	東大屋小
	5	裁縫ヘラ	10.2	0.9~1.8	~0.5	全面に光沢。基部に径3mm孔。	蒲伊礼小 (S-4)
	6	裁縫ヘラ	11.1	1.0~2.2	~0.6	基部に径3mm孔。	大屋
	7	筭	4.0	1.3	0.8	体部は長方体でソケット状貫通孔あり。棒状品刺さったまま残存。五側面に草文(?)の線刻。	祝女殿内
	8	不明	6.2	-	0.5~0.8	削り出しによって丸頭の釘状を呈する。	名嘉座

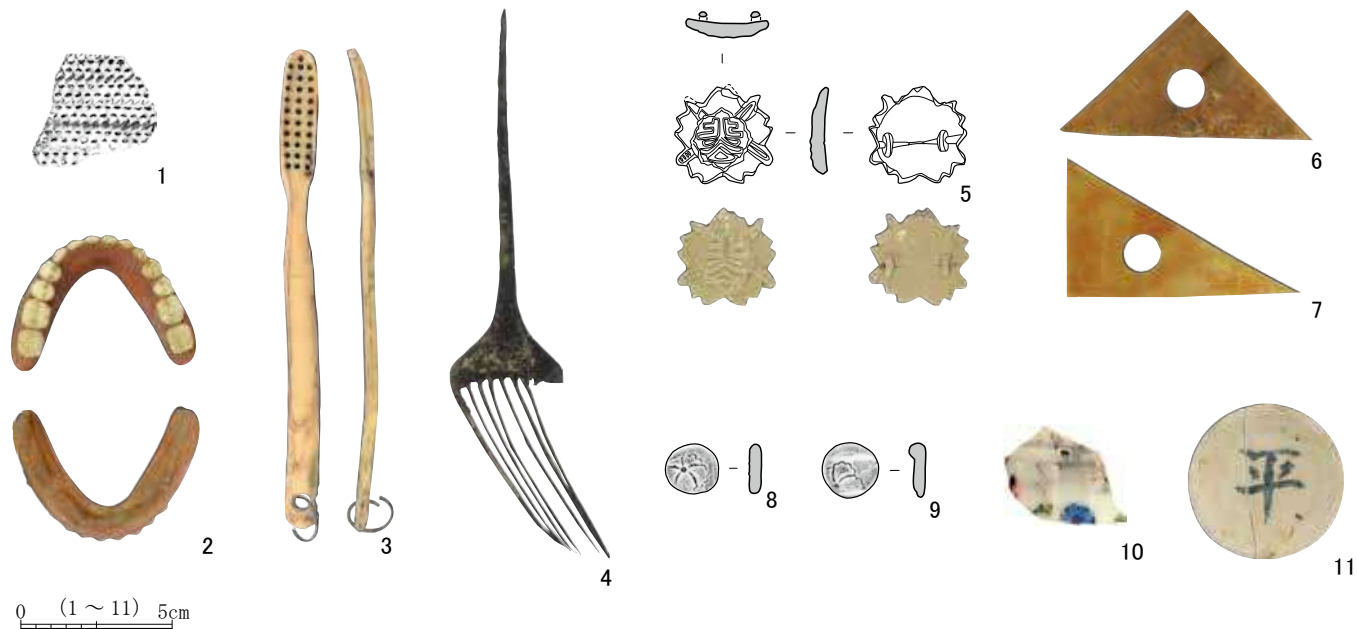
## (5) 近代骨製品 (第26図、図版12、第11表)

**歯ブラシ (第26図1~4)** : 9点の資料が得られており、4点を図示した。破損品が多いが、共通した特徴として、①植毛列が3列である、②植毛列に対応する3孔がブラシ部先端に穿たれている、③1点を除いて柄尻付近には柄厚より長い金属製両頭鉾が通されている、ということが挙げられる。1は柄が後方に強く反り、出土資料中最も厚い作りになっている。素材がかなり限定されるが、詳細は不明である。穿孔や線刻による羽状文の描出により、非常に装飾的な感を受ける。2も柄が後方への反りが強い資料である。柄部の両側面に抉りがあり、握った時の指への引っ掛かりが良い。柄尻孔は径約5mmと大きい。3は、比較的小ぶりで柄があまり反らない。9点中7点がほぼ同型であり、通有の規格だったのであろう。 **裁縫ヘラ (第26図5・6)** : 4点の資料が得られており、完形の2点を図示した。下方の縁辺は片側に尖った弧を描き、この弧の部分が薄くなって刃部を形成している。軸頂部は幅1cm弱でやや厚みをもち、円孔が穿たれる。 **筭 (第26図7)** : 左右分割型の片方と思われ、括れた基部には棒軸が刺さったまま残存していた。穿孔は貫通する。非常に不明瞭であるが、体部側面に草花文及び文字のような黒色の細描きが残される。 **その他 (第26図8)** : 削り出しによって頭部が半球形の長釘状を呈する製品である。筭の軸であろうか。

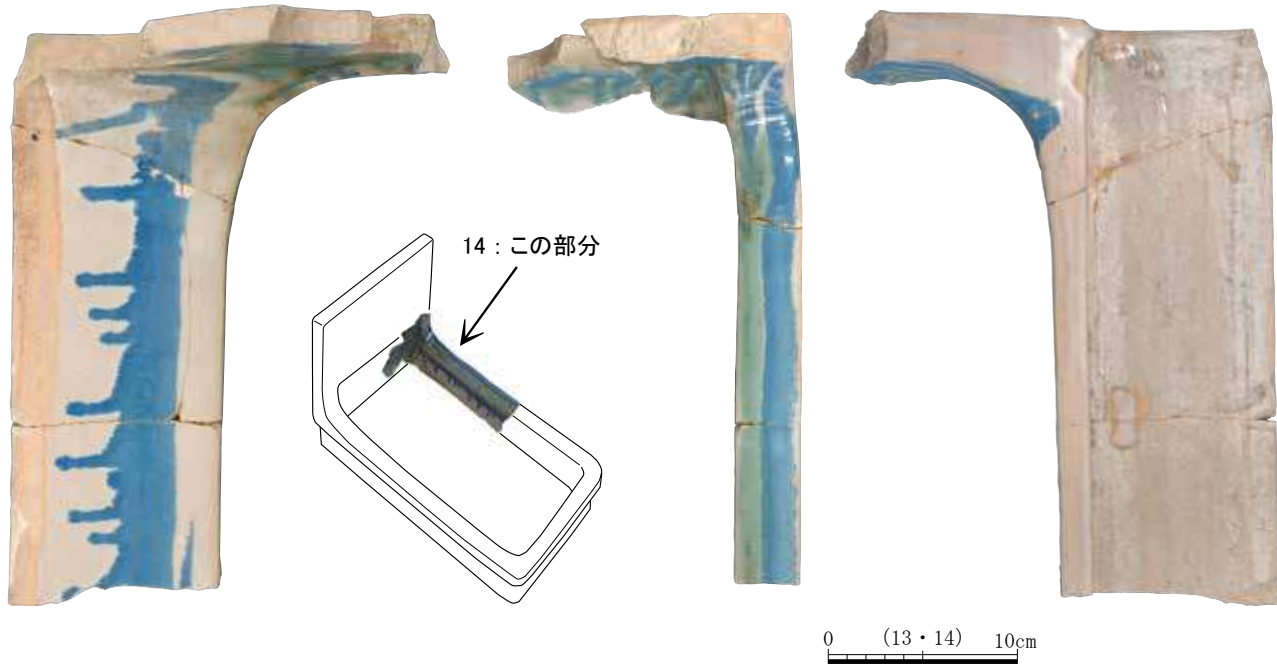
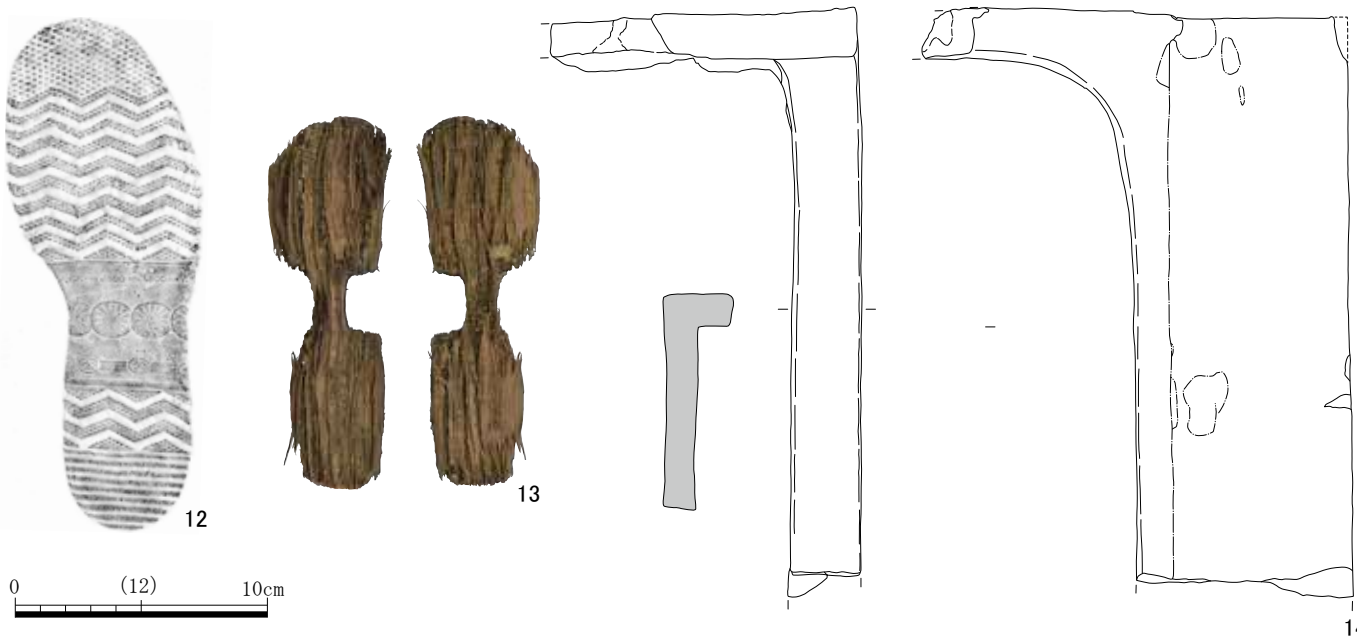
## (6) 近代日用品等 (第27図、図版13)

**おろし器 (図版13-1)** : 磁器製の小片が1点確認されたが、おろし目がある平板状部分のみのため、全体形状は不明である。『町史3』には、戦前の北谷村で日常使われる調理器具の1つとして、「ソーガスリ」が挙げられている。 **入れ歯 (図版13-2)** : 下顎用で、やや右側に偏った咬耗が認められる。歯肉部はオレンジ色を呈するが、切歯直下の見え易い部分には肌色の塗色がなされている。日本歯科医史学会によると、恐らくゴム床義歯(1880~1945)であり、人工歯は陶材であるとのこと。当時は健康保険がなく、全て自費診療だったので、かなり高額の診療代であったとされる。 **歯ブラシ (図版13-3)** : セルロイド製と思われるものが4点得られた。体部はほぼ扁平であり、植毛列が4列認められるものもある。いずれも柄尻に円孔があり、完品のものには金属リングが通されている。 **櫛 (図版13-4)** : セルロイド製が3点得られた。1点は完形に近い縦長黒色のもので、櫛歯数は10本、櫛歯の長さは65mmである。串状の持ち手は約100mmを測る。他の2点は非常に薄い作りの破片資料で、櫛歯の長さは14~16mmである。 **徽章 (第27図5)** : 枯草色を呈する陶製章が1点得られた。桜花の形をしており、「北谷」の文字に「剣」と「ペン」が斜めに交叉する。村内の国民学校のものであろうか。 **三角定規 (図版13-6・7)** : セルロイド製のものが4点見つかっており、現在通常使用されているものに比べてだいぶ小さい。直角二等辺三角形と半正三角形がそれぞれ2点ずつで、目盛がないものもある。 **ビー玉** : ビー玉8点のうち、ラムネ玉栓であった可能性がある薄緑色無文のものが2点あり、その他は全てマーブル模様をもつ。また、7点が径約1.5cmを測り、1点のみ径約1cmであった。 **おはじき (第27図8・9)** : 2点のおはじきには同じ花文が陽刻されており、形状が歪で作りも雑である。 **瓶蓋** : プラスチック製の完形品が2点得られた。径はそれぞれ35mm・45mmを測り、いずれも内側にスクリューを持つ。白色ガラス瓶に取り付けられていたものと思われる。 **磁器製クリーム瓶? (図版13-10・11)** : 10は色絵の施された破片資料である。多角円柱形を呈し、横位に凹線が巡る。草花文(赤・青・緑)とともに、「止」字の一部が認められるが、「止」を部首に含む別の漢字かも知れない。確証はないが、復元径5.6cmであることから、化粧クリーム瓶の類ではないかという印象を受ける。瀬戸美濃系と思われる。11は、内面のみ施釉された短円柱形のクリーム瓶である。口唇から7mm下に僅かな段を有していることから、蓋が伴うものと思われる。底外面には「平」字が墨書されている。「祝女殿内」不明建物からの出土である。 **服飾ボタン** : 非金属製が5点得られた。4穴と2穴がある。白色の3点と乳緑色の1点はガラス製であろうか。こげ茶色の1点は有機質のもの(皮革?)を素材にしているようである。 **靴ゴム底 (第27図12)** : 右4点、左3点が見つかっており、裏面の模様は全て同一である。学校の制靴であろうか。残りの良いものには、【日本ゴム(現アサヒコーポレーション)】の「波に朝日」のロゴマークの他、「4500」「公」といった文字も認められる。「公」の文字は統制下の公定価格を意味するという。サイズは20~23cmであるが、劣化や被熱による縮みも考えられる。 **不明木製品 (図版13-13)** : 約20×6×1.5cmの扁平材で、胴部中央を側面から抉入させている。用途不明。「照屋先生」屋敷内の石組遺構からの出土である。 **和式便器 (第27図14)** : 信楽焼大便器の破片が確認された。灰白色地に瑠璃色・薄青色の色釉が施される。出土地点から「祝女殿内小」の屋敷に設置されていたものである可能性が高い。平面形は方形を呈し、楕円形のものより先出とされる。 **碍子** : 磁器製の破片資料が集落内に多く散乱していた。絶縁部の傘が二重となる「二重通信用碍子」で、電信用とされる。北谷村では、1929(昭和4)年頃から北谷郵便局にて電信業務が始まっている。





第三章 3



第 27 図・図版 13 近代日用品 (S=2/5・1/3・1/4)

### (7) 石臼 (図版 14、第 12 表)

石臼は 9 点出土している。本来は上下一対で 1 点とすべきであるが、対で一組の資料を特定できなかつたため、上いずれか単体をもって 1 点とカウントしている。地区別の出土は HA ② 6 点・HA ③ 3 点で、グリッドは HA ② I4・J6・C2・A9・F1・T9、HA ③ A10・F10・G7 である。遺構では「祝女殿内小」・「瓦屋又吉小」・「名嘉座」井戸 3 及び S-2、層序はⅡ層・Ⅱ層上部・遺構一括・Ⅰ層一括である。上臼 5 点・下臼 4 点が出土し、全て破損資料である。そのうち残存部が多く状態の良い資料と特徴的なものを抜き出し、上臼 3 点・下臼 1 点を図に示した (図版 14-1 ~ 4)。

一般的な碾臼には、茶臼・葉研・挽き臼・磨臼など、使われる地域や用途に応じ多様な種類がある。通常の径は、製作最盛期の尺貫法で一尺六寸 (約 48.3cm)、一尺八寸 (約 54.3cm)、二尺 (約 60.6cm) の 3 タイプがあり、高さは対で 2 尺 2 寸 (約 67cm) とされる。民俗事例では、小型の石臼は一人でも使用可能だという<sup>註1</sup>。

形態は、上臼・下臼の接触面の中心に、上下を固定するための丸い芯棒孔が掘られる。供給口は中心より偏心位置にあり、材料を投入すると外方向へ広げる作用をする。下臼を固定して上臼を回転させるが、手回しの場合は反時計方向に回す。材料は次第に細くなり、円周方向へ排出される。側面には遣り木 (やりぎ) を埋める四角形の横打込穴が掘られる。上臼・下臼それぞれの接触面は主溝で区画され、副溝が刻まれる。上下を噛み合わせる臼面の刻みには地域によって違いがあり、近畿やその周辺は 8 区画、関東・九州は 6 区画が多い。石臼職人 (臼師) が臼の噛み合わせを実際に挽きながら調整を行う<sup>註2</sup>。石臼の石材は、全国的に地元産の石を使うことが多い。

主な用途は豆類・雑穀類の脱穀・製粉である。石臼の出自年代や開始時期は、種類により古くは平安時代に始まり、江戸時代初期には一般に広まる<sup>註3</sup>。

本調査の資料は、かなり破損が激しいうえ使用頻度が高く、図版掲載のない資料には区画の判別不能なものが多い。形態は一般的な石臼との差異はあまりなく、接触面の中心に掘られた丸い芯棒孔は、直径 2.5cm 程度である。しかしサイズについては、復元径が最大でも 32.8cm と小型を呈しており、沖縄独自の大きさと思われる。高さに関しても本土でみられる石臼と比較し、残存資料は単体で 6.5 ~ 13.5cm と厚みが薄い。同じ上臼でも個別別で高さが 2cm 程度変わる。また、円周沿いに一周する上臼の縁部幅も、同様に幅が若干異なる。供給口が残存する資料ではその径 3.4 ~ 4cm、側面の横打込穴は対極に 2 箇所確認される。さらに、歪みがある、下臼の下面が荒削りであるなど、臼面の噛み合わせ区画の彫り込みが雑な資料が認められた。石質の面では、既に報告されている石臼には砂岩製のものが多いが、それ以外に今回は沖縄本島外産と推測される火山岩性の凝灰岩・火山礫凝灰岩・巨晶花崗岩のものが確認されたことが特筆する点である。上下接触面の溝についても、小堀原遺跡の資料を参考に 6 区画と仮定したものの、そうとは考えにくい資料が認められる。読谷村歴史民俗資料館所蔵の資料も検討したが判然としない。接触面の噛み合わせ区画にも、沖縄独特の規格性があつた可能性も推測される。前述した他県での事例では、職人が臼の噛み合わせを挽きながら調整を行うとしたが、今資料は作りが雑なものが多い。用途は自給作物として作られた小豆・大豆・粟・麦などの脱穀・製粉で、豆腐作りの際にも使用された。上勢頭字史の聞き取り事例から、大正時代には農作業用に普及している。1 は上面中央窪み部分に鑿使用痕があり、両側面の横打込穴の彫り込みが対極に 2 箇所、裏面には研磨面がみられる。2 は凝灰岩特有の縦縞模様を有し、裏面の区画溝は認められず、使用時の研磨痕が残るのみである。3 は、素材に含まれる鉱物の結晶が大きく、特徴的な巨晶花崗岩を用いている。4 は側面に凹凸があり正円でない。上臼の縁部幅は、3 は幅が 3.5cm と幅広に対し、1 は幅 2.5cm と細い。全出土資料の計測値を第 12 表に示した。

註 1・2 日本民具学会 (編) 1997 『日本民具事典』 (株) ぎょうせい

註 3 江戸遺跡研究会 (編) 2001 図説 江戸考古学研究事典 柏書房

第 12 表 石臼 観察一覧

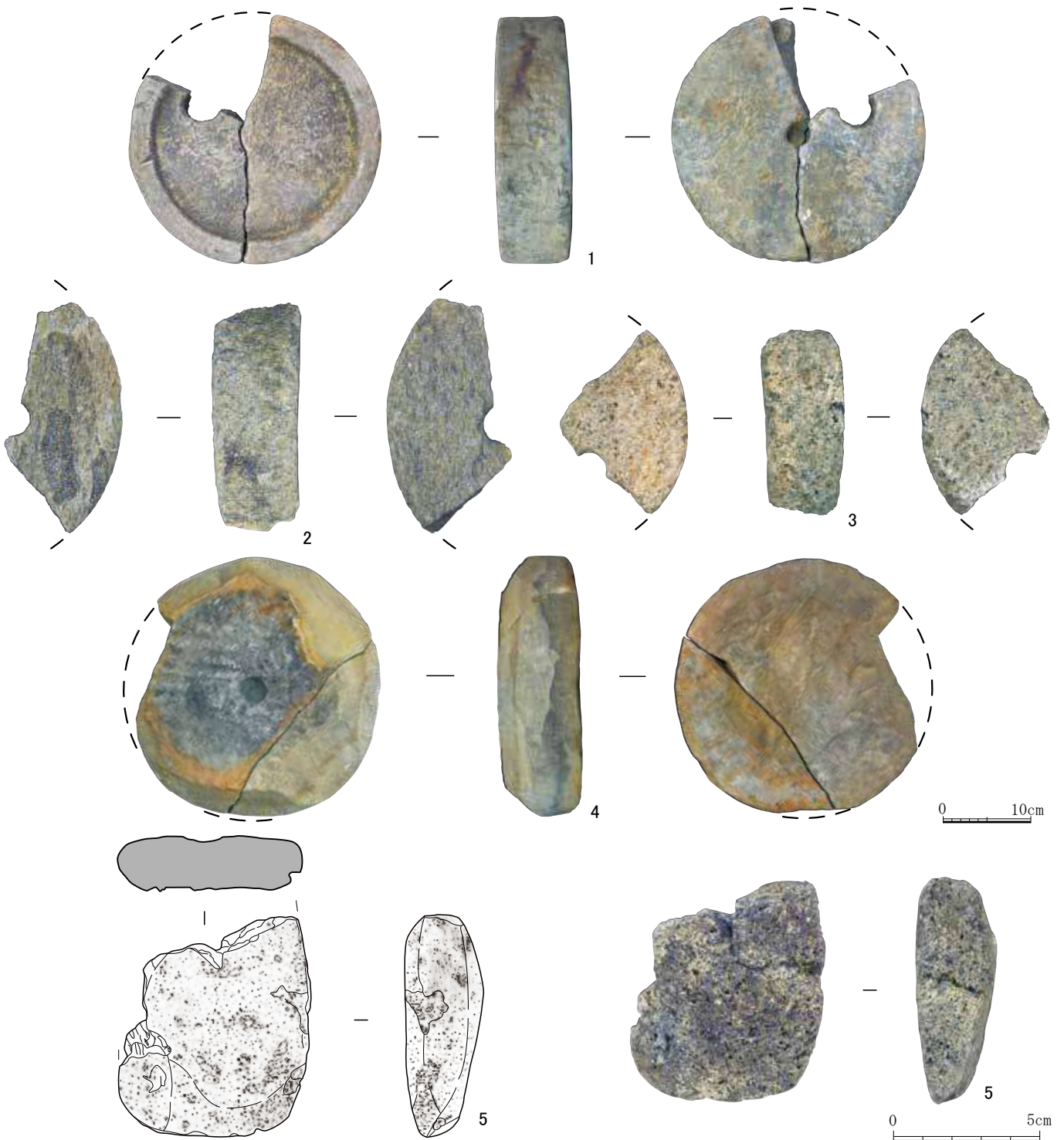
質量単位 (cm/kg)

図版番号	番号	上/下部位	完/破	残存	計測値						上面ノミ跡	石質	地区・グリッド・層・遺構台帳 (取上) 番号	
					復元径 (直径)	高さ (残存)	重さ (残存)	上臼縁部幅	上臼供給口 / 直径	上臼側面 / 遣り木穴縦×横×奥行き				
図版 14	1	上臼	欠損	4/5	26.5	7.2	6.8	2.5	有り / 3.6	有り	2.5 × 3.5 × 2.8	有り	砂岩	HA ③ G7 II 台 3420
	2		破損	1/5	32.8	8.5	2.6	3.0	有り / 3.4	無し	破損 / 不明	不明	凝灰岩	HA ③ F10 II S-2 台 3314-1
	3	下臼	破損	1/5	29.0	8.0	2.8	3.5	有り / 3.5 ~ 4.0	無し	破損 / 不明	不明	巨晶花崗岩	HA ② T9 II 台 4249
	4		欠損	4/5	28.0	8.0	9.5	—	—	—	—	不明	砂岩	HA ② C2 I 祝殿台 4236
図版なし	—	上臼	破損	1/8	31.5	10.2	3.5	3.0	破損 / 不明	有り	2.5 × 4.5 × 3.5	有り	砂岩	HA ② J6 II 取 96
	1/4			27.8	8.8	3.0	3.0	有り / 4.0	有り	2.8 × 3.5 × 3.0	有り	砂岩	HA ③ A10 II 台 3416	
	—	下臼	破損	1/8	26.5	13.5	2.4	—	—	—	—	不明	火山礫凝灰岩	HA ② I4 II 名嘉座 井戸③ 2621
	—			1/2	29.5	8.0	4.5	—	—	—	—	不明	凝灰岩? 人工?	HA ② A9 II 祝殿小 SD09 台 4237-1
	—			1/10	28.0	6.5	0.9	—	—	—	—	不明	砂岩	HA ② F1 II 瓦屋台 4201

### (8) 軽石製品 (第 28 図、図版 14)

自然の水磨とは考えられない痕跡が認められるものを軽石製品として抽出し、1 点を掲載した。図 5 は、上端部が破損しているため全体形状は不明であるが、やや方形を呈し扁平な資料である。表面中央は平坦に面を成し、両端下部に小さく角度の違う異なる面も認められる。また、右側面・裏面にも同様の面が形成され、下端部にも面が確認できる。色調は全体に黒褐色を呈す。HA ③ E17 II 層からの出土で、計測値は縦 7.5cm、横 6.6cm、厚さ 2.6cm、重さ 49.1g。軽石製品は、伊礼原 D 遺跡でも 1 点出土している。

県内では煮炊きに薪を使用していた頃、頻りに海岸に軽石を取りに行ったという証言が民俗事例としてある。軽石の硬さが鉄鍋等のスス落としに最適であったという。軽石は火山の噴火による噴出物で、含まれる鉱物の種類と成分の比較で判別する。厳密にはスコリアとパミスと呼ばれる 2 種類に分類される。海に流出後、波や海流の影響で沖縄各地の海岸に流れ着くことが多く、波打ち際に留まり汀線を示す。このため北谷町での過去の発掘調査においては、製品ではない軽石についても汀線推定を示す自然遺物として取り扱っている。



第 28 図・図版 14 石臼・軽石製品

(9) 瓦 (第 29・30 図、図版 15、第 13 表)

本遺跡出土の瓦は、HA ③ 3601 点、HA ② 2622 点、HA ④ 2416 点、HA ① 1 点の計 8640 点の出土である (第 13 表)。隣接する平安山 B 遺跡では 216 点とその出土量は約 40 倍に上るため、瓦葺の建物が想定される。第 29 図に瓦の出土地の平面分布を示した。これによると HA ③の F・G15～18 を中心に HA ③・HA ②・HA ④に分布する。特に集中する場所について第 29 図を参考にすると、「小渡小」が最も多く、次いで「祝女殿内」、他の屋敷もほぼ全般にわたって出土する。また、HA ③ F11 は「大屋小」の石が集中していた場所と重なり、小規模の建物が想定される。HA ②からの近代遺構の延長部分に相当する HA ④では、E10・F10・G14・I14 に集中する。また、瓦の特に集中する「小渡小」・「祝女殿内」・「三良又吉小」の 3 カ所を中心に、沖縄産無釉陶器 (10 数点)・沖縄産施釉陶器 (数点)・近世の本土産陶磁器 (10 数点) に接合されるものがあるため、戦後の米軍基地建設時の整地により、「小渡小」付近にかき集められた可能性も否定できない。

出土した瓦のほとんどは明式瓦の赤瓦である。しかしこの他に、灰色瓦・高麗系瓦・近世大和系瓦が各々 1 点確認された。いずれも小破片ではあるが、キャンプ桑江北側地区では初見である。完形に近い近代の丸瓦・平瓦と併せて図示した。以下、各々について略述する。

図 1 は高麗系瓦の小破片である。5cm 大で、表面に有軸羽状の敲きを施すが摩耗し、裏面には布目痕を残す。すり切り痕を残す本来の高麗瓦からは外れるものと思われる。厚さ 1.5cm、器色は内外面とも暗茶褐色、内部が灰色のサンドイッチ状をなすもので、HA ③ G9 II 層の出土である。図 2 は近世大和系瓦の縁部分で、表面に幅 1.0cm の櫛搔を左右斜めに施すものである。厚さ 1.55cm、内外面は黒褐色を呈し、本体は明灰色を呈することから燻したものである。混和材に石英・ガラス質の鉱物が含まれる。HA ④ E10 SD51 II 層の出土。同類の瓦は、那覇市御細工所跡 (1991) で大量に出土している。

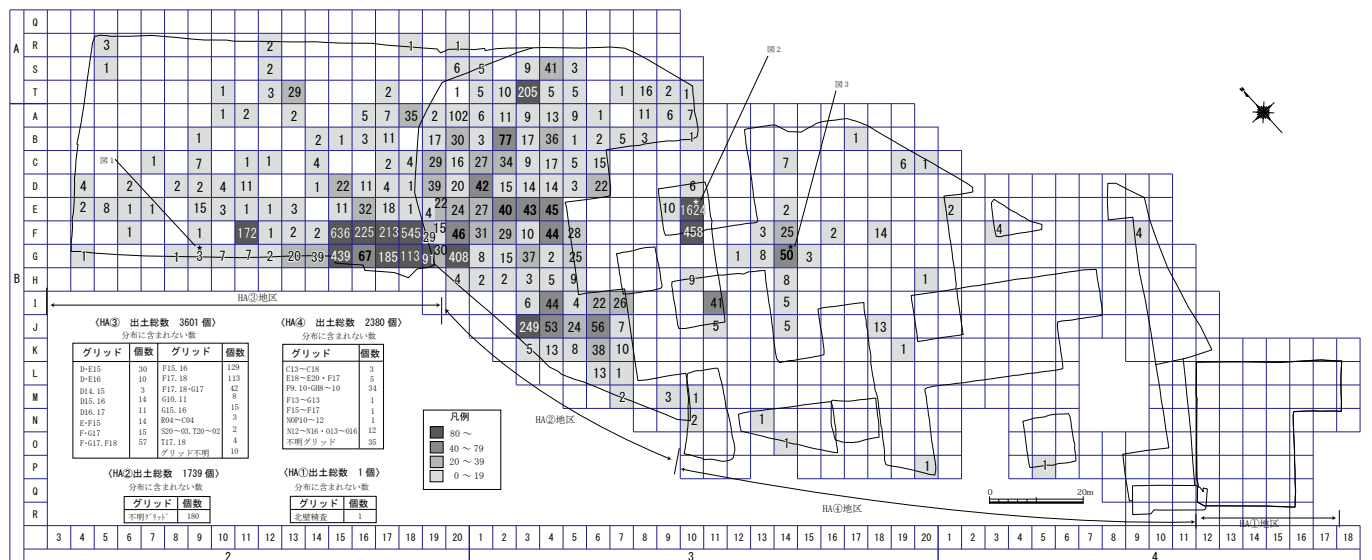
図 3 は明灰色の平瓦で、厚さ 1.6cm、砂質を呈する。裏面に縄目が見られることから上縁部分と考えられる。HA ④ G14 II 層の出土である。図 2 と 3 は後述の近代瓦よりは古くなるもので、出土地の周辺からは染付や青磁なども出土しており、時代的にも符合する。主体となる赤瓦の丸 (図 4) と平 (図 5) も、各々 1 例を示した。図 4 は瓦の縁に接着のための漆喰を厚さ 8mm 塗る。色調は暗褐色を呈し、赤瓦の中でも焼成が良い。模骨の大きさは 10.8cm が想定される。

図 5 は平瓦で、明赤褐色を呈する。表面のヘラナデや裏面の縄目痕は明瞭に残る。

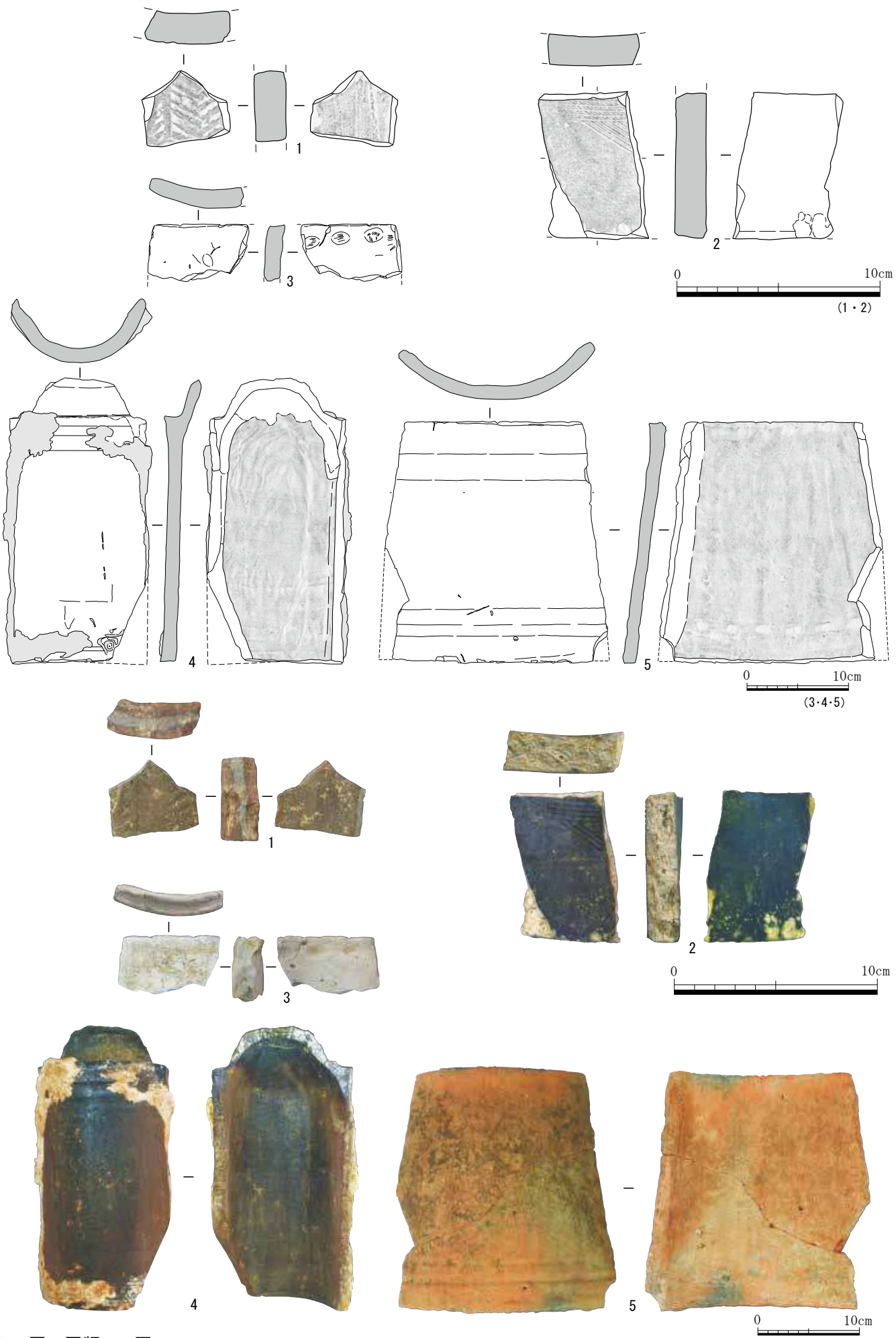
第 13 表 瓦 出土量

地区	層	遺構	軒丸		軒平					丸				平				不明			合計
			橙	橙	橙	赤	茶	—	高麗瓦	橙	赤	茶	—	橙	茶	—					
HA ③	I				80	14					341		2							437	
	II	遺構	3	1	461	22	4				2009	2	3							2505	
	II			1	107	9			1	409	2	5								534	
	III	遺構									1									1	
	III下	遺構				7					23									30	
	IV			1		12	2				79									94	
	小計		4	2	667	47	4		1	2862	4	10							3601		
HA ②	I				64	9				286	1	1	3						364		
	II上				50	2	2			165	6	2	4						231		
	II	遺構			4					3									7		
	II				209	44	8	156		877	9	7	697						2007		
	III	遺構								2	1								3		
	不明					2	1			4	3								10		
	小計				329	56	10	156		1337	16	14	704						2622		
HA ④	I				1		6			39		1							47		
	I or II				16		11			121		29							177		
	II	遺構			42	1	9			225		38							315		
	II				196	2	121	7		1248	5	116	12	7	10	138			1862		
	II~III									2									2		
	III	遺構					2			1									3		
III						1			5		4							10			
	小計				255	6	147	7		1641	5	188	12	7	10	138			2416		
HA ①	北壁精査									1									1		
	合計		4	2	1251	109	161	163		1	5841	25	212	716	7	10	138		8640		
	分類別計		4	2			1684					6795				155					

(図 2 大和瓦・図 3 灰色瓦は集計に含まず)



第 29 図 瓦 平面分布



第30图·图版15 瓦

(10) 瓦二次製品 (第31図、図版16、第14・15表)

破損品を利用した二次製品が18点出土している。円盤状製品にみられる打ち割りで形を成すものでなく、擦りの痕跡のみが確認される資料については、別用途として選別した。遊具として中央に孔を穿つ独楽製品以外の資料も出土している。

大きく分類すると、1. 中央に穿孔するもの、2. 穿孔のないものに分けられ、穿孔のないものは円形以外に四角形・三角形の形状のものが確認された。以下、全体の出土量を第14表に、資料の観察一覧を第15表に示した。

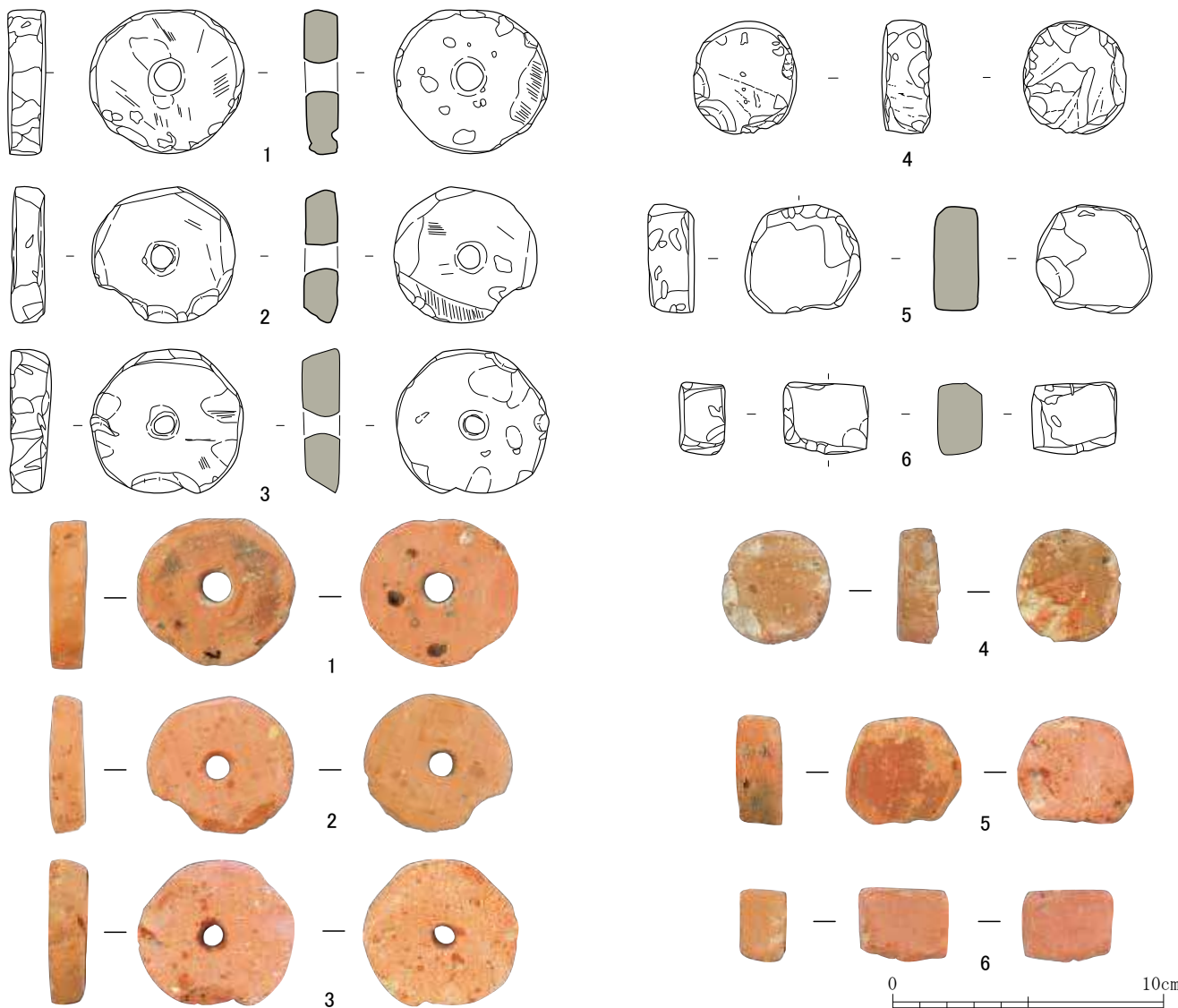
第14表 瓦二次製品 出土量

地区	層	形状 孔/有無 完/破	円形				四角形		三角形	合計
			有孔		孔無し		孔無し		孔無し	
			完形	破損	完形	破片	完形	破損	完形	
HA③	II	S-3.4.16	1	3			1	1	1	7
			1	1			1			3
HA②	I			1						1
			3	1	2	1				7
小計			5	6	2	1	2	1	1	18
合計			14				3		1	

第15表 瓦二次製品 観察一覧

質量単位 (cm/ g)

第31図・図版16	図番号	形状	完/破	縦	横	孔の有無	有孔の孔径		厚さ	重さ	観察事項	地区・グリッド・層 遺構・台帳(取上)番号
							縦	横				
第31図・図版16	1	円形	完形	5.6	5.2	有孔	1.0	1.0	1.3	45.9	表裏の両面研磨あり/やや多孔質/周縁を複数回に分け擦り整える	HA ② C1 II 台 4108
	2			5.3	4.9	有孔	0.8	0.8	1.2	35.7	表裏面研磨あり/両面部分的に擦痕あり/一部破損し正円でない	HA ② C20 II 上 台 565
	3			5.4	5.3	有孔	0.8	0.6	1.4	50.1	表裏面研磨/裏面に一部布目痕確認される/周縁欠けを生じる	HA ③ F15 S-3 II 台 536
	4			4.2	3.8	孔無し	-	-	1.7	29.1	表裏面研磨あり/裏面は一部削られる/周縁にも欠けが認められる	HA ② C1 II 上 台 566
	5			2.3	4.3	孔無し	-	-	1.6	33.1	表面は瓦の焼成の色が残る/裏面僅かだが布目痕あり/形状は歪	HA ② B2 II 上 台 4107
	6			2.5	3.2	孔無し	-	-	1.7	19.7	四角形で六面研磨あり/破損後さらに研磨か?/面取りの稜線多し	HA ③ D15 S-4 II 台 876
図版なし	-	円形	完形	4.2	4.7	有孔	1.0	1.0	1.1	25.9	表裏面研磨/やや薄手/孔は両面から穿つが裏面からの穿孔大きい	HA ② K6 II 取 55
	-			4.5	5.0	有孔	1.0	1.0	1.1	32.2	表裏面研磨/擦り痕跡明瞭/裏面に石灰付着/左右厚み違いあり	HA ③ B8 II 台 2523
	-			7.0	4.0	有孔	-	-	1.3	44.7	半欠するが、中央に穿孔あり/表裏面研磨あり/裏面に明瞭な布目痕	HA ② J5 I 攪乱 台 265
	-			6.2	4.2	有孔	-	-	1.2	41.5	形状は円より角を残す/両面研磨/中央に穿孔あり/周縁の擦痕が雑	HA ③ E16 II 台 1755
	-			6.0	3.2	有孔	-	-	1.5	38.7	表裏面研磨/厚手/半欠するが中央に孔あり/周縁は複数回の擦り	HA ③ D15 S-16 II 台 514
	-			5.6	2.3	有孔	-	-	1	26.3	表裏研磨/半欠するが中央に穿孔あり/周縁の擦りの面が細かい	HA ③ A18 II 台 2880
	-	四角形	破片	2.6	3.9	有孔	-	-	1.3	12.8	破片だが、中央に穿孔の痕跡あり/表裏面研磨/周縁の擦りの痕跡	HA ② E20 II 上 台 708
	-			3.8	2.5	孔無し	-	-	1	16.7	破片/孔なし/表裏面研磨/薄手/周縁も擦りの痕跡/形状は歪	HA ② F20 II (ナカミチ) 台 694
	-			4.0	2.5	有孔	-	-	1.4	18.8	残存部は全体の四分の一/中央に穿孔痕あり/表裏面に擦り痕あり	HA ③ F11 II 台 1359
	-			3.4	3.5	孔無し	-	-	1.4	26.0	形状いびつで四角形/六面研磨あり/周縁の擦痕は明瞭で滑沢	HA ③ F16 II 台 1892
	-			5.0	5.3	孔無し	-	-	1.5	54.4	形状は変形四角/表裏研磨/一部破損/周縁擦りなし/手慣れか風化	HA ③ F12 II 台 1483
	-			2.5	3.0	孔無し	-	-	1.7	13.5	残存形状三角形/表裏面・側面に研磨あり/破損後さらに再利用	HA ③ A10 II 台 2515



第31図・図版16 瓦二次製品

## 第4節 近世以前の遺構

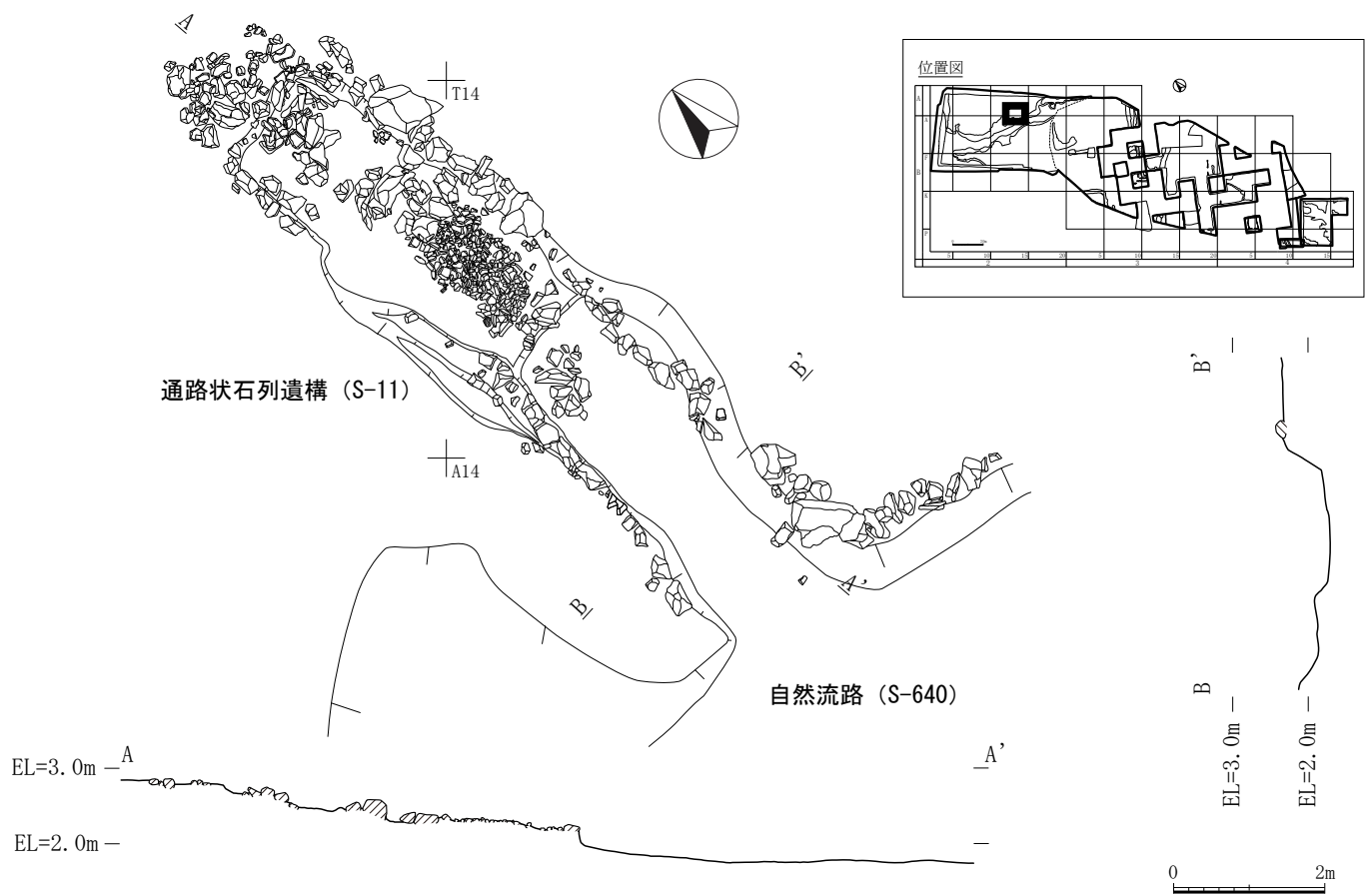
IV層上面にて2面目の遺構群を検出した。Ⅲ層中・下から掘り込まれるもの（グスク～近世前半）と、Ⅱ層下から掘り込まれるもの（近世後半以降）とが存在するが、全ての遺構に対しての厳密な識別は困難であった。また、IV層中からも埋葬遺構と思われる人骨・犬骨を検出しているが、時期決定の根拠に欠けるため、これらの遺構は本節でまとめて報告する。

### (1) 石列遺構・自然流路

大小様々な自然流路が見つかっており、原地形復原を目指す上で重要な成果である。これらの流路に対して、人的働きかけを示すような遺構も散見された。

#### ・通路状石列遺構 (S-11)・自然流路 (S-640) (第32図、図版17・18)

HA③において、大型自然流路 (S-640) とそれに直交する石列遺構 (S-11) を検出した。S-640 は HA③調査区を東西に横断するように走っている。『平安山原B遺跡』(2015 北谷町教委) でIV層 (貝塚後期) とした自然流路に連なるものと



第32図 S-11・640 (S=1/100)



図版17 S-11 検出状況 (北東より)



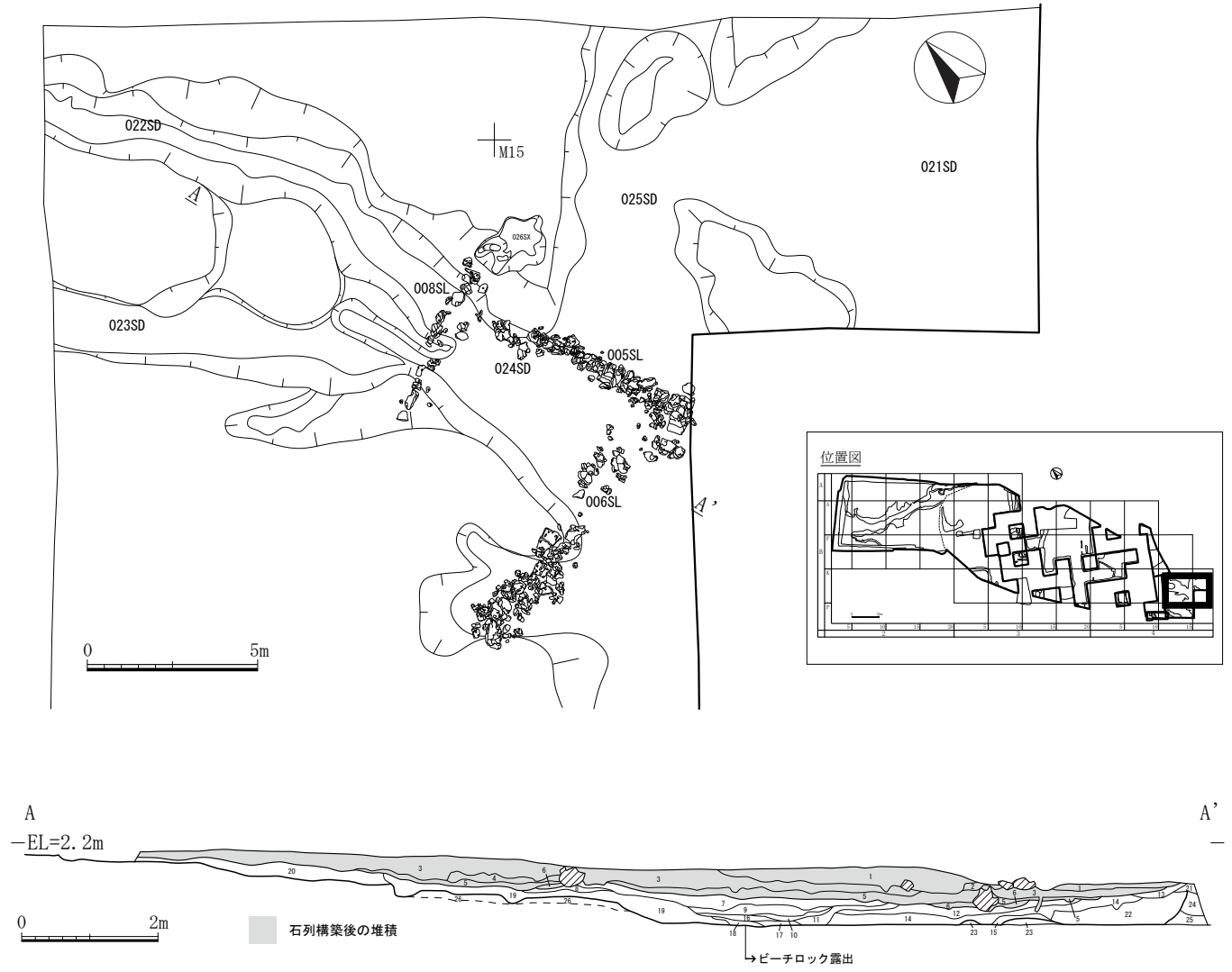
図版18 S-11とS-640 立地状況 (南西より)



第 33 图 2 面目 検出遺構配置图 (S=1/500)







- |                                |                                 |                             |
|--------------------------------|---------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗灰黄色粘質シルト 2.5Y4/2 カワナを均質に含む。 | 10 黒褐色粗砂 2.5Y3/1                | 19 黄褐色粗砂 2.5Y5/3            |
| 2 黒褐色粘質シルト 2.5Y3/2             | 11 暗オリーブ色粗砂 2.5Y3/3 海産貝・枝サンゴ多量。 | 20 黄褐色粗砂 2.5Y5/3            |
| 3 黒褐色粘質シルト 2.5Y3/2 カワナを均質に含む。  | 12 暗灰黄色中砂 2.5Y4/2               | 21 オリーブ褐色粗砂 2.5Y4/4         |
| 4 黒褐色砂質シルト 2.5Y3/2             | 13 黒褐色粘質シルト 2.5Y3/2             | 22 黒褐色粘質シルト 2.5Y3/2         |
| 5 中砂と粘土の互層。                    | 14 粗砂・中砂・粘質シルトの互層。              | 23 灰色中砂 5Y4/1 以下は024SD外の堆積。 |
| 6 粗砂と粘質シルトの互層。                 | 15 暗灰黄色粗砂 2.5Y5/2               | 24 にぶい黄褐色粗砂 10YR6/4         |
| 7 粗砂・中砂・粘質シルトの互層。以下は石列構築前の堆積。  | 16 暗灰黄色粗砂 2.5Y5/2               | 25 灰色粗砂 5Y5/1               |
| 8 中砂と粘質シルトの互層。                 | 17 黒褐色中砂 2.5Y3/2 ヤヤグライ化。        | 26 にぶい黄色中砂 2.5Y6/3          |
| 9 暗灰黄色粗砂 2.5Y4/2               | 18 暗灰黄色粗砂 2.5Y5/2               |                             |

第 34 図 005・006・008SL、021～025SD (平面 S=1/200、断面 S=1/100)



図版 19 石列・自然流路検出状況 (南西より)



図版 20 024SD 土層断面 (南西より)

思われるが、ある段階において舌状に飛び出した岩盤丘陵付近で分断された可能性もある。完全埋没は近代に入ってからであり、それ以前の遺構配置に影響を与えていることから、流水の有無に関わらず、近世段階では河川状の窪地を呈していたことは確実である。埋め立て後にはこの流路上に平安山集落の東西道路（「ウラミチ」）が構築され、「祝女殿内」屋敷より北側の屋敷割がなされたものと考えられる。

S-11 は溝状に掘り窪めた側縁に礫を並べており、中途には小礫が敷かれている。流路中～下位まで降りるような階段状を呈しているため、汲水等を目的とした通路ではないかと考えられる。

・土留状石列遺構（005・006・008SL）・自然流路 021～025SD）（第 34 図、図版 19・20）

HA ①において、3 条の石列遺構とそれらを基にして区画された棚田状の空間を検出した。これらは旧ナガサ川北岸に注ぎ込む自然流路を堰き止めることで、人為的に耕作域を形成したものと思われ、以後の近世平安山集落における居住・耕作の空間設定に影響を与えている。層序の概念上、石列構築後に堆積した土壌をⅡ層として取り扱っている。石列の長さはそれぞれ、005SL が約 510cm、006SL が約 540cm、008SL が 370cm であり、これらの石列によって区画された面の標高差は約 30cm である。遺物は多くはないが、近世陶磁器片や簪が出土している。

これらの石列は、数流検出された自然流路のうち、024SD とした部分に構築されている。小流路 022・023SD が合流することで本流路は形成されており、流水方向は概ね北西→南東である。更に北東からの SD25 と合流して旧ナガサ川に流れ込んでいたものと思われるが、ほどなく流路底面が広大な広がりをもせる「ビーチロック」となる。024SD 底面からは青磁碗破片（第 106 図 49）が出土した。よって、流路として機能していたのもこの頃とみて大過ないものと思われる。

（2）溝状遺構

HA ④の各所にて、区画・排水を目的としたと考えられる溝状遺構が検出された。2 条が対になるものがあり、周辺で検出されたピットには、これら溝の走行方向と対応するように配置されるものも多く看取される。

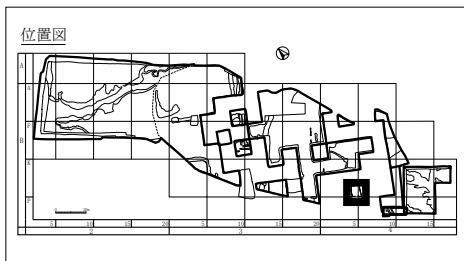
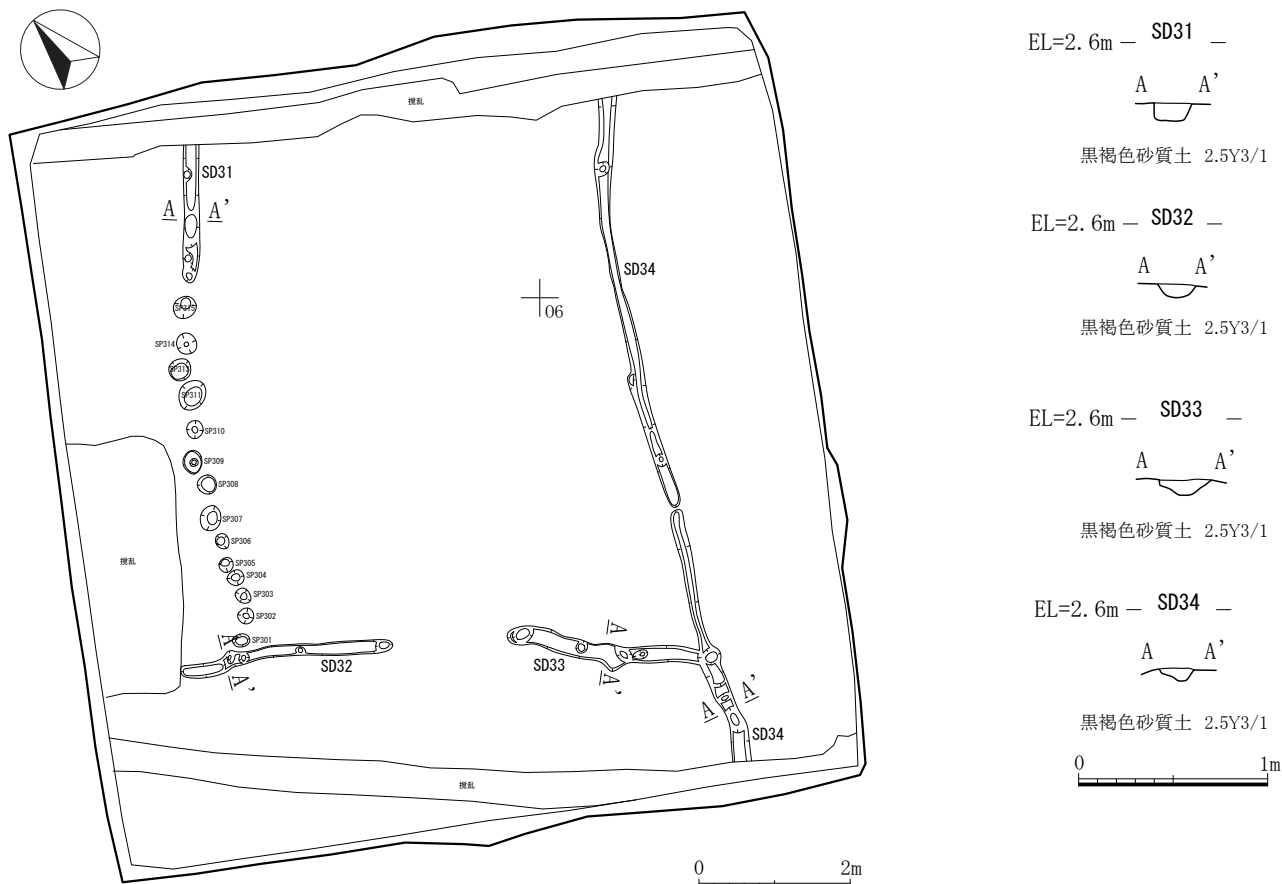
・SD1～3（第 35 図、図版 21）

SD1・2 は 2 条 1 対であるような印象を受ける。また、SD1 プラン内にて溝走行方向に沿うように配置されたピットが 3 基検出されている。遺物は、SD1 から褐釉陶器・沖縄産施釉陶器が出土した。



図版 21 SD1・2 完掘状況（南西より）

第 35 図 SD1～3（平面 S=1/100、断面 S=1/40）



第 36 図 SD31 ~ 34 (平面 S=1/100、断面 S=1/40)

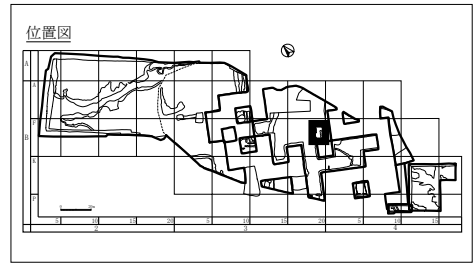
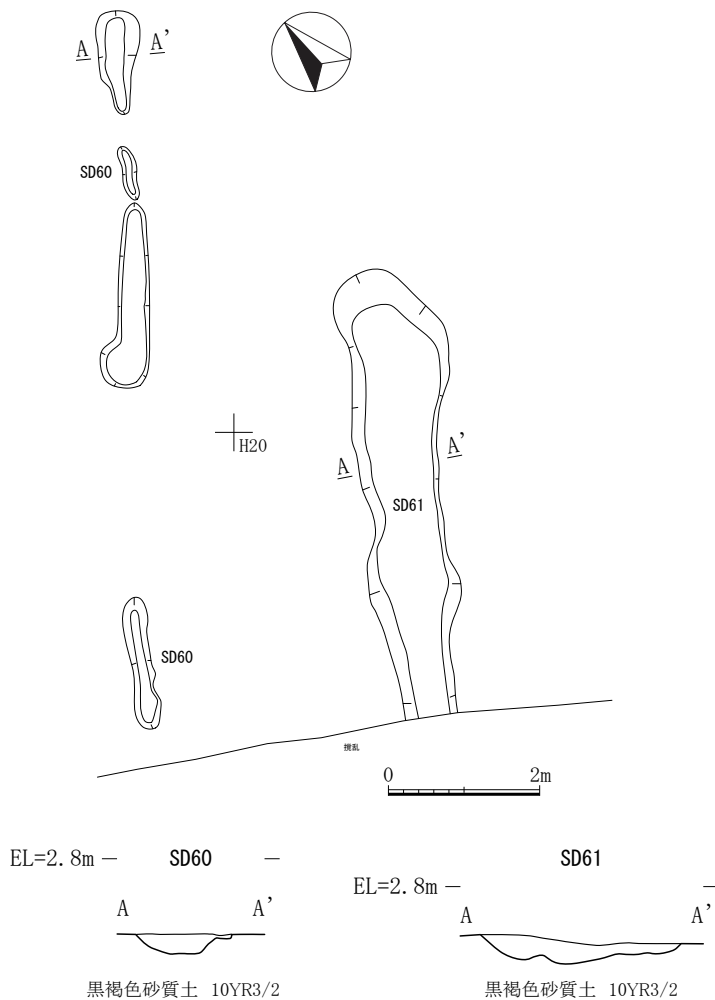
図版 22 SD31 ~ 34 完掘状況 (南東より)

・SD31 ~ 34 (第 36 図、図版 22)

いずれも細い溝で、溝幅は 30cm を超えない。SD31 と SD34 は約 5.2 m の間隔をもって並走しており、SD32・33 がそれらに直交して、方形の空間を形成している。北西辺の SD31 は途切れるが、その先を埋めるように径 20~40cm のピット 15 基 (SP301 ~ 311, 313 ~ 315) が列をなして配置されている。垣根や柵の類であろうか。また、同軸上を走る SD32・33 の間にも約 150cm の空白地があり、この溝で囲まれるスペースへと続く通路のようにもみえる。溝の狭小さから考えて、排水というよりは区画を目的とした溝群であると考えたい。列状ピット以外のピットが全く見つからないことも、空間利用を考える一材となろう。遺物は出土していない。

・SD60・61 (第 37 図、図版 23)

両者は北東—南西に並走し、2 条 1 対になると思われる。SD60 は途切れ途切れとなっているが、これは上位削平による可能性がある。溝の幅・形状は異なるものの、前述 SD31 ~ 34 の走行方向とはほぼ一致している。また、この溝付近にピット・土坑が少ないことも留意しておく必要があるであろう。遺物は出土していない。



図版 23 SD60・61 検出状況 (北東より)



第 37 図 SD60・61 (平面 S=1/100、断面 S=1/40)

### (3) ピット・土坑等

規模の大小や平面形状を問わず、素掘りで土坑状のものを一括した。本項で扱うべきものとして、各調査区合計 3,041 基を数える。掘り込み面や出土遺物等の検討から、遺構の帰属時期と平面分布との関係に一定の傾向があることが分かっており、最も遺構密度の高い HA ④の中央エリア、及び HA ③自然流路 S-640 以北エリアにおいては、相対的に古い時期の遺構分布が認められた。現場調査中及び整理事業段階において、配置や形状・規模から掘立柱建物の可能性を想定できたものが相当数あったものの、同時にその殆どは建物としての決定的根拠を欠いていることも事実であり、建物案の提示は行っていない。

### (4) 食料残滓の廃棄痕跡

#### ・005SL 上貝集中部 (図版 24)

前述 005SL (石列遺構) の北側において、食料残滓と考えられる海産貝の集中範囲を検出した。貝は石列を構成する礫の直上にて見つかった。前述の通り、石列は構築後に埋没が進んだと考えられるので、貝が廃棄されたのは石列構築時期とはそれほど間が空かなかったと思われる。貝種が極めて限定されており、オニノツノガイ・マガキガイがその殆どを占める。



図版 24 005SL 上 貝集中部 検出状況 (西より)

## (5) 人骨

### ・人骨 11 (第 38 図)

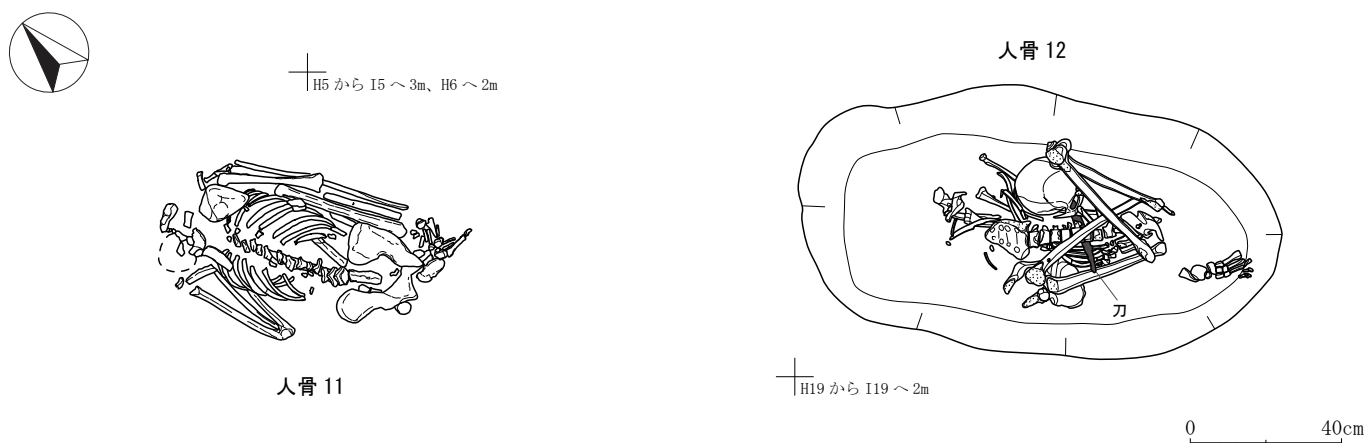
B3H5 のIV層中から全身骨格を検出した。埋葬遺構と思われるが、掘り込みは判別できなかった。正座のまま上半身を前に倒したような伏臥の態を呈し、体幹は北西を向く。両足が揃っているようにも見えるため、緊縛状態にあった可能性も考えられる。残存状態は非常に良好であるが、頭部上半が欠失している(下顎骨は残存)。

未刊であるが、旧ナガサ川を挟んで所在する伊礼原D遺跡において、酷似した埋葬姿勢の全身骨格を検出している。この埋葬遺構にはグスク時代の土器を伴っていたため、本遺構も近い時期のものとして考えたい。骨格の観察から、被葬者は成人の女性である。

### ・人骨 12 (第 38 図)

B3H19 において、掘り込みを伴う人骨が発見された。全体検出の結果、局所的な骨の連結は認められるものの、通常埋葬ではあり得ない人骨配置であった。このため、ある程度腐敗の進んだ死体を土坑内に埋納処理したものと思われるが、葬送儀礼を伴ったかどうかは確実でない。本遺構付近には、ピット等の遺構が殆ど検出されていないことも、埋納場所の選定にあたって無縁ではないように思われる。

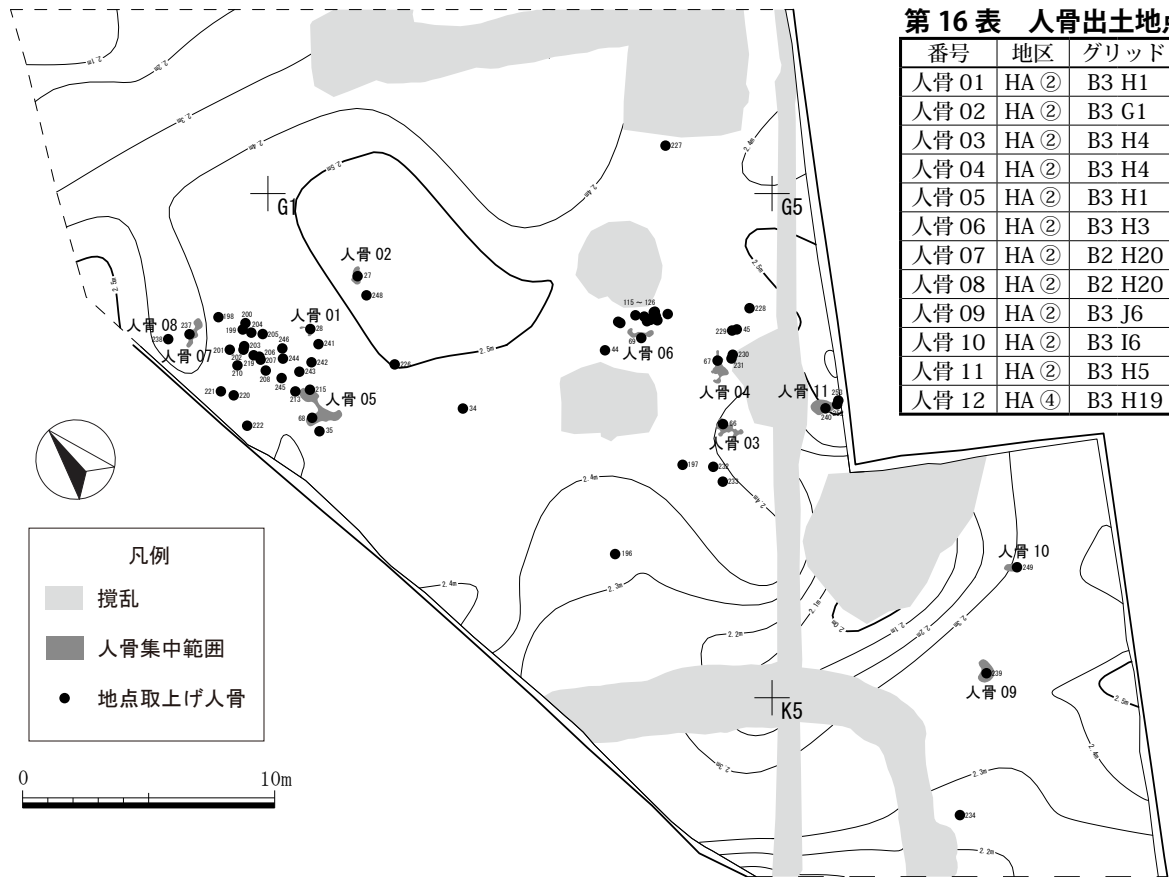
被埋納者の左脇腹部からは長さ約 23cm の刀子が見つかっており、埋納時には背骨に深く食い込んで抜けなかったことが予想される。この被埋納者は 20 代前半の女性であり、死に至った状況には非常に特異な事情を孕んでいたことを窺わせる。



第 38 図 出土人骨 (S=1/20)



第 39 図 人骨出土グリッド平面分布 (S=1/1600)



**第 16 表 人骨出土地点**

番号	地区	グリッド	層位
人骨 01	HA ②	B3 H1	IV層中
人骨 02	HA ②	B3 G1	IV層中
人骨 03	HA ②	B3 H4	IV層中
人骨 04	HA ②	B3 H4	IV層中
人骨 05	HA ②	B3 H1	IV層中
人骨 06	HA ②	B3 H3	IV層中
人骨 07	HA ②	B2 H20	IV層中
人骨 08	HA ②	B2 H20	IV層中
人骨 09	HA ②	B3 J6	IV層中
人骨 10	HA ②	B3 I6	IV層中
人骨 11	HA ②	B3 H5	IV層中
人骨 12	HA ④	B3 H19	IV層上

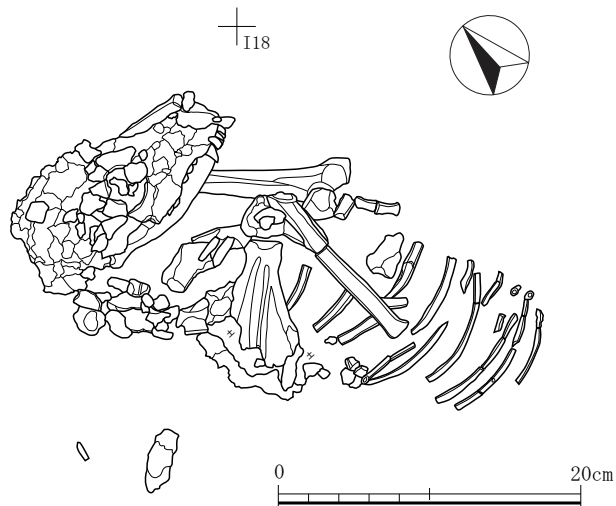
第 40 図 人骨密集範囲詳細図 (S=1/300)

・その他の人骨 (第 39・40 図、第 16 表)

特に HA ②地区のIV層中から、グスク～貝塚時代後期のものと考えられる人骨が多く検出された。砂丘上の墓域を形成していたものと思われるが、掘り込みや墓標の可能性を示唆するようなものは全く認められなかった。後代の盛んな土地利用により大いに攪乱されており、埋葬姿勢を想像できるものはないが、人骨 07・08 については、頭骨同士が近く、顔面の向きからどちらも体幹が北東を（足先が海側を）向いていた可能性がある。共伴遺物と言えるものも殆どないため帰属時期は不明とするしかないが、短頭を呈するものや抜歯するものが認められるため、貝塚時代後期に属する個体が含まれているものと思われる。

(6) 犬骨 (第 41 図・図版 25)

B3I17・18 にて、イヌの上半骨格が原位置を保った状態で検出された。下半の骨格は欠失しているが、埋葬されたものと考えられる。帰属時期は不明であるが、IV層中からの検出であったので、人骨同様、近世以前のものとして取り扱った。



第 41 図 埋葬犬骨 (S=1/5)



図版 25 埋葬犬骨検出状況 (南より)

# 第17表-1 土坑・ピット一覧

HA②地区

遺構番号	グリッド		平面形
SK001	B3	A・B1	楕円形
SK002	B3	A・B1	円形
SK003	B3	A1	楕円形
SK004	B3	A1	隅丸方形
SK005	B3	A・B1	隅丸長方形
SK006	B3	A1	不整楕円形
SK007	B3	A1	不整楕円形
SK008	B3	A1	楕円形
SK009	B3	A・B1・2	楕円形
SK010	B3	A1・2	楕円形
SK011	B3	A2	楕円形
SK012	B3	A2	不整楕円形
SK013	B3	A2	不整長楕円形
SK014	B3	A2	隅丸台形
SK015	B3	A2・3	不整楕円形
SK016	B3	A3・4	楕円形
SK017	B3	A3	円形
SK018	B3	A3	楕円形
SK019	B3	A3	楕円形
SK020	B3	A4	不整楕円形
SK021	A・B3	T・A5	円形
SK022	B3	A5	長楕円形
SK023	B3	A5	円形
SK024	B3	A5	長楕円形
SK025	B3	A6	不整楕円形
SK026	B3	A6	不整楕円形
SK027	B3	A6	隅丸長方形
SK028	B3	A6・7	隅丸長方形
SK029	B3	A7	円形
SK030	B3	A7	楕円形
SK031	B3	A7・8	長楕円形
SK032	B3	A7	楕円形
SK033	B3	A7	楕円形
SK034	B3	A7	円形
SK035	A・B3	T・A7	不整楕円形
SK036	B3	A7	楕円形
SK037	B3	A7	不整楕円形
SK038	B3	A7	楕円形
SK039	B3	A6・7	—
SK040	B3	A7	—
SK041	B3	A8・9	楕円形
SK042	B3	A8	不整形
SK043	B3	A8	楕円形
SK044	B3	A8	不整形
SK045	B3	A・B8	不整楕円形
SK046	B3	A8	隅丸方形
SK047	B3	A8	楕円形
SK048	B3	A8	方形
SK049	B2	B19・20	円形
SK050	B3	B1	隅丸方形
SK051	B3	B1	楕円形
SK052	B3	B1	楕円形
SK053	B3	B1	楕円形
SK054	B3	B2	楕円形
SK055	B3	B2	楕円形
SK056	B3	B3	円形
SK057	B3	B2・3	不整楕円形
SK058	B3	B3	長楕円形
SK059	B3	B3	隅丸長方形
SK060	B3	B3	隅丸長方形
SK061	B3	B3	隅丸長方形
SK062	B3	B3	隅丸方形
SK063	B3	B3・4	不整形
SK064	B3	B3・4	隅丸長方形
SK065	B3	B3・4	不整形
SK066	B3	B3	楕円形
SK067	B3	B・C3	隅丸長方形
SK068	B3	B4	隅丸長方形
SK069	B3	B4	不整楕円形
SK070	B3	B4	不整長方形
SK071	B3	B4	円形
SK072	B3	B4	円形
SK073	B3	B3・4	楕円形
SK074	B3	B6	長方形
SK075	B3	A・B6	楕円形
SK076	B3	A・B7	楕円形
SK077	B3	B7	—
SK078	B3	B7	長方形
SK079	B3	A・B8	楕円形
SK080	B3	B8	楕円形
SK081	B3	B8	楕円形
SK082	B3	B7・8	楕円形
SK083	B3	B7・8	長楕円形
SK084	B3	C1	楕円形
SK085	B3	C1	楕円形
SK086	B3	C3	—

遺構番号	グリッド		平面形
SK087	B3	C3	不整楕円形
SK088	B3	C3・4	不整楕円形
SK089	B3	B・C3・4	楕円形
SK090	B3	C4	楕円形
SK091	B3	C4	楕円形
SK092	B3	D1	不整楕円形
SK093	B3	D3	不整楕円形
SK094	B3	D3	楕円形
SK095	B3	D5	不整形
SK096	B3	D5	楕円形
SK097	B3	D5	楕円形
SK098	B3	D5	不整形
SK099	B3	D5	不整楕円形
SK100	B3	D5	不整楕円形
SK101	B3	D5・6	隅丸三角形
SK102	B3	D・E2	不整楕円形
SK103	B3	E2	不整形
SK104	B3	DE・5	—
SK105	B3	E・F2	不整楕円形
SK106	B3	F・G2	円形
SK107	B3	F・G3	不整形
SK108	B3	F・G3	不整楕円形
SK109	B3	F・G3	—
SK110	B2	G19	不整楕円形
SK111	B3	G1・2	円形
SK112	B3	G1・2	円形
SK113	B3	G1	円形
SK114	B3	G1	隅丸長方形
SK115	B3	G1	—
SK116	B3	G2	円形
SK117	B3	G2	隅丸長方形
SK118	B3	G2	隅丸長方形
SK119	B3	G1・2	楕円形
SK120	B3	G2	楕円形
SK121	B3	G3	不整形
SK122	B3	G3	楕円形
SK123	B3	G2・3	楕円形
SK124	B3	G4	楕円形
SK125	B3	G4	隅丸長方形
SK126	B3	G4	楕円形
SK127	B3	G4	楕円形
SK128	B3	G4	不整形
SK129	B3	G4	隅丸長方形
SK130	B3	G4	不整楕円形
SK131	B3	G4	楕円形
SK132	B3	G3・4	—
SK133	B2・3	H20・1	楕円形
SK134	B2	H20	—
SK135	B2	H20	楕円形
SK136	B3	H1	隅丸長方形
SK137	B3	H1	隅丸長方形
SK138	B3	H1	円形
SK139	B3	H1	楕円形
SK140	B3	H1	隅丸長方形
SK141	B3	H1	楕円形
SK142	B3	H1	円形
SK143	B3	H2	長楕円形
SK144	B3	H2	—
SK145	B3	H2	—
SK146	B3	H2	不整形
SK147	B3	H1・2	—
SK148	B3	H2	長楕円形
SK149	B3	H2	楕円形
SK150	B3	H2	不整楕円形
SK151	B3	H2・3	楕円形
SK152	B3	H2	円形
SK153	B3	H2	円形
SK154	B3	H2	隅丸方形
SK155	B3	H・I2	楕円形
SK156	B3	H2	隅丸長方形
SK157	B3	H2	円形
SK158	B3	H2	隅丸方形
SK159	B3	HI・2	楕円形
SK160	B3	H2	円形
SK161	B3	HI・2	不整形
SK162	B3	G・H2・3	不整楕円形
SK163	B3	H3	長楕円形
SK164	B3	H3	隅丸長方形
SK165	B3	H2・3	楕円形
SK166	B3	H3	楕円形
SK167	B3	H2・3	円形
SK168	B3	H3	円形
SK169	B3	G・H3	不整楕円形
SK170	B3	H3	楕円形
SK171	B3	H3	—
SK172	B3	H3	—

遺構番号	グリッド		平面形
SK173	B3	H4	楕円形
SK174	B3	H4	楕円形
SK175	B3	H4	楕円形
SK176	B3	H4	楕円形
SK177	B3	H4	—
SK178	B3	H4	—
SK179	B3	H4	—
SK180	B3	H4	—
SK181	B3	H4	楕円形
SK182	B3	H4	—
SK183	B3	H4	楕円形
SK184	B3	H4	楕円形
SK185	B3	H4	不整楕円形
SK186	B3	H4	不整形
SK187	B3	H5	隅丸長方形
SK188	B3	H5	隅丸長方形
SK189	B3	H5	隅丸長方形
SK190	B3	H5	楕円形
SK191	B3	I1	楕円形
SK192	B3	I1	楕円形
SK193	B3	I1	隅丸方形
SK194	B3	I1	不整楕円形
SK195	B3	I1	円形
SK196	B3	I1	楕円形
SK197	B3	I1・2	—
SK198	B3	I2	円形
SK199	B3	I2	楕円形
SK200	B3	I2	楕円形
SK201	B3	I2	楕円形
SK202	B3	I2	不整楕円形
SK203	B3	I2	楕円形
SK204	B3	I2	楕円形
SK205	B3	I2	楕円形
SK206	B3	H・I2	不整方形
SK207	B3	I2	隅丸長方形
SK208	B3	I2	楕円形
SK209	B3	I2	楕円形
SK210	B3	I2	長楕円形
SK211	B3	I2	楕円形
SK212	B3	I2	楕円形
SK213	B3	I・J2	隅丸長方形
SK214	B3	I2	楕円形
SK215	B3	I2	楕円形
SK216	B3	I2	円形
SK217	B3	I2	隅丸長方形
SK218	B3	I3	隅丸長方形
SK219	B3	I2・3	楕円形
SK220	B3	I3	楕円形
SK221	B3	I4	円形
SK222	B3	I4	円形
SK223	B3	I4	—
SK224	B3	I4・5	—
SK225	B3	I4・5	—
SK226	B3	I4	円形
SK227	B3	I4	隅丸方形
SK228	B3	H・I4	—
SK229	B3	H・I4	—
SK230	B3	H・I4	長楕円形
SK231	B3	I4	楕円形
SK232	B3	HI・5	不整楕円形
SK233	B3	HI・5	—
SK234	B3	I7	円形
SK235	B3	I7	楕円形
SK236	B3	I7	楕円形
SK237	B3	J2	—
SK238	B3	J2	隅丸長方形
SK239	B3	I・J2	楕円形
SK240	B3	J6	円形
SK241	B3	J6	円形
SK242	B3	K3・4	楕円形
SK243	B3	K5	円形
SK244	B3	K5	円形
SK245	B3	K5	円形
SK246	B3	L4・5	楕円形
SK247	B3	K・L5	円形
SK248	B3	L7	楕円形
SK249	B3	L7	楕円形
SK250	B3	L8	楕円形
SK251	B3	M7・8	不整楕円形
SK252	B3	L・M7	円形
SK253	B3	L・M7	—
SK254	B3	L・M9	円形
SK255	B3	M9	円形
SK256	B3	M9	楕円形
SK257	B3	M8・9	円形
SK258	B3	M9	円形



第17表-2

遺構番号	グリッド		平面形
SK259	B3	M9	楕円形
SK260	A3	S6	長楕円形
SK261	A3	S7	円形
SK262	A3	S7	楕円形
SK263	A3	S7	楕円形
SK264	A3	R・S7	円形
SK265	A3	T5	円形
SK266	A・B3	T・A6	楕円形
SK267	A3	T6	不整楕円形
SK268	A3	T6	円形
SK269	A3	T6	不定形
SK270	A3	T6	楕円形
SK271	A3	T6	楕円形
SK272	A3	T6・7	円形
SK273	A・B3	T・A7	楕円形
SK274	A3	T7	隅丸方形
SK275	A3	T7・8	楕円形
SK276	A3	T7	楕円形
SK277	A3	T7	隅丸方形
SK278	A3	T6・7	楕円形
SK279	A3	T7	不整形
SK280	A・B3	T・A7	不整長方形
SK281	A3	T6・7	楕円形
SK282	A3	T7	不整長方形
SK283	A3	T8	楕円形
SK284	A・B3	T・A8	不整長方形
SK285	A・B3	T・A8	—
SP001	B3	A1	楕円形
SP002	B3	A1	楕円形
SP003	B3	A1・2	楕円形
SP004	B3	A2	楕円形
SP005	B3	A2	楕円形
SP006	B3	A2	不整楕円形
SP007	B3	A2	—
SP008	B3	A2	円形
SP009	B3	A2	不整円形
SP010	B3	A2	—
SP011	B3	A2	円形
SP012	B3	A2	円形
SP013	B3	A2・3	—
SP014	B3	A2	円形
SP015	B3	A2	楕円形
SP017	B3	A3	—
SP018	B3	A4	楕円形
SP019	B3	A4	—
SP020	B3	A4	隅丸長方形
SP021	B3	A4	不整楕円形
SP022	B3	A5	楕円形
SP023	B3	A6	楕円形
SP024	B3	A6	楕円形
SP025	B3	A6	楕円形
SP026	B3	A6・7	—
SP027	B3	A7	円形
SP028	B3	A7	楕円形
SP029	B3	A7	楕円形
SP030	B3	A8	楕円形
SP031	B3	A7・8	円形
SP032	B3	A8	長方形
SP033	B3	A8	—
SP034	B3	A8	—
SP035	B2	B19	円形
SP036	B2	B19	円形
SP037	B3	B1	円形
SP038	B3	B1	楕円形
SP039	B3	B2	円形
SP040	B3	B2・3	楕円形
SP041	B3	B3	不整形
SP042	B3	B3	円形
SP043	B3	B3	隅丸長方形
SP044	B3	B3	楕円形
SP045	B3	B3	楕円形
SP046	B3	B3	—
SP047	B3	B4	円形
SP048	B3	B4	円形
SP049	B3	B5	楕円形
SP050	B3	B5	楕円形
SP051	B3	B6	楕円形
SP052	B3	B6	楕円形
SP053	B3	B6	楕円形
SP054	B3	A・B7	円形
SP055	B3	B8	楕円形
SP056	B3	B8	隅丸方形
SP057	B3	B8	楕円形
SP058	B3	C1	楕円形
SP059	B3	C1	不整楕円形
SP060	B3	C1	楕円形
SP061	B3	C1	楕円形
SP062	B3	C1	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP063	B3	C1	楕円形
SP064	B3	C1	楕円形
SP065	B3	C・D3	楕円形
SP066	B3	C4	楕円形
SP067	B3	C5	楕円形
SP068	B3	C5	円形
SP069	B3	D2	円形
SP070	B3	D2	隅丸三角形
SP071	B3	D3	楕円形
SP072	B3	D3	楕円形
SP073	B3	D3	円形
SP074	B3	D3	円形
SP075	B3	D3	不整楕円形
SP076	B3	D3	楕円形
SP077	B3	D3	円形
SP078	B3	D4	楕円形
SP079	B3	D4・5	楕円形
SP080	B3	D・E5	円形
SP081	B3	D5	—
SP082	B3	D5	円形
SP083	B3	D5	不整楕円形
SP084	B3	D6	円形
SP085	B3	D6	楕円形
SP086	B3	D6	円形
SP087	B3	D6	不整楕円形
SP088	B3	D6	不整楕円形
SP089	B3	D6	楕円形
SP090	B3	D6	円形
SP091	B3	D6	円形
SP092	B3	E1	楕円形
SP093	B3	E2	不整形
SP094	B3	E2	楕円形
SP095	B3	E3	不整楕円形
SP096	B2	G19	円形
SP097	B2	F・G19	円形
SP098	B2	F19・20	円形
SP099	B2	F19	円形
SP101	B2	F20	円形
SP102	B2	F20	円形
SP103	B2	F20	楕円形
SP104	B2	F20	円形
SP105	B3	F1	円形
SP106	B3	F1	円形
SP107	B3	F1	円形
SP108	B3	F1	円形
SP109	B3	F1	楕円形
SP110	B3	F1	円形
SP111	B3	F1	楕円形
SP112	B3	F1	円形
SP113	B3	F1	楕円形
SP114	B3	F1	円形
SP115	B3	F1	円形
SP116	B3	F2	円形
SP117	B3	F2	楕円形
SP118	B3	F2	円形
SP119	B3	F2	円形
SP120	B3	F2	円形
SP121	B3	F2	円形
SP122	B3	F2	円形
SP123	B3	F2	円形
SP124	B3	F2	円形
SP125	B3	F2	楕円形
SP126	B3	F1	円形
SP127	B3	F2	円形
SP128	B3	F2	楕円形
SP129	B3	F2	円形
SP130	B3	F2	円形
SP131	B3	F2	円形
SP132	B3	F2	円形
SP133	B3	F2	円形
SP134	B3	F2	楕円形
SP135	B3	F2	楕円形
SP136	B3	F2	円形
SP137	B3	F・G2	円形
SP138	B3	F3	楕円形
SP139	B3	F3	楕円形
SP140	B3	F3	円形
SP141	B3	F3	楕円形
SP142	B3	F3	円形
SP143	B3	F3	円形
SP144	B3	F3	不整円形
SP145	B3	F3	不整楕円形
SP146	B3	F3	不整円形
SP147	B3	F3	円形
SP148	B3	F3	楕円形
SP149	B3	F3	楕円形
SP150	B3	F4	楕円形
SP151	B3	F4	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP152	B3	F4	楕円形
SP153	B3	F4	楕円形
SP154	B3	F4	楕円形
SP155	B3	F4	不整形
SP156	B3	F4	円形
SP157	B3	F4	楕円形
SP158	B3	F4	円形
SP159	B3	F4	円形
SP160	B3	F3・4	円形
SP162	B3	F・G4	楕円形
SP163	B3	F・G4	円形
SP164	B3	F3・4	不整楕円形
SP165	B3	F4	不整形
SP166	B3	F4	楕円形
SP167	B3	F4	楕円形
SP168	B2	G19	円形
SP169	B2	G19	円形
SP170	B2	G19	円形
SP171	B3	G1	楕円形
SP172	B3	G1	円形
SP173	B3	G1	楕円形
SP174	B3	G1	円形
SP175	B3	G・H1	楕円形
SP176	B3	G2	円形
SP177	B3	G2	円形
SP178	B3	G2	楕円形
SP179	B3	G2	楕円形
SP180	B3	G2	円形
SP181	B3	G2	円形
SP182	B3	G2	円形
SP183	B3	G2	楕円形
SP184	B3	G・H2	円形
SP185	B3	G2	円形
SP186	B3	G2	円形
SP187	B3	G2	隅丸長方形
SP188	B3	G2	—
SP189	B3	G2	—
SP190	B3	G2	円形
SP191	B3	G2	円形
SP192	B3	G2	楕円形
SP193	B3	G2	—
SP194	B3	G2	円形
SP195	B3	G2	円形
SP196	B3	G2	楕円形
SP197	B3	G2	不整楕円形
SP198	B3	G2	楕円形
SP199	B3	G・H2	—
SP200	B3	G2	楕円形
SP201	B3	G2	楕円形
SP203	B3	G2	楕円形
SP204	B3	G2	楕円形
SP206	B3	F・G3	楕円形
SP207	B3	F・G3	—
SP208	B3	F・G3	楕円形
SP209	B3	G3	楕円形
SP210	B3	G3	隅丸方形
SP211	B3	G3	楕円形
SP212	B3	G3	円形
SP213	B3	G3	楕円形
SP214	B3	G・H3	楕円形
SP215	B3	G3	円形
SP216	B3	G3	円形
SP217	B3	G3	楕円形
SP218	B3	G3	円形
SP219	B3	G3	楕円形
SP220	B3	G3	楕円形
SP221	B3	G3	楕円形
SP222	B3	G3	—
SP223	B3	G3	楕円形
SP224	B3	G4	楕円形
SP225	B3	G4	円形
SP226	B3	G4	楕円形
SP227	B3	G4	円形
SP228	B3	G4	円形
SP229	B3	G4	円形
SP230	B3	G4	楕円形
SP231	B3	G4	円形
SP232	B3	G4	楕円形
SP233	B3	G4	円形
SP234	B3	G4	—
SP235	B3	G4	楕円形
SP236	B3	G4	円形
SP237	B3	G4	円形
SP238	B3	G4	円形
SP239	B3	G4	円形
SP240	B3	G4	円形
SP241	B3	G4	楕円形
SP242	B3	G4	円形

第 17 表-3

遺構番号	グリッド		平面形
SP243	B3	G4	円形
SP244	B3	G4	—
SP245	B3	G4	円形
SP246	B3	G4	—
SP247	B3	G4・5	円形
SP248	B3	G4	円形
SP249	B3	G4	楕円形
SP250	B3	G4	円形
SP251	B3	G4	円形
SP252	B3	G4	円形
SP253	B3	G4	円形
SP254	B3	G4	円形
SP255	B3	G4	隅丸方形
SP256	B3	G4	円形
SP257	B3	G・H4	楕円形
SP258	B3	G4	円形
SP259	B3	G4	円形
SP260	B3	G4	円形
SP261	B3	G4	楕円形
SP262	B3	G4	円形
SP263	B3	G4・5	円形
SP264	B3	F・G5	円形
SP265	B3	G・H4	円形
SP266	B3	G・H5	楕円形
SP267	B2・3	H20・1	円形
SP268	B2	H20	円形
SP269	B3	H1	円形
SP270	B3	H1	円形
SP271	B3	H1	円形
SP272	B3	H1	円形
SP273	B3	H1	円形
SP274	B3	H1	楕円形
SP275	B3	H1	円形
SP276	B3	H1	円形
SP277	B3	H1	楕円形
SP278	B3	H1	楕円形
SP279	B3	H1・2	円形
SP280	B3	H2	楕円形
SP281	B3	H2	楕円形
SP282	B3	H2	円形
SP283	B3	H2	円形
SP284	B3	H2	円形
SP285	B3	H2	楕円形
SP286	B3	H2	円形
SP287	B3	H2	楕円形
SP288	B3	H2	—
SP289	B3	H2	—
SP290	B3	H2	円形
SP291	B3	H2	円形
SP292	B3	H2	円形
SP293	B3	H2	楕円形
SP294	B3	H2	円形
SP295	B3	H2	楕円形
SP296	B3	H2	円形
SP297	B3	H2	円形
SP298	B3	H2	円形
SP299	B3	H2	—
SP300	B3	H2	楕円形
SP301	B3	H2	円形
SP302	B3	H2	円形
SP303	B3	H2	楕円形
SP304	B3	H2	円形
SP305	B3	H2・3	円形
SP306	B3	H2	楕円形
SP307	B3	H2	—
SP308	B3	H・I2	楕円形
SP309	B3	H2	楕円形
SP310	B3	H2	円形
SP311	B3	H2	円形
SP312	B3	H2	—
SP313	B3	H2	—
SP314	B3	H2	円形
SP315	B3	H2	円形
SP316	B3	H・I2	円形
SP318	B3	G・H2	—
SP319	B3	H2	円形
SP320	B3	H2	円形
SP321	B3	H2	円形
SP322	B3	H2	—
SP323	B3	H2	不整形
SP324	B3	H2	不整形
SP325	B3	H2	円形
SP326	B3	H3	円形
SP327	B3	G・H3	楕円形
SP328	B3	H3	円形
SP329	B3	H3	円形
SP330	B3	H3	—

遺構番号	グリッド		平面形
SP331	B3	H3	—
SP332	B3	H3	円形
SP333	B3	H3	円形
SP334	B3	H3	円形
SP335	B3	H3	円形
SP336	B3	H3	円形
SP337	B3	H3	円形
SP338	B3	H3・4	楕円形
SP339	B3	H3	楕円形
SP340	B3	H3	不整形
SP341	B3	H3・4	楕円形
SP342	B3	H3	楕円形
SP343	B3	H3	不整形楕円形
SP344	B3	G・H4	楕円形
SP345	B3	H4	円形
SP346	B3	H4	円形
SP347	B3	H4	隅丸方形
SP348	B3	H4	円形
SP349	B3	H4	円形
SP350	B3	H4	円形
SP351	B3	H4	円形
SP352	B3	H4	—
SP353	B3	H4	—
SP354	B3	H4	円形
SP356	B3	H4	円形
SP357	B3	H4	不整形楕円形
SP358	B3	H・I4	楕円形
SP359	B3	H4	—
SP360	B3	H4	楕円形
SP361	B3	H4	円形
SP362	B3	H4	円形
SP363	B3	H4	円形
SP364	B3	G・H5	楕円形
SP365	B3	H5	不整形
SP366	B3	H5	円形
SP367	B3	H5	隅丸方形
SP368	B3	H5	—
SP369	B3	H5	不整形
SP371	B3	I1	円形
SP372	B3	I1	円形
SP373	B3	I2	円形
SP374	B3	I1	楕円形
SP375	B3	I1	円形
SP376	B3	I1	円形
SP382	B3	I1	—
SP383	B3	I1	—
SP384	B3	I1	円形
SP385	B3	I1	楕円形
SP386	B3	I1・2	円形
SP387	B3	I2	楕円形
SP388	B3	I2	円形
SP389	B3	I2	楕円形
SP390	B3	I2	不整形楕円形
SP391	B3	I2	楕円形
SP392	B3	I2	楕円形
SP393	B3	I2	円形
SP394	B3	I2	円形
SP395	B3	I2	楕円形
SP396	B3	I2	楕円形
SP397	B3	I2	円形
SP398	B3	I2	円形
SP399	B3	I2	円形
SP400	B3	I2	楕円形
SP401	B3	I2	隅丸長方形
SP402	B3	I2	円形
SP404	B3	I2	—
SP405	B3	I2	円形
SP406	B3	I2	円形
SP407	B3	I2	—
SP408	B3	I2	長楕円形
SP409	B3	I2	—
SP410	B3	I2	—
SP411	B3	I・J13	円形
SP412	B3	I3	楕円形
SP413	B3	I3	—
SP414	B3	I3	長楕円形
SP415	B3	I4	円形
SP416	B3	I4	楕円形
SP417	B3	I4	円形
SP418	B3	I4	円形
SP419	B3	I4	円形
SP420	B3	I4	楕円形
SP421	B3	I4・5	円形
SP422	B3	I4	円形
SP423	B3	I4	円形
SP424	B3	I4	円形
SP425	B3	I4	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP426	B3	I4	楕円形
SP427	B3	I4	円形
SP428	B3	I4	円形
SP429	B3	I4	円形
SP430	B3	I4	楕円形
SP431	B3	I4	—
SP432	B3	I4	楕円形
SP433	B3	H・I4	円形
SP434	B3	I5	楕円形
SP435	B3	I5	楕円形
SP436	B3	I7	円形
SP437	B3	I7	円形
SP438	B3	I7	楕円形
SP439	B3	I7	楕円形
SP440	B3	I7	楕円形
SP441	B3	I7	楕円形
SP442	B3	H・I7	楕円形
SP443	B3	I7	楕円形
SP444	B3	J2	楕円形
SP445	B3	J2	円形
SP446	B3	J2	円形
SP447	B3	J2	円形
SP448	B3	J2	円形
SP449	B3	J2	円形
SP450	B3	J2	円形
SP451	B3	J3	円形
SP452	B3	J5	円形
SP453	B3	J5	楕円形
SP454	B3	J5	円形
SP455	B3	J5	楕円形
SP456	B3	J5	楕円形
SP457	B3	J6	楕円形
SP458	B3	J6	楕円形
SP459	B3	J6	円形
SP460	B3	J・K6	円形
SP461	B3	J7	円形
SP462	B3	J7	円形
SP463	B3	J7	楕円形
SP464	B3	J7	円形
SP465	B3	J・K7	楕円形
SP466	B3	K3	円形
SP467	B3	K3	—
SP468	B3	K3	円形
SP469	B3	K3	楕円形
SP470	B3	K4	円形
SP471	B3	K4・5	—
SP472	B3	K4	円形
SP473	B3	K4	楕円形
SP474	B3	K5	楕円形
SP475	B3	K5	円形
SP476	B3	K5	楕円形
SP477	B3	K5	円形
SP478	B3	K5	楕円形
SP479	B3	K5	円形
SP480	B3	K6	円形
SP481	B3	K7	楕円形
SP482	B3	K7	楕円形
SP484	B3	L5	円形
SP485	B3	L5	円形
SP486	B3	L・M7	円形
SP487	B3	L7	円形
SP488	B3	L7	円形
SP489	B3	L7	円形
SP490	B3	L7	円形
SP491	B3	L7	円形
SP492	B3	L8	楕円形
SP493	B3	L8	円形
SP494	B3	M7	円形
SP495	B3	M7	円形
SP496	B3	M8	円形
SP497	B3	M8	円形
SP498	B3	M9	円形
SP499	B3	M9	円形
SP500	B3	M9	円形
SP501	A3	S7	円形
SP502	A3	T5	円形
SP503	A3	T5	円形
SP504	A3	T6	楕円形
SP505	A3	T6	円形
SP506	A3	T6	楕円形
SP507	A3	T7	楕円形
SP508	A3	T7・8	不整形円形

第17表-4

HA③地区

遺構番号	グリッド		平面形
S-52 SK	B2	B10・11	楕円形
S-54 P	B2	D18	隅丸方形
S-56 P	B2	E18	隅丸長方形
S-57 P	B2	E18	楕円形
S-70 P	B2	F11	円形
S-71 P	B2	F11	楕円形
S-72 P	B2	F11	円形
S-73 P	B2	F11	楕円形
S-74 P	B2	F11	楕円形
S-75 P	B2	F11・12	楕円形
S-76 P	B2	F12	楕円形
S-77 P	B2	F11	楕円形
S-78 P	B2	F11・12	楕円形
S-81 P	B2	F10	隅丸長方形
S-82 P	B2	F10	円形
S-83 P	B2	F10	隅丸長方形
S-84 P	B2	C17	隅丸長方形
S-85 P	B2	C18	円形
S-89 SK	A・B2	T・A8	不整形
S-101 P	A2	R5	不整形
S-102 P	A2	R5	不整形
S-105 P	A2	S5	
S-106 P	A2	S5	隅丸長方形
S-107-P1			楕円形
S-107-P2			円形
S-107-P3			楕円形
S-107-P4	A2	S・T5・6	円形
S-107-P5			楕円形
S-107-P6			楕円形
S-107-P7			楕円形
S-108 P	A2	T5	楕円形
S-109 P	A2	T5	楕円形
S-112 P	A・B2	T・A5	円形
S-114 P	B2	A5・6	円形
S-115 P	B2	A5	隅丸方形
S-116 P	B2	A5	楕円形
S-117 P	B2	A5	楕円形
S-118 P	B2	B6	円形
S-119 P	B2	B5	円形
S-120 P	B2	B5	楕円形
S-122 P	B2	B5・6	不整形楕円形
S-123 P	B2	B6	楕円形
S-124 P	B2	B5	不整形長方形
S-126 P	A2	R5	円形
S-127 P	A2	R5	—
S-128 P	A2	S5	隅丸長方形
S-129 P	A2	S5・6	楕円形
S-130 P	A2	S5	円形
S-131 P	A2	S5	楕円形
S-133 SK	A2	S5	不整形
S-134 P	A2	S5	楕円形
S-135 P	A2	S5	楕円形
S-136 P	A2	S5	円形
S-137 P	A2	S5	円形
S-138 P	A2	S5	—
S-139 P	A2	S5	不整形楕円形
S-140 P	A2	S5	不整形楕円形
S-142 P	B2	A5	円形
S-143 P	B2	A・B5	円形
S-144 P	B2	B5	不整形楕円形
S-145 P	B2	B5	円形
S-146 P	B2	B5・6	楕円形
S-147 P	B2	B5・6	円形
S-148 P	A2	R5	楕円形
S-150 P	A2	R6	楕円形
S-152 P	A2	R6	不整形楕円形
S-153 P	A2	R6	不整形
S-154 P	A2	R6	不整形
S-155 P	A2	R6	楕円形
S-156 P	A2	R6・7	円形
S-157 P	A2	R6	楕円形
S-159 P	A2	S6	円形
S-160 P	A2	S6	—
S-161 P	A2	S6	円形
S-162 P	A2	S6	楕円形
S-163 P	A2	S6	—
S-165 P	A2	S6	楕円形
S-166 P	A2	S6	楕円形
S-167 P	A2	S6	円形
S-168 P	A2	S6	円形
S-169 P	A2	S6	楕円形
S-170 P	A2	S6	楕円形
S-181 P	A2	S6	楕円形
S-182 P	A2	S6	円形
S-183 SK	A2	S6	不整形楕円形
S-184 P	A2	S6	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
S-185 P	A2	S6	円形
S-186 P	A2	S6	円形
S-187 P	A2	S6	楕円形
S-188 P	A2	T6	円形
S-189 P	A2	T6	円形
S-190 P	A2	T6	円形
S-191 SK	A2	T5・6	楕円形
S-192 P	A2	T6	円形
S-193 P	A2	T6	円形
S-194 P	A2	T6	楕円形
S-195 P	A2	T6	楕円形
S-196 P	A2	T6	楕円形
S-197 P	A2	T6	不整形楕円形
S-198 P	A2	T6	楕円形
S-199 P	A2	T6	不整形
S-200 P	A2	T6	楕円形
S-201 SK	A2	T6	楕円形
S-202 P	A2	T6	—
S-203 SK	A2	T6	長楕円形
S-204 P	B2	A6	円形
S-205-P1			円形
S-205-P2			楕円形
S-205-P3			楕円形
S-205-P4	A・B2	T・A6・7	円形
S-205-P5			円形
S-205-P6			楕円形
S-205-P7			円形
S-206 SK	A2	T6	不整形楕円形
S-207 P	A2	T6・7	円形
S-208 P	A・B2	T・A7	円形
S-209 P	A2	T7	楕円形
S-210 P	B2	A6	円形
S-211 P	B2	A6	楕円形
S-212 P	B2	A6	楕円形
S-213 P	B2	A6	楕円形
S-214 P	B2	A6	楕円形
S-215-P1			楕円形
S-215-P2			楕円形
S-215-P3	A・B2	T・A6・7	楕円形
S-215-P4			円形
S-215-P5			円形
S-215-P6			円形
S-216 P	B2	A6	楕円形
S-217 P	B2	A6	円形
S-218 P	B2	A6	楕円形
S-219 P	B2	A6	円形
S-220 P	B2	A6	円形
S-221 P	B2	A6	円形
S-222 P	B2	A6	円形
S-223 P	A2	R6	楕円形
S-224 P	A2	R6	楕円形
S-225 P	A2	R6	楕円形
S-226 P	A2	R6	円形
S-227 P	A2	R6	不整形
S-228 P	A2	R6	楕円形
S-230 P	A2	R・S6	楕円形
S-231 P	A2	S6	円形
S-232 P	A2	S6	円形
S-233 P	A2	S6	円形
S-235 P	A2	S6	不整形楕円形
S-236 P	A2	S6	—
S-237 P	A2	S6	隅丸長方形
S-238 P	A2	S6	楕円形
S-239 P	A2	S・T6	楕円形
S-240 P	A2	T6	楕円形
S-242 P	A2	T6	円形
S-243 P	A2	T6	円形
S-244 P	A2	T6	円形
S-245 P	A2	T6	円形
S-246 P	A2	T6	円形
S-247 P	A2	T6・7	円形
S-248 P	A2	T6	楕円形
S-249 P	A2	T6	—
S-250 SK	A・B2	T・A6	円形
S-251 P	A2	T6	楕円形
S-252 P	B2	A6	楕円形
S-253 P	B2	A6	円形
S-254 P	B2	A6	円形
S-255 P	B2	A6	隅丸長方形
S-256 P	A2	A6	円形
S-257 P	A2	R6	楕円形
S-258 P	A2	T6	楕円形
S-259 P	B2	A6	円形
S-260 SK	B2	A6	不整形
S-262 P	A2	R7	円形
S-263 P	A2	R7	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
S-264 P	A2	R7	楕円形
S-266 P	A2	S7	楕円形
S-267 P	A2	S7	楕円形
S-268 P	A2	S7	楕円形
S-269 P	A2	S7	円形
S-270 P	A2	S7	円形
S-271 P	A2	S7・8	楕円形
S-272-P1			円形
S-272-P2			円形
S-272-P3	A2	S・T6・7	円形
S-272-P4			楕円形
S-272-P5			円形
S-273-P1			円形
S-273-P2			円形
S-273-P3			円形
S-273-P4	A・B2	T・A7・8	楕円形
S-273-P5			円形
S-273-P6			円形
S-273-P7			円形
S-274-P1			楕円形
S-274-P2			楕円形
S-274-P3	A・B2	T・A7・8	楕円形
S-274-P4			楕円形
S-274-P5			円形
S-275 P	A2	T7	円形
S-276 P	A2	T7	楕円形
S-277 P	A2	T7	楕円形
S-278 P	A2	T7	楕円形
S-279 P	A2	T7	楕円形
S-280 P	A2	T7	楕円形
S-281 P	A2	T7	楕円形
S-282 P	A2	T7	円形
S-283 P	A2	T7	—
S-284 P	A2	T7	円形
S-285 P	A2	T7	楕円形
S-286 P	A2	T7・8	楕円形
S-287 P	B2	A7	楕円形
S-288 P	B2	A7	楕円形
S-289 P	B2	A7	楕円形
S-290 P	B2	A7	楕円形
S-291 P	B2	A7	楕円形
S-292 P	B2	A7	円形
S-293 P	B2	A7・8	楕円形
S-294 P	B2	A7・8	円形
S-296 P	A2	R7	—
S-298 P	A2	R7・8	円形
S-299 P	A2	R7	楕円形
S-300 P	A2	R・S7	円形
S-301 P	A2	S7	円形
S-303 P	A2	S7	楕円形
S-304 P	A2	S7	楕円形
S-306-P1			楕円形
S-306-P2			楕円形
S-306-P3	A2	S7・8	楕円形
S-306-P4			楕円形
S-306-P5			楕円形
S-307 P	A2	S8	円形
S-308 P	A2	S7・8	楕円形
S-309 P	A2	S・T7	円形
S-310 P	A2	S・T7	不整形
S-312 P	A2	T7	円形
S-313 P	A2	T7	不整形
S-314 P	A2	T7	楕円形
S-315 P	A2	T7	楕円形
S-316 P	A2	T7	円形
S-317 P	A2	T7	楕円形
S-318 P	A2	T7	—
S-319 P	A2	T7	円形
S-320 P	A2	T7	円形
S-321 P	A2	T7	楕円形
S-322 P	A・B2	T・A7・8	楕円形
S-323 P	B2	A8	円形
S-324 P	B2	A7・8	円形
S-325 P	B2	A8	楕円形
S-326 P	B2	A8	楕円形
S-327 P	B2	A7・8	円形
S-328 SK	B2	A7	不整形
S-329 P	A2	S7	楕円形
S-330 P	A2	S7	楕円形
S-331 P	A2	S8	円形
S-332 P	A2	S8	円形
S-333 P	A2	S8	楕円形
S-334 P	A2	T7	楕円形
S-335 P	A2	T7・8	楕円形
S-336 P	A2	T8	—
S-337 P	A2	T8	円形

第 17 表-5

遺構番号	グリッド		平面形
S-338 SK	A2	T8	楕円形
S-339 P	A2	T8	円形
S-340 P	A2	T8	円形
S-341 P	A2	T8	楕円形
S-342 P	A2	T8	円形
S-343 P	A2	T8	楕円形
S-344 P	A2	T8	円形
S-345 P	A2	T8	楕円形
S-346 P	A2	T8	楕円形
S-347 P	A2	T7	円形
S-349 P	A2	T8	円形
S-351 P	A2	T8	円形
S-352 P	A・B2	T・A8	不整楕円形
S-353 P	A・B2	T・A8	円形
S-354 P	B2	A8	円形
S-355 P	B2	A8	円形
S-356 P	B2	A8	円形
S-357 P	B2	A8	隅丸方形
S-358 P	B2	A8	円形
S-359 P	B2	A8	楕円形
S-360 P	B2	A8	不整楕円形
S-361 P	B2	A8	楕円形
S-362 P	A2	S8	楕円形
S-363 P	A2	R・S8	楕円形
S-364 P	A2	S8	円形
S-365 P	A2	S8	円形
S-367 P	A2	T8	楕円形
S-368 P	A2	T8	楕円形
S-369 P	A2	T8	楕円形
S-370 P	A2	T8	不整円形
S-371 P	A2	T8	—
S-372 P	A2	T8	円形
S-373 P	A・B2	T・A8	楕円形
S-374 P	B2	A8	—
S-375 P	B2	A8	円形
S-376 P	B2	A8	楕円形
S-377 P	B2	A8	楕円形
S-378 P	B2	A8	不整楕円形
S-379 P	B2	A8	円形
S-380 P	B2	A8	円形
S-381 P	B2	A7	円形
S-382 P	B2	A8	円形
S-383 P	B2	B8	楕円形
S-385 P	B2	A8	楕円形
S-386 P	B2	A・B8	—
S-387 P	B2	A・B8	円形
S-388 P	B2	A8	不整楕円形
S-389 P	B2	A8	楕円形
S-390 P	B2	A8	楕円形
S-391 P	B2	A8	楕円形
S-392 P	B2	A8	楕円形
S-393 P	B2	A8	円形
S-394 P	B2	A8	円形
S-395-P1	B2	A8	楕円形
S-395-P2			不整楕円形
S-395-P3			楕円形
S-395-P4			円形
S-395-P5			楕円形
S-395-P6	B2	A8	楕円形
S-396 P	B2	A8	円形
S-397 P	A2	R8	不整楕円形
S-399 P	A2	S6	円形
S-401-P1	B2	A・B6・7	円形
S-401-P2			楕円形
S-401-P3			円形
S-401-P4			円形
S-401-P5			楕円形
S-401-P6			円形
S-402 P	B2	B6	円形
S-403 P	B2	B6	円形
S-405 P	B2	B6	楕円形
S-406 P	B2	B6	円形
S-407 P	B2	A・B6・7	円形
S-408 P	B2	B6	楕円形
S-409 P	B2	B6	楕円形
S-411 P	B2	B6	円形
S-412 P	B2	B6	楕円形
S-413 P	B2	B6・7	円形
S-414 P	B2	B6・7	楕円形
S-415 P	B2	B7	楕円形
S-416 P	B2	B7	円形
S-417 P	B2	B7	不整楕円形
S-418 P	B2	B7	楕円形
S-419 P	B2	B7	楕円形
S-420 P	B2	B6・7	円形
S-421 P	B2	B6	楕円形
S-422 P	B2	B6	円形

遺構番号	グリッド		平面形
S-423 P	B2	B6・7	円形
S-424 P	B2	B・C 7	円形
S-425 P	B2	B7	楕円形
S-426 P	B2	B7	楕円形
S-427 P	B2	A7	楕円形
S-428 P	B2	A6・7	楕円形
S-429 P	B2	B6	円形
S-430 P	B2	A6	円形
S-431 P	B2	B6	円形
S-432 P	B2	A・B5・6	円形
S-433 P	B2	B5・6	楕円形
S-434 P	B2	A7	楕円形
S-435 P	B2	A8	円形
S-436 P	A2	S・T6	円形
S-437 P	A2	T6	楕円形
S-439 P	A2	T7	楕円形
S-440 P	A2	T7・8	楕円形
S-441 P	A2	S6	円形
S-443 P	A2	S7	円形
S-444 P	A2	S7	楕円形
S-445-P1	A2	S・T7・8	楕円形
S-445-P2			楕円形
S-445-P3			楕円形
S-445-P4			楕円形
S-445-P5			楕円形
S-446 P	A2	S7	楕円形
S-447 P	A2	S7	楕円形
S-448 SK	B2	B8	不整形
S-449 P	B2	A7	—
S-451 P	A2	T6	円形
S-452 P	B2	A7	楕円形
S-500 SK	A2	S10	円形
S-501 P	A2	S・T9	円形
S-502 P	A2	S9	円形
S-503 P	A2	S9	円形
S-504 SK	A2	S9・10	不整楕円形
S-505 SK	A2	S・T10	楕円形
S-506 SK	A2	S・T9・10	楕円形
S-507 SK	A2	T9	楕円形
S-508 P	A2	T9	円形
S-509 P	A2	T9	円形
S-510 P	A2	T9	円形
S-511 P	A2	T10	円形
S-512 P	A2	T10	円形
S-513 P	B2	C10	楕円形
S-514 P	A2	T10	不整楕円形
S-515 P	A2	T10	—
S-516 P	A2	T10	楕円形
S-517 P	A2	T10	円形
S-518 SK	B2	A9	—
S-519 P	B2	A9	隅丸方形
S-520 P	B2	A9	円形
S-521 SK	B2	A9	不整楕円形
S-522 P	B2	A9	円形
S-523 P	B2	A9	円形
S-524 P	B2	A9	楕円形
S-526 P	B2	A・B9	楕円形
S-527 SK	B2	B9	隅丸長方形
S-528 P	B2	B 9	—
S-529 SK	B2	B9	隅丸三角形
S-530 P	B2	B 9	楕円形
S-531 P	B2	B 9	円形
S-532 P	B2	B 9	楕円形
S-533 P	B2	B9	楕円形
S-534 P	B2	B9	楕円形
S-535 P	B2	B9	不整形
S-536 P	B2	B10	楕円形
S-537 P	A2	S・T9・10	楕円形
S-538 P	B2	B10	楕円形
S-539 P	B2	B・C10	楕円形
S-540 P	B2	C9	楕円形
S-541 P	B2	C9	楕円形
S-542 P	B2	B・C10	楕円形
S-544 P	B2	C9	円形
S-545 P	B2	C9	不整楕円形
S-546 SD	B2	B・C9	—
S-547 P	A2	S・T10	円形
S-548 P	B2	A11	楕円形
S-549 SK	B2	A11	楕円形
S-550-P1	A2	S・T10・11	円形
S-550-P2			円形
S-550-P3			不整楕円形
S-550-P4			楕円形
S-550-P5			円形
S-551 P	A・B2	T・A9	楕円形
S-552 P	B2	B 9	不整楕円形
S-553 P	B2	B 9	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
S-554 P	B2	B9	円形
S-555-P1	A2	T9	円形
S-555-P2			楕円形
S-555-P3			—
S-555-P4			楕円形
S-556 P	A2	T10	楕円形
S-558 P	A2	T9	楕円形
S-560-P1	A・B2	T・A9・10	—
S-560-P2			楕円形
S-560-P3			円形
S-560-P4			楕円形
S-560-P5			円形
S-561 P	A2	S9・10	—
S-562 SK	A2	T10	隅丸三角形
S-563 P	A2	T9	楕円形
S-564 P	B2	A10	—
S-565 SD	A・B2	T・A9	—
S-566 P	A2	T9	楕円形
S-567 P	A2	T9	楕円形
S-568 P	B2	B・C10	円形
S-569 P	B2	B10	楕円形
S-570 P	B2	B11	楕円形
S-571 P	B2	B 11	円形
S-572 P	B2	A・B 11	円形
S-573 P	B2	A・B11	円形
S-574 SK	B2	B 11	不整形
S-575 P	B2	B 11	楕円形
S-576 P	B2	A11	—
S-577 P	B2	A11	不整楕円形
S-578 P	B2	A10・11	不整楕円形
S-579 SK	B2	A10・11	不整楕円形
S-580 P	B2	A11	楕円形
S-581 SK	A2	T9	円形
S-582 SK	A2	T10	不整楕円形
S-583 P	A2	T11	—
S-584 SK	A2	T10	楕円形
S-585 P	A2	T11	楕円形
S-586 P	A2	T11	楕円形
S-587 P	A2	T11	楕円形
S-588 P	A2	T11	楕円形
S-589 P	A2	T11・12	円形
S-590 P	A2	T12	—
S-591 P	A2	T12	楕円形
S-592 P	A2	T12	円形
S-593 P	A2	T12	楕円形
S-595 P	B2	A9・10	—
S-596 P	A2	T12	楕円形
S-597 P	A2	T12	楕円形
S-598 P	A2	T12	楕円形
S-599 SK	A2	S12	長楕円形
S-600 P	A2	T11	楕円形
S-602 P	A2	T12	隅丸長方形
S-603 P	A2	T10	—
S-604 SK	B2	A9	不整形
S-605 SK	B2	A11	楕円形
S-606 P	A2	T12	楕円形
S-607 P	A2	T12	円形
S-608 P	B2	B11	楕円形
S-609 P	B2	C10	不整円形
S-610 P	B2	C10	楕円形
S-611 P	A2	T12	—
S-613 P	A2	T9	楕円形
S-614 P	A2	T9	楕円形
S-615 P	A2	T10	円形
S-616 P	A2	S13	円形
S-617 P	A2	T12	楕円形
S-618 P	A2	T13	円形
S-619 P	A・B2	T・A12	円形
S-620 P	B2	A12・13	楕円形
S-621 P	B2	A13	楕円形
S-622 P	A・B2	T・A13	円形
S-623 P	A2	T13	円形
S-624 P	A・B2	T・A13	楕円形
S-625 SK	B2	A・B10	楕円形
S-626 P	A2	S13	楕円形
S-627 P	A・B2	T・A11	楕円形
S-628 P	A2	T15	楕円形
S-629 P	A2	S15	楕円形
S-630-P1	B2	B9・10	楕円形
S-630-P2			楕円形
S-630-P3			不整楕円形
S-630-P4			楕円形
S-631 P	A2	S15・16	円形
S-632 P	A2	R16	円形
S-633 P	A2	T15	楕円形
S-634 P	A2	T15	楕円形
S-635 P	A2	T16	楕円形

第 17 表-6

遺構番号	グリッド		平面形
S-636 P	B2	B11	楕円形
S-637 P	B2	B11	円形
S-638 P	B2	A13	楕円形
S-639 P	B2	A13	楕円形
S-641 SK	B2	A13	円形
S-642 P	B2	E13	円形
S-643 P	B2	E13	円形
S-644 P	B2	D12	円形
S-645 P	B2	D11	楕円形
S-646 P	B2	D11	円形
S-647 P	B2	D12	楕円形
S-648 P	B2	D11	円形
S-649 P	B2	D11	円形
S-650 P	B2	D13・14	円形
S-651 P	B2	D13	隅丸長方形
S-652 P	B2	D13	円形
S-653 P	B2	D・E13	不整形
S-654 P	B2	F8・9	楕円形
S-655 P	B2	F8	楕円形
S-656 P	B2	F8	円形
S-657 P	B2	E・F7・8	隅丸長方形
S-658 P	B2	F8	円形
S-659 P	B2	F8	楕円形
S-660 P	B2	F8	不整形楕円形
S-661 P	B2	F8	円形
S-662 P	B2	F7	楕円形
S-663 P	B2	F7	楕円形
S-664 P	B2	F7	不整形楕円形
S-665 SK	B2	F6・7	円形
S-666 P	B2	F6	円形
S-667 P	B2	F6	円形
S-668 P	A2	T13	円形
S-669 P	A2	T13	楕円形
S-670 P	A2	T13	楕円形
S-671 P	B2	A13・14	楕円形
S-672 P	B2	F7	楕円形
S-673 P	B2	F7	円形
S-674 P	B2	B11	円形
S-675 P	B2	B11	円形
S-676 P	B2	B11・12	円形
S-677 P	B2	B11・12	円形
S-678 P	B2	C7	楕円形
S-679 P	A2	S14	円形
S-685 SK	A2	S・T14	楕円形
S-686 P	B2	C9	円形
S-687 P	B2	C9	楕円形
S-689 P	B2	C16	円形
S-690 P	B2	C16	楕円形
S-694 P	B2	B10	楕円形
S-695 P	B2	B10	隅丸長方形
S-696 SK	A2	S9	楕円形

HA ④地区

遺構番号	グリッド		平面形
SK2	B4	Q・R10・11	不整形楕円形
SK3	B4	Q10	隅丸長方形
SK4	B4	Q・R10・11	—
SK9	B3	O・P19・20	—
SK10	B3	P18・19	不整形
SK11	B3	O18・19	円形
SK12	B3	N19・20	不整形
SK13	B3	N20	—
SK15	B3	M・N19	不整形楕円形
SK16	B3	M19	楕円形
SK21	B3	N16	不整形
SK22	B3	N15	不整形楕円形
SK23	B3	M15	—
SK24	B3	N15	不整形楕円形
SK25	B3	N15	楕円形
SK26	B3	N16	—
SK27	B3	N16	—
SK28	B3	N14	楕円形
SK29	B3	O15	楕円形
SK30	B3	O15	—
SK31	B3	O15	—
SK32	B3	O16	—
SK33	B3	N16	楕円形
SK34	B3	O15	楕円形
SK35	B3	N15	楕円形
SK36	B3	N15	円形
SK37	B3	O16	楕円形
SK38	B3	N15・16	不整形楕円形
SK39	B3	O14	—
SK40	B3	N14	楕円形
SK41	B3	N14	楕円形
SK42	B3	O15	—
SK43	B3	N14・15	不整形楕円形
SK62	B3	F9	—
SK65	B3	G11	円形
SK66	B3	F12	隅丸長方形
SK71	B3	E18	不整形楕円形
SK73	B3	H14	円形
SK80	B3	J・K18	不整形
SK81	B4	K3	—
SK82	B4	K・L3	円形
SK83	B4	L1	—
SK84	B3	L20	不整形楕円形
SK85	B4	K・L1	不整形楕円形
SK86	B4	K1	楕円形
SK87	B4	K1	楕円形
SK88	B4	K1	不整形楕円形
SK89	B3・4	K20・1	—
SK90	B3	K20	円形
SK91	B3	K20	楕円形
SK92	B3	I19	楕円形
SK93	B3	K18	楕円形
SK100	B4	K1	不整形楕円形
SK101	B3・4	K20・1	楕円形
SP1	B4	Q9・10	楕円形
SP2	B4	Q10	楕円形
SP3	B4	Q10	楕円形
SP5	B4	Q10	隅丸長方形
SP6	B3	P19	楕円形
SP7	B3	O18	円形
SP9	B3	O19	円形
SP10	B3	O18	—
SP12	B3	N18	楕円形
SP14	B3	N18	円形
SP15	B3	N18・19	円形
SP16	B3	N18	不整形楕円形
SP18	B3	N19	楕円形
SP19	B3	N19	楕円形
SP20	B3	N19	楕円形
SP21	B3	N19	円形
SP22	B3	N19	円形
SP23	B3	N20	円形
SP24	B3	N20	円形
SP25	B3	N20	円形
SP26	B3	N19・20	円形
SP27	B3	N19	円形
SP28	B3	N19	不整形
SP29	B3	N19	円形
SP30	B3	N19	楕円形
SP31	B3	N19	楕円形
SP32	B3	N19	円形
SP33	B3	N19	円形
SP34	B3	N19	円形
SP35	B3	N19	楕円形
SP36	B3	N19	円形
SP37	B3	N19	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP38	B3	N19	円形
SP39	B3	Q10	円形
SP40	B3	N19	円形
SP41	B3	N19	楕円形
SP42	B3	N19	円形
SP43	B3	N18・19	円形
SP44	B3	N18	楕円形
SP45	B3	N18	円形
SP46	B3	N18	—
SP48	B3	N19	楕円形
SP49	B3	N19	円形
SP50	B3	N19	円形
SP51	B3	N18	楕円形
SP52	B3	N18	円形
SP53	B3	N18	楕円形
SP55	B3	M・N18	円形
SP56	B3	M18	—
SP57	B3	M18・19	楕円形
SP58	B3	M18	不整形楕円形
SP59	B3	M18	円形
SP60	B3	M18	—
SP61	B3	M18	円形
SP62	B3	M18	円形
SP63	B3	M18	円形
SP64	B3	M18	楕円形
SP65	B3	M18	楕円形
SP66	B3	M18	円形
SP67	B3	M18	円形
SP68	B3	M18	円形
SP69	B3	M18	—
SP71	B3	N19・20	円形
SP72	B3	M・N19・20	楕円形
SP73	B3	M19・20	楕円形
SP74	B3	N19	楕円形
SP75	B3	M19	円形
SP76	B3	M・N19	楕円形
SP77	B3	M19	楕円形
SP78	B3	M19	楕円形
SP80	B3	M19	楕円形
SP81	B3	M19	楕円形
SP82	B3	M19	—
SP84	B3	M19	円形
SP85	B3	N19	楕円形
SP86	B3	M19	円形
SP87	B3	M19	楕円形
SP88	B3	M19	不整形楕円形
SP89	B3	M19	円形
SP90	B3	M・N20	円形
SP91	B3	M20	不整形楕円形
SP92	B3	M20	—
SP94	B3	M20	—
SP95	B3	M20	—
SP96	B3	M20	—
SP97	B3	M19・20	楕円形
SP98	B3	M19	円形
SP99	B3	M19	円形
SP100	B3	M19	円形
SP101	B3	M19	円形
SP102	B3	M19	楕円形
SP103	B3	M19	円形
SP104	B3	M19	楕円形
SP105	B3	M19	円形
SP106	B3	M19	楕円形
SP107	B3	M19	円形
SP108	B3	M19	楕円形
SP110	B3	M19	円形
SP111	B3	M19	円形
SP112	B3	M19・20	—
SP113	B3	M20	—
SP117	B3	M19・20	不整形
SP118	B3	M19	楕円形
SP119	B3	M19	楕円形
SP120	B3	M19	楕円形
SP121	B3	M19	円形
SP122	B3	M19	円形
SP123	B3	M19	楕円形
SP124	B3	M19	不整形楕円形
SP125	B3	M19	楕円形
SP126	B3	M19	楕円形
SP127	B3	M18	円形
SP129	B3	M18	円形
SP130	B3	M18	円形
SP132	B3	M19	—
SP133	B3	M19	楕円形
SP134	B3	L19	不整形楕円形
SP135	B3	L19	円形

第 17 表-7

遺構番号	グリッド		平面形
SP136	B3	L19	円形
SP137	B3	L19	楕円形
SP138	B3	L19	円形
SP139	B3	L19	楕円形
SP140	B3	L19	楕円形
SP142	B3	L19	不整楕円形
SP143	B3	L20	円形
SP145	B3	N18・19	楕円形
SP146	B3	N18	円形
SP147	B3	N18	円形
SP148	B3	N18	円形
SP150	B3	N18	円形
SP151	B3	N18	円形
SP152	B3	N・O18	円形
SP153	B3	N18	—
SP154	B3	N19	楕円形
SP155	B3	N20	円形
SP156	B3	N19・20	円形
SP157	B3	O18	—
SP158	B3	N20	楕円形
SP159	B3	N20	楕円形
SP160	B3	M20	—
SP161	B3	M20	—
SP162	B3	N19	円形
SP163	B3	N19	円形
SP164	B3	M19	楕円形
SP165	B3	M19	楕円形
SP166	B3	L19	楕円形
SP167	B3	M19	楕円形
SP168	B3	N20	楕円形
SP169	B3	N20	楕円形
SP170	B3	N20	楕円形
SP171	B3	N20	—
SP172	B3	M・N20	楕円形
SP173	B3	N20	楕円形
SP174	B3	N20	楕円形
SP175	B3	N20	円形
SP177	B3	M20	楕円形
SP178	B3	M19	楕円形
SP180	B3	M・N20	—
SP181	B3	M19	楕円形
SP182	B3	M18	楕円形
SP183	B3	M18	—
SP184	B3	M19	楕円形
SP185	B3	N19	不整楕円形
SP201	B3	M・N14	—
SP202	B3	M15	—
SP203	B3	N15	円形
SP204	B3	N15	円形
SP205	B3	M16	楕円形
SP206	B3	M16	楕円形
SP207	B3	M15	円形
SP208	B3	M15	楕円形
SP209	B3	N15	楕円形
SP210	B3	N15・16	—
SP211	B3	N15・16	楕円形
SP212	B3	N15	—
SP213	B3	N15	円形
SP214	B3	N15	—
SP215	B3	N15	楕円形
SP216	B3	N15	隅丸三角形
SP217	B3	N15	楕円形
SP218	B3	N15	円形
SP219	B3	N15	円形
SP220	B3	N15	円形
SP221	B3	O16	—
SP222	B3	O16	—
SP223	B3	N16	円形
SP224	B3	O16	—
SP225	B3	O15	円形
SP226	B3	O16	円形
SP227	B3	N15・16	—
SP228	B3	N16	円形
SP229	B3	N16	円形
SP230	B3	O15	円形
SP231	B3	O14	楕円形
SP232	B3	O14	楕円形
SP233	B3	O14	円形
SP234	B3	M15・16	楕円形
SP235	B3	M15・16	—
SP236	B3	M・N15	楕円形
SP237	B3	N15・16	円形
SP238	B3	N15	楕円形
SP239	B3	M・N15	円形
SP240	B3	O15	—
SP241	B3	O15	—
SP242	B3	O14	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP243	B3	N14・15	楕円形
SP244	B3	N14	楕円形
SP245	B3	N14	楕円形
SP246	B3	O15	—
SP247	B3	O15	円形
SP248	B3	O14・15	楕円形
SP249	B3	N14・15	楕円形
SP250	B3	N14	円形
SP251	B3	N14	楕円形
SP252	B3	N14	円形
SP253	B3	N14	楕円形
SP254	B3	N14	円形
SP255	B3	N14	楕円形
SP256	B3	N14	楕円形
SP257	B3	M15	円形
SP258	B3	N・O13	楕円形
SP259	B3	N13	不整楕円形
SP260	B3	N14	円形
SP261	B3	N14	円形
SP262	B3	N14	円形
SP263	B3	N15	円形
SP264	B3	N15	—
SP265	B3	N14・15	円形
SP266	B3	N15	円形
SP267	B3	N16	円形
SP268	B3	M・N14・15	—
SP269	B3	M・N14・15	不整楕円形
SP270	B3	M・N14・15	楕円形
SP271	B3	O14	不整楕円形
SP272	B3	N14	円形
SP273	B3	N16	円形
SP274	B3	N16	—
SP275	B3	N16	—
SP276	B3	N16	楕円形
SP277	B3	N16	不整楕円形
SP278	B3	N16	円形
SP279	B3	N16	—
SP280	B3	N16	—
SP281	B3	O15	円形
SP282	B3	N16	—
SP283	B3	N14	楕円形
SP284	B3	O15	円形
SP301	B4	O5	楕円形
SP302	B4	O5	円形
SP303	B4	O5	円形
SP304	B4	O5	円形
SP305	B4	O5	円形
SP306	B4	O5	円形
SP307	B4	O5	楕円形
SP308	B4	O5	円形
SP309	B4	O5	楕円形
SP310	B4	O5	円形
SP311	B4	O5	楕円形
SP313	B4	O5	円形
SP314	B4	O5	円形
SP315	B4	N・O5	円形
SP401	B3	L18	円形
SP402	B3	L19	楕円形
SP403	B3	L19	円形
SP406	B3	L19	円形
SP407	B3	L19	楕円形
SP408	B3	L19	円形
SP409	B3	L19	楕円形
SP410	B3	L19	円形
SP411	B3	L19	楕円形
SP412	B3	L19	円形
SP415	B3	L20	楕円形
SP416	B3	L20	不整楕円形
SP421	B3	L20	円形
SP425	B3	L20	円形
SP426	B3	L18	—
SP427	B3	L20	円形
SP428	B3	L20	楕円形
SP429	B3	L20	円形
SP430	B3	L20	楕円形
SP431	B3	L20	楕円形
SP432	B3	L20	円形
SP433	B3	L20	楕円形
SP434	B3	L20	楕円形
SP435	B3	L20	円形
SP438	B3	L19・20	不整楕円形
SP439	B3	L19	円形
SP440	B3	L19	不整形
SP441	B3	L19	楕円形
SP442	B3	L19	円形
SP443	B3	L19	円形
SP444	B3	L19	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP445	B3	L19	円形
SP446	B3	L19	円形
SP447	B3	L19	円形
SP448	B3	L19	円形
SP449	B3	L19	円形
SP450	B3	L19	円形
SP451	B3	L19	円形
SP452	B3	L19	円形
SP454	B3	L19	楕円形
SP455	B3	L19	楕円形
SP456	B3	L19	—
SP457	B3	L19	楕円形
SP458	B3	L19	楕円形
SP459	B3	L19	—
SP460	B3	L19	隅丸三角形
SP461	B3	L19	—
SP462	B3	L19	楕円形
SP463	B3	L19	円形
SP464	B3	L19	—
SP465	B3	L19	—
SP466	B3	L19・20	楕円形
SP467	B3	K18	円形
SP468	B3	L20	楕円形
SP471	B3	L20	円形
SP472	B3	L20	楕円形
SP473	B3	K・L20	楕円形
SP474	B3	K・L20	—
SP475	B3	L20	楕円形
SP476	B3	L20	楕円形
SP478	B3	L19	楕円形
SP479	B3	L19	円形
SP480	B3	L19	楕円形
SP481	B3	L19	円形
SP482	B3	L19	楕円形
SP483	B3	L19	楕円形
SP485	B3	L19	楕円形
SP486	B3	L19	円形
SP487	B3	L19	円形
SP488	B3	L19	楕円形
SP489	B3	L18	円形
SP490	B3	L18	円形
SP491	B3	L18・19	円形
SP492	B3	L19	楕円形
SP493	B3	L18	円形
SP494	B3	L18・19	円形
SP495	B3	L18	楕円形
SP496	B3	L19	—
SP497	B3	L19	楕円形
SP498	B3	L19	円形
SP499	B3	L19	円形
SP500	B3	L19	楕円形
SP501	B3	L19	円形
SP502	B3	L19	楕円形
SP503	B3	L19	円形
SP505	B3	L19	楕円形
SP506	B3	L19	円形
SP507	B3	L19・20	円形
SP508	B3	L19・20	円形
SP509	B3	L20	楕円形
SP511	B3	K・L20	不整形
SP512	B3	K・L20	不整形
SP513	B3	K20	円形
SP514	B3	K20	楕円形
SP515	B3	K20	不整楕円形
SP516	B3	K20	楕円形
SP517	B3	K20	円形
SP518	B3	K20	円形
SP519	B3	K・L20	楕円形
SP520	B3	K20	楕円形
SP521	B3	K・L19・20	円形
SP522	B3	K・L19	不整楕円形
SP523	B3	K・L19	楕円形
SP524	B3	K19	円形
SP528	B3	K18	円形
SP529	B3	K18	楕円形
SP530	B3	K18	楕円形
SP531	B3	K18	円形
SP532	B3	K18・19	円形
SP534	B3	K・L19	円形
SP535	B3	K・L19	楕円形
SP536	B3	K19	楕円形
SP537	B3	K・L19	—
SP538	B3	K19	円形
SP539	B3	K19	楕円形
SP540	B3	K19	円形
SP541	B3	K19	円形
SP542	B3	K19	円形

第 17 表-8

遺構番号	グリッド		平面形
SP543	B3	K19	不整楕円形
SP545	B3	K・L19	不整形
SP546	B3	K・L19	円形
SP547	B3	K・L19	円形
SP548	B3	K19	—
SP549	B3	K19	楕円形
SP551	B3	K19	楕円形
SP552	B3	K19	円形
SP553	B3	K19・20	楕円形
SP554	B3	K19・20	楕円形
SP555	B3	K20	円形
SP556	B3	K18	—
SP557	B3	K20	円形
SP558	B3	K20	隅丸方形
SP559	B3	K20	—
SP560	B3	K20	楕円形
SP561	B3	K20	円形
SP563	B3	K20	円形
SP565	B3	K20	円形
SP567	B3	K20	円形
SP568	B3	K20	楕円形
SP569	B3	K19・20	楕円形
SP571	B3	K19	円形
SP572	B3	K19	円形
SP576	B3	K19	—
SP579	B3	K19	楕円形
SP580	B3	K19	楕円形
SP581	B3	K19	楕円形
SP583	B3	K19	不整楕円形
SP585	B3	K19	円形
SP586	B3	K19	円形
SP587	B3	K19	不整円形
SP588	B3	K19	—
SP589	B3	K19	—
SP590	B3	K19	楕円形
SP591	B3	K19	楕円形
SP592	B3	K19	楕円形
SP593	B3	K19	円形
SP596	B3	K19	円形
SP597	B3	K19	円形
SP598	B3	K19	不整楕円形
SP599	B3	K19	—
SP600	B3	K19	楕円形
SP601	B3	K19	楕円形
SP602	B3	K18・19	円形
SP603	B3	K18・19	楕円形
SP604	B3	K18・19	—
SP605	B3	K18・19	円形
SP606	B3	K18	不整形
SP607	B3	K18	楕円形
SP608	B3	K18	円形
SP609	B3	K18	円形
SP610	B3	K18	楕円形
SP613	B3	K18	円形
SP614	B3	K18	楕円形
SP615	B3	K18	楕円形
SP616	B3	K18	円形
SP617	B3	K18	円形
SP618	B3	K18	不整円形
SP619	B3	K18	楕円形
SP623	B3	K18・19	不整楕円形
SP624	B3	K19	—
SP625	B3	K19	楕円形
SP626	B3	K19	円形
SP627	B3	K19	楕円形
SP628	B3	K19	不整楕円形
SP629	B3	K19	円形
SP631	B3	K19	不整形
SP632	B3	K19	楕円形
SP636	B3	K19・20	—
SP637	B3	K19	—
SP638	B3	K19	—
SP639	B3	K19	楕円形
SP641	B3	K19	円形
SP643	B3	K19	不整楕円形
SP644	B3	K19	円形
SP645	B3	K19	円形
SP646	B3	K19	円形
SP647	B3	K19	楕円形
SP648	B3	K19	楕円形
SP649	B3	K19	長楕円形
SP651	B3	K19	楕円形
SP652	B3	K19	—
SP653	B3	K19	円形
SP654	B3	K18・19	楕円形
SP655	B3	K18	円形
SP656	B3	K18	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP657	B3	K18	楕円形
SP658	B3	K18	楕円形
SP659	B3	K18	円形
SP660	B3	K18	楕円形
SP661	B3	J・K18	楕円形
SP662	B3	J18	円形
SP664	B3	K18	—
SP665	B3	K19	楕円形
SP666	B3	K19	楕円形
SP667	B3	J19	楕円形
SP668	B3	K19	円形
SP669	B3	K19	不整形
SP675	B3	J19	不整形
SP701	B3	H11	楕円形
SP702	B3	H11	—
SP704	B3	I11	—
SP705	B3	I11	円形
SP706	B3	I11	円形
SP707	B3	I11	—
SP708	B3	I11	楕円形
SP709	B3	I10・11	楕円形
SP710	B3	I10・11	楕円形
SP711	B3	I10	円形
SP712	B3	I10	円形
SP713	B3	J10	円形
SP714	B3	I・J11	楕円形
SP715	B3	I11	楕円形
SP716	B3	I・J11	円形
SP717	B3	I11	円形
SP719	B3	I10	円形
SP720	B3	I10	—
SP721	B3	I10	円形
SP723	B3	I・J10	円形
SP724	B3	I・J10	—
SP725	B3	J10	—
SP726	B3	I10	円形
SP727	B3	I10	円形
SP731	B3	E9	円形
SP733	B3	F9	—
SP734	B3	E・F9	円形
SP735	B3	E9	—
SP736	B3	E9	不整形
SP737	B3	E9	楕円形
SP739	B3	E9	円形
SP740	B3	E9	不整円形
SP743	B3	E9	楕円形
SP744	B3	E9	楕円形
SP745	B3	E9	楕円形
SP746	B3	E9	円形
SP747	B3	E9	円形
SP748	B3	E9	—
SP749	B3	E9	楕円形
SP750	B3	E9	—
SP751	B3	E9	円形
SP752	B3	E9	円形
SP753	B3	E9	楕円形
SP754	B3	E9	円形
SP755	B3	E9	—
SP756	B3	E9	円形
SP757	B3	E9	円形
SP758	B3	E9	円形
SP759	B3	E9	円形
SP760	B3	E10	円形
SP761	B3	E10	円形
SP762	B3	E9	円形
SP763	B3	F9	—
SP764	B3	E9	楕円形
SP765	B3	E9	—
SP766	B3	E9	円形
SP767	B3	E9	円形
SP768	B3	E9	円形
SP769	B3	E9	—
SP770	B3	F9	—
SP771	B3	F11	楕円形
SP772	B3	F11	円形
SP773	B3	F・G11	楕円形
SP774	B3	G11	楕円形
SP775	B3	G11	楕円形
SP776	B3	G11	円形
SP777	B3	G11	楕円形
SP778	B3	G12	—
SP779	B3	G12	円形
SP780	B3	G12	円形
SP782	B3	G12	円形
SP783	B3	G12	—
SP785	B3	G12	円形
SP786	B3	G12	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP787	B3	G12	円形
SP788	B3	G12	円形
SP789	B3	G11・12	楕円形
SP790	B3	G12	楕円形
SP791	B3	G11	不整形
SP792	B3	F・G11	円形
SP793	B3	F11	楕円形
SP794	B3	F11	円形
SP795	B3	F11	円形
SP796	B3	F11	円形
SP797	B3	G11・12	円形
SP798	B3	F・G12	楕円形
SP799	B3	F11・12	—
SP800	B3	F12	楕円形
SP801	B3	F12	楕円形
SP802	B3	G12	円形
SP803	B3	F・G12	円形
SP804	B3	F12	楕円形
SP805	B3	F12	不整楕円形
SP806	B3	F12	楕円形
SP807	B3	F12	楕円形
SP808	B3	F12	円形
SP809	B3	F12	円形
SP810	B3	F12	円形
SP811	B3	F・G12	—
SP812	B3	F・G12	楕円形
SP813	B3	G12	楕円形
SP814	B3	G12	楕円形
SP815	B3	G12	円形
SP816	B3	G12	楕円形
SP818	B3	G12	楕円形
SP819	B3	G12	楕円形
SP820	B3	G12	楕円形
SP821	B3	G12	円形
SP822	B3	G12	円形
SP823	B3	G12	円形
SP824	B3	G12	楕円形
SP825	B3	G12	—
SP826	B3	G12	楕円形
SP827	B3	G12	不整楕円形
SP828	B3	G12	円形
SP829	B3	G12	円形
SP830	B3	G12	円形
SP832	B3	G12	円形
SP833	B3	G12	円形
SP835	B3	G12	円形
SP836	B3	G12	円形
SP837	B3	G12	円形
SP838	B3	G12	楕円形
SP839	B3	G12	円形
SP841	B3	G12	円形
SP842	B3	G12	不整円形
SP843	B3	G12	円形
SP846	B3	G12	楕円形
SP847	B3	F・G12	円形
SP848	B3	F12	不整楕円形
SP850	B3	F12	円形
SP851	B3	F12	不整楕円形
SP852	B3	F12	円形
SP853	B3	F12	楕円形
SP854	B3	F12	楕円形
SP855	B3	F12	—
SP856	B3	F12	楕円形
SP857	B3	F12	円形
SP858	B3	F12	不整楕円形
SP859	B3	F12	不整楕円形
SP861	B3	F12	楕円形
SP862	B3	F12・13	楕円形
SP863	B3	F12・13	円形
SP864	B3	F12・13	不整楕円形
SP865	B3	F12	楕円形
SP866	B3	F12	—
SP867	B3	F12	円形
SP868	B3	F12	不整楕円形
SP869	B3	F12	円形
SP870	B3	F12	楕円形
SP871	B3	F12・13	円形
SP872	B3	F13	円形
SP873	B3	F12	楕円形
SP874	B3	F12	円形
SP875	B3	F12・13	円形
SP877	B3	F12	円形
SP878	B3	F12	楕円形
SP880	B3	G12・13	不整楕円形
SP881	B3	G12	円形
SP882	B3	G12	楕円形
SP883	B3	G12・13	楕円形

第 17 表-9

遺構番号	グリッド		平面形
SP885	B3	G12・13	楕円形
SP886	B3	G12・13	円形
SP887	B3	G13	円形
SP888	B3	G13	円形
SP889	B3	G13	円形
SP890	B3	G13	円形
SP891	B3	G13	楕円形
SP892	B3	G13	不整楕円形
SP893	B3	G13	楕円形
SP894	B3	G13	楕円形
SP895	B3	G13	不整楕円形
SP897	B3	G13	円形
SP898	B3	G13	円形
SP899	B3	G13	楕円形
SP900	B3	G13	円形
SP902	B3	G13	楕円形
SP903	B3	G13	不整円形
SP904	B3	G13	円形
SP905	B3	G13	円形
SP906	B3	F13	円形
SP907	B3	F13	不整楕円形
SP909	B3	F13	楕円形
SP910	B3	F13	不整楕円形
SP912	B3	F13	不整形
SP913	B3	F13	楕円形
SP914	B3	F13	—
SP915	B3	F13	—
SP916	B3	F13	円形
SP917	B3	F13	楕円形
SP919	B3	F13	楕円形
SP920	B3	F13	円形
SP921	B3	F12	—
SP922	B3	F13	円形
SP925	B3	F13	円形
SP927	B3	F13	不整楕円形
SP928	B3	F・G13	不整円形
SP929	B3	G13	円形
SP931	B3	G13	—
SP932	B3	G13	円形
SP933	B3	G13	円形
SP934	B3	F13	円形
SP938	B3	F13	楕円形
SP939	B3	F13	円形
SP940	B3	F13・14	円形
SP941	B3	F14	円形
SP942	B3	F14	円形
SP943	B3	F14	不整楕円形
SP944	B3	F13	円形
SP945	B3	F11	長楕円形
SP946	B3	F11	円形
SP947	B3	G11	円形
SP948	B3	F12	—
SP949	B3	F13	—
SP950	B3	E14	円形
SP951	B3	E14	楕円形
SP952	B3	E14	楕円形
SP953	B3	E14	楕円形
SP954	B3	E14	不整楕円形
SP955	B3	E14	円形
SP956	B3	E13	楕円形
SP957	B3	E13	楕円形
SP958	B3	E13	楕円形
SP959	B3	E13・14	円形
SP960	B3	F13	楕円形
SP961	B3	G13	円形
SP962	B3	G13	円形
SP963	B3	F12	楕円形
SP964	B3	F13	楕円形
SP965	B3	G11	—
SP967	B3	F11	楕円形
SP968	B3	F11	楕円形
SP969	B3	F12	—
SP970	B3	F13	楕円形
SP971	B3	F13	円形
SP972	B3	F12	—
SP974	B3	F13	円形
SP975	B3	F13	楕円形
SP976	B3	G12	不整楕円形
SP977	B3	G12	楕円形
SP978	B3	G12	楕円形
SP979	B3	G12	—
SP980	B3	G12	楕円形
SP984	B4	J3	円形
SP985	B4	J2	円形
SP986	B4	J2	—
SP988	B4	J2	円形
SP989	B4	J2	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP990	B4	J2	楕円形
SP991	B4	J2	—
SP992	B4	J2	楕円形
SP993	B4	J2	円形
SP994	B4	J2	円形
SP995	B4	J2	円形
SP996	B4	J3	円形
SP997	B4	K3	円形
SP998	B4	K3	楕円形
SP999	B4	K3	円形
SP1000	B4	K3	円形
SP1001	B4	K3	不整楕円形
SP1002	B4	K3	楕円形
SP1003	B4	K3	楕円形
SP1004	B4	K3・4	楕円形
SP1005	B4	K4	楕円形
SP1006	B4	K4	円形
SP1007	B4	K4	円形
SP1008	B4	K4	不整円形
SP1009	B4	K3	楕円形
SP1010	B4	K3	円形
SP1011	B4	K3	—
SP1012	B4	K3	円形
SP1013	B4	K3	—
SP1014	B4	K3	円形
SP1015	B4	K3	楕円形
SP1016	B4	K3	楕円形
SP1017	B4	K3	円形
SP1019	B4	K3	円形
SP1020	B4	K4	楕円形
SP1021	B4	L4	—
SP1022	B4	L3	楕円形
SP1023	B4	L3	楕円形
SP1024	B4	L3	楕円形
SP1025	B4	L3	楕円形
SP1027	B4	K3	円形
SP1028	B4	K3	円形
SP1029	B4	K2・3	楕円形
SP1031	B4	K2	不整楕円形
SP1032	B4	K2	楕円形
SP1034	B4	K3	円形
SP1035	B4	K・L3	楕円形
SP1036	B4	L3	円形
SP1037	B4	J2	円形
SP1038	B4	J3	楕円形
SP1039	B4	J4	円形
SP1040	B4	J4	円形
SP1041	B4	K・L3	楕円形
SP1042	B4	K3	円形
SP1043	B4	K3	円形
SP1044	B4	K3	円形
SP1045	B4	K・L2	楕円形
SP1046	B4	K・L2	楕円形
SP1047	B4	K・L2	円形
SP1048	B4	K2	円形
SP1049	B4	K2	楕円形
SP1050	B4	K2	楕円形
SP1051	B4	K2	円形
SP1052	B4	K2	楕円形
SP1053	B4	K2	楕円形
SP1054	B4	K2	円形
SP1055	B4	K2	楕円形
SP1056	B4	K2	円形
SP1057	B4	K3	—
SP1058	B4	L2	楕円形
SP1059	B4	K2	不整円形
SP1060	B4	K2	—
SP1061	B4	L2	楕円形
SP1062	B4	L2	円形
SP1063	B4	L2	楕円形
SP1065	B4	L2	円形
SP1066	B4	L2	楕円形
SP1067	B4	L2	円形
SP1068	B4	L2	円形
SP1069	B4	K2	楕円形
SP1070	B4	K2	円形
SP1072	B4	K2	円形
SP1073	B4	K2	楕円形
SP1074	B4	K2	円形
SP1075	B4	K2	—
SP1078	B4	L2	不整円形
SP1079	B4	K2	不整円形
SP1080	B4	K2	楕円形
SP1081	B4	K2	—
SP1082	B4	K2	円形
SP1083	B4	K・L2	不整楕円形
SP1085	B4	L2	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP1086	B4	L2	円形
SP1087	B4	L2	円形
SP1089	B4	L1	—
SP1090	B4	L1	楕円形
SP1091	B4	L1	不整円形
SP1092	B4	L1	楕円形
SP1093	B4	L1	円形
SP1094	B4	L1	円形
SP1095	B4	L1	楕円形
SP1096	B4	L2	—
SP1097	B4	L2	円形
SP1098	B4	L2	円形
SP1099	B4	L2	円形
SP1100	B4	L2	—
SP1101	B4	L2	円形
SP1102	B4	L1	楕円形
SP1103	B4	L1	円形
SP1104	B4	L1	円形
SP1105	B4	L1	円形
SP1106	B4	L1	円形
SP1107	B4	K2	円形
SP1108	B4	K・L2	円形
SP1109	B4	L2	楕円形
SP1110	B4	L2	円形
SP1111	B4	K2	楕円形
SP1112	B4	K2	楕円形
SP1113	B4	K2	円形
SP1114	B4	K2	楕円形
SP1115	B4	K2	楕円形
SP1116	B4	K2	楕円形
SP1117	B4	K2	楕円形
SP1118	B4	K2	円形
SP1119	B4	K1・2	円形
SP1120	B4	K1	円形
SP1121	B4	L2	楕円形
SP1122	B4	K・L2	楕円形
SP1123	B4	K・L2	—
SP1124	B4	K2	円形
SP1125	B4	K1	円形
SP1126	B4	K1	楕円形
SP1127	B4	K1	楕円形
SP1128	B4	L1	円形
SP1129	B4	L1	楕円形
SP1130	B4	L1	円形
SP1131	B4	L1	不整楕円形
SP1132	B4	L1	楕円形
SP1133	B4	K・L1	楕円形
SP1134	B4	K・L1	不整楕円形
SP1135	B4	K1	円形
SP1136	B4	K1	円形
SP1137	B4	K1	円形
SP1138	B4	K・L1	円形
SP1139	B4	L1	楕円形
SP1140	B4	K・L1	不整円形
SP1141	B4	K1	円形
SP1142	B4	K1	不整楕円形
SP1143	B4	K1	楕円形
SP1144	B4	L2	—
SP1145	B4	L1・2	—
SP1146	B4	L1・2	不整楕円形
SP1147	B4	K1	不整楕円形
SP1148	B4	K1	楕円形
SP1149	B4	K1	不整円形
SP1150	B4	K1	—
SP1151	B4	K1	円形
SP1152	B4	L1	円形
SP1153	B4	L1	楕円形
SP1154	B4	L1	—
SP1155	B4	L1	—
SP1156	B4	L1	楕円形
SP1157	B4	L1	円形
SP1158	B4	L1	楕円形
SP1159	B4	L1	—
SP1160	B4	L1	楕円形
SP1161	B4	L1	—
SP1162	B4	L1	楕円形
SP1163	B4	L1	—
SP1164	B4	L1	円形
SP1165	B4	L1	楕円形
SP1166	B4	K1	円形
SP1167	B4	K1	楕円形
SP1168	B4	K1	円形
SP1169	B4	K・L1	楕円形
SP1170	B4	K1	—
SP1171	B4	K1	不整楕円形
SP1172	B4	L1	—
SP1173	B4	L1	楕円形



第 17 表 -10

遺構番号	グリッド		平面形
SP1174	B4	K1	—
SP1175	B4	K1・2	不整楕円形
SP1176	B4	K2	楕円形
SP1177	B4	K2	楕円形
SP1178	B4	K2	楕円形
SP1179	B4	K2	円形
SP1180	B4	K2	円形
SP1181	B4	K2	楕円形
SP1182	B4	K2	不整楕円形
SP1183	B4	K2	円形
SP1184	B4	K1	円形
SP1185	B4	K1	円形
SP1186	B4	K1	楕円形
SP1187	B4	K1	円形
SP1188	B4	K2	円形
SP1189	B4	K1・2	楕円形
SP1190	B4	K1	円形
SP1191	B4	K1	円形
SP1192	B4	K1	円形
SP1193	B3	L20	不整円形
SP1194	B3	L20	円形
SP1195	B3	L20	楕円形
SP1196	B3	L20	不整楕円形
SP1197	B3	L20	楕円形
SP1198	B3	L20	楕円形
SP1199	B3	L20	—
SP1200	B3	L20	円形
SP1201	B3	L20	不整楕円形
SP1202	B3	L20	楕円形
SP1203	B3	L20	円形
SP1204	B3	L20	楕円形
SP1205	B3	L20	円形
SP1206	B3	K20	円形
SP1207	B3	L20	円形
SP1208	B3	K20	不整形
SP1209	B4	K1	不整楕円形
SP1210	B4	K1	不整楕円形
SP1211	B4	L1	楕円形
SP1212	B4	K1	円形
SP1213	B4	K1	不整円形
SP1214	B3	L20	—
SP1215	B3	L20	—
SP1216	B4	L1	楕円形
SP1217	B4	L1	不整円形
SP1218	B4	K・L1	—
SP1219	B4	K・L1	楕円形
SP1220	B4	K1	円形
SP1221	B3・4	K20・1	楕円形
SP1222	B3	K・L20	—
SP1223	B3	K・L20	円形
SP1224	B3	L20	隅丸三角形
SP1225	B3	L20	—
SP1226	B3	L20	円形
SP1227	B3	L20	—
SP1228	B3	L20	—
SP1229	B3	L20	円形
SP1230	B3	L20	楕円形
SP1231	B3	L20	円形
SP1232	B3	L20	円形
SP1233	B3	L20	楕円形
SP1234	B3	K20	円形
SP1235	B3	K20	楕円形
SP1236	B3	K20	楕円形
SP1237	B4	K・L1	円形
SP1238	B4	K・L1	円形
SP1239	B4	K・L1	円形
SP1240	B4	K・L1	—
SP1241	B4	K1	楕円形
SP1242	B4	K1	—
SP1243	B4	K1	円形
SP1244	B4	L1	円形
SP1245	B4	L1	楕円形
SP1246	B4	K・L1	楕円形
SP1247	B4	L2	不整楕円形
SP1248	B4	L2	—
SP1249	B4	L2	円形
SP1250	B4	L2	楕円形
SP1251	B4	L2	円形
SP1252	B4	K・L2	楕円形
SP1253	B4	K2	円形
SP1254	B4	K2	円形
SP1255	B4	K2	不整円形
SP1256	B4	K2	不整円形
SP1257	B4	K1	楕円形
SP1258	B4	K1	円形
SP1259	B4	K1	—
SP1260	B4	K1	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP1261	B4	K1	円形
SP1262	B4	K1	円形
SP1263	B4	K1	円形
SP1264	B4	K1	不整楕円形
SP1265	B4	K1	円形
SP1266	B4	K1	楕円形
SP1267	B4	K1	不整楕円形
SP1268	B4	K1	楕円形
SP1269	B4	K1	楕円形
SP1270	B4	K1	円形
SP1271	B4	K1	—
SP1272	B4	K1	—
SP1273	B3	K20	楕円形
SP1274	B3	K20	円形
SP1275	B3	K20	円形
SP1276	B3・4	K20・1	円形
SP1277	B3・4	K20・1	—
SP1278	B4	K1	円形
SP1279	B4	K1	円形
SP1280	B4	K1	楕円形
SP1281	B3・4	K20・1	楕円形
SP1282	B3	K20	楕円形
SP1283	B3	K20	円形
SP1284	B3	K20	楕円形
SP1285	B3	K20	円形
SP1286	B3	K20	—
SP1287	B3	K20	—
SP1288	B3	K20	不整楕円形
SP1289	B3	K20	円形
SP1290	B3	K20	不整円形
SP1291	B3	K20	—
SP1292	B3	K20	円形
SP1293	B3	K20	不整楕円形
SP1294	B3	K20	—
SP1295	B3	K20	—
SP1296	B3	K20	—
SP1297	B3	K20	円形
SP1298	B3	K20	楕円形
SP1299	B3	K20	円形
SP1300	B3	K20	—
SP1301	B3	K20	—
SP1302	B3	K20	円形
SP1303	B3	K20	円形
SP1304	B3	K20	不整楕円形
SP1305	B3	K19	楕円形
SP1306	B3	K19	楕円形
SP1307	B3	K・L19	不整楕円形
SP1308	B3	K18	不整楕円形
SP1309	B3	K18	楕円形
SP1310	B3	K18	楕円形
SP1311	B4	K1	円形
SP1312	B3	K19	円形
SP1313	B3	K19	—
SP1314	B3	K19	—
SP1315	B3	K19	円形
SP1316	B3	K19	円形
SP1317	B3	I18	楕円形
SP1318	B3	J18	円形
SP1319	B3	K19	—
SP1320	B3	K19	楕円形
SP1321	B3	K19	円形
SP1322	B3	L20	円形
SP1323	B3	L20	楕円形
SP1324	B3	K20	—
SP1325	B3	K・L19	—
SP1326	B3	K20	楕円形
SP1327	B3	K・L19	円形
SP1328	B3	K20	楕円形
SP1329	B3	K19	—
SP1330	B3	K19	—
SP1331	B3	K19	楕円形
SP1332	B3	K19	楕円形
SP1333	B3	I19	円形
SP1335	B3	J18	不整楕円形
SP1336	B3	J18	円形
SP1338	B3	K18	楕円形
SP1339	B3	K18	楕円形
SP1340	B3	K18	—
SP1341	B3	K18・19	楕円形
SP1342	B3	K18・19	—
SP1343	B3	K19	円形
SP1344	B4	K3	楕円形
SP1345	B4	K3	円形
SP1346	B4	L1	円形
SP1347	B4	K・L1	楕円形
SP1348	B4	K・L1	円形
SP1349	B4	K1・2	—

遺構番号	グリッド		平面形
SP1350	B4	K・L1・2	円形
SP1351	B4	K2	不整楕円形
SP1352	B4	K2	—
SP1353	B4	K2	円形
SP1354	B3・4	L20・1	—
SP1355	B3・4	L20・1	—
SP1356	B4	L1	円形
SP1357	B3	K18	楕円形
SP1358	B3	J18	円形
SP1359	B3	J18	円形
SP1401	B3	F・G13	楕円形
SP1402	B3	F13	—
SP1403	B3	G13	—
SP1404	B3	F・G13	不整円形
SP1405	B3	G13	円形
SP1406	B3	F・G13	楕円形
SP1407	B3	F・G12・13	円形
SP1408	B3	F・G12	円形
SP1409	B3	G12	円形
SP1410	B3	G12	円形
SP1411	B3	G12	楕円形
SP1412	B3	G12	円形
SP1413	B3	G12	円形
SP1414	B3	F15	楕円形
SP1415	B3	F15	楕円形
SP1416	B3	F14・15	楕円形
SP1417	B3	F・G12・13	楕円形
SP1418	B3	I14	円形
SP1419	B3	I14・15	円形
SP1420	B3	I15	—
SP1421	B3	I15	円形
SP1422	B3	F・G12	楕円形
SP1423	B3	F15	円形
SP1424	B3	F14	不整楕円形
SP1425	B3	F13	円形
SP1426	B3	F13	円形
SP1427	B3	F13	円形
SP1428	B3	G12	楕円形
SP1429	B3	F14	円形
SP1430	B3	E17	円形
SP1501	B3	E20	円形
SP1502	B3	E20	円形
SP1503	B3	E20	円形
SP1504	B3	E19・20	円形
SP1505	B3	E20	円形
SP1506	B3	E19	円形
SP1507	B3	E19	楕円形
SP1508	B3	E19	円形
SP1509	B3	E19	楕円形
SP1510	B3	E19	楕円形
SP1511	B3	E19	円形
SP1512	B3	E18	円形
SP1513	B3	E19	円形
SP1514	B3	E19	円形
SP1515	B3	E17	不整円形
SP1516	B3	E17	不整円形
SP1517	B3	E17	円形
SP1518	B3	E17	楕円形
SP1519	B3	E17	円形
SP1520	B3	E19	円形
SP1521	B3	E19	円形
SP1522	B3	E17	楕円形
SP1523	B3	F16	円形
SP1525	B3	E16	円形
SP1526	B3	E16	円形
SP1527	B3	E16	円形
SP1528	B3	E16	楕円形
SP1529	B3	E16	—
SP1530	B3	E16	円形
SP1531	B3	E16	楕円形
SP1532	B3	E16	円形
SP1533	B3	E15	楕円形
SP1534	B3	E15	楕円形
SP1535	B3	E15・16	円形
SP1536	B3	E15・16	円形
SP1537	B3	F16	楕円形
SP1538	B3	F15・16	円形
SP1539	B3	F16	不整楕円形
SP1540	B3	F15	円形
SP1541	B3	F15	円形
SP1542	B3	F15	円形
SP1543	B3	F15	円形
SP1544	B3	F15	楕円形
SP1545	B3	F15	円形
SP1546	B3	E15	楕円形
SP1547	B3	E15	隅丸三角形
SP1548	B3	E15	不整楕円形

第 17 表 -11

遺構番号	グリッド		平面形
SP1549	B3	E15	円形
SP1550	B3	E15	円形
SP1551	B3	E15	楕円形
SP1552	B3	E15	円形
SP1553	B3	E15	円形
SP1554	B3	E15	不整形円形
SP1555	B3	E15	円形
SP1556	B3	F15	円形
SP1557	B3	F15	円形
SP1558	B3	F15	楕円形
SP1559	B3	F15	円形
SP1560	B3	E15	円形
SP1561	B3	E15	楕円形
SP1562	B3	E14	楕円形
SP1563	B3	F14	円形
SP1564	B3	F14	楕円形
SP1565	B3	F14	-
SP1566	B3	F14	楕円形
SP1567	B3	F14	楕円形
SP1568	B3	E14	円形
SP1569	B3	E15	円形
SP1570	B3	F15・16	円形
SP1571	B3	E17	円形
SP1572	B3	F14	不整形楕円形
SP1573	B3	G17	不整形円形
SP1574	B3	G17	円形
SP1575	B3	G17	不整形円形
SP1576	B3	H17	円形
SP1577	B3	H17	不整形円形
SP1578	B3	H17	楕円形
SP1579	B3	H17	円形
SP1580	B3	H17	円形
SP1581	B3	H17	不整形楕円形
SP1582	B3	H17	円形
SP1583	B3	H17	楕円形
SP1584	B3	H17	不整形円形
SP1585	B3	H17	不整形円形
SP1586	B3	H17	楕円形
SP1587	B3	H17	楕円形
SP1588	B3	H17	楕円形
SP1589	B3	G17	円形
SP1590	B3	G17	円形
SP1592	B3	G17	隅丸方形
SP1593	B3	G17	円形
SP1594	B3	G16・17	円形
SP1595	B3	G16・17	円形
SP1596	B3	G16	円形
SP1597	B3	G16	楕円形
SP1598	B3	G16	不整形円形
SP1599	B3	G・H16	楕円形
SP1600	B3	H16	円形
SP1602	B3	H17	円形
SP1603	B3	H17	円形
SP1604	B3	H16・17	円形
SP1605	B3	H16・17	円形
SP1606	B3	H17	楕円形
SP1607	B3	H17	円形
SP1608	B3	I16	楕円形
SP1609	B3	H・I16	不整形楕円形
SP1610	B3	I16	円形
SP1611	B3	H16	楕円形
SP1612	B3	H16	円形
SP1613	B3	H16	円形
SP1614	B3	H16	円形
SP1615	B3	H16	円形
SP1616	B3	H16	円形
SP1617	B3	H16	円形
SP1618	B3	H16	円形
SP1619	B3	H16	円形
SP1620	B3	H16	楕円形
SP1621	B3	G・H16	円形
SP1622	B3	G16	円形
SP1623	B3	G16	不整形楕円形
SP1624	B3	G16	不整形
SP1625	B3	G16	円形
SP1626	B3	G・H16	円形
SP1627	B3	H16	円形
SP1628	B3	H16	円形
SP1629	B3	H16	円形
SP1630	B3	H16	楕円形
SP1631	B3	H16	不整形楕円形
SP1632	B3	H16	楕円形
SP1633	B3	I16	楕円形
SP1634	B3	I16	楕円形
SP1635	B3	I16	円形
SP1636	B3	I16	楕円形
SP1637	B3	I16	円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP1638	B3	I16	円形
SP1639	B3	I16	円形
SP1640	B3	I16	楕円形
SP1641	B3	I16	不整形楕円形
SP1642	B3	I16	楕円形
SP1643	B3	I16	楕円形
SP1644	B3	H16	円形
SP1645	B3	H16	楕円形
SP1646	B3	H16	円形
SP1647	B3	H16	円形
SP1649	B3	F16	円形
SP1650	B3	I16	円形
SP1651	B3	I16	不整形円形
SP1652	B3	H16	円形
SP1653	B3	H16	円形
SP1654	B3	H17	楕円形
SP1655	B3	G18	円形
SP1656	B3	I16	円形
SP1657	B3	I16	円形
SP1658	B3	E20	円形
SP1659	B3	D20	円形
SP1660	B3	D・E20	円形
SP1661	B3	D20	楕円形
SP1662	B3	D・E19	円形
SP1667	B3	E15	円形
SP1668	B3	E15	円形
SP1669	B3	E・F15	円形
SP1670	B3	F14	円形
SP1671	B3	E20	円形
SP1673	B3	H16	楕円形
SP1674	B3	H16	楕円形
SP1675	B3	H15・16	楕円形
SP1676	B3	G15	不整形円形
SP1677	B3	G15	円形
SP1678	B3	G15	円形
SP1679	B3	G15	円形
SP1680	B3	G15	楕円形
SP1681	B3	G15	不整形円形
SP1682	B3	G15	円形
SP1683	B3	F・G15	不整形楕円形
SP1684	B3	F15	円形
SP1685	B3	H15	楕円形
SP1686	B3	H15	円形
SP1687	B3	H15	円形
SP1688	B3	H15	円形
SP1689	B3	H15	楕円形
SP1690	B3	H15	楕円形
SP1691	B3	H15	円形
SP1692	B3	H15	円形
SP1693	B3	H15	不整形楕円形
SP1694	B3	H15	楕円形
SP1695	B3	H15	円形
SP1696	B3	H15	不整形
SP1697	B3	H15	円形
SP1698	B3	H15	円形
SP1699	B3	H15	楕円形
SP1700	B3	H15	不整形楕円形
SP1701	B3	H15	楕円形
SP1702	B3	E19	楕円形
SP1703	B3	E・F14	不整形円形
SP1704	B3	H15	-
SP1705	B3	H15	円形
SP1706	B3	H15	円形
SP1707	B3	E15	楕円形
SP1708	B3	F16	円形
SP1709	B3	H15	円形
SP1710	B3	G15	楕円形
SP1711	B3	G15	円形
SP1712	B3	G15	円形
SP1713	B3	G15	不整形円形
SP1714	B3	F15	円形
SP1718	B3	F15	楕円形
SP1719	B3	G15	円形
SP1720	B3	G15	楕円形
SP1721	B3	G15	円形
SP1722	B3	F15	楕円形
SP1723	B3	F14	不整形円形
SP1724	B3	G14	不整形楕円形
SP1725	B3	F15	円形
SP1726	B3	F14・15	円形
SP1727	B3	G15	円形
SP1728	B3	G15	円形
SP1729	B3	G14	円形
SP1730	B3	G14・15	楕円形
SP1731	B3	H17	円形
SP1732	B3	H15・16	円形
SP1733	B3	F14	楕円形

遺構番号	グリッド		平面形
SP1734	B3	F・G14	不整形円形
SP1735	B3	G14	円形
SP1736	B3	G14	円形
SP1737	B3	G14	円形
SP1738	B3	G14	隅丸長方形
SP1739	B3	G14	不整形
SP1740	B3	H16	不整形円形
SP1741	B3	G15	-
SP1742	B3	G14	円形
SP1743	B3	G14	円形
SP1744	B3	G14	円形
SP1745	B3	G14	円形
SP1746	B3	G14	円形
SP1747	B3	G14	円形
SP1748	B3	H14	円形
SP1749	B3	H14	不整形円形
SP1750	B3	H14	円形
SP1751	B3	H14	楕円形
SP1752	B3	H14	円形
SP1753	B3	H14	円形
SP1754	B3	H15	円形
SP1755	B3	H14・15	-
SP1756	B3	H15	円形
SP1757	B3	H15	楕円形
SP1758	B3	H15	円形
SP1760	B3	H15	楕円形
SP1761	B3	H15	楕円形
SP1762	B3	H14・15	不整形楕円形
SP1763	B3	H14	円形
SP1764	B3	H14	楕円形
SP1765	B3	H14	円形
SP1766	B3	H14	円形
SP1767	B3	H14	円形
SP1768	B3	H15	円形
SP1769	B3	H14	-
SP1770	B3	H14	円形
SP1771	B3	H15	円形
SP1772	B3	H15	楕円形
SP1773	B3	H・I15	円形
SP1774	B3	I15	楕円形
SP1775	B3	I15	円形
SP1776	B3	I15	円形
SP1777	B3	I15	円形
SP1778	B3	I15	円形
SP1779	B3	I15	円形
SP1780	B3	H14	円形
SP1781	B3	I14	円形
SP1782	B3	I14	楕円形
SP1783	B3	H・I14	円形
SP1784	B3	I14	円形
SP1785	B3	I14	円形
SP1786	B3	I14	円形
SP1787	B3	I14	円形
SP1788	B3	I14	不整形楕円形
SP1789	B3	I14	円形
SP1790	B3	I14	円形
SP1791	B3	I14	円形
SP1792	B3	I14	円形
SP1793	B3	I14	-
SP1794	B3	I14	楕円形
SP1795	B3	I14	円形
SP1796	B3	I14・15	楕円形
SP1797	B3	I14・15	楕円形
SP1798	B3	I14	円形
SP1799	B3	I15	円形
SP1800	B3	I15	円形
SP1801	B3	I15	-
SP1802	B3	I15	楕円形
SP1803	B3	I15	-
SP1804	B3	I15	楕円形
SP1805	B3	I15	不整形楕円形
SP1806	B3	I15	-
SP1807	B3	I15	不整形円形
SP1808	B3	I15	円形
SP1809	B3	I15	不整形楕円形
SP1810	B3	I15	円形
SP1811	B3	I15	楕円形
SP1812	B3	I15	不整形円形
SP1813	B3	I15	楕円形
SP1814	B3	I15	楕円形
SP1815	B3	I15	円形
SP1816	B3	I15	楕円形
SP1817	B3	I14・15	楕円形
SP1818	B3	I14	円形
SP1819	B3	I14	円形
SP1820	B3	I14	楕円形
SP1821	B3	I14	-

第 17 表 -12

遺構番号	グリッド		平面形
SP1822	B3	I14	楕円形
SP1823	B3	I・J14	円形
SP1824	B3	I14	円形
SP1825	B3	I14	—
SP1826	B3	I14	楕円形
SP1827	B3	I14・15	円形
SP1828	B3	I・J14・15	—
SP1829	B3	I・J14	—
SP1830	B3	J14・15	円形
SP1831	B3	J14	円形
SP1832	B3	J14	円形
SP1833	B3	I14	円形
SP1834	B3	I・J14	楕円形
SP1835	B3	J14	円形
SP1836	B3	J14	楕円形
SP1837	B3	J14	円形
SP1838	B3	J14	楕円形
SP1839	B3	J14	円形
SP1840	B3	J・K14	円形
SP1841	B3	J14	楕円形
SP1842	B3	J15	円形
SP1843	B3	J15	円形
SP1844	B3	J15	楕円形
SP1845	B3	J15	円形
SP1846	B3	J15	—
SP1847	B3	J15	楕円形
SP1848	B3	J15	—
SP1849	B3	J15	円形
SP1850	B3	J15	円形
SP1851	B3	G14	楕円形
SP1852	B3	J14	—
SP1853	B3	J14・15	楕円形
SP1854	B3	J14・15	円形
SP1855	B3	H14	円形
SP1856	B3	I14・15	楕円形
SP1857	B3	G14	—
SP1858	B3	D19	円形
SP1859	B3	D19	楕円形
SP1860	B3	F15	円形
SP1901	B3	K19	—
SP1902	B4	K1	楕円形
SP1903	B3	L20	楕円形
SP1904	B3	L18	楕円形
SP1906	B4	L1	円形
SP1907	B3	L20	円形
SP1908	B3	L20	楕円形
SP1909	B3	L20	円形
SP1910	B4	K2	楕円形
SP1911	B4	K1・2	円形
SP1912	B4	K1	円形
SP1913	B4	K1	不整形円形
SP1914	B4	L1	円形
SP1915	B4	L1	—
SP1916	B4	K1	不整形楕円形
SP1917	B4	K1	—
SP1919	B4	K1	円形
SP1920	B4	K2	—
SP1921	B4	K2	不整形円形
SP1922	B4	L2	—
SP1923	B4	K1	—
SP1924	B4	K1	—
SP1925	B4	K1	—
SP1926	B4	K1	—
SP1927	B4	L1	—
SP1928	B4	K1	不整形楕円形
SP1929	B3	L20	—
SP1930	B3	L20	—
SP1931	B3	L20	楕円形
SP1932	B3	L20	円形
SP1933	B3	K18	円形
SP1934	B3	K18	楕円形
SP1935	B3	L18	楕円形
SP1936	B3	L18	不整形楕円形
SP1937	B3	K18	—
SP1938	B3	K18	—
SP1939	B3	K18	—
SP1940	B3	K18	楕円形
SP1941	B3	K18・19	楕円形
SP1942	B3	K18・19	楕円形
SP1943	B3	K20	—
SP1944	B3・4	K20・1	—
SP1945	B3・4	L20・1	楕円形
SP1946	B3	K18	円形
SP1947	B3	L18	円形
SP1948	B3	K18	円形
SP1949	B3	J18	円形

HA④地区(油分箇所)

遺構番号	グリッド		平面形
SK1	B3	G・H8	隅丸長方形
SK2	B3	G8	楕円形
SK3	B3	H8	不整形楕円形
SK4	B3	G7・8	楕円形
SK5	B3	G7・8	—
SK6	B3	G8	—
SK7	B3	G8	—
SK8	B3	H8	円形
SK11	B3	N・O17	楕円形
SK12	B3	N17	楕円形
SK13	B3	O17	楕円形
SK14	B3	N17	不整形楕円形
P1	B3	G・H8	楕円形
P2	B3	H8	—
P3	B3	G8	—
P4	B3	G8	楕円形
P5	B3	G8	楕円形
P6	B3	G8	楕円形
P7	B3	G8	楕円形
P8	B3	G8	楕円形
P9	B3	G8	楕円形
P10	B3	G8	楕円形
P11	B3	G8	楕円形
P12	B3	G8	楕円形
P13	B3	G・H8	円形
P14	B3	G8	楕円形
P15	B3	G8	—
P16	B3	G8	楕円形
P21	B3	N18	楕円形
P22	B3	N18	楕円形
P23	B3	N18	楕円形
P24	B3	N18	—
P25	B3	N18	楕円形
P26	B3	N18	楕円形
P27	B3	N18	不整形楕円形
P28	B3	N18	楕円形
P29	B3	N18	円形
P30	B3	N18	楕円形
P31	B3	N17・18	楕円形
P32	B3	N18	楕円形
P33	B3	N17	円形
P34	B3	N18	楕円形
P35	B3	N18	楕円形
P36	B3	N・O18	円形
P37	B3	O18	楕円形
P38	B3	N17	円形
P39	B3	N17	—
P40	B3	N17	円形
P41	B3	O17	楕円形
P42	B3	O17	円形
P43	B3	O17	楕円形
P44	B3	N17・18	—
P45	B3	O17・18	円形
P46	B3	O17	—
P47	B3	O17	楕円形
P48	B3	O17	—
P49	B3	O17	楕円形
P50	B3	O17	円形
P51	B3	O17	—
P52	B3	O17	楕円形
P53	B3	O17	円形
P54	B3	O17	—
P55	B3	O17	楕円形
P56	B3	O16	—
P57	B3	O16	円形
P58	B3	O16	円形
P59	B3	O16	—
P60	B3	N16	円形
P61	B3	N16	隅丸長方形
P62	B3	N16	—
P63	B3	N16	円形
P64	B3	N17	楕円形
P65	B3	N17	楕円形
P66	B3	N17	楕円形
P67	B3	N17	楕円形
P68	B3	N17	楕円形
P69	B3	N17	—
P70	B3	N17	不整形
P71	B3	N17・18	楕円形
P72	B3	N17・18	長楕円形
P73	B3	N17・18	楕円形
P74	B3	N17	円形
P75	B3	N17・18	—
P76	B3	N17	楕円形
P77	B3	N・O16・17	不整形楕円形
P78	B3	N・O17	—

遺構番号	グリッド		平面形
P79	B3	O17	—
P80	B3	O17	—
P81	B3	N・O17	円形
P82	B3	N・O17・18	楕円形
P83	B3	N17	楕円形
P84	B3	N・O17	円形
P85	B3	O17	円形
P86	B3	O17	楕円形
P87	B3	N17	—
P88	B3	N・O17	円形
P89	B3	N・O17	円形
P90	B3	N17	円形
P91	B3	N17	—
P92	B3	N17	楕円形
P93	B3	N17	楕円形
P94	B3	N・O17	—
P95	B3	O17	—
P96	B3	O16・17	—
P97	B3	O16	—
P98	B3	O16	—
P99	B3	O16	—
P100	B3	O17	楕円形
P101	B3	O17	楕円形
P102	B3	O17	楕円形
P103	B3	O16	楕円形
P104	B3	O17	円形
P105	B3	O17	円形
P106	B3	N・O17	楕円形
P107	B3	N17	楕円形
P108	B3	N17	円形
P109	B3	O17	楕円形
P110	B3	O17	楕円形
P111	B3	N17	—
P112	B3	N17	—
P113	B3	N17	—
P114	B3	N17	円形
P115	B3	N16	楕円形
P116	B3	N16	円形
P117	B3	N17	楕円形
P118	B3	N17	円形
P119	B3	N17	円形
P120	B3	N16・17	円形
P131	B3	M11	楕円形
P132	B3	N・O11	楕円形

## 第5節 近代以前の出土遺物

近現代の出土遺物の項で掲載した以外の遺物で32種 59,391点を数える(第18表)。本土産近代陶磁器、沖縄産陶器、陶質土器、瓦質土器、本土産近世陶磁器、中国産磁器(染付・青磁・白磁)、その他輸入陶磁器(色絵・瑠璃釉・青磁染付・鉄釉染付・鉄釉磁器・翡翠釉・三彩・無釉陶器・黒釉陶器・タイ産鉄絵)、褐釉陶器、半練土器、カムイヤキ、土製品、簪、銭貨、円盤状製品、硯、煙管、石板、滑石・石製品、羽口・鉄滓・焼土、埴、鉄製品、貝塚時代の石器、貝製品、骨製品、グスク土器、貝塚時代後期土器が出土した。第18表から全体の出土量として最も多くを占めるのは沖縄産無釉陶器(13,640点)、沖縄産施釉陶器(10,491点)、本土産近代磁器(7,104点)など近世終盤から近代の食膳容器・貯蔵容器・調理容器で遺構の項で述べた、1899年以降から戦前まで存続した平安山集落内の屋敷の存在を裏付けるものとなっている。また、本土産近世陶磁器(1,048点)や中国産磁器(染付2,507点・青磁2,802点・白磁1,065点)、褐釉陶器1,779点、貝塚時代の人工品やグスク土器・貝塚時代後期土器(4,056点)の出土量はこれまで調査してきたキャンプ桑江北側の遺跡の中でも最も多く、貝塚時代後期～近代にかけて人々が生活していた可能性が想定できた。

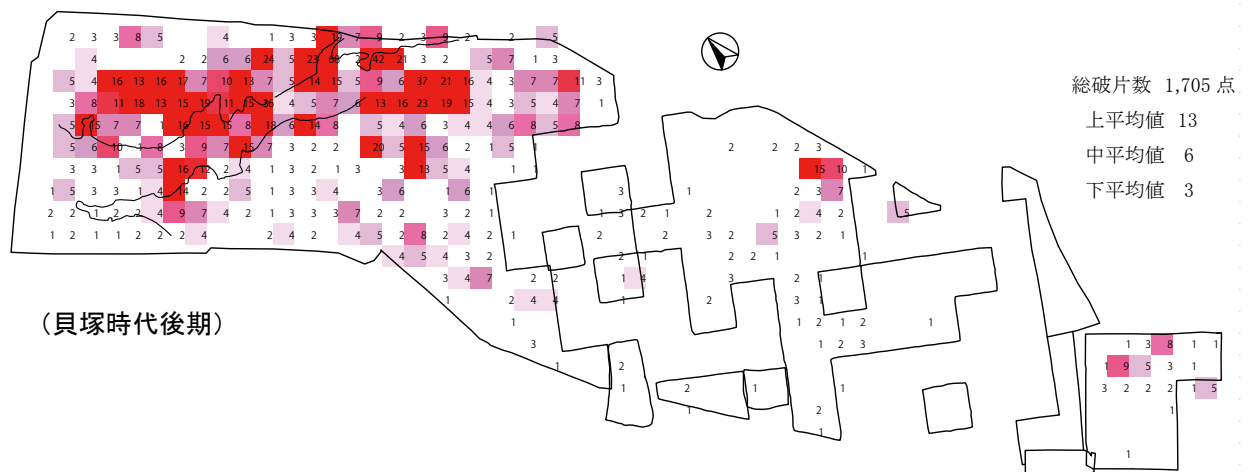
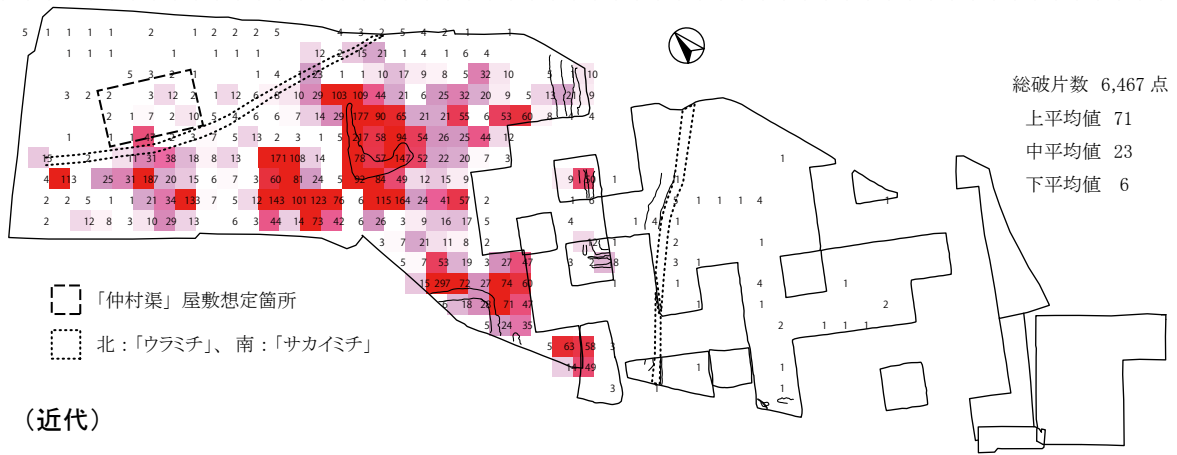
層別に見るとHA③②④地区ではⅡ層からの遺物出土量が最も多いが、Ⅱ層の遺物は新旧入り混じっており、本来ならばⅢ層以下から出土すべき遺物も多数出土している。これについて層序の項では後世にⅢ層以下の遺物包含層を激しく攪乱・削平したことによるものであり、Ⅲ層以下の遺構が一部にしか残っていない理由も同じと想定している。これらの事を踏まえ出土遺物からのアプローチとして、遺物ごとに分類・集計し分布図を作成することで時代ごとの平面的変遷を検討した(第42図)。なお、各期遺物の平面分布図の検討については第V章第3節で再掲する。また、陶磁器の接合状況をプロットする(第43図)ことで、攪乱・削平の状況を知ろうとした。その結果、当地は近世以前の遺構は近世以降に幾度となく行われた、人為的な土地改変の影響によりほとんど残っていないが、貝塚時代から現代まで生活の場であったことが想定できた。

第18表 遺物出土量

時代区分	近代											近世～グスク時代											貝塚時代後期			合計							
	瓦	瓦・二次製品	本土産磁器	本土産陶器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	その他の不明陶器	円盤状製品	瓦質土器	本土産磁器	本土産陶器	染付	青磁	白磁	その他の輸入陶磁器	褐釉陶器・半練土器	カムイヤキ	土製品	簪	銭貨	硯	煙管	石板	滑石・石製品		羽口・鉄滓・埴壁・焼土	埴	鉄製品	土器	石器	貝製品	骨製品
HA③	I	437		209	7	428	632	178	3	19	5	8	10	62	49	24	3	19	13	3				3			31		240	22	19		2424
	II	534	7	2548	124	3624	5998	1284	24	109	63	191	202	480	313	197	34	346	47	4	2	11	3	12	2	1	262	2	1625	112	117	3	18281
	II遺構	2505	3		45						69	7		265	157	70	8	153	13	2	2	2	6		3	1				47			3358
	III			10	1	55							6													13		224		6		318	
	III遺構	1					62	25		1				27	9	11	2		7	2										1		150	
	III下			11	2							4	4													18				14		53	
	III下遺構						41	2			2			3		18	3		8											5		82	
	IV			37	1	58	136	26		4		3	7	14	4	4	1	2											36	4	5		343
	不明					14	17	10	1			1			6				1										17				67
	小計	3477	10	2815	180	4179	6886	1525	28	202	77	207	229	857	532	324	51	531	83	9	4	13	9	18	5	2	324	2	2142	191	161	3	25076
HA②	I	364	1	549	13	369	478	81	1	37		12	17	83	49	40	5	26	1							5		52	2	9		2197	
	II上	231		1064	11	945	865	296	9	59	2	22	30	139	81	51	13	30	4	1	1	3							36	7	6		3874
	II	2007	7	2414	1	4554	4376	1648	68	270	65	134	276	1022	816	436	45	518	15	9	18	22	5	16	1	1	87	1	1092	67	146	5	20142
	II遺構	7			28						1				5	3	1																45
	III			15		81		1	29	1	2	11	11	15													67		132		18	1	417
	III遺構	3					82				3				43	90	46	3				3	3							7		283	
	IV																												19		2		21
不明	10					3	24				1		4	1		1												1				45	
小計	2622	8	4042	53	5949	5805	2078	79	370	70	179	338	1303	1041	577	67	607	20	10	19	25	9	21	1	1	163	1	1296	83	181	6	27024	
HA④	I	47		17	2	2	52	2	1	1	2	1	10	20	5	1	12	1		1									9	3	3		192
	II	1862		115	7	343	434	64		7	17	31	31	147	416	82	12	284	9	1	1	6	1	2			6		164	9	9		4060
	II遺構	315		94	1		244			2	7	6			48	118	8					1	1						5				902
	II～III	2					16					1		2													5					56	
	III遺構	3		1		14	29			2	1	4		38	102	13						1						9		20	30		338
	III	10		20			162	20		2	1	7	21	90	532	51	5	207		1	1	4	2					1	226	14			1377
	IV						3	1						3	6	2		2		1									31	3	7	1*	59
不明					3	3	31							11		1	1										1					51	
小計	2239		247	10	362	943	118	4	18	29	41	53	338	1205	161	38	638	10	3	3	12	2	4	1		20	1	2	430	54	49	1	7036
HA①	I	1				1	3							5	3			1	1									15	2	1		33	
	II																											3	1			10	
	III																											163		3		173	
	III遺構					1																											14
	III下													2																			2
	III下遺構						2								6	3			1											2			14
IV																												7		2		9	
小計	1				1	6					1		9	24	3			3	5		1							188	5	6		255	
合計	8339	18	7104	243	10491	13640	3721	111	590	176	428	620	2507	2802	1065	156	1779	118	22	27	50	20	45	7	3	507	4	2	4056	333	397	10	59391

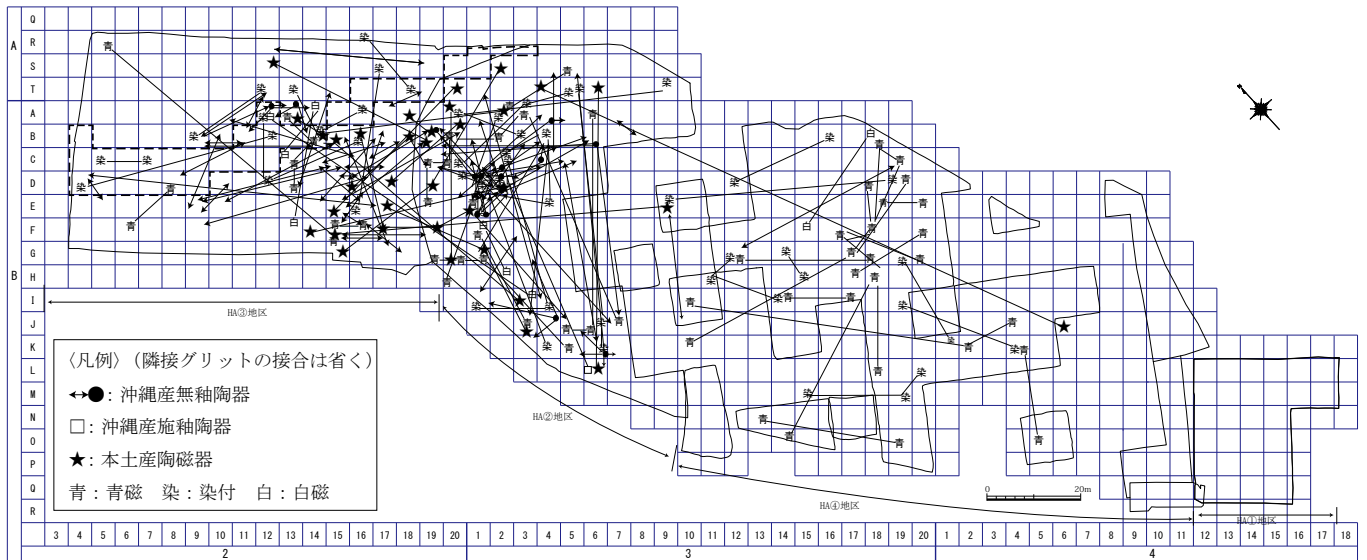
II→II層上、III→III層下を含む

\*V層出土



※色凡例：下平均値→上平均値：淡→濃

第 42 図 遺物分布変遷



第 43 図 遺物接合状況 平面分布

### (1) 本土産磁器 (近代)

明治時代以降西洋技術を取り入れた製陶技術の近代化による製品である。総数 7,104 点の出土があり、地区別では HA ③ 2,815 点・HA ② 4,042 点・HA ④ 247 点で、HA ①での出土はなかった。器種別では小碗が最も多く 2,967 点 (42%)、次いで中碗 1,772 点 (25%)、皿 933 (13%) (底部数と同一部位での文様の重なりのあるものを最少個体数とすると、小碗 1,278 個体、中碗 415 個体、皿 434 個体)、他に杯・鉢・急須・蓋物・香炉・火入れ・洋食器・玩具等が出土した (第 22 表)。

器種ごとの特徴として、小碗は器形から用途 (茶飲み、湯飲み) の判別が可能なものもあり、茶飲み碗 128 点中 1 例ではあるが同じ文様が手描きからゴム判、呉須からコバルト、瀬戸・美濃から砥部への変遷が確認できた。中碗は外反碗が 72% を占めた。皿では口径が 11cm 前後のものより 13cm 前後のものがやや多く得られた。皿は本土産近代磁器では 13% の出土率だが沖縄産施釉陶器では 2% の出土率しかなく、また、本土産近代陶磁器・沖縄産施釉陶器とも鉢は非常に少なかった。当時の食文化を窺う上で興味深い例であると思われる。急須 (身) は大中小があり各 12・39・22 個体であった。いずれの底部にも加熱の痕跡は見られなかったため、茶葉を煮出す行為はしていないようである。なお、沖縄産施釉陶器の急須の底部には加熱の痕が確認されている。蓋はほとんどが小型で急須の蓋か壺の蓋か判然としなかった。撮みの有 (I) 無 (II)、脚の有 (A) 無 (B) として分類し、I B については縁の広い方を a とした。少数ではあるが I A : 6 個体、I B : 8 個体、I Ba : 4 個体、II A : 3 個体、II B : 1 個体が確認できた。香炉は 16 個体が確認できた。

施文技法としては銅版転写 (28%) がやや多く、型紙刷り (25%) クロム青磁 (10%) 手描き (8%) ゴム判 (8%) 色絵 (4%)・国民食器 (3%) 吹き絵 (3%) 盛り絵 (1%) が確認できた<sup>註1</sup> (第 23 表)。型紙刷りは中碗、銅版転写・ゴム判・クロム青磁・国民食器では小碗が多かった。砥部産の中碗は「伊予ボール」と呼ばれ南方向け大量に輸出された<sup>註2</sup>。そのため生産量も高く沖縄でも流通した事が窺えるが、反面、小碗の沖縄への流通は少なかったため、瀬戸・美濃産の小碗が普及したのだろうか。皿は型紙刷りや銅版転写が多く、口径 11 ~ 13cm 前後は型紙刷り多く、口径 11 ~ 15cm 前後では銅版転写が大半を占めた (第 23 表)。成形には轆轤 (動力含む) や石膏を使った型作り (押し型・鑄込等) が用いられており、いずれの施文技法でも確認できた。また、ほとんどの碗類の畳付けは釉葉が掻き落とされ、釉が残るのは蛇の目凹形高台皿のみであった。(肥前では碗の高台外側を釉と一緒に削り込む事はあまり行わない<sup>註3</sup> そうである。)

生産地としては全体の約 65% を瀬戸・美濃が占め、34.6% が肥前系 (砥部産の 21% を含む) で関西系は 1% にも満たなかった (近代陶器では関西系が 75% を占める) (第 19 表)。

出土量としては各地区とも II 層が最多であったが、HA ③・②では屋敷跡に集中しており、特に蒲伊礼小と祝女殿内から多く出土した (第 44 図)。屋敷別に見ると大屋、蒲伊礼小、祝女殿内小では肥前系と瀬戸・美濃産の割合に大きな差は見られず、他の屋敷では肥前系の 2 ~ 3 倍近く瀬戸・美濃産が多く出土している (第 24 表)。なお、同一物が複数個得られることも多かったが、同じ場所からの出土であることは少なく、纏まって利用されたかは不明である。以下、技法ごとに概略し、主な遺物については第 25 表に詳細と第 45 ~ 51 図、図版 26 ~ 32 に示す。

註 1 : 技法の併用も多く確認できたが、出現時期の新しい技法に古い技法が併用されると想定し、新しい技法側で割合を算出した。

註 2 : 伊予陶磁器協同組合『砥部』1977 註 3 : 大橋康二先生、堀内秀樹先生よりご教示頂いた。

第 19 表 産地別出土量

産地 地区	肥前・ 肥前系	肥前系 or 砥部	砥部	瀬戸美濃・ 瀬戸美濃系	関西系
HA ③	500	6	538	1648	17
HA ②	348	11	906	2683	16
HA ④	14	0	61	166	1
合計 (個)	862	17	1505	4497	34
割合 (%)	12.8	0.2	21.7	64.9	0.4

**A. 手描き・色絵・盛り絵 (図 1～24・図 25～32・図 33)**

呉須・コバルト等の青色顔料により手描きされたものである。小碗 237 点、中碗 27 点、杯 46 点、皿 19 点、急須 (身) 141 点等計 523 点で、肥前系 167 点、砥部・砥部系 101 点、瀬戸・美濃産 265 点が確認できた。小碗が多く中でも茶飲み碗が 51 点を占め、筒型と腰折れ型が得られた。後者には 4 種の文様が見られた。図 5～7 は外面に同種の文様を持つが、5 は砥部産でコバルト使用、6 は瀬戸・美濃産で呉須使用、7 は同じく瀬戸・美濃産だがコバルト使用で 5・7 よりも 6 が古手である。この後、砥部では型紙刷りへと遷移する (図 38)。なお、5 の見込みの結び雁金には図柄違いが見られた (5a)。中碗は飯椀の可能性が高く図 11 には蓋が付いたと思われる。小杯や皿は瀬戸・美濃産や関西系が多かった。急須は手描き製品が最も多く、文様に紅葉・桜・巴文・菊水・梅花 (図 18) 等が見られた。中でも鳳凰 (図 19) や雲龍文が多く大中小合わせて 13 個体が確認できた。また、HA ③・②地区を跨いで接合できたものが 3 点あった。蓋は I Ba 型が多く、うち 3 点を図示 (図 20～23) した。いずれも肥前系である。図 24 は I A 型で蓋裏に銘が見えるが詳細不明。

図 25～32 は色絵の碗・杯・皿・蓋である。色絵は小碗 105 点、中碗 15 点、皿 15 点、杯 102 点等計 282 点で、肥前系 38 点、瀬戸・美濃産 213 点であった。文様のデザインは花鳥風月に依るものもあったが、小碗や小杯では戦時色の強いものが多く、赤や金色による旭章旗や日章旗、金文字で凱旋記念や紀元節や孝行など、中には「○記念座喜味」等も確認できたが、大半で色が剥落していた。盛り絵は総計 75 点で中碗が多く他に杯・皿・急須があり、瀬戸・美濃産が 75% を占めた。図 33 は急須で二羽の鶴を描く。2 個体が得られた。

**B. 型紙刷り (図 34～67)**

小碗 119 点、中碗 1,253 点、皿 230 点等計 1,641 点で、肥前系 146 点 (8%)、砥部産 1,417 点 (83%)、瀬戸・美濃産 95 点 (5%) が確認できた。小碗では筒型 (図 34) と腰折れ型 (茶飲み) が得られた。腰折れ型の見込みには動物や雁金や結び雁金を描かれていたが手描き同様様々であった (図 36～38)。中碗は蛇の目釉剥ぎの直口碗 (図 39・40) から、いわゆるスキャンマカイとして認識されている外反碗まで数多く出土した。外面 (腰部文含む) と見込みの文様の組み合わせについて分類したところ、外面の地文や腰部に描かれる文様について変遷が窺えた。見込みの文様はある程度決まっているようであるが、直口碗

**第 20 表 型紙文様別 出土個体数**

器形	成形	外面の文様	地文	見込み文様		五弁花		松竹梅		〃 (枝有り)		昆虫		ザク口		動物		蛇の目剥ぎ	合計	図番号
				五足のハマ痕		有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無			
				有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無					
直口碗	亀甲に菊花等		無	無														13	13	39・40
	桜花等	青海波		ヲ蓮弁														1	1	41
	福寿	蛸唐草															3	4	9	42・43
	雪輪窓に菊花	四方禪	三角			1	1												2	—
外反碗	竹笹	鹿の子	無		1	3													4	45
	鶴丸・松竹	網代	竹の子状	3	1	3													7	46
	水仙?	点描	竹の子状			4													4	—
	鶴丸・松竹	点描	三角	12		20	8												40	47
	六弁花	唐草	八卦	4															4	48
	五花弁	唐草	櫛	7	4						1	1	2	2					17	49
	五花弁	唐草	八卦								1	1							2	—
	桔梗	無	櫛			3	1												4	50
	菱形窓・菊花	点描	三角	12		5	3	16	1										37	51・52
	型	梅窓に水仙・松・桐	点描 (大)	劍先			7												7	53
鉢	梅窓に水仙・松	点描 (大)	三角			5	17											22	54	

に見られた動物文様 (図 42) は初見である。また、同一文様であっても五足のハマ痕に有無があった。地文の簡略化として鹿の子文様 (図 45) や網代 (図 46) が点描 (図 47) へ、腰部の三角文の変化として図 47 → 図 54 があるのではないだろうか。型の新旧を判断するには文様の簡略化に合わせて、統制番号の有無も重要になるとと思われる。県内の遺跡や民俗事例等で最も多く目にする「点描地に菱形窓の中に菊花」碗には、統制番号 (㊦ 2 や ㊦ 11 等) が賦されているものも多い。当遺跡では蛸唐草に福寿を描く直口碗で蛇の目釉剥ぎ碗と統制番号 (㊦ 2) 碗も確認した。文様について津守淳二 (1995) <sup>註 4</sup> は明治初～中期は大まかだが丁寧、中～末期は繊細な小紋が多く精巧、大正～昭和は粗く型紙の彫り方も粗雑で貿易品は特に乱雑と述べている。これらを踏まえて型紙を新旧に並べたのが第 20 表である。福寿文様の直口碗は蛇の目釉剥ぎから統制番号が賦される時期まで作り続けられたようであるが、外反碗の文様は多種で簡略化も見られる事から一つの文様が長く用いられるのではないと推察する。皿では口径 11cm 前後で点描を地文に大きく桜や梅の花弁を描くもの (図 56～59) が肥前系でも瀬戸・美濃産でも見られ、口径 13cm 前後では、蛇の目凹形高台の形状の違いから、肥前系と砥部産に分類できた。肥前系は器壁全体が薄めで高台も浅いが削りを入れて蛇の目凹形高台にしている (図 60) それに対して砥部産の器壁は厚く高台も高めである (図 61)。高台内を削らず総釉後アルミナを塗るもの (図 62) もあった。図 63・64 は同一型紙だが一方の文様が裏返しであった。また、64 の腰部には削りで圏線が入る。図 66 は下地 (1994) <sup>註 5</sup> に同タイプの写真掲載があり大皿とした。

註 4: 津守淳二『古砥部陶片文様集』砥部焼文化研究会  
 註 5: 下地安広「沖縄の遺跡から出土する近代磁器—浦添の遺跡を中心に—」『南島考古』第 14 号

**C. 銅版転写 (図 68～96)**

小碗 1,206 点、中碗 62 点、皿 498 点等計 1,820 点で、肥前系 262 点 (17%)、砥部 5 点、瀬戸・美濃産 1,226 点 (80%)。肥前系にはイゲ皿や段重・蓋物があった。文様のデザインは多種に亘るが、花鳥風月及び吉祥を主題としたものが多く、

花（梅・桜・牡丹・菊・朝顔・鉄線等）、鳥（鶴・鶯・雀等）、山水、吉祥（小槌・亀甲等）、人物（唐子・君子・恵比須等）、樹木（松・竹・銀杏・芭蕉等）、古典柄（分銅繫ぎ・菊水・鹿の子・扇・古銭等）、時世を表現（君が代・帝國万歳等）等が確認できた（第21表）。銘は小碗34個体、中碗5個体に見られ「○ノ山○製」「○山」「香山」「古○専製」「沢田精製」「沢田製」「紫雲」「竹泉」「杳山」「舟山」（図70）等の文字や花か星？と思われる図柄（図69）が確認できた。中碗では「TRADE MARK MADE IN JAPAN」と賦されるものがあり輸出品である事を窺わせた。また、皿では1個体のみ「城岩」の印刻が見られた。有田の城岩太郎氏作とのことであった<sup>註6</sup>。着色には酸化コバルト（青）・酸化クロム（緑）・酸化マンガン（黒）・酸化ウラニウム（黄）・正円子（赤）等の顔料が使用される。

註6：大橋康二先生のご教示

#### D. 吹き絵（図97～107）

小碗64点、碗63点、皿11点、杯40点等計207点で、肥前系は8点、瀬戸・美濃産は202点（94%）であった。他技法との併用も多く、特に銅版転写との併用は小碗に多かった。底部を桜花などに型抜きした小杯は口縁部を着色するものが多く見られた。文様のデザインとしては草花を始め富士山を望む松原や田子の浦を描いたものが多く確認できた。

#### E. ゴム判（図108～114）

小碗440点、中碗38点、皿24点等計531点で、肥前系102点、瀬戸・美濃452点（81%）が出土した。ゴム判も銅版転写同様、花鳥風月及び吉祥を主題としたものが多く、文様のデザインとしては鶴に蓮華や梅に鶯等、2つのモチーフを組み合わせたものや2色を使ったものが多かった。着色顔料も銅版転写と同じ物が使用されたと思われる。図114は色絵や盛り絵との技法併用が為されている。

#### F. クロム青磁（図115～133）

小碗550点、中碗2点、杯21点、皿40点等計955点で、瀬戸・美濃産が667点で98%を占めた。特に多く得られた外面に飛びガンナを施す小碗について口径・底径の組み合わせからグループ分けを行った。口径を7.0cm台（A）、8.0cm台（B）に分け、それぞれ直口（a）、外反（b）で分類し、底径も3.0cm前後（X）、3.7cm前後（Y）に分け、蛇の目高台の有（x）、無（y）で分類した。Ab-Xy（図115）：21個体、Ba-Xx（図116）：8個体、Bb-Xy（図117）：13個体、Bb-Xx：2個体、Bb-Yy（図118）：2個体で、口径7.0cm台・底径3.0cm前後で蛇の目高台でない直口タイプが46%を占めた。また、底部のみではXx：22個体、Xy：20個体、Yx：2個体、Yy：4個体で、底径3.0cm前後で蛇の目高台でないものが88%を占めた。飛びガンナの間隔は6mmを中心に2～10mmまで幅があり5～7mmが全体の57%を占めた。器形との関係を見てみると、直口タイプでは6mm以上が多く46個体、5mm以下は4個体、外反タイプでは6mm以上は3個体、5mm以下は5個体であった。飛びガンナ以外では手描きやゴム判が多く、小杯は10個体、小皿は7個体が得られ口径11cm前後が多かった。

#### G. 国民食器・洋食器（図134～144・図145）

小碗115点、中碗97点等計257点が確認でき、HA③から13個体、HA②から53個体が確認できた。祝女殿内からの出土が55点で碗11個体、皿2個体を数える。型や鑄込みによる成形が多く、統制番号や窯銘も見られた。小碗の外面口縁部下に引かれる二重の圏線について口唇部からの距離を計測してみたところ、2.0～2.5mm：4点、3.0mm：27点、4.0mm：20点、4.5～5.0mm：8点であった。二重圏線のある小碗の個体数は13。掲載はしていないが全面茶（正円子？）の碗も2種出土した。洋食器はカップやスープ皿、洋皿、鉢等34点が出土。図145の底面には○許番号と統制番号有り。

#### H. 統制番号について（図146）

今回の調査でも統制番号の賦された碗・小碗・皿が確認できた。「㊦2」型紙刷り（コバルト・押印）、「岐1056」吹き絵（コバルト・クロム押印）・国民食器（クロム押印）、「岐58」ゴム判（陽刻）、「岐241」国民食器（クロム押印）、「岐280」国民食器（クロム押印）、「ヤマカ陶器」国民食器（クロム押印）、洋食器には「㊦20285」（赤絵押印）、「岐1〇4〇」（印刻）。「岐」が賦されるのは「岐阜県輸出陶磁器工業組合連合会」に属する生産者による製品である。

#### I. 玩具・貯金箱・水滴（図147～153）

玩具はままごと道具と思われるミニチュアの道具類や型抜き人形が出土した。図147の急須はラスター彩色が施され大正～昭和初期のオールドノリタケのラスター彩製品と類似している。図149の馬に乗る軍人は日露戦争後の時世を反

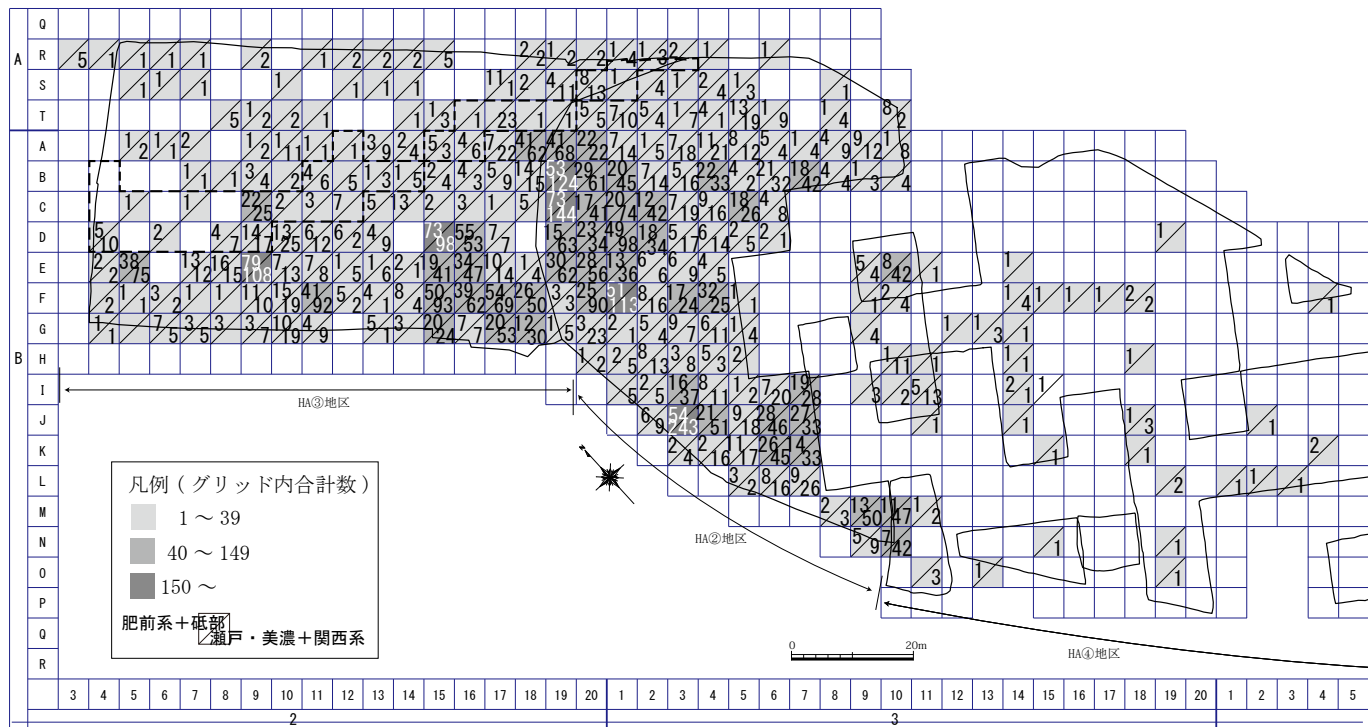
第21表 銅版転写文様別 出土個体数

文様	器種		皿							合計
	小	中	小1	小2	小3	中1	中2	イゲ		
花	178	9	1	26	21	13	1		249	
古典	28			4	8	6		6	52	
樹木	29	4		1	2				36	
文字	18			4	9	3			34	
花と文字	29			1					30	
鳥	13			6	11				30	
山水	28			2					30	
草木	22				2		1		25	
樹木と文字	17								17	
花鳥	13								13	
人物	13						1		14	
君が代	9								9	
花鳥と文字	7								7	
吉祥	3		2		2				7	
古銭と文字	6								6	
窓絵	1	2		1	2				6	
扇絵		2					4		6	
鳥と文字	6								6	
手まり唐草	5								5	
葡萄と雀	5								5	
山水と文字	4								4	
古銭	2			2					4	
麒麟	3								3	
草と文字	3								3	
うさぎ				3					3	
松と文字					2				2	
蝶	2								2	
日本帝国	2				2				4	

※皿のサイズについては第22表を参照







第 44 図 本土産陶器（近代）平面分布

第 24 表 屋敷別主要器種 出土量

産地 器種 屋敷名	肥前・肥前系										砥部					肥 or 砥		砥 or 伊豆		瀬戸・美濃										合計 割合 (100%) 肥前系・ 美濃戸系・ 瀬戸系											
	碗		杯		皿		急須		香炉		碗		皿		香炉	碗	皿	小碗		碗		杯		皿		急須		香炉													
	小	中	小	中	小	中	小	中	小	中	小	中	小	中	小	中	小	中	小	中	茶	湯	筒	小	中	大	小	中	大		小	中	大	不	身	蓋	香	炉			
後又比嘉小																																						4	—	100	
大屋	17	8			1	14	2		9	1		49	1	3	1					2	98	24			1	5	2		5	1				4			250	44	56		
小渡小	3				1	1		1				10			1					3	37	4			3	1		1		1				8	2	1	78	26	74		
浦伊礼小	23	3			9	20	10		23	1	1	77	3		8				1	156	39		2	1	10	12	3	2	18	13	2		7	7	2	453	41	59			
仲村渠												2								1	3	1			1												3	100	—		
道端大屋小												3																									3	100	—		
祝女殿内小						1			2			13			2				1	1	16	4			2									1			43	47	53		
祝女殿内	63	5	2	2	1	15		3	36	6		20	322	2	32	11	8	6	4	6	15	657	111	6		23	40	49	11		60	58	19	2	17	32	9	10	1666	34	66
瓦屋又吉小	5	3				2		2		3	1	55			2				1		2	119	28			4	5	1		22	13	13	2	6	11	4	304	25	75		
三良又吉小	6	1		1		1		5				53		1	3	1			1		84	15	1		1	5	3	2		8	4		2	2	4	2	207	36	64		
照屋先生	8		1		3			7	2			47	1	3	2					114	16			3	9	7	2		16	10		1	6	3	1	262	28	72			
東大屋小								3				14								1	16	3			1	2			5		1						46	39	61		
名嘉座	10	2	1			3	11	10	10	2	1	104	2	12	10				1	5	228	17	2		5	10	4	2		17	28	3	4	15	4	3	526	35	65		

※皿のサイズについて江戸考古学研究会を参考に、小1：8.5～9.4cm、小2：10.5～11.6cm、小3：12.5～13.6cm、中1：14～15.4cm、中2：21cmとした。手：手描き、型：型紙

第 25 表-1 本土産磁器（近代）観察一覧

第図 図版	施文 技法	サイ ズ	重部 量位 (g)	口縁 形状	口径・底径・器高 (cm)	観察事項 (器形 / 文様 / 高台 / 出土個体総数等)	文様色	成形 技法	産地	地区 小グリット層 遺構 台帳番号		
第45 図・ 図版 26	手描	碗	小	口~底	舌・直	8.0 4.6 5.8	筒型(茶飲み) / よろけ縞のくずれ	コバルト	ロケロ	肥	HA③C・D9～11 II台 1560	
					舌・外	8.9 3.0 3.7	腰折れ(茶飲み) / 外面:丸文・寿文、見込:千鳥、口銹/6個体			※	HA②A20 II祝殿台 1285	
					舌・端	8.9 3.0 3.8	腰折れ(茶飲み) / 内外面:口縁下に圏線、見込:圏線、口銹/6個体				HA②D1 不建II台 338	
					舌・端	8.9 3.0 3.9	腰折れ(茶飲み) / 外面:二重圏線・桜?、見込:花卉、口銹/5個体				HA③R-A11・12 II仲村渠台 1293	
				底	舌・外	8.9 3.0 3.10	腰折れ(茶飲み) / 外面:染色体文(明治)、見込:結び雁金/4個体(5の含む)				HA②C19SD05 II台 1492	
				口~底	舌・端	8.9 3.0 3.11	腰折れ(茶飲み) / 外面:染色体文(幕末)、見込:雁金、口銹/4個体			呉須	HA③D15 II台 2590	
				口	舌・外	8.9 3.0 3.12	腰折れ(茶飲み) / 外面:染色体文(明治)、口銹/5個体			コバルト	—	HA③A13 II台 2489
				底	—	8.9 3.0 3.13	外面:不明、銘:角福					HA③S19 II台 3152
				底	—	8.9 3.0 3.14	見込:不明、銘:角福					HA③E9 II大屋台 2477
				底	—	8.9 3.0 3.15	逆「ハ」字状に開く外面:草花					HA③C15 II蒲礼台 986
		中	口~底	直・舌	8.9 3.0 3.15	逆「ハ」字状に開く外面:草花	青桃	型	HA③S19 II暗褐砂台 3152			
		小	口~底	直・下	14.0 5.4 5.5	外面:蓮弁、銘:可/2個体	コバルト	型	HA③S・T16～20 II S13台 2220 HA②B1 II祝殿台 1923			
		中	口~底	舌・端	5.4 2.6 3.2	外面:圏線(青・緑)/2個体	青緑	鑄	HA②B2 II上祝殿台 594			
		中	口~底	丸・直	6.5 2.6 3.0	内外面:口唇から3ヶ所鉄釉を流す、外面:コバルト手描「六兵衛」	青茶	型	京 HA③D15 I台 1191			

産地凡例: ※肥前系 or 砥部 肥:肥前系 砥:砥部 瀬:瀬戸・美濃 京:京都

第25表-2 本土産磁器（近代）観察一覧

第図版	番号	施文技法	サイズ	重量位 (g)	形状	口径・底径・器高 (cm)	観察事項 (器形/文様/高台/出土個体総数等)	文様色	成形技法	産地	地区グリット層遺構台帳番号
第45図・図版26	15	皿	小2	口~底	丸・直	12.3 2.4 7.0	内面：桐・外面：流水に草、口鏽、器面に気泡/削り出し/2個体	コバルト	口	肥	HA② G20 II上瓦台 315
	16		ほぼ完	丸・直	11.6 6.6 2.35	内面：松笠・折れ松葉	茶青	口	肥	HA② B4 II祝殿台 1216	
	17		ほぼ完	丸・直	12.8 7.6 2.6	梅木にメジロ・付着物	緑茶白黒	型	肥	HA④ E10 II SD51台 3211	
	18	急須	中	口~底	—	12.8 7.6 2.7	外面：梅・圏線	青	口	肥	HA② F20 II坊台 694
	19		—	12.8 7.6 2.8	外面：鳳凰（明治~大正）	コバルト	HA② H2 II瓦屋台 1552				
	20	手描	小	ほぼ完	角・直	12.8 7.6 2.9	I Ba/外面：ザク口	コバルト	口	肥	HA④ B3 II F10台 2089
	21			完形	—	12.8 7.6 2.1	I Ba/外面：唐草/3個体	青緑			HA② I1 名嘉座II台 56
	22		中	完形	—	12.8 7.6 2.11	I Ba/外面：唐草	青緑			HA② C1 II祝殿台 2401
	23		—	口~底	—	12.8 7.6 2.2	I B/外面：繋ぎ文?同文の急須の身あり	青			HA③ C~E15~17 II蒲礼台 1493
	24	手描	中	完形	—	12.8 7.6 2.8	I A/外面：雪輪文に山水画、内面：陶三〇（精?）の銘	青	不	不	HA③ F10 II台 2993
25	小		ほぼ完	舌・直	8.6 3.4 4.7	花卉/2個体	桃緑茶赤	口	肥	HA③ D~G15~5 坊II台 701	
26	色絵	杯	中	底	—	9.8 4.0 4.1	日章旗・「凱施記念」	赤金	口	肥	HA③ E15 I台 1803
27			小	完	舌・端	4.8 1.8 2.9	風水画	赤青茶			HA③ D~G15~5 II坊台 537
28		小	完	舌・端	4.8 1.8 2.4	孝行に柴垣	赤青金	HA③ F15 II坊台 1438			
29		大	口~底	—	4.8 1.8 2.8	内面に鳳凰と青・見込：「祝」（赤）/統制番号：岐 206（陽刻）/2個体	赤青黒金	HA③ E18 II蒲礼台 1066			
30	手描	皿	小1	完	丸・直	7.4 3.2 3.4	内面：松・青海波・花菱/5個体 HA② B19C19F01C04B20とHA③ B18と接合	赤青黒金	口	肥	HA② B20 II上祝殿台 2556
31			中	撮~縁	舌・外	7.4 撮 3.2 3.6	外面：地色に正円子を塗布し亀甲文と鶴を描く	白赤青			HA③ S・T16~20 II坊台 2220
32	第46図・図版27	急須	中	口~底	—	6.0 10.2 7.0	二羽の鶴（手描き）/2個体	青	口	肥	HA② A10 II祝殿小台 993
33			口~底	舌・直	7.4 3.2 3.7	筒型（茶飲み）/外面：鹿子唐草・印花、腰：ラム連弁	青	口			肥
34		底	—	3.0 —	筒型（茶飲み）外面：青海波・唐草、腰部：蓮弁	コバルト	HA④ G13 II SD42台 3160				
35		手描	小	口~底	舌・端	8.8 3.2 4.3	腰折れ（茶飲み）/外面：鶴（前向き）、見込：麒麟（明~大）、口鏽	青茶	口	肥	HA② C20 II上台 564
36				口~底	舌・端	8.8 2.9 3.8	腰折れ（茶飲み）/外面：鶴（振り返り）、見込：雁金、口鏽/4個体				HA② F20 II瓦屋台 805
37				口~底	舌・外	8.6 3.0 3.8	腰折れ（茶飲み）/外面：染色体文、見込：雁金/11個体				HA② B1 II上祝殿台 1919
38				丸・直	11.0 5.0 5.95	外面：寿と桜/見込：蛇の目刺し HA③ E9 II大屋から出土と類似	コバルト				口
39		舌・直	10.2 4.6 4.6	外面：竹・人?、見込：蛇の目刺し、胎土目痕 同型で見込み蛇の目刺し碗は3個体出土	HA③ E9 II台 1313						
40		口~底	角・直	10.5 4.4 —	外面：青海波を地紋に桜花、腰部：ラム連弁、内唇：環珞文帯、見込：蛇の目刺し	HA④ E9 II台 2018・2019 + HA③ F 15 II坊台 685					
41		舌・直	10.5 4.5 —	外面：福寿・唐草、腰：ラム連弁、見込：動物? (a-犬、b-天狗、c-猿)、内唇：福寿帯、五足のハマ痕/11個体	HA③ D~G15~5 II坊台 664 + HA② F20 II瓦屋台 816						
42	口	10.5 4.6 —	外面：福寿・腰：ラム連弁、内面：松竹梅・福寿帯、五足のハマ痕/統制番号：①2	HA③ D~G15~5 II坊台 425							
43	口~底	10.5 4.7 —	外面：青海波・窓絵・腰：ラム連弁、内唇：輪宝文帯/2個体	HA② B2 II上祝殿 594							
44	口~底	14.4 5.0 6.2	外面：鹿子地・竹笹、見込：松竹梅、内唇：鹿子に竹笹帯、五足のハマ痕/3個体	HA③ E5 I台 1282							
45	口~底	10.5 4.9 —	外面：網代地・鶴丸・松竹、腰：剣先文?見込：五弁花、内唇：網代地に福寿帯/3個体	HA② J3 II名嘉座台 1248							
46	中	完形	10.5 4.8 —	外面：点描地・鶴丸（右向き）・松竹、腰：三角文、見込：松竹梅、内唇：点描に松竹帯、五足のハマ痕/8個体（鶴丸左向きあり）。a-見込：五弁花 同型で鑄込み成形あり（3個体・祝殿出土）	HA③ E5 II台 1339						
47	手描	皿	口~底	舌・外	14.4 5.0 6.1	外面：唐草地・六弁花、腰：八卦文、見込：五弁花、内唇：花唐草帯、五足のハマ痕/3個体		口	肥	HA③ C~E15~17 II蒲礼台 1492 + HA② C19 II SD05台 279	
48			口~底	14.1 5.0 6.8	外面：唐草地・五弁花、腰：櫛文、見込：五弁花、内唇：五弁花帯/2個体	HA③ E~G9~12 II大屋台 1989					
49			口~底	14.4 5.0 6.3	外面：桔梗、腰：櫛文、見込：松竹梅、内唇：点描松竹梅帯/3個体	HA③ T~C15~19 II蒲入台 556					
50			ほぼ完	13.1 5.0 5.45	外面：点描地・菱形窓に菊花、腰：三角文/見込：五弁花、内唇：点描三角と梅花帯、五足のハマ痕/統制番号①2	HA④ H10 II SD54台 3218-9					
51	手描	皿	ほぼ完	14.1 5.0 6.7	外面：点描地・菱形窓に菊花、腰：三角文、見込：松竹梅、内唇：点描・菱形窓に梅花帯、五足のハマ痕/5個体	口	肥	HA② B19 II 701台 864			
52			口~底	14.2 5.1 5.7	外面：点描地・梅花窓に水仙・桔梗、腰：剣先文、見込：松竹梅、内唇：点描地松竹梅帯、五足のハマ痕/7個体			HA③ T~C15~19 II蒲礼台 559			
53			口~底	14.2 5.1 5.8	外面：点描地・梅花窓に水仙・松、腰：三角文、見込：松竹梅、内唇：点描に松帯、五足のハマ痕/5個体			HA② F20 II瓦屋台 816			
54			底	—	4.9 —			外面：剣先文、見込：鶴丸	HA③ F18 II台 1670		
55			小2	ほぼ完	丸・直			11.0 6.8 1.9	内面：点描地に桜花・口鏽/8個体	口	肥
56	手描	皿	完	丸・直	11.0 6.8 1.1	内面：点描に桜花・輪花	口	肥	HA② B1 II祝殿台 1920		
57			口~底	舌・直	11.0 6.8 1.11	外面：窓絵・松竹梅+見込：千鳥/3個体			HA③ E9 II台 1369		
58			丸・直	10.5 6.4 2.0	内面：桐・巴文・点描/3個体	HA② J3 II名嘉座台 1248					
59	手描	皿	小3	口~底	角・直	13.2 7.4 3.1	外面：唐草、内面：捻り割て松竹梅・輪花/蛇の目凹形	コバルト	型	肥	HA③ E8 II台 1390
60			第48図・図版29	小3	口~底	角・直	13.2 7.4 3.1	外面：唐草、内面：捻り割て松竹梅・輪花/蛇の目凹形	コバルト	型	肥

\*完形及び完形に近い器物のみ重量を掲載した

産地凡例：肥：肥前系 低：低部 瀬：瀬戸・美濃 不：不明

第三章 5

第25表-3 本土産磁器（近代）観察一覧

第図版	番号	施文技法	器種	サイズ	重部 量位 (g)	口縁 形状	口径・底径・器高 ( ) : 推定 (cm)	観察事項 (器形 / 文様 / 高台 / 出土個体総数)	文様色	成形 技法	産地	地区グリット層 遺構台帳番号		
第48図・図版29	61	型紙	皿	小3	口~底	角・直	13.0 8.8 3.3	外面：花唐草・内面：松竹梅・輪花 / 蛇の目凹形・畳付けに釉有り / 2個体	コバルト	型	低部	HA ③ T~C15 ~ 19 II 蒲礼台 975		
	62						13.6 8.0 6.6	八角皿、内面：牡丹・五足のハマ痕 / 蛇の目凹形高台にアルミナ塗布・畳付けに釉有り				HA ③ E5 I 台 1282		
	63						13.6 8.0 6.7	外面：花唐草・圏線、内面：窓絵：松竹梅・見込：松竹梅・輪花、五足のハマ痕 / 蛇の目凹形・畳付けに釉有り / 8個体				HA ② T20 II 祝殿台 556		
	64						13.6 8.0 6.8	外面：花唐草・圏線・削りで2条の圏線、内面：窓絵：松竹梅・見込：松竹梅・輪花、五足のハマ痕 / 蛇の目凹形・畳付けに釉有り				HA ② C5 II 7がり台 868		
	65	中1	大	ほぼ完 171.8	角・直	13.9 6.9 3.2	外面：宝文、内面：点描地に桜花、見込：松竹梅・輪花 / 蛇の目凹形	コバルト	型	瀬	HA ② D1 II 祝殿台 261			
	66			胴	(24.0) — —	外面：花唐草 / 内面：花卉？	コバルト	口	低部	HA ④ 不明 I 台 4603				
	67	香炉	口~底	角・直	10.7 10.4 8.7	外面：牡丹・梅木・鶯・四方襷・ラム蓮弁	コバルト	口	低部	HA ② II 台 913				
	68	銅版転写	杯	小	口~底	舌・直	ほぼ完 70.3	7.0 3.2 4.2	外面：古銭・福寿禄等 / 4個体	青黒	鑄	瀬戸・美濃	HA ③ E~G10 ~ 12 II 大屋台 957	
	69						舌・直	8.0 4.0 4.3	腰折れ / 外面：手鞠・唐草・銘：花か星？ / 5個体	青	口		肥前系	HA ② A4 II 祝殿台 1641
	70						— 3.0 —	外面：鶴丸（左向き）・蓮弁？ / 銘：舟山 / 2個体	青緑	型	HA ② C19 II 祝殿台 568			
71	舌・外						6.8 3.4 4.6	腰折れ / 外面：菊花 / 4個体	青緑	型	HA ② C19 II SD05 蒲礼台 1492			
72	完 98.7						丸・直	8.0 3.6 4.8	外面：草花	青桃	型		HA ③ F10 II 台 2993	
73	8.0 3.6 4.9						外面：小菊・君が代他 / 5個体 平安山原 B 遺跡でも出土	緑茶	口	瀬戸・美濃	HA ② B1 II 祝殿台 1920			
74	8.0 3.6 4.1						外面：菊・柴垣（四菱柄） / 銘：紫雲 / 4個体	桃青			HA ② H3 II 名嘉座台 1691			
75	7.9 3.9 4.6						外面：桜花・高台に鋸歯状の圏線 / 銘：沢田精製	青緑赤茶	口	瀬戸・美濃	HA ③ DC~E15 ~ 18 II 蒲礼台 491			
76	7.9 3.9 4.7						外面：唐子・瓔珞文、口鏽 / 銘：竹泉 / 4個体	青茶			HA ② D1 II 祝殿台 1371			
77	7.9 3.9 4.8						腰折れ / 山水	茶緑	型	瀬戸・美濃	HA ② N10 I 表掃台 668			
78	ほぼ完 73.1	舌・外	8.8 3.0 3.9	腰折れ / 内外面：蝶に桜、腰部：瓔珞文、口青 / 蛇の目	青	HA ② F3 II 名嘉座台 1662								
79	口~底	8.8 3.0 3.10	腰折れ / 外面：菊・桜・鉄線 / 2個体	緑茶	型	HA ② D1 II 祝殿台 1468								
80	ほぼ完 110.2	丸・直	8.8 3.0 3.11	花卉	コバルト 正円子	鑄	HA ④ H10 II SD54 台 3218-9							
81	中筒	口~底	舌・直	12.0 4.2 4.9	外面：窓絵に風景・桜花等	青緑	—	不	HA ③ E~G9 ~ 12 II 大屋台 1983					
82	口~底	丸・直	12.0 4.2 4.10	外面：色違いの花唐草	青緑赤	型	瀬	HA ③ T8-9 II 台 1662						
83	不底	—	12.0 4.2 4.11	銘：不明	青	鑄	瀬	HA ③ C~E15 ~ 17 II 蒲礼台 1495						
84	小	ほぼ完 31.2	舌・外	5.0 2.0 2.8	外面：鶴	青	型	瀬	HA ③ A17 II 台 3114					
85	中	ほぼ完 31.1	舌・外	5.0 2.0 2.9	外面：鶴	青	型	瀬	HA ③ A17 II 蒲礼台 543					
86	ほぼ完 21.7	6.4 2.5 2.5	見込：金魚	HA ③ E5 I 台 1282										
87	小1	ほぼ完 48.4	舌・直	8.9 5.0 1.8	内面：瓔珞・鳳凰・唐草・桐・菊 / 削り出し	コバルト	口	瀬	HA ④ E9 II SK64 台 3345					
88	口~底	11.2 6.4 2.4	内面：千鳥・青海波、見込：巴文に鹿の子、見込：巴文・鹿の子	青	鑄	瀬戸・美濃	HA ② B19 II 701 祝殿台 7621							
89	小2	完 103.2	角・直	11.2 6.6 2.1	内面：朝顔、見込：朝顔の葉		緑	型	HA ② J3 II 7台 2417					
90	完 168.7	11.0 7.4 2.6	外面：花唐草 / 内面：捻り文他、見込：松竹梅	青	鑄	HA ② T3 II 祝殿台 389								
91	小3	ほぼ完 146.0	角・直	12.6 7.4 2.8	内面：花・葉、見込：四菱、口鏽 / 4個体	紺	型	瀬	HA ② B19 II 祝殿台 837					
92	口~底	12.6 8.0 2.3	内面：帝國萬歳・旭章旗・八重桜木、口鏽	青	HA ③ E8 II 台 1390									
93	中2	口~底	舌・外	21.1 12.4 2.7	内面：水仙、見込：雲に水仙、輪花 / 銘：城岩（印刻）	青	口	有	HA ③ E4 II 台 1611					
94	イゲ	口~底	角・直	22.0 13.6 2.5	内面：区画文（松竹梅他）、見込：蓮花？、口鏽	青茶	型	肥	HA ② C20 II 上 祝殿台 564					
95	段重蓋物（角）	身	胴	—	10.8 9.8 2.7	外面：紅葉？	青	型	肥	HA ② J6 II 三良台 1705				
96	小	ほぼ完 131.0	角・直	— — 3.4	外面：4種の地文（四菱・七宝等）に六弁花・松木・鶯 / 合わせ口無釉	青	型	瀬	蓋：HA ② A3 II 上 祝殿台 1789 身：HA ② T1 II 祝殿台 523					
97	小	ほぼ完 82.9	舌・直	7.8 3.2 5.0	腰折れ / 外面：富士山・松葉・波濤 / 2個体	青緑	鑄	瀬	HA ③ D10 II 台 595					
98	口~底	10.8 4.9 5.4	外面：草花 / 2個体	青緑	鑄	瀬戸・美濃	HA ② M9 I 攪乱台 270							
99	ほぼ完 127.5	舌・直	11.1 4.4 6.1				外面：カモメ・山水 / 4個体 / HA ③ R2 II 層からも同一種出土	HA ② B20 II 祝殿台 835						
100	中	口~底	11.2 — —	外面：ブドウの葉、統制番号：岐 1056（コバルト印）3個体・（クロム印）2個体・（印無し）2個体	青緑	型	瀬戸・美濃	HA ② L7 II 上 照屋台 645						
101	ほぼ完 111.5	丸・直	11.6 4.2 5.3	外面：富士山と波濤	青緑	鑄	瀬戸・美濃	HA ④ E10 II SD51 台 3211						
102	口~底	丸・外	11.4 4.6 5.6	腰折れ / 外面：富士山と帆掛け船・松原 / 2個体 / HA ③ 大屋 II や蒲伊礼小 II からも同種	青緑桃			HA ② C19 II 祝殿台 1659						
103	筒	口	舌・直	7.4 — —	菊花（盛り絵）	青白土	—	瀬	HA ② A4 II 上 祝殿台 1793					
104	完形 34.0	肥・直	5.8 2.0 2.7	底部は桜を模す / 口縁部2カ所に青と緑の吹付け	青緑	型	瀬戸・美濃	HA ② C2 II 祝殿台 183						
105	口~底	舌・直	5.7 2.4 2.9	底部は桜を模す / 口縁部に桃の吹付け	桃			HA ② M10 I 表掃台 664						
106	舌・端	5.0 2.0 2.8	外面：雲のかかる富士山 / 統制番号：岐 223（陽刻）圏線あり	青	HA ④ J18 II 台 2565									
107	中	口~底	舌・直	6.0 2.2 2.3	内面：桜花を青で吹き絵	青桃	HA ③ E9 II 台 1313							
108	ゴム判	口~底	舌・直	8.0 3.0 4.6	外面：宝船・松 / 色違いで2個体・円盤状製品あり	青	型	瀬	HA ② I 表掃台 657					
109	口~底	舌・直	8.8 3.5 4.8	花唐草と圏線 / 統制番号：岐 325（コバルト印）	青（濃淡）	鑄	HA ④ E10 II SD51 台 3212-5							

※完形及び完形に近い器物のみ重量を掲載した

産地凡例：※肥：肥前系 有：有田 低：低部 瀬：瀬戸・美濃 不：不明

第25表-4 本土産磁器（近代）観察一覧

(質量単位：cm, g)

第図版	番号	施文技法	器種	サイズ	重量位 (g)	形状	口径・底径・器高 ( ) : 推定	観察事項 (器形 / 文様 / 高台 / 個体数等)	文様色	成形技法	産地	地区グリット層 遺構台帳番号		
第50図・図版31	110	ゴム判	碗	小	完 122.3	舌・直	8.4 3.4 4.8	外面：菊花・砥草	青緑	型	瀬戸・美濃	HA ② D1 II 上 祝殿台 727		
	111				口～底	舌・直	8.6 3.2 4.7	外面：鶯・梅花（色絵・盛り絵）3個体 平安山原 B 遺跡でも出土	青緑黒白	口		HA ② I 表掃台 660		
	112				ほぼ完 62.2	舌・外	7.2 3.2 4.5	腰折れ / 外面：鼎、見込：鼎 / 2個体	青	型		HA ② D1 II 祝殿台 261		
	113		中	口～底	丸・直	11.3 4.1 6.2	外面：菊唐草（ゴム判の二色重ね） / 銘：岐 58（陽刻） / 4個体	青桃	型	瀬	HA ② A19 II 上 祝殿台 1530			
	114			ほぼ完 163.2	舌・直	11.4 4.0 6.1	外面：八卦文・紅葉他 平安山原 B 遺跡でも出土	青	鋳		HA ② C6 I 攪乱台 1965			
	115		碗	小	口～底	舌・直	6.8 3.2 3.8	外面：飛びガシ（Ab-Xy） / 21個体	—	型	瀬戸・美濃	HA ③ D～G15～5 II 坊台 1414		
	116						8.8 3.0 3.8	外面：飛びガシ（Ba-Xx）・蛇の目高台 / 8個体	—			HA ③ D12 台 II 3192		
	117						8.8 3.0 3.9	外面：飛びガシ（Bb-Xy） / 13個体	—			HA ③ B9 I 台 1188		
	118						8.8 3.0 3.1	外面：飛びガシ（Bb-Yy） / 2個体	—			HA ③ E5 II 台 1298		
	119						8.2 3.6 4.6	腰折れ / 外面：薔薇（銅版） / 3個体	青緑			HA ② D1 II 祝殿台 360		
	120						8.1 3.5 4.7	外面：四菱（手描） / 2個体	—			HA ② B19 II 701 台 864		
	121						完形 89.3	8.3 3.1 4.9	外面：青海波の簡略？（ゴム判） / 2個体			青	鋳	HA ③ S20 I 台 1218
	122	クロム青磁	碗	小	口～底	舌・端	8.2 3.0 4.8	外面：鶴丸（左向き）（ゴム判） / 7個体	—	型	瀬戸・美濃	HA ② B19 II 701 台 864		
123	6.4 3.0 4.5						腰折れ / 無文	—	HA ③ D～G15～5 II 坊台 573					
124		杯	小	口	舌・外	8.9 4.0 4.6	若干腰丸 / 外面：花卉（手描） / 削り出し	青緑	口		HA ④ H10.11 II SD51 台 3214-2			
125						中	口～底	舌・外	11.0 4.0 5.75	外面：南天（ゴム判 + 手描）	緑茶	鋳	瀬	HA ② H5 II 名嘉座台 969
126		杯	小	口～底	舌・外	8.2 3.3 4.7	外面：蓑龜（ゴム判）・鶴（吹き絵） / 5個体	青	鋳	瀬	HA ② D19 II 上 祝殿台 803			
127						口～底	舌・直	5.2 2.2 2.9	畳付け：鉄泥塗布	—	鋳	瀬	HA ④ E10 II SD51 台 3211	
128						口	舌・外	5.5 (3.0) —	内面：花（手描）と銘（鳥）	金	型	瀬	HA ③ F17 II 小渡台 2051	
129		皿	小	口～底	舌・直	10.8 6.2 1.9	内面：梅花（盛り絵）・菊花・壺（型紙） / 2個体	緑	型	瀬戸・美濃	HA ② C2 II 祝殿台 512			
130						10.7 6.3 1.9	内面：梅花（盛り絵）・箱・壺（型紙） / 2個体				HA ② B19 II 701 台 864			
131						11.0 6.6 1.9	内面：梅花（盛り絵）・カゴ（型紙）				HA ② C19 II SD05 台 1492			
132		皿	小	口～底	丸・直	13.0 7.6 2.1	外面：三重圏線、内面：菊花に雛菊（型）	—	型	瀬戸・美濃	HA ② L7 II 照屋台 1435 HA ③ F16 II S3 台 1435			
133						大	ほぼ完 592.5	舌			24.9 13.8 2.4	内面：梅花、口青 / 底部：こま文様	赤青緑茶	
134	第51図・図版32	国民食器	碗	小	口～底	丸・直	8.1 3.1 4.5	外面：二重圏線 / 統制番号：岐 280 ?（陽刻）	クロム	鋳	瀬戸・美濃	HA ③ A18 II 蒲礼台 556+HA ③ T17・18 70 II 2220		
135						玉・外	8.4 3.2 4.7	口縁部下に二重圏線	緑	鋳	HA ④ F10 II 台 2086			
136						口	舌・外	8.0 — —	口縁部下に三重圏線	クロム	型	瀬	HA ② A2 II 上 祝殿台 1790	
137				8.0 — —	口縁部下に三重圏線 / 完成ではないが円盤状を意識している	クロム	型	瀬	HA ③ F15 II 坊台 1438					
138				中	口～底	丸・直	11.8 4.0 5.4	無文	クロム	型	瀬	HA ② F3 II 名嘉座台 1687		
139							11.6 4.2 5.1	外面：二重圏線 / 統制番号：岐 1056（クロム印）				HA ③ D9 II 大屋台 1914		
140							11.0 3.8 5.2	外面：口縁部下に三重圏線・銘：ヤマカ陶器（クロム印） / 6個体				HA ② B4 II 祝殿台 1216		
141				筒	口	角・直	7.4 — —	外面：二重圏線	クロム	型	瀬	HA ② D1 II 上 祝殿台 723		
142				杯	小	口～底	舌・外	7.5 — —	六面体、外面のみクロム	クロム	型	瀬	HA ② J5 II 三良台 1711	
143				洋食器	皿	小	口～底	—	15.8 9.2 3.1	内面：二重圏線 / 銘：ヤマカ陶器（クロム印）	クロム	型	瀬	HA ② B20 II 祝殿上台 2556
144	15.8 9.2 3.2	内面：二重圏線 / 統制番号：TOKI KOSHITSU 岐 241（クロム印）	クロム						型	瀬	HA ② G10.11 II 台 1686			
145	不明	碗	中	口～底	外・丸	15.8 9.2 3.3	内面：口青・ラスター彩 / 底面：許印（許 20285（赤絵印）・岐 1〇4〇（陰刻））	銀青	型	瀬	HA ③ D16 II 蒲礼台 1526			
146						不	底	— — 4.3 —	銘：岐 248（陽刻）	—	鋳	不	HA ③ F15 I 台 879	
147	玩具	ままごと道具	焜炉	ほぼ完 44.2	—	幅 3.8 器高 3.5 奥行 3.9	脚部以外に茶色の顔料塗布（6面を貼り合わせる？）	茶	型	瀬	HA ④ E10 II 台 2038			
148						急須	ほぼ完 48.4	—	1.2 2.6 2.9	ラスター彩による吹付け後、顔料で色付け	赤橙緑	型	瀬	HA ② C1 II 祝殿台 2428
149						軍人	—	—	—	馬に乗る軍人	—	型	関	HA ② N10 I 表掃台 668
150	人形	カウボーイ	—	—	—	—	上半身が欠失するが、ズボンや側面に携えた帽子の形状からカウボーイを象ったものと思われる。足の中には粘土塊。素焼き	—	型	瀬	HA ④ E10 II SD51 台 3207			
151							山羊？	—	—	—	あご髭が付くので山羊か？角か耳は差し込み式。沖縄産？	—	手	不
152	貯金箱	だるま	—	最大径 7.2 器高 7.2 奥行 7.7	—	—	前身と後身を貼り合わせ底部には2ヶの粘土塊を貼り付け重しにしている	—	型	肥	HA ④ E9 II SK64 台 3345			
153	水滴	唐子	—	—	—	—	唐子の腕が残る。なすび形童子水滴に似る（19c）	朱	型	関	HA ② N10 I 表掃台 668			

産地凡例：肥：肥前系 砥：砥部 瀬：瀬戸・美濃 関：関西系 不：不明

第26表 皿技法別出土量

産地地区	肥前系		瀬戸美濃				砥部				合計		
	HA ③	HA ②	HA ③	HA ②	HA ④	HA ③	HA ②	HA ③	HA ②	型紙	銅版		
小1					1			1				2	
小2		8	1	12	17	6	32	3				27	61
小3	14	25	2		3	14	32	1	13		3	36	72
中1		13	1	2	2	9	2	10	1		2	7	35
中2		1						1					2

凡例：小1：8.5～9.4cm、小2：10.5～11.6cm、小3：12.5～13.6cm、中1：14～15.4cm、中2：21cm



第 45 図・図版 26 本土産磁器 (近代) 1



第46図・図版27 本土産磁器 (近代) 2



第 47 図・図版 28 本土産磁器 (近代) 3





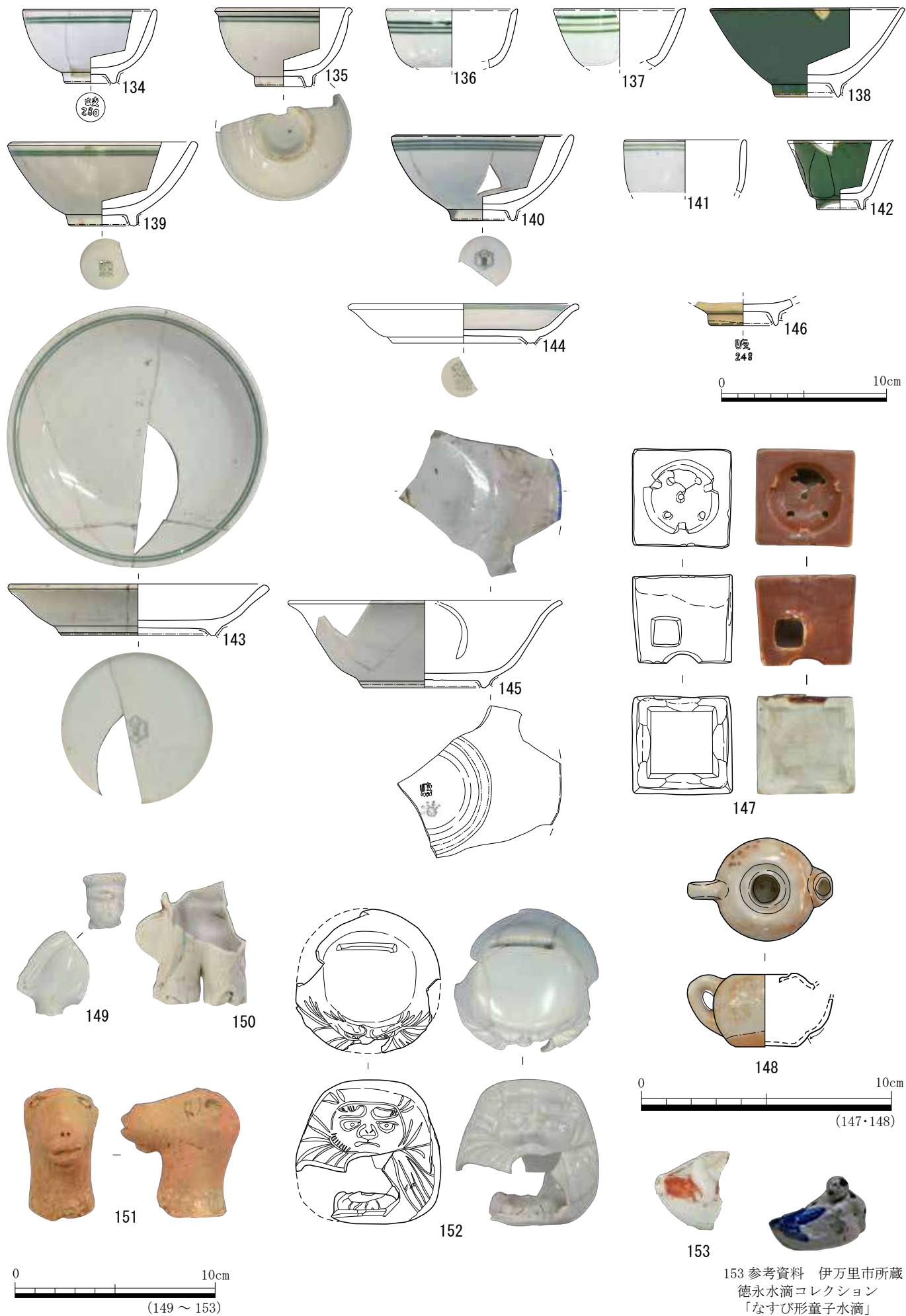
第 48 图 · 图版 29 本土産磁器 (近代) 4



第 49 図・図版 30 本土産磁器 (近代) 5



第 50 図・図版 31 本土産磁器 (近代) 6



第 51 図・図版 32 本土産磁器 (近代) 7

## (2) 本土産陶器 (近代)

明治時代以降に生産された陶器でHA③180(うち焜炉片が92)点、HA②53点、HA④10点の計243点が出土した。HA③では特に蒲伊礼小・小渡小周辺に集中する(第52図)。Ⅱ層出土が多数を占めるが、Ⅰ層やⅢ下層との接合も多かったため、層ごとには分けずに報告する。関西系が多く75%を占め、瀬戸・美濃系は9%であった。土瓶の出土が多く16個体、碗は9個体であった。大正時代以降生産される硬質陶器<sup>註1</sup>は碗・皿・蓋の3器種確認できた(第27表)。主な遺物については第28表に詳細を記載し、第53図、図版33に示す。

図1は美濃産の織部風小碗で外面3ヶ所に椿の花を描くようである。高台脇に統制番号が押印される。図2は硬質陶器の洋皿で裏には日本硬質陶器株式会社の商標が押印される。当社は明治41年金沢に設立され、大正6年からは釜山にも工場が設立され海外輸出が行われたが、当遺物の商標には『CO.』や『KANAZAWA』の文字があり大正9年以降に金沢工場で生産されたと思われる<sup>註2</sup>。図3は関西系の挿鉢を真似て島根県で生産された挿鉢で同タイプが4個出土した。図4・5は関西系の土瓶の蓋と身でセット関係にある。緑色顔料の上に白土を使ったイッチン技法で唐草を描く。図6は宜興窯(中国)の影響を受けた土瓶で暗い紫色を呈する。煎茶用の湯沸鉄瓶を模したような造作で八角形、地紋、貼付けが見られた。図7は鍋物焜炉で関西系の軟質陶器である。明治維新後、肉食が始まった事により涼炉の形状を真似て生産された<sup>註3</sup>。その他の特徴的な遺物としては柿釉掛け煎茶用炉(軟質陶器)や漆で接着された痕跡の残る土瓶も出土したが、小片のため掲載は見送った。

註1: 1200～1300度の高温で焼いた陶器。陶器と磁器との中間的な品質をもつ。洋食器の需要に応じ大正時代以降生産される。  
 註2: <http://nekonote.jp/korea/old/fukei/ynd/ynsn/toki.html> 註3: 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001

第27表 産地別器種出土量

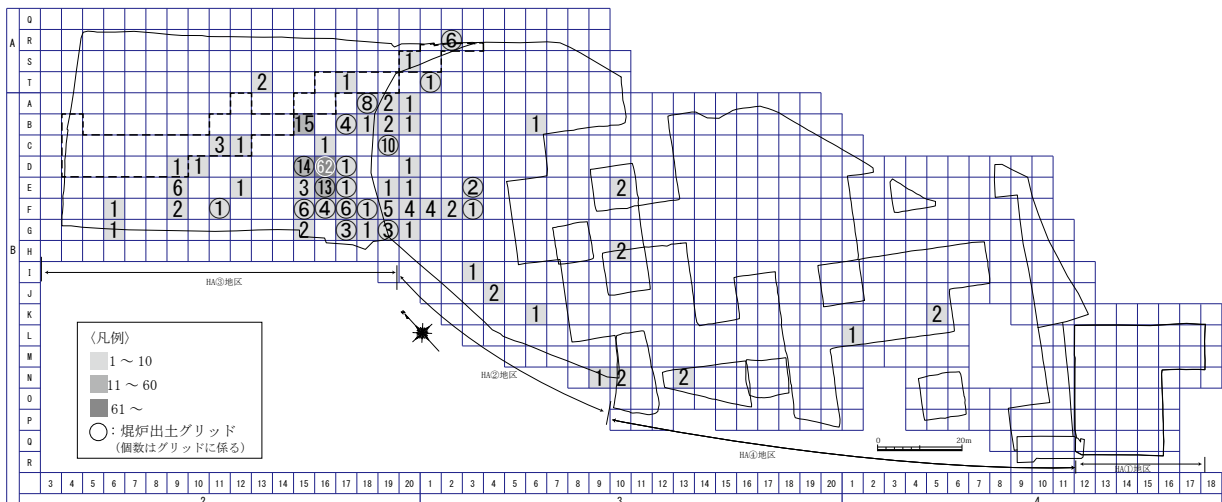
産地	器種											不明	合計					
	碗	皿	洋皿	鉢	挿鉢	土瓶	蓋	蓋	袋物	花生	火入れ			香炉	焜炉			
関西系	2	2	2			23	1	6	1	1		1	2	98	1	13	153	
京焼			3			3		5									11	
京焼系								1									1	
島根					10												10	
淡路						1											1	
瀬戸系						2	3				1						7	
美濃系		1	2			10										1	14	
常滑				1													1	
肥前系				9													9	
薩摩								1									1	
肥前真似	6																6	
硬質陶器		1		9				1									11	
不明						11											7	
合計	2	9	4	13	9	1	10	50	4	14	1	1	1	2	98	1	22	243

焜: 煎茶用

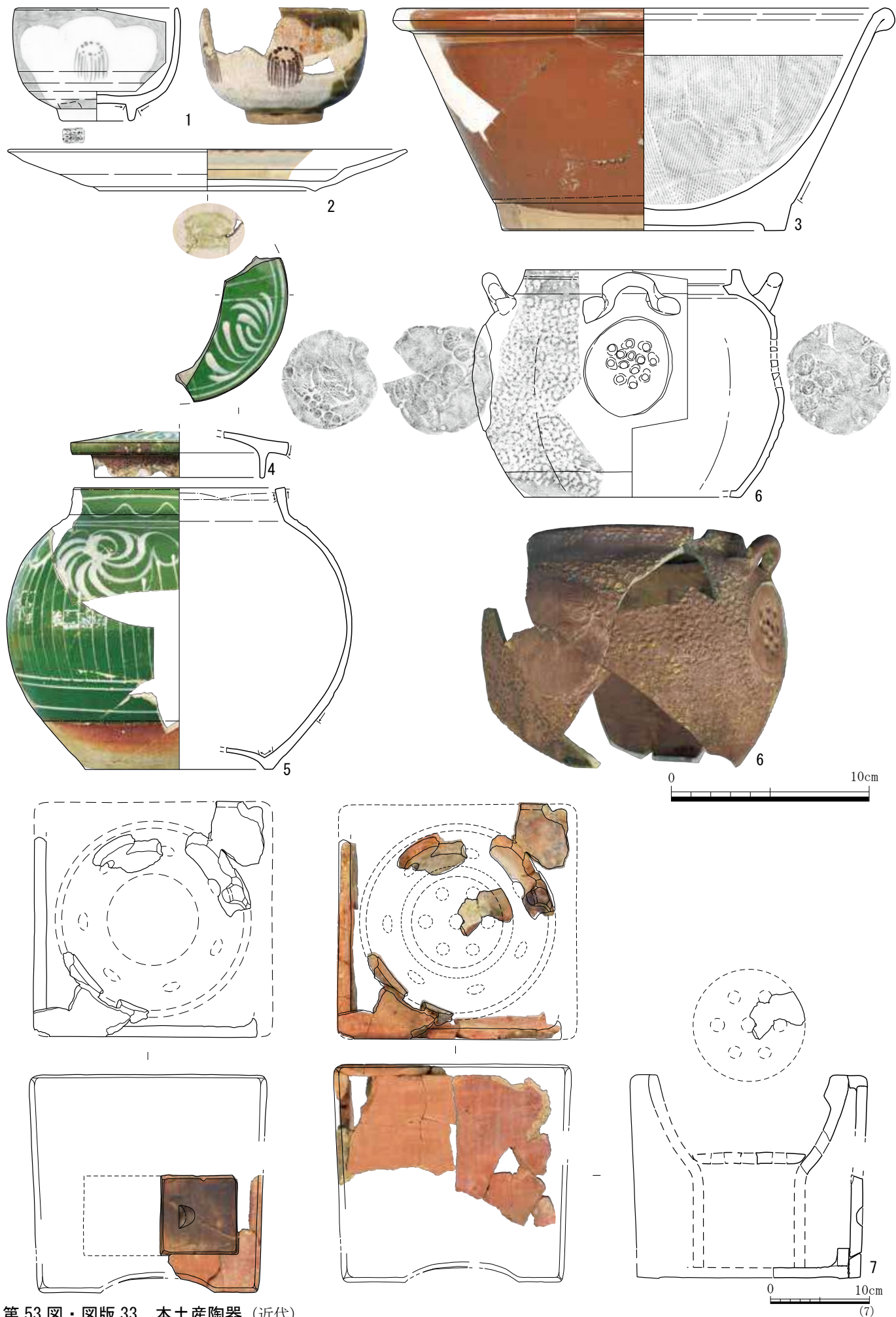
第28表 本土産陶器 (近代) 観察一覧

第図版	番号	産地	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	観察事項 (器形/施文方法/成形/素地等/接合)	生産年代	地区グリッド層遺構 (取上)台帳番号
第53図・図版33	1	美濃	小碗	口・底	8.2	3.8	5.7	3	織部風小碗/白土で花卉、鉄軸で花芯を描いた後、透明釉を掛け、緑釉で隙間を埋める。統制番号の押印部と高台側面は無釉。押印: 瀬 200/ 叻 成形 / 素地は黄白色で細かい。大きめの貫入が入る。<接合: HA③ D10 II + D9 II>	戦前	HA③ D10 II 大屋 S39 台 1978 他
	2	金沢	洋皿	ほぼ完	20.2	5.5	2.1	3~4	硬質陶器 / 表: 暗紅色の緑取りにラスター彩・裏: クロムによる日本硬質陶器株式会社商標 (上段: IMPERIAL IRONSTONE CHINA 中央: 二羽のフェニックスと KANAZAWA 下段: NK.PORCELAIN CO.)	大正	HA③ A17 II 蒲伊礼小 S12 台 540
	3	島根	挿鉢	ほぼ完	25.4	14.2	11.3	6	口唇部は折り返して玉縁状、櫛目 32 本 / 底部から 2cm 程までを鉄軸のふせ掛け / 轆轤引きで極浅い高台を削り出し・灰色で細かい (黒色粒混)	19c 以降	HA② B1・20 祝殿台 590 HA③ D15 蒲伊礼小 台 867
	4	関西系	土瓶	蓋	8.6	-	-	3~6	緑色顔料施釉後白土でイッチン / ナ 消し / 灰色で堅緻	明治	HA③ G19 II 台 2536
	身			10.7	8.5	14.2	3~5	緑色顔料施釉後白土でイッチン / ナ 消し / 灰色で堅緻。<接合: HA③ D15 II + E15 II + E16 II>	明治	HA③ D15 II 蒲伊礼小 S4 台 1602 他	
	6	関西系	土瓶	身	10.8	11	11.5	4	中国江蘇省宜興窯の影響を受ける / 紫泥・無釉・八角形たたら作り (裏布目・口部は別作り) / 器面: 岩肌を模したと思われる地紋に梅花他が陽刻された貼り付けを 3ヶ所 / 暗い紫色で白色細粒をわずかに含む。<接合: HA② C19 I・II + B19 II>	明治	HA② C19 II 祝殿台 1658
	7				焜炉	(24.9)	(24.9)	(21.5)	7	鍋物焜炉 (涼炉の形状を真似る) / 立方体を基調とし、体部が二重になる。通風調節口の扉。器壁は磨かれる / 橙色で雲母を多く含む。<接合: HA③ DE15 ~ 17 II>	明治

( ): 推定



第52図 本土産陶器 (近代) 平面分布



第53图·图版33 本土産陶器 (近代)

### (3) 沖縄産施釉陶器

いわゆる「上焼」(ジョウヤチ)とされるものであるが、中には素地から陶質土器、沖縄産無釉陶器、本土産陶器、中国産陶器に類似するものも含まれる。地区別に HA ③ 4179 点・HA ② 5949 点・HA ④ 362 点・HA ① 1 点の計 10491 点で、出土する器の中では最も多い。層別には I 層 800 点、II 層 9466 点 (II 層上含む)、III 層で 150 点、IV 層 58 点、不明 17 点の出土で、そのほとんどは II 層で得られている。器種別には碗 5572 点・小碗 425 点・皿 247 点・鉢 653 点・急須 866 点・酒器 177 点・鍋 492 点・蓋 175 点・火取 197 点・香炉 47 点・火炉 170 点・壺 498 点・瓶 536 点・杯 8 点、灯明具 17 点、不明 411 点である (第 29 表)。なお 2cm 以下は集計に含めなかった。これはキャンプ桑江北側地区の中では最も多く、平安山原 B 遺跡 (2014) のほぼ 10 倍である。平安山集落跡 (『北谷町の地名』2004) の生活の様子が遺物で具体化される。

#### <分類>

沖縄産施釉陶器 (上焼) の技法の変遷を検討するため、施釉の方法を軸に分類する。

I 類 - 白化粧無しで透明釉を施すもの。II 類 - 白化粧無しで鉛釉<sup>註1</sup>・鉄釉を施すもの。III 類 - 外面に鉛釉・鉄釉、内面に透明釉を掛けるもので、さらに内面の白化粧の無し (イ)、有り (ロ) に細分。IV 類 - 白化粧を施し、透明釉を掛けるもの。なお、各々に無文 (a) と有文 (b) があり、IV 類はさらに加飾 (①線彫・②二彩・③淡彩・④イッチン (花文)) によって細分した。

#### <観察の方法>

器種ごとに、①口・底の形状、文様、②施釉 (白化粧の有無、露胎)、③素地色について観察し、碗・小碗・皿・鉢については前述の技法で分類し、急須・香炉・壺・瓶は大きさ、酒器・鍋・蓋・火炉・灯明具については形状で細分した。第 29 表に地区別の集計、出土平面分布を第 56 図に示した。また、戦前の平安山集落で使用されたと想定されるため、屋敷ごとの集計を第 30 表に示した。これによると祝女殿内が 2944 点 (28.1%) と最も多く、次いで道端大屋小・名嘉座が各々 660 点 (6.3%) と続く。

以下、主なものを第 57 ~ 64 図、その観察一覧を第 32 表に示した。以下、器種ごとに記述する。

#### <碗> (図 1 ~ 44)

碗は全体の 53.1% の出土で、前記の技法により I ~ IV 類に分け、さらに IV 類は文様の有無、種類によって細分した (第 31 表)。

I 類：浸し掛け<sup>註2</sup>でいわゆる灰釉碗と称されるもので無文 (a)・有文 (b) に分けられる。また、高台や腰部の形状も異なるが、今回は細分せず、観察一覧に示した。出土数は 1520 点 (碗の 27.3%) でそのうち、有文 (b) は 69 点 (4.5%) に留まる。

無文は図 1 ~ 12 に図示した。図 1 ~ 3 は底部からの立ち上がりが直状で、図 1 は素地が粗く畳付けは太い。図 2 は素地も密、畳付けの周縁に砂が付着し、見込みに釉垂れがある。図 3 は底部に窯出し時の焼きふくれがあり、畳付けは細い。図 4 ~ 6 は腰部が丸みを帯びるもので、図 4 は器高も前 3 者より低く、図 5 は他の碗より釉に透明感があり、図 6 ~ 8 は腰部の形状がより屈曲し、胎土などから広東碗に類似する。図 9 は口縁部が熔着するもので、窯道具 (第 80 図 17) も出土することから消費地での製品入手を示唆するものである。図 10 は腰部が丸みを帯び、高台は細く貼り付けられた可能性が高い。図 11 は見込みに砂目、図 12 は見込みが総釉である。

I 類の加飾は外面に鉄釉で草花文 (図 16)、見込みに丸文 (図 15) するのが一般的であるが、内面の見込みと腰部に刷毛で鉄釉を塗る (図 13)、見込みに白土をドーナツ状に塗る (図 14) のものが出土した。そのうち、図 13 は II・III 類と施文も同じで、器形も腰部が丸みを帯び類似する。

II 類：I 類と同じく浸し掛けだが、内外面に濃鉛や鉄釉を施すもので、315 点 (碗の 5.7%) 出土した。そのうち有は 97 点 (30.8%) と前者より割合が高い。施釉の範囲は腰部までが一般的で、見込みの文様は III 類・IV 類の蛇の目釉剥ぎを想起させる。図 17 は口縁部がわずかに外反し、腰部は丸みを帯びる。2 度の釉がけで見込みに刷毛で丸文を施し、底部は高台~底にかけて露胎するが畳付けは白化粧後、釉剥ぎする。

III 類：外面に鉄釉か濃い鉛釉、内面に透明釉を施すもので白化粧無 (イ) と有 (ロ) がある。形状は口縁がやや外反し、腰部は丸みを帯びる。見込みに蛇目釉剥ぎが施され、畳付けは白化粧を施し釉剥ぎする。329 点 (碗の 5.9%) と少なく、イが 163 点、ロが 162 点とほぼ同じ割合で出土する。イ：形状をみると図 19 は直口、図 18・21・22 は外反口縁で、図 19 は内面の口縁と腰部に刷毛で白土の圈線を施す。図 21 は内面の口縁と腰部、見込みに刷毛で鉄釉と白土を塗る。図 22 はやや大ぶり外外面に鉄釉、内面に鉄釉で花文 (イッチン) を施すもので、他に比べて胎土もよく上質の感を受ける。本品の出土は県内では初めてである。ロ：図 23・24 は白化粧を施すもので前者が無文、後者が有文である。図 24 も図 22 と同様、

内面と見込みに飴釉で花文（イッチン）を施すもので、前者より小ぶりである。技法をみると見込みは蛇の目釉剥ぎされ、外底は高台～内底が露胎し畳付けに白土が残り、研磨は認められないことから、施釉の過渡期な技法と思われる。

IV類：器全体に白化粧を施し透明釉を掛け、見込みを蛇の目釉剥ぎ、外底も畳付けを釉剥ぎするもので、無文（a）、有文（b）がある。3408点（碗の61.2%）の出土で、そのうち有文は837点（IV類の24.6%）の出土である。有文（加飾）は技法によって①～④に細分類した。IV類a：図25は白化粧無しだが、碗の形状からここに含めた。内外面に黄釉を掛けるもので、口縁部は外し、高台断面は方形を呈する。瓦屋又吉小からの出土で、数点得られている。図44は白化粧後、内外面に透明釉を施したもので、口縁は玉縁を呈し高台断面は三角形、底面がやや凹むもので、前者とは形状が異なる。2571点（46.1%）の出土で最も多い。IV類b：文様を線彫りのみ＝①、線彫り＋単彩＝①イ、線彫り＋複彩＝①ロ、二彩のみ＝②、青釉＝③、呉須＝③イ、コバルト釉＝③ロ、イッチン（花文）＝④に細分類できる。IV類b①（線彫）：図26は白化粧後、トビガンナと沈線文を施す、図27は線彫りで、丸文の中に竹葉を描く。図28は花卉を彫った後、淡い飴釉を塗布する。図29は線彫りで細かい葉の上に呉須を塗布するものである。図30・31は線彫りで草花文を施した後、黄釉と緑釉を塗布するもので、図32は丸文となる。IV類b②（二彩）：図33はコバルト釉と黄釉で草花文を施すもので、素地は暗灰色を呈し白化粧は厚い。素地の影響か、呉須の発色は悪い。5点と少なく、瓦屋又吉小と名嘉座の出土に限られる。IV類b③（呉須）：図34・35は素地が濃茶褐色を呈するためか呉須の発色が悪く、図37・38は草花文、図36はコバルト釉を外面と内面に施すもので文様は3カ所の可能性あり。図39は丸文で内面に重ね焼きによる文様の青が残る。IV類④（花分-イッチン）：図40・41は鉄釉と青釉で施文、図42・43はコバルト釉と黄釉で、斜め下に釉垂れる。図42は花文を見込みと外面に4カ所、図43は外面に3カ所施すもので、後者は碗の文様では一般的だが、前者の見込みに文様のあるものは県内では初めての出土である。形状をみると図42は器高が低く、図43は底が厚く、高台断面は畳付け幅が細くて丸い。

#### <筒碗>（図45～47）

筒状で腰部は「く」字状に屈曲し、口唇及びその内面は蓋を被せるため露胎する。16点出土した。施釉はI類（図45）、II類（図46）とIV類の線彫りを施した（図47）がある。他に三島手（I類）も得られている。口径は8.6～10.4cmと前述の碗より小ぶり、後述する蓋の脚径9.6～11.8cmとほぼ同じ大きさである。

#### <天目型碗>（図48～51）

形状および釉色から天目茶碗を模倣<sup>註3</sup>したと考えられるものである。図48は腰部からの立ち上がり逆「ハ」字状、図49は「く」字状にくびれる口縁で、図50は胴～底部で直状に立ち上がり、図51は切り高台である。胎土は図48・49は灰褐色、図50・51は乳褐色を呈する。図51は底部の立ち上がりやや丸味を帯び、見込みも無釉で別の器種の可能性も考えられる。また、図50は茶と黒の釉の窯変が顕著である。18世紀代に作られた沖繩産施釉器の天目模倣は底部が高台タイプ<sup>註4</sup>であることから、本遺跡出土のものは異なる。

#### <小碗>（図52～70）

碗と同じく技法で分類した。425点（全体の4.1%）の出土で、IV類が247点、III類141点、II類12点、I類25点の出土である。IV類の有文は面取りも含まれる。以下、図示したものを略述する。I類a：図52は腰部が逆「ハ」字状を呈するもので、釉は透明釉で、胎土は淡灰色で気泡もなく内面は総釉で、小碗ではあまりない形状である。I類b：図53は腰部が丸く、外面に呉須で薄く文様を描き、見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。図54はやや大ぶりで外面には鉄釉で明瞭な草花文を描く、口径が10.0cmと筒碗の大きさに近いが、口唇が舌状のためここに含めた。II類：図55は内外面に濃い飴釉を施すもので、他の小碗に比べて大きく、内底は蛇の目釉剥ぎ、高台～外底は露胎する。III類：図56は白化粧-無（イ）、図58～61は白化粧有（ロ）である。図60・61は見込みが総釉、それ以外は見込みが蛇の目釉剥ぎする。外面は鉄釉か飴釉が一般的であるが、図61は外面に透明釉のみで灰色を呈し、掛け分けに見える。いずれも高台は「ハ」字状、断面は三角形を呈する。IV類：小碗の58.1%と最も多い。直口（図62）、外反（図63）で底部も9mmと厚手である。図64は総釉で、口唇が薄く、高台の形状は前出図60・61と似る。図65は外面を面取りするものでHA③で20点出土した。図66は呉須で山水文、図67・68はイッチンによる花文を施すが、前者が淡く（呉須）、後者が濃い（コバルト釉）。イッチンの釉は前者が口縁側、後者が底部側へと逆にたれる。形状をみると前者が直口で椎茸高台、後者は外反口縁、高台がやや内彎の方形を呈する。図69は青と茶で松葉を描き、高台は細く、畳付け～内底は無釉で、他の小碗とは形状が異なる。鑄込み成形<sup>註4</sup>の可能性が高い。図70は筒状で口径6.2cmと小さく、ぐい呑みの類ともとれるが、トビガンナと呉須を施すことからここで扱った。1点の出土。

#### <皿>（図71～95）

247点（2.4%）の出土で、ここでも技法による分類を行った。I類26.3%、II類28.3%、III類15.0%、IV類30.4%を占め、白化粧を施さないI＋II類が54.6%を占める。皿の大きさは、小：口径が10.0cm前後、底径が5.0cm前後、中：



口径 15.0cm 前後、底径 6.0cm 前後、大：口径 20.0cm 前後、底径 9.0cm に分けられるが、破片が多くサイズの分類は図示したものに留めた。

小：Ⅰ類 a (図 71) は見込みが総釉で高台が低いことから筒碗の可能性も考えられる。Ⅳ類 b (図 72・73) 前者は外反口縁で、内面に呉須で圏線、豊付けに鉄釉を塗る。後者は直口口縁で全体に光沢があり、内面は赤と銅緑釉で花文を描くが禿げる。いずれも上質である。

中：Ⅰ類 a (図 74) は浸し掛けの底部で腰部にロクロ痕が明瞭に残る。Ⅰ類 b (図 75～83)：図 75 は内彎、図 78～80 は口縁が受け口状に内湾するもので、図 78・79 は内面に鉄釉で加飾する。類例は『湧田古窯跡Ⅳ』(1999) にあり、同様の器形は『平安山原 B 遺跡』(2015、第 119 図) の有田産皿に見られる。Ⅱ類 b (図 76) は見込みに墨書(?) と圏線(鉄釉)を施す。Ⅲ類 a (図 82) は内面が白化粧のみ、外底は豊付け釉剥ぎのみである。Ⅲ類 b (図 83) は輪花で内面を縦位に幅広沈線文で蓮弁状に加飾するもので、高台は内縁を削る。Ⅳ類 b (図 84) は呉須で文様を四区画して山水文と草花文を描く、底部は中央に厚くなる。

大：Ⅱ類 a (図 85～88) 図 87 は内湾で薄手、図 88 は厚手で口縁部は方形に肥厚するもので沖縄産施釉陶器にはみられない形状である。図 85 と 86 は同じような釉を施すが、高台の形状が若干異なる。Ⅱ類 b：(図 89) は見込みに刷毛で丸文を描く。Ⅲ類 a (図 90) は外反、Ⅲ類 b (図 91) 刷毛で圏線、Ⅲ類 c (図 92) 内面に花文(イッチン)を施すもので、文様は碗に比べて大きく釉色も鉛釉を用いる。いずれも焼きが良い。Ⅳ類 a (図 93)、Ⅳ類 b は呉須(図 94) と二彩(図 95) がある。

#### <鉢> (図 96～115)

小 1 点、中 1 点、大 651 点の出土である。

小：図 96 は上面から八角形に面取りされ、口唇に薄い鉛釉で縁取りするもので、口径 10.2cm・底径 5.0cm 前後と碗に近い。

中：図 97 はアサガオ状に外反し、口縁断面は三角形を呈する。内面に呉須で草花文を施す。

大：651 点(6.2%) 技法からⅠ類とⅢ類があるが、前者(図 98・99) は口縁部が破損し詳細は不明。Ⅲ類は内湾(図 105・107) と逆「L」字状(図 108～110) がある。技法で見るとⅠ類は外面をトビガンナ(図 98) と櫛目状(図 99) に施文、さらに白土を埋めるいわゆる三島手で、素地は灰色で、内面と外面の高台～底が露胎する。鉢に類例がなく、内面が露胎することから、別の器種の可能性も考えられる。Ⅲ類は出土量が多く、白化粧無(イ)と白化粧有(ロ)がある。(イ) は図 100～104 で、図 100 は口縁部が舌状に外面に張り出し、図 102 は直口で口縁を縄目凸帯文で加飾、図 103 は内面に白土で花文(イッチン)を 2 カ所に施す。図 104 は輪花でアサガオ状に外反、外面にヒスイ釉、内面に刷毛目で文様を描く。(ロ) は図 105～115 で、口縁が内湾するもの(図 105～107)、逆「L」字状を呈するもの(図 108～113・115) がある。図 109 は「L」字の口縁部分に鉛釉で加飾し、外面にはヘラ調整が残る。図 110 は外面をトビガンナで加飾、図 111 は口唇に挟りがある。図 112・113 は内面に花文(イッチン) 文様、図 114 は輪花状、図 115 は鉢の中でもっともの大きく、内面を白化粧後、鉛釉を施すもので、類例は少ない。

#### <急須> (図 116～134)

口縁が直口に窄まって胴部が張り、底部が三脚で外底面と内面は露胎をなす。サイズは小が口径 5.0cm 前後、中が口径 8.0 前後、大が口径 10.0cm 前後に分けられる。形状は丸タイプが主体であるが、筒型(図 128) もある。施釉によりⅠ類(白化粧無)、Ⅱ類(鉛釉)、Ⅳ類(白化粧有)に分けられる。866 点(8.3%) の出土で、Ⅰ類 29 点、Ⅱ類 158 点、Ⅲ類 6 点、Ⅳ類 383 点でⅣ類が 66.5% (不明を除く) と最も多い。以下、大きさ別に略述する。

小(図 116～126)：文様を施すもので図 116 はトビガンナ、図 117 は圏線の中に花型のスタンプを施す。図 116 は全体に翡翠釉を掛け、釉の濃淡が加飾と思われる。胎土もよく、上等品であるが、白化粧が無いことからⅠ類とした。図 119・120 はⅡ類で前者は内面も透明釉を施し、後者は薄い鉛釉にトビガンナで加飾する。注口は 1 孔である。Ⅳ類は図 121～126 で、図 121 は白化粧のみ、図 122・123 は呉須で山水文を施すもので、後者は沈線が加わる。図 124 は線彫り、図 125 はコバルト釉で亀甲模様をラフに施す。図 126・127 は全面にコバルト釉を塗る。後者は肩部が角をなす形状から酒器に使われた可能性もある。5 点と出土数は少ない。図 128 は筒型で把手を有し、「水注」の形状に似るもので、後述の泥釉に類似する。

中(図 129～図 131)：図 129 はトビガンナを白土で埋めるいわゆる三島手(Ⅰ類 b)、図 130・131 は線彫り後、前者は呉須、後者は黄とコバルト釉を掛けるものである(Ⅳ類 b)。

大(図 132～134)：「アンビン」と呼ばれる大型の急須である。出土数は 13 点と少ない。

#### <酒器> (図 135～149)

177 点(1.7%) の出土である。技法よりⅠ類(白化粧無)、Ⅱ類(鉛釉か鉄釉)、Ⅳ類(白化粧有)があり、Ⅰ類は小

さく、Ⅱ・Ⅳ類は大きい。出土量をみるとⅠ・Ⅱ類が33.5%、Ⅳ類が65.3%と後者の方が多い。形状をみると筒型・丸型・ソロバン玉型・丸肩がある。

**筒型** (図135～139) : 45点出土。薄手でⅠ類(図135～137)とⅡ類(図138・139)があり、図139は縦位に深い線彫りを施す。図140は筒型の若干変形したもので、加飾は図139に似るが底部は他と異なり、高台である。**丸型**(図141～146) : 44点出土。図141はⅠ類でトビガンナを施し、図142はⅡ類で胴部にヘラ彫り、図143は底部が厚く基筈底をなす。図144は線彫りで丸文を配し、呉須を塗布したⅣ類をなすもので、呉須は淡く意匠は図39の碗に似る。図146は呉須、図145は線彫り後、黄と青釉を施す。**ソロバン玉型**(図147・148) : 26点の出土。図147はやや丸みがあり、縦と横の沈線に鉛釉で塗布、図148は細沈線を葉状に4分割し、注口部は略し3カ所に施す。黄と青の釉を塗布する。類似の文様は急須(図124)に見られる。**高筒型**(図149) : 胴の高いタイプで、1点の出土である。底部でやや張るものでⅣ類の線彫りである。

#### <鍋> (図150～156)

492点(4.7%)の出土で羽釜と茶釜もあるが、記述上ここにまとめ、A～C類に分類した。

**A類** : 口縁部が「く」字状に湾曲、その幅は1.0～1.7cmまでの幅があり、鍋の大きさに関連すると思われる。底部は三脚を呈し、外面は胴部まで施釉し胴下～底部は露胎、内面には鉛釉か鉄釉を薄く塗布するものである。図150～152は蓋受けが無釉(a)、図153は口唇が厚く施釉(b)。(a)が最も出土量が多く平面分布でみるとD1(祝女殿内)に集中、また、中には素地が赤褐色・粗粒で陶質土器に近いものも含まれている。(b)は上質で出土も少ない。図152は厚手で、白化粧のみで墨がみられるが文様かは不明。ロク口痕が明瞭、胎土も灰炭～乳褐色、器形も張りが強いことから違和感があり本土産の可能性もある。

**B類** : 胴部に鏝を圍繞する、いわゆる羽釜である。施釉の範囲は外面が鏝、内面は下～底部まで見られ、焼成もかなり良い。類例は陶質土器にも見られる。

**C類** : 図155・156は鏝を持ち、施釉の範囲もB類に類似するが、口縁が内湾する点で異なる。『湧田古窯跡Ⅳ』(1999)の瓦質土器の茶釜に似る。

#### <蓋> (図157～177)

175点(1.7%)の出土で4種類得られた。急須の蓋は74点、筒碗の蓋6点、油壺(マンダガーミ)の蓋67点、鍋の蓋23点、不明5点の出土で急須の蓋が最も多い。以下、各種ごとに記述する。**急須** : 鏝径7.0cm～10.2cmで、中央に撮みと脚を有するもの(図157～165)である。図157は撮みの中央に径1.5mmの孔、図159はトビガンナ、図162は葉を線彫りで青(コバルト)と黄釉で3カ所、図161は楕円の濃淡の淡彩、図163は黄と青釉で全面に亀甲模様、図169は二彩、図160は呉須を全面に施すものである。図164はやや大きめの蓋で脚を欠損する。**筒碗** : 脚が短く甲がドーム状に膨らむもので径9.6～11.8cmの範囲に収まる。図9は三島手、図10は呉須、図11は線彫りに二彩、図12は緑釉を全面に施す。図167は図47の筒碗と同じ文様を施す。**油壺** : 直径12.0cm前後で白化粧は無く、甲に窯詰めのための蛇の目釉剥ぎがある。撮みは断面が丸いもの(図170)と高台に近いもの(図171)があるが、口径がほぼ同じであることから蓋の大きさとは関係ないようである。**鍋** : 口径が11.4～18.2cmがあり、身と重なる口唇部は露胎である。撮みは高台タイプで、基本的に鉛釉が施すが、中には濁白釉を施すものがある。口唇の形状は外反(図174)と直口(図173・176)があり、圏線(図173)、鉄釉で丸文を配する(図176)などの加飾がみられる。中には撮みに砂が付着するものもある。**不明** : 図177は脚有タイプで、縁に段を有するもので、器種不明。胎土・混和材から褐釉陶器に近い。

#### <火取> (図178～188)

197点(1.9%)の出土である。口縁部の形状から内湾は19点、筒型173点があり後者が多い。加飾をみると三島手3点、呉須5点、線彫り3点がある。内湾型(図178)と筒型(図179～188)に分けられ、筒型はさらに口縁部が逆「L」字状(図179・180)と直状(図181～188)がある。施釉の範囲は内面の口縁部から外面の腰部までが一般的である。加飾についてみると内湾型は外面にトビガンナを施し、部分的に鉛釉を施すもの。筒型は鉛釉を施すものは横位の細かい沈線文(図180)、深い沈線文を格子状+斜位に組み合わせたもの(図181～183)、竹節状を呈するものがある。三島手(図184)、黒釉と緑釉で掛け分けたもの(図185)がある。白化粧後、口唇に呉須を掛けるもの(図186)、銅緑釉をかけた後、銀化現象により光沢のある上質な作りのもの(図187・188)があり、そのうち図188はHA④Ⅲ層の出土で使用時期を示唆する。また、図182・188は高台が胴部からまっすぐ伸びる。口唇の内側が剥離しているもの(図186)は使用によるものであろう。

#### <香炉> (図189～194)

口縁から頸部まではすばみ、胴部で大きく膨らみ、三脚を有するもので、施釉の範囲は内面の頸部から外面の腰部ま

である。口縁の形状は逆「L」字状（A類）と直状（B類）があり、ほとんどがA類である。HA③で34点、HA②で13点の計47点（0.5%）の出土で、他の遺物と異なりHA③に多い。A類：図189は逆「L」字状の口縁でやや内傾し、濃い鉛釉を施す。図190は前者に比べて大きい、薄作りで胴が張り外面に貼り付け文（？）を施す。図192は白化粧後緑釉を施すもので、口縁は釉が厚く丸みをなす。釉が厚いため、底部に径8.0cmの溶着痕が残る。B類：図193は径19.8cmと大ぶりの香炉で、他の香炉より一回り大きい。ほぼ全面に炭が付着し、建物の破棄直前まで使用したと思われる。HA②祝女殿内で最も遺物の集中するD1で出土。図194は素地が濃橙褐色、脚は湾曲が強く、底厚9mm、底面が角を持つことから、香炉以外の可能性も考えられる。

#### <火炉>（図195～202）

170点（1.6%）得られ、筒型（A類）と湾曲型（B類）に分けられる。火取と同様に外面に鉛釉を施すものがほとんどで、大小のサイズが認められる。A類（図195～198）：口径が13.0cm前後の小さいものである。内面突起の形状をみると図195は斜め上方向、図197は口縁に対して水平で平面は三角形である。また、図196・197は口縁部に「U」字状の挟りが認められる。これらはほぼ同じ大きさを口唇に白化粧を施し、外面に火取と同様、圏線で加飾するものである。図198は前3者に比べてわずかに開くもので、底部は逆「U」字状の浅い挟りで脚となし、淡い鉛釉を施すが前者と比べると胎土が密で沖縄産施釉陶器としては上質である。B類（図199～202）：口径20.0cm前後でA類より一回り大きく、胴部が膨らむものである。図199は薄手で、口縁と胴部が2段に膨らみ瓢箪型をなす。突起の断面は三角形で厚みがある。外面に横耳を持ち、頸部にトビガンナで格子状の文様を施す。図200は横耳を持ち、格子状の模様を胴部の張ったところに施す。図201・202も図200を一回り大きくしたもので、図201は口縁部が方形に肥厚し、突起部も大きい。図202は径4.3cmの脚を有するもので、胴上部に格子状の模様を施す。素地をみると図200以外は淡灰色で密であることから上質である。B類は加飾も凝り素地上質のものも多く、茶器（風炉）として用いた可能性もある。

#### <壺>（図203～211）

主に外面に濃い鉛釉か鉄釉、内面に防水のために薄い釉を施し、口唇に白化粧を施し、釉剥ぎするものが一般的で、498点（4.7%）出土した。大きさ・形状からA～C類に分類した。A類（図203・204）：図203は口縁が丸く、口径が6.1cmを測るもので、口唇～内面の頸部まで露胎、図204は胴上部に縦耳を、胴部に圏線を施すもので、傾きからA類に含めた。B類（図205～209）：図205は口唇が平らで釉剥ぎにより白化粧を残すもので、内面に薄い釉を施すいわゆる「アンダガーミ」と称されるものである。図205～209で口径6.5～8.1cmの小（図205・206）、口径10.8cm前後の中（図207）、12.6cm前後の大（図208・209）がある。C類：図210は高台から腰部にかけて湾曲が強く腰部は薄くなり、胴上部に厚くなる傾向が見られ、内面のロク口痕が明瞭で外底は無釉、高台を貼り付けた可能性もあり、アンダガーミとは若干異なるようである。祝女殿内・名嘉座・三良又吉小などから出土。

#### <瓶>（図212～229）

536点（5.1%）の出土である。瓶は基本的に内面に釉は施されてなく、6種に分けられたが破片のため、遺物の集計は大・中・小でまとめた。ここでは図示したものを中心に、形状ごとに略述する。瓶①（図212～215）：口径が2.0cm前後の有頸で胴部の張る碁笥底の瓶である。前2者は口縁が玉縁で素地が赤～茶褐色を呈し胎土もやや粗く、後2者は灰褐色を呈する。図212は透明釉のみ、図213は胴部に白化粧を施し、透明釉を掛け、掛け分け様に仕上げて胴部にイチシンの文様が残る。図214・215は頸部が欠損するもので、図214は素地が灰色で白粒を混入し、図215は白化粧後に透明釉をかける。他より胴の張りが弱い。瓶②（図216～218）：器高6.5cm前後の小瓶で、口縁部がアサガオ状、胴部の張るものである。施釉は黒釉（図216）、透明釉（図217）の高台タイプと黒釉で碁笥底タイプ（図218）がある。図218は内面が施釉され、厚手であることから前2者とは用途が異なる可能性もある。前者はフチュクルビンか。瓶③（図219）：破片のため全形は窺えないが、胎土や高台の作りから分類した。瓶④（図220～222）：墓前や仏前に酒を備える渡名喜瓶と呼ばれるもので、数種の形がある。図220は頸部が筒状を呈し胴下部に広がる形で、篋で草花文を2カ所に施す。図221は胴部が瓢箪状に膨らむもので、嘉瓶の可能性もある。図222は底部で前者と異なりくびれない高台で砂が付着する。瓶⑤（図223・224）：図224は双耳の花瓶である。瓶⑥：大・中型（図225～229）：図225・226は胴で丸くなり、図227・228は胴長で腰部が「く」字状に屈曲するものである。いずれも鉛釉を施し、胎土も上質である。図229は大型の無頸瓶で底径11.0cmと大きく、加飾のため鉛釉を円形に施す。祝女殿内と照屋先生という広い範囲で接合がされた。焼きも良く、他のものより新しい時期に属すると思われる。

#### <灯明具>（図230～235）

17点出土した。皿と器台タイプがある。

皿：径10cm前後の直口の皿で、前述の皿の小とも重なるが、内面に施釉し、外面は口唇近くの施釉のみで、小皿と区別した。図230は完形で口縁に4mmの突起がある。図化した3点は高台の形状が異なるもので、施釉も図232がⅠ類、図231がⅡ類、

図 230 がⅢ類である。器台 (図 233 ~ 235): 図 233 は最大胴径 5.5cm を測り、火皿部分が黒釉、器台部分が黄釉を塗る。図 234 は器台部分が破損するもので、火皿部は前者よりはやや大きめである。図 235 は中の芯の部分と思われる。

< 杯 > (図 236・237)

8 点出土した。口径が 3 ~ 5cm の外反口縁で、腰は丸みを帯び、高台は細く、胎土は密である。底部の形状から型成形の可能性も想定される。

< 泥釉・マンガン釉 > (図 238 ~ 250)

素地に洗練された土を用いる薄手のもの (a)、素地が「荒焼」でマンガン釉のもの (b) をここにまとめた。

(a) (図 238 ~ 245): 泥釉を掛けたものと無釉のものがあり、器種は水注と瓶がある。水注は筒状 (図 238・239) で、注口 (図 240)、把手 (図 241) から中国の宜興窯の器種と酷似する。図 238 以外は泥釉を施す。花瓶は残りの良い脚台タイプの瓶 (図 243)、口縁 (図 244)、脚台 (図 245) がある。図 243 は上絵に五弁花を主文、竹葉を副文にあしらう。図 244 は白釉を施し、図 245 は脚台で径 5mm の孔を有する。

(b) (図 246 ~ 250): 素地はいわゆる荒焼にマンガン釉を施すもので全て瓶である。図 246 ~ 247 はやや小ぶり、図 249・250 は大きめで、後者は底径 6.3cm の碁筒底となる。

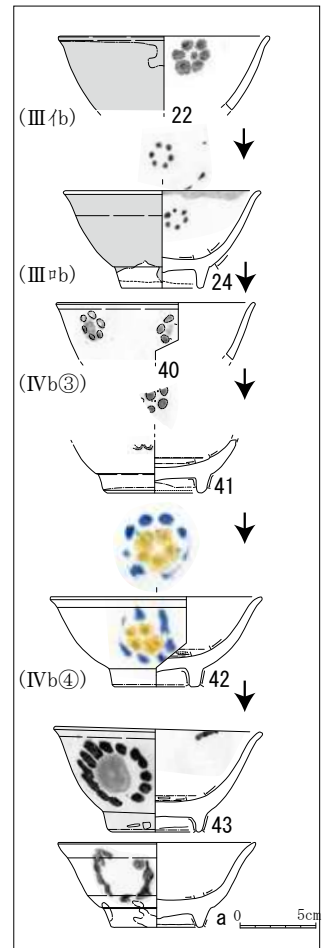
< 古典焼 > (図 251・252)

図 251・252 は古典焼あるいは大正焼<sup>註5</sup>ともいわれるものである。図 251 は六角形の瓶の胴部で、最大胴径 9.0cm、HA ② B7 II 層の出土。図 252 は筒状の火炉の胴部で胴径 16.4cm、三角形の中を格子で埋める。HA ④ I 層の出土。

< 小 結 >

沖縄産施釉陶器は 10491 点と出土遺物の中でも多く、その中でも碗は 5572 点と全体の 53.1% を占めた。本遺跡からは近代の平安山集落の屋敷跡が明瞭に検出されており第 55 図に屋敷ごとの碗の分類を示した。これによると 17C 後半 ~ 18C 後半とされる I 類の灰釉碗が約 55% を占める仲村渠・大屋、18C 中 ~ 19C 後半とされる<sup>註6</sup> IV 類が 70% を超える小渡小・蒲伊礼小・名嘉座・瓦屋又吉小と屋敷で違いがみられる。最も出土の多い祝女殿内は I・II 類が 36.9%、IV 類が 56.4% でその中間の値を示す。総じて I・II 類の割合の多い屋敷は内陸側に位置し、IV 類が主体をなす屋敷は海側に位置する。

さらに IV 類の文様をみると IV b ④ が IV b の (有文) 66.3% で最も多くを占める。文様は花文 (イッチン) で、コバルト釉で花卉を施しと黄釉 (薄い飴釉) で花芯を作り、器全体に 3 組を施すのが一般に見られる形である。本遺跡からイッチンの技法による加飾がⅢ類からも見られることから、第 54 図に変遷を示した。これによるとⅢ類の掛け分けに白化粧なしに鉄釉を施文したもの (図 22) から、白化粧を施した後に飴釉で施文 (図 24)、IV 類の白化粧を施し、飴釉で施文したもの (図 40・41)、コバルト釉で施文したものは見込みと 4 個を配するもの (図 42)、外面のみに文様を 3 個配するもの (図 43)、他に花卉のみで花芯の欠落するもの (図 a) がある。沖縄産施釉陶器の製作年代から少なくともⅢ類は IV 類より古いと考えられ、図 22・24 → 図 40・41 の文様の変遷が想定される。図 22・24 は鉄釉や飴釉を用い、図 42・43・a はコバルト釉を用いていることから 19 世紀後半以降と考えられる。図 22・24 が出土した仲村渠は I・II 類の出土が約 60% を占めることから屋敷の中では最も古いとされる。図 40・41 はコバルト釉が導入される以前のイッチン (花文) で祝女殿内の出土である。祝女殿内は前述したように I 類 ~ IV 類の出土割合も中間を示し、出土量も全体の 3 割を占めることから、平安山集落の古い時期から最も新しい時期まで存続し、集落の中心的存在であったことが窺える。今後、碗以外の器種構成を明らかにするとより詳細になるとと思われる。



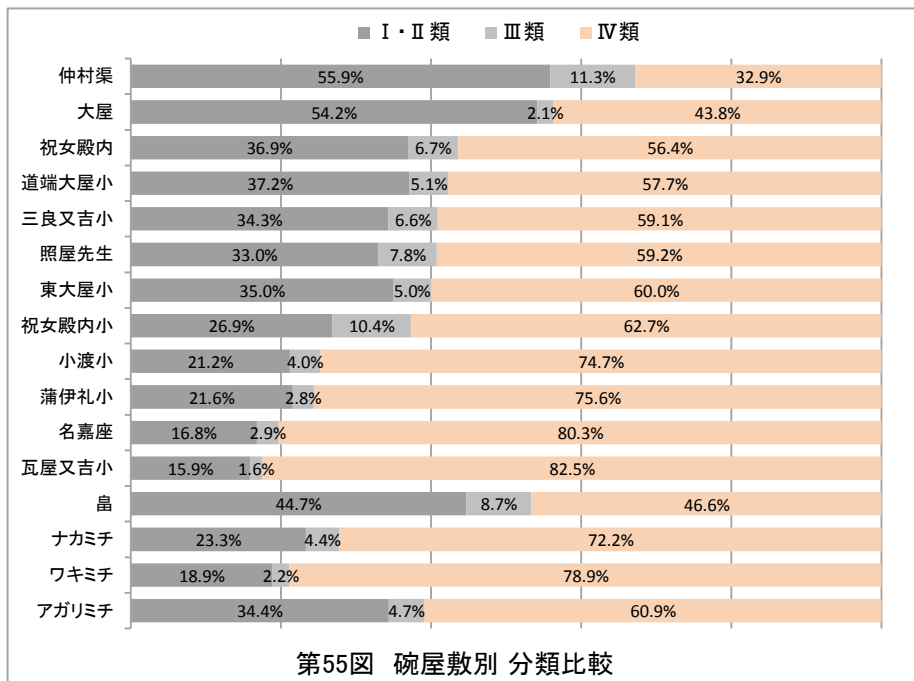
第 54 図 イッチン文様の変遷

第29表 沖縄産施釉陶器出土量

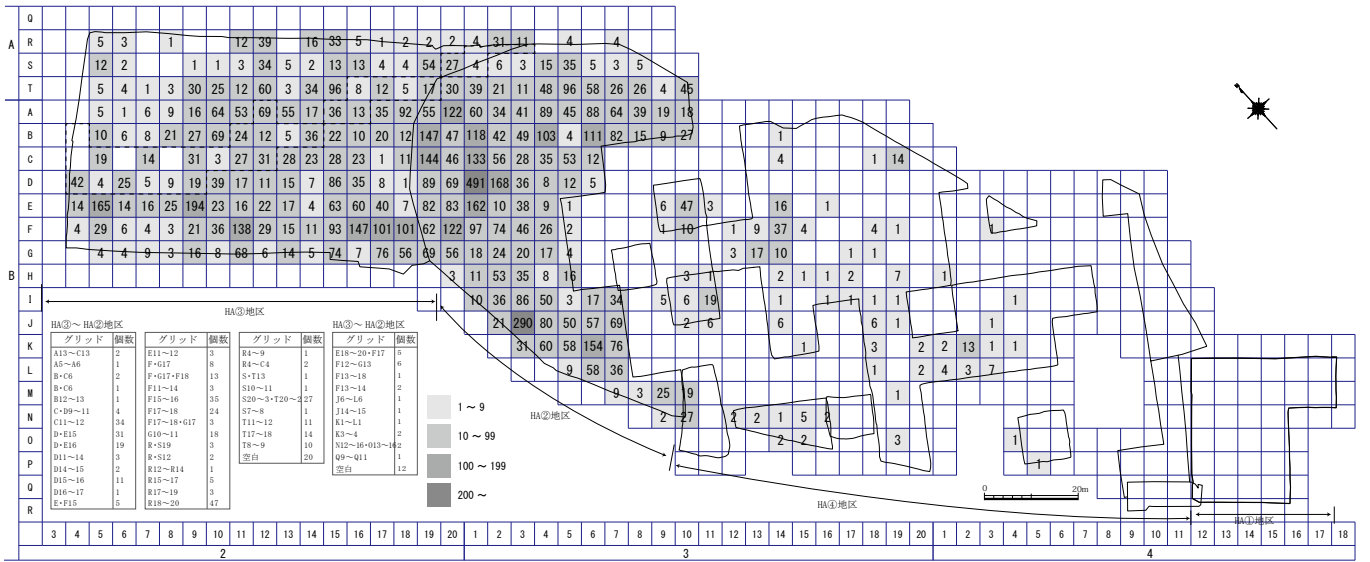
地区	器種	碗								小碗				皿				鉢				急須										
		I		II		III		IV		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	小	中	大	不明							
		a	b	a	b	イ	ロ	不明	a	b			イ	ロ	a	b			イ	ロ	a	b										
HA③	I	56	2	18	4	12	3		110	24			7	8	1	2	2	3	2	4	3		3	2	14		13	23	4	1		
	II	493	16	109	33	44	54		867	245	6	4	8	67	70	26	20	17	5	2	14	19	9	13	11	206	1	1	96	149	59	8
	III	14		2		1	2		10	2			4	1			1	1								7		1	1			
	IV	9		1	1	1			16	3	1			1												3		4	3			
	不明			0	1				5	2				1												1						
小計	572	18	130	39	58	59	0	1008	276	7	4	8	78	81	27	22	20	9	4	18	22	9	16	13	231	1	1	114	176	63	9	
HA②	I	35	3	2	4	2	5		93	27	2			4	2	5	4		2	3	2	1	8	2	25		12	7	2	11		
	II上	129	14	9	13	11	8	1	227	142		2	1	5	10	2	3	5		1	1	3	3	2	6	47	1	29	14		27	
	II	651	34	69	39	87	65	3	1156	371	15	5	15	32	86	33	33	38	10	9	13	10	7	18	20	209	5	7	134	59	21	125
	III	18		1			1		14	3	1	1	2		1	1	2	2	1									1				
小計	833	51	81	56	100	79	4	1490	543	18	8	18	37	101	38	43	49	11	12	17	15	11	28	28	281	6	7	175	81	23	163	
HA④	I																														1	
	II	46		7	2	5	23		73	18							1		1	2	1		4	2	14		43	1		7		
	III						1																		1		1	5				
	不明																												3			
小計	46	0	7	2	5	24	0	73	18	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1	0	4	2	15	0	0	1	52	1	7	
HA①	I																														1	
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	1451	69	218	97	163	162	4	2571	837	25	12	26	115	182	65	65	70	20	17	37	38	20	48	43	527	7	8	290	310	87	179	
器種別合計								5572					425					247						653						866		

第30表 屋敷別出土量

屋敷(ミチ)名	器種				小碗	皿	鉢	急須	酒器	鍋	蓋	火取	香炉	火炉	壺	瓶	杯	灯明具	器種不明	合計
	I・II	III	IV																	
仲村渠	119	24	70	39	14	15	35	5	15	1	10	6	9	17	44				25	448
大屋	26	1	21	6	1	11	6	2	9	5	4	2	1	5	16				8	124
祝女殿内	560	101	855	123	77	197	245	52	189	45	78	9	73	133	155	3	4	4	45	2944
道端大屋小	123	17	191	24	12	36	84	18	24	10	3	4	18	27	28	1	2	2	38	660
三良又吉小	68	13	117	28	17	31	51	11	40	12	12	1	11	46	25		1	1	16	500
照屋先生	34	8	61	9	10	18	22	10	25	8	4		8	24	22		1	2	266	
東大屋小	7	1	12		1	9	1			1				2					34	
祝女殿内小	18	7	42	6	1	6	9	2	2		3	1		1	1				99	
小渡小	21	4	74	7	1	31	7	1	2	5		2	1	19	6			9	190	
蒲伊礼小	69	9	242	31	6	68	52	13	23	10	9	7	10	16	22	1		37	625	
名嘉座	64	11	306	21	13	37	52	11	22	17	3	2	5	54	30	1		11	660	
瓦屋又吉小	50	5	259	13	7	27	31	6	18	10	6	4	2	31	29		2	11	511	
畠	160	31	167	17	13	35	46	9	43	10	11	2	15	36	43		2	11	651	
ナカミチ	74	14	229	29	12	51	49	6	19	13	7	4	8	59	28			46	648	
ワキミチ	17	2	71	3	4	5	10	2	12	7	2		1	6	1		4	1	148	
アガリミチ	22	3	39	2	3	10	9	3	4	1		1	3	5	5	1			111	
道	2																		2	
合計	1434	251	2756	358	192	587	709	151	447	155	152	45	165	481	455	7	16	260	8621	



酒器				鍋			蓋				火取			香炉				火炉			壺				瓶				灯明具			器種不明	合計			
筒	丸	ソパン	不明	A	B・C	急須	筒碗	油壺	鍋	不	内筒	筒	不明	大	中	小	不明	筒型	湾曲	不明	小	中	大	不明	大	中	小	不明	杯	皿	燭台			不明		
1	3	1	5	8		1		1				7				2		3		3	3	11	6	1		15	10	2				24	428			
6	23	13	24	94		23	4	25	2		3	40	1	3	13	7	8	41	3	25	22	80	57	15	13	69	54	25	2	2	1	254	3624			
				1								2											1										1	55		
				5		1						4	1	1									1										2	58		
												1											1										2	14		
7	26	14	29	108	0	25	4	26	2	0	3	54	2	4	15	7	8	44	3	28	25	93	64	16	13	86	64	28	2	2	1	0	283	4179		
7	2		2	9		4		2	1	1		11					1	1	1	6		2	27	1	4	4	9					10	369			
9	2	2	3	42		7		4	1		2	14			1		3		8		1	2	67	2	5	7	32	1				13	945			
21	5	10	28	312	2	35	2	35	16	4	13	77		1	1	2	6	25	2	48	8	2		181	3	25	25	191	4	10	1	2	78	4554		
1	1			14		1			2		1	1					1						3										7	81		
38	10	12	33	377	3	46	2	41	20	5	16	103	0	1	2	2	8	30	3	62	8	3	4	278	6	34	36	239	5	11	1	2	101	5949		
																																			2	
	8				4		3					16	2											4	1		23	3	3	1			25	343		
								1																2										2	14	
																																			3	
0	8	0	0	4	0	3	0	0	1	0	0	16	3	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	23	4	3	1	0	0	0	27	362		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
45	44	26	62	489	3	74	6	67	23	5	19	173	5	5	17	9	16	74	6	90	33	102	69	294	19	143	104	270	8	13	2	2	411	10491		
	177				492			175				197										498			536			8		17		411				



第 56 図 沖縄産施釉陶器 平面分布

第 31 表 碗IV類 (屋敷別) 出土量

分類	IV a	IV b					IV類合計	
		①	②	③	④	不明		
仲村渠	54	1		5	10		16	70
大屋	19					2		21
祝女殿内	611	10	2	62	156	14	244	855
道端大屋小	150	1		13	26	1	41	191
三良又吉小	104	4		2	7		13	117
照屋先生	45			4	11	1	16	61
東大屋小	6	1		3	2		6	12
祝女殿内小	34	3		3	2		8	42
小渡小	67			2	5		7	74
蒲伊礼小	157			14	68	3	85	242
名嘉座	248	5	3	9	40	1	58	306
瓦屋又吉小	159	5	5	21	68	1	100	259
畠	110	1	1	19	35	1	57	167
ナカミチ	167			25	37		62	229
ワキミチ	58	2		2	9		13	71
アガリミチ	22			1	16		17	39
合計	2011	33	11	185	494	22	745	2756

註 1：中には黒釉も含まれるが、施釉の濃淡により、発色が異なるため、ここでは飴釉で統一し、黒釉、あるいは飴釉の濃いもの（濃）、飴釉（淡）とした。

註 2：浸し掛け：従来の研究や報告では、灰釉碗によくみられるこの施釉法を、「フィガキー（振り掛け）」技法としているものが多い。・・・内底を最初から施釉しない技法。容器をためた釉薬に口縁部から浸す、いわゆる「浸し掛け」の技法を用いたと考えるのが妥当であろう。（木村 謙介 2010 沖縄産施釉陶器に関する基礎研究（1）、壺屋焼物博物館紀要第 11 号、P1-20）

註 3：大橋康二氏の同定

註 4：沖縄県立博物館・美術館×那覇市壺屋博物館合同企画展 2011『琉球陶器の来た道』（株）沖縄文化の杜

註 5：1928-32 年ごろ、奈良県出身の黒田里庵が海外やヤマトに輸出するため、南洋風なデザインの焼かせたものをさす。最近では琉球古典焼と呼称する。

註 6：灰釉碗の存続年代について池田は灰釉碗と黒釉碗の細分から 17C 後半～18C 中頃、家田は肥前系皿の写しの存在から 17C 後半～18C 後半、化粧掛け上焼を池田は 18 世紀中葉、家田は 18 世紀後半とする（池田 2011）。

第32表-1 沖繩産施釉陶器 観察一覧

第図 図版	図番 号	器形	分類 / 施釉	部位	口径・器高 底径 (cm)	形状 (口・腰底) 文様: 外 / 内 器面調整 (cm)	釉 (白化粧有無 / 外面 / 内面) 露胎: 外面 / 内面 貫入	素地	地区・グリッド・層 遺構・台帳 (取) 番号	
第57図・図版34	1	碗	I a	口~底	13.2/6.1/6.6	口:直口一丸。底:方形一内縁一削、厚0.6、高1.1。腰部:直状。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み。	乳~灰 / 疎	HA ③ D11 II 台 1165	
	2			口~底	13.4/6.1/7	口:直口一丸。底:台形、厚0.5、高1.1。腰:直状。文様: - / 見込み一斑点。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底、砂 / 見込み。	淡灰色	HA ② D1 II 祝殿台 361	
	3			底	- / - / 6.4	底:三角、厚0.6、高1.5。腰:直状。焼き膨れ。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み (熔)。	灰色	HA ③ S12 II S-7 台 714	
	4			口~底	13.2/5/6.8	口:直口一角。底:台形、厚0.6、高0.9。腰:丸味。器調: 叩 / 叩。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み。	淡灰色	HA ② II 台 923	
	5			口~底	13/6/7	口:直口一丸。底:台形一やや丸、底:三角一丸、厚0.8、高1.2。釉は直線に掛かる。	釉:有 / 透 / 透、ガラス質。露胎:腰~底 / 見込み。貫入○。	灰~乳色	HA ② D1 II 祝殿台 355	
	6			口~底	13.2/5.9/7.4	口:直口一丸。底:方形、厚0.8、高1.2。腰:丸味。器調: 叩○ / 叩。	釉:無 / 透 / 透。露胎:高~底 (量削) / 見込み。	淡灰~乳色	HA ② B19 II 祝殿 701 台 864	
	7			口	13.6 / - / -	口:外反、口唇下0.8よりくびれ一丸。器調: 叩 / 叩。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み。貫入○。	乳色	HA ③ T6 II 台 2258	
	8			口	14 / - / -	口:直状、口唇下1.0よりくびれ一舌。本土 or 中国かも土白っぽい。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み。貫入○。	淡灰色	HA ③ A12 II 台 2819	
	9			口	12.2 / - / -	口:直口一丸、厚0.3。重ね焼き。	釉:無 / 透 / 透。	灰色	HA ② K6 II 三良台 1828	
	10			底	- / - / 6.6	底:方形、高台張付か。厚0.9、高0.8。腰:丸味。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み。	乳色、細	HA ② K6 II 三良台 1567	
	11			底	- / - / 6.2	底:丸味、厚0.6、高0.8。腰:やや丸。	釉:無 / 透 / 無。露胎:量~底一砂 / 見込み、熔着有。	淡灰 / 細粒	HA ② D1 II 祝殿台 1371	
	12			底	- / - / 5.4	底:方形、厚0.8、高1.1。腰:丸み。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 総。	淡灰色	HA ③ S20 ~ 03.T20 ~ 02 II 台 1616	
	13			口~底	I b	口~底	12.6/5.6/6.4	口:直口一丸。底:台形、厚0.4、高0.8。腰部:丸み。文様: - / 鉄釉 (丸文と圏線)。	釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底、7 / 見込み。	灰色
	14	底	- / - / 6.4	底:台形、厚0.8一中央厚、高1.4。腰:直状。文様: - / 見込みに7 / けで丸文 (ドーナツ状)。		釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底、7 / 見込み。	乳~灰色	HA ③ A11 II 台 2952		
	15	口~底	13.4/6.1/7	口:直口、口唇膨。底:台形、厚0.7、高1.3。文様: 見込みに丸文径 3.0。		釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底、砂 / 見込み。	淡灰色 / 細	HA ② K6 II 三良台 1782		
	16	口	14.3 / - / -	口:直口一丸。文様: 鉄釉で草花 / -。		釉:無 / 透 / 透。露胎:腰~底 / 見込み。	灰色	HA ② E20 II 上 台 702		
	17	口~底	II b	口~底	13.4/6.5/6.6	口:やや外反一舌。底:台形、厚0.7、高1.4。文様: - / 見込み一丸文。2回掻き取り。	釉:無 / 濃胎 / 濃胎。露胎:高~底一7 / 量削 / 見込み。	乳色	HA ③ B11 II 台 2600	
	18	口~底	III b	口~底	13.4/6.5/6.2	口:やや外反一舌。底:台形、厚0.8、高1.1。文様: - / 胴と見込みに圏線 (刷毛目、白)。	釉:無 / 濃胎 / 透。露胎:高~底一7 / 量削 / 蛇目。	淡~乳	HA ③ S12 II S-7 台 714	
	19	口		12.4 / - / -	口:直口一丸。文様: - / 口・腰に圏、3本 (鉄釉 + 白土)。	釉:無 / 黒 / 透。	淡乳色 / 細	HA ② D1 II 祝殿台 1468		
	20	底		- / - / 6.1	底:台形、厚0.8、高1.3。文様: - / 2本圏線 (白 + 黒)・見込みに丸文2.8 (白)。	釉:無 / 黒 / 透。露胎:高~底 (部分)、量削 / 蛇目一熔 (砂)。	明灰色 / 細	HA ② D1 II 祝殿不建台 829		
	21	口~底		口~底	12.7/5.8/6	口:外反一玉縁。底:台形、厚0.4、高1.2。文様: - / 鉄釉一唇、胴一圏線一2本。見込みに丸文2.4。	釉:無 / 黒 / 透。露胎:高~底 / 蛇目。	明灰色 / 細	HA ② D1 II 祝殿不建台 338	
	22	口	14.1 / - / -	口:外反一丸。文様: 口唇一黒釉 / 胴一鉄釉でイッチン (初例)。	釉:有 / 鉄、口唇一透 / 透。	灰色	HA ③ A10 II 台 2820			
	23	底	III a	底	- / - / 6.8	底:方形丸み、厚0.9、高0.9。器調: 叩 (腰) / -。	釉:有 / 失鉄 / 透。露胎:量削、7 / 蛇目一熔一7 / 。	乳色	HA ③ B9 III S-546 台 3041	
	24	口~底	III b	口~底	13/6.4/5.4	口:外反一玉。底:台形、厚1.0、中央厚、高1.3。文様: - / 口唇一鉄釉、イッチン (胴と見込み)。	釉:有 / 濃胎 / 透。露胎:高~底、7 / 蛇目。	乳色	HA ③ A12 II 台 1148	
	25	口~底	IV a	口~底	12.8/6.1/6	口:外反一丸。底:四角一丸、厚0.6。	釉:無 / 淡胎 / 淡胎。露胎:量削 / 蛇目。	濃乳色	HA ② F1+F20 II 瓦屋 台 1597	
	26	底	IV b ①	底	- / - / 7	底:四角、内湾、厚0.5。文様: 線彫 (胴部一トビガンナ、腰一圏線) + 淡鉄釉 / -。	釉:有 / 透 / 透。露胎:外底一白化粧無、量削、7 / 蛇目。	濃灰色	HA ② A1 II 上 台 1785	
	27	底		- / - / 6.5	文様: 線彫 (丸の中に竹葉?) / -。	釉:有 / 透 / 透。露胎: - / 蛇目。	乳色	HA ② D2 II 祝殿台 1368		
	28	口		12.1 / - / -	口:外反一舌一丸。文様: 線彫 (花文) 淡呉須 / -。	釉:有 / 透 / 透。	淡乳色	HA ② L5 II 三良台 1270		
	29	口		10.8 / - / -	口:外反一舌。文様: 線彫 (草花文) + 呉須 / -。文様が細かい。	釉:有 (厚) / 透 / 透。	灰色	HA ③ G11 II 台 1868		
	30	口	IV b ③	口	14.2 / - / -	口:外反一玉。文様: 線彫 (草花) + 彩 (黄・緑) / 緑。	釉:有 / 透 / 透。	濃乳~橙色	HA ② I3 II 名嘉座台 2352	
	31	胴	IV b ①	胴	- / - / 腰 7.1	文様: 線彫 (葉文) + 黄釉 / -。	釉:有 / 透 / 透。露胎: - / 蛇目。	乳色	HA ② A10 II 祝殿 SD08 台 1955	
	32	口~底	IV b ③	口~底	13/6.2/6.2	口:外反一玉。底:台形、厚0.8、高1.0。文様: 線彫 (丸一3か所) + 彩 (緑 + 茶) / -。	釉:有 / 透 / 透。露胎:量削、7 / 蛇目。	乳色	HA ② H3 II 名嘉座台 1166	
	33	口~底		12.6/6/6	口:外反一玉。熔着あり。底:台形、厚0.7、高1.1。文様: 二彩 (草花文) - 呉須一悪 + 黄 / 見込み・口唇。呉須一悪。	釉:有 / 透 / 透。露胎:7 / 厚、量削 / 蛇目。	濃茶~灰色	HA ② F19 II 上 瓦屋台 1538		
	34	口	IV b ②	口	11.9 / - / -	口:外反一丸。文様: 呉須一悪 (草花文) / 口縁一呉須一悪 (草花文)。図35と同一個体。	釉:有 / 透 / 透。	濃茶色	HA ③ G15 II 台 1760	
	35	底		- / - / 6	底:台形、厚1.0、高1.1。文様: 呉須一悪 / 見込みに呉須一悪 (1并)。図34と同一個体。	釉:有 (厚) / 失透 / 失透。露胎:量削、7 / 蛇目、墨。	濃茶~濃灰色	HA ③ F15 II S-3 台 534		
	36	口~底		口~底	13.8/6.6/6.8	口:外反一舌。底:台形、厚1.1、高1.1。文様: コバルト (草花文) / 口縁一コバルト (草花文)。	釉:有 / 透 / 透。露胎:量削一7 / 蛇目。	乳色	HA ③ A18 II S-12 台 532	
	37	口		15.2/7.4/7.3	口:外反一丸。文様: コバルト (草花) / コバルト (草花文一細)。	釉:有 / 透 / 透。露胎:量削 / 蛇目、7 / 。	乳色	HA ② D1 II 祝殿台 1468		
	38	底	- / - / 5.8	底:厚1.1。文様: 呉須 (草花) 青一淡いかも / -。	釉:有 / 透 / 透。露胎:量削、+ 7 / 蛇目一深。	淡乳	HA ② E19 II 上 台 705			
	第58図・図版35	39	口~底	IV b ③	口~底	13.4/6.9/6.8	口:やや外反一丸。底:台形、厚0.7。文様: コバルト (丸文一顔?) / 青釉が残。	釉:有 / 透 / 透。露胎:量削○ / 蛇目。	乳色	HA ③ F15 II S-3 台 685
		40	口		13.2 / - / -	口:外反一丸。文様: 彩一黄・鉄 (イッチン一6個) / -。	釉:有 / 透、気泡 / 透。	濃乳	HA ② B2 I 祝殿台 2537	
		41	底		- / - / 7	底:方形、線彫り、厚0.7、高1.2。文様: イッチン / 見込みにイッチン (花文、丁字) 鉄釉。	釉:有 (外底一無) / 透 / 透。露胎:量削、7 / 蛇目厚。	濃乳色	HA ② B19 II 祝殿701 台 865	

〈凡例〉○: 強、○: 有、△: 少、△: 僅少。量削→量付釉剥ぎ。蛇目→蛇目釉剥ぎ。全→全面。7/→アルミナ (白化粧)

第三章 5

第32表-2 沖縄産施釉陶器 観察一覧

第図 図版	図番 号	器形	分類 / 施釉	部位	口径・器高 底径 (cm)	形状 (口腰底) 文様: 外 / 内 器面調整 (cm)	釉 (白化粧有無 / 外面 / 内面) 露胎: 外面 / 内面 貫入	素地	地区・グリッド・層 遺構・台帳 (取) 番号
第58図・ 図版35	42	碗	IV b ④	口~底	14.5/9.5/6	口: 外反一舌。底: 方形-内湾、厚 1.0、高 1.0。文様: イッチン (花文: 径-4.5、4 方所) 釉垂れ底→口 / 見込みに花文。黄釉文様は 5 個。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削○ / 蛇目、7%。	灰~濃乳色	HA ③ C16 II 石 19 台 1120
	43			口~底	13.8/6.6/6	口: 外反一舌。底: 台形、厚 0.9、高 1.0。文様: イッチン (花文) 黄 + コバルト、底→口、斜 / コバルト一釉垂れ。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削◎ / 蛇目、7%。	淡灰~乳色	HA ④ H10 II SD64 台 3218-9
	44		IV a	口~底	14.6/6.5/6	口: 外反一舌。底: 三角、厚 1.0、高 1.0。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 / 蛇目-7%。	濃乳~灰色	HA ④ E10 II SD52 台 3218-3
	45		筒 / I a	口	8.6 / - / -	口: 直口一方形。腰: 折れ。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 口唇~内縁、腰~底 / -。	灰色 / 細粒	HA ② A6 II 晶台 1910
	46		筒 / II a	口~底	10.4 / - / -	口: 直口一方形。腰: 折れ。	釉: 無 / 濃胎 / 濃胎。露胎: 口唇~内縁、腰下~底 / -。	淡灰色 / 細粒	HA ② A1 II 祝殿台 1290
	47		筒 / IV b	口	- / - / -	口: 直口一やや丸。文様: 線彫 (圏線 + 格子) 呉須 + 黄 / -。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: - / 口唇。	濃灰色	HA ② F1 II 瓦屋台 1597
	48		天目型	口	12.0 / - / -	口: 直口一舌、口唇わずかにくびれ。	釉: 無 / 濃胎 (鉄) / 濃胎 (鉄)。	灰色	HA ② I3 II 名嘉座台 2333
	49			口	- / - / -	口: 「く」字状に湾曲一舌。	釉: 無 / 濃胎 / 濃胎。	灰色 / 細粒	HA ② B3 II 祝殿台 1349
	50			底	- / - / 3.8	底: 碁笥底、厚 7.4mm、高台 0.2。文様: 窯変天目と酷似。報: 湧田 IV。	釉: 無 / 鉄 + 薬灰 / 黒 + 鉄。露胎: 腰~底 / 総。	濃乳色	HA ③ C5 II 台 1624
	51			底	- / - / 3.5	底: 切り高台、厚 1.3cm、高 0.9。腰部: 折れ。別の器種か。	釉: 無 / - / -。露胎: 腰~底 / 見込み。	乳色	HA ③ T10 III S-562 台 1105
52	小碗	I a	口~底	9.2/4.8/3.7	口: 直口一舌。底: 丸、厚 0.6、高 0.5。	釉: 無 / 透 - 気泡 / 透 - 気泡。露胎: 量削 / 総。	淡灰色	HA ② D3+C4 II 祝殿 井戸 01 台 1082+627	
53		I b	底	- / - / 4.7	底: 四角、厚 0.5、高 0.9。文様: 呉須 (草花? - 淡) / -。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 高~底、砂△ / 蛇目。貫入。	淡灰色	HA ② C19 II 祝殿台 1646	
54			口	10 / - / -	口: やや内湾一舌。文様: 鉄釉 (草花-明瞭) / -。丸碗に近い。	釉: 無 / 透 / 透。貫入。	淡乳色	HA ③ F14 IV 台 3216	
55		II a	口~底	10.6/5/4.6	口: 外反丸。底: 台形。	釉: 無 / 胎 / 胎。露胎: 高~底 / 蛇目。	灰色	HA ② E1 II 祝殿台 1024	
56		III a	口~底	9/4.8/4.4	口: やや外反丸。底: 三角形。文様: - / 口唇 - 濃胎。	釉: 有 / 濃胎 / 透。露胎: 高~底 / 蛇目?。	橙色	HA ③ A13 II 台 2489	
57		III b	口~底	9/4.7/4	口: やや外反一舌。底: 三角。文様: 釉垂れ / 胎釉 - 濃淡で模様。	釉: 無 / 鉄 / 透。露胎: 量~底 - 7% / 蛇目。	淡乳色 / 細	HA ③ G11 II 台 2857	
58		III a	口~底	8.4/3.4/3.8	口: 外反丸。底: 方形、高台 - 内縁削。文様: - / 内唇、黒釉。	釉: 有 / 黒 / 透。露胎: 高~底 / 蛇目。	濃灰色	HA ② J4 II 名嘉座台 1234	
59			口~底	8.8/4.4/3.8	口: 外反一玉。底: 細方形。文様: 釉垂れ / -。	釉: 有 / 胎 / 透。露胎: 量 - 7% / 蛇目。	乳色	HA ② A7 II 晶台 1802	
60			底	- / - / 4.1	底: 三角。	釉: 有 / 黒 / 透。露胎: 量削 / 総。	灰色	HA ② C19 II 上 台 574	
61			口~底	8/4.55/3.9	口: 直口一舌。底: 「ハ」字状。	有 - 内のみ / 透 / 透。露胎: 量削 - 7% / 総。	乳色	HA ③ E5 I 台 1282	
62		IV a	口~底	8.5/4.4/4.2	口: 直口一舌。底: 丸。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 - 7% / 蛇目。	乳色	HA ② A2 II 祝殿 SK003 取 257	
63			口~底	8.4/4.3/3.8	口: 外反一舌。底: 丸。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 - 7% / 蛇目。	乳	HA ④ E10 III 台 2039	
64			口~底	8.6/4.4/4	口: 外反一舌細。底: 丸、高台 - 低。見込み灰?	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 - 7% / 総。	乳色	HA ③ B10 I S-37 台 997	
65		IV b	口~底	8.2/3.7/3.8	口: 直口一玉。底: 方形。文様: 面取 / -。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量 - 7% / 蛇目。	濃灰色	HA ② K3 II 三良台 328	
66			口	9/4.7/3.7	口: 外反一舌。文様: 呉須 (縦 + 横線で山水文) / -。	釉: 無 / 透 / 透。	淡灰色	HA ② D2 II 祝殿台 2577	
67		IV b f	口~底	8/4/3.8	口: 直口一舌。底: 台形、厚 0.8。文様: コバルト (花文) 底→口 / -。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 - 7% / 蛇目。	濃乳色	HA ③ A18 II S-12 台 556	
68	口~底		8.6/4.1/3.8	口: 外反丸。底: 方形。文様: 彩 (イナ) コバルト + 黄、釉垂れ口→底 / -。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量一熔 / 蛇目 (久入)。	乳色	HA ② K6 II 三良台 1571		
69	IV b	口~底	8/4/3.5	口: 直口一丸。底: 方形。造りは本土か。文様: 彩松 / -。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量~底 / 総。	濃灰色	HA ② E19 II 祝殿台 606		
70		口~底	6.2/4.6/3.8	口: 直。底: 丸。腰: 一丸み。文様: 線彫・呉須 (格子 + 圏線) / -。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 / 総。	濃乳色	HA ② K6 II 三良台 1571		
71	皿	I a	底	- / - / 4.5	底: 方形、中央厚 0.8。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: (腰~底) / 総釉。	淡灰色、細粒	HA ② K6 II 三良台 1574	
72		IV b	口~底	9.5/2.1/3.4	口: 外反舌。底: 方形、目痕あり。文様: - / 呉須 (圏線 - 口、腰、見込み)。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量 - 鉄釉 / 蛇目。	濃灰色	HA ③ E5 II S-23 台 1957	
73			口~底	11.2/4.3/4	口: 直口一丸。底: 方形。文様: 光沢 / 色絵赤緑取り銅緑釉で絵付け、剥ける。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 / 蛇目。	濃灰色	HA ③ E5 II S-23 台 1958	
74		I a	底	- / - / 6.2	底: 台形。文様: 叩 / -。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 見込み。	淡灰色、細	HA ④ H18 III 台 2393	
75		I b	口	16.4 / - / -	口: 直口一。文様: - / 鉄絵 - 草花文。釉 - 気泡。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 見込み。	淡灰色	HA ③ A10 II 台 2649	
76			底	- / - / 6.2	底: 方形、厚 0.5、高 0.9。文様: - / 見込み - 墨書、鉄釉 - 圏線 2 本、白釉の釉垂れ。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 見込み。	暗茶色	HA ③ G13 II 台 1733	
77			底	- / - / 6.8	底: 台形、厚 0.8、高 0.9。文様: - / 鉄釉 (見込み - 丸文 4.0、腰 - 圏・草花)。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 見込み。	濃橙色	HA ② D1 II 祝殿台 355	
78			口~底	13.4/2.5/6.6	口: 受け口、内湾一舌。底: 方形、厚 0.4、高 0.7。文様: - / 鉄釉 (斑点)。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 見込み。	明灰色 / 細	HA ③ S20 ~ 03.T20 ~ 02 II 台 1616	
79			口~底	13.8/2.7/7	口: 受け口状、内湾一舌。底: 台形、厚 0.5、高 0.6。文様: - / 鉄釉、口唇に斑点。報: 湧田 I。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底、量削 / 見込み。	淡灰	HA ② E20 I 祝殿台 1532	
80		II a	口	13.4 / - / -	口: 受け口状、内湾一舌。	釉: 無 / 胎 / 胎。露胎: 腰~底 / 見込み。	淡灰色	HA ③ G11 II 台 1868	
81		I b	口	18 / - / -	口: 受け口 - 0.7、有段一舌。文様: - / 呉須 (草花)。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 見込み。	淡灰色	HA ② II 上 台 650	
82		III a	底	- / - / 7	底: 台形、厚 0.8、高 0.7。	釉: 有 / 胎 - 光沢 / 白化粧。露胎: 量付釉剥き / -。	濃茶色	HA ③ D11 I 台 1842	
83		III b	口~底	13.8/4.4/6.6	口: 直口一輪花。底: 三角形、厚 1.0、高 0.7。文様: 白化粧で濃淡 / 沈線文 - 縦位、進弁状、口唇 - 緑釉。	釉: 有 / 濃胎 / 透。露胎: 量付削、内縁削 / 蛇目。	乳色	HA ② J6 I 三良台 676	
84	IV b	口~底	14.7/4.6/6.4	口: 外反丸。底: 丸。文様: 呉須の斑点 / コバルト (4 区画後草花と山水?)。見込みに 3 重の丸文。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 量削 / 蛇目、熔着あり。	濃乳色	HA ③ S2 I 台 2589		

〈凡例〉◎: 強、○: 有、△: 少、∠: 僅少。量削→量付釉剥き。蛇目→蛇目釉剥き。全→全面。7%→アルミナ (白化粧)



第32表-3 沖縄産施釉陶器 観察一覧

第9図版	図番号	器形	分類/施釉	部位	口径・器高 底径 (cm)	形状 (口腰底) 文様: 外/内 器面調整 (cm)	釉 (白化粧有無/外面/内面) 露胎: 外面/内面 貫入	素地	地区・グリッド・層 遺構・台帳 (取) 番号
第59図版 図版36	85	Ⅱ a	Ⅱ a	底	- / - / 8	底: 台形 / 丸み。	釉: 無 / 緑 / 緑。露胎: 腰~底一砂、 畳付削 / 蛇目。	淡乳色	HA ② I6 II 名嘉座台 2014
	86			底	- / - / 9.6	底: 方形、厚0.9。見込みに熔着。焼成良好、素 地は茶に変色。	釉: 無 / 緑 / 緑。露胎: 一、砂 (腰~底) / 砂、蛇目→フイガキ一かも。	淡灰色	HA ② T2 II 祝殿台 392
	87			口	19.8 / - / -	口: 内一丸。文様: ロクロ◎ / -。薄手、沖繩?。	釉: 無 / 黒 / 黒。	淡乳色 / 細	HA ② E1 II 上 台 1518
	88			口	21.7 / - / -	口: 直口一有段 1.0、方形。	釉: 無 / 胎 / 胎。	淡乳	HA ② I3 II 名嘉座台 1098
	89		Ⅱ b	底	- / - / 9.3	底: 方形 / 熔着あり。文様: - / 鉄釉一丸文 (7.7cm) 刷毛。	釉: 無 / 鉄 / 鉄。露胎: 腰~底 / -。	乳色	HA ③ F9 II 台 550
	90		ⅢⅠ a	口~底	20.9 / 6.2 / 9	口: やや外反一。底: 方形、厚0.9。文様: - / 口唇一胎釉。	釉: 無 / 黒 / 透。露胎: 畳一丸 / 蛇目 釉剥き? 砂。	乳色	HA ③ B10 I S-37 台 2004
	91		ⅢⅠ b	底	- / - / 9.6	底: 四角 (内削) / 見込みに熔着。文様: / 白土一 圏線 (刷毛)。焼成良好。	釉: 無 / 胎 / 透。露胎: (腰~底) 四角 / 蛇目。	淡灰	HA ② H4 III 名嘉座 SK14 台 2175
	92		ⅢⅡ b	口	20 / - / -	口: 外反一L字に近い。文様: - / 胎釉 (イワ、 点径 0.4 点)。	釉: 有 / 黒一気泡 / 透。	乳色	HA ② B6 II 品台 1750
	93		Ⅳ a	口~底	18.8 / 6.3 / 9	口: 外反か。底: 四角一丸、厚0.6、中央凹。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 畳削 / 蛇目。	乳色	HA ② K6 II 三良台 1572
	94	Ⅳ b	口	22 / - / -	口: 外反一丸。文様: - / コバルト (草花文)。	釉: 有 / 透一釉溜まり? / 透。露胎: 一 / 蛇目。	淡乳色	HA ② C1 II 祝殿台 2529	
	95		口	28 / - / -	口: 直口丸。文様: - / 線彫 + 二彩 (黄 + 緑)。	釉: 有 / 透 / 透。	濃乳色	HA ② E20 II 上 台 702	
	96	小鉢	Ⅳ	口	10.2 / 6 / 5.1	口: 直口一丸、八角形。文様: 淡胎釉 (口唇およ び面取を緑削 / 口唇)。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: - / 蛇目。	淡灰色	HA ③ B9 II 台 2812
	97	鉢	Ⅳ	口	18.1 / - / -	口: 外反一三角。文様: コバルト。口唇 / 草花文。 報: 湧田Ⅳ。	釉: 有 / 透 / 透。	乳色	HA ② B7 II 品台 1177
	98		I ?	底	- / - / 10.6	底: 方形、厚0.9。文様: 三鳥手 (ヒガナ + 圏線 / -)。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 高~底 / -、 浴着痕。	淡灰色	HA ② D3 II 祝殿台 1074
	99		I * ?	底	- / - / 10.4	底: 方形一内縁割り、厚: 1.0、付け高台か。文様: 三鳥手 (縦2本1組一横位) / 吻△。	釉: 無 / 透 / 無。露胎: 高~底一丸。 / -。	淡灰	HA ② E20 I 祝殿台 1532
	100		ⅢⅠ b	口~底	18.2 / - / -	口: 直口一舌。文様: - / 腰 (圏線) 鉄釉。	釉: 無 / 黒 / 透、口唇黒。露胎: - / 蛇目。	明灰色	HA ② T5 II 品台 2589
	101			口	- / - / -	口: 外反一丸膨。文様: - / 縦に曲文一白土。	釉: 無 / 濃胎 / 透明。	乳色	HA ③ S5 III S-105 台 807
	102			口	20.8 / - / -	口: 直口。文様: 網目 / 筆描一白土。	釉: 無 / 黒 / 透。	明灰色	HA ② D2 II 祝殿台 1374
	103			胴	- / - / -	文様: - / イッチン (花文) 白土。	釉: 無 / 黒 / 透。露胎: - / 蛇目。	灰色	HA ③ A15 I S-29 台 1981
	104			口	- / - / -	口: 外反一丸、輪花。文様: - / 圏 + 他 (鉄釉と 白土)。	釉: 無 / 翡翠 (薬灰) / 透。	明灰色 / 細	HA ② S8 II 上 台 636
	105		ⅢⅡ a	口	20.6 / - / -	口: 内湾一丸。	有一内 / 胎 / 透。	乳色	HA ④ E09 II 台 2019
	106			底	- / - / 8	底: 方形。	有一内 / 胎 / 透明。露胎: 畳削 / 内一 蛇目。	乳色	HA ④ L01 II 台 2693
	107			口~底	26.6 / 12.7 / 12	口: 内湾一丸。底: 方形一丸、厚 1.9。	釉: 有一内 / 胎 / 透。露胎: 畳削。 / 蛇目。	乳色	HA ② B10 II 祝殿 SD08 台 1956
	108			口	22.8 / - / -	口: L1.5、丸。	釉: 有 / 胎 / 透一口唇、胎釉。	乳色	HA ② J3 II 三良石 24 台 768
	109			口	26.2 / - / -	口: L一1.7、丸。文様: ヘラで調整、幅 1.2 / 胎 釉で幅 3.5 の斑点。	釉: 有 / 黒 / 透。露胎: - / 蛇目。	乳色	HA ② C19 II 祝殿台 1393
	110			口	24.8 / - / -	やや浅め。口: L一1.3、丸。文様: トビガンナ? 一ロクロ。	釉: 有 / 胎 / 透。	明橙色	HA ② A19 II 上 台 1530
111	ⅢⅡ b	口	- / - / -	口: 外反L一1.5、丸、文様: 口唇抉り一輪花? 胎釉。	釉: 有 / 黒 / 透。	明灰色	HA ② G2 II 上 名嘉座台 311		
112		胴	- / - / -	文様: - / イワ (丸文) 緑釉。	釉: 有 / 黒 / 透。	乳色	HA ② C1 II 祝殿台 2517		
113		底	- / - / 9	底: 台形、厚 1.2。文様: - / 見込み、イワ (丸 文一緑 or 茶、点 0.8)。	釉: 有 / 胎 / 透。露胎: 畳削。 / 蛇目。	乳色	HA ② I7 II 東大台 1850		
114		口	- / - / -	口: 丸、波状 (輪花)。文様: - / 鉄釉→口縁2条 の圏線、縦線。	釉: 有 / 胎 / 透。	明灰色	HA ② L5 II 三良台 1268		
115		口	32.4 / - / -	口: L 字状一1.8一。	釉: 有 / 黒 / 白 + 茶釉。	濃橙色	HA ③ G17 II S-10 台 1253		
116		急須	小 / I	胴	胴 13.8 / - / -	文様: 線彫ヒガナ / -。胴の膨らみが強く、扁平。 器厚 0.4。	釉: 無 / 透 / 透部分。露胎: 胴下部~ 底 / 口~胴。	淡灰色	HA ② A3 II 祝殿台 1621
117	小 / I		胴	胴 12.1 / - / -	文様: 圏線とスタンプ中に鉄釉 / -。内面に鉄釉、 沖繩にはない。胴も膨らむ、本陶?	釉: 無 / 透 / 鉄。露胎: - / 胴一部分。	灰色	HA ② D1 II 祝殿台 338	
118	小 / I b		口	4.8 / - / -	口: 直口。文様: 一釉垂れ / -。最大胴径 10.4。	釉: 無 / 翡翠釉 / 内頸に施釉。露胎: 一 / 頸~底。	淡灰色	HA ② E1 II 祝殿台 1283	
119	小 / II		口	5.9 / - / -	口: 直口一長。頸部一釉を掻き取る。	有一内 / 黒 / 透。露胎: - / 口唇~頸部 (掃)。	乳色	HA ② A4 II 祝殿台 1626	
120	小 / II b		口~底	5.4 / - / -	口: 直口一がた。底: 炭付着、被熱。文様: 線彫 (ト ビガンナ + 圏線) / 。注口: 孔径 1.2cm の粗孔。口唇、 注口: 削り。耳孔、0.4、上→下に穿孔。	釉: 無 / 胎 / 淡胎。露胎: 腰~底 / 口 唇~胴下部。	淡乳色	HA ④ C14 II 台 1974	
121	小 / IV		口~底	5.4 / 8 / -	口: 直状。文様: - / ロクロ。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 腰~底 / 口唇 一丸。	濃乳色、注口 - 白色	HA ③ D15 II S-16 台 508	
122	小 / IV b		口	5.8 / - / -	口: 直状。文様: 淡呉須 (山水画、鳥) / -。最大 胴径 11.5。	有一外 / 透 / 透。露胎: 口唇 / 胴~底。	淡灰色	HA ③ B10 I S-37 台 2004	
123	小 / IV b		口	- / - / -	口: 直状一。文様: 線彫 (山水画、鳥) 淡呉須 / -。	釉: 有 / 透 / 白化粧。露胎: 口唇 / -。	淡灰色	HA ③ B8 II S-12 台 975	
124	小 / IV b		口~底	5.4 / 7.9 / 6.8	口: 直状。底: 三脚。文様: 線彫 (斜 + 縦 + 横) 黄 + 青 / -。最大胴径 11.5。報: 湧田 I。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 脚・腰~底 / -。	乳色、注口・ 淡灰色	HA ② A20 II 取 82	
125	小 / IV b		口~底	6.6 / 9.2 / 8.3	口: 内傾一丸。底: 厚 0.9。文様: コバルト (亀甲文 中に薄い青) ラフ。 / -。外面: 気泡、雑仕上り。	有 / 透 / 透。露胎: 腰~底、脚 / 頸~底。	淡灰色	HA ③ G5 II 台 1635	
126	小 / IV c	口~底	4.8 / - / -	口: 直状一舌。文様: - / ロクロ。注口は 4 孔 (粗)。 最胴 12.0。	釉: 有 / コバルト / 透明。露胎: 腰 / 口唇	乳色	HA ④ E09 II 台 2017		

〈凡例〉◎: 強、○: 有、△: 少、△: 僅少。畳削→畳付釉剥き。蛇目→蛇目釉剥き。全→全面。丸→アルミナ (白化粧)

第32表-4 沖縄産施釉陶器 観察一覧

第図 図版	図番 号	器形	分類 / 施釉	部位	口径・器高 底径 (cm)	形状 (口腰底) 文様: 外 / 内 器面調整 (cm)	釉 (白化粧有無 / 外面 / 内面) 露胎: 外面 / 内面 貫入	素地	地区・グリッド・層 遺構・台帳 (取) 番号
第60図・図版37	127	急須	角丸 / IVc	口~底	6.1/7/7.5	口: 内部一有段。酒器か。	釉: 有 / コバルト / 透明。露胎: 蓋受、脚~底 / 総釉。	濃乳色	HA ③ A18 II S-12 台 531
	128		筒 / IV	底	- / - / 11.5	筒状。底: 胴から直状。方形。文様: 一把手部分に緑釉 / -。胴径 8.6cm。	釉: 有 / 透 / 透。露胎: 白化粧 (畳~底) / 総。	乳色	HA ③ A13 II 貝 2705
	129		中 / I	口	8.4 / - / -	口: 直状。文様: 三鳥手 (トビガンナ) / -。	釉: 無 / 透 / 無。露胎: - / 全。	濃灰色	HA ② A7 III SK010 台 2223
	130		中 / IV b	口~底	8.3/11/8.4	口: 直状。底: 厚 7。文様: 線彫 (格子) 只須一淡 / -。最大胴径 15.0。	釉: 有 / 透 / 白化粧。露胎: 腰~底 / -。	乳色	HA ③ E8 II 台 755
	131		中 / IV b	底	- / - / 10	口: 直口。底: 厚 0.7。文様: 線彫 (縦・横・斜) 只須 + 緑釉 + 黄 / -。	釉: 有 / 透 / 白化粧。露胎: 腰~底 / -。	淡乳色	HA ④ I11 II SD51 台 3213-4
	132		大 / II	口	10.2 / - / -	口: 直状一か。光沢あり。最胴 18.9。報: 湧田 I。	釉: 無 / 鉛 / 鉛釉。露胎: - / 頸部。	乳色	HA ② B9 II 祝殿 SD009 台 1947
	133		大 / II	注口	- / - / -	注口: 1.5。口: かつ。	釉: 無 / 黒 / -。露胎: - / 内。	淡灰色	HA ② B5 I 祝殿 台 2364
	134		大 / II	把手	- / - / -	光沢あり。把手幅 3.7 x 1.5。断: 饅頭型。	釉: 無 / 黒 / 黒。	乳色	HA ② F19 II 道 台 693
	135		筒 / I a	胴	胴 10 / - / -	文様: 濃淡釉、淡彩か / 叻。薄手。	釉: 無 / 透明灰、濃淡で模様か / -。露胎: - / 全。	淡灰色	HA ② C2 I 祝殿 台 2362
	136		筒 / I a	注口	- / - / -	筒。注口径: 1.0 (内 0.6)。	釉: 無 / 淡鉛 / 無。露胎: - / 全。	淡灰色	HA ② G20 II 瓦屋 台 932
	137		筒 / I a	胴 (頸)	胴 10.2 / - / -	筒。薄手。文様: 肩部にロクロ? / ロクロ○。	釉: 無 / 黒 / 黒。露胎: - / -。	淡灰色	HA ③ B15 II S-43 台 2601
	138		筒 / II b	胴	胴 9.3 / - / -	文様: 線彫一幅広く / 叻。注口、基部 2.0cm 注口は粗孔。	釉: 無 / 鉄釉、溜一黒 / 無。露胎: - / 全。	灰色	HA ③ G11 II 台 1658
	139		筒 / II b	底	- / - / 10	底: 内縁一上げ。幅 2.0。文様: 線彫一深 (沈・縦) / -。線彫りの火取りと同じ。	釉: 無 / 鉄 / 無。露胎: 畳~底 / 無。	淡灰~濃灰色、サンド	HA ② E20 II 上 台 707
	140		筒扁 / II b	底	9.8 / - / 6.4	底: 高台、方形、高 0.3。文様: 線彫一へら彫り一縦位 / -。	釉: 無 / 鉄 / 無。露胎: 腰~底 / 無。	灰色	HA ③ D10 II 台 1639
第61図・図版38	141	酒器	丸 / I b	底	9.4 / - / 7	底: 蛇目高台? 厚 0.7。文様: 三鳥手、注口のあとあり。 / ロクロ。	釉: 無 / 透 / 無。露胎: 畳~底 / 無。	淡茶色	HA ③ T12 II S-7 台 1328
	142		丸 / II b	胴	12.4 / - / -	丸。文様: へら彫り (縦) / ロクロ。	釉: 無 / 黒 / 無。露胎: - / 全。	淡灰色	HA ③ T12 II S-7 台 1328
	143		丸 / II a	底	- / - / 8.3	底: 基筒、厚: 1.3。文様: - / 叻。底に石灰付着、熔着か。	釉: 無 / 黒 / 無。露胎: 高~底 / -。	淡灰色	HA ② K6 II 三良 台 1768
	144		丸 / IV b	胴 (頸)	12.4 / - / -	扁丸。文様: 線彫一丸文 / 叻。注口は緑釉、注口、孔径 0.6、2 個か。	釉: 有 / 透 / 無。露胎: - / 全。	乳色	HA ③ E5 I S-24 台 2086
	145		丸 / IV b	口~底	12 / - / 7.4	底: 蛇目高台。文様: 彩 (青・黄) 口~胴に細沈線で扇状 / -。	釉: 有 / 透 / 無。露胎: 畳~底 / 無。	濃乳色	HA ③ C-D9-11 II 台 1560
	146		丸 / IV b	底	- / - / 8.2	底: 蛇目高台、厚 0.7。文様: 只須コト / 叻。最大胴径 12.3cm。	有~外 / 透胴部付近、ゆし、膨らむ / 無。露胎: 7% (畳) / 無。	乳色	HA ④ E10 II SD61 台 3212-5
	147		丸玉 / IV b	胴	最胴 12 / - / 8	ソロバン玉一丸。文様: 線彫一沈 (縦・横)、熔着 / -。	釉: 有 / 透 / 無。露胎: 腰~底一7% / 無。	濃~灰色	HA ③ F11 II S-2 台 957
	148		丸玉 / IV b	胴	最胴 12.4 / - / -	文様: 線彫 (三角) 青 + 黄 / -。	釉: 有 / 透 / 無。露胎: - / 全。	淡乳色	HA ② D1 II 祝殿 不建 台 338
	149		筒高 / IV b	底	- / - / 7.2	底: 蛇目高台、厚 0.6。文様: 線彫 (格子) 青 + 黄 / 叻。	釉: 有 / 透 / 白化粧無一透。露胎: 7% (畳~底) / 総。	灰色	HA ③ C11 II 台 3214
	150		銅	I A	口・耳	17 / - / -	口: 外反 L1.7。受け縁のみ無釉、内面の口縁は濃く、胴は薄く塗る胎土は赤く、陶質土器に近い。	釉: 無 / 鉛△ / 鉛△ (胴) ○ (緑)。露胎: 腰~ / 胴。	淡~濃橙色
151	口	15.7 / - / -			口: L1.7。胴部にトビガンナ / -。	釉: 無 / 鉛△口~胴上部 / 鉛△。露胎: 胴下~ / 総。	淡橙色	HA ② D1 II 祝殿 台 361	
152	口	17.3 / - / -			口: 「く」。文様: 墨一文様? / 叻痕。	釉: 有 / 釉: 無 / 白化粧のみ。露胎: 口~ / 口唇。	淡灰~乳色	HA ③ II 宿道 台 4711	
153	I B	口			14.6 / - / -	口: 有段 1.3。-	有~内 / 鉛○ / 透。露胎: - / 受け口	乳色	HA ② K6 II 上 三良 台 651
154	II	口			14.8 / - / 21.6	口: 直口。器調: ロクロ○ / -ロクロ△。焼成良好。現在の羽釜に近い。鈔幅 1.7。	釉: 無 / 鉛○ / 鉛○。露胎: 胴~ / 総。	淡灰色	HA ② G2 II 名嘉座 台 1715
155	III	口			12.2 / - / -	口: 内一。茶釜の可能性もあり	釉: 無 / 鉛○ / 鉛△。露胎: 口唇 / -。	灰色	HA ③ G15 IV 台 2295
156		口~底			14.6 / - / -	口: 内湾。底: 厚 0.4。文様: - / - 叻。報: 湧田 I 瓦質土器。	釉: 無 / 鉛○ / 鉄△。露胎: 無 / 無。	灰白色	HA ② E20 II 祝殿 台 610
第62図・図版39	157	蓋	急須 / I a	口	6.3/3.5/4.2	撮: 中央に孔 0.3。口: 直口一角。底: 脚高 1.5。	釉: 無 / 透 / -。露胎: 縁~内面 / -。	淡灰色	HA ② H3 II 上 台 306
	158		急須 / II a	口	6.3/2.6/4.5	撮: 径 1.3。撮み横から穿孔。口: 直口一丸。底: 脚高: 0.7。	釉: 無 / 黒 / -。露胎: 縁~内面 / -。	淡灰色	HA ② A1 II 祝殿 台 495
	159		急須 / II b	口~底	6.5 / - / 4.6	撮: 丸。口: 直口。底: 脚高 1.1。文様: 線彫 (比ガナ+圏線) / -。	釉: 無 / 黒、失透 / -。露胎: 鈔~内 / -。	淡灰色	HA ② A20 II 祝殿 台 1300
	160		急須 / IV	口~底	7.3/3/5.4	撮径 1.9。口: 直状一角。孔径 0.5、内→外。文様: 圏線一条 / -。脚の接着部は「V」付け脚。	釉: 無 / 只須のみ / -。露胎: - / 鈔一申。	淡灰色	HA ④ F10 II 台 2088
	161		急須 / I b	口	6.8 / - / 4.5	撮。口: 直口一丸。底: 脚高 1.3。文様: 単彩一鉛釉、楕門 2 個一濃淡あり / -。	釉: 無 / 透 / 白化粧。露胎: 脚 / -。	乳色	HA ② I 台 789
	162		急須 / IV b	口~底	7 / - / 5	口: 直口一角。文様: 線彫 (葉) コバルト + 黄釉 - 3 個 / -。	釉: 有 / 透 / 白化粧。露胎: - / 全。	淡~濃乳色	HA ③ E5 I S-24 台 2085
	163		急須 / IV b	口~底	9/3.9/6.4	撮。口: 直口一角。底: 脚高 1.1。孔、外面から斜めに穿孔後、白化粧。文様: 彩 (亀甲文) コバルト + 黄 / -。	釉: 有 / 透 / 白化粧。露胎: 脚 / -。	濃乳~灰色	HA ② J3 II 道 台 2410
	164		急須? / II	口~底	10.4/2.4/1.6	撮径 1.6。口: 直口一角、段。底: 脚一破損。	釉: 無 / 黒 / -。露胎: - / 縁~内面。	灰色	HA ③ C7 II 台 2598
	165		筒碗 / I b	口	10.6/2.2 / -	撮一ドーム。薄手。鈔状。文様: 三鳥手 / -。	釉: 無 / 透 / -。露胎: - / 縁~。	淡灰色	HA ② K6 II 三良 台 1567
	166		筒碗 / I b	口	10.8/3.1/9.4	撮一ドーム。厚手。文様: 只須 (草花) / -。	釉: 無 / 透 / 白化粧。露胎: - / -。	乳色	HA ③ F16 II 台 1896
	167		筒碗 / IV b	口	9.6/2.3/11.2	撮一ドーム。厚手、直状一。文様: 線彫 (三角) 只須 + 黄 / -。	釉: 有 / 透 / 白化粧。	橙~灰色	HA ③ G15 II S-3 台 1462
	168		筒碗 / IV	口	11.8 / - / 9.8	撮一ドーム。内湾一舌。底: 脚台: 0.5。	釉: 無 / 緑釉 (~鈔) / 無。露胎: - / 脚~。	濃灰色	HA ② E1 II 祝殿 台 1835

〈凡例〉○: 強、○: 有、△: 少、△: 僅少。畳削→畳付釉剥ぎ。蛇目→蛇目釉剥ぎ。全→全面。7%→アルミナ (白化粧)

第32表-5 沖縄産施釉陶器 観察一覧

第図 図版	図番 号	器形	分類 / 施釉	部位	口径・器高 底径 (cm)	形状 (口腰底) 文様: 外 / 内 器面調整 (cm)	釉 (白化粧有無 / 外面 / 内面) 露胎: 外面 / 内面 貫入	素地	地区・グリッド・層 遺構・台帳 (取) 番号	
第61図・ 図版38	169	蓋	油壺 / IV b	口~底	10.2/2.6/7.6	撮。口:直口一。脚高0.9。文様:二彩(黄釉)斑點 / -。	釉:有 / 透 + 黄 / 白化粧。露胎:- / -。	灰色	HA ③ F16 II S-3 台 682	
	170		油壺 / II	口~底	12/4/7.1	撮一平。径2.1。口:一角。文様:線彫(外縁・圈線・2本釉剥ぎ) / -。焼成良好。報:湧田I。	釉:無 / 黒 / 無。露胎:胴 / 全。	暗茶~灰色	HA ② A5 II 品台 1893	
	171		油壺 / II	口~底	11.4/3.4/6.6	撮一高台。口:直口一丸。文様:圈一2本 / -。焼きよい、戦前かも。	釉:無 / 黒 / 無。露胎:胴 / 全。	乳色	HA ③ E17 II 台 1864	
	172		鍋 / II	口	12.4 / - / -	口:直口一有段0.8、舌。腰部に釉たま。図78の皿に類似。	釉:無 / 鉄 / 鉄。露胎:腰~ / 見込み。	濃茶~灰色	HA ② A1 II 祝殿台 495	
	173		鍋 / II	口	14.6 / - / -	高台。口:内一丸。文様:圈線-3条 / -。	釉:無 / 鉄 / 無。露胎:口唇 / 全。	乳色	HA ② L6 II 三良台 1432	
	174		鍋 / II	口	18.2 / - / -	高台。口:外反一強、L0.8。報:壺屋I。	釉:無 / 鉄 / 無。露胎:- / 全。	茶色	HA ② N10 I 照屋台 668	
	175		鍋 / II	底 or 報	- / - / 6.4	高台:径6.4。	釉:無 / 鉄 / 無。露胎:砂付着 / 全。	赤色	HA ③ F11-14 II 台 1504	
	176		鍋 / IV b	口~底	11.4/4.2/2.8	高台。口:内一丸。文様:彩(丸文一鉄-3個か) / -。焼成良好、新しい?	釉:無 / 透一濁、 / 無。露胎:口唇 / 全。	淡灰色	HA ② B20 II 祝殿台 834	
	177		壺 / II	口	13 / - / -	口:直口。脚高0.4。	釉:無 / 失一胎釉一貫入 / 鉄。露胎:- / -。	濃灰色	HA ③ F5 II 石15 台 1960	
	178		火取	内罇 / II b	口	11.4 / - / -	口:内罇一丸。文様:比ガナ / - 叩。	釉:無 / 黒 + 透 / -。露胎:部分 / 口縁~。	灰色	HA ③ B14 II 台 2823
	179			筒 / II	口	11.8 / - / -	口:直口一逆L字1.3。	釉:無 / 黒 / 無。露胎:- / 胴~底。	乳色	HA ③ A12 II S-7 台 991
	180			筒 / II b	口	11.2/8.5 / -	口:直口一内肥一1.1。文様:線彫(横一密(13条)) / -。釉溜り、腰部。	釉:無 / 黒 / 黒。露胎:腰~底 / 胴~。	淡灰色	HA ② D1 II 祝殿台 1467
	181			筒 / II b	口	10 / - / -	口:直口一丸。文様:線彫(縦~横) / -。	釉:無 / 鉄 / 鉄。露胎:腰~底 / 胴~。	乳色	HA ④ G13 III 台 2224
	182			筒 / II b	底	- / - / 9	底:厚:0.5、胴部から直状高台。畳外縁にやや削り。文様:線彫(斜位、左右にあり) / -。	釉:無 / 鉄 / 無。露胎:畳(削)底 / 全。	淡灰~乳色	HA ② B1 土層 祝殿 SK01 台 2216
	183			筒 / II b	口~底	10.6/8.5/6.6	口:直口一丸幅0.7。底:厚:0.7、高台幅0.4。文様:線彫(好8条+X字状の上下に6条を1組、4つ) / -。	釉:無 / 黒 / 黒。露胎:腰~底 / 全。	淡橙色	HA ② D1 II 祝殿台 361
	184			筒 / I b	底	- / - / 7.4	底:台形 / -。文様:三島手(比ガナ+圈線) / -。	釉:無 / 透 / 無。露胎:腰~底 / ~底。	橙色	HA ③ A20 II 台 1614
	185			筒 / III	口	10/8.5 / -	口:直口一丸。文様:掛け分け(緑一口縁+黒一胴) / -。	釉:無 / 緑 + 黒 / 口唇まで。露胎:- / 口~底。	濃乳色	HA ② D1 II 祝殿台 356
	186			筒 / IV b	口~底	10.5/8.4/7.2	口:直口一丸。底:高台一方形。文様:口縁に単彩(呉須) / -。	釉:有 / 透 / 白化粧のみ。露胎:畳削 / 白化粧。熔着 / 有。	灰色	HA ④ F18 III 台 2180
	187			筒 / IV	口~底	10.3/8.3/10.4	口:直口一口唇膨一丸。底:上げ底。	釉:無 / 銅緑釉系 / 釉(口)。露胎:- / 胴~底。	乳色	E10 II 台 2034
	188		筒 / IV	口~底	10.1/7.2/9.9	口:直口一方形。底:方形。銅緑釉が剥げ、光沢あり(銀化現象)。裏面に釉残。	釉:有 / 銅緑釉系 / 釉(口)。露胎:底 / 内縁~底。	乳色	HA ④ E10 II 台 2034	
	189		香炉	A / I	口	13.4/7/7	口:L(幅1.6) 方形。底:厚6.5。	釉:無 / 黒 / 黒。露胎:腰~底・脚 / 胴~底。	淡橙色	HA ② A9 II 祝殿 SD09 台 1954
	190			A / IV	口	18.5 / - / -	口:L(幅1.4)一やや方形。文様:貼り付け文様? / -。最胴18.1、頸径16.1。	釉:有 / 透 / 透。露胎:腰~ / 胴~。	淡灰色	HA ③ D11 II 台 1173
	191			A / II	底	頸径14.8 / - / 10.1	底:脚一湾曲。文様:単彩一縦に鉄軸掛(頸部に凸帯文) / -。最大胴径16.5cm。地軸を逆に掛け、鉄軸を持ち替えて掛ける。	釉:無 / 鉄 + 透(底) / 無。露胎:底・脚 / 胴~底。	灰色	HA ③ T12 II S-7 台 715+B14 II 台 2423
	192			A / IV	口~底	14.8/7.6/7.3	口:L幅1.5。文様:緑釉単掛け / 単掛け。最大胴径13.8、頸径12.6。釉が厚い、底部に外面釉が厚く熔着(窯道具が径8.0) / 内面にも点あり。	釉:有 / 緑 / 白化粧。露胎:畳付 / 胴~底。	乳色	HA ③ E8 II 台 1390
	193			B / II	口	19.8/13.3/13.3	口:直口一方形(0.9)、胴部一湾曲。底:厚1.5。文様:圈線4条 / -ほぼ全面に墨が付着、使用痕か。	釉:無 / 鉄 / 鉄。露胎:脚、畳底 / 胴~底。	淡灰色	HA ② D1 II 祝殿取 64
	194			- / II ?	底	- / - / 7.6	底:厚9mm、脚「く」字状に湾曲。	釉:無 / 釉 / 無 / 無。露胎:脚 / ~底。	濃橙色	HA ③ A7 II 台 2858
	195		火炉	A / 筒	口	13 / - / -	小。口:直口一角(1.1)。文様:胴(圈一3) / 突起一鈎状、施釉。	釉:無 / 鉄(口~) / 黒(口縁)。露胎:腰~底、口唇一釉剥 / 胴~底。	淡乳色	HA ② D1 II 祝殿不建 台 829
	196				口~底	13.6 / - / 8.6	小。口:直口一肥厚。底:厚1.1 / 中央膨、内縁削。文様:線彫一圈線(胴部2条、腰部4条)幅不揃 / -。火口「U」字状。	釉:無 / 鉄 / 鉄(口)。露胎:口唇・腰~底 / 全。	乳色	HA ② D19 II 祝殿台 263
	197				口	14.8 / - / -	小。口:直口一四角。文様:線彫(横) / -。突起一水平。	釉:有 / 鉄 / 鉄(口)。露胎:口唇(白) / 胴~底。	乳色	HA ③ R2 II 台 1538
	198				底	- / - / 13	大。底:厚(1.1)、高台「U」字状に扶る。搬入?	釉:無 / 鉄 / 無。露胎:高~底 / 全。	淡灰色	HA ② G20 II 上瓦屋 台 315
	199				口	20.2 / - / -	大。口:内罇一丸。薄手。横耳。文様:格子状トビガナナ / -。	釉:無 / 鉄 / 鉄(口)。露胎:胴一部分 / 頸~。	淡灰色	HA ③ E16 II S-4 台 1052
	200		B / 湾曲	口	17 / - / -	大。口:湾曲。耳:横(43×40)、半円形、穿孔。文様:比ガナ(格子)。孔11。	釉:無 / 鉄 / 鉄(頸)。露胎:- / 胴~底。	乳色	HA ② T3 II 祝殿台 389	
	201			口	23 / - / -	大。口:直口一方形に肥厚(1.5)。突起:4.0×4.0。先端とがり、かた。火口か、内側に斜めに切る。	釉:無 / 鉄釉(濃淡あり) / 鉄。露胎:- / -。	淡灰色	HA ② K6 II 三良台 1564	
	202			底	- / - / 14.2	大。底:厚1.6、脚径3.0。文様:胴上-格子状、胴部-圈線(5条)、調整-胴下部(3条) / 叩痕明顯。	釉:無 / 鉄 / -。露胎:腰~底、脚 / 全。	淡灰色	HA ② C1 II 上 台 567	
	203		壺	A	口	6.1 / - / -	小。口:直口一丸(0.6)。文様:圈線3条 幅0.4凹 / -。	釉:無 / 黒 / 黒。露胎:口唇 / 口~頸。	濃乳色	HA ② C2 II 祝殿台 519
	204				胴・耳	- / - / -	小。文様:線彫4条胴下 / -。縦耳2.8×1.8、耳孔0.8×0.7。	釉:無 / 鉄 / 鉄。露胎:- / 頸~。	橙色	HA ② K6 II 三良台 1567
	205			口	6.5 / - / -	口:直口一L0.63。文様:頸と肩に幅0.2cmの圈線 / -。外口唇剥離、使用痕?	釉:無 / 黒 / 黒。露胎:口唇 / 胴下部~底。	淡灰色	HA ② L6+K6 II 三良台 1264.1265	
	206			口	8.1 / - / -	口:内一四角、口唇一7かけ。耳4個サイズ3.0×1.5 / -。	釉:無 / 鉄 / 鉄。露胎:口唇 / 口唇。	淡灰色	HA ③ G18 II S-10 台 1255	
207	B	口~底		10.8/15/9.1	中。口:内傾一三角。幅1.0。底:方形。幅1.1。器調:- / 叩。縦耳、4個、3.3×1.3。耳孔0.8。	有一口唇 / 黒頸 / 黒。露胎:高~畳 / 蛇目。	濃乳~灰色	HA ② C19 II 祝殿 SD05 台 279		
208		口~底		12.6/22.1/11.3	中。口:内傾一三角幅1.25中。底:四角。厚:2.3。底部はくぼみ1.2。縦耳4個、5.3×2.9。	釉:無 / 黒 / 黒薄。露胎:畳 / 見込み無釉、約4.0。	乳色	HA ② D3 II 上 B19 フ01 取 195. 台 732.865		
209		底		- / - / 8.8	中。底:直状に立ち上がる。厚0.9。器調:- / 叩。	釉:無 / 鉄 / 無。露胎:腰~底 / 全。	濃橙色	HA ③ T12 II S-7 台 1289		

〈凡例〉◎:強、○:有、△:少、△:僅少。畳削→畳付釉剥ぎ。蛇目→蛇目釉剥ぎ。全→全面。7ル→アルミナ(白化粧)

第三章  
5

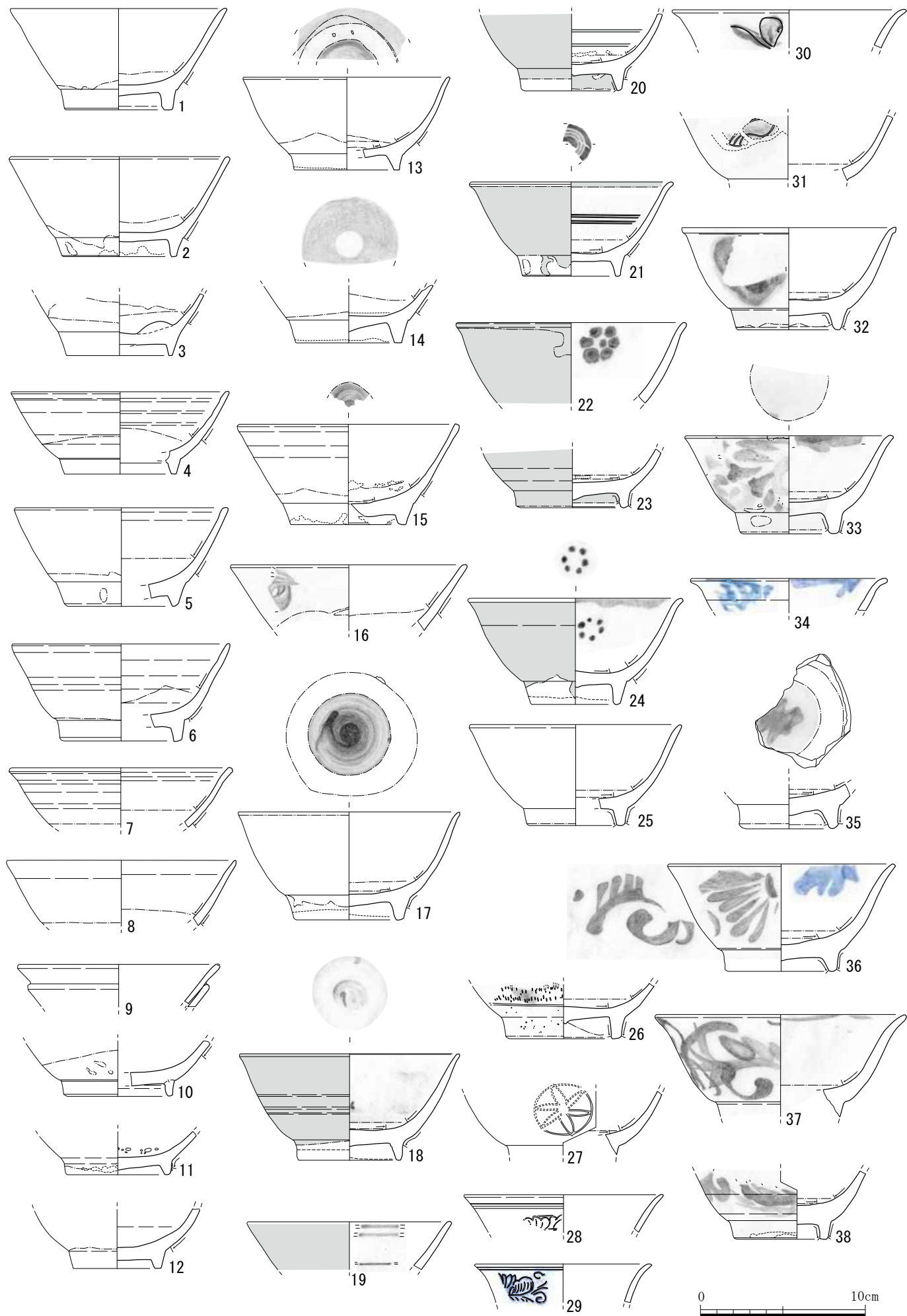
第62図・  
図版39

第63図・  
図版40

第32表-6 沖縄産施釉陶器 観察一覧

第図 図版	図番 号	器形	分類 / 施釉	部位	口径・器高 底径 (cm)	形状 (口腰底) 文様: 外 / 内 器面調整 (cm)	釉 (白化粧有無 / 外面 / 内面) 露胎: 外面 / 内面 貫入	素地	地区・グリッド・層 遺構・台帳 (取) 番号	
第63図・ 図版40	210	壺	C	底	- / - / 9	大。底: 方形。厚1.0。腰: 張る。器調: - / ロクロ。 付け高台が胴上部に厚くなる。	釉: 無 / 灰 / 胎。露胎: 高~底 / ~胴。	灰色	HA ② D3 II 祝殿台 1074	
	211			底	- / - / 8.4	大。底: 方形。厚0.6。内縁~低い。腰: 張る。 底部の形状は酒器に似る。	釉: 無 / 高台はアルミナの上に黒釉。 まだら / 黒。露胎: 腰~底、熔~砂 / 総。	濃乳色	HA ③ D・E16 II S-4 台 1495	
	212	瓶	①	口~底	2.6/10.2/4.4	口: 直口~玉縁~幅4。底: ベタ底、厚0.5。最大 胴径7.9。無文。	釉: 無 / 透明 / 透明 (口)。露胎: 底 / 胴~底。	茶色	HA ② D1 II 祝殿不建 台 262	
	213			口~底	2.3/8.85/5	口: 直口~玉縁~4。底: ベタ底、厚0.6。文様: イッ チン文様の痕。碗の近くで焼いたためか / ~。逆 さに釉をかけ、底部に至る。最大胴径7.1。	釉: 有 / 黒 + 透 (白化粧) / 透明 (口縁)。 露胎: 底 / 口唇、頸~底。	濃茶色	HA ② C19 II 祝殿台 1649	
	214			底	- / - / 5.6	底: ベタ底~やや上る、厚5.0。文様: 頸部に圈 線 (浮) / ~。最大胴径9.9	釉: 無 / 透明 / 無。露胎: 底 / 頸~底。	灰色	HA ② A7 II 晶台 1814	
215	①	底	- / - / 4.3	底: ベタ底。最大胴径6.3cm。	釉: 有 / 透 / ~。露胎: 底 / 頸~底。	濃灰色	HA ③ E16 II 台 1755			
第64図・ 図版41	216	瓶	②	口~底	3/6.5/3.4	口: 外反~アガね。底: 高台~方形、熔着有。最大 胴径6.1。	釉: 無 / 黒 / 黒 (口~頸)。露胎: 高・ 頸 / ~底。	灰色	HA ② A7 II 晶台 1802	
	217			底	- / - / 4.4	底: 高台~方形、幅2.5。最大胴径7.0。	釉: 無 / 透 / 無。露胎: (高~底) / ~底。	淡乳色	HA ② D1 II 祝殿不建 台 830	
	218			②a	底	頸2.3 / - / 3.2	底: 碁筒底、厚0.6。最大胴径6.3。	釉: 無 / 黒 / 黒。露胎: 腰~底 / ~底。	淡灰色	HA ② J5 II 取 33
	219			③	底	- / - / 5.2	底: 高台~方形、厚0.5。器調: - / 叩。	釉: 有 / 翡翠釉 / ~。露胎: 豎削り / ~ 底 (淡橙)。	淡灰色	HA ② E1 II 祝殿台 1032
	220			①トナキ	胴	- / - / -	有肩。文様: 浅い圈線 + 線彫 (草花) 2面 / ~。 肩径3.4。	釉: 無 / 濃胎 / ~。露胎: - / 胴。	濃灰色	HA ② D1 II 祝殿不建 台 1134
	221			④嘉	底	- / - / 7.6	嘉瓶。底: 方形 / 豎付幅0.7。最大胴径11.8。	釉: 無 / 鉄 / ~。露胎: (高~底) / ~底。	濃灰色	HA ② D19 I 祝殿台 1533
	222			トナキ	底	- / - / 7.1	筒状。底: 高台~隅丸、厚: 0.5。器調: - / 叩、 底中央~厚。	釉: 無 / 濃胎、光沢 / ~。露胎: (高~底)、 砂着 / ~底。	淡灰色	HA ② E1 II 祝殿台 1025
	223			⑤	底	- / - / 5.6	寸胴。底: 高台~くびれ無~丸、厚0.5。文様: 全面に淡彩~鉄釉で平加 (筆の方向を変え) / ~。 最大胴径8.5。	釉: 有 / 透 / ~。露胎: (豎~底) 削り ~底。	淡乳色	HA ③ E5 II S-23 台 1957
	224			⑩	口~底	6.6/13.3/5.8	口: アガね~丸。底: 高台~方形。器調: - / 叩。 文様: 耳~渦巻き状。最大胴径: 8.7。	釉: 無 / 黒 / 黒~口縁。露胎: 高~豎 / 頸~底。	淡灰色	HA ③ B10 II 台 1735
	225			中・丸型	胴・頸	頸5.3 / - / -	広口。器調: - / 叩。	釉: 無 / 黒 (厚) / 黒 (薄)。露胎: - / 胴~底。	淡灰色	HA ② J7 II 照屋台 2631
	226			中・丸型	胴	- / - / (7.0)	油瓶?。器調: - / 叩。最大胴径11.7。	釉: 無 / 黒 / ~。露胎: 腰~底 / ~底。	淡灰色	HA ③ G18 II S-10 台 1255
	227			中・筒型	胴	- / - / -	筒状、腰部「く」字屈曲。文様: 胴中央 (圈不揃 ~6条) / ~。器調: - / 叩。最大胴径11.6。	釉: 無 / 胎 / ~。露胎: - / ~底。	淡灰色	HA ② F19 II 道台 693
	228			中・筒型	底	- / - / 11.8	「く」字屈曲、底: 高台~方形、幅0.4、厚: 1.3。 器調: - / 叩。	釉: 無 / 胎 / ~。露胎: 豎 / ~底。	淡灰色	HA ② E1 II 祝殿台 1283
	229			大・丸型	底	- / - / 11	底: 高台幅1.0、文様: 胎軸で丸文 / ~。器調: 叩 / 叩。祝女殿内 (D2) + 照屋先生 (L1・6) 接合。	釉: 無 / 胎 / ~。露胎: 口~底 / 口~底。	淡灰色	HA ② D2 II 祝殿台 1368
	第64図・ 図版41			230	灯明具	皿 / IV a	口~底	10.4/3.1/4.2	口: 直口~突起舌突起あり。底: 方形。	釉: 有 / 透~口唇のみ / 透。露胎: (腰 豎~7、底) / 蛇目。
231		皿 / II a	口~底	10.2/2.9/4.6			口: 直口~丸。底: 台形。文様: - 叩、カネ / ~。	釉: 無 / 黒~厚 / 黒。露胎: 腰~底 / 蛇目。	淡灰~乳色	HA ② D1 II 祝殿台 357
232		皿 / I a	底	- / - / 4.4			底: 四角。外~炭付着。	釉: 無 / 透~口唇のみ / 透。露胎: 、7 ル (腰~底) / 蛇目、熔着。貫入。	乳色	HA ③ T12 II S-7 台 715
233		燭台 / II	口~底	5.5 / - / 3.9			口: 内丸。底: 脚。報: 湧田 I。	釉: 有 / 黄 + 黒 / ~。露胎: - / 脚。	乳色	HA ② J3 II 道台 2408
234			底	最大胴径6.4			内湾。	釉: 無 / 鉄 / 鉄。	乳色	HA ③ F11 II S-2 台 957
235	底	- / - / 2.7	孔が0.5、秉燭の芯の部分。左右不対象。	釉: 無 / 黒 / 無。露胎: 底 / ~。	濃灰色	HA ② K4 II 三良台 2608				
第64図・ 図版41	236	杯	I	口~底	3.4/1.8/1.8	口: 外反~舌。底: 丸。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 豎~底 / ~。	白色	HA ③ E9 II 台 1302	
	237			口~底	4.4/2.6/2	口: 外反~舌。底: 丸。器調: ロクロ / ~。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 腰 / ~。	淡灰色	HA ④ F10 II 台 2084	
第64図・ 図版41	238	急須	泥 / 宜	底	- / - / 9.6	筒状。底: 豎付幅1.7。器調: 叩 / 叩、焼彫灰色。 最胴9.2。	釉: 無 / 透 / 透。露胎: 豎~底 / ~。	明茶~灰色	HA ② M10 II 照屋 収納 台 4094	
	239			口~底	6.4/7.4/8.4	筒状。口: 内部有段。底: 高台、幅。文様: 彩~ 有文か / 叩。最胴8.7。	釉: 無 / 泥釉 / ~。露胎: 総 / ~。	濃赤色	HA ③ E9 II S-39 台 2476	
	240			注口	- / - / -	1孔、径: 1.1。土は中国のか注口の曲がりも。	釉: 無 / 釉 / 無 / ~。露胎: - / 胴。	暗茶色	HA ② S7 II 台 2463	
	241			把手	- / - / -	把手: 径1.0。器調: 打 / ~。	釉: 無 / 赤褐色? 泥 / ~。	暗灰色	HA ④ G13 II SD42 台 3182	
第64図・ 図版41	242	瓶	泥 / 宜	底	- / - / 7	底: 高台0.2、厚0.5。	釉: 無 / 泥釉 / ~。露胎: - / ~底。	濃赤色	HA ② I2 II 瓦屋台 2347	
	243			口~底	頸2.1 / - / 6.5	口: ~泥釉。底: 文様: 彩主 (花、唐草)、副文 (竹、 花)、白粘土、部分的にはける / ~。	釉: 無 / 泥釉泥 / 口縁。露胎: (豎 / 無) / ~。	明茶色	HA ② E1 II 祝殿台 1838	
	244			口	5 / - / -	口: アガね~丸。文様: 彩~白 / ~。	釉: 無 / 翡翠釉 / ~。	明茶色	HA ② K6 II 三良台 1829	
	245			底	- / - / 9.6	底: 脚台~方形。孔 (径0.4) ~ 5 ~ 6 個、器台1.6。	釉: 無 / 泥釉 / 泥釉。露胎: - / ~。	暗赤色	HA ② D2 II 祝殿台 2576	
	246			底	- / - / 3.6	底: ベタ底、厚0.9。文様: 頸 (2圈) / 叩。	釉: 無 / マガソ / ~。露胎: (腰~底) / 無。	濃茶色 (沖無)	HA ② B6 II 晶台 1204	
	247			底	- / - / 4.6	底: 高台~丸。器調: 叩。	釉: 無 / マガソ / ~。露胎: 腰~底 / ~底。	濃茶色 (沖無)	HA ② T4 II 祝殿台 362	
	248			底	- / - / 4.7	底: 脚台、厚0.9、熔着痕あり。器調: - / 叩。	釉: 無 / マガソ / ~。露胎: - / ~脚台。	濃茶色 (沖無)	HA ② D1 II 祝殿台 1135	
	249			頸~底近	- / - / -	底。文様: 頸~圈2条 / ~。最胴11.6。	釉: 無 / マガソ光沢 / ~。露胎: 腰~底 / ~焼彫。	濃茶色 (沖無)	HA ② G20 II 瓦屋台 1048	
	250			底	- / - / 6.3	底: ベタ底。器調: - / 叩。	釉: 無 / マガソ / ~。露胎: 腰~底 / 黒釉を熔着。	濃茶色 (沖無)	HA ② B20 II 祝殿台 840	
	251			古典焼A / 筒	胴	- / - / -	文様: 線彫り竹文様の部分のみ透明釉 / ~。最大 胴径9.0。	釉: 無 / 透明釉 / 無。露胎: 胴 / 胴。	濃茶色	HA ② B7 II 晶台 1178
252	火鉢	古典焼A / 筒	胴	- / - / -	文様: 揺落三角形、格子模様 / ~。最大胴径 16.4cm。	釉: 無 / 鉄深く削り、浮文のみ鉄釉。 胎釉。底 / ~。	淡茶色	HA ④ 壁掘 I 4607		

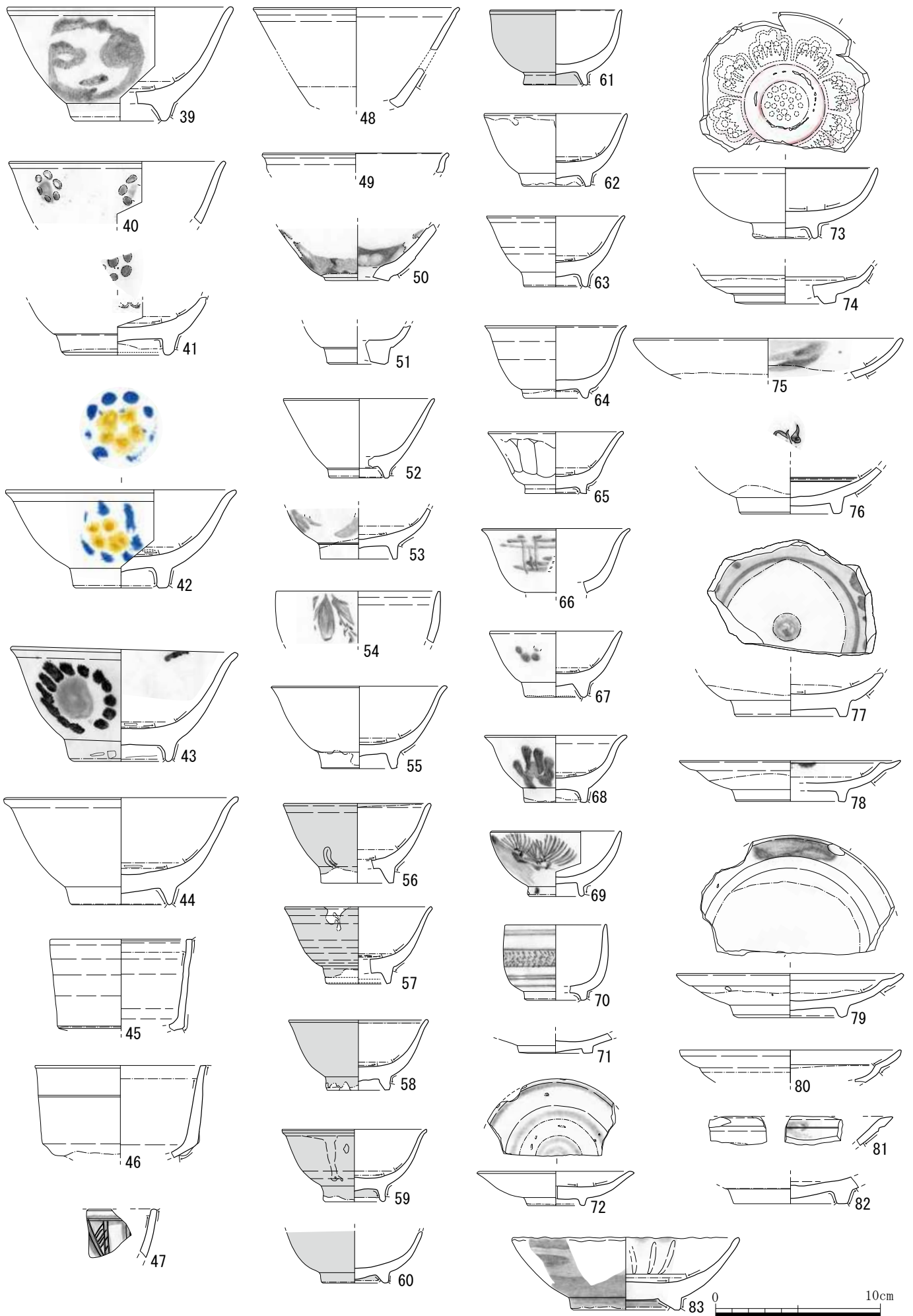
〈凡例〉◎: 強、○: 有、△: 少、△: 僅少。豎削→豎付釉剥ぎ。蛇目→蛇目釉剥ぎ。全→全面。ア→アルミナ (白化粧)



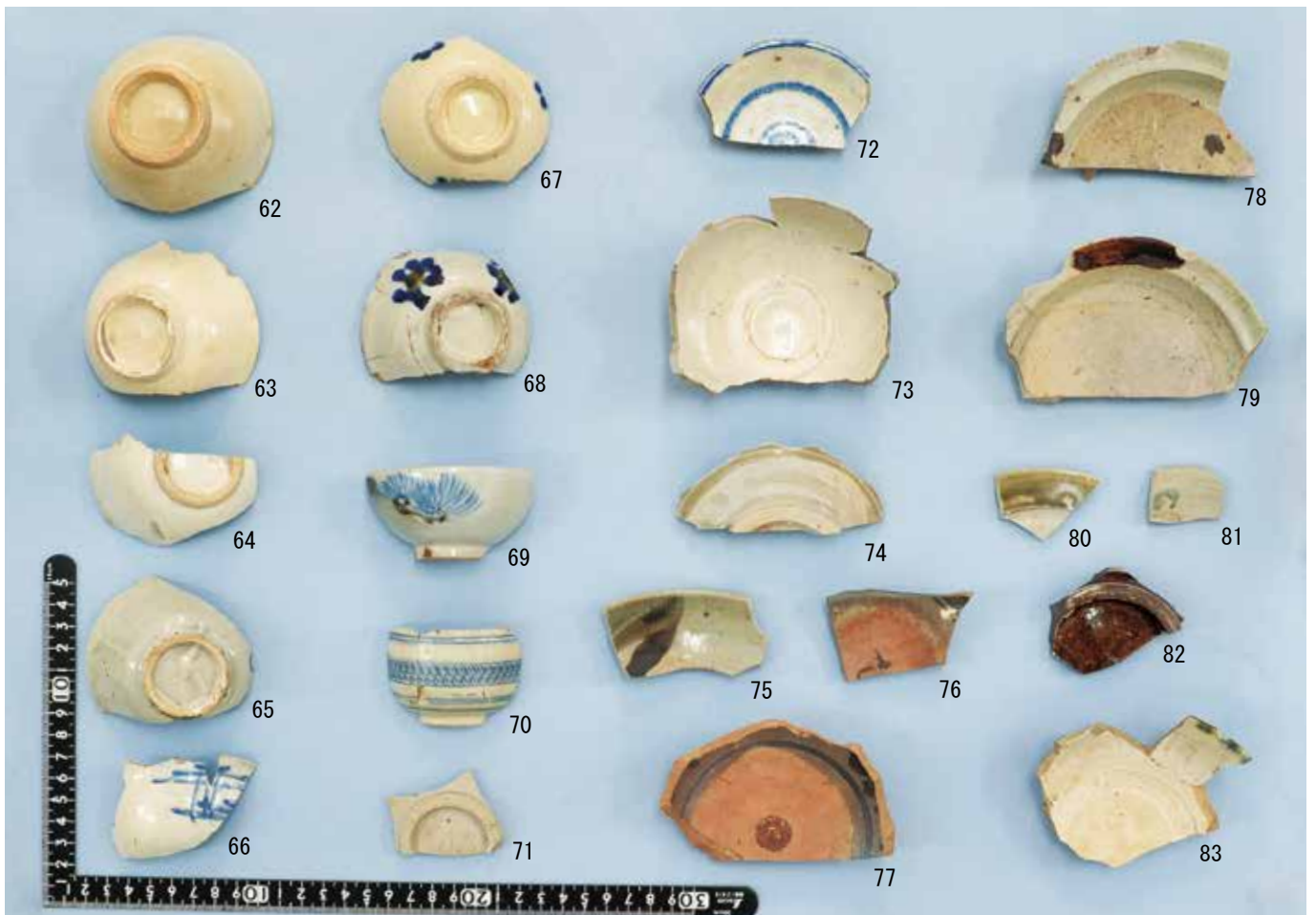
第 57 図 沖縄産施釉陶器 1



図版 34 沖縄産施釉陶器 1

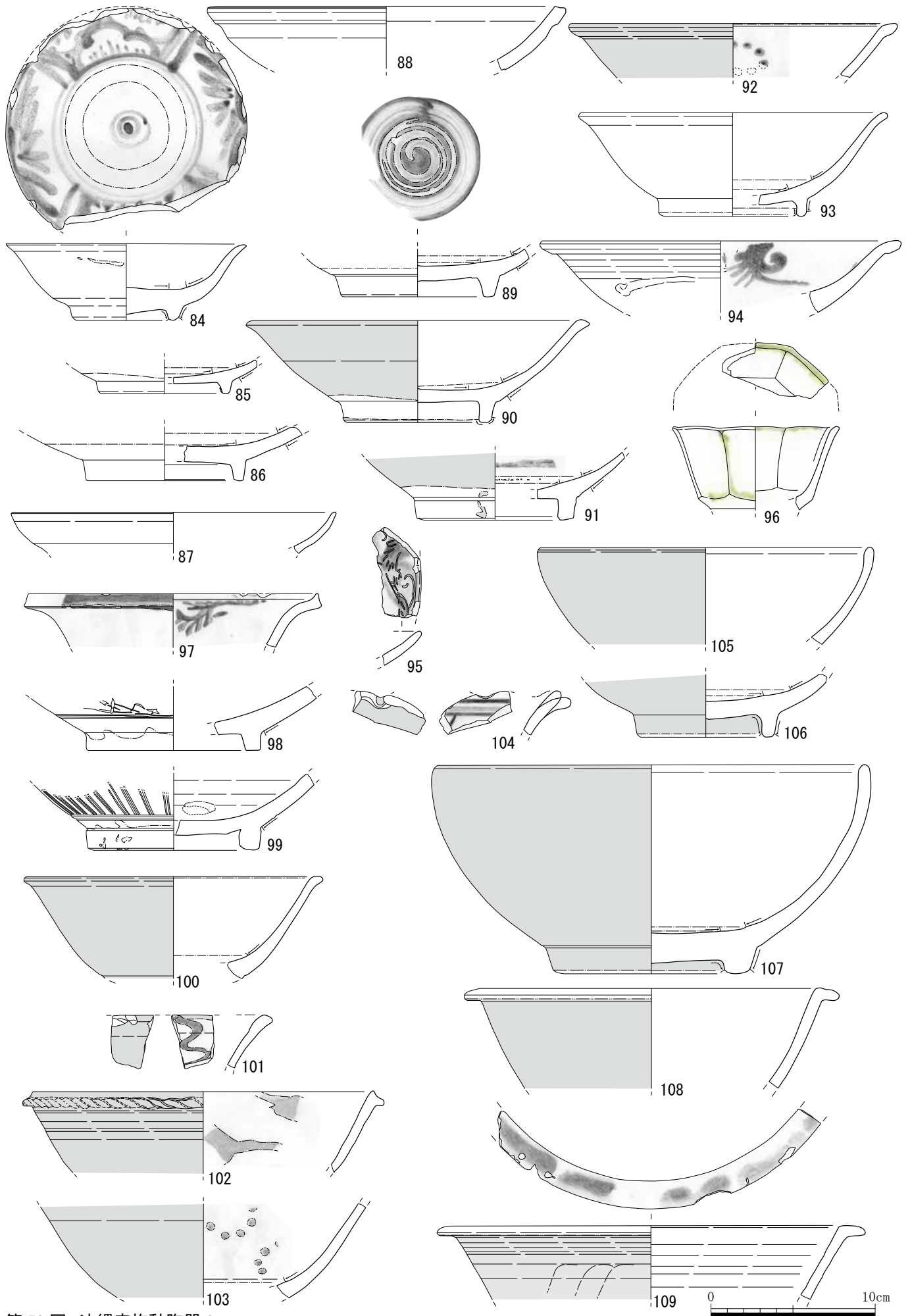


第 58 図 沖縄産施釉陶器 2



図版 35 沖縄産施釉陶器 2

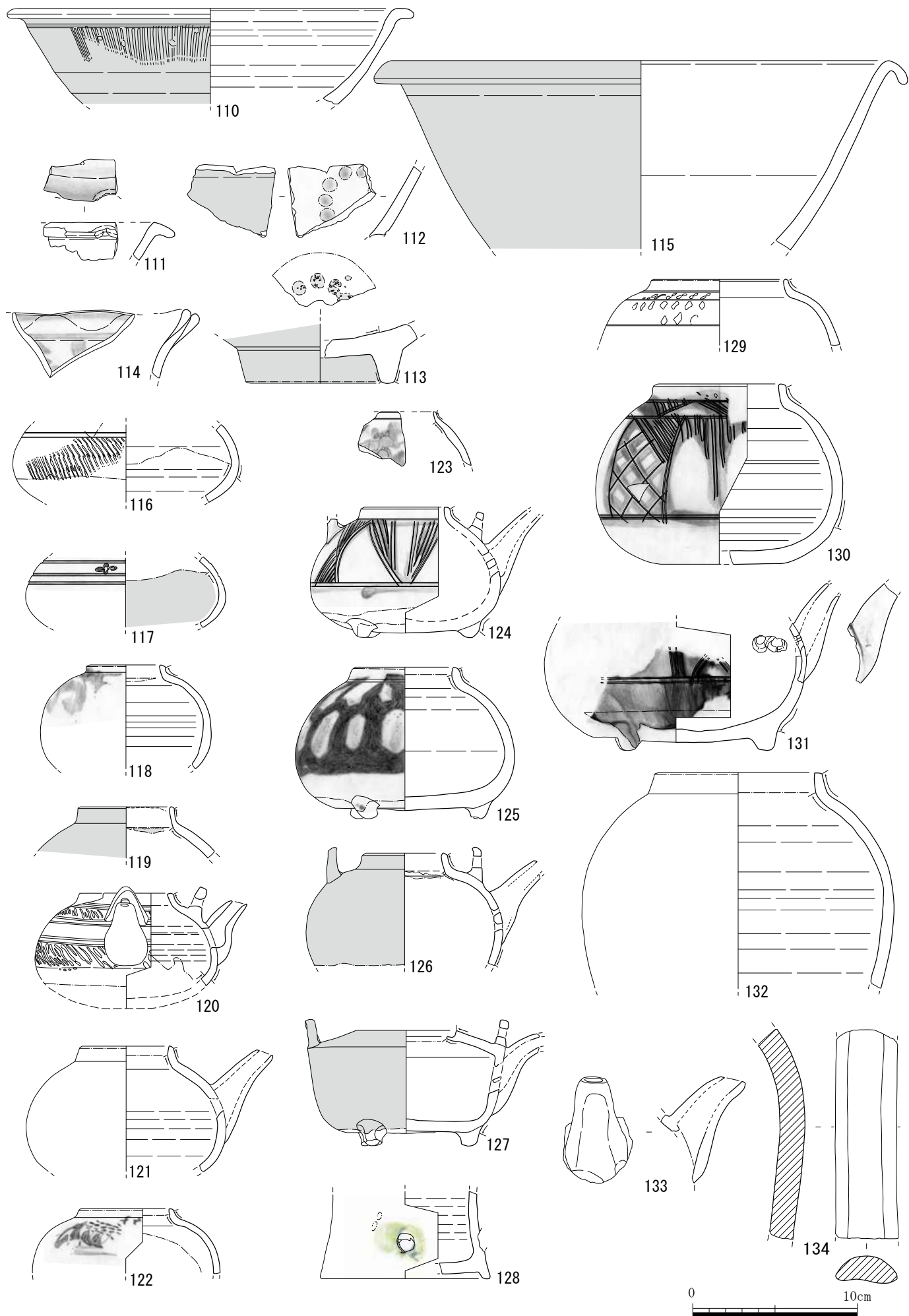




第 59 図 沖縄産施釉陶器 3



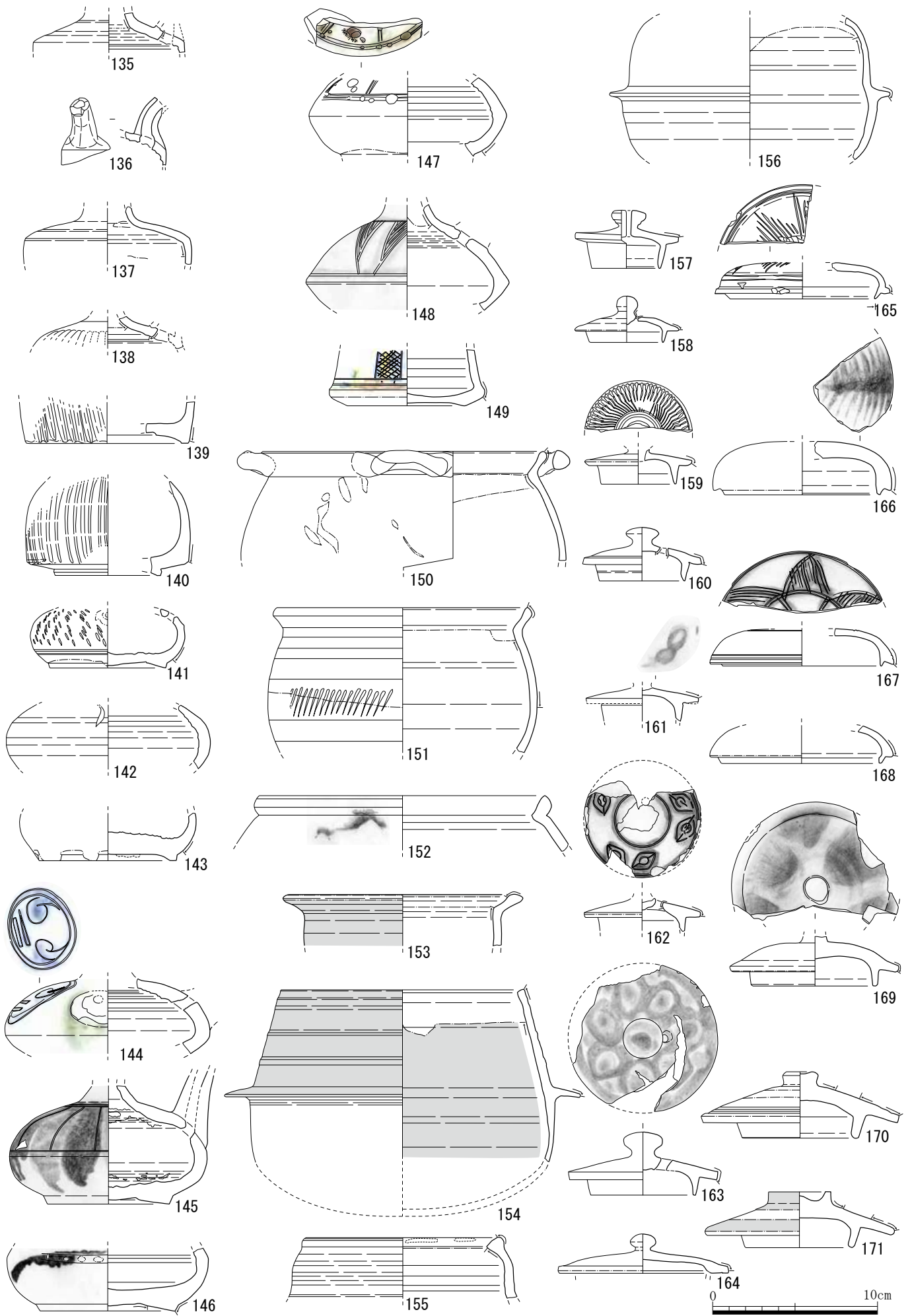
図版 36 沖縄産施釉陶器 3



第 60 图 沖縄産施釉陶器 4



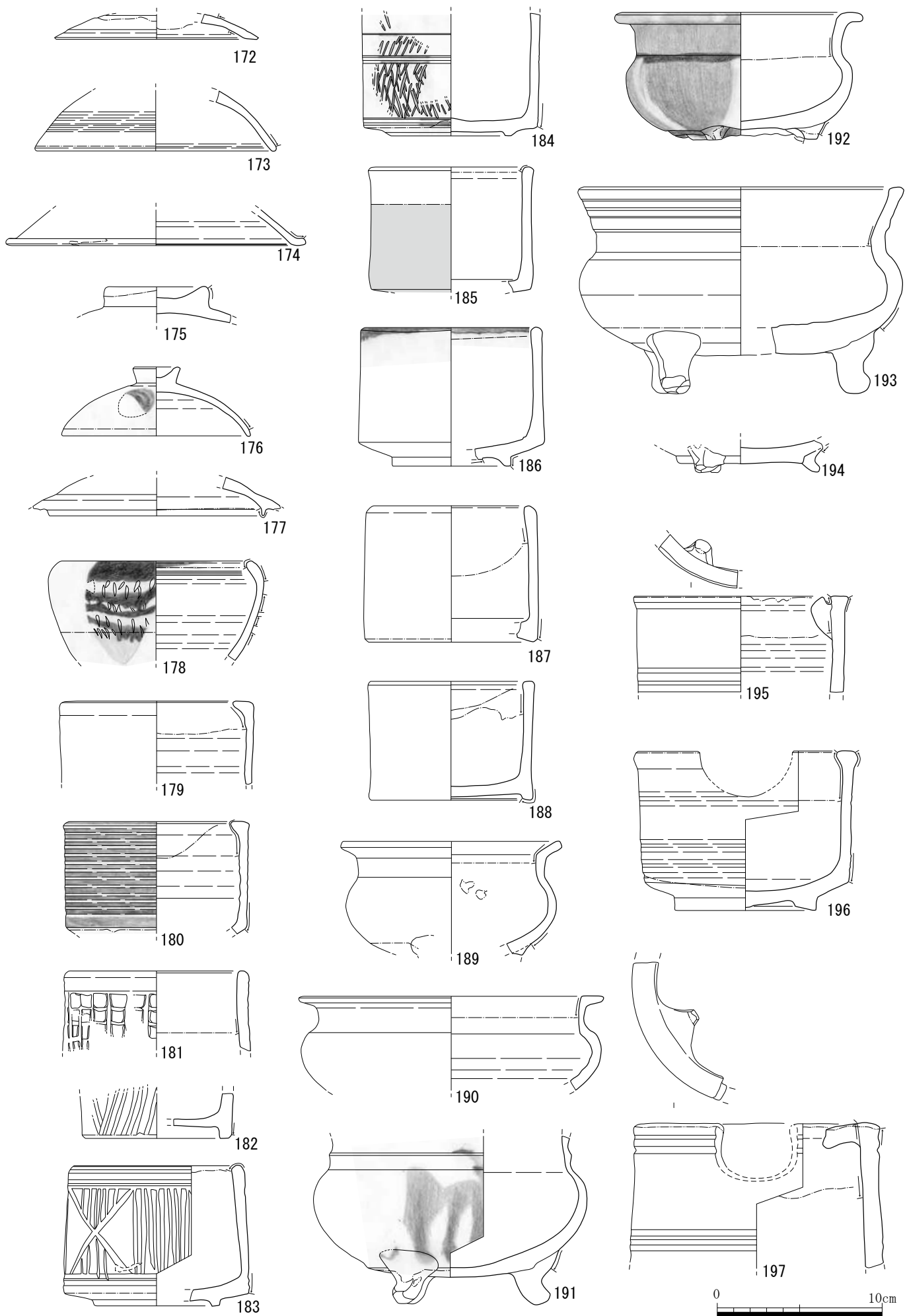
図版 37 沖縄産施釉陶器 4



第 61 图 沖縄産施釉陶器 5



図版 38 沖縄産施釉陶器 5

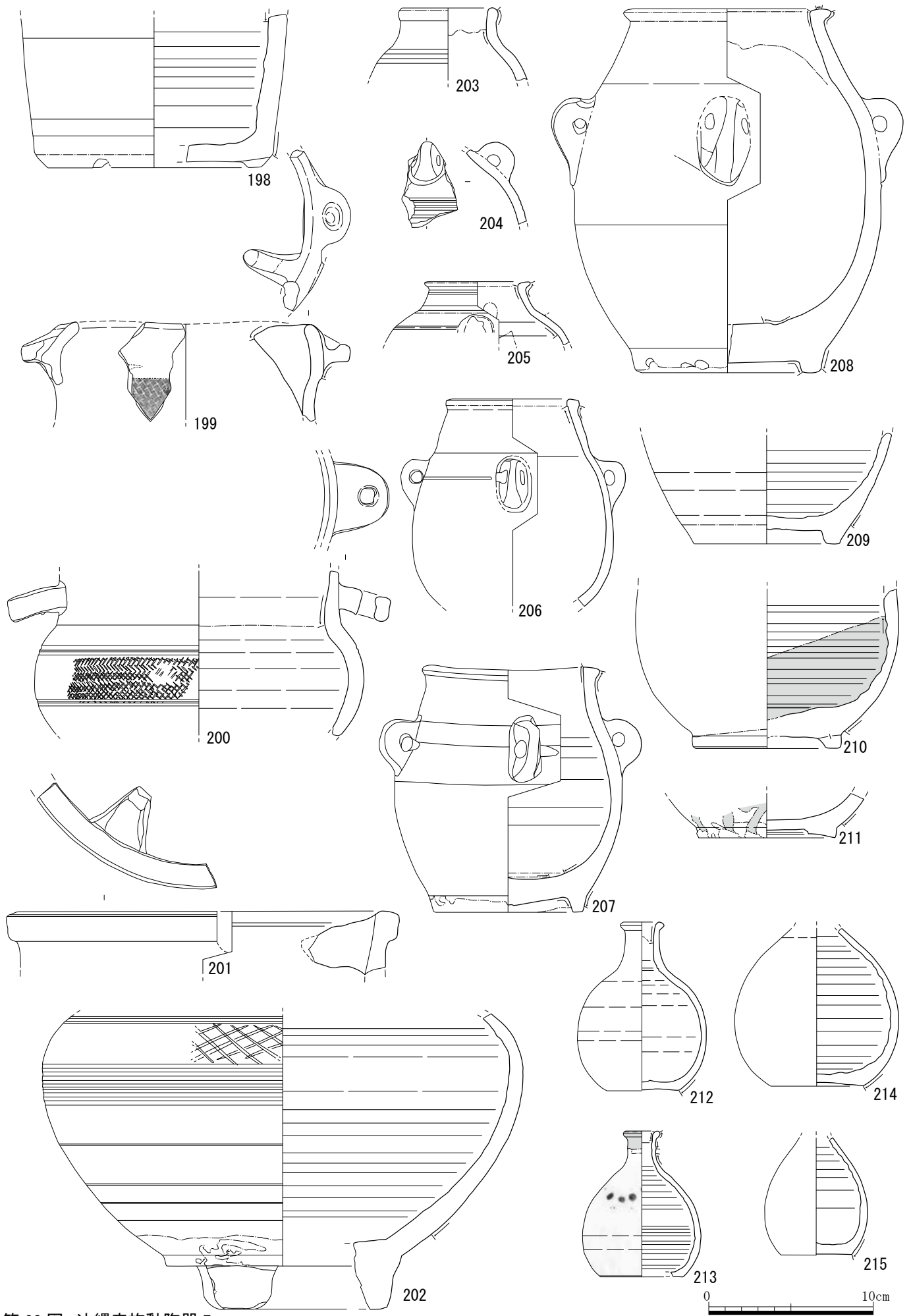


第 62 図 沖縄産施釉陶器 6



図版 39 沖縄産施釉陶器 6

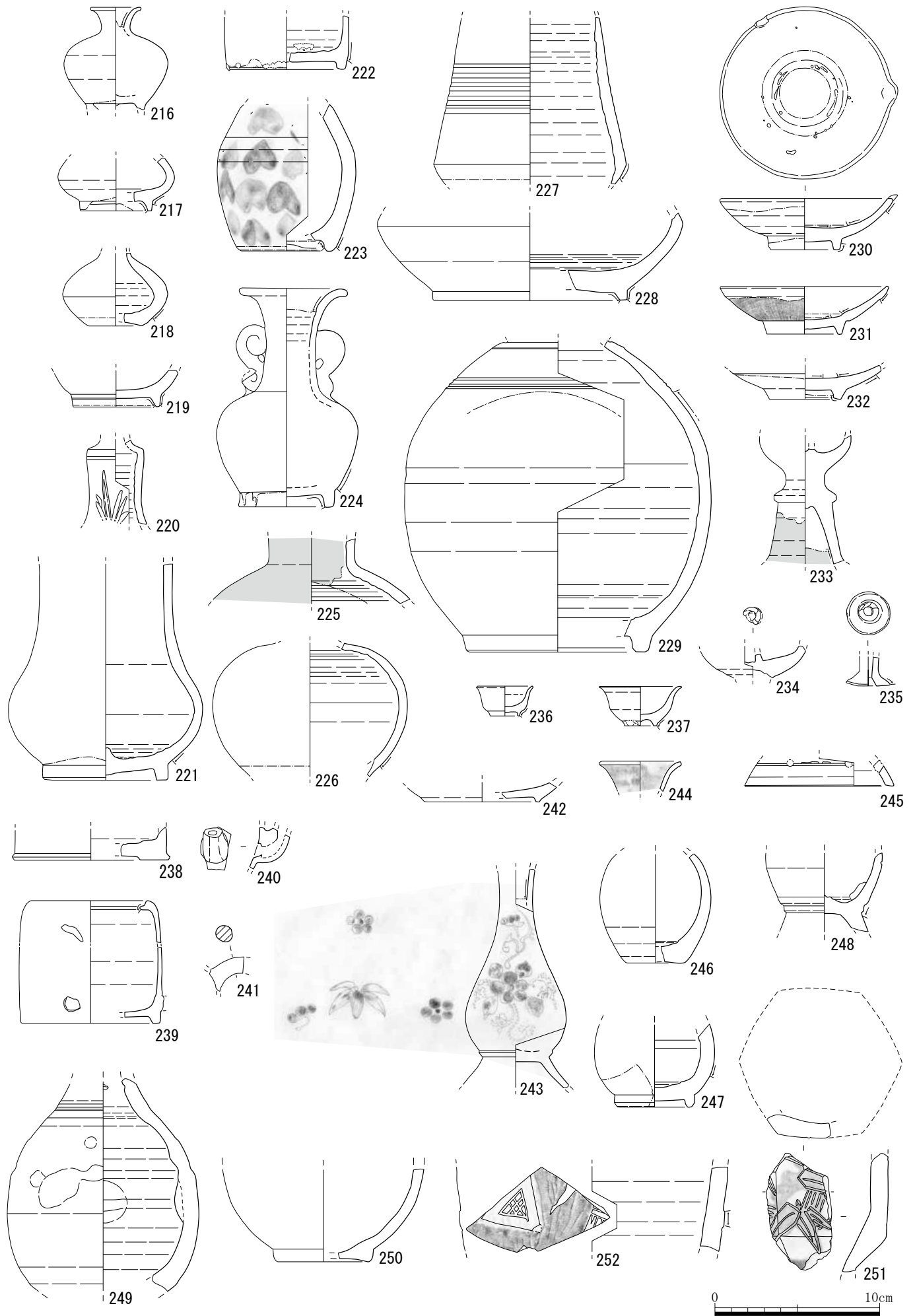




第 63 図 沖縄産施釉陶器 7



図版 40 沖縄産施釉陶器 7



第 64 図 沖縄産施釉陶器 8



図版 41 沖縄産施釉陶器 8

## (4) 沖縄産無釉陶器

荒焼（アラヤチ）と称される沖縄産の無釉の焼き締め陶器を扱い、中にはマンガン釉や泥釉等が施されるものも含まれる。また、胎土が砂質、或いは軟質（陶質にやや近い）のものも沖縄産無釉陶器で扱った。総数 13640 点と大量に出土し、その出土量を第 36 表、平面分布を第 66 図、接合関係を第 43 図、第 37 表に屋敷別の出土量、第 35 表に観察一覧を示した。なお、5cm 以下は分類・報告から除外している。最も多く出土した遺物は貯蔵容器の壺や甕で、調理容器である播鉢も次いで多い。沖縄産施釉陶器で多く見られる食膳容器の碗、皿、急須は僅か 0.9% の出土量で、中でも小皿は殆どが灯明皿に使用され、本遺跡では食膳容器としての用途は少ないようである。地区別では HA ②・HA ③での出土が多く、両地区で全出土量の 93% を占める。

HA ②では祝女殿内から多量に出土し、その中でも不明建物（D1）出土が最も多い。次に三良又吉小（K6）とその周辺から出土する。第 37 表の屋敷別出土量から見ても祝女殿内出土が特に多いことが窺える。元集落のナカミチ出土も割と多い。HA ③は A12・13（仲村渠）を中心とした周辺と S-7（溝）、S-640（自然流路）を挟んで F15（蒲伊礼小）を中心に G17（小渡小）や S-3・S-10（道路）等の二箇所でも多く出土する。両地区は戦前の平安山集落で当時の屋敷跡が検出されており、他の遺物と兼ね合わせて当時の生活の一端を窺うことが出来る。旧平安山集落からはずれる HA ④・①は両地区合わせても 28 点と僅かの出土である。主な遺構出土の沖縄産無釉陶器は第 3 節 1 の遺構の項にて報告を行った。殆どはⅡ層出土で、接合関係を示した第 43 図から見るとかなり離れた場所の遺物も接合されることから、戦後の米軍基地接收時に攪乱を受けていることが明らかである。Ⅲ・Ⅳ層から出土する遺物もあり、かなり深く掘削されたと思われる。

以下、器種別に記述するが、それぞれ個々の遺物の詳細は第 35 表の観察一覧に記した。

### 1. 碗

碗は 68 点が出土したが、壺等の出土量と比べると僅か 0.5% である。第 66 図の平面分布を見ると HA ③が 40 点と最も多く、屋敷別（蒲伊礼小、仲村渠等）にまとまりが見られる。次に HA ④が 18 点と続く。HA ②は沖縄産無釉陶器が最も多く出土するが、碗は 10 点と少ない。特に祝女殿内からは 5 割近くも沖縄産無釉陶器が得られるが、碗は僅か 2 点である。その次に多いのは瓦屋又吉小の 6 点である。以下、形状により二つに分類した。

I 類：逆「ハ」字状に外反し、口径は大きい。胴部は直線的で、底部からの立ち上がりは緩やかなもの

Ⅱ類：I 類より外反が弱く、口径は小さくなる。腰が折れて胴部は膨らむもの

I 類は図 1～8、Ⅱ類は図 9～11 に図示した。全体的には若干 I 類が多い。I・Ⅱ類とも形状はやや異なるが、胎土や器色等はほぼ同じである。高台は 0.3～0.6cm と低めが殆どで、畳付の幅は 0.4～0.7cm 間に収まる。マンガン釉を施すものが多く見られることから全般的にやや古手と思われる。読谷村喜名古窯出土の遺物と比較させてもらったところ<sup>註1</sup>、焼成、胎土、マンガン釉等から喜名焼の可能性が高いもの（図 1）も得られた。図 8 は断面の器色が暗紫色で層状を呈し、備前焼にも類似する。ただ、同様な胎土を持つものが沖縄産無釉陶器にも見られ、今回はここで扱った。

### 2. 皿

皿は 38 点（全体の 0.3%）が出土し、図 12～18 に図示した。出土量が多い地区は HA ②が 21 点、HA ③が 14 点である。前者では祝女殿内出土が 14 点と目立ち、後者は A9～11 で 7 点と最も多く得られた。小皿が多く、口唇部に見られる煤付着の皿は灯明皿と思われる。大きさの違いにより二つに分類した。

I 類は小皿で、図 12～17 に図示した。口縁が逆「ハ」字状に外反し、削りによって胴部に稜を持つが、不明瞭なものもある。底部はベタ底が多いが、若干上げ底を呈するものもある。図 16 は外面にも煤が明瞭に残る。

Ⅱ類は大皿で図 18 の 1 点である。口縁が逆「ハ」字状に外反し、畳付の幅は 0.6、高台が 0.4cm と碗同様に低い。

### 3. 急須

急須は 23 点（0.2%）の出土で、図 19～23 に 5 点を図示した。図 19・20 は本体部分、図 21 は把手部分のみ、図 22・23 は蓋である。図 19 には受け口が見られ、器色は青灰褐色を呈する。図 20 の注ぎ口は先端部が破損しており、全体的に赤褐色を呈し、やや薄手である。図 21 の把手は全体的に気泡が見られ、古手の可能性がある。図 22・23 の蓋径の大きさがそれぞれ異なり、前者は 9.0、後者は 12.4cm である。

### 4. 鍋

鍋は図 27 の 1 点のみの出土である。腰部のみだが、外面には煤が付着している。やや軟質で陶質土器にも近いが、器厚が 0.9～1.1cm と厚く、ニービを混和しないことからここに含めた。

## 5. 播鉢

播鉢は 1648 点 (12.1%) が得られ、図 28～82 に 55 点を図示した。HA ②・③での出土が多く、次に HA ④と続く。播鉢が多数出土していることから、調理容器としての必要頻度や具材の検討等、今後の課題である。安里・他 (1987) の播鉢分類を参考に、器形や櫛目を等組み合わせで以下のように分類した。同類の中で同じ形状を持つが、粘土や焼成、器厚等が明らかに違うものも見られる。産地の違いであろうか。始めに口縁部、次に底部を略述する。

### (口縁部)

口～底部まで復元可能な個体を参考に主なものを I～IV 類に分け、第 33 表に形状の分かる口縁・頸部のみ分類別の出土量を示した。平安山原 B 遺跡 (2015) の播鉢分類とほぼ同じであるが、本遺跡では稜等の形状を重視したために I 類の中に平安山原 B 遺跡で分類した II 類の一部が含まれる。

- I 類：口縁部の稜は 2 条でその直下は直線的な形状・内面にも稜を持つ・櫛目の方向は直線的で間隔が有るもの
- II 類：口縁部の稜は 1 条でその直下は直線的な形状・内面に稜を持つものと持たないものがある・櫛目の方向は直線的 or やや弧状で間隔が有るもの
- III 類：逆「L」字状の外反を呈し、口～胴部は直線的な形状・櫛目の方向は直線的 or 弧状で間隔が有るもの
- IV 類：逆「L」字状の外反 (幅で 2.1cm 以上) を呈し、口～胴部は丸みを呈する形状・櫛目の方向は直線的 or 弧状で、間隔は無いもの

I 類は 44 点 (図 28～40) が得られ、稜の間が幅広いものを A (図 28～34)、稜の間が幅狭いものを B (図 35～40) に細分した。

器厚は両者とも薄手と厚手が見られ、前者は口唇の端部が舌状を呈し、幅が狭い。厚手は口唇の端部が角か丸で、幅がやや広くなる傾向が見られた。櫛目の方向はいずれも直線的で、櫛目間は間隔が開く。

A は自然釉が多く見られ、器色も暗茶褐色等が殆どで古手の可能性が考えられる。

II 類は 139 点と最も多く、図 41～56 に図示した。口縁部の稜と櫛目の方向の違いによって A：稜が明瞭・櫛目方向が直線的 (図 41～51)、B：稜がやや明瞭・櫛目方向がやや弧状 (図 52～56) に細分した。胴部はいずれも直線的で、浅い不明瞭なロクロ痕が同間隔で見られる。図 50・54 は櫛目の間隔が無く、口縁部の稜などの形状から II 類とした。図 55・56 は器色が明橙色を呈し質的に新しい感を受けるが、明瞭な稜などの特徴から II 類に含めた。

III 類は 73 点の出土で図 57 に 1 点を図示した。口唇上面の幅が 2.0cm と広く圏線も見られ、IV 類とも捉えられるが、胴部が直線的であるなど全体的な特徴から III 類とした。尚、II or III 類も 73 点を得られた。

IV 類は 136 点の出土で、II 類とほぼ同数である。図 58～62 に図示し、いずれも口唇の上面幅が 2.1cm 以上と広く、圏線も見られる。図 58 の胴部はやや直線的であるが、口唇部の上面幅が 2.5cm と広いことから IV 類に含めた。

### (底部)

底部は 258 点を得られ、口縁部の分類に準じた。図 63～71 は I or II 類、図 72～76 は III 類に分けられる。図 66 の外面は重ね焼き痕が明瞭、図 69 は砂質で焼成が甘く、混和材等から備前の影響を受けたと思われる<sup>註2</sup>。図 70 は櫛目の間隔が無く、胴部が直線的等の特徴から II 類と思われる。

また、図 77～81 は脚付きの底部で復元個体が無く、口縁部が不明なために V 類とした。形状から A：脚部・胴部とも直線的なもの (図 77～79)、B：脚部が膨らみ、胴部は直線的なもの (図 80・81) に分けられる。中には胴部が直線的である等、III 類に近いものもある。A・B とも脚部には孔が見られ、図 77 にはいずれも貫通した 3 個の孔、図 80 は貫通した 1 個の孔、図 81 は未貫通の孔である。図 80 の脚部の外面に波状文、内面に複数の圏線が施される。尚、図 82 は僅かにニージュを含み軟質ではあるが、今回はここで扱った。

## 6. 水鉢

水鉢は「ミジクブサー」と呼称されているものである。本遺跡では様々な大きさのものが見られ、口径が 12.4～25.2cm と幅広い。285 点 (2.1%) が出土し、図 83～110 に図示した。以下のように I～III 類に分類され、いずれにも有文、無文が見られる。水鉢の中では I 類が最も多い。

- I 類：口縁部は内彎し、直下はくびれ、口唇部が三角や玉縁状を呈するもの (図 83～98)
- II 類：口縁部は内彎し、口唇部が丸・舌状を呈するもの (図 99～104)
- III 類：小型で I 類から外れる薄手のもの (図 105～110)

I 類の中でマンガン釉が施されるものは薄手でやや小振りである。図 83・89 の口唇部には波状文が施される。

第 33 表 播鉢 (口縁・頸部) 分類

分類 地区	I	II	II or III	III	IV	計
HA ③	21	69	34	34	52	210
HA ②	15	68	39	42	83	247
HA ④	8	2		2	1	13
計	44	139	73	78	136	470

Ⅱ類の中で無文は小振り、有文は大振りなものに多く見られる。図 104 は他と異なり胎土が軟質でやや砂質に近いが、形状からここで扱った。

Ⅲ類はⅠ類に類似するが、若干形状や特徴が異なる。図 105・107 はⅠ類と形状が似るが、頸部には横位の圏線が施される。後者は外面に茶褐色の釉薬が施され、沖縄産施釉陶器の可能性もある。図 106～110 は口唇・口縁部の形状が異なり、図 106・108 は口唇部が角で直状、図 109 は舌状で直状、図 110 は舌状で外反する。

## 7. 鉢

鉢は花鉢も含めて 628 点 (4.6%) が出土し、図 111～123 に図示した。以下、三つのタイプに分類される。

Ⅰ類：口縁部は逆「L」字状に外反し、胴部がやや丸みを持ちながら立ち上がる (図 111～114・120・121)

Ⅱ類：口縁部は逆「L」字状に外反し、胴部が直線的に立ち上がる (図 115～117・122・123)

Ⅲ類：口縁上部がやや内彎する (図 118・119)

Ⅰ類は鉢の中で最も多く得られ、大半が明るい赤褐色を呈する。図 120 は胴部で、外面に弧状の凸帯文と葉文を貼付していることから花鉢と思われる。図 121 の底部も形状からⅠ類とした。

Ⅱ類は外面が全体的に朱色の釉薬を施し、Ⅰ類などに比べて深みのある赤褐色を呈する。図 122・123 の底部には、外面の立ち上がり部に圏線と袂が見られる。

Ⅲ類は 2 点を図示した。図 118 は胴部が丸みを呈し、図 119 は直線的である。いずれも口縁上端は平らで幅広い。

## 8. 香炉

香炉は 41 点 (0.3%) が出土し、図 124～127 に図示した。底部は脚付きが若干多いが、脚が無いものも見られる。火取と香炉は口縁部の形状が類似し、区別が困難なことから今回は両者をまとめて集計した。図 124～126 はいずれも径 2.0cm 前後、高さ 0.5cm 前後の円形の脚が 3 個貼付され、筒型を呈する。殆どが小型で、図 124 の外面には圏線が施されている。香炉は HA ②の祝女殿内で多く出土する。

## 9. 火炉

火炉は 260 点 (1.9%) が出土し、図 128～137 に図示した。いずれも「く」字状に屈曲させる形状で、口縁部が窓を持つもの (図 128～133) を A、口縁部が平坦なもの (図 134・135) を B とし、前者が多く出土する。A とした図 131 は薄手で、他はやや厚手の火炉である。B の図 134 は屈曲部に穿孔がある。図 136・137 の 2 点は火炉の底部と思われ、円形の脚が 3 個貼付されている。後者は外面の立ち上がり部に圏線が施される。

## 10. 瓶

瓶は 963 点 (7.1%) が出土し、図 138～152 に図示した。形状の違いによりⅠ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類：最大径は底部近くにあり、ナデ肩を呈するほぼナス形タイプ (図 138～141)

Ⅱ類：最大径は胴部にあり、胴長でやや張るタイプ (図 142・144～146)

Ⅲ類：最大径は胴部にあり、ほぼ砲弾形を呈するタイプ (図 143)

Ⅳ類：最大径は胴部にあり、胴部が丸形を呈するタイプ (図 147～152)

Ⅰ類は沖縄で「1 合マス」、「2 合マス」等と通称されているもので、形状により A・B に分類した。A は胴下半部まで直線的なタイプで、図 138 に図示した。B は胴部がやや丸みを帯びるもので、図 139～141 に図示した。

Ⅱ類は 4 点を図示し、口縁部が図 142 の 1 点、底部は図 144～146 の 3 点である。図 142 は肩部に複数の圏線を施し、底部 3 点は内面のロクロ痕が顕著である。図 144・145 はやや丸みを帯び、図 146 はやや直に立ち上がる。

Ⅲ類は図 143 の 1 点を図示した。本資料は胴部の張りがⅡ類より弱いことからⅢ類とした。沖縄では「ターワカサー」もしくは「鬼の手」と称される。那覇市の壺屋古墓群Ⅰ (1992) では徳利のⅣ型に分類されている。

Ⅳ類は沖縄で「チュワカサー」もしくは「ヒラチビ」と呼ばれているものである。サイズが大小あり、図 147～152 に図示した。図 150 の外底は他と異なり、高台を持つ。図 152 は胎土が軟質だが、形状からここに含めた。瓶はⅡ類、Ⅳ類が多く出土する。

## 11. 壺

壺は 5397 点 (39.6%) と最も多く得られ、図 24・25、153～185 に特徴的なものを図示した。口縁・頸部は様々な形状や大小のサイズが見られ、以下のようにⅠ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類：口縁部は直状を呈し、肩部から胴部にかけて張り出すタイプで、サイズは大小あり (図 153～167)

Ⅱ類：口縁部は外反し、肩部から胴部にかけて張り出すタイプで、サイズは大小あり (図 168～177)

Ⅲ類：無頸の口縁部で、肩部から胴部にかけて張り出しが大きいタイプ (図 178)

Ⅳ類：無頸の口縁部で、内彎するタイプ（図 179）

Ⅰ類は口唇部の形状により A・B に分類した。A は口唇部の断面形が玉縁状を呈するもので、図 153～161 に図示した。サイズは小型が大半である。図 160 は口唇部全体が丸みを呈し、数条の圈線が施される。外面にも菊花文・三重の円形文が見られる。焼成が良く堅致である。B は口唇部の断面形が四角で逆「L」字状を呈するもので、図 162～167 に図示した。サイズは大小あり、大（図 166・167）は口唇部の側面に圈線が施される。図 166 は壺屋焼で、肩部には窯印が見られる。本資料の窯印は『壺屋の判と屋号・家名一覧表』（内間・2002）によれば「新屋敷」の屋号である。

Ⅱ類も口唇部の形状により A～C に分類した。A は口唇部の断面形が蒲鉾状を呈し、図 168～172 に図示した。

図 168 は小型で、口唇部が余り張り出さない。17C 後半頃であろうか<sup>註2</sup>。図 169 は間延びしたような大きな肥厚部が見られる。図 172 は頸胴部であるが、全体的な特徴からⅡ類とした。B は口唇の断面形が四角で、図 173 に図示した 1 点である。短頸で、肩部からの張り出しが強い。C は口唇部の断面形が三角や舌状を呈するもので、図 174～177 に図示した。図 174・175 は肩部に圈線が施され、前者には窯印が施される。図 176 は外面と内面上部にマンガン釉が施され、器色は茶褐色となる。図 177 は前二者より胴部の張りが弱である。

Ⅲ類は図 178 の 1 点を図示した。口唇部はやや玉縁状を呈し、肩部から胴部にかけての張り出しが大きい。

Ⅳ類は図 179 の 1 点を図示した。口縁部はやや内彎し、胴部の張りは弱い。壺で最も多いものはⅡ類で、次いでⅠ類と続き、Ⅲ・Ⅳ類は僅か数点の出土である。

蓋は 4 点が得られ、図 24・25 に 2 点を図示した。前者は円形の蓋上にリボン状の撮みを貼付し、やや小型の壺の蓋と思われ、後者は撮みが無く、大型の壺の蓋が想定される。

図 180～185 の 6 点は壺の胴部、底部である。図 180 は胴部で、内面に粘土の積み痕が明瞭に残る。灰褐色を呈しており、焼成が甘いのであろうか<sup>註2</sup>。図 181～185 は壺の底部で、図 184 は砂質で内面にロクロ痕が明瞭に残る。他の底部と胎土や混和材が異なるが、今回はここに含めた。このような軟質系の土器は壺以外にも得られ、本来、「荒焼（アラヤチ）」と称される無釉の焼き締め陶器を基準とした沖縄産無釉陶器の範疇からは外れる。これらも沖縄産無釉陶器の中で扱うのか、今後の課題としたい。

## 12. 甕

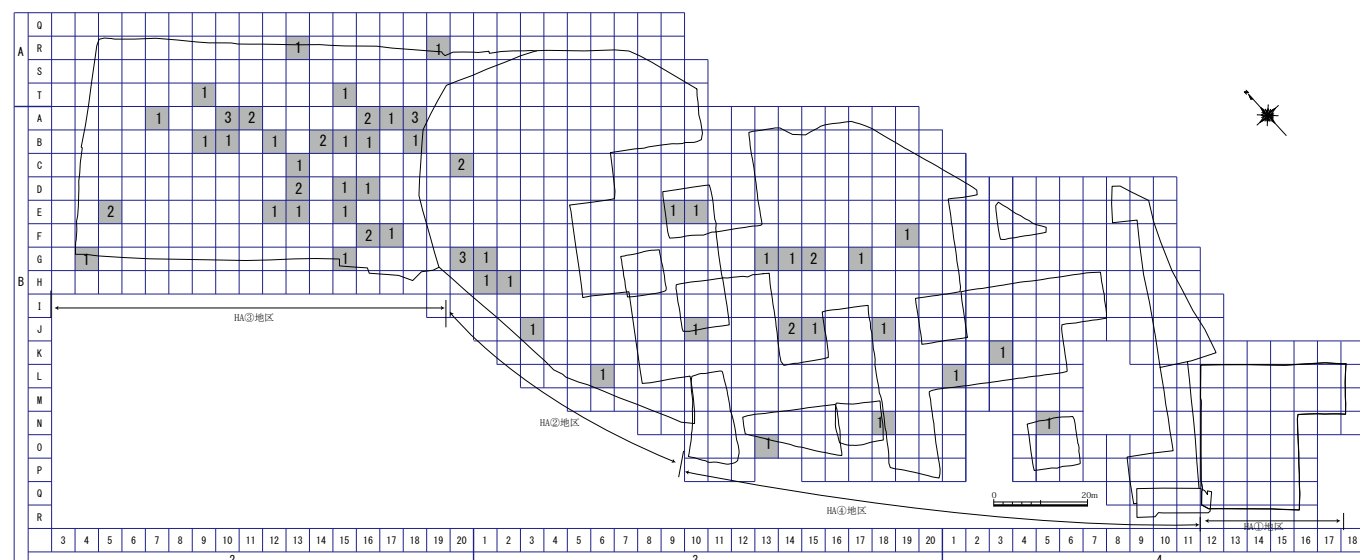
甕は 752 点（5.5%）が得られ、同様な器種が多く見られることから代表的な 3 点を図示した。図 186 は逆「L」字状に張り出した口縁部を持ち、肩部から胴部にかけて丸みを呈する。頸部には圈線と円形の浮き文が見られる。図 187 は口縁部の内側が「く」字状に屈曲し、明瞭な稜を持つ。図 26 は厨子甕の蓋で、二段目の平らな部分に獅子顔の加飾が見られる。周囲が打割され、二次加工の可能性も考えられる。

また、壺・甕のいずれかの器種と思われるものが 2806 点出土した。全体の出土量の 20.6% も占め、貯蔵用である壺、甕の出土量と合わせると 65.7% の割合となり、沖縄産無釉陶器の主体であることがわかる。

### 〈註文献〉

註 1：読谷村立歴史民俗資料館館長 仲宗根求氏のご厚意による

註 2：大橋先生のご教示



第 65 図 沖縄産無釉陶器（碗）平面分布





第36表-1 沖縄産無釉陶器 観察一覧

(質量単位: cm)

第図 図版	図番 号	器種	分類	部位	口径 器高	底径 底厚	形状・特徴(口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色(釉)	素地・焼成・混和材	地区・ケルト・層 遺構・台帳(取)番号	
第67図・図版42	1	碗	I	口~底	17.0 6.7	6.4 0.6	逆「n」字状外反・胴直線的・立ち上がり緩やか 高台(0.6)・畳付幅(0.7)	内外-明茶褐色 (両-マゴン釉)	茶褐色・やや悪(内-気泡) 石英(細・少)	HA③ B14 II S-20 台1017	
	2			口	14.2	—	逆「n」字状外反・口唇舌 胴直線的・薄手(0.2-0.6)	内外-暗茶褐色 (両-マゴン釉)	茶褐色・良 石英・赤粒(粗・多)	HA③ D13 II 台3247	
	3			底	—	—	8.0 0.7	立ち上がり緩やか・高台(0.6)・畳付幅(0.5)	内外-明茶褐色 (両-鉄釉?)	ワド状・良 (暗茶・黒・暗茶)	HA④ E9 III SP749 台3773 HA④ J10 II 台2532
	4				—	—	6.2 0.5	立ち上がり緩やか・高台(0.5)・畳付幅(0.6)	内外-暗茶褐色 (両-マゴン釉)	暗茶・暗茶褐色・良 石英(粗・中)	HA③ B15 I S-43 台2648
	5				—	—	7.0 0.6	立ち上がり緩やか・高台(0.3)・畳付幅(0.4) 胴一圏線2条(幅0.1)・薄手(0.3-0.7)	外-暗灰褐色 内-灰褐色	層状(白・茶紫色)・良 赤・黒粒(粗・多)	HA④ P19 II 台2886
	6				—	—	6.8 0.4	立ち上がり緩やか・高台(0.6)・畳付幅(0.4)	外-暗茶褐色 内-茶褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・中)	HA② J3 II 名嘉座 台1239
	7				—	—	6.8 0.7	立ち上がり緩やか・高台(0.5)・畳付幅(0.6)	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・良 石英(細・少)	HA② C20 II 上 台573
	8				—	—	7.2 0.6	立ち上がり緩やか・高台(0.6)・畳付幅(0.6)	内外-暗茶褐色	層状(白・暗紫色) やや悪・石英(粗・多)	HA③ F16 II 台1892
	9	II	口~底	12.2 5.8	5.2 0.5-0.8	逆「n」字状外反(Aより弱)・腰折れ(胴膨らむ) 高台(0.5)・畳付幅(0.7)・内底盛り上がる	外-暗灰褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・良	HA③ A16 II 台533 HA③ A18 II S-12 台559		
	10		底	—	—	7.8 0.7	腰折れ(胴膨らむ)・高台(0.7)・畳付幅(0.4)	外-黒茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・空間有り 焼成やや悪(気泡)	HA③ A16 II 台2879	
	11			—	—	5.8 1.0	腰折れ(胴膨らむ)・高台(0.6)・畳付幅(0.7)	内外-暗茶褐色 (両-マゴン釉)	灰褐色・良・石英(粗・中)	HA③ E5 I 台1322	
	12	皿	I	口~底	10.4 2.4	4.4 0.6	小皿・逆「n」字状・口唇舌 胴下部屈曲(削り)・底-平	外-明茶褐色 内-黄茶褐色	赤褐色・良	HA② T4 II 祝殿台362	
	13				10.6 2.6	4.4 0.9	小皿(灯明・内側煤)・逆「n」字状 口唇やや舌・底-平・上げ底	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA② E1 II 祝殿台1024	
	14				10.4 3.2	6.2 1.1	小皿(灯明・内外煤)・逆「n」字状・口唇舌 胴中央僅かに屈曲(削り?)・底-平	内外-暗褐色 (口唇:泥釉)	褐色(やや砂)・良	HA③ T14 II S-11 台976	
	15				10.5 2.8	5.4 0.6	小皿(灯明・内底煤)・逆「n」字状・口唇舌 胴下部僅かに屈曲(削り?)・底-平・上げ底	外-茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・良 赤粒・石英(粗・多)	HA③ E9 II S-39 台1075 HA③ E9 II 台1371	
	16			9.8 2.7	6.8 0.3	小皿(灯明・内外煤)・逆「n」字状・口唇舌 胴下部僅かに屈曲(削り)・底-平・雑	内外-灰褐色	ワド状(灰・茶・灰)・良 赤粒(粗・多)	HA④ G13 II SD42 台3182 HA④ F13-14 II SD42 台3194		
	17			底	—	—	4.4 0.6	小皿(灯明皿?)・底-平・立ち上がり直 一部煤?	外-暗褐色 内-褐色	褐色(やや砂質)・良 赤粒(中・中)	HA② E3 II 上台1500
	18	II	口~底	21.2 3.2	14.4 0.5	大皿・逆「n」字状・口唇舌・胴やや張る 高台(0.4)・畳付幅0.6	外-黒茶(マゴン釉) 内-茶褐色	茶褐色・良 赤粒・石英(粗・中)	HA② E1 II 祝殿台1283		
19	急須	口	—	7.9	—	口縁直(頸部くびれ)・口唇丸・胴膨らみ強 受口有り	外-青灰褐色 内-灰黄褐色	灰褐色・良・ワド(青灰・ 暗茶・青灰)	HA② T1 II 台637		
20			—	8.9	—	口唇丸・口縁直・胴膨らむ・注口有(半欠損) 受口無し	外-赤茶褐色 内-赤茶褐色	茶褐色(砂)・良 赤粒・石英(細・中)	HA② A2 II 祝殿台446		
21		—	把手	—	—	—	把手のみ・円柱・外-気泡	内外-暗茶褐色	茶褐色・良	HA④ G13 III SP890 台3862	
22		—	蓋	—	9.0 3.3	7.2(脚) —	鈔下ム状・撮みやや宝珠形 脚部(高0.7・幅0.2)	外-茶褐色 内-茶褐色	赤褐色(やや砂)・良 石英・砂粒(細・多)	HA② S4 II 祝殿台960	
23		—		—	12.4 1.5(現)	10.1(脚) —	鈔平ら・撮み破損・脚部(幅0.3・高0.7) 文様-上面に圏線3条(幅0.1)	外-暗茶褐色(マゴン釉) 内-灰褐色	茶褐色・良 石英・赤粒(粗・中)	HA③ D10 I 台1308	
24		壺	蓋	—	8.0 1.8	—	円形状・中央にリボン状の撮み・両端やや反る 小壺の蓋?・無文	外-黒茶褐色 内-暗茶褐色	暗茶褐色・硬 石英・砂粒(細・多)	HA③ A15 II 台3108	
25				—	—	13.2 4.4(現)	7.0 —	鈔平ら・脚部(幅0.7・高3.4)・撮み無し 大型壺の蓋?・無文	内外-赤褐色(外面半分と 脚は暗褐色:煤?)	赤褐色・良	HA② B20 II 祝殿 台837
26	—			—	—	—	—	段有り(径11.2)二次加工?(周囲に打割痕) 文様-外面に獅子顔	内外-赤褐色	赤褐色(砂)・良 石英・砂粒(細・少)	HA② I 壁面清掃台793
27	鍋	—	底近く	—	14.0(現)	底-やや丸み(推定)・外底-煤付着・軟質	外-暗茶褐色 内-明褐色	明褐色(砂・ニヒ混)・良	HA② H3 II 名嘉座台1166		
第70図・図版45	83	水鉢	I	口	12.4	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅0.8)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-口唇・外面に波状文(複)	外-暗褐色(マゴン釉) 内-暗茶褐色(マゴン釉)	層状(白・灰褐色)・良	HA③ B14 II S-20 台847	
	84				14.6	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅1.1)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(複)	外-紫茶褐色(マゴン釉) 内-茶褐色	茶褐色・やや悪(気泡)	HA③ B15 I S-43 台2648	
	85				13.2	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅0.9)・直下くびれ 胴膨らむ・無文	外-暗茶褐色(マゴン釉) 内-茶褐色	茶褐色・良	HA③ C13 II 台3211	
	86				17.4	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅1.1)・直下くびれ 胴膨らむ・無文	内外-茶褐色	茶褐色・良	HA② B3 III SK058 台2262	
	87				16.0	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅1.3)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(1)	外-明紫色(マゴン釉) 内-明茶褐色	暗茶褐色・良	HA② K4 II 三良台2605	
	88				16.9	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅0.8)・直下くびれ 胴膨らむ・無文	外-暗茶・黄色(泥釉) 内-茶褐色	茶褐色・良	HA③ C14 II 台2416	
	89				19.2	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅0.8)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-口唇・外面に波状文(複)	外-暗茶褐色(上マゴン釉) 内-橙褐色(上マゴン釉)	層状(白・紫褐色)・良 赤・白粒(細・中)	HA④ J18 II 台2572	
	90				18.0	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅1.7)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(複)	外-暗茶褐色 内-茶褐色	茶褐色・良	HA② B1 II 祝殿台1927	
	91				23.0	—	内湾・口唇三角(上面平ら-幅1.7)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(1条・幅広・交差)	内外-明茶褐色	暗赤褐色・良	HA③ G15 II S-3 台1465	
	92				17.4	—	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.5)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(複)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA② B19 II 祝殿台847	
第71図・図版46	93	14.1	—	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.1) 胴膨らむ・文様-外面に波状文(複)	外-暗茶褐色 内-灰茶褐色	茶褐色・良	HA③ B19 I 台2551				
	94	16.6	—	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.2)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(複)	内外-橙褐色	橙褐色・良	HA② G2 I 台1971				

第三章  
5

第36表-2 沖縄産無釉陶器 観察一覧

(法量単位: cm)

第図 図版	図番 号	器種	分類	部位	口径 器高	底径 底厚	形状・特徴(口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色(釉)	素地・焼成・混和材	地区・ケルト・層 遺構・台帳(取)番号
第71図・図版 46	95	水鉢	I		22.4 —	— —	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.7)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-外面に波状文(釉で不明瞭)	外-灰紫色(泥釉) 内-紫褐色	紫褐色・良	HA ② B10 II 祝殿台 1951
	96			口	23.6 —	— —	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.9)・直下くびれ 口縁上部膨らむ・文様-外面に波状文(複)	外-暗赤褐色 内-赤褐色	茶褐色・良	HA ② A6 II 畠台 1909
	97			口~底	18.0 7.4	8.6 0.8	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.3)・直下くびれ 口縁上部膨らむ・胴下部直線的・文様-外面に 波状文(複)・外-二色(重ね焼き?)	外-赤褐・黄茶褐色 内-灰褐色	赤褐色・良	HA ② C4 II 祝殿 井戸1台 627
	98			口	24.6 —	— —	内湾・口唇玉縁(上面平ら-幅1.8)・直下くびれ 口縁上部膨らむ・文様-外面に波状文(複)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ② A6 II 石23台 1379
	99		II	口	15.2 —	— —	内湾・口唇丸・胴膨らむ・無文	内外-茶褐色	赤褐色・良	HA ② K6 II 三良台 1833
	100				17.0 —	— —	内湾・口唇丸・胴膨らむ・無文	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ③ A8 III S - 361台 2762
	101				15.6 —	— —	内湾・口唇やや丸・口縁上部に最大径・無文	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ③ A5 I S - 113台 838
	102				22.0 —	— —	内湾・口唇丸・口縁上部に最大径・文様-外面に 圏線2条(その間に刺突文+緩やか波状1条)	内外-茶褐色	赤褐色・良	HA ② D1 II 祝殿 台 1135
	103		口~底	25.2 15.1	14.9 —	内湾・口唇舌・口縁上部に最大径 文様-外面に圏線+波状	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ② D1 II 不建台 830 HA ③ E1 II 祝殿台 1837	
	104		口	14.0 —	— —	やや内湾(直気味)・口唇丸・文様-外面に0.5幅の 圏線2条・口縁内側-上部膨らむ	外-暗橙褐色 内-橙褐色	橙色(砂)・やや良 石英赤粒(細・多)	HA ③ F4 II 台 1266	
	105		III	口	13.4 —	— —	小型・内湾・口唇三角(上面平-幅0.6)・直下くびれ 胴膨らむ・文様-頸部に圏線1条	外-暗灰褐色(黄?泥釉?) 内-暗灰褐色	茶褐色・良	HA ③ T6 III S - 206台 2258
106	12.0 —	— —			小型・口縁直(上面平-幅0.5)・直下くびれ・ 胴膨らむ・無文	外・内上-暗茶褐色 内-茶褐色	茶褐色・良	HA ④ J14 III 台 2153		
107	14.2 —	— —			小型・内湾・口唇三角(上面平-幅1.1)・直下くびれ 胴膨らむ・無文	外-茶黄褐色(茶釉?) 内-茶褐色	層状(白・茶褐色)・良 赤・白粒・石英(細・少)	HA ③ B14 II S - 20台 847 HA ③ B14 II 台 2823		
108	10.4 —	— —			小型・口縁やや直(上面平-幅0.4)・直下くびれ 胴膨らむ・無文	内外-暗茶褐色	茶褐色・良	HA ② F19 II 坊子台 699		
109	10.6 —	— —			小型・口縁直・口唇やや舌・直下くびれ 胴膨らむ・無文	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・良	HA ② K6 II 三良台 1567		
110	12.6 —	— —			小型・口縁外反・口唇やや舌・直下くびれ 胴膨らむ・無文	外-茶褐色 内-暗茶褐色	暗茶褐色・良	HA ② A20 II 祝殿 台 1309		
第72図・図版 47	111	I	口	34.0 —	— —	逆「L」字状外反・角(2.4×0.8)・胴やや丸み 文様-圏線(口唇上面)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ② D1 II 祝殿 不建 台 262・1134	
	112			24.0 —	— —	逆「L」字状外反・角(1.2×0.7)・胴やや丸み 文様-圏線(口唇上面)・吻痕顕著	内外-赤褐色	茶褐色・良	HA ② D1 II 祝殿 台 355	
	113			30.6 —	— —	逆「L」字状外反・丸(3.0×0.9)・胴やや丸み 文様-圏線(口唇上面)	内外-茶褐色	橙色・やや良 赤粒(粗・多)	HA ③ F15 S - 3 II 台 534.630.1463 HA ③ F17 S-10 II 台 1414	
	114			26.8 —	— —	逆「L」字状外反・角(2.4×0.9)・胴やや丸み 文様-圏線(口唇上面)	内外-橙褐色	橙色(軟質・こぼれ?)・悪 赤粒(中・多)	HA ③ T14 II S - 40 台 2500 HA ③ T15 II S - 40 台 2480.2501	
	115	II	口	26.2 —	— —	逆「L」字状外反・角(1.9×1.3)・胴部直線的 文様-圏線(口唇側面)	内外-茶褐色	茶褐色・良	HA ② S3 II 祝殿 台 959.938	
	116			21.2 —	— —	逆「L」字状外反・角(1.9×0.7)・胴部直線的 文様-圏線(口唇側面)	外-暗茶褐色 内-茶褐色	茶褐色・良	HA ② B2 I 台 2548	
	117			胴(頸)	— —	— —	逆「L」字状外反・胴部直線的 最大胴径(22.4)・内-墨書(判読不明)	内外-赤褐色 (外・内上-赤釉)	赤褐色・良	HA ③ G14 II 台 1516 HA ③ F14 IV 台 3216
	118	III	口	20.0 —	— —	やや内湾・口唇平ら(幅広:2.0) 口唇・口縁外-石灰付着	内外-橙褐色	橙色(砂・こぼれ混)・良 赤粒(粗・少)	HA ③ C9 II 台 1773	
	119			43.0 —	— —	口唇内側内湾・口唇平ら(幅広2.1) 文様-外面に圏線+細凸帯文	内外-橙褐色	橙褐色・良	HA ② B4 II 祝殿 台 1340	
	120			胴	— —	— —	花鉢・外反・最大胴径24.6・文様-外面に幅0.7の 凸帯文+花文+葉文貼付	外-赤褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・良	HA ② D1 II 祝殿 不建台 831 HA ② A4 II 祝殿 台 1622
	121	II	底	— —	25.2 1.5	— —	平底・立ち上がり直・胴部丸み 内外-片丁摩	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ② G19 II 石10 台 3073
122	— —			18.0 0.9	— —	外底上げ底・胴部直線的 文様-外面に圏線(明瞭)・指押さえ部明瞭	外-暗茶色(釉?) 内-暗橙褐色	暗橙褐色・良	HA ③ D15-16 II S - 4 台 1570.1603	
123	— —			14.4 0.8	— —	外底上げ底・胴部直線的 文様-外面に圏線(明瞭)・指押さえ部明瞭	外-赤褐色(釉?) 内-明赤褐色	明赤褐色・良	HA ③ G13 II 台 1550	
第73図・図版 48	124	香炉	—	口~底	8.6 6.2	7.4 0.7	筒型・口縁内側はやや内湾・口唇平ら 底-三脚(円形・径2.1・高0.7)	内外-茶褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA ③ B9 II S - 65 台 1060 HA ③ T12 II S - 7 台 1328
	125				9.2 7.1	7.2 0.4	筒型・口唇平ら・底-三脚(円形・径1.7・高0.6)	内外-茶褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA ② C20・B20 II 上 祝殿台 571.2555 HA ③ C2 I 祝殿 台 2362
	126				10.4 8.4	10.0 0.8	筒型・口唇平ら・底-三脚(円形・径不・高0.5)	外-赤褐色 内-青灰褐色	ナド状(青灰・茶・青灰) 良	HA ② C4 II 祝殿台 2455 HA ② S4 II 祝殿台 941
	127		底	— —	6.6 1.0	筒型・平底(やや上げ底・雑)・立ち上がりは削り	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ③ E9 II 台 1313	
	128		口~底	— —	12.5 0.9	肩部「く」字状屈曲・口唇平ら(三窓・尖)・台形把手 の孔(上→下)・底-三脚(円形)・文様-上下に圏線	内外-紫褐色	ナド状(青灰・暗紫・青灰) 良	HA ② D1 II 祝殿 不建台 1914	
129	A	口	— —	— —	— —	肩部「く」字状屈曲・口唇平ら(三窓・尖) 台形把手の孔(上→下)・小孔(外→内径0.4)	外-暗茶褐色(マガン釉) 内-茶褐色(上マガン釉)	暗茶褐色・良	HA ③ C13 II 台 3211	
130			— —	— —	— —	肩部「く」字状屈曲・口唇平ら(三窓・尖)・台形把手 (穿孔・破損で全形不明)・文様-肩部上に圏線	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ② B19 II 祝殿 台 2427	
131			— —	— —	— —	肩部「く」字状屈曲・口唇平ら(三窓・尖)	内外-暗褐色	ナド状(灰・茶・青)・良	HA ③ A17 II S - 12 台 434	
132			口	9.8 —	— —	— —	肩部「く」字状屈曲・口唇丸(三窓・幅有り) 文様-圏線1条	内外-茶褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA ② T20 II 祝殿 台 558

第三章  
5

第36表-3 沖縄産無釉陶器 観察一覧

(質量単位: cm)

第73図・図版48	第74図・図版49	図番号	器種	分類	部位	口径器高	底径底厚	形状・特徴(口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色(釉)	素地・焼成・混和材	地区・ケルト・層遺構・台帳(取)番号	
第73図・図版48	火鉢	133	火鉢	A		15.2	—	肩部「く」字状屈曲・口唇丸(三窓・幅有り)文様-圏線(口縁・屈曲部)・外面の斜線窯印?	内外-暗紫褐色	茶褐色・良	HA ③ A9 III S - 521 台 3058	
		134		B	口	12.2	—	肩部「く」字状屈曲・口唇平ら・窓無し・台形把手の孔(上→下)・口の孔(外→内)・文様-圏線	内外-茶褐色	茶褐色・良	HA ② B19 II 祝殿 台 2425	
		135				14.3	—	肩部「く」字状屈曲・口唇やや丸・窓無し・台形把手の孔(上→下)・文様-圏線	外-茶褐色 内-赤褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA ③ E9 II S - 39 台 2476	
		136		—	底	—	12.4	立ち上がり直で外反・底-三足(円形・径2.8・高0.9)	内外-暗褐色 (内-ワゴン釉?)	層状(白・暗褐色)・良	HA ③ B15 II 台 2521	
		137		—	底	—	13.4 0.8	立ち上がり直で外反・底-三足(円形・径2.0・高0.4)・文様-外面下部に圏線4条(幅0.15)	内外-茶褐色	茶褐色(緻密)・良	HA ② C19 II 上 舎舎 台 575	
	138	瓶	I A	底~頸	3.3 (頸径)	8.5	1.0	口縁破損・片肩・底近くまで直線的 文様-肩部に1条の圏線	外-黄褐色(黄釉) 内-橙褐色	橙褐色・良	HA ② D6 II 島台 2315	
	139			I B	口	4.0	—	—	外反・長頸・片肩・胴膨らむ	内外-暗茶褐色	茶褐色・良	HA ② G1 II 瓦屋 台 1057
	140		頸~胴		4.0 (頸径)	—	—	—	長頸・片肩・胴やや膨らむ	外-茶褐色(茶釉) 内-明茶褐色	茶褐色・良	HA ② D1 II 祝殿 台 355 HA ③ E1 II 祝殿 台 1284
	141				5.0 (頸径)	—	—	—	長頸・片肩・胴膨らむ 現存胴径19.4・文様-胴部に圏線2条	外-暗茶褐色 内-茶褐色	層状(白・茶褐色) 良	HA ③ R12 II S - 7 台 979
	142		II	口~胴	6.2	—	—	外反・頸窄まる・胴張る(寸胴) 文様-頸部に圏線4条	外-茶褐色 内-暗褐色	茶褐色・良	HA ③ E9 II 台 1302 HA ③ F9 II 台 1344	
	143		III	口	5.0	—	—	「知判一」・外反・頸窄まる・胴張る(寸胴) 文様-頸部に圏線3条	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・良	HA ② F3 II 名嘉座 台 1674	
	144		II	底	—	8.4 1.0	—	—	外底やや上げ底・立ち上がり直・胴部の張り弱 (最大胴径12.8)・内-凹痕顕著	内-暗茶褐色 内-暗褐色	茶褐色・良	HA ③ A12 II S - 7 台 990
	145				—	6.4 0.5	—	—	外底上げ底・雑・立ち上がり直・胴部の張り弱 (最大胴径11.0)	外-明紫黄色(黄釉) 内-紫褐色	茶褐色・悪(気泡)	HA ③ E9 II S - 39 台 1057 HA ③ E9 II 台 1313
	146				—	7.3 1.4	—	—	外底やや上げ底・立ち上がり直・胴部の張り弱 (最大胴径12.8)・内-凹痕顕著	外-暗茶褐色 内-暗褐色	茶褐色・良	HA ② E20 II 祝殿 台 598
	147		IV	頸~底	—	3.6 (頸径)	10.0	1.2	外反・頸窄まる・口唇破損・胴膨らみ強 (最大胴径16.0)・文様-頸部に圏線4条	外-黄色(黄釉) 内-茶褐色	茶褐色・良	HA ② C2 I 台 1962.B4 II 台 2363 HA ② B7 II 井戸 2 台 626
	148				胴	—	—	—	頸窄まる・胴膨らみ強(最大胴径16.6) 内-凹痕?・文様-胴部に圏線複数	内外-青灰褐色 (内-凹痕釉?)	ワド状(青灰・茶・青灰) 良	HA ③ B16 II 台 2994
	149			底	—	—	11.2 0.9	—	—	やや上げ底・立ち上がり直・胴部膨らみ強 (最大胴径15.4)・内-凹痕顕著	外-黄色(黄釉) 内-暗褐色	茶褐色・良
150	—				—	8.2 0.9	—	—	高台(四角・高0.3・底面削り)・胴膨らみ強 文様-外面の底近く圏線1条・凹痕顕著	内外-茶褐色	茶褐色・良	HA ② 台 E1 II 祝殿 台 1283
151	—				—	5.8 0.5	—	—	小型・平底(上げ底)・立ち上がり直・胴部膨らむ (最大胴径9.0)	外-暗茶褐色 内-紫褐色	茶褐色・良	HA ④ I 台 4603 HA ④ I18 II 台 2499
152	—		—	—	4.0 1.4	—	—	小型・平底(上げ底)・胴部張る・凹痕	内外-橙褐色	黄褐色(砂・ニヒ混)・中	HA ② D1 II 不建 台 1136	
第74図・図版49	壺		I A	口	—	8.5	—	—	小型・直状・口唇玉縁・胴部張る	内外-明茶褐色	ワド状(青灰・茶・青灰) やや悪(気泡)	HA ③ B16 II 台 2995
					—	10.2	—	—	小型・直状・口唇玉縁・胴部張る	内外-茶褐色	茶褐色・やや悪(気泡)	HA ③ T5 II 台 1767
		—			9.2	—	—	小型・直状・口唇玉縁・胴部張る	外-灰褐色(自釉?片有り) 内-暗褐色	灰褐色・やや悪(気泡)	HA ② T7 II 島台 4254	
		—			11.6	—	—	中型・直状・口唇玉縁・胴部張る	内外-暗茶褐色 ワゴン釉?(片有り)	ワド状(青灰・茶・青灰) やや悪(気泡)	HA ② E4 II 坊台 1457	
		—			8.6	—	—	小型・直状・口唇玉縁・胴部張る	内外-明茶褐色	ワド状(青灰・茶・青灰) やや悪(気泡)	HA ② T5 II 島台 2591 HA ② S5 II 坊台 1555	
		—			10.3	—	—	小型・直状・口唇玉縁(弱)・胴部張る 文様-外面に波状文	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA ③ B16 II 台 2995	
		—			—	—	—	小型・直状・口唇玉縁(弱)・胴部張る・薄手	外-暗褐色(ワゴン釉) 内-暗紫褐色	茶褐色・良	HA ③ A13 II 台 2705	
		—			—	—	—	小型・直状・口唇丸(大)・胴部張る 文様-外面に凹文・花文・圏線4条	内外-暗茶褐色 自釉?(片有り)	層状(白・暗紫褐色)・良 石英(粗・多)	HA ③ A13 II 台 2489 HA ③ T14 II 台 2582	
		—			13.4 (頸径)	—	—	—	小型・頸窄まる・肩部張り出す	外-暗茶褐色(茶釉) 内-灰茶褐色	層状(白・青灰色)・良 石英(中・中)	HA ② B3 III SK059 台 2265
		162			I B	口	—	9.4	—	—	小型・直状・口唇逆「L」字(四角)・胴部不明	内外-茶褐色
		163	—	10.4			—	—	中型・直状・口唇逆「L」字(四角)・胴部不明	外-明茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・良	HA ② J3 II 味汁 台 2416
		164	—	10.4			—	—	中型・直状・口唇逆「L」字(四角)・胴部不明	外-明茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・良	HA ② J3 II 味汁 台 2416
		165	—	16.4			—	—	大型・直状・口唇逆「L」字(四角)・胴部不明	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA ② E1 II 祝殿 台 1837
		166	—	17.7			—	—	口縁直・口唇(端部角・圏線1)・胴部張る 肩部-圏線3・窯印(土)・大型	外-淡赤褐色 内-赤褐色	赤茶褐色・良	HA ③ C7 III 下 S - 678 台 719
		167	—	17.2			—	—	大型・直状・口唇逆「L」字(四角)・胴部張る 文様-口唇部に圏線1・肩部に2	外-暗茶褐色 内-赤褐色	茶褐色・良	HA ② E19 II 祝殿 台 611
		168	II A	口			—	13.0	—	—	中型・外反・口唇玉縁・口縁内膨らみ 頸やや窄まる・胴部張る	内外-明橙褐色
		169			—	15.8	—	—	大型・外反・口唇玉縁(長)・胴部張る 頸やや窄まる・薄手(0.7)	外-茶褐色 内-赤褐色	茶褐色・良	HA ② B6 II 島台 1751
170	—	15.6			—	—	大型・やや外反・口唇玉縁(大)・胴部張る 味汁状耳付き・厚手(1.2)	内外-茶褐色	茶褐色・良	HA ④ E14 II 台 3188 HA ④ F14 II SD42 台 3186		
171	—	25.0			—	—	大型・外反・口唇玉縁(大)・胴部張る 厚手(1.7)	内外-灰茶褐色	茶褐色・良	HA ③ A15 I S - 29 台 1981		

第36表-4 沖繩産無釉陶器 観察一覽

(法量單位: cm)

第圖版	図番号	器種	分類	部位	口径器高	底径底厚	形状・特徴(口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色(釉)	素地・焼成・混和材	地区・ケルト・層遺構・台帳(取)番号		
第74図・図版49	172	壺	II A	頸	—	—	大型・外反・片状耳付・胴張る 内一粘土積み痕・叩き痕	内外一暗褐色	層状(白・暗紫褐色)・良	HA④ I18 II 台 2499 HA④ J18 II 台 2573		
	173		II B	口	19.0	—	—	大型・外反・口唇四角・頸窄まる・肩部張り出す 文様-口唇部に圈線1・肩部に数条	外一暗茶褐色 内一赤褐色	茶褐色・良	HA③ E4 II 台 2473	
	第75図・図版50		174	II C	口~底	13.1	18.6	—	大型・外反・口唇三角(強調)・胴部膨らむ 底部平ら・文様-肩部に圈線・捺印(土)	内外一暗茶褐色	茶褐色・良	HA② S4 II 台取 91
			42.5			1.7	—	—	—	—	—	—
			175		口~胴	8.8	—	—	中型・外反・口唇三角(強調)・頸窄まる・胴膨らむ 文様-頸部に圈線(5+1条)・外面に甲殻類?	外一暗茶褐色 内一暗褐色	茶褐色・良	HA② D1 II 祝殿 台 1468
			176			12.6	—	—	大型・外反・口唇やや三角・頸窄まる・肩部張り出す 胴部膨らむ・文様-肩部に圈線6条	外一暗茶褐色(ワゴン釉) 内一赤褐色	赤褐色・良	HA② D1. D2. E1 祝殿 II 台 361・355. 991・1374.1025. D1 不建 II 台 830
	177		口	10.6	—	—	中型・外反・口唇舌(膨らむ)・頸窄まる・肩部張り出す 胴部張り弱・文様-頸部に圈線(4+1条)	外一暗茶色(ワゴン釉) 内一赤褐色(上ワゴン釉)	赤褐色・良	HA② B19. D1. C19 II 祝殿 台 845 HA② B6 II 畠台 1195. HA② B6 II 台 904		
	178		III	口	15.6	—	—	大型・無頸・口唇玉縁・テ肩・胴部張り強 薄手(0.6)	内外一赤褐色	赤褐色・良	HA③ A18 II S - 12 台 435 HA③ A17 II 台 3114	
	179		IV	口	—	—	—	中型・無頸・内湾・口唇丸 胴やや張る(最大胴径 22.8)	外一暗茶褐色(泥釉) 内一赤褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA③ B15 I S - 43 台 2603	
	180		—	胴	—	—	—	内一粘土貼付痕明瞭	外一暗褐色 内一青灰褐色	茶褐色・良	HA① B4 P15 I 0013SZ 台 137	
	181		—	底	—	10.4	1.0	—	外一橙褐色 内一青灰褐色	灰紫褐色・中	HA③ E18 II 台 1888	
	182		—	底	—	16.4	1.0	—	外一暗褐色(泥釉) 内一茶灰褐色(泥釉)	暗茶褐色・良	HA① B4015 III 0006SL 取 6	
	183		—	底	—	14.0	1.3	—	外一暗灰褐色 内一暗灰褐色	暗灰褐色・良	HA③ A15 I S - 29 台 1981	
	184		—	底	—	11.0	1.3	—	内外一赤褐色	赤褐色(砂)・中 石英(中・多)	HA② D1 II 不建 台 1917	
	185		—	底	—	6.0	0.8	—	内外一暗茶褐色	片状(暗茶・茶・暗茶) 良	HA③ A13 II 台 2717	
	186		—	口	—	31.8	—	—	逆「L」字状直(幅 3.9・丸)・胴部張る・文様-口唇に 圈線 1、頸部に圈線(間に波状文、円文)	外一暗茶褐色 内一赤褐色	茶褐色・良	HA④ E10 II SD52 台 3218 HA④ E10 II SD51 台 3210 - 1
	187								逆「L」字状外反(幅 2.5・角)・内側稜有り・胴部張る 文様-口唇部に圈線 2、頸部に円文と凸帯文	外一暗茶褐色(泥釉) 内一茶褐色(上-泥釉)	茶褐色・良	HA② D1 II 不建 台 1917

第37表-1 沖繩産無釉陶器(搦鉢) 観察一覽

(法量單位: cm)

第圖版	図番号	分類	部位	法量		口縁形態				櫛目				器色	地区・ケルト・層遺構・台帳(取)番号		
				口径器高	底径底厚	形状・胎土・混和材・他	断面・端部	上面幅	口唇圈線	稜(有・無)	間隔	方向	本数			櫛目幅	溝幅
第67図・図版42	28	I A	口	—	—	内一内折れ弱	舌	0.7	無	有(2) 下は幅広・薄	有(1.5)	縦(直線)	6	1.4	太(0.15-0.2)	外一明茶褐色 内一紫灰褐色	HA② G1 瓦屋 II 台 1735
	29			29.2	—	内一内折れ・胴一直線的 外一気泡	舌	1.2	無	有(2) 下は幅広・薄	有(0.8)	縦(直線)	9	1.1	太(0.15-0.2)	外一暗茶褐色 内一紫灰褐色	HA③ B14 II S20 台 847 D11-14 II 台 1540
	30			26.0	—	内一内折れ 胎土一層状(白)	舌	1.2	無	有(2) 下は幅広・薄	有(1.2)	左→右(直線)	7	1	中(0.1-0.15)	外一黒褐色(ワゴン釉) 内一暗褐色	HA② F4 II 祝殿 台 362
	31			—	—	内一内折れ弱 外一気泡	角	1.7	無	有(2) 下は幅広・薄	有(0.8)	縦(直線)	12	1.1	狭(0.1)	外一暗褐色 内一紫褐色	HA③ B14 II S20 台 846
	32			29.6	—	内一内折れ弱 赤粒(粗・多)・堅致	丸	1.7	無	有(2) 下は幅広・薄	有(0.6-1.0)	縦(直線)	9	1.5	中(0.1-0.15)	外一茶褐色 内一赤褐色	HA② T14 II 台 377 T14 II 祝殿 台 362
	33			30.6	—	内一内折れ・胎土一層状(白) 内一気泡・注口有り	丸	1.9	無	有(2) 下は幅広・薄	有(1.4)	縦(直線)	9	1.7	中(0.1-0.15)	外一暗褐色(ワゴン釉?) 内一明茶褐色	HA② J4 II 注付 台 2367
	34			30.2	—	内一内折れ弱 堅致	丸	1.7	無	有(2) 下は幅広・薄	有(1.0-1.5)	縦(直線)	7	1.4	中(0.1-0.15)	外一茶褐色(泥釉?) 内一赤褐色	HA② F19 II 注付 台 698
第68図・図版43	35	I B	口	24.0	—	内一内折れ	丸	1.2	無	有(2) 下は幅狭・薄	有(0.8-1.2)	左→右(直線)	12	1.8	狭(0.1)	内外一暗茶褐色	HA③ B14 II S20 台 846
	36			21.0	—	外反・内折れ 胎土一層状(白)	角	1.2	無	有(2) 下は幅狭・薄	有(1.5)	左→右(直線)	7	1.2	太(0.15-0.2)	外一暗茶褐色 内一赤褐色	HA③ A16 II 台 2926
	37			—	—	内一内折れ	舌	1.1	無	有(2) 下は幅狭・薄	有(1.5)	縦(直線)	8	1.4	中(0.1-0.15)	外一暗茶褐色 内一明茶褐色	HA② H3 II 名嘉座 台 1166
	38			29.4	—	内一内折れ弱・短	舌	1.7	無	有(2) 下は幅狭・薄	有(0.5)	縦(直線)	8	1.7	太(0.15-0.2)	外一黒褐色(ワゴン釉?) 内一茶褐色	HA④ N12 II 台 2766
	39			31.8	—	外反・内折れ弱・短	角	1.4	無	有(2) 下は幅狭・薄	有(0.8-1.8)	縦(直線)	11	1.8	中(0.15)	内外一茶褐色	HA③ A13 II 台 2489
	40			30.6	—	内一内折れ弱・短	丸	1.8	無	有(2) 下は幅狭・薄	有(不)	縦(直線)	不	不	狭(0.1)	外一黒褐色(ワゴン釉?) 内一紫褐色	HA③ B6 II 台 2816
	41			24.2	—	内一やや内折れ・胴一直線的 刃口礫溶着痕	丸	1.3	無	有(1) 明瞭	有(1.0-1.3)	縦(直線)	9	1.5	中(0.1-0.15)	内外一暗茶褐色 (自然?)	HA③ D13 II 台 3247
	42			29.0	—	逆「L」字状外反・胴一直線的	丸	1.5	無	有(1) 明瞭	有(0.7-1.7)	縦(直線)	12	1.5	狭(0.1)	内外一暗褐色	HA④ I18・19 II 台 2500 I18 III J18 II 台 2571
	43			26.0	—	内一やや内折れ・胴一直線的	丸	1.5	無	有(1) 明瞭	有(0.9-1.3)	左→右(直線)	9	1.5	狭(0.1)	外一黄茶褐色 内一茶褐色	HA④ N14 II 台 2790 N13 III 台 2783
	44			—	—	内一やや内折れ・胴一直線的 注口有り	角	1.7	無	有(1) 明瞭	有(1.6)	縦(直線)	8	1.7	中(0.15)	内外一赤褐色	HA③ A12 II S-7 台 990
45	32.2	—	逆「L」字状外反・胴一直線的	角	1.4	無	有(1) 明瞭	有(1.1)	縦(直線)	8	1.5	太(0.15-0.2)	内外一赤褐色	HA③ R12 II S - 7 台 978			

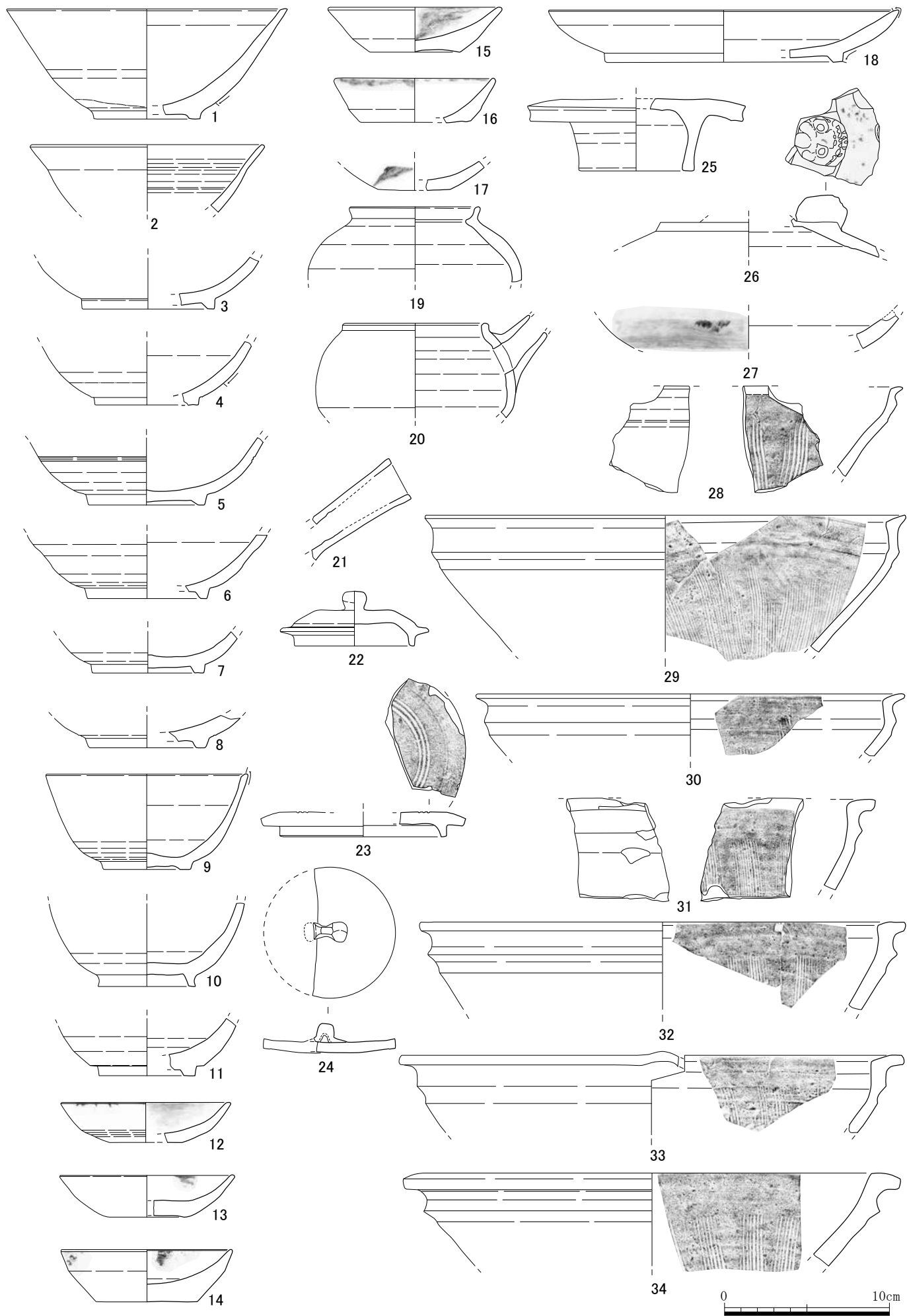
第三章 5

第 37 表 -2 沖繩産無釉陶器 (挿鉢) 観察一覽

(質量単位: cm)

第図版	図番号	分類	部位	法量		口縁形態				櫛目					器色	地区・ケラド・層遺構・台(取)番号	
				口径器高	底径底厚	形状・胎土・混和材・他	断面・端部	上面幅	口唇周縁	稜(有・無)	間隔	方向	本数	櫛目幅			溝幅
第 68 図・図版 43	46	II A	口	34.8	—	逆「L」字状外反・胴一直線の外一ロクロ痕顕著	角	1.4	無	有(1)明瞭	有(0.8-1.2)	縦(直線)	7	1.1	狭(0.1)	内外一暗茶褐色	HA ② C2 I 台 1962
	47			34.4	—	逆「L」字状外反・胴一直線の外一ロクロ痕・注口有り	角	1.4	無	有(1)明瞭	有(不)	左→右(やや弧状)	8	1.7	太(0.2)	内外一暗茶褐色	HA ③ D10 II S - 39 台 1978
	48			36.6	—	逆「L」字状外反・胴一直線の	角	1.7	無	有(1)明瞭	有狭(0.6)	縦(直線)	8	1.7	狭(0.1-0.05)	外一茶褐色 内一赤褐色	HA ③ A15 II S - 29 台 1981
	49			—	—	逆「L」字状外反・胴一直線の	角	1.6	無	有(1)やや明瞭	有狭(0.6)	左→右(やや弧状)	9	1.4	中(0.1-0.15)	内外一茶褐色	HA ② E19 II 上 祝殿台 718
	50			34.4	—	逆「L」字状外反・胴一直線の	角	1.7	無	有(1)やや明瞭	無	縦(直線)	6	1.4	太(0.2)	内外一茶褐色	HA ③ B14 II (攪乱?) S - 28 台 2332
第 69 図・図版 44	51	II B	口	32.6	—	逆「L」字状外反・胴一直線の外一ロクロ痕顕著	角	1.3	無	有(1)明瞭	有(1.3)	左→右(直線)	7	1.2	中(0.15)	外一明茶褐色 内一茶褐色	HA ② T5 II 晶台 2599
	52			27.2	—	逆「L」字状外反・胴一直線の外一ロクロ痕顕著	角	1.8	無	有(1)やや明瞭	有狭(0.5)	左→右(弧状)	12	1.9	極狭(0.05-0.1)	内外一暗茶褐色	HA ③ R18-20 II 台 1605
	53			27.0	—	逆「L」字状外反・胴一直線の	角	1.5	無	有(1)やや明瞭	有狭(0.8)	左→右(やや弧状)	5	1.6	太(0.15-0.2)	内外一明茶褐色	HA ② J6 II 三良台 1692
	54			32.6	—	逆「L」字状外反・胴一直線の外一ロクロ痕顕著	角	1.6	無	有(1)明瞭	無	左→右(直線)	8	1.7	中(0.15)	内外一暗茶褐色	HA ② C2 II 祝殿 台 502
	55			30.0	—	逆「L」字状外反・胴一直線の	丸	1.8	無	有(1)弱	有(1.4)	左→右(弧状)	12	2.4	太(0.15-0.2)	内外一橙褐色	HA ② A4 II 祝殿 台 1626
	56			30.4(胴)	—	逆「L」字状外反・胴一直線の	不	不	無	有(1)弱	有(0.8-1.0)	左→右(弧状)	5	1.5	極太(0.2-0.25)	内外一橙褐色	HA ③ 台 1344 F9 台 1041 D16 S - 4 II 層
	57			22.0	—	逆「L」字状外反(やや幅広)胴一直線の・注口有り	角	2	有	無	無	左→右(直線)	多	不	中(0.1-0.15)	内外一茶褐色	HA ③ F16 II 台 1962
	58			26.9	—	逆「L」字状外反・胴一直線の外一ロクロ痕・注口有り	丸	2.5	有	無	無	右→左(弧状)	不	不	極狭(0.05)	外一暗茶・赤褐色 内一茶褐色	HA ② C3 II 祝殿 台 501
	59			24.6	—	逆「L」字状外反・胴一丸み・注口有り	角	2.4	有	無	無	左→右(弧状)	5	0.8	中(0.1-0.15)	内外一茶褐色	HA ② D2 II 殿台 1374+2577 +C1 II 台 2433
	60			26.6 15.0	8.8 1.2	逆「L」字状外反・胴一丸み	角	2.1	有	無	無	左→右(直線)	7	1.2	中(0.1-0.15)	外一暗茶褐色 内一茶褐色	HA ② J6 I 台 676 J6 II 上三良台 297
61	28.8 13.9	10.8 1.4	逆「L」字状外反・胴一丸み注口有り	角	2.6	有	無	無	縦(直線)	14	2.5	中(0.1-0.15)	内外一暗茶・赤褐色	HA ② C19 SD57 台 279+ 台 1492			
62	29.5 13.3	11.8 1.3	逆「L」字状外反・胴一丸み	角	3.0	有	無	無	右→左(弧状)	20	2.5	極狭(0.05-0.1)	内外一赤褐色	HA ② D1-2 II 台 366.989 祝殿台 366+C5 II 7カリヤ			
第 70 図・図版 45	63	I or II	底(平)	—	10.8 1.0	立ち上がり直・胴一直線の カマコ 溶着痕	—	—	—	—	有(1.2)	縦(直線)	7	1.2	中(0.1-0.15)	外一茶褐色 内一暗茶褐色	HA ③ C11-12 II 台 1607
	64			—	10.6 1.4	立ち上がり直・胴一直線の カマコ 溶着痕	—	—	—	—	有(1.2)	縦(直線)	11	1.5	狭(0.1)	外一暗茶褐色 内一明茶褐色	HA ③ D4 I S - 27 台 1980
	65			—	15.0 0.7	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	—	—	有(2.5)	縦(直線)	6	1.6	太(0.2)	外一暗茶褐色 内一暗茶褐色	HA ② C3 II 上 建検台 582
	66			—	9.8 0.9	立ち上がり直・胴一直線の 重ね焼き痕	—	—	—	—	有(0.5)狭	左→右(直線)	8	1.6	中(0.1-0.15)	外一紫褐色(泥釉) 内一明茶褐色	HA ③ E9 II 台 1358
	67			—	7.8 0.9	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	—	—	有(0.1-1.5)	縦(直線)	6	1.1	中(0.1-0.15)	内外一明茶褐色	HA ② C19 II 台 1393 B1 II 祝殿 台 1925
	68			—	6.6 1.0	立ち上がり直・胴一直線の 砂質・混和材多(石英・茶粒)	—	—	—	—	有(0.7)狭	縦(直線)	4	0.9	極狭(0.05-0.1)	内外一橙褐色	HA ③ D4 II 台 3406
	69			—	10.6 1.0	立ち上がり直・上げ底 胴一やや張る・赤粒(粗・多)	—	—	—	—	有(1.0)	縦(直線)	7	1.1	狭(0.1)	内外一明茶褐色 (外: 有)	HA ③ F11 II S - 2 台 955
	70			—	8.0 0.8	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	—	—	無	縦(直線)	11	2.2	中(0.1-0.15)	内外一茶褐色	HA ② D19 II 上 畜舎 台 802
	71			—	13.5 0.7	立ち上がり直・胴一直線の 釉垂れ?	—	—	—	—	有(0.8-1.7)	左→右(弧状)	8	1.8	太(0.2)	外一暗茶色(茶釉?) 内一赤褐色	HA ② C2 I 台 1967
	72			—	11.4 0.7	立ち上がり直・胴一直線の 一部削り有り	—	—	—	—	無	左→右(直線)	12	2.4	中(0.1-0.15)	外一茶褐色(灰釉?) 内一茶褐色	HA ③ A12 II S - 7 台 990
	73			—	8.0 0.7	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	—	—	無	縦(直線)	11	1.8	中(0.15)	外一灰茶褐色 内一赤褐色	HA ② I 台 655
	74			—	8.0 0.3	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	—	—	無	左→右(やや弧状)	9	2.2	太(0.15-0.2)	内外一茶褐色	HA ② C3 II 祝殿 台 517
	75			—	9.8 1.1	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	—	—	無	左→右(直線)	4	1.2	極太(0.2-0.3)	外一暗茶・赤褐色 内一赤褐色	HA ② E1 II 祝殿 台 1837
	76			—	10.4 1.0	立ち上がり直胴一直線の 焼成やや悪	—	—	—	—	無	縦(直線)	9	2	中(0.1-0.15)	内外一暗褐色	HA ④ C14 II 台 1974
	77			—	12.8 1.0	脚「く」の字(直線的) 胴一直線的	—	—	—	—	有(不)	縦(直線)	7	1.7	太(0.2)	外一暗茶褐色 内一暗褐色	HA ② D1 II 台 355-914 D2 II 祝殿台 1368
78	—	12.0 0.5	脚「く」の字(直線的) 胴一不明	—	—	—	—	無	不	多	不	中(0.15)	外一暗茶褐色 内一赤褐色	HA ② J6 II 三良台 1704			
79	—	8.6 1.2	脚「く」の字(直線的) 胴一不明	—	—	—	—	無	不	多	3	狭(0.1)	内外一橙褐色	HA ② F1 II 7カ台 696			
80	—	15.8	脚「く」の字(丸)・脚一有孔(3個・貫通)・文様一外: 圏線 2+ 波状・内: 櫛目(横)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	外一橙褐色 内一橙褐色	HA ② B8 II 晶台 1198 HA ② A7 II 晶台 1800		
81	—	12.0 0.9	脚「く」の字(丸)・胴一不明・脚部有孔(貫通せず)	—	—	—	—	無	不	多	不	中(0.15)	内外一赤橙褐色	HA ③ S19 II S - 8 台 773			
82	不	底	—	10.6 0.7	平底・胴部やや張る 軟(ニ一ビ)	—	—	—	—	無	左→右(やや弧状)	8	1.6	中(0.1-0.15)	内外一橙色	HA ② E19 II 祝殿 台 596	

第三章 5

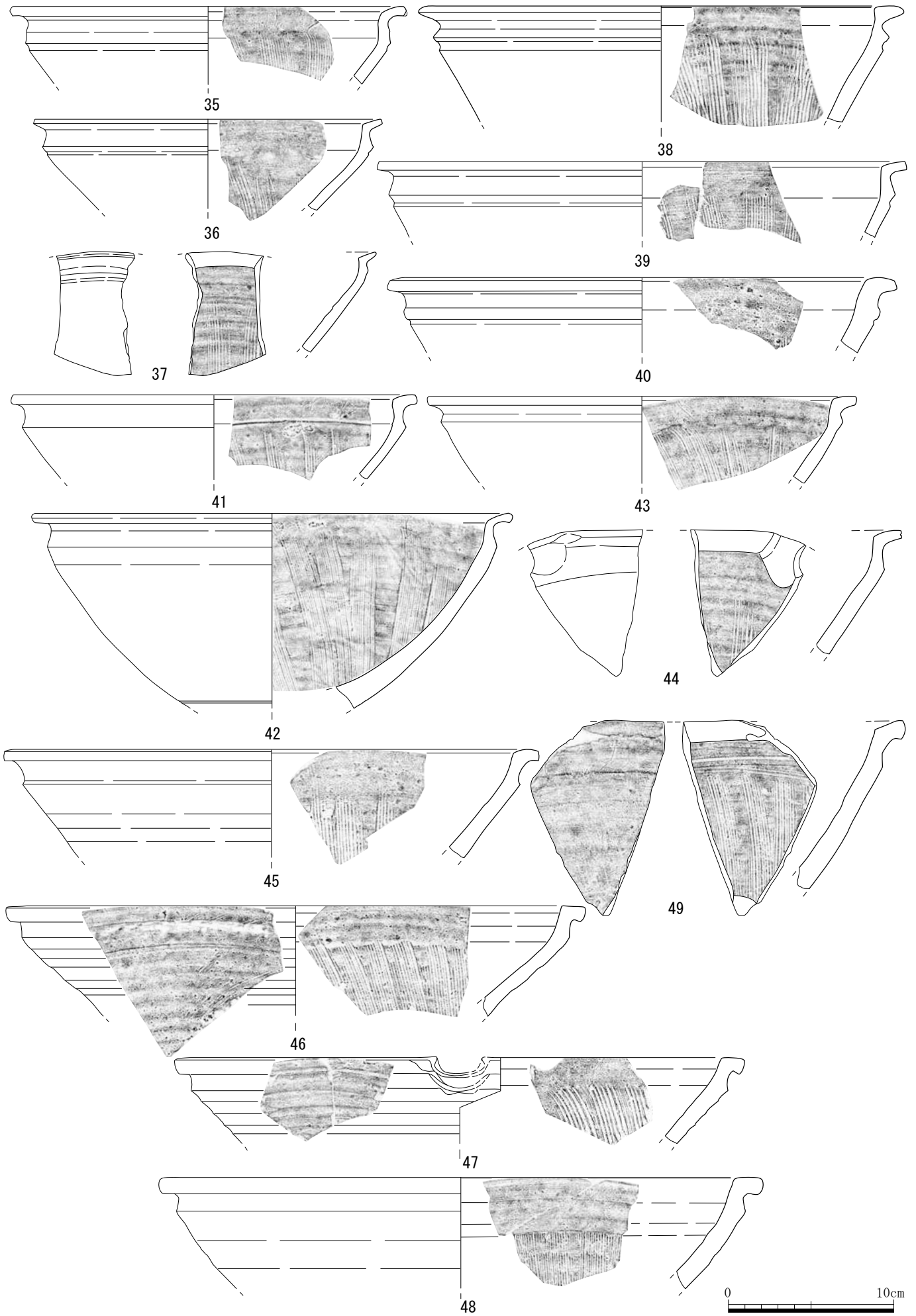


第 67 図 沖縄産無釉陶器 1



図版 42 沖縄産無釉陶器 1

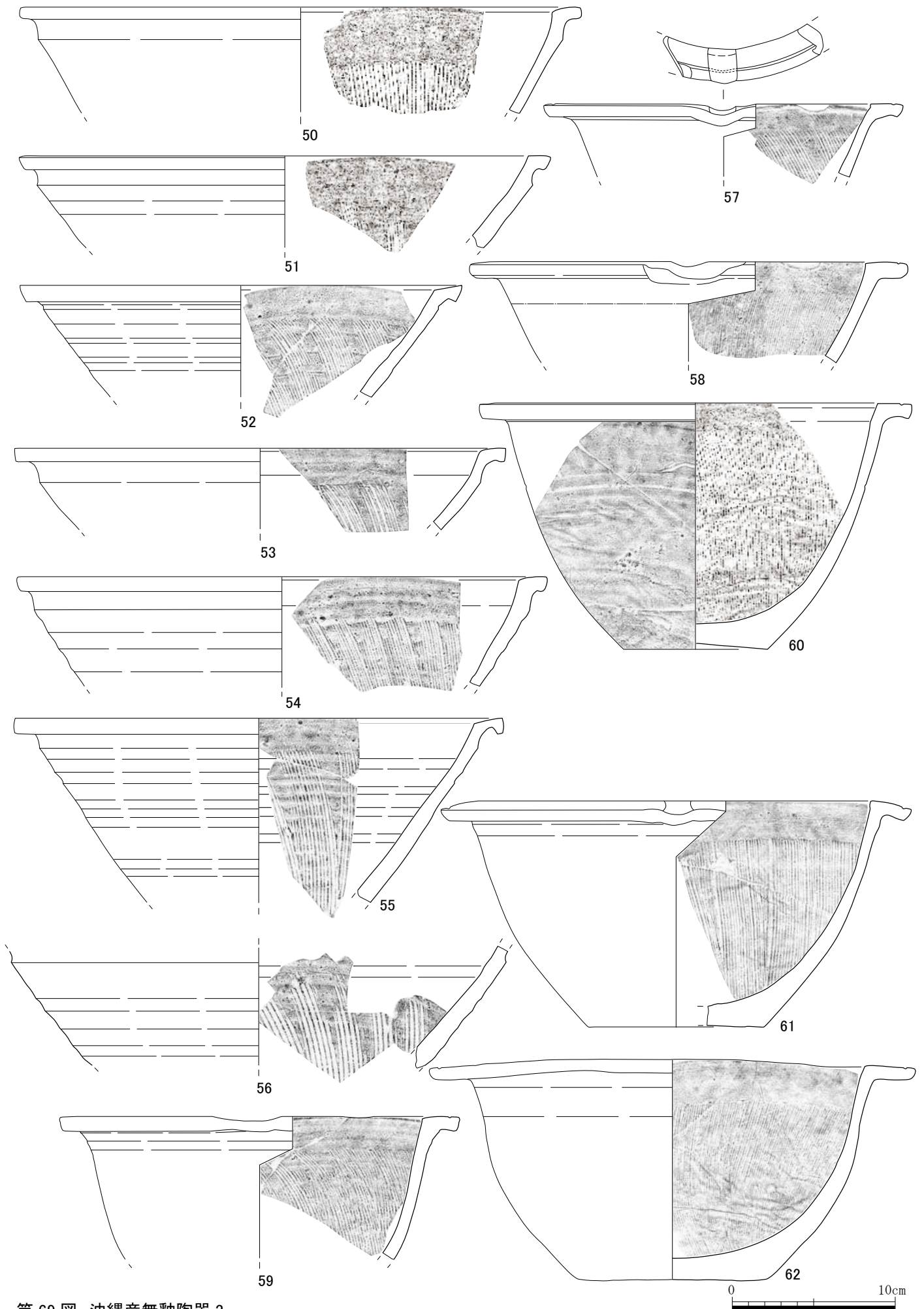




第 68 図 沖縄産無釉陶器 2



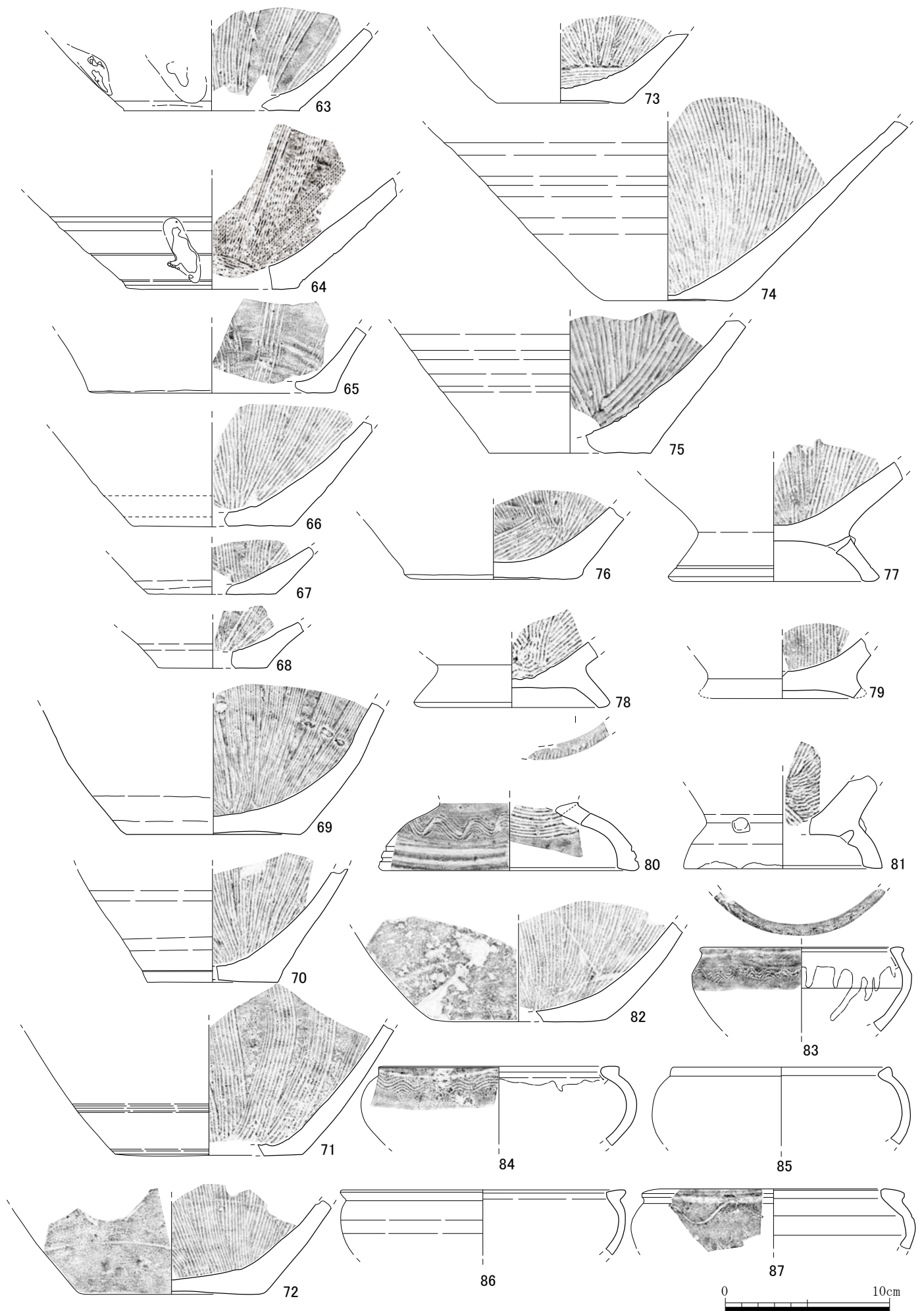
図版 43 沖縄産無釉陶器 2 (上:外面 下:内面)



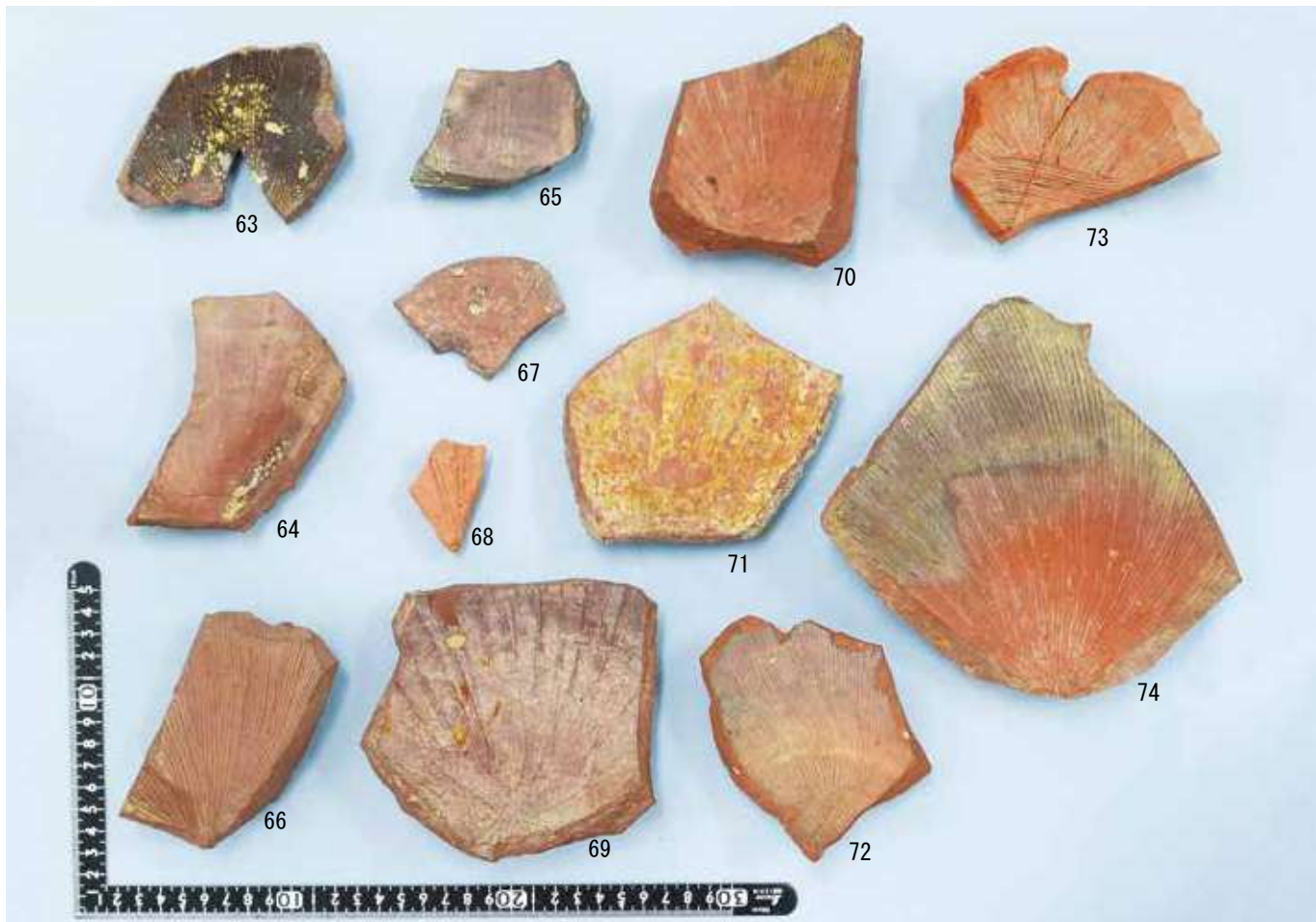
第 69 図 沖縄産無釉陶器 3



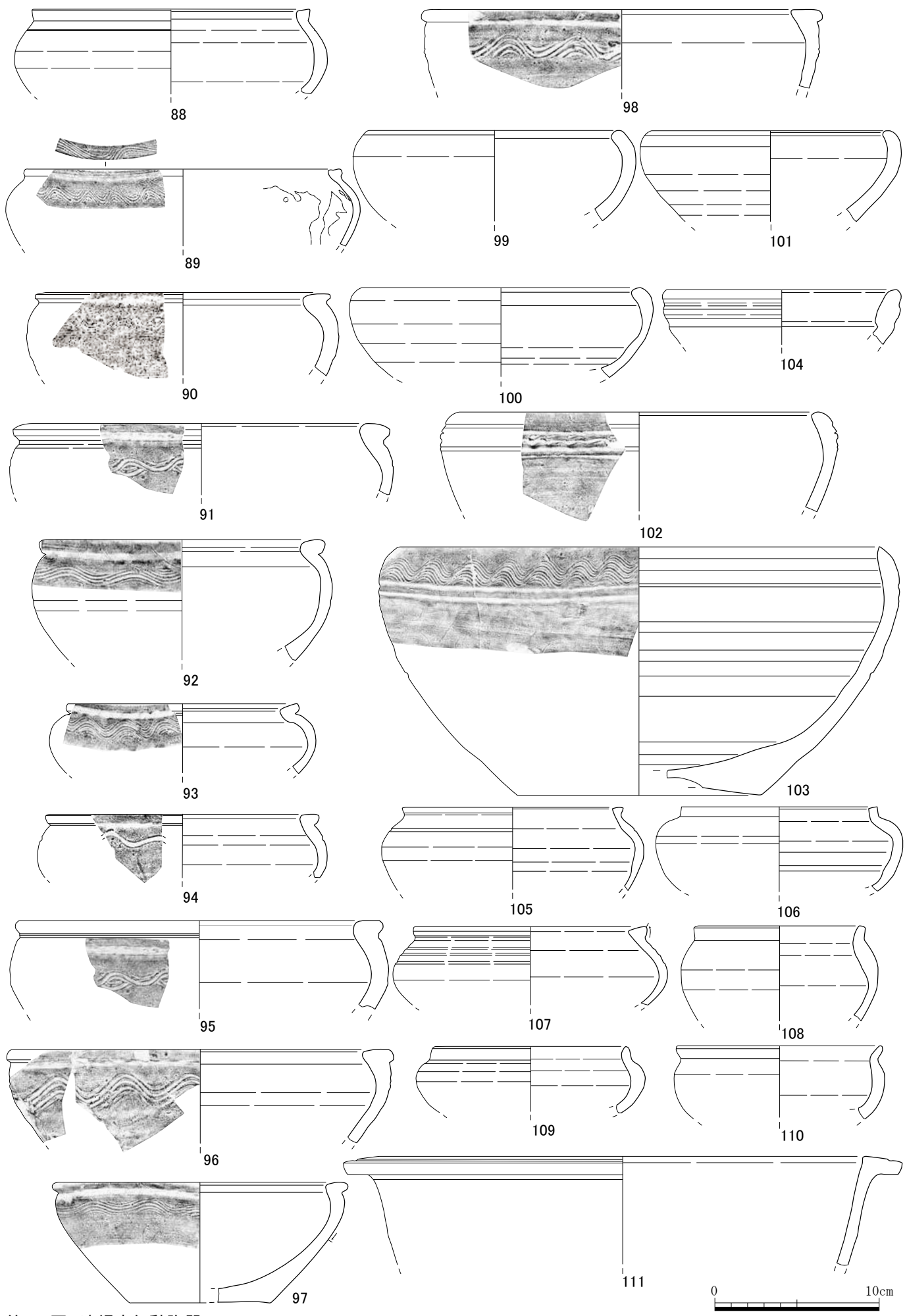
図版 44 沖縄産無釉陶器 3



第70図 沖縄産無釉陶器4



図版 45 沖縄産無釉陶器 4

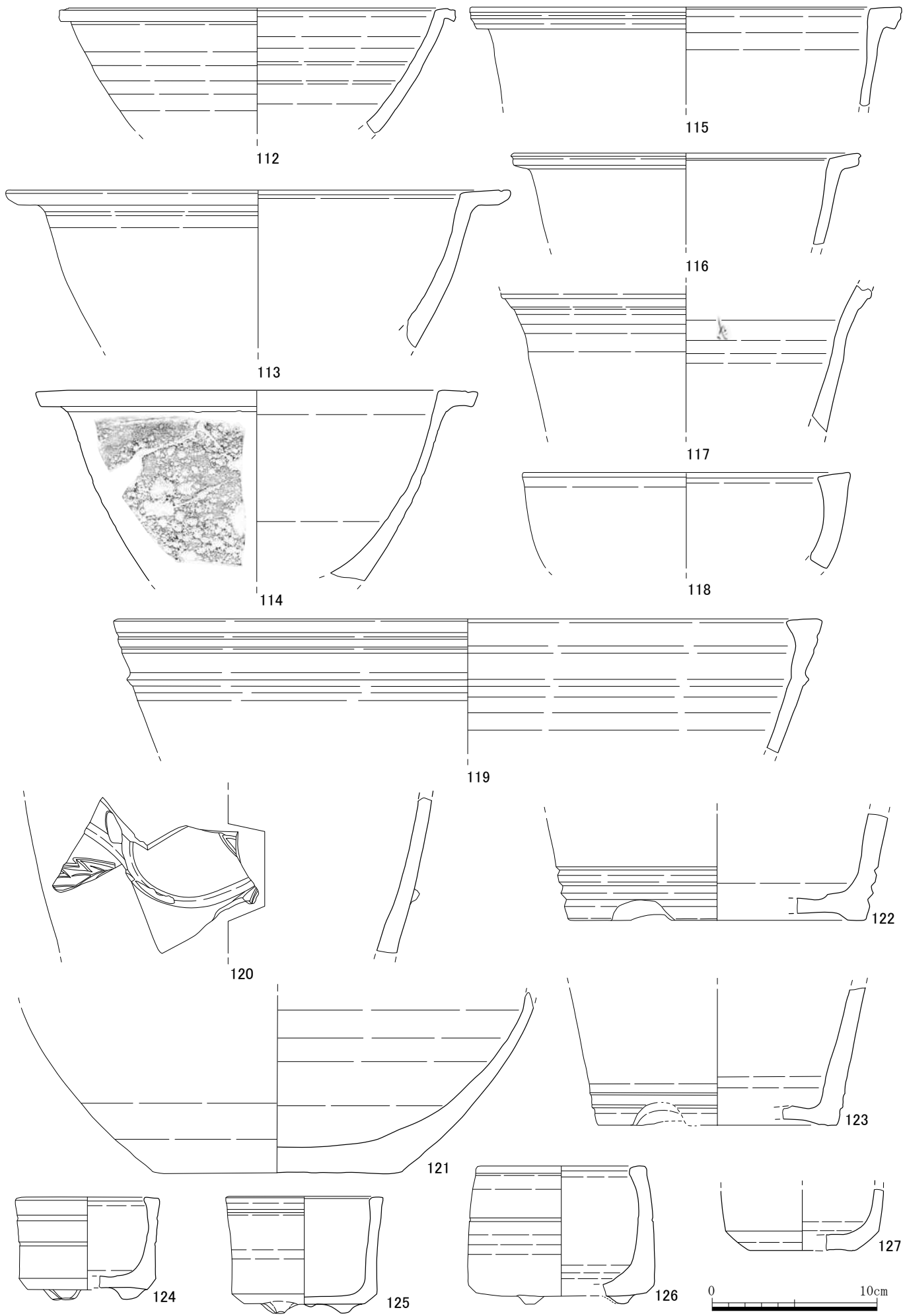


第71図 沖縄産無釉陶器 5

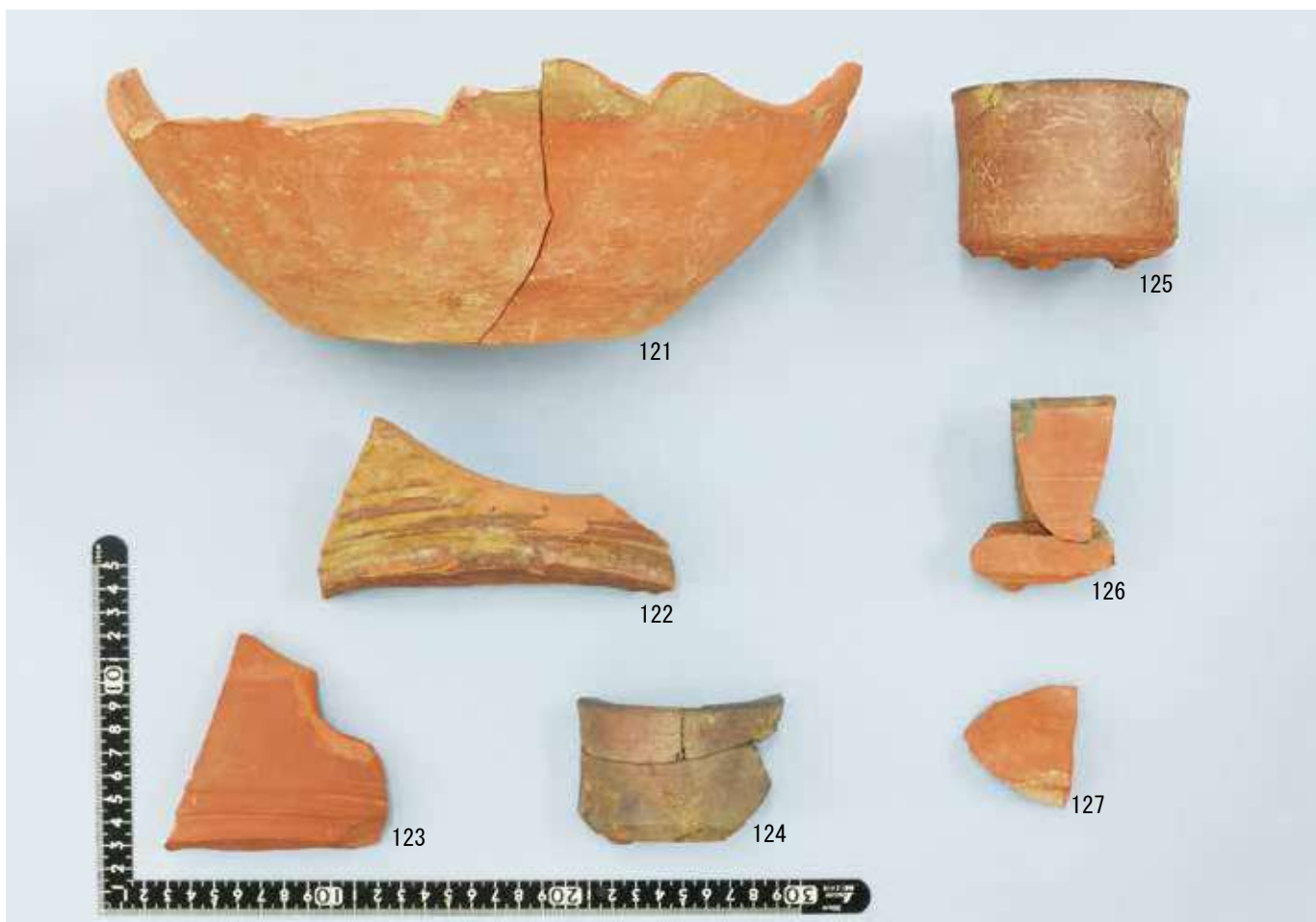
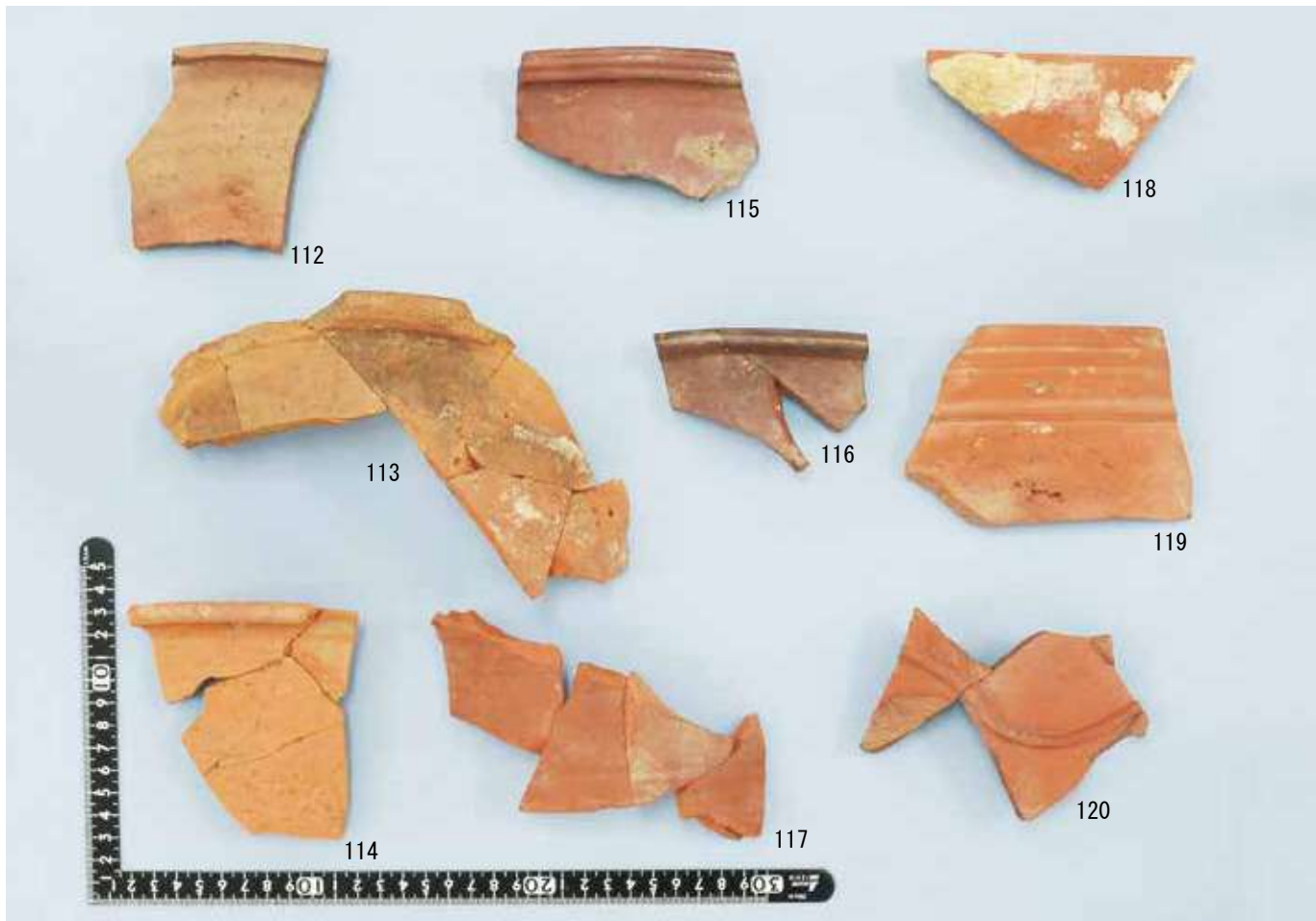


図版 46 沖縄産無釉陶器 5

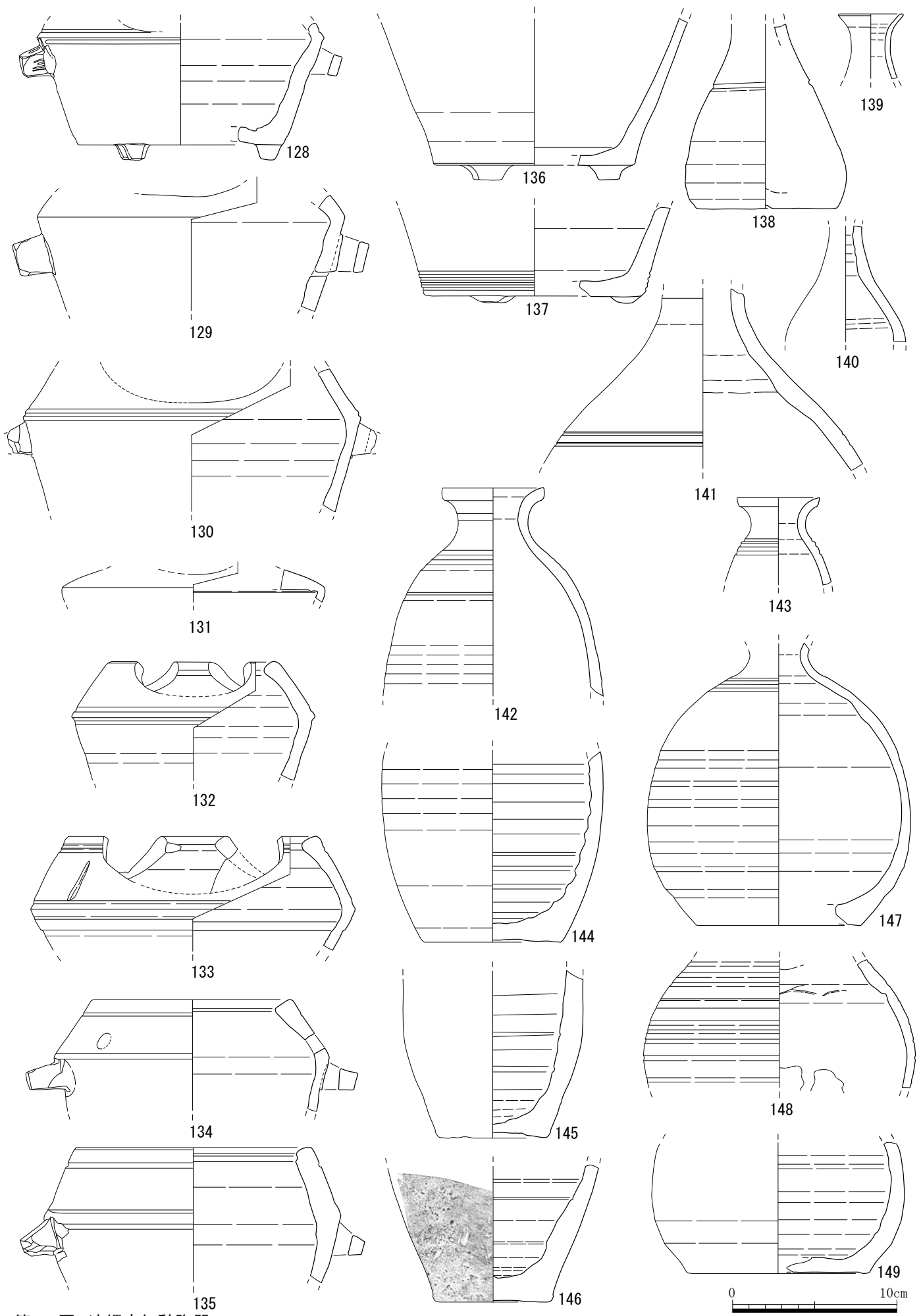




第 72 図 沖縄産無釉陶器 6



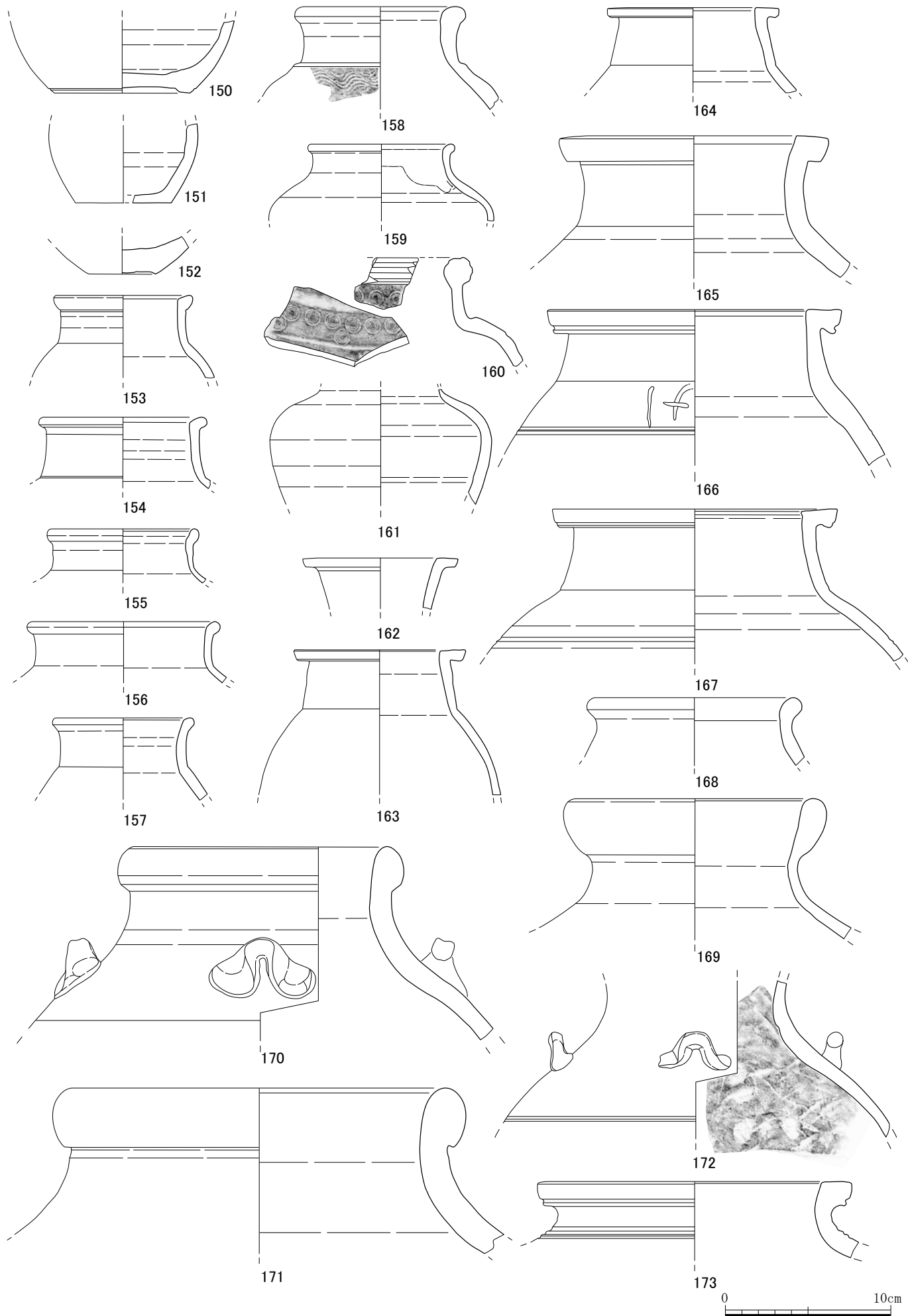
図版 47 沖縄産無釉陶器 6



第 73 図 沖縄産無釉陶器 7



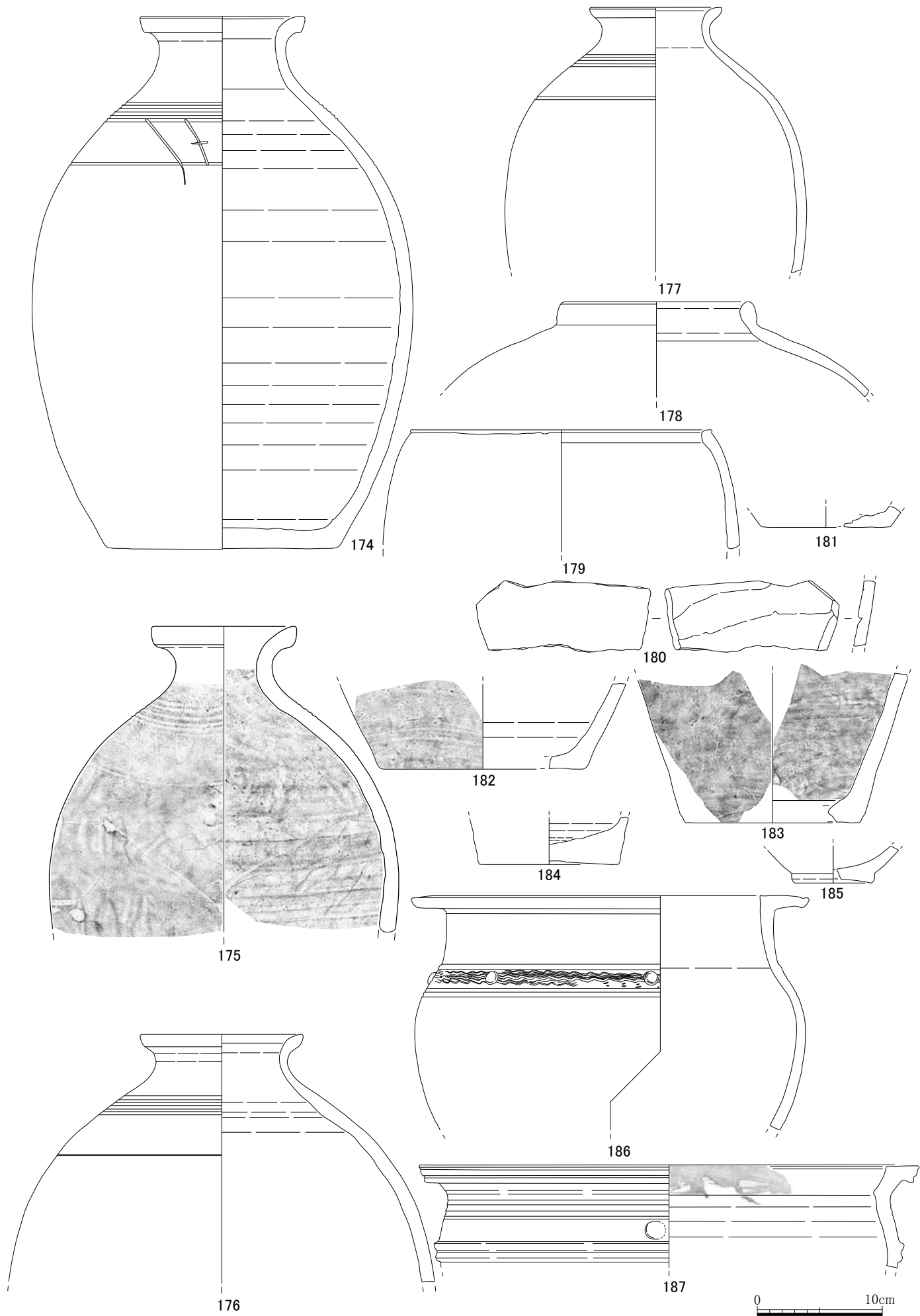
図版 48 沖縄産無釉陶器 7



第74図 沖縄産無釉陶器 8



図版 49 沖縄産無釉陶器 8



第75図 沖縄産無釉陶器9



図版 50 沖縄産無釉陶器 9



## (5) 陶質土器

陶質土器が9器種3,724点出土した(第39表)。軟質なものと硬質なものが混在するが雲母の混入が見られ、厚みに関わらず触れると素地の粒子が付着し、水分を含むと色落ちする物を陶質土器と捉えた。いずれも素地に混和材(雲母・白色粒・赤色粒・黒色粒等)を含み、轆轤成形後ナデ消しを行うものが多数であるが、混和材のサイズに極微細から砂粒ほどの大きさまで幅があった。HA③・②・④いずれの地区でも鍋・急須・火炉が多く出土し、特にHA③・②では屋敷跡の範囲に集中していた(第76図)。屋敷別に出土状況を見てみると、どの器種も祝女殿内が非常に多く、中でも不明建物から248点が出土している(第40表)。なおHA③・④のIV層より出土の陶質土器は混ざり込みだと考えられる。以下、主な遺物について第38表に詳細を記載し、第77～79図、図版51～53に示す。

### 1. 鍋(図1～9)

方言で「サークー」と呼ばれる把手付きの土鍋である。蓋195点、口縁部244点、胴部229点、底部341点を確認できた。蓋は掴み部分を高台状に作り全体に皿を伏せた器形で舌状の縁部を持つ。掴み部は三日月高台を呈するものが多かった。身は口縁部を「く」字状に折り曲げ蓋受けを作り、胴部は緩やかに膨らみながら丸底に成形する。また蓋受け下には紐状の把手を貼り付けている。内面には焦げ付き痕、外面には煤が付着するものが多かった。図1～3は鍋の蓋で、かかり無し(図1・2)かかり有り(図3)が見られ、かかりの無いものがほとんどであった。図4～9は鍋の口縁部で蓋受けの幅に大きな違いは無いが、把手のサイズに大(図5)中(図6・7)小(図8)があり、鍋の直径に比例するようであった。図9は蓋受けに窪みがあり、硬質で沖縄産無釉陶器に近いが、混和材に雲母を含むので陶質土器とした。

### 2. 鉢(図10～14)

方言で「ワンブー」と呼ばれる鉢34点、「ミジクブサー」と呼ばれる水鉢6点、播鉢10点を確認できた。いずれも沖縄産無釉陶器と重複する器形であり、使用対象による使い分けが考えられる。図10は口縁部が内湾し小振りで無文である事から鉢としたが水鉢の可能性も否めない。図11・12は水鉢で口縁部が内湾し、胴部上端に櫛描きによる5本の波状沈線が施される。特に図11は底面以外に顔料が塗られ外面上半分は茶褐色、内面と外面下半分は赤色を呈する。顔料塗布は急須・鍋・羽釜・風炉で見られた。水鉢に多く見られる事から水漏れ防止と考えていたが、火炉に塗布されていた例<sup>註1</sup>もあり、今回の風炉と併せて、顔料の用法について今後の資料増加を待ちたい。図13・14は播鉢で、図13は口縁部で逆「L」字状に外側に折り曲げ水平にした鐔状の口縁を持つ。図14は胴～底部で内面に隙間無く櫛目が入る。

### 3. 火炉(図15～40)

方言で「ヒールー」と呼ばれる。口縁部114点、把手50点、胴部332点、底部171点を確認できた。今回は破片数が多かったため、器形・底部・把手・突起部の形状に着目して下記のとおり分類した(( )内は割合を示す)。

〈器形〉I(図15～19):口縁部を内湾状に立ち上げ緩やかにカーブを描きながら底部に至り高台を持つ。口唇部は舌状に成形し半月状の火窓を設け、口唇内側に器物を乗せる突起を水平に3ヶ所貼り付ける(82%)。II:肩部を「く」字状に折り曲げ、底部へ直に伸びる(15%)。口唇部は幅広平坦に成形し縁部に階段状の沈線を巡らせる(図23・24)と、沈線無し(図20)が得られた。III(図21・22):筒型で腰折れ後、高台を持つ。口唇部は扁平に成形し、内面口縁部下に3ヶ所突起を貼り付ける(3%)。〈突起部〉突起先端の角度についてイ(図19):0°～45°(20%)。ロ(図17・18):45°～90°(78%)。ハ(図15・16):90°(2%)。〈把手〉a(図23・24):方形を呈する(29%)。b(図26):隅丸方形を呈する(63%)。c(図27):楕円形を呈する(8%)。〈底部〉A1(図28・29):高台脇まで白化粧土による横線を巡らせる。高台幅が広い(53%)。A2(図30):A1と同様だが高台幅が狭い(7%)。B1(図31):高台脇から1.5cmほど空けて白化粧土による横線を巡らせる。高台幅は広い(21%)。B2(図32・33):B1と同様だが高台幅が狭い(10%)。C(図34):高台脇から3cmほど空けて白化粧土による横線を巡らせる。高台脇には沈線を巡らせる(3%)。D(図35):高台脇に飛びガンナを巡らし、その上に白化粧土による横線(1%)。E(図36):器厚が1cm以上で無文(3%)。F(図37・38):腰折れ(2%)。

これらの割合から火炉の形状としてはI+A1が最も多かった。また、突起先端の角度はロが、把手の形状についてはbが多くなった。胴部に巡る白化粧土による横線はHA③では77%、HA②では90%、HA④では47%で確認できた。

雲母が含まれるので陶質土器に含めた硬質の風炉(図39・40)も出土した。39は顔料により全面茶褐色を呈する。

### 4. 火取(図41)

火取は1点のみの出土である。口唇部は丸く筒型(口径8.6cm)を呈する。

### 5. 急須(図42～50)

急須(土瓶を含む)は、蓋30点、頸部63点、耳部58点、胴部469点、注口68点を確認できた。器壁はいずれも3～4mmである。蓋は直径1cmほどの撮みを持つもので笠型(図42)と饅頭型(図43)が見られ、撮みの形状は宝珠・

そろばん珠・上端扁平が確認できた。身は胴部が屈曲するもの(図44・45)と球状のもの(図46)に分類できた。前者については19点を数えたが、後者は鍋との分類が難しく確実な個数は3点のみとなった。内面には厚く石灰分が付着し中には3mm近く溜まったものも確認できた。頸部についてはかかり無し(図47)が大半を占めるが、かかり有り(図48)も得られた。また、計測可能な頸部の高さは3~9mmまで様々であったが、3mmのものが一番多かった。耳部も多く得られたが、今回は耳部外面に粘土粒をいくつか貼り付けたもの(図49・50)が確認できた。明確な模様を作っているのでは無いようである。今後の類似資料の増加を待ちたい。注口についてはほぼ完形に近い状態のものがHA②では23点確認でき、その内訳は祝女殿内で12点(うち不明建物で8点)、名嘉座で2点、照屋先生1点であった。他地区では屋敷跡でまとまる様子は見られなかった。

### 6. 羽釜 (図51)

6点のみ羽釜が出土した。外面は茶褐色と赤色を呈し、顔料が塗布されているが焼成により発色に違いがでたようである。赤色は前述の水鉢(図11)と茶褐色は風炉(図39)と酷似している。

### 7. フライパン状製品 (図52・53)

浅鉢状を呈するが口唇部は平坦で鉢よりも径が大きい事から、破片ではあるがフライパン状製品と判断した。

### 8. 皿

土鍋の蓋と似るが皿と確定できた遺物が3点出土した。いずれも小片のため今回は報告をひかえた。

### 9. 壺 (図54)

小壺になる可能性のある口縁部が出土した。口唇部を扁平にし口縁部を「く」字状に折り曲げ胴部は膨らむ。

### 10. 器種不明 (図55~63)

図55は急須の頸部とも思われるが確証が無いため器種不明とする。図56は口縁部に向かって内彎する胴部でヘラ削り痕が顕著である。図57~59は平底の底部で糸切り痕の有無がある。『壺屋古窯群I』(1992)掲載の肩部が「く」字状に折れる火炉は平底であるので、その可能性もあると思われるが確証が得られず器種不明の底部とする。図60は脚台を持つ底部で内面に釉の落ちが見られる。報告書<sup>註2</sup>に類似資料が見られる。図61は碁笥底の底部である。いずれも火炉の可能性は高いと思われるが資料の増加を待ちたい。図62・63は平底の底部である。図57~59と違い厚手で胴部への傾きが急であるので、壺もしくは甕の可能性があるとと思われる。

註1:北谷町教育委員会 平安山原B遺跡 2015

註2:北谷町教育委員会 伊礼原D遺跡 2013・那覇市教育委員会 壺屋古窯群II 1995

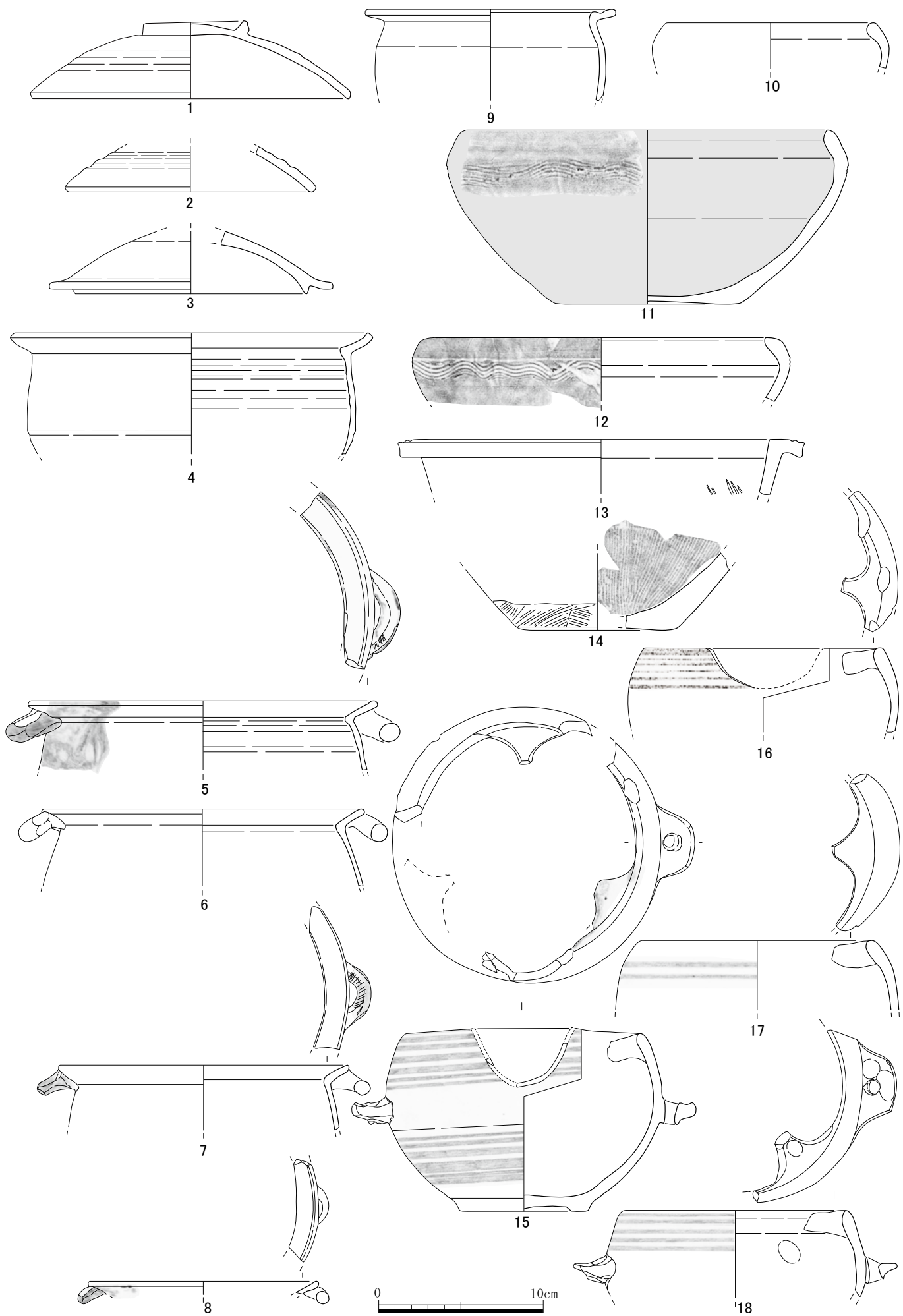
第38表-1 陶質土器 観察一覧

第図版	番号	器種	部位	口(縁)径・器高・底(胴)径(cm)	器厚(mm)	分類・形状	所見	器色	質	混和材	地区グリッド層 遺構台帳番号				
第77図・図版51	1	鍋	蓋	19.1 5.8 4.7	4	皿を伏せた形状	三日月高台・かかり無	内面:明灰/外面:明橙	軟	赤色粒:大・少・雲母:小・少	HA②D1Ⅱ祝殿台361				
	2			14.8 - -	5		かかり無	内外面:明茶	雲母:小・砂粒:小・多	HA②B1Ⅱ祝殿台1938					
	3			17.2 - -	7~5		かかり有	内外面:暗茶	赤色粒:大・白色粒:小・少 雲母:小・少	HA②B20Ⅱ上祝殿台2556					
	4	鍋	口縁	21.4 - -	4~2	折り曲げ受け皿状に成形	外面:口縁下部に把手貼付けの痕	内面:橙 外面:明茶(煤付)	硬	雲母・砂粒:少	HB③C18ⅡS12台993				
	5			20.8 - -	3~2		把手幅:5.8・把手厚:1.3	内面:橙・外面:明茶(煤)	硬	砂粒・雲母:少	HA③B10Ⅰ台2004				
	6			19.3 - -	4~2		把手幅:3.9 把手厚:1.1	内外面:橙(外面煤)	硬	雲母・赤色粒・白色粒:微細・少	HB②D1Ⅱ祝殿台356				
	7			17.6 - -	4~3		把手幅:4.2 把手厚:0.9			雲母・赤色粒・黒色粒・白色粒:微細	HA③A12ⅡS7台990				
	8			13.8 - -	3		把手幅:2.5・把手厚:0.7			砂粒・雲母:多	HA③F5Ⅱ台1206				
	9	14.8 - -	4	折り曲げ受け皿状に成形。窪みあり	沖繩産無釉陶器に近似	内面:赤 外面:暗褐	硬	雲母・白色粒・黒色粒:少	HA②C2Ⅱ祝殿台563						
	10	鉢	口縁	12.5 - -	8~4	口縁部:内湾	浅くて小振り	内外面:赤	硬	赤色粒・黒色粒:大・多 雲母:小・少	HA②C19Ⅱ蒲礼SD05台1489				
	11			22.2 11.2 10.6	7		口縁部下に5本の波状沈線	内面:赤・外面:茶褐	硬	白色粒・黒色粒・雲母:大	HA③F9ⅡS32台716・1989				
	12	水鉢	口縁	20.0 - -	6	逆「L」字状口唇部に二重圏線	櫛目は5本まで確認	内面:橙/外面:暗橙	硬	砂粒・雲母:小・少	HA③A18ⅡS12台1065				
13	23.4 - -			7	櫛描きは全面に施される		内面:橙/外面:茶	硬	赤色粒・黒色粒:大・多 雲母:小・少	HA②J6Ⅱ三良台1694					
14	掃鉢	底	- 9.8 -	9~11	平底。底部より2cmまで疔。石粒の引き摺り痕	疔痕・調整痕:明瞭	内外面:茶(煤付)	硬	黒色粒・雲母	HA③C9Ⅱ台2344					
15			14.2 8.0 10.8	5		分類:I B1bハ縁部は丸	内面:疔消し 白化粧土による圏線	内面:明茶/外面:橙	硬	赤色粒:多 黒色粒・雲母	HA②T5Ⅱ祝殿台2585				
16			14.4 - -	5		分類:Iハ縁部は丸・口唇に半円状の火窓	内面:茶(突起部に煤)	内外面:橙	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②L6Ⅱ照屋台1280				
17			14.2 - -	6		分類:Iロ・縁部は丸	疔痕・調整痕:明瞭 白化粧土による圏線	内面:茶(煤付) 外面:橙(煤付)	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②D1Ⅰ祝殿台1466				
18			13.4 - -	6		分類:Iaロ・縁部は丸	内面:暗赤(煤付) 外面:暗赤	内外面:茶(煤付)	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②C1Ⅱ上台2401				
19			16.4 - -	7		分類:Iイ・縁部は丸	内面:橙/外面:明茶	内外面:茶(煤付)	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②J4Ⅱ台2367				
第78図・図版52	20	火炉	口縁	17.8 - -	11	分類:Ⅱ(圏線無し)	白化粧土による圏線	内面:暗赤(煤付) 外面:暗赤	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA③B9ⅢS546台3041				
	21			16.4 8.0 9.9	6							分類:ⅢaI縁部は半円状の火窓	内面:橙/外面:明茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母
	22			15.3 - -	9~4							分類:Ⅲ・縁部は平	内面:暗橙(突起部に煤) 外面:茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母

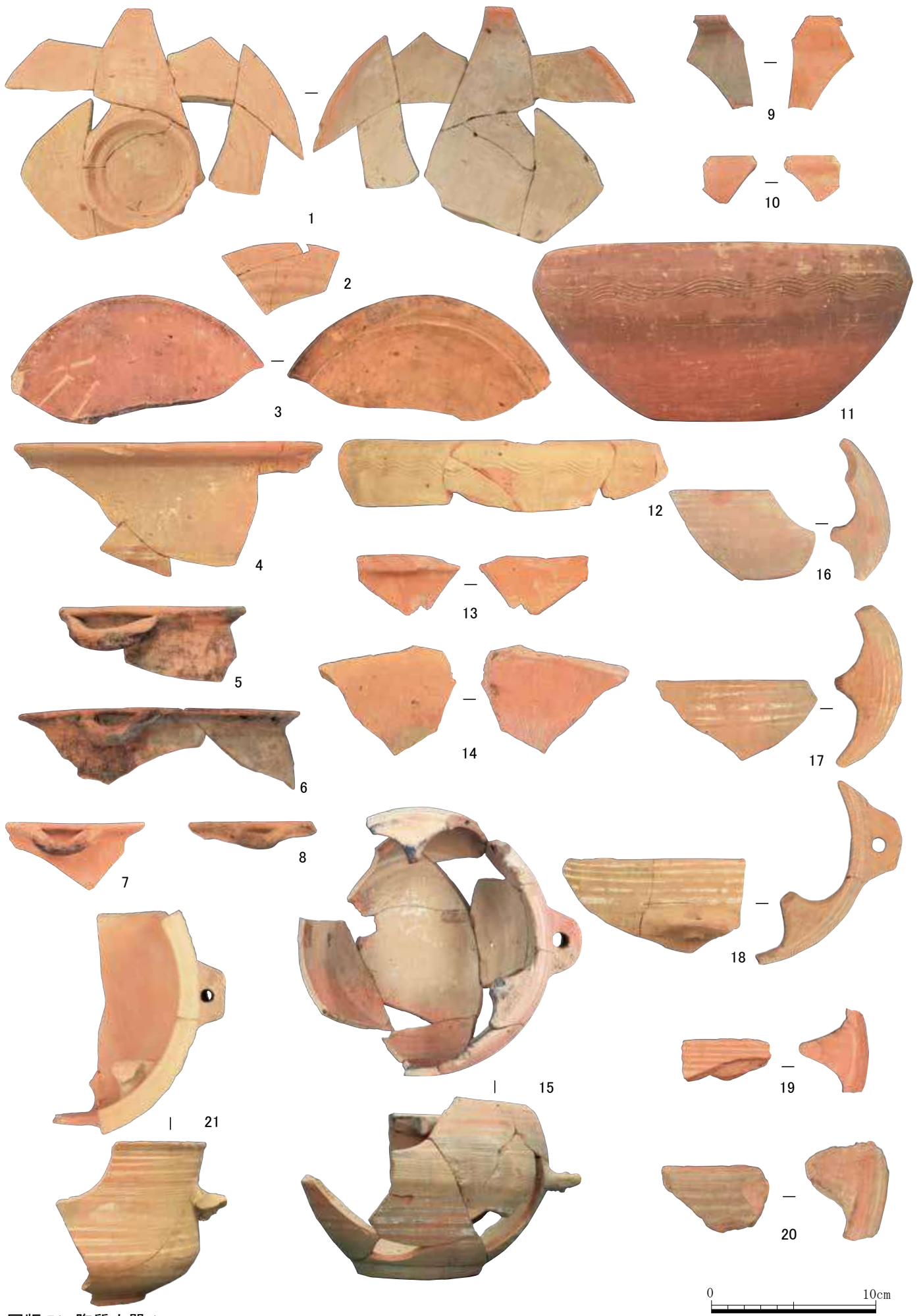
第38表-2 陶質土器 観察一覧

第図 図版	番号	器種	部位	口(縁)径・器高 ・底(胴)径(cm)	器厚 (mm)	分類・形状	所見	器色	質	混和材	地区グリッド層 遺構台帳番号		
第78図・ 図版52	23	火炉	把手	16.6	—	6	分類：Ⅱ(二重圏線)a	把手裏側に指痕	内外面：赤茶(煤付)	硬	黒色粒：小・少	HA②C1Ⅱ祝殿 台2430	
	24			15.6	—	—	分類：Ⅱ(二重圏線)a	穿孔：中心よりずれる	内外面：茶(煤付)		赤色粒・黒色粒・雲母	HA②D1Ⅱ不建台830	
	25		胴	—	—	7~4	分類：Ⅰa	白化粧土による圏線	内面：暗橙/外面：茶	軟	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②C3Ⅱ祝殿 台582	
	26		把手	14.4	—	5	分類：Ⅰb・縁部 は丸	外面は摩耗し白色圏 線は消える	内外面：茶	軟	赤色粒・黒色粒	HA②A4Ⅱ祝殿 台1641	
	27			14.1	—	—		白化粧土による圏線				赤色粒・黒色粒・雲母	HA②F20Ⅱ上瓦屋 台805
	28			—	7.4	—	9~6	分類：A1	吻痕顕著 白化粧土による圏線	内面：赤/外面：暗茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②ⅡH2瓦屋 台1168・I3名嘉座 台2339
	29			—	(9.5)	—	10	分類：A1の傾き 違い	高台：非常に浅い 白化粧土による圏線	内面：赤(すす) 外面：暗橙		黒色粒・雲母	HA②B2Ⅱ祝殿 台2556
	30			—	9.2	—	9~6	分類：A2	吻痕顕著 白化粧土による圏線	内外面：暗赤		赤色粒・雲母	HA②J5Ⅱ東大 台2623
	31			—	7.7	—	4	分類：B1	高台：非常に浅い 白化粧土による圏線	内面：暗茶/外面：明 茶		黒色粒・雲母	HA②D2Ⅰ祝殿 台2584
	32		底	—	7.4	—	4	分類：B2	吻痕 白化粧土による圏線	内面：暗橙/外面：橙		雲母	HA②A19Ⅱ祝殿 台1325
	33			—	7.8	—	5	分類：B2(貼り付 け高台)	白化粧土による圏線	内面：明赤/外面：橙		雲母	HA②E3Ⅱ名嘉座 台1577
	34			—	9.5	—	—	分類：C		内面：暗橙/外面：橙		雲母	HA②N10Ⅰ台668
	35			—	8.2	—	6	分類：D	高台：非常に浅い 白化粧土による圏線	内外面：暗赤		赤色粒・黒色粒・雲母	HA②D1Ⅱ祝殿 台356・K3Ⅱ又吉小 台326
	36			—	9.8	—	9	分類：E	高台：浅い	内面：暗赤/外面：暗 橙		雲母	HA②D1Ⅱ上 不建 台831・台1915
	37			—	8.2	—	5	分類：F	内面：吻痕 白化粧土による圏線	内面：明橙/外面：明 茶	軟	砂粒・雲母	HA③E10Ⅰ台 1380
	38			—	7.4	—	5		高台：浅い 白化粧土による圏線	内面：橙/外面：明橙		黒色粒・雲母	HA②L6Ⅱ三良 台1404
	39		風炉	口	17.8	—	5	風炉?口縁部：逆 「L」字状・鏝縁	胴部：獅子の貼り付け 頭部中央より貫通孔あり	内外面：茶褐色(施釉)	硬	雲母	HA③F16Ⅱ台1892
	40			胴	—	—	5~3	風炉?	胴部：獅子の貼り付け 中は空洞	内外面：暗赤	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA②D1Ⅱ上 不建 台1915
	第79図・ 図版53		41	火取	口縁	8.6	—	6	筒	外面：吻痕 内面：テ`消し	内面：明茶/外面：橙		赤色粒・雲母
42		蓋	2.0	9.0	3.2	6	笠	撮み：扁平 かかり有	内面：明橙/外面：茶		赤色粒・黒色粒・雲母	HA③E16Ⅱ台 1756・F16Ⅱ台 1962	
43			1.6	9.0	2.8	5~3	饅頭	撮み：扁平 かかり有	内面：橙/外面：茶	軟	赤色粒・黒色粒・白色 粒・雲母	HA②I3Ⅱ名嘉座 台1102	
44		急須	胴	最大胴径：16.2	—	3	腰部：「く」字状 に屈曲	内面：吻痕	内面：橙 外面：橙(煤付)		黒色粒・雲母	HA③B14ⅡS20 台847・B10Ⅰ 台2004・B10Ⅳ台 2321	
45			胴~ 注	最大胴径：19.0	—	3~2			内面：明橙(石灰付着) 外面：明橙(煤付)		赤色粒・黒色粒・白色 粒・雲母	HA②D1Ⅱ祝殿 台1468	
46			身	頸径：7.6 最大胴径：16.6	—	3	胴部：球状				赤色粒・黒色粒・雲母	HA③E17Ⅱ台1864・ F11Ⅱ台1865・F16 Ⅱ台1962	
47			頸	8.0	—	—	3~2	頸部はやや立ち上 がる	頸高：5mm 内面：吻痕	内外面：明橙		白色粒・黒色粒・雲母	HA②D1Ⅱ祝殿 台1468
48		頸	8.8	—	—	3	頸部はゆるやかに 立ち上がり、かかり を持つ	頸高：8mm	内面：茶/外面：明茶		茶色粒・黒色粒・雲母	HA③A17ⅡS12 台540	
49		耳	長：3.2 短：2.1	—	—	7	外面：粘土粒の貼 り付け	6粒	内面：明茶/外面：橙		赤色粒・黒色粒・白色 粒・雲母	HA②A20Ⅱ上 祝殿 台2392	
50			欠損	—	—	7		3粒	内面：赤/外面：赤	硬	赤色粒・黒色粒・白色 粒・雲母	HA②A1Ⅱ祝殿 台483	
51		羽釜	口縁	8.8	—	6	円筒形	内外面：テ`消し	内面：茶 外面：顔料塗布		赤色粒：大、黒色粒・ 白色粒・雲母：少	HA②ⅡD1 不建 台1915・1917・ 831・D2台991・ E20台708	
52		フライ パン状 製品	口縁	18.6	—	4	浅鉢形・口唇部： 丸	関西系の可能性あり	内外面：淡橙	硬	黒色粒・雲母：極少	HA②A1Ⅱ祝殿 台1320	
53			口縁	17.4	—	5			内面：テ`消し	内外面：暗茶 (外面煤)		黒色粒・雲母：極少	HA②H3Ⅱ名嘉座 台1166
54		小壺	口縁	9.0	—	4	壺型	口唇部：扁平 外面：テ`消し	内外面：橙	軟	赤色粒：大・多、黒色粒・ 白色粒・雲母：微細	HA②B19Ⅱ祝殿 台2427	
55	器種 不明	頸?	7.4	—	3	急須? 不明	口唇部：扁平	内面：橙/外面：赤	硬	白色粒：多、黒色粒・ 雲母：微細	HA②T1Ⅱ祝殿 台525		
56		胴	—	—	6	火炉? 丸みを帯びる	瓦質土器に類似 テ`削り痕が顕著	内外面：暗茶		黒色粒・白色粒・雲母： 極小、茶色粒：大	HA②E1Ⅱ祝殿 台1837		
57		底	—	9.2	—	6	火炉? 平底	底面：糸切り痕	内面：暗橙/外面：暗 橙		赤色粒・雲母	HA②F1Ⅱ瓦屋 台808・F5東大 台987・C20 台1390・J2?台2414	
58			—	6.4	—	10			内面：吻痕 底面：糸切り痕	内面：橙/外面：茶	硬	赤色粒：大 黒色粒・雲母：極小	HA③D16Ⅱ台3203
59			—	11.4	—	9		内面：茶/外面：明茶		硬	赤色粒・黒色粒・雲母： 極小	HA③F17ⅡS10 台1244	
60			—	11.2	—	8	火炉? 「く」字状の脚台	内面に釉薬の落ちあ り	内外面：橙	硬	赤色粒：大、黒色粒・ 雲母	HA③B18Ⅱ台1837	
61			—	10.4	—	6	火炉? 碁碁底	内面：吻痕顕著 外面：テ`削り	内外面：赤		赤色粒：大、黒色粒・ 雲母：小、白色粒	HA③A13Ⅱ台2489	
62	底	—	10.5	—	10	壺 or 甕 平底	内面：吻痕 底面：糸切り痕無し	内面：茶/外面：橙	硬	赤色粒・黒色粒・白色 粒・雲母：極小	HA②A1Ⅱ上 祝殿 台1785		
63		—	9.8	—	6			内面：テ`消し 底面：糸切り痕	内外面：暗橙	硬	赤色粒・黒色粒・白色 粒・雲母	HA②E1Ⅱ祝殿 台1283・1284	

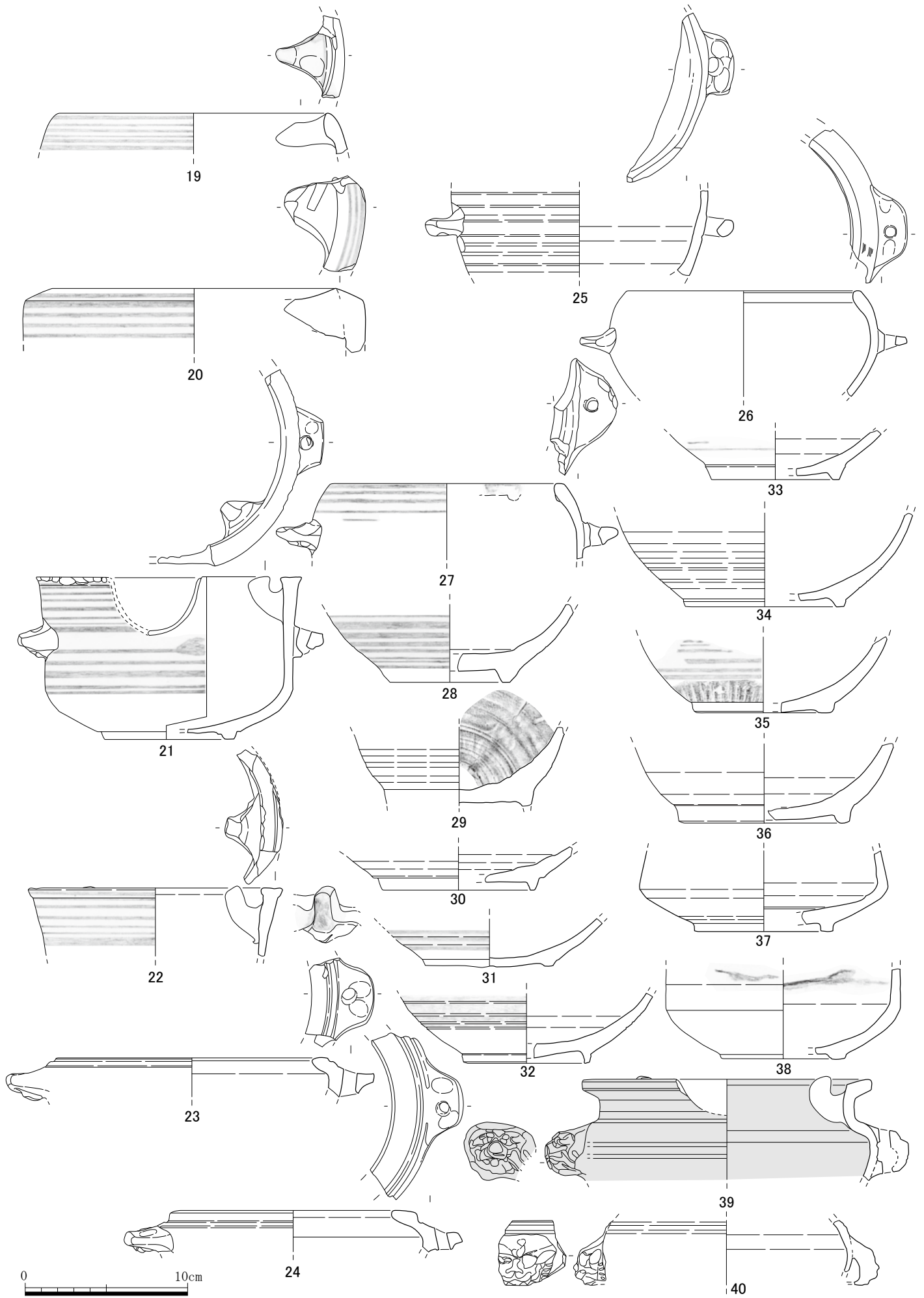




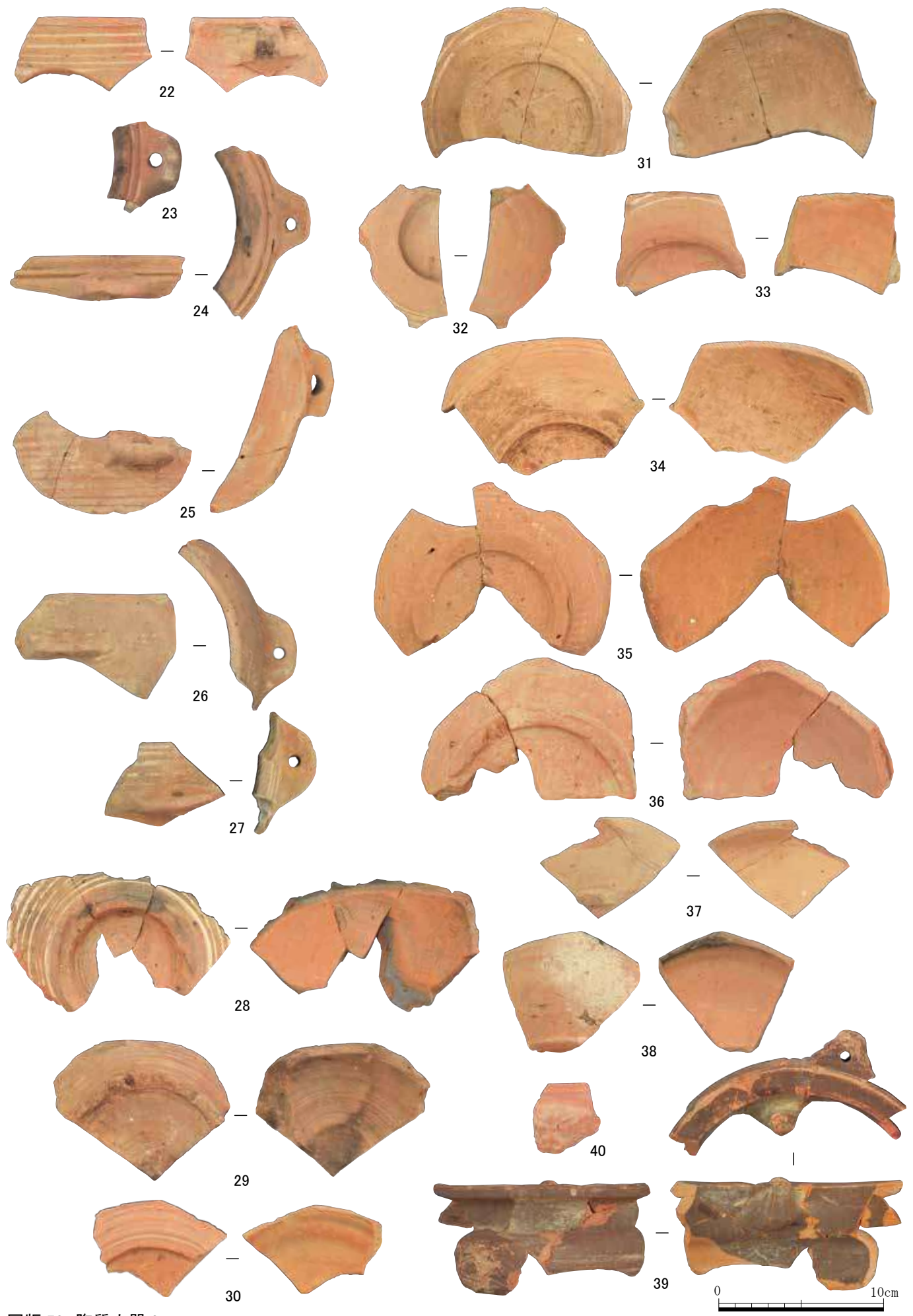
第 77 図 陶質土器 1



图版 51 陶質土器 1

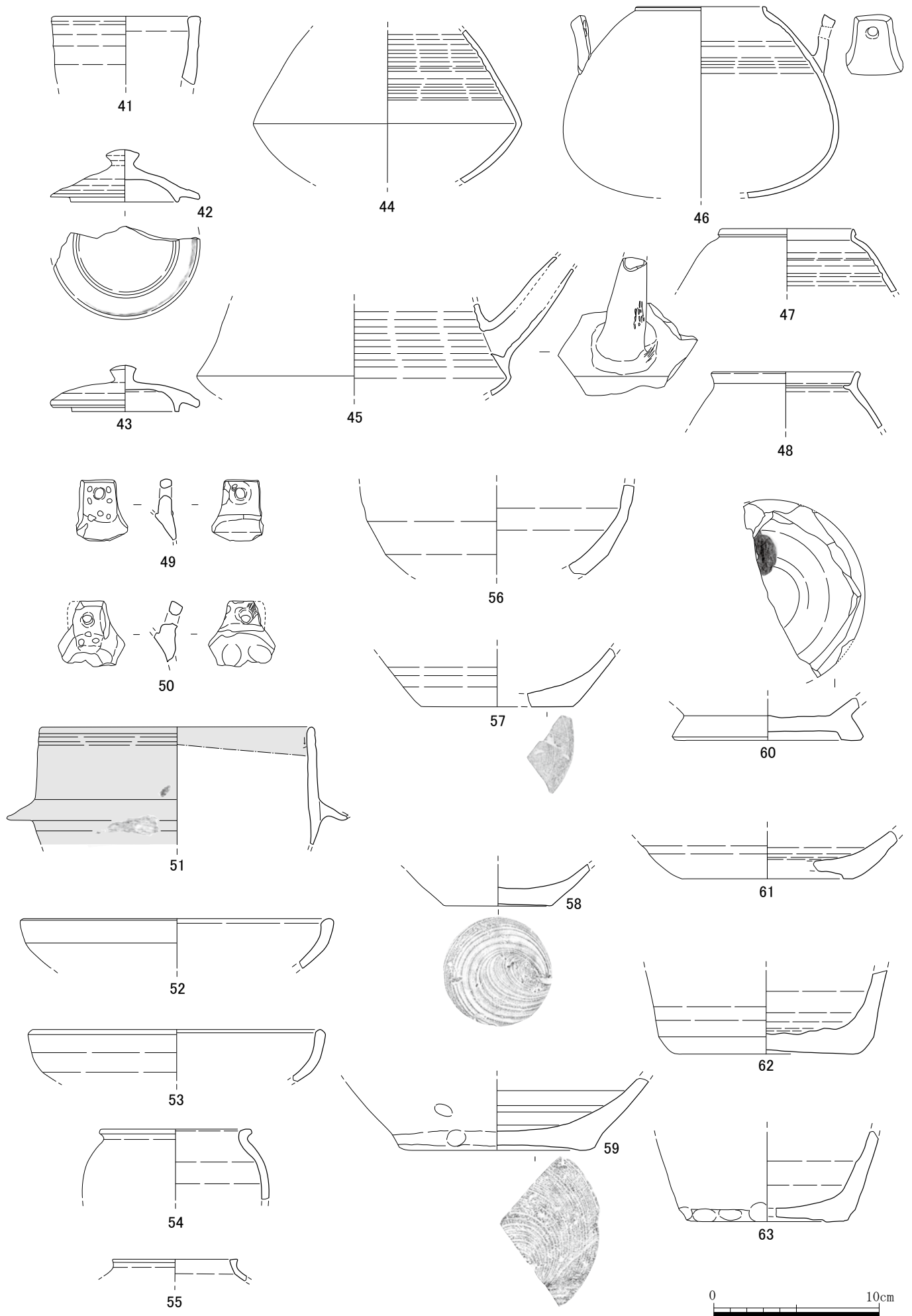


第 78 図 陶質土器 2

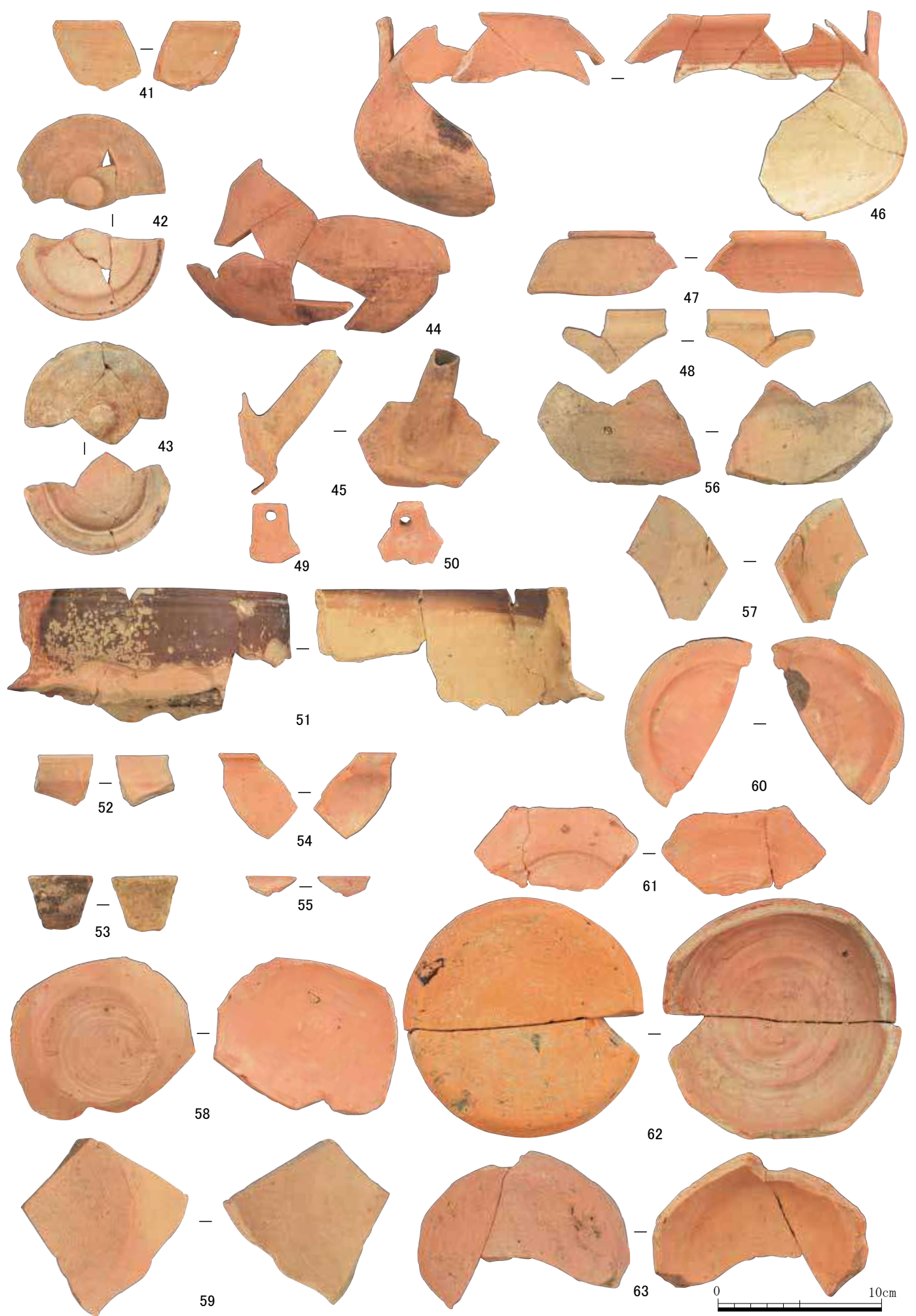


图版 52 陶質土器 2





第 79 図 陶質土器 3



图版 53 陶質土器 3

## (6) 瓦質土器

瓦質土器は還元炎焼成で灰色を為すものと赤～橙色を為すものがあり、それぞれを砂質と泥質に分けた。一般に瓦質土器は中世に比定されるが、沖縄においては17C代に瓦質土器が生産されていた<sup>註1</sup>。本土産・湧田産とも灰色で泥質のものが一般的であるが、今回は赤～橙色を呈し近世以降の生産で産地が明確でないものを瓦質a、灰色を呈し湧田窯及び国内で生産されたものを瓦質bとして分類して報告する。

(a) (赤～橙色)：本土産及び湧田産の瓦質土器とは異なるうえ、混入物や硬度から陶質土器にも含まれないものである。赤～橙色を呈し、砂質のものが多数を占めた。総数110点のうち85%が馬蹄形焜炉<sup>註2</sup>の破片で、他には挿鉢、鉢、火取、火炉を確認した(第41表)。馬蹄形焜炉は焜の部分が丸く、火入れ部が方形を呈し、焜の部分に突起を3個有するものである。出土品の胎土を見ると赤・茶色等の粒や雲母の混入があり、ニービの成分も含まれる。瓦にも同様の混和材は使用されており、湧田古窯群IV(1999)で喜友名貝塚タイプとして報告されるものに類似する。また、現在のところ県外に類似品は確認できていないので、在地(湧田系)の可能性は高いと思われる。以下、遺物の詳細について第42表に記載し、第81図、図版54に示す。

図1は鉢の胴部で外面に約7cmの菊花文を配するが瓦の可能性もある。図2は挿鉢の底部で櫛目が3～4本確認できる。同一個体と思われる胴部から櫛目は12本と思われる。図3は火取で底径13.0cm。類似の器形は沖縄産無釉陶器(第72図127)にも見られ、判別が難しい。図4は火炉の口縁部で外面に貼り付けの痕が残る。図5～17は馬蹄形焜炉で全形を窺える1点(17)の他に焜部(5～11)のうち突起の周縁に煤が付着するもの(7～9)、火入れ部(12～16)が得られた。火入れ部の縁は逆「L」字状を呈し、その幅は2.1～4.9cmと幅があったが、3cm後半のものが多く48%を占めた。火入れ部の底面は方形で板状の粘土が使われ、対上りはへらで削られる。また、内底面には長軸に沿った指が痕が残る、胎土は赤褐色が主体で橙褐色も見られた。混和材は石英や赤色粒を含むが、大量に糊殻を含むもの(8)も確認できた。砂質と泥質があるが前者が多い。

(b) (灰色)：灰褐色が強く、胎土に細かい混和材を含み泥質が多い。大方は湧田窯で焼かれたもの<sup>註1</sup>と思われ、埴や灰色瓦も数点得られている。出土総数66点で、地区別にはHA③21点・HA②22点・HA④23点で他の遺物に比べてHA④の割合が高い(第80図)。全て破片で器種が分かるものは鍋5点・鉢13点・挿鉢8点・火炉6点・壺か甕7点・土鍾2点・不明25点である(第43表)。以下、残りの良いものを図示し、観察一覧を示した。

鍋：図18は鍔縁で羽釜タイプ。湧田古窯跡IV(1996)に出土例があり、同じ形状は沖縄産施釉陶器(第61図154)

第41表 瓦質土器(a)出土量

地区	層	器種	鉢		火取	火炉	馬蹄形焜炉		
			器形	鉢			丸	方	
HA③	A	I(攪乱)				1		3	
		II	1	2		4	2	26	
		大屋							2
		蒲伊礼小							1
		仲村渠				1			5
		ウラミチ				1			1
HA②	A	ナカミチ			1	1		4	
		合計	1	2	1	8	2	42	
		II						1	1
		祝女殿内						1	32
		祝女殿内小(SD8)							1
		瓦屋又吉小	1	1					3
		三良又吉小							2
		東大屋小							1
		名嘉座				1			
		ワキミチ							1
HA④	A	ナカミチ						1	
		アタンガー9							1
		合計	1	1		1	2	43	
		表土掘削							1
HA④	A	II				1	1	1	
		サカイミチ							2
		合計				1	2	3	
		器形別合計	2	3	1	10	6	88	
		器種別合計	5	1	10		94		

第42表 瓦質土器(a) 観察一覧

(単位: cm)

第81図・図版54	番号	器種	部位	口径底径	緑幅	緑厚	器厚	観察事項	器色(外/サンド/内)		混和材							器面調整(外/内)	質	地区グリッド層遺構(取上)台帳番号	
									赤粒	茶粒	黒粒	白粒	砂粒	雲母	その他						
第81図・図版54	1	鉢	胴	—	—	—	1.6	外面: 型押しで菊花文(推定7cm)。瓦の可能性あり	暗赤/暗赤	粗△				細○			—/叩	砂	HA②G20 II 瓦屋台 1055		
	2	挿鉢	胴	13.6	—	—	1.8	櫛目12本、間隔を空けて引かれる	橙/暗茶/橙	粗△	中△					光白△	▽/—	やや泥	HA②G01 II 瓦屋台 1035 B09 II 祝殿小台 2405		
	3	火取	丸	14.8 13.0 6.0	1.1	1.2	—	器厚: 2.1～1.1cm 口唇及び内面に煤が付着、口唇部が濃い	茶/灰/暗茶	中○	粗○					光白△	▽/叩	やや泥	HA③F15 II ナカ台 866		
	4	火炉	丸	23.4	3.6	0.8	1.0	口縁部: 断面三角形(内唇側に張り出し) 外面: 貼り付け痕、把手か?	橙/淡灰/橙		中△					光白△	▽/叩	砂	HA②I03 II 名嘉座台 2409		
	5	馬蹄形焜炉	丸	口縁	25.2	3.2	0.9	0.7	口縁部: 断面三角形 粘土帯(厚2.0幅1.1)、内面: 煤付着	暗橙/暗茶/暗橙		中△	細○					▽/叩	やや泥	HA③S12 II 仲村渠台 714	
	6				30.8	4.0	—	0.7	内側に剥がれた痕、突起部か?	橙/茶/橙			中△					叩/叩	砂	HA③D15 II 蒲伊礼小台 491	
	7				24.8	3.1	2.2	1.1	突起: 6.1・3.7・2.2・2.0、内面: 煤付着	赤/—/赤		中△	中△	細○		糊殻○	▽/叩	硬	HA③B10 II 攪乱台 2007		
	8				22.4	3.3	—	0.7	突起: 4.0・6.5・1.7・1.8、内面: 煤付着	淡赤/灰/淡赤	粗○				細○	光白△	▽/叩	泥	HA③T12 II 仲村渠台 1328		
	9				28.4	3.0	—	1.0	突起: 4.0・7.5・2.9・1.8、突起下に煤	赤/赤/赤	中△	中△			細○	石灰△	▽/叩	砂	HA③E9 II 大屋台 1057		
	10				—	3.0	—	2.7	突起: 3.5・5.0・2.5・1.6、内面・上面: 煤付着	暗赤/暗灰/赤	粗○		中△	細○		糊殻○	▽/▽	やや泥	HA③A11 II 台 2306		
	11				—	3.5	—	1.2	突起: 4.5・5.3・2.0・2.0、内面: 煤付着	赤/淡灰/橙	中○		粗△		細○		▽/▽	砂	HA③G19 II 台 432		
	12				—	3.3	2.1	1.3	火入れの左端、縁上にも削り跡の痕が顕著。外面: 粘土の貼り付け痕残る	淡赤/茶/淡茶	粗△ 中○				細△	石灰△	▽/▽	硬	HA②C06 II 台 2322		
	13				方	火入れ	—	4.3	1.7	1.5	火入れの右端。右縁は先細り 内外面: 指が痕顕著、内面: 煤付着	赤/淡灰/橙	中○		粗△		細○		▽/▽	砂	HA③G19 II 台 432
	14						—	4.0	1.0	1.7	火入れの中央左寄り。外面: 指が痕顕著	淡橙/—/淡橙	粗○	粗○		細○	中△		▽/▽	砂	HA②E19 II 祝殿台 718
	15	—	3.2	1.8			2.2	火入れの右端、外面の調整粗く内面は丁寧	赤/赤/赤	中○	中○			細△		▽/▽	硬	HA③E09 II 台 1371			
	16	—	3.3	1.5			1.4	火入れの左端近く。縁の先端は先細り 内底面: 指が痕顕著	淡橙/—/赤	粗△ 中○				細○		▽/▽	砂	HA③A12 II 仲村渠台 991			
	17	ほぼ完	—	—	—	4.0	1.5	1.7	推定#17: 長径35.0短径23.0高さ13.5.0。火入れ部: 縁周辺に煤付着	淡茶/淡灰/淡茶	粗○	中△ 細○		細○		石灰△ 石英△	▽/▽	砂	HA②D01 II 台 829・ 830・831・1914、D02 II 台 2584		

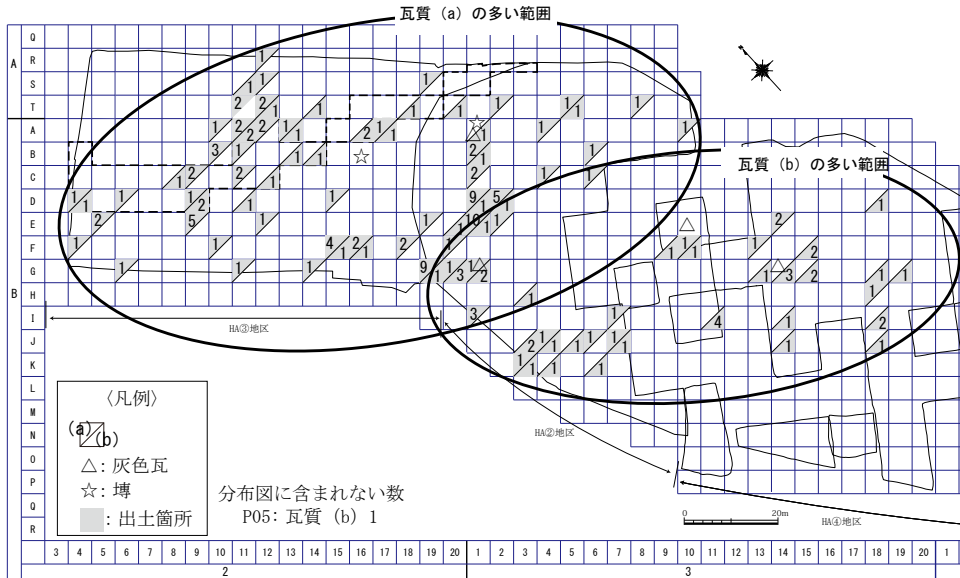
焜部突起の計測値: 最小幅・最大幅・奥行き・厚み

混和材凡例 ○: 非常に多い △: 多い △: 少ない ▽: 僅少

にもある。図 19 の形状はグスク土器に近い丸底。図 20 は燻しにより黒い光沢があり、底面で僅かにくびれ、高台の可能性もある。鉢：図 21 は内湾で内側に肥厚、図 22・23 は外面に沈線で草花文のたぐいがあり、同一個体の可能性がある。図 24 は直状の底部で薄手の淡茶色で他とは異なる。図 25 は器面が禿げ櫛目は確認できないが後述の播鉢に酷似。播鉢：図 26 と 27 は「く」字状に湾曲し、口縁部断面は角をなすもので、図 27 は注口である。図 28 は内唇が肥厚し、口唇には 2 本の圈線を施す。渡地村跡に類似あり。図 29 は厚手、櫛目細かく、櫛と櫛の間隔は 2.4cm で両者は図 26 と 27 より大ぶりである。火炉：図 30・31 は口縁が肥厚し胴部が張り内部の突起は鈎状をなす。図 33・34 はやや薄手であるが、前者と同タイプ。図 31 と 33 は赤色顔料が塗布される。図 32 は厚手の筒状タイプで、外面に化粧土で圈線を施す。この技法は陶質土器と同じである。壺か甕：図 35 は口唇に特徴があり、本土産の可能性あり。図 37 は小ぶりで図 24 と同じ胎土。図 38 は硬質で、外面に自然釉？がある。土鍾：図 40・41 は管状の土鍾で前者は太めは瓦質、後者は細身で土器質である。前者は後兼久原遺跡（2003）と酷似する。第 80 図に分布を示した。主に瓦質（a）は HA ③②の近代集落跡から出土し、瓦質（b）は HA ②④の近世期より出土している。遺物の新旧が遺跡内の時期差と矛盾無く示されている。

註 1：沖縄県教育委員会『湧田古窯群 II』沖縄県文化財調査報告書第 121 集 1995

註 2：丸形は火炉との区別が難しいが馬蹄形は炊事用と推測できるため焜炉の名称を用いた。



第 43 表 瓦質土器 (b) 出土量

地区層	器種							合計
	鍋	鉢	播鉢	火炉	壺か甕	土鍾	不明	
HA ③	I						1	1
	II	1	4	2	2		1	11
	遺構	1	1	1				4
	遺構		1					1
	S-640			1				1
合計	2	6	4	2		1	6	21
HA ②	II 上	1				1		2
	II	1	4	1	3	3	1	4
	III		1					1
	不明							1
合計	2	5	1	3	4	1	6	22
HA ④	II		2	2	1			9
	遺構	1				1		2
	III			1		1		2
	遺構					1		1
合計	1	2	3	1	3		13	23
総数	5	13	8	6	7	2	25	66

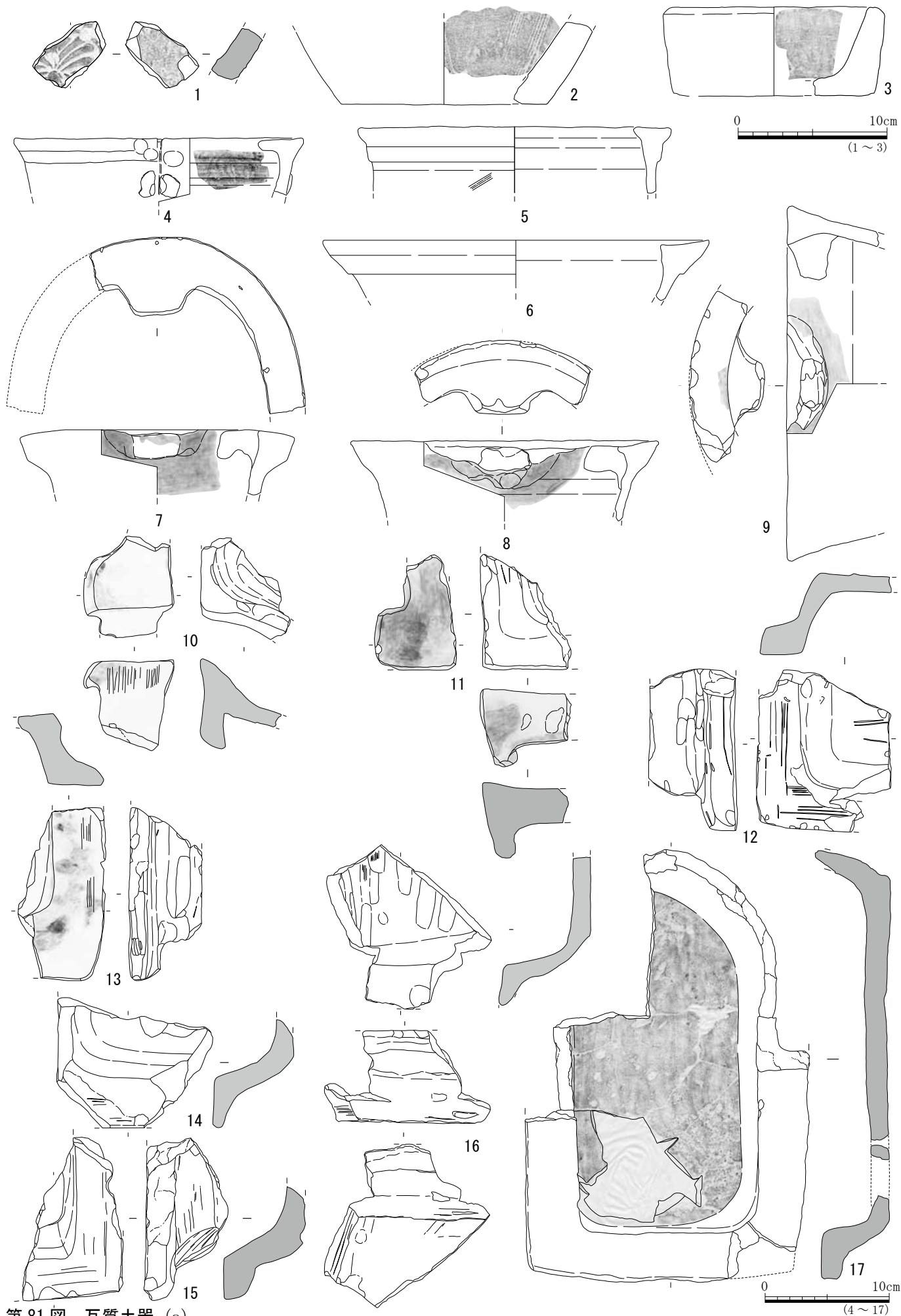
第 80 図 瓦質土器 平面分布

第 44 表 瓦質土器 (b) 観察一覧

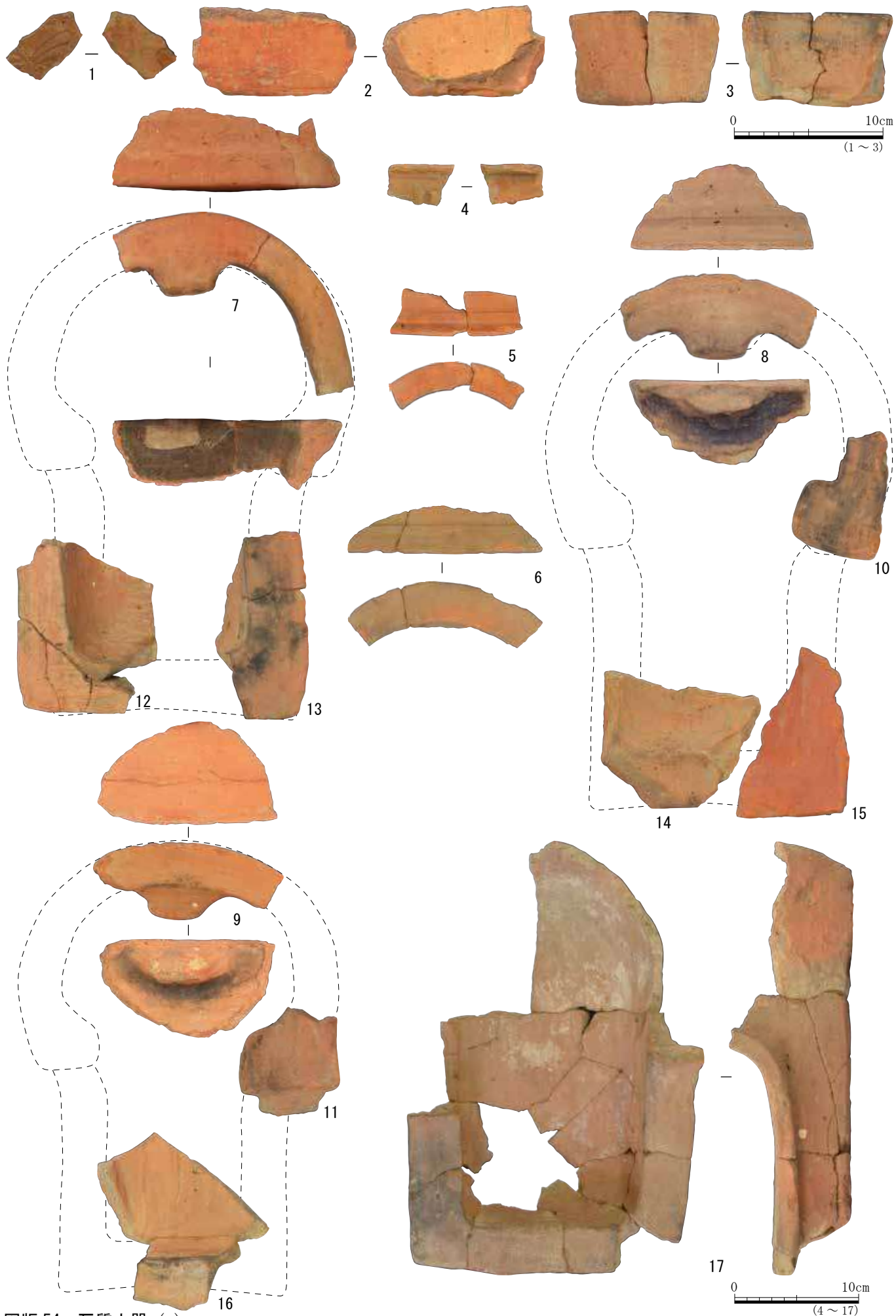
(単位：cm)

第 82 図・図版 55	番号	器種	部位	口径 / 胴径 / 底径	器厚	観察事項	器色	混和材					器面調整 (外 / 内)	質	地区グリッド層遺構 (取上) 台帳番号
								黒粒	白粒	砂粒	雲母	他			
	18	鍋	胴	- / 18.5 / -	0.6	鍋と思われる。湧田IV - 28	茶・サンド：灰	祖△	細○	細○		仔 / 仔	硬	HA ④ G14 II SD41 台 3010	
	19	鍋	底	- / - / 17.2	0.8	底面に煤。焼一良好 別の器種か	灰	祖△	細○			仔 / 叩	やや砂	HA ③ C12 II 台 3215	
	20		底付近	- / - / -	0.4	外面：燻しにより黒色化。光沢あり	灰～暗灰		細○			仔 / 叩	やや泥	HA ② E1 II 祝殿台 1024	
	21		口縁	- / - / -	0.7	口一内湾・玉縁状。外面：煤付着	茶・サンド：灰		細○	細○		仔 / 仔	泥	HA ④ G14 II 台 2236	
	22		口縁	- / - / -	0.8	外面に文様 (草花文?) あり。図 6 と同一か	暗灰・淡灰	中△	細△	細△		叩 / 叩	泥	HA ③ A11 II 台 1740	
	23	鉢	胴	- / - / -	1.1	外面に文様 (草花文?) あり。図 5 と同一か	暗灰・淡灰	中△	細△	細△		叩 / 叩	砂	HA ③ S ~ A13 ~ 15 III 下 S11 台 2022	
	24		底	- / - / 10.9	0.8	直状。焼一良好。摩耗	淡茶		細○			叩 / 叩	砂	HA ③ D9 II 台 748	
	25		口～底	28.4 / 16.8 / 12.0	1.6	口一「く」字状に湾曲・断面一角。播鉢か?	淡灰	中○		細△	褐色中		剥落	泥	HA ③ D11 II 台 3248
	26		口～底	26.4 / 15.8 / 9.2	1.5	小型の播鉢、口一「く」字状に湾曲・断面一角	淡灰	中△	細△			仔 / 仔	泥	HA ③ R ~ G4 ~ 3 III 下 S640 台 1125	
	27	播鉢	口縁	26.6 / - / -	1.3	口一「く」字状に湾曲・断面一角。櫛目 9 本、注口幅 2.5	淡灰	中△		細△		仔 / 仔	泥	HA ③ B13・14 II S20 台 847	
	28		口縁	- / - / -	1.6	口一内湾・逆「L」状。口唇に 2 本の圈線か。櫛目 4 本	暗灰・淡灰		細△	細△		仔 / 剥離	泥	HA ④ I18 II 台 2498	
	29		底	- / - / 13.0	1.8	厚手。直状。櫛目 10 本 (細線)。間隔 - 2.4cm	灰	祖△	細△			仔 / 剥離	砂	HA ④ G14 III 台 2247	
	30		口縁	17.2 / - / -	0.6	口一肥厚。胴一膨。突起：幅 1.3 × 奥行 2.5 × 厚 1.2	濃灰	中△		細△		仔 / 剥離	やや泥	HA ③ A13 II 台 2708	
	31		口縁	- / - / -	0.7	口一肥厚。胴一膨。突起：幅 1.1 × 奥行 1.7 × 厚 1.1	暗茶・サンド淡灰		細△	細△		仔 / 仔	泥	HA ② J5 II 名嘉座台 2623	
	32	火炉	口縁	- / - / -	1.4	筒状。外面：白化粧土による横線	黒		細△			叩 / 叩	砂	HA ② A1 II 祝殿台 495	
	33		胴	- / - / -	0.5	頸一くびれ。胴一膨。貼付一有。内外面一赤色顔料	赤・サンド灰		細△			仔 / 叩	硬	HA ③ F11 II 台 1484	
	34		底	- / - / 8.2	0.6	内面：叩痕顕著	濃灰		細△	細△		仔 / 叩	やや泥	HA ② D2 II 祝殿台 989	
	35	壺か甕	口～肩	11.2 / - / -	0.8	口唇：舌状・有段、外面：縦位に櫛目状。大橋一中世 (瓦質)	黒		細△			仔 / 仔	砂	HA ④ I14 III 台 2475	
	36		肩	- / - / -	0.8	内一ユビ痕。大ぶり	灰	中△	中△	細△		仔 / 叩	やや砂	HA ② E20 II 上祝殿台 708	
	37		胴	- / - / -	0.6	図 19 と同一か?	淡灰	中△	中△	細○		仔 / 仔	泥	HA ② G20 II 瓦屋台 935	
	38		直状	- / - / 6.0	0.4	直状。焼一良好。赤色塗布?	茶		細○			仔 / 仔	砂	HA ② D1 II 祝殿台 354	
	39	不明	底	- / - / 15.2	1.1	外面：ほぼ全面微細な気泡 (自然釉?) 瓦質?	茶・灰		細○			仔 / 叩	硬	HA ② J4 II 名嘉座台 1235	
	40	土鍾	口～底	長 5.9 / 幅 3.0	1.4	口径 6mm。残存 33g。筒状。端部一丸味	暗灰	細○	細○			北 / 仔	やや砂	HA ③ D9 II 台 744	
	41		口胴	長 1.9 / 幅 1.1	0.2	口径 6 × 5mm。残存 1.8g。中央膨らむ。端部一切痕	橙		細○			仔 / 雑	砂	HA ② T20 II 祝殿台 556	

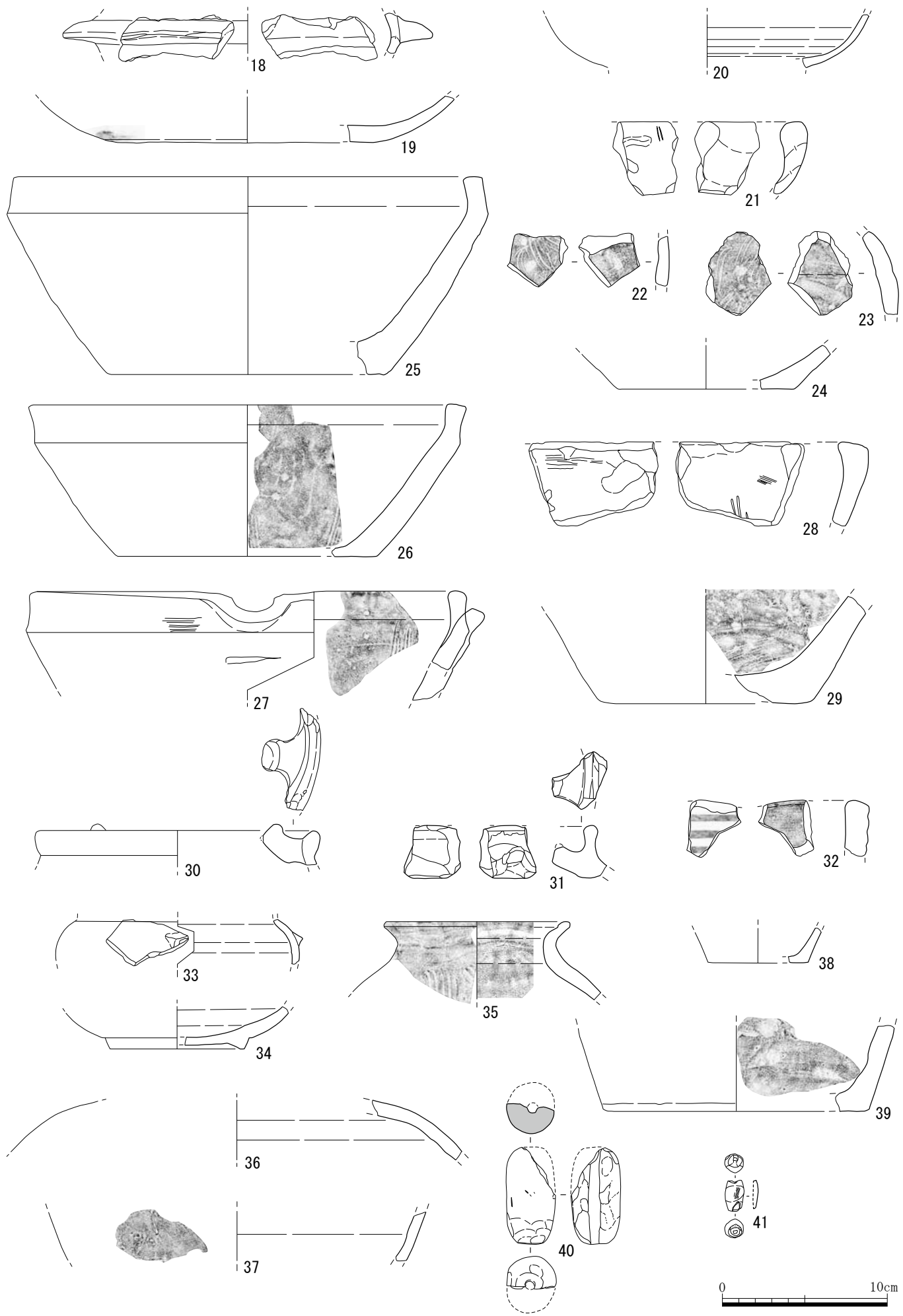
混和材凡例 ◎：非常に多い ○：多い △：少ない △：僅少



第81図 瓦質土器 (a)



図版 54 瓦質土器 (a)



第 82 図 瓦質土器 (b)



图版 55 瓦質土器 (b)



## (7) その他の不明陶器

器形や胎土から検討を重ねたが、土器、瓦質、陶質、陶器等に分類できないものをまとめた。類似した器質ごとに分類したところ、土器系9点、土師質13点、瓦質土器系11点、陶質土器系16点、沖縄産施・無釉陶器系32点、タイ産半練土器系4点、褐釉陶器系18点、本土産陶器系3点等が得られた。今回はHA③②④II層からの出土が多く、屋敷跡から確認できたのはHA②のみで、祝女殿内29点(窯道具・袋物以外全器種)、瓦屋又吉小12点、名嘉座・三良又吉小7点、他屋敷からは数点ずつの出土だった。屋敷跡から出土した不明陶器は沖縄産施・無釉陶器系・褐釉陶器系・陶質土器系が多かった。今後の資料増加を待って分類したい。なお、窯道具が1点得られた。施釉陶器の焼成に使用される物であるが、現在のところ当遺跡周辺に陶器を生産する窯は確認されておらず、今後の資料増加が待たれる。以下、特徴のある器物について第46表に記載し、第83図・図版56に示す。

第45表 その他の不明陶器 出土量

地区	種類	器種											不明	合計		
		鍋	鉢	鉢	瓶	壺	急須	蓋	火	柄	窯	不明				
HA③	土器系	1				1			1						2	5
	土師質		1												1	2
	瓦質系					2				1						3
	陶質系														1	1
	沖施・無系				2	4		1						1		8
	タイ半練系														3	3
	褐釉系					3										3
	本陶系									1						1
不明						1		1							2	
合計		1	1		2	11		1	2	2		1	7		28	
HA②	土器系														4	4
	土師質	1	1	1		1									7	11
	瓦質系	1								1	1				4	8
	陶質系	1	1		1	2	1	1							7	14
	陶器系					1									2	3
	沖施・無系	1	1			2		9							6	21
	褐釉系	1				1	10								3	15
	本陶系		1			1									2	2
	青磁													1	1	
	不明	1				1	1								3	
合計	6	2	2	1	3	19	1	9	1	1	1		34		80	
HA④	陶質系	1													1	1
	陶器							1							1	1
	沖施・無系					1									1	3
	タイ半練系														1	1
合計	1				1	1								2	5	
総数	8	2	3	1	1	5	3	1	1	1	1	1	1	4	113	

(法量単位: cm)

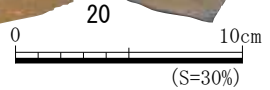
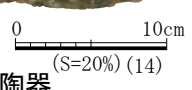
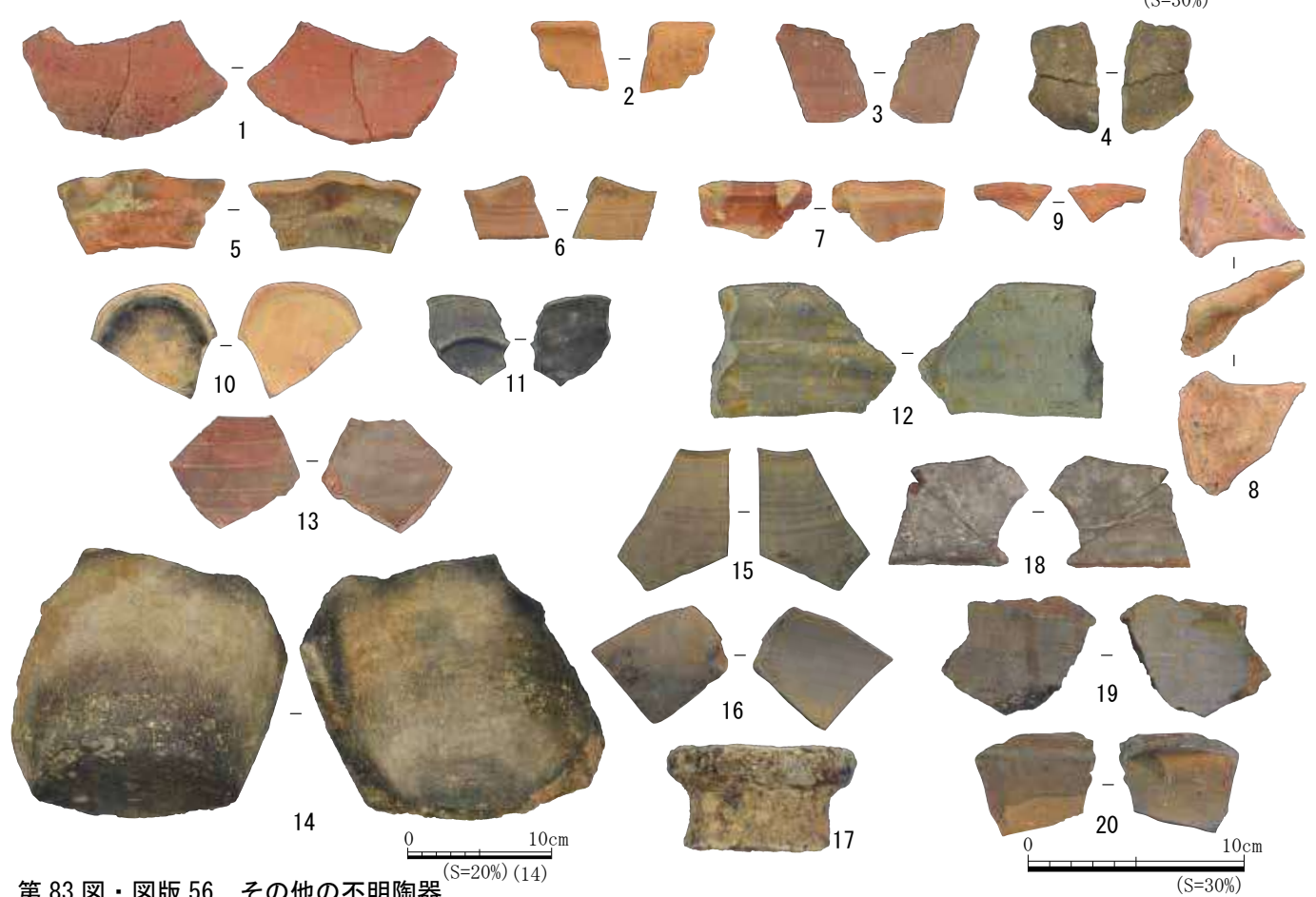
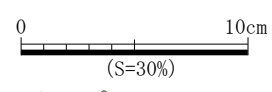
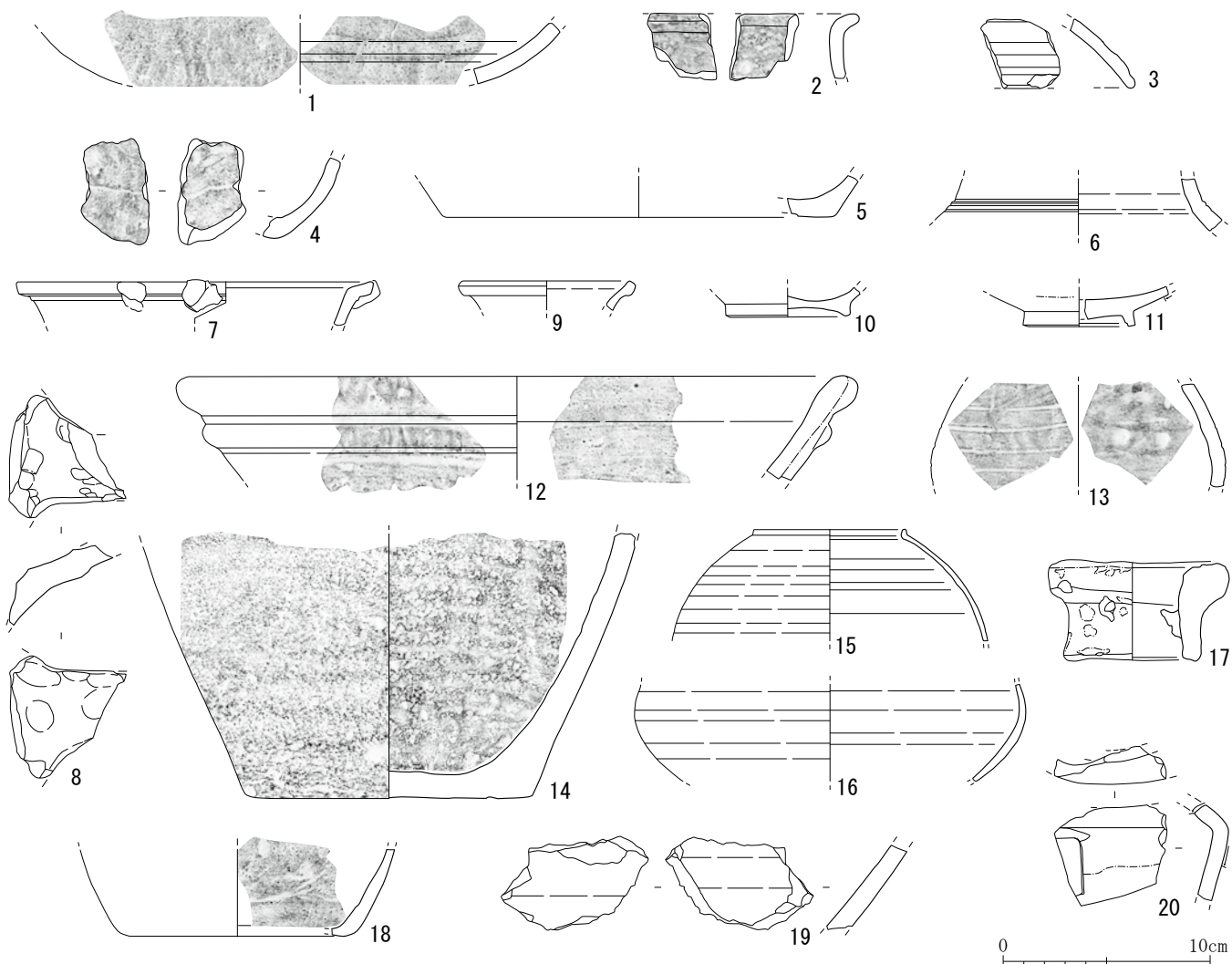
第46表 その他の不明陶器 観察一覧

第83図・図版56	番号	種類	器形	部位	口径 底径 器高	器厚 (mm)	観察事項	器色 / 混和材	器面調整 (外/内)	器質	地区グリッド 層遺構 (取上)台帳番号
第83図・図版56	1	土器系	鍋?	底	—	8	外面:一部黒いのは煤か	濃赤 / 石英 (粗) ○・チャート (粗) ◎	ㄱ / ㄲ	硬	HA③ E9 II S39 台 1915
	2		壺	口	—	5	口縁部:外反	淡赤 / 赤色粒 (中) △・雲母 (細) △	ㄴ / 剥かれ	泥	HA③ C11 II 台 1160
	3		蓋?	口	—	5	図1とよく似る	濃赤 / 石英 (粗) ○・チャート (粗) ◎	ㄲ / ㄴ	硬	HA③ F12 II 台 1398
	4		不明	胴	—	6	内外面ともに指痕残る	淡灰~橙 / 石英 (粗) ○・チャート (粗) ○	ㄴ / ㄴ	硬	HA③ S16 II 台 1514
	5	土師質	鉢	底	—	6	内外面:煤付着	淡桃 / —	ㄴ / ㄲ	泥	HA② F1 II 上瓦屋台 1545
	6		壺	頸	—	8.5	外面:三条の圈線、内面:2条の圈線	外:淡茶・サンド:淡灰 / —	ㄴ / ㄲ	泥	HA② K6 II 三良台 1564
	7	瓦質系	火炉	口	17.2	4	口縁部を折り返し蓋受けを作る。外唇には把手が付いたよう	赤茶 (塗料か?) / —	ㄲ / ㄲ	泥	HA② A1 II 祝殿台 1291
	8		フライパン状製品	柄	—	10	器面は凹凸と指紋の痕が目立つ	淡桃 / 黒色粒 (細) △	ㄴ / ㄴ	泥	HA② H1 II 瓦屋台 1172
	9	陶質系	瓶?	口	—	3	口縁部:外反・肥厚、外唇に煤	橙 / 砂粒 (細) ○	ㄲ / ㄲ	泥	HA② C20 II 祝殿台 1394
	10		袋物	底	—	3	底面に煤付着 中国産の可能性あり	乳白色 / 黒色粒 (中) △・雲母 (細) △	ㄲ / ㄲ	泥	HA② F2 II 名嘉座台 1685
	11	沖無系	皿	底	5.4	4	外面:僅かに施釉痕。喜名焼きか? 17c後半。全体が黒いのは2次的要素	濃灰 / 砂粒 (細) △	ㄲ / ㄲ	硬	HA② T20 II 祝殿台 558
	12		鉢	口	33.0	11	備前模倣 口唇部:丸、貼り付け1条15mm、丸	淡灰 / 茶色粒 (粗) △・砂粒 (細) ○	ㄲ / ㄲ	砂	HA④ D18 II 台 1993
	13		壺	胴	—	6	胴部:沈線文 (1.0cm間隔で4条) 粘土積み痕明瞭	濃赤 / 石英 (中) △	ㄴ / ㄴ	硬	HA③ E11 II 台 1458
	14		底	—	14.0	12	全体が黒いのは2次的要素?	濃灰 / 石英 (中) △	風化により不明	硬	不明
	15		急須	口	7.4	2	焼き締め陶器。内外面:煤付着	濃灰 / 砂粒 (細) △	ㄲ / ㄲ	硬	HA② D4 II 祝殿台 1075
	16		底	—	4	焼き締め陶器。外面:煤付着	濃灰 / 砂粒 (細) △	ㄲ / ㄲ	硬	HA② A4 II 祝殿台 1636	
	17		窯道具	完形	8.7 6.6 4.8	10	重量:224.5g 内外面共に蒸クソ付着	茶 / 砂粒 (細) △	釉飛び及び破損のため不明	砂	HA③ B15 I 攪乱台 1321
	18		褐釉系	壺	底	—	6	器面:粉をふいたように白い	濃茶 / 赤色粒 (中) △	ㄴ / ㄴ	硬
	19	陶器	壺	胴	—	9	器色:須恵器に近い。沖縄産では無い。	濃灰・サンド:赤紫と灰 / 石英 (粗) △	ㄴ / ㄴ	硬	HA④ G13 II SD42 台 3182
	20	本陶系	火炉	胴	—	7	上面三つ葉状か。把手部が剥かれる	赤茶 (釉:鉄釉) / 石英 (粗) △	ㄲ / ㄲ	硬	HA③ F18 II S10 台 2518

混和材凡例 ◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少

## (8) 本土産磁器 (近世)

1616年に有田の泉山磁石場で磁石が発見されて磁器が生産され始めて以来、明治維新までに生産された磁器製品である。HA③207点、HA②179点、HA④41点、HA①1点の計428点出土し、個体数(底部及び同一部位の文様の重なり等から算出)としては350点前後を数えた。17c後半に代表される多数の荒磯文碗や網目文瓶を始めとして、東南アジア輸出用の碗や皿・小瓶、ヨーロッパ輸出用の皿、有田産の段重・瓶等の高級品も数点確認できた。器種別では碗198点、小碗39点、大碗6点、鉢類(八角鉢・蓋付き鉢含む)9点、皿23点、小皿25点、瓶88点、油壺・小杯・蕎麦猪口・段重・蓋等が数点ずつ出土した(第47表)。また、産地別では肥前系が336点を数え、有田29点、波佐見28点、薩摩10点、砥部は1点のみで、生産年代別に見ると17c:69%(肥前系89%・有田5%・波佐見6%)、18c:19%(肥前系76%・有田6%・波佐見13%)、19c:12%(肥前系64%・有田39%)と17cに生産された肥前系の器物が最も多かった。分布図(第84図)から17cの遺物が全面に広がっている様子が見られる。また、18c以降の遺物はHA③やHA②の近代の屋敷跡の範囲に集中するようである。細かく生産年代が同定できた<sup>註1</sup>17cに生産された器物240点について、生産年ごとに個数を集計したところ17c後半に集中した(第87図)。ちょうど肥前磁器の海外輸出時代と重なる。中でも多く得られた碗について見てみると、1660年以降量産された海外輸出向け製品である見込み荒磯文碗が67点と最も多かった(第86図)。また、17cでは荒磯文碗や山水文碗を中心とする中碗や大碗が多く得られているが、18cになると小碗が増え、19cには



第 83 図・図版 56 その他の不明陶器

小碗が中心となる（第 85 図）。18C 後半に国内産の磁器小碗が飲料器（湯や酒）として使用・流通し始め、<sup>えんちや</sup>淹茶（沸かした湯で急須に入れた茶葉を浸してお茶を作る）の広がりと共に茶飲み碗として流通したようである。沖縄にも喫茶の習慣は入ったのではないだろうか。以下、産地ごとに概略し、主なものを第 88～90 図、第 48 表に観察一覧を示す。

#### 〈肥前・肥前系〉（第 88 図 1～33）

肥前及び肥前系の碗が 175 点、皿 16 点、小皿（手塩皿含む）16 点、瓶 77 点、油壺 2 点等が得られた。図 1 は上質の鉄釉染付碗で高台脇を削っている事から、天目型と考えられる。図 2 は唯一出土の青磁碗口縁部である。図 3～10 は染付碗で 3 は高台内に『大明』と想定される銘。4 は見込みに花卉文を描く。5 は網目文碗で魚は掛からないタイプ。6 は量産される以前の荒磯文碗で文様が丁寧に描かれる。7 は量産タイプの荒磯文碗で宝珠の一部が残る。8 は山水文碗で焼成により呉須の発色に違いが見られる。9 は文様が不明瞭な碗底部で 3 と同様に高台が打ち欠かれる。10 は荒磯文碗で内面に金絵を描くようであるが小片のため詳細不明。図 11 は小碗外面に赤絵が残る。図 12～15 は茶飲み碗で 12 は京焼系の小碗に類似した形状。13～15 は腰折れ筒型碗の胴・底部。同タイプだが別個体である。図 16 は染付鉢だが珍しい器形<sup>註1</sup>で平安山原 B 遺跡<sup>註2</sup>からも出土があった。図 17・18 は白磁と思われる小杯だが 17 は小片のため詳細は不明、18 は鳥用の水入れに使用されたようである。図 19～21 は見込みに山水文を描く皿で、19 は高台内に多数の砂粒が付着する。焼成不良。20 は口折れの小皿と思われる。21 は手塩皿で同タイプが 4 枚出土した。セットで販売された可能性がある。図 22～32 は染付瓶である。23 は一対で使用されたと考えられる祭祀用の瓶。24～27 は網目文で 26 以外は鋸歯状に描かれる。24・26 がやや早い時期に生産されている。28 は肥前オリジナルの人物画が描かれるもので高級品<sup>註1</sup>である。図 29～31 は底部で高台の形状に違いが見られる。29 は古手のタイプで 31 は一対で使用された祭祀用である。図 32 は白磁の瓶か壺の底部で焼成温度が低く貫入が多い。図 33 は東南アジア輸出用小瓶の肩部で国内流通用の油壺が変形したものである。今回これとは別に国内流通用の油壺の肩部も出土したが小片のため報告は割愛した。

#### 〈薩摩・薩摩もしくは肥前系〉（第 88 図 34・第 89 図 35～38）

薩摩産の小碗 8 点、茶飲み用小碗 2 点、薩摩もしくは肥前系と考えられる碗類が 3 点確認できた。いずれも肥前産に比べると呉須の発色は鈍い。図 34・35 は碗で 34 は腰部に崩れた梵字文が描かれ、35 は見込みに花卉文が描かれる。当遺跡では草花文・花卉文碗の高台が打ち欠かれていることが多いようである。図 36～38 は小碗で 37 は良品、38 は焼成不良のため貫入が粗い。

#### 〈砥部・砥部もしくは肥前系〉（第 86 図 39～43）

砥部産の茶飲み用小碗が 1 点、砥部もしくは肥前系と考えられる碗 1 点、茶飲み用小碗 1 点、皿 3 点が出土した。図 43 は砥部産の茶飲み用小碗である。図 39～42 は砥部もしくは肥前系と考えられる碗・皿・小碗で、39 は碗の底部で見込みに文様が見られる。40 は皿で見込みに牡丹を描くが筆遣いが肥前のものとは違う<sup>註1</sup>。41 は皿か鉢と考えられる口縁部で筆遣いが独特であり質の落ちた呉須が使用される。42 は 43 とほぼ同種と考えられる茶飲み用の小碗で施釉が均一でなく所々に釉溜まりや無釉箇所が見られる。

#### 〈有田〉（第 89 図 44～61・第 90 図 62）

有田産の碗、小碗（湯飲み・茶飲み用含む）、小杯、皿類、段重ね、そば猪口、瓶等 29 点が得られた。図 44・46 は見込み荒磯文碗で 46 は高台が打ち欠かれる。図 45 は外面に土坡と牡丹のつぼみが描かれる碗で東南アジア輸用<sup>註1</sup>である。図 47 は湯飲み用小碗で呉須の発色も良く高級品である。図 48 は器面に僅かにピンホールが見られる小碗。図 49 は色絵の湯飲み用小碗であるが色絵部分は剥落している。図 50 は小型の広東碗を呈するが高台内に兜巾状の高まりが見られる。図 51 は茶飲み用小碗で釉薬が熔けていないため呉須以外は桃色に発色している。図 52 は湯飲み用小碗で外面には回転擦痕が顕著に残る。図 53 は景德鎮模倣の小杯である。図 54～56 は皿である。54 はヨーロッパ輸出品、55 は八角鉢が登場する直前に生産されたタイプ、56 は手塩皿である。図 57 は鉢、図 58 は高台の削りが非常に浅い蕎麦猪口である。図 59 は鉢か段重ねの蓋と考えられる。図 60 は図 55 と筆跡の似る段重ねでそのサイズから化粧道具入れの可能性が高い<sup>註1</sup>。図 61 は色絵の瓶で若松の入った吉祥文が描かれる。2 個体確認できた。若松は 17C 後半より描かれる。同タイプが鹿児島県瀬戸内町加計呂麻島在西家に伝承されている<sup>註3</sup>。図 62 は高台の高い瓶である。

#### 〈波佐見・波佐見もしくは有田〉（第 90 図 63～66）

波佐見産の碗類 15 点、小皿 7 点、瓶 6 点が得られた。図 63 は波佐見か有田と考えられる中皿で三カ所に脚が付いていたようであるが、破損し付け根のごく一部のみ残る。龍泉窯風にするため蛇の目凹高台に鉄泥を塗布するが一部にチャツ（窯詰めに用いる小皿状の焼台）の熔着痕が残る。図 64 はいわゆる「くらわんか碗」で見込みに重ね焼きによる熔着痕が見られる。図 65 はやや大振りの碗で外面に器面調整痕が残る。図 66 は二重格子文の皿で呉須の鉄分が多いタイプも確認できた。

#### 〈嬉野〉（第 90 図 67）

嬉野産は 1 点のみの出土である。図 67 は瓶で質はあまりよくない。

註 1：大橋先生よりご教示頂いた 註 2：北谷町教育委員会 2015 P264 第 119 図 -1 註 3：渡辺芳郎他『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』2015 図版 57-33 参考資料：『世界に輸出された肥前磁器』九州近世陶磁学会 2010



第48表-1 本土産磁器（近世）観察一覧

第図版	番号	産地	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器形 (用途等)	文様	釉色 (範囲) / 呉須発色	器面	成形	素地・締	生産年代	地区グリッド層遺構台帳番号		
第88図・図版57	1		鉄釉染付	底	-	4.8	-	天目型	内面：ハート型如意頭文・見込：草花文	外面：鉄釉(口～高台脇)内面：淡青白 / 青	内外面：ナゲ消し	白	白	1630～40	HB③ C13 II台 3211			
	2		青磁	口	11.4	-	-	直口(口唇：舌状)肥前?	不明	内外面：淡緑色・貫入一部釉が熔けず白く残る	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し			1650～60	HB③ R18-20 II台 1632			
	3		染付	碗	底	-	-	-	高台が打ち欠かれる	内面：花卉文・圏線銘：明?(大明)	黄味がかった淡青白 / 青	外面：ピンホール	灰	灰	1650～70	HB② M9 III台 910		
	4				底	-	4.8	-	脇より高台内が深く高台高い	高台脇：圏線見込み：花卉文	淡青灰(豊付け部無釉) / 青	内外面：ピンホール			1655～70	HB③ A12 II台 2873 HB② H4 II台 1144		
	5				口	9.2	-	-	直口(口唇：舌状)肥前系	外面：網目文網に魚は掛からない	淡青灰 / 青黒	内外面：ナゲ消し	白	白	1655～70	HB② G1 II台 1047		
	6				底	14.0	5.4	6.8	高台中：狭口唇：舌状	外面：雲龍内面：宝珠(荒磯文)	黄味を帯びる(総釉) / 青黒	内外面：ナゲ消し			灰	灰	17C後	HB② E5 SK1 III台 2302 HB② G1 II台 1732
	7				胴	-	-	-	-	外面：宝珠(荒磯文)	外面：淡黄灰 / 青内面：淡青白	内外面：ナゲ消し	白	白			17C後	HB③ R18-20 II台 1605
	8				口	15.0	-	-	直口唇：舌状	内面：魚文外面：山水文	淡青灰 / 濃淡のある青(発色に違い)	内外面：若干のピンホール			灰	灰	17C後	HB④ O5 II台 2818
	9				底	-	5.0	-	高台が打ち欠かれる	見込み：草花文生掛けのためムラあり	淡灰(総釉) / 青黒	内外面：ナゲ消し	白	白			18C頃	HB③ A11 II台 2305
	10				染付色絵	胴	-	-	-	荒磯文碗肥前系	外面：荒磯文(呉須)内面：草花?(金絵具)	淡黄灰 / 青			内外面：ナゲ消し	白	白	18C後
	11				色絵	底	-	3.2	-	-	赤絵	詳細不明	内外面：ナゲ消し	白	白			1770～1810
	12		染付	小碗	底	-	3.4	-	京焼系小碗に似せる(茶飲み)肥前系	矢羽根	淡青白(豊付け無釉) / 濃青	内外面：貫入	白			白	18C前	HB④ A2 II上台 1790
	13				口	7.5	-	-	筒型(茶飲み)3点別個体口唇：四角状	内唇：四摺帯外面：草花	淡青白 / 青	内外面：ナゲ消し		白	白		1630～50	HB③ A13 II台 2489
	14				口	7.8	-	-	筒型(茶飲み)3点別個体口唇：四角状	内唇：四摺帯外面：草花(梅花)	淡青白 / 青	内外面：ナゲ消し	白			白	1650～60	HB② J6 II台 1694
	15				底	-	4.0	-	筒型(茶飲み)3点別個体口唇：四角状	内唇：四摺帯外面：草花	淡青白(総釉) / 青熔着物付着	内外面：ナゲ消し		白	白		1660～80	HB② T20 II台 550
	16		肥前	鉢	口	17	-	-	直口唇：舌状	外面：鳳凰・宝文内面：蔓草	淡青白 / 青	内外面：ナゲ消し	白			白	1650～70	HB③ C9 II台 1770
	17		白磁?	小杯	口	5.0	-	-	端反口唇：舌状	文様のある可能性あり	淡青白	内外面：ナゲ消し		白	白		1660～80	HB③ F12 II台 1398
	18		染付	皿	口	5.4	3.2	2.3	内湾(口唇：舌状)(烏用の水入れ)肥前系	見込みに呉須の飛びが見られる	透明釉 / 青 / 底部無釉	外面：線状痕	白			白	1660～80	HB② T20 II台 550
	19				底	-	-	4.5	小皿	内面：山水	焼成不良、豊付け無釉(高台内に砂粒の付着)	ナゲ削り痕残る		内外面：ナゲ消し	白		白	1650～70
	20				口	14.2	-	-	口折れ口唇：舌状	内面：山水?	淡青白 / 青外面：貫入	内外面：ナゲ消し	白	白		1660～80		HB② T20 II台 550
	21				口	10.4	6.2	2.6	輪花(手塩皿)口唇：四角状肥前系	内面：山水	淡青白(豊付け無釉) / 青	内外面：ナゲ消し			白	白	1650～70	HB③ A12 II台 1644
	22				白磁	口	4.6	-	-	外反	小片のため詳細不明	淡薄緑	内外面：ナゲ消し	白			白	1650～70
	23				染付	瓶	頸	-	-	-	平底対で祭祀用	外面：吊り松葉	淡黄白(内面無釉) / 青黒		外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し	白		白
	24						頸	-	-	-	高台有り	外面：鋸歯状の網目文	淡青白(内面無釉) / 青	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し	白		白	
	25						胴	-	-	-	胴部で緩やかに丸みを持つ	外面：鋸歯状の網目文(頸部は簡略化)	淡灰白 / 青黒	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し		白		白
	26						胴	-	-	-	胴部で緩やかに丸みを持つ	網目文	淡灰白(内面無釉) / 青黒	外面：ナゲ消し・ピンホール / 内面：ナゲ消し	白		白	
	27						胴	-	-	-	胴部で緩やかに丸みを持つ	外面：鋸歯状の網目文	淡灰白(内面無釉) / 青	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し		白		白
	28		底	-			-	-	有田オリジナル(高級品)	人物画(瓢箪を担ぐ)	淡青白(内面無釉) / 明瞭	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し	白	白	1660～80		HB③ A12 II台 1644	
	29		底	-			5.4	-	高台有り(古いタイプ)	不明	淡青白(豊付け無釉) / 不明瞭	外面：ナゲ消し・ピンホール / 内面：ナゲ消し			白	白	1660～80	HB③ A13 II台 2489
	30		底	-			5.2	-	高台有り	外面：鋸歯状の網目文	淡青白(内面・豊付け無釉) / 青	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し	白	白			1660～80	HB③ R19 II台 1588
	31		底	-			5.8	-	高台有り / 対で祭祀用	胴部：草花腰部：鋸歯状の蓮弁	淡灰白(内面・豊付け無釉) / 青	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し			白	白	1660～80	HB② B2 I台 2536
	32		白磁 or 壺	底			6.0	-	-	高台有り	不明	淡薄緑(内面・豊付け無釉)	外面：貫入	白			白	1660～80
	33		染付	肩	-	-	-	丈が低く横に広がる	外面：鋸歯状の蓮弁文	淡灰白(内面無釉) / 青	外面：ナゲ消し内面：ナゲ消し	白	白		1660～80	HB② I7 II台 1850		
	34		染付	碗	腰	-	-	-	小片のため詳細不明	外面：梵字くずれ見込み：圏線	淡青白 / 青黒			内外面：ナゲ消し	白	白	1660～80	HB② C19 II台 1644
	35				底	-	3.8	-	高台が打ち欠かれる	見込み：花卉文?腰部：蓮弁	淡青白(豊付け無釉) / 青	内外面：ナゲ消し	白	白			1660～80	HB② C6 II台 2322

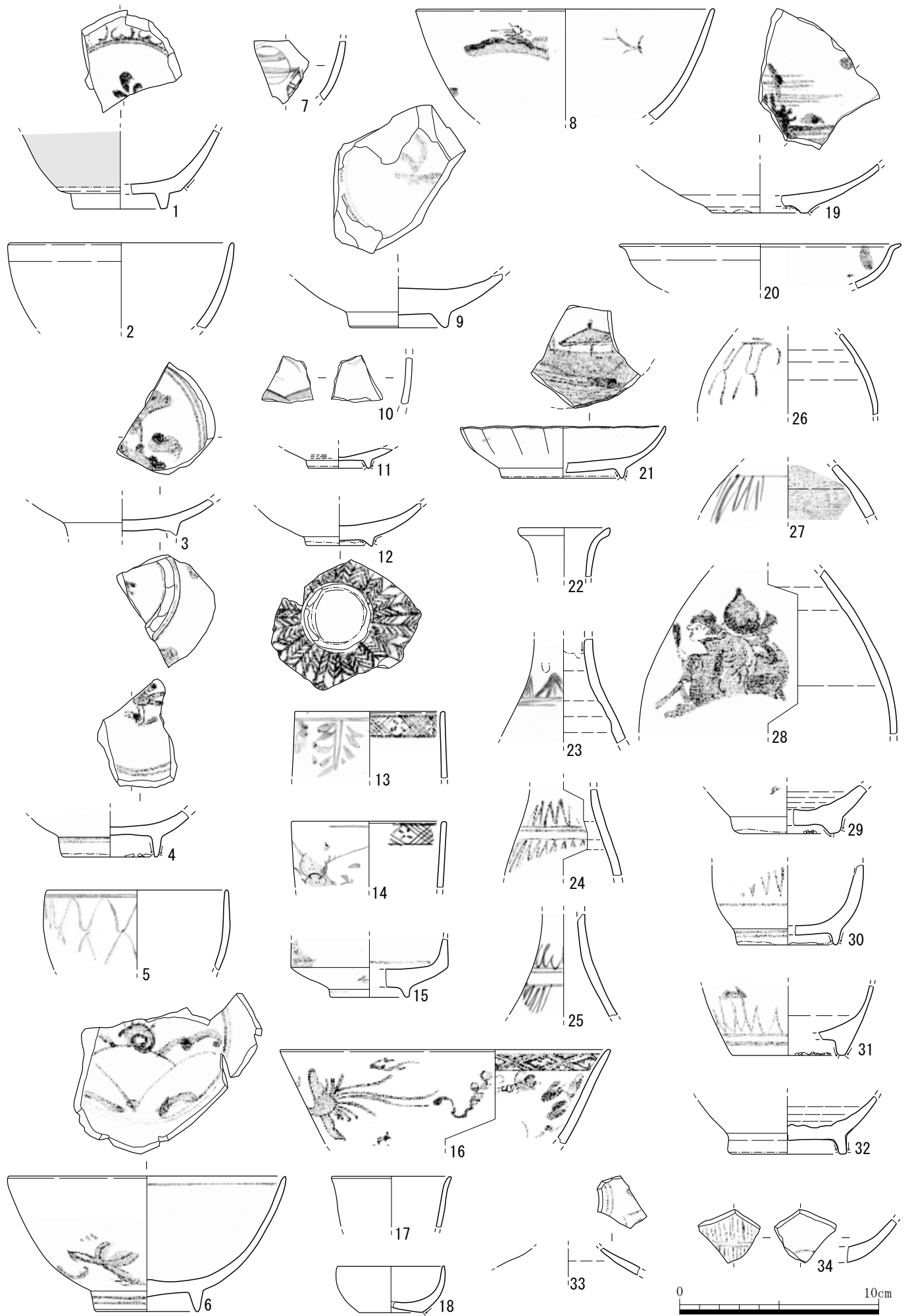
第88図・図版57

第89図・図版58

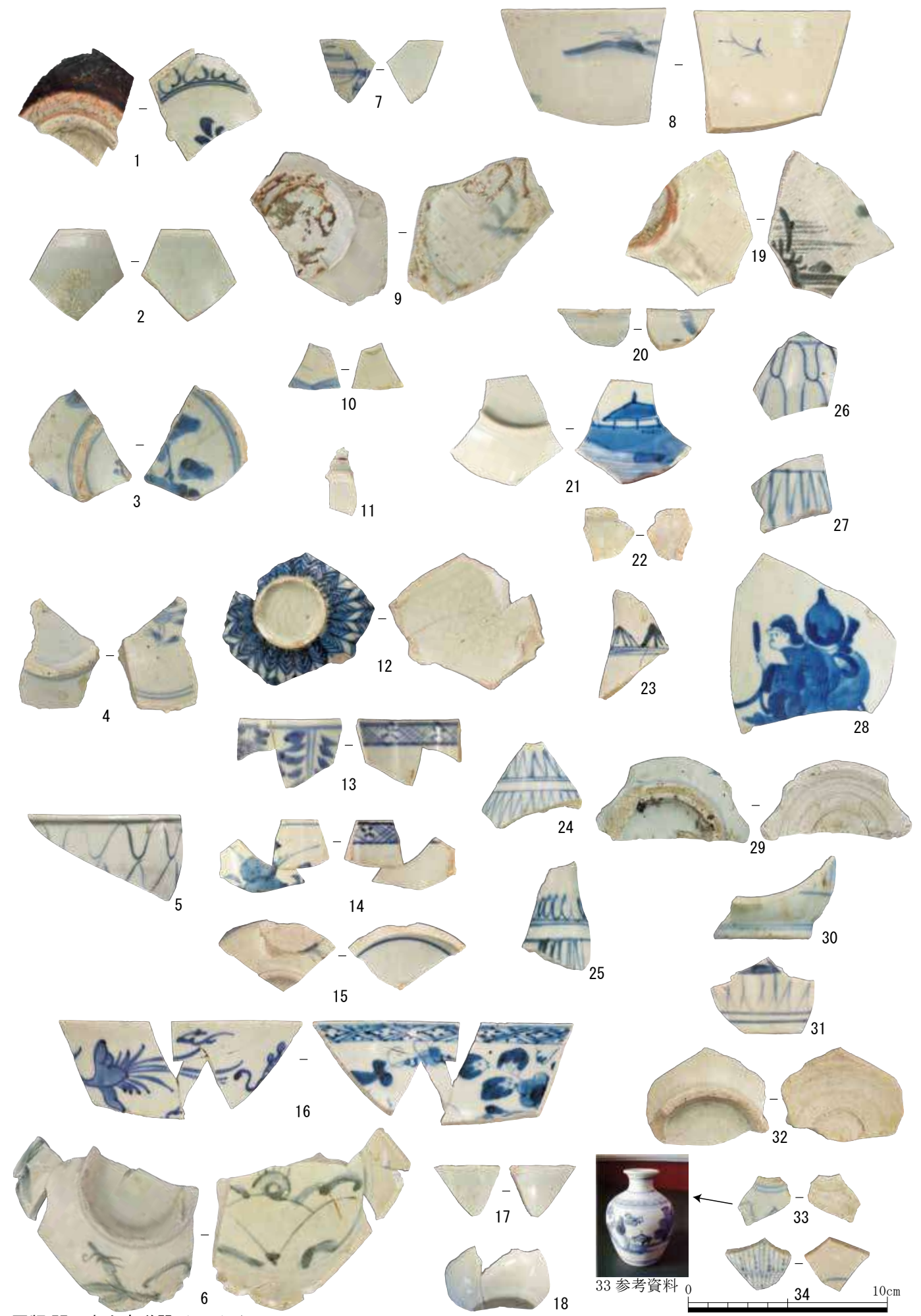
第三章 5

第48表-2 本土産磁器（近世）観察一覧

第図版	番号	産地	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器形 (用途等)	文様	釉色 (範圍) / 呉須発色	器面	成形	素地・縮	生産年代	地区グリッド層遺構台帳番号
第89図・図版58	36	薩摩	染付	小碗	口	8.2	—	—	やや外反口唇：舌状	外面：花唐草	淡青白 / 青 内外面：貫入	内外面：ナゲ消し	ロケ口	白 緻密	1820 ～60	HB ② T5 II 台 2591
	37				口	9.2	—	—	やや外反口唇：舌状	外面：花唐草	淡青白 / 青 内外面：貫入	内外面：ナゲ消し			1820 ～60	HB ② A8 II 台 1866
	38				口	8.6	3.8	4.8	外反（口唇：舌状） 薩摩？	不明	淡青白（畳付け無釉） / 青 内外面：貫入	内外面：ナゲ消し			1820 ～60	HB ③ T15 II 台 2479
	39	肥前系or低部	染付	碗	底	—	3.8	—	底部のため詳細不明	植物・板塀	淡青白（畳付け無釉） / 青 （呉須溜まり） 内外面：貫入	外面：ナゲ消し	型	白 細	1775～ 19C前	HB ② J6 II 台 1698
	40				皿	底	—	8.6	—	輪花 口唇：四角状	外面：不明・圏線 内面：牡丹	淡青白（蛇の目凹高台 無釉） / 青黒・筆遣い か肥前の物とは違う			内外面：貫入	HB ② K6 II 台 1569
	41				口	—	—	—	方形（鉢の可能性も） 口唇：四角状	内面：亀甲文に花（唐 草）・外面：唐草	淡青白 / 青黒（質の落ち た呉須）・筆遣いが独特	内外面：ナゲ消し			19C初 ～幕末	HB ② B7 II 台 628
	42				小碗	口	6.8	—	—	やや内湾 口唇：舌状 （茶飲み）	胴部：松 腰部：蓮弁	淡青白 / 青 施釉にムラ（釉溜まり や無釉）			内外面にピンホール	HB ② B4 II 台 1205
	43	低部	染付	小碗	底	—	3.2	—	腰丸 （茶飲み）	外面：松・蓮弁	淡青白（畳付け無釉） / 青 施釉にムラ（釉溜まり や無釉）・高台内に熔着 痕あり	内外面にピンホール	1820 ～幕末	HB ③ E9 II S39 台 1057		
	44	有田	染付	碗	底	—	5.4	—	荒磯文碗 有田？	外面：不明 見込み：荒磯文	淡青白（畳付け無釉） / 青 高台脇に一部無釉箇所	内外面：ナゲ消し ピンホール	1650 ～70	HB ③ B13 II 台 2822		
	45				碗	底	—	6.2	—	東南アジア輸出用	外面：土坡・ 牡丹（つぼみ）	淡青灰 / 青 / 総釉 畳付けに熔着物	内外面：ナゲ消し	1655 ～70	HB ③ T19 II 台 4296	
46	底					—	—	—	高台が打ち欠かれ る	見込み：荒磯文	淡青白 / 青 / 総釉	内外面：ナゲ消し	1660 ～80	HB ③ E16 II 台 1756		
47	染付				小碗	口	11.2	6.0	—	筒型（湯飲み） 口唇：舌状 高級品	外面：草花（桔梗（秋草））	淡青白（畳付けのみ無 釉） / 青	内外面：ナゲ消し・ 若干のピンホール	1650 ～70	HB ③ S20 II 台 1030	
48						口	9.2	—	—	内湾 口唇：舌状	外面：唐草 内唇：見込み：圏線	淡青白（内外面：貫入） / 青（圏線は文様に比 べて薄）	内外面：ナゲ消し・ 僅かにピンホール	1650 ～80	HB ② G1SK4 III 台 2078	
49	染付色絵				小碗	口	—	—	—	筒型 （湯飲み） 口唇：舌状	口唇帯：四方襷 外面：色絵で草花	淡青白 / 呉須・青・色絵 剥落	内外面：ナゲ消し	18C後	HB ② E20 II 上 台 708	
50						底	—	—	—	小広東 やや兜巾	外面：梵字・高台脇に圏線・ 見込：寿字、圏線	淡青白 / 青	内外面：ナゲ消し	1770～ 1810	HB ③ E11 II 台 3170	
51	色絵				小碗	底	—	2.6	—	腰丸 （茶飲み）	腰部：蓮弁	色絵釉と透明釉が溶けて いない（畳付け無釉） / 青	内外面：ナゲ消し	19C 前半	HB ③ A11 台 1740	
52						口	7.6	4.8	5.1	筒型 （湯飲み） 口唇：舌状	外面：竹林・人物（七賢人） / 口唇帯：癖の強い雷文	淡青白（畳付け無釉） / 青	外面：回転擦痕	1840～ 1860	HB ③ E9 II 台 1358	
53	有田				染付	小杯	底	—	1.8	—	腰無し （景德鎮モデル）	外面：鋸歯状蓮弁文 高台内に「大明」	淡青白（畳付け無釉） / 青	内外面：ナゲ消し	1650 ～60	HB ② G3 III SK3 台 2074
54		胴	—	—			—	ヨーロッパ輸出用 / 上質	内面：宝文・花卉文 外面：芙蓉手	淡青白 / 青	内外面：ナゲ消し	1660 ～70	HB ③ T10 II 台 2508			
55	染付	皿	底	—	8.4	—	深皿	内面：梅木（鶯？）	淡青白（畳付け無釉） / 青	八角鉢の直前	1775	HB ② T4 II 台 365+HB ④ J6-L6 I 台 2528				
56			口	7.4	4.6	1.6	輪花（手塩皿） 口唇：四角状	内面：山水 口鏽	淡青白（畳付け無釉） / 青	内外面：ナゲ消し	18C末～ 19C前	HB ② B2 I 台 2536				
57	染付	鉢	口	16.8	7.8	—	八角鉢 口唇：四角状	外面：竹林 内面：区画文	淡青白（畳付け無釉） / 青	内外面：ナゲ消し	19C前	HB ③ E9 II 台 1313				
58			猪口	底	—	5.6	—	高台：極浅い削り （そば猪口）	胴部：樹木（松竹梅？） 腰部：柴垣	淡青白（畳付け無釉） / 青	内外面：ナゲ消し	18C後	HB ③ F11 II 台 959			
59	染付	蓋	底	—	—	—	丸型（鉢か段重ね の蓋） かかりあり	氷裂文・梅花	白（合わせ部には泥漿 状のアルミナ砂を塗布） / 青	外面：ナゲ消し 内面：叩痕	19C前	HB ③ F8 II 台 926				
60			段重	身	9.2	6.4	3.8	丸型 口唇：四角状 口唇：極浅い	外面：窓絵に梅木など	淡青白 / 青黒→焼成良好 重ね用の削りに砂粒付着	内外面：ナゲ消し・ 僅かにピンホール	19C初 ～幕末	HB ② B19 II 台 2422			
61	色絵	瓶	頸	—	6.2	—	玉壺春型の変形 （対て祭祀用）	吉祥文（若松・竹・梅・ 鶴）・土坡	焼成良好だが色絵は剥げ 落ちている / 畳付け無釉	外面：線状痕	18C後	HB ② D2 II 台 1373				
62			底	—	5.8	—	高台有り	外面：蓮弁・窓絵（色絵）	淡黄白（内面及び畳付 け無釉） / 青黒	外面：ナゲ消し・ピ ンホール / 内面：叩痕	18C末～ 19C前	HB ③ G11 II 台 2857				
63	有or波	青磁染付	中皿	底	—	—	—	三足 （龍泉窯風 / 高級 品）	内面：呉須にて圏線が 巡る	青緑・貫入 / 薄青 蛇の目凹高台：鉄泥塗布 チャツの熔着痕	内外面：ナゲ消し	1660 ～80	HB ② B1 II 台 1923			
64				波佐見	染付	碗	口	10.8	—	—	くらわんか碗 直口（口唇：舌状）	外面：丸文（コニヤコ印判）・ 内唇帯と見込み：圏線	淡青灰 / 青黒 重ね焼きによる 熔着痕	外面：ナゲ消し	18C後	HB ② D3 II 台 1082
65	胴	—	—				—	やや大振りの碗	外面：土坡・竹？	淡青白（蛇の目釉剥ぎ） / 青	外面：ナゲ消し	HB ② B20 II 台 839				
66	嬬野	染付	瓶	口	12.0	—	—	小皿 口唇：舌状	内面：二重斜格子文	淡青灰 / やや鈍	外面：叩痕 内面：ナゲ消し	18C後	HB ③ DE15 II 台 875			
67				胴	—	—	—	（質はあまりよく ない）	外面：圏線・山水	淡灰（内面無釉） / 青 黒	外面：ナゲ消し 内面：叩痕	17C後	HB ② G1 II 台 1041			

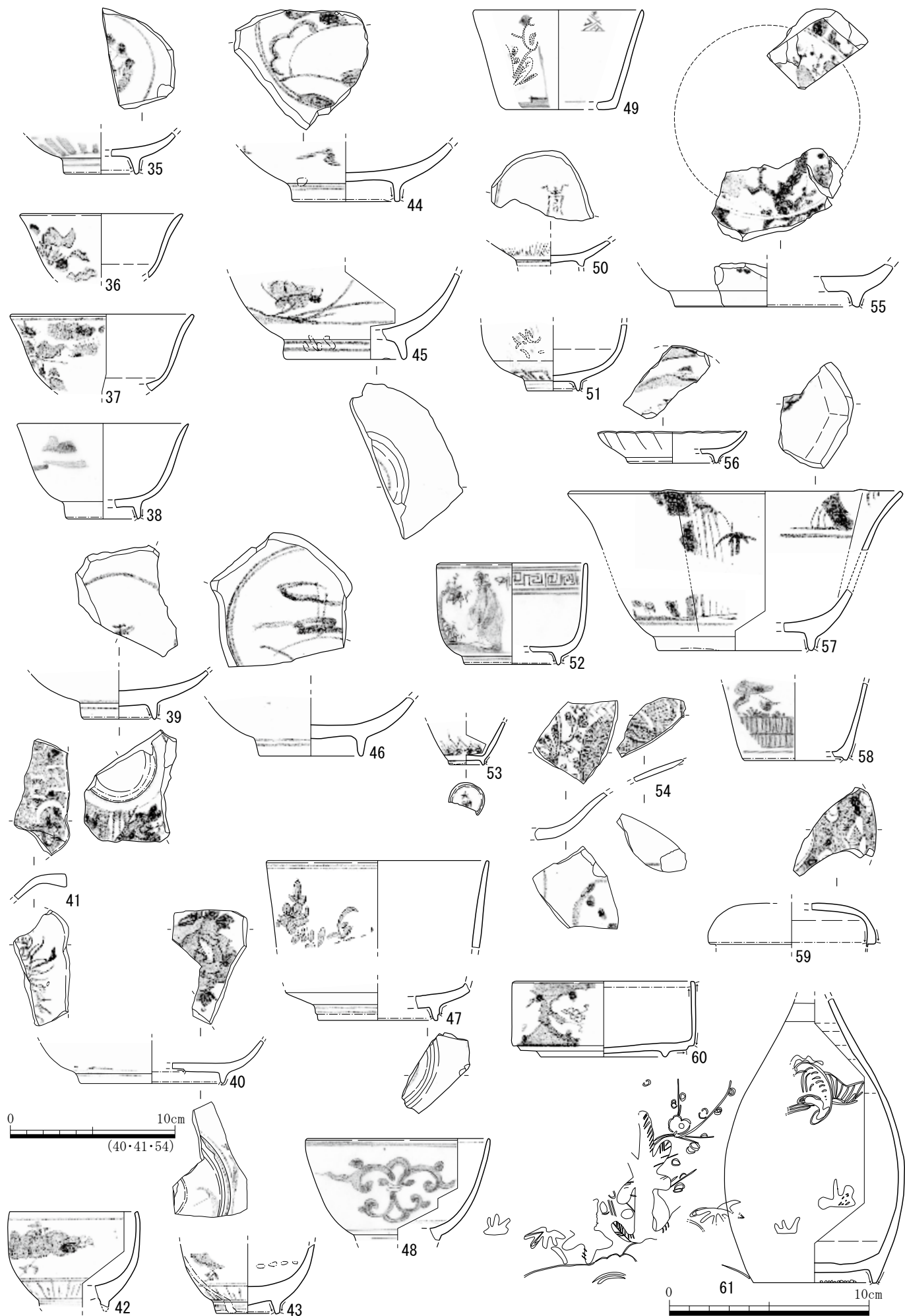


第 88 图 本土産磁器 (近世) 1



图版 57 本土産磁器 (近世) 1

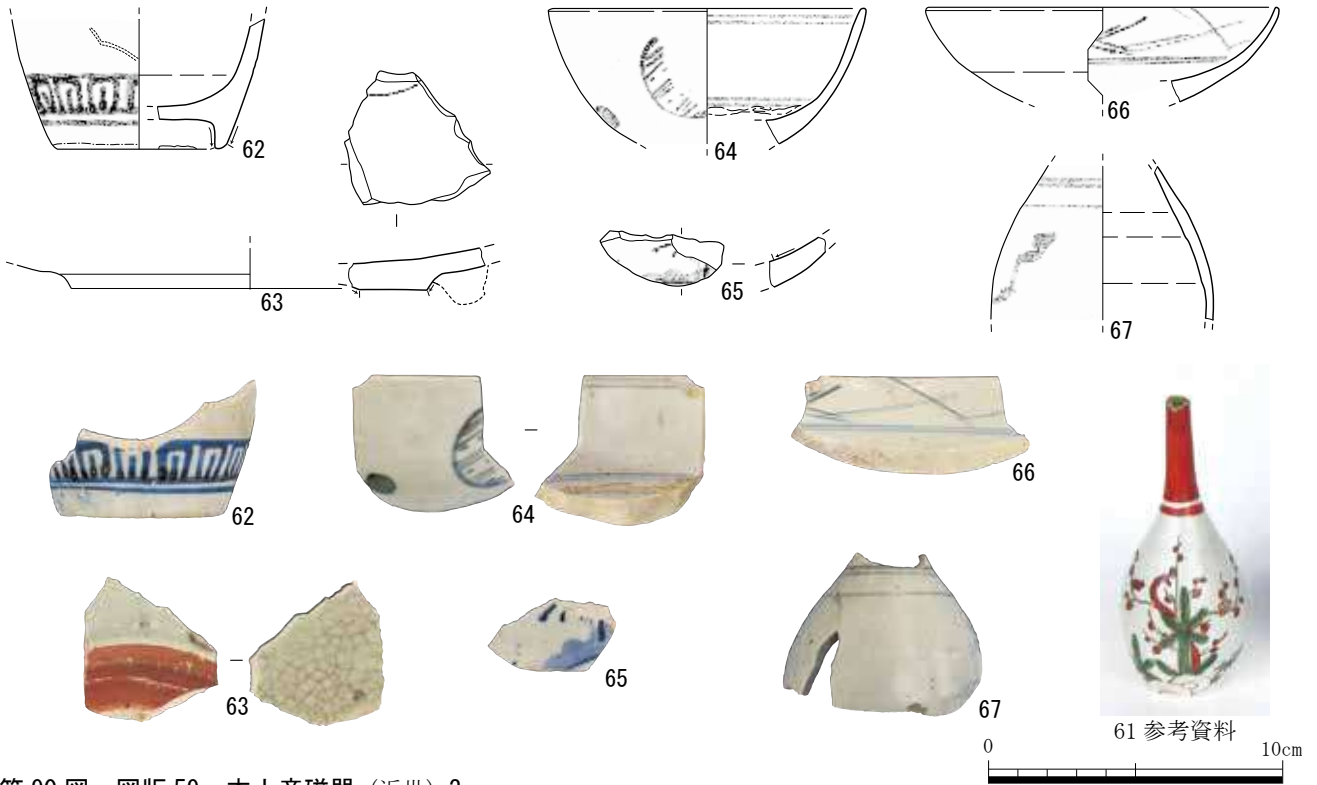




第 89 图 本土産磁器 (近世) 2



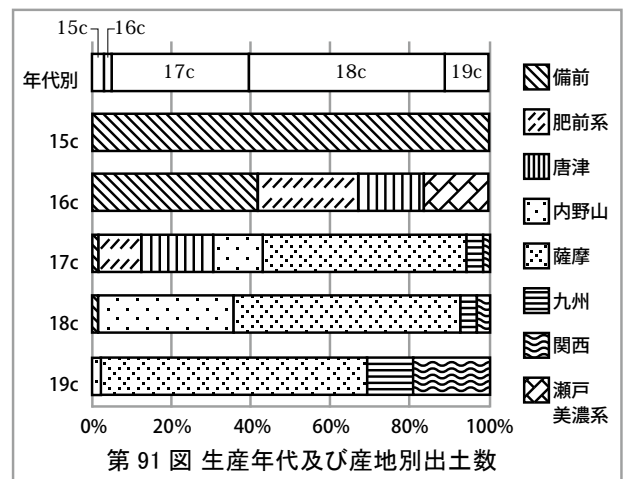
图版 58 本土産磁器 (近世) 2



第 90 図・図版 59 本土産磁器 (近世) 3

### (9) 本土産陶器 (近世)

HA ③ 229 点、HA ② 338 点、HA ④ 53 点の計 620 点が出土した (第 50 表)。11C 頃に生産された須恵器の流れを汲む九州産陶器から 15・16C 代の備前産播鉢、16C 末の肥前産陶器、武雄 (佐賀県) 周辺で生産された東南アジア向け輸出用の大皿、薩摩産の日用雑器や貯蔵容器、19C 以降に信楽で生産された茶壺まで多種にわたって確認できた。建水・茶入・茶壺などの茶道具類や天目型碗及び沖縄産の風炉 (第 63 図 199・200) の出土から、当地に住む人々の中に茶道の嗜があった者が居たと想定される。大まかに日用雑器と貯蔵容器に分けると前者は 333 点、後者は 288 点と日用雑器が貯蔵容器の 1.2 倍程の出土量であった。器種別では碗 138 点、小碗 11 点、皿類 70 点、播鉢 22 点、土瓶 44 点、瓶 14 点、壺・甕類 234 点、小型の壺・甕類 11 点、その他鉢、鍋、茶入、火炉、急須、蓋、香炉等が数点ずつ確認できた。また、産地別では薩摩が 314 点で一番多く、内野山 130 点、唐津 41 点、九州 (福岡含) 37 点、肥前・肥前系 30 点、備前系 27 点、関西系 10 点、信楽 10 点、瀬戸美濃系 (志野含) 6 点で、九州とそれ以外に分けると、前者が 96% を占めた。生産年代別に見ると 15C:3% (備前 100%)、16C:2% (備前 42%・肥前 42%)、17C:35% (肥前 30%・内野山 13%・薩摩 53%)、18C:49% (肥前 1%・内野山 33%・薩摩 55%)、19C:11% (薩摩 66%・関西 19%) と 17C～18C に生産された肥前・内野山の碗・皿や薩摩の壺・甕が多く得られた。分布図 (第 92 図) から地区ごとに出土傾向を見てみると、HA ③では全域で 17～18C の遺物が数点ずつ得られるが、15C の備前産は中央～西側で出土する。年代が新しい遺物ほど南側に多くなり、関西系は中央～南側の出土であった。HA ②でも全域に広がるが特に西側に多く G20・1 (後の瓦屋又吉小) や J3・4 (後の味子 1) K6・7 (後の刈子) でまとまった数が得られた。特に年代に偏りは無かったが、関西系は南側 (後の照屋先生や三良又吉) からのみの出土であった。HA ④は備前産が一番多く出土した地区で、17C までの遺物と共に島に関係する溝と考えられる遺構 (SD41) 周辺に広がっていた。また、白薩摩も HA ④から一番多く出土しているが、17C に生産された 2 点が別々ではあるが溝と考えられる遺構から出土している事以外に関連性はつかめなかった。以下、産地ごとに概略し、主なものを第 93～95 図、第 49 表に観察一覧を示す。



### 〈備前産〉(第93図1～3)

15・16C代に生産された播鉢が19点出土。櫛目が確認できたものは少なかった。HA④では15Cに生産された播鉢のみHA③②では15～16Cの播鉢が得られた。図1は図示した図2・3よりも若干古手で、唯一器高が窺える資料である。2は同時期に生産された播鉢片が3点確認できた。なお、今回茶入の頸部が出土しているが、小片のため図化は控えた。

### 〈肥前・肥前系〉(第93図4～14)

肥前・肥前系の碗11点、小碗1点、皿6点、壺5点の他に播鉢、小鉢、土瓶、瓶、火炉が1点ずつ得られた。全体的に数は少ない(肥前・肥前系磁器は336点)が、生産年代としては17C代が76%を占める。図4は茶道具として使用される建水けんすいの口縁部で口唇部に鉄釉を掛けて皮鯨かわくじらにしている可能性がある。図5は鉄釉碗で高台脇の削り出しは緩やかである。図6～8は天目型の碗で、低い高台や二段作りの口縁部を持つが6と7では高台の形状に違いが見られる。今回は他に唐津産(1点)瀬戸美濃産(2点)、南九州産の完形品2点を含め計7点が確認できた。図9は鍔縁皿で口唇部に熔着痕が残る。伏せ焼きにしたものと考えられる。図10は播鉢でほぼ隙間無く櫛目が入る。図11は瓶でつけ掛けを行った様子のわかる資料である。未焼成部分が多く、鉄釉の熔着もあり良品ではないが沖縄での肥前産瓶の出土は非常に珍しい<sup>註</sup>とのことであった。図12は鉄釉と鉄泥の二彩手の壺である。鉄泥部に鉄釉の垂れが見られる。図13・14は内面轆轤痕が顕著な瓶と小碗である。14は器形からは瓶のようであるが高台の形状(呉器手)と内面に鉄釉が掛かる事から小碗とも考えられる。類似資料の増加を待ちたい。

### 〈唐津産〉(第93図15～27)

唐津産の碗が7点、皿(サイズ不明)17点、大皿10点、小碗、播鉢、土瓶、瓶が数点得られた。生産年代としては17C代が86%を占める。図15・16は碗で前者には鉄釉、後者には透明釉が掛けられる。図17は刷毛目の小碗で見込みは平坦である。図18～23は鉄絵皿である。18は高台の削りが整然とし、19は見込みに胎土積みの痕が残る。20は土見せ部の削りが顕著であるが一段のみで碗の可能性もある。21は砂目痕が顕著に残り、底面は三日月高台。22も砂目痕が顕著である。外面は施釉部と無釉部があり、鍔縁裏には釉薬が白く熔け残る。23は見込みと畳付けに砂目痕、高台内には兜巾ちりめんじわと縮緬皺が見られる。図24・25は大皿で24は鉄絵後釉を掛けるが焼成不良で白い。25は刷毛目文と一部緑釉(銅緑釉)で絵付けされる。見込みに砂目痕が顕著である。図26・27は藁灰釉の瓶で平底面に糸切り痕と粉殻痕が残る。26は鉄絵が描かれたようである。底部脇にはつけ掛けの際付いたと考えられる指の痕が見え、その位置から左手を使用したようである。27の内部の器面調整は粗い。

### 〈内野山産・武雄周辺〉(第94図28～39)

内野山産の碗が102点、皿19点、小皿8点が得られた。生産年代は18Cが74%を占めるが、内外面に銅緑釉を掛け、畳付けを幅広に作る古手の碗も確認できた。図28～31は碗で銅緑釉と透明釉を掛け分けるが高台に違いが見られる。他にも銅緑釉・鉄釉・透明釉・灰釉・黄釉で掛け分けた碗が多数出土しており、外面に銅緑釉、内面に透明釉を掛けた碗が一番多かった(第51表)。中でも3点出土した鉄釉を両面掛けた碗は珍しい<sup>註</sup>とのことであった。図32は端反りを強調した小碗である。図33～39は皿で34・35は見込みに蛇の目釉剥ぎと砂目痕が残る。36・37は小皿で胴下半部に削りが見られる。38・39は武雄周辺で生産された刷毛目文の中・大皿でいずれも東南アジア向け輸出品である。

### 〈薩摩産〉(第94図40～56・第95図57～66)

薩摩産は白土に透明釉を掛けた(白薩摩)小物類と黒釉・褐釉を掛けた(黒薩摩)貯蔵容器等とに分けられる。今回は白薩摩の小碗7点、皿、土瓶、瓶、袋物が1～2点ずつ、黒薩摩の土瓶39点、壺甕類219点、碗、播鉢、鉢、茶入、鍋、瓶等の袋物、香炉、蓋が数点ずつ得られた。図40～45は白薩摩と呼ばれる器物である。40・41は小碗で高台の形状に違いが見られる。42は鍔縁の大皿である。43は袋物で桃形水注の蓋と考えられる。44は三足の土瓶で煤が付着する。45は堅冷水窯産の瓶でHA②D2からの出土であるがHA③F4からも同種の出土があった。図46～59・61～66はいわゆる黒薩摩で成形後、土灰釉を掛けるものである。焼成温度により発色は様々であった。また、胎土に粘土紐輪積みの痕が残る器物が多かった。生産年代は17C:33%、18C:53%、19C:14%で、壺・甕類のみでもほぼ同じ値である。46～48は龍門司系の窯で焼かれた器物で46は鮫肌釉の掛かる小壺。同種のものがHA②からも出土している。47・48は蓋付き小壺である。49は苗代川系の瓶で内面に器面調整時の指痕が顕著に残る。注口の付く可能性がある。50～52は土瓶である。50は全形の窺える資料で腰部から下には煤が付着。51は胴部に最大径を持つ器形で同年代に生産された土瓶の中では古手に該当する。52は注口で焼成温度が低く、釉化していない。53は茶入れでくびれの無い器形だと思われるが、小片のため詳細不明。天目様の発色を呈する。54は焼成温度が高すぎ釉色が飛んでしまった袋物である。器面が薄く器面調整痕が顕著であることから薩摩産ではない可能性もある。55～60は壺である。生産年代が新しくなると器壁が厚くなる様子が窺える。57・58は小壺で口唇部の形状にやや違いが見られる。59は高台を持つ底部で器壁は薄い。図60は無釉壺で内外面ともに叩き痕が顕著である。61・62は壺か甕か判然としないが、両

者とも口唇部は「T」字状に折り返し三角形の隙間を持つ。63・64 は合わせ口のため口縁部がゆがむが全形の窺える資料である。釉の発色に違いが見られる。63 は底部に耐火粘土（ヒラゴマ）が付着する。65・66 は甕で両者とも土灰釉を掛けるが、口唇部に残る目痕の種類が違う。図版 62 の 74～76 はそれぞれに貼り付け文を持つ甕の肩部である。今回は図版のみの報告とする。

〈九州産〉（第 95 図 67～70）

明確な産地は不明だが、九州で生産された陶器をまとめて報告する。九州産の碗が 11 点、小碗、皿、壺・甕・香炉等が各 1～2 点ずつ得られた。図 67 は二段の口造りの鉄釉小碗で天目型の可能性がある。図 68 は須恵器の流れを汲む壺である。内外面ともに叩きの痕が顕著に残るが焼成はあまりよくない。唯一の出土である。図 69 は香炉で灰釉が掛かるが被熱がひどい。図 70 は福岡産の大型筒型鉢で火窓が開き内部に置き台を持つ。火炉か焔炉と考えられる。

〈関西系（信楽産含む）〉（第 95 図 71～73）

明確な産地は不明であるが関西周辺で生産された器物で碗、筒型碗、皿、行平鍋、土瓶、蓋、小瓶、壺、袋物が数点ずつ得られた。また、信楽産の茶壺 9 点、袋物 1 点を得られた。生産年代としては 17C:11%、18C:32%、19C:57%と 19C に生産された器物が多い。図 71・72 は信楽産の茶壺である。71 は鉄釉掛け、72 は腰白で腰部が露胎する。この資料とは別に透明釉の掛かる腰部片も確認できたが、小片のため報告はひかえた。図 73 は破損した行平鍋の把手である。

〈瀬戸美濃系（志野産含む）〉

数点ではあるが志野産の皿を含む瀬戸美濃系の碗、皿、瓶が確認できた。HB ②では後の祝女殿内、瓦屋又吉小周辺より 5 点、HB ④より 1 点出土している。資料は小片のため今回は報告をひかえた。

註：大橋先生のご教示による。

第 49 表 -1 本土産陶器（近世）観察一覧

（法量単位：cm、g）

第 93 図・図版 60	第 93 図・図版 60	番号	産地	器種	部位	口径	底径	器高	器重量	器形	文様 / 施釉	素地 / 調整痕 / 他	成形痕	生産年代	地区グリッド層遺構(取上台帳番号)
第 93 図・図版 60	肥前	1	備前	播鉢	口底	—	15.6	(106)	0.7 51.2	外面口縁部下方に張り出した鈿	櫛目 7 本残存 / 無釉	赤褐色で細かい（大粒の白・赤色粒混） / 回転による器面調整	粘土積み上げ	15C (古手)	HA ④ I17 II 台 2494
		2			口縁	23.5	—	—	0.9 98.0	外面口縁部下方にやや張り出した鈿	櫛目 4 本残存 / 無釉	赤褐色で細かい（白・赤色粒混） / 回転による器面調整		15C	HA ④ G14 III 台 2243
		3			口縁	28.2	—	—	10.0 116.4	小鉢状の茶道具（建水）	鉄釉を内唇や突帯部に施釉後、長石釉（皮鯨の可能性）	櫛目 8 本 / 無釉			
	4	肥前	碗	口縁	—	—	—	0.6 9.4	三日月高台 やや兜巾	鉄釉を内唇や突帯部に施釉後、長石釉（皮鯨の可能性）	鉄釉を内唇や突帯部に施釉後、長石釉（皮鯨の可能性） / 口縁部をゆがめた可能性高い	口 ク 口	1590～ 1610	HA ② G1 II 台 1043	
	5			底	—	4.6	—	0.7 64.7	天目型高台脇：削り顕著	鉄釉内面と外面腰部	灰白色で細かい / 器面調整痕顕著		1590～ 1630	HA ③ E5 I 台 1957	
	6			口底	—	4.2	—	0.6 34.2	天目型高台脇：削り顕著	鉄釉内面と外面腰部	淡茶でやや細かい（砂粒と赤色粒混）		1590～ 1630	HA ③ T10 II 台 2508	
	7			口底	11.0	5.2	5.4	0.5 38.8	天目型高台：削り出し無	鉄釉〔内面：総釉、外面：二重口縁下まで（他は垂れ？）〕	灰色で細かい（黒色粒混）		1590～ 1630	HA ③ A13 II 台 2489	
	8	肥前？	碗	口縁	—	13.0	—	0.5 9.7	天目型	鉄釉掛け分け〔透明釉を総釉後、内面口唇部下より外面へ鉄釉〕焼成不良 + 被熱	灰白色で細かい	1630～ 1640	HA ② A2 II 台 460		
	9	肥前	中皿	口縁	22.6	—	—	0.5 20.6	鈿緑	透明に近い灰釉 口唇部に熔着痕	透明に近い灰釉 口唇部に熔着痕	暗褐色で細かい	17C前半	HA ③ A14 II 台 2802	
	10			播鉢	胴	—	—	—	0.8 38.0	櫛目は 10 本 1 組か？	残存部は無釉（口縁部に鉄釉が掛かるタイプ）	灰褐色でやや細かい（砂粒混）	—	17C前半	HA ② G20 II 台 1046
	11			瓶	頸底	—	—	—	0.8 477.0	頸は短く、胴下半部に最大径	胴下半部まで鉄釉のつけ掛け 内外面に残る白い部分は未焼成	暗赤褐色でやや細かい（砂粒と赤色粒混）	叩き	16C末～ 17C初	HA ③ C13 II 台 3211
	12	肥前系	壺	底	—	7.8	—	0.65 108.3	底部のため詳細不明	外面：鉄釉と鉄泥の二彩手。胴下半部に鉄泥が塗られる。畳付けのみ無釉 内面：無釉（鉄釉の飛びあり）	外面：鉄釉と鉄泥の二彩手。胴下半部に鉄泥が塗られる。畳付けのみ無釉 内面：無釉（鉄釉の飛びあり）	赤褐色で細かい	17C～ 18C	HA ② D2 II 台 1373・T1 II 上台 1788	
	13			瓶	底	—	5.1	—	0.5 47.7	高台脇：削り顕著	高台脇より 1.5cm 程上方まで灰釉つけ掛け	灰色で細かい / 内面：成形痕顕著（黒色粒混）	—	HA ② T4 II 台 1556	
	14			小碗	底	—	4.4	—	0.3 69.1	呉器手	内面：鉄釉、外面：灰釉	灰白色で細かい / 内面：成形痕顕著	—	HA ② B4 II 台 1216	
	15	唐津	碗	底	—	4.2	—	0.8 45.7	高台内：やや兜巾	鉄釉内面と外面胴下半部	鉄釉内面と外面胴下半部	暗赤褐色でやや細かい（砂粒と黒色粒（大）混） / 器面調整痕顕著	口 ク 口	1590～ 1630	HA ② G20 II 台 1042
	16			底	—	4.8	—	0.7 56.6	底部のため詳細不明	畳付け以外透明釉を掛ける 外面：一部釉がはじかれる	著白っぽく細かい（玉子手） / 外面：器面調整痕顕著	17C後半		HA ② G20 II 台 1061	
	17			小碗	口底	8.6	4.4	5.6	0.4 43.7	高台脇を削り出し、口縁部まで直線に伸びる	内外面に白土で刷毛目をつけた後、灰黄褐色の釉を総釉（内外面：貫入） 畳付けは釉剥ぎ	灰褐色で細かい		1775～ 18C頭	HA ② T1 II 台 525
	18			皿	底	—	7.4	—	0.65 33.3	高台内：兜巾の可能性	内面：鉄絵後透明釉 器面：貫入以上のひび	赤褐色でやや細かい		1590～ 1610	HA ② G20 II 台 1036
	19	唐津？	皿	底	—	6.8	—	0.6 67.3	小片のため詳細不明	内面：鉄絵後透明釉（見込み：胎土目痕） 灰黄褐色に発色。土見せ：釉が掛かる	内面：鉄絵後透明釉（見込み：胎土目痕） 灰黄褐色に発色。土見せ：釉が掛かる	赤褐色でやや細かい（砂粒と黒色粒混） / 土見せに器面調整痕	1590～ 1610	HA ④ P19 II 台 2886	
	20			底	—	5.4	—	0.8 40.0	高台脇まで	内面：鉄絵後やや白濁した透明釉 外面：高台脇まで	茶褐色でやや細かい（砂粒と黒色粒混） / 土見せに器面調整痕	1590～ 1620	HA ③ T9 II 台 2806		
	21			底	—	4.2	—	0.5 32.0	高台内：兜巾	薄い透明釉〔内面：全面外面：高台脇〕 見込み：砂目痕。三日月高台	灰白色でやや細かい（砂粒・黒色粒混）	1610～ 1630	HA ② H3 II 台 1157		
	22	唐津？	皿	口底	15.0	5.6	3.4	0.45 77.9	鈿緑・溝緑・高台内外の高さ同じ	鉄釉〔内面：全面・外面：半面に釉掛け？〕 見込み：砂目痕	鉄釉〔内面：全面・外面：半面に釉掛け？〕 見込み：砂目痕	灰白色で細かい	1610～ 1630	HA ③ B16 II 台 2995	

第49表-2 本土産陶器（近世）観察一覧

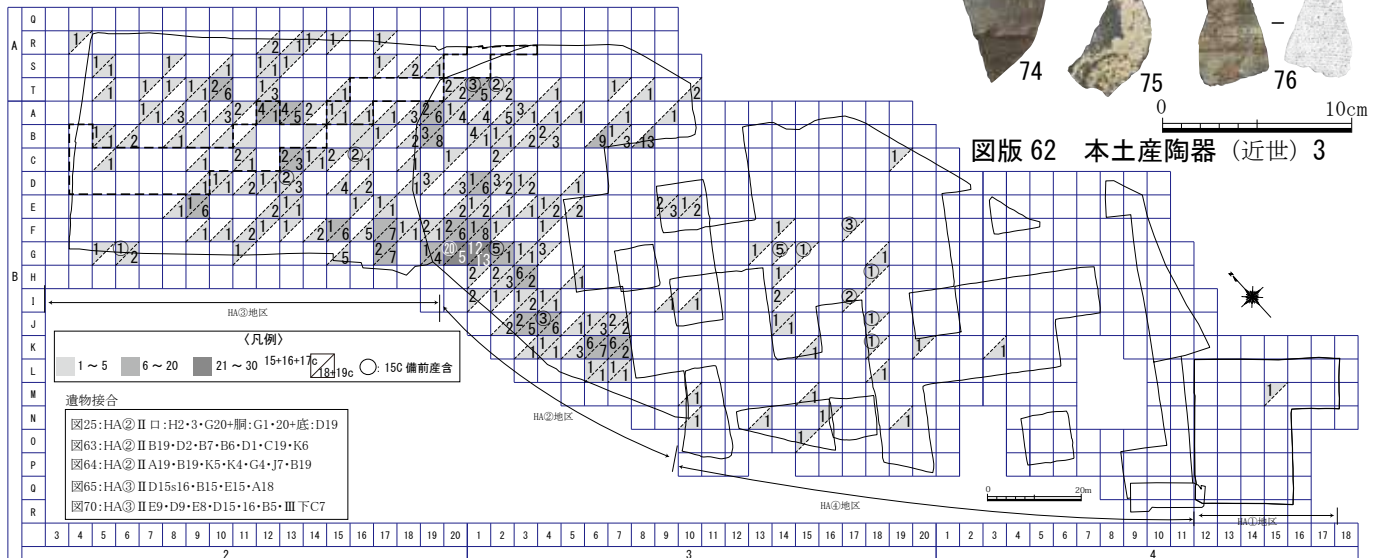
(質量単位: cm, g)

第図版	番号	産地	器種	部位	口径	底径	器高	器重量	器形	文様/施釉等	調整痕/素地/他	成形痕	生産年代	地区グリッド層遺構(取上台帳番号)	
第93図・図版60	23	唐津	皿	底	—	4.8	—	0.48 46.2	高台内:縮緬織・巾兜	透明釉(つけ掛け)見込み・畳付け:砂目痕	黄褐色でやや細かい		1610~1640	HA②B4 II 台1340	
	24	唐津	大皿	口縁	24.8	—	—	0.6 37.9	鏝緑	白化粧後、鉄絵を施す二彩手焼成不良(釉化せず)	赤褐色でやや細かい(赤色粒混)		17C後~18C	HA②G20 II 台935	
	25			口底	24.8	10.4	—	0.9 89.9		内面:刷毛目の波状文後、緑釉(銅緑釉)で絵付け後透明釉・見込み:砂目痕	赤褐色でやや細かい(赤色粒混)		17C後半	口:HA②H3 台1166他・底:HA②D19 台263	
	26		瓶	底	—	6.0	—	0.6 279.5	平底(底面に糸切り痕と初穀痕)	鉄絵後薬灰釉を施釉・底部との境に施釉時の指の痕残る。叩右回転	暗褐色で細かい(白色粒・ピンホール多数)		16C末~17C	HA②C2 I 台2362	
	27				—	6.2	—	0.9 61.5		高台脇より薬灰釉を掛ける。		16C末~17C	HA②E3 II SD02 台1487		
第94図・図版61	28	内野山	碗	口底	12.2	5.2	7.3	0.4 67.3	呉器手	内面:透明釉・外面:銅緑釉 高台は土見せ	黄白色で細かい		1675~1750	HA③S18 II 台2355	
	29			底	—	4.6	—	0.45 91.5	呉器手 高台内:兜巾	外面:銅緑釉(一部高台まで垂れる) 内面:透明釉	灰白色で細かい		1675~1750	HA②D5 II 台867	
	30			底	—	4.4	—	0.4 40.4	高台:撥状・脇の削りシャープ	外面:銅緑釉(高台まで垂れる)・内面:透明釉。高台:土見せ	黄白色で細かい		1675~1750	HA②F1 II 台1581	
	31	内野山	碗	底	—	4.4	—	0.6 39.9	高台:脇の削りシャープ・打ち欠く	内面:透明釉・外面:銅緑釉 腰部~高台:土見せ	黄白色で細かい		18C	HA③D13 II 台3247	
	32				小皿	口縁	9.4	—	—	0.25 5.8	端反の強調	内外面:透明釉	灰白色で細かい		1610~1630
	33		小皿	口縁	13.4	—	—	0.3 4.5	溝緑	内面:透明釉・外面:透明釉が流れる	灰白色で細かい		1610~1630	HA④H14 SD41 台3090	
	34		皿	底	—	7.0	—	0.55 190.9	緩やかに胴部へ延びる	内面:銅緑釉・外面:透明釉(高台脇見込み:蛇ノ目釉剥ぎ・砂目痕)	黄白色で細かい		17C後半	HA③S12 II S7 台714	
	35				—	6.0	—	0.5 36.0	腰部:角気味に立ち上がる	内面:銅緑釉・外面:灰釉(畳付け無釉) 見込み:蛇ノ目釉剥ぎ・砂目痕	灰白色で細かい		17C後~18C始	HA③E9 II S39 台1074	
	36		小皿	口縁	10.4	—	—	0.45 11.9	胴下半部に削り(高台あり)	内外面:透明釉に近い灰釉 見込み:蛇ノ目釉剥ぎ	灰白色で細かい(黒色粒混)		17C末~18C半	HA③R12 II S7 台979	
	37		小皿	口底	11.2	4.2	3.5	0.4 65.9	口縁部に向かってやや内湾気味に延・縮緬織	内面:銅緑釉・外面:透明釉(口~腰) 蛇ノ目釉剥ぎ・砂目痕	黄白色で細かい		1675~1750	HA②J6 II 台1698・1708	
	38		武雄周辺	中皿	口縁	—	—	—	0.6 23.1	鏝緑 東南アジア輸出品	内面に白土で刷毛目後、灰黄褐色の釉を内面と外面の胴上部に施釉	暗赤褐色で細かい(砂粒混)		17C後半	HA③C11 II 台1591
	39					大皿	—	—	—		0.65 28.9	内面に白土での刷毛目後、灰黄褐色の釉を掛ける	暗褐色で細かい		17C後半
	40		薩摩(白薩摩)	小碗	底	—	3.8	—	0.4 19.9	高台脇よりも高台内が深い	白化粧後透明釉 見込み:蛇ノ目釉剥ぎ・畳付け:釉剥ぎ	黄白色で細かい(ピンホール)粗製品		18~19C	HA③D16・17 II S4 台1530
41	ほぼ完	8.0				4.0	4.4	0.3 61.4	高台高い	透明釉(貫入)・畳付け:釉剥ぎ 窯の中で染付と一緒に焼成されたため、器面に呉須の飛びあり	白色で細かい		19C	HA④E9 II 台2020	
42	大皿	口縁		—	—	—	0.65 12.9	鏝緑	内外面:透明釉(貫入)	黄白色でやや粗い(僅かに黒色微粒子混)		17C?	HA②G4 III P40 台2110		
43				袋物	底	—	—		—	0.4 23.3	袋物(桃形水注?) 内面:釉垂れ、外面:全面	黄白色でやや粗い(僅かに黒色微粒子混)		19C?	HA②T4 II 台1562
44	土瓶	底		—	—	—	0.45 49.8	脚長の三足	外面:脚の高さまで透明釉 煤付着	黄白色で細かい(ピンホール多数)		19~18C半	HA③E9 II 台1369		
45				瓶	底	—	7.0	—	0.4 43.6	高台削出し	透明釉(緑色気味・貫入) 内面:無釉、畳付け:釉剥ぎ	黄白色で細かい/内面叩痕顕著、丁寧/堅冷水蒸		17C後~18C	HA②D2 II 台1368・1374
46	小壺	底		—	7.2	—	0.5 83.5	詳細不明	外面:鮫肌釉。小さな灰色粒が高台脇までを覆う	青灰色で緻密龍門司系		江戸末	HA③A13 IV 台2147		
47				蓋	完	9.4	6.6	2.9	0.7 91.0	傘型	白化粧後外面:黄釉、内面:透明釉(かかり先端は無釉)	赤褐色で細かい龍門司系		18C後~19C	HA②D3 II 台1082
48	薩摩	小壺	口胴底	9.0	8.1	11.0	0.5 273.5	胴に最大径を持つ	全面:白化粧後内面:透明釉、外面:黄釉(内唇含)後、肩部より灰釉を流す。内唇及び口唇は釉剥ぎ。その後鉄釉で圏線	赤褐色で細かい龍門司系		18C後~19C	HA②E20 II 台1496		
49				瓶	口縁	6.2	—	—	0.6 327	最大径:胴部、注口の付く可能性あり	土灰釉・内外面共にツヤあり 口唇部:無釉(使用中に磨滅)	灰褐色で細かい(若干の砂粒混)/内面:粘土積上げ時の指痕 苗代川系	叩き	18~19C	HA③G6 S640 台2137+G7 II 台1306
50		土瓶	口胴底			14.8	5.2	—	0.3 78.3	最大径:腰部 口縁部にやや内湾ぎみに向かう	土灰釉? 口唇部・胴下半部及び底部:無釉	赤褐色で細かい(白・黒色粒混) 外面:横線状の器面調整痕が顕著	粘土積	18C半~19C	HA②E1 台1837・D1 II +HA③S19 II 台3204
51				土瓶	口縁	12.8	—	—	0.6 26.4	最大径:胴部	土灰釉〔外面:ややツヤあり 内面:砂粒状にざらつく〕	赤褐色で細かい(砂粒混)/外面ナデ消し		18C半~19C	HA③T12 II S7 台1289
52		茶入	注口			—	—	—	0.5 16.8	注口は後付け	土灰釉 焼成温度が低く、釉化していない	赤褐色で細かい(やや砂粒混)	叩き	18C後~19C前	HA③D10 II S39 台1978
53				肩	—	—	—	0.3 6.6	くびれ無し	外面:黒鉛釉(天目状に白い斑点が入る)	暗灰色で細かい(黒色粒混) 堅野冷水蒸?		17Cか?	HA②A3 II 台419・F20 II 台818	
54	薩摩?	袋物	底	—	10.0	—	0.5 33.8	平底、(器壁は薄く胴部へ緩延)	薄い灰釉(土灰) 焼き飛びで白い・剥落	暗紫色で細かい(砂粒混)/器面調整痕顕著	ロク口	17C	HA④I14 II 台2977		
55				壺	口縁	11.6	—	—	0.4 33.9	口唇部を外側に折り返す。最大径は胴部を持つ	内外面:薄い土灰釉 焼成温度が低く釉化せず。口唇釉は拭取り無したが合わせ口でも熔着せず。	暗紫色で細かい(砂粒混)	叩き	17C	HA④F17 III 台2166
56						壺	17.7	—	—	0.4 7.8	小型	土灰釉(釉が流れる) (口唇無釉)	暗紫色で細かい(砂粒混)		17C半~17C末

第 49 表 -3 本土産陶器 (近世) 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	番号	産地	器種	部位	口径	底径	器高	器重量	器形	文様 / 施釉	素地 / 調整痕 / 他	成形痕	生産年代	地区グリッド 層遺構(取上) 台帳番号	
第95図・図版62	57	薩摩	小壺	口縁	11.2	-	-	0.45 49.4	口唇部は折り返し玉縁状に作る	黒釉、(外面: ツヤ・内面: 砂粒状にざらつく) 口唇部の釉は拭き取らず、波状に石灰が付着 (二枚貝腹縁部?)	暗赤褐色で細かい(砂粒混) / 内外面共にナデ消し	叩き	17C半~ 18C	HA③ D11 II 台 3190	
	58		小壺	口・底	9.0	6.2	-	0.8 83.9	肩部で最大径、底部に向かいすぼむ	土灰釉 (内外面共にツヤ) 口唇部には合わせ口の痕跡	黒褐色で細かい (黒色粒顕著)		18~ 19C	HA③ F17・18 II S10 台 2098・2099	
	59		壺	底	-	9.8	-	0.5 206.5	削り出し高台	胴上半部: 鉄釉・胴下半部: 無釉 見込みに鉄釉の飛び (施釉時)	明茶褐色で細かい(砂粒混) / 内外面: 調整痕顕著		18C半~ 19C	HA② F1 II 台 1536	
	60		壺	頸	-	-	-	0.7 158.1	耳付き	無釉	赤褐色で細かい(砂粒及び小石混) / 外面: 横線状の叩き痕		19C	HA③ F9 II 台 1344	
	61		甕か壺	口縁	14.4	-	-	0.6 109.0	口唇部は折り返し「T」字状・肩部に耳あり	内外面: 土灰釉 (口唇一部無釉)	紫褐色でやや粗い / 外面: ナデ消し (砂粒多数混)		18~ 19C	HA② B8 II上 台 2406	
	62	薩摩	壺	口縁	13.4	-	-	0.6 97.0	叩き / 口唇部は折り返し「T」字状	内外面: 土灰釉 (口唇一部無釉) 内外面共にツヤあり	内面: 横線状の器面調整痕が顕著・外面: ナデ消し黒褐色で細かい (黒色粒顕著)		17~ 18C	HA③ AT12 II S7 台 991・1293	
	63		壺	口縁	12.4	11.6	24.6	0.8 2,500	三耳壺 (合わせ口でゆがむ)	黒褐色 底部に耐火粘土 (ヒラゴマ) 熔着	黒褐色で細かい (砂粒顕著) 内部に石灰分付着		18~ 19C	HA② B19 II 台 845 他	
	64		壺	口縁	13.4	14.0	24.0	0.8 1,835	ほぼ完	灰褐色 (土灰釉が生地の鉄分と反応) 口唇部は無釉。耐火粘土痕	黒褐色で細かい (砂粒顕著) 器面: 灰中に含まれる白色粒多数付着		18~ 19C	HA② A19 II 台 1520 他	
	65		壺	口縁	20.5	16.6	35.1	0.6 3,650	平口縁で「T」字状	土灰釉 口縁部に耐火粘土痕	赤褐色でやや細かい (白色粒と黒色粒混) / 横位の線状痕		18C	HA③ D15 II S16 台 2216 他	
	66		甕	口縁	17.2	-	-	0.3 46.6	口唇部: 折り返し「T」字状。三角形の隙間有り	内外面: 土灰釉? (口唇一部無釉) 口唇部には約 3cmの隙間を空けて貝目焼成不良	暗赤褐色で細かい (白色粒混)		19C	HA② A20 II 台 1309	
	67	南九州	小碗	口縁	8.8	-	-	0.5 14.9	天目型?	鉄釉	灰白色で細かい / 内外面: 器面調整痕顕著		ロクロ	18~ 19C	HA② C4 II 台 2448
	68	九州	壺	胴	-	-	-	10.0 81.3	最大径は 27cm を越す	無釉 外面には煤が付着	明灰色で細かい(茶・黒・白粒子) 内外面: 成形痕顕著		叩き	11~ 13C	HA③ F13 II S18 台 858
69		香炉	口・脚	15.8	-	7.2	0.5 304.0	三足	灰釉 ひどい被熱	灰色で細かい (黒色粒混)	-	17Cか?	HA② C2 I 台 1961		
70	福岡?	筒型鉢	口・底	23.6	22	16.3	0.6 1,098	円筒形 火炉?か焔炉?	鉄釉に石灰を流し掛け	灰白色で細かい (黒色粒混)	ロクロ	19C	HA③ E9 II 台 1057 他		
71	信楽	壺	肩	-	-	-	0.5 22.6	茶壺	外面: 鉄釉施釉後、灰釉掛け流し	灰白色で細かい (ピンホール多数) / 内面: 器面調整痕顕著	粘土積み上げ	近世	HA② T10 II上 台 635		
72	信楽?	壺	底	-	7.8	-	0.7 23.7		腰部から無釉	黄白色で細かい		19C 以降	HA③ R18-20 II 台 1632		
73	関西系	鍋	口・取	11.4	-	-	0.3 15.6	行平	透明釉・蓋受けは無釉	黄白色で細かい / 器面調整痕	ロクロ	19C	HA③ B18 II S12 台 975		
図版62	74	薩摩	甕	肩	-	-	-	0.8 23.3	肩部: 縄状突帯	外面: 土灰釉	黒色で細かい (若干の白色粒)	-	17C	HA② A20 II 台 1321	
	-				-	-	0.8 23.9	肩部: 縄目状の花弁貼り付け	褐色でやや粗い (砂粒多数混) 内外面共にナデ消し		HA② E4 II 台 1457				
	-				-	-	0.6 25.2	肩部: 2条の突帯	灰褐色でやや粗い(砂粒多数混)		HA③ F18 II S10 台 1573				

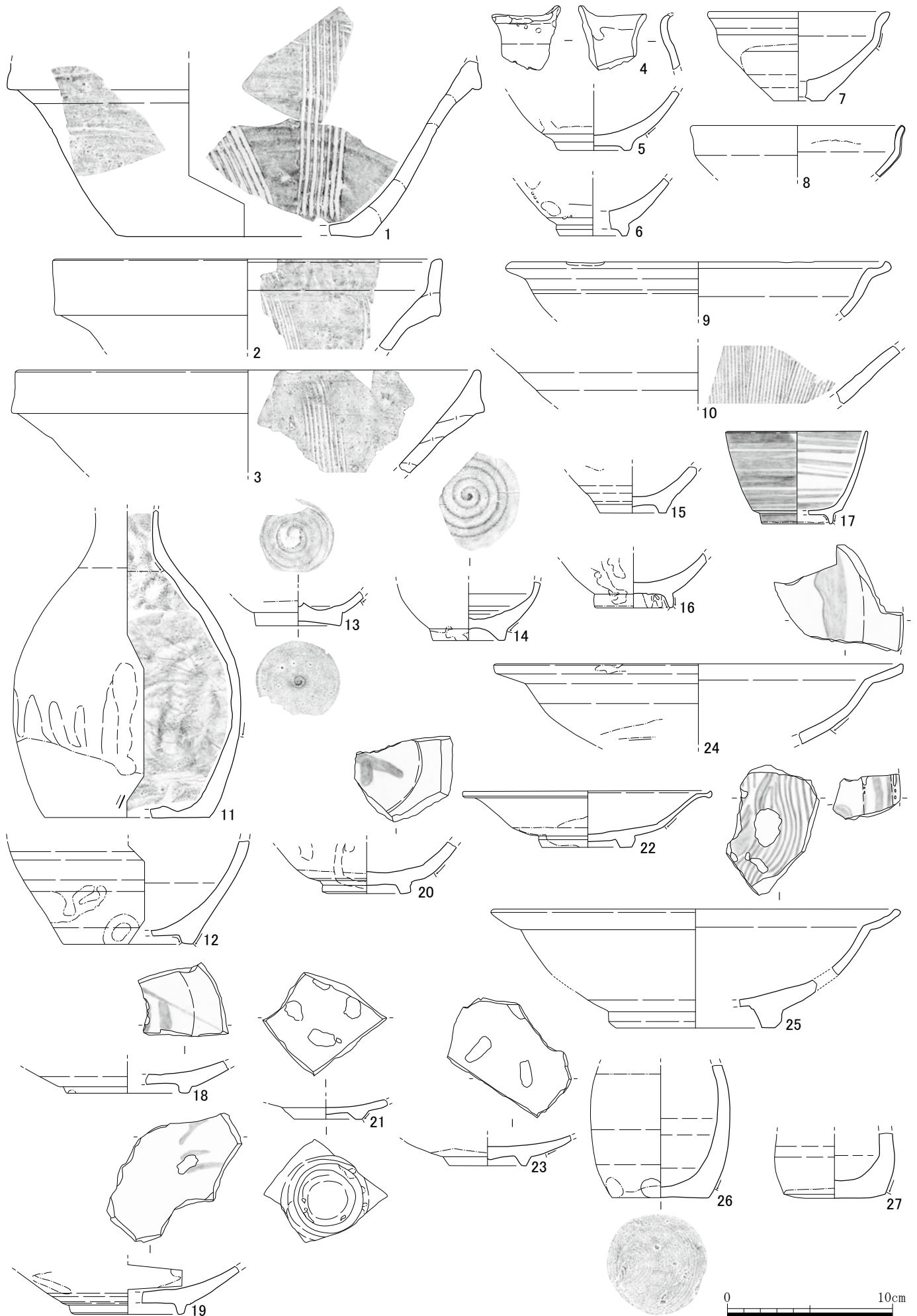


第 92 図 本土産陶器 (近世) 平面分布

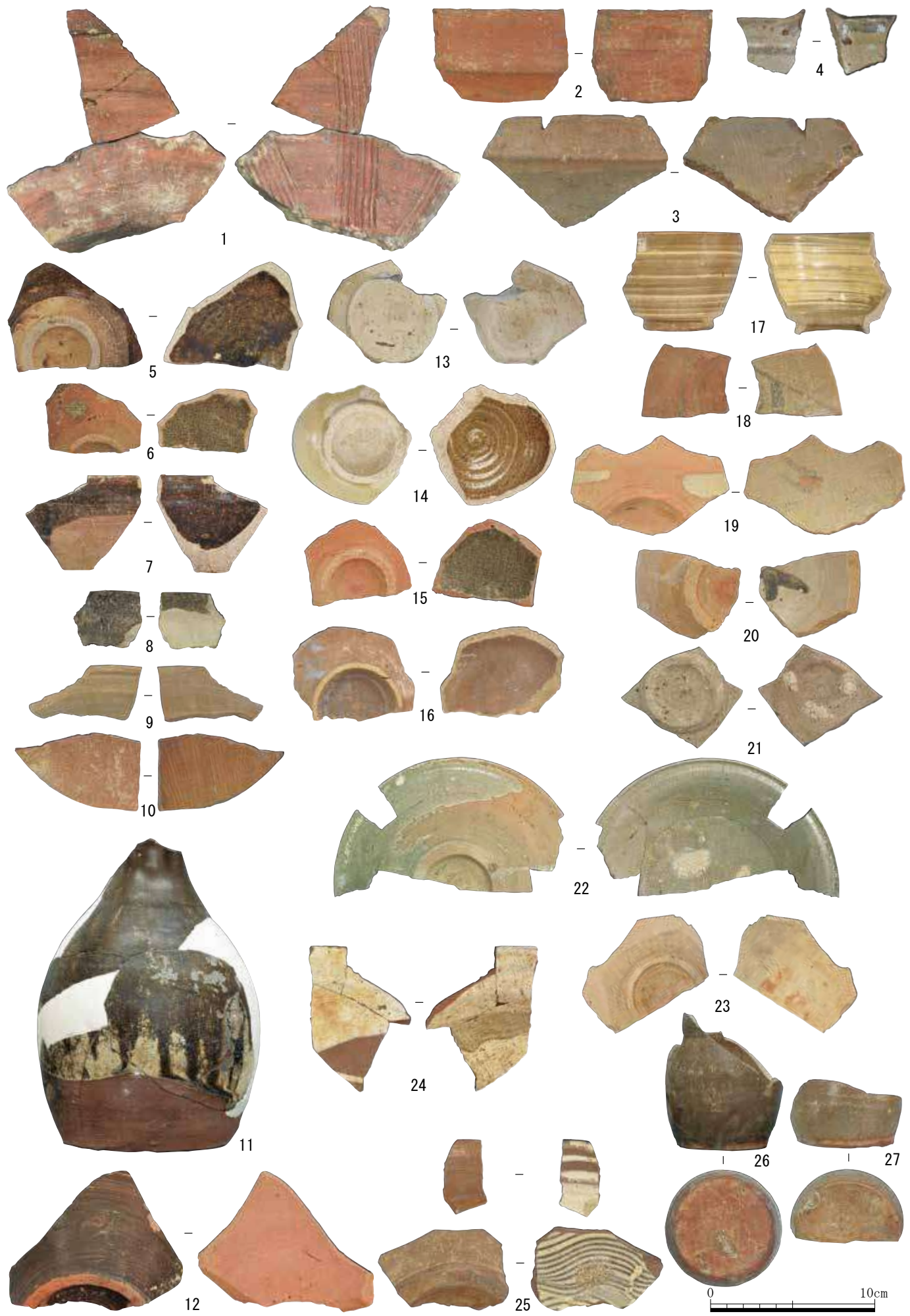
第三章 5



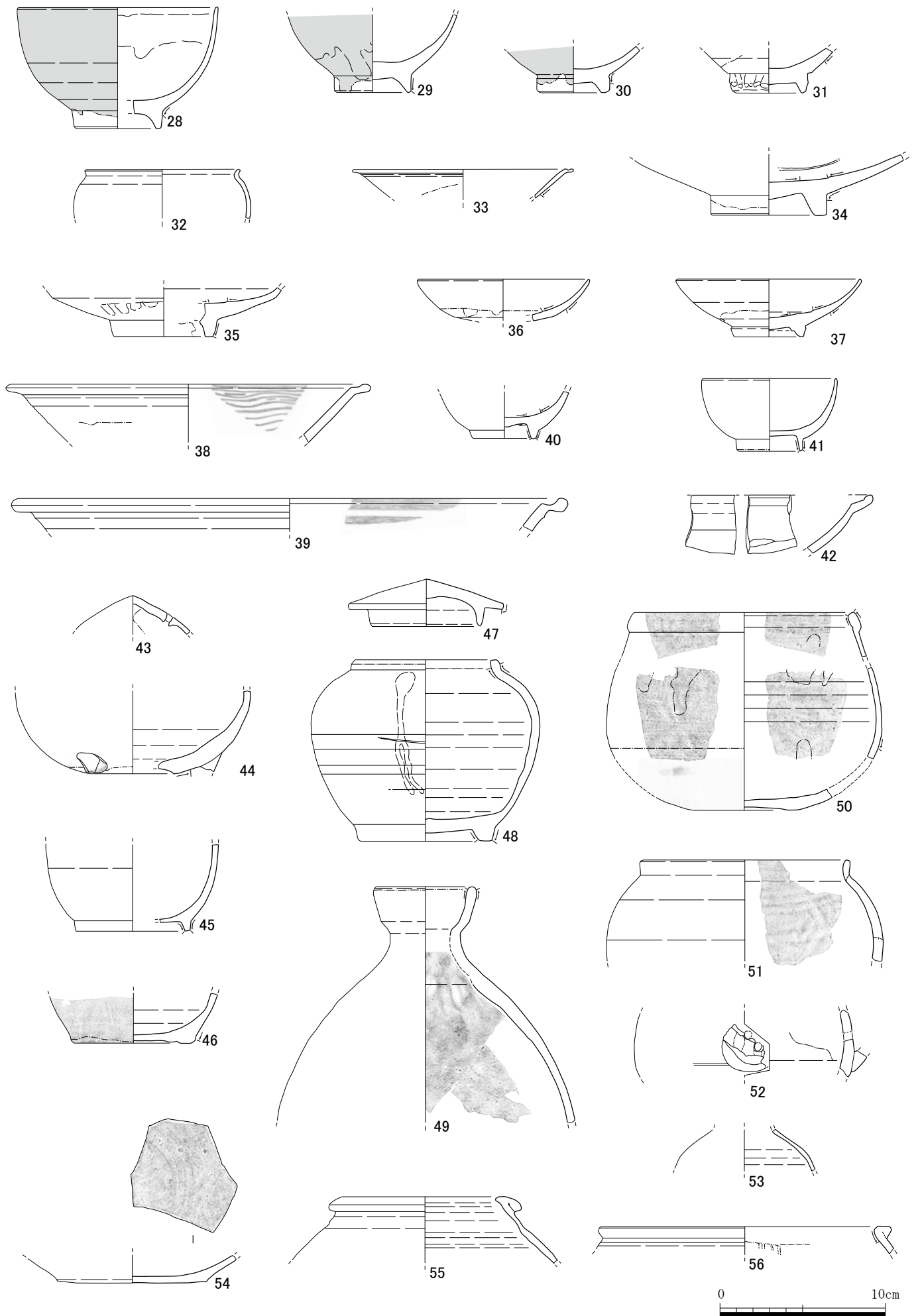




第93图 本土産陶器 (近世) 1



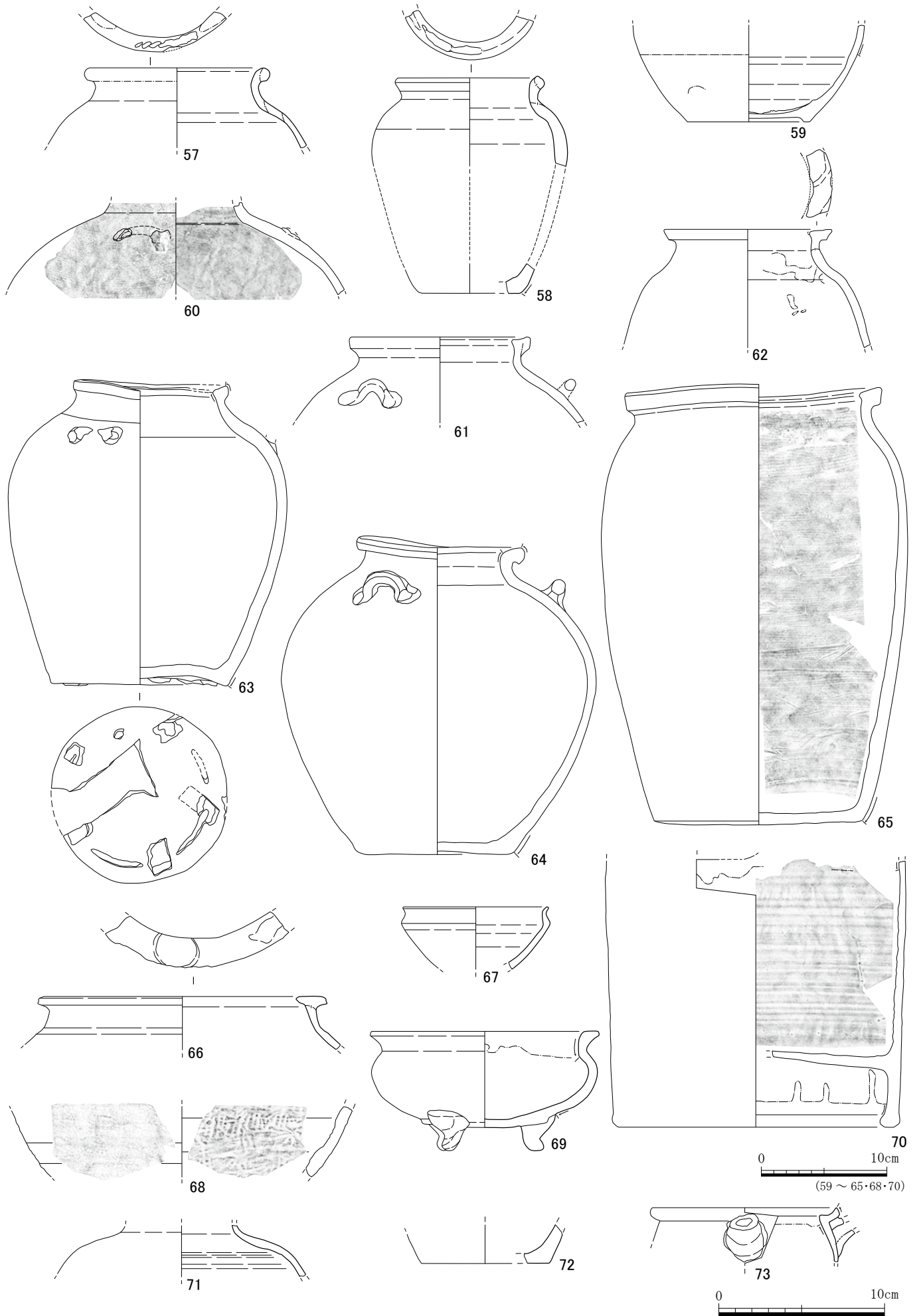
图版 60 本土産陶器 (近世) 1



第94図 本土産陶器（近世）2



図版 61 本土産陶器 (近世) 2



第95图 本土産陶器 (近世) 3



図版 62 本土産陶器 (近世) 3

## (10) 染付

総数 2507 点が得られ器種別に碗 1989 点・皿 268 点・杯 161 点・鉢 16 点・瓶 44 点・壺 13 点・レンゲ 2 点・深鉢 2 点、小碗 or 杯 4 点・碗 or 皿 2 点・蓋物碗・袋物・水注・合子・蓋・盤が各 1 点であった（第 54～56 表）。碗は全体の 79.3% と多数を占め、皿、杯、瓶とつづく。生産地は中国を中心にベトナム産が 2 点みられ、中国産は景德鎮窯、漳州窯、徳化窯、福建・広東系がある。生産年代は 15C から 17C の明代から 17C 後半から 19C の清代があり、清代が多い。分類は形態、成形方法、文様構成、施文範囲、釉調、素地により行い明代の編年は小野正敏（1982）に準拠する。当該器の出土はⅡ層に多い。平面分布においては清代のものが HA ②では祝女殿内、瓦屋又吉小、三良又吉小の遺構に集中し、HA ③は仲村渠と大屋の遺構と重なる。明代は全体の 20% に止まり、特に分布に偏りはみられなかった（第 96 図）。

**1. 碗：**20 類に分類でき、更に細分されるものは第 52 表に示した。生産年代は明代中期から後期と清代に位置付けられる。明代の生産地は景德鎮窯産が全体の 41%、福建・広東系産が 34% で漳州窯産が 2% であった。清代は景德鎮窯産が 2%、徳化窯産が 1% と少数で福建・広東系が 90% と圧倒的である（第 54 表）。

**I 類：**口縁は強い外反を示す。腰が張り胴部は逆「八」の字状に外に開き立ち上がる。高台は細身で断面形態はやや方形に近い。内底は平坦である。

内外面の文様は口縁に雷文帯、文字文帯、四方襷、半花菱、亀甲繫文などの帯文と胴部に八宝唐草文、松竹梅、蕉葉文、花唐草文などを組み合わせる複数の文様構成持つものと、外面の口縁から胴部に圏線と唐草騎馬、花唐草、梅月文などの単一文を描くものとある。図 14 は線刻の地文を施す。見込みは圏線に松竹梅、梅花、野菜文、樹木、草花文などが施文される。貫入が入るものがある。図 1～3・5～7・9・10・13・14・18・20・32～34・41。小野分類 B 群

**Ⅱ類：**腰部に張りを持たずラップ状に外に開きながら立ち上がる。口縁は大きく外反する。口唇の形態は丸い。高台断面形態は三角状。外面に宝相華唐草文を描く。図 8・17。小野分類 B 群

**Ⅲ類：**胴部は緩やかに外に開きながら立ち、口縁の外反は弱い。外面に単一文様の牡丹唐草文を描く。器壁が薄い。図 4。小野分類 B 群か？

**Ⅳ類：**内底が下がる蓮通心である。腰に張りがなく高台から開き立ち上がる。高台は低く断面形態が細身の三角状を呈する。外面に如意頭文、唐草文を描き、内底面に草花文を描く。図 12・16・19。口縁は内湾気味の直口なることが予想される。小野分類 C 群

**V類：**腰にやや丸味を持ち緩やかに立ち上がる。内底が下がる蓮通心である。口縁が直口外面の口縁に波濤文、唐草文を帯条に巡らす。中位に二条圏線を配し、下位に蕉葉文、唐草を施文している。内底見込みに法螺貝文、蓮華文、捻子花文がある。図 23・24・26～28・38・42。小野分類 C 群

**Ⅵ類：**腰が張り腰折れ様に屈曲させる。内底は平坦。高台は細身で断面形態は三角状。外面にアラベスク文や唐草を描き高台脇と高台に圏線を配する。内面は施文する例と無文とあり図 29 は窓絵（如意頭形）に草花を描き、窓外に渦文を充填する。内底面は十字花文、草花文、団龍文を描いている。図 40・43。小野分類 D 群か？

**Ⅶ類：**腰が折れ、胴部は直線的に開き立ち上がる。口縁は直口を成す。外面の文様は口縁の帯文と胴部文に分かれ施文される。口縁は波濤文、帯条の唐草文を巡らし下位にアラベスク文を描く、内面は二条圏線を配し内底面に圏線が確認できる。内底見込みに十字花文、渦花文、花文があげられる。図 22・25・30・31・35・36・39。小野分類 D 群

**Ⅷ類：**口縁は開いた直口とやや内湾気味に立つ直口がある。腰にあまり張りはなく胴部に丸み持ちやや開きながら立つ。高台は細身で内底は饅頭心である。外面は松や仙人、豹皮文、唐草文、竹に鳥を描く。内底面に山水文、草花文を描く。高台内に「天下太平」等、銘款を付すものがある。図 44～46・49～51。小野分類 E 群

第 52 表 染付碗分類（小分類があるもののみ）

分類	小分類	文様構成
I	1	外面 複数文 口縁文様：圏線、半花菱文、雷文 胴部文様：八宝唐草文、不明
		内面 複数文 口縁文様：四方襷文、チベット文字文 胴部文様：牡丹唐草
	2	外面 複数文 口縁文様：亀甲繫文 胴部文様：松竹梅文（三友文）、蕉葉文
		内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線、竹梅文
	3	外面 単一文 胴部文様：騎馬唐草、花唐草文、牡丹唐草 連華唐草文
		内面 単一文 口縁文様：圏線、草花文
	4	外面 単一文 胴部文様：梅花文+線刻文（暗花文）
		内面 単一文 内底文様：梅花文
	5	内面 単一文 内底文様：圏線、花文、野菜文、樹木文 梅月文
		内面 単一文 内底文様：不明 腰部文様：如意頭文
IV	1	外面 複数文 口縁文様：不明 腰部文様：如意頭文
	2	外面 単一文 内底文様：草花文 胴部文様：唐草文
VIII	1	外面 単一文 口胴文様：圏線、豹皮文、唐草文、竹鳥文 内面 単一文 口縁文様：圏線
	2	外面 単一文 胴部文様：松や仙人、人物 内面 単一文 内底文様：圏線、山水文、草花文 外底 単一文 天下太平
X	1	外面 単一文 胴文様：圏線、唐草文 内面 単一文 内底文様：花卉+蛇の目刺ぎ
	2	外面 単一文 口胴文様：圏線、唐草文、山水文 内面 単一文 口縁文様：圏線、芝垣文
XVII	1	外面 単一文 胴部文様：菊唐草 外底文様：圏線、銘款
		内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線
	2	外面 単一文 口胴文様：圏線、団花文、唐草文 内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線、花卉
		3
4	外面 複数文 口縁文様：圏線、梵字文 腰部文様：方形簡易連弁文	
	内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線、花卉	
XIX	1	外面 複数文 口胴文様：圏線、半梅、龍文区画文区 腰部文様：連弁文
		内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線
	2	外面 複数文 口胴文様：圏線、半梅、寿字区画文 腰部文様：連弁文 外底文様：圏線、銘款
		内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線、銘款
	3	外面 複数文 口胴文様：圏線、唐草文 腰部文様：圏線
		内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線、花卉、銘款
4	外面 複数文 口胴文様：唐草文 腰部文様：連弁文	
	内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線、葉文	
6	外面 複数文 口胴文様：圏線、半梅、草花文区画文区 腰部文様：連弁文	
	内面 単一文 口縁文様：圏線 内底文様：圏線	

**IX類**：輪花状外反口縁を呈する。口唇に刻みを入れ口唇の断面形態は角状。

外面に圈線と花鳥画を描き、内面は圈線を配する。図 47。

**X類**：腰は屈曲し外に開き立つ口縁は外反。外面に唐草文、山水文を描く。内面は芝垣文を巡らしている。高台の断面形態は三角状。内底面は花卉を施し、見込みは蛇の目釉剥ぎをしている。図 48・52～54。

**XI類**：胴部は逆「八」の字状に大きく外に開き口縁は直口する撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。外面は上段に半梅花文繫ぎを施し下段は唐草文を描く内面は圈線を口縁と見込みに配し蛇の目釉剥ぎしている。高台内は露胎している図 55・64・67。

**XII類**：口縁は直口する。撥形碗である。腰部はやや丸み持ち大きく外に開き立つ。高台は外割りの断面形態は台形。内底は中心がやや盛り上がる。外面に一条圈線と帯条唐草文を描き高台脇に一条圈線を配する。内面見込みに一条圈線と草花文を配している。釉は見込みの際まで施釉。外底と内底は露胎している。図 56・57・69

**XIII類**：腰部に丸み持ち逆「八」の字状に大きく外に開く直線的に立つ。口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。高台は外割りの断面形態は四角形。内底は中心が盛り上がる。饅頭心で外面の口縁と腰部に一条圈線を、内面は口縁と見込みに圈線を配している。釉は見込みの際まで施釉。外底と内底は露胎している。XI、XII類が無文化したもの。図 70～74

**XIV類**：腰部から直線的に逆「八」の字状に大きく外に開き立つ。口縁は直口する撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。高台の断面形態は台形と三角形があり。内底は中心が窪むものと盛り上がるものとある。外面に圈線と唐草文、字文を描く。見込みが蛇の目釉剥ぎされ物置付は露胎するものと釉を見込みの際まで施し、外底と内底は露胎している物とある。図 58～60・63・65・66・68。

**XV類**：腰部から直線的に逆「八」の字状に大きく外に開き立つ。口縁は直口する浅い撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。高台の断面形態は四角。外面に唐草文を描き内面は一条圈線を配する。釉は見込みの際まで施釉。外底と内底は露胎している。図 61・62。

**XVI類**：腰部から直線的に逆「八」の字状に大きく外に開き立つ。口縁は直口する撥形碗である。口縁径と底径の差が小さい。口唇の断面形態は丸状。高台は外割りの断面形態は台形。内底は中心が窪む。外面に菊花の印花文と草花文を描く。内底は蛇の目釉剥ぎし、高台は露胎している。図 75～81。

**XVII類**：腰部は張り丸みを持つ、ほぼ直線的に立ち上がり口縁は直口する。口唇は丸い。高台の断面形態は細身の先端の丸い方形。外面に圈線と牡丹唐草文を描き腰下部に蓮弁文を巡らしている。高台脇と高台に圈線で閉じる。内面は口縁に圈線を配し見込みは圈線と牡丹唐草を施文している。図 82

**XVIII類**：腰部は張り丸みを持ち直線的に立ち上がる。口縁は直口し口唇は舌状。高台の断面形態は先端の丸い方形。外面口縁から胴部に圈線と菊花唐草文を描き高台脇と高台に圈線で閉じる。内面は口縁に圈線を配し見込みは圈線、草花文、花卉を施文、蛇の目状に釉剥ぎしている。外底に圈線と銘款「福、利」が認められる。図 83・84・101・102。

**XIX類**：胴部に僅かな丸みを持ち開きながら立ちあがるがやや腰高張で胴が直線的に開き立ち上がるものもある。口縁は端反である口唇は舌状と丸状とある。高台の断面形態はやや方形の先端が丸と尖るものがある。内底面はやや盛り上がるもの、下がるもの、平坦とある。外面に圈線を配し区画文などの複数の文様を横に縦割りで構成する物と口縁と胴部は一つの文様を描き腰部に簡略化された蓮弁文を描く物がある。縦割りの区画文は半牡丹寿龍文などを組み合わせず。口縁と胴部に単一の文様を描くものに唐草文、龍文がある。内面は口縁に圈線を巡らし見込みに圈線を配し中に花卉、葉文や銘款「上、人、主、梵字」などを描く。外底の高台内に圈線を配し「和美、全美、金」などの銘款を付している。図 85～100・103・104・106・107。

**XX類**：腰が張り胴部は外にやや開きながら立つ、外面に圈線、牡丹唐草と腰部にラマ式蓮弁文を施文している。胴部片のため図化していない。生産地景德鎮窯 生産年代 18C～19C

**2. III**：9類に分類できる（第 53 表）。生産年代は 15C 後半～17C 前半の明代から 17C 後半～19C 代の清代に位置づけられた。生産地は明代で景德鎮窯産が全体の 73%、福建・広東系産 8%漳州窯産が 4%であった。清代では景德鎮窯産 4%、徳化窯産 3%、福建・広東系産が 84%で殆どを閉めている（第 55 表）。

**I類**：腰に僅かな丸みを持ち外に開く口縁は外反し、高台断面形態が三角状と方形とある。外面は宝相花唐草文や渦巻唐草を描き、見込みに玉取獅子文、十字花文を施文する。小野分類 B 群に属すると考えられる。図 108～117。

**II類**：底部は碁笥底を成す。胴部は内湾気味に立ち口縁が直口を成すものが多い。外面に施文するものと無文がある。有文は波濤文と蕉葉文帯を組み合わせるものや渦巻状の唐草を描くものがある。内体面に略化した唐草文を描き、見込みに圈線と蕉葉文、捻子花文、花唐草文、「寿」の字文を描いている。置付けは露胎している。図 125 は外面に渦唐草文



を施文し内面に白抜きの十字花文をかたどり周囲を点描で充填する。見込みには圈線内に十字花文を施し、畳付けは露胎している。口縁を欠くが、同様な資料が那覇市天界寺 2000 で報告され、外反口縁であることがわかっている。小野分類 C 群 I に属する。図 118 ~ 128。

**III類**：口縁は内湾気味の直口。高台の断面形態が三角状。口縁の外面に圈線を巡らし、内面に四方禪文を施文している。見込みに「寿」の字文を描くものと圈線に雨龍文を描くものがある。薄手である。小野分類 E 群。

図 131 ~ 133。

**IV類**：口縁は端反で身は深め。高台の断面形態は方形に近い三角状、畳付けは丸い。口縁外面に二条圈線に花枝文、内体面と見込みに圈線と花唐草を描いている。高台内に圈線に方形銘款を付す。図 137 ~ 139。

**V類**：口縁は内湾気味の直口。口縁の内外面に圈線を巡らし、外面無文と草花文を描くものがある。高台の断面形態は三角状。高台脇と見込みに圈線を巡らす。内底を蛇の目釉剥ぎし外底は露胎させている。図 129・130・135・136。

**VI類**：口縁は鏝状。図 134 は口縁が鏝状になると考えられる。口唇は丸い。口縁の内面に圈線と草花文を描く。

**VII類**：胴部が内湾気味に立ち口縁は端反、口唇が丸くなる。高台はやや幅広で断面形態は台形、先端は丸い。外面は口縁と高台脇に圈線を配し、変形した「王」の字文を描く。内面は口縁に圈線、見込みに圈線と「志在書中」の人物図を描く。高台内は圈線と銘款を付す。図 145 ~ 153・156 ~ 158。

**VIII類**：口縁は内湾気味の直口、口唇が尖る。高台の断面形態は方形で先端は丸い。口縁の内面に一条圈線を巡らし見込みに圈線と山水文を描く。外面無文。図 141 ~ 144・154・155。

**IX類**：型成形である。底面は偏平、高台は三角状を成す。内体面は無文と有文とある（広幅の帯状のダミ塗り）。見込みに圈線と雲龍文や山水文を描き、外底面に「合」の陽刻銘款がみられる。図 140・159。

**3. 杯**：杯 150 点、小杯 11 点の総数 161 点、が得られている、生産地は景德鎮窯、徳化窯、福建・広東系がある。生産年代は明代と清代がある。清代の杯が小碗と区別がつきにくいことから杯に統一した。図 160 ~ 163 は胴から口縁まで直線的に立つ直口の杯である。図 160 は腰折れで口縁が有段になり、外面に折枝、昆虫を描く。腰には如意頭繫文を巡らし、高台内に方形銘款「福」を付す。15C 後半から 16 C 前半に位置づけられ生産地は景德鎮窯が考えられる。図 164・165・175・176 は胴部に丸みを持つやや内湾気味の直口の杯である。図 166 ~ 170 は腰にやや張りがあり口縁は外反している。図 180 は高杯である。胴は球状に丸く、内底が丸く窪む。脚部は中空で底面に向かい「八」の字状に広がる。見込みに二条圈線と「福」の字款を付している。図 181 ~ 190 は小杯である。図 181 ~ 183・188 は外反口縁の小杯。図 184 ~ 186・189・190 は直口口縁の小杯である。図 187 は八角杯である。図 188 ~ 190 は型押成形である。

**4. 鉢**：鉢が 16 点、うち大鉢が 2 点出土している。図 192 は高台の断面形態が台形状。外面の高台脇に圈線を施す。見込みに圈線と花文を描いている。図 193・194 は肉厚の大型鉢で図 194 は外面に「寿」の字文を施し見込みは圈線を巡らし露胎している。図 193 は高台の断面形態は台形状。外面の高台に圈線を施し見込みを蛇の目釉剥ぎし畳み付けは露胎する。

**5. 深鉢**：2 点得られた。胴部資料である。口径に対して器高の低い器種が推測でき、香炉か植木鉢と考えられる。外面は如意頭雲文の帯文に牡丹唐草文を描いている。図 210。

**6. 瓶**：総数 43 点出土し図 195 ~ 205 に示すものである。図 195 は口縁がラッパ状に外に開き外反する。口唇は舌状をなす。外面に蕉葉文を描くもので生産年代は 16C ~ 17C 位置づけられ、生産地は景德鎮窯である。図 199 ~ 202 は胴の丸い頸の締まる瓶である。図 200 は胴の最大径が肩にあり頸部に向かい「八」の字状に窄む錨形状の肩を有するものである。外面に圈線と如意頭繫文を巡らし、果物文を描く。生産年代は 16C ~ 17C に位置づけられ、生産地は景德鎮窯である。図 196 ~ 198 は長径瓶が考えられる。図 198 は胴部に偏平な面を持つ角瓶で外面に梅と青海波の窓絵を描くものである。生産年代は 15C 後半 ~ 16C 代に位置づけられ生産地は景德鎮窯である。図 204・205 は底部である。高台はいずれも外割りで断面形態は三角状。外面に花文を描き略化した蓮弁文や如意頭繫文を巡らす。図 204 高台内に四角款を付している。図 205 の生産年代は 15C 後半 ~ 16C 代。図 204 は 17 C 前半に位置づけられ生産地はいずれも景德鎮窯である。

**7. その他**：そのほかに蓋物碗・壺・水注・合子・蓋物・レンゲが得られている。図 191 は蓋の付く碗が考えられる。

第 53 表 染付皿分類 (小分類があるもののみ)

分類	小分類	文様構成
I	1	外面 複数文 口縁文様：一条圈線 胴部文様：宝相花唐草文 腰部文様：一条圈線
		内面 単文 内底文様：二条圈線、玉取獅子文 十字花文、菊花文
	2	外面 複数文 胴部文様：唐草文 腰部文様：二条圈線 高台文様：一条圈線
		内面 複数文 胴部文様：唐草文 内底文様：二条圈線、十字花文
II	1	外面 複数文 口縁文様：波濤文帯 腰部文様：蕉葉帯文
		内面 複数文 口縁文様：一条圈線 胴部文様：略化唐草文 内底文様：二条圈線、捻子花文、蕉葉文
	2	外面 無 無文
		内面 複数文 内底文様：二条圈線、花唐草
	3	外面 無 無文
		内面 単文 内底文様：二条圈線、「寿」字文 草花文(文字可能性あり)
	4	外面 無 無文
		内面 単文 口縁文様：幅広一条圈線 内底文様：蕉葉文(沢瀉か?)
	5	外面 単文 胴部文様：渦巻状唐草 腰部文様：二条圈線 外底文様：蕉葉文帯
		内面 複数文 胴部文様：十字花文 内底文様：二条圈線、捻子花文
V	1	外面 圈線 口部文様：一条圈線 腰部文様：一条圈線
		内面 圈線 口縁文様：一条圈線 内底文様：一条圈線
	2	外面 単文 口部文様：一条圈線、草花文
		内面 圈線 口縁文様：一条圈線

外面は氷裂文を描く。図 206 は水注、注ぎ口のみ資料である。注口縁部に幅広の覆輪状ダミ塗りと抽象的な文様を描く。

図 207 は型押成形による箱形の合子蓋である。上面観は分銅形。図 208 はレンゲの身部で内底に唐草文を描く。

8. ベトナム産：碗と皿が得られている。図 211 は腰部に丸みを持つ碗の胴部で、外面に草花文を描く。生産年代 17C。

図 212 は腰の張る皿で外面にラマ式蓮弁文を描き、内面は唐草文、見込みに草花文を描く。生産年代 15C。

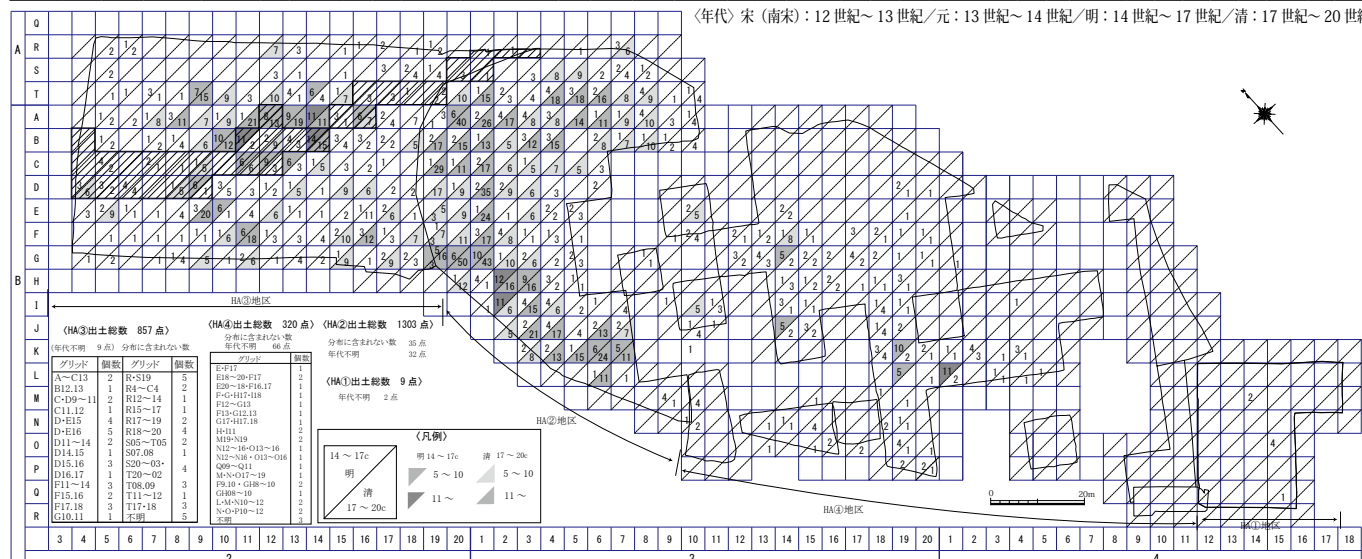
第 54 表 染付碗出土量

年代	産地	14c~17c 明										17c~20c 清										不明			14c~17c 明	合	地区別計			
		景德鎮窯		福建・広東系		漳州窯		不明		景德鎮窯		福建・広東系		德化窯		漳州窯		中国		不明		景德鎮窯	福建・広東系		不明			ベトナム		
		口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底			口	底	口
HA③	I		1	4	1	2	1																						44	
	I or II 遺構																													1
	II	1	4	8	8	7	1	5																					216	
	III 遺構	1	16	12	17	17	4	13																					385	
	III下 遺構																												20	
	IV 不明																												9	
HA②	I																												63	
	II上																												108	
	II	8	9	15	19	17	3	2	1	14	10	5																	842	
	III 遺構	1	2																										39	
HA④	I																												2	
	II 遺構	1																											9	
	II	6	7																										33	
	II~III 遺構	3																											113	
	III	3																											25	
HA①	I																												64	
	III下																												2	
合計		2	46	42	53	52	38	28	3	2	39	34	16																1989	
		355										1549										84			1					

第 55 表 染付皿出土量

(年代) 宋(南宋): 12世紀~13世紀/元: 13世紀~14世紀/明: 14世紀~17世紀/清: 17世紀~20世紀

年代	産地	14c~17c 明										17c~20c 清										不明			明	合	遺跡別計		
		景德鎮窯		福建・広東系		漳州窯		中国?		不明		景德鎮窯		福建・広東系		德化窯		不明		景德鎮窯?	福建・広東系		不明		ベトナム				
		口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底			口	底
HA③	I																												10
	II 遺構																												25
	II	2	10	2	13																								48
	III 遺構																												2
	IV 不明																												2
HA②	I																												9
	II上																												23
	II	2	13	2	9																								89
HA④	I																												4
	II 遺構																												10
	II	1	3																										14
	II~III 遺構	1																											1
HA①	I																												6
	III 遺構	1	3																										19
合計		8	29	7	45	1	3	1	4	2	1	1	1	6	1	12	2	2	1	8	53	13	33	3	4	1	8	268	
年代別計		122										128										17			1				



第 96 図 染付 平面分布



第57表-2 染付(碗・皿) 観察一覧

第図版	図番号	器種	部位	口径器高(cm)	底径(cm)	分類	器形・文様構成	釉・呉須	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第97図・図版63	12	碗	底	—	5.6	IV-1	高台は細身で断面形態はやや方形に近い。見込みが僅かに窪む。外面に如意頭文を巡らし高台脇と高台を二条の圈線で閉じる。内底面に二条の圈線を配し草花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA③ A14 II 台1449
	13		底	—	6.0	I-5	腰が張り見込みは広くやや盛り上がる。高台は細身で断面形態は三角。外面高台脇と高台に一条か二条の圈線で閉じる。内底面に二条の圈線を配し野菜文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C末～16C前 景德鎮窯	HA③ E9 II S-39 台1076
	14		底	—	5.0	I-4	腰が張り、高台は畳付を偏平に研磨し細身で断面形態はやや方形に近い。外面に線刻文と草花文を描き高台脇に二条の圈線を配している。内底面に二条の圈線と梅樹を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA③ R16 II 台1932 HA③ A18 II 台3071
	15		胴	—	—	I～III	胴部にやや丸みを持つ胴部片である。外面に牡丹唐草文を描き高台脇に二条の圈線を配する。内底は二条の圈線を巡らし草花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C後～16C初 景德鎮窯	HA③ T14 II 台2594
	16		底	—	5.8	IV-1	高台は細身で断面形態は方形に近い。内底は窪み通過心である。外面腰に如意頭文。高台に二条の圈線を配する。内底面に二条の圈線を配し草花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	15C末～16C前 福建・広東系	HA④ H・I11 II SD51 台3215
	17		底	—	4.7	II	腰がやや張り。高台の断面形態は三角。外面腰部に二条の圈線を配する。内底面に二条の圈線を配し草花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	15C末～16C中 景德鎮窯	HA④ G1 II 瓦屋 台1725
	18		底	—	6.2	I-2	腰に張りがあり高台の断面形態は三角。腰部外面に蕉葉文を描く。内底面に二条の圈線と草花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 細	15C末～16C前 景德鎮窯	HA③ A14 II 台1138
	19		底	—	5.2	IV-2	高台の断面形態はやや方形に近い三角。内底は下がりぎみの蓮通心である。外面文様は唐草文を描き高台に二条の圈線を配する。内底面に二条の圈線を配し草花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	15C末～16C前 福建・広東系	HA② A3 II 祝殿 台1615
	20		底	—	6.0	I-5	腰が張り立つ。高台は細身で断面形態はやや方形に近い。外面に草花文を描き高台脇と高台を二条の圈線で閉じる。内底面に二条の圈線を配し樹文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA③ A16 II 台1424
	21		底	—	5.8	V～VII	高台は断面形態が三角状を成す。内底面に二条の圈線と十字架文が確認できる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ D19 II 台2000
	22		口	14.4	—	VII	腰折れ、胴部は直線で開き立つ。口縁は直口。口唇は丸い。外面にと波壽文を二条の圈線で挟み、アラベスク文を描く。口縁内は二条の圈線を配し見込みに圈線。小野分類D群	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	16C前 景德鎮窯	HA④ G14 II 台2242 HA④ G14 II 台2234 HA④ H15 II 台3067
	23		口	—	—	V	直口口縁で口唇の断面形態はやや角張る。外面に上下の二条の圈線と波壽を帯状に巡らし下に蕉葉文を施す。内面は一条の幅広圈線を巡らしている。	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ G12 III 台2221
	24		口	—	—	V	直口口縁で口唇の断面形態は角張る。外面に上下の二条の圈線の間に花詰文を施す。内面は一条の幅広圈線を巡らしている。	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ F17 II 台2155
	25		口	14.7	—	VII	胴部は直線的に開き立ち、口縁は直口を成す。口唇は尖る。外面に唐草文を上下の二条の圈線で挟み帯状に巡らしている。下にアラベスク文がみられる。内面は二条の圈線。	淡青白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ T13 II 台3145
	26		口	12.7	—	V	直口で口唇の断面形態は角張る。外面は口唇下に呉須描の海面に白波の立った波壽文を巡らしている下に二条の圈線を配している。内面は一条の圈線を巡らしている。	明緑灰色 呉須の発色は濃い	白色 密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA② H2 II 瓦屋 台1161
	27		口	12.6	—	V	胴部はやや直線的に立つ。口縁は内湾気味の直口。口唇は丸い。外面に上下の二条の圈線と波壽を巡らし下に草花文を描く。口唇部内面は部分的に圈線。焼成不良	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ C11 II 台3214
	28		底	—	6.0	V	腰部に丸く、高台は細身で断面形態は方形。内底は下がりぎみ。外面に蕉文を描き高台脇と高台に二条の圈線で閉じる。内底面に二条の圈線を配し法螺貝文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C末～16C中 景德鎮窯	HA④ L1 II 台2696
	29		底	—	7.0	VI	腰が張り高台は細く断面形態は三角状。外面にアラベスク文を描き、高台脇と高台に圈線。内面は如意頭文窓絵に草花を描き、窓外に渦文を充填。見込みに圈線と草龍文。全面に貫入	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	15C末～16C中 景德鎮窯	HA② F2 II 名嘉座 台1580
	30		底	—	6.0	VII	腰折れ。胴部は直線的に開く。高台はやや内削りの断面形態は三角状を成す。外面に草花文を描く。内底面に二条の圈線と十字文が確認できる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C後～16C中 景德鎮窯	HA③ A10 II 台2649
	31		底	—	6.2	VII	腰折れ。胴部は直線で外開き立ち上がる。高台は細く、断面形態は三角。外面にアラベスク文を描き高台脇と高台に圈線を配する。内底面に二条の圈線を配し花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C後～16C中 景德鎮窯	HA③ D5 I 台653
	32		口	—	—	I-3	口縁が外反し、口唇の断面形態は丸い。外面に幅に違いのある圈線を二条と樹文を描いている。内面は一条の圈線を巡らしている。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C代 景德鎮窯	HA④ L1 II 台2700
33	口	—	—	I-3	口縁が外反し、口唇はやや丸い。口唇は覆輪を施す。外面に幅に違いのある圈線と雲文を描いている。内面は一条の圈線を巡らしている。	淡青白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	16C代 景德鎮窯	HA② A2 II 祝殿 台487		
34	口	—	—	I-3	胴部は大きく外に開き口縁は外反する。口唇は肥厚し丸い。口唇に鉄軸の覆輪。外面に幅の違う二条の圈線と宝相唐草文を描く。内面は一条の圈線を巡らし岩に草を描く。	淡青白色 呉須の発色は濃い	白色 密	16C代 景德鎮窯	HA④ N12-16・O13-16 I 台2764		
35	底	—	5.6	VII	腰折れで立ち上がりは直線的。断面形態はやや三角状。外面にアラベスク文を描く。高台脇に二条、の圈線を配する。内底面に二条の圈線を配し満花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C代 景德鎮窯	HA④ K2 II 台2613		
36	底	—	5.6	VII	腰折れの胴部は直線的に開き立ち上がる。高台の断面形態はやや三角状。外面にアラベスク文を描く。内底面に二条の圈線を配し満花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C代 景德鎮窯	HA④ K10 II 台2641		
37	底	—	5.0	—	高台は断面形態が三角状を成す。内底面に満巻文を施文している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C頃 景德鎮窯	HA④ J14 III 台2563		
38	底	—	5.6	V	高台は細身で断面形態は方形に近い。見込みが僅かに窪む。外面にアラベスク文を描いている。高台脇と高台に二条の圈線で閉じる。内底面に二条の圈線を配し捻子花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C～16C 景德鎮窯	HA② A20 II 祝殿 台1294		
39	底	—	5.3	VII	腰折れ、胴部は直線で開き立ち上がる。高台は内削りの断面形態は三角状。外面にアラベスク文を描き、高台脇と高台に圈線を配する。内底面に圈線を配し十字花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C代 景德鎮窯	HA④ L19 III 台2257		
40	底	—	6.0	VI	腰はやや張り、高台は畳付を偏平に研磨し細身で断面形態は三角状。外面に唐草文を描き高台に二条の圈線を配している。内底面に二条の圈線と十字花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ S17 II 台1646 HA③ S17 II S-35 台1879		
41	底	—	5.6	I-4	高台は内削りで断面形態がやや方形の三角状。高台脇に一条、高台に二条の圈線を配する。内底面に圈線と梅月文を描く。小野分類B、C群。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ F18 III 台2183		

第57表-3 染付(碗・皿) 観察一覧

第図版	図番号	器種	部位	口径器高(cm)	底径(cm)	分類	器形・文様構成	釉・呉須・貫入	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第98図・図版64	42	碗	底	—	5.5	V	腰が張り、高台は内割りで細い、断面形態は三角状。内底は蓮子心。外面の中心に二条圏線、下段に蕉葉文を描く。高台脇と高台に圏線。見込みに圏線と蓮華文を描き、空間を斜線で埋める。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C代 景德鎮窯	HA④ G12 III 台2217 HA④ H・111 II SD51 台3215 HA④ I14 III 台2474
	43		底	—	6.2	VI	丸みのある腰から外に開きながら立つ。高台の断面形態は三角状。外面に唐草文を描き高台脇に一条圏線を閉じる。内底面に一条圏線を配し草花文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C頃 景德鎮窯	HA④ D19 II 台2001 HA④ E9 II 台96
	44		底	—	—	VIII-2	腰が高く、高台は細身、内底は傾頭心である。外面に松、仙人を描き、高台脇と高台に圏線、内底面に圏線と草花文を描く。高台内に圏線に銘款を付す。小野分類E群。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後 景德鎮窯	HA③ A16 II S-12 HA③ T13 II S-11 HA③ B14 II 台543・972・2823
	45		口	15.3	—	VIII-1	やや内湾気味に外に向かい開く口縁は直口。口唇は舌状。外面に二条圏線に唐草文を描く。内面は二条圏線を配している。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ L1 III SP1945 台4443
	46		口	12.2	—	VIII-1	逆「八」の字状に外開く直口碗である。口唇は丸い。外面に一条圏線に豹皮文を描く。内面は一条圏線を配している。	淡灰白色 呉須の発色は悪い	灰白色 密	16C後～17C前 福建・広東系	HA③ C12 II 台3182
	47		口	12.0	—	IX	外反口縁。口唇に刻みを入れた輪花口縁で口唇断面形態は角状。外面に一条の圏線と花鳥画を描き、内面は二条圏線を配する。わずかに貫入が見られる。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後～17C初 景德鎮窯	HA④ K10 III 台2607
	48		底	—	5.6	X	高台の断面形態はやや四角。見込みは蛇の目軸割ししている。内底見込みに草花文を描く。(円盤状製品)	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後～17C初 福建・広東系	HA④ E14 II SD42 台3146
	49		底	—	4.8	VIII-2	高台の断面形態は細身の三角状。内底は中心が盛り上がる。外面に人物文を描き、高台脇と高台に圏線。見込みに圏線と山水文を描く。高台内に圏線と「太・下」の字が認められる。「天下太平」か。焼成不良。	淡灰白色 呉須の発色は不良 焼成不良	灰白色 密	16C末～17C初 景德鎮窯	HA④ P19 II 台2887
	50		底	—	5.2	VIII-2	高台の断面形態は細身の方形。内底は中心がやや盛り上がる。外面は高台脇と高台に一条圏線を配する。内底面に二条圏線を配し山水文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C末～17C初 景德鎮窯	HA③ D5 II 台1412
	51		口	12.8	—	VIII-1	腰部に丸みを持ちほぼ直線的に立ち口縁は直口を成す。口唇は舌状。外面に二条圏線に竹に鳥を描いている。口縁内面と見込みに二条圏線を配している。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	17C前 景德鎮窯	HA④ N12-N16・O13-O16 I 台2763
	52		口	15.8	—	X-2	口縁が外反し、口唇の断面形態は丸い。外面は二条の圏線と唐草を描き内面は芝垣と二条圏線を巡らしている。	淡灰白色 呉須の発色は悪い	灰白色 密	16C後～17C代 福建・広東系	HA④ G19 III 台2309 HA④ K1 II 台2596
	53		底	—	6.4	X-1	丸みのある腰から外に開き立つ。高台の断面形態は三角状。外面に唐草文を施す。内底面は一条圏線を見込みと内底の中心に輪状に描く。見込みは蛇の目軸割ししている。	淡灰白色 呉須の発色は悪い	灰白色 密	16C後～17C代 福建・広東系	HA③ C12 II S-8 台919
	54		底	—	5.0	X-1	高台は外割りの断面形態は台形。外面に唐草文を描き、高台脇に圏線を配する。見込みに圏線と「小」の字を配し、蛇の目軸割ししている。外底は露胎している。	淡灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	16C頃 景德鎮窯	HA④ I18 II 台2497 HA④ J18 II 台2571
	第99図・図版65		55	口	14.4	—	XI	口縁が直口の撥形碗。口唇は丸状。外面の上位に半梅花文を圏線で挟み巡らす。下位は簡易な唐草文を施す。内面は圏線を口縁と見込みに配し、釉は見込みまで施す。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	16C後～17C前 福建・広東系
56		口	15.2	—	XII	胴部は逆「八」の字状、口縁は直口の撥形。口唇は丸状。外面は上位に唐草文を上下の圏線で挟んだ帯状文を巡らす。内面は圏線を配している。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	16C後～17C代 福建・広東系	HA② F1 II 瓦屋 台1581	
57		口	12.4	—	XII	口縁は直口。撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。外面は上位に上下の圏線で挟んだ帯状の唐草文を巡らす。内面は一条圏線を配している。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C前 福建・広東系	HA③ A16 II 台2926	
58		口	14.0	—	XIV	胴部は逆「八」の字状に大きく外に開き口縁は端反り。口唇は尖る。外面は草花文を施す、内面は一条圏線を口縁と見込みに配し、釉は見込みの際まで施す。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後～18C前 福建・広東系	HA② T6 II 晶 台1982	
59		口～底	13.0 5.7	6.9	XIV	口縁が直口する撥形碗である。口唇は丸状。高台は外割りの断面形態は三角状。内底は中心が窪む。外面に圏線と唐草文を描く。置付けを釉割しし内底は蛇の目軸割し。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後～18C前 福建・広東系	HA② A1 II 祝殿 台495・470	
60		口	11.4	—	XIV	逆「八」の字状に大きく外に開き口縁は直口する撥形碗である。口唇の断面形態は舌状。外面に一条圏線と唐草文を描き内面は一条圏線を配する。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後～18C前 福建・広東系	HA③ R18-20 II 台1605	
61		口～底	15.0 3.3	6.8	XV	腰部から大きく外に開き、口縁は直口する、浅い撥形である。口唇は丸い、高台は低く、断面形態は四角。外面に唐草文を描き、内面は圏線を配する。外底と内底は露胎。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後～18C前 福建・広東系	HA③ D13 II 台3247	
62		口～底	14.8 5.7	7.0	XV	高台径が大きく胴部は外に開き、口縁は直口、口唇は丸状。高台は外割り、断面形態は台形。内底は中心が盛り上がる。外面に圏線と唐草文を描く。内面は圏線を配し、外底と内底は露胎。轆轤痕顕著。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後～18C前 福建・広東系	HA③ B14 II S-20 台1017・2115 HA③ B14 II 台2423 HA③ A13 II 台2708	
63		口～底	16.7 6.0	8.4	XIV	腰折れ、胴部は直線で開き立つ。口縁は直口。口唇は丸状。高台の断面形態は方形。先端三角状。外面に圏線と草花文を描く。口縁内に圏線、見込みに圏線と蛇の目軸割し。高台内の釉を拭き取る。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	17C後～18C前 福建・広東系	HA④ J18 II 台2571	
64		底	—	6.8	XI	腰にやや丸みを持つ。高台の断面形態は四角状。外面に唐草文を描き高台脇に一条圏線で閉める。見込みに一条圏線を配する。外底と内底は露胎。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C代 福建・広東系	HA② H2 II 瓦屋 台1153	
65		底	—	7.0	XIV	高の断面形態は三角。外面に唐草文を描く。内面見込みに一条圏線を配し内底と外底は露胎している。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	17C後～18C前 福建・広東系	HA③ G17 II S-10 台1306	
66		底	—	7.0	XIV	高台は外割りの断面形態は四角。外面に唐草文を描く。内面見込みは蛇の目軸割しし外底は露胎している。	淡青白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	17C後～18C前 福建・広東系	HA③ E15 II S-16 台2217	
67		底	—	6.0	XI	腰部から直線的に外に開き立ち上がる。高台の断面形態は四角状。外面に唐草文を描く。見込みに一条圏線を配する。釉は見込みの際まで施す。外底は露胎している。	淡灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	17C末～18C前 福建・広東系	HA② H2 II 瓦屋 台1152・1168	
68		底	—	6.2	XIV	腰部は屈曲し逆「八」の字状に開く、高台は内割りの断面形態は台形。外面に唐草文を描き高台脇と高台に圏線。見込みに蛇の目軸割しを挟み圏線を配す。高台内は露胎。	淡灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	16C後～17C前 福建・広東系	HA④ I19 III SP1333 台4159	
69		底	—	7.2	XII	腰部が丸く、逆「八」の字状に開き立つ。高台は外割りの断面形態は台形。内底は中心がやや盛り上がる。外面に圏線と帯状唐草文を描き、高台脇に圏線。見込みに圏線と字文か？を施す。内外底は露胎。轆轤痕顕著。	淡灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 密	17C前 福建・広東系	HA③ B14 II S-20 台847	
70		口	14.0	—	XIII	口縁は直口、口唇は角張り鉄軸の覆輪を施している。	淡灰白色	灰白色 密	17C頃 福建・広東系	HA③ F16 II S-3 台871	

第三章 5

第57表-4 染付(碗・皿) 観察一覧

第図版	図番号	器種	部位	口径高(cm)	底径(cm)	分類	器形・文様構成	釉・呉須・貫入	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第99図 ・図版65	71	碗	口~底	15.4 6.0	7.6	XIII	腰部は丸く、逆「八」の字状に立つ。口縁は直口。口唇は丸い。高台は外削りで断面形態は四角。内底は中心が盛り上がる。外面は口縁、腰部、内面は口縁、見込みに、圏線。内外底は露胎。無文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後~17C 福建・広東系	HA③ A6 II 台1681
	72		口	16.8 —	—	XIII	腰部に丸み持ち逆「八」の字状に大きく外に開き直線的に立つ。口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。外面に一条圏線を配し口唇に鉄釉の覆輪を施している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後~17C 福建・広東系	HA③ D16 II 台3203
	73		口	14.8 —	—	XIII	腰部に丸み持ち逆「八」の字状に大きく外に開く直線的に立つ。口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。外面の口縁と腰部に一条圏線を、焼き-悪い。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後~17C 福建・広東系	HA② H2 II 瓦屋 台1152
	74		底	— —	6.4	XIII	高台は外削りの断面形態は四角形。内底は中心が盛り上がる。外面の口縁と腰部に圏線。内面は口縁と見込みに圏線。内底は蛇の目釉剥きし外底は露胎している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	16C後~17C 福建・広東系	HA③ A16 II 台2876
	75		口~底	13.2 5.2	6.2	XVI	腰部から直線的に大きく外に開き立ち口縁は外反する。口唇は角状。高台の断面形態は台形。外面に圏線と唐草文と印花文を施文している。外底と内底は露胎している。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA③ A12 II S-7 台991
	76		口~底	14.1 6.4	8.2	XVI	底径が大きく、腰部は逆「L」字状に削り、直線に開き立つ。口縁は直口。口唇は丸い。高台は外削りで断面形態は台形。内底は窪む。外面に印花菊花文と草花文を施文。内底は蛇の目釉剥き、高台は露胎。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA② G20 II 瓦屋 HA② G1 II 瓦屋 台1042・1046・1033・1035 HA② B4 II 祝殿 台1205
	77		口~底	13.0 7.3	5.2	XVI	腰部から直線的に外に開き立ち、口縁は直口。口唇は丸状。高台は外削りの断面形態は台形。外面に唐草、鶴丸の印花文を施文。内面に圏線。内底は蛇の目釉剥き、畳付露胎。	淡灰白色 呉須の発色は黒い	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA② G1 瓦屋II 台1727
	78		口~底	13.0 5.4	7.4	XVI	腰部が丸く外に開き立つ。口縁は直口。口唇は丸い。高台は外削りの断面形態は三角形。外面に唐草文、印花菊花文を施文。内底は蛇の目釉剥き、畳付露胎。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA④ M15 III SP202 HA④ M・N19 III SK15 HA④ L20 II 台 3482・3247・2731
	79		口	14.0 —	—	XVI	直口口縁で口唇の断面形態は丸状。外面に唐草、丸鶴文の印花文を描かく。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA② A20 II上 祝殿 HA② B1 II 祝殿 台1523・1942
	80		底	— —	6.4	XVI	腰部から直線的に逆「八」の字状に開く。高台は外削りの断面形態は台形。外面に印花の丸鶴文を描かく。内底、外底は露胎している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA② A5 II アガリミチ 台2509
81	底	— —	8.8	XVI	高台は外削りの断面形態は先端の丸い四角。内底は中心が窪む。外面に印花文、見込みに圏線と菊花印花文を施文。内底は蛇の目釉剥き。高台内円状に施釉、畳付け露胎。	淡青白色 呉須の発色は普通	黄白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA③ B14 II S-20 台1018		
82	口~底	15.4 7.7	6.5	XVII	腰に丸みを持ち、直に立ち上がる。口縁は直口。口唇は丸い。高台の断面形態は細く先端が丸い方形。外面に圏線と牡丹唐草文を描き、下位に蓮弁文を巡らす。高台脇と高台に圏線。内口縁は圏線、見込みに圏線と牡丹唐草文を施文。	淡青白色 呉須の発色は良い	白色 密	17C末~18C前 景徳鎮窯	HA② A20 II 祝殿 HA② B3 II 祝殿 台1304・1341		
第100図 ・図版66	83	碗	口	15.0 6.8	7.0	XVIII-1	腰部は丸みを持ち、直線的に立ち、口縁は直口。口唇は丸みを持つ。高台の断面形態は先端の丸い方形。外面に圏線と菊花唐草文を描き、高台脇に圏線。高台に圏線で閉じる。口縁内は圏線。見込みに草花文を施文。外底に圏線と○福か○利の銘款。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	18C 福建・広東系	HA② I 台657
	84		口	15.6 —	—	XVIII-1	胴部に丸み持ちながら直線的に立ち上がる直口口縁である。口唇は丸みを持つ。外面に二条圏線と菊花唐草文を施文。内面は二条圏線を配する。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	18C 福建・広東系	HA② T5 II 晶 HA② C20 II上 祝殿 HA② A3 II 祝殿 台2589・571・1614
	85		口	13.2 —	—	XIX-1	胴部が丸く、開き立つ。口縁は外反。口唇は舌状、外面に圏線を配し、唐草文を施文。半梅花文で構成する。下位に圏線と縦線の蓮弁文。内面は口縁に圏線、内底に圏線。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② J6 II 名嘉座 台2634
	86		口~底	15.8 6.6	6.8	XIX-2	腰高で直線的に開き立つ。口縁は端反。口唇は丸く、高台の断面形態は方形。外面に半梅花文、寿文の区画文、下位は縦線の蓮弁文を施文。高台脇と高台に圏線。口縁内に圏線と草花文。高台内に「和美」の銘款。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA④ J10 II 台2530
	87		口~底	13.5 1.3	6.1	XIX-2	腰が張り、直線的に開き立ち、口縁は外反。口唇は丸い。高台の断面形態は方形。外面に圏線と半梅花文、寿文で構成した区画文を巡らし下位に縦線の蓮弁文を施文。高台脇と高台に圏線。口縁内に圏線、見込みに圏線。高台内に圏線。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA③ T15 II 台2064 HA③ A15 S-13 II 台2212
	88		口~底	13.2 7.0	6.4	XIX-2	腰に僅かに丸み、胴部は直線的に開き立ち。口縁は端反。口唇は丸い。高台の断面形態は方形。内底は窪む。外面に圏線、半梅花文、寿文の区画文を施文。下位に縦線の蓮弁文。高台脇と高台に圏線。口縁内に圏線、見込みに圏線と「上」の銘款。高台内に「和美」の銘款。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D1 II 祝殿 台1371・1466・1468
	89		胴	— —	—	XIX-5	胴部に僅かな丸みを持ち開きながら立ちあがる。外面龍文を施文している。下位に圏線で上下を挟む縦線の蓮弁文を配している。内底面に二条圏線を配している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA③ T9 I 台1184
	90		口~底	14.2 6.3	6.8	XIX-2	口縁は端反。口唇は丸く、高台の断面形態は先端が尖る方形。外面に圏線、半梅花文、寿文を区画文で構成し巡らす。下位に圏線と上下を挟む縦線の蓮弁文。高台脇と高台に圏線。内面は口縁に圏線。見込みに圏線と「人」の字文。高台内に「和美」の銘款。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D1 II 祝殿 HA② K4 II 三良 SD01 台829・831・1129・1486
	91		口	14.8 —	—	XIX-4	口縁は口唇直下を折外反させる。口唇は舌状、外面に龍文を施す。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② T2 II 祝殿 台382
	92		口~底	12.6 5.2	6.0	XIX-3	腰は張り直線的に開き立ち上がる。口縁は端反。口唇は丸い。高台の断面形態は先端が尖る台形。外面に圏線と唐草文を描く。腰部に圏線を高台脇と高台に巡らす。口縁内に圏線、見込みに圏線と花卉。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② B20 II 祝殿 台850
	93		口~底	15.2 6.5	7.4	XIX-4	腰が張り折るよに、直線的に立ち上がる。口縁は端反。口唇は丸い。高台は内削りの断面形態は先端が尖る方形。外面に圏線と唐草文。下位に簡易蓮弁を巡らす。口縁内に圏線、見込みに圏線と花卉。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA③ F16 II S-3 HA③ F16 II 台871・1758
	94		口~底	12.6 5.9	6.8	XIX-3	腰は丸く、直線的に外に開きながら立ち。口縁は端部を僅かに外に折る。口唇は舌状。高台の断面形態は方形。外面に唐草文、口唇の平坦面に圏線を巡らす。見込みに圏線。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D2 II 祝殿 HA② D1 II 祝殿 台1368・1917
	95		口	14.0 —	—	XIX-4	腰は丸みを持ち直線的に外に開き立ち上がる。口縁は端反。口唇は舌状を成す。外面に唐草文、内面は口唇直下に一条圏線を巡らし見込みに二条圏線を配している。見込みの位置が高い。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② I 台663 HA② K6 II 三良 HA② T5 II アガリミチ HA② J6 II 名嘉座 台1829・2500・2626

第57表-5 染付(碗・皿) 観察一覧

第図版	図番号	器種	部位	口径器高(cm)	底径(cm)	分類	器形・文様構成	釉・呉須・貫入	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第100図・図版66	96	碗	底	—	7.6	XIX-4	腰はやや張る。高台の断面形態は先端が尖る方形。外面に唐草文を描き腰部に二条圏線と上下を挟む縦線の蓮弁文を配している。内面は圏線と銘「玉」の字を入れている。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA③ T12 II S-7 HA③ B9 II S-65 台 715・1060
	97		底	—	6.6	XIX-3	内底は盛り上がる。高台の断面形態は先端の丸い方形。外面に唐草文、内面は見込みに銘款の「二」の字を入れている。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D1 II 祝殿 台 1917
	98		底	—	7.0	XIX-4	腰が張る。高台の断面形態は方形。外面に唐草文を描き、下位に圏線で挟む縦線で表現する簡易蓮弁を巡らす。内面は見込みに圏線と銘款の「上」を入れている。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② A2 II 祝殿 HA② D2 II 祝殿 台 472・989
	99		底	—	7.6	XIX-4	高台の断面形態は先端が尖る方形。外面の腰部に上下を挟む縦線の蓮弁を描き、高台内に花文を配している。内面は見込みに二条圏線と銘款「一」の字を入れている。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② E1 II 祝殿 台 1283
	100		底	—	—	XIX-4	外面に唐草文を描き上下の圏線に縦線の蓮弁を腰部に描き、内面は見込みに二条圏線と文様を描くが梵字か草花文か不明である。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA③ S12 II S-7 台 714
	101		口～底	12.1 5.4	6.7	XVII-2	腰部は丸く、直線的に立つ。口縁は直口。口唇は舌状。高台の断面形態は台形。外面に圏線と丸文を描き、高台に圏線。口縁内と見込みに圏線。外底に圏線。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA③ T5 II 祝殿 台 364
	102		口～底	12.3 5.6	6.5	XVII-2	腰部に丸み、直線的に立ち。口縁は直口。口唇は舌状。高台の断面形態は台形。外面に草花文を描く。見込みは花卉を描き、蛇の目輪刺している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D2 II上 祝殿 HA② E1 II 祝殿 台 731・1024・1284
	103		底	—	6.6	XIX-3	腰部はやや丸み持ち高台の断面形態は先端の丸い方形。外面に唐草文を描き高台脇に二条圏線、高台に二条圏線で閉じる。内面は見込みに二条圏線を配している。	淡青白色 呉須の発色は濃い	白色 密	17C末～18C前 景德鎮窯系	HA② C2 I 祝殿 HA② B4 I 祝殿 台 1962・2363
	104		底	—	6.6	XIX-3	高台の断面形態は先端の尖る方形。外面に唐草文を描き高台脇に二条圏線、高台に二条圏線で閉じる。内面は見込みに二条圏線と草花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は濃い	白色 密	17C末～18C前 景德鎮窯系	HA② D20 II上 祝殿 HA② D2 II 祝殿 台 739・2584
	105		底	—	—	—	内面見込みに二条圏線と梅花文を描く。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	18C 福建・広東系	HA② G5 II 名嘉座 台 980
106	底	—	7.2	XIX-5	高台は外側で断面形態は方形。外面は腰部に圏線と上下を挟む縦線の簡易蓮弁を施文し、高台に圏線。見込みは圏線と葉文を描き、高台内に「金」の銘款。円盤状製品	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	18C 福建・広東系	HA③ B14 II S-20 台 847		
107	口～底	14.6 6.7	7.4	XIX-5	腰が張り外に開き立つ。口縁は端反り。口唇は丸い。高台の断面形態は方形。外面は龍文を描き、下位に縦線の蓮弁文を施文。見込みに葉文を施文。高台内に銘款「金美」。	淡青白色 呉須の発色は普通	白色 密	18C 福建・広東系	HA② T9 II 祝殿小 HA② A20 II上 祝殿 台 633・1521		
第101図・図版67	108	皿	口～底	11.8 2.8	7.0	I-1	口縁は外反し高台は断面形態が三角状。外面に宝相花唐草文を描き、見込みに玉取獅子文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ K19 III 台 2679
	109		口～底	11.4 2.9	6.4	I-1	口縁は外反し高台は断面形態が三角状。外面に宝相花唐草文を描き、見込みに玉取獅子文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA③ C5 II 台 1333 HA③ C7 I 台 1384
	110		口	10	—	I-1	口縁は外反し外面に宝相花唐草文を描く。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ F18 III 台 2178
	111		口	12.4	—	I-1	口縁は外反し外面に宝相花唐草文を描く。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ G18 III 台 2322
	112		口～底	12.5 2.7	7.2	I-1	口縁は外反し高台は断面形態が三角状。外面に宝相花唐草文を描き、見込みに玉取獅子文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA② H2 SK1 III 台 2146
	113		口～底	12.2 2.6	7.2	I-1	口縁は外反し高台は断面形態が三角状。外面に宝相花唐草文を描き、見込みに玉取獅子文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA③ E5 II 台 1299
	114		底	—	10.0	I-1	口縁は外反し高台は断面形態が三角状。外面に宝相花唐草文を描き、見込みに玉取獅子文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C前 景德鎮窯	HA④ G13 III 台 2227・2228
	115		底	—	7.0	I-1	高台は細身の断面形態が方形。外面に唐草文を描き、見込み十字花文を描き余白に渦巻文を充填している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C末～16C前 景德鎮窯	HA③ T14 II S-11 台 977
	116		底	—	7.0	I-1	高台の断面形態が三角状。見込み十字花文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ I 台 4599 HA④ F16 III 台 2145
	117		底	—	10.2	I-1	高台の断面形態が三角状。見込み菊花文を施文している。小野分類B群に属すると考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ D4 II 台 1267 HA③ B12 II 台 2809
	118		口～底	10.2 2.7	2.8	II-1	口縁は直口。底部は基筒底。外面に波瀾文、腰に蕉葉文を施文。内面に略化唐草文を描き、見込みに圏線と蕉葉文を施文。置付けは露胎。小野分類C群I。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ F12 III SP969 台 3908
	119		底	—	2.7	II-1	胴は内湾気味に立ち、底部は基筒底。外面腰部に蕉葉文帯を施し見込みに圏線内に蕉葉文を施している。置付けは露胎している。小野分類C群I	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中前 景德鎮窯	HA③ E16 II S-4 台 1493 HA③ S17 II S-35 台 1879
	120		底	—	3.2	II-1	基筒底を外腰部に蕉葉文帯を施し見込みに二条圏線内に蕉葉文を施している。置付けは露胎している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ B16 II 台 2994
	121		底	—	3.0	II-1	口縁は内湾気味の直口。底部は基筒底。外面腰部に蕉葉文帯を施し見込みに圏線内に捻子花文を施文。置付けは露胎している。小野分類C群I	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ D10 II 台 2359
	122		底	—	3.2	II-1	基筒底を外腰部に蕉葉文帯を施し見込みに二条圏線内に蕉葉文を施している。置付けは露胎している。小野分類C群I。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ K19 II SD5 台 2915
	123		底	—	2.8	II-1	胴は内湾気味に立ち、基筒底。外面腰部に蕉葉文帯を施し見込みに圏線内に蕉葉文を施文。置付けは露胎。焼成不良。小野分類C群I。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後～16C中 景德鎮窯	HA② A2 II 祝殿 台 450・476
	124		底	—	3.7	II-2	胴は内湾気味に立ち底部は基筒底をなす。外面は無文見込みに二条圏線内に花唐草文を施している。置付けは露胎している。小野分類C群IV	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ J18 II 台 2571
125	底	—	4.6	II-5	外面胴に渦巻唐草文を施文し、内面に十字花文を白抜きし周囲を点描で充填。見込みに圏線と十字花文を施文。置付けは露胎。小野分類C群Iか。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA④ K2 II 台 2615		
126	底	—	3.2	II-3	底部は基筒底をなす。胴部外面は無文、見込みに二条圏線内に草花文を施している。置付けは露胎している。小野分類C群に属する。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C前～中 景德鎮窯	HA③ C5 II 台 1521		
127	底	—	4.4	II-3	底部は基筒底をなす。胴部外面は無文、見込みに二条圏線内に「寿」字文を施している。外底は露胎している。小野C群IIIに属する。	明緑灰色 呉須の発色は薄い	灰白色 緻密	16C後 福建・広東系	HA④ H19 II 台 2404		

第57表-6 染付(碗・皿) 観察一覧

第図版	図番号	器種	部位	口径器高(cm)	底径(cm)	分類	器形・文様構成	釉・呉須・貫入	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第101図・図版67	128	III	口~底	8.2 2.3	3.2	II-4	口縁は内湾気味の直口。甚苜底。外面は無文、口縁内面に圈線、見込みに蕉葉文を描いている。口唇のみ被熱している。灯明小野分類C群	明緑灰色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	16C後~17C初 福建	HA③ B14 II S-20 台 846
	129		底	—	5.2	V-1	粗製の底部である。高台の断面形態は三角状。高台脇と見込みに圈線を巡らす。内底を蛇の目軸刺きし外底は露胎させている。	淡黄灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 やや細	16C後 漳州窯	HA① O15 I 0010SD 台 140
	130		口	9.8 —	—	V-1	口縁は内湾気味の直口。口縁の外内外に一条見込みに二条の圈線を巡らす	淡黄灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 やや細	16C後 福建	HA① O15 I 0010SD 台 140
	131		底	—	6.0	III	高台の断面形態が三角状。見込みに寿の字文を描く。小野分類E群	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C後 景德鎮窯	HA③ B14 II S-20 台 847
	132		口	12.5 —	—	III	口縁は内湾気味の直口。口縁の外面に一条圈線を巡らし、内面に四方禪文を施文している。薄手である。小野分類E群	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C後~17C前 景德鎮窯	HA② H4 II 名嘉座 台 3693
	133		底	—	7.8	III	高台の断面形態が三角状。見込みに二条圈線と雨龍文を描く。132と同一個体の可能性がある。小野分類E群	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C末~17C初 景德鎮窯	HA② G1 II 瓦屋 台 1043
	134		口	—	—	VI	口縁は罽状に外に張り出すように開く直口。口唇は丸い。口縁の内面に一条圈線と草花文を描く。(大皿)	明緑灰色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	16C末~17C前 漳州窯	HA④ I9 III 台 2433
	135		口	10.0 —	—	V-2	口縁は内湾気味の直口。口縁の外内外面に幅の異なる圈線を一条を巡らす。	明緑灰色 呉須の発色は鉄色	灰白色 細	17C後~18C初 福建・広東系	HA④ G17 III 台 2284
	136		口	10.2 —	—	V-2	口縁は内湾気味の直口。口縁の外内外面に一条圈線を巡らし、外面に草花文を描く。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	17C後~18C前 福建・広東系	HA② D19 II 祝殿 台 263
	137		口~底	8.4 3.4	4.2	IV	口縁は端反りで、身は深め。高台の断面形態は三角。口縁外面に圈線に花枝文、内体面と見込みに圈線と花唐草を描文。高台内に圈線に方形銘款。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 緻密	17C前半 景德鎮窯	HA② D1 II 祝殿台 1468 HA② D1 II 祝殿 台 1915・1917
138	底	—	—	IV	腰部に丸味をもち身はやや深めである。内体面と見込みに一体の草花文を描いている。高台内に二条圈線に方形銘款を付す。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 緻密	16C~17C前半 景德鎮窯	HA② D2 II 祝殿 台 2584		
139	底	—	6.6	IV	腰部に丸味をもち身はやや深めである。内体面と見込みに一体の草花文を描いている。高台内に二条圈線に文を付す。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 緻密	16C中~17C前 景德鎮窯	HA③ C11.12 II 台 1607		
140	底	—	8.7	IX	高台の断面形態が三角状。内体面は広幅の帯状にダミ塗りするものか、見込みに二条圈線と山水文を描く。徳化窯の可能性が高い。型成形	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建	HA② C20 II 祝殿 台 1390		
141	口	17.0 —	—	VIII	口縁は内湾気味の直口、口唇が尖る。口縁の内面に一条圈線を巡らし見込みに二条圈線と文を描く。外面無文。159と同一個体か	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② C19 II 祝殿台 1658		
142	口~底	15.3 3.1	8.7	VIII	口縁は内湾気味の直口、口唇が尖る。高台の断面形態は方形で先端は丸い。口縁の内面に一条圈線を巡らし見込みに二条圈線と山水文を描く。外面無文。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② T4 II 祝殿 台 1553		
143	口	14.2 —	—	VIII	口縁は内湾気味の直口、口唇が尖る。口縁の内面に一条圈線を巡らし唐草文を描く。見込みに二条圈線と花唐草文を施文している。外面無文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA③ A11 II 台 2611		
144	底	—	12.3	VIII	高台の断面形態は方形で先端は三角。見込みに花唐草文を描く。外面無文。高台内に一条圈線。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D2 II 祝殿 台 989・2583		
145	底	—	8.8	VII	高台の断面形態は台形で先端は丸い。外面は高台脇に一条圈線、見込みに二条圈線と半梅花文を描く。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② J3 II 上名嘉座 台 288		
146	口~底	15.4 3.5	8.7	VII	胴は内湾気味。口縁は端反り、口唇が尖る。高台の断面形態は台形。外面に「王」の字文。口縁と高台脇に一条圈線を配する。内面は口縁に幅広圈線や幅広帯文を巡らし、鳥文を描く。高台内に圈線。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA④ E10 II SD52 台 3218・3		
147	口~底	15.2 2.8	8.4	VII	胴部は内湾立ち、口縁は端反り、口唇が丸い。高台は幅広で断面形態は台形。先端は丸い。外面に變形王の字文を描き、口縁と高台脇に圈線。口縁内と見込みに圈線と「志在書中」の人物図を描く。高台内に圈線と字文。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D1 II 祝殿台 361 HA② A2 II 祝殿台 476 HA② B4 II 祝殿台 1333 HA② E1 II 祝殿台 1032 HA② II 台 914		
148	口~底	15.6 2.9	8.3	VII	胴部は内湾気味に立ち口縁は端反り、口唇が丸くなる。高台の断面形態は台形。先端は丸い。外面の口縁と高台脇に一条圈線を配する。内面は口縁に一条圈線を巡らし草花文を描く。見込みに二条圈線が認められる。	淡青灰白色 呉須の発色は濃い 鉄色が混ざる	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA③ R15-17 IV 台 2144		
149	口~底	12.8 2.9	6.4	VII	胴部はやや直線的に立ち口縁は端反り、口唇が尖る。高台はやや断面形態は台形。外面に草花文を描き、口縁と高台脇に一条圈線を配する。内面は口縁に一条圈線を巡らし見込みに三條圈線と「志在書中」図を描く。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C 福建・広東系	HA③ G14 II 台 3113		
150	口~底	15.7 2.9	8.2	VII	胴部は内湾気味に立ち口縁は端反り、口唇が丸い。高台の断面形態は台形。外面に字文を描き、口縁と高台脇に一条圈線を配する。内面は口縁に一条圈線を巡らし見込みに二条圈線と「志在書中」図を描く。高台内に圈線。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② D1 II 祝殿 台 1468		
151	底	—	8.6	VII	高台の断面形態は方形。見込みに雲龍文を描いている。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② A20 II 上 祝殿 台 1523		
152	口~底	15.9 3.3	9.5	VII	胴部は内湾気味に立ち口縁は端反り、口唇は丸い。高台の断面形態は台形。外面に「王」の字文。口縁と高台脇に圈線。口縁内に圈線、半梅花、唐草、龍文を施文。見込みに圈線と方形の梅花詰めを描く。高台内に圈線と字款「再盛」。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② I4 I 名嘉座 台 264 HA② I1 II 瓦屋 台 2355 HA② C2 I 祝殿 台 2360		
153	底	—	10.0	VII	高台の断面形態は方形。見込みに二条圈線と「志在書中」図を描く。高台内に二条圈線と字款「和美」?を付す。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② E1 II 祝殿 台 1032・1284		
154	口	19.6 —	—	VIII	口縁は内湾気味の直口を成し、口唇は丸い。外面に龍文を描き、内面は雲文を描く。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② A20 II 祝殿 台 1309・1322		
155	口	20.4 —	—	VIII	口縁は直線上に外に開く直口。口唇は丸い。外面に龍文を描き、内面は雲文を描く。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② T10 II 祝殿(SD08) 台 1953		
156	口~底	18.2 4.0	10.0	VII	胴部は内湾気味に立ち口縁は端反り、口唇が丸くなる。外面に唐草文を描き、口縁と高台脇に一条圈線を配する。内面は口縁に一条圈線を巡らし見込みに二条圈線と雲龍文を描く。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 景德鎮窯 福建・広東?	HA② K7 II 照屋先生 台 1774		
157	口	15.9 —	—	VII	胴部は内湾気味に立ち口縁は端反り、口唇が丸くなる。外面に草花文を描き、口縁に一条圈線を配する。内面は口縁に一条圈線に草花文を描く。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② E3 II ナカミチ 台 1451		
158	口	17.5 —	—	VII	胴部は内湾気味に立ち口縁は端反り、口唇が丸くなる。外面は口縁に一条圈線を配し龍文を描く。内面は口縁に一条圈線に花唐草を描く。	淡灰白色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② H20 II 瓦屋 台 1021		
159	底	—	7.2	IX	底面は扁平高台は三角状の型押し整形の皿である。見込みに雲龍文を描いている。外底面に「合」の字の印花が施されている。	淡青灰白色 呉須の発色は普通	白色 緻密	18C 徳化窯	HA② C19 II 祝殿 台 1651		



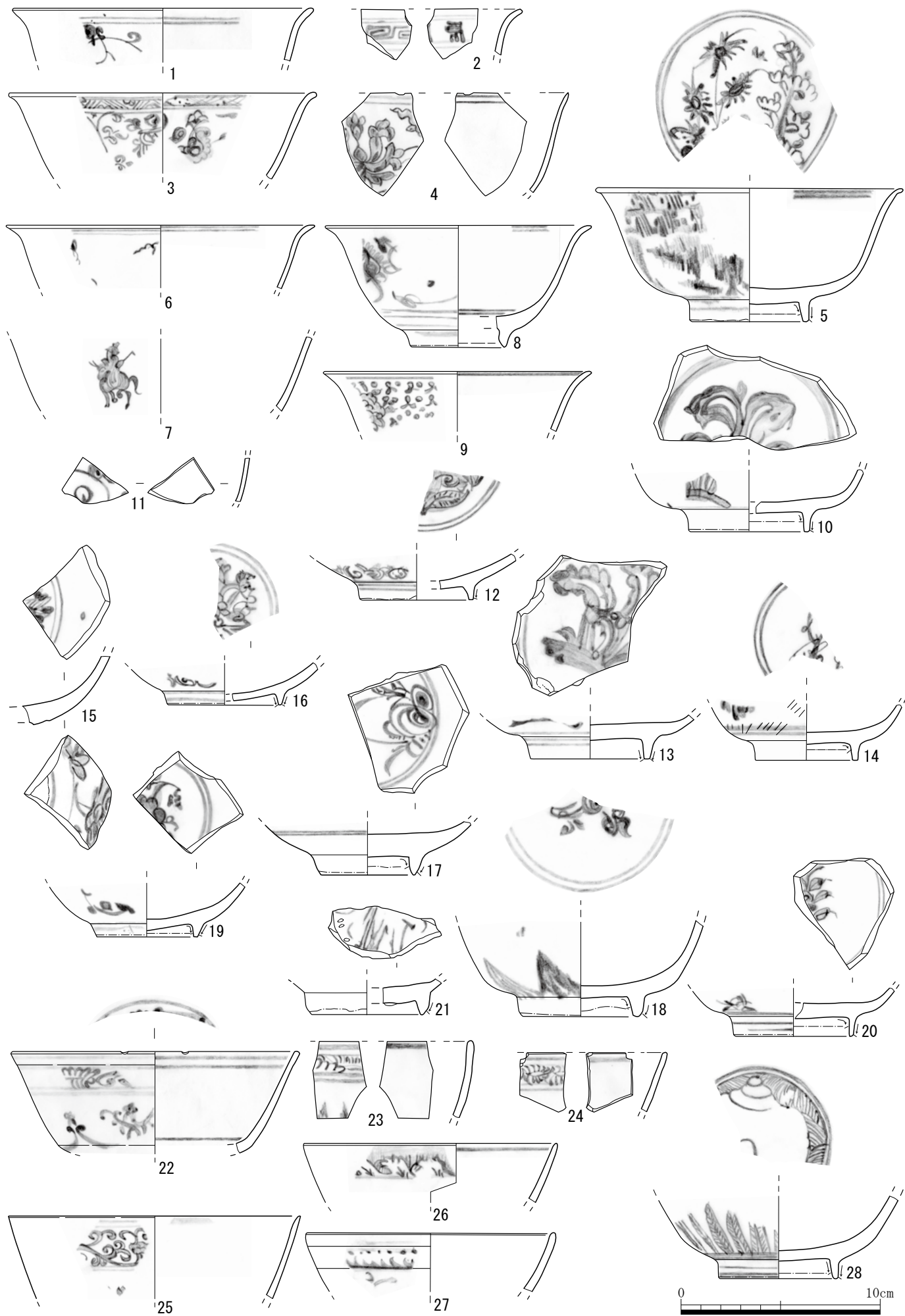
第58表-1 染付(その他) 観察一覧

第図版	図番号	器種	部位	口径器高(cm)	底径(cm)	器形・文様構成	釉・呉須	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第103図・図版69	160	杯	口~底	14.6 4.3	4.4	腰折れの胴部は直線的に開きながら立つ。胴部から口縁にかけて帯状にやや肥厚し有段を成す。口縁は直口を呈し、口唇の断面形態は舌状。口縁の外側に二条圏線と折枝と虫(ハッター or コウロギ)を描き、腰に如意頭繁文を巡らしている。内面は幅の広い圏線と二条口縁に配し見込みに二条圏線と草花文を施文している。高台と高台脇に二条圏線、高台内に方形銘款「角福」を付す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後~16C前 景德鎮窯	HA④ J19 III 台 2588
	161		口	9.4	—	胴部は外に向かい直線的に開く。口縁は直口で口唇の断面形態は丸い。外面の口縁に二条の圏線を配し折枝と鳥文を描き、二条圏線で閉じる。横位に器内を線状に盛り上げ巡らせている。下位に文様を置いている。内面は口縁に二条の幅広の圏線を巡らしている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C後~16C前 景德鎮窯	HA④ L19 III SP498 台 3926
	162		口	9.7	—	胴部は外に向かい直線的に開く。口縁は口唇が僅かに反る。口唇の断面形態は丸い。口縁外側に二条の圏線を配し波濤文帯を描き、胴上部に横位の帯状突起を巡らし二条圏線を配する。下位に唐草文様を描く。内面は口縁に二条の圏線を巡らしている。	明緑灰色 呉須の発色は薄い	灰白色 緻密	15C末~16C前 景德鎮窯	HA② A20 II 祝殿 台 1289
	163		口	10.8	—	胴部に丸みを持ち内湾気味に立ち上る。口縁は直口、口唇は舌状。外面に二条圏線を巡らし、鳥文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C代 景德鎮窯	HA② F1 II 瓦屋 台 820
	164		口	7.8	—	胴部に丸みを持ち内湾気味に立ち上る。口縁は直口、口唇は丸い。外面に二条圏線を巡らし、草花文を描いている。口突である。	明緑灰色 呉須の発色は薄い	灰白色 細	18C 福建・広東系	HA② E5 III SK001 名嘉座 台 2302
	165		口	8.2	—	胴部は外に向かい直線的に開く。口縁は直口で口唇の断面形態は隅丸方形。器内が比較的厚い。外面に四方帯文を巡らし青海波の地文に梅花を描く。蓋の付く小碗か小鉢。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C~18C前 景德鎮窯	HA② T1 II 祝殿 台 637
	166		口	11.7	—	腰が張り胴部は外にやや開きながら立つ口縁は外反し口唇は舌状。外面に二条圏線と花唐草文を描き腰にラマ連弁文帯を巡らしている。内面は口縁と見込みに二条圏線を配している。口唇に覆輪の痕跡がある。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C末~18C 景德鎮窯	HA② A6 II 晶 台 1903
	167		口	9.8	—	胴部は直線的に開きながら立つ口縁は外反し口唇は舌状。外面に二条圏線と花文を描く。内面は口縁に二条の圏線を配している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C 景德鎮	HA② B20 II 祝殿 台 860
	168		口	9.8	—	胴部は直線的に開きながら立つ口縁は端反、口唇はやや玉縁に近い丸。口唇にタミ塗りし外面に仙芝祝寿文。見込みに二条の圏線を配している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C 景德鎮	HA② S6 II 晶 台 2479
	169		口	9.8	—	胴部は直線的に開きながら立つ口縁は端反、口唇は丸。口唇にタミ塗りし内外面に仙芝祝寿文(靈芝文)を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C前 景德鎮窯	HA② T1 II 祝殿 台 523
	170		口~底	9.5 4.5	4.0	腰がやや張り胴部は外に開きながら立つ口縁は外反し口唇は舌状。高台は細身で断面形態はやや方形に近い。外面に二条圏線と蓮華唐草を描き、高台は二条圏線で閉じる。内面は無文。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C前 景德鎮窯	HA② A7 II 晶 台 1803
	171		底	—	4.0	胴部は直線的に開きながら立つ口縁は端反、口唇は丸。高台は細身で断面形態はやや方形に近い畳付けは丸い。口唇にタミ塗りし外面に仙芝祝寿文を描き高台に二条圏線を施す。見込みに靈芝文を描き、高台内に二条圏線と十字を四つ付す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C末~19C前 景德鎮窯	HA② D3 II 上 祝殿 台 732
	172		底	—	—	腰がやや張る。外面に菊花唐草を描き、高台は二条圏線で閉じる。見込みに二条圏線と花卉文を配している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C末~19C 景德鎮窯	HA④ I10 II 台 2441
	173		底	—	4.6	高台は細身で断面形態はやや三角に近い。外面に唐草文を描き高台に二条圏線を施す。見込みに二条圏線と花卉文を描き、高台内に二条圏線と方形銘款を付す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C末~19C前 景德鎮窯	HA② B1 II 祝殿 台 1921
	174		底	—	5.0	高台は細身で断面形態は細身の三角形畳み付けは丸い。外面に仙芝祝寿文を描き高台に二条圏線を施す。見込みに二条圏線と靈芝文を描き、高台内に二条圏線と銘款を付す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C前 景德鎮窯	HA② D19 I 祝殿 台 1531
	175		口	8.1	—	胴部に丸みを持ち内湾気味に立ち上る。口縁は直口、口唇は舌状。外面に雲龍文を描いている。	灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C~19C 徳化窯?	HA② J4 II ワキミチ 台 2367
	176		口	10.2	—	腰部は丸みを持ち内湾気味に立ち上る。口縁は直口する。口唇は丸い。外面は格子文と草花文を交互に配置した帯文を描き上下に二条圏線を配している。腰下部に蕉葉文を巡らす。内面は口縁と見込みに二条圏線を配する。口突である。	灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C~19C 徳化窯	HA② T20 II 祝殿 台 558
177	底	—	4.2	高台は細身で断面形態は三角。外面に仙芝祝寿文を描き高台に二条圏線を施す。見込みに靈芝文を描き、高台内に二条圏線が認められる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C前 景德鎮窯	HA④ I11 II 台 2454		
第104図・図版70	178	底	—	5.0	腰がやや張り胴部は外に開きながら立つ。高台は細身で断面形態はやや方形に近い。外面に仙芝祝寿文を描き、高台脇に二条圏線で閉じる。見込みに靈芝文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C前 景德鎮窯	HA② B9 II 祝殿小 台 2405	
	179	底	—	4.3	腰がやや張り胴部は外に開きながら立つ。高台は外側りの細身で断面形態はやや方形に近い。畳付けは丸い。外面に仙芝祝寿文を描き、高台脇に二条圏線で閉じる。内面は見込みまで仙芝祝寿文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C後~19C前 景德鎮窯	HA② S4 II 祝殿 台 939	
	180	腰~底	—	3.9	高杯である。球状に丸く上った胴をもつ。内底は凹む。脚部は「八」の字状に広がる底面から円柱状に伸びる基部からなり、上部に断面三角状の帯状突起を有する。中空である。外面は二条圏線で閉じた唐草文と胴下部に二条圏線、脚の際に二条、帯状突起と底面に二条圏線を配する。見込みに二条圏線と「福」の字款を付している。	黄白色 呉須の発色は普通	灰白色 密	15C後~16C前 景德鎮窯	HA④ K4 II 台 2625 HA④ I19 II 台 2512	
	181	口	5.8	—	胴部は外に開きながら立つ。口縁は外反し口唇は舌状。外面に二条圏線と蘭花文を描き、内面口縁に二条圏線を配する。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C後~17C前 景德鎮窯	HA④ O16 III P98 台 118	
	182	口	6.2	—	腰がやや張り胴部は直線的に立つ。口縁は外反し口唇は丸い。外面に二条圏線と梵字文を描き、腰に二条圏線、内面は口縁に二条、見込みに二条圏線を配する。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C後~17C初 景德鎮窯	HA③ E6 I 台 1385	
	183	小杯	口	6.0	—	胴部は外に開きながら立つ。口縁は外反し口唇は舌状。外面に二条圏線と草花文を描き、内面口縁に二条圏線を配する。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C末~17C前半 景德鎮窯	HA④ E10 II 台 2031
	184	口	5.0	—	直口口縁で口唇は舌状。外面に二条圏線を巡らし、草花文を描いている。内面は口縁と見込みに二条圏線を配する。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C末~17C前半 景德鎮窯	HA④ G12 III SP980 台 3920	
	185	口	5.2	—	腰部に丸みを持ち直にたつ。口縁は直口、口唇は舌状。外面に二条圏線を巡らし、花唐草文を描いている。内面は口縁と見込みに二条圏線を配する。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C前半 景德鎮窯	HA② H4 II 名嘉座 台 1138・1156	

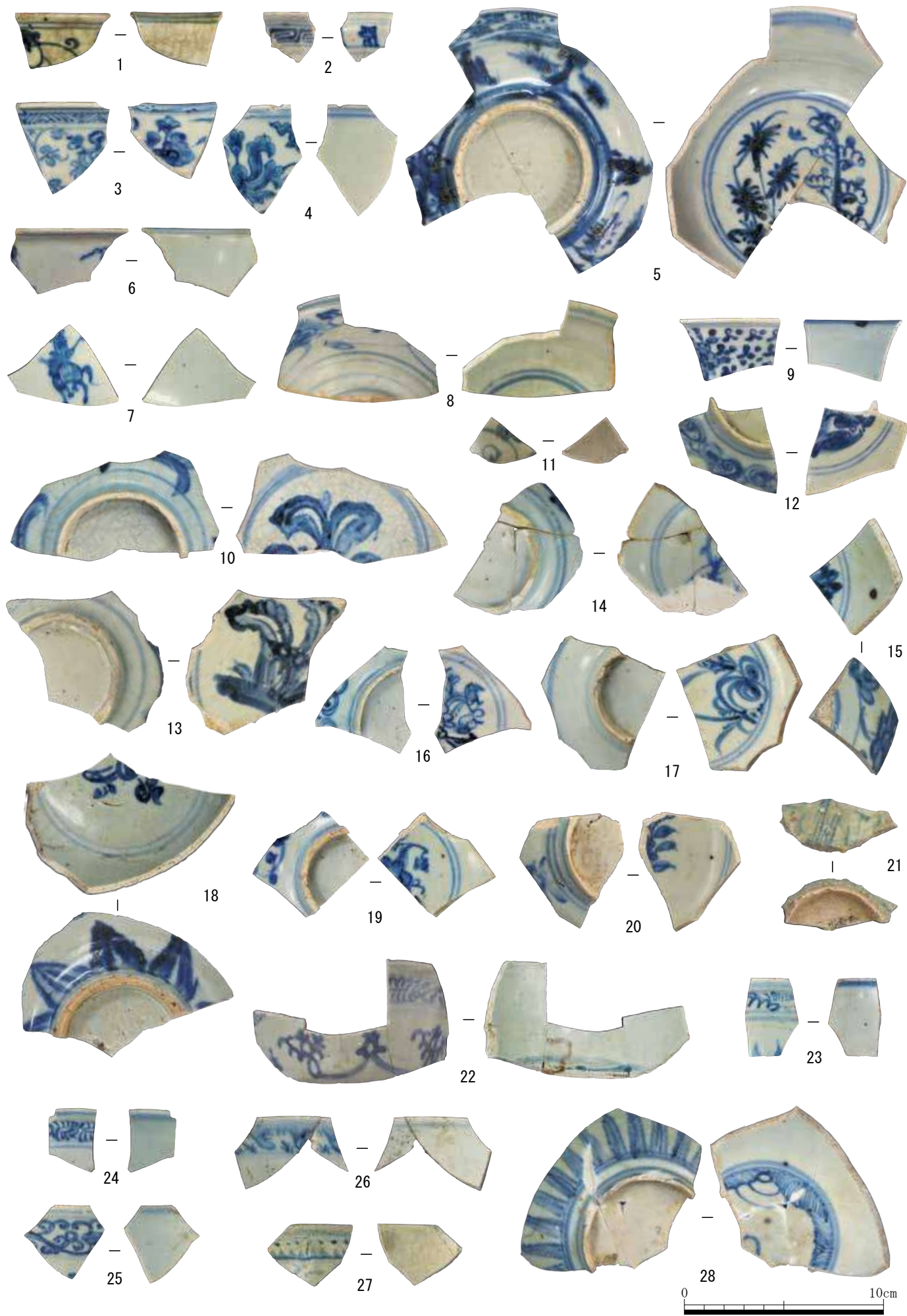
第三章 5

第58表-2 染付(その他) 観察一覧

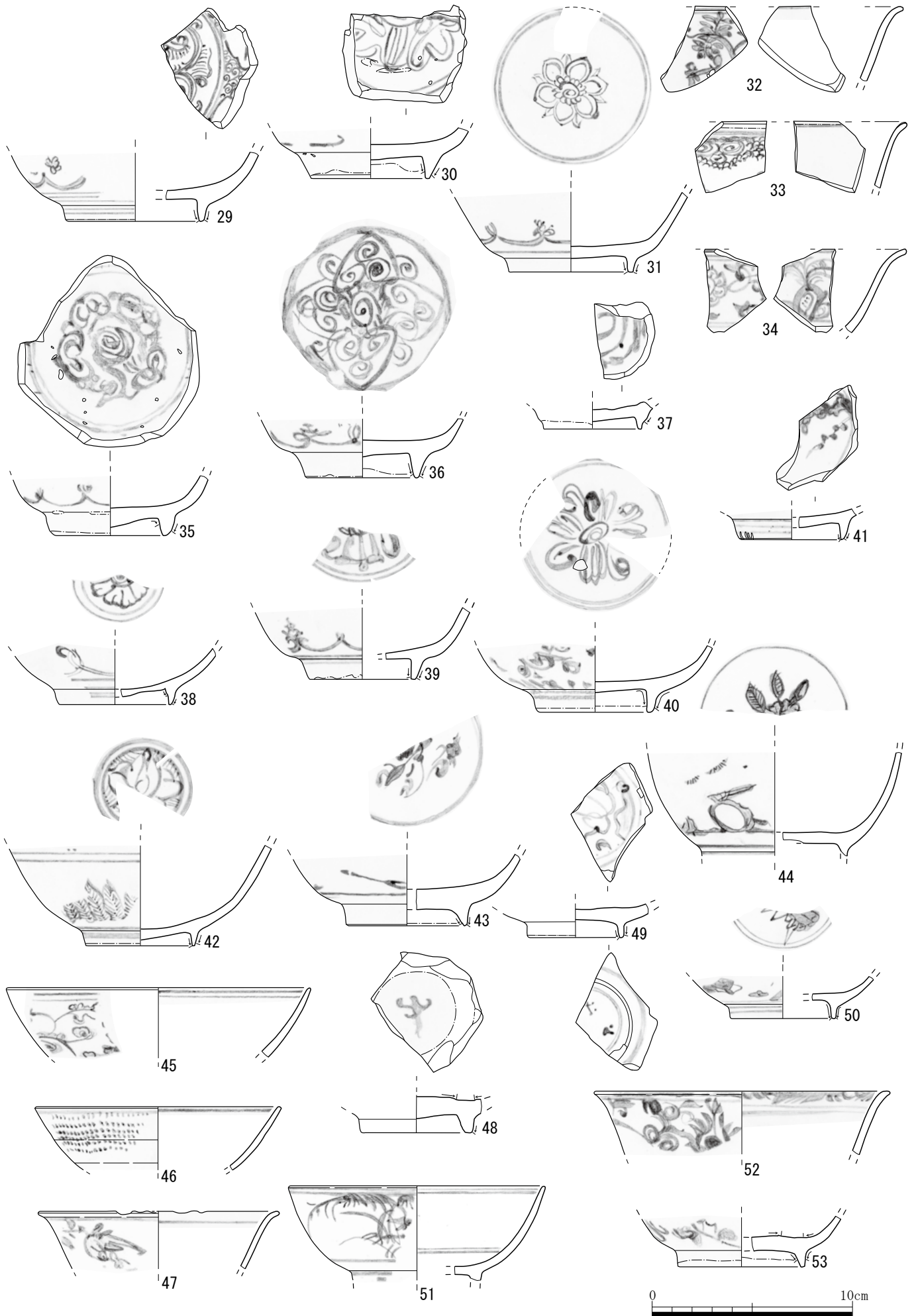
第図版	図番号	器種	部位	口径高(cm)	底径(cm)	器形・文様構成	釉・呉須	素地色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第104図 図版70	186	小杯	口	5.5 —	—	上がった胴を持ち直にたつ。口縁は直口、口唇は舌状。外面に一条圏線を巡らし、人物文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C前半 景德鎮窯	HA ② B4 I 祝殿 台 2363
	187		底	—	2.8	腰部から八面体の面取りをしている。外面に窓絵の枠と考えられる窓絵の下の部分の文様がみられる。見込みに二条圏線と花文が施文されている。高台脇と高台に一条圏線を配し、高台内に「福」の字款を付す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C前半 景德鎮窯	HA ④ K19 II 台 2665
	188		口〜底	6.4 3.2	3.5	腰胴部に丸みを持つ口縁は外反し口唇は丸い。外面に唐草文を描き、高台脇に一条圏線を配する。口充、型押し整形である。	灰白色 呉須の発色は普通	白色 緻密	18C 徳化窯	HA ② D1 II 祝殿 台 1468
	189		口縁	5.2 —	—	直口口縁で口唇は舌状。外面に一条圏線を巡らし略化した梵字を描いている。口充、型押し整形である。	灰白色 呉須の発色は普通	白色 緻密	18C 徳化窯	HA ② H20 II 瓦屋 台 1021
	190		口	4.2 —	—	上がった胴を持ち直にたつ。口縁は直口、口唇は舌状。外面に芝垣の帯文を描いている。口充、型押し整形である。	灰白色 呉須の発色は普通	白色 緻密	18C〜19C 徳化窯	HA ② II 台 922
	191	蓋物(碗)	底部	—	6.6	腰胴部に丸みをもち高台は比較的低く、断面形は三角状。畳付けは丸い。外面に氷裂文を描き、高台内に一条圏線を配する。内面は薄く透明釉を施している。蓋物が考えられる。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ② L6 II 三良 台 1266
	192	大鉢	底	—	7.6	高台は断面形態は台形状。外面の高台脇に二条圏線を施す。見込みに圏線と花文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C末〜18C中 景德鎮窯か 福建・広東系	HA ② D1 II 祝殿 台 830
	193		底部	—	12.7	高台は断面形態は台形状。肉厚。外面の高台に二条圏線を施す。見込みは蛇の目刺刺ぎ、畳み付けは露胎である。	黄白色 呉須の発色は薄い	灰白色 緻密	18C〜19C 福建・広東系	HA ② K6 I 三良 台 692
	194	鉢	胴	—	—	肉厚。外面「寿」の字文を施す。見込みは一条圏線を施し露胎している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C〜19C 福建・広東系	HA ② E1 II 祝殿 台 1025
	195	瓶	口	6.6 —	—	口縁はラッパ状に外に開き外反する。口唇は舌状をなす。外面に蕉葉文を描く	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C〜17C前 景德鎮窯	HA ④ G8 III SK5 台 37
	196		胴(頸)	—	—	ラッキョウ形のなで肩の長頸である。瓶が考えられる。外面はチベット文字帯文、唐草文、花唐草を横位の文様構成で描く。文様間に二条圏線で区画している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C〜16C 景德鎮窯	HA ④ N14 II 台 2787
	197		胴(頸)	—	—	長頸である。玉壺春瓶が考えられる。外面は蕉葉文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C〜16C 景德鎮窯	HA ④ F13 II SD42 台 3189
	198		胴	—	—	胴部に扁平な面を持つ。外面に梅と青海波の窓絵を描く偏壺窓絵瓶	明緑灰色 呉須の発色は濃い	灰白色 緻密	15C後〜16C代 景德鎮窯	HA ④ H19 II 台 2401
	199	袋物	胴部	—	—	丸い胴部を持つ袋物外面に雲文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C〜17C 景德鎮窯	HA ④ K2 II 台 2615
	200	瓶	胴	—	—	胴の最大径が肩にある鐮形状の肩を有する。頸部に向かい「八」の字状に窄む。外面に圏線と如意頭繫文を巡らし、果物文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C〜17C 景德鎮窯	HA ③ B16 II 台 3068 HA ③ D12 II 台 3249
	201	瓶?	頸	—	—	胴が丸く鐮形状の肩を有する。頸部に向かい一気に窄む肩の外面に一圈線と宝珠文を巡らし一圈線と唐草文を描く。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C末〜16C 景德鎮窯	HA ② H5 II 名嘉座 台 988
	202	瓶	胴	—	—	胴の丸い瓶である。外面は窓絵花唐草文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C末〜16C中 景德鎮窯	HA ② G2 II 上名嘉座 台 311
	203	瓶	胴	—	—	胴の丸い袋物。外面は頸部の周りに帯状突起と圏線文、唐草文を描いている。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C頃 景德鎮窯	HA ② G5 II 名嘉座 台 980
	204	瓶	底	—	8.4	高台の断面形態は三角状。外面に花文を描き三条圏線を挟み略化した蓮弁文を巡らす。高台に二条圏線を配している。高台内に四角款を付す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C末〜16C前 景德鎮窯	HA ② A2 II 祝殿 台 493
	205		底	—	7.6	高台は外割りで断面形態は三角。畳付けは丸い。畳付けは丸い。外面腰下部に如意頭繫文を配し高台に二条圏線を施す。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	17C前 景德鎮窯	HA ② I3 II 名嘉座 台 1103
	206	水注	注口	—	—	注ぎ口の傾きは上向き、上面途中に肩部から伸びる支えの部分が認められる。外面は注口の縁部に幅広のタミ塗りをし、抽象的な文様を描く(星形)。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C〜17C前 景德鎮窯	HA ② A4 II 祝殿 台 1617
	207	合子	蓋	—	—	箱状の合子で上面観が分銅形の蓋である。内面から籠を当てて成形するため内側に縦形方形の籠痕がよこに並ぶ様に認められる。外面は側面に飾の歯状に蓮弁文を描いている。焼成不良のため文様が確認できない部分が多い。型押し整形	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	16C〜17C前 景德鎮窯	HA ④ M・N・O17-19 II 台 133
208	レンゲ	底	—	—	蓮華の身部の底部である。先端のみ残す資料で裏面観は三角状に尖る。底面中央が凹み周辺に断面形が三角状の低い高台をつくる。内底に唐草文を描く。型押し成形	灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	18C〜19C 徳化窯	HA ② A1 II 祝殿 台 484	
209	瓶	胴	—	—	なで肩の長頸である。外面は蕉葉文、雲文、唐草を横位の文様構成で描く。文様間に二条圏線で区画している。	明緑灰色 呉須の発色は普通	灰白色 緻密	15C〜16C 景德鎮窯	HA ③ A15 暗褐砂 台 1425	
210	深鉢	胴	—	—	口径対して器高の低い器種が推測できる。香炉か植木鉢と考えられる。外面は如意頭雲文、牡丹唐草を描く。	灰白色 呉須の発色は濃い	灰白色 緻密	不明	HA ③ F14 明黄褐砂 台 3216	
211	碗	胴	—	—	腰部に丸みを持つ。外面は草花文を描き腰部に一条圏線を巡らしている。内面は見込みに一条圏線を巡らす。	灰白色 呉須の発色は薄い	黄灰白色 細	17C ベトナム	HA ④ F10 II 台 4020	
212	皿	底部	—	—	腰が張り胴部は外にやや開きながら立つ。外面にラマ式蓮弁文を描き、高台脇と高台に三条圏線で閉じる。内面は唐草文を描き、見込みに二条圏線を配し草花文を描く。	灰白色 呉須の発色は黒色 濃い	黄灰白色 細	15C頃か ベトナム	HA ④ E・F17 II〜III 台 4574	



第 97 图 染付 1



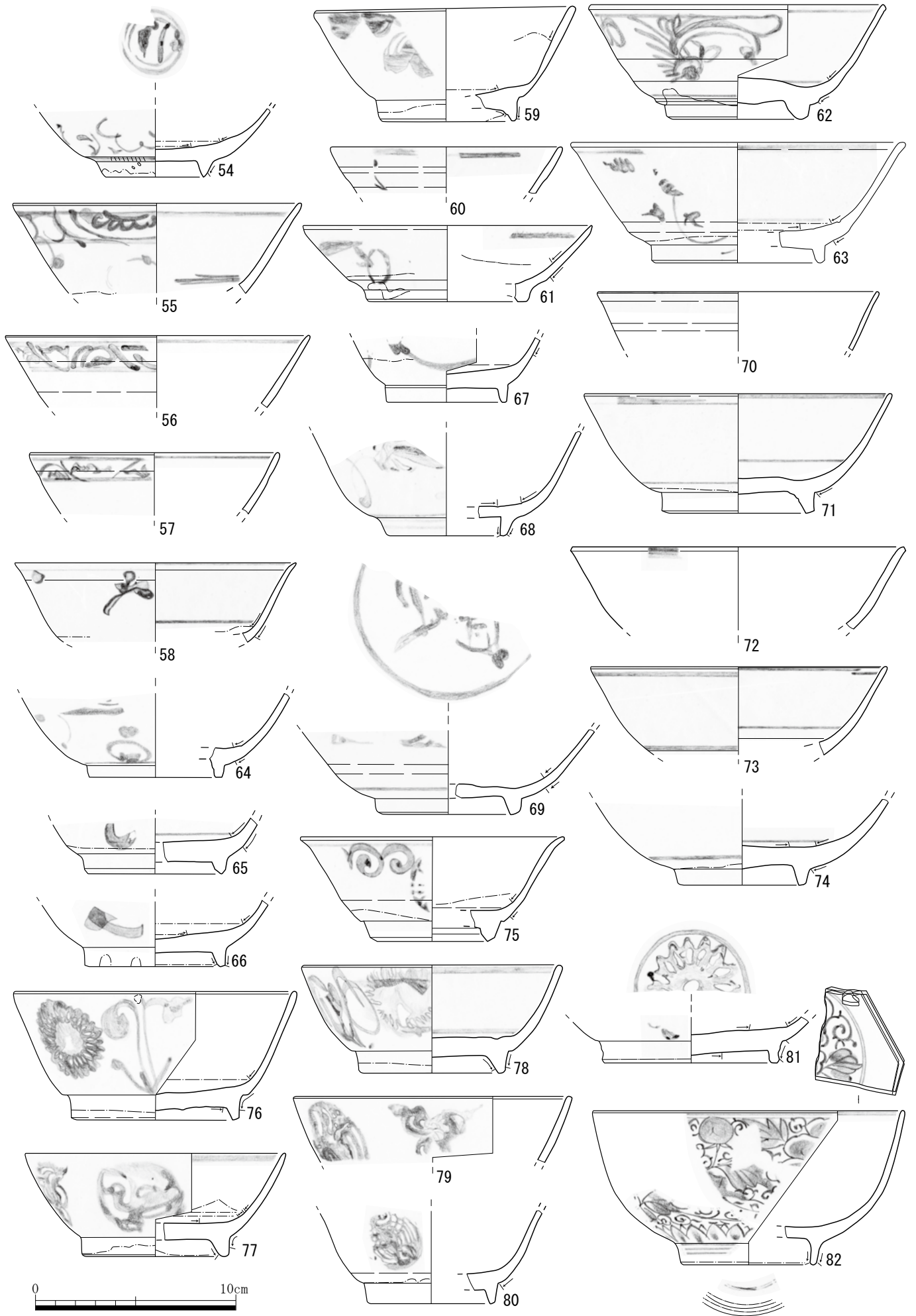
图版 63 染付 1



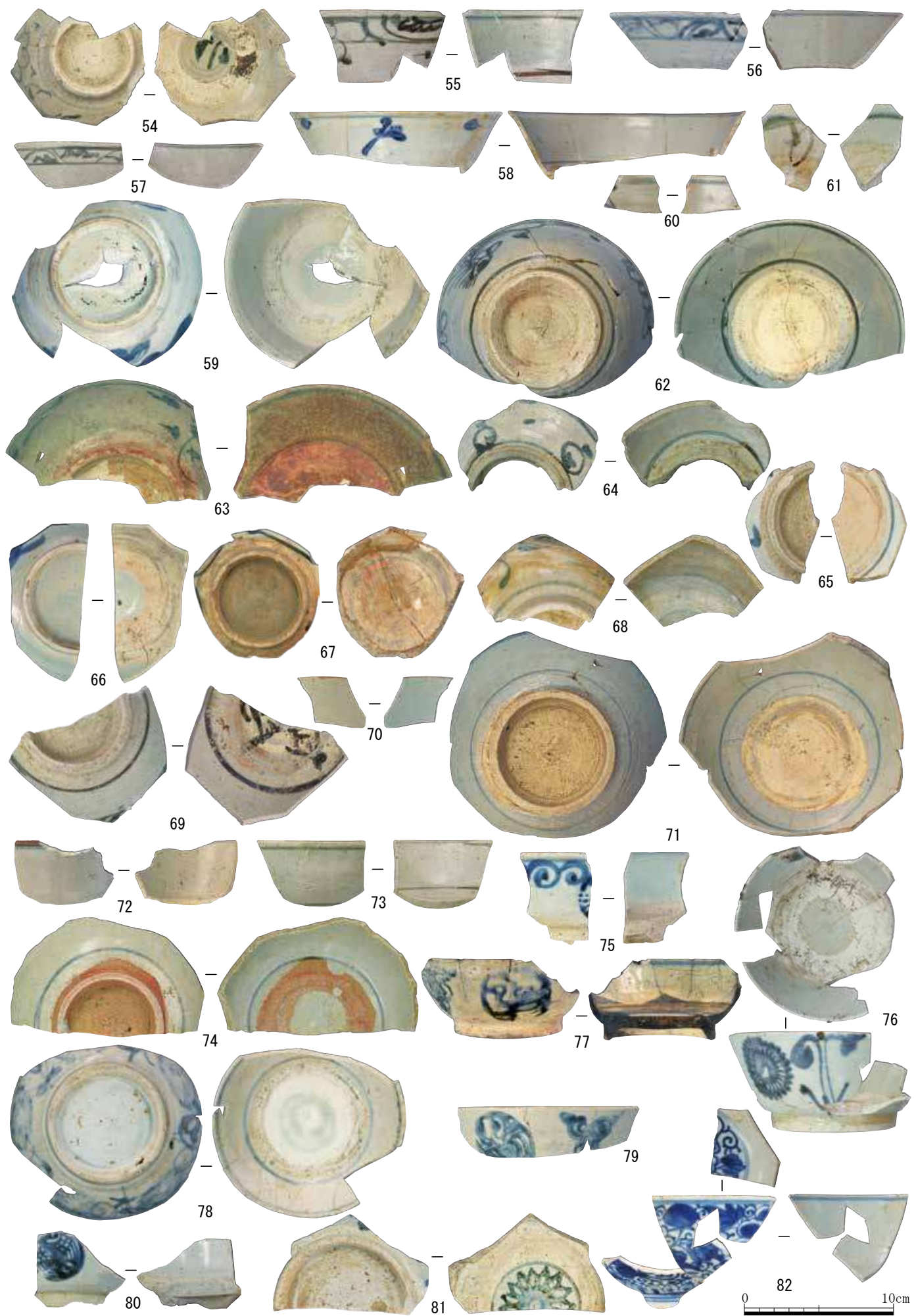
第98图 染付2



图版 64 染付 2



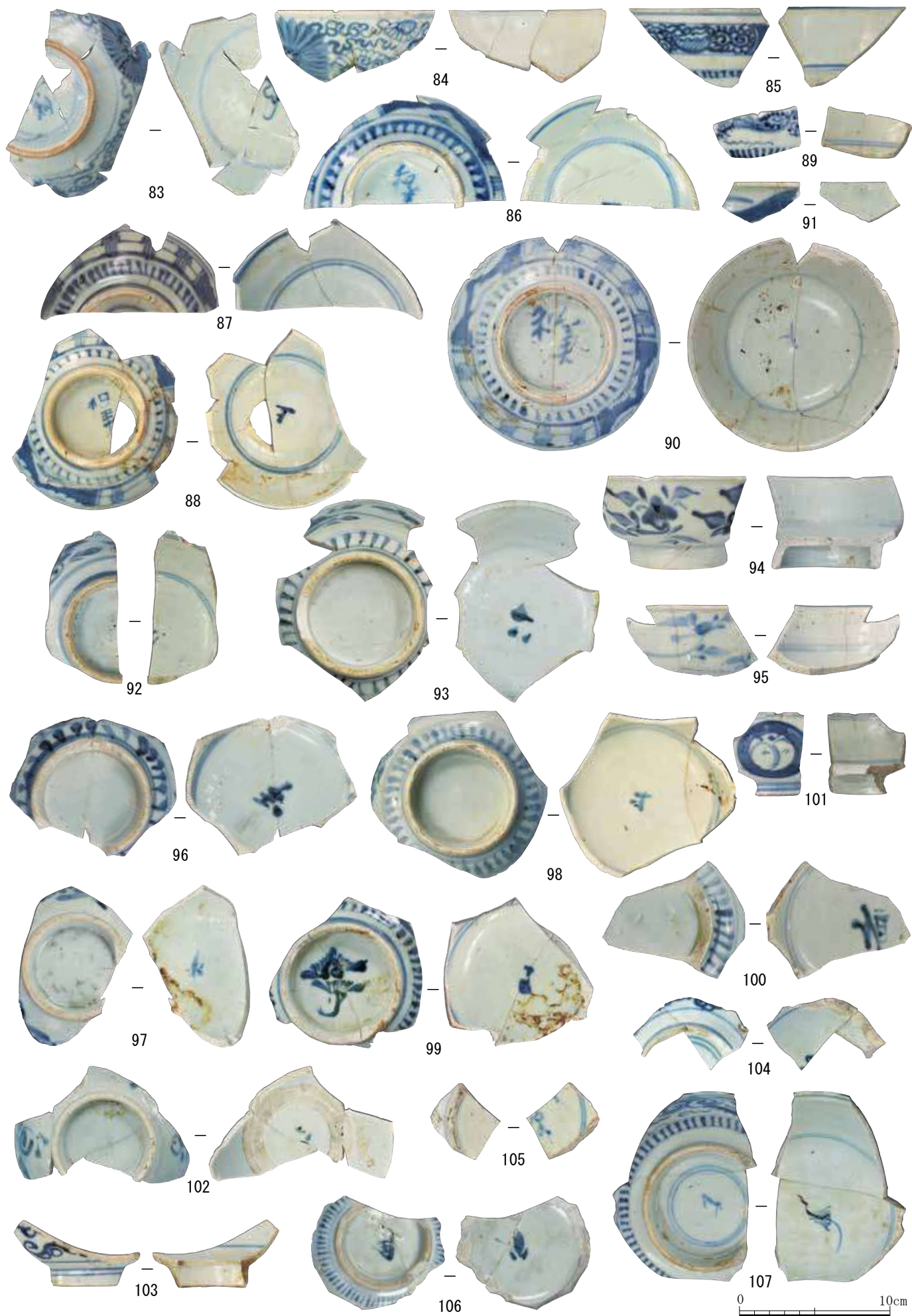
第99图 染付3



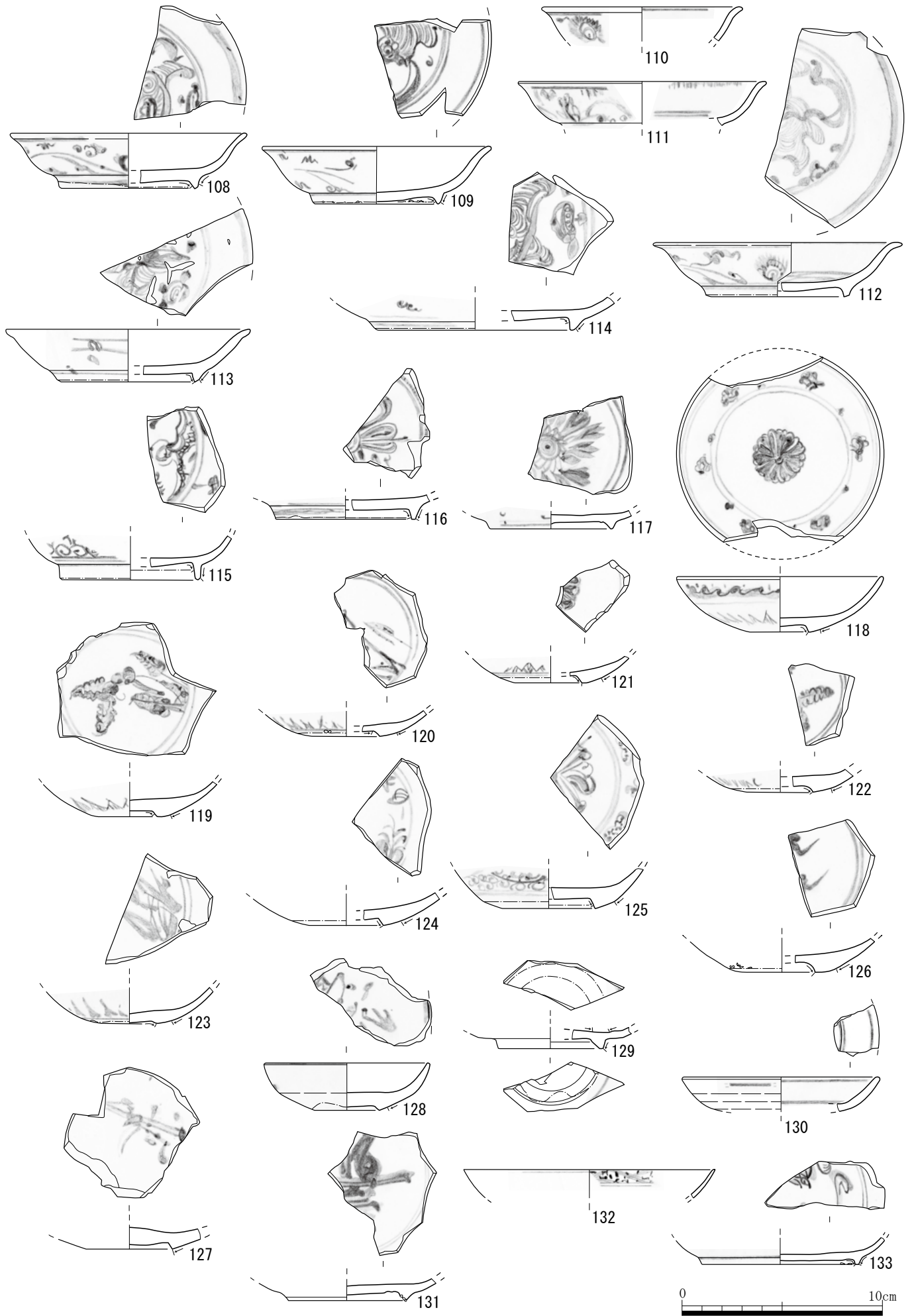
図版 65 染付 3



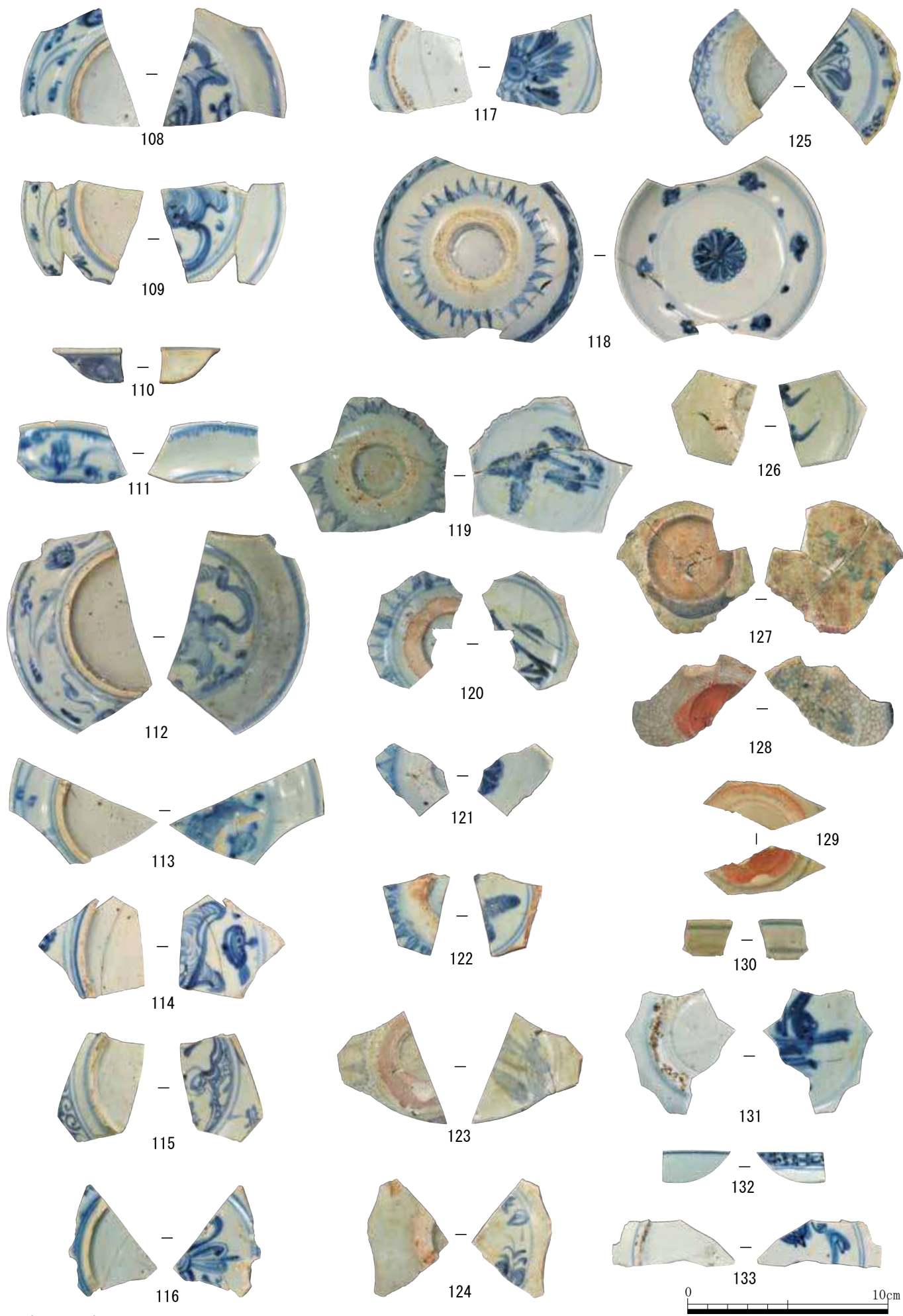




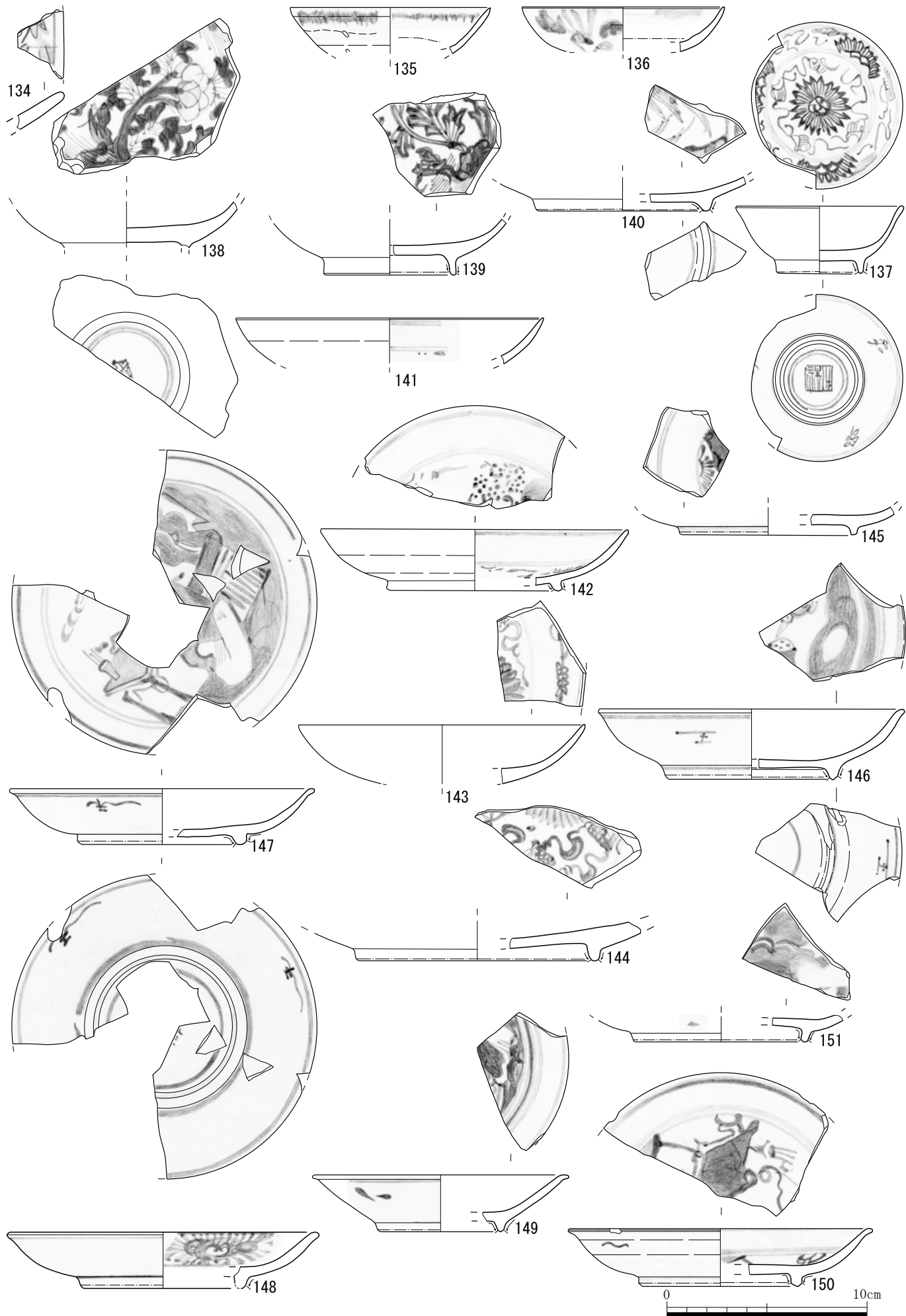
图版 66 染付 4



第101図 染付5



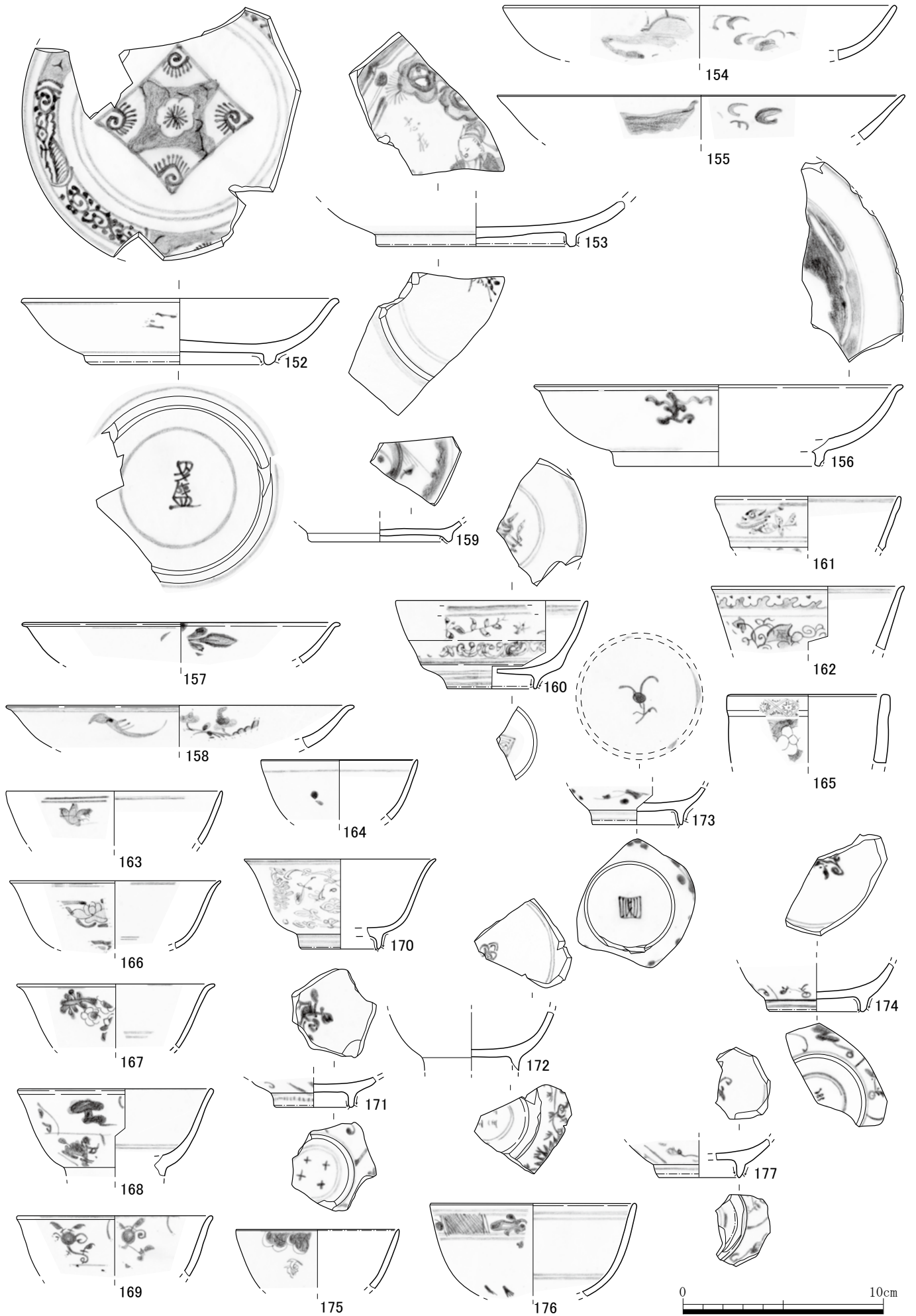
图版 67 染付 5



第102図 染付6



图版 68 染付 6

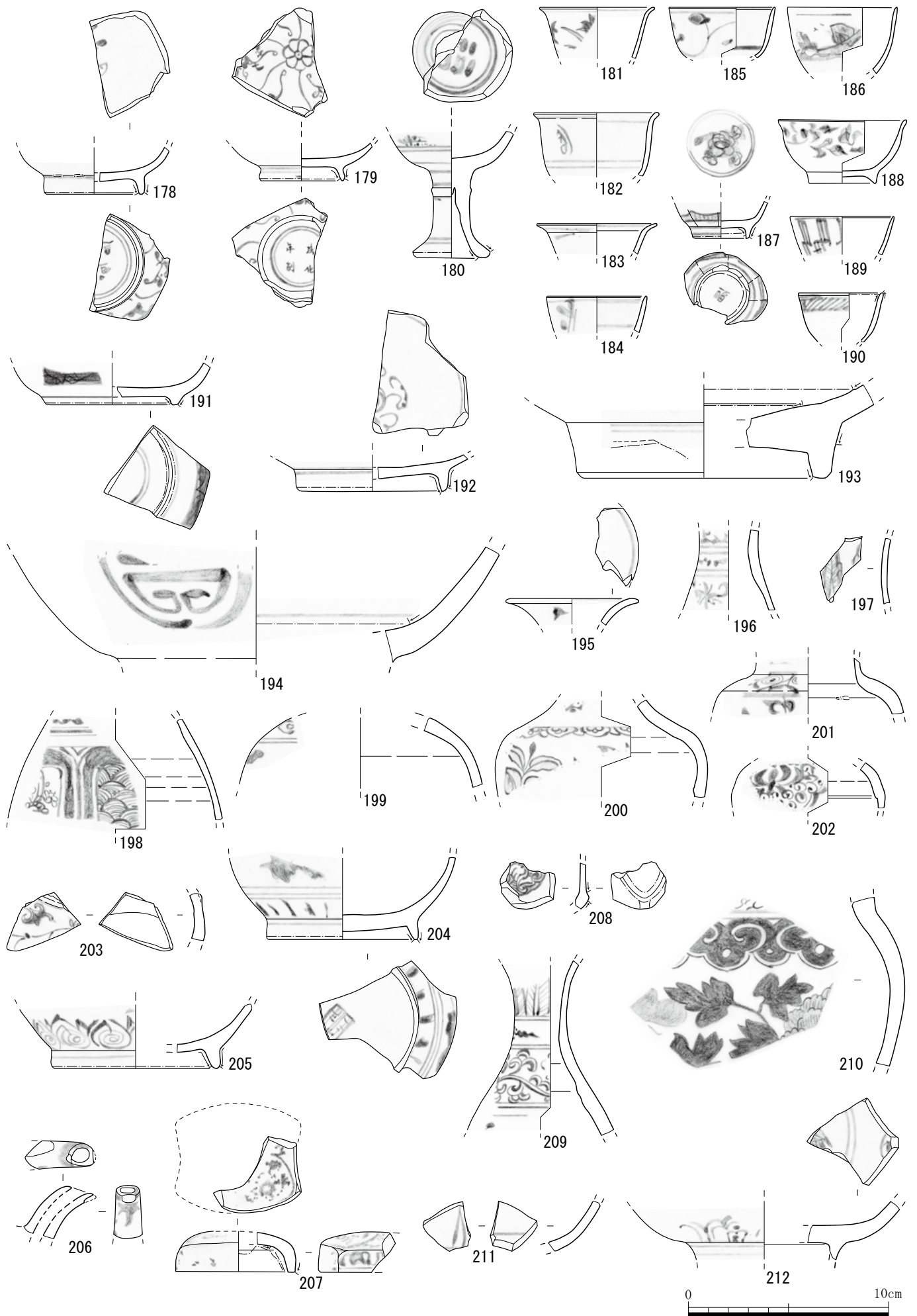


第103图 染付7



图版 69 染付 7





第104图 染付8



图版 70 染付 8

## (11) 青磁

総数 2807 点、殆どは中国産青磁である。主な生産地には龍泉窯、景德鎮窯、徳化窯、福建・広東系があり、生産年代は 12C～13C の南宋が全体の 0.4%、13C～14C の元・明初が 6.2%程ある。更に 14C～17C 明代が 67.2%と多数を占め、清代は全体の 3.3%で 17C～18C 代の福建・広東系と 18C～19C 代の景德鎮窯産にほぼ二分される。器種の内訳は碗 2257 点・皿 280 点・大皿 8 点・盤 91 点・瓶 54 点・壺(蓋) 14 点・杯 9 点・鉢 18 点・香炉 7 点になり、碗と皿で全体の 90%を占める(第 61～63 表)。又、東南アジア産(タイ、中国南部)も少数得られ、碗 6 点・皿 2 点・瓶 1 点であった。出土分布にみる(第 105・106 図)明代青磁は HA ④全体と HA ②西側と東側にグスク期の遺構と重なる。HA ③は全体に薄く分布するようである。清代は全体に出土が少ないこともあるが HA ③、HA ④、HA ②と少なくなる。HA ①には殆ど出土していない。分類と年代観は形態、成形方法、文様構成、釉調、胎土、により行い、特に元代から明代の碗、皿の分類は基本的に太宰府分類(森田勉・横田賢次郎 1978)上田(1982)に準拠するものである。

### 1. 碗

全体の 80.4%で大多数をしめる。分類は 22 類に分けられた。生産地は龍泉窯、福建・広東系、東南アジア産(タイ、中国南部)がある。生産年代は宋末～元代、明代、清代に位置づけられる(第 63 表)。

#### I 類 a 龍泉窯系 劃花文

腰部で屈曲、口縁は直口し撥状に開く。口唇は舌状。外面無文、内面に片切彫りの二条圈線で弧状(輪花)に縁取りし中に飛雲文を施文。図 1～4。底部は高台の断面形態が四角を成し高台の畳付け及び外底は露胎している。見込みに圈線と片切彫りの草花文(茸文)を施文する。図 5・6 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

#### I 類 b 龍泉窯系 無文

高台の断面形態は四角状を成し、高台の畳付け及び外底は露胎している。底部の器肉は特に厚い。図 7 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

#### II 類 a 同安窯系 櫛描文

内湾気味の平碗。外面に縦位の平行櫛目文を描き、内面は中位に圈線を巡らし、「乙」状の草花文と平行櫛目文を描く。透明感のあるオリーブ色釉を薄く施している。図 8 生産年代 12C～13C、生産地 同安窯

#### II 類 b 福建・広東系 櫛目文

内湾気味の直口碗。外面に縦位の平行櫛目を充填している。内面は無文で灰黄色釉を薄く施釉。図 9・10 生産年代 13C～14C、生産地 福建・広東系

#### III 類 a 龍泉窯系 鎬蓮弁文(貼花)

外面に肉厚の細鎬蓮弁文。内面は無文。高台は断面形態が三角状で先端は尖る。華奢な作り。釉は青灰色で貫入がある。全面釉で畳付けは露胎している。図 11 生産年代 13C～14C 前、生産地 龍泉窯

#### III 類 b 龍泉窯系 鎬蓮弁文

胴部は逆「八」の字状に広がりながら立つ。口縁は外反するものと直口するものとある。口唇は舌状に尖るものと丸く整えたものとある。外面にシャープな輪郭の花弁を片切彫りで描き幅の広い鎬蓮弁文を施す。弁と弁の間に花弁を有する。内底に凹圈線と印花文を有する。高台は断面形態四角状。釉色は青灰色とオリーブ灰色がある。図 12～21 生産年代 13C～14C 前、生産地 龍泉窯

#### IV 類 龍泉窯系 片切彫蓮弁文

外面に片切彫りの蓮弁文を施す。高台の断面形態は四角状と三角状とある。釉は青緑灰色で高台脇までし施釉し外底は蛇の目状又は無釉である。図 22～30

#### V 類 龍泉窯系 片切彫蓮弁文+唐草文

直口口縁、口唇は丸味を持つ。外面に片切彫りの蓮弁文を二条圈線下に施し内面は片切彫りの草花文や唐草を施文する。図 31 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

#### VI 類 龍泉窯系 片切彫ラマ式蓮弁文+唐草文

外面に片切彫りのラマ式蓮弁文、内面に唐草文及び草花文を施文。内底は圈線と片切彫の花文を描いている。図 32～34 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

#### VII 類 龍泉窯系 片切彫唐草文

外面と内面に片切彫の唐草文及び草花文を施文している。内底は圈線と片切彫の花文を描いている。図 35～38 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

Ⅷ類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面は無文。内面に片切彫草花文。作図無し。

Ⅸ類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面に片切彫の草花文か唐草文。内面は無文。作図無し。

X類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面に片切彫の草花文か唐草文。内面は片切彫の雷文+草花文。作図無し。

XI類 龍泉窯系 雷文+唐草文

外面に片切彫の雷文と唐草文を施文。内面は片切彫の唐草文を施文。図 39～43 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XII類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面に片切彫の雷文+草花文。内面は無文。作図無し。

XIII類 龍泉窯系 雷文

外面に片切彫りや印花の雷文を施文している。内面は無文。図 44・45 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XIV類 a 龍泉窯系 型押施文(人形手)器面の内外面に施文

内湾気味の直口碗で口唇が丸いものと玉縁にやや近いものとある、ア：外面は印花の雷文、内面に型押し of 雷文と草花文を施文している。図 46・47。イ：外面に片切彫の草花文と内面に型押し of 人物文(故事題材)を施文。図 48 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XIV類 b 龍泉窯系 型押施文(人形手)内面のみ施文

内湾気味の直口碗で口唇が丸いものと玉縁にやや近いものとある。

ア：外面が無文で内面に型押し of 人物文(故事題材)を施文。図 49～51 イ：外面無文内面に草花文や雷文と建物文を施文している。図 52・53 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XV類 a 龍泉窯系 丸彫蓮弁文

外面に丸彫り蓮弁文を施文。内面無文。図 54～56 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

XV類 b 龍泉窯系 丸彫蓮弁 文外面に丸彫り蓮弁文を施文。内面は草花文。作図無し。

XVI類 a 龍泉窯系 線描き蓮弁文

外面に線描きの蓮弁文。内面無文。図 58～65 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

XVI類 b 福建・広東系 線描き蓮弁文

外面に線描きの蓮弁文。内面無文。図 57 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

XVII類 a 龍泉窯系 線描き波状雷文

外面に線描きの波状雷文と蓮弁文を施文。図 66 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

XVII類 b 福建・広東系 線描き波状雷文

外面に線描きの波状雷文と蓮弁文を施文。図 67・68 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

XVIII類 a 龍泉窯系 外反無文 図 69～73 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XVIII類 b 福建・広東系 外反無文 図 74 生産年代 14C～15C 生産地 福建・広東系

XIX類 龍泉窯系 内彎無文作図無し。

XX類 龍泉窯系 玉縁無文作図無し。

XXI類 a 龍泉窯系 直口無文 図 75・76 生産年代 15C代 生産地 龍泉窯

XXI類 b 福建・広東系 直口無文 図 77～79 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

XXII類 福建・広東系 撥形碗 図 94・95 生産年代 17C～18C 生産地 福建・広東系

## 底部

1類 a 龍泉窯系(劃花文) 高台の断面形態が四角を成し高台の畳付け及び外底は露胎している。内底に圏線と片切彫りの草花文(茸文)を施文。図 5・6 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

1類 b 龍泉窯系(劃花文) 内底面無文。高台の断面形態は四角状を成し、高台の畳付け及び外底は露胎している。底部の器肉は特に厚い。図 7 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

2類 a 龍泉窯系 高台の断面形態が三角状を成す。図 80・81・83・84・86～89・91・92。

2類 b 龍泉窯系 高台の断面形態が四角状を成す。図 82・85・90。

3類 a 福建・広東系 高台の断面形態が三角状を成す。図 93

3類 b 福建・広東系 高台の断面形態が四角状を成す。図無し

3類 c 福建・広東系 高台の断面形態が四角状を成す。図 94・95

## 2. 皿

総数 280 点、全体の 10.0%、碗に次ぐものである。生産地は龍泉窯、景德鎮窯、福建・広東系がある。生産年代は 14C～17C 中葉までの明代、17C 後半～18C 清代に位置づけられる（第 61 表）。9 類に分類した

### I 類 福建・広東系 無文 外反

外面に轆轤痕を多く残す。胴部から逆「八」の字状に開き口縁は外反している。図 96 生産年代元代、生産地 泉州窯か

### II 類 a 龍泉窯系 鎬蓮弁文 口折

腰に丸味を持ち、胴は直線的に開く。口縁は口折れである。高台は外割りが多く、断面形態は四角や台形がある。外面に鎬蓮弁文を巡らしている。図 98～100 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### II 類 b 龍泉窯系 片切彫蓮弁文 口折

腰は腰折れに近い屈曲を持ち、胴は直線的に開く。口縁は口折れ。高台の断面形態は四角状である。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。図 101～103 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### II 類 c 龍泉窯系 無文 口折

腰は腰折れに近い屈曲を持ち、胴は直線的に開く。口縁は口折れ。図 104 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### III 類 a 龍泉窯系 篋描唐草文 外反

腰が丸く、胴部は直線的に外に開く口縁は外反である。高台は畳付けの外側を斜めに削り出し、断面形態は三角形状。両面に篋描きの唐草文を描いている。内底に草花印花文を施す。図 110 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### III 類 b 龍泉窯系 篋描唐草文 外反

腰が腰折れに近い丸味を持つ、口縁は外反である。外面は無文で内面に篋描きの唐草文を施す。図 111 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### III 類 c 龍泉窯系 無文 外反

腰が丸く、口縁に向かい開き外反する。高台は畳付けの両面削り出し、断面形態は三形状。無文である。図 112 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### III 類 d 龍泉窯系 篋描蓮弁文・唐草文 外反

腰の丸い外反口縁である。外面に篋描きの蓮弁文を巡らし内面は唐草文を施す。生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯 作図無し

### IV 類 龍泉窯系 無文 腰折 円縁外反

腰折れで口縁は外反。高台は外割りで高台の断面形態は台形状、四角状。内底面は草花の印花文を施すものと無文があり、円形に露胎させている。図 114・115 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### V 類 a 龍泉窯系 腰折 稜花外反

腰折れの稜花である。口縁部は外に開き口唇部に抉りを入れ稜を作る。口唇は丸い。高台は畳付け外側から削り出し断面形態は三角状を成す。外体は無文、内面に篋描きの流水文を描き、内面の口唇と体部に櫛描き文を描く。内底中央は円状露胎している。図 116～119 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

### V 類 b 龍泉窯系 無文 腰折 稜花外反

腰折れで口縁は大きく外に開き口唇部に抉りを入れた無文の稜花である。図 120 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

### VI 類 龍泉窯系 輪花直口

腰部にやや丸味を持ち外に開き立ちあがる。口縁は直口し輪花状。高台の断面形態は先端丸い四角状。外体面に線彫に鎬状の稜を加えた菊花弁を描き内体面に丸彫りの花弁を描く。口唇に花弁の切り込みを入れ、上面観が菊花状の輪花を成す。図 122 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

### VII 類 龍泉窯系 直口

腰部に丸味を持ち口縁に向かいやや開き立つ。口縁は直口。高台断面形態は先端が尖る四角状である。外面に鎬蓮弁文を施す。内底面に陽刻圏線を巡らす。図 123 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

### VIII 類 龍泉窯系 直口

腰部に丸味を持ち口縁に向かいやや直で立ち上がるものがある。口縁は直口。高台断面形態は四角状。外体面に片切り彫りの蓮弁文を施す。内底面に陽圏線に草花の印花文を施している。図 124 生産年代 15C 前～中 生産地 龍泉窯

### IX 類 a 龍泉窯系 直口 胴部に陽圏線区画

腰部に丸味を持ち外面中段の陽圏線の区画線から口縁に向かい開き直線的に立つ。口縁は直口。高台は外割りの断面形態は四角状と三角状がある。有文と無文があり図 125 は下段に叉状蓮弁を 4 方に描く、内面は丸彫りの蓮弁文を巡らしている。内底面に陽圏線に印花文を施している。図 126 は無文。生産年代 15C 生産地 龍泉窯

**IX類b 龍泉窯系 直口**

腰部に丸味を持ち口縁に向かいやや開き立つ。口縁は直口。高台断面形態は三角状。外面は無文。内体面に二条から三条の縦位の櫛描きを施す。内底面に陽圏線が認められる。図 127・128 生産年代 15C 生産地 龍泉窯

**底部**

**1類1 龍泉窯系 帖花文(双魚文)**

高台の断面形態は四角状。外面無文。内底に圏線と帖花の双魚文を施す。図 97 生産年代 14C 生産地 龍泉窯

**1類2 龍泉窯系 印花文(草花文)**

高台は置付けの外側を斜めに削り出し外割りである。高台の断面形態は台形状。外面無文。内底面に草花の印花文を施している。図 113 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

**2類1 龍泉窯系 片切彫蓮弁文 印花(双魚文)**

高台は置付けの両側を斜めに削り出し外割りで断面形態は三角状、台形状、四角状があり、外面に片切彫の蓮弁文や鎬蓮弁に線彫りを加えた蓮弁文を巡らしている。内底は陽刻と陰刻の圏線に印花の双魚を施文するものとある。図 105～107 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

**2類2 龍泉窯系 片切彫蓮弁文 印花文(草花文)**

高台は置付けの外側から削り出し外割り断面形態は台形を成す。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内底は圏線に草花の印花文を施している。図 108・109 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

**3類 龍泉窯系 腰に丸味を持ち、比較的底径が小さいが見込みは広い。内底は印花文を施し中央部は円状に露胎させている。図 129 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯**

**4類a 龍泉窯系 腰折**

腰折れである。高台の断面形態は四角状。外底置付内に兜巾絞り切り痕が認められる内面に櫛描の斜線文を描き、内底に篋描の流水文を描がいている。内底面に幅広圏線と印花の草花文がみられる。内底の釉を剥ぎとるものがある。図 121 生産年代 15C代 生産地 龍泉窯

**4類b 龍泉窯系 腰折 無文**

腰折れである。高台の断面形態は三角状。内底の釉を蛇の目剥ぎする。図 130・131 生産年代 15C～ 生産地 龍泉窯

**5類 福建・広東系 無文。高台内の釉を蛇の目釉剥ぎする。図 132 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系**

**6類 龍泉窯系 無文碁筭底。図 133 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯**

**3. 大皿**

口径が 20cm前後で盤に含まれない大ぶりの皿で、総数 8 点得られた。図 135 は腰折れの輪花の大皿である。外面に蓮弁文中に櫛描を縦位に充填している。口唇は抉りで輪花を成す。内面は櫛描きの流水文と青海波、波中に櫛目を充填し、内底に圏線と印花文を施文している。図 136 は口折れの稜花大皿である。外面の鏝より下位に丸彫りの蓮弁文を巡らし、内面の鏝上面に篋と櫛による流水文を描き、内体面に篋彫りの草花文を施している。図 134 は碁筭底の大皿である。内面は丸彫りの細蓮弁文を巡らし内底全面に印花文を施こしている。

**4. 盤**

総数 91 点得られた。稜花縁と平縁がありいずれも鏝状を成す。鏝は断面形態で撥状、略「L」字状があり、図 138・140 は撥状、以外、略「L」字状であった。図 138 は口唇を切り込み稜を作る稜花縁である、鏝上面にへら彫りの弧状文を描き、内面に篋彫りの幅広蓮弁文を施文している。図 140 は内面に 6 本櫛目の蓮弁文を描いている。図 144 は内面に 5 本櫛組の細蓮弁文を描いている。図 145 は口縁が略「L」字状の鏝縁を成すもので、内面に面篋描きの幅広蓮弁文を描き内底面に印花の双魚文を施している。

**5. 瓶**

総数 54 点得られた。型押し偏瓶、玉壺春瓶、双耳瓶、小型瓶が得られている。図 147 は型押し成型の扁瓶である。外面の平坦部に陽刻の円弧繫いだ窓文、周辺に二条の界線とラマ蓮弁の枠に青海波を充填している。高級品である。図 150・154 は中型の玉壺春瓶で、図 150 は口縁部が大きく外に開く玉縁を持ち、外面に線刻の圏線を巡らしている。図 154 は外面に線刻の芭蕉文と篋描きの唐草と二条圏線を挟み線刻の蓮弁文を描く瓶底部である。図 151・157 は小型の

玉壺春瓶である。図 151 は口縁部が大きく外に開く玉縁の口縁で図 157 は底部資料である。図 148 は頸部が方形になる双耳瓶である。外面は動物形と思われる型押し成型の外耳が付く。

## 6. 蓋

総数 14 点で酒会壺の蓋が 1 点、壺などの被せ蓋 5 点が得られている。図 165 は鏝部分のみの破片で甲上面に片切彫の草花文が見られる。図 168 は被せ蓋である。甲部がやや平坦で僅かに膨らむ、甲上面に貼付痕が見られる、縁部は単構造で、先端の断面形態は四角状である。

## 7. 鉢

総数 18 点小鉢 1 点、大鉢 17 点が得られている。図 169 は口縁部が「く」の字状に内側に内彎する小鉢である。外面に鎬蓮弁文を施文している。図 177 は腰部の張った大鉢である。外面に線刻の蓮弁文を巡らしている。

## 8. 杯

高杯 2 点、杯 7 点、総数 9 点が得られている。図 172・173 は高足杯の脚部である。図 172 は横位の線刻文が巡る、粗製品。図 174～176 は内面に白磁釉、外面に青磁釉を掛け分ける杯である。176 は高台内に染付による方形銘款を付す。

## 9. 香炉

7 点得られた。図 178 は鏝縁香炉で釉は比較的薄い。図 179 は鏝縁三足香炉である。外面は鏝上面に線彫りの檜垣文を巡らし、頸部に波状文、下に蓮弁文を挟み篋彫り牡丹唐草を施文している。

## 10. 東南アジア産青磁

東南アジア産の青磁が 5 点得られている。タイ産の碗 4 点、瓶 1 点、タイか中国の南部が考えられる東南アジア産の青磁の碗が 1 点である。図 180～182・184 はタイ産の青磁碗である。180 は腰に張りを持つやや浅い碗で口縁は外反し、外面に轆轤痕が顕著である。図 184 はタイ産の双耳瓶である。図 183 は東南アジア産の青磁碗である。

第 59 表-1 青磁(碗・皿) 観察一覧

(法量単位: cm)

第図版	図番号	種類	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第 107 図・図版 71	1	碗	I 類 a	口	—	直口、口唇舌状。外面無文内面にへら彫の三条圏線と草花文。	オリーブ色 釉薄い	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯・同安窯?	HA ③ E9 II S-39 台 1057
	2			口	14.6	直口、腰は屈曲、撥状に開く。口唇は舌状。外面無文、内面に片切彫の二条沈線で弧状(輪花)に縁取りし中に飛雲文を施文。見込は二条の圏線。	灰色がかったオリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯	HA ③ D11 II 台 1165 HA ③ A14 II S-11 台 4267
	3			口	14.8	直口、口唇舌状。外面無文内面に片切彫の二条の沈線で輪花状の縁取りを施す。	灰色がかったオリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯	HA ③ C13 II 台 1210
	4			胴	—	外面無文内面に片切彫の二条沈線で図 3 と同様な文様を描く。	オリーブ色釉薄	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯	HA ② T20 II 祝殿 台 522
	5			底	7.6	見込に圏線と片切彫の草花文(茸文)を施している。	水色、浅青色 高台脇外底無釉	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯	HA ③ E5 I S-23 台 1958
	6			底	6.5	見込に圏線と片切彫の草花文(茸文)を施している。	オリーブ色 高台脇外底無釉	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯	HA ③ D9 I 台 1310
	7		I 類 b	底	5.8	無文、内底に円凹四部が見られる。器内は 18mm と特に厚い。高台は削りが浅く、断面形態は四角状。畳み付けと外底に円形目痕が認められる。	オリーブ色失透釉 高台脇外底無釉	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 龍泉窯	HA ② S4 II 祝殿 台 939
	8		II 類 a	口	13.0	内彎気味に立ち上がり口縁部は直口する。平碗外面に 12 条の櫛描き文を縦位に描いている。内面は内体の中程に一条の圏線を巡らし平行欄目文と乙状の草花文を描く。	オリーブ色釉薄い	灰白色 微粒子・緻密	12C～13C 同安窯	HA ③ S18 II 台 1453
	9		II 類 b	口	14.0	口縁部は直口する。外面に約 9 条の櫛描き文を縦位に隙間なく描いている。内面は無文。	灰黄色釉薄い	灰白色 微粒子・緻密	13C～14C 福建・広東系	HA ④ K2 III SP1352 台 4185
	10		II 類 b	口	12.0	口縁部は開き直口する。外面に約 8 条の櫛描き文を縦位に隙間なく描いている。内面は無文浅碗。	灰黄色釉薄い	灰白色 微粒子・緻密	13C～14C 福建・広東系	HA ④ L20 II 台 2729
	11		III 類 a	底	— 5.4	外面肉厚鎬蓮文内面無文高台形は先端が尖る断面形は三角状。華奢。	青灰色貫入あり 畳付露胎	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ③ D16 II 台 3203
	12		III 類 b	胴	14.6	外反する口縁をもつと考えられる。外面に花卉の輪郭を片切彫りで描き更に花卉は鎬を持った幅の広い蓮文である。間弁を有する。内面無。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ③ D06 I 台 1354
	13			口	15.2	胴部が逆「八」の字状に広がりながら立ち口縁は直口である。口唇は舌状にやや尖る。外面にシャブな輪郭の花卉を片切彫りで描き幅の広い鎬蓮文を施す。弁と弁の間に間弁を有する。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ③ C7 II 台 1335
	14			口	16.9	胴部から逆「八」の字状に広がりながら立つ直口口縁である。口唇は丸い外面に図 13 と同様な文様を描いている。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ③ C6 II 台 1297
	15			口	18.0	胴部から逆「八」の字状に広がりながら立つ直口口縁である。口唇は丸い外面に図 13 と同様な文様を描いている。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ② M9 I 照屋 台 268
	16			口	15.2	胴部にやや丸味をもち逆「八」の字状に開き立ち上がる。口縁は口唇が舌状を成し僅かに外側に反る。外面に花卉の輪郭を片切彫りで描いた幅の広い鎬蓮文を施す。弁と弁の間に間弁を有する。	青緑灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ② L5 II 三良 台 1269.1270
	17		口	16.4	胴部にやや丸味をもち逆「八」の字状に開き立ち上がる。口縁は口唇に丸味を持ち外側にやや反った直口である。外面に花卉の輪郭を片切彫りで描いた幅の広い鎬蓮文を施す。弁と弁の間に間弁を有する。	青緑灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA ③ A18 II 台 1428	

第59表-2 青磁(碗・皿) 観察一覧

(法量単位: cm)

第図版	図番号	種類	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号	
第107図・図版71	18	碗	Ⅲ類b	口	16.6 — —	胴部にやや丸味をもち逆「八」の字状に開き立ち上がる。口縁は口唇が舌状を成し僅かに外側に反る。外面に花卉の輪郭を片切彫りて描いた幅の広い鎚蓮文を施す。弁と弁の間に間弁を有する。	青緑灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA② J3 II 味子 台2373	
	19			底	4.4	外面に花卉の輪郭を片切彫りて描いた鎚蓮文を施す。内底に凹圏線を有し高台形は断面四角状。	青灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA③ B15 Ⅲ下 P001 台3960	
	20			底	— 5.5	外面は図19と同様。内底に凹圏線と印花文を有する。高台形は断面四角。	青灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA③ A14 II 台1460	
	21		底	—	外面に花卉の輪郭を片切彫りて描いた鎚蓮文を施す。内底に凹圏線を有する。	—	オリーブ灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 微粒子・緻密	13C中～14C前 龍泉窯	HA② D05 Ⅲ SK001 畠台2298	
	22		口	13.8 — —	胴部に丸味を持ち外側に開き立つ口縁上部で一日内にやや寄る直口。口唇は丸い。外面に片切彫りの蓮弁文を施文。	—	青緑灰色透明釉	灰白色 微粒子・緻密	14C代 龍泉窯	HA④ F14 II SD42 台3115	
	23		底	— 4.4	高台形は断面四角。外面に片切彫りの蓮弁文。	—	青緑灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 微粒子・緻密	14C代 龍泉窯	HA③ B18 II 台3144	
	24		口	15.6 — —	胴部に丸味のある内湾気味の碗。口唇は舌状を成す。外面に片切彫りの蓮弁を施しているが弁先はシャープさに欠ける。内面無文。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ K4 II 台2629 HA④ O5 II 台2825	
第108図・図版72	25	碗	Ⅳ類	口	17.2 7.6 7.7	腰から口縁に向かい僅かに開き直に立つ。口唇は丸味を持つ。高台断面形三角状。外面に片切彫の二条圏線と蓮弁文を施文、内面は無文である。	青緑色 全面施釉 外底:釉剥き	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ E18-20・F17 II～Ⅲ 台4563 Ⅲ 台4585 HA④ F18 Ⅲ 台2177 HA④ H18 Ⅲ 台2396	
	26			底	— 5.8	腰が張る碗。高台は畳付けの外側から斜めに削り出し断面形は三角状をなす。外面に片切彫の蓮弁文、内底に唐草に「福」字の印花文を施文。外底に砂目痕が認められる。	オリーブ色 畳付露胎	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ E15 Ⅲ SK72 台3361	
	27			底	— 5.8	底面はやや蓮通心を成す。高台の断面形は高台の外側から削る三角状をなす。外面に片切彫の蓮弁文、内底に一条圏線と印花文を施文。	オリーブ色釉 全面施釉 外底面:蛇の目釉剥き	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ F18 Ⅲ 台2182	
	28		底	— 5.6	高台の形態は外側から削る断面形が三角状。外面に片切彫の蓮弁文、内底に一条圏線と印花文を施文。	—	青緑色 畳付け内側まで施釉 外底:釉を掻き取る	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ D19.20 II上 石溜り② 台4467	
	29		底	— 5.4	高台の形態は断面形が三角状。外面に片切彫の蓮弁文、内底に一条圏線と唐草に「天」字の印花文を施文。	—	灰オリーブ色 全面施釉 外底:蛇の目状釉剥き	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ D18 Ⅲ 台2324 HA④ F18 II 台2173	
	30		底	— 6.0	高台の形態は畳付け外と内側から削る断面形が三角状。外面に片切彫の蓮弁文、内底に一条圏線と印花文を施文。	—	灰青緑色 全面施釉 外底面:釉を掻き取る	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ I11 Ⅲ 台2463	
	31		Ⅴ類	口	14.4 — —	直口、口唇は丸い。外面は二条圏線下に片切彫の蓮弁文を施文。内面は片切彫の草花文を施文。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ F20 II 台2199
	32		Ⅵ類	口	16.4 — —	外反の玉縁碗。外面に片切彫のラマ式蓮弁文、内面に草花を施文。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ K1 Ⅲ SK86 台3377
	33			口	13.5 — —	腰部に丸味を持ち口縁部まで直的に立ちあがり口縁は外反する。口唇は丸い。外面に片切彫のラマ式蓮弁文、内面に草花を施文。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA③ F4 II 台1336
	34			底	— 8.0	大碗高台の形態は畳付けの外側から削り出した断面形が三角状。外面に片切彫のラマ蓮弁文を肉厚に描き、内面は片切彫の唐草文を描いている。内底は一条圏線と片切彫の花文を描いている。	—	青緑色 全面施釉 外底:釉を掻き取る	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA② M10 II 照屋 台666
第109図・図版73	35	Ⅶ類	口	17.8 — —	丸い胴部から口縁は外反、玉縁を成す。外面に片切彫の唐草文、内面は草花を施文する。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA④ D19.20 Ⅲ 石溜り② 台4466.4467 HA④ D19 II 台2001	
	36		口	14.6 — —	直口口縁。外面はヘラの二本取りで唐草文を描いている。内面も同じ二本線の唐草文を施文。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA② T6 II 畠 台772	
	37		底	— 7.6	高台の形態は畳付けの外側から削り出した断面形が三角状。外面に片切彫の唐草文、内底に一条圏線と片切彫の草花文を描いている。	—	青緑色 全面施釉 外底:釉を掻き取る	灰白色 微粒子・緻密	14C～15C中 龍泉窯	HA② A20 II 祝殿 フ 台1887	
	38		底	— 5.6	高台の形態は畳付けの内側から削り出した断面形が三角状。外面と内面に片切彫の唐草文を施文、内底に一条圏線と片切彫の草花文を描いている。	—	オリーブ色 全面施釉 外底:釉を掻き取る	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA③ S19 II 台1162	
	39		口	15.2 — —	外反口縁で口唇は丸味を持つ外面に片切彫の草花文、内面に雷文帯を巡らし下位に草花文を配している。	—	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ K20 Ⅲ SP1208 台4060	
	40		口	14.6 — —	丸味のある腰から内湾気味に立ち上がる直口口縁、口唇は丸い。外面に片切彫の雷文帯と下位に唐草文、内面は唐草文を全体に施文している。	—	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA② T3 II 祝殿 台394	
第109図・図版73	41	Ⅸ類	口	15.0 — —	口縁は直線的に立ち上がり口唇は丸い。外面に片切彫の雷文帯と下位に唐草文を施文する。内面は無文である。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA③ S20 II 台3175	
	42		口	12.6 — —	口縁は内湾気味に立ち上がる口唇は丸い。外面に片切彫の雷文帯と下位に唐草文を施文する。内面は無文である。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA④ H18 Ⅲ 台2397	
	43		口	15.0 — —	丸味のある腰からやや内湾気味に立ち上がる直口口縁である。口唇は先細で丸い。外面に片切彫の雷文帯と下位にラマ蓮弁文、内面は無文である。	—	灰オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA④ F15 Ⅲ 台2130	
	44		ⅩⅢ類	口	14.0 — —	やや内湾気味に立ち上がる直口口縁である。口唇は先細で丸い。外面に片切彫の雷文帯を巡らす。内面は無文である。	—	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA④ E20 Ⅲ 台2080
	45			口	15.9 — —	直線的に広がり立つ直口口縁である。口唇は先太で丸い。外面に印花の雷文帯を巡らす。内面は無文である。	—	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA④ N13 II 台2773
	46		ⅩⅣ類 a7	口	16.4 — —	やや内湾気味に立ち上がる直口口縁である。口唇は丸い。外面に印花の雷文帯を巡らし、内面は草花文を型押ししている。	—	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA④ D20 II 台2008



第59表-3 青磁(碗・皿) 観察一覧

(法量単位: cm)

第99図・図版73	図番号	種類	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第99図・図版73	47	碗	XIV類 a7	口	16.0	直線的に広がり立つ直口口縁である。口唇形状は先太がやや肥厚した丸。外面に雷文帯と段下に鋸歯文、内面は雷文帯と草花文を型押しにより施文している。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA④ H17 III 台2381.2383
	48		XIV類 a1	底	6.8	高台の形態は畳付けの内側から削り出した断面形が三角状。外面に片切彫の唐草文を施文、内面は型押し的人物文を施文している。内底に一条圈線が認められる。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA③ F15 II S-3 台424
	49		XIV類 b7	底	7.0	高台の形態は畳付けの内側から削り出した断面形が三角状。外面は無文、内面に故事を題材とした人物文を型押ししている。内底は轆轤痕である螺旋状の凹みに一条圈線と印花(銘)が認められる。	灰オリーブ色 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA① N14 III下 0024SD 台7
	50			底	6.6	高台の形態は畳付けの内側から削り出した断面形が三角状。外面は無文、内面に故事を題材とした人物文を型押し、内底は印花(銘)を施している。	灰オリーブ色 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA③ F6 II 台3187 HA③ D8 II 台754
	51			胴	—	内面に故事を題材とした人物文を型押ししている。外面は無文。	緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA③ F15 II S-3 台685 HA③ R5 I 台1222
	52	XIV類 b1	胴	—	内面に菊花文を型押ししている。外面は無文。	灰オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA② A1 II 祝殿 台2391	
	53		胴	—	内面に雷文帯、波湾文に似弘風寺院の屋根を型押ししている。外面は無文。	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	14C後半～15C中 龍泉窯	HA② A3 II 祝殿 台1630	
	54	XV類 a	底	5.9	腰が張らず高台から逆「八」の字に外に開く高台は畳付けの内側から削り出すが断面形はほぼ四角状を成す。外面に丸彫の蓮弁文を施文している。	オリーブ色 畳付内側途中まで 外底: 無釉	灰白色 微粒子・緻密	14C末～15C中 龍泉窯	HA① N14 III 0008SL 台1	
	55		口	14.6	丸味のある腰から内湾気味に立ち上がる直口口縁、口唇は丸い。外面に丸彫の圈線と蓮弁文を施している。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15C 龍泉窯	HA② F3 II 名嘉座 台1662	
	56	碗	XV類 a	口	13.2	直線的に立ち、口唇は丸い。外面に弁の縦部分が二条線で表現される蓮弁文を描いている。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15C 龍泉窯	HA④ O5 II 台2818
57	XVI類 b			口	14.2	内湾気味の直口である。口唇は丸く外面に線描きの蓮弁文を描くが剣頭と蓮弁は別々に描き一對の弁を成さない。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15C後～16C 福建・広東系	HA② T1 II 祝殿 台1086
58	XVI類 a		口 底	11.0 4.6 6.6	腰に丸味を持ち内湾気味に立ち。口唇は丸。高台は畳付けの内側から削り出す。断面形は三角状。外面に線描きの蓮弁文を描くが剣頭と蓮弁は一對の弁にならない。内体面の下部に丸い蓮弁文を巡らす。内底に円線の外側は菊花、中に字款を付す。文字は不明。	灰オリーブ色 外底: 釉剥目痕あり	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA④ L18 II 台2720 HA④ H18 III 台2395	
59			口	11.6	内湾気味の直口である。口唇は丸く外面に線描きの蓮弁文を描くが剣頭と蓮弁は別々に描き一對の弁を成さない。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15C前～16C前 龍泉窯	HA③ A14 II S-11 台1260	
60			口	13.8	内湾気味の直口である。口唇は丸く外面に線描きの圈線と蓮弁文を描くが剣頭を省略している。	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA④ M19 II 台2746	
61	口		13.0	内湾気味の直口である。口唇は丸く外面に線描きの圈線と蓮弁文を描くが剣頭を省略している。	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA④ F17 III 台2161		
62	XVI類 a		底	5.6	腰があまり張らず高台から外に開く高台は畳付けの両側から削り出し断面形は三角状を成す。外面に線描き蓮弁文を内底に「清」の銘入り印花を施文。	オリーブ色 畳付け内側まで	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA④ E20 II 台2079	
63			底	3.4	腰があまり張らず高台から外に開く高台は畳付けの両側から削り出し断面形は三角状を成す。外面に線描き蓮弁文を内底に印花を施文。	オリーブ色 畳付け内側まで 内底: 円状に釉剥ぎ	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA③ B15 II 台2521	
64			底	5.6	腰があまり張らず高台から外に開く高台は畳付けの外側から削り出し断面形は三角状を成す。外面に線描き蓮弁文を内面に線彫の捻子花を施文している。	オリーブ色 畳付蛇の目釉剥ぎ 目痕あり	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA④ K2 II 台2613.2615.2680	
65			胴	—	筒状の器である。外面に線描きの蓮弁文を描く。	オリーブ色	灰白色 微粒子・緻密	15C中～16C前 龍泉窯	HA④ M・N・O17-19 III 台132	
66		口	12.5	内湾気味の直口である。口唇はやや四角く外面に線描きの上下に圈線を持つ波状雷文帯と剣頭を省略した蓮弁文を描く。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15C後～16C前 福建・広東系	HA② J6 II 照屋 台1704		
67	XVII類 b	口	14.0	胴部に丸味を持つ直口口縁の浅碗である。口唇は丸の四角。外面に線描きの波状雷文帯と剣頭を省略した蓮弁文を描く。	淡緑灰色	灰白色 微粒子	16C代 福建・広東系	HA④ K18 II 台2655		
68		口	13.4	腰部は逆「八」の字状に広がり胴部で内湾し立つ。口縁は内湾気味の直口である。口唇は丸い。外面に線描きの波状雷文帯を描く。	淡灰色	灰白色 微粒子	16C代 福建・広東系	HA④ N18 III P67 台95		
69	碗	XVIII類 a	口 底	17.8 6.4 7.2	腰に張りをもち外に開きながら直に立ち上がる口縁で外反し口唇は舌状に近い丸。無文。高台は畳付の外側を僅かに削り出すが断面形はほぼ四角形を成す。	青緑灰色 全面施釉 高台内の釉は不明	灰白色 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA② J3 II 名嘉座 台1248 HA② J3 II 味子 台2416 HA② F1 I 台2563	
70			口	—	外反口縁口唇はやや肥厚し丸い。	淡緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C中 龍泉窯系	HA④ G13 III 台2229	
71		XVIII類 a	口	14.4	腰から僅かに開き直に立ち上がる。口縁は外反し口唇は丸い。無文。	淡緑灰色 貫入あり	灰白色 微粒子	14C末～15C中 龍泉窯	HA④ H18 III 台2395 HA④ O14 II 台2842	
72			口	14.9	腰から僅かに開き直に立ち上がる。口縁は外反し口唇はやや肥厚した丸。無文。	青緑灰色	灰白色 微粒子	14後半～15C中 龍泉窯	HA④ E18 II 台2063	
73			口	15.8	腰から僅かに開き直に立ち上がる。口縁は外反し口唇は玉縁を成す。無文。	緑灰色	灰白色 微粒子	15C前半～中 龍泉窯	HA④ F19 III 台2195	
74		XVIII類 b	口	15.1 5.8	腰は張りがあり口縁向かい緩やかに開き立ち上がる口縁は外反し口唇は舌状に近い丸。無文。高台の断面形は四角。	淡緑灰色 高台脇まで施釉	灰白色 黒色粒子混 微粒子	14C後～15C中 福建系	HA④ F17 III 台2157. 2158 HA④ F18 III 台2174. 2187 HA④ G17 III 台2280	
75			XXI類 a	口	12.0	直口口縁口唇は丸い。外面に圈線が認められる。無文。	青緑灰色	灰白色 微粒子・緻密	15前半～中 龍泉窯	HA④ G18 SD41 II 台3052 HA④ G12 III 台2220
76		口		12.6	腰があまり張らずに外に開き直に立つ。口縁は直口。口唇は丸い。外面に圈線が認められる。無文。	オリーブ色	灰白色 微粒子	15C頃 龍泉窯	HA② J07 II ワキミチ台2379 HA② A03 II 台1630(接合)	
77		XXI類 b	口	13.6	腰に張りをもち外に開きながら直に立ち上がる口縁は直口。口唇は丸い。外面は轆轤痕が顕著。無文。	緑灰色	灰白色 黒色粒子混 微粒子	15C頃 福建・広東系	HA② A2 II 祝殿 台490 HA② T1 II 祝殿 台1086.1088	

第59表-4 青磁(碗・皿) 観察一覧

(法量単位: cm)

第図版	図番号	種類	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第110図・図版74	78	XX I 類b	口	12.7	腰に丸味があり、外に開き直に立つが口縁は内彎気味の直口。口唇は丸い。外面に圏線が認められる。無文。	青緑褐色	灰白色 微粒子	16C代 不明	HA④ F18 II SD41 台2982	
	79			14.4	腰に丸味があり内彎気味に直に立つ浅碗。口唇は隅丸方形。無文。	緑灰色	灰白色 微粒子	15C～16C頃 福建・広東系	HA④ L20 III 台2738	
	2類a	80	底	5.2	高台は畳付けの外側から削り出し断面形は三角状を成す内底に四花卉の窓に十字、分銅、花?(宝くし)を描く印花文を施している。	青緑灰色 畳付まで施釉	灰白色 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA③ C12 II 台749	
		81		5.8	高台は畳付けの両側から削り出し断面形は三角状を成す。内底印花・圏線。	青緑灰色 畳付まで施釉	灰白色 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA③ A14 II S-11 台963	
	第111図・図版75	82	2類b	底	6.3	高台は高台外脇と畳付けの外側を僅かに削り出す。断面形は四角状である。見込に片切彫の幅広圏線と花卉に「十」「天」の文字が入る印花文を施す。	青緑灰色 畳付外側まで 外底:露胎	灰白色 微粒子・細かい	14C～15C 龍泉窯	HA③ D11 II 台1547
		83	2類a	底	6.6	腰に張りを持つ。高台は畳付の外側を削り出し断面形は三角状である。内底は轆轤痕が顕著である。見込には圏線と八弁の窓に剣や斧を配した印花文を施している。宝くし文か。	青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底は露胎	灰白色 黒色粒子混 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA④ I5 III 台2424
		84			7.0	腰が張り高台は畳付けの外側から斜めに削り出し断面形は外削りの三角状である。腰部外面に幅広圏線を巡らし、内面見込に二条圏線に菊花の印花文を施す。	オリープ色 畳付外側まで施釉 外底は露胎	灰白色 赤褐色・微粒子	14C末～15C中葉 龍泉窯	HA④ E15 III SK72 台3361
		85	2類b	底	6.4	畳付の外側を僅かに削り出すが高台の断面形は四角状である。腰部外面に二条圏線、高台外脇に削り出しが認められる。内面見込に幅広圏線と梵字の印花文を施す。	青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底は露胎	灰白色 微粒子・細かい	15C頃 龍泉窯	HA③ D7 I 台603
		86	2類a	底	5.2	畳付の外側を斜めに削り出し高台の断面形は三角状である。内面見込みに二タイプの花卉を巡らしアルファベットの「J」の字状の文様を配し中央に卍の変形型の印花文を施している。	淡青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底は露胎	灰白色 黒色粒子混 微粒子・緻密	14C～15C 龍泉窯	HA② A2 II 祝殿 台474
		87			5.0	畳付の外側を僅かに削り出し高台の断面形は三角状。内面見込みに卍の縁に花卉を巡らし中に「宝」?の文字を配した印花文を施している。高台は比較的高めである。内盤製型転用品。	淡青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	黄灰白色 細粒子・細かい	14C～15C 龍泉窯	HA③ I 台3364
88		5.0			畳付の外側を斜めに削り出し高台の断面形は外削りの三角状である。見込みに菊花弁を縁取りに「具」字を配する印花文を施している。高台はやや高い。	青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	黄灰白色 細粒子・細かい	14C～15C 龍泉窯	HA③ D06 I 台1352	
89		4.6			畳付の外側を斜めに削り出し高台の断面形は三角状である。内面見込みに花卉の縁取りに福と春を合体した字を配した吉祥文の印花文を施している。	淡青緑褐色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	灰白色 微粒子・緻密	15C 龍泉窯	HA③ B14 II S-28 台2312	
90		2類b	底	6.1	畳付の外側を僅かに削り出すが高台の断面形は外削りの略四角状である。内面見込みに圏線と印花文を施す。	青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底:畳付中央が露胎 目痕あり	灰白色 微粒子・密	14C～15C 龍泉窯	HA③ F4 II 台1263	
91		2類a	底	7.0	高台形は畳付の外側を僅かに削り出し断面形が外削りの三角である。内面見込に牡丹の印花を施す。釉は厚い。	青緑色 全面施釉 内底:蛇の目釉剥ぎ 外面に貫入あり	灰白色 微粒子・緻密	15C前半～中 龍泉窯	HA④ N14 II 台2792	
92	6.2			畳付の外側を斜めに削り出し高台の断面形は外削りの三角状である。内面見込は轆轤痕が顕著である。圏線を配する。外底に線刻の渦巻文を描いている。	淡青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	灰白色 細粒子・細かい	14C～15C 龍泉窯	HA③ R19 II 台1161		
93	3類a	底	5.8	高台形は畳付の内側を外削りに削り出し断面形が三角である。内面見込に凹線の圏線に牡丹の印花を施す。	淡黄灰色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	灰白色 細粒子・細かい	15C～16C代 福建・広東系	HA③ T17 II 台1280		
94	XX II 類c (3類c)	口 底	8.8	腰折の直線的に立つ口縁は直口口唇は四角状をなし鉄軸の覆輪を施している。高台形は畳付の内側を外削りに削り出し断面形が三角である。	淡青緑灰色 全面施釉 内底:蛇の目釉剥ぎ 高台は露胎	灰白色 微粒子・緻密	17C頃 福建・広東系	HA③ B14 II 台2823 HA③ A13 II 台2708		
95			6.6	腰折の直線的に立つ口縁は直口口唇は四角状をなし鉄軸の覆輪を施している。高台形は幅広、畳付の内側を外削りに削り出し断面形が三角である。	オリープ色 全面施釉 内底:蛇の目釉剥ぎ 外底:露胎	褐色 細粒子・細かい	17C～18C 福建・広東系	HA④ K-L2 III SP1108 台3976		
第112図・図版76	96	I類	口	15.0	胴部から逆「八」の字状に開き口縁は外反する。口唇は丸い泉州窯の可能性が高い。	オリープ色 腰部:露胎	褐色 黒色細粒子 微粒子細かい	元 福建・広東系 泉州窯か	HA② M7 III SK002 照屋 台2054	
	97	1類a	底	5.9	高台の断面形は四角状内底見込に陰圏線に帖花の双魚文を施す。	淡青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	灰白色 微粒子・細かい	14C 龍泉窯	HA③ E6 II 台1368	
	98	II類a	口	12.4	口縁は外側に折れる。高台は畳付けの両側を斜めに削り出し外削りの断面形は台形。外面に鎗蓮弁文?を巡らしている。内面は無文。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ E14 II SD42 台3124	
	99			12.0	腰折れで口縁は外側に強めに折る。高台は畳付けの両側を斜めに削り出し外削りの断面形は台形。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内面は無文。	淡青緑灰色変色 全面施釉 外底:蛇の目状に釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ D19 II 台2003. 2005 HA④ G17 III 台2289	
	100			13.6	腰胴部が丸く口縁は口折れ。外面に帖手タイプの鎗蓮弁文を巡らしている。内面は無文。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA② A2 II 祝殿 台493	
	101			13.4	腰胴部が丸く口縁は口折れ。高台の断面形は四角状。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内底に麦穂の様な印花文を施す。	淡青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底:露胎	灰白色 微粒子・細かい	14C末～15C中 龍泉窯	HA④ F18 III 台2177 HA④ B18 II 台1971 HA④ C19 II 台1984	
	102	II類b	口	11.0	腰折れで胴は直線的に外に開く口縁は口折れである。高台は畳付けの両側を斜めに削り出し外削りで断面形は台形。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内面は印花の双魚を施文している。	淡青緑灰色 全面施釉 外底:蛇の目状釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ J04 II 台2524 HA④ K02 II 台2609 HA④ I10 II 台2441	
	103			13.8	胴が丸く口縁は口折れ。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA② S5 II 阜 台2464 HA② A2 II 祝殿 台474	
	104	2類a	底	12.4	腰胴部は直線的に外に開く口縁は口折れである。無文。	青緑灰色	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ K04 II 台2629	
	105			5.6	高台は畳付けの外側を斜めに削り出し断面形は三角状。外面に型で押した様な蓮弁と線彫の蓮弁文を巡らし内底見込は印花の双魚を施文している。	淡青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底は露胎	灰白色 微粒子・細かい	14C末～15C中 龍泉窯	HA② A19 II 祝殿 フ02-04 台1875	

第三章  
5

第59表-5 青磁(碗・皿) 観察一覧

(法量単位: cm)

第図版	図番号	種類	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号	
第112 図版 76	106	2類a	底	— 6.7	—	高台は畳付けの両側を斜めに削り出し外削りで断面形は台形。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内面は陽刻の圓線に印花の双鱼を施文している。	淡青緑灰色 全面施釉 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA② A20 II 祝殿 台1316	
	107		底	— 6.0	—	高台は畳付けの両側を僅かに削り出し断面形は四角形。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内面は圓線に印花の双鱼を施文している。	青緑灰色 全面施釉 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA② A1 II 祝殿 台455	
	108	2類b	底	— 6.2	—	高台は畳付けの外側から削り出し断面形は台形を成す。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内面は圓線に草花の印花文を施している。	青緑灰色 全面施釉 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ G20 II 台2318 HA④ F17 III 台2169	
	109		底	— 4.6	—	高台は畳付けの両側から削り出した外削り断面形は台形を成す。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内面は圓線に草花の印花文を施している。	青緑灰色 全面施釉 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ H18 III 台2397	
	110	Ⅲ類a	口 底	11.8 5.8 3.1	—	胴部は直線的に外に開く口縁は外反である。高台は畳付けの外側を斜めに削り出し断面形は三角形。内面に篋描きの唐草文を巡らしている。内底見込は印花の草花文を施している。	オリーブ色 全面施釉 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ B18 II 台1973. 1971	
	111	Ⅲ類b	口	13.7	—	—	腰折れで胴部は直線的に外に開く口縁は外反である。内面に篋描きの唐草文を施している。	オリーブ色 全面施釉	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ G18 III 台2324
	112	Ⅲ類c	口 底	12.8 5.6 3.8	—	—	腰折れ胴部直線的に開きながら立ち口縁は大きく外反する。高台は畳付けの両側を斜めに削り出し断面形は三角状。無文。	オリーブ色 全面施釉 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ H16 III 台2370 HA④ F20 III 台2205 HA④ H17 III 台2385
	113	1類b	底	6.9	—	—	高台は畳付けの外側を斜めに削り出し外削りである。高台の断面形は台形状。内底面見込みは草花の印花文を施している。	青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底: 露胎	灰白色 微粒子・緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ F17 III 台2163
	114	Ⅳ類	口 底	13.0 6.0 3.5	—	—	腰折れで口縁は外側に強めに折る。高台は畳付けの内側を斜めに削り出し外削りである。高台の断面形は台形状。内底面見込みは円形に露胎し草花の印花文を施している。	青緑灰色 畳付外側まで施釉 外底: 露胎 内底: 円形に露胎	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ D19 II 台2004
	115		口 底	11.4 4.2 2.5	—	—	比較的浅い腰折れ、口縁は外反口唇部は四角、高台は断面形が四角状で小さい。畳付け内は兜巾絞り痕が認められる。内底に幅広の圓線を巡らし中央部は輪状露胎している。	オリーブ色 内底: 輪状露胎 高台畳から内面無釉	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ S17 I or 流路 台1877 HA③ S17 II S-35 台1878
	116	Ⅴ類a	口	11.4	—	—	腰折れの口縁部が稜花の皿、口唇部は丸い。外体は無文、内面に篋描きの流水文と唐草文を描く。	青緑灰色 全面施釉 内外: 貫入あり	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ H17 III 台2381 HA④ H16 III 台2368
	117		口 底	13.8 6.9 3.2	—	—	腰折れの稜花皿である。口縁部は外に開き口唇部に長、短の袈りにより稜花を作る。口唇は丸い、高台は畳付け外側から削り出し断面形は三角状を成す。内面に篋描きの流水文を描き、内底中央は輪状露胎している。	釉色不明 内底: 円状露胎 外底: 蛇目状釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	15C前～中 龍泉窯	HA④ G17 III 台458 HA④ F18 III 台2177 HA④ K10 II 台2641
	118	Ⅴ類a	口	13.8	—	—	腰折れの稜花皿で口唇に深い袈りを入れ口唇部は丸い。内面に3本輪の流水文を描いている。	淡青緑灰色 全面施釉 内外: 貫入あり	灰白色 微粒子・緻密	15C前～中 龍泉窯	HA④ I14 III 台2474 HA④ I16 III 台2491
	119		口 底	11.5 5.0 2.5	—	—	口唇部に袈りをいれた腰折れの稜花皿である。口唇は丸い。高台の断面形は三角状を成す。	淡青緑灰色 畳付の脇まで施釉 外底: 無釉	灰白色 微粒子・細かい	15C前～中 龍泉窯	HA④ G14 II SD41 台3034
120	Ⅴ類b	口	11.0	—	—	腰折れ浅めで口縁部は稜花、口唇部は丸る。内外面無文。	オリーブ色 全面施釉	灰白色 微粒子・細かい	15C前～中 龍泉窯	HA④ I14 III 台2476	
121	4類a	底	5.8	—	—	腰折れ皿である高台の断面形は四角状。外底畳付内に兜巾絞り切り痕が認められる内面に篋描き文を描き、内底に篋描きの流水文を描き内底面に幅広圓線と櫛目文がみられる。	青緑灰色 内底: 畳付内無釉	灰白色 微粒子・細かい	15C前～中 龍泉窯	HA④ F18 III 台2183	
122	Ⅵ類	口 底	10.2 5.3 2.4	—	—	胴の丸い直口口縁皿、口唇は四角い、高台断面形は三角状を成す。口唇部の外側に三角の切れ込みを入れ外体面に線彫りの菊の花弁を描く。内体面に丸彫りの花弁を描くことで上面観が菊花状の輪花になっている。	青緑灰色 畳付内側露胎 内底: 貫入	灰白色 微粒子・緻密	15C 龍泉窯	HA④ K4 II 台2625	
123	Ⅶ類	口 底	9.6 5.4 3.5	—	—	胴の丸い直口口縁皿、口唇部は丸い。外体面に鎗蓮弁文を施す。剣先は尖る。内底面に陽刻の圓線を巡らす。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C中 龍泉窯	HA② A3 II 台1639	
124	Ⅷ類	口 底	9.4 5.9 3.8	—	—	胴の丸い直口口縁、口唇は丸い、高台の断面形は四角近い三角状を成す。外体面に片切り彫りの蓮弁文を施し、内底面に陽刻の圓線と印花文を施している。	淡青緑灰色 釉は厚め 高台内無釉	灰白色 微粒子・緻密	15前～中 龍泉窯	HA④ O19 II 台2858 HA④ N13 III 台2784	
125	Ⅸ類a	口 底	12.4 6.1 3.6	—	—	胴の丸い直口口縁、口唇は丸い。高台の断面形は三角状、外体面中段に陽刻線を巡らし下段に文状蓮弁を4区画に描く。内体面に丸彫りの蓮弁文を描き内底面に陽刻線に印花文を施している。	青緑灰色 釉は厚め 外底: 蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	15C 龍泉窯	HA④ G17 III 台2286 HA④ F18 II 台2173	
126		口 底	9.4 5.8 3.25	—	—	胴の丸い直口口縁、口唇は丸い。高台の断面形は四角状、外体面中段に陽刻線を巡らしている。内底面に陽刻線見込中央は輪状に露胎。無文。	内底面: 輪状釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	15C 龍泉窯	HA④ F17 III 台2166	
127	Ⅸ類b	口 底	8.4 5.0 3.2	—	—	胴の丸い直口口縁、口唇は丸い。高台の断面形は三角状、内体面に三本対の櫛描きの蓮弁文を描き内底面に陽刻線を施している。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子・細かい	15C 龍泉窯	HA④ G15 III 台2257	
128		口	8.2	—	—	胴の丸い直口口縁、口唇は丸い。内体面に二本対の櫛描きの蓮弁文を描いている。	淡青緑灰色 外底内は露胎	灰白色 微粒子・細かい	15C 龍泉窯	HA④ K20 II 台2688	
129	3類	底	4.8	—	—	高台は外側から削り出す断面形が三角状で小さい。畳付け内は兜巾絞り痕が認められ、内底に幅広の圓線と印花文を施し中央部は円状に露胎させている。	淡青緑灰色 内底: 円状釉剥ぎ 高台内釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ A7 II 石18 台1058	
130	4類b	底	5.2	—	—	腰折れ無文。高台の断面形は三角状を成す。	オリーブ色 外底: 畳付け内釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	15C 龍泉窯	HA① Q15 II 台208	
131		底	6.0	—	—	腰折れ無文。高台の断面形は三角状を成す。	淡青緑灰色 内底: 蛇目釉剥ぎ 高台内釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	15C前～中 龍泉窯	HA④ J4 II 台2524	
132	5類	底	5.6	—	—	腰折れ無文皿、高台の断面形は台形状を成す。	オリーブ色 外底: 畳付内露胎	灰白色 微粒子・細かい	15C～16C前半 福建・広東系	HA④ H17 III 台2379	
133	6類	底	3.8	—	—	碁笥底の皿。腰に2条圓線を巡らす内底轆轤痕が認められる。	淡緑灰色 高台内釉剥ぎ	赤褐色 黒色微粒子 細かい	15C～16C前 龍泉窯	HA③ T17 II S-13 台2246	

第三章 5

第113  
図版  
77

第60表-1 青磁(その他) 観察一覧

(法量単位: cm)

第図版	図番号	種類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉色・範囲・貫入	素地色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第113図・図版77	134	大皿	口 底	— 8.8 —	基筒底の大皿。内面は丸彫りの細連弁文を巡らし内底全面に印花文を施す。	淡緑灰色 高台内釉剥ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ A15 II 台 1425
	135		口 底	21.1 9.1 4.8	腰折れ輪花。高台は畳付けの両側より削る。断面形は外削りの台形状。高台内は広義の兜巾状。外体面に連弁文と欄描を縦位に充填。口唇に扶りを入れ輪花を成す。断面形は四角。内面は欄描きの流水文と青海波、波中に欄目を充填。内底に圈線と印花文を施す。	青緑色 全面施釉 外底:高台内を蛇の目釉剥ぎ	灰白色 微粒子 気泡・密	15C前～中 龍泉窯	HA② T20 II 祝殿 台 408 HA② T1 II 祝殿 台 147.538.10861057 HA② A20 II 祝殿 台 1298
	136		口	21.2 — —	口折れの稜花大皿。口唇の断面形は隅丸方形、外面の罫より下位に丸彫りの連弁文を巡らしている。内面の罫上面に罫と欄による流水文を描き内体面に罫彫りの草花文を施している。	黄緑褐色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ G17 III 台 2282, 2285
	137		口	19.0 — —	口折れの大皿。口唇の断面形は四角状。	緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	14C後～15C 龍泉窯	HA② D05 III SK001 畠 台 2298
	138		口	— — —	罫縁緑花の盤口唇の断面形は撥状を成す。内面罫上面にへら彫りの弧状文、内体面に罫彫りの幅広連弁文を描く。	緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C～15C 龍泉窯	HA② C20 II上 祝殿 台 569
	139		底	— 8.4 —	基筒底で高台断面形が方形。内面に欄描の連弁文を描く。内底に圈線が認められる。	オリーブ色 高台内無釉 細かい・貫入	灰白色微粒子 気泡・密	15C前半～中 龍泉窯	HA④ D19 II 台 2000 HA④ D19.20 III 台 4465
	140		口	24.0 — —	口縁は罫縁、口唇の断面形は撥状を成す。内体面に6本欄目の連弁文を描く。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	15C前半～中 龍泉窯	HA④ D19 II 台 2002
第114図・図版78	141	底	— 7.2 —	基筒底で高台断面形が方形。内面に丸彫りの連弁文を描く。内底に印花文を施す。轆轤痕が顕著である。	淡青緑灰色 高台内無釉	灰白色微粒子 細かい	15C前半～中 龍泉窯	HA④ E10 II SD52 台 3218-3	
	142	口	24.6 — —	口縁は緑の先端を上面に引き上げ断面形がL字状の罫縁を成す。口唇は丸い。内面に欄描の細連弁文を描く。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	15C前半～中 龍泉窯	HA④ G17 III 台 2290	
	143	口	24.4 — —	口縁は緑の先端を上面に引き上げ断面形が略L字状の罫縁を成す。口唇は尖る。内面に丸彫りの連弁文を描く。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・細かい	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ F15-17 III 台 4567	
	144	口	11.9 — —	口縁は緑の先端を上面に引き上げ断面形が略L字状の罫縁を成す。口唇は丸い。内面に5本欄目の細連弁文を描く。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	14C～15C 龍泉窯	HA② A20 II 祝殿 台 1317	
	145	口 底	19.7 7.3 4.2	口縁は緑の先端を上面に引き上げ断面形が略L字状の罫縁を成す。口唇は丸い。高台断面形は台形をなしている。内体面罫描きの幅広連弁文内底に印花の双鱼文を施している。	淡青緑灰色 全面施釉 高台内に砂目熔着痕	灰白色微粒子 黒色細粒子 緻密	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ E18-20・F17 III 台 4585 HA④ F15-17 III 台 4567 HA④ F18 III 台 2178	
	146	底	— — —	底部は基筒に近い高台。腰部が有段になる。内面に罫描きの幅広連弁文を施し、見込に圈線を巡らす。	青緑灰色 高台内は露胎	灰白色 微粒子 気泡・密	15C前～中 龍泉窯	HA④ F・G・H17・I18 III 台 4575	
	147	胴	— — —	胴部の横位断面形が楕円形を成す型押し成型の扁瓶である。縦位の繋痕が見られる。外面の平坦部に隅刻の円弧繋いだ窓文。周辺に二条の界線とワラ連弁の枠に青海波を充填している。高級品。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ F15-17 III 台 4567	
	148	胴 (耳)	— — —	偏子で双耳である。外耳を象形的に作る。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子気泡・密	14C後～15C前 龍泉窯	HA④ O15 II 台 2847	
	149	水注	注口	1.5 — —	水注の注ぎ口である。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 気泡密	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ J14 III 台 2546
	第115図・図版79	150	口	11.2 — —	口縁部が大きく外に開く玉緑の中型瓶外面に線刻の圈線を巡らす。玉壺春瓶。	淡緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 気泡密	14C後～15C中 龍泉窯	HA② F3 II 名嘉座 台 1674
151		口	5.0 — —	口縁部が大きく外に開く玉緑小型の瓶。玉壺春瓶。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 気泡密	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ F13 III 台 2106	
152		口	4.8 — —	口縁部が頸ぶから有段をなし口縁になる断面形は階段状になる。	淡緑灰色 全面施釉 箇所に釉が厚い 貫入あり	白色微粒子 黒色細粒子 気泡・密	15C～16C前 龍泉窯	HA② G20 II 瓦屋 台 935	
153		底	6.0 — —	玉壺春瓶高台畳付けに釉剥ぎ痕と砂目を残している。外体面罫描きの連弁文。	オリーブ色 畳付釉剥ぎ	灰白色微粒子 黒色細粒子・密	14C代? アトヲ?	HA③ B11 II 台 3295	
154		底	7.2 — —	外体面線刻の芭蕉文と罫描きの唐草と二条圈線を挟み線刻の連弁文を描く。	オリーブ色 畳付釉剥ぎ	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ C13 II 台 1157 HA③ D13 II 台 3282 HA③ B14 II S-28 台 2312, 2314	
155		底	7.0 — —	外体面に線描連弁文。	淡緑灰色明るい 釉薄く透明 畳付釉剥ぎ	灰白色微粒子 気泡・密	14C末～15C 龍泉窯	HA② C1 II 台 2430	
156		底	7.5 — —	瓶底部高台外面に陽圈線、やや粗い。	外底:畳付けから内 側露胎	淡緑灰色微粒子 黒色細粒子・細	14C～15C中 龍泉窯	HA② G02 III SP007 名嘉座 台 2080	
157		底	5.0 — —	玉壺春瓶圈線刻。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ H10 II 台 2333	
158		胴	— — —	外体面に罫描きの唐草を描く。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ B14 II S-28 台 2312	
159		胴	— — —	外体面に罫描きの流水文と唐草文を描く。唐草の中に細かい欄描き文を充填している。同122(青磁・93)より新しい。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA② K6 II 照屋 台 1778	
160		胴	— — —	外体面に罫描きの連弁文、唐草文を描く。唐草の中に細かい欄描き文を充填している。同122(青磁・93)より新しい。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA② M7 III SK002 照屋 台 2054	
161		胴	— — —	外体面に線刻の芭蕉文と二条圈線を挟み罫描きの唐草を描く。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ C13 II 台 1225	

第60表-2 青磁（その他）観察一覧

(法量単位：cm)

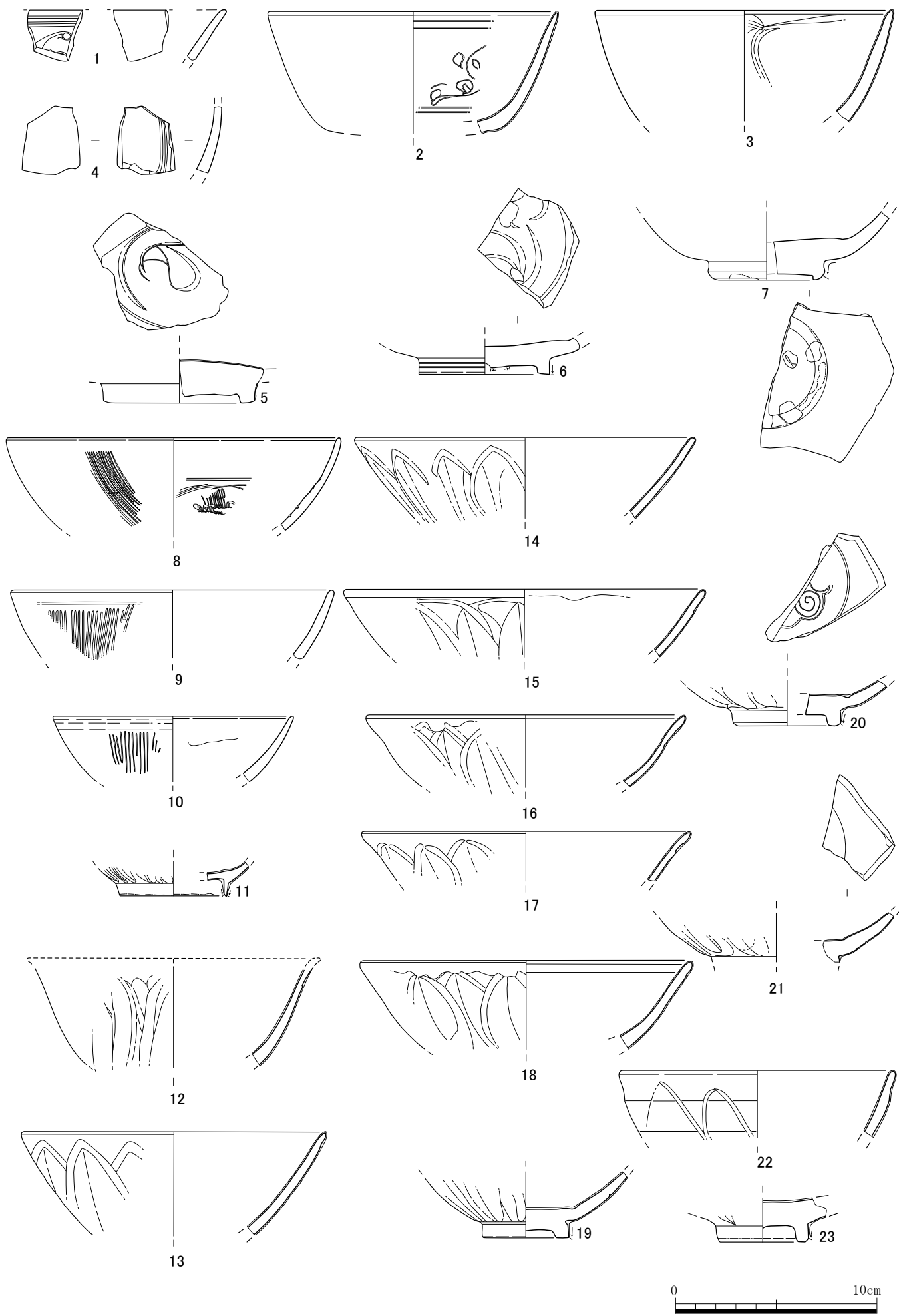
第図 図版	図 番号	種類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	地区・クリッド・層 遺構・台(取)番号
第115 図・図版 79	162	瓶	胴	—	外外面襷描きの蓮花唐草。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA④ G13 II SD42 台3182
	163		頸	—	長頸の瓶。襷描きの蓮弁文を描く。	緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	15C 龍泉窯	HA② A20 II 祝殿 702-04 台1885
	164		胴	—	ナデ肩のびわ状の瓶である。肩に環状の飾りを貼付している。環状飾りの上部に円形の貼付痕があり簡易的な耳が付く。環状飾付双耳瓶と考えられる。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 気泡・密	14C後～15C中 龍泉窯	HA③ A12 II 台1164
蓋	165	口	—	酒会壺の蓋が考えられる。鏝部分のみの破片で甲上面に片切彫の草花文が見られる。	淡青緑灰色 内面露胎	灰白色微粒子 黒色細粒子 緻密	14C後～15C前 龍泉窯	HA② J3 II 味子 台2371	
	166	胴	14.8	鏝の張り出した壺の蓋が考えられる。鏝はやや上向きである先端の断面形は四角。壺内に納まる突起部分は短角先端は四角い。	淡青緑灰色 内面露胎	淡灰色微粒子 黒色細粒子 やや密	14C後～15C中 龍泉窯	HA② E1 II 味子 台1442 HA② H20 III SK001 瓦屋 台2096	
	167	胴	—	鏝の張り出した壺の蓋が考えられる。壺内に納まる突起部分と鏝縁とが別に作られる二重構造である。鏝の先端の断面形は三角状を成し、壺内に納まる突起部分は短く先端が内側から斜めに削り出した断面形は三角である。	灰青色 全面施釉 貫入あり	白色 黒色微粒子 緻密	15C～16C前 龍泉窯	HA② G19 II 瓦屋 石10 台762 HA② G01 II 瓦屋 台1033 HA② G20 II 瓦屋 台1055 HA② K5 II 照屋 台1820	
	168	口	23.8	甲部はやや平坦で僅かに膨らむ。緑部は単構造で被せ蓋である。緑断面形は四角甲上面に取っ手が貼付痕のみ見られる。被蓋。	灰青色 全面施釉 縁に虫食い 貫入あり	白色微粒子 黒色細粒子 緻密	14C～15C前 龍泉窯	HA② J5 II 照屋 台1711 HA② K6 II 照屋 台1778 HA② J6 II 照屋 台1705 HA② T5 II 芳野 台2500	
第116 図・図版 80	169	小鉢	口	8.6	口縁部が「く」の字に内側に屈曲する。口唇は尖る。外外面に鎚蓮弁文を施す。	淡青緑灰色 全面施釉	白色微粒子 黒色細粒子 気泡・密	13C中～14C前 龍泉窯	HA③ S17 II 台1582
	170	杯	底	2.8	内底蓮通心轆轤痕が見られる。高台断面形が台形高台ない兜巾絞り状。	淡緑灰色 畳付から内側露胎	白色微粒子 黒色細粒子 気泡・密	14C～15C 龍泉窯	HA④ F15 III 台2130
	171		口	6.7	腰部が張り口縁に向かい直に立つ口縁で外反する。内底面は平坦か外外面に片切り彫りの蓮弁文を描く高杯の可能性あり。	淡青緑灰色 全面施釉 内底面の釉が厚い	灰白色微粒子 気泡・密	14C～15C 龍泉窯	HA④ N17 III P62 台90
高杯	172	高底基部	—	高足杯の脚部である。横位の線刻文が巡る。粗製。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・密	14C末～15C 龍泉窯	HA② A20 II 祝殿 台1312	
	173	脚部	—	高杯の脚部の可能性あり。	脚内露胎	灰褐色微粒子 細	14C末～15C 龍泉窯	HA③ 不明 台1060	
杯	174	杯	口	10.2	口縁に向かいやや開きながら直線的に立ちあがる。口縁は外反する。口唇部に口鏝を施している。	外面：淡青緑色 内面：白色	灰白色微粒子 緻密	18C～19C 景德鎮窯	HA② C20 II上 祝殿 台569
	175		口	—	口縁に向かいやや開きながら直線的に立ちあがる。口縁は外反する。口唇は口鏝である。	外面：淡青緑色 内面：白色	灰白色微粒子 緻密	18C～19C 景德鎮窯	HA② I 台655
	176		胴 底	3.6	腰部の丸い丸碗形、高台は断面三角状の華奢な作り高台内に方形の染付銘款が認められる。	外面：淡青緑色 内面：白色 畳付け露胎	灰白色微粒子 緻密	18C～19C 景德鎮窯	HA② D02 II 祝殿 台1374
177	鉢	底	7.5	腰部の張った大鉢高台断面形は台形外外面に線刻の蓮弁文を巡らしている。	淡緑灰色 高台内露胎	灰白色微粒子 気泡・密	17C代 福建・広東系	HA③ E05 II 台1202 HA③ E05 I 台3368	
香炉	178	香炉	口	14.9 74.3	鏝縁香炉、釉が比較的薄い。内面に一部釉が厚い部分があり突起状のものが貼付される可能性がある。外面の肩圏線を巡らしている。	淡青緑色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色細粒子 緻密	15C頃 龍泉窯	HA② B7 II 畠井戸2 台626
	179		口 底	23.8 9.4 13.4	鏝縁三足香炉口唇は丸い。底面は平底脛に半球状の脚を供え付けている。足は穿孔されている。髷上面に線彫りの圏線に繪文を巡らし、頸部に線彫りの波状文下段に蓮弁文更に下段に窠彫り牡丹唐草を施している。	外面：淡青緑色 内面：透明釉 外底：露胎	白色微粒子 緻密	18C～19C 景德鎮窯	HA② II上 祝殿(A4+B2+B20+C19 C20+E19)、台568 II(A3) 台419 HA③ II(E15+E16+F15) S-3 S-4 台685
碗	180	碗	口	15.9	腰に張りを持ち外に開きながら立ち上がる口縁で一旦内に寄り外反する。口唇は角のある舌状。外面に轆轤痕が認められる。	オリーブ色 外底：露胎	灰色 黒色微粒・細かい	14C～17C タイ?	HA② I2 II 名嘉座 台2349
	181		胴	—	腰に丸味を持ち外に開きながら立ち上がる。	オリーブ色 外底：露胎	灰色 黒色微粒・細かい	14C～17C タイ?	HA② K6 II 照屋 台1778
	182		底	5.0	見込みは平坦で広めである。高台は外削り、断面形は三角状を成す。高台内は兜巾絞り状に尖る。	緑灰色(変色) 外底：露胎	灰色 黒色微粒・細かい	14C～17C タイ?	HA② A2 II 祝殿 台487
	183		口	15.1	胴部は逆「八」の字状に外に開きながら直に立ち上がる口縁上部で僅かに外反し、口唇は舌状。	オリーブ色 内底：外底露胎	灰色 黒色微粒・細かい	14C～17C 東南アジア	HA② A1 II 祝殿 台1301
184	瓶	胴	—	「八」の字状の肩から頸部に縦耳が付く。外面は轆轤痕が顕著である。	薄緑灰色	灰白色 黒色微粒・細かい	15C頃 タイ	HA② A10 II 祝殿小 台992	



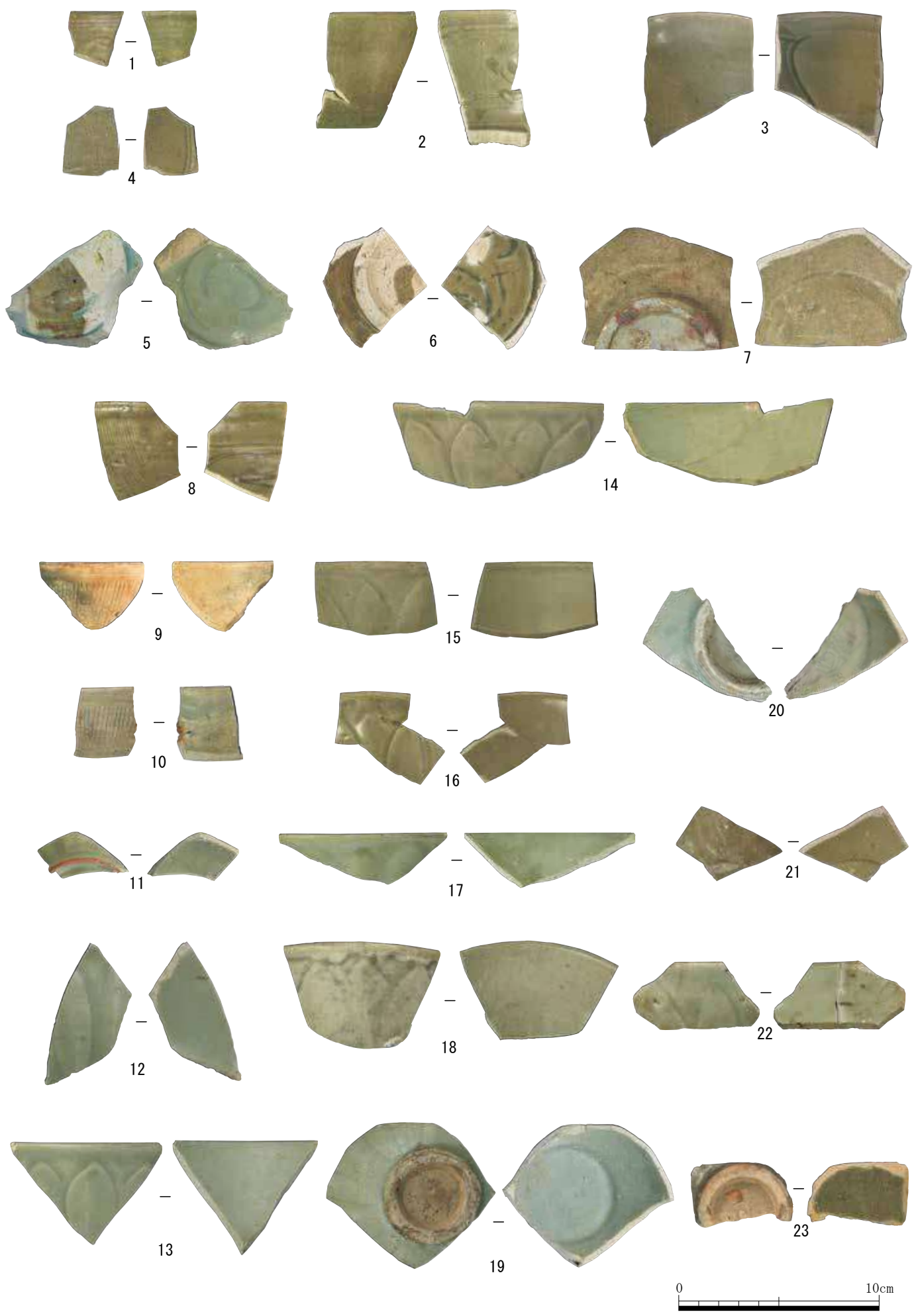




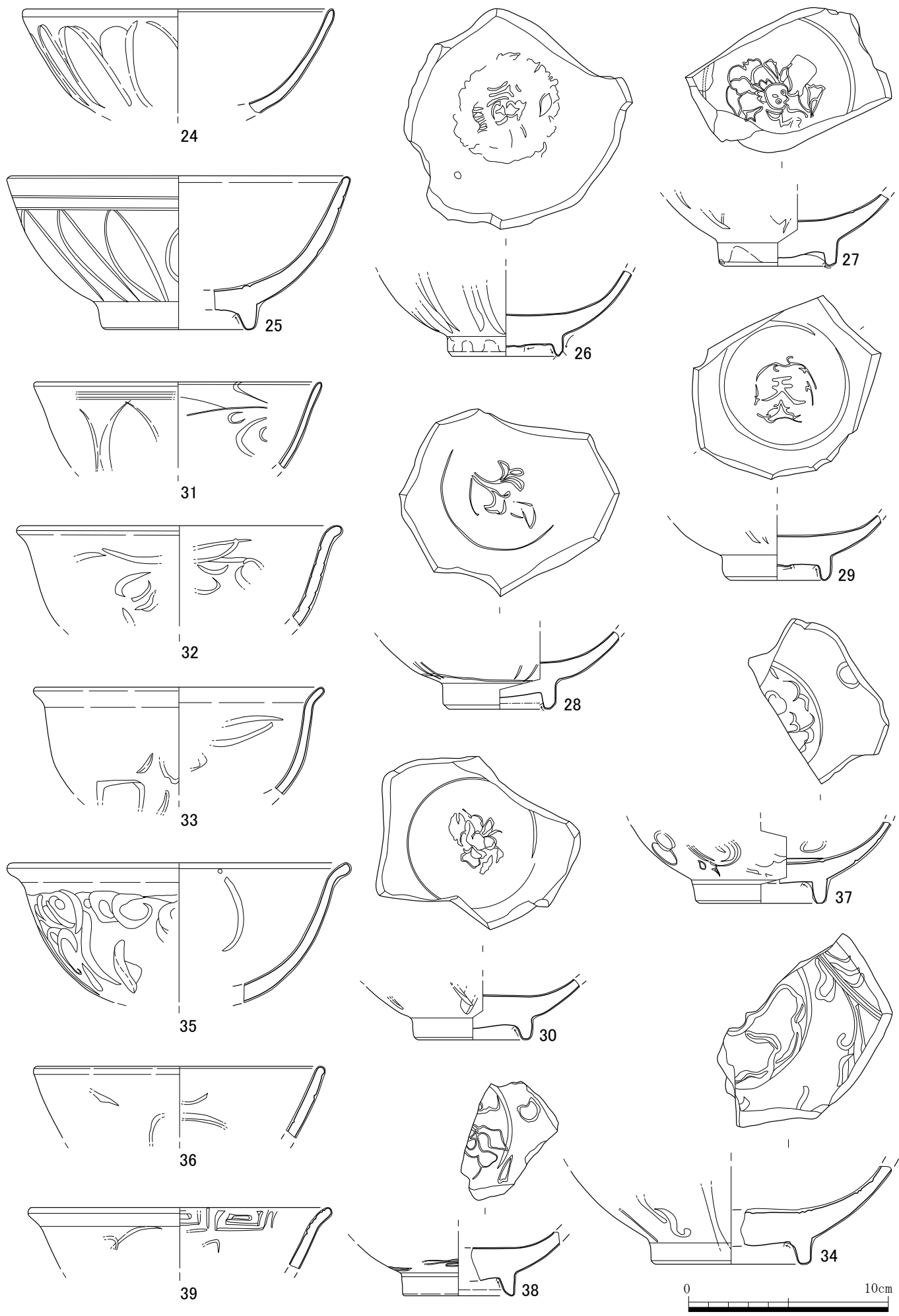




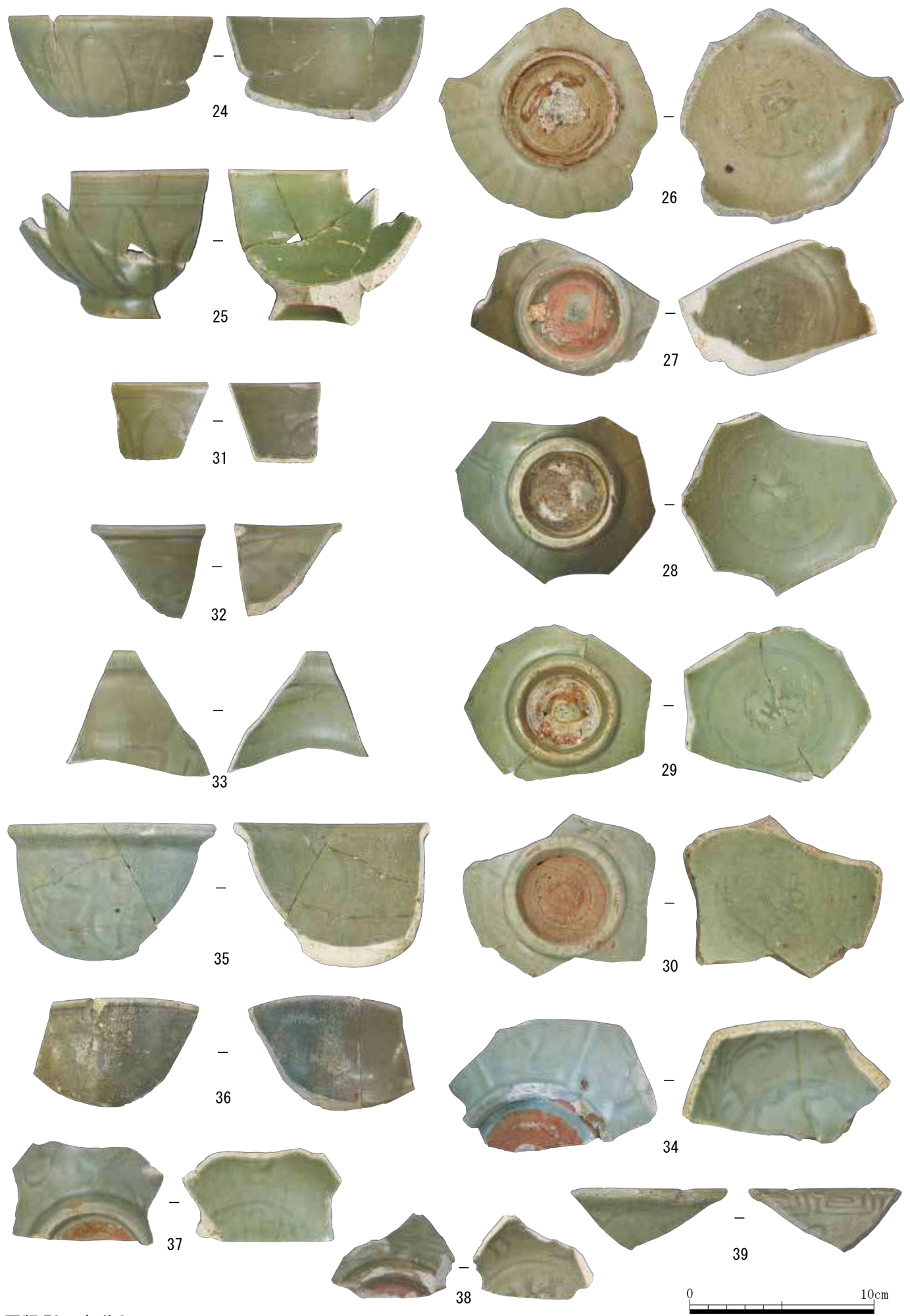
第 107 图 青磁 1



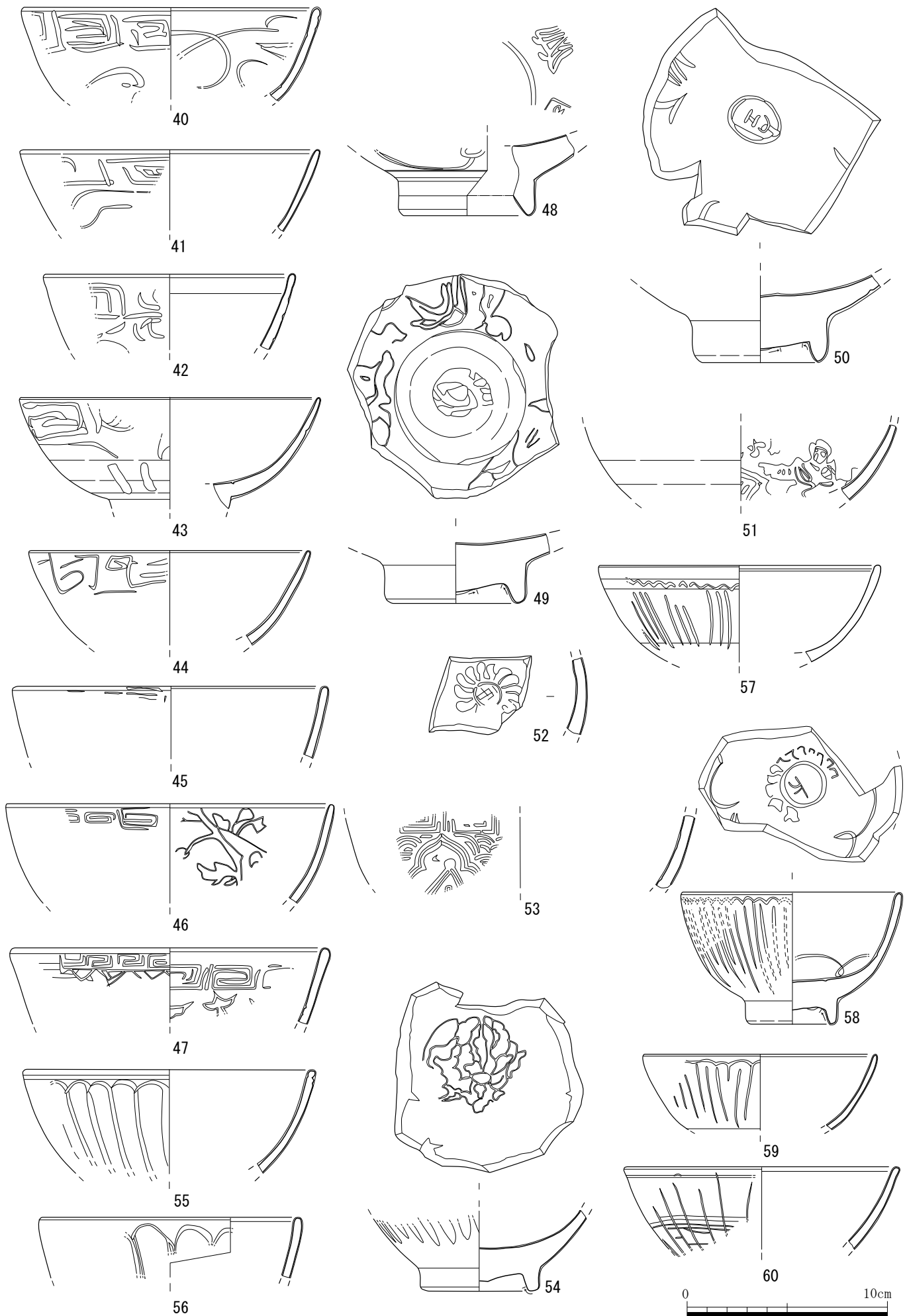
图版 71 青磁 1



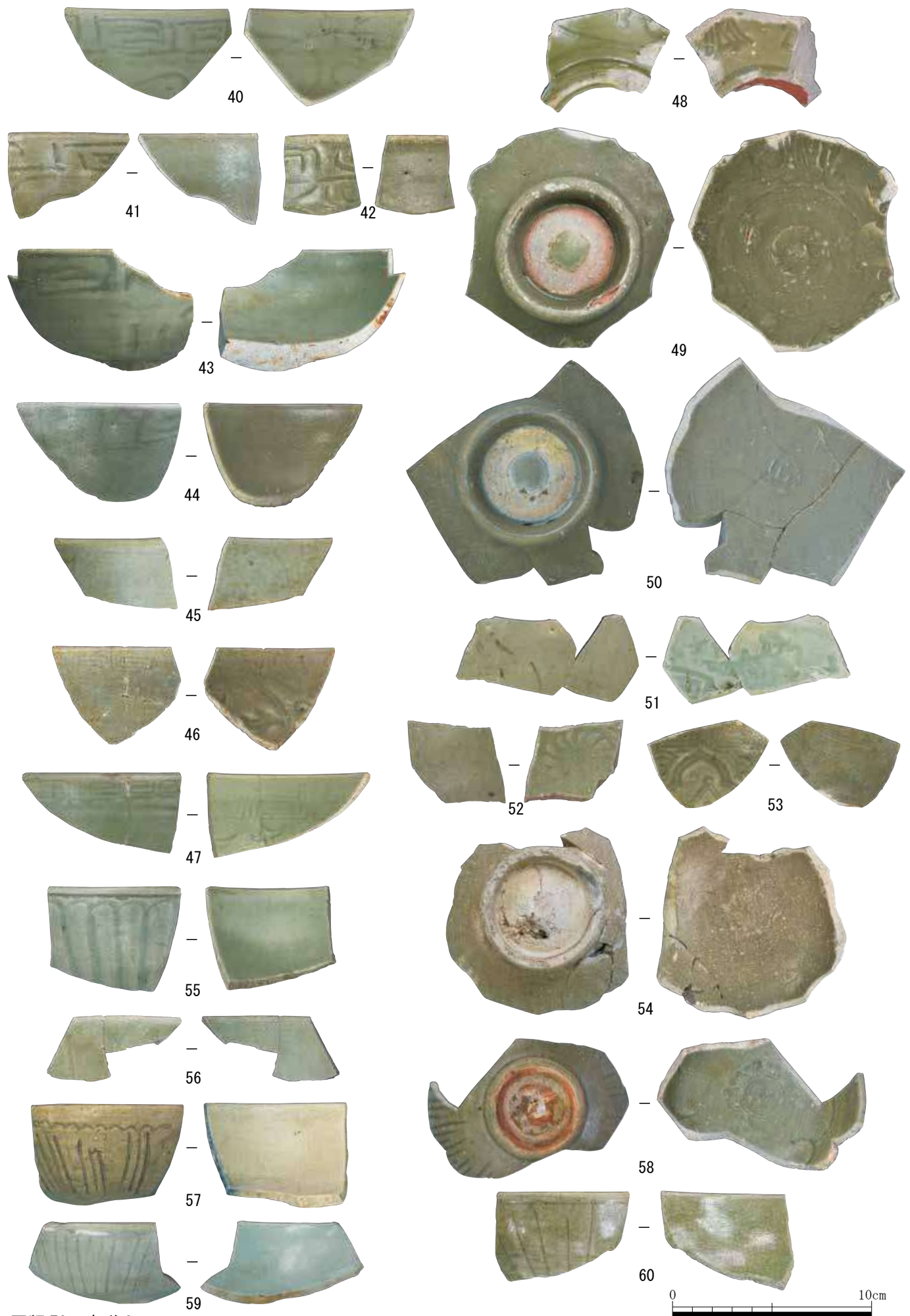
第 108 图 青磁 2



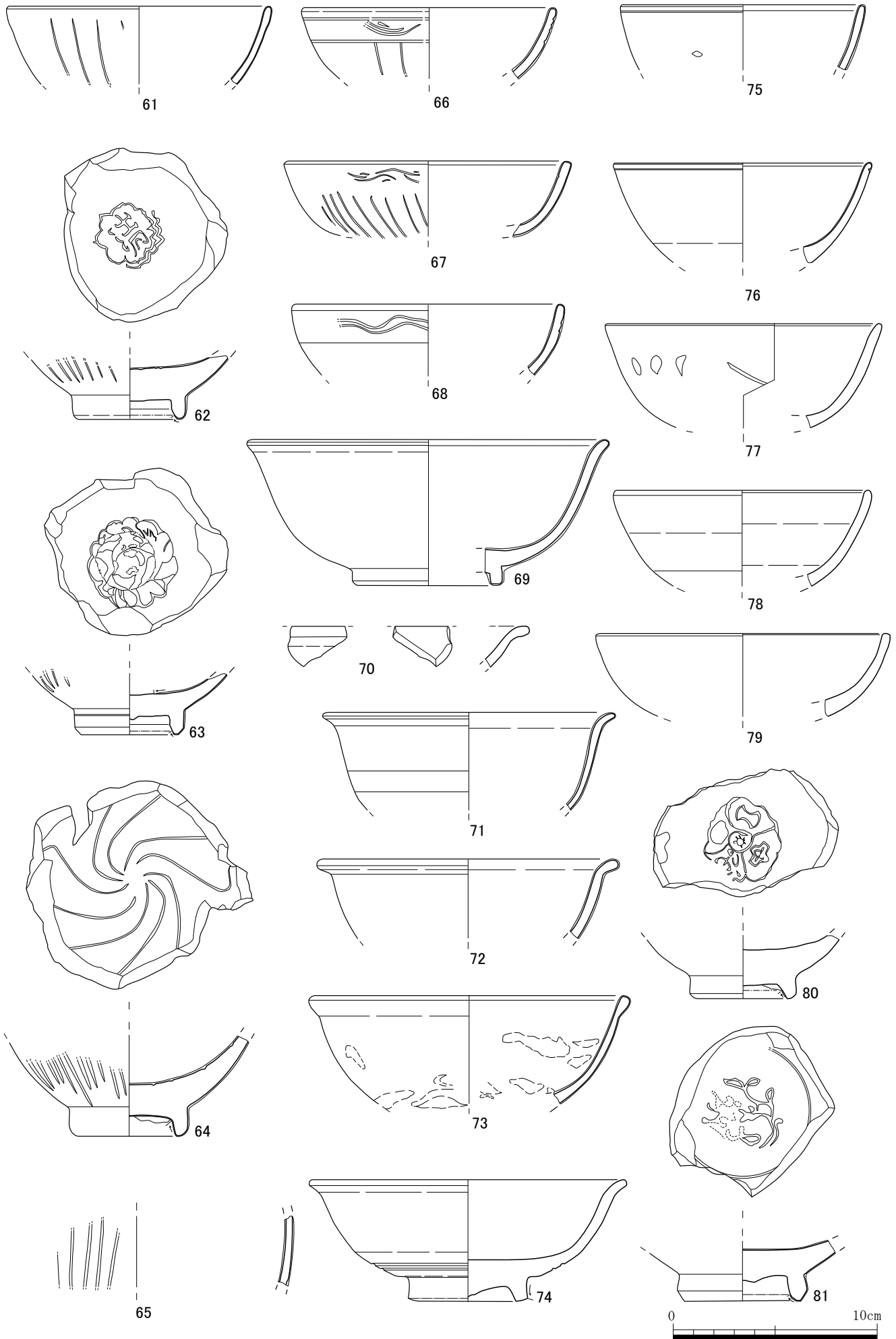
图版 72 青磁 2



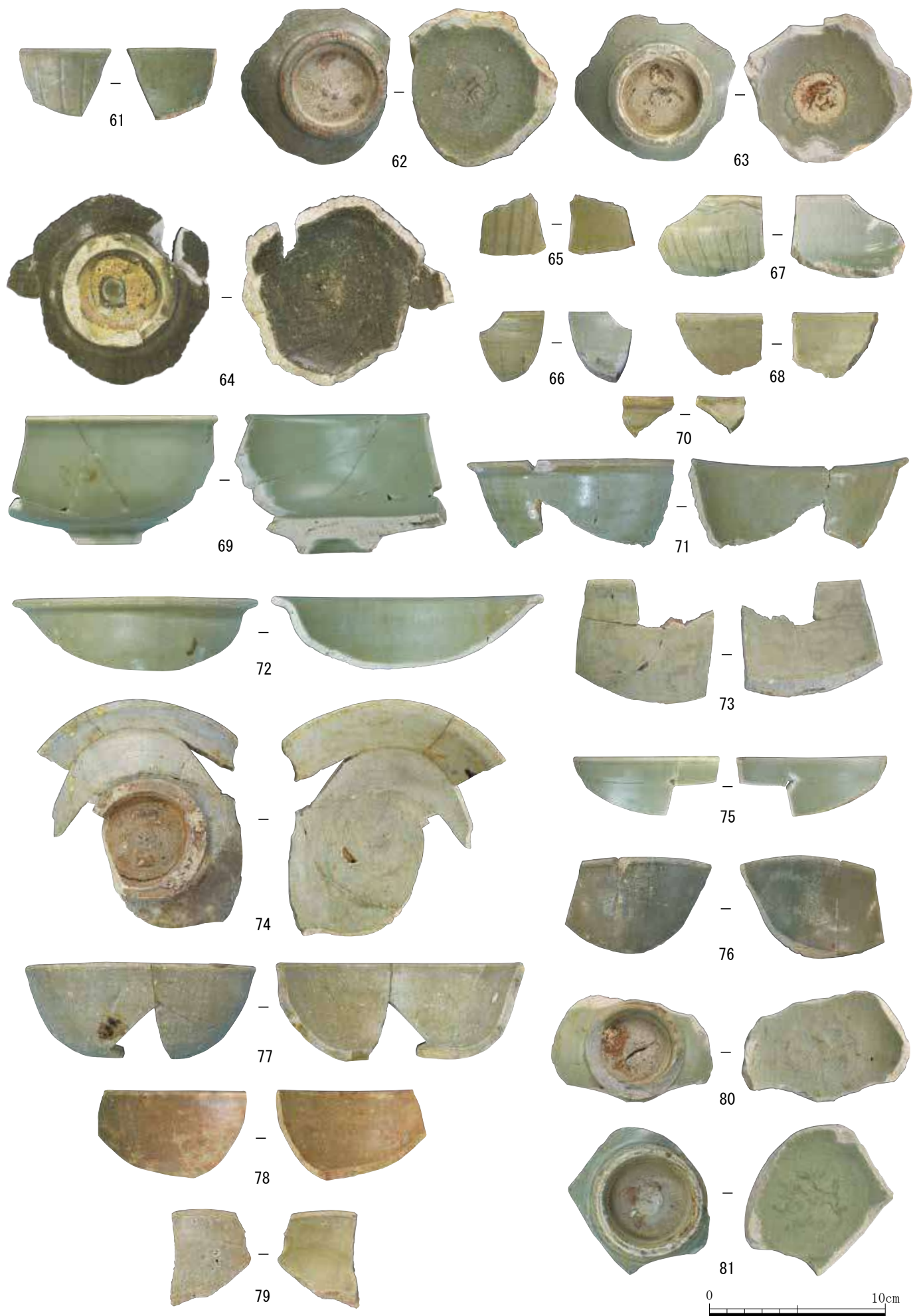
第109图 青磁 3



图版 73 青磁 3

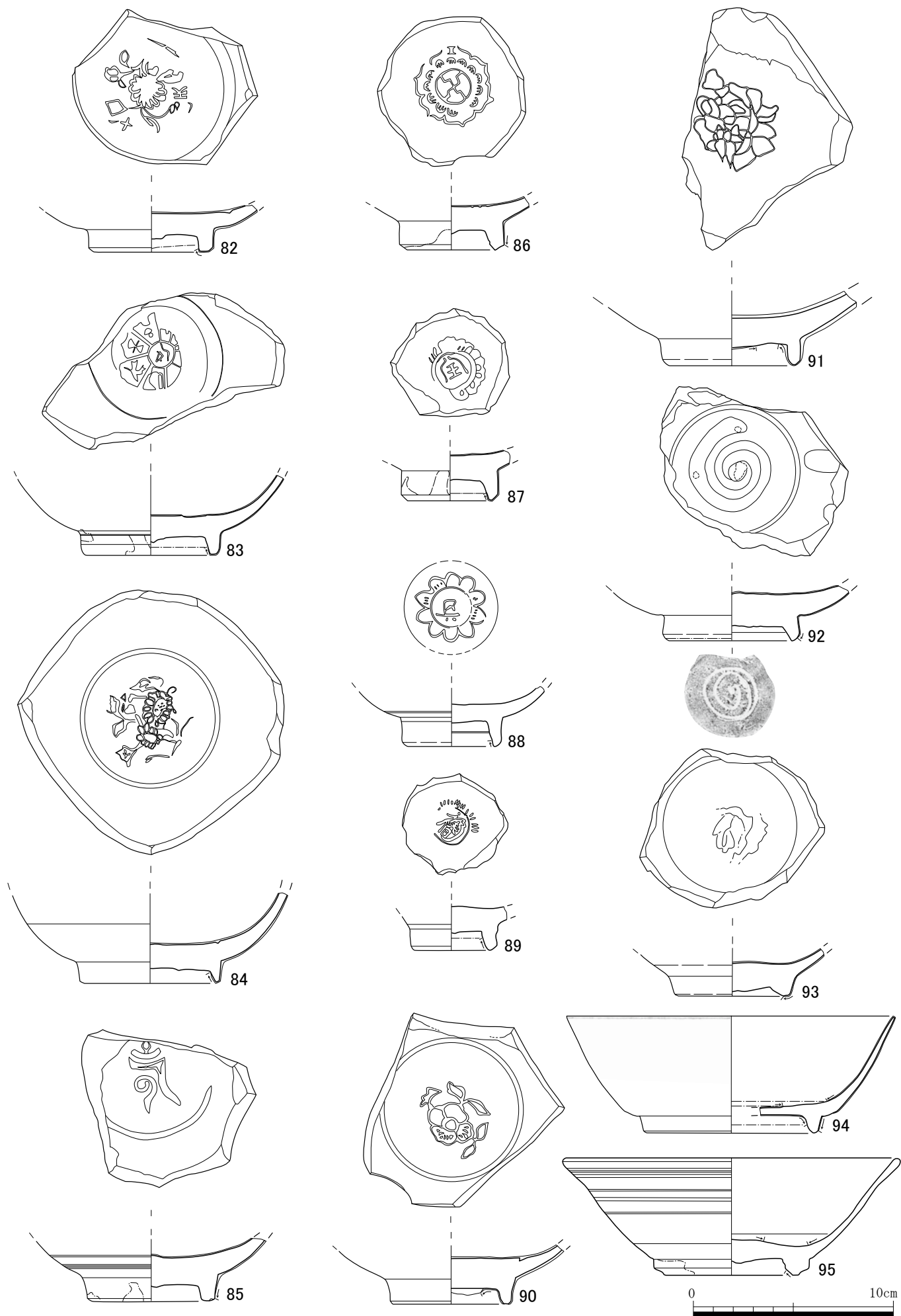


第110图 青磁 4

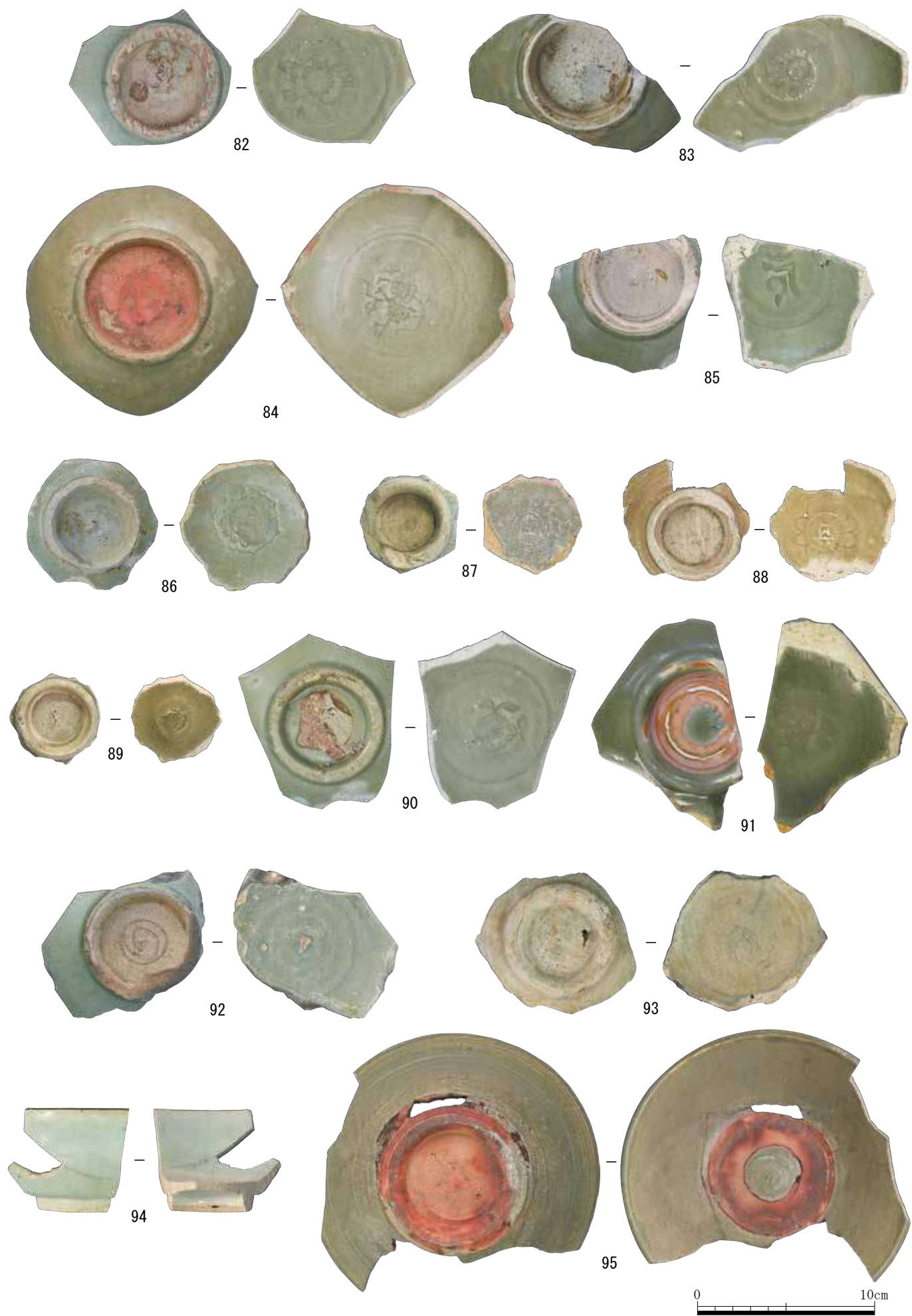


图版 74 青磁 4

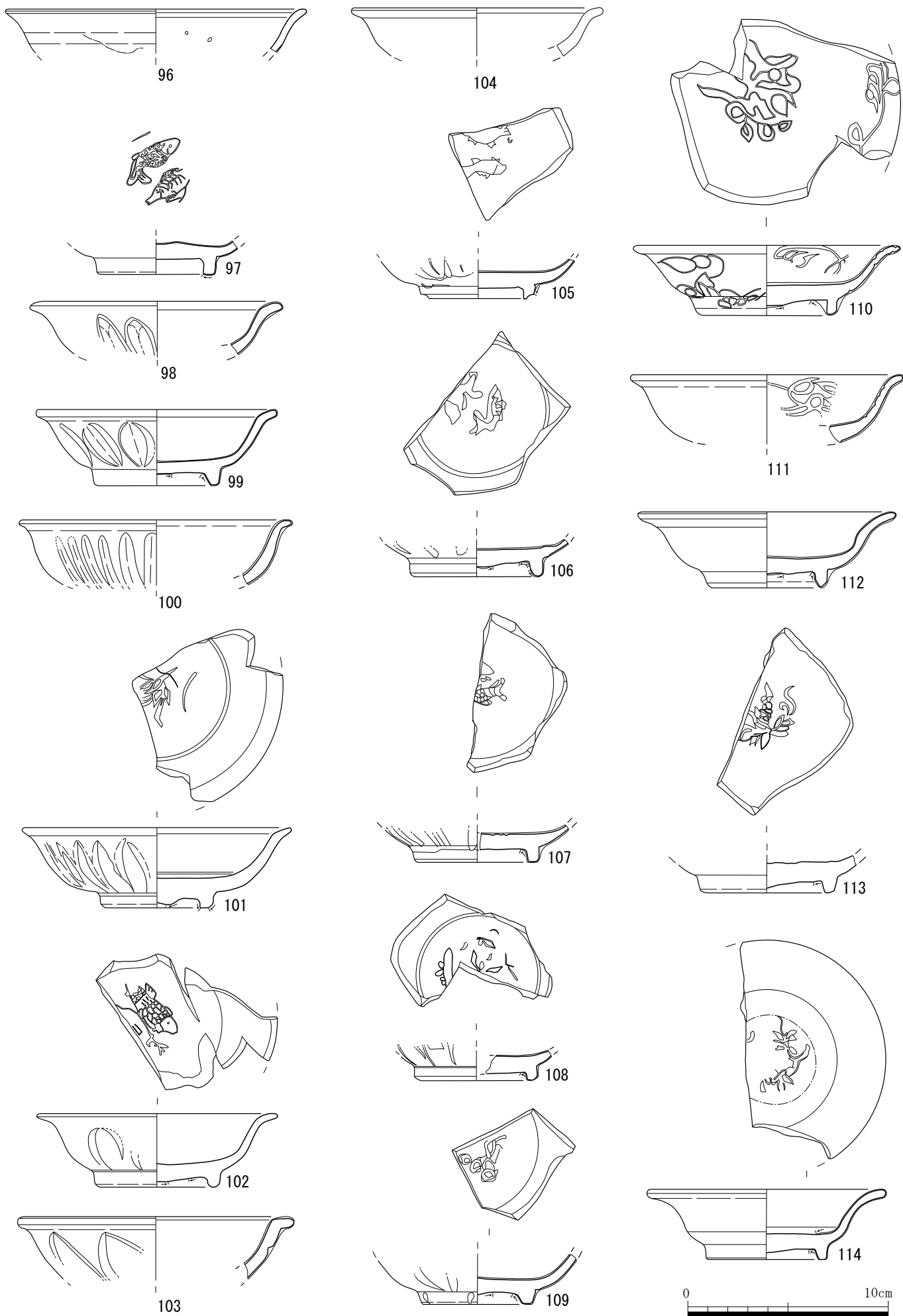




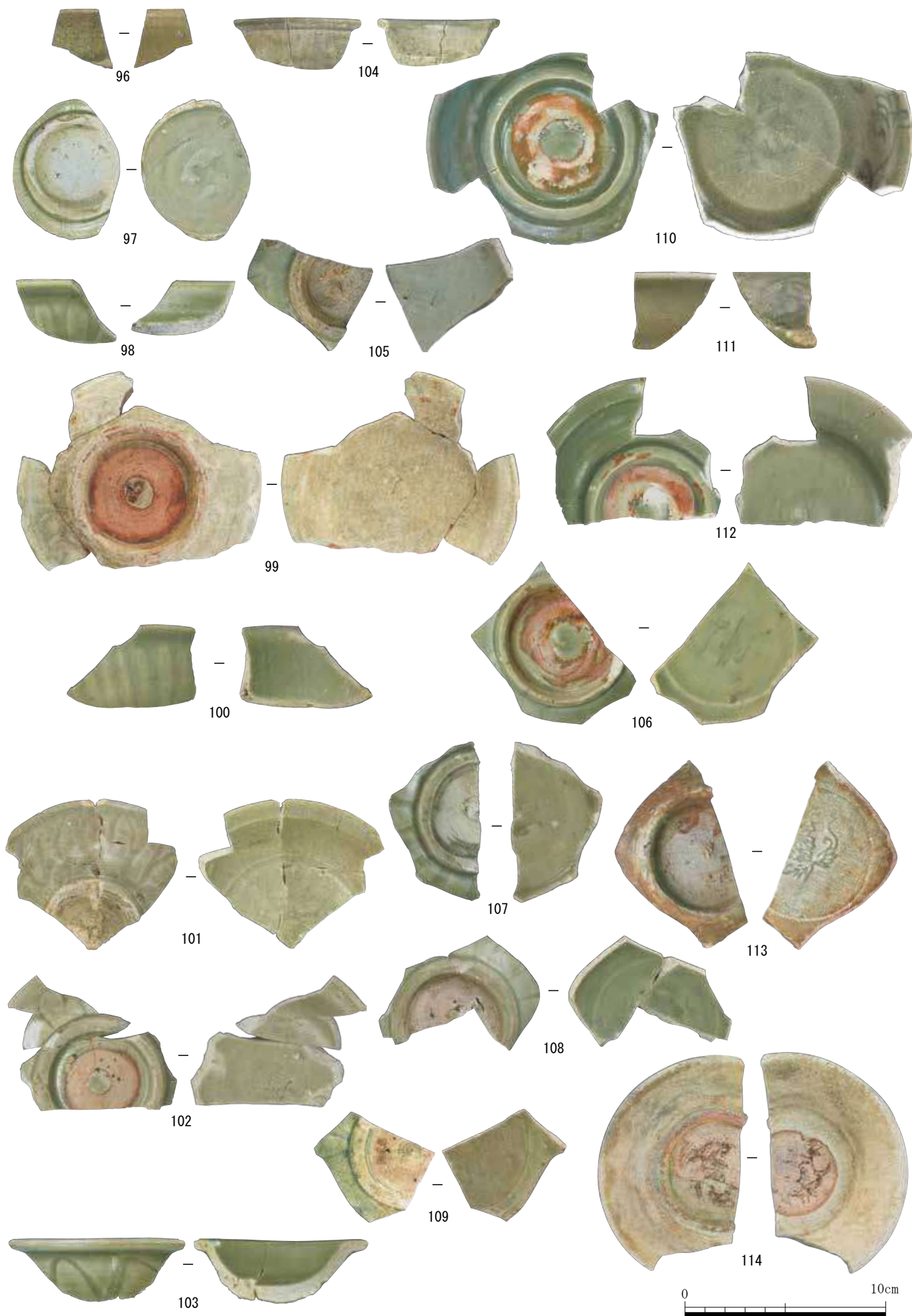
第 111 图 青磁 5



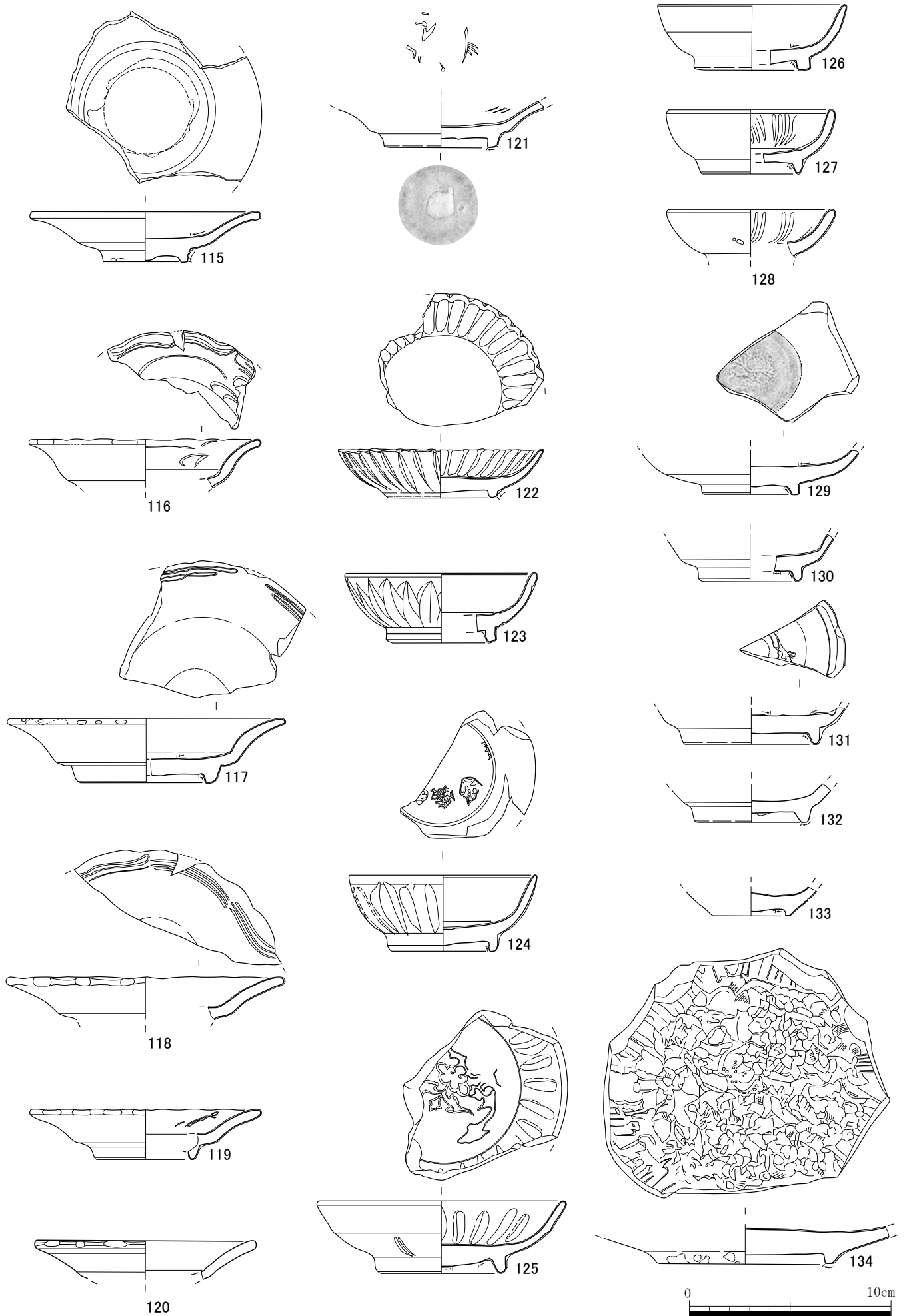
图版 75 青磁 5



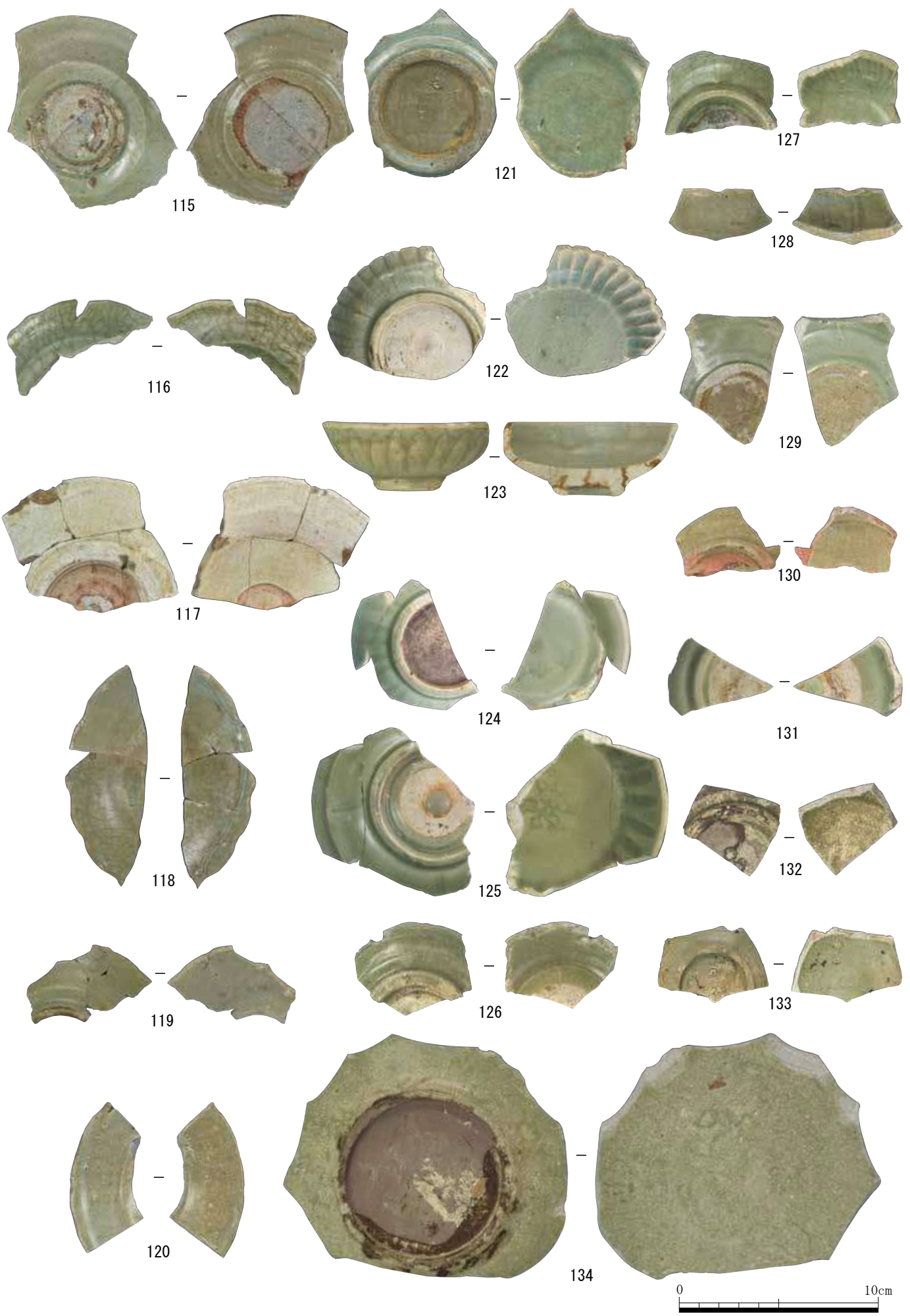
第112图 青磁6



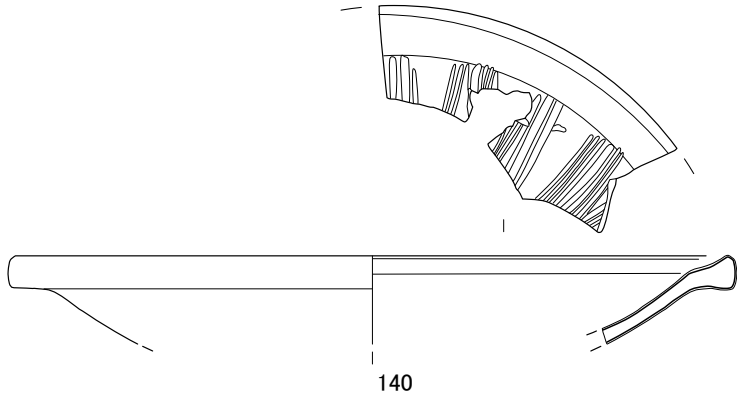
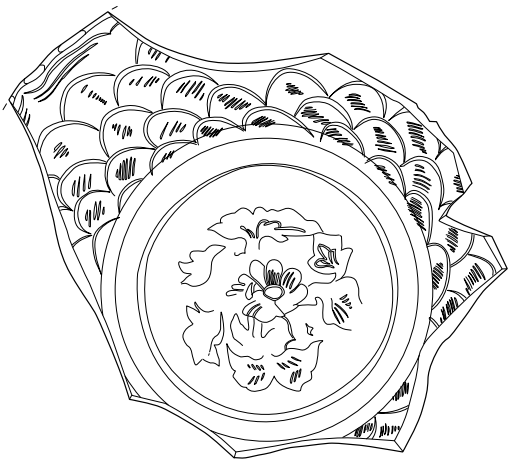
图版 76 青磁 6



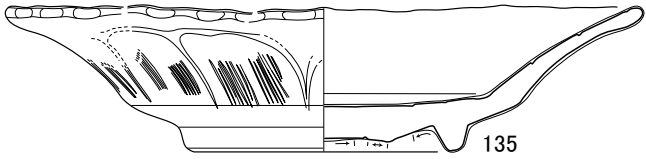
第113图 青磁 7



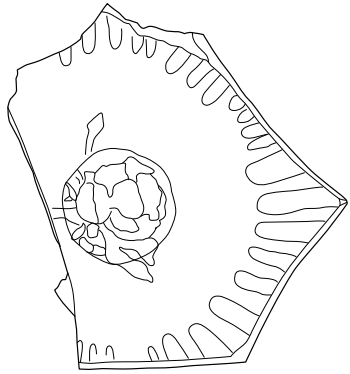
图版 77 青磁 7



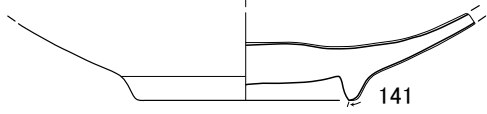
140



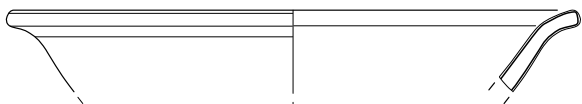
135



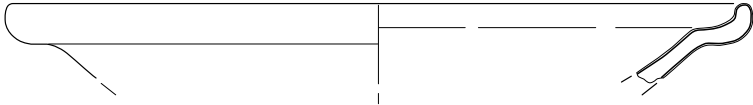
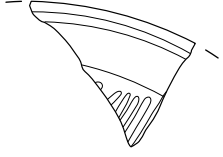
136



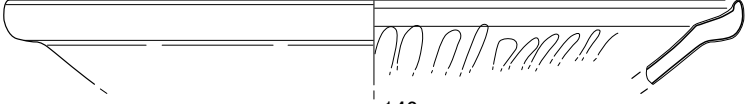
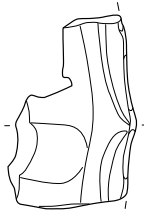
141



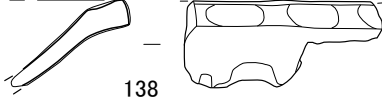
137



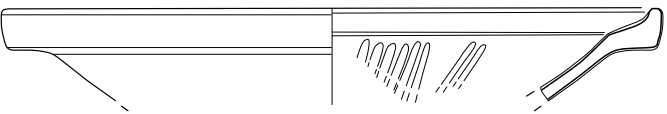
142



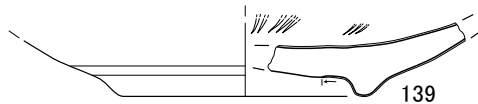
143



138



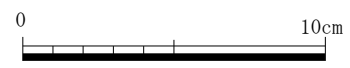
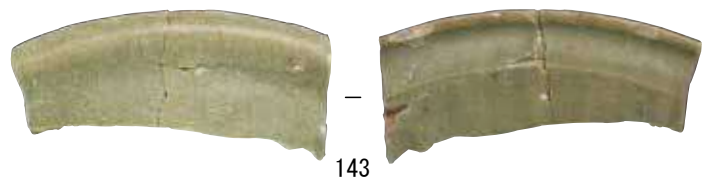
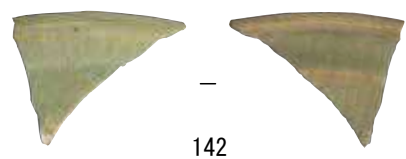
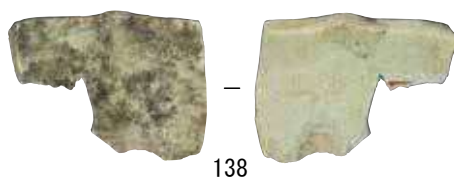
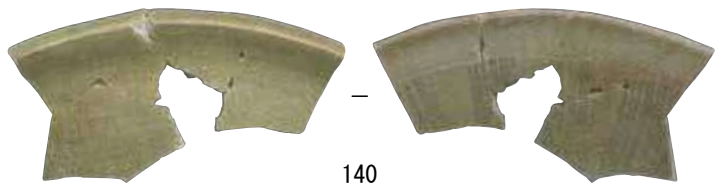
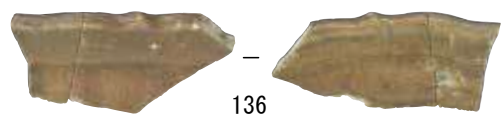
144



139

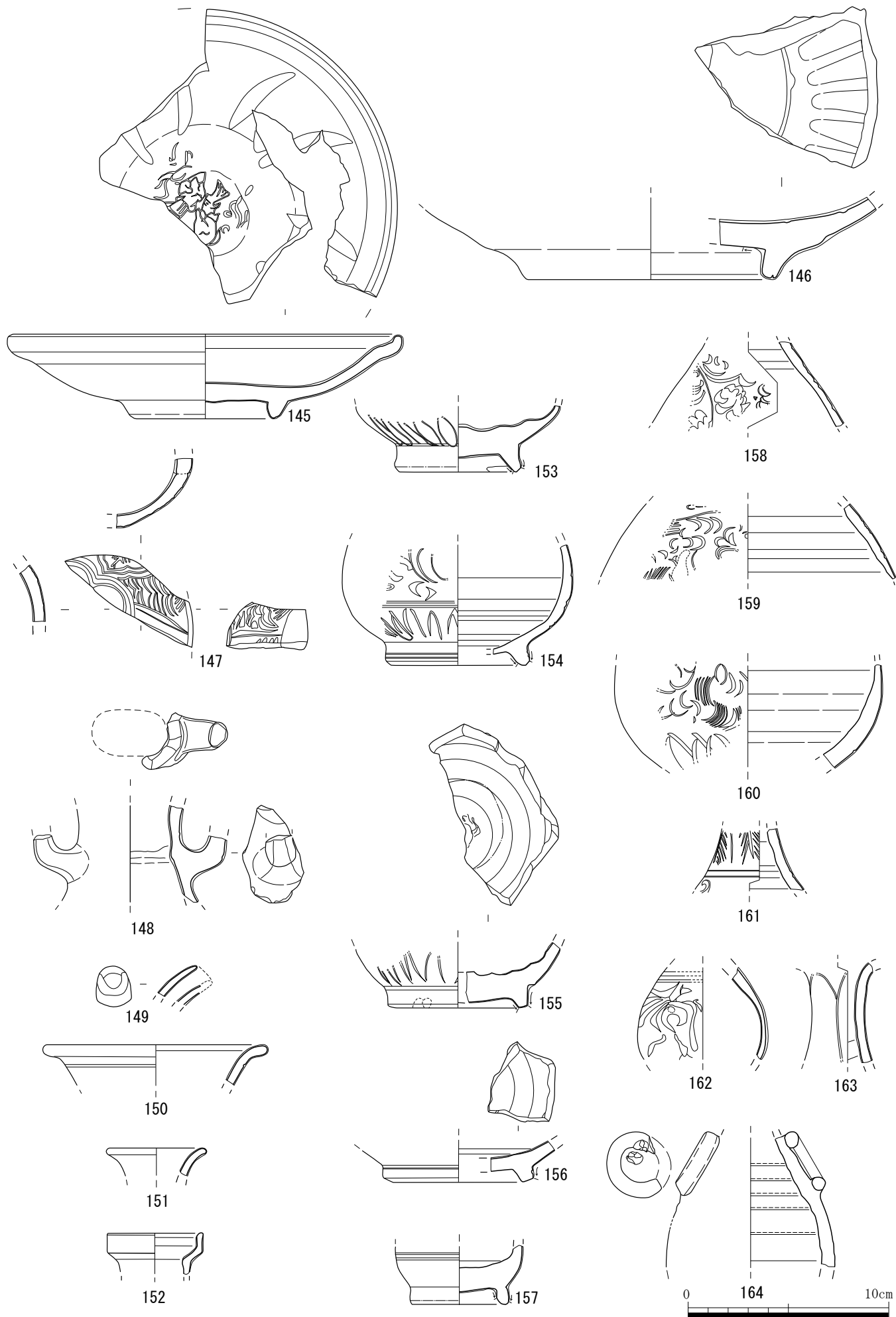


第 114 图 青磁 8

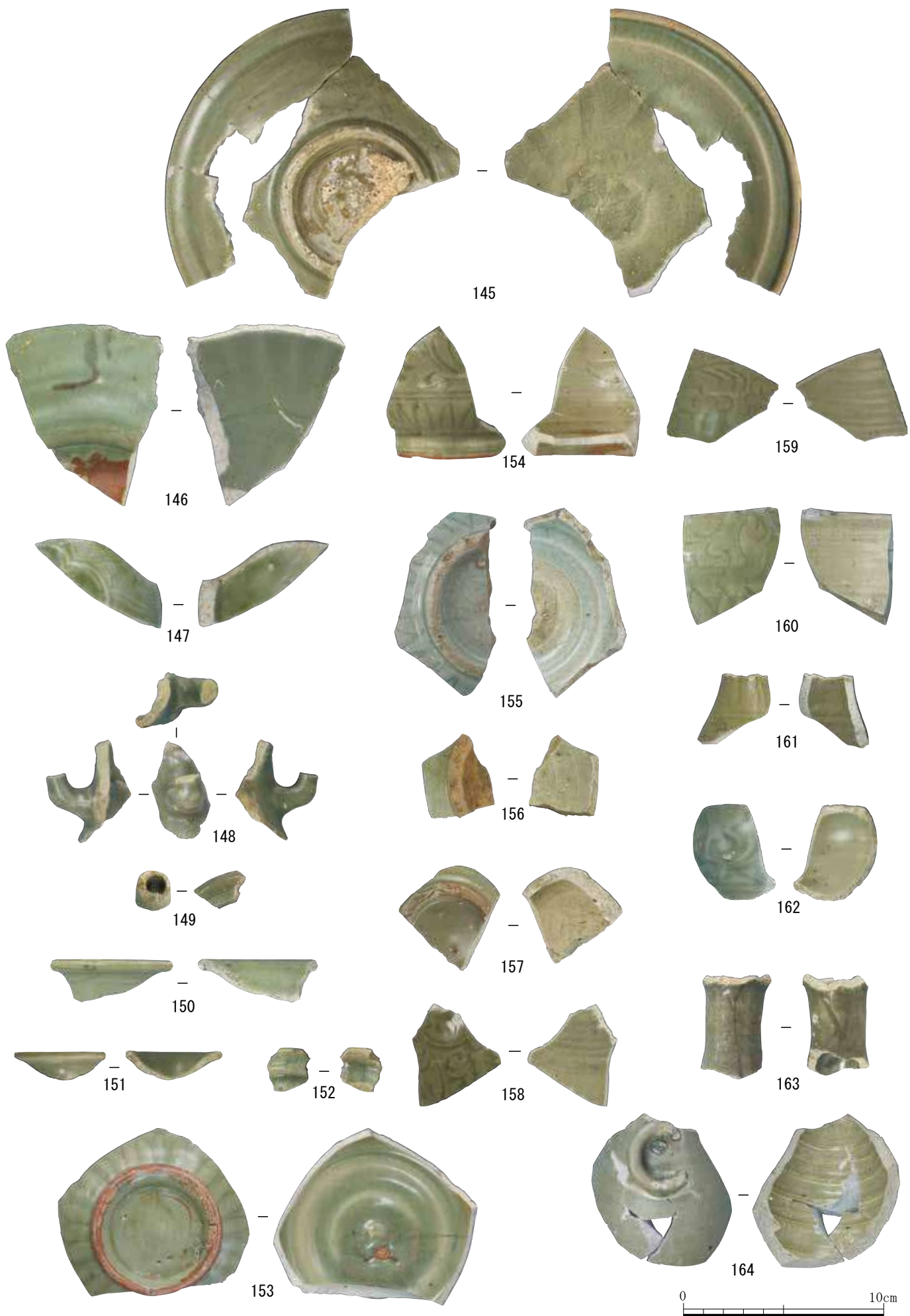


图版 78 青磁 8

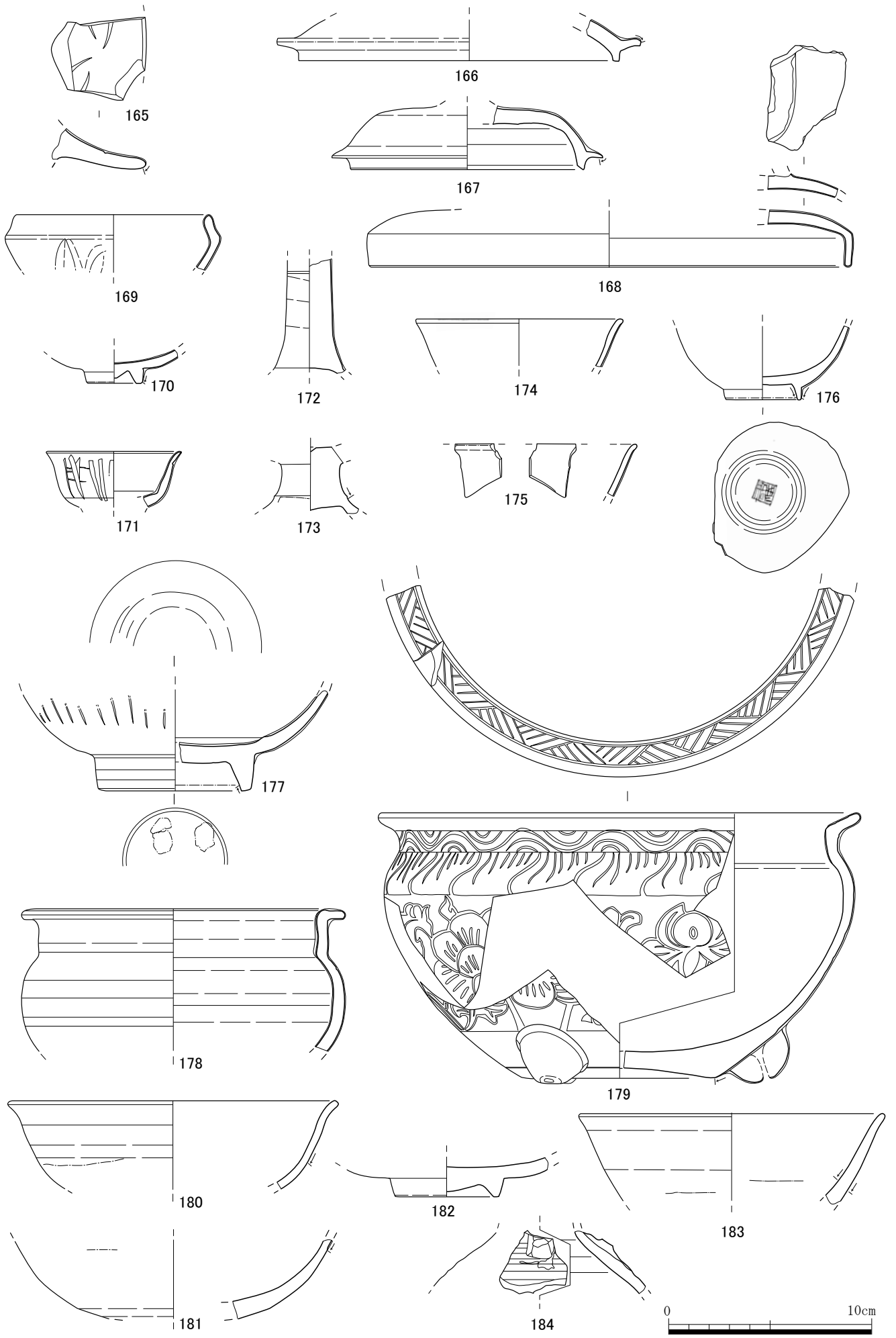




第115图 青磁9



图版 79 青磁 9



第116图 青磁 10



图版 80 青磁 10

## (12) 白磁

中国産白磁は総数 1062 点で碗、皿、鉢、杯、瓶、壺、壺蓋、急須の 8 種が得られた (第 64 表)。又、台湾産急須 1 点と、ベトナム産の碗 2 点を合せて報告する。全器種を含め図上復元が可能なものは 6 点あるが残り全て破片資料である。分類は形態、成形方法、文様構成、施文範囲、釉調、素地により行い、元代から明代の分類や編年は太宰府分類 (森田勉・横田賢次郎 1978) 森田 (1982) に準拠するものである。

当該器の平面分布 (第 121・122 図) は HA ③においては元代、明代の資料が自然流路 (S-640) の周辺に分布し、自然流路 (S-640) 内にみられない。逆に清代の資料は S-640 に僅かに分布することから自然流路 (S-640) の埋まる時期が明代以降、終戦以前であることが予想できる。HA ②は元代、明代、清代共に全体的に分布するが、元代・明代は F ~ J19 ~ 4 のエリアに集中する傾向にあり、グスク期の遺構と重なる。HA ④は清代の資料は殆ど出土していない。

**1. 碗** 中国産 555 点である。中国産は福建・広東系のものが多数を占め景德鎮窯産は僅かである。生産年代は元代から清代まであり、生産年代に幅がある。I ~ VII 類に分けられる。

**I 類：玉縁口縁** - 口縁を玉縁状に肥厚、底部は蛇の目高台、外底が露胎し高台は低い。器肉厚い。図 1 は内底が丸く窪む、高台内の削りは浅い玉縁口縁の底部が考えられる。

**II 類：口禿端反口縁** - 上部で外反、内面に口禿。底部は高台が低く器肉が薄い。図 2 ~ 9 は高台径が小さく腰部から丸みを持ちながら外に開き立ち口縁は外反する。口唇の断面形態は四角状をなし口唇の上面と内側を露胎させる口禿口縁である。外体面に轆轤痕が顕著で内底見込みに一条圈線を施している。

**III 類：口禿内湾口縁** - 上部で内向、内面に口禿。図 44 は胴部に丸みを持ち口縁が内湾する口禿の蓋付碗である。

**IV 類：内湾口縁**

**A- 丸碗形**：全体的に器肉が厚く、胴部に丸味を持つ。口唇は比較的角張るものと丸いものとある。底部は内底全面釉、外底は腰下部まで露胎。釉は厚め。高台の削りは浅く器肉が厚い。内底面有文 (印花) と無文がある。ビロースク II。(図 12・18・19)

**B- 浅碗形**：胴に丸みを持ち浅い。口縁は内湾する。図 20 は胴部が浅く、丸みを持つ口縁は内湾し口唇は丸い。

**V 類：外反口縁**

**A- 外反の弱い口縁** 図 11 は胴部にやや丸みを持ち外側に開き口縁は端反り。外体面に轆轤痕が顕著である。

**B- 外反が強い口縁** 胴上位まで丸味を持ち口縁は外反させる。口唇は丸いものとやや細くなるものとある。図 22 は高台径が比較的小さく高台の削りも浅い。図 29 はビロースク III に属するもので、胴部が直線的に開き立ち上がり、口縁は外反し、外体面に轆轤痕が認められる。

**VI 類：直口口縁碗**

**A- 口縁は外に開きながら直線的に立つ。**口唇は三角状に肥厚、上面を水平に切っている、平碗である。(図 10)

**B- 逆「八」の字状に開き立ちあがる直口の碗である。**(図 24)

**C- 腰部から直線的に開き立ちあがる直口の碗である。**口唇の断面形態は撥状をなし先端は平坦になる。器面に轆轤痕が顕著である。(図 41)

**VII 類：型成形** - 型押し成形の碗である。図 38 は腰部外面に型押し成形のための皺が認められる。

・底部：高台付き。1 ~ 5 類に分けられ、内底文様は A 有文 B 無文に細分される。

**1 類** - 玉縁口縁の底部。内底が丸く窪む、高台内の削りは浅い。(図 1)

**2 類** - 口禿碗の底部。高台は小さく低めの外削り、断面形は逆台形を呈なす。見込みは高台の中に下がる。畳付けを含め外底は露胎。(図 8、9)

**3 類** - 高台低め。幅広。高台は外削り、断面形態は高台外面を削り出した三角形と台形状を成すものとある。畳付けを含め外底は露胎。(図 10、13 ~ 17、21)

**4 類** - 高台幅が広く浅い。断面形態は四角形を呈する。畳付けを含め外底は露胎。内底面見込みに印花文を施すものと無文がある。高台器肉が厚い。ビロースクタイプ。(図 26、27、30 ~ 32、36)

**5 類** - 高台外面を斜位に削り出し断面形態は三角形を呈する。内底と腰下部から畳付けを含め外底は露胎。見込みに字款を施文するものと無文がある。比較的浅い碗である。2 に対して器肉は薄い。(図 23、33 ~ 35)

**2. 鉢** 総数 3 点得られた。内訳は口縁が 2 点底部 1 点である。(図 45、46)

**3. 皿** 総数 199 点である。福建・広東系のものが多数を占め景德鎮窯産は僅かである。生産年代は 12C ~ 14C 前半の元代から 17C ~ 18C の清代までである。I ~ VIII 類に分けられ、形状から A 口禿直口、B 口禿内湾に細分される。

I類：図 48 は胴部の中位で「く」字状に屈曲し口縁は内湾し立ち上がるものである。太宰府VI - 1

## II類口禿皿

A- 口禿直口：図 49 は胴部の直線的に逆「八」の字状に開き口縁は直口。口唇は角張り上部と内側が露胎した口禿である。見込みは盛り上がる。太宰府IX - 1

B- 口禿内湾：図 50 は胴部にやや丸味をおび口縁は内湾。口唇は舌状で上部と内側が露胎した口禿である。太宰府IX

III類：直口皿 図 61 は胴部が内湾気味に立ち上がり口縁は直口を成す。口唇は舌状。高台外面脇に高台は小さく畳付けの外側から斜めに削り出し、外削りの断面形態が台形状を成す。外面に轆轤痕が顕著に残る。器肉が厚い。(ビロースクタイプ)

IV類：腰折れ皿 図 62 は腰折れの外反口縁で口唇は丸い、外面に轆轤痕を多く残す外底と内底が露胎している。

V類：直口平底皿 図 68 は逆「八」の字状に外に開く口縁は直で口唇は丸い口唇端部と外面は露胎している。器肉厚い。口唇に煤が付着、灯明皿である。

VI類：直口抉り出し高台 口縁は直口、逆「八」の字状に直線的に外に開く。口唇は丸い。高台の四カ所に抉りを加えた、抉り高台である。内底四カ所に目痕が認められる。内底は丸く窪むものと中心が盛り上がるものとある。器肉は厚い。(図 74・75)

VII類：直口碁笥底 高台は碁笥底で、胴部に丸味を持つ内湾気味の直口。内面に型押し施文を施す。図 78

VIII類：型成形皿 型押し成形の皿である。(図 76、77、79)

## ・口縁破片資料

1類 - 外反 口縁が外反し身の深い皿である。(図 69)

2類 - 直口 直行口縁である。逆「八」の字状に外に開きく。(図 67)

3類 - 口唇撥形肥厚 口縁は口唇の断面形態が撥形に肥厚した直口。胴部は逆「八」の字状に開く。図 47

・底部破片資料：形状により 1～4類、さらに内底は A 有文・B 無文に分けられる。

## 1類 - 平底

A- 底径の小さいやや底面の持ち上がった平底である。見込みに印花文を施している。I類の底部が考えられる。太宰府VI - 1 (図 51)

B- 無文 (図 68)

## 2類 - 高台底

A- 内底は露胎するものと施釉とある。(図 53、56～58、60)

B- 無文。(図 52、54、55、59、66、73、84)

## 3類 - 碁笥底 (図 71、72)

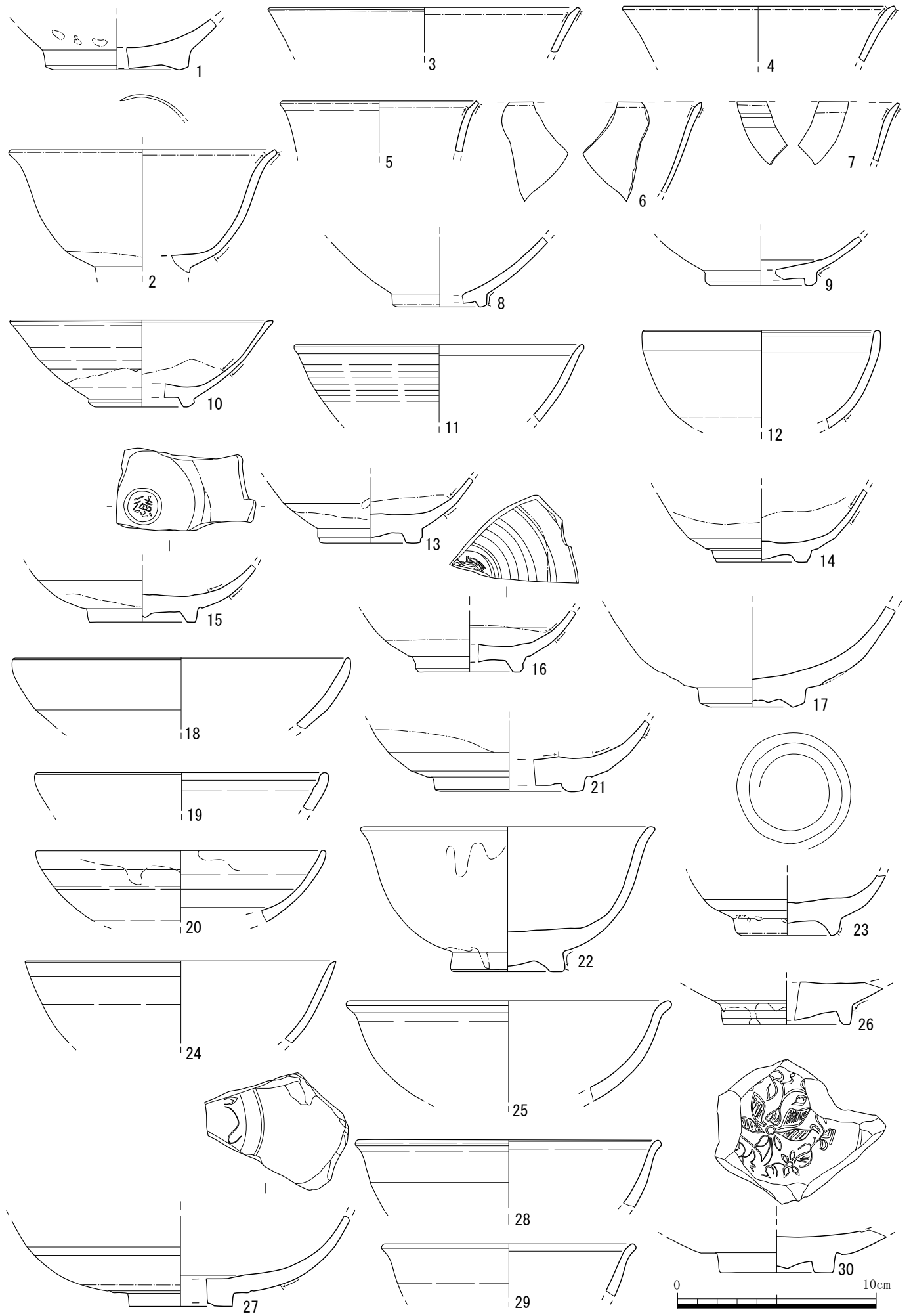
## 4類 - 幅広高台 幅の広い高台を持ち、断面形態は台形状。(図 83)

4. 杯 総数 197 点が得られた。生産地に景德鎮窯、徳化窯、福建・広東系があり、生産年代は 13C～14C の元代から 19C の清代、徳化窯の型成形までみられる。図 85 は胴部の開いた、浅めの杯である。高台は外削りで畳付けの外側を斜めに削りだしている。高台内は兜巾絞り状に削られる。図 89、90 は明代の景德鎮窯系の筒型杯、端反杯である。図 87、88 は福建・広東系の角杯である。図 93、96 は清代の徳化窯製で型成形の杯である。

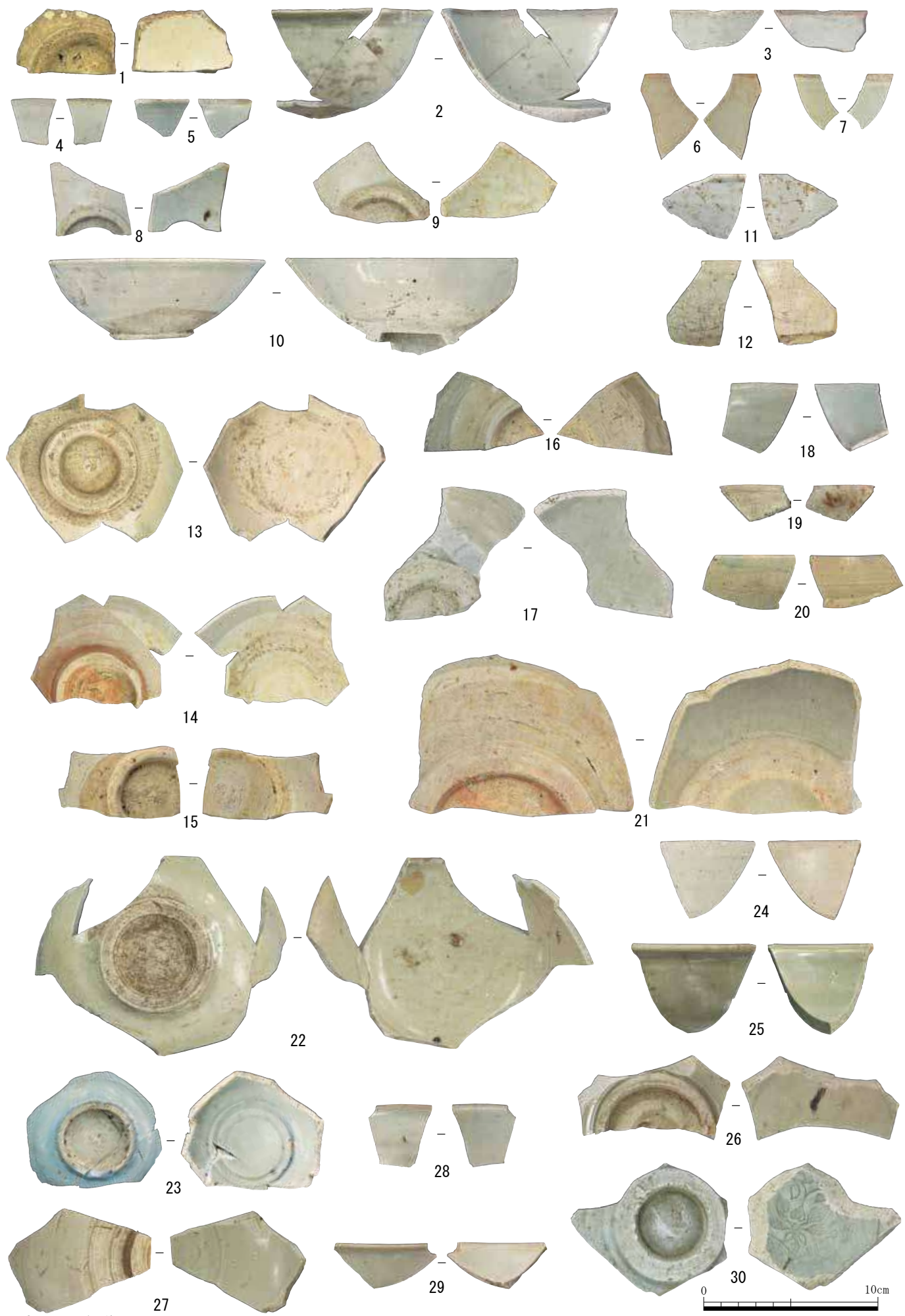
5. その他 瓶 32 点、壺 28 点、蓋 3 点、台湾産の急須 1 点、ベトナム産の碗 2 点が得られた。図 97 は胴が丸いので肩の玉縁短頸壺で体部の轆轤痕が顕著である。生産年代は 14C～15C の生産地は東南アジアで中国南からベトナムが考えられる。図 101 は高台から内側にくびれ外側に大きく開き立ち上がる。底部は蛇の目高台で削りは浅い内外面に轆轤痕が顕著である。生産年代は 13C～14C、生産地は福建・広東系である。

図 102 は上面観が菊花になる輪花の蓋である。型押し成形の縁部と突起は露胎している。生産年代 15C 末～16C 生産地は景德鎮である。図 103 は台湾産の急須である。胴が丸く口縁と底部に向かい絞る形態。口縁は筒状に立ち内面に輪状の蓋受けを有する。注ぎ口は円錐状で胴部の中位よりやや上面に上向きに貼付され注ぎ口の内面から複数孔が穿孔されている。底部は上げ底。蓋受けと外底は露胎。生産年代は 1868 年～終戦頃。

図 104、105 はベトナム産の碗でいずれも高台から逆「ハ」の字状に直線的に開き立ち上がる。口縁を残さないため口縁形態は不明である。図 104 は高台が細めの輪状高台をなし削りは浅い断面形態は四角状で丁寧な作りである。外底を除く全面に化粧掛けし透明釉を施している。焼成は不良である。図 105 は形態的に図 104 と酷似するが化粧掛けは成されない。高台の作りなどはやや雑で粗製といえる。いずれも生産年代は 14C～15C に位置づけられる。

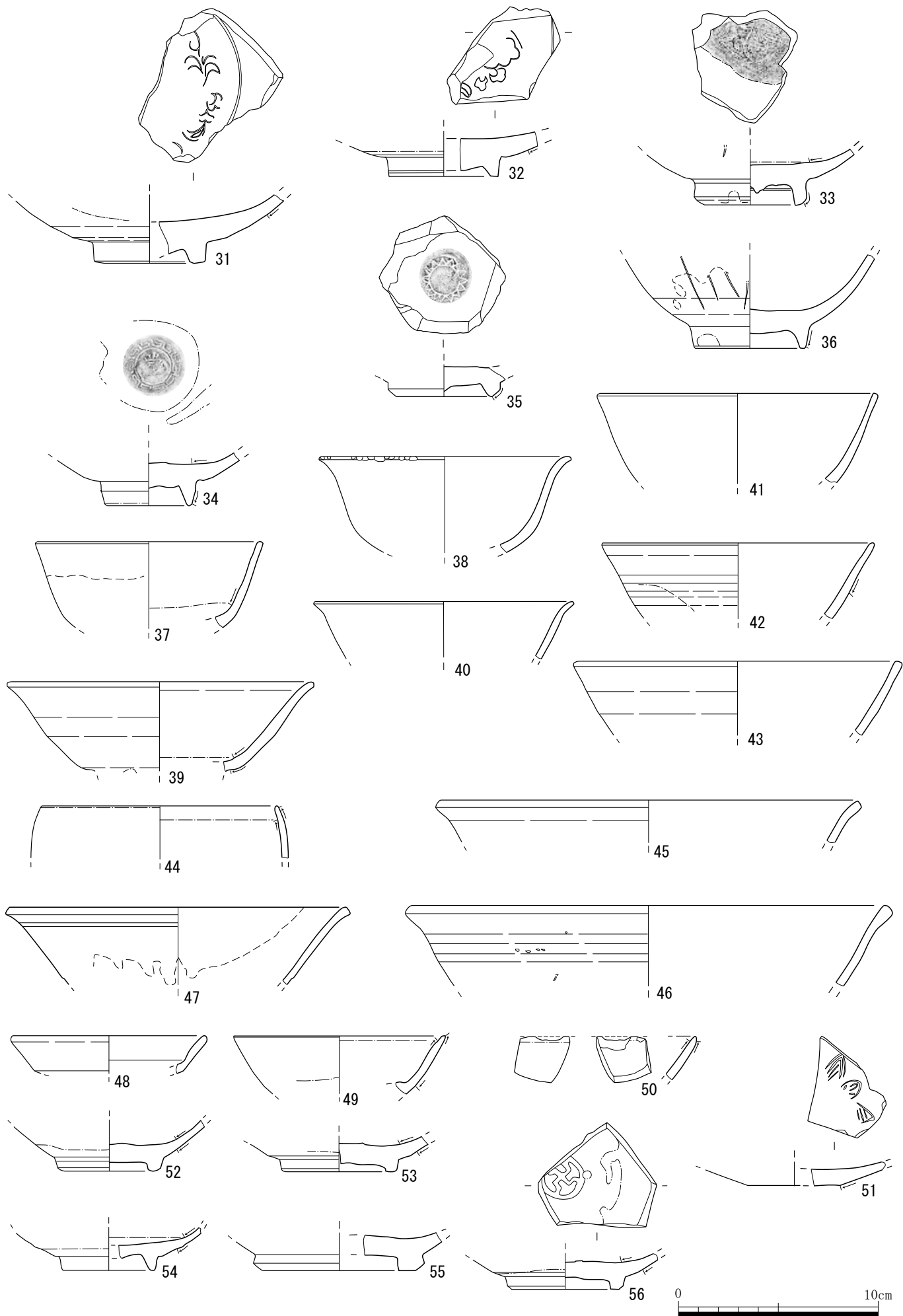


第117图 白磁 1

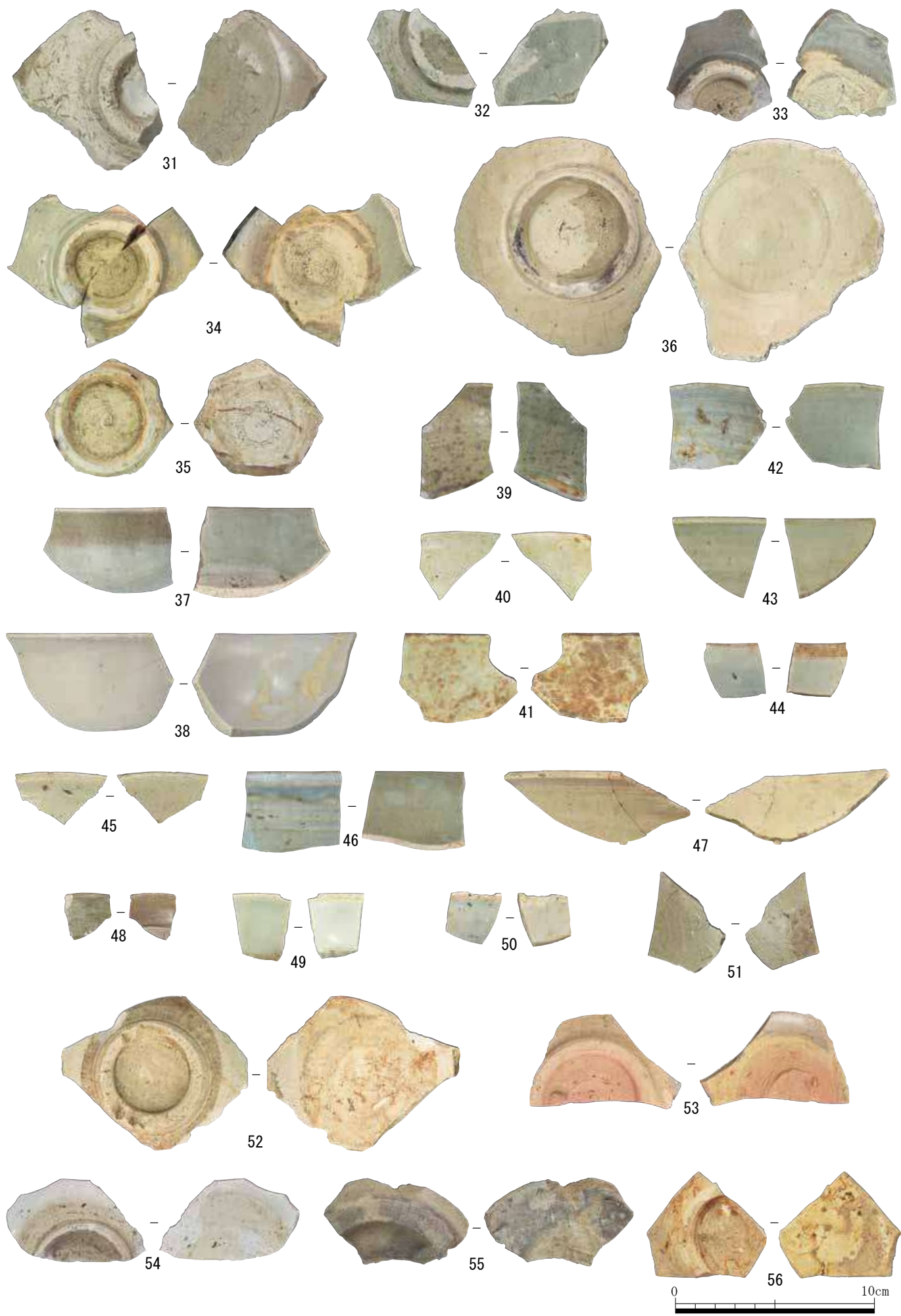


图版 81 白磁 1

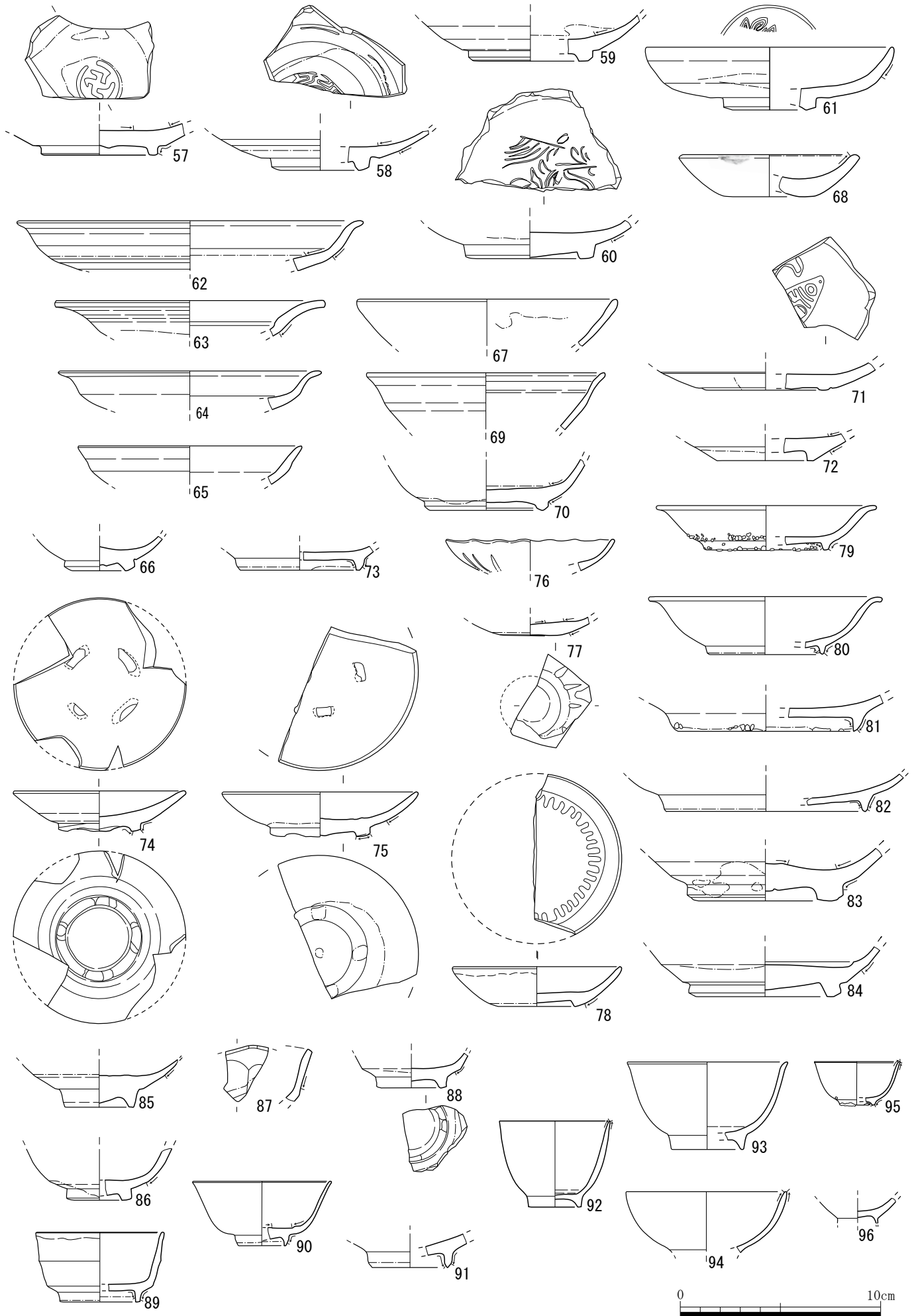




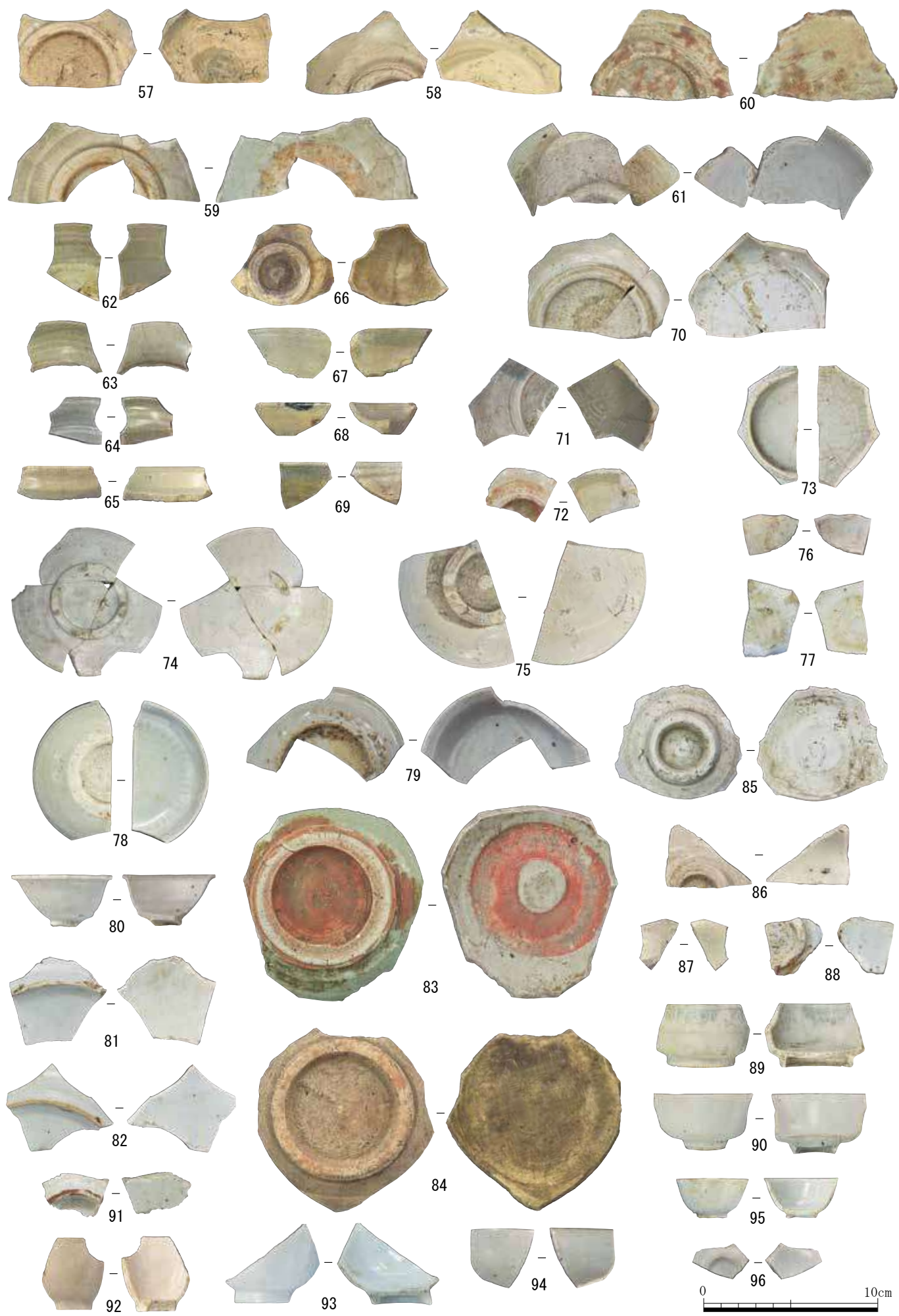
第118图 白磁2



图版 82 白磁 2



第119图 白磁3



图版 83 白磁 3





第 65 表 -1 白磁 観察一覽

第 117 図・図版 81	第 118 図・図版 82	器種	分類	部位	口径高 (cm)	底径 (cm)	器形・文様構成	釉色・範囲	素地質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台 (取) 番号
第 117 図・図版 81	碗	1B	底	—	7.2	—	内底は丸く窪む、高台内の削りは浅い。玉緑の底部か	生成り色 外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 14C前 福建系	HA ② K4 II 三良 台 2605
		II	口	—	13.5	—	口縁は外反。口唇断面形態四角状。口唇の上面と内側を露胎、口禿口縁。外体面に轆轤痕。内底見込み一条圈線。	灰白色 口唇上、内面、 外底露胎	白色 緻密	13C ~ 14C 福建系	HA ② F1・F20・H2・G19 II 瓦屋 台 761.808.1141.1153.1381 HA ② H2 III SK4 台 2151
		II	口	—	15.6	—	端反口縁で口唇形態は角状をなす。口唇の上面と内側を露胎させ口禿を呈する。外体面に轆轤痕が僅かに認められる。	灰白色 口唇上、内面	白色 緻密	13C ~ 14C 福建系	HA ③ S18 II S-12 台 556
		II	口	—	13.7	—	端反口縁で口唇は内外面から削り出されて尖る。口唇の外側と内側を露胎させ口禿を呈する。	灰白色 口唇上、内面	白色 緻密	13C ~ 14C中 福建・広東系	HA ③ F11-14 II 台 1504
		II	口	—	10.0	—	端反口縁で口唇形態は角状をなす。口唇の上面と内側を露胎させ口禿を呈する。外体面に轆轤痕が僅かに認められる。	灰白色 口唇上、内面	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建系	HA ② A5 III 崑 SK002 台 2254
		II	口	—	—	—	端反口縁で口唇は内外面から削り出されて尖る。口唇の外側と内側を露胎させ口禿を呈する。	灰白色 口唇上、内面	白色 緻密	13C ~ 14C中 福建・広東系	HA ② T1 II 祝殿 台 547
		II	口	—	—	—	端反口縁、口唇形は四角状。口唇の外側、上面、内側を露胎、口禿を呈する。外体面に僅かに轆轤痕。	灰白色 口唇上、内面	白色 緻密	13C ~ 14C中 福建・広東系	HA ② B4 II 祝殿 台 1211
		2B	底	—	4.8	—	高台は小さく低い。畳付の外から斜めに削り出す。断面形態は外削りの台形を呈す見込みは丸く窪み、一条圈線を施す。	灰白色 外底露胎	白色 緻密	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ② A1 II 祝殿 台 470
		2B	底	—	5.6	—	高台は小さく低い。畳付の外から斜めに削り出す。断面形態は外削りの台形。見込みは窪み、一条圈線を施す。	青白色 外底露胎	白色 緻密	12C ~ 14C前半 福建・広東系	HA ③ S17 II 台 1726
		VI A 3B	口~底	—	13.2 4.4	5.4	高台は小さい。胴は逆「八」の字状。口縁は直口。口唇断面形上面は平坦三角状。高台の断面形態は外削りの台形。	灰白色 内外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建系	HA ② I3 II 名嘉座 台 2352 HA ③ A12 II 台 2352
		V A	口	—	14.6	—	胴部にやや丸みを持ち外側に開きながら立ち上がる。口縁は端反で、口唇は舌状を呈する。外体面に轆轤痕が顕著。	灰白色	灰白色 細かい	14C頃 福建・広東系	HA ② B3 III 祝殿 SK003 台 2265
		IV A	口	—	12.0	—	胴部に丸みを持ち口縁は内湾する口唇は丸い。外体面に轆轤痕を認める。	黄薄白色 外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ② T4 II 祝殿 台 368
		3B	底	—	5	—	畳付の外側を斜めに削り出す。断面形が台形状、高台内は兜巾状に削り出。高台脇放射状カンナ痕。	黄薄白色 外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ④ L19 III SP488 台 3616
		3B	底	—	4.6	—	畳付の外側を斜めに削り出す。断面形態が台形状をなし高台内は兜巾状に外体面に轆轤痕顕著である。	灰白色 内外底露胎	白色 緻密	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ④ L19 IV 台 979 HA ④ L20 II 台 2729
		3A	底	—	5.6	—	腰部に張りがあり高台は内削りの断面形態が台形を成す。見込み中央に二条圈線に「徳」の印花文を施している。	生成り色 内底蛇の目軸剥ぎ 外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ③ B16 II 台 2995
		3A	底	—	5.4	—	腰部に張りがあり高台は内削りの断面形態が台形を成す。見込み中央に二条圈線に印花文を施している。	黄薄白色 内外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ③ F13 II S-18 台 1024 HA ③ A14 II 台 2951
		3B	底	—	5.4	—	胴部はやや丸みを持ちながら立つ。高台径が比較的小さく高台の削りは浅い。高台の断面形態は台形を成す。	黄薄白色 内外底露胎	白色 緻密	13C ~ 14C中 福建系	HA ③ D5 II 台 1412
		IV A	口	—	17.0	—	胴部は浅く丸みを持ち口縁で内湾する口唇は舌状を成す。外体面に轆轤痕を僅かに認める。器肉は厚め。ピロースク II	灰白色	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建・広東系	HA ③ C12 II 台 749
		IV A	口	—	14.8	—	口縁で内湾気味に立つ口唇は丸い。外体面に轆轤痕を僅かに認める。ピロースク II	灰白色	灰白色 細かい	14C ~ 15C 福建・広東系	HA ④ G1 II 台 2208
		IV B	口	—	14.6	—	胴部は浅く丸みを持ち口縁は内湾する口唇は丸い。内外体面に轆轤痕を認める。	黄白	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建系	HA ③ D11 II 台 3248
		3B	底	—	7.6	—	腰部に張りがあり高台の削りは浅く断面形態は四角形を成す。	灰白色 内底に蛇目軸剥	灰白色 細かい	13C ~ 14C 福建系	HA ② A20 II 祝殿 台 1316
		V B 4B	口~底	—	14.8 7.3	2.9	腰部は張り、口縁は外反口唇は丸。高台浅く小さい、断面形台形、高台内兜巾絞状。見込みに一条圈線、轆轤痕顕著。	灰白色 高台内露胎	白色 緻密	14C頃 福建系	HA ④ B18・K10 II 台 1973.2641 HA ④ F15・H14 III 台 2137.2351
		5B	底	—	5.5	—	腰部に丸みを持ち外面胴下部に篋削りの横線認められる。高台は小さく高台脇から斜めに削り出し断面形態は三角状を成す高台内はドーム状に丸く削りだししている。見込みは三条の渦巻きの篋削り圈線を配している。	青白色 高台内露胎	白色 緻密	明代 景德鎮窯	HA ② T2 II 祝殿 台 408
		VI B	口	—	15.6	—	胴部は丸。口縁は直口。口唇は尖る。外体面に篋削り痕と轆轤痕が認められる。	灰白色	灰白色 細かい	14C頃 福建系	HA ③ A13-C13 II S-640 台 1136
		V B	口	—	16.4	—	胴部は丸みを持つ。口縁は外反。口唇は舌状を呈する。外体面に轆轤痕が認められる。ピロースク III	灰白色	灰白色 細かい	14C ~ 15C 福建・広東系	HA ② I2 II 瓦屋 台 2341
		4B	底	—	6.4	—	高台は断面形態が台形を成す。高台内に兜巾絞状に削り出している。見込みに一条圈線を巡らしている。	灰白色	灰白色 細かい	14C頃 福建系	HA ③ F18 II S-10 台 1574
		4A	底	—	5.2	—	腰部に張り、胴部は丸い。高台が小さく高台の削りは浅い断面形四角形。見込みに一条圈線と印花唐草文。ピロースク III	灰白色 外底露胎	白色 緻密	13C ~ 15C 福建系	HA ② B6 II 崑 台 1753
		V B	口	—	14.0	—	胴部はやや丸みを持ち外側に開きながら立ち上がる。口縁は端反で、口唇は丸い。ピロースク III	灰白色 外底露胎	灰白色 細かい	14C頃 福建系	HA ③ B14 II 台 1430
		V B	口	—	12.8	—	胴部はやや丸みを持ち外側に開きながら立ち上がる。口縁は端反で、口唇は丸い。ピロースク III	灰白色 外底露胎	灰白色 細かい	14C ~ 15C 福建系	HA ② F1 II 瓦屋 台 822
		4B	底	—	5.8	—	高台脇に篋削り。高台の断面形態は四角。高台内は兜巾絞状削り。見込みに一条圈線と印花の草花文。ピロースク III	灰白色 外底露胎	白色 緻密	13C ~ 14C 福建系	HA ④ I8 III 台 2506
		4A	底	—	5.6	—	高台の断面形態は外削りの台形。高台内は兜巾絞状。見込みに一条圈線と印花の草花文を施文。ピロースク III	灰白色 外底露胎	白色 緻密	14C ~ 15C 福建・広東系	HA ③ D13 II 台 3282
		4A	底	—	5.3	—	高台の断面形態は外削りの台形、高台内は兜巾絞状。見込み一条圈線と印花の草花文を施文。ピロースク III	灰白色 外底露胎	灰白色 細かい	13C ~ 15C 福建系	HA ② G1 II 瓦屋 台 1727
		5A	底	—	5.7	—	畳付外を斜めに削り出し断面形態は外削りの三角形。高台内は兜巾絞状の削り。見込みに印花の草花文を施文している。	灰白色 内外底露胎	白色 緻密	14C後 ~ 15C前 福建・広東系	HA ④ H18 II SD41 台 2983
		5A	底	—	4.4	—	畳付外を斜めに削り、断面形態は外削りの三角形。高台内は兜巾絞状。見込みに「堂」の字文周囲は雷文の印花文。	灰白色 内外底露胎	白色 緻密	15C ~ 16C 福建・広東系	HA ③ D13 II 台 3247
		5A	底	—	4.8	—	畳付外を斜めに削り、断面形態は外削りの三角形。高台内は兜巾絞状の削り。見込みに印花の菊花文を施文。	灰白色 内外底露胎	白色 緻密	15C ~ 16C 福建・広東系	HA ④ G13 III 台 2228

第三章  
5

第 65 表 -2 白磁 観察一覽

第 118 図・図版 82	第 119 図・図版 83	図番号	器種	分類	部位	口径器高 (cm)	底径 (cm)	器形・文様構成	釉色・範囲・貫入	素地色・混相材・質	生産年代・その他	地区・グリッド・層遺構・台(取)番号	
第 118 図・図版 82		36	碗	4B	底	—	5.8	腰が絞られ胴部は外に広がりが立つ。外面に線刻連弁文を施文。高台の断面形態は外削りの三角形。見込みに一条圈線。	黄薄白色外底露胎	白色緻密	15C~16C代 福建系	HA ③ B13 I 台 3003	
		37		VI B	口	11.4	—	腰部に丸みを持ち外にやや開き直に立ち上がる。口縁は直口を呈し口唇は丸い。外面に篳篥痕と轆轤痕。	灰白色内外底露胎	白色緻密	14C~15C 福建・広東系	HA ③ D5 I 台 2135	
		38		VII	口	12.6	—	胴に丸みを持ち口縁は外反。口唇は舌状。腰外面に型押成形の皺がある。口唇の一部を連続剥離する二次転用品。	灰白色全面釉	白色緻密	明代 福建系	HA ③ F7 IV 台 3228	
		39		VI C	口	15.4	—	腰部が屈曲し胴部は逆「八」の字状に外に向かい開く。口縁は端反口唇は丸い。外面は篳篥痕が顕著である。	灰白色内外底露胎	白色緻密	明代 福建・広東系	HA ② H4 III SK002 台 2185	
		40		VI C	口	13.0	—	腰部に丸みを持ち外にやや開き直に立ち上がる。口縁は直口を呈し口唇は四角状で靴 釉の覆輪を施している。	灰白色内外底露胎	白色緻密	明代 福建・広東系	HA ④ K18 III 台 2657	
		41		VI C	口	14.0	—	腰部に丸みを持ち外にやや開き直に立ち上がる。口縁は直口を呈し口唇は四角状で靴 釉の覆輪を施している。	灰白色内外底露胎	白色緻密	17C頃 福建・広東系	HA ④ I8 III 台 2501	
		42		VI C	口	13.6	—	胴部は逆「八」の字状に外に開く。口縁は直口し口唇は四角。外面は篳篥痕が顕著である。	灰白色外底露胎	白色緻密	17C頃 福建・広東系	HA ④ E19 II 台 2073	
		43		VI C	口	16.4	—	胴部は逆「八」の字状に外に開く。口縁は直口し口唇は四角。外面は篳篥痕を認める。	灰白色全面釉	白色緻密	16C~17C 福建・広東系	HA ③ E11 II 台 1458	
		44		III	口(口禿)	11.8	—	胴部に丸みを持ち口縁は内湾する口唇は丸い、口唇上面と口縁内面を露胎させている。口禿の蓋付碗か。	灰白色口唇上面~口縁内面露胎	白色緻密	13C~14C 福建系	HA ② G20 II 瓦屋 台 1036	
		45		鉢	—	口	20.8	—	口縁は外反口唇の断面形態は撥形	灰白色	白色緻密	16C~17C 福建・広東系	HA ② H3 III SP003.SK005 台 2166.2179
		46		—	口	23.8	—	胴部は逆「八」の字状に開く、口縁は口唇の断面形態が撥形に肥厚した直口。	灰白色	白色緻密	16C~17C 福建・広東系	HA ③ B14 II S-20 台 1037	
		47		3	口	17.2	—	胴部は逆「八」の字状に開き、口縁は口唇断面形態が撥形に肥厚し直口。口縁上部に二条陽圈線。深皿	灰白色	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ③ B5 II 台 1653	
		48		I	口	9.8	—	胴部の中で「く」字状に屈曲し口縁は内湾し立ち上がり内側を引き上げる。口唇は舌状を成す。太宰府分類はVI-1に近い	オリーブ灰色	白色緻密	12C~14C前 福建系	HA ③ S12 II 台 1726	
		49		II A	口	10.6	—	胴部は逆「八」の字状に開く口縁は直口。口唇は角張り上面と内側が露胎、口禿。見込は盛り上がる。外面の腰部から外底露胎。太宰府IX-2	淡青灰色腰部外底露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ A14 III下 S-11 台 2018	
50	II B	口	—	—	胴部にやや丸味をおび、口縁は口唇は舌状で上部と内側が露胎した口禿である。太宰府IX	灰白色口唇露胎	白色緻密	13C~14C中 福建・広東系	HA ③ S19 II 台 3208				
51	1A	底	—	4.6	底径の小さいやや底面の持ち上がった平底である。内底に印花文を施している。	灰白色外底露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ② K4 II 三良 台 2606				
52	2B	底	—	5.2	高台は削りが浅く断面形態が台形状を成す。	灰白色外底露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ A14 III下 S-11 台 2094				
53	2A	底	—	5.8	高台外面脇に逆「L」字状の削り出しがあり畳付は外側から斜めに削り出している。削りが浅く高台の断面形態が台形状を成す	灰白色内外底は露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ D13 II 台 3247				
54	2B	底	—	4.8	高台は外削りの断面形態が三角状を成す	灰白色内外底は露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ B8 I 台 1751				
55	2B	底	—	7.6	高台は畳付け脇を斜めに削りだす。断面形態が台形状を成す。	灰白色内外底は露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ E17 II 台 1575				
56	2A	底	—	5.8	高台は畳付の外側から斜めに削り出し外削りの断面形態が台形状を成す。見込みに丸に「卍」の印花文を施文。	灰白色内外底は露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ T9 III S-581 台 1144				
57	2A	底	—	5.8	高台は外削り畳付の外側から斜めに削り出し外削りの断面形態が台形状を成す。見込みに丸に「卍」の印花文を施文。	薄黄灰白色内外底は露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ C11 II 台 3214				
58	2A	底	—	5	高台は小さく畳付の外側から斜めに削り出し外削りの断面形態が台形状を成す。見込みに円形の雷文印花を施文。	薄黄灰白色内外底は露胎	白色緻密	13C~14C 福建・広東系	HA ③ T17 II 台 1446				
59	2B	底	—	6.2	高台は小さく畳付の外側から斜めに削り出し外削りの断面形態が台形状を成す。	薄黄灰白色内外底は露胎	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ④ F18 III 台 2186				
60	2A	底	—	6.4	高台は浅くやや外削りの断面形態が四角状を成す。見込みに印花の草花文を施文。	灰白色外底露胎	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ④ G15 III 台 2261				
61	III	口~底	12.4	4.6	口縁は内湾し立つ。口唇舌状。高台外面脇に高台は小さく畳付外から斜めに削り出し外削りの断面形態台形状。器肉が厚い。(ピロースク)	灰白色	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ② K6 II 照屋 台 1565.1771.1565				
62	IV	口	17.3	—	腰折れの外反口縁で口唇は丸い、外面に篳篥痕を多く残す外底と内底が露胎している。	灰白色	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ④ E18-E20・F17 III 台 4585				
63	IV	口	13.5	—	腰折れの外反口縁で口唇四角	灰白色	白色緻密	明代 福建・広東系	HA ④ G18 III 台 2302				
64	IV	口	13.1	—	腰折れの外反口縁で口唇は丸い、外面に篳篥痕を多く残す。	灰白色	白色緻密	14C~15C 福建・広東系	HA ④ J2 II 台 2520				
65	IV	口	11.2	—	胴部の中で屈曲し口縁は内湾気味に立ち上がり外反する。口唇は舌状を成す。	灰白色	白色緻密	明代 福建・広東系	HA ④ F14 III 台 2119				
66	2B	底	—	3.6	腰部に丸味を持ち高台は外削りで畳付の外側を斜めに削りだす高台内は兜巾絞り。断面形態は台形状。見込みに盛り上がる。	灰白色外底露胎	白色緻密	14C後~15C 福建・広東系	HA ② T4 II 祝殿 台 363				
67	2	口	13.0	—	逆「八」の字状に外に開き口縁は直口。口唇は舌状を成す。	薄黄白色	白色緻密	明代 福建・広東系	HA ④ O19 III 台 2865				
68	V 1B	口~底	9.0	4.4	逆「八」の字状に外に開く口縁は直口で口唇は丸い口唇端部と外面は露胎している。器肉厚い。口唇に煤が付着灯明皿である。	灰白色	白色緻密	14C前後 福建・広東系	HA ③ A10 II 台 1396				
69	1	口	11.9	—	胴部は外に開き口縁は一旦内により外反する。口唇は丸い。	灰白色	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ③ B14 II S-20 台 847				
70	—	胴	—	5.8	腰部に丸味を持ち高台は小さく浅い外削りで畳付の外側を斜めに削りだす断面形態は台形状を成す。	灰白色内外底は露胎	白色緻密	明代 福建・広東系	HA ③ A11 III S-605 台 1115				
71	3A	底	—	6.4	削りの浅い碁笥底。内底に印花の双鱼文を施文。	薄青灰白色外底露胎	白色緻密	14C頃 福建・広東系	HA ③ C13 II 台 3211				



第 65 表 -3 白磁 観察一覽

第 119 図・図版 83	図番号	器種	分類	部位	口径器高 (cm)	底径 (cm)	器形・文様構成	釉色・範囲・貫入	素地色・混相材・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・層 遺構・台 (取) 番号	
第 119 図・図版 83	72	III	3B	底	—	4.9	逆「八」の字状に外に開く底部は碁筒底を成す。外底と見込みが露胎。	灰白色	白色 緻密	明代 福建・広東系	HA② B19 II 祝殿 台 2427	
	73		2B	底	—	3	高台は低く断面形態は三角状をなす。	灰白色	白色 緻密	15C末～16C 景德鎮窯	HA④ E10 II 台 2037	
	74		VI	口～底	8.6 —	4.1	逆「八」の字状に外に開く、口縁は直口。口唇は丸。高台は四箇所に挟りを入れる。内底は丸く窪み四箇所、露胎し目痕を認める。器内は厚い。	灰白色	白色 緻密	15C～16C前 福建・広東系	HA④ F17.18 III 台 2163.2182 HA④ L1 II 台 2693	
	75		VI	口～底	9.8 2.2	5	逆「八」の字状に外に開く、口縁は直口。口唇は丸。高台は挟り高台。内底は丸く窪み四箇所、露胎し目痕が認められる。	灰白色	白色 緻密	15C～16C前 福建・広東系	HA④ E9 III SP753 台 3780	
	76		VIII	口	8.4 —	—	口縁は輪花状を成し外面に花卉の型押しを施している。菊花を型押しした小皿である。	灰白色	白色 緻密	16C頃 景德鎮窯	HA④ J18 II 台 2571	
	77		VIII	底	—	3	菊花を型押しした小皿の底部である。外面に花卉の型押しを施している。内底面に蛇の目軸刺ぎ外底は露胎。	灰白色	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA④ J18 II 台 2565	
	78		VII	口～底	8.4 2.0	3.6	胴部に丸味を持ち内湾気味に立ち上がる。口縁は直口。口唇は丸い。高台は碁筒底内面に蓮弁の型押しを施文している。	灰白色	白色 緻密	15C末～16C 景德鎮窯	HA④ K18 III 台 2663	
	79		VIII	口～底	11.0 2.3	6.2	腰で膨らみ胴部は緩やかに広がる。口縁は外反、口唇丸い。高台は低く断面形態は三角状。型押し成形。腰部と畳付けに砂目。	灰白色	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA② H2 II 瓦屋 台 1161 HA② H1 II 瓦屋 SK004 台 2113	
	80		VIII	口～底	11.6 2.9	5.8	腰で僅かに膨らみ胴部は緩やかに広がり立ち上がる。口縁は外反する。口唇丸い。高台は低く断面形態は三角状。型押し成形	灰白色	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA③ B17 II 台 1159	
	81		VIII	底	—	8.8	高台は低く断面形態は三角状をなす。型押し成形。腰部と畳付けに砂目がみられる。	灰白色	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA④ L4 II 台 2716	
	82		VIII	底	—	9.8	高台は低く断面形態は三角状をなす。型押し成形	灰白色	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA③ B6 II 台 2816	
	83		4B	底	—	7.8	高台外面脇に削り出し痕、畳付の外側から斜めに削り出し外割りの断面形態が台形状を成す高台の幅が広い	灰白色 内底蛇の目軸刺ぎ 外底露胎	白色 緻密	14C～15C 福建・広東系	HA② F1 I 台 2563	
	84		2B	底	—	7.6	高台は外面脇と畳付の外側から斜めに削り出ししている削りは外割りの断面形態が台形状。内底は有段状に削られ扁平。染付の可能性はある	灰白色 外底と内底は露胎。	白色 緻密	17C 福建・広東系	HA② H2 II 瓦屋 台 1153	
	第 120 図・図版 84		85	杯	—	底	—	3.4	胴部にやや丸味を持ち高台は外割りで畳付の外側を斜めに削りだす高台内は兜巾絞りに削られる。断面形態三角状。	灰白色 内外底は露胎	白色 緻密	13C～14C頃 福建・広東系
86		—	底		—	3.2	胴部に丸味を持ち高台はやや外割りで畳付を外側から僅かに削りだす。断面形態は四角状を成す。	灰白色	白色 緻密	14C～15C 福建系	HA④ G13 III SP888 台 3857	
87		—	口		—	—	胴部に多角面を有し口縁は山形になる外反の角杯である。口唇は四角	灰白色 外底露胎	白色 緻密	15C 福建・広東系	HA② L6 II 照屋 台 1266	
88		—	底		—	3.5	腰部は腰折れ、胴部は逆「八」の字状に開く。外面は多角面に削り出す。底部は挟り高台。断面形態は四角状。	灰白色 外底露胎	白色 緻密	15C 福建・広東系	HA④ F15 II SD41 台 2967	
89		—	口～底		6.4 —	4	腰が折れ胴部は筒状。口縁は直口。口唇は丸い。高台の断面形態は四角。内外底は扁平。外面の胴中位に闊縁線。	灰白色 畳付け露胎	白色 緻密	15C末～16C前 景德鎮窯	HA④ K19 II 台 2671	
90		—	口～底		7.0 3.2	2.4	腰が張り胴部は逆「八」の字状に外に開く口縁は端反り口唇は尖る。高台は断面形態は三角状を成す。内底は扁平。	灰白色 蛇の目軸刺ぎ	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA③ A14 II 台 1449	
91		—	底		—	3.8	高台は畳付けの外側から斜めに削り出す断面形態は三角状を成す。内底は扁平。	灰白色	白色 緻密	17C～18C 景德鎮窯	HA③ C5 II 台 1333	
92		—	口～底		5.6 4.3	2.2	腰は絞り胴部はやや開き筒状に立つ。口縁は直口。口唇は尖る。高台は細く断面形態は四角状。内外底は扁平。口壳。	灰白色 口唇、畳付け露胎	白色 緻密	17C 徳化窯	HA② B20 II 祝殿 台 850	
93		—	口～底		8.0 4.4	3.6	腰に丸味を持ち胴部は逆「八」の字状に外に開き口縁は端反る。口唇は尖り口壳。高台は断面形態が三角状を成す。型成形	灰白色	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA③ R3 II 台 3099	
94		—	口		8.0 —	—	腰に丸味を持ち胴部は逆「八」の字状に外に開き口縁は直口。口唇は尖り口壳。型成形	灰白色	白色 緻密	17C～18C 景德鎮窯	HA③ T9 I 台 1211	
95		小杯	—		口～底	4.3 2.2	1.8	腰に丸味を持ち胴部は外に開き口縁は端反る。口唇は尖り口壳。高台は断面形態が三角状を成す。型成形	灰白色	白色 緻密	16C 景德鎮窯	HA② T4 II 祝殿 台 363
96			—		底	—	—	腰胴部は逆「八」の字状に直線的に開く。型成形	灰白色	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA④ G14 I or II 台 2239
第 120 図・図版 84	97	壺	—	口	11.0 —	—	口縁は玉緑。なで肩の短頸の壺である。外面は轆轤痕が顕著である。	黄緑灰色	白色 緻密	14C～15C 東南アジア	HA③ C18 II 台 1840	
	98		—	口	11.5 —	—	口縁は外反、口唇の上面が平坦で露胎し先端は舌状である。蓋の付くものと考えられる。	灰白色	白色 緻密	明代 福建・広東系	HA④ M.N.O17-19 II 台 129	
	99		—	口	8.5 —	—	玉緑で短頸の小壺か鉢の口縁である。外面の頸部下位に一条闊縁線が認められる。	灰白色	白色 緻密	13C～14C 福建・広東系	HA③ B6 II 台 2816	
	100		—	底	—	8	胴部は高台から内側にくびれ外側に大きく開く、底部は蛇の目高台。内面に轆轤痕が顕著。	灰白色	白色 緻密	13C～14C前 福建・広東系	HA③ T13 III下 S-11 台 927	
	101		—	底	—	6.8	胴部は高台からわずかに内側にくびれ外側に大きく開き立ち上がる。底部は蛇の目高台で削りは浅い内面に轆轤痕が顕著。	灰白色	白色 緻密	13C～14C 福建・広東系	HA③ A14 II 台 1460.2025 HA③ C13 II 台 2492	
	102		蓋	—	口	10.6 —	—	上面観が菊花になる輪花の蓋である。型押し成形の縁部と突起は露胎。	灰白色 甲部と内面施釉	白色 緻密	15C末～16C 景德鎮窯	HA③ A6 II 台 1681
第 120 図・図版 84	103	碗	急須	—	口～底	8.3 9.5	8.2	胴部に丸味を持ち口縁に向かい絞る。口縁は筒状に立ち上がる。内面に輪状の蓋受けを有する。注ぎ口は凹窪状で胴部の中位よりややや上面に上向きに貼付される。注ぎ口の内面から複数孔が穿孔されている。底部は上げ底	灰白色 蓋受け 外底露胎	白色 緻密	1868～終戦 台湾産	HA③ D11 II 台 1300 HA③ D10 II S-39 台 1978
	104		—	底	—	6.1	高台から撥型に外に開き立ち上がる。高台は細めの輪状高台削りは浅い断面形態は四角状。焼成不良。	灰白色 化粧掛け 畳付けから高台内 露胎	灰白色 緻密	14C～15C ベトナム産	HA④ F12 II 台 2093	
	105		—	底	—	5	高台から撥型に外に開き立ち上がる。高台は外割りの断面形態は台形状。	緑灰白色 畳付けから高台内 露胎	薄黄 白色 緻密	14C～15C ベトナム産	HA② T4 II 祝殿 台 365	

第三章  
5

## (13) その他の輸入陶磁器

出土量の少ない輸入陶磁器をここにまとめた。中国産は色絵 42 点、瑠璃釉 26 点、青磁染付 3 点、鉄釉染付 11 点、鉄釉磁器 3 点、翡翠釉 1 点、三彩 18 点、無釉陶器 18 点、黒釉陶器（天目）7 点、鉄絵 2 点、タイ産の鉄絵 6 点である（第 66 表）。

### 1. 色絵

碗が 21 点、皿 7 点、杯 7 点、合子（蓋）1 点、袋物 5 点、急須の 1 点が得られた。明代の景德鎮窯や清代の徳化窯と福建・広東系が得られている。

<碗> 図 1～8 は殆どが福建・広東系の 18C に位置づけられる。上絵のみの絵付けである。図 1～7 は腰の張る碗で口縁は端反りになる。高台の断面形態は先端が尖る、方形。外面に芝仙祝寿文、赤色草花文、窓絵、蓮弁文や篆字寿文を描いている。図 4 は外面に圈線を口縁の上段と腰部に巡らし、中位に穂に枝を配する丸形窓絵と草花文を描く。腰下に蓮弁文を施文している。圈線、丸文、草花、蓮弁等の文様の輪郭を赤色で描き、緑色はダミ塗りする。福建・広東系の 18C に位置づけられる。図 8 は高台が露胎する内割の碗である。外面は高台脇に赤の三条の圈線と草花文を描く。見込みは二条圈線と草花文を圈線と輪郭を赤色で描き葉は緑色でダミ塗りしている。景德鎮窯の明代に位置づけられる。

<皿> 図 9～11 に示すものである。図 9 は腰が張り胴部は緩やかに広がる。口縁は外反する。外面はピーチ色が一面に広がるが特に口縁と高台に濃く残る。文様は不明。景德鎮窯の明代に位置づけられる。図 11 は福建・広東系の 18C に位置づけられる皿で腰部に丸味を持ち口縁は広がり端反る。高台はやや幅広で断面形態は台形。内面に三角繫文と圈線を巡らし側面と見込みに草花文を施文している。

<杯> 図 12～18 はいずれも型成形の徳化窯で 18C～19C 位置づけられる。

<袋物> 図 20～22。図 20 は瓶か小壺の胴部資料で外面に草花文を描いている。福建・広東系の 18C に位置づけられる。図 21 は瓶の頸部考えられる資料で外面に赤色の雷文状の幾何学文を描いている。図 22 は外面に草花文を描く瓶か壺の資料で、被熱している。

<合子> 図 19 は合子の蓋である。縁部に帯状の肥厚部を持つ甲部はドーム状で上部はやや偏平である。縁部の内側に身部内に収まる突起を有する。外面の文様は染付で下絵を描き色絵の上絵を加えている。側面の外面に染付の圈線を上下に配し間に梅花を赤と緑の色絵で描く。甲部上面に染付の圈線と草花文を下絵として描き葉の輪郭と葉脈を赤の上絵で重ねている。景德鎮窯、明代に位置づけられる。

<急須> 図 23 は小振りで胴部が球状を成す。口縁は上面に引き上げ内面に輪状の蓋受けを有する。注ぎ口は基部に丸味を持ち注ぎ口の先端に向かい細くなる。胴部の中位よりやや上面に上向きに貼付される。注ぎ口の内面に複数穿孔した半球形の茶こしが注ぎ口側より取り付け。注ぎ口の上と反対の胴上部に紐状で馬蹄形の耳を持つ。底部は碁筭底。外体面は轆轤痕が顕著である。外面に雲龍文、赤色は文様の輪郭と雲を描き、黄色で龍、髭、眉、目を緑色で描く。生産年代、産地は不明であるが文様の傾向から 19C 頃の中国産の可能性がある。

### 2. 瑠璃釉

杯が 8 点、小杯 4 点、瓶 10 点、香炉 1 点、蓋 1 点、器種不明 2 点が得られ轆轤成形と型成形がある。生産地は景德鎮窯、徳化窯で 18C 代に位置づけられる。杯、小杯、香炉は外面に瑠璃油、内面に透明釉と掛け分ける。瓶は外面に瑠璃油、内面は口縁と頸部の途中まで透明釉を掛けている。無文である。図 24～35 に示した。

### 3. 青磁染付

碗 2 点と杯 1 点が得られた。図 36～38 に示した。図 36 は口縁が外反し口唇に覆輪。外面は青磁釉、内面に染付の幅広圈線を巡らす。図 37 は腰に丸味を持ち外に開きながら立ち高台は畳付けの外面を斜めに削り出し断面形態は三角状。内底見込みに染付の二条圈線と捻子花を施文。図 38 は腰部が丸碗状。外面に青磁釉内面に染付の八卦文と見込みに菊花文を施文している。

### 4. 鉄釉染付

杯が 11 点得られている。図 39、40 に示した。図 39 は腰がやや膨らみ口縁に向かい直線的に開く口縁は外反、口唇は舌状を成す。高台は外割り畳み付けの外面から斜めに削り出している。断面形態は三角状。外面に鉄釉内面に染付の圈線見込みに二条圈線に山水文を描く。高台内に二条圈線と梵字を配している。

### 5. 鉄釉磁器

杯が 3 点得られている。図 41 は腰部が丸く直線的に立つ口縁は直口。唇は舌状を成す。外面に鉄釉。内面透明釉。図 42 は高台が短く断面形態は四角状。外面に鉄釉。内面透明釉。

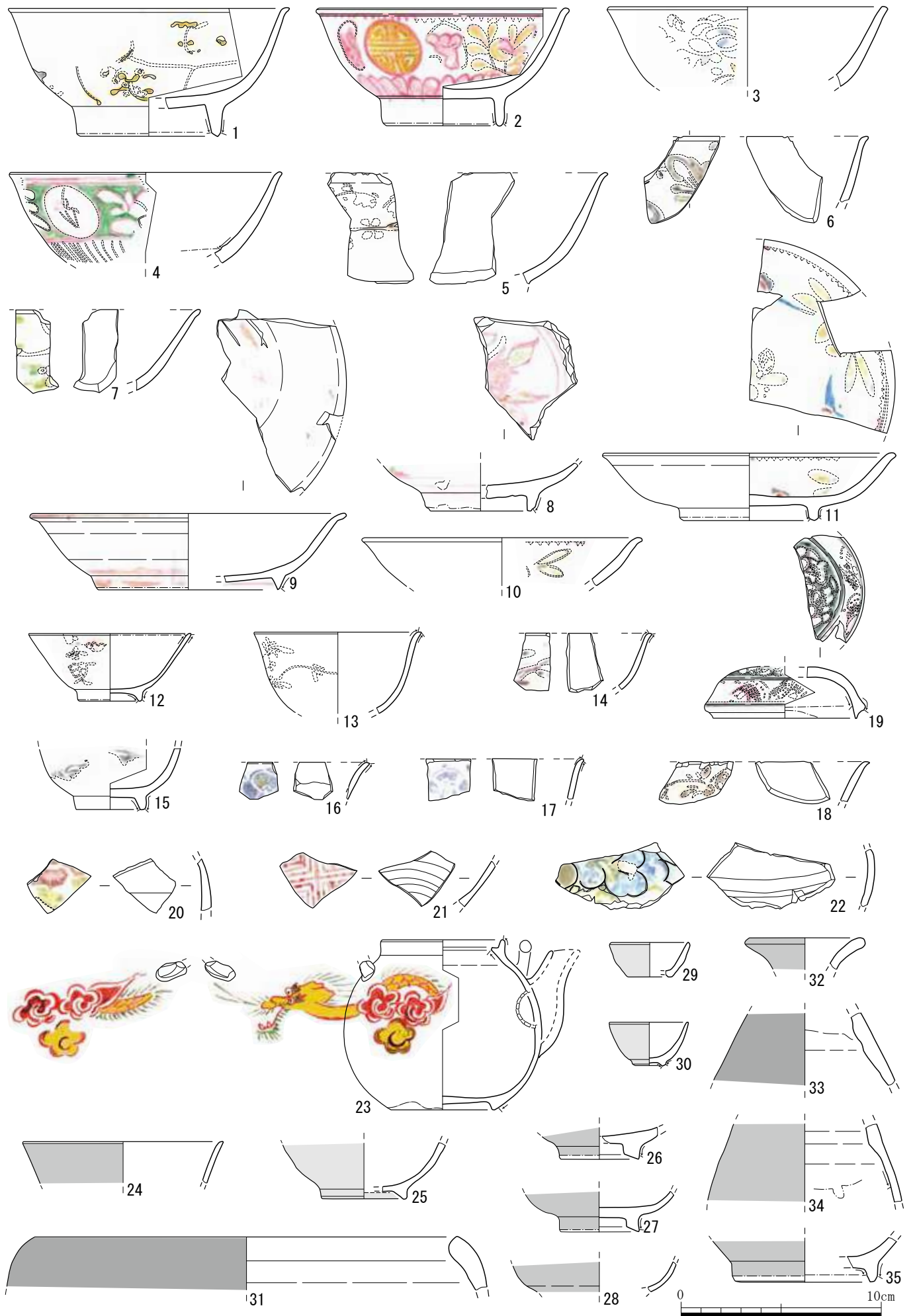
### 6. 翡翠釉

皿 1 点が得られている。図 43 逆「八」の字状に外に開き、口縁は鏝縁の輪花を成す。口唇は四角状である。

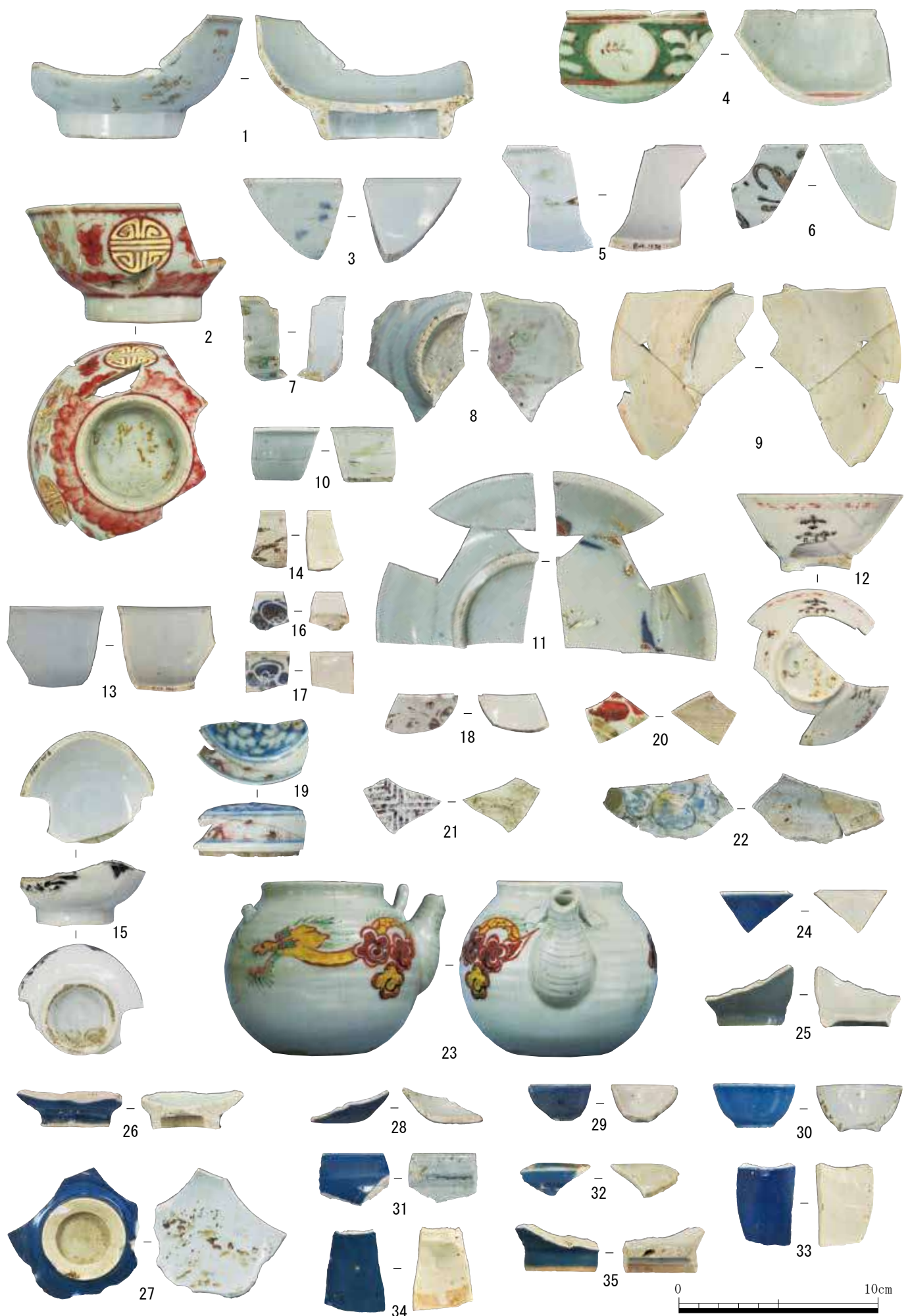


第 67 表-1 その他の輸入陶磁器 観察一覧

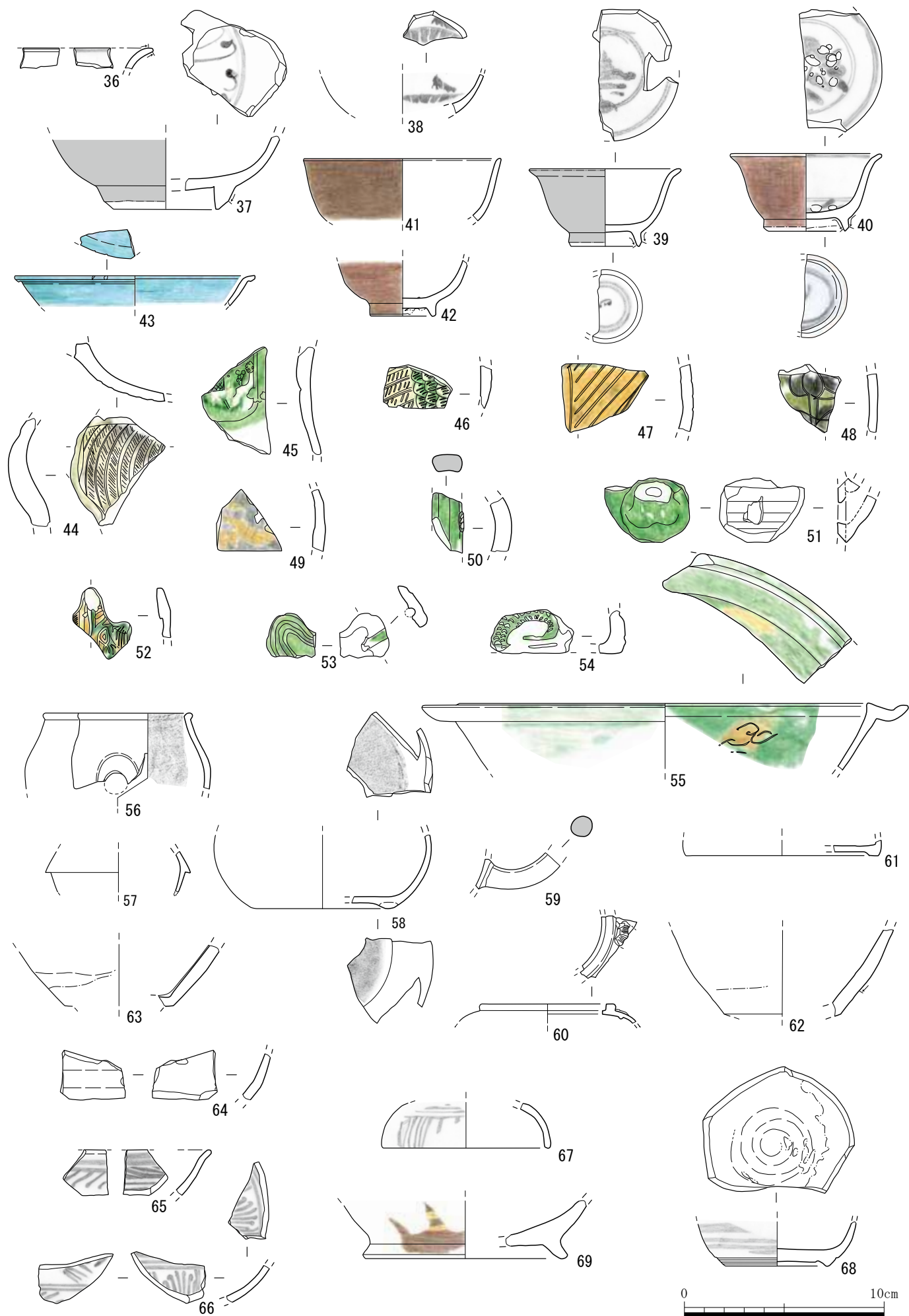
第図版	図番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	形状・文様構成	釉色・範囲	素地・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第123 図・図版 85	1	色 絵	碗	口～底	14.0 6.4	7.2	腰が張り胴部は直線で立つ。口縁は端反り。口唇は舌状。高台の断面形態は方形。外面に芝仙祝寿文を描く。釉剥落。	透明釉	白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ② A7 II 畠 台 1802
	2			口～底	13.6 5.9	6.2	胴は直線で立ち、口縁は端反り。口唇舌状。高台の断面形態方形。外面に赤：圏線、三角繁文、草花、蓮弁文。黄：「寿」丸形篆字。	透明釉	灰白色 黒色微粒 緻密	18C代 福建・広東系	HA ② D1 II 祝殿 台 360
	3			口	14.0	—	胴は直線的に立ち口縁は直口。口唇は丸い。外面に青色、黄色：草花文。	透明釉	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ② T5 II 畠 台 2592
	4			口	13.6	—	胴は直線的に立ち口縁端反り。口唇舌状。外面に圏線を口縁と腰に、間に三角、枝の窓絵と草花文や腰下に蓮弁を赤で描きタミは緑。	透明釉	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ③ E9 II 台 1302
	5			口	—	—	胴は直線的に立ち口縁は端反り。口唇は舌状。外面に草花文を描くが釉の剥落が著しく色の確認できない。	透明釉	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ② D2 II 祝殿 台 1370
	6			口	—	—	胴は直線的に立ち口縁は端反り。口唇は舌状外面に黒で縁取りした黄土色の草花文を描く。	透明釉	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ③ G7 II 台 1363
	7			口	—	—	胴は直線的に立ち口縁は端反り。口唇は舌状。外面に赤で輪郭を描き緑と白の草花(芝仙祝寿文)を描く。	透明釉	白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ④ F13 III 台 2106
	8			底	—	5.4	高台は内削りで断面形態は三角。外面は高台脇に三条の圏線と草花文を赤で描く。内底は二条圏線と草花文を赤と緑で描く。	透明釉 外底露胎	灰白色 緻密	明代 景德鎮窯	HA ③ E5 III 台 1339
	9	皿	口～底	15.8 3.8	9.2	腰が膨らみ胴部は緩やかに広がる。口縁は外反。口唇丸い。高台は低く断面形は三角状。腰と畳付けに砂目。地ビーズ色	透明釉	灰白色 緻密	明代 景德鎮窯	HA ④ K1 II 台 2605	
	10		口	14.0	—	胴は内湾気味に立ち、口縁は端反り。口唇が丸くなる。口縁の内面圏線に三角繁、草花文を施文。	透明釉	灰白色 黒色微粒 緻密	18C代 福建・広東系	HA ② D19 I 台 1531	
	11		口	14.6 3.4	6.95	腰に丸味、口縁は端反り、口唇は丸。高台は幅広く断面形態は台形。口縁内に圏線、三角繁文、内側と内底に草花文。	透明釉 畳み付露胎	灰白色 黒色微粒 緻密	18C代 福建・広東系	HA ② C19 II 台 572	
	12	杯	口～底	8.0 3.4	3.2	撥形の小杯。口縁は直口。口禿。外面に圏線に波状文、「寿」字文を描く。型成形。高台内に印文。	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ② D1 II 不建 台 831	
	13		口	8.4	—	胴から緩やかに開き口縁は端ぞり。外面に草花文を描くが釉剥落色不明。型成形	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ② B1 II 祝殿 台 1921	
	14		口	—	—	口ハゲ外面に草花文を描くが釉変色のため色不明。型成形上絵色不明	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ③ B9 III 台 2972	
	15		底	—	3.6	腰からやや開き立つ外面に青色の草花文を描く。	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ② E1 II 祝殿 台 1025	
	16		口	—	—	口ハゲ外面に青色の草花文を描く。型成形	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ② A1 II 祝殿 台 430	
	17		口	—	—	口ハゲ外面青色の草花文を描く。型成形	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ③ G12 II 台 1147	
	18		口	—	—	外面草花文釉剥落色不明。型成形	透明釉	白色 緻密	18C～19C 徳化窯	HA ② A1 II 祝殿 台 1290	
	19	合子蓋	口～底	4.0	—	外側面に染付の圏線、間に梅花を赤と緑の上絵で描く。上面に染付の圏線と草花文に輪郭と葉脈を上絵の赤で重ねる。	透明釉	灰白色 黒色微粒 緻密	明代 景德鎮窯	HA ② H3 II 名嘉座 台 1166	
	20	袋物	胴	—	—	外面に赤と黄色の草花文を描く。瓶か	内面露胎 透明釉	灰白色 緻密	18C代 福建・広東系	HA ③ G6 I 台 2137	
	21		胴	—	—	外面に赤の雷文状の幾何学文を描く。瓶か	内面露胎 透明釉	灰白色 緻密	不明	HA ③ R・S19 II 台 3016	
	22		胴	—	—	外面に黒で輪郭を描き青色と黄色で草花文を描く。被熱。瓶か	内面露胎 透明釉	灰白色 緻密	不明	HA ② F20 II 上 台 1546	
	23	急須	口～底	6.3 5.8	5.2	胴は球形、口は筒状、甚筒底。外面に雲龍文を施文。赤色：輪郭、雲、黄色：龍、雲、緑色：鬚、眉、目。	透明釉	灰白色 緻密	19C頃 中国	HA ② E20 II 上 台 706	
	24	杯	口	10.0	—	口縁は端反る。	外紺色 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ② E3 II 台 1594	
	25		底	—	4.2	腰胴が丸い。高台断面形態三角。型成形。瑠璃釉薄灰青	外薄灰青色 内透明	白色 緻密	18C後～19C前 徳化窯	HA ② B3 III SK012 台 2271	
	26		底	—	4.0	高台の内側から斜めに削り出す。畳付内露胎	外紺色 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ③ F18 II S-10 台 2097	
	27		底	—	4.0	腰が丸い。高台の内側から斜めに削り出す。	外紺色 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ③ R14 II 台 4554	
	28		胴	—	—	腰が丸い型成形。	外紺色 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ③ D11 II 台 3248	
	29	瑠璃釉 小杯	口～底	4.0 1.7	2.3	高台から逆「八」の字状に立ち上がる口唇は尖る。型成形 口禿	外薄青 内透明	灰白色 緻密	18C 徳化窯	HA ② B3 II 不建 台 1350	
	30		口～底	4.1 2.2	1.7	高台から逆「八」の字状に立ち上がる口唇は尖る。型成形 口禿	外薄青 内透明	灰白色 緻密	18C 徳化窯	HA ② C4 II 祝殿 台 2452	
	31	香炉	口	21.2	—	口縁は内湾し口唇は内面が肥厚する。	外紺色 内透明	灰白色 緻密	清朝 不明	HA ③ A10 II 台 2811	
	32	瓶	口	6.0	—	朝顔状に開き口唇は四角状。	外薄青 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ④ K2 II 台 2609	
	33		胴-頸	—	—	なで肩内面に繋ぎ痕がみられる。	外濃紺 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ③ A12 II 台 2873	
	34		胴	—	—	なで肩内面に繋ぎ痕がみられる。	外薄灰青 内透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ③ A14 II 台 2801	
	35		底	—	7.2	高台畳付に外面から斜めに削り出した断面形態は三角状。畳付露胎	外 内面・高台内 透明	灰白色 緻密	18C 景德鎮窯	HA ③ E19 I 台 1807	



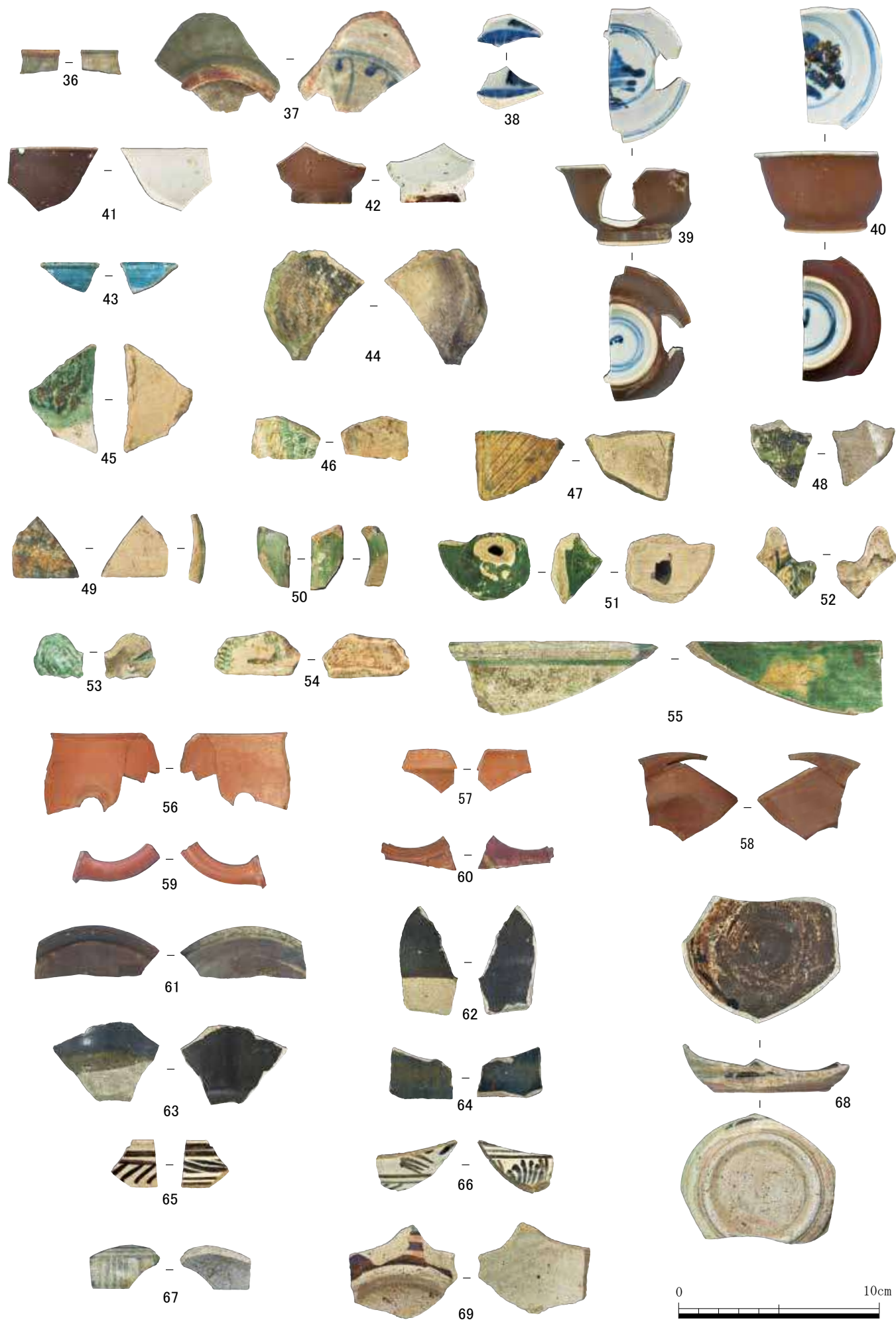
第123図 その他の輸入陶磁器 1



図版 85 その他の輸入陶磁器 1



第124図 その他の輸入陶磁器 2



図版 86 その他の輸入陶磁器 2



第 67 表 -2 その他の輸入陶磁器 観察一覧

第図版	図番号	種類	器種	部位	口径器高 (cm)	底径 (cm)	形状・文様構成	釉色・範囲	素地・混和材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台 (取) 番号			
第124図・図版86	36	青磁染付	碗	口	—	—	口縁は外反、口唇は舌状。外面に青磁釉、口縁内に染付の幅広圏線、口唇に鉄軸覆輪。呉須：発色普通	外：翡翠色 内：灰白色	灰白色 緻密	16C末～17C前半 景德鎮窯	HA④ H17 III 台 2379			
	37			底	—	5.3	腰に丸味。外に開き、高台の断面形は三角状。外面に青磁釉、見込みに染付の二条圏線と捺子花を施文。外底は露胎。呉須：普通	外：翡翠色 内：灰白色	灰白色 緻密	16C後～17C初 景德鎮窯	HA④ L18 II 台 2719			
	38		杯	胴	—	—	腰が丸い丸碗状。外面に青磁釉内面に染付の八卦文見込みに菊花文を施文。呉須：発色普通	外：薄翡翠色 内：白色	灰白色 緻密	18C後 景德鎮窯	HA③ E12 II 台 1150			
	39	鉄軸染付	杯	口～底	7.6 3.9	3.6	腰が膨らみ直線が開く。口縁は外反、口唇は舌。高台の断面形三角状。内面染付の圏線、内底二条圏線山水文。壺内圏線と梵字。呉須：発色普通	外：茶褐色 内：白色	灰白色 緻密	17C末～18C初 景德鎮窯	HA③ R15-17 IV 台 2144 HA③ R14 I 台 1194			
	40			口～底	7.6 3.9	4.4	図 39 に同じ内底に鉄軸がこぼれている。呉須：発色普通	外：茶褐色 内：白色	灰白色 緻密	17C末～18C初 景德鎮窯	HA② B19 II フ 台 864			
	41	鉄軸磁器	杯	口	—	—	腰が丸く直線的に立つ口縁は直口。唇は舌状を成す。外面に鉄軸。内面透明釉。口突	外：茶褐色 内：白色	灰白色 緻密	18C～19C	HA③ F8 III S-656 台 740			
	42			底	—	—	高台は短く断面形態は四角角状。外面に鉄軸。内面透明釉。	外：茶褐色 内：白色	灰白色 緻密	17C末～18C初	HA③ T8-9 II 台 1659			
	43	翡翠釉	皿	口	12.0	—	逆「八」の字状に外に開く口縁は靑緑の輪花を成す。口唇は四角状である。	外：トルコブルー色 内：トルコブルー色	灰白色 緻密	明代 福建・広東系	HA② G1 II 瓦屋 台 1047			
	44	水注	二彩	水注	胴	—	—	鳥形。外面は型押し成形による羽文、上面に黄、緑、黒の釉を掛けている。白化粧。被熟している。	外：緑・黄・黒化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA② T2 II 祝殿 台 410		
	45				胴	—	—	形象物、水注が考えられる。型押し成形。外面に緑の釉を掛けている。緑釉が銀化している。	外：緑化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA④ K1 III 台 2606		
	46				胴	—	—	鳥形。外面は型押し成形による羽文、上面に黄と緑の釉を掛ける。	外：緑・黄・黒化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA④ K1 II 台 2595		
	47				胴	—	—	鳥形。外面は型押し成形による羽文、上面に黄と緑の釉を掛ける。	外：緑・黄・黒化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA③ A12 II 台 2352		
	48				胴	—	—	外面に線刻文を施文上から黒軸緑釉を掛けている。内面に轆轤痕	外：緑・黄・黒化粧土 内：露胎	生成り色・灰色サンド 黒細粒 細かい	15C～16C 福建	HA③ B16 II 台 2139		
	49				胴	—	—	鳥形水滴。外面に型押し成形。上面に黄と緑の釉を掛ける。緑釉銀化	外：緑・黄化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA③ A14 II S-11 台 2025		
	50				取手	—	—	外面に緑釉を掛ける。取手銀化	外：緑・化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA② I3 II上 台 308		
	51				注口	—	—	注ぎ口部分で外面に緑釉を掛ける。内面は径0.9cmの孔が穿たれている。轆轤痕が認められる。	外：緑・化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA③ E11.12 II 台 3300		
	52				水滴	水注	胴	—	—	魚形。外面は型押し成形による波と尾鰭上面に黄と緑の釉を掛ける。	外：緑・黄化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA④ K20 II 台 2681
	53						口	—	—	鴨形。外面は型押し成形による尾羽文、上面に緑の釉を掛ける。	外：緑化粧土 内：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA④ H4 III 台 2329
	54	底	—	—			魚形。底面は偏平。外面には型押し成形による鱗が渦状に盛り上がる。緑の釉を掛ける。	外：緑化粧土 内・外底：露胎	生成り色	15C～16C 福建	HA④ G15 II 台 2248			
	55	盤	口	24.4	—	逆「八」の字状に外に開く口縁は靑緑えおなし緑部は上方に引き上げ断面形態は鍵状を成す。内面にハスの花を施文。	外：緑・黄色・透明・化粧土 内：緑・黄色・透明・化粧土	灰白色	15C～16C 福建	HA④ N18 I SK10 台 64				
	56	中国(朱釉陶器)	水注(身)	口	7.4	—	胴膨らみ口縁は絞り上面が偏平な玉縁状。胴中に径1.1cmの孔を穿ち周りに注ぎ口の貼付痕。内面は布目状の圧痕。	—	橙色・黒 サンド 茶黒細粒 細かい	18C～19C 宜興窯	HA② B4 II 祝殿 台 1229			
	57	中国(朱釉陶器)	水注(蓋)	甲	7.3	—	ドーム状。緑部の内側に身部の内に収まる突起。器肉薄。	—	橙色 黒細粒 密	18C～19C 宜興窯	HA③ G11 II 台 2857			
	58	中国(紫釉陶器)	水注(身)	底	—	7.0	胴は球形で碁筒底。内底に刷毛痕が認められる。外底に字款あり	—	赤紫・黒褐色サンド 茶細粒 細かい	18C～19C 宜興窯	HA② B5 II 祝殿 台 1217			
	59	取手		—	—	—	胴に貼付し、断面形態が円状、環状の取手である。	—	橙色 茶細粒 密	18C～19C 宜興窯	HA③ B10 II 台 2121			
	60	口		6.8	—	球形で口縁は上面に引き上げ筒状。内面に輪状の蓋受けを有す。外面に葉の貼花文	—	赤茶色 黒細粒 密	18C～19C 宜興窯	HA③ E5 II 台 1411				
	61	筒型容器	底	—	9.7	—	蛇の目高台。胴部は筒型になることが推察できる。	—	紫色 茶細粒 密	18C～19C 宜興窯	HA② A20 II上 台 1521			
	62	黒(天目陶器)	碗	胴	—	—	高台脇に逆「L」字状の削り痕が認められる。胴は僅かに膨らみ立ち上がる。外底：露胎	外：黒褐色 内：黒褐色	灰色 白黒細粒 細かい	14C～15C 福建	HA③ S19 II 台 3208			
	63			胴	—	—	高台脇に逆「L」字状の削り痕。胴はラッパ状に開き、立ち上がる。外底：露胎	外：黒褐色 内：黒色	灰色 黒細粒 細かい	14C～15C 福建	HA② T10 II SD8 祝殿小 台 1953			
	64			胴	—	—	—	胴僅かに膨らむ。外底：露胎	外：黒褐色 内：黒褐色	灰色 白黒細粒 細かい	14C～15C 福建	HA③ II S-3 台 429		
65	タイ産鉄絵	碗	口	—	—	口縁は端反り、口唇は丸い。外面に二条横線と斜行線。内面は二条横線の間に斜行線を挟む文様である。施文方法は鉄軸を面的に塗り、文様を掻き取り施文。	外：化粧土・透明 内：化粧土・透明	茶灰色 白黒細粒 細かい	15C～16C スコタイ窯	HA③ D5 I 台 1348				
66			胴	—	—	胴は丸い。外面に二条横線を挟み上四条の斜行線、下斜行線。内面は二条の横線挟み下は椰子葉状線文を施文。両に二条縦線。	外：化粧土・透明 内：化粧土・透明	茶灰色 白黒細粒 細かい	15C～16C スコタイ窯	HA③ T7 III S-279 台 2229				
67		合子(蓋)	口	8.3	—	甲部はドーム状。外面の側面に鉄軸による。縦線の文様構成、甲上面に横線上面観は波紋状になる。焼きが甘い。	外：化粧土・透明 内：露胎	淡灰色 黒白微粒 密	15C ジャットャイ窯	HA③ D11 II 台 3248				
68	合子(身)	底	—	5.4	胴は丸く、高台は脇に二条、内側に一条の線状の削り、外削りで浅い。外面に鉄軸の横線を四条。焼き甘い。外底：露胎	外：化粧土・透明 内：茶褐色 (鉄軸)	淡灰色 黒白微粒 密	15C～16C ジャットャイ窯	HA② K4 II 台 2629					
69	壺	底	—	10.2	腰から外に開く。高台は外削り「八」の字状。断面形は方形。外面は腰と高台に鉄軸、胴に横線状に施文。外底：露胎	外：化粧土・透明 内：透明	淡黄褐色 黒茶細粒 細かい	15C～16C タイ	HA③ A13-C13 II S-640 台 1132					

第三章 5

## (14) 褐釉陶器・半練土器

総数 1779 点、中国産 1594 点、タイ産 144 点、東南アジア産 20 点、タイ産半練土器 7 点、不明 14 点が得られている。(第 68 表) 中国南部からタイにかけて地域で、生産地の特定できないものは東南アジア産で報告した。また壺・甕類の分類は形態、釉、素地から行ったが全形を窺える資料が得られていないことから、形態分類は首里城京の内(1998)、首里城御内原(2010)の資料を参考に行った。生産年代は京の内倉庫跡出土の褐釉陶器が 15C 前半から 15C 中葉以前に搬入されたことを示していることから、ほぼ同様の当該器は 14C～16C を中心とした明代の範疇に収まるといえる。

褐釉陶器の平面分布(第 125 図)は HA ③は縦軸が A・B・C、横軸が 12～14 グリッドに集中し、HA ②は西側のグスク期遺構、瓦屋又吉小と祝女殿内の東側に集中部がある。HA ④は特に集中部はないが西側が多いようである。

### 1. 中国産褐釉陶器・その他

総数 1594 点が得られ、器種別に壺 1535 点、甕 1 点、水注 10 点、鉢 15 点、播鉢 1 点、蓋 2 点があった。また、その他に灰釉の小壺 1 点・蓋 1 点、黄褐釉の壺 2 点、炆器の壺 1 点、袋物 1 点、壺 or 甕 23 点、不明 1 点がある。

#### 壺・甕類

壺が貯蔵器であることは疑う余地のないものであるが、タイ産褐釉壺は容器そのものが輸入品ではなく輸入物資のコンテナとしての容器(タイ香花酒の貯蔵器)と考えられていることは周知のことであり<sup>註</sup>、褐釉陶器の帰属性を考える上で重要である。中国産褐釉の壺、甕においても法量はもとより内面の釉薬の有無は輸入物資(内容物)になんらかの違いがあると考え、法量と共に分類の判断に加えた。大型：内面施釉 92%、中型：内面施釉 48%、小型：内面施釉 26%で、内面施釉率は大型が特に多く 9 割である。中型はほぼ半数に施釉、小型に至っては施釉するものは 3 割以下であることがわかった。小型から大型へ内面施釉率は高くなる傾向にある。

#### I 類：大型(15C～17C)

肩が張り、器の最大径が胴上部にある。頸部は内向し、口縁は外側に折り返し外に張り出す。口縁部の断面形態は方形。底部は全面施釉、全体の大きさに対して比較的底径が小さい。器面に轆轤痕が顕著である。1 無頸：胴部が窄まり頸部を作らず口縁に至る。2 短頸：頸部は内向し、口縁を外側に折り返す。A：鏝の上面がやや水平、B：鏝が斜行、C：先端のみ三角。(図 3・16・36・37～43)

#### II 類：中型(14C～16C)

頸部に無頸と短頸があり口縁部の形態は玉縁状、断面形態が三角状、四角状、鏝状とある。いずれも口縁の上端部を外側に折返し成型する。口径は 10cm 前後が多数を占め、最大は 10.8cm である。底径は 7.6cm～16.4cm であった。器面は外面内面共に轆轤痕を多く残すものと外面は調整され轆轤痕が認められないものとある。内面と殆どの底部資料は無釉である。底部は内面露胎で円盤状の粘土を嵌め込んだ様な痕跡を外底に残す。1 無頸：胴部が窄まり頸部を作らず口縁に至る。口縁は a：玉縁状、b：三角状、c：四角状、d：舌状を成す。(図 4・8～12)

2 短頸：頸部は内向し、口縁を外側に折り返す。鏝縁状を成し断面形態は a：三角状、b：四角状、c：舌状を成す。(図 1・2・6・13～15)

#### III 類：小型(明代・清代)

口径が 8～9cm 大、底径が 6cm 大の小型壺類である。7 点が得られている。口縁は無頸壺が 1 点と残りは小破片で判然としない。底部は平底で胴部が卵形(図 29)と高台を持つ物(図 28)とある。図 5 は口縁の断面形が楕円状の玉縁を成す。図 7 は腰部に丸味を持ち口縁まで窄まるまで肩、無頸の小壺で器の最大径は腰部ある。口縁は内から外に折り返し三角状を成す、口縁の断面形は「フ」字状。図 18 は口縁が内向し口唇が外側に僅かに折り返す断面形は四角の小壺である。(図 5・7・18)

#### 水注

図 52・53 は胴部に丸味を持ち口縁に向かい絞る。口縁はやや内彎気味に立ち上がる。口縁部上面は断面形が「T」字状に平坦に整えている。内面に蓋受けの鏝を有する。図 54 は胴部に丸味をもち、注ぎ口は筒状で胴部の中位やや上部に上向きに貼付されたことが推察できる。注ぎ口の内面から円孔が穿孔されている。図 55 底面から逆「八」の字状に開き立ち上がる。外底は上げ底で煤が付着している。

#### 蓋類

図 45・47 はドーム状の甲部を持つ。図 45 は小型壺の蓋が考えられる。作りはかなり薄い。図 46 は口縁部が半円状で中央は平坦で円孔を持つ。図 45・47 の生産年代は明代。

#### 鉢・播鉢

図 56 は最大径を腰部持ち、口縁に向かい窄まり口縁は内向する。かぼちゃ形。口唇は舌状。図 57 は口縁がやや肥

厚し内向する浅鉢。外面に横位の粘土凸帯を巡らしている。図 58 は小振りな播り鉢である。胴部は逆「八」の字状に開き、口縁は内側に屈曲させ先端は反る。口唇は肥厚し先端は尖る、内側に斜行する平坦面を持つ。内面に八条の櫛目を屈曲面から施している。図 60・61 は口縁の上端が「T」の字状の平坦を持つ鉢である。胴部はいずれも逆「八」の字状に開き、口縁は内側に屈曲させている。口唇は外側に張り出す。図 59 は円盤状の鏝を持つ鉢である。

#### その他

図 66 は灰釉の小壺である胴部が丸く口縁は無形で口唇は舌状、露胎している。生産年代は明代に位置づけられる。図 69 は灰釉の蓋で甲部から鏝状の縁を持つ。図 67 は黄釉の壺の胴部である。器面に櫛目状の条痕を残す。生産年代は明代。図 70 は炆器（無釉陶器）壺である。口縁は直口を成し、内面に蓋を受ける鏝状の突起がみられる。外面に粘土帯を縦に貼付、縦耳か把手と考えられる。生産年代は 13C～15C に位置づけられる。

### 2. 東南アジア陶器

鉢 12 点と壺と考えられる破片が 8 点得られている。図 71 は胴部が筒型の深鉢と考えられる。口縁は一旦内彎させ口縁上面で外側に折り返し玉縁状を成す。外面に二条の横線と幅広の押し引き文を施文している。図 72～79 は壺と思われる胴部資料である。いずれも器面は叩き痕と粗い布目状の圧痕が認められ、生産年代は概ね 15C～16C に位置づけられる。

### 3. タイ産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器は総数 144 点、内訳は壺 139 点、甕 1 点で灰釉瓶が 4 点得られている。

#### 壺・甕類

壺・甕類の分類は基本的には形態、釉、素地から行ったが今回、全形を窺えるものがなく、形態分類は首里城京の内の一括資料と首里城御内原の資料を参考に生産地で大別しⅠ類 4 種、Ⅱ類 3 種に分類した。

##### Ⅰ類：シーサッチャナライ窯 長頸四耳壺

口縁は肩部から大きくラップ状に外反する。A：頸部の最小径の位置が下部にある。B：頸部の最小径の位置が中央部にある。15C～16C 前に位置づけられる。

- 1：口縁部は鏝縁状。鏝の上端を摘まみあげる。口縁の断面形態は三角状。図 80
- 2：口縁部は鏝縁状。鏝の下端を斜め下に尖らす。口縁の断面形態は三角状。図 81
- 3：口縁部は鏝縁状。鏝は外側から内側に折り返している。鏝の角は尖らない。図 82
- 4：口縁部は鏝縁状。鏝に丸味を持つ。図 83

##### Ⅱ類：メナムノイ窯

口縁は玉縁状を呈し、頸部の最小径の位置は中央よりやや上にある。15C～16C 前に位置づけられる。

- 1：口縁がやや三角の玉縁。図 84
- 2：口縁の先端を外側から内側に折り曲げている。玉縁。図 85・86
- 3：口縁の先端を内側から外側に折り曲げている。玉縁。図 87

底部は図 91 に示す甕と図 89・90 に示す壺が得られている。図 89 は胴下部器壁に厚みがあり、立ち上がりは砲弾状の形態を示す。図 90 は胴にやや丸味があり立ち上がる。内面は轆轤痕を僅かに残す。底面砂目。内面は轆轤痕を残す。図 91 は立ち上がりか緩やかに開き立つ。底径が大きくフラットである。

#### 瓶

図 92 は小瓶の胴部資料である。頸部が締まり胴部の最大径が下位にある瓢箪形を呈す。生産年代は 15C～16C に位置づけられる。

### 4. タイ産半練土器

半練土器は 7 点得られ壺 5 点と蓋 2 点得られている。壺と蓋がありいずれも全形を窺えない小片のみの出土であった。生産年代は 15C～16C に位置づけられる。

#### 壺

図 95 は胴部が「く」の字状に屈曲する壺である胴上部に横位の二条沈線を施文している。図 96 は壺か鉢の底部である。底面から逆「八」の字状に開く。外面に煤の付着が認められる。

#### 蓋

図 97・98 は断面形態が錨状の落とし蓋である。図 97 は摘まみの資料である。図 98 は基部の資料である。

註：金武正紀 2000 「陶磁器が語るグスク時代の酒器」『琉球・東アジアの人と文化 上』高宮廣衛先生古希記念論集刊行会



第 69 表-1 中国・東南アジア産褐釉陶器 観察一覧

(質量単位: cm)

第 126 図・図版 87	図番号	器種	部位	分類	口径 器厚 底径	器形・特徴	釉 色・範囲・掻き取り	素地 色・質・混和材	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号
第 126 図・図版 87	1	壺	口	II 2-b	10.2 — —	肩に丸味、口縁は外に折り返し、断面形態は「フ」字状で口縁上端は偏平。短頸。	褐色 内面露胎	褐色 細かい、 白色、褐色砂粒	14C~15C 中国	HA ④ F13 III 台 2111
	2			II 2-b	10.0 — —	肩に丸味、頸部は内向し口縁は外に折り返す。断面形態は「フ」字状。口縁上端は偏平。短頸。	褐色 内面露胎	褐色 細かい、 白色、褐色砂粒	14C~15C 中国	HA ④ J14 III 台 2549
	3			I 2-C	13.6 — —	頸は内向。口縁は外に「く」の字に屈曲、更に粘土帯を巻き、罅状を作る。口縁断面形態は四角状。	灰褐色 口唇、頸内露胎	灰色と褐色サンド 細かい、 白色、褐色砂粒	14C~15C 中国	HA ④ I14 III 台 2479
	4			II 1-a	10.7 — —	なで肩で口縁は玉縁状に内から外に丸める。内面と外面に轆轤痕が著しい。無頸。	緑灰褐色 内面露胎 口縁上、内	灰色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	14C~15C 中国	HA ④ K1 SP1143 III 台 4004
	5			III	8.8 — —	なで肩。口縁は外に折り玉縁状。口縁の断面形態は「フ」字状で口縁上端は偏平。無頸。(小壺)	緑灰褐色 全面 頸部内面	灰色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	14C~15C 中国	HA ④ J14 III 台 2153
	6			II 2-b	10.3 0.4~0.5	頸部は内向。口縁は外に折り返す。口縁断面形態は「フ」字状。	褐色 内面露胎 口上、口内	赤褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ③ B17 II 台 3070
	7			III	9.6 0.2~0.4	最大径が腰部あり丸い。無頸で口縁は外に折る。口縁の断面形態は「フ」字状で、上端は偏平。口唇は丸い。(最大胴径: 11.5) (小壺)	黒褐色 内面露胎 口上、口内	褐色 やや細かい、 白色砂粒、	明代 中国	HA ③ B14 S-20 II 台 1030
	8			II 1-a	9.8 — —	口縁は玉縁状に内から外に丸め、上端は偏平。無頸になると考えられる。	褐色 内面露胎 口上、口内	灰褐色 やや細かい、 白色砂粒	15C~16C 中国	HA ④ M19 III 台 1009
	9			II 1-d	9.6 — —	口縁は内から外に折、上端はやや丸い。口唇は丸い。無頸。	褐色 内面露胎 口上、口内	灰褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ④ K18 II 台 2651
	10			II 1-b	10.8 — —	胴は丸く無頸。口縁は外に折り、断面形態が三角状の罅。口縁上端、内側偏平にする。	褐色 内面露胎	黒褐色 やや細かい、 白色、黒色砂粒	15C~16C 中国	HA ③ A11 II 台 2305
	11			II 1-d	14.4 — —	頸部が窄まり、口縁は逆「八」の字状に開く罅状を持つ。鍋の可能性あり。	褐色 全面施釉	灰褐色 やや細かい、 白色、黒色細粒	明代 中国	HA ① N16 0010SD I 台 139
	12			II 1-b	10.5 0.3~0.6	頸部は内向、口縁の外に折り、断面形が三角状の罅。口縁断面形態は「フ」字状。口縁上端は偏平。	褐色 全面施釉 口上	灰褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ③ A13 S-11 II 台 4265
	13			II 2-a	10.4 — —	なで肩、頸部は内向。口縁は外に折り玉縁状。胴上部と頸下部に縦耳を貼付している。	褐色 内面露胎	灰褐色 やや細かい、 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ④ K4 II 台 2629 HA ④ K3.4 SK82 III 台 3366 HA ④ OP18.19 SD4 II 台 2906
	14			II 2-c	8.6 — —	頸部は上面に持ち上げ口縁は外側に折り返す。口縁は方形をなす。胴上部に目痕を残す。	緑灰褐色 内面露胎	灰色 やや細かい、 白色、褐色砂粒、	明代 中国	HA ④ G18 III 台 2324
	15			II 2-a	10.0 — —	頸部は斜め上面に持ち上げ口縁の外側に僅かに折り返す。口縁は玉縁状。	褐色 内面露胎	褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ④ I11 SD51 II 台 3213-4
	16			I 2-C	14.4 — —	頸部は上面に持ち上げ口縁の外側に折り返す。口縁は方形をなす。	褐色 内面露胎	褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	15C~16C 中国	HA ③ D13 II 台 3247
	17			I	17.6 0.8 —	口縁は方形をなす。	褐色 全面施釉	褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ② F3 名嘉座 II 台 981
	18			III	8.0 0.3~0.4	口縁は内向し口唇は外側に僅かに折り返す口唇の断面形態は四角。(小壺)	褐色 全面施釉	赤褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	清代か 中国	HA ③ T9 II 台 2806
	19			中型	— 0.4~0.7 9.0	底部は円盤状の底面が落とし蓋状に嵌まっている。僅かにくびれて立ち上がる。	褐色 内面露胎	暗褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 福建・広東	HA ② T10 祝殿小 II 台 635
	20			中型	— — 7.6	底部は僅かにくびれて立ち上がる。底面砂目	褐色 内面露胎	褐色 底部露胎 焼成良好	明代 中国	HA ③ A13-C13 S-640 II 台 1125
	21			中型	— — 9.8	底部は円盤状の底面が落とし蓋状に嵌まっている。僅かにくびれて立ち上がる。	褐色 内面露胎	灰色サンド やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ④ G18 SD41 II 台 3066
	22			中型	— 0.6 9.0	底部は円盤状の底面が落とし蓋状に嵌まっている。僅かにくびれて立ち上がる。外面に墨描きが認められる。「ミーガチー」か	黒褐色 底部露胎	紫褐色 やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 福建・広東	HA ② T8 畠 II 台 638
	23			中型	— — 10.2	底部は円盤状の落とし蓋状に嵌まっている。僅かにくびれ開き立つ。	灰褐色 底部露胎	橙褐色灰色サンド やや細かい、 白色、黒色砂粒	明代 中国南部	HA ④ F16 III 台 2146
	24			中型	— 0.4~0.8 9.2	底部は円盤状の底面が落とし蓋状に嵌まっている。僅かにくびれて立ち上がる。タイ産の可能性あり	褐色 底部露胎	紫褐色黒灰色サンド やや細かい、 白色、褐色砂粒	明代 中国南部かタイ	HA ③ D16 S-4 II 台 846
	25			中型	— — 11.4	底部は内底の高さまでくびれ、外に開き立ち上がる。器面は轆轤痕が顕著である。	褐色 底部露胎	紫灰色褐色サンド やや細かい、 白色、褐色砂粒	14C~15C 中国	HA ④ G19 II 台 2306 HA ④ G18 III 台 2298
	第 127 図・図版 88			26	胴	中型	— — —	胴部に横耳の貼付部	暗褐色 全面施釉	黒褐色 やや細かい、 白色、黒色砂粒

第 69 表-2 中国・東南アジア産褐釉陶器 観察一覧

(質量単位: cm)

第 127 図・図版 88	図番号	器種	部位	分類	口径 器厚 底径	器形・特徴	釉 色・範囲・掻き取り	素地 色・質・混和材	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号		
	27	壺	底	中型	— — —	平面形は瓢箪形の縦耳である。貼付部に押捺痕がみられる。	淡褐色 全面施釉	淡褐灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C~16C 中国	HA④ E18 II 台 2066		
	28			小型	— — —	碁笥底の小壺で全面鉄塗り(小壺)	褐色 全面施釉	灰褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA③ A14 S-11 II 台 2018		
	29			小型	0.2~0.4 6.0	くびれ平底外面に轆轤痕が顕著である。薄作り。(小壺)	不明	褐灰色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 福建・広東	HA③ B17 II 台 3169		
	30			中型	— 9.5	底面から逆「八」の字状に開く。内底は轆轤痕が顕著である。外底は上げ底。内面施釉。(茶壺)	褐色 外底露胎	灰色 細かい 白色、褐色細粒	明代 福建・広東	HA④ K4 II 台 2629 HA④ K4 III 台 2632		
	31			中型	— 0.7 16.4	底面から逆「八」の字状に開く。外底は上げ底。内面施釉。(茶壺)	褐色 外底露胎	灰色 細かい 白色、褐色細粒	15C~16C 中国	HA② T7 畠 II 台 881 HA④ K4 II 台 2629		
	32			中型	— 13.2	内底の高さまで直行しそこから外に開立ち上がる。内底中央が窪む。	暗褐色 底部露胎	灰色 やや細かい 白色、黒色粒	明代 中国南部	HA③ S17 S-35 II 台 2060		
	33			中型	— 14.2	僅かにくびれて立ち上がる。外底に砂目。	暗褐色 底部露胎	灰色 細かい 白色、黒色粒	15C~16C 中国南部	HA④ O15 II 台 2848		
	34			中型	— 13.8	僅かにくびれて立ち上がる。外底に砂目。内面施釉。	黒褐色 外底露胎	紫褐色 やや細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA④ E10 SD51 II 台 3202		
	35			中型	— 15.2	僅かにくびれ逆「八」の字状に開く。外底は上げ底。内面施釉。	暗褐色 全面	紫灰色 細かい 白色、黒色粒	明代 中国	HA③ B14 S-20 II 台 846		
	36			I 2-C	13.4 — —	口縁は外側に折り返し、鐔を成す。断面形態は方形状。口縁斜行し、鐔の先端はやや尖る。	暗褐色 全面	生成り色 細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA③ F18 II 台 3131		
	37			I 2-A	16.8 — —	頸部は内向。口縁は外に折り返し、断面形態方形状。口縁上面が平坦になり鐔の先端はやや尖る。	暗褐色 全面	生成り色 細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA③ C13 S-20 II 台 2209		
	38			I 2-C	25.4 — —	口縁は外側に折り返し、鐔は斜め下に張り出す。断面形態は方形状。	暗褐色 全面	灰色 細かい 白色、黒色粒	15C~16C 中国	HA④ J14 III 台 2549 HA④ K10 II 台 2641		
				39	口	口	I 2-C	19.0 — —	頸部は内向。口縁は外に折り返し、断面形態方形状の鐔。口縁上面が平坦な鐔、先端は尖る。	緑褐色 全面	褐灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C~16C 中国
40		I 2-C	17.6 — —	肩が張る。頸部は内向。口縁は外に折り返し、斜め下に張り出す。断面形は方形。肩部に楕円形の叩痕			黒褐色 全面施釉	褐灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C~16C 中国	HA③ C12 II 台 3116		
41		I 2-C	20.8 0.7~1.0 —	肩の張り頸部は内向。口縁は外側に折り返し、鐔は斜めに張り出す。断面形態は方形状。			暗褐色 全面施釉	紫褐色 やや細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA② A20 祝殿 702~04 II 台 1887		
42		I 2-C	18.4 0.7~1.0 —	肩の張る。頸部は内向。口縁は外側に折り返し、鐔は斜め下に張り出す。断面形態は方形状。			暗褐色 全面施釉	紫褐色 やや細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA② A20 祝殿 II 台 1292 HA② B20 祝殿 II 台 848 HA② A19 祝殿 702~04 II 台 1875		
43		I 2-C	22.4 0.8~1.0 —	肩の張る。頸部は内向。口縁は外に折り返す。鐔は斜め下に張り出す。断面形は方形状。肩部に楕円形の叩痕。			暗褐色 全面施釉	紫褐色 やや細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA② A20 祝殿 II 台 1289		
第 128 図・図版 89	44	蓋	底	大型	— 12.2	一旦くびれ逆「八」の字状に開く。外底は上げ底。轆轤痕が顕著である。	無釉 底部露胎	灰色、紫灰色サンド 細かい 白色、褐色細粒	15C~16C 中国	HA④ F18 III 台 2177 HA④ F18 III 台 2179		
	45			—	— 7.3	小壺の蓋が考えられる。甲部は半円形内面に身に掛かる突起を持つ。内面鉄釉	緑灰色 甲部	灰褐色 細かい 黒色細粒	明代 中国	HA③ A18 II 台 3077		
	46			—	— 6.6	半円形、甲部は中央が平坦になり小孔を持つ。甲縁近くに溶着痕が認められる。	褐色 全面施釉	灰色 細かい 白色、褐色細粒	不明	HA③ A15 II 台 1434		
	47			—	— —	甲部は半円形。合子蓋か	褐色 内面露胎	生成り色 細かい 白色、褐色粒	明代 中国	HA③ R-S19 II 台 3016		
	48			壺	底	大型	— 17.8	一旦くびれ逆「八」の字状に開く。轆轤痕が顕著である。	褐色 全面施釉	灰色 やや細かい 白色、黒色細粒	15C~17C 中国	HA④ I10 III 台 2448
	49					大型	0.8~1.1 13.4	一旦くびれ逆「八」の字状に開く。外底は上げ底。轆轤痕が顕著である。	褐色 全面施釉	紫褐色 やや細かい 白色、褐色粒	15C~16C 中国	HA② B20 祝殿 II 台 839 HA② J3 717 II 台 2419
	50					大型	— 14.0	底部はくびれて逆「八」の字状に開く。外底は上げ底が考えられる。轆轤痕が顕著である。	褐色 全面施釉	灰色 細かい 白色、黒色細粒	15C~16C 中国	HA③ C13 II 台 3004 HA③ C12 II 台 3215
	51			甕	底	大型	— 28.2	底面からやや開き立ち上がる。外底は僅かに上げ底である。内面無釉。	緑褐色 内面、底部無釉	橙褐色 やや粗い 白色、褐黒、色粒	明代 中国	HA③ E9 S-39 II 台 1076 HA③ C9 II 台 1774
52	水注	口	—	12.2 —	胴部に丸味。口縁はやや内彎気味に立ち、口縁部上面は断面形が「T」の字状。内面に蓋受けの鐔を有する。	褐色 内面露胎	黒灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C~16C 中国	HA④ J14 SD41 II 台 3013			
53			—	8.7 —	胴部に丸味。口縁は直行。口縁上面は断面形が「T」字状の平坦。内面に蓋受けの鐔を有する。	褐色 全面	黒灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C~16C 中国	HA④ G7.8 SK4 III 台 15			

第 69 表-3 中国・東南アジア産褐釉陶器 観察一覧

(質量単位: cm)

第 128 図・ 図版 89	図 番号	器種	部位	分類	口径 器厚 底径	器形・特徴	釉 色・範囲・掻き取り	素地 色・質・混和材	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取)番号		
第 128 図・ 図版 89	54	水注	注口	—	—	胴部に丸味、注ぎ口は筒状、胴部の中よりややや上に 上向きに貼付。注ぎ口の内面に円孔。	褐色 内面露胎	黒灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ④ J14 SD41 II 台 3013		
	55		底	—	11.2	底面から逆「八」の字状に開き立ち上がる。外底は 上げ底で煤が付着している。	褐色 底部露胎	黒灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ④ J14 SD41 II 台 3013.3054 HA ④ G14 SD41 II 台 3075		
	56	鉢	口~胴	—	12.3	最大径を腰部持ち、口縁に向かい窄まり口縁は内向 する。口唇は舌状。	緑褐色 口唇、外底露胎	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ② T07 晶 II 台 875 HA ② T08 晶 II 台 895		
	57		口	—	16.0	0.5	口縁がやや肥厚した内向する浅鉢。外面に横位の粘 土凸帯を巡らしている。	褐色 口唇露胎	橙褐色 やや細かい 白色、褐色粒	明代 中国	HA ② H2 瓦屋 II 台 2397	
	58	挿鉢	口	—	20.0	0.5 ~ 0.6	胴部は外開く。口縁は内に屈曲させ先端は反る。口 唇は肥厚し先端は尖り、内側に斜め平坦面を持つ。 内面の屈曲面八条の櫛目を施す。	褐色 内面露胎	橙褐色 やや細かい 白色、褐色粒	明代 中国	HA ② A3 祝殿 II 台 1621 HA ② A3 祝殿 II 台 496	
	59	鉢	—	—	22.2	—	円盤状の鐔を持つ。口唇は四角状。	褐色 全面	橙褐色 やや細かい 白色、褐色粒	明代 中国	HA ④ P19 II 台 2890	
	60		口	—	25.4	—	口縁は内側に屈曲させ先端は「T」の字状の平坦を持 つ。口唇は外側に張り出す。	褐色 内面施釉	赤褐色 やや細かい 白色、褐色粒	16C ~ 17C 中国南部	HA ② B4 祝殿 II 台 1205 HA ② B4 祝殿 II 台 1211	
	61		—	—	23.3	—	胴部は逆「八」の字状に開く、口縁は内に屈曲、上 端は平坦。口唇は外に張り出す。胴部に目尻痕。	褐色 内面施釉	赤褐色 やや細かい 白色、褐色粒	16C ~ 17C 中国南部	HA ④ N16 P-116 III 台 127	
	62		底	—	—	8.6	底は円盤状の粘土を嵌た様に外底に痕跡を残す。立 ち上がりは僅かにくびれ開く。壺の可能性。	褐色 底部露胎	紫褐色 やや細かい 白色、褐色粒	14C ~ 15C 中国	HA ④ P20 II 台 2894	
	63	底	—	—	9.2	逆「八」の字状に開く。外底はやや上げ底。壺の可 能性あり。タイ産の可能性あり。	褐色 内面施釉	赤褐色 やや細かい 白色、褐色粒	14C ~ 15C 中国南部	HA ④ G13 SD42 II 台 3169		
	64		—	—	0.6	13.2	底面は外側に張り出し断面形が「く」の字にくびれ 逆「八」の字状に開く。外底に砂目痕。	褐色 底部露胎	赤褐色 やや細かい 白色、褐色粒	16C ~ 17C 中国南部・ 東南アジア	HA ② G1 瓦屋 II 台 1035	
65	中型		—	—	15.0	底部はくびれ逆「八」の字状に開く。外底に砂目痕。	褐色 内面施釉	赤褐色 やや細かい 白色、褐色粒	16C ~ 17C 中国南部・ 東南アジア	HA ② B4 祝殿 II 台 1215		
第 129 図・ 図版 90	66	壺	口	小型	6.4	—	灰釉の小壺である胴部が丸く口縁は無形で口唇は舌 状、露胎している。(小壺)	灰色 内底露胎	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ③ A12 II 台 2873	
	67		胴	—	—	—	黄褐釉の壺の胴部である。器面に櫛目状の条痕を残 す。	生成り色 全面	生成り色 やや細かい 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ③ D11-14 II 台 1540	
	68	不明	胴	—	—	—	黄褐釉の袋物が考えられる。	黄色 全面	生成り色 細かい 黒色粒	明代 中国	HA ④ G16 III 台 2275	
	69	蓋	口	—	0.3 ~ 0.5	—	灰釉の蓋で甲部から鐔状の縁を持つ。(口径: 8.2cm)	灰色 甲部	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ③ A13 S-11 II 台 4265	
	70	壺	口	—	10.7	—	妬器(無釉陶器)。口縁は直口、内面に蓋を受ける鐔 状の突起。外面に粘土帯を縦に貼付。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	13C ~ 15C 中国	HA ② E20 祝殿 II 上 台 707	
	71	鉢	口	—	31.0	0.6 ~ 0.9	筒型の胴部から口縁は一旦内湾、玉縁状を成す。外 面に二条の横線と幅広の押し引き文を施文。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ② S4 祝殿 II 台 954	
	72	壺?	胴	—	—	—	—	外面に布目状圧痕なのか叩き痕なのか不明。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ S17 S-35 II 台 1994
	73			—	—	0.6	—	外面に布目状圧痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ② K3 三良 II 台 319
	74			—	—	—	—	外面に篋による条痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ F11 II 台 3205
	75			—	—	—	—	外面に布目状圧痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ F17.18 S-10 II 台 2034
	76			—	—	—	—	外面に布目状圧痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ F17.18 S-10 II 台 2034
	77			—	—	—	—	外面に布目状圧痕なのか叩き痕なのか不明。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ A14 S-11 II 台 1258
	78			—	—	—	—	外面に篋による条痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ B16 II 台 3161
	79			—	—	—	—	外面に布目状圧痕なのか叩き痕なのか不明。	無釉	灰色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ E9 II 台 1371

第70表 タイ産褐釉陶器・半練土器 観察一覧

(質量単位: cm)

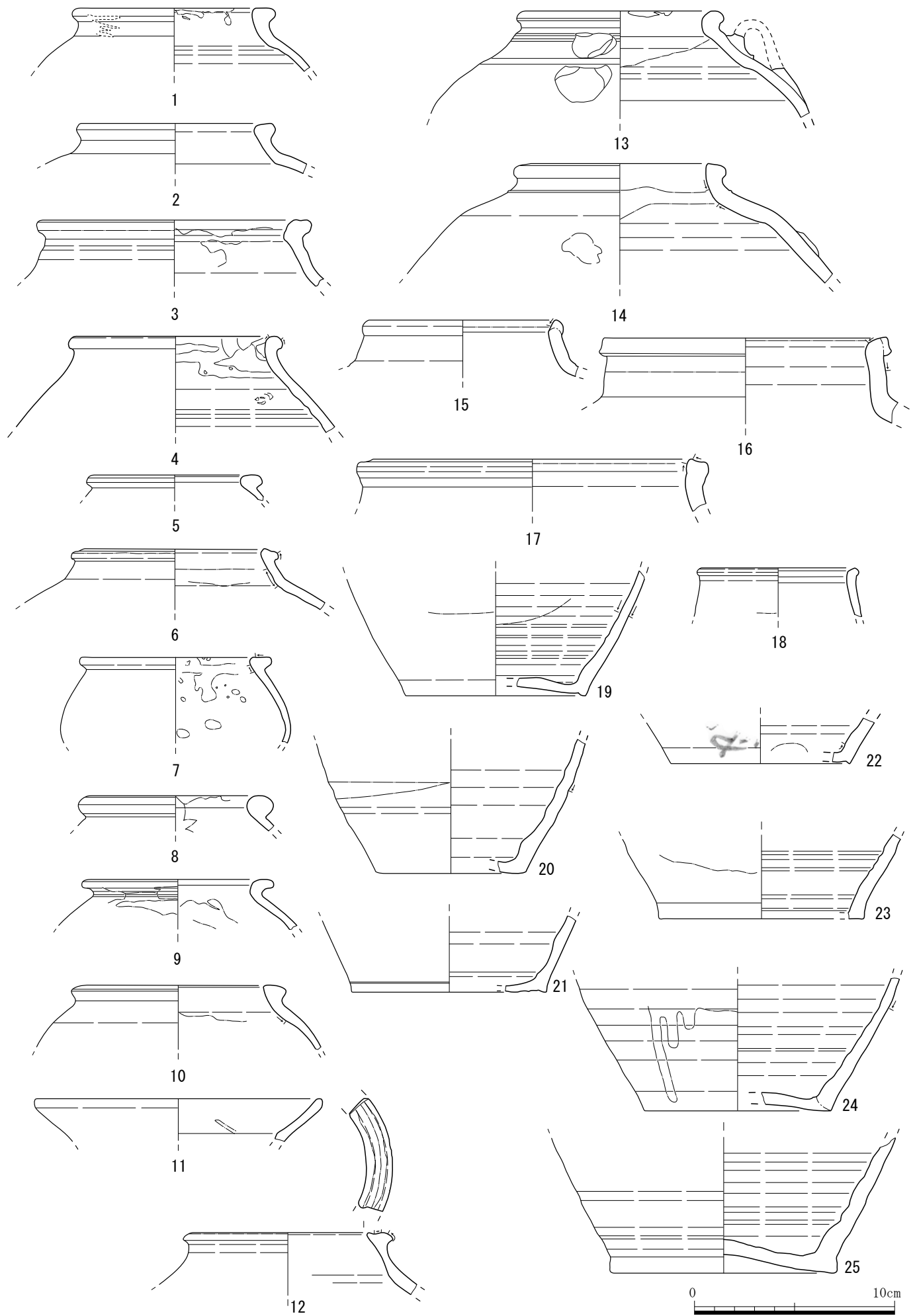
第図 図版	図 番号	器種	部位	分類	口径 底径	胴径 器厚	器形・特徴	釉 色・範囲・焼成・貫入	素地 色・質・混和材	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺構・台(取) 番号	
第130 図・図版 91	80	壺	口	I類-1	17.6	—	口縁部は頸部からラップ状に大きく外反し、口唇は上端を上へつまみあげた、断面三は角状を成す。	黒褐色 口縁全体 貫入	紫褐色 細かい 白色砂粒、	15C~16C タイ	HA④ N15 II 台 2793	
	81			I類-2	13.8	—	口縁端部の断面形態が三角状を呈する。ラップ状に外に大きく開く。	黒褐色部分的に黄褐色 口縁上面と頸部内側の釉を拭き取る。	黒灰色 細かい 白色砂粒、	15C~16C タイ	HA④ K19 III 台 2674 HA④ I19 III 台 2514	
	82			I類-3	12.2	—	口縁端部を外側から内側に折り返している。罎の角が尖らない。	褐色口縁上面から頸部の内側の釉を拭き取っている。	黒灰色と褐色サンド 細かい 白色砂粒、	15C~16C タイ	HA④ I15 II 台 2482	
	83			I類-4	14.0	—	口縁の端部に丸みを持たせラップ状に大きく外反している。	褐色部分的に黄褐色 口縁先端と頸部内側の釉を拭き取る。	灰色褐色サンド 細かい 黒色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ M19 III 台 2747	
	84			II類-1	11.4	—	口縁がやや三角の玉縁を成し頸部の最小径の位置は中央よりやや上にある。	黒褐色 頸より下部の内側を拭き取る。	灰色褐色サンド 細かい 黒色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ L19 IV 台 981	
	85			II類-2	11.1	—	口縁の先端を外側から内側に折り曲げている。口唇は丸い。	褐色 口縁上面から頸部内側の釉を拭き取る。	褐色 細かい 黒色、褐色、白色粒子	15C~16C タイ	HA③ A14 S-11 II 台 1236	
	86			II類-2	11.8	—	口縁の先端を外側から内側に折り曲げている。口唇は丸い。	黒褐色 口縁全体	灰色 細かい 黒色、白色粒子	15C~16C タイ	HA③ A13 II 台 2489 HA③ C12 II 台 3182 HA③ A13 S-11 II 台 4265	
	87			II類-3	11.0	—	口縁の先端を内側から外側に折り曲げている。口唇は丸い。	褐色 口縁上面から頸部内側の釉を拭き取る。焼きが甘い。	褐色 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ?	HA③ A15 II 台 1434	
	88	底	—	—	—	—	小型壺の横耳である。円筒形の紐をアーチ状に耳を作り両端は円形に広がりに貼付する。	黒褐色 全体	灰色褐色サンド 細かい 黒色、白色粒子	15C~16C タイ	HA③ D-E15 S-4 II 台 1477	
	89		—	10.0	1.1~1.3	—	胴下部は砲弾状、胴の内面は轆轤痕を残す。胴部の器壁が13mmと比較的厚いのにに対して底面は6mmと薄い作り。	黒褐色 外面胴下部まで、内面露胎	紫褐色 細かい 黒色、白色粒子	15C~16C タイ	HA② T1 祝殿 II 台 1088	
	90	底	—	—	—	—	胴にやや丸味があり立ち上がる。内面は轆轤痕を僅かに残す。底面砂目。	緑褐色 底部無釉 焼成良好	紫褐色褐色サンド 細かい 白色褐色砂粒、	明代 タイ	HA③ C6 I 台 1353	
	91		—	—	22.0	1.3~1.4	—	底面は径が広くフラット。立ち上がりは僅かに開き立つ。	内面と胴下部から無釉	橙褐色 細かい 黒色、白色粒子	15C タイ	HA③ A13 II 台 2489
	92	瓶	胴	—	—	7.4	—	頸部が締め胴部の最大径が下位にある瓢箪形を成す。灰釉の可能性あり。	灰色 胴下部まで内面無釉	灰褐色 細かい 黒色微粒子	15C~16C タイ	HA④ G15 III 台 2258
	93	壺	胴	半練	—	—	0.5	外面に叩き痕なのか詳細は不明であるが縦縞状に隆起文(陽刻文)が認められる。	焼成良好	橙褐色 やや細かい 金雲母、黒色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ F18 II 台 2173
	94			半練	—	—	0.4~0.6	底部付近に格子状の叩き痕が認められる。	焼成良好	赤褐色 やや細かい 金雲母、黒色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ G14 II 台 2234
	95			半練	—	—	0.5	胴部が「く」の字状に屈曲し横位沈線を二条施文している。	焼成良好	褐色 やや細かい 金雲母、黒色微粒子	15C~16C タイ	HA② L7 照屋 II 台 1424
	96			底	半練	—	—	12.2	底面から逆「八」の字状に開き立つ平底で内底に轆轤痕が認められる。外面に煤付着。	焼成良好	灰褐色 やや細かい 黒色、白色微粒子	15C~16C タイ
	97	蓋	撮	半練	—	—	—	落とし蓋のつまみである。断面形態は宝珠状。	焼成良好	褐色 やや細かい 黒色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ G15 III 台 2264
98	胴		半練	—	—	—	断面形態が弓状を成す。落とし蓋である。	焼成良好	黒褐色 やや細かい 黒色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ E-F17 II~III 台 4574	

第三章 5

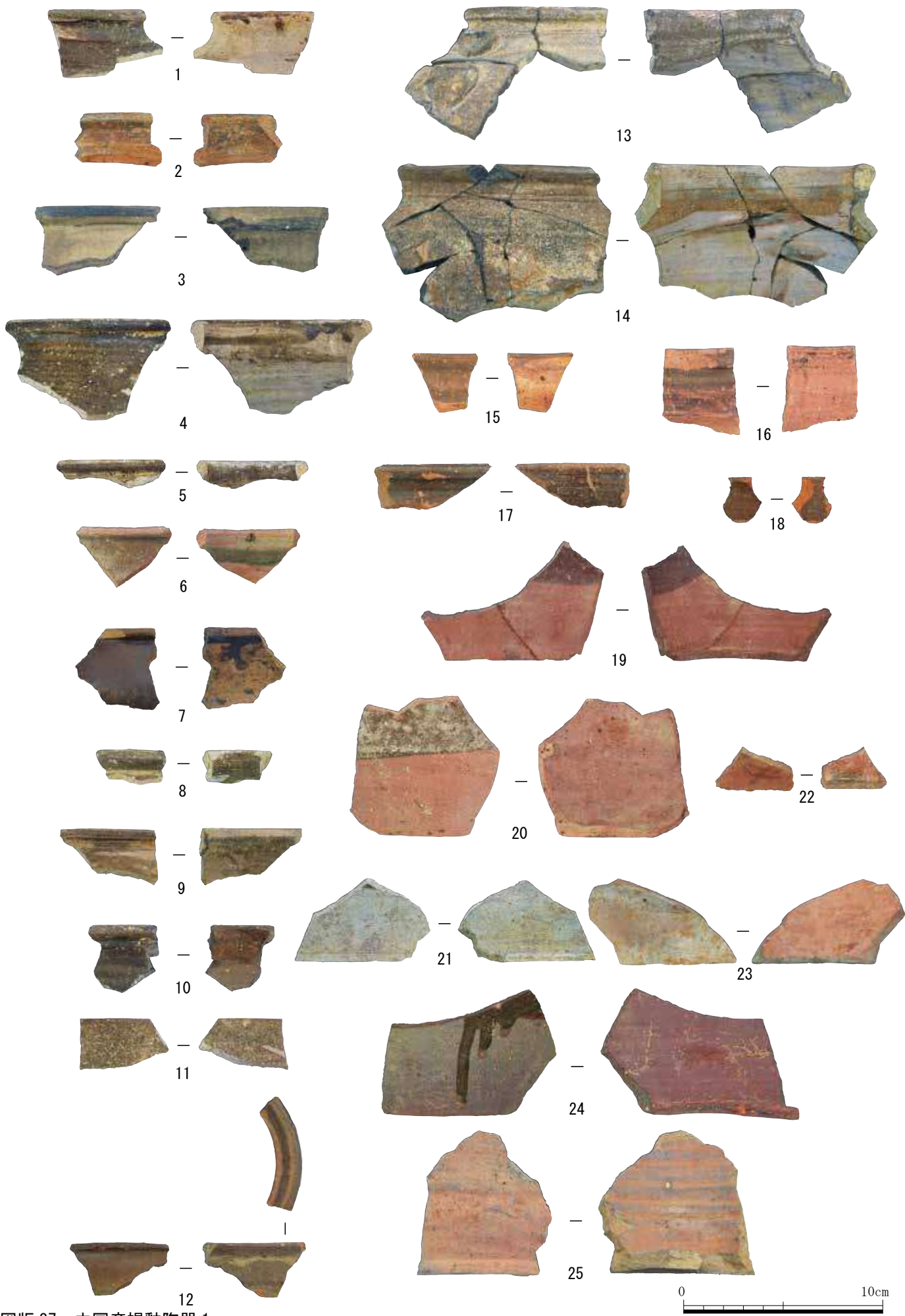


第125図 褐釉陶器 平面分布

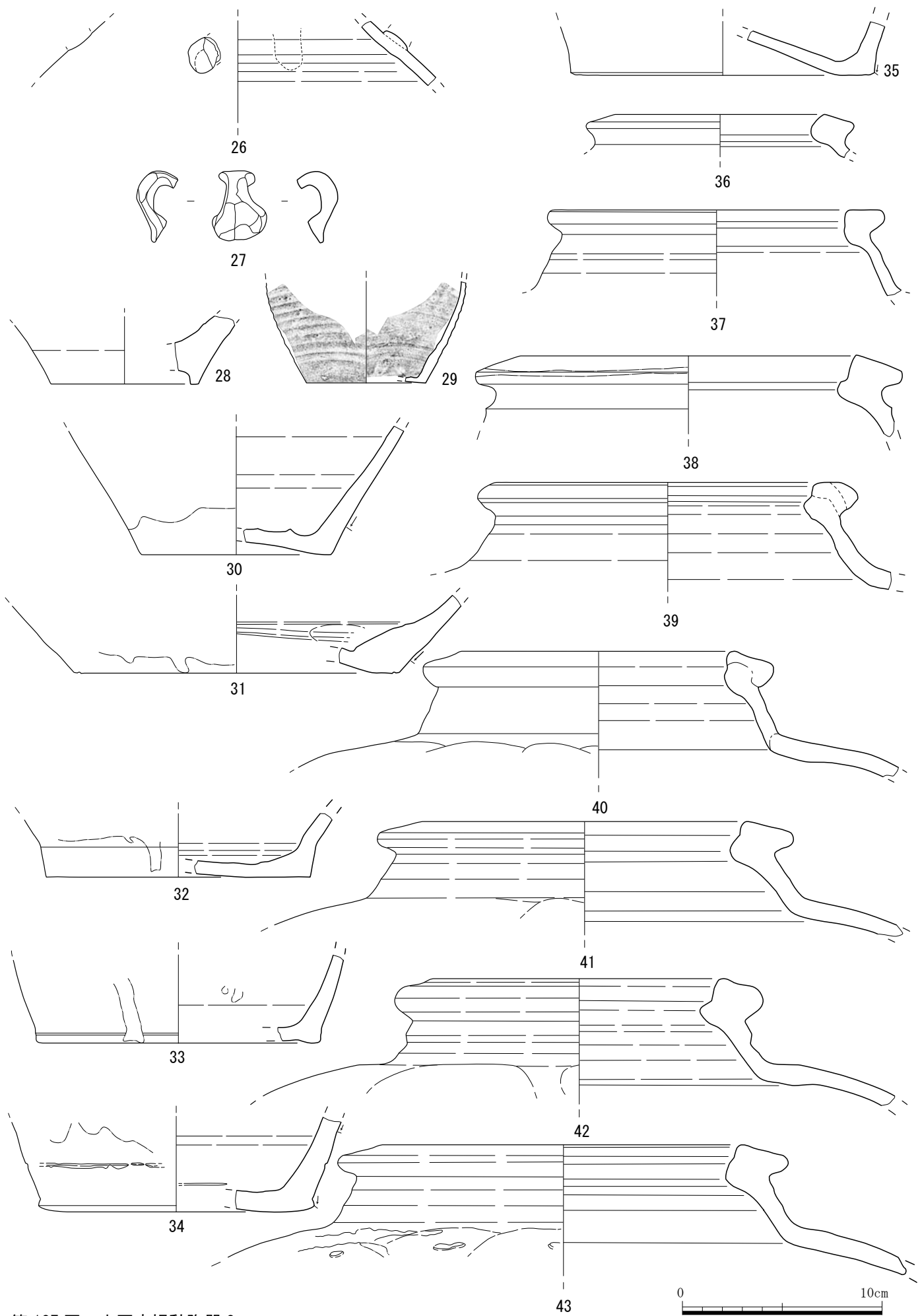




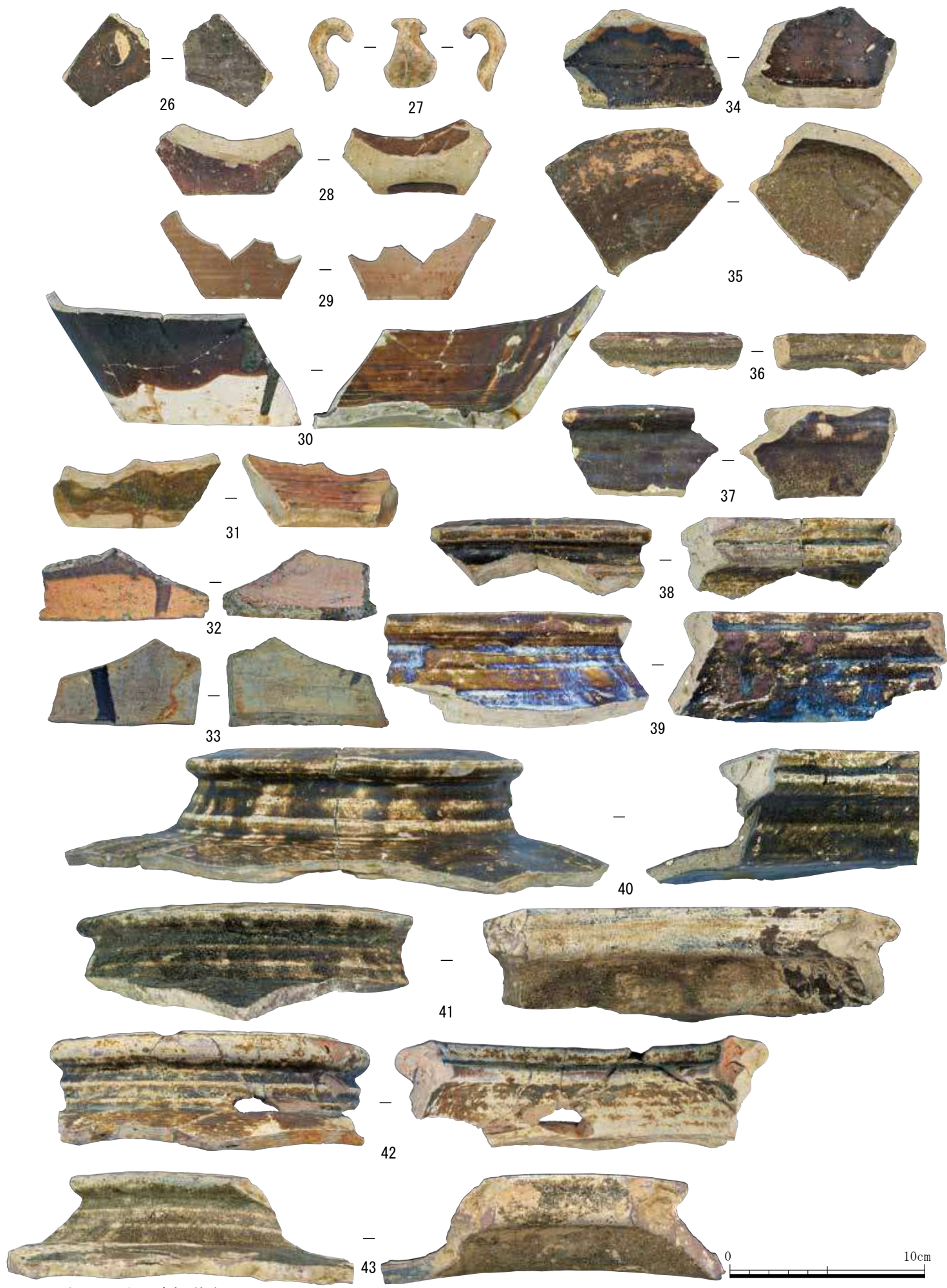
第126图 中国産褐釉陶器 1



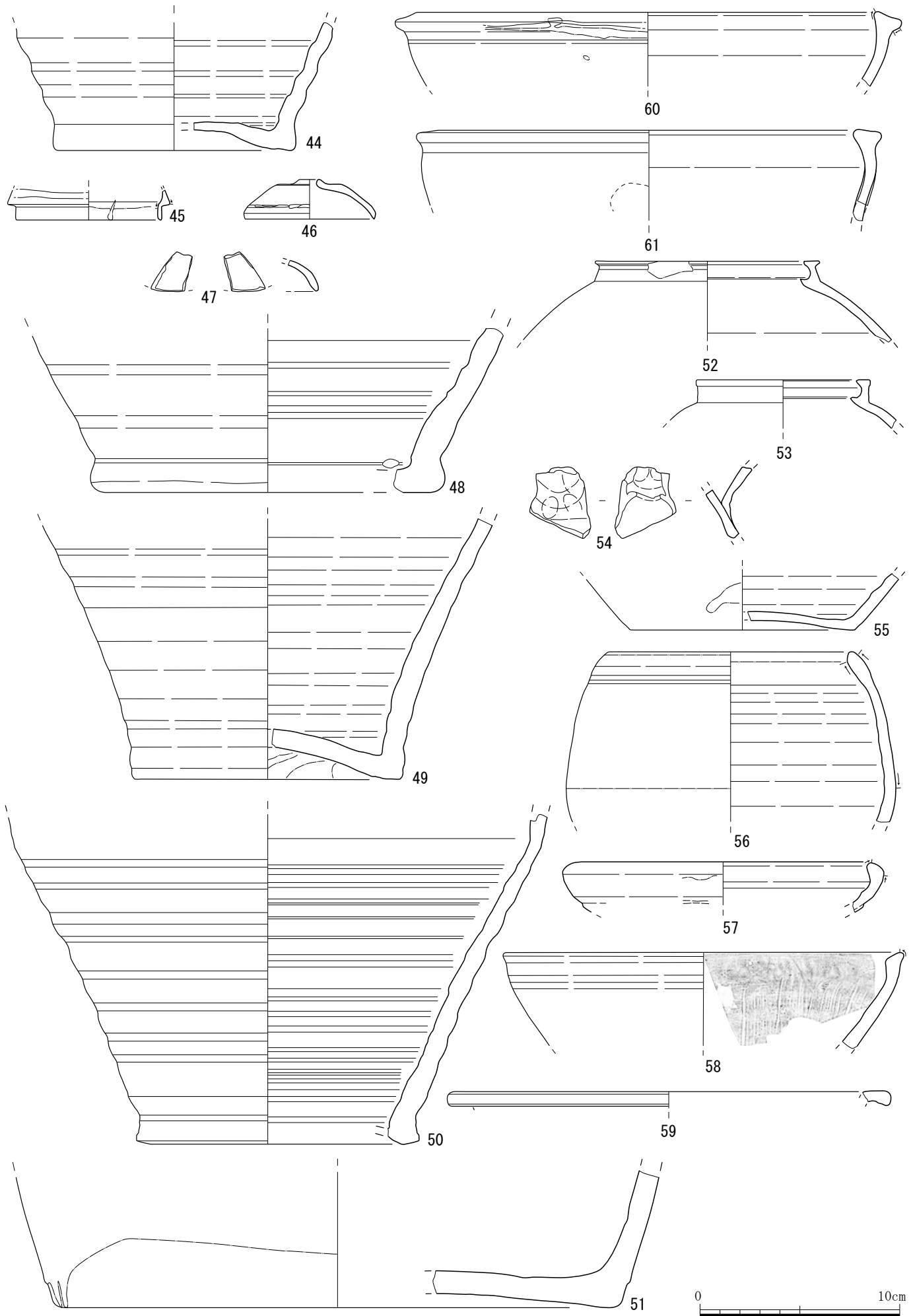
图版 87 中国産褐釉陶器 1



第127图 中国産褐釉陶器 2



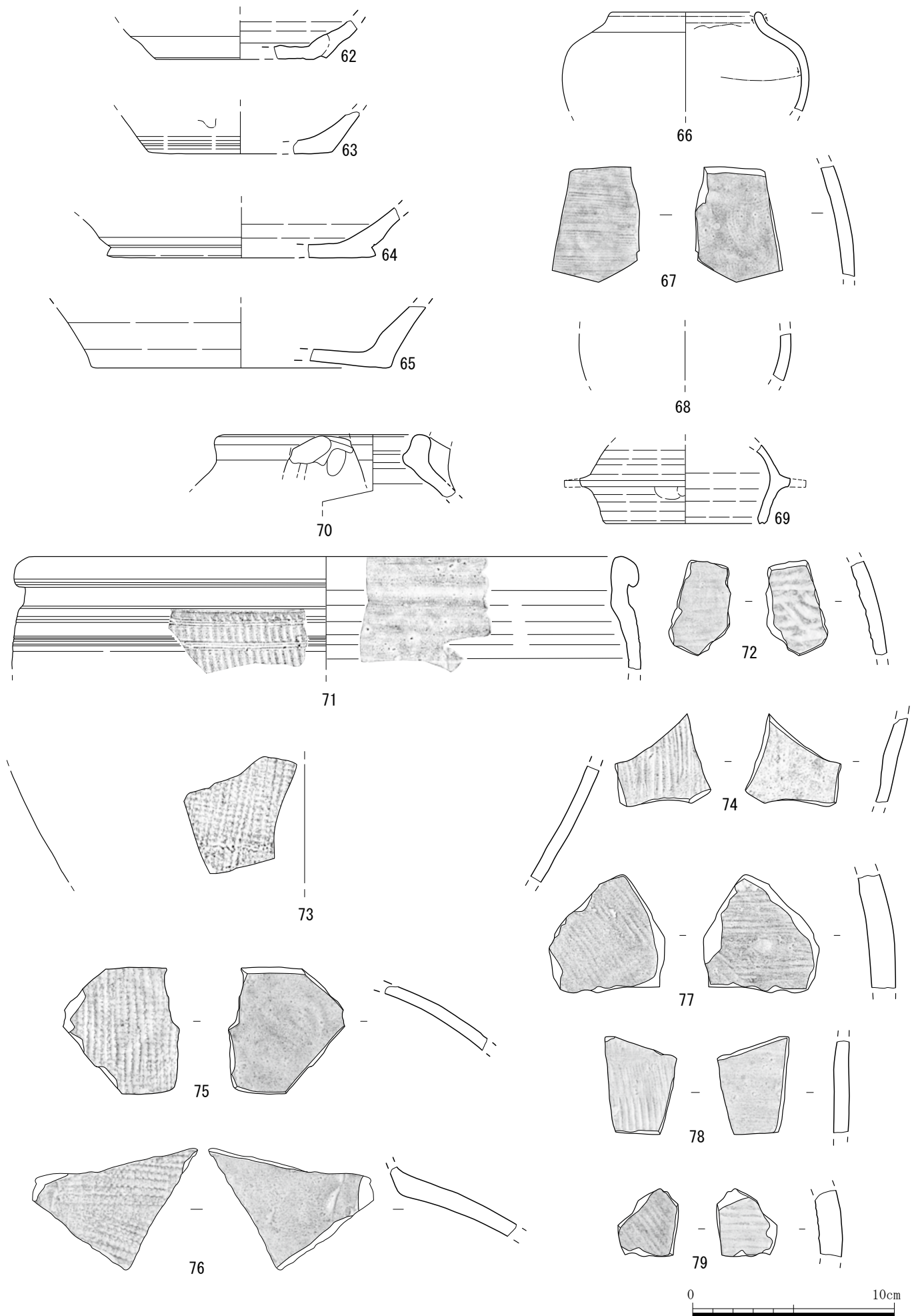
图版 88 中国産褐釉陶器 2



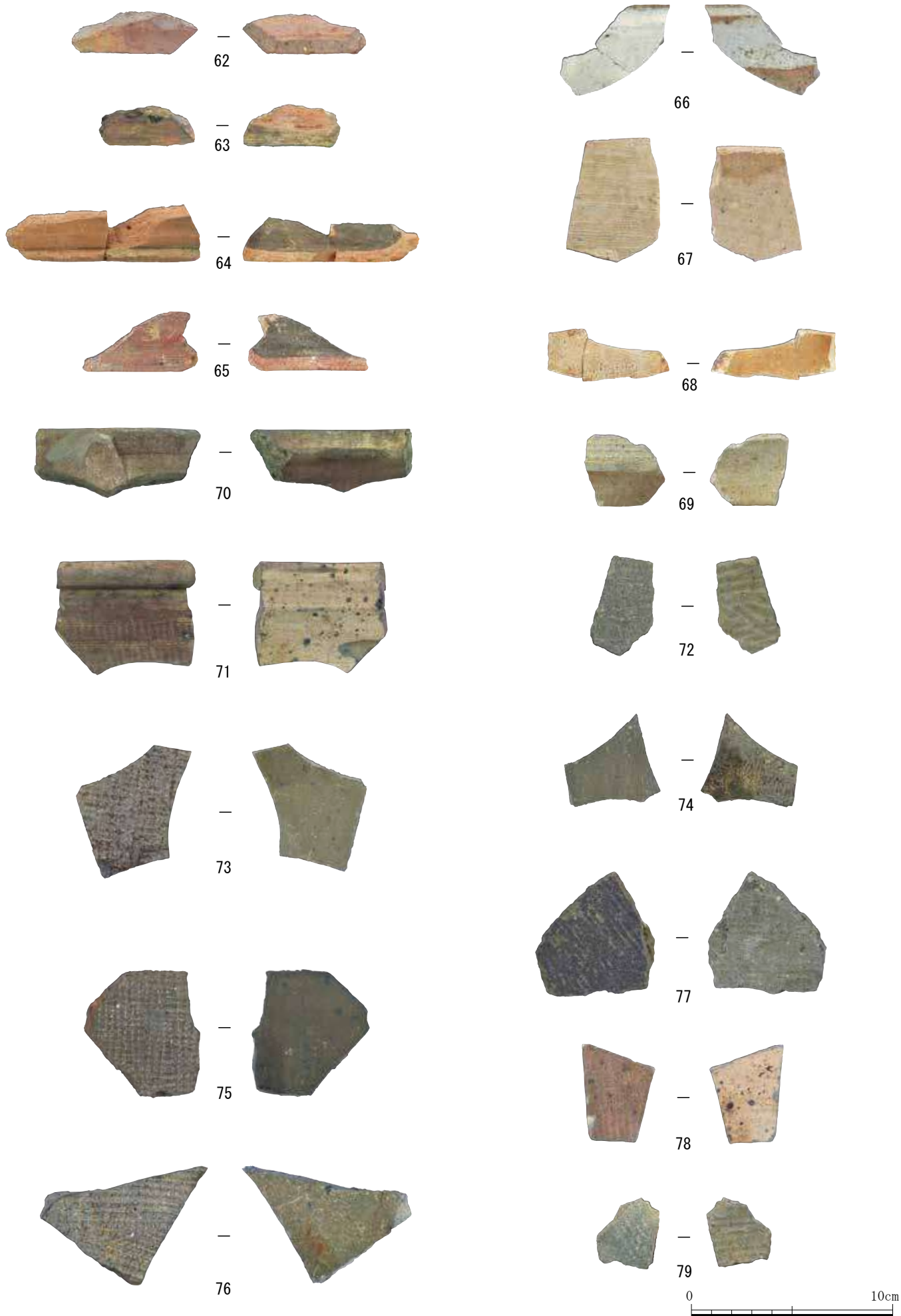
第 128 图 中国産褐釉陶器 3



图版 89 中国産褐釉陶器 3

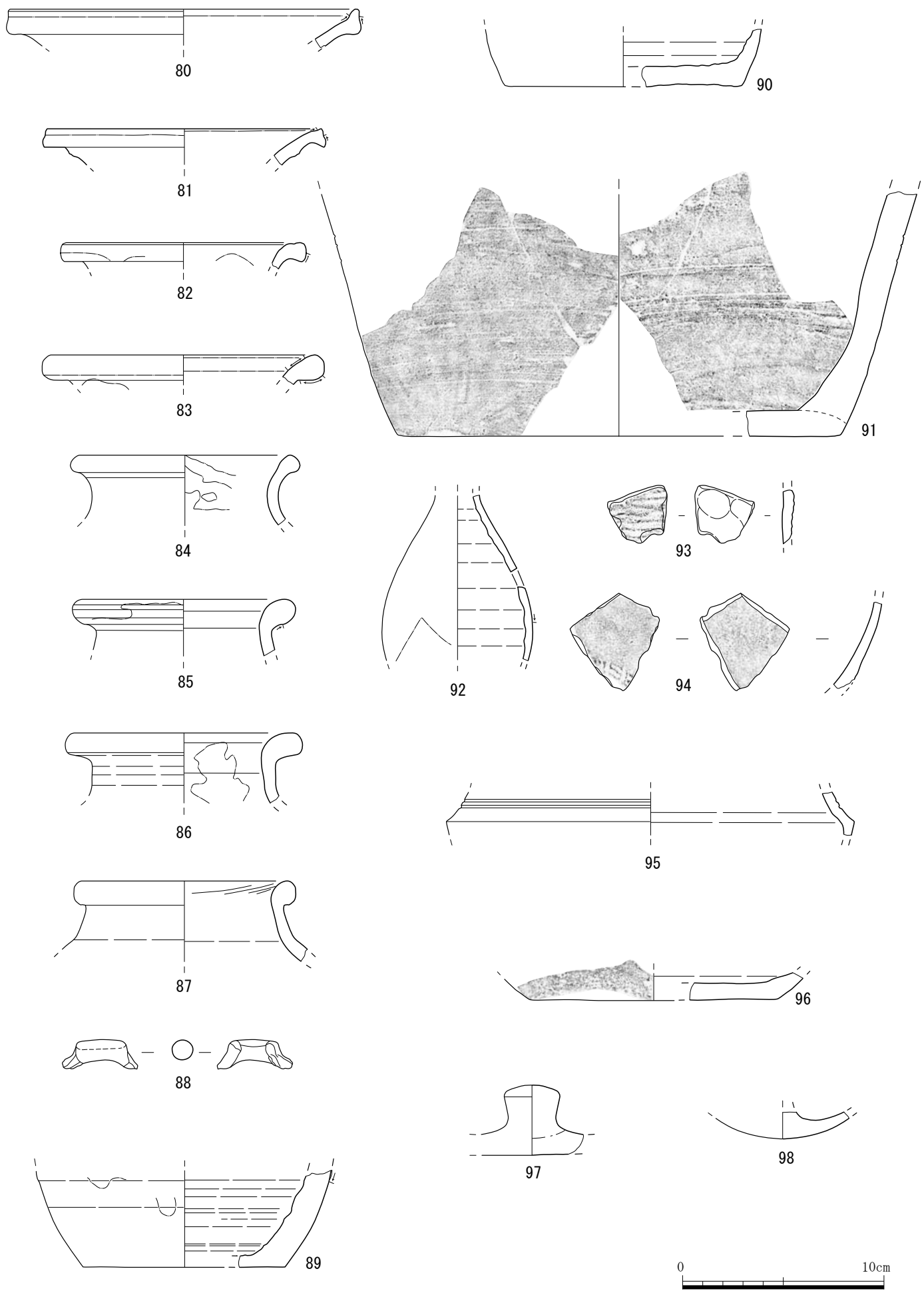


第129図 中国産褐釉陶器4・東南アジア産褐釉陶器

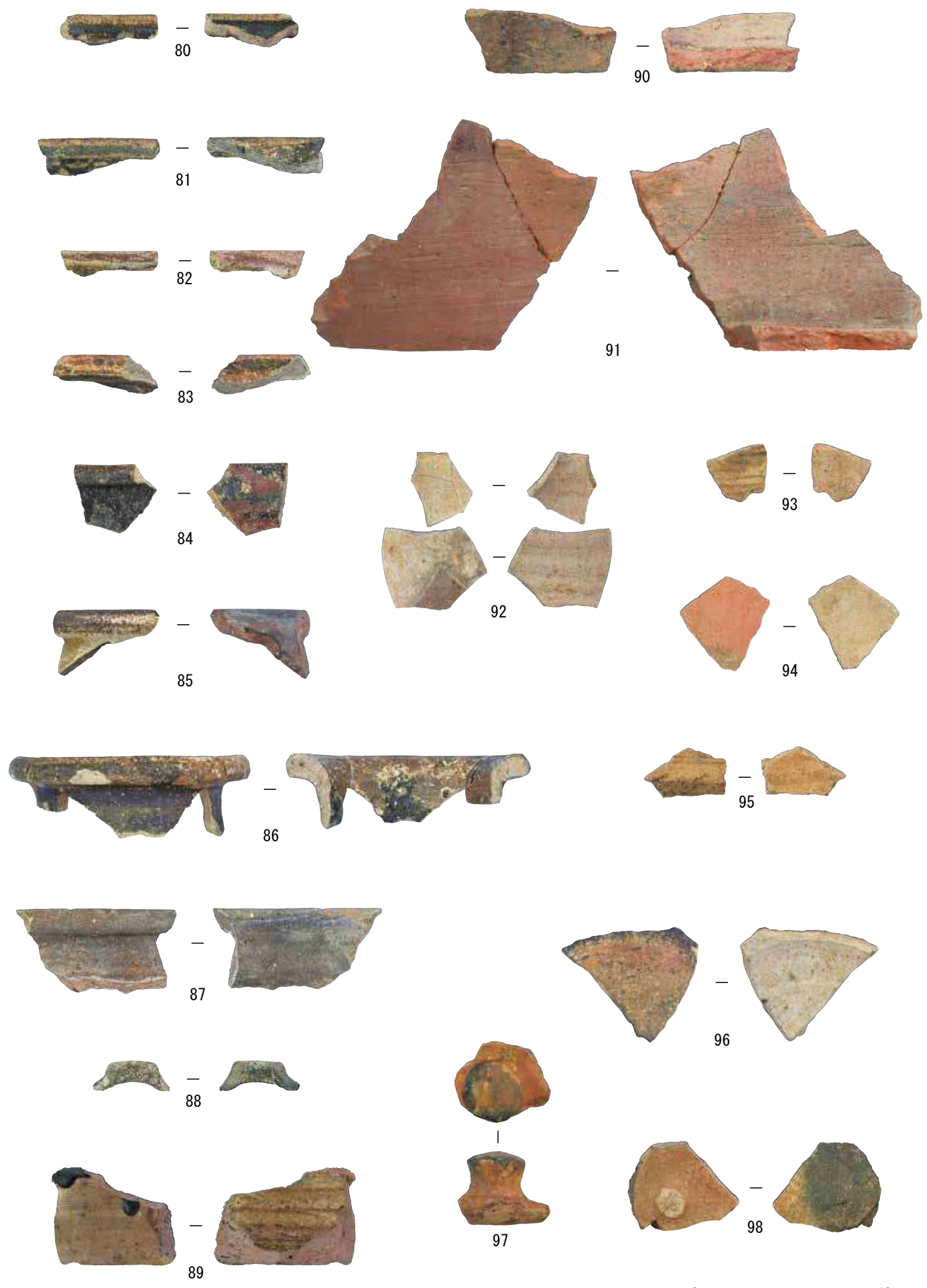


図版 90 中国産褐釉陶器 4・東南アジア産褐釉陶器





第130図 タイ産褐釉陶器・半練土器



図版 91 タイ産褐釉陶器・半練土器

## (15) カムイヤキ

カムイヤキ 118 点が出土した。完品の出土はなく、口縁部 7 点・胴部 97 点・底部 13 点・把手 1 点を得られている(第 72 表)。確認できる器種はすべて壺であり、口径は 8.5cm～14.4cm と全体として小ぶりである。当該器の出土分布(第 133 図)は、主に HA ③の東から西に伸びるライン(T16、A14～16、B12～17、C12、D8～10、E10)があり S-640(自然流路)と重なる。HA ②(G20、G1)グリッドはグスク期の埋葬人骨(11号)と重なりグスク土器の出土地区とも重なっている。HA ①は(L14、M12・13、O14・15)グリッドに分布している。口縁の形態分類は新里分類に準拠する<sup>註1</sup>。

### 1. 口縁部

口縁は、口唇の断面形態が三角状を呈す「新里Ⅰ式」と、口唇の断面形態が四角状を呈す「新里Ⅵ式」がある。生産された年代は、11C 後半～14C 前半に位置づけられる。図 1 は頸部からラップ状に外に開きながら上方に引き上げた後、外下方向に絞り带状の肥厚口縁を作る。先端は尖り鐔状を示す。断面形は下方が尖る三角状で、新里分類のⅠ式 c に分類でき、生産年代は 11C 後半とされている。図 3 は長頸の口縁で直口気味に立ち、口縁上部で外反し口唇断面形態は隅丸方形を示す。内面に刻線の「十」字印があり、窯印の可能性がある。新里分類のⅥ式 a に分類でき、生産年代は 14C 前半に位置づけられる。口縁の形態別の出土状況は、Ⅰ式 2 点・Ⅵ式 a 4 点・Ⅵ式 c 1 点の計 7 点の出土があり、Ⅵ式 a がやや多く出土している。

### 2. 底部

底部の形態はすべて平底で、底から直線的に立つものとやや丸味を持つものがあり、底面は扁平と僅かに上げ底のものがある。作りは円盤状の粘土に側面(粘土紐)を積み上げるものではなく、底部の底面から約 2cm の高さまでは継ぎ目なしで作りあげている。底部の立ち上がり段階の凹みを手練りで作り、その上に粘土紐を積み上げ胴部まで作ると考えられる。この技法は沖縄の作陶にみられる「ウシチキー技法」と同一と考えられる<sup>註2</sup>。図 32 はやや上げ底の底部で、逆「八」の字状に外に向かい開き立ち上がる。底部側面はへら削りした後、ナデ調整で仕上げている。底面から約 1～2cm の高さから積み痕が現れる。内底面は格子状圧痕を疎らに残し、器肉は中央がやや厚く縁に向かい薄くなる。内底の立ち上がり部分は指ナデし、内体面に格子状圧痕が認められる。図 35 は底面から丸味を持ちながら外に開き立ち上がり、外底から外側面はへら削りした後ナデ調整で仕上げている。外底面から 2cm 程の高さに積み痕が見られる。内面はへら削りが顕著で圧痕は認められない。外底面は扁平である。図 36 は腰部を僅かに絞りやや括れをなす平底である。胴部は逆「八」の字状に外に開き立つ。外底及び底部側面はへら削りとナデ調整がなされる。外底面から 2.5cm 程の高さから積み痕が現れる。内体面は平行状圧痕を残している。底面の器肉は薄くなる。

### 3. 胴部

胴部の器面調整(叩き・ナデ・へら削り)は、外体面と内体面のセットで以下の 6 種に分類できる。

Ⅰ類：外体面に平行状叩痕や綾杉状叩き痕、内体面に平行状圧痕や綾杉状圧痕とへら削り痕

Ⅱ類：外体面に平行状叩痕、内体面に格子状圧痕

Ⅲ類：外体面に平行状叩痕、内体面にナデ及びへら削り調整

Ⅳ類：外体面はナデ調整、内体面平行状圧痕と綾杉状圧痕

Ⅴ類：外体面はナデ調整、内体面は積み痕・指圧痕・へら削り痕・ナデ痕

Ⅵ類：外体面と内体面をナデ調整、外体面に文様が描かれる

外体面に見られる綾杉状痕や細かい格子状痕またはステッチ状痕は、平行叩痕が重なることにより生じると考えられるため、基本的には平行状叩き痕に含めた。胴部はⅠ類の出土がやや多く、Ⅴ類・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅱ類の順となるが、ほぼ部位による差異といえる。

把手・有文：図 37 は横位の手練り方形、把手で平面の横軸の中央付近に溝を設けている。溝は一方にやや偏り、両端に薄く広がる貼付部を持つ。カムイヤキ古窯跡群Ⅳ(2005)に同様の把手の報告例がある。有文片は 5 点得られている。図 7・8・16 は横位の波線文で、図 7 は外面の頸部から肩部にかけ上下の圏線に 3 条の波線を巡らしている。図 8 は頸部に振り幅の大きい波文を一条施文している。図 16 は波の一部が確認できる資料である。図 17 は縦線に放射状に波線が伸びる。図 15 は横線のみ破片である。

#### <註文献>

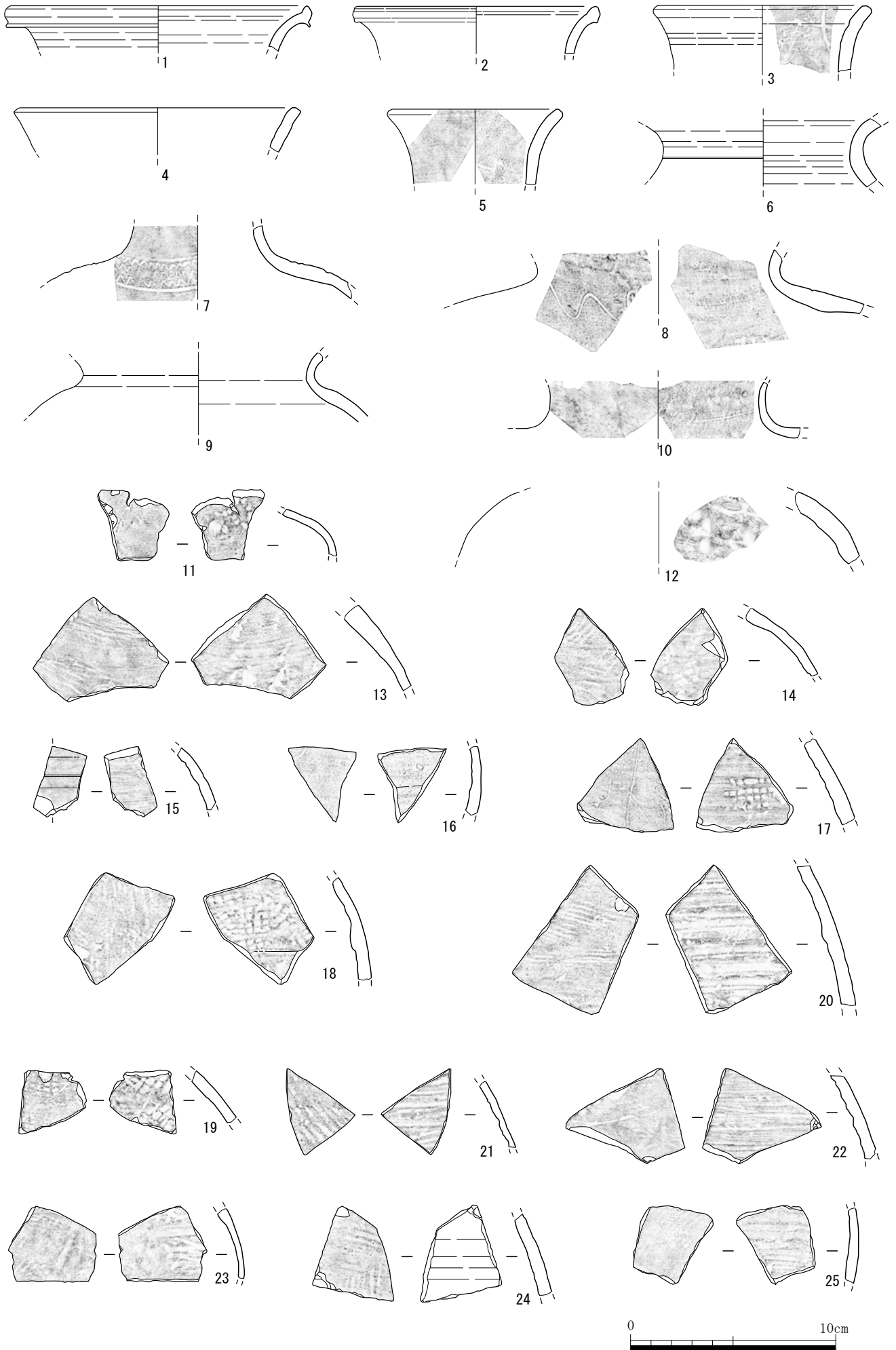
註 1：新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産の成立と発展」『考古学研究』49-1 考古学研究会

新里亮人 2007 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島『東アジアの古代 130 号』

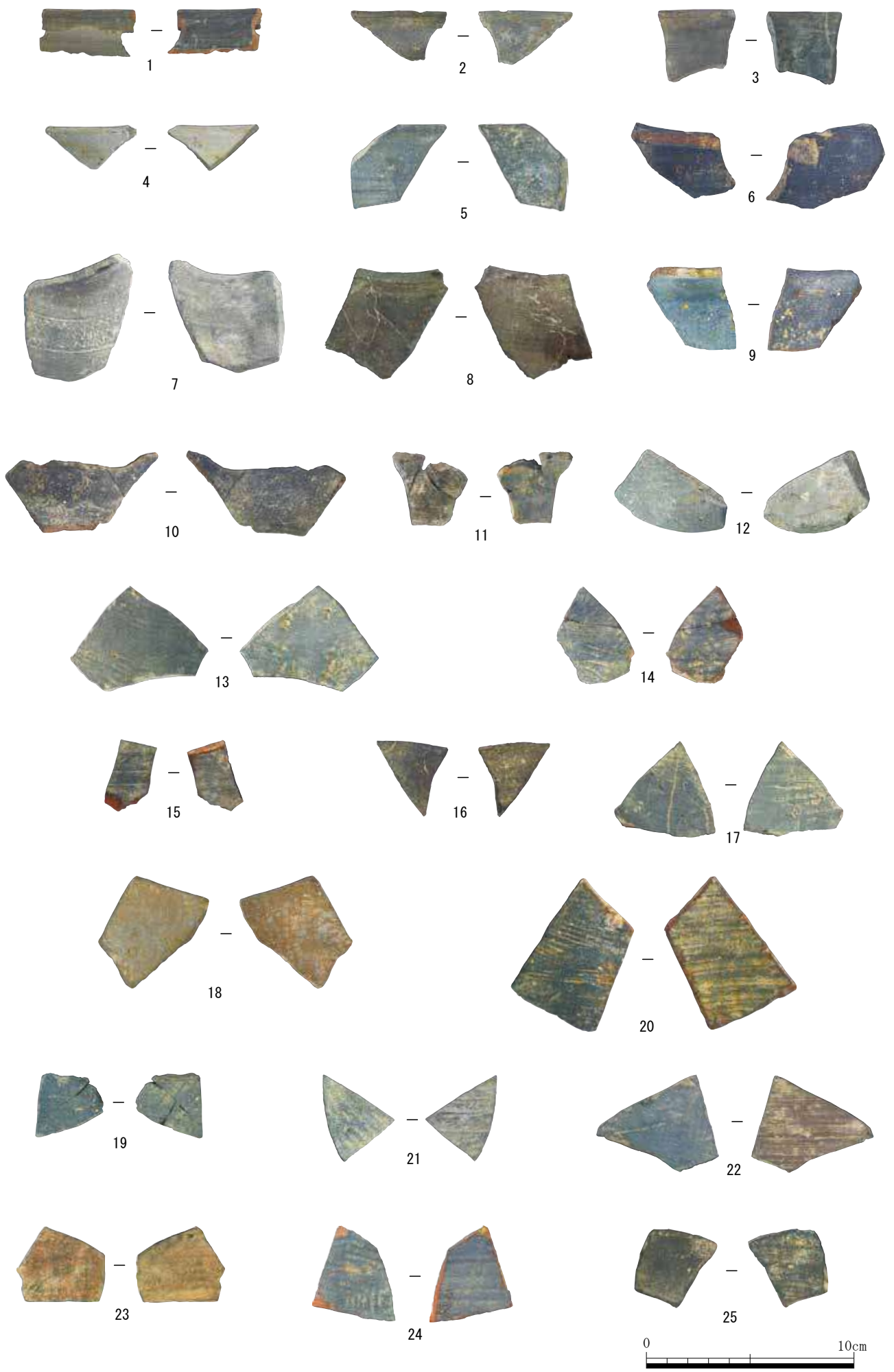
註 2：照屋善義 2000 『沖縄の陶器—技術と科学—』

第71表-1 カムイヤキ 観察一覧

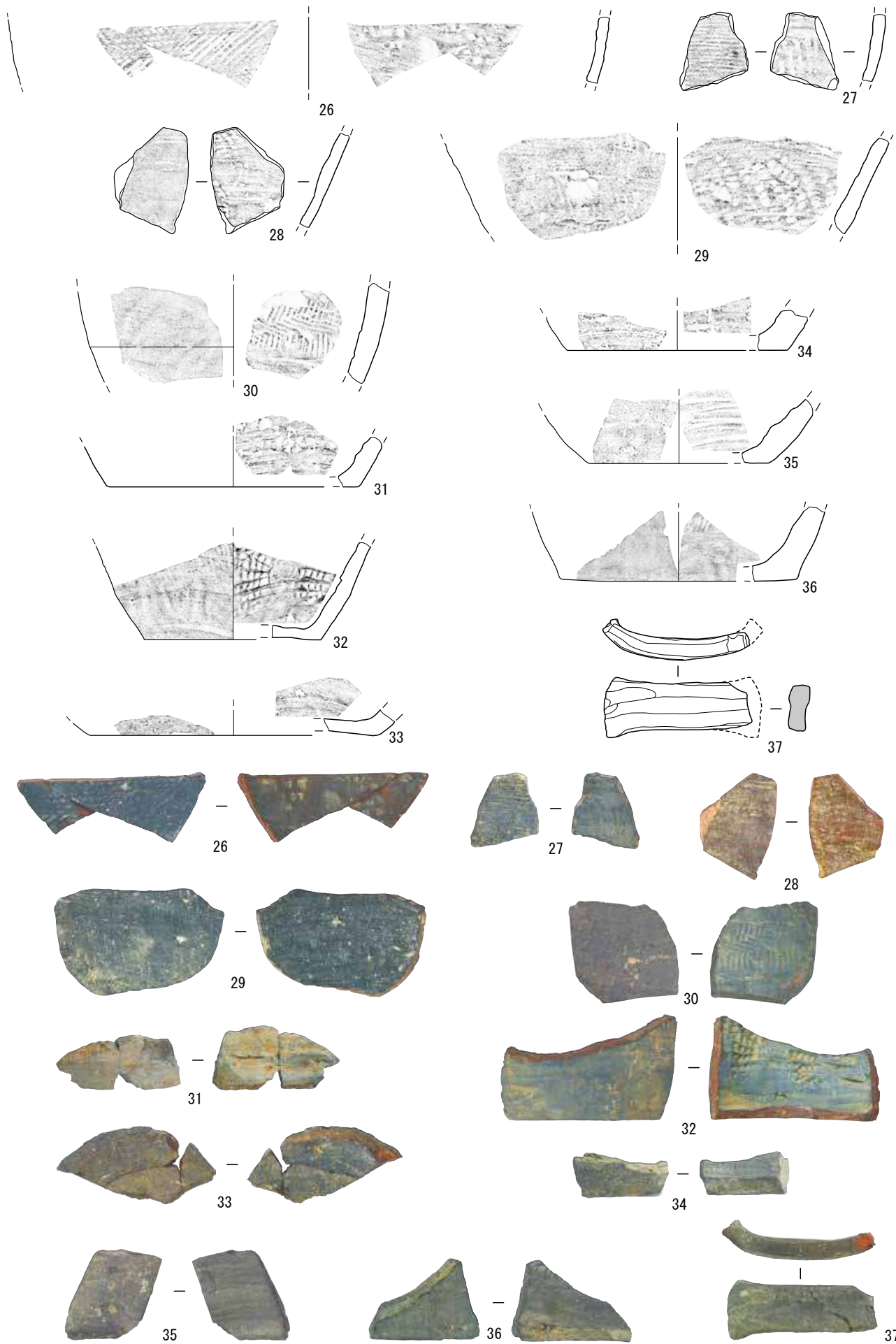
第131図・図版92	図番号	部位	分類(叩)	口径底径(cm)	厚(mm)	器形・文様	器面調整	素地・焼成・混和材	器色	地区・グリット・層・遺構・台帳番号
第131図・図版92	1	口	V類	14.4	5	口縁は外側に大きく開き外反する。口唇を三角状に肥厚させ端部に沈線を巡らしている。(新里I式c 12C前半)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗赤 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ R17 II 台 3093
	2			12.1	5	口縁は外側に大きく開き外反する。口唇を三角状に肥厚させ、端部に沈線を二条巡らしている。(新里I式c 12C前半)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗赤 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ T17 II S-35 台 1942
	3			10.6	6	長頸の外に僅かに開く外反口縁。口唇は丸く内面に窯印と考えられる「十」字文が描かれている。(新里VI式a14C前半)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：茶・黒・白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ B16 II 台 3139
	4			13.9	6	外に開く直口口縁。口唇の断面形態は四角状。(新里VI式c14C前半)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：明灰 裏：明灰	HA③ S17 II 台 1994
	5			8.5	6	僅かに開く外反口縁、長頸で比較的口径の小さい壺である。口唇は丸い。(新里VI式a14世紀前半)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② C19 II 祝殿 台 1644
	6	胴	V類	-	7	胴部から「く」の字状に屈曲する頸部片である。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：暗茶 裏：暗茶	HA③ A14 III下 S-11 台 4259
	7		VI類	-	7	肩の張った器形。頸部直下に二条の沈線文で区画した三条波線文を巡らしている。頸部片。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：灰 焼成：良好 混和材：白・黒・光(細)	表：灰 裏：灰	HA③ D9 I 台 1310
	8		VI類	-	9	肩の張った器形。頸部直下に沈線的一条波状文を巡らしている。頸部片。	表：ナデ 裏：ナデ・平行	素地：灰・茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：灰 裏：灰	HA② G4 II 名嘉座 台 1742
	9		V類	-	6	胴頸部は「く」の字状に屈曲、口縁に向かい外に開く。肩はやや張る。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：灰 焼成：良好 混和材：白石英(細)	表：暗赤 裏：灰	HA③ A15 II 台 1425
	10		V類	-	5	胴頸部は「く」の字状に屈曲。肩は張る。頸部片。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗赤 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA① M12 III 台 21
	11		V類	-	4	肩の張った小型壺が考えられる。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② F2 II 名嘉座 台 1680
	12		V類	-	9	肩が張り器壁は比較的厚め。	表：ナデ 裏：積痕指 圧痕ヘラ削	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：灰 裏：灰	HA③ E10 I 台 1380
	13		I類	-	5~10	肩部、表面に叩打による平坦面が認められ、器壁は均一ではない。	表：平行ナデ 裏：平行ナデ	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：明灰 裏：明灰	HA② T19 II 祝殿 台 529
	14		II類	-	4~7	肩部、表面に叩打による平坦面が認められ、内面に粘土紐の積痕が認められる。	表：平行綾杉 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② I 台 658
	15		VI類	-	5	肩部、二条の横位沈線。	表：ナデ 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ K18 II 台 2651
	16		VI類	-	4~5	表面に曲線が確認できるが小片のため波線文になるかは不明。	表：ナデ 裏：ヘラ削・ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ E10 II 台 2034
	17		VI類	-	7	有軸の波線文、軸から左右に波線が斜め30度の角度で伸びる。小破片のため詳細不明。	表：ナデ 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② B1 II上 祝殿 台 590
	18		II類	-	5~6	丸味のある胴上部片、内面に粘土積痕が認められる。	表：平行・ナデ 裏：格子・ナデ	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ H16 III 台 2374
	19		II類	-	5~6	丸味のある胴上部片。	表：平行・ナデ 裏：格子・ナデ	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：明灰 裏：明灰	HA④ P20 II 台 2892
	20		III類	-	5	丸味のある胴上部片。	表：平行・綾杉・ナデ 裏：ヘラ削り	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ O19 III 台 2865
	21	I類	-	3~4	丸味のある胴上部片。	表：平行・ナデ 裏：格子・ヘラ削り	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：明灰 裏：明灰	HA① O14 III 台 29	
	22	III類	-	7	丸味のある胴上部片。	表：平行・ナデ 裏：ヘラ削り	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：明茶	HA② C19 II 祝殿 台 1393	
	23	I類	-	3	丸味のある胴上部片、積痕が認められる。	表：平行・綾杉 裏：平行・ヘラ削り	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ I 台 4591	
	24	III類	-	7	丸味のある胴上部片。	表：綾杉 裏：ヘラ削り	素地：茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ B13 II S-20 台 2203	
	25	IV類	-	6~7	丸味のある胴上部片。	表：ナデ 裏：平行・ヘラ削り	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：暗灰 裏：暗茶	HA④ Q09-Q11 II 台 2900	
第132図・図版93	26	III類	-	-	胴下部、叩き調整が行き届き器壁は薄い。	表：平行・綾杉 裏：格子	素地：暗灰 焼成：良い 混和材：白・黒(細)	表：暗茶 裏：暗灰	HA③ S20 II 台 3171	
	27	I類	-	5~6	胴下部、叩き調整が行き届き器壁は薄い。	表：平行 裏：綾杉・ナデ	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白・黒(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ G17 II 台 2278	
	28	I類	-	0.6	胴下部、叩き調整が行き届き器壁は薄い。	表：平行・ナデ 裏：平行・ナデ	素地：暗赤 焼成：良好 混和材：白(微)	表：赤 裏：赤	HA⑥ O15 II 0010SD 台 140	
	29	I類	-	7.5	胴下部、器壁は比較的厚めで凹凸が見られる。	表：平行・ナデ 裏：平行・ヘラ削り	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白・黒・光(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ O6-L06 台 2528	
	30	IV類	-	10	胴下部、器壁は比較的厚め。	表：ナデ 裏：平行・綾杉	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ E10 II 台 2037	
	31	底	III類	-	11.9	底面からくびれ気味に立ち上がる。内面に積み痕が確認できる。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：明灰 裏：明灰	HA② G1 II 瓦屋 台 1037



第131図 カミイヤキ 1



図版 92 カムイヤキ 1



第 132 図・図版 93 カムイヤキ 2

0 10cm

第71表-2 カムイヤキ 観察一覽

第図版	図番号	部位	分類(叩)	口径底径(cm)	厚(mm)	器形・文様	器面調整	素地・焼成・混和材	器色	地区・グリッド・層・遺構・台帳番号
第132図・図版93	32	底	Ⅱ類	— 8.4	6~9	上げ底の平底、直線的に開き立ち上がる。外底面から1~2cm程の高さから積み痕が現れる。器肉は中央がやや厚く縁に向かい薄くなる。内底立ち上がりの内側は窪む。	表：平行・ナデ 裏：格子・ナデ	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② J6 Ⅱ 名嘉座 台2632
	33		V類	— 13.6	6~10	外底及び底部側面は研磨仕上げ、外底面は上げ底。	表：平行・ナデ 裏：ヘラ削り	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② G20 Ⅱ 瓦屋 台935
	34		V類	— 10.4	8~14	円盤にした粘土に粘土紐を積み上げている。底面扁平。	表：ヘラ削り 裏：ヘラ削り	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：明灰 裏：明灰	HA③ A15 Ⅱ 台1434
	35		V類	—	11	平底、外側面はヘラ削りし底面から2cm高に積み痕、内面はヘラ削りで圧痕を残さない外底面扁平。	表：ナデ 裏：ヘラ削り	素地：暗灰・茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ D11 Ⅱ 台3248
	36		IV類	—	3.5	平底で腰部が僅かに扶れる。胴部は逆「八」の字状に外に開き立つ。外底面から2.5cm程の高さから積み痕が現れる底面の器肉は薄くなる。	表：ナデ 裏：平行・ナデ	素地：灰・暗茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：灰 裏：灰	HA③ A14 Ⅲ下 S-11 台116
	37	把手	—	—	9	横位の長方形把手、巾2.2cmで断面形態は方形。貼付部に向かい薄く広がる平面の横軸の中央に溝状の凹みを設けている。内面は横の溝を一方に寄せている。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：赤 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA① L14 Ⅲ 台24

第72表 カムイヤキ 出土量

地区	層	遺構	部位年代分類	口縁部			胴部						把手	底部	合計
				11c後		14c前	11c~14c								
				I式	VI式	VI式	I類	II類	III類	IV類	V類	VI類			
HA③	I						2		3	2	2	1		3	13
	II	遺構	1		1	2	1	1	1	4				2	13
	II		1	3		8	7	7	10	7	1		3	47	
	III	遺構				1				1				2	
	III下	遺構				1	1		1	3			2	8	
	小計		2	3	1	14	9	11	14	17	2		10	83	
HA②	I													1	
	II			1		1		6	1	2	1		3	15	
	II上					2	1				1		4		
	小計			1		3	2	6	1	2	2		3	20	
HA④	I					1								1	
	II					2	2	1	2			2		9	
	小計					3	2	1	2		2		10		
HA①	I					1								1	
	III					1					1	1		3	
	III下	遺構						1					1	1	
	小計					2	1				1	1	5		
合計				2	4	1	22	14	18	17	19	7	1	13	118
部位別計				7			97						1	13	



第133図 カムイヤキ 平面分布



## (16) 土器

貝塚時代後期、グスク時代、その他先島系と思われる土器が総数 4069 点出土し、第 73 表に全体の出土量を示した。小破片が多く、2.5cm以下は分類から除外し、2913 点を対象とした。時期別には貝塚時代後期の土器が最も多く、次にグスク時代の土器と続く。地区別には HA ③出土が主で、中でも貝塚時代後期の土器が約 7 割を占める。次に多い HA ②では、貝塚時代後期土器とグスク土器がほぼ半々の出土である。層位的には HA ②・③はⅡ層出土、HA ④はⅡ・Ⅲ層から同数の出土、HA ①はⅢ層出土が多いなど、地区ごとに若干の違いが見られた。HA ②・③ではグスク時代・貝塚時代後期の遺物の大半がⅡ層出土であることから、攪乱を受けているものと思われる。以下、時期別に記述する。

第 73 表 土器全体出土量

地区	層	後期系			グスク			先島系			不明			分類不可		合計
		口	胴	底	口(頸)	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	胴	底	
HA ③	I	11	108	17	3	20	5	1	4	2	1	2		66		240
	II	64	666	127	20	237	30	3	28	4	2	34	4	405	1	1625
	III	5	70	12	3	18	2		11	2		4		97		224
	IV	1	15	3		7			2			1		7		36
	不明			8										9		17
	小計	81	867	159	26	282	37	4	45	8	3	41	4	584	1	2142
HA ②	I	4	26	1	4	10			1			3		3		52
	II	36	338	37	21	265	38	1	14	1		34	3	304		1092
	III	6	37	2	5	28	4	1	2			2		45		132
	IV	2	5	3	1	2	1							5		19
	不明								1							1
	小計	48	406	43	31	305	43	2	18	1		39	3	357		1296
HA ④	I	1	3			1								4		9
	II	2	59	9		31	1		16	2		1	1	42		164
	III	7	49	16	2	50	4	6	14	1		1		76		226
	IV	2	19	2		2						1		5		31
	小計	12	130	27	2	84	5	6	30	3		3	1	127		430
	HA ①	I		2			1								12	
II		1	1											1		3
III		11	28	7	5	31	2				1	16		62		163
IV		1	1			1								4		7
小計		13	32	7	5	33	2				1	16		79		188
不明		1	1	1		1						1		8		13
合計	155	1436	237	64	705	87	12	93	12	4	100	8	1155	1	4069	
分類別計	1828			856			117			112			1156			

### 1. 貝塚時代後期 (第 137 図 1 ~ 第 139 図 93)

貝塚時代後期の土器が 1828 点得られ、分類した土器の 62.8%の割合を占める。第 135 図に示した平面分布を見ると、遺跡のほぼ全域で出土しており、その中でも HA ③出土が最も多く、特に S-640 (自然流路) を境に北側での出土が目立つ。その他、HA ②祝女殿内からの出土も多く、隣接する平安原 B 遺跡 (2015) HB ②口で出土したくびれ平底との関連性が考えられる。層位的には貝塚時代後期の砂層と考えられるⅣ層からの出土は少なく、攪乱からの出土が殆どであるが、平面分布ではまとまりが見られた。僅かに尖底系の土器も出土するが、大半はくびれ平底系の土器で、貝塚時代後期後半の時期に相当する。第 74・76 表に観察一覧をまとめ、口縁部・底部の順に記述する。胴部は 1436 点と多量に得られたが、小破片が多く、主なものは口縁部の項で記述した。その他の胴部は、口縁部の出土量からその大半がくびれ平底系に属すると思われる。割愛した。

#### <口縁部>

口縁部は 155 点出土し、Ⅰ～Ⅲ類に分けた。胴部の一部もここで記述する。

#### Ⅰ類 (浜屋原式土器)

Ⅰ類は僅か 4 点出土し、図 1～3 に口縁部 3 点を図示した。3 点とも鉢形で口縁部は外反する。胎土や混和材もほぼ同じである。出土地は HA ① L15、HA ② R 7・E20 とばらつく。

#### Ⅱ類 (大当原式土器)

Ⅱ類も僅か 3 点の出土で、口縁部 2 点・胴部 1 点を図 4～6 に図示した。いずれも薄手で粘土積み痕が明瞭である。図 4 は HA ② T6、図 5 は HA ② T 7 (SK277) と出土地に近いが、層位は前者がⅡ層、後者はⅢ層の遺構出土である。

#### Ⅲ類 (くびれ平底系土器)

Ⅲ類はくびれ平底系の口縁部で、アカジャンガー式土器とフェンサ下層式土器をまとめたものである。貝塚時代後期土器の主体となるもので、無文・泥質が多く、有文は少量であることから、殆どはフェンサ下層式土器と思われる。遺跡全体から出土するが、中でも HA ③ S17 が最も多く、その周辺のグリッドからも出土が目立つ。口縁部は 132 点出土し、

鉢・甕・壺形が得られた。以下、器種別に記述する。

**鉢形**：最も多く出土し、図7～21に図示した。いずれも逆「ハ」字状に開くが、図7は直状、図8～11・14は外反が弱い。図12・13は口唇部がやや玉縁状を呈し、図15～18は口縁部上端の外反が強い。有文の口縁部は少なく、図7の口唇部に豆粒大の鞍状凸帯文、図9の口唇部には刺突文が施される。図14の外面には粘土の剥がれ痕、図15の内面は粘土積み痕が明瞭に残る。図10・11のように口縁部が緩やかな波状を呈し、内面の刷毛目が明瞭なものもある。図19～21は胴部で、鉢形と思われる。図19・20とも凸帯文が貼付され、前者は薄く幅が1cm前後、後者は幅約4cmの細い凸帯文で、内面には刷毛目が残る。図21は粘土帯が約4cm幅と一定で、積み痕が明瞭である。

**甕形**：少量が得られ、図22～27に図示した。図25は頸部に凸帯文を貼付し、圍繞すると思われる。甕形も大部分は内面の刷毛目が明瞭に残る。図24以外は口径が15.0cm以下と小型で、図26・27はより小さい。

**壺形**：少量の出土で、図28～31に図示した。図28は直状の口縁部を呈するもので、無文である。図29～31は有文の壺で、前二者は頸部、後者は頸～胴部が残存する。図29は刺突文の施された凸帯文を横位に貼付し、その後に縦位に貼付する。図30は文様帯を区画する横位の沈線文を施し、その上部に逆「U」字状の凸帯文を貼付する。図31は頸部から胴部にかけて幅4mmの細い凸帯文を縦位に貼付する。頸部は角を持ち、残存する凸帯文の間隔と推定胴径などから6本の凸帯文、上面形は方形が想定される。かなり精製された胎土で、器面調整も丁寧である。

**不明**：分類が不明なものを図32～37に図示した。図32・35は沈線文、図36は凸帯文が施される。図33は厚手で口縁部は外反する。図34は口縁部が玉縁状に肥厚し、胎土等から貝塚時代中期の可能性も考えられる。図37は形状から壺としたもので、胴部の張り出しが強い。個々の詳細は第74表の観察一覧に記述した。

第74表 後期土器（口縁部・胴部）観察一覧

第図版	図番号	分類	器種	部位	形状・特徴・文様	口径(cm)	胎土	粒度含量	石英(光黒)	赤色粒	砂粒	他	器色 外面・内面	器面調整 外面・内面	地区・ケリド・層 遺構・台帳(取)番号		
第137図・図版94	1	I	鉢	口	外反(逆「ハ」字状)・口唇舌	14.4	砂強	細・多	◎◎	△			内外:茶黄色	外:テ、内:指頭痕顕著	HA① L15 III 台19		
	2				外反(逆「ハ」字状)・口唇平	—	砂強	細・多	◎◎	△			外:茶、内:淡茶褐色	外:テ、内:指頭痕顕著	HA② R7 I 台2540		
	3				外反(逆「ハ」字状)・口唇平	—	砂強	細・多	◎◎	△			内外:茶褐色	外:テ、内:指頭痕顕著	HA② E20 II 台599		
	4				直・口唇舌・粘土積み痕隆起	—	泥砂	細・少	△	△△			内外:赤褐色	内外:指頭痕・テ	HA② T6 II 台2482		
	5	II	鉢	口	直・口唇舌・粘土積み痕隆起	—	泥砂	細・少	△	△			内外:茶褐色	内外:指頭痕・テ	HA② T7 III SK277 台2198		
	6				胴	粘土積み痕隆起	—	泥砂	細・中	○	○			内外:赤褐色	内外:指頭痕・テ	HA④ C17 IV 台1977	
	7	III	鉢	口	直(逆「ハ」字状)・口唇舌で鞍状凸帯文(小)	—	泥	細・少	△	△△			外:暗、内:淡橙褐色	内外:指頭痕・テ	HA③ T8 II 台3404		
	8				外反(逆「ハ」字状)・口唇舌	—	泥	細・少	△	△△			外:暗茶、内:橙褐色	外:指頭痕、内:刷毛目	HA① L14 III 台186		
	9				外反(逆「ハ」字状)・口唇平 外-沈線文・口唇・刺突文	—	砂	細・少	△	△△			内外:灰茶色	内外:テ	HA③ T5 II 台1763		
	10				外反(逆「ハ」字状)・口唇丸・器厚不揃い	—	泥	細・少		△△			外:橙褐、内:灰褐色	外:指頭痕、内:刷毛目	HA③ A13 II 台2471		
	11				外反(逆「ハ」字状)・口唇丸	20.6	泥	中・中		○◎	粘板△			外:暗茶、内:橙褐色	外:指頭痕、内:刷毛目	HA③ A14 II 台1138	
	12				外反(逆「ハ」字状)・口唇玉縁	19.4	泥	細・少			△△			内外:赤褐色	外:指頭痕、内:刷毛目	HA③ R16 II 台1931	
	13				外反(逆「ハ」字状)・口唇玉縁	23.0	砂泥	細・少	△	△	△			外:茶褐、内:赤褐色	内外:指頭痕・テ	HA③ S16 II 台2318	
	14				外反(逆「ハ」字状)・口唇舌・外-粘土剥がれ	—	泥	中・中	△		△○	黒○		内外:淡橙灰色	外:削り、内:テ・指頭痕	HA② M7 II 台3268	
	15				外反(逆「ハ」字状)・口唇舌・内-積み痕明瞭	—	砂	細・少	△		△			内外:赤褐色	内外:指頭痕・テ	HA④ E13 SP958 III 台3904	
	16				外反(逆「ハ」字状)・口唇玉縁	—	泥	細・少	△		△△			内外:淡橙褐色	内外:指頭痕	HA④ L19 SP501 III 台3633	
	17				外反(逆「ハ」字状)・口唇丸・胴部若干張る	—	泥	細・少	△		△△			外:赤褐、内:橙褐色	内外:指頭痕・テ	HA④ D20 II 台2012	
	18				外反(逆「ハ」字状)・口唇平・胴部若干張る	—	泥	中・中			○△			内外:茶褐色	内外:指頭痕	HA④ D・E20 IV 台4616	
	19	胴	外-凸帯文(薄い・幅10～13mm)	—	泥	粗・中		○◎	△			内外:茶褐色	内外:指頭痕・テ	HA② D2 II 台1370			
20	外-凸帯文(紐状・幅4mm)		—	砂	細・中		○	○			内外:淡茶褐色	内外:テ	HA② H20 IV 取193				
21	外反(逆「ハ」字状)・粘土帯積み痕明瞭(約4cm幅)・最大胴径23.2cm		—	砂泥	中・中	△		○△			外:暗茶、内:茶褐色	外:テ・内:刷毛目	HA③ A12 II 台2335				
22	甕	口	外反(頸部縮まる・胴部張る)・口唇平	14.8	泥	細・少	△		△	黒△		内外:暗褐色	内外:指頭痕・テ	HA② C2 I 台1960			
23			外反(頸部縮まる)・口唇丸	12.0	砂泥	細・少	△		△△			内外:茶褐色	内外:テ・指頭痕	HA① M14 III 台182			
24			やや外反(頸部縮まる)・口唇丸	29.2	泥	細・少	△		△			外:橙褐、内:灰褐色	外:指頭痕、内:刷毛目	HA③ T12 II 台2317			
25			外反・口唇舌・外-凸帯文(幅12mm・無文)	—	泥	細・少	△		△△			内外:暗茶褐色	内外:指頭痕・テ	HA③ C8 I 台1284			
26			外反(頸部縮まる・胴部やや張る)・口唇舌	12.0	砂泥	細・少	△		△			内外:茶褐色	外:指頭痕、内:刷毛目	HA③ E14 II 台3097 HA③ E11-14 II 台1497			
27			外反(頸部縮まる)・口唇平	12.1	泥	中・少			△	白△		外:橙灰、内:灰褐色	内外:テ	HA② H20 IV 取209			
28			口	直・テ肩・口唇平	5.4	泥	細・少	△		△			外:暗茶、内:淡茶褐色	内外:指頭痕・テ	HA③ T11 I 台2541		
29			頸	外-凸帯文が横+縦位(幅7mm・刺突文)	6.2(頸)	砂	細・少	△		△			内外:淡赤褐色	外:テ、内:テ	HA② A1 II 台4117		
30	壺	頸	外-横位沈線+逆「U」字凸帯文(幅6mm・刺突文)	6.2(頸)	砂泥	細・中		△△				内外:赤褐色	内外:テ	HA③ D10 II 台625			
31			頸部くびれ・肩部テ肩・胴部張り弱・外-縦位に細凸帯文(本数不明)・口縁は方形形状?	4.2(頸) 13.6(胴)	泥	細・少	△		△			外:茶灰、内:赤茶褐色	外:テ	HA② E20 II 上 台707.1497			
32	第138図・図版94	鉢	口	外反(逆「ハ」字状)・外-曲沈線文・摩耗	—	砂	中・中	○	△△			外:暗茶、内:赤褐色	内外:テ	HA② T1 II 台540			
33				外反強(口唇破損)・厚手・摩耗	—	砂	細・中		○				外:茶褐、内:赤褐色	不明(摩耗)	HA① M16 III下 00255D 台16		
34				外反(口唇若干肥厚)・厚手	—	砂	中・多	◎		○			内外:赤褐色	内外:テ	HA③ B16 II 台3245		
35				外-縦・横・斜位・弧状の沈線文	—	砂	粗・中	◎		◎			内外:茶黄褐色	外:テ、内:指頭痕	HA③ S5-T5 II 台1926		
36				外-凸帯文(幅7mm・無文)	—	砂	中・中	△		△○			外:暗茶、内:橙褐色	外:テ、内:指頭痕	HA④ D19 II 台2000		
37				壺	胴	胴部張る・厚手	—	—	砂	粗・多	○	△○	○	灰粒	内外:黄褐色	内外:テ	HA① M13 III 台37 HA① L13 III 台28

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

< 底部 >

総数 237 点が得られた。尖底・乳房状尖底・丸底・平底・くびれ平底が出土し、第 134 図に分類別出土量を円グラフで示した。貝塚時代後期前半の尖底や乳房状尖底は少なく、後半のくびれ平底が 91% を占め、口縁部の出土状況ともほぼ一致する。その他、底厚がより厚い杯？と思われる底部やミニチュア土器の底部も 1 点ずつ出土した。第 135 図の平面分布を見ると遺跡のほぼ全域から出土し、尖底や乳房状尖底は口縁部の I・II 類、くびれ平底は口縁部の III 類の底部が想定される。第 76 表に個々の観察一覧を示した。以下、順に記述する。

尖底

尖底は僅か 6 点の出土で、4 点を図示した。形状の違いにより a：外底が尖るもの（図 38）、b：丸を呈するもの（図 39）、c：外底が平らなもの（図 40・41）に分類される。

乳房状尖底

乳房状尖底は 10 点と少なく、図 42～48 に 7 点を図示した。出土数は少ないが、様々な形状が見られ a～c に分類される。a は乳頭部が小振りで低く、b は乳頭部が中振りで低く、c は乳頭部が大振りで高い。a は図 42 に 1 点、b は図 43～45 に 3 点、c は図 46～48 に 3 点を図示した。図 46 は底厚がより厚く、図 48 は乳頭部がより大きい。

丸底

丸底は 1 点のみ得られ、図 49 に図示した。若干くびれて丸みを帯びながら立ち上がる。

平底

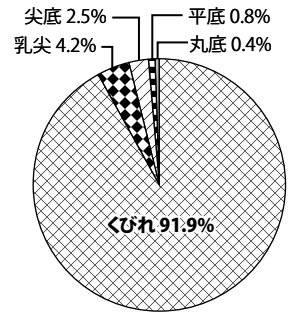
平底は僅か 2 点の出土で、図 50 に 1 点を図示した。薄手で堅致である。

くびれ平底

くびれ平底は 216 点と最も多く得られ、図 51～91 に 41 点を図示した。出土数が多いことから底厚を中心にくびれの強弱を組み合わせて以下のように分類（第 75 表）を行った。

底厚が厚い（1.4cm 以上）ものは 2 種に分け、くびれが弱いものは a、強いものは b とした。a は図 51～60 に 10 点、b は図 61～63 に 3 点を図示した。胎土は a・b とも砂質・砂泥質が多い。大半は立ち上がりの角がやや丸みを呈するが、図 53・54 はシャープである。図 58 の外底は薄い粘土を貼付し、やや丸みを呈する。

底厚が薄い（1.2cm 以下）ものも 2 種に分け、くびれが弱いものは c、強いものは d とした。c は図 64～81 に 18 点、d は図 82～91 に 10 点を図示した。図 80・81 の 2 点は外底の立ち上がり部に細かい打割痕が見られ、色調も他と異なることから二次加工の可能性が考えられる。図 91 の外底には楕円状の粘土が 5 カ所に貼付され、煤が付着している。胎



第 134 図 底部分類別出土量

第 75 表 くびれ平底 底径・底厚の関係 (cm)

分類	底厚	底径					不明	計
		4.0 以下	4.1 } 5.0	5.1 } 6.0	6.1 } 7.0	7.0 以上		
厚手 (a・b)	2.0 以上	3	3	1			7	
	1.4 ~ 1.9	5	13	17	4	3	42	
薄手 (c・d)	1.0 ~ 1.2	5	4	28	10	7	4	58
	0.6 ~ 0.9	5	11	23	17	15	5	76
	0.5 以下	1	3	4	2	4	3	17
	不明			7			9	16
合計		19	34	80	33	26	24	216



第 135 図 後期土器 平面分布

第76表 後期土器（底部）観察一覧

第図版	図番号	分類	形状	底径 (cm)	底厚 (cm)	胎土	粒度含量	石英	光黒	赤色粒	白色粒	砂粒	他	器色 外面・内面	器面調整 外面・内面	地区・ケルト・層 遺構・台帳(取)番号	
第138 図・図版 95	38	尖底	a 外底が尖る	—	1.2	砂	中・少	△			△			内外: 灰褐色	内外: 指頭痕・ $\nabla$ 打	HA③ S16 II 台 2318	
	39		b 外底が丸い	—	1.8	砂	中・多	○		△	◎			外: 赤褐、内: 暗褐色	不明(小破片)	HA① M14 III下 0024SD 台 91	
	40		c 外底が平ら(底径が3cm以下)	2.0	1.0	砂泥	細・少	△			△			内外: 茶褐色	内外: 打	HA② T8 II 台 879	
	41		c 外底が平ら(底径が3cm以下)	2.8	1.0	砂	細・中			○		黒○		内外: 橙褐色	内外: 打	HA③ T19 II 台 3177	
	42	乳房状尖底	a 乳頭部小・低い・外底平ら	1.8	1.0	砂泥	中・多	△			◎	△	灰△	外: 赤褐、内: 茶褐色	内外: 指頭痕・打	HA③ T7 II 台 3297	
	43		乳頭部中・低い・外底平ら	2.5	2.0	砂	中・中	○				△		内外: 赤褐色	内外: 指頭痕・打	HA② S6 II 取 169	
	44		b 乳頭部中・低い・外底上げ底	乳頭部中・低い・外底上げ底	2.9	1.2	砂	細・少	△				△		外: 赤褐、内: 茶褐色	内外: 指頭痕・打	HA④ L20 III SP1929 台 4429
	45			乳頭部中・低い・外底平ら	2.8	1.1	砂	細・中	○				△		外: 赤褐、内: 暗褐色	内外: 指頭痕・打	HA④ H10 IV 台 2336
	46		c 乳頭部大・高い・外底やや丸い	乳頭部大・高い・外底やや丸い	3.4	2.5	砂	中・少	△				△		外: 橙褐、内: 暗褐色	外: 指頭痕・打 内: $\nabla$ 打	HA③ R16 II 台 928
	47			乳頭部大・高い・外底丸い	3.0	2.0	砂泥	細・少	△			△	△		外: 灰茶、内: 茶褐色	外: 指頭痕、内: 打	HA③ B14 II S-28 台 2308
48		c 乳頭部大・やや高い・外底丸い	4.0	1.8	砂	中・中	○			○	△		内外: 赤褐色	外: 指頭痕、内: 打	HA② S4 I 台 2546		
49	丸底	— 外底やや丸み	5.6	1.1	砂	粗・多	◎				◎		内外: 茶褐色	外: 打、内: 不明	HA④ G15 III 台 2269		
50	平底	— 外底平・立ち上がり角	5.8	0.5	泥砂	中・中	○				○		内外: 茶褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA④ G15 III 台 2267		
第139 図・図版 96	51	くびれ 平底	くびれ弱・底厚が厚い	4.4	1.6	砂	中・多	◎				○		外: 淡茶、内: 灰茶色	外: 指頭痕、内: 打	HA④ C17 IV 台 1977	
	52		くびれ弱・底厚が厚い	5.0	1.7	泥砂	細・少	△				△		内外: 茶褐、内: 赤褐色	内外: 指頭痕・打	HA④ F12 III SP807 台 3803	
	53		くびれ弱・底厚が厚い	5.0	2.0	砂泥	細・少	△					黒△	内外: 赤褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA③ D10 I 台 601	
	54		くびれ弱・底厚が厚い	4.5	1.5	砂	細・中	○					△		外: 赤褐、内: 灰褐色	外: 指頭痕・打 内: $\nabla$ 打	HA③ F18 II S-10 台 2518
	55		くびれ弱・底厚が厚い	5.0	1.8	砂	中・中	△	△				○	茶△	外: 赤褐、内: 暗灰色	外: 打、内: 指頭痕・打	HA③ C6 II 台 1334
	56		a くびれ弱・底厚が厚い	5.0	1.5	砂	細・少	△					△		外: 茶褐、内: 茶褐色	外: 指頭痕・打、内: 刷毛目	HA③ A14 II 台 1423
	57		くびれ弱・底厚が厚い	5.4	2.0	砂	細・中	○	△	○			△	光△	外: 橙褐、内: 暗褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA③ A7 III S-328 台 2767
	58		くびれ弱・底厚が厚い	5.4	1.5	泥砂	細・少	△					△		外: 灰褐、内: 橙褐色	内外: 指頭痕・打	HA② H20 IV 取 192
	59		くびれ弱・底厚が厚い	6.6	1.7	砂	細・少						△	粘板 △	内外: 黄茶色	外: 指頭痕、内: 打丁寧	HA② T2 II 台 408
	60		くびれ弱・底厚が厚い	7.0	1.8	砂	細・中	△	△	△			○		内外: 茶褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA② G5 II 台 973
	61		くびれ強・底厚が厚い	4.8	1.5	砂泥	細・少	△					△		外: 灰褐、内: 茶褐色	外: 指頭痕・打、内: 刷毛目	HA② A19 II 上 台 1530
	62		b くびれ強・底厚が厚い	くびれ強・底厚が厚い	5.2	1.8	砂泥	細・粗少	△		△		△	黒△	外: 淡赤、内: 黄茶色	内外: 指頭痕・打	HA③ E10 II 台 742 HA③ D10 I 台 601
	63			くびれ強・底厚が厚い	5.3	1.8	砂	細・少	△	△	△		△		内外: 茶褐色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA③ S20 II 台 1166
	64		くびれ弱・底面楕円状・底厚薄い	(4.8) (5.3)	1.0	砂	細・少	△				○	△		内外: 暗褐色	外: 指頭痕、内: 打	HA② L6 II 取 12
	65		くびれ弱・外底中央上げ底・底厚薄い	4.8	0.9	砂泥	中・少	△					△		内外: 茶褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA① L15 III下 0025SD 台 130
	66		くびれ弱・底厚やや厚い	5.1	1.2	泥砂	細・少	△					△		外: 茶褐、内: 灰褐色	内外: 刷毛目	HA④ F15-17 III 台 4566
	67		くびれ弱・内底雑・底厚やや厚い	6.0	1.2	砂泥	細・少	△				△	△		外: 淡茶、内: 灰茶色	内外: 指頭痕・打	HA③ C13 II 台 1157
	68		くびれ弱・底厚薄い	5.8	0.7	砂泥	中・中	△				○	△		内外: 茶褐色	内外: 打	HA④ H16 III 台 2369
	69		くびれ弱・底面楕円・底厚薄い	(4.8) (5.3)	0.9	砂泥	細・少	△					△		内外: 茶褐色	外: 指頭痕、内: 刷毛目 明瞭	HA③ A11 II 台 2605
	70		くびれ弱・外底上げ底・底厚やや厚い	5.6	1.2	砂泥	細・少	△				△	△		内外: 赤褐色	外: 指頭痕・打 内: 指頭痕	HA② C19 II 台 1656
	71		くびれ弱・底面楕円・底厚薄い	(5.5) (6.0)	1.0	砂	中・中	△				○	○		内外: 茶褐色	外: $\nabla$ 打、内: 打	HA④ L20 II 台 2734
	72		c くびれ弱・底厚薄い	6.0	—	泥砂	細・少						△	茶△	外: 橙褐、内: 茶黄色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA④ D19 II 台 2004
	73		くびれ弱・外底中央上げ底・底厚薄い	6.0	0.9	泥	細・少	△				△	△		外: 灰褐、内: 淡褐色	外: 指頭痕、内: 打	HA③ B10 I S-37 台 1952
	74		くびれ弱・底厚薄い	6.3	0.8	砂泥	細・少	△				△	△		内外: 淡茶色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA② D3 III SK094 台 2277
	75		くびれ弱・底厚薄い	6.4	0.7	砂泥	細・少	△				△	△		外: 橙、内: 灰茶褐色	内外: 打	HA④ M・N19 III SK15 台 3242
	76		くびれ弱・外底煤付着・底厚薄い	6.8	0.9	砂	細・多	△		◎	◎		△		外: 桃褐、内: 灰茶色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA② T2 II 台 408
	77		くびれ弱・底厚やや厚い	7.0	1.1	泥	中・中	○				○			内外: 橙褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA③ A18 II 台 1419
	78		くびれ弱・中央上げ底・底厚やや厚い	7.2	1.1	砂	中・多	△	△			○	○	黒△	内外: 赤褐色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA④ I15 III SP1811 台 4375
79	くびれ弱・外底上げ底・底厚薄い	7.8	0.8	泥	中・多	○				○	△	◎	長石 △	外: 赤褐、内: 淡赤色	外: 指頭痕、内: 指頭痕・打	HA③ G16 IV 台 2184	
80	くびれ弱・底厚やや厚い・立ち上がり打割(二次加工?)	5.4	1.2	砂	細・多	○				◎	○		内外: 淡褐色	外: 打、内: 指頭痕・打	HA③ G4 II 台 1404		
81	くびれ弱・楕円・底厚薄い・立ち上がり打割(二次加工?)	6.4	1.0	砂	細・中	△				○	○		外: 茶褐、内: 暗茶色	外: 打・打割、内: 打	HA③ D8 I 台 602		
82	くびれ強・底面楕円・底厚薄い・摩耗	(5.2) (4.8)	1.0	泥	細・少	△					△		外: 赤褐、内: 灰褐色	外: 指頭痕、内: 打	HA④ E10 II SD52 台 3218-6		
83	くびれ弱・底厚やや厚い	4.4	1.1	砂	中・多	○					△	黒◎	内外: 赤褐色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA③ F10 II 台 2993		
84	くびれ強・底厚薄い	5.2	1.0	泥砂	細・少	△					△		内外: 黄茶色	内外: 指頭痕・打	HA② I3 IV 取 104		
85	くびれ強・外底打割?底厚やや厚い	6.0	1.1	砂泥	細・少	△					△		外: 赤褐、内: 灰褐色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA② A2 II 台 480		
86	くびれ強・外底中央上げ底・底厚薄い	6.4	0.8	泥	細・少	△					△	黒△	外: 灰赤、内: 灰褐色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA③ A11 II 台 3383		
87	くびれ強・底厚薄い	6.4	1.0	砂	細・多	◎					○		内外: 淡赤色	外: 指頭痕・打、内: 打	HA③ S20 II 台 1166		
88	くびれ強・底厚薄い	7.2	1.0	砂	細・少	△					△	黒△	内外: 灰赤色	内外: 指頭痕・打	HA② D1 II 台 1371		
89	くびれ強・底厚薄い	7.4	0.9	泥砂	細・少	△	△				△	黒△	外: 茶褐、内: 灰褐色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA③ T7 II 台 2128		
90	くびれ強・底厚薄い	6.5	0.6	泥	細・少						△	粘板 △	外: 桃褐、内: 灰褐色	外: 指頭痕・打 内: 刷毛目	HA③ T10 II 台 1392		
91	くびれ強・底厚薄い・外底に楕円状の粘土貼付(5個)	7.8	0.5	泥	細・少	△					△		内外: 茶褐色	内外: 指頭痕・打	HA③ S20 II 台 3758		
92	—	— くびれ弱・底厚超厚い・有孔	4.0	4.6	砂泥	細・少	△				△	△		内外: 茶褐色	内外: 打	HA② T5 II 台 2592	
93	ミチユア	— くびれ弱・立ち上がり丸み・底厚薄い	3.2	0.8	砂	細・少	△				△			内外: 淡茶色	内外: 指頭痕・打	HA③ T14 III S-11 台 3519	

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

土はc・dとも砂質・砂泥質・泥質があり、後者が最も多く見られる。

第75表に底厚と底径の関係を示した。底厚の厚手・薄手共にくびれの強弱が見られることから、a・bを厚手、c・dを薄手としてまとめた。厚手は1.4～1.9cm、2.0cm以上、薄手は1.0～1.2cm、0.6～0.9cm、0.5cm以下の底厚に分けた。厚手が49点、薄手が151点と後者が70%も占め、くびれ平底の主体となる。底径は厚手・薄手とも5.1～6.0cmが80点と最も多い。詳細に見ると、厚手は底厚1.4～1.9cmが42点と圧倒的に多く、底径は4.1～6.0cmに収まるものが大半である。中には底厚が2.0cm以上のより厚手も見られ、底径は4.0～5.0cmと小型化する。薄手は底厚0.6～0.9cmが76点と多く、底径は5.1～6.0cmが主流となるが、4.1～7.1cm以上も多い。底厚1.0～1.2cmのものも底径は5.1～6.0cmが多く、次いで5.1～6.0cmと続く。全体的に厚手は底径が小さく、薄手は小～大サイズまで見られる。

#### その他

上記の分類より外れる2点を92・93に図示した。

図92は底径4cm、底厚が4.6cmとより厚い平底である。形状は坏が想定されるが、類例がなく不明である。外底より約1.5cm上の箇所に孔が見られ、貫通している。HA②T5Ⅱ層出土である。

図93はミニチュア土器である。底部は僅かにくびれ、胴部は余り張らない。口縁部は破損し、調整は丁寧である。HA③T14S11(石組遺構)Ⅱ層出土である。

## 2. グスク時代(第139図94～第141図162)

グスク時代の土器が総数856点出土し、分類した土器総数の29.4%の割合を占める(第73表)。HA②・③では貝塚時代後期の土器とグスク時代の土器が共にⅡ層出土、HA①ではいずれもⅢ層出土が多く見られた。胎土を見ると砂泥質や泥質が多く、白色粒を混和するものが殆どであるが、僅かに白色粒以外の混和材が見られるものもある。また、白色粒が細・中粒で少・中量(胎土分類：ハa)、粗粒で多量(胎土分類：ハb)に含む2タイプの胎土があるが、後者の一部は形状などの特徴からグスク土器の範疇より外し、先島系の土器へ含めた遺物もある。第136図の平面分布ではHA②G1で最も多く出土し、その周辺での出土も割と見られる。近くのHA②H5からグスク時代の人骨が出土する。次に出土量の多い箇所はHA③S17、HA②A20周辺である。グスク時代の土器と関連性の強いカムイヤキはHA③のA14辺りで多く出土し、HA②G20・1出土も見られ、グスクの土器と出土状況がほぼ一致する。古手の青磁・白磁もその南側でまとまりを見せる。第77表に胎土分類別出土量、第136図に平面分布、第78・79表に観察一覧を記す。口縁部から順に記述する。

#### <口縁部>

口縁部は頸部も合わせて64点が出土し、鍋・碗・甕・壺形の器種が得られた。胴部の胎土分類に合わせて見ると、Cハa(泥質・白色粒主体)、Bハa(砂泥質・白色粒主体)が殆どで、器厚は大半が5.1～8.0cmに収まる。以下、滑石混入多量、横耳などの特徴的な胴部もここに含めて器種別に記述する。

**鍋形**：29点が得られた。本遺跡出土の土器では最も多い器種で、a：多量の滑石混入、b：把手貼付、c：羽釜形、d：その他(把手無し)に細分して記述する。今回得られた鍋形は完形が無く全て破片で、dの中にはbが含まれる可能性も考えられる。1点のみ得られた碗形(図111)もここに含めた。

aは2点のみが出土し、図94・95に図示した。前者は口縁部で、外面に粘土を貼付し、若干膨らみを呈する箇所が見られる。後者は胴下部で、若干器厚が上下で異なる。滑石が多量に混入され、手触りが滑らかである。

bも出土量が少なく、8点を図示した。把手には縦長方形と横耳があり、前者は図96～100、後者は図101～103である。前者の図96は明瞭な縦長方形、図97・98はやや崩れた縦長方形、図99・100は方形が崩れて小さな略円形を呈する。大半が胎土に石英・砂粒を含み、図96・98は両面に滑石が少量塗布されている。後者の図101は口唇部と平行に小型の横耳が貼付される。白色粒を多量に含み、4mmと薄手である。図102・103の2点は大型の横耳把手で、胴部のみが得られた。前者は器厚が0.5cmと薄手、後者は0.8cmとやや厚手である。また、後者は粗い白色粒を多量含んでおり、先島系の土器Aと類似の胎土を呈するが、本町の後兼久原遺跡(2003)・宜野湾市の大山前門原第二遺跡(1999)等での出土例や、それらと形状が類似すること等からグスク土器に含めた。

cは図示した図104・105の2点のみが得られた。図104は口縁部上端から約2cm以下の箇所に貼付され、図105は前者に比べて若干幅狭の鏝である。

dは最も多く得られ、図106～115に10点を図示した。口唇部には舌状・角・丸があるが、内彎の強弱度との相関関係は見られない。胎土と混和材を見ると、砂泥質・泥質が多く見られ、白色粒を含むものが多い。図110の口縁部内面には煤が見られる。図111は推算口径が12.8cmと小さく、碗形と思われ、鍋以外の用途が考えられる。1点のみの出土

で、今回は鍋形の項で記述した。類例として糸数城跡（1991）・銘苅原遺跡（1997）がある。

**甕形**：16点の出土で、図116～118の3点を図示した。いずれも破片が小さく、全形は窺えない。

**壺形**：12点が得られ、全て図示した。壺はいずれも短頸で、a：口縁部が外反するもの、b：直状を呈するものに細分した。前者は図119～124に図示した。頸部の屈曲部が内面側に強く張り出し、厚くなるものも見られる。後者は図125～130に図示した。頸部が直角に折れ曲がり、胴部は張るものと思われる。

その他、器種不明のものが7点得られている。

第77表 グスク土器（胴部）胎土分類別出土量

器厚	胎土・混和材							A=砂質							B=砂泥質							C=泥質							不明			合計	
	イ	ロ	ハa	ハb	ニ	ホ	ハ	イ	ロ	ハa	ハb	ニ	ホ	ハ	イ	ロ	ハa	ハb	ニ	ホ	ハ	イ	ロ	ハa	ハb	ニ	ホ	ハ	ト	イ	ハa		不
① 5.0mm下	1						2	1		12			2	2		53			1	2		1											77
② 5.1～8.0mm	2	1	38		4	7	2	3	1	104			3	17	6	267			11	5									1	1		473	
③ 8.1～10mm	2		11	2	1	3	1	1		19	1		1	1	50	5	2															100	
④ 10.1mm以上				1			2	2	1	1	4		1		1	2																15	
不明								3		13	2				8			5			2										6	40	
合計	5	1	50	3	5	14	5	9	1	149	7	5	21	7	379	7	19	7	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	705		
胎土別計	83							199							415							8			705								

< 胴部 >

胴部は705点の出土で、小破片が多く、大半が鍋形の胴部片と思われる。第77表に器厚・胎土・混和材の組み合わせで分類を行った。器厚は①：5.0mm以下の薄手、②：5.1～8.0mmの中間、③：8.1～10.0mmの厚手、④：10.1mm以上のより厚手、胎土はA：砂質、B：砂泥質、C：泥質、混和材はイ：滑石混入、ロ：黒色粒主体、ハa：白色粒（薄手・やや細粒）主体に石英・赤粒、ハb：白色粒（厚手・粗粒）主体に石英・赤粒、ニ：赤色粒主体に白・砂粒、ホ：砂粒主体

第78表 グスク土器（口縁部・胴部）観察一覧

第図版	図番号	器種	分類	部位	形状・特徴	口径 (cm)	胎土	粒度含量	石英	赤色粒	白色粒	砂粒	滑石	他	器色 外面・内面	器面調整 外面・内面	地区・ケラット・層 遺構・台帳(取)番号		
第139 図版 96	94	鍋	a	口	内湾・口唇部幅広・滑石多量	30.0	泥砂	中・多				△	◎	青◎	外：桃茶、内：桃灰褐色	内外：指頭痕・疔	HA② J5 II 台2623		
	95			胴	滑石多量・手触りカカ	—	泥砂	細・多	△					◎	黒△	外：桃灰、内：青灰褐色	内外：疔	HA③ A14 III下 S-11 台4266	
	96			口	把手貼付（縦長方形・明瞭）	—	砂	細・中	○				△	△		外：茶褐、内：橙褐色	内外：疔	HA③ A14 II 台2951	
	97				把手貼付（縦長方形・やや斜位）	—	砂	細・中	○	○			△			内外：茶褐色	内外：疔	HA② I 台789	
	98				把手貼付（縦長方形）	—	砂泥	細・少	○				△	△		内外：茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ B16 II 台3139	
	99				把手貼付（略円形・小）	—	砂	細・少	△	△			△		黒○	外：橙褐、内：黄茶褐色	内外：疔	HA② S2 II 台955	
	100				把手貼付（略円形・小）	—	泥	中・中	△		○	△			茶△	外：灰茶、内：灰橙褐色	内外：疔	HA③ S17 II 台3105	
	101				口唇部平・把手貼付（口唇横に耳）	22.8	泥	粗・多	△	△	◎						内外：橙灰褐色	内外：指頭痕	HA② T1 II 台543
	102				把手	大型把手貼付（横耳・楕円）・薄手	—	砂泥	粗・多	△	△	◎					内外：茶褐色	内外：疔・指頭痕	HA③ A13 IV 台2148
	103					大型把手貼付（横耳・楕円）・やや厚手	25.6 (胴径)	泥	粗・多			◎	△				内外：茶褐色	内外：疔・指頭痕	HA② J6 II 台1692
	104					c	口	内湾・口唇部平・鏝状凸帯文	—	砂	細・少	△			△			外：橙褐、内：青灰褐色	内外：疔
	105				口		内湾（口唇部破損）・鏝状凸帯文	—	砂泥	中・中	○			○			内外：暗茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA① L14 III 台25
	106			口	内湾（把手無）・胴部張る・口唇部舌		—	砂	中・中	○	△	○				外：赤茶、内：暗茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA① M13 III 台32	
107	胴	内湾（把手無）・胴部張る・口唇部丸	—	砂泥	中・中		○	○	△		黒△		内外：茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA② J6 IV 取94				
108	d	口	内湾（把手無）・胴部張る・口唇部平	—	砂泥		粗・中	○	○	△				内外：茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ C7 II 台1295			
109		口	内湾（把手無）・口唇平	—	砂泥		中・中	○		○	△			外：橙褐、内：暗茶褐色	内外：疔	HA② C5 II 台2492			
110		口	内湾（把手無）・胴部張る・口唇部舌内・口縁上部に一部煤	20.0	泥		細・中	○	△	○	△			外：橙灰、内：黒褐色（煤）	外：疔 内：疔・丁寧	HA③ D8 I 台602			
第140 図版 97	111	d	口	内湾（把手無）・胴部張る・口唇部舌小型（碗）	12.8		泥	中・中	○	△	○	△			内外：橙茶褐色	内外：疔	HA② M9 I 台268		
	112			内湾（把手無）・胴部張る・口唇部丸	16.4		泥	粗・少		△	△				内外：淡橙褐色	内外：刷毛目	HA② G20 II 台1051		
	113	d	口	内湾（把手無）・胴部張る・口唇部舌	—		泥	粗・中	○	△	○	△		貝△	内外：淡茶褐色	内外：疔	HA② D20 II 台343		
	114			内湾（把手無）・胴部張る・口唇部舌	—	泥	中・中	△	△	○				内外：淡橙褐色	内外：疔	HA② C2 II 台563			
	115			内湾強（把手無）・口唇部丸	—	泥	粗・中	△		○	△			外：橙灰、内：灰褐色	内外：疔	HA② H1 II 台1011			
	116			外反・胴部張り出し弱・口唇部丸	—	泥	細・中		○	△	△		茶△	外：灰褐、内：橙褐色	内外：疔	HA③ A13-C13 III下 台1132			
	117	一	口	外反・胴部張り出し弱・口唇部丸	19.4	泥	細・少	△	△	△				内外：茶褐色	内外：指頭痕	HA② A1 II 取141			
	118			外反・口唇部丸・胴部は不明	—	泥	中・少		△	△	△			外：橙灰、内：灰褐色	内外：疔	HA② B7 II 台616			
	119	a	口	外反・短頸・胴部張る・口唇部破損	12.0	砂	細・中	○	△	△		茶△	外：赤褐、内：灰褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ B16 II 台3136				
	120			外反・短頸・胴部張る・口唇部やや舌	18.6	泥	細・少		△	△				内外：淡茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA② T20 II 台3437			
121	外反・短頸・胴部張る・口唇部丸			14.6	砂泥	中・中	○		○	△				内外：茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ F16 II 貝1507			
122	外反・短頸・胴部張る・口唇部丸			16.0	砂泥	中・中	○		○	△				内外：茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA④ F16 III SP1708 台4307			
123	口			直・短頸・胴部張る・口唇部丸・厚手	15.4	泥	粗・中		△	○			茶△	外：橙褐、内：淡橙褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ T17 II 台1942			
124				直・短頸・胴部張る・口唇部破損	—	泥	粗・中		○	○			貝△	外：橙褐、内：灰褐色	内外：指頭痕	HA② K6 II 台1567			
125	口			直・短頸・胴部は不明・口唇部丸	20.6	砂泥	中・中	○		○	△				外：暗茶、内：赤褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ A13-C13 III下 台1132		
126				直・胴部張る・口唇部破損	—	泥	細・多			◎	△		茶△	外：暗茶、内：淡橙褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ G8 II 台624			
127	b			頸・胴	直・胴部張る・口唇部破損	—	泥	細・多			◎	△			外：灰褐、内：淡橙褐色	内外：指頭痕・疔	HA② D19 II上 台802		
128					直・頸（短・屈曲強）・胴部張る・口唇部丸	11.6	泥	中・中	○	△	○	△				内外：橙灰褐色	内外：刷毛目	HA② G1 II 台1044	
129		直・頸（短・屈曲強）・胴部張る・口唇部丸	—		泥	中・中	○	△	○	△				外：淡橙、内：橙褐色	内外：指頭痕・疔	HA② H2 III SP310 台2136			
130	直・頸（短・屈曲強）・胴部張る・口唇部丸	—	砂	細・中	○			△					外：赤褐、内：茶褐色	内外：指頭痕・疔	HA③ E9 II 台751				

凡例（◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少）

に赤粒、へ：石英主体に赤・黒・砂粒、ト：灰色粒主体とし、それらの組み合わせで分類した。全体的に器厚は②が多く、Cの泥質が主体となる。混和材をみると、いずれの胎土もハaの白色粒主体が多く見られ、82.1%を占める。その中では②Cハaが267点(37.9%)と最も多く、次に②Bハaが104点(14.8%)と続く。その他、①・③Cハaと②Aハaが約40～50点前後出土する。口縁部もほぼ同じ状況を見せ、②ハaが本遺跡のグスク土器の主体となる。

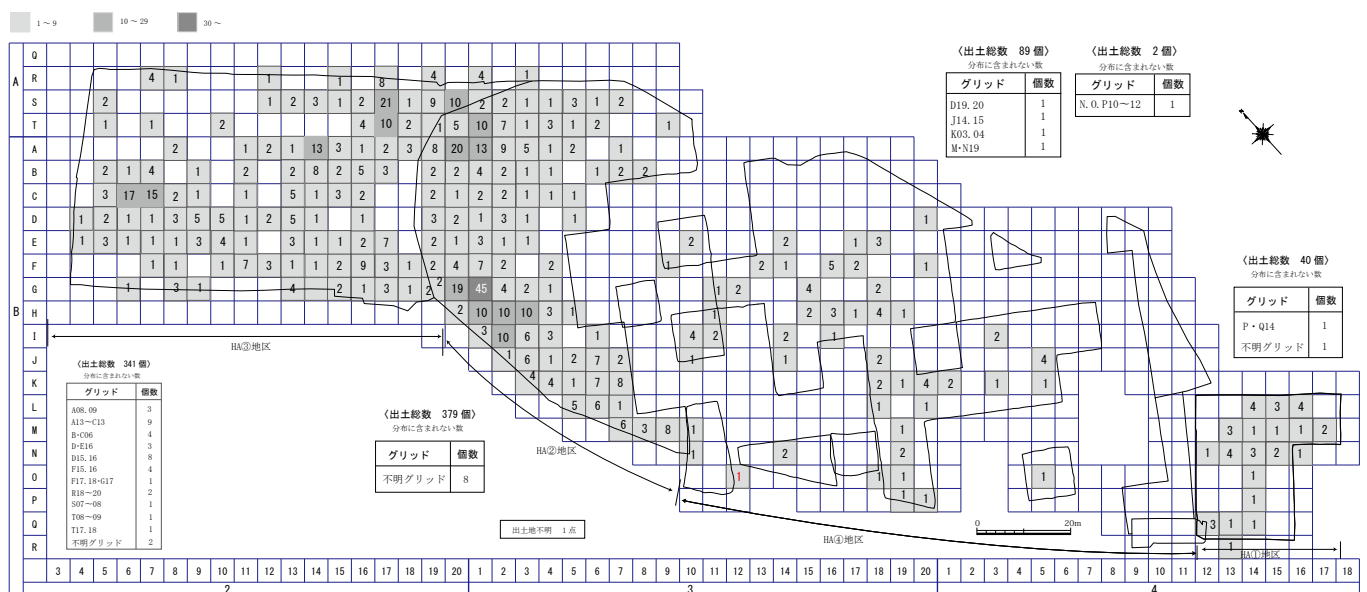
<底部>

底部は全て平底で、立ち上がり部の形状により分類した。底径の大きな平底が多く、口縁部の器種で見られた鍋・壺・

第79表 グスク土器(底部) 観察一覧

第図版	図番号	分類	形状・特徴	底径(cm)	底厚(cm)	胎土	粒度含量	石英	赤色粒	白色粒	砂粒	滑石	他	器色 外面・内面	器面調整 外面・内面	地区・ケラド・層 遺構・台帳(取)番号
第140図・図版97	131	a	立ち上がり丸・胴部やや張る	12.4	0.6	砂泥質	粗・多	◎	△	△	○			外:黒褐、内:茶褐色	内外:打	HA③ A15 II 台1450
	132		立ち上がり丸・胴部やや張る	11.8	1.0	砂泥質	中・中	○	△	△				内外:茶褐色	内外:打	HA③ E5 I 台1897
	133		立ち上がり丸・胴部やや張る	—	0.7	砂質	中・多		◎				△黒	外:赤褐、内:淡茶褐色	内外:打	HA④ F16 III 台2151
	134		立ち上がり丸・胴部やや張る	—	0.7	砂質	中・中	○	△	△	△			外:茶褐、内:淡赤褐色	内外:打	HA② A20 II 台1286
	135		立ち上がり部丸・胴部やや張る	14.0	0.7	砂泥	中・多	◎	△					内外:暗茶褐色	内外:打	HA① L15 III下 0025SD 台135
	136		立ち上がり丸・胴部やや張る	—	0.7	砂泥	粗・多	◎	△	○				外:黒褐、内:茶褐色	内外:打	HA③ E6 I 台649
	137		立ち上がり丸・胴部やや張る・小(碗?)	5.1	0.6	泥	中・中	○	△	△		△貝		外:茶褐、内:灰茶褐色	内外:打	HA② A4 II 台1634
	138		立ち上がり丸・胴部やや張る	9.0	0.8	泥	中・中	△	○	△		△茶		外:橙褐、内:灰茶褐色	内外:打	HA③ S19 II 台1167
	139		立ち上がり丸・胴部やや張る	19.4	0.8	砂泥	中・中	○	△	△				外:暗黄、内:黄茶褐色	内外:指頭痕・打	HA③ S19 II 台3178
	140		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	19.0	1.3	泥	中・少	△	△					外:灰褐、内:橙褐色	内外:打	HA② G20 II 台1048
	141		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	9.8	0.7	砂	細・中	△	○	△				内外:灰橙褐色	内外:打	HA② G2 II 台1747
	142		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	9.0	0.5	泥	中・少		△	△				外:灰茶褐、内:灰褐色	外:打・削り 内:打	HA② G1 II 台1720
	143		立ち上がり角(外底)・内底緩やか 外底・白色粒多量	9.4	1.3	泥	粗・多		◎	△				外:灰橙褐、内:灰褐色	外:刷毛目 内:打	HA③ C7 II 台1335
	144		立ち上がり角(外底)・内底緩やか・外底雑	10.0	0.6	泥	中・小		△	△				外:灰褐、内:橙褐色	内外:打	HA② L6 II 台1267
145	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	8.0	0.5	砂泥	中・中	△	○	△				外:灰橙褐、内:灰褐色	内外:打	HA③ F16 II 台1962		
146	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	12.0	0.6	泥	粗・多	△	◎	△				外:黒褐、内:淡橙褐色	内外:打	HA① L16 III下 0025SD 台146		
147	立ち上がり角(外底)・内底緩やか・外底雑	7.6	0.5	泥	粗・中		○	△		茶△		外:暗灰、内:灰茶褐色	内外:打	HA③ D10 II 台625		
第141図・図版98	148	b	立ち上がり角(外底)・内底緩やか外底葉痕?	10.4	0.9	泥	中・中	△	○	△				外:淡茶、内:灰茶褐色	内外:打	HA③ G17 II S-10 台2113
	150		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	11.0	1.3	泥	中・少	△	△					外:暗褐、内:灰茶褐色	内外:打	HA③ E13 II 台1144
	151		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	8.0	0.8	泥	中・少	△	△					外:桃褐、内:茶褐色	内外:打・削り	HA② G20 II 台1046
	152		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	6.6	0.4	泥	中・中	△	△	○				外:黄茶、内:黄茶褐色	内外:打	HA② H1 IV 取224
	153		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	—	0.9	砂泥	細・少	△	△		茶△			外:黒褐、内:橙褐色	内外:打	HA③ R7 II 台1557
	154		立ち上がり角(外底)・内底緩やか外底葉痕?	—	0.6	泥	粗・中	△	○					外:橙褐、内:橙褐色	外:打・内:刷	HA③ T16 II 台2707
	155		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	—	0.9	泥	中・中		○					外:灰褐、内:橙褐色	内外:打	HA② H1 II 台1011
	156		立ち上がり角(外底)・内底緩やか 外立ち上がり削り	11.2	0.9	泥	中・中	△	○	△				外:黒褐、内:暗茶褐色	内外:打	HA② G20 II 台1049
	157		立ち上がり角(外底)・内底緩やか	16.0	0.5	泥	中・多	◎	△	△				外:黒褐、内:茶褐色	内外:指頭痕・打	HA④ K20 III 台2692
	158		立ち上がり角(内外)	—	0.6	砂泥	細・多	△	◎					外:暗灰、内:茶褐色	内外:打	HA③ B7 II 台4557
	159		立ち上がり角(内外)	11.4	0.6	砂泥	細・多	△	◎					内外:暗茶褐色	内外:打	HA③ C7 II 台1335
	160		d 立ち上がり急・胴部膨らむ・底葉痕(太)	7.8	0.3	泥	粗・多		◎					内外:灰橙褐色	内外:打	HA③ C6 I 台1353
	161		— 底面のみ残存・外底雑(白色粒多量)	—	1.0	砂泥	中・中	△	○					内外:茶褐色	内外:打	HA② L5 II 台1270
	162		ミチュウ 口唇平・上げ底・内底緩やか・くびれ	4.0	0.4	泥	中・少		△						外:橙褐、内:灰橙褐色	内外:打

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)



第136図 グスク土器 平面分布

甕形のいずれかの底部と思われる。中には図 160 のように小さい底径も見られることから、碗形等の器種も考えられる。

a は立ち上がり部が丸みを呈するもので、図 131 ~ 139 に図示した。図 137 を除いて他は底径が大きい。

b は外面の立ち上がり部が角、内面は緩やかに立ち上がるもので、図 140 ~ 157 に図示した。図 140・156 は外底の立ち上がりが削りにより段を呈する。図 157 は立ち上がり部の角がやや丸く、若干くびれが見られる。砂質で石英を多量に含み、胎土からは貝塚時代後期の土器とも考えられるが、底径が 16.0cm と広底で、形状から今回はグスク土器の範疇で捉えた。

c は両面とも立ち上がり部が角を呈するもので、図 158・159 に図示した。2 点とも角は明瞭である。

d は直角に立ち上がり、胴部が膨らみを持つもので図 160 に図示した。底径が 7.8cm と小さく、碗形と考えられる。1 点のみの出土であることから形状の似る鍋形で扱った。なお、図 161 は厚手の底部で底径の大きな平底と思われるが、立ち上がり部が破損しており、分類は出来なかった。

162 は 1 点のみ出土したミニチュア土器で、口縁部は丁寧にナデ調整を行っている。類例として糸数城跡 (1991) がある。また、底部の胎土は C (泥質) が多い。B (砂泥質) は石英や砂粒を混和材とし、泥質は白色粒を多量に含み、口縁部と同様である。中には立ち上がり部に削り、外底に葉痕が見られるものもあるが、全体的には少ない。

### 3. 先島系土器 (第 141 図 163 ~ 第 142 図 178)

貝塚時代後期やグスク時代の土器から外れるものをまとめ、胎土や混和材の違いにより下記の 2 類に分けた。

A 類は白色粒がやや粗く厚手のものである。グスク土器の胎土 C ハ b にも類似するが、厚手で硬質な点から先島系土器と思われるものである。図 163 ~ 169 に 7 点を図示した。図 163 (HA ④ SK100 出土) は口~底部まで得られたので復元を行った。土器付着の煤で年代測定を行ったところ (第 IV 章第 4 節)、補正 240 ± 20BP (暦正 17 ~ 18 世紀末) の値が得られた。それからすると近世の時期に相当し、グスク土器の範疇からは外れる。図 166・167 は他に比べてより厚手である。図 168・169 の底部も同様な胎土からここにまとめた。

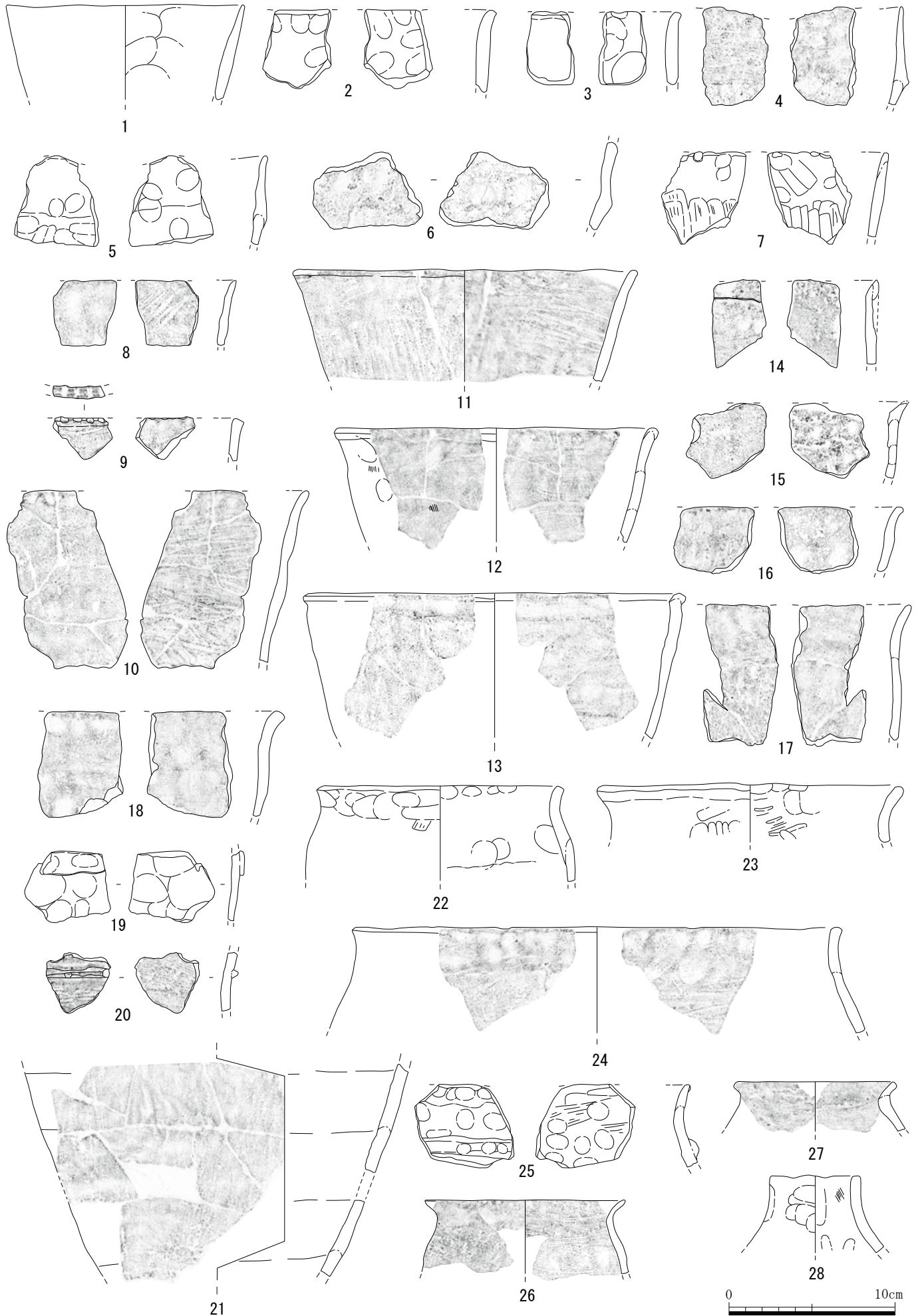
B 類は胎土や混和材などの特徴から、宮古式土器と思われるものである。51 点の出土で、主なものを図 170 ~ 178 に図示した。細かい白色粒と粗い赤色粒を主体とし、A 類とは胎土や混和材の違いが見られる。器種は甕形と壺形が得られ、若干後者が多い。外面は黒色を呈し、磨きを呈するものが多く手触りは滑らかであるが、内面はやや雑である。いずれの器種も全形が窺える資料は得られなかった。ただ、図 174 の口縁部と 177 の底部は、土器の特徴と出土地 (HA ③ C11 II 層) が同じであることから同一個体の可能性が考えられるが、胴部片が得られず接合が出来なかったことから別々に図化した。

第 80 表 先島系土器 観察一覧

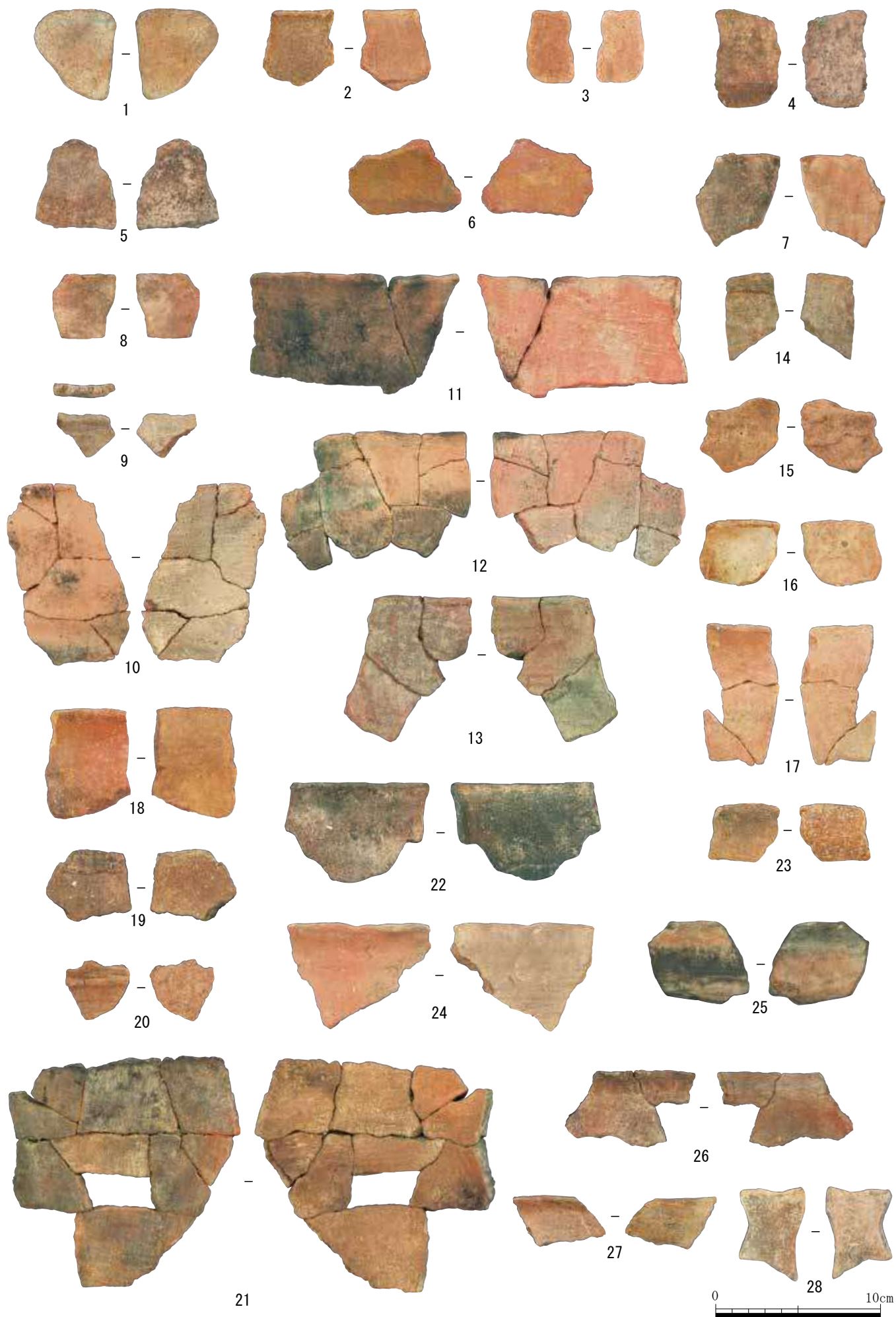
第 141 図・図版 98	第 142 図・図版 99	図番号	分類	器種	部位	形状・特徴	口径高 (cm)	底径 (cm)	器厚底厚 (cm)	胎土	粒度含量	石英	赤色粒	白色粒	砂粒	器色 外面・内面	器面調整 外面・内面	地区・ケルト・層 遺構・台帳 (取) 番号
A	壺	163	-	口~底	やや外反・頸部くびれ 胴部膨らむ・口唇舌・外面煤付着	10.0 18.3	12.0	0.8 —	泥	粗・多			◎		外: 暗茶、内: 茶褐色	内外: 打	HA ④ L1 SK100 III 台 4492 HA ④ K1 SK100 III 台 3394	
		164			口	やや外反・打肩 口唇舌・外面煤付着	10.2 —	—	0.9 —	泥	粗・多		◎△		外: 暗褐、内: 暗茶褐色	外: 指頭痕 内: 打・指頭痕	HA ④ L1 III SP1161 台 4024	
		165			外反・胴部張る 口唇舌	14.8 —	—	0.8 —	泥	粗・多		◎		内外: 茶褐色	内外: 打	HA ② H1 SK142 III 台 2130 HA ② G20 II 台 935		
		166			頸~胴	頸部くびれ・胴部膨らむ 胴下部は煤付着 (黒色)	20.0 (胴径)	—	1.0 —	泥	粗・多		◎△		外: 茶褐、内: 明茶褐色	内外: 打	HA ③ C13 II 台 1157	
		167			胴	球形に膨らむ・0 底部近くは薄手・ 煤付着 (黒色)	28.8 (胴径)	—	1.0 —	泥	粗・多		◎△		外: 茶褐、内: 明茶褐色	内外: 打	HA ③ C11 II 台 1203	
B	-	168	底	平底 (広)・底厚薄 (7mm) 立ち上がり (外底角、内底緩やか)	—	—	0.7	泥	粗・多			◎		外: 暗茶褐、内: 茶褐色	外: 打 内: 打・指頭痕	HA ③ E10 I 台 1380		
		169		平底 (広)・底厚薄 (7mm) 立ち上がり (外底角、内底緩やか)	—	12.0	0.5	泥	粗・多	△		◎		外: 暗茶、内: 茶褐色	内外: 打	HA ④ J14 III 台 2550		
	甕	口	170	外反・無頸・胴部張る・口唇丸	22.8 —	—	0.5 —	砂	細・多	△	◎			外: 黒褐、内: 桃褐色	外: 打・打 内: 打・指頭痕	HA ③ B16 II 台 3820		
			171	外反・無頸・胴部張る・口唇丸	14.8 —	—	0.5 —	砂	細・多	△	◎			外: 黒褐、内: 桃褐色	外: 打・打 内: 打・指頭痕	HA ④ J14 III 台 2564		
			172	やや直・胴部張る・口唇丸	16.4 —	—	0.6 —	砂	中・多	△粗	◎			内外: 桃茶色	内外: 打・指頭痕	HA ④ M19 III SP120 台 3453		
			173	頸	胴部のみ残存	—	—	0.5 —	砂	細・多		◎粗			外: 黒褐、内: 桃褐色	外: 打・打 内: 打	HA ② H3 III SP331 台 2167	
	壺	口	174	直・胴部張る・口唇丸	15.8 —	—	0.5 —	砂	細・多		◎粗			外: 黒褐、内: 桃褐色	外: 打・打 内: 打・指頭痕	HA ③ C11 II 台 1203		
			175	直・胴部張る・口唇破損・外面ナレ	—	—	0.8 —	砂	細・多		△粗	◎		外: 桃褐、内: 黄茶褐色	外: 打して雑 内: 打・打	HA ② H2 II 台 1161		
		頸	176	直・胴部張る・口唇破損	—	—	0.6 —	砂	細・多		△粗	◎		外: 黒褐、内: 桃褐色	外: 打 内: 打	HA ④ L19 III SP492 台 3621		
			177	平・立ち上がり直・外反	— 19.4	—	—	砂泥	細・多		◎粗	◎		外: 黒褐、内: 桃褐色	外: 打 内: 打・指頭痕	HA ③ C11 II 台 1203		
		178	底	平・立ち上がり不明・内面緩やか	—	—	—	砂泥	細・多		◎粗	◎		外: 桃褐、内: 暗褐色	外: 打して雑 内: 打	HA ③ A15 I S-29 台 1916		

凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)

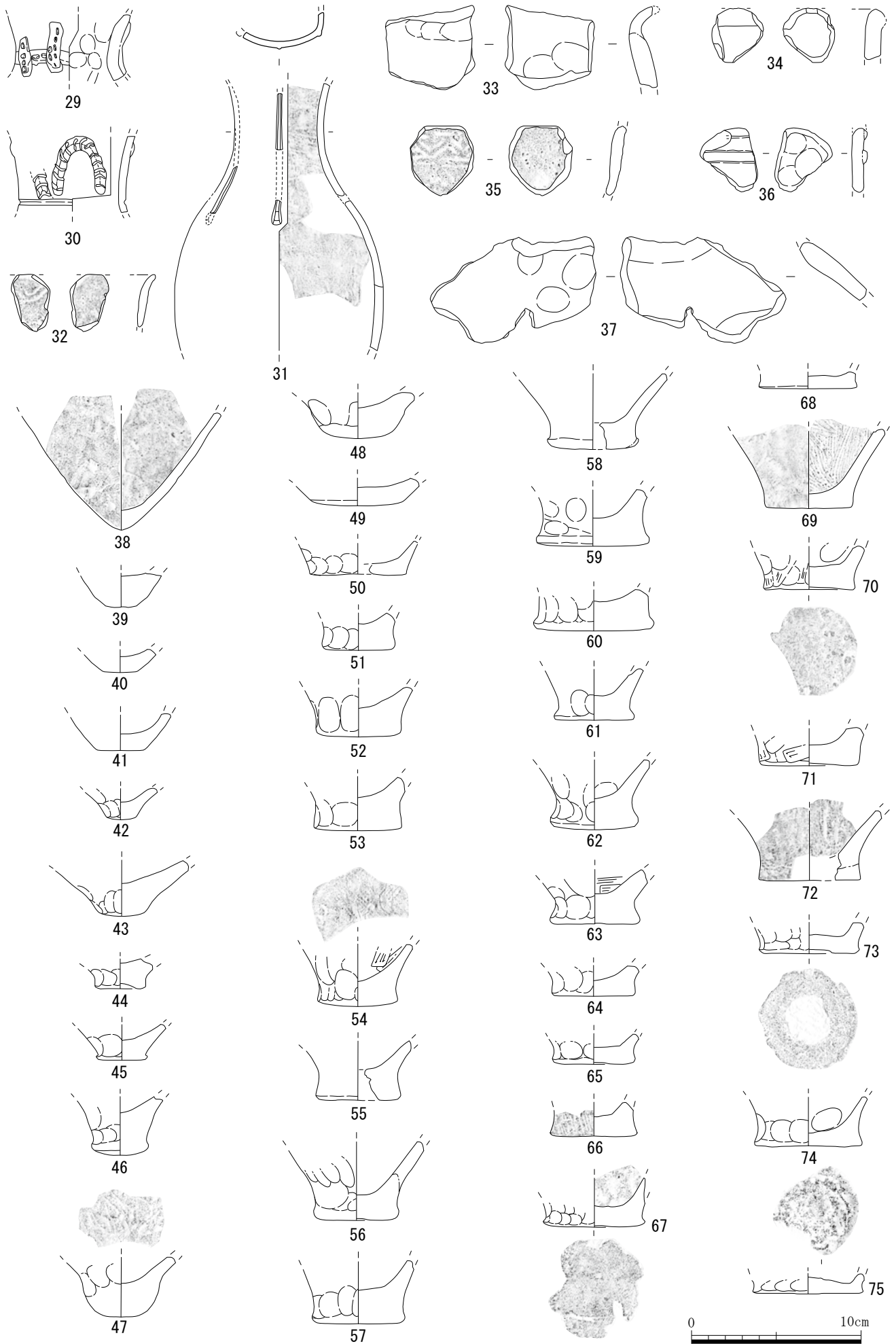




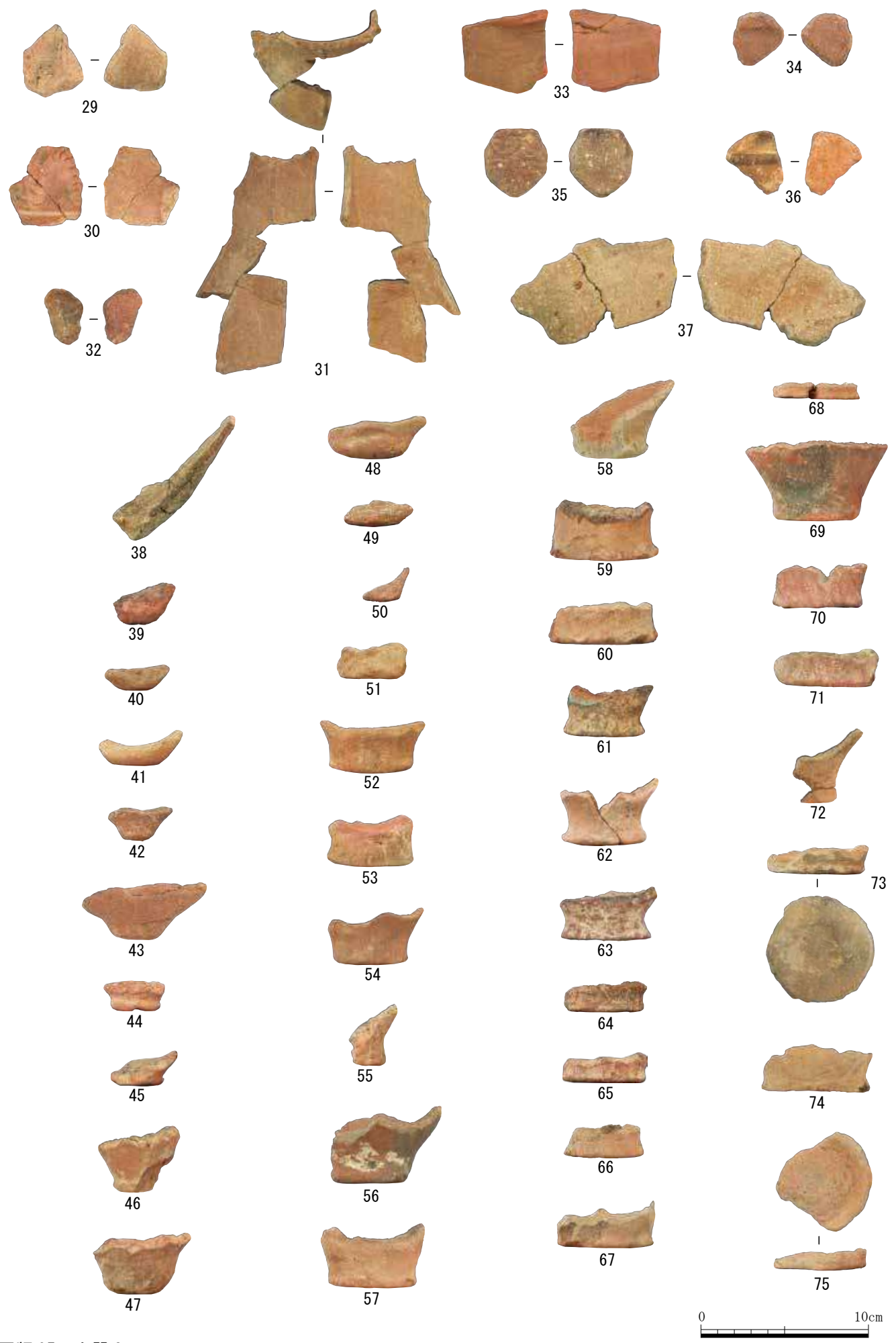
第137图 土器1



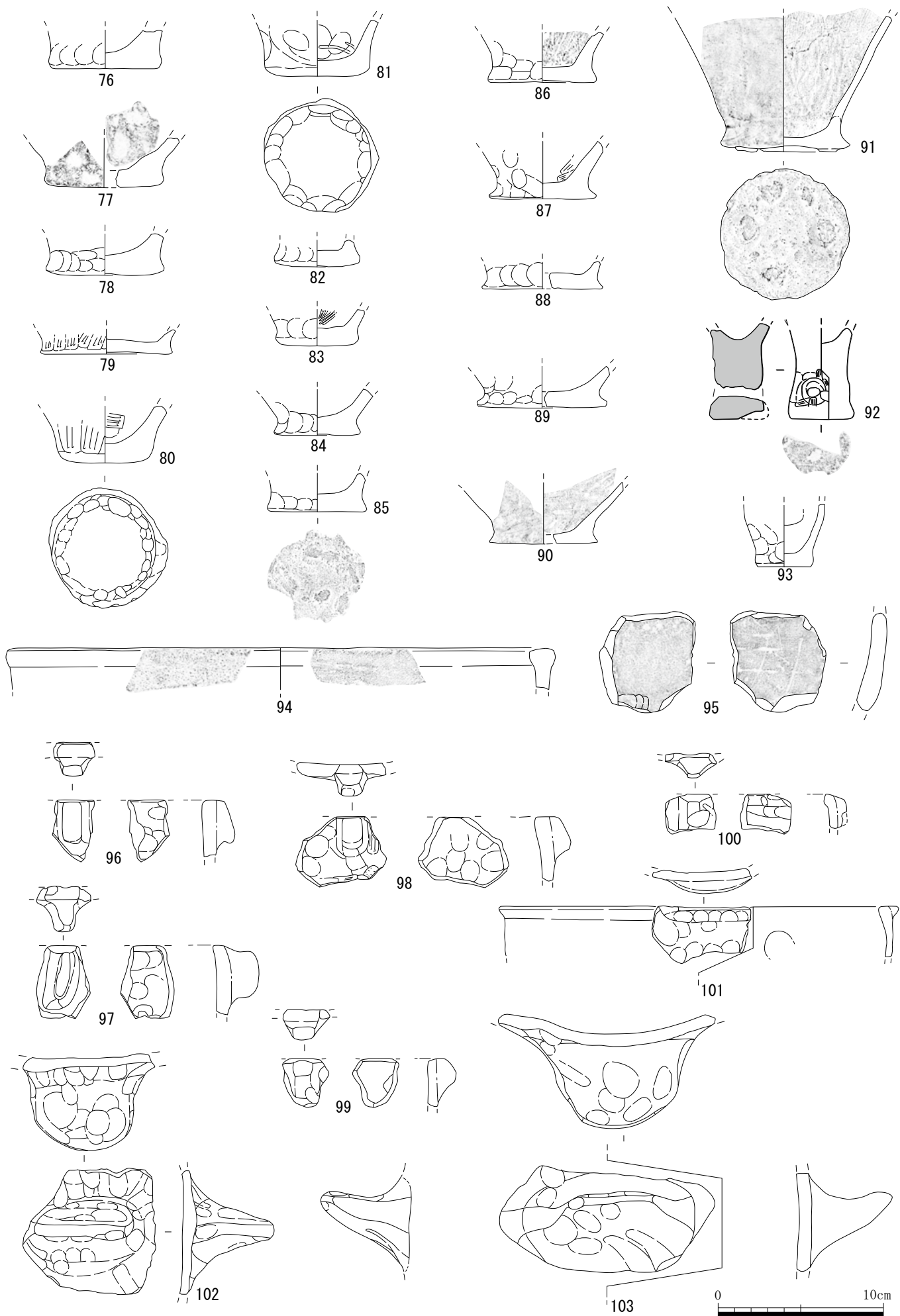
图版 94 土器 1



第 138 图 土器 2



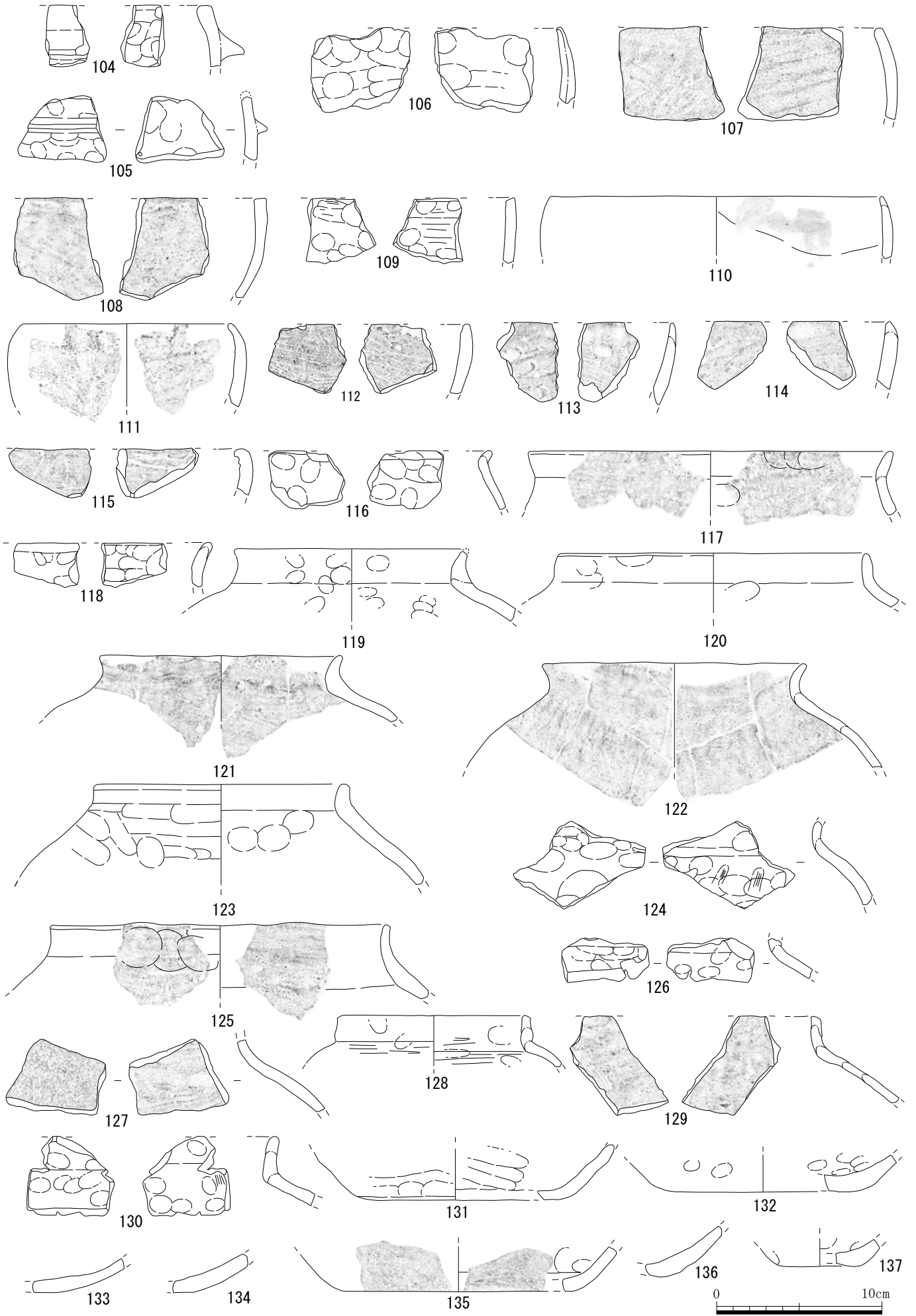
图版 95 土器 2



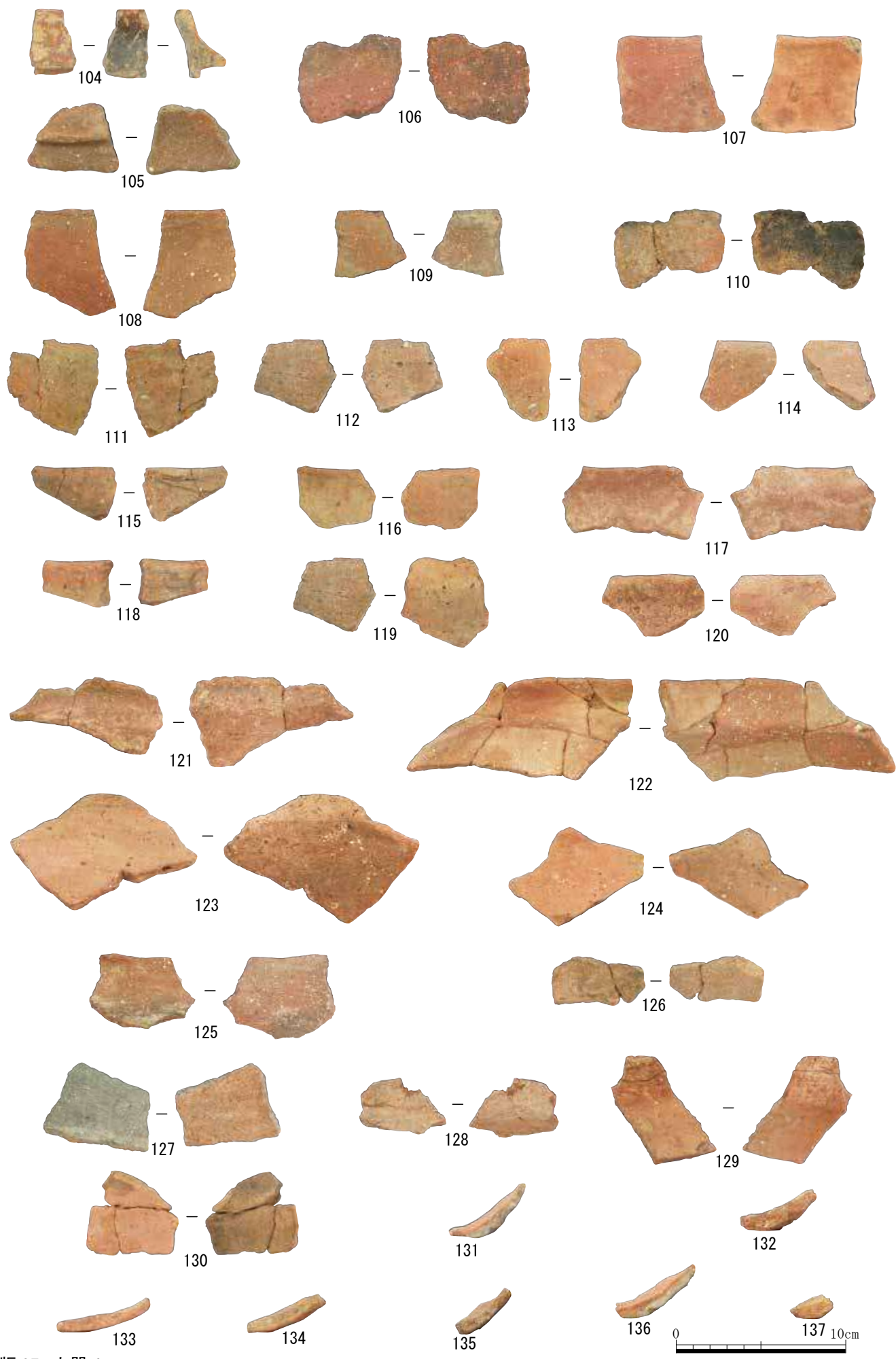
第 139 图 土器 3



图版 96 土器 3

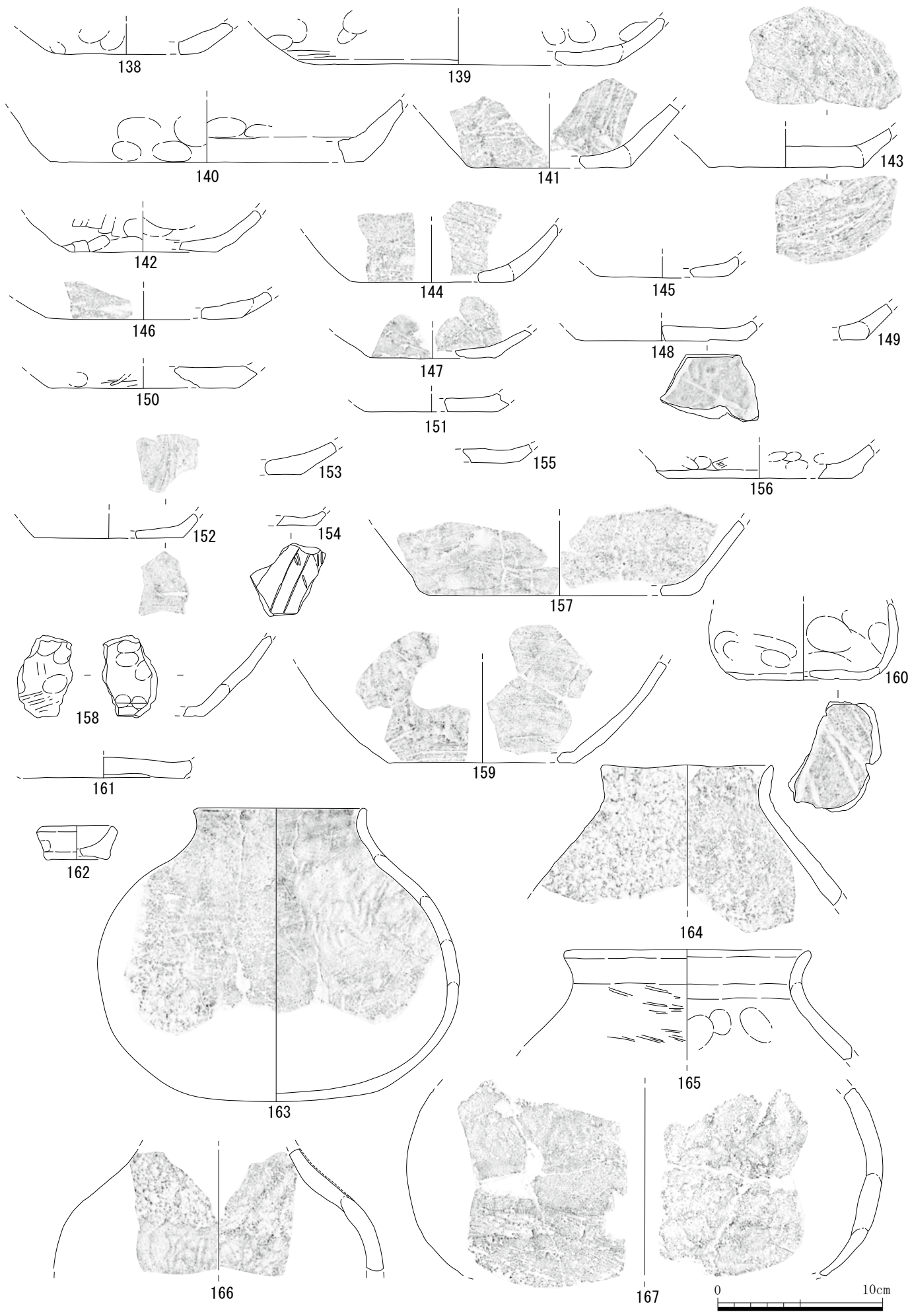


第 140 图 土器 4

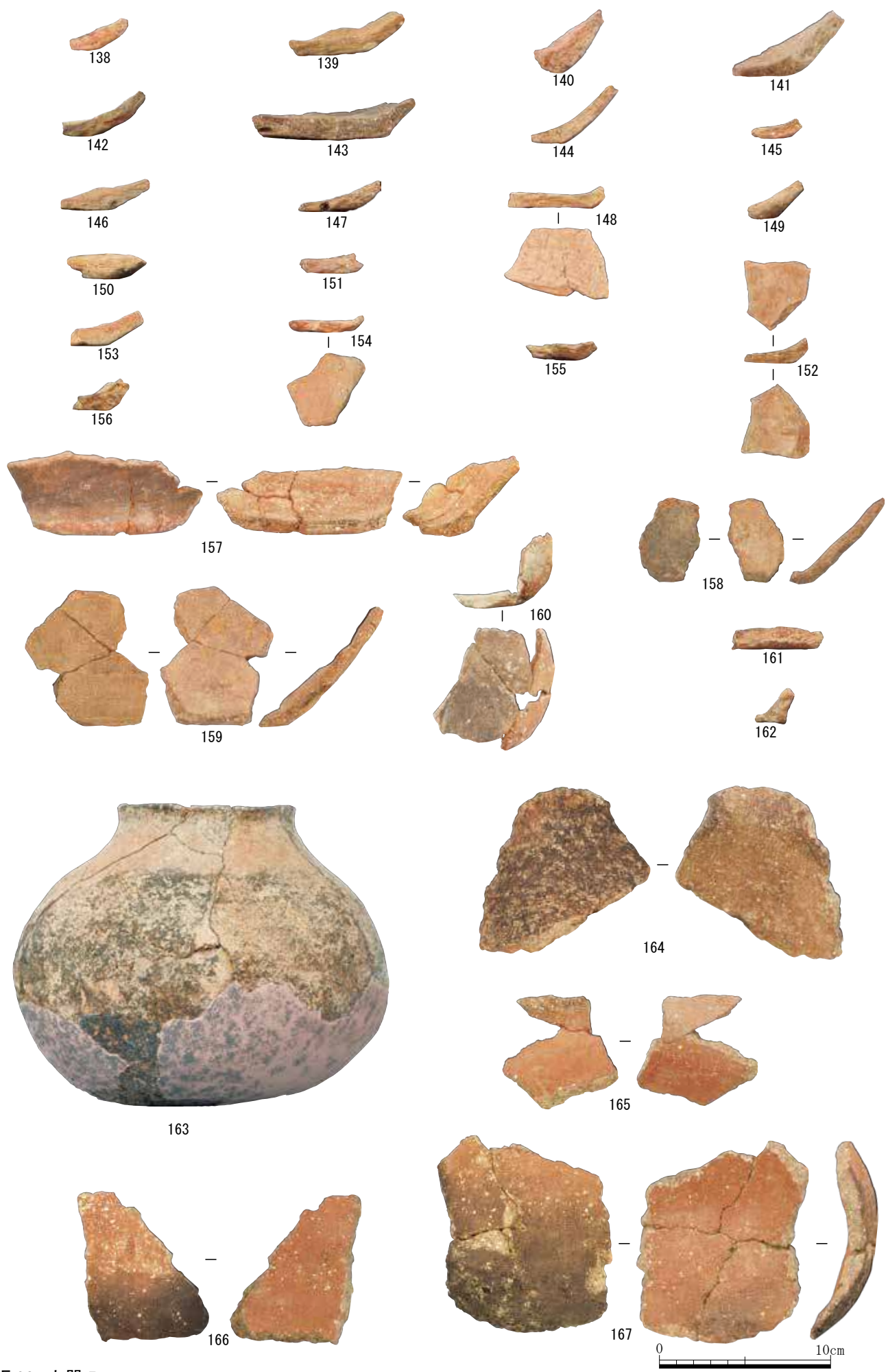


图版 97 土器 4

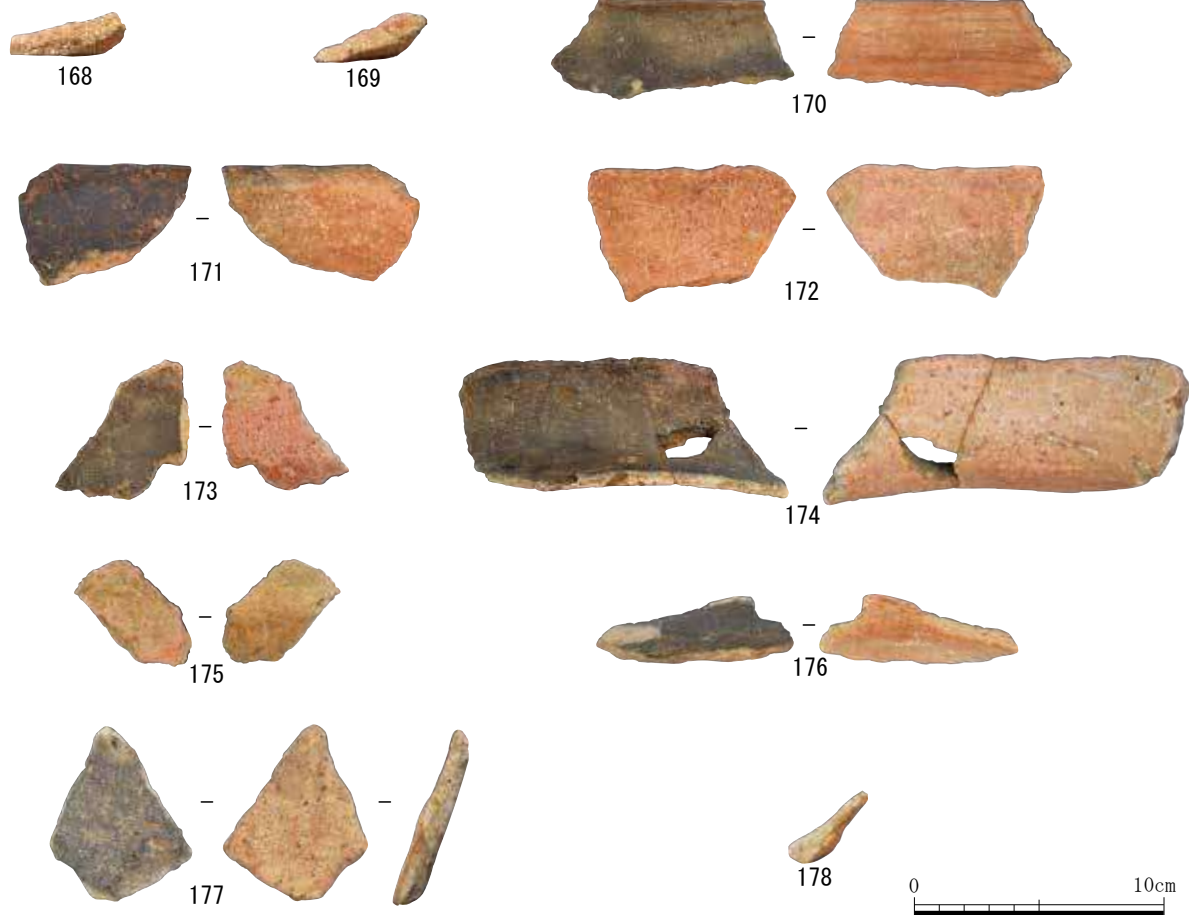
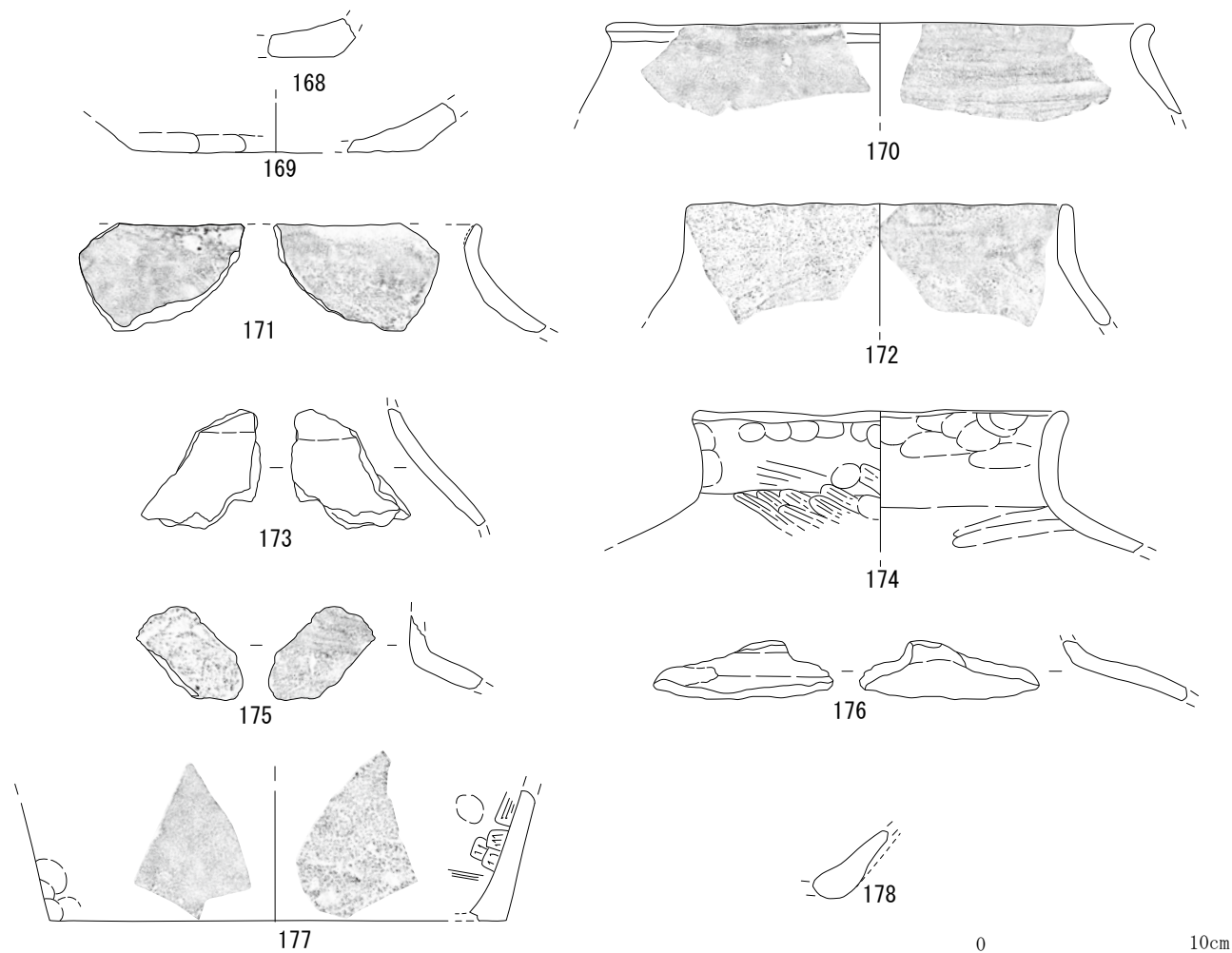




第 141 图 土器 5



图版 98 土器 5



第 142 图 · 图版 99 土器 6

## (17) 土製品

22点が出土しており、粘土を使用した一次製品と土器を転用した二次製品に大別出来る。円盤状製品と同じ時期に製作された可能性もあるが、今回は素材と形状の違いにより土製品として扱った(第81表)。一次製品は僅か2点、他の20点は二次製品で、貝塚時代後期の土器片とグスク時代の土器片を用いたものが約半数ずつ得られた。Ⅱ層出土で攪乱遺物が多いが、貝塚時代後期の時期に所属する遺物もある。HA③・②での出土が目立ち、後者の地区では祝女殿内に集中する。HA④でも3点が得られた。円盤状製品もHA②においては祝女殿内出土が多く、本製品と出土地が重なる。

本町では伊礼原D遺跡(2013)・伊礼原A遺跡(2014)・平安山原B遺跡(2015)などでも数点が得られているが、本遺跡では22点と多い。詳細は第82表の観察一覧に示し、一次製品から順に記述する。

一次製品は図1・2の2点で、今のところ類例がない。前者は残存部から円形が想定され、孔は中心から少しずれて施される。外面には弧状の沈線文が3mm間隔で5本施されている。孔には紐ずれの痕は見られないが、形状から装飾品の可能性が考えられる。後者の平面形は振り子に類似し、薄く平らに整形されて外周の縁には細かい打割痕が見られる。

器を利用した二次製品は、①方形と②円形に分けられる。前者は図3・4の2点が得られた。図3は上部を両面とも研磨している。類例がなく、用途などは不明である。図4は両面を研磨し、正方形に整形したものである。製作時期が円盤状製品と同時期の可能性も考えられる。

後者は18点出土し、図5～13の9点を図示した。部位の利用を見ると、後期土器は底部、グスク土器は若干胴部片が多い。

図5は底部の立ち上がり部が丁寧に研磨されており、手触りが滑らかである。図6～13は粗雑な打割痕で、製作途中の可能性も考えられる。胴部を使用するものは楕円形も多い。打割方向は図10・11・13が両面、図12は内→外面で行われている。報告外も含めてサイズは小さいものが多く、径3.0cm以下が7点、径5.0cm以下が8点得られた。径6.0cmのやや中サイズのもの報告した3点のみで、くびれ平底自体を利用している。

第81表 土製品出土量

地区	層	遺構	分類				合計
			後期系	グスク	先島系	不明	
HA③	Ⅱ	I	1			2	3
		II	3	1			4
	Ⅱ	S-13	1				1
		S-28		1			1
HA②	Ⅱ上		1			1	
	Ⅱ		2	6	1	9	
HA④	Ⅱ			1		1	
	Ⅲ		1			1	
	Ⅳ		1			1	
合計			9	10	1	2	22

第82表 土製品観察一覧

第図 図版	図 番号	分類	素材	形状	使用部位	大きさ・現存 縦×横(cm)	器厚 (mm)	胎土	観察事項	備考	地区・ゲルド・層 遺構・台帳番号
第 143 図・ 図版 100	1	一次製品	粘土	円形? (推定)	—	3.6×3.5 (半欠品)	6~11	砂質	有孔・外面に弧状の沈線文 内面は凹凸・径5cmの円形?	周縁一部に僅かな 煤付着	HA③ A16 Ⅱ S-13 台 2248
	2	一次製品	粘土	不定形	—	4.7×3.5	5	砂質	無文・薄手・周縁を細かい打割 で整形(振り子状)	ほぼ平ら・円形部 の径は約3cm	HA② A19 Ⅱ 701 台 1889
	3	二次製品 ①	後期 土器	方形	底部 (くびれ平)	3.2×3.2	4~10	泥質	底部を方形に粗割・上部 のみ両面より研磨(やや尖る)	調整痕有り ヘラ・指頭痕	HA③ A10 Ⅱ 台 2869
	4	二次製品 ①	グスク 土器	方形	胴部	2.4×2.4	5~8	泥質	胴部片を方形に加工(ジャブ) 片面は丁寧な研磨	器厚の違いから胴 下半部の可能性	HA④ K18 Ⅱ 台 2653
	5	後期 土器	後期 土器	円形 (くびれ平)	底部 (くびれ平)	6.0×6.0	—	泥質	立ち上がり部を平らに研磨 (滑らか)・他には加工痕跡無し	内底刷毛目顕著	HA③ T 9 Ⅰ 台 1223
	6.0×6.0					—	砂質	立ち上がり部を粗割(複数回) 製作途中?	厚手・外底に粘土 塊有り	HA④ G12・13 Ⅳ 台 4493	
	6.0×3.6 (半欠品)					8~11	泥質	周縁を打割(複数回) 円形に整形	くびれ平底の中央 盛り上がり	HA③ A11 Ⅱ 台 1736	
	4.3×4.0					5~7	泥砂質	全体的に摩耗・底部の立ち 上がり部周縁を細かく打割	薄手・摩耗	HA③ D14 Ⅰ 台 1281	
	9	二次製品 ②	グスク 土器	円形	胴部	3.5×2.8 (半欠品)	7	砂質	細かく打割(内→外) 円形状に整形	僅かに湾曲	HA④ G1 Ⅲ 台 2210
	10	楕円形 (縦長)		胴部 (底部近く)	5.0×4.2	7~11	泥質	粗割(両面より打割) 周縁に角が残る	灰・混和材に 白色粒	HA② T3 Ⅱ 台 398	
	11	楕円形 (横長)		胴部	3.5×4.4	8	泥質	粗割後に細かい打割 (両面より打割)	削り痕有り やや湾曲	HA② T 1 Ⅱ 台 1090	
	12	楕円形 (縦長)		胴部	4.7×4.2	9	泥砂質	粗割(内→外へ複数回周縁を 楕円状に打割)・角が残る	厚手・白色粒多量	HA③ B14 Ⅱ S-28 台 2312	
	13	円形		胴部	3.1×3.4	6	泥質	粗割(両面よりやや円形に 打割)・角が残る	灰 (混和材抜け)	HA② T1 Ⅱ 台 532	



第 143 图 · 图版 100 土製品

## (18) 簪

簪は尚真王のころ（16C 中頃）、位階や身分を表す制度によりその種類や品質が決められていたとされている。

簪には花型（男性用）、匙型（女性用）、細匙型（副差）がある。本遺跡では花型 7 点、匙型 8 点、細匙型 12 点の計 27 点の出土（第 83 表）で、キャンプ桑江北側地区の遺跡の中で最も多く得られた。

出土地をみるとⅡ層は祝女殿内で 7 点、畠 5 点、蒲伊礼小 2 点、名嘉座 6 点、小渡小 2 点、瓦屋又吉小 1 点、道端大屋小 1 点で近代の屋敷に関わる出土が多い。Ⅲ層は HA ①で細匙型 1 点、HA ④で花型 1 点の出土で、中国産陶磁器の出土が主体となる地区である（第 144 図）。隣接する平安山原 B 遺跡でも匙型 2 点が出土している。主なものを第 145 図に示し、出土した全てを図版 101、観察一覧を第 84 表に示した。計測については全長が頭部・頸部・竿部の合計、各部位の横断面の計測と形状、先端部の観察、残存部の重量を示した。なお、観察のため遺物をクリーニング後、研磨剤で磨いたところ、ほとんどのものが当時の黄金色をよみがえらせた（巻首図版 15）。

なお、簪の素材は詳細な分析を行ってないため便宜上、金・銅・アルミと表記した。

・**花型**：完形 2 点、軸部 5 点の出土で、その内 4 点を図化した。頭部が花型で、直下の断面は方形、ねじって軸部の方形に至る。図 1 は完形で、頭部が六弁花、弁先は丸みを持つ。写真 a は同じ形であるが、全長は前者より長い。図 2 は写真 a とほぼ同じ大きさとなる。図 3 は頭部を欠損し、先端部を板状に二次加工するもので、大きさは図 1 に類似する。「く」字状に曲がる。使用後、あるいは戦中に加工したものと思われる。図 4 は薄手で、先端部分は柳葉状を呈する。HA ④のⅢ層の出土。古手である。他に写真 b・c があり、写真 b はやや赤みがあり、銅の割合が高い。

・**匙型**：完形 8 点の出土である。本品は頭部の形状が通常の「卵」形（図 5・8 写 d・f）とやや薄手の「丸」形（図 6・7、写 e・g）があり、素材は金・アルミ・銅の 3 種がある。

図 8 は唯一のアルミ製である。他よりも大きく、蒲伊礼小 S-4（井戸）から出土している。図 5 は HA ④のサカイミチ出土である。他は近代の名嘉座で 3 点、祝女殿内 1 点、畠 1 点で、道端大屋小 1 点（写 f）は銅製でやや大きめである。卵と丸形の出土の差は認められない。

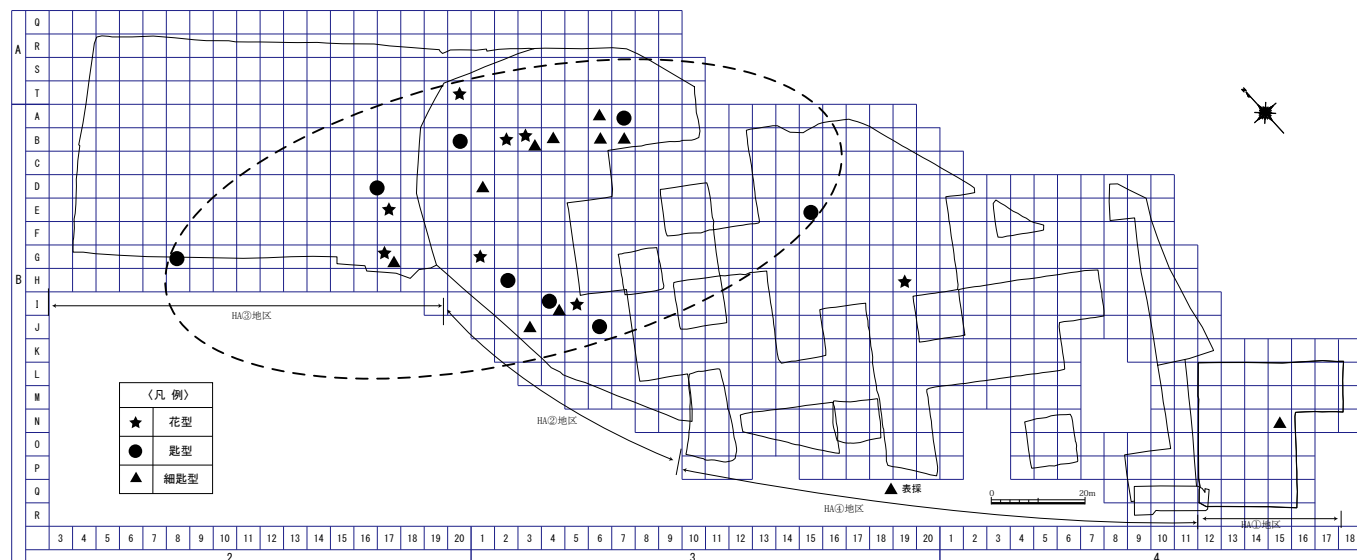
・**細匙型**：完形 9 点、軸部 1 点、頭部 2 点の計 12 点の出土である。図 9～12、写真 h～o である。

図 10 は HA ①Ⅲ層の出土で、他は HA ②の特に祝女殿内および畠に集中する。図 9 は竿部で 90°に曲がる。写真 i・k・m の湾曲は使用痕と思われる。図 10 と写真 l は頭部の部分が他のものより短く小さく、耳かき状を呈する。用途が異なるかは不明である。図 12 は頭部でねじれ、角度は 45 度である。

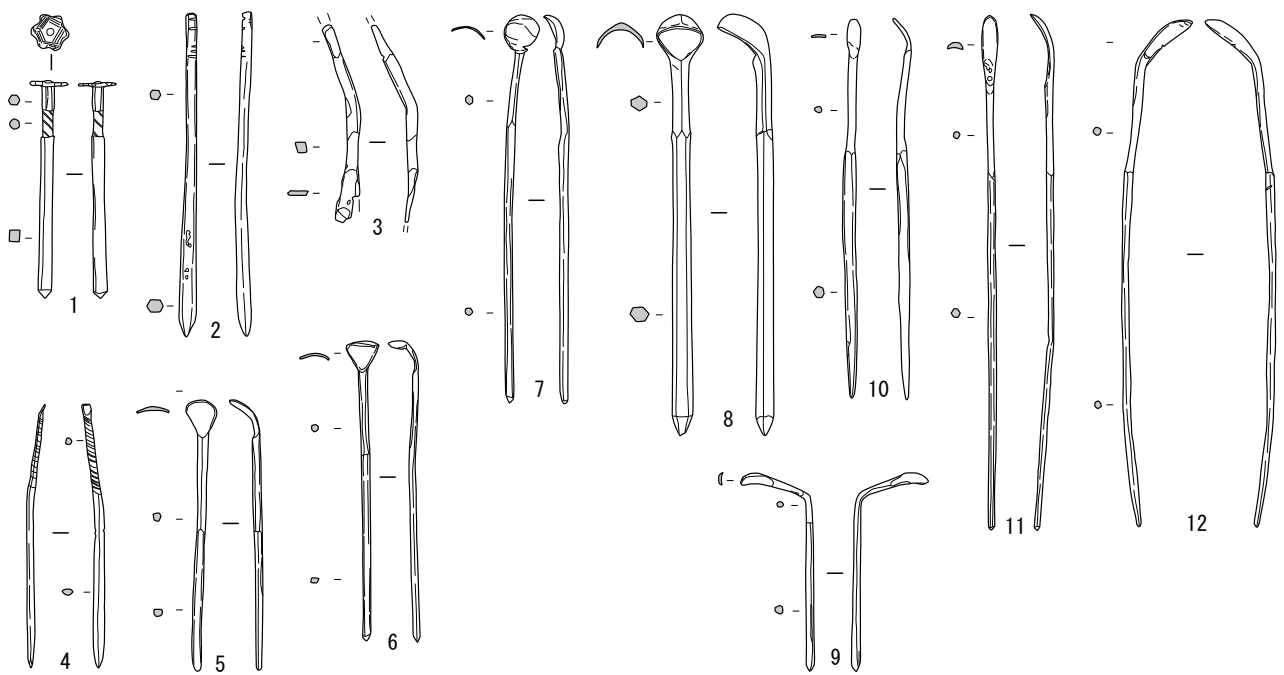
<素材>図 8 はアルミ、図 10、写真 b・f は青銅、他は金製と思われる。金製？が多いのは祝女殿内に関連するものであろうか。Ⅲ層出土のものは金製で、中国産陶磁器を主体とする HA ①と HA ④で出土することから、当時の身分の位置づけが窺われる。花卉型は頭部の花卉部分が薄く、匙型は丸形など、頭部が薄手が多い。

第 83 表 簪出土量

地区	層	遺構	花型		匙型		細匙型		合計
			完	軸	完	完	軸	頭	
HA ③	Ⅱ	S-3.4	1			1			2
					2				2
HA ②	Ⅱ上			1				1	
	Ⅱ		1	3	5	6	1	2	18
HA ④	Ⅰ					1		1	
	Ⅱ				1			1	
	Ⅲ			1				1	
HA ①	Ⅲ					1		1	
合計			2	5	8	9	1	2	27



第 144 図 簪 平面分布



第145图·图版101 簪

第84表 簪観察一覧

(質量単位：cm, g)

第図版	図版番号	分類	素材	完破	全長	頭部幅	頭長	頭厚	竿長	竿厚	重さ	観察事項	地区・グリッド・層・遺構・台番号	
第145図版101	1	花型	金?金箔	完	7.2	1.2(長)1.0(短)	0.8 0.9(ねじり)	0.31	5.5	0.35~0.41 方形	7.8	直状、竿部は頭部近く六角形→ねじり→方形は先端方向に太くなり、先端は四角柱。金箔7割残。	HA② T20 祝殿 II 台 4123	
	2		金?金箔	軸部	10.8	—	1.5	0.35×0.4 六角形	9.3	0.35~0.45 扁六角形	9.3	頭部欠、竿部は頭部から先端部に徐々に太くなる。先端の尖りは鋭い。	HA② I5 II 取 112 X 36108.766.Y25540.487.Z2.152	
	3		金?金箔	軸部	6.9	—	—	0.21×0.39 ねじれ、加工	—	より扁平	5.3	頭部、先端部加工、二次製品。板状。	HA② B3 祝殿 II 台 3140	
	4		金?金箔	軸部	8.7	—	3.0	0.25×0.27 ほぼ円形	—	5.7	0.22×0.28 0.2×0.37 菱形	3.4	頭部欠、頭部でねじれ、竿部は柳葉状に尖る。「ね」印刻?	HA④ H19 III 台 1204
	a		金?金箔	完	11.2	2.2×1.5	3.4(1.7) 円形	0.35 円形	—	7.8	0.45~0.5 方形	16.7	頭部は六弁花、薄手。軸は直状。先端は四角錐。花卉の裏に「ふ」?印刻。	HA③ E17 II 台 668
	b		青銅金箔	軸部	—	—	—	—	—	7.5	0.34~0.42 方形	7.6	竿部のみ。先端四角錐丸み。僅かに金箔残。クリーニングにより赤み。	HA② B2 II 上 台 3083
	c		青銅金箔	軸部	—	—	3.3	0.23	—	4.5	0.25×0.28 方形	3	頭部欠。先端は四角錐。折損部に金を確認。若干の錆。	HA② G1 瓦屋 II 台 3360
	5		金?金箔	完	9.3	1.04 厚さ0.08	1.4	0.27	—	4.1	0.21×0.3 扁平六角形	4.06	直状、先端丸み。裏面に新しいキズ(斜め)。	HA④ E15 II 台 1189
	6		金?金箔	完	10.9	1.05	2.4	0.25×0.28	—	—	0.15×0.25 扁平方形	3.1	完形、直状。頭部は0.3mm斗薄く、湾曲。金箔4割残。軸部は板状。	HA② J6 II 取 59 X 36099.659.Y25539.132.Z2.491
	7		金?金箔	完	13.4	1.0	2.8	0.27 六角形	—	9.0	0.24 円形	5.2	頭部にかけてゆるやかに湾曲。頭部は丸形。軸部はほぼ棒状、先端丸み。金箔6割残。	HA② B20 II 取 191 X 36148.486.Y25544.288.Z1.989
	8	アルミ	完	15.7	1.55 0.15	2.5	0.45×0.5 扁六角形	—	10.2	0.5~0.65 六角形	8.7	直状、先端は六角錐、やや丸み。	HA③ D16.17 II S-4 台 613	
	d	金?金箔	完	11.5	0.97	2.5	0.05 扁六角形	—	7.5	0.18×0.28 扁四角形	6.3	頭部は卵形、竿部は棒状、先端で鋭く尖る。	HA② I4 II 取 75 X 36100.795.Y25535.883.Z2.275	
	e	金?金箔	完	11.2	1.01	3.3	0.28×0.24 扁六角形	—	6.8	0.28~0.24 扁六角形	4.5	頭部、薄く、円状。軸部は細く、竿部はほぼ中央で太く、先端に向けて細くなる。先端丸み。	HA② H2 名嘉座 II 取 23 X 36123.146.Y25532.073.Z2.712	
	f	青銅金箔	完	13.8	1.4	2.4	0.45×0.5 円形	—	10.0	0.43~0.5 扁六角形	18.8	ムディで曲がる。若干、金箔が残る。	HA③ G7 II 台 661	
	g	青銅金箔	完	8.2	0.85	3.3	0.25 円形	—	4.1	0.25 円形	4.3	竿部破損、頭部は一部溶ける。縦位に不規則な調整痕。錆あり。	HA② A7 II 晶 台 3187	
	9	金?金箔	完	8.2	0.35	2.2	0.22 丸	—	5.0	0.2×0.3 扁平六角~方形	2.6	頭部から1/3の部分でねじりながら屈曲。先端で扁平。	HA④ I 台 4591	
	10	銅	完	12.5	0.45	3	0.25~0.4 丸	—	8.2	8.8 六角形	8	ほぼ直状。竿部太い。	HA① N15 III 石列検出時 取 2	
	11	金?金箔	完	17.0	0.55	2.8	0.2 丸	—	11.8	0.3 六角形	5.8	ほぼ中央で湾曲、先端丸み。頭部背面と竿部の中程に若干の金箔が確認できる。	HA② D1 II 取 185 X 36138.975.Y25543.758.Z2.43	
	12	金?金箔	完	17.4	0.56	3.7	0.26×0.25 丸	—	11.4	0.25 六角形	7.5	頭部で曲がる。頭部近くに金箔が残る。先端丸み。	HA② B3 II 取 179 X 36137.225.Y25555.576.Z2.466	
	h	金箔	完	12.4	0.53× 1.9 厚0.1	3.0	0.25×0.3 扁六角形	—	7.5	0.25×0.3	6.1	ほぼ直状、竿部は棒状。頭部中央で緩やかに湾曲。	HA③ G17 S-3 II 台 605	
i	金箔	完	12.3	0.48	5.2	0.31 円形	—	5.6	0.36 六角形	5.8	頭部緩やか、先端から3.5cmで55度曲がる。器面調整は縦に不規則な筋残る。	HA② B4 II 取 172 X 36138.569.Y25557.294.Z2.381		
j	青銅金箔	完	11.95	0.43	5.4	0.24	—	5.25	0.3×0.35 0.16 扁六角形	4.5	頭部でひねる。竿部は先端に緩やかに細くなる。若干錆。器面雑。	HA② B6 II 晶 取 19 X 36130.834.Y25566.055.Z2.488		
k	金?金箔	完	13.5	0.63	5.9	0.33×0.28 0.23 円形	—	5.8	0.35×0.38 0.14 六角形	5.8	ほぼ中央で、緩やかに湾曲。	HA② J3 II 取 74 X 36109.988.Y25529.831.Z2.567		
l	青銅金箔	完	10.9	0.6× 0.35	3.0	0.35 円形	—	6.5	0.35 六角形	6.5	頭部は他に比べて短い。竿部は先端方向に細くなる。	HA② A6 II 取 71 X 36132.209.Y25571.594.Z2.575		
m	金?金箔	軸部	—	—	△0.5	0.18×0.22 ほぼ円形	—	6.5	0.21×0.2 扁六角形	1.8	頭部欠、先端から2.0cmでほぼ90度で曲がる。	HA② I4 II 取 76 X 36100.327.Y25533.944.Z2.459		
n	青銅金箔	頭部	—	0.25×—	3.1	0.18×0.22 ほぼ円形	—	—	扁六角形	1.9	頭部の一部、竿部欠。	HA② B6 II 取 70 X 36131.962.Y25568.546.Z2.275		
o	青銅金箔	頭部	—	0.62	—	0.2×0.3 ほぼ円形	—	—	—	1.7	頭部のみ、ねじれ部で破損。	HA② B7 II 晶 取 18 X 36127.794.Y25569.502.Z2.491		

<凡例>完：ほぼ完形 △：残存部

第三章 5

(19) 銭貨

計 51 点の資料が得られており、全資料の観察を第 86 表に、平面分布を第 146 図に示した。地区別の出土点数は、HA②で 26 点、HA③で 13 点、HA④で 12 点、HA①では 0 点である。近世銭貨である寛永通寶が HA②・③地区に偏在していることが分かるが、非出土地が近世以降に耕作域として利用されていたことの傍証となるであろう。

中国銭の内訳は、唐銭(開元通寶・乾元重寶) 2 点、北宋銭(皇宋通寶・熙寧重寶折二銭・元豊通寶・元祐通寶折二銭・紹聖元寶・政和通寶折二銭) 6 点、南宋銭(端平通寶当三銭) 1 点、明銭(洪武通寶・永楽通寶) 5 点、清銭(乾隆通寶・道光通寶) 2 点となっている。

唐銭(図 1・2)：開元通寶(図 1)は、今回得られた資料の中では最も古い 621 年初鑄のものである。HA② L4 からの出土で、周辺からは貝塚時代後期の人骨(巻首図版 11)やくびれ平底土器なども得られている。乾元重寶(図 2)は初鑄造が 758 年で、発行当初は当十銭であった。本銭はこれまで県内での古い時期の遺跡からの出土例がなく、僅かに首里城跡で数例報告されているのみであった。従って、後続する時期に使用された可能性も高いのだが、周辺で出土するくびれ平底土器の比率が高かったことは留意しておきたい。

北宋銭(図 3~8)：皇宋通寶(図 3)は 1038 年初鑄造で、北宋銭の中では日本での出土量が最も多いものである。熙寧重寶(図 4)は、1071 年初鑄造の折二銭である。孔縁不揃となる私鑄銭が多いとされ、本品もそれに当たると考えられる。元豊通寶(図 5)は 1078 年の初鑄造で、北宋銭の中では本邦模鑄が多かったことでも知られる。元祐通寶(図 6)は 1093 年初鑄造の折二銭で、「祐」側にバリが残る。紹聖元寶(図 7)は 1094 年の初鑄造で、孔にバリが残り隅丸を



呈する。政和通寶（図8）は1111年初鑄造の折二銭である。本品は「政」と「和」の文字配置のズレが大きい。南宋銭（図9）：端平通寶（図9）の1点のみである。出土した銭貨で最も大きく、当三銭とされる。今帰仁城跡（1983今帰仁村教委）で欠損品の出土事例があるが、本資料は完品である。

明銭（図10・11・13・14）：洪武通寶は計3点得られ、うち2点を図示した（図10・11）。いずれもHA④の出土である。永楽通寶は2点得られた（図13・14）。図14は「楽」「通」部分が欠落するが、字面は明瞭である。

清銭（図12・15）：乾隆通寶（図12）は、金メッキが施される薄手のもので、4ヶ所に径1mmの孔が認められる。裏面には鑄造地を示す文字が残っていた。雲南宝雲局製か。道光通寶（図15）は1782年初鑄造である。裏面に文字あり。日本銭（図16～24・26）：寛永通寶31点と無文銭3点の計34点が出土した。寛永通寶はHA②で18点と最も多く、祝女殿内屋敷のウワーフルからは3枚重なった状態で出土している。鑄造期間は3期に大別されるが、1期（古寛永、1636～1659年）が2点（図20・21）、2期（文銭、1668～1683年）が計4点（図16）、それ以外は3期（1697年～）に位置づけられる。3期のものには、裏面に「元」のある「高津銭」（1741年～）が2点（図17）、「足」のある「足尾銭」（1741～）が2点（図18）も認められた。無文銭の図24は鉄銭と思われる。図26は銅製で、型抜きにより片方の縁が湾曲している。

不明銭（図25・27）：図27は、径3.0cmに対して孔径0.45cmと小さく、たたいて伸ばしたものであることが分かる。素材は中国銭であると思われる。

小結

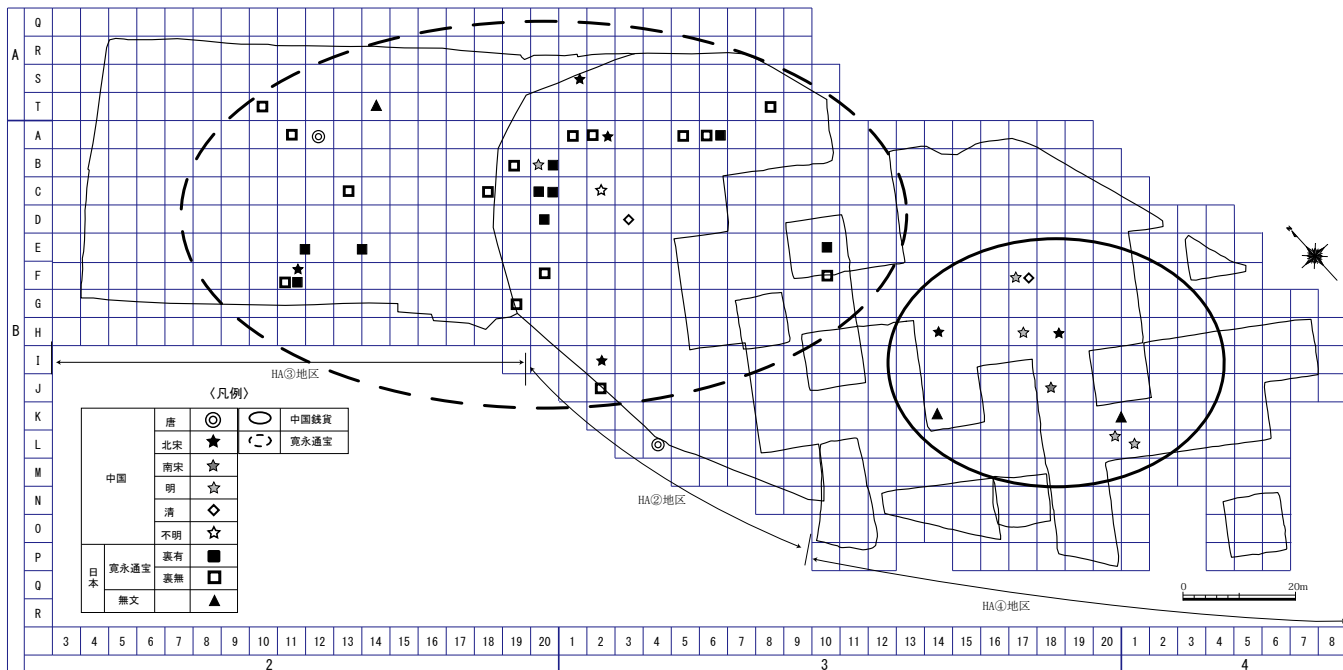
近世鑄造と分かる銭貨（清銭・寛永通寶）については、道光通寶1点を除いて全て近世居住域（SD42以北）からの出土である。これに対して中世以前の輸入銭（後代の模鑄銭を含む可能性あり）は、青磁や染付などの中国陶磁器が多いHA④地区からの出土が最も多くなっている。また、折二銭や当三銭といった大銭に磨輪されたものがみられないことも考えると、中世銭貨の多くは宮城Ⅴ期<sup>註</sup>におけるあり方を物語っていると言って良いであろう。村落遺跡からの複数の大銭出土は、改めて特記すべき事例である。

また、唐銭である開元通寶・乾元重宝の出土地点周辺では、貝塚時代後期の人骨・土器も出土している。これらの唐銭が、当地において宮城Ⅲ期<sup>註</sup>にもたらされたものとしても矛盾は生じない結果となった。

註：宮城弘樹 2008 「琉球出土銭貨の研究」『出土銭貨』第28号 出土銭貨研究会

第85表 銭貨出土量

地区	層	年代 遺構	中国						寛永通寶		無文	合計
			唐	北宋	南宋	明	清	不明	裏有	裏無	無文	
			HA③	II	1	1					2	
	II	S-2.11		1							1	2
		小計	1	2					2	7	1	13
HA②	II		1			1	1	1	5	13	1	22
	III	SK2.4.9		2							1	3
		小計	1	2		1	1	1	5	13	1	25
HA④	II				1	2	1		1	1		6
	II	SD41		1								1
	III			1		2					1	4
	III	SP1220						1				1
		小計		2	1	4	1	1	1	1	1	12
		合計	2	6	1	5	2	2	8	22	3	51



第146図 銭貨 平面分布

第86表 錢貨観察一覧

第図 図版	図 番号	錢貨名 錢文	背 文字	初鑄造		残存	外径 (cm)	内径 (cm)	縁幅 (mm)	縁厚 (mm)	重量 (g)	字体	内縁・観察	地区・グリッド・層 遺構・台帳番号
				年	代									
	1	開元通寶	不明	621	唐	完	2.7	0.70	1.5	0.50	7.5		縁・字明瞭。	HA② L4 II 三良 取99
	2	乾元重寶	無	758	唐	完	2.4	0.70	1.8	1.00	3.8		当十錢。縁・字明瞭。	HA③ A12 II 台639
	3	皇宋通寶	不明	1038	北宋	完	2.4	0.70	2.0	0.10	2.5	真書	欠け・ヒビ割れ・歪み。強い緑青。	HA③ S1 II 台660
	4	熙寧重寶	無	1071	北宋	完	2.9	0.70	3.0	0.08	7.1	真書	折二錢。裏面の孔縁不揃い。緑青。	HA② A2 III SK004 取15
	5	元豊通寶	不明	1078	北宋	完	2.5	0.50	3.0	0.10	3.1	行書	ヒビ割れ。	HA④ H14 II SD41 台3029
	6	元祐通寶	無	1093	北宋	完	3.1	0.70	2.0	0.20	11.0	行書	折二錢。「祐」側にバリ。強い緑青。	HA② I2 III SP9 取106
	7	紹聖元寶	無	1094	北宋	完	2.4	0.60	2.5	1.00	4.0	篆書	字面磨滅。孔にバリ。	HA③ F11 II S-2 台608
	8	政和通寶	無	1111	北宋	完	4.1	0.70	3.0	0.10	6.7	分楷	折二錢。字面磨滅。ヒビ割れ。緑青。	HA④ H18 III 台3029
	9	端平通寶	無	1234	南宋	完	3.6	1.10	2.0	0.20	11.0		当三錢。縁・字明瞭。緑青。	HA④ J18 II 台4615
	10	洪武通寶	無	1368	明	完	3.2	0.70	3.0	0.20	3.0		字明瞭。孔にバリあり。	HA④ L1 II 台1218
	11	洪武通寶	不明	1368	明	完	2.4	0.60	2.0	0.20	3.7		字明瞭。孔にバリあり。ヒビ割れ・歪み。表面に強い赤錆。	HA④ H17 III 台1203
	—	洪武通寶	不明	1368	明	1/2	2.2	0.60	1.0	0.10	1.9		縁・字明瞭。	HA④ L20 III 台1219
	12	乾隆通寶	文字	1736	清	完	2.6	0.55	3.0	0.20	5.7		字明瞭。4箇所に小孔。緑青。	HA② D3 II 祝殿 取87
	13	永楽通寶	無	1408	明	完	2.5	0.65	2.0	0.10	4.1		字面磨滅。僅かに薄い。	HA② B20 II 祝殿 取190
	14	永楽通寶	無	1408	明	1/2	1.0	0.65	1.5	0.10	1.7		「楽」「通」欠。字明瞭。孔にバリあり。	HA④ F17 II 台1198
	15	道光通寶	文字	1782	清	完	3.2	0.50	2.0	0.10	3.8		字明瞭。孔にバリ。	HA④ F17 II 台4614
	—	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.4	0.65	2.5	0.10	3.1		縁・字明瞭。白銅銭？	HA② A6 II 晶 台4131
	—	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.4	0.65	2.0	0.10	3.2		縁・字明瞭。	HA② D20 II上 祝殿 畜舎 台4127
	—	寛永通寶	不明		日本	完	3.0	—	—	0.08	12.6		3枚が重なったままくっついている。	HA② B19 II 祝殿 フ02 取3
	—	寛永通寶	不明		日本	完	2.1	0.65	2.0	0.07	2.4		表面のみ強い赤錆。	HA② B19 II 祝殿 フ02 取5
	—	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.4	0.65	2.0	0.06	3.5		字明瞭。歪み。	HA② B20 II 祝殿 取8
	16	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.5	0.50	2.0	0.10	3.8		縁・字明瞭。孔にバリ。	HA④ E10 II 台1186
	—	寛永通寶	元	1741	日本	3/4	2.0	0.60	2.0	0.10	1.8		孔にバリ。	HA③ F11 II 台667
	17	寛永通寶	元	1741	日本	完	2.2	0.60	2.0	0.10	2.2		字明瞭。孔にバリ。	HA③ E11~14 II 台659
	18	寛永通寶	足	1741	日本	完	2.2	0.68	2.0	0.20	2.4		字明瞭。	HA② G20 II 瓦屋 取9
	—	寛永通寶	足	1741	日本	完	2.2	0.68	—	0.20	2.6		字面磨滅。	HA② G20 II 瓦屋 取9
	—	寛永通寶	無		日本	1/2	2.2	0.68	2.0	0.03	1.7		字明瞭。	HA② B19 II 祝殿 フ01 取2
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.2	0.65	2.0	0.08	2.7		表面のみ赤錆。	HA② B19 II 祝殿 フ02 取4
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.4	0.71	—	0.20	3.8			HA② A6 II 晶 取30
	—	寛永通寶	無		日本	3/4	2.4	0.63	2.0	0.06	2.5		縁・字明瞭。ヒビ割れ・歪み。	HA② G19 II 瓦屋 取10
	—	寛永通寶	不明		日本	完	2.3	0.70	2.0	0.05	2.8		字明瞭。歪み。緑青。	HA② T8 II 晶 取29
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.2	0.68	2.0	0.10	3.0			HA② F20 II 瓦屋 取62
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.2	0.68	2.0	0.09	2.8			HA② A1 II 祝殿 取46
	19	寛永通寶	無		日本	完	2.3	0.60	1.5	1.00	2.1		縁・字明瞭。赤味が強い。	HA③ T10 II 台670
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.3	0.68	2.0	0.02	2.5			HA② A2 II 祝殿(母屋) 取15
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.2	0.80	2.0	0.01	1.9		字不明瞭。裏面縁なし、ヒビ割れ。	HA② J2 II 瓦屋 取41
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.3	0.60	2.0	0.10	2.8		孔にバリ。	HA④ F10 II 台1193
	20	寛永通寶	無	1636	日本	完	2.5	0.60	2.0	1.00	2.8		字明瞭。緑青。古寛永。	HA③ T10 II 台671
	21	寛永通寶	無	1636	日本	完	2.4	0.65	1.0	1.00	3.6		字明瞭。古寛永。	HA③ C18 II 台654
	22	寛永通寶	無		日本	完	2.0	0.78	1.5	1.00	2.0		薄い。孔大きい。	HA③ A11 II 台662
	23	寛永通寶	無		日本	完	2.4	0.62	2.0	1.00	3.1		字明瞭。	HA③ A11 II 台640
	—	寛永通寶	無		日本	3/4	2.4	0.65	2.0	1.00	1.7			HA③ C13 II 台655
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.5	0.68	2.0	0.10	2.5		ヒビ割れ・歪み。緑青。	HA③ F11 II 台667
	—	寛永通寶	無		日本	完	2.4	0.65	2.0	0.10	2.5		緑青。	HA② A5 III SK002 台4121
	24	無文銭	無		日本	完	2.1	0.60	不可	0.10	1.2	—	鉄錆。	HA④ K14 III 台1216
	25	〇〇〇寛	無		不明	完	2.3	0.60	1.5	0.10	2.0	不明	孔にバリ残る。歪み。緑青。中国？	HA④ K20.01 III SP1220 台4069
	26	無文銭	無		日本	完	1.9	0.85	1.0	1.00	0.9	—	型抜き。表から裏に縁曲がる。緑青。	HA③ T14 III下 S-11 台672
	—	無文銭	無		日本	完	1.8	0.75	—	0.04	1.1	—	型抜き。表から裏に縁曲がる。	HA② T2 II 祝殿 台4129
	27	不明	不明		中国	完	3.0	0.45	不可	0.02	3.8	不明	タタキにより、孔は小さく、縁は薄い。模鑄銭か。	HA② C2 II 祝殿 取184

〈凡例〉○：判読不可 □：欠 完'：ほぼ完形





图版 102 钱货



第 88 表は、平面分布における円盤状製品の出土状況を受け、屋敷跡・遺構の出土量を示した。HA ②の屋敷跡では祝女殿内が圧倒的に多く 137 点、照屋先生、瓦屋又吉小、名嘉座、畠は二桁台を示し、祝女殿内小、三良又吉小、東大屋小、アガリミチ、ナカミチ、ワキミチの道路遺構全体で一桁台である。この結果 HA ②では、ほぼ戦前の屋敷跡から出土していることが判る。

HA ③の屋敷跡では、HA ②に比較し多くないが、詳細は大屋、蒲伊礼小、ナカミチで二桁台、その他の屋敷、石組遺構に少量認められる。種類で見ると、沖縄産無釉陶器が最も多く、次いで本土産磁器が出土する。青磁、染付、白磁、沖縄産施釉陶器は二桁台である。

次に素材となる陶磁器類の産地や年代の特徴を、確認した範囲内で記述する。

#### 中国産（青磁・白磁・染付・褐釉陶器）

青磁の多くは底部を使用している。その中で、ある程度の年代把握ができた資料を示した。器形を判断できた中では、碗が 31 点と最も多く、次いで皿 9 点となっている。窯の産地は龍泉窯が 30 点、福建・広東系 5 点とほぼ龍泉窯である。年代別では 14C～15C が 3 点、14C～16C が 3 点、14C 後半～15C 前半 1 点、14C 後半～15C 中頃 18 点、14C 末～15C 代 1 点、15C 後半～16C 中頃 2 点、15C 代 4 点、明代 1 点である。

白磁も底部を使用したものが多い。器形の判断できる資料は碗が 9 点、皿 7 点、小碗 1 点、杯 1 点である。窯の産地は、景德鎮が 1 点、龍泉窯 1 点、福建・広東系 14 点、徳化窯 2 点で福建・広東系が多い。年代別では、14C～15C が 7 点、14C 後半～15C 中頃 2 点、16C 後半頃 1 点、17C～18C 1 点、17C 代 3 点、18C～19C 2 点である。

染付は碗が 38 点、皿 1 点、小碗 1 点でほとんどが碗である。産地は福建・広東系が 31 点、徳化窯 1 点、年代は 17C～18C が 30 点、18C 代 7 点、18C～19C が 1 点である。

褐釉陶器は県内遺跡で中国産・タイ産・ベトナム産の資料が出土するが、当遺跡の円盤状製品に点数は少なく、中国産の資料が 4 点である。部位は胴部が 3 点、底部が 1 点で、図化した資料は胴部 1 点である。底部資料は底径 5.8cm と小さく、平底で器形は小型の壺が想定される。年代の把握できたものは 16C 代が 1 点ある。以上、青磁・白磁・染付に関しては、高台のつくりや見込み部分の特徴から古手の資料を使用していることが判った。

#### 本土産（陶器・磁器）

本土産磁器は胴部が多く、図柄の中心部を残し打ち欠くため、器形の判断できる資料は少ない。器種の把握ができた資料は碗が 4 点と小碗 6 点、皿 2 点、底径の大きさから、大皿の底部と考えられるものがある。産地・年代で判断できた資料は、肥前・波佐見焼（18C 前～中頃、江戸後期 1780 年～1860 年）、瀬戸・美濃産（明治以降～大正時代）、砥部焼などがみられる。また、高台の形態が三日月高台（片薄高台）になるものが幾つか確認された。高台を削り出す際、轆轤の中心を外れ高台の輪が三日月状に不整形な円を生じたもので、古唐津などにみられるものである。

本土産陶器は点数が少ないが、図柄などから判断できたものには瀬戸・美濃焼の他、内野山焼・薩摩焼も少量ながら確認されている。

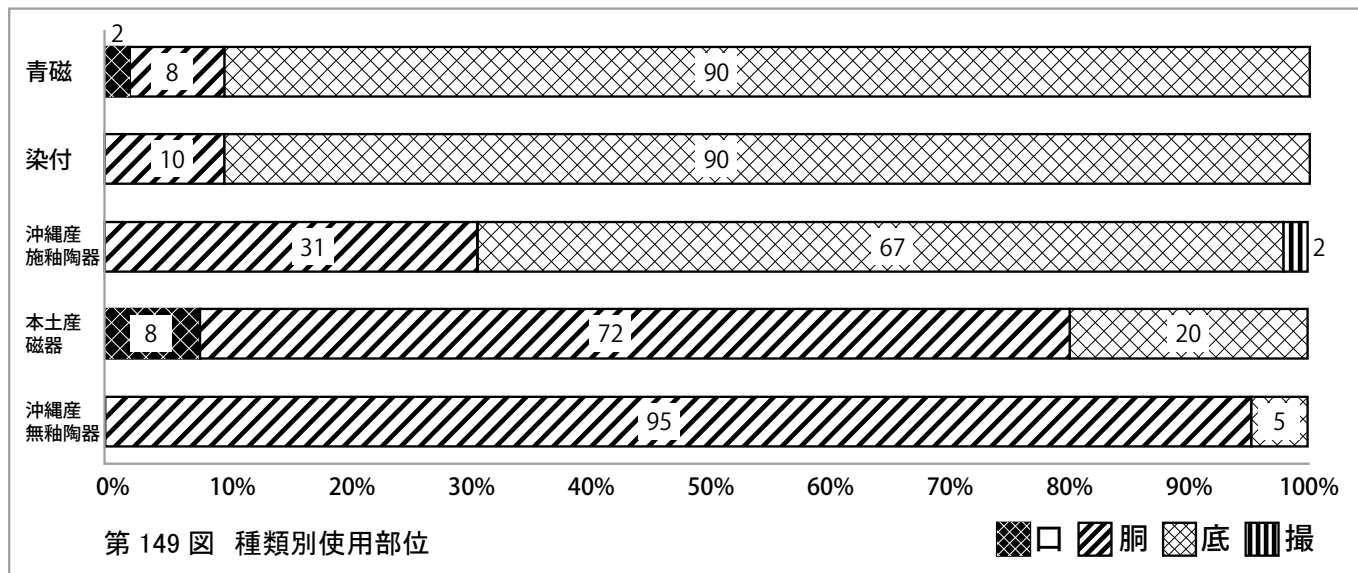
#### 沖縄産（施釉・無釉）陶器

沖縄産施釉陶器は底部が多く、器種は碗が多い。沖縄産無釉陶器は壺類が多い傾向にあり、胴部は中央部分を細かく打割するため器種の特定は困難だが、底部は底径サイズから大小様々な大きさの壺類がある。

第 149 図では、量の多い種類を部位別に比率で示した。青磁・染付・沖縄産施釉陶器は大半が底部を用い、沖縄産無釉陶器・本土産磁器は逆に胴部が多く使用される。青磁・染付は圧倒的に底部が多く 90% を占める。沖縄産施釉陶器は 67% が底部、31% が胴部である。胴部の使用が多い本土産磁器の割合は、胴部 72%、底部 20%、口縁部 8% である。沖縄産無釉陶器は胴部が 95%、底部は僅かに 5% である。図に示した器種も含め遺物全体の割合は（瓦及び本土産磁器の口縁～底部を除く）、口縁部 12 点で 2.2%、胴部 336 点で 60.6%、底部 206 点で 37.2% と部位全体では胴部が多く、青磁・白磁・染付に限り底部が多い。

第 88 表 屋敷別遺物出土量

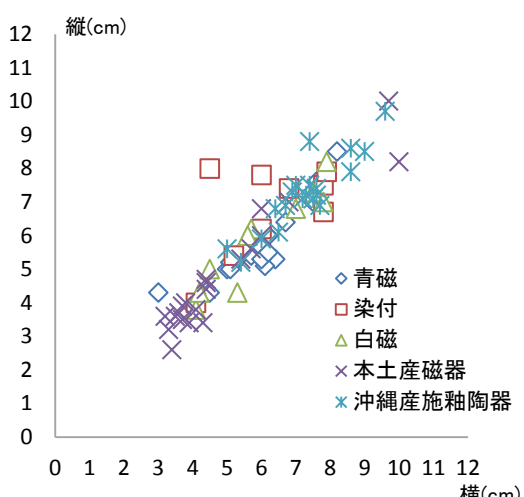
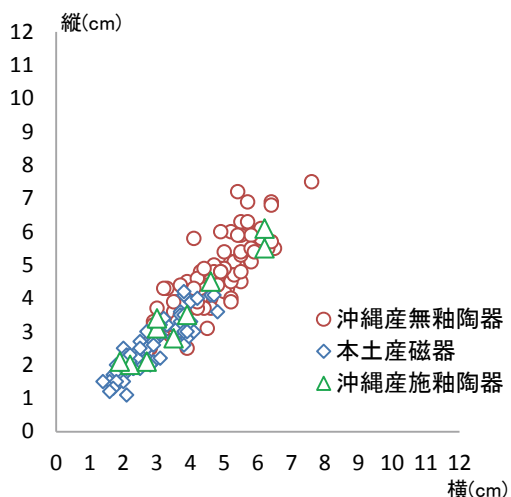
屋敷 (ミチ)名	中国産				本土産 陶器	本土産 磁器	沖縄産 施釉 陶器	沖縄産 無釉 陶器	陶質 土器	不明 陶器	合計
	青磁	染付	白磁	青磁? 白磁?							
祝女殿内	12	19	7		1	34	17	46	1		137
祝女殿内小								1			1
瓦屋又吉小	1	1	3			12	2	8			27
照屋先生	6	3	3		1	5	4	12	1		35
三良又吉小	1	1	1					4			7
名嘉座	3	3				5	3	11			25
東大屋小		1				1	1	1			4
畠	3	8	2			5		17	2		37
アガリミチ	2	1				1	1	4			9
ナカミチ	2	2	1			13		11			29
ワキミチ	1	2				4		1			8
ウラミチ	1						1	1			3
大屋		1				11		3	1		16
蒲伊礼小			1	1		5	3	8		1	19
小渡小						3	1				4
仲村渠								1			1
道端大屋小						1					1
土坑								1			1
石組遺構			1								1
自然流路			1								1
合計	32	42	20	1	2	100	33	130	5	1	366



第150・151図は、完形円盤状製品の計測値分布図で、使用部位（胴部・底部）ごとに示している。正円から外れる資料の方がむしろ多く、本土産磁器の胴部など図柄で上下が判断できる資料では、縦軸が短い傾向が認められる。また、大きさの違いで遊具としての用途も若干変わると推測されたが、分布が示すように全体的には大・中・小のような明確な区別はできず、胴部資料は1cm台～7cm台、底部資料は3cm台～10cm台の範囲に収まっている。

しかし器種ごとに検討してみると、胴部では特定の器種においてサイズの分散が認められた。本土産磁器は1cm台～4cm台のサイズに集中しており、使用器種には小碗や小杯が多い。これに対して沖縄産無釉陶器は2cm台後半以上のものに限られており、本土産磁器のような小型のものはない。沖縄産無釉陶器には器壁の厚い壺・甕が多いことに起因しているが、重量比では差異がもっと際立つことが考えられる。

底部資料については、高台径・底径がそのまま円盤状製品の大きさとなることが多い。種類ごとの点数が少ないため、胴部資料のような集中傾向や器種による偏りは判断しにくい。青磁は2cm台～8cm台で、器種に碗・小碗・皿・小杯など多くの器形がみられるが、比較的底径の小さい資料を使用している。染付は4cm台～7cm台後半で、形状が縦長などの非円形の資料が多い。雑な打ち割りでは腰部が残ってしまうことがその原因と思われる。白磁は4cm台～8cm台であるが、底部自体が少ない。本土産磁器は4cm前後、6cm前後、10cm台が認められ、10cm台は底径の大きな大皿を使用している。沖縄産施釉陶器は5cm台から9cm台があり集中するのは7cm台が多い。

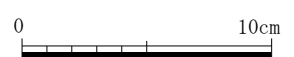
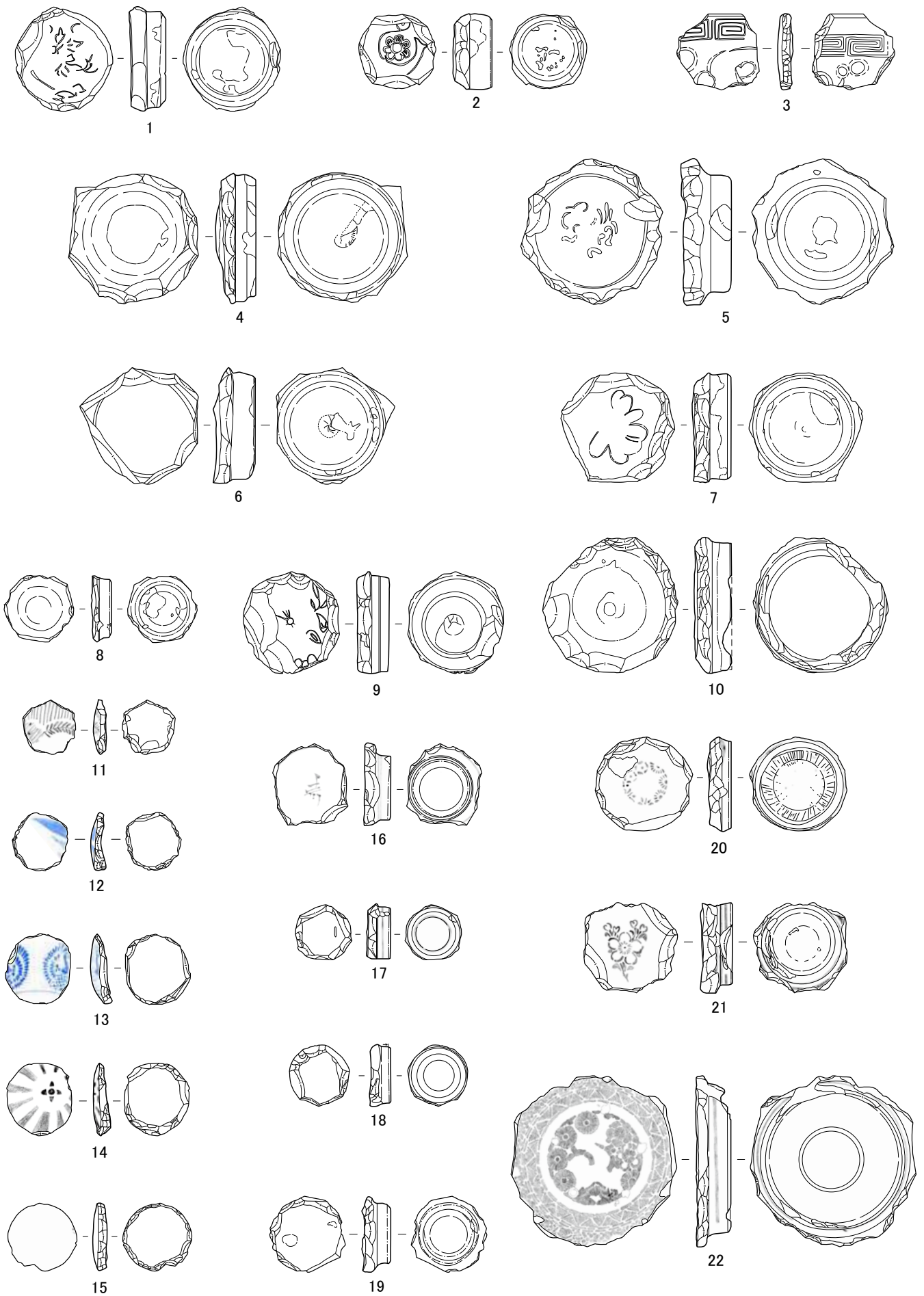


第 89 表 円盤状製品 観察一覧

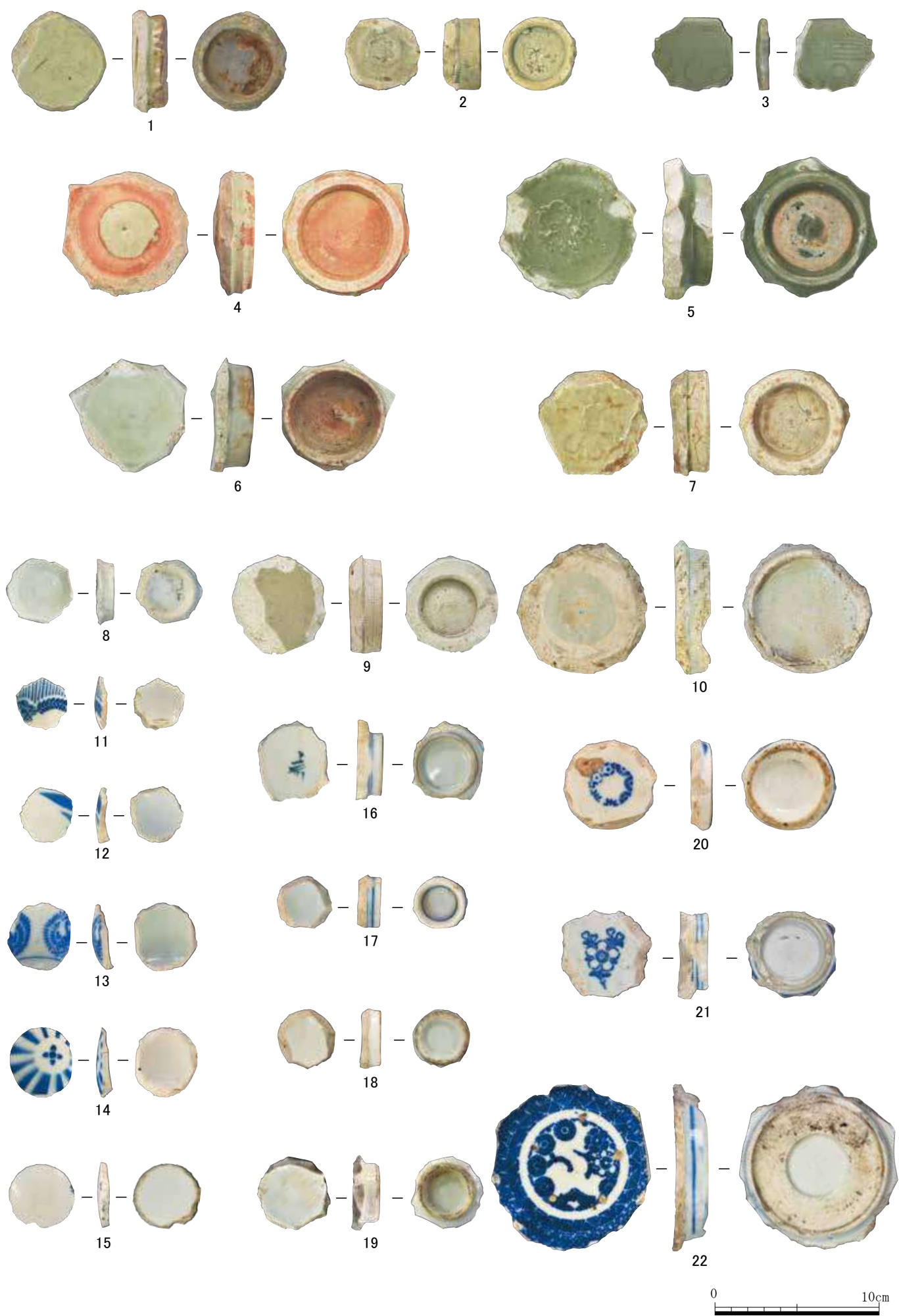
法量単位 (cm / g)

第 152 図・図版 103	図番号	種類	器種	部位	完/破	観察事項	縦	横	厚さ	底径	重さ	地区・グリッド・層遺構・台帳(取上)番号
第 152 図・図版 103	1	青磁	皿	底部	完形	見込みに印花文、釉の厚み薄い、高台部分を残し、打ち割りが雑、一部角を残す	6.1	5.8	2.1	5.6	73.9	HA ② A2 II 取 181 X=36146.298 Y=25553.977 Z=2.195
	2	青磁	—	底部	完形	見込みに印花文、釉は高台内まで掛ける、釉は斑状、色調は緑青色、素地は悪い、打ち割り粗い	4.3	4.5	2.3	4.1	50.6	HA ② A3 S-5 II アガリミチ台 1561
	3	青磁	碗	口縁部	完形	外面に雷文帯+ラマ式連弁文、内面も同文様を施す、打ち割り角を残す	4.2	4.5	—	—	19.5	HA ④ D20 II 台 2012
	4	青磁	—	底部	完形	見込み釉剥ぎ、釉の色調は乳青色、素地は赤味を帯び、打割りは高台、円を成し一部角を残す	7.6	7.6	2.3	6.8	134.3	HA ③ G8 II 台 2650
	5	青磁	碗	底部	完形	見込みに印花文、釉は高台内まで掛ける、釉の色調は深緑青色、打ち割り器壁厚いが丁寧	8.5	8.2	2.9	6.6	189.4	HA ③ A10 II 台 1777
	6	白磁	碗	底部	完形	福建系、16C 後半頃、打割りは粗い	6.8	7.0	2.5	6.0	85.1	HA ④ K19 II 台 2668
	7	青磁	碗	底部	完形	龍泉窯、14C 末～15C 代、見込みに印花文	6.4	6.7	2.3	6.2	101.4	HA ④ F18 III 台 2182
	8	白磁	小碗皿?	底部	完形	高台のつくりは雑な仕上げ、打ち割りは高台のみを残し、円に施す	3.8	4.1	1.2	3.4	13.5	HA ② T1 II 台 637
	9	白磁	碗	底部	完形	見込みに印花文、高台釉なし、打割りは高台きわまで及ぶ	6.0	5.6	1.9	5.5	75.5	HA ② R7 II 皿台 2475
	10	染付	—	底部	完形	見込み釉剥ぎ、釉は高台内に及ぶ、打割り一部雑	7.9	7.9	2.2	7.8	126.1	HA ② B2 I 台 2536
	11	本土産磁器	小碗	胴部	完形	部位は胴～腰部、縦縞に植物の葉の図柄を施す、打ち割りは円に近いがやや雑なつくり	3.2	3.1	0.7	—	6.7	HA ③ C15 II S-5 台 986
	12	本土産磁器	小碗	胴部	完形	胴～腰部、葉が並ぶが図柄不明、下部やや厚い、打ち割りは表面円に近く、裏面は角を残し一部雑	3.4	3.2	0.9	—	8.6	HA ③ F14 IV 台 3216
	13	本土産磁器	小碗	胴部	完形	胴～腰部で鶴丸図と腰部に圏線 1 条、打割り丁寧	4.1	3.8	1.3	—	12.0	HA ③ C12 II 台 3215
	14	本土産磁器	碗	胴部	完形	旭日旗を連想、九州武家の草野氏家紋、十二日足文に類似構図、中心花図柄、周囲打ち割り円形	4.2	3.8	1.0	—	13.5	HA ③ F10 II 台 1866
	15	本土産磁器	碗	胴部	完形	図柄は一部僅かに有り、周縁の打ち割りは丁寧で細かい、ほぼ円形に近い、部分的に欠けを生じる	3.9	4.0	0.8	—	12.1	HA ② E20 II 上台 715
	16	染付	小碗皿?	底部	完形	見込み部分に「寿」の文字、釉は畳付けになく、高台内まで掛ける、高台、腰部を残し丸く打ち割る	4.7	4.4	1.6	3.7	29.3	HA ③ F9 S-32 II 台 1990
	17	本土産磁器	小碗	底部	完形	高台に 2 条、高台内に 1 条の圏線、高台の打割り雑	3.2	3.3	1.4	3.0	13.6	HA ② E3 II ナカミチ台 1462
	18	本土産磁器	小碗	底部	完形	見込みに図柄なく、高台も絵付けなし、小碗で、畳付け部分やや幅あり、これも錆込みの痕跡あり	3.6	3.5	1.3	2.6	14.9	HA ② F20 II 上台 1546
	19	本土産磁器	碗	底部	完形	見込み、高台、図柄、圏線なし、畳付けなし、高台より若干腰を残し打欠く、打割り円形、わりに雑	4.4	4.4	1.7	3.6	22.3	HA ③ G8 II 台 2155
	20	本土産磁器	碗	底部	完形	型紙刷り、見込みに桜、菊の図柄、高台内に錆込み跡、高台低い、畳付け丸味を帯び、打割りは丁寧	5.6	5.7	1.4	5.2	36.0	HA ② C1 II 上台 567
	21	本土産磁器	碗	底部	完形	見込みに桜と菖蒲、高台も二本圏線を引く、釉は畳付け以外高台内に及ぶ、打割り雑で角がたつ	5.3	5.4	1.9	4.8	40.5	HA ③ F16 II 台 1962
	22	本土産磁器	大皿	底部	完形	見込みに桜、菊の図柄、裏面は蛇の目高台(錆込み?)で高台が低い、他の資料に比較し大きい	10.0	9.7	2.1	8.4	175.8	HA ③ S20-03.T20-02 II 台 1616
第 153 図・図版 104	23	本土産陶器	—	底部	完形	内野山焼、釉色調：見込み黄褐色、腰～高台は緑黄色、三日月高台、高台残し打ち割り雑	5.3	5.4	1.7	5.2	41.4	HA ③ S19 II 台 1162
	24	沖繩産施釉陶器	碗	底部	完形	見込みに釉、周囲を釉剥ぎ、底径小さい、打割り雑	5.2	5.4	1.4	3.6	43.0	HA ③ B11 II 台 2814
	25	中国産褐釉陶器	壺?	胴部	完形	内外面とも周部の打ち割りは円に近く素地は摩耗	2.7	2.7	0.8	—	10.0	HA ④ K01 II 台 2595
	26	沖繩産施釉陶器	碗?	胴部	完形	外面黒釉、内面白濁釉、周縁を細かく円に打ち割	3.1	3.0	1.0	—	9.0	HA ④ G13 II SD42 台 3148
	27	沖繩産施釉陶器	碗	底部	完形	畳付けに釉なし、高台内は釉、一部腰部残し打欠く	9.7	9.6	2.0	8.6	130.3	HA ③ D4 II 台 2689
	28	沖繩産施釉陶器	碗	底部	完形	見込み釉剥ぎ、色調は白濁釉、畳付けに釉なし、高台内に釉掛け施す、打割りは高台残し細かい	7.2	7.3	2.3	6.2	85.6	HA ③ A18 S-12 II 台 532
	29	沖繩産施釉陶器	碗	底部	完形	見込みに釉剥ぎ、色調は白濁釉、畳付けに釉なく、高台内底に釉掛け施す、打ち割りは丁寧	6.9	6.7	2.3	5.8	101.2	HA ③ D-E15 II S-4 貝 1477
	30	沖繩産施釉陶器	碗	底部	完形	畳付けなし、高台内も一部釉掛け、打割り大きい	7.1	7.2	1.7	6.3	60.7	HA ② D3 II 祝殿台 1082
	31	沖繩産施釉陶器	碗	底部	完形	見込み無釉、素地は粗い、高台残し、円に打割る	7.5	7.4	2.0	7.0	64.2	HA ③ B2 D5 II 台 1412
	32	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	酸化炎焼成、内面に器面調整痕が確認、円に近く一部角を残す、打割りはやや雑	3.1	3.3	1.3	—	17.6	HA ③ B2 G11 II 台 1838
	33	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	外面はマンガン釉?内面無釉、周縁を円に打割る	3.1	3.2	1.0	—	15.0	HA ④ E10 SD52 II 台 3217-3
	34	沖繩産無釉陶器	すり鉢	胴部	完形	内面摺目の跡、外面微かに調整痕、打割り円が雑	4.0	4.3	1.4	—	24.3	HA ② B1 II 祝殿台 1945
	35	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	器壁は平坦で厚い、色調外面暗褐色、内面赤褐色、内面に調整痕、打割りは厚いが円形で細かい	4.2	4.6	1.2	—	32.1	HA ② E2 II 上台 1507
	36	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	器壁は薄く、色調は外面が茶褐色、内面赤褐色、打割りは 2 方所角を残し、他の部分は細かい	6.8	6.4	1.1	—	52.9	HA ③ G17 II S-10 台 2108
	37	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	器壁厚い、色調は外面暗褐色、内面赤褐色、内面横方向にカーブ、厚みのわりに胴径小さいと推測	6.9	6.4	2.1	—	102.6	HA ② D20 II 上台 742
	38	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	外面平坦、内面横方向にカーブ、色調は外面暗褐色、内面赤褐色、断面に黒色層有り、打割りは円	4.4	4.3	1.5	—	32.2	HA ③ D16 II 台 3203
	39	沖繩産無釉陶器	壺	胴部	完形	色調：内外面とも赤褐色、両面に調整痕、打割り丁寧	4.0	4.4	0.9	—	17.3	HA ② R7 I 台 2542
	40	沖繩産無釉陶器	壺?	底部	完形	立ち上がりなし底面、平坦、内外暗褐色、打割り丁寧	6.2	5.9	1.2	—	57.6	HA ② K6 II 照屋台 1771
	41	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	内面にへらによる器面調整痕、打ち割りは丁寧	5.9	5.5	1.0	—	53.2	HA ③ F11 II 台 1359
	42	沖繩産無釉陶器	壺?	胴部	完形	胴径小さいと想定、外面アバタ状気泡潰れた痕跡	6.0	6.0	1.5	—	52.3	HA ③ F13 II 台 1171
	43	瓦	平瓦	—	完形	外面上部に桶板留の組痕、内面は布目痕、サイズ小さく、打ち割りは円形に近いが部分的に歪む	4.4	4.4	1.6	—	32.9	HA ③ G11 II 台 1868
	44	瓦	—	—	破損	外面、内面も平坦、色調は内外面とも赤褐色、打割りは丁寧でほぼ円形を呈し、一部欠けを生じる	5.3	4.8	1.5	—	49.4	HA ③ D15 II S-4 台 867
	45	瓦	平瓦	—	完形	外面は組痕とへら削り、内面布目痕、打割り丁寧	6.2	6.0	1.6	—	56.5	HA ② N9 I 台 669
	46	瓦	—	—	完形	外面微かに調整痕、内面に布目痕、打割り細かい	6.1	5.8	1.7	—	60.5	HA ③ E13 II 台 1169

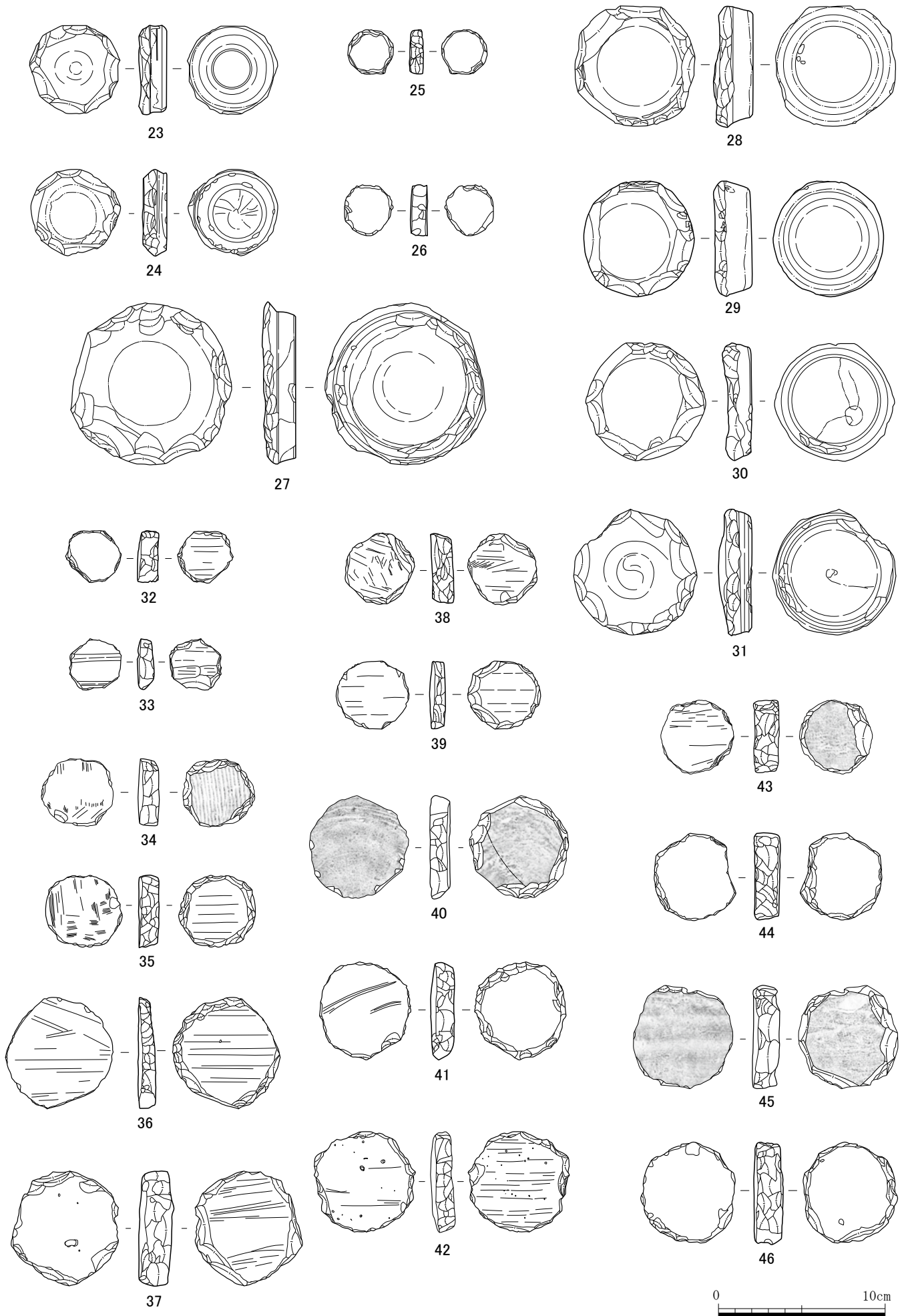




第 152 図 円盤状製品 1



図版 103 円盤状製品1



第 153 図 円盤状製品 2



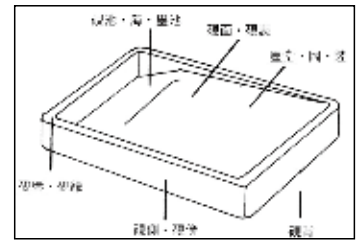
图版 104 円盤状製品 2

## (21) 硯 (すずり)

硯は、HA②9点・HA③9点・HA④2点の総数20点出土した。全ての資料がⅡ層以上からの出土であるため、その帰属時期は近代まで下る可能性もある。全て破損資料であった。第90表に出土量を示している。

第90表 硯出土量

地区	層	遺構	タイプ 石質			幅広			幅細			不明			合計
			赤色頁岩	凝灰岩	砂岩?	赤色頁岩	凝灰岩	砂岩?	頁岩	赤色頁岩	黒色頁岩	凝灰岩			
HA③	Ⅱ	遺構	1	1		1		2	1					6	
						1	1	1						3	
HA②	Ⅱ上	祝殿		1				1				1		3	
										2	2	1		5	
HA④	Ⅱ	SD51					1						1		
					1								1		
合計			1	2	1	2	2	5	1	3	2	1	20		



第154図 硯の部位名称

全ての資料が長方硯と思われ、古手とされる楕円形や円形、異形態の硯は出土していない。幅広のものとの幅の細いものが認められ、便宜上前者を「大」、後者を「小」と呼称する。長さが判る資料のうち、大の最長値は13.7cm(図1)を測る。幅は大で7cm台が4点、小で幅6cm台9点であり、最も幅の細い資料は5.4cmであった。厚さに関しては、硯縁の破損資料が多く確実な値が測れたものは少ないが、概ね2cm台、薄いもので1.7cmの資料が確認できた。例外もあるが、硯の厚さはその幅に比例する傾向にある。

図1は、最も完形に近い資料の1つであるが、墨池の右上端を破損している。表裏面には細かい線条痕が確認できる。硯面の中央部分はすり減り度合いが激しく、使用頻度の高さを示している。裏面右上に「三八」の刻み文字が確認できた。図2は右側端を破損しており、全体の幅は測定できない。この資料も硯面の中央がすり減り、表裏両面にキズが認められる。図3も上端を破損する。硯縁の劣化が著しく、中央部は刃物痕が無数にみられる。前述の2点同様に硯面中央、墨堂は繰り返し使用したため深く抉れ、すり減る。図4は、残存部が全体の二分の一程度と推測される。墨池の部分にあたる硯縁の内側が曲線を成し、断面で確認できるとおり墨池の部分が高い。図示資料の中では最も幅が広い。これもやはり硯面中央がすり減っていた。図5も上端が破損し全体の長さは不明である。他の資料との相違点は、裏面の硯背部分に一段の縁を設けている点である。この資料も図3同様に硯幅が小さい。類似した資料は、首里城跡一之御庭跡の報告で認められる。同報告では、硯背部分に文字を刻んだ資料が見受けられるが、多くは年号・月日・所有者氏名などを刻んだものと思われる。今回の資料は漢数字のみ判別されたものの、それ以外はほぼ判読不能である。

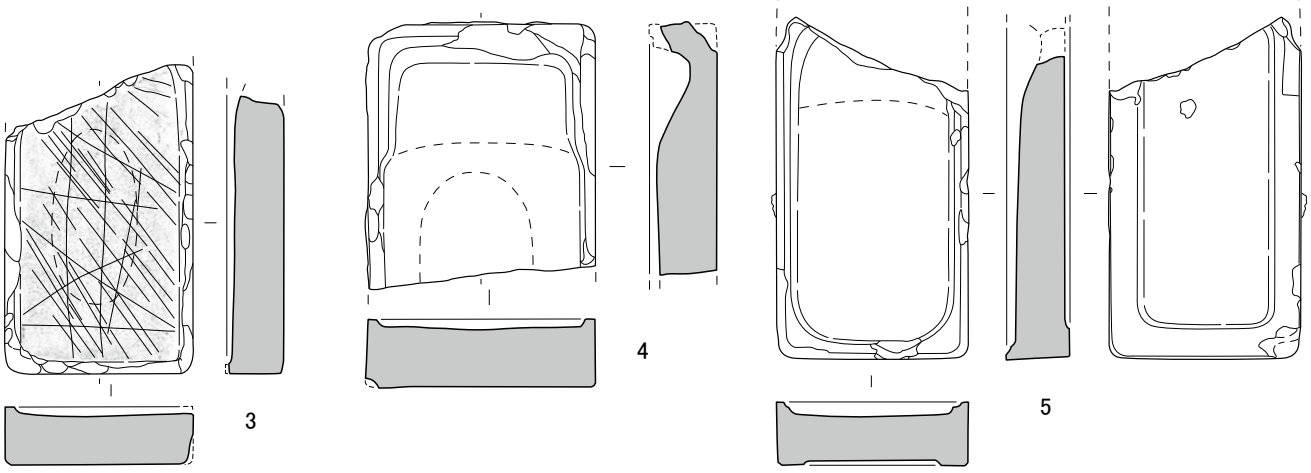
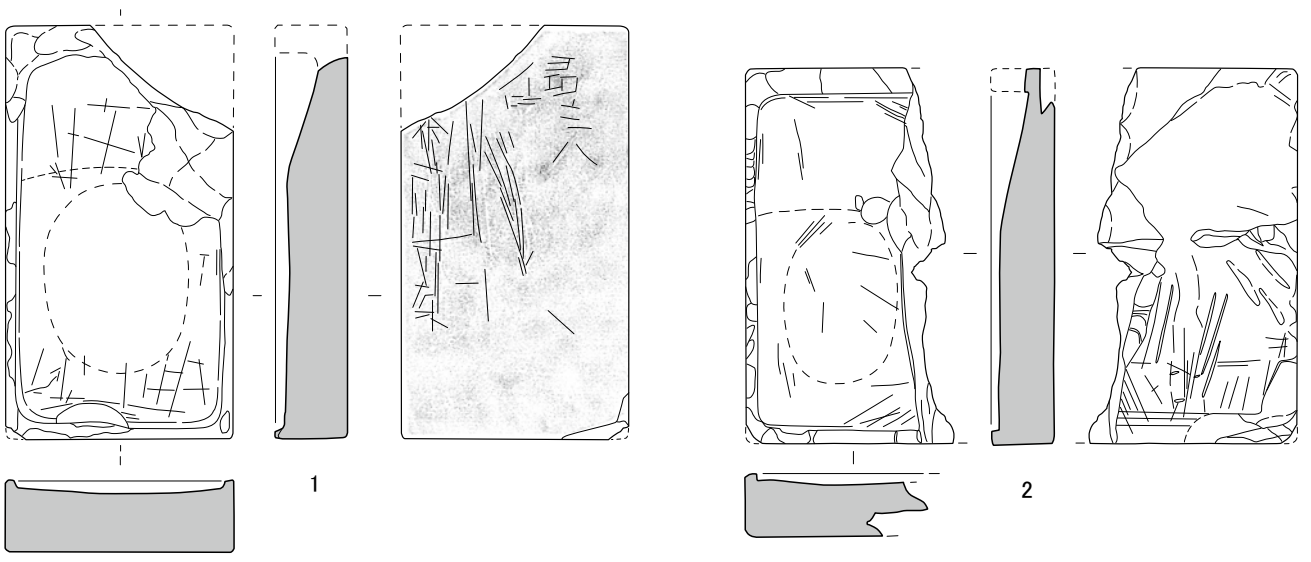
今回の出土資料では、頁岩・黒色頁岩・赤色頁岩・凝灰岩・砂岩の石材を使用しており、大・小両タイプのどちらにも確認される。また、図示掲載しなかったが、人工石の裏面に石板(黒色頁岩)を貼り付けた硯が1点出土している。硯の産地で知られる山口県下関の赤間石・滋賀県近江の高嶋石・三重県熊野の那智黒など本土産や、中国産の石材は確認できていない。その他の図示掲載以外の資料についても、第91表に個別の観察一覧を示している。

第91表 硯観察一覧

法量単位 (cm/ g)

挿図版	図番号	残存形	残存状態	残存度合い	破損箇所	硯幅	表面・墨池/縁二段	裏面縁/上げ底有無	色調	石質	計測値				地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
											残存長	残存幅	残存厚	重さ	
第155図・図版105	1	長方形	欠損	9/10 残存	墨池・破損	幅広	無し	無し	灰色	砂岩?	13.7	7.5	2.4	344	HA④ F10 II 台 1935
	2	長方形	破損	2/3 程度	右・硯縁破損	—	—	無し	黒灰色	黒色頁岩	12.4	6.9	2.0	274	HA② B19 II 祝殿 フ01 台 864
	3	長方形	欠損	8/10 程度	墨池・破損	幅細	—	無し	明砂褐色	凝灰岩	10.2	6.2	1.9	196	HA④ E10 II 台 3212-3
	4	方形	半欠	8/10 程度	墨堂・硯縁破損	幅広	墨池・縁二段	無し	明砂褐色	凝灰岩	8.8	7.6	2.3	189.6	HA② C20 II上 祝殿 台 571
	5	長方形	破損	9/10 残存	墨池・破損	幅細	墨池・縁二段	縁・上げ底	明灰色	砂岩?	11.3	6.4	2.1	214.5	HA② E2 II上 祝殿 台 1498
挿図版なし	図番号なし	長方形	破片	2/10 程度	墨池・墨堂破損	—	—	縁・上げ底	茶褐色	赤色頁岩	8.8	2.2	1.8	49.7	HA② T4 II 祝殿 台 362
	不定形	破片	1/10 程度	墨池・墨堂破損	—	—	石板貼付け	黒灰色	黒色頁岩	7.5	4.6	2.0	35.2	HA② II 祝殿 台 637	
	三角形	破損	2/10 程度	墨堂・破損	—	—	縁・上げ底	明砂褐色	凝灰岩	4.7	6.0	2.1	39.6	HA② F20 II 瓦屋 台 816	
	方形	破損	1/3 残存	墨池・墨堂破損	幅細	—	無し	青灰色	砂岩?	6.9	6.0	—	98.5	HA② K6 I 三良 台 692	
	不定形	破片	1/10 程度	墨池・墨堂破損	—	—	無し	茶褐色	赤色頁岩	4.8	4.2	—	28	HA② E19 II上 祝殿 台 703	
	不定形	破片	1/10 程度	墨池・墨堂破損	—	—	—	赤茶褐色	赤色頁岩	7.3	2.2	—	11.6	HA② T1 II 祝殿 台 525	
	方形	半欠	1/2 程度	硯縁・破損	幅広	—	無し	赤茶褐色	赤色頁岩	7.3	7.2	—	188.8	HA③ B8 II S-12 台 975	
	長方形	半欠	8/10 程度	墨池・破損	幅細	—	縁・上げ底	明砂褐色	凝灰岩	9.6	6.4	2.2	186	HA③ G11 II 台 1658	
	不定形	破損	2/10 程度	墨池・破損	幅細	—	無し	緑茶褐色	赤色頁岩	4.8	6.1	2.2	12.5	HA③ F17 II S-10 台 1226	
	不定形	破損	1/10 程度	墨堂・破損	幅広	無し	裏面・幾何学柄?	明砂褐色	凝灰岩	3.0	7.2	2.0	23.5	HA③ F16 II S-3 台 682	
	不定形	破損	2/10 程度	墨池・破損	幅細	—	縁・上げ底	赤茶褐色	赤色頁岩	7.0	5.4	1.7	102	HA③ E5 II 台 1361	
	不定形	破損	1/4 残存	墨堂・破損	幅細	無し	無し	灰色	砂岩?	4.7	6.1	—	71	HA③ A10 II 台 2818	
	方形	破損	1/3 程度	墨堂・硯縁破損	幅細	—	無し	緑灰色	頁岩	6.5	6.4	—	88	HA③ F17.18 II S-10 台 2034	
	不定形	破損	1/4 残存	墨池・硯縁破損	幅細	—	縁・上げ底	灰色	砂岩?	4.6	6.0	2.5	99.7	HA③ F11 II S-2 台 959	
	不定形	破損	1/4 残存	墨池・硯縁破損	幅細	—	無し	灰色	砂岩?	5.6	6.1	2.3	71.7	HA③ E9 II S-39 台 1075	

凡例： 欠損一部が欠ける程度 半欠二分之一残存 破損二分之一以下の残存 破片一残存が一割程度



第155图·图版105 砚

## (22) 煙管

煙管は総数 45 点得られた。種類は羅宇煙管と延べ煙管の 2 タイプがある。羅宇煙管は雁首と吸口を中央の吸管で繋ぐタイプで、素材別出土数は雁首が石製（シルト岩・砂岩・泥岩）6 点、陶製（沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器）20 点、金属製（真鍮？もしくは銅？）3 点得られ、吸口は陶製（沖縄産施釉陶器）2 点、磁器製（中国産緑釉磁器、本土産肥前系磁器）2 点、金属製（真鍮？と銅？）7 点である。延べ煙管は雁首から吸口まで同一素材の一体型を成すタイプで、出土数は 5 点と少ない。素材別では金属製の真鍮？3 点と銅？2 点の 2 種類が出土した。

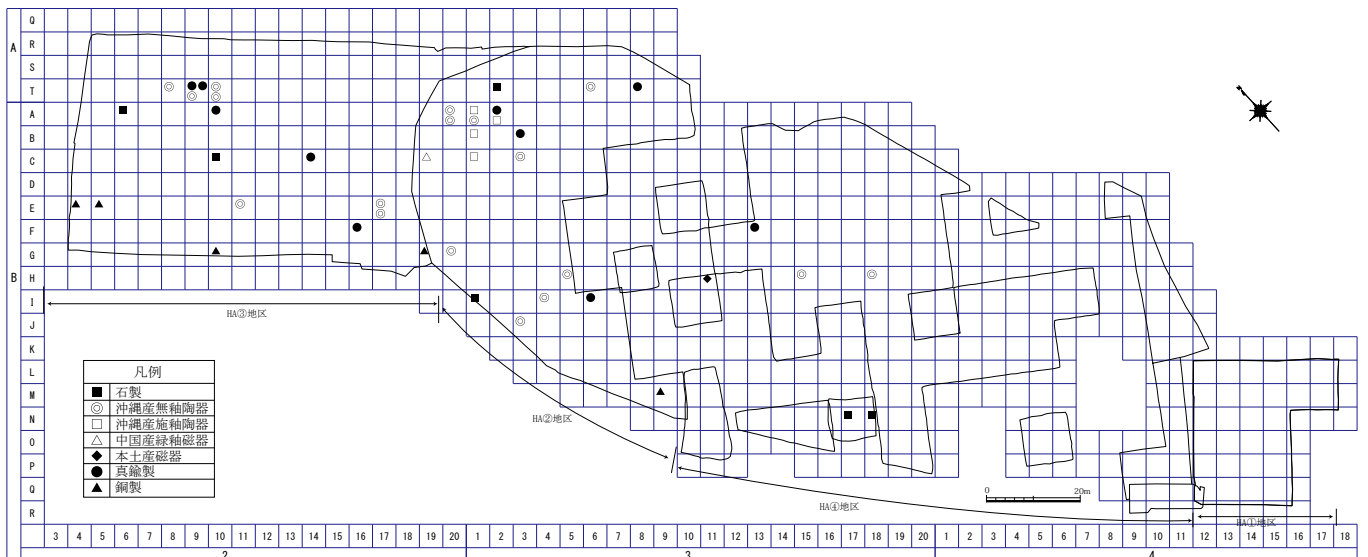
羅宇煙管の雁首が 29 点出土しているのに比べ、吸口の数量が 11 点と少ない。石製の煙管は雁首のみ出土している。陶製も沖縄産無釉陶器は雁首のみ出土しており、吸口では出土していない。沖縄産施釉陶器は、雁首・吸口とも 2 点ずつ認められたが、釉薬の種類は異なる。金属製の雁首・吸口も同数ではなく、セット関係を導き出すに至らない。破損資料が多く、完形は 22 点の出土である。

地区別では HA ②から 21 点と多く、次いで HA ③が 18 点、HA ④は 6 点の出土である。遺構はⅢ層に集中し、層序別にみると、Ⅰ層 5 点、Ⅱ層 30 点、Ⅲ層 2 点、Ⅲ層遺構 7 点、Ⅳ層 1 点でⅡ層が多い。Ⅱ層には屋敷跡の資料も含まれるため詳細は後述する。第 92 表に全体の出土量を示した。

第 156 図に調査区ごとの分布状況を示した。調査範囲では HA ③と HA ②に集中する。個別にみると HA ③が T 8 ~ T 10・A 10 グリッドに集中、E 17 では 2 点出土する。HA ②では T 2・A 20 ~ A 2・B 1・B 3・C 19・C 1・C 3 で集中、このグリッドは祝女殿内にあたる箇所である。祝女殿内からは 9 点、G 19・G 20・I 1 は瓦屋又吉小、H 5・I 4・I 6 は名嘉座の屋敷跡にあたる。地区別遺構は HA ③が A 6・S-256、T 8・S-273-P 2 の 2 点、HA ②が SK002 埋土層 3 点、HA ④の P73・P77 が 2 点、層序は全てⅢ層で 7 点である。種類別では沖縄産無釉陶器がⅡ層屋敷跡で 8 点と点数が多く、Ⅲ層遺構で 2 点、遺構外で 8 点出土する。石製は HA ③の A 6・C 10 から 2 点、HA ②の T 2・I 1 屋敷跡で 2 点、HA ④はⅢ層遺構で 2 点出土する。全体の割合は主に HA ②の遺構周辺に多く、HA ③では S-640（自然流路）から北側グリッドに一部集中的で、自然流路から南側のグリッドでは散在傾向にある。

第 92 表 煙管出土量

地区 層	名称 部位 種類 素材 完・破	羅宇煙管															延べ煙管 一体型		小計	合計				
		雁首						吸口									金属製							
		石製			陶製			金属製			陶製			磁器製			金属製							
		シルト岩	砂岩	泥岩	沖縄産無釉陶器	沖縄産施釉陶器	真鍮？	銅？	沖縄産施釉陶器	中国産緑釉磁器	本土産磁器	肥前系	真鍮？	銅？	真鍮？	銅？								
HA ③	Ⅰ					1											1		1			3	18	
	Ⅱ					5												1	1	1		2		
	Ⅲ 遺構		1			1																2		
	Ⅳ																					1		
HA ②	Ⅰ										1							1				2	21	
	Ⅱ	1	1			8		1			1		1				1	1			1	16		
	Ⅲ 遺構					1	1				1											3		
HA ④	Ⅱ					1									1							2	6	
	Ⅲ 遺構			1	1																	2		
小計		1	1	2	2	2	16	1	1	1	2		2		1		1	4	2	1	2	1	2	45
合計		29						11									5							



第 156 図 煙管 平面分布

第 93 表はⅡ層の屋敷跡から出土した煙管を細分したものである。前述の第 92 表で屋敷跡はⅡ層に含めた為、戦前のもので表に示した。屋敷跡は数多く確認されているが、煙管は 4 箇所の屋敷跡から認められ戦前の屋敷関連のミチなどを含め 18 点である。祝女殿内では煙管が他の屋敷より多く 9 点出土した。名嘉座・瓦屋又吉小・大屋の屋敷では 3 点から 1 点と少ない。ワキミチ・ナカミチ・畠からも僅か出土している。

第 93 表 煙管 屋敷別出土量

名称 / 部位 屋敷(ミチ)名	素材 真鍮製	羅宇煙管(雁首)				羅宇煙管(吸口)		
		石製	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	中国産 緑釉磁器	沖縄産 施釉陶器	真鍮製	
祝女殿内	1	1	1	3	1	1	1	
名嘉座				2			1	
瓦屋又吉小		1		1				
ワキミチ				1				
畠				1				
ナカミチ	1							
大屋		1						

上記の表はⅡ層の屋敷跡の個別表だが、Ⅲ層遺構や遺構外の資料とも検討してみた。Ⅲ層遺構からは全体で 7 点の出土で、屋敷跡(Ⅱ層)の 18 点が多い。遺構から外れた資料は 20 点であったが、層序分けするとⅠ層 5 点、Ⅱ層 12 点、Ⅲ層 2 点、Ⅳ層 1 点となり、この場合も屋敷跡から出土する煙管が多いことが判る。

材質では沖縄産無釉陶器の雁首が多く 8 点である。例外的な資料では中国産緑釉磁器の吸口が 1 点認められる。又、沖縄産施釉陶器の雁首と吸口は各 1 点ずつ認められた。資料の観察状態では釉薬の種類はどちらも透明釉を施しており、釉薬の細かい点は多少異なるが、中央羅宇の部分で繋ぐため小口の径が同じであれば釉薬が異なる場合でもセットとして使用した可能性も考えられる。雁首・吸口両側の小口径の数値が同様の計測値を示す。

又、素材の面から屋敷跡・Ⅲ層遺構・遺構外で比較してみると、沖縄産無釉陶器は屋敷内と遺構以外の箇所で 9 点の同数、Ⅲ層遺構は 4 点、本土産磁器は遺構以外から 1 点である。石製の雁首は、屋敷跡(Ⅱ層)、Ⅲ層遺構から各 3 点、金属製の煙管の出土が遺構以外の箇所では 11 点に対し、屋敷跡では 4 点と少ない。相対的に言えるのは層序分けでは屋敷跡の出土が多く、材質別では屋敷跡から金属製の煙管は少ないことが判断できる。

**I 類：羅宇煙管**－羅宇煙管は素材の種類が多く年代により変遷が迎れる資料もあり多種多様である。雁首と吸口に分けられ、それを繋ぐ接続部分、吸管(羅宇)はほとんど竹(竹管)を用いている。

**1：雁首**－種類は石製・金属製・陶製の 3 種類が確認され、さらに各々素材別に細分される。

**ア：石製**－石製の部位は雁首のみで、吸口は県内遺跡でも出土がない。雁首は 6 点出土し、シルト岩 2 点、砂岩 2 点、泥岩 2 点と石質は微妙に異なるがほぼ同素材とみてよい。

a：砂岩－図 9 は長軸、短軸、厚みともほぼ同程度で円筒形を呈す。側面は軽く面取りをされている。

b：泥岩－図 10 は、やや歪で火皿から小口部分にあたる箇所のつくりが簡素である。貫通する孔の開け方も雑である。図 11 は、図 9・10 に比べサイズが大きく上面・下面・側面とも丁寧に面取りされている。色調は青灰色を呈し、乾燥の為ひび割れが生じている。

c：シルト岩－2 点で、完形と破損資料が各 1 点ずつ出土した。完形資料は 51.0 g と最も重い。

**イ：陶製**－沖縄産無釉陶器が多く 18 点、沖縄産施釉陶器は 2 点で透明釉と黒釉の 2 種類が出土している。沖縄産無釉陶器は火皿の上面観、小口の形状が八角形を呈し、沖縄産施釉陶器は円形を成す。宜興窯の模倣品に類似するものは火皿、小口とも面取りが多く多面体を呈し円形に近い。

a：沖縄産無釉陶器－図 1 は火皿部分が破損、径が大きい。雑なつくりで面取りが八角形ではなく、七角形を呈す。図 2 は火皿・小口の両端が欠ける。形状は八角形を呈す。図 3 は、火皿の立ち上がりが短く、図 4・5 の雁首を含め、沖縄産無釉陶器の中で色調がやや朱色を呈す。首部の面取りは細かく多面的、角を可能な限りおとし円形に仕上げる意図がみられる。火皿の縁がラッパ状に開き、形状も上面観は一般的な八角形ではなく、円形を呈す。小口の断面も同様な事が言える。他の沖縄産無釉陶器に比べ、中国・明代の宜興窯・朱泥(紫泥)の影響を受けた印象を持ち、模倣したものと考えられ類似資料が幾つか出土している。

b：沖縄産施釉陶器－図 6 は脂反し(やにがえし)から首部にかけて破損している。色調は淡緑色を呈し、釉薬は透明釉である。図 7 は完形資料で、黒釉が掛けられている。火皿の部分は径が小さく、つくりは雑で脂反しの部分は粘土が薄く透けている。首部の形状も円筒形を呈し小口まで直口する。

**ウ：金属製**－真鍮製と銅製と思われる資料の 2 種類、3 点出土している。

a：真鍮製－真鍮は銅と亜鉛の合金で六四真鍮(銅 60%、亜鉛 40%)、七三真鍮(銅 70%、亜鉛 30%)と様々な種類がある。出土している資料は雁首の火皿部分が破損し作図に至っていない。

b：銅製－図 8 は小口付近上面が潰れ、溶接縫ぎ目から裂ける。真鍮と比較し、軽量である。

**2：吸口**－雁首に比べ出土量が少ないが、磁器製、陶製、金属製の種類があり各々産地、素材で細分される。



ア：陶製－沖縄産施釉陶器が2点確認されたのみである。

a：沖縄産施釉陶器－図12の特徴は胴部が張り、三日月状の刻みが施される。口付の部分の孔は小さい。釉薬は小口際までは至らない。色調は全体が淡緑色で刻みの部分は若干青味を帯びる。類例資料が湧田古窯跡（I）で出土している。もう1点は胴部に刻みは施されず、孔内部は吸管が止まるよう上げ底状になる。

イ：磁器製－中国産、本土産の産地が違う種類がそれぞれ1点ずつ出土している。

a：中国産－図13の1点のみ出土、他の資料に比べ小型を呈す。口付部分の径は小さく、小口は欠けている。全体に緑釉を掛けるが、釉薬に含まれる鉛の影響で肩部分の表面は銀色の色調が露呈、低下度焼成のため銀化現象をおこし変質したものである。産地は福建省、中国産緑釉磁器という同定結果が出ている。

b：本土産－1点のみの出土である。羅宇煙管の吸口と思われ、縦方向に破損、長軸、小口、口付は測れない。小口の外面周囲に呉須で描かれた図柄は瓔珞文（ようらくもん）である。

ウ：金属製－吸口も雁首同様に真鍮製？6点、銅製？1点が出土している。

a：真鍮製？－図17は肩から口付に向かい先細りになる。細くなる箇所は六面体を呈す。図16も全体に円筒形を呈し前者のような面はつくられていない。図17より口付の部分は径が若干大きく、貫通する孔も大きい。同様の形状の資料が他1点出土している。図15も長さは前者2点に比べ短く、小口から肩にかけてやや膨らむ。口付の部分は僅かに丸みを帯びる。同じ長さの資料が他2点出土している。

b：銅製？－図14は銅製？と考えられる資料で、軽量で小口から口付まで径のサイズは変化せず、筒形で窪み、折れが数カ所に認められる。

Ⅱ類：延べ煙管－雁首～吸口まで一体型で素材は全て金属製、真鍮3点・銅2点の計5点が出土した。

A：真鍮製－銅素材に比較し硬質である。図18は火皿が僅かに潰れる。真鍮製？と考えられ、裏面に「明視堂」の文字を彫り、丸印に×の刻印が認められる。「明視堂」は県外出身者が戦前まで那覇に店を構えていた。

B：銅製－軟質で真鍮より軽く加工が容易で、製作時は金色の発色が華やかな印象を与えたものと推測される。軟質のため劣化した際、器形の損傷が激しく、今回は作図していない。

### 小結

今回調査の遺物内容は戦前、近代～近世の時期が主体で、煙管もこれまで本町で報告した遺跡のうち最も多く出土した。種類や素材も多様で、県内遺跡の煙管と同種の類例資料が幾つか確認できた。本土では金属製煙管が主流だが沖縄では金属製以外に陶製や石製の煙管が多く出土する。県内で最も多く出土する遺跡は湧田古窯跡で、比較すると雁首部分の出土が多い点も本遺跡と共通する。

特徴的な点を挙げると、量的に沖縄産無釉陶器の出土が多いが、雁首はあるが、吸口の出土例はない。雁首は火皿、小口とも断面八角形を呈す。沖縄産施釉陶器は雁首、吸口とも出土する。図12の沖縄産施釉陶器の吸口は胴部にある刻みの形状など安仁屋トゥンヤマ遺跡、湧田古窯跡で類例資料がみられる。

石製の雁首は台湾の遺跡<sup>註1</sup>から出土例もあり台湾から伝搬したとも想定される。県内で出土する石製の雁首は模倣品ではないかとも推測される。石製雁首は首里城でも出土、磚を再利用した二次製品の雁首未製品が出土している。

図18の真鍮製？煙管の裏面に刻印のある「明視堂」とは、戦前、那覇で県外出身者が営む煙管を扱う店である。武器の携帯禁止時代、護身用に雁首から吸い口までが長い煙管を所持したという事例がある。

沖縄産無釉陶器の中でも色調にやや赤みを帯び、朱色を呈す資料がある。他の無釉陶器より若干つくりも良く薄手である。中国、明代の宜興窯の朱泥、又は紫泥と呼ばれ茶器や急須などに多くみられるもので、煙管にも朱泥（紫泥）の影響を受け、模倣したと推測される。雁首の首部及び小口の面取りは細かく、火皿の部分がややラッパ状に開く。類似資料が多く出土している。

図13の中国産緑釉磁器の吸口は他の資料と比較すると小型である。表面に銀色を呈す部分が認められ、同定の結果、銀化現象であるとのこと教示を頂いた<sup>註2</sup>。銀化現象とは中国漢代の鉛釉陶器やペルシャ陶器などで、時代を経て風化、銀色になったものをいう。

文献では琉球のノロは「煙草ふけふけ云々」と唱え、祭祀に関わる場面で煙草を祈祷の道具として使っている。そのため屋敷跡、特に祝女殿内で煙管が多く出土したのも納得される。

註1：李匡悌『三舎暨社内遺址受関水利工程影響範囲搶救考古発掘工作計画』台南県政府の委託を受け中央研究院歴史語言研究所が執行した研究報告 2004.98頁、図版201

註2：大橋康二氏による。

第94表 羅宇煙管（雁首）観察一覧

質量単位 (cm/ g)

第94表 図版 106	図番号	種類	素材	観察事項	完/破	長さ	火皿の 高さ	火皿		小口		重さ	地区・グリッド・層 遺構・台帳(取)番号
								外径/内径 (縦×横)	外径/内径 (縦×横)	外径/内径 (縦×横)	外径/内径 (縦×横)		
157 図版 106	1	石製	砂岩	サイズ:小型 形状:面取り有り、角を削り円形、一部歪み有り	完	2.0	2.4	外:2.0×1.9 内:1.4×1.4	外:1.1×1.0 内:0.8×0.6	8.6	HA④ N17.18 III P77 取100		
	2		泥岩	素材:シルト質で脆い 状態:一部欠けが生じる、形状:つくりは粗雑	完	2.3	3.4	外:2.5×2.2 内:1.6×1.5	外:1.2×1.2 内:0.9×0.9	28.5	HA③ C10 S-17 II 台3425		
	3		泥岩	サイズ:長さあり、表面:研磨痕あり 状態:全面ひび割れ生じる	完	2.7	4.9	外:2.8×2.6 内:1.4×1.4	外:1.4×1.2 内:0.8×0.7	49.9	HA④ N18 III P73 取99		
	4	陶製	沖繩産無釉陶器	小口断面:七角形 火皿の径:大きい、火皿:一部欠ける	破	4.1	2.0 (0.3)	外:2.1 内:1.5	外:1.6×1.5 内:0.8	14.0	HA④ H15 III 台1205		
	5		沖繩産無釉陶器	状態:火皿一部、小口の端部欠ける サイズ:大きい、つくりが粗雑	破	残存 4.1	1.8 (0.6)	残存外:2.2 残存内:1.5	外:1.8×1.7 内:1.1×0.9	10.6	HA③ T8 S-273-P2 III 台2441		
	6		沖繩産無釉陶器	状態:小口欠け、色調:火皿上:黒褐色、下部・ 赤褐色焼きムラあり、火皿:立ち上がり短い	破	残存 2.6	1.5 (0.2)	外:1.7 内:1.2	—	6.0	HA③ T9 I 台1212		
	7		沖繩産無釉陶器	状態:小口斜めに欠ける、色調:全面赤褐色つくり 、面取り:朱泥(紫泥)の模倣品か?	破	3.5	1.3 (0.1)	外:1.8×1.7 内:1.3×1.2	—	5.0	HA③ E11 II 台1422		
	8		沖繩産無釉陶器	状態:縦方向に大きく破損 火皿:立ち上がり僅かに残存	破	残存 3.4	—	—	外:1.4 内:0.8	3.1	HA② H104 名嘉座 II 台1117		
	9		沖繩産施釉陶器	釉薬:全面透明釉を掛ける 色調:僅かに淡緑色を呈す	破	3.0	— (0.6)	外:1.7 内:1.4×1.3	外:1.5 内:0.9	6.0	HA② C1 祝殿 II 台2531		
	10		沖繩産施釉陶器	火皿のサイズ:小型、火皿の形状:楕円形 釉薬:黒軸が内面まで掛けられる	完	3.0	1.3 (—)	外:1.6×1.3 内:1.2×1.0	外:1.2 内:0.8	4.2	HA② A1 祝殿 SK002 III 台2203		
	11	金属製	銅?	首部:上面潰れる、小口:潰れ、歪み有り 火皿の径:小さい	完	3.7	1.8 (0.6)	外:1.0 内:0.9	外:1.1×1.0 内:1.0×0.9	5.5	HA③ E4 IV 台694		
図版 なし	—	石製	シルト岩	状態:火皿・小口縦に破損、一部平坦、孔一部残	破	—	—	—	—	6.1	HA③ A6 S-256 III 台2385		
	—		シルト岩	色調:青灰色、表面:研磨痕、形状:面取りあり	完	3.1	3.9	外:2.8、内:2.5	外:1.3、内:0.8	51.0	HA② T2 祝殿 II 台4218		
	—		砂岩	形状:面取り有り、部分的に平坦面、角は丸い	完	2.4	3.1	外:2.3、内:1.5	外:1.4、内:1.0	27.0	HA② I1 瓦屋 II 取109		
	—	陶製	沖繩産無釉陶器	状態:火皿破損、小口断面:円形、太さ変化なし	破	3.1	—	—	外:1.5、内:1.0	7.5	HA③ E17 II 台1315		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿破損、小口断面:円形、面:細多面体	破	2.8	—	—	外:1.4、内:0.8	4.7	HA③ E17 II 台1583		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:ほぼ破片、小口:円形、面取り細かい	破	残存2.3	—	—	—	1.9	HA③ T10 II 台2853		
	—		沖繩産無釉陶器	破片、形状:火皿上面・小口断面:八角形?	破	2.1	—	—	—	2.7	HA③ T10 II 台1776		
	—		沖繩産無釉陶器	破片、形状:火皿上面・小口断面:八角形?	破	2.1	—	—	—	2.7	HA③ T10 II 台1776		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿半欠、形状:小口、火皿とも八角形	破	残存4.2	1.2(0.2)	—	外:1.5、内:0.9	10.1	HA② A20 祝殿 II 取155		
	—		沖繩産無釉陶器	ほぼ破片、雁首の一部、小口断面:推定八角形	破	—	—	—	—	1.8	HA② T6 島 II 台776		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿、小口破損、小口断面:八角形	破	—	—	—	—	4.1	HA② G20 瓦屋 II 台1056		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿全て欠落、面取り:小口周囲細かい	破	—	—	—	外:1.5、内:0.9	5.7	HA② A1 祝殿 SK002 III 台2203		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:小口大きく破損、面取り:細かく多面体	破	—	—	外:1.9、内:1.3	—	3.0	HA② A20 祝殿 フ02～04 II 台1885		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿九割破損、色調:赤～黒褐色焼きムラ	破	—	—	—	外:1.4、内:0.9	4.9	HA② C3 祝殿 II 台497		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿～小口半欠、小口断面:推定八角形	破	—	—	外:1.8、内:1.1	—	3.6	HA② H5 名嘉座 II 台976		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:小破片、計測不可、色調:朱色	破	—	—	—	—	1.0	HA② J3 ワキミチ II 台2407		
	—		沖繩産無釉陶器	状態:火皿全て破損、小口断面:八角形	破	—	—	—	外:1.6、内:1.0	9.0	HA④ H18 II 台2388		
—	金属製	真鍮?	状態:火皿補強体から上破損、小口断面:六角形	破	残存4.7	—	—	外:0.9、内:0.8	7.3	HA③ A10 II 台664			
—		銅?	表面:さび、腐食、金属劣化激しい、不純物付着	完	5.0	1.5(0.5)	外:1.0、内:0.8	外:1.1、内:0.7	7.9	HA② M9 I 台3184			

火皿の高さ:雁首底辺からの高さ( )内は火皿のみの高さ  
縦×横:火皿、小口に、潰れ、歪みがある場合

第95表 羅宇煙管（吸口）観察一覧

質量単位 (cm/ g)

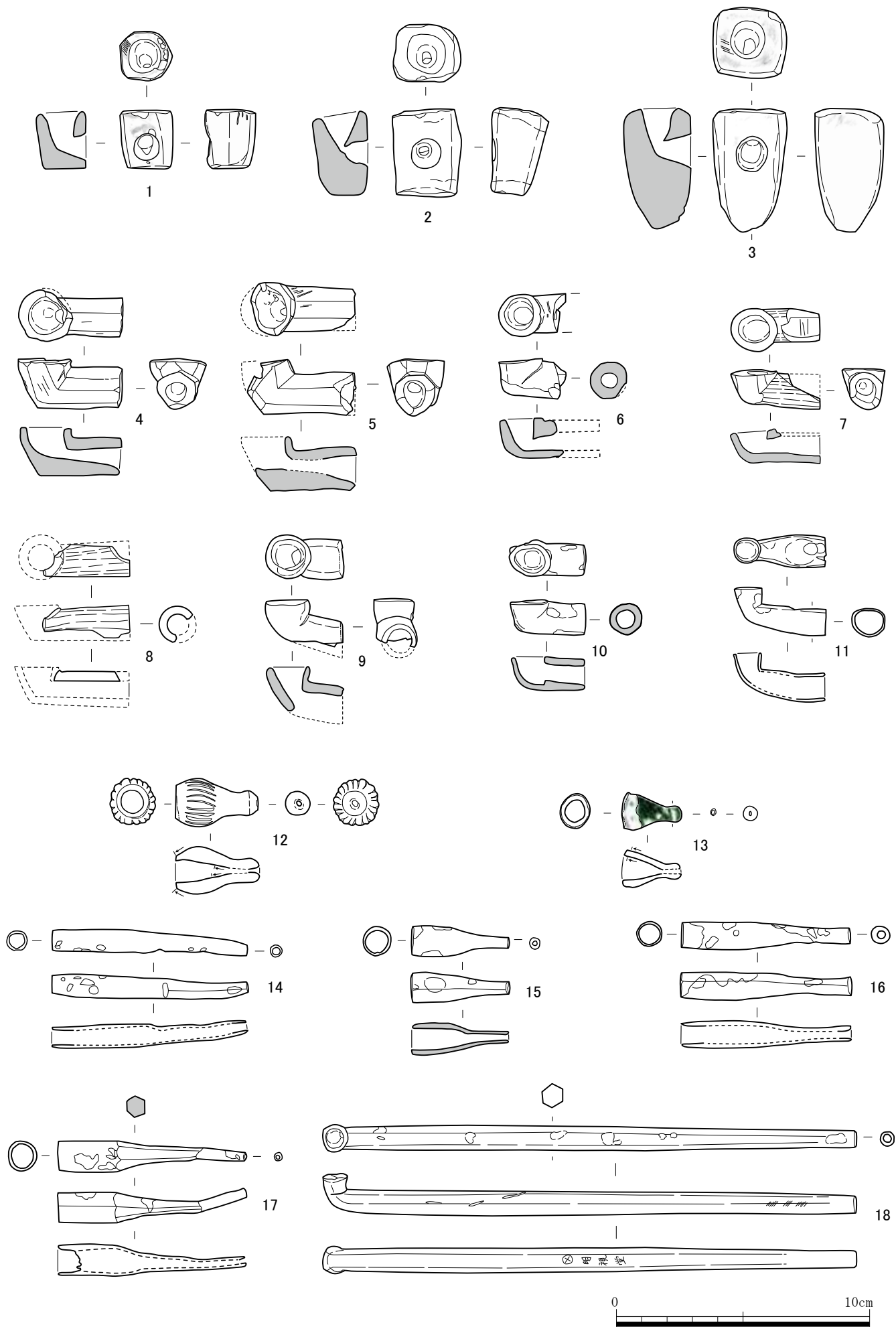
第95表 図版 106	図番号	種類	素材	観察事項	完/破	長軸 (長さ)	胴径 (最大値)	小口		口付		重さ	地区・グリッド・層 遺構・台帳(取)番号
								外径	内径	外径	内径		
157 図版 106	12	陶製	沖繩産施釉陶器	釉薬:全体に透明釉掛ける 彫り込み:三日月状刻み、淡青灰色	完	3.3	1.8	1.3	1.0	1.0	0.4	7.4	HA② A2 III SK002 祝殿 台2241
	13		中国産緑釉陶器	長軸サイズ:短く小型、小口歪みあり 口付の孔:開口部小さい	完	2.3	1.5	1.4×1.3	0.9×0.8	0.7	0.2	2.6	HA② C19 II 祝殿 台1656
	14	金属製	銅?	長軸サイズ:充分長さあり 銅製で軽い、2カ所で折れ曲がる	完	7.7	1.0	0.8	0.7	0.5	0.3	7.2	HA③ G10 II 層 台665
	15		真鍮?	長軸サイズ:短め、重量有り	完	3.9	1.2	1.2	0.9	0.5	0.3	8.5	HA② T8 I 島 台2547
	16		真鍮?	長軸サイズ:長さあり 口付の開口部:開け方不均等	完	6.7	1.1	1.0	0.8	0.7	0.4	10.0	HA④ F13 III 台1197
	17	真鍮?	小口断面:円形、 口付中間:六角形呈す、重量感あり	完	7.7	1.3	1.2	1.0	0.4	0.2	13.8	HA③ T9 I 層 台1212	
図版 なし	—	金属製	真鍮?	長軸:長さ不明、口付:破損	破	4.8	1.2	1.2	1.0	—	—	11.8	HA③ T9 II 層 台663
	—		真鍮?	長軸:短め、小口:潰れ、錆び激しい	破	残存4.0	1.3	—	—	0.7	0.3	6.9	HA② I6 II 名嘉座 取73
	—		真鍮?	長軸サイズ:長め、錆びが激しい	完	7.3	1.2	1.0	0.7	0.8	0.3	13.1	HA② B3 II 祝殿 取178
	—	陶製	沖繩産施釉陶器	釉薬:白濁釉、孔内部:貫通部二段	完	3.3	2.0	1.6	1.0	0.8	0.5	10.0	HA② B1 II 祝殿 台1942
—	磁器製	本土磁器	形状不明、絵付:呉須で瓔珞文描く	破	残存2.7	残存2.1	—	—	—	—	—	HA④ H11 II 台2342	

第96表 延べ煙管観察一覧

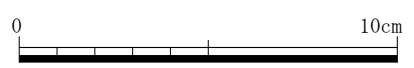
質量単位 (cm/ g)

第96表 図版 106	図番号	種類	素材	観察事項	完/破	長軸	胴径 (最大値)	火皿までの 高さ	火皿		口付		重さ	地区・グリッド・層 遺構・台帳番号
									外径	内径	外径	内径		
図版 なし	18	金属製	真鍮?	形状:羅宇断面は六角形、火皿:やや潰れる 口付に向かい緩く円形成す	完	21.1	1.0	1.4 (0.6)	1.1	0.8	0.6	0.3	46.4	HA③ C14 I 層 台563
	—	金属製	銅?	形状:羅宇部は丸く円柱形、羅宇に縦ぎ目 節有り、状態:一部折れ曲がり、亀裂あり	完	18.5	0.8	1.4 (0.4)	0.9	0.7	0.6	0.4	20.2	HA③ E5 II 層 台673
	—		銅?	状態:部分的に折れ曲がり、亀裂あり 形状:羅宇部は丸く、円筒形	完	18.3	0.8	1.6 (0.5)	1.0	0.8	0.6	0.4	15.3	HA③ G19 II 層 台562
	—		真鍮?	状態:錆び付き一部腐食、明瞭でない 形状:羅宇は微かに六角形と判明	完	20.6	0.9	1.3 (0.6)	1.0	0.8	0.6	0.4	31.7	HA③ F16 S-3 II 層 台607
—	真鍮?	状態:火皿、口付、両端破損 形状:火皿、口付詳細不明	破	残存 12.4	1.0	火皿破損	—	—	—	—	38.0	HA② A2 祝殿 II 層 台3160		

( ) 内の数値は火皿のみの高さ



第157图 煙管



图版 106 煙管

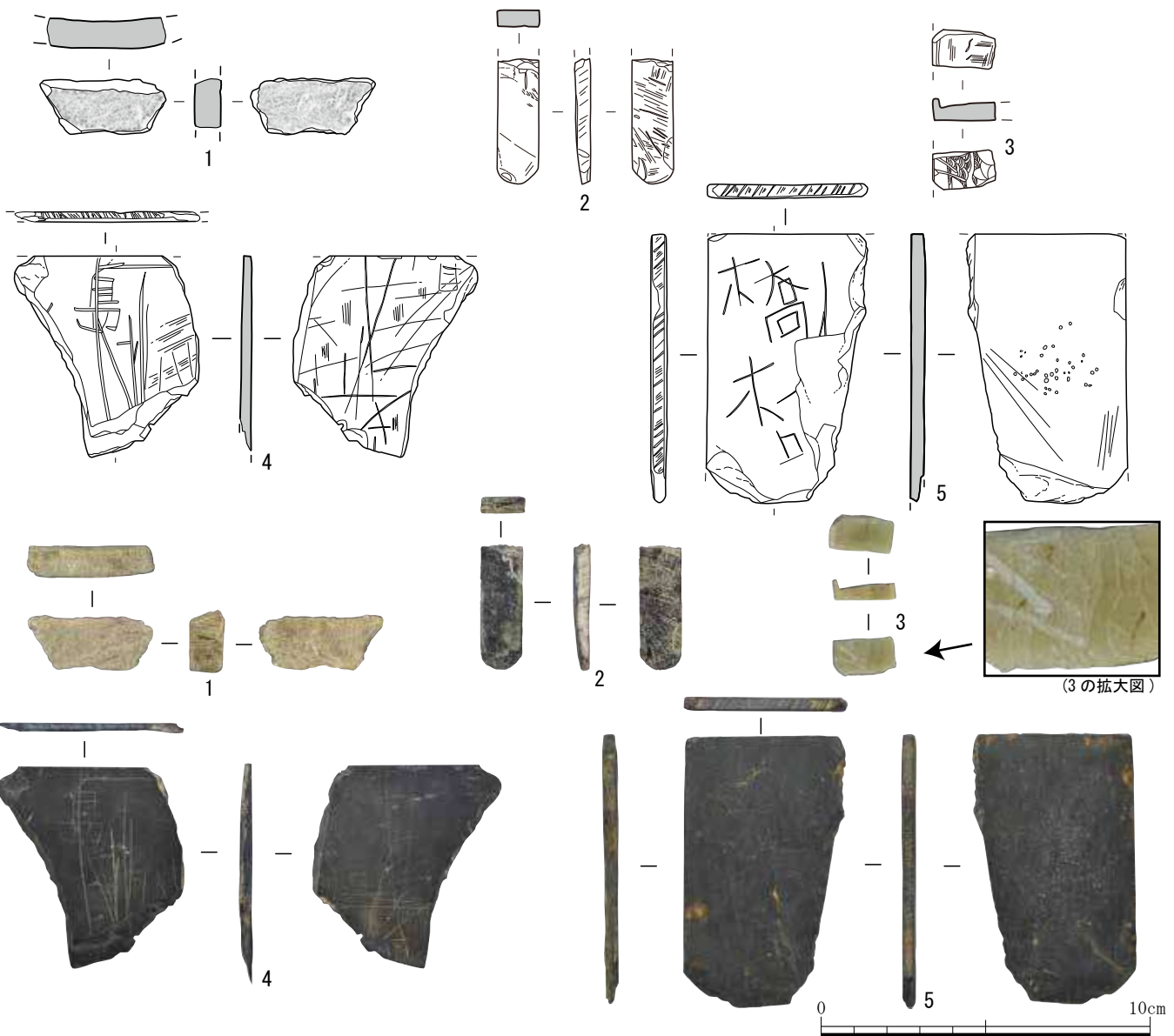
## (23) 滑石製品・石製品・石板

滑石製品 1 点・石製品 2 点・石板が 7 点、計 10 点出土し、そのうち石板は使用痕が認められる資料 2 点を図化した。全てⅡ層からの出土で、地区別では HA ②で石製品 1 点、石板 1 点、HA ③で滑石製品 1 点、石製品 1 点、石板 5 点、HA ④から石板が 1 点出土した。図 1 は滑石製石鍋の胴部片で軽く湾曲し、反りがみられる。二次加工の素材と考えられる。HA ②・③からは滑石混入のグスク土器も出土している。図 2 の残存形状は平面観が「U」字状を呈し細かい線状痕が認められ、特に裏面に多い。図 3 の石製品は断面が「L」字状の立ち上がりを呈し縁の様に認められる為、器の類と思われる。裏面に陰刻文で青海波状の図柄が確認できる。石質は軟玉で産地は日本・中国・韓国にあり沖縄本島に産出せず、中国では彫刻材、印材に用いられている。図 4 の石板は先端の鋭利なもので線書きの痕跡があり表面に「島」の文字、裏面は不明瞭だが「目」の文字に読み取れる。図 5 も、線書きで、「橋」「木」の文字が確認できる。検出された遺構は、S-12 (蒲伊礼小・溝)、瓦屋、S-10 (ナカミチ)、SD41 (サカイミチ) で、全て戦前の屋敷跡と道関連からの出土である。

第 97 表 滑石製品・石製品・石板 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	完/破	残存	形状	側面 厚み	加工痕/ 使用痕	石質	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層・遺構・台帳番号
第 158 図・ 図版 107	1	滑石製品	破損	一部	平坦	反る	?	滑石	1.7	3.5	0.8	10.0	HA ③ D8 II 台 745
	2	石製品	破損	一部	縦長舌状	偏平 薄手	線状痕:裏面 擦痕:側面	滑石片岩	3.8	1.3	0.5	5.1	HA ③ A18 II S12 台 3561
	3	石製品	破片	縁あり	不定形	薄い	裏面:線彫り	軟玉	1.2	1.9	0.5	2.4	HA ② I02 II 瓦屋 台 2325
	4	石板	破損	一部	偏平	薄い	使用痕:線書き	黒色千枚岩	6.1	5.6	0.3	15.5	HA ③ G17 II S10 台 3484
	5	石板	破損	一部	偏平 板状	薄い	使用痕:線書き	黒色頁岩	8.2	4.8	0.4	34.7	HA ④ J14 II SD41 台 3049-2



第 158 図・図版 107 滑石製品・石製品・石板

## (24) 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物は羽口、鉄滓、炉壁、焼土が確認された。主なものを第 160 図に示し、平面分布を第 159 図、出土量を第 98 表にまとめた。以下それぞれについて略述する。

### 1. 羽口

羽口先端とその他破片の出土総数は 14 個、総重量は 421.1 g で、ほぼⅡ層出土(第 98 表)である。炉側先端部の形状は、円筒形(図 1・2)、角筒形(図 3)があり、気泡痕が見られる溶融物が先端に付着し、縁辺部側面にも見られることから炉壁面より僅かに突出していたものと考えられる。第 160 図に特徴的な HA③出土の 3 点、第 159 図に平面分布を示す。

図 1 は、外径約 9.4 cm、風道孔径約 2.3 cm、断面形は円形、重量 77g、D8、Ⅱ層出土。図 2 は、風道孔周囲が欠損し先端外縁部に溶融物が付着する。外径約 8.4 cm、風道孔径は約 3.7 cm、重量 69.4 g、D8～E8 自然流路(S-640)Ⅲ層下出土。同図 3 は 1 辺が約 8 cm の隅丸方形と見られ、風道孔径は約 4.3 cm、重量 45.1 g、G7、Ⅱ層出土。羽口の土質は、砂粒や石英等を含む砂質と含まない泥質がある。先端部の溶融物付着面にはガラス質状の光沢も見られる。破損部に見られる色調は外側が褐色を呈し内側へ橙色となり、風道口面は褐色を呈する。

### 2. 鉄滓

鉄滓の出土総数は 146 個、総重量は約 17,267.8g、出土個数の約 74%がⅡ層出土(第 98 表)である。椀形滓が大半で不定形のものもある。全体形が窺える資料は少ない。図 4 の縁に厚みのあるもの(約 3cm)、図 5 のやや薄いもの(約 2cm)、図 6 の薄いもの(約 1cm)に大別される第 160 図に特徴的な資料を図示し、第 159 図に平面分布を示す。

図 4 は椀形滓、僅かに欠損部が見られる。上面縁に炉壁に近いことで生じたと思われる反り上がりがある。白色粒(石灰岩?)、砂粒、貝片の付着が上面の中央部にあり、下面では全体的に見られる。色調は褐色が主体であるが、欠損部は暗灰色を呈し、表面に比して気泡痕が多い。全体的に土や砂が付着したと思われる。最大径は 12.8 cm、重量 1,028 g、C11、Ⅱ層出土。同図 5 は椀形滓としたが、上面は滓の重なりによる段差があり中央部が窪み、下面は塊が突出する。表面は僅かに赤錆色部分に砂粒が付着する。色調は全体的には茶褐色であるが、暗灰色部がまだらに露出する。重量 295 g、C11、Ⅱ層出土。図 6 は前述の 2 点に比して薄く、上面縁に滓の固まりが付着する。最大幅は 8 cm、重さ 132 g、B10、S-37 出土。

椀形滓の破片は縁辺部片や中央部片があり、前者には 3 cm×5cm 程度の大きさが目立つ。破損面が鈍い光沢を有しガラス質の粒が目立つものや粒々状の塊も見られる。色調は暗黒灰色、暗灰色、暗灰色に赤錆色(白色粒、石英が付着する)がある。図示を割愛したが、図 6 に類似する薄くて扁平なものにも滓が重なるもの、極端に薄いものも見られる。また、炉壁に接したために縁辺の一部が縦位に広がる面となり焼土が付着したと考えられるものもある。

### 3. 炉壁

鍛冶炉の溶融物が付着した炉壁と見られるもので、表面は炉内側面と見られ、裏面は羽口と同様な土や色調の破損面、総出土数は 182 個、総重量は 4,069.6g、出土個数の約 81%がⅡ層出土(第 98 表)である。鍛冶炉の送風口と見られる大型破片 2 点を図 7・8、第 159 図に平面分布を示す。

図 7 は、残存する孔の最大径が 2.4 cm。孔は土の盛り上がりの中央に位置しており、孔の周辺にはガラス質の溶融物を含む滓の付着物による盛り上がりが見られる。表面は緑灰色や灰白色を呈し、気泡痕が部分的に集中する。裏面の破損面の孔周囲にはやや弧状を呈するひび割れが見られ、羽口の接合面の可能性があるものと思われる。重量 139 g、D10、Ⅱ層出土。

図 8 は、孔から 5～8cm 離れたところでは、気泡痕が弧状にまとまり赤錆色を呈する。この部分は反り上がっており、炉壁形状が変化するところと思われる。孔周辺は図 7 のような溶融物の付着はほとんど見られないが暗褐色を呈する範囲が幅約 3.5 cm で円形に広がり、灰色を主に灰緑色や暗灰色がまだらに広がる色調を呈する。裏面の焼土には、羽口の接合面と思われるひび割れは見られない。石灰塊や砂粒の混入が目立つ。重量 320 g、C11、Ⅱ層出土。

### 4. 焼土

総出土数は 165 個、総重量は 2,186.5g、約 47%がⅡ層約 43%がⅢ層出土である。第 159 図に平面分布を示す。焼土はいずれも小破片であるが、図示は割愛したが平坦な整形面を 1 面、または 2 面、3 面有するものがあり、植物痕の有無の特徴が見られる。土質は砂質、色調は羽口や炉壁、鉄滓に付着する焼土に類似するものと、砂粒を多量に含む脆いものがあり色調は橙色と褐色を呈するものがある。後者は羽口や炉壁とは異なるものと思われる。

### 小結

これらの鍛冶関連遺物は HA③に多い。第 98 表に示した出土状況で見るとほぼⅡ層出土である。Ⅱ層が堆積する立地で見ると、HA③では自然流路(S-640)、流路の東側で丘陵からの土砂の影響を他地区よりも受けた一帯、流路西側

の砂丘上堆積に大別され、HA ②④は砂丘上の堆積である。HA ①は北側が砂丘、南側には自然小流路群が検出され、鍛冶関連遺物は出土していない。

第 159 図の平面分布では、羽口、鉄滓、炉壁は HA ③ A ~ D11 ~ 14 の自然流路 (S-640) の中程で幅広となる一帯、HA ③ DE8 ~ 10 の流路下流側の流路が分岐する一帯にまとまりが見られる。出土分布の密度は低い、出土箇所では鉄滓と炉壁は同様な広がりである。遺構出土には HA ③ S・T・A ~ C5 ~ 10 で検出されたピット群や石組遺構、HA ② F ~ M19・20、1 ~ 6 にまとまる土坑・ピット群からの出土、HA ④ E・F19 で出土量は少ないが鉄滓・炉壁・焼土が出土している。鉄滓には 33 図の 2 面目遺構に攪乱溝で示した S -7 (R・S11・12、T・A12)、炉壁には SD59 にⅢ層出土のものもある。鉄滓・炉壁・焼土の中でⅢ層・Ⅲ層下出土のものは、遺構出土が多いが共伴遺物では明確に古い時期を示す結果は得られていない。鍛冶関連遺物に見られる平面分布は、Ⅲ~Ⅱ層期にかけて鍛冶場が移動した可能性、または、ムラの変遷を示唆するものと思われる。

戦前の集落配置に当てはめると、屋敷地内や道路 (ウラムチ、ナカムチ)、集落南・東側の耕作地となる。鍛冶遺構は、本調査区内や隣接する遺跡においても発見されていないが、火を強く受けた遺構には、祝女殿内で「風呂場」のような施設が検出され、コンクリート製の溜枡状構造物があり燃焼痕跡も認められる (註：第 V 章 1 節 4 を参照)。本調査区内の出土状況から鍛冶遺構は HA ③ 付近の丘陵側または HA ② の西側に可能性があるものと考えられる。隣接する遺跡には、既報告の「平安山原 B 遺跡」(2015)

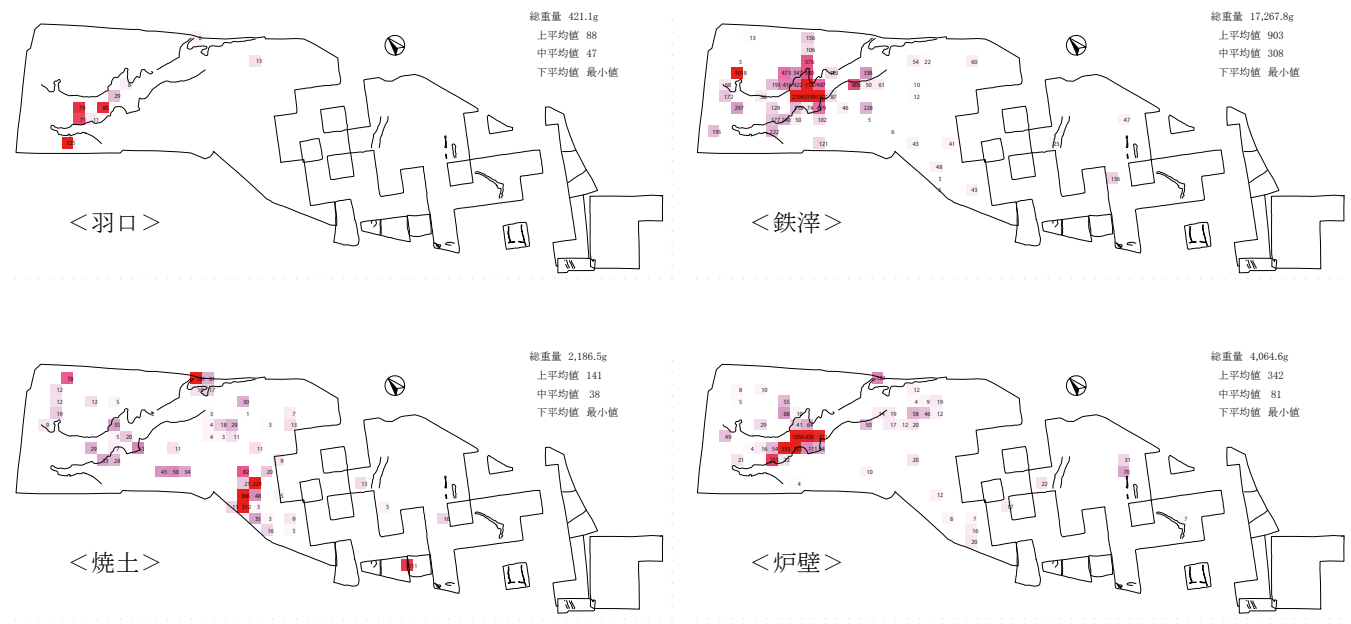
第 98 表 鍛冶関連遺物 出土量

(法量単位：g)

地区 層	種類	羽口		鉄滓		炉壁		焼土		
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	
HA ③	I 層			12	863.0	18	296.0	1	29.1	
	II 層	12	337.3	96	14008.8	117	3225.1	37	641.3	
	III 層			3	1086.0	5	55.9	5	34.1	
	III 層下	1	71.0	8	758.5	1	30.3	8	29.5	
	合計	13	408.3	119	16716.3	141	3607.3	51	734.0	
HA ②	I 層			2	45.0			3	9.0	
	II 層上					1	5.0	3	17.1	
	II 層	1	12.8	17	184.3	29	298.2	40	624.8	
	III 層			4	115.8	1	12.0	62	657.3	
	合計	1	12.8	23	345.1	31	315.2	108	1308.2	
HA ④	I 層									
	II 層			2	159.4	2	17.0	2	20.7	
	II~III 層			2	47.0	3	31.0			
	III 層					5	99.1	4	123.6	
	合計			4	206.4	10	147.1	6	144.3	
層別合計	I 層			14	908.0	18	296.0	4	38.1	
	II 層上					1	5.0	3	17.1	
	II 層	13	350.1	115	14352.5	148	3540.3	79	1286.8	
	II~III 層			2	47.0	3	31.0			
	III 層			7	1201.8	11	167.0	71	815.0	
	III 層下	1	71.0	8	758.5	1	30.3	8	29.5	
合計			14	421.1	146	17267.8	182	4069.6	165	2186.5

の燃焼施設 (1018SX)、サーター屋跡の窯跡 1 (石組の窯跡) 近くで検出された窯跡 2 が想起されるが、同遺跡の調査では羽口と焼土の出土は少量である。戦前の旧字平安山には、鍛冶屋の記録や証言は得られていないが、「鍛冶屋」に関連する地名として、『北谷町史』(民俗下)、『北谷町の地名』に記載される HA ③ 北側の丘陵谷間を通る道に「カンジャーヤヌスバ (鍛冶屋の近く)」の名称がある。戦前の北谷村内 (現在の嘉手納町域を除く) には、桑江ヌ前屋取に鍛冶屋をしていた「瓦屋 (カーラヤー) カンジャー小 (グワー)」、「ユーフルヤー」(註：第 V 章 1 節 4 を参照)、「細工 (セーク) カンジャー小」、「大 (ウフ) カンジャー」、上勢頭屋取に「鍛冶屋城間 (カンジャグシクマ)」がある。

第三章 5



第 159 図 羽口・鉄滓・焼土・炉壁 重量平面分布



第 160 图 · 图版 108 羽口 · 鉄滓 · 炉壁



## (25) 埴

4点が得られた。いずれも破片資料であり、3辺が残存するものがないために平面形状は不明である。辺の残存率が最も高いものから、少なくとも1辺が15cm以上を測る。いずれの資料も灰色の色調を呈し、厚さが約5cm、表面が平滑であること等が共通しており、全て同タイプのものであった可能性がある。図1には幅6～8mmほどのピッチで平行する線刻のようなものが認められた。成形痕であろうか。これ以外の刻印・ヘラ描といった痕跡は、外面に残存していなかった。

県内の埴については、首里城跡及び湧田古窯跡での出土例が知られている。『首里城跡』(2010 県埋文センター)において上原静氏が埴の分類を行っており、以下に略示する。

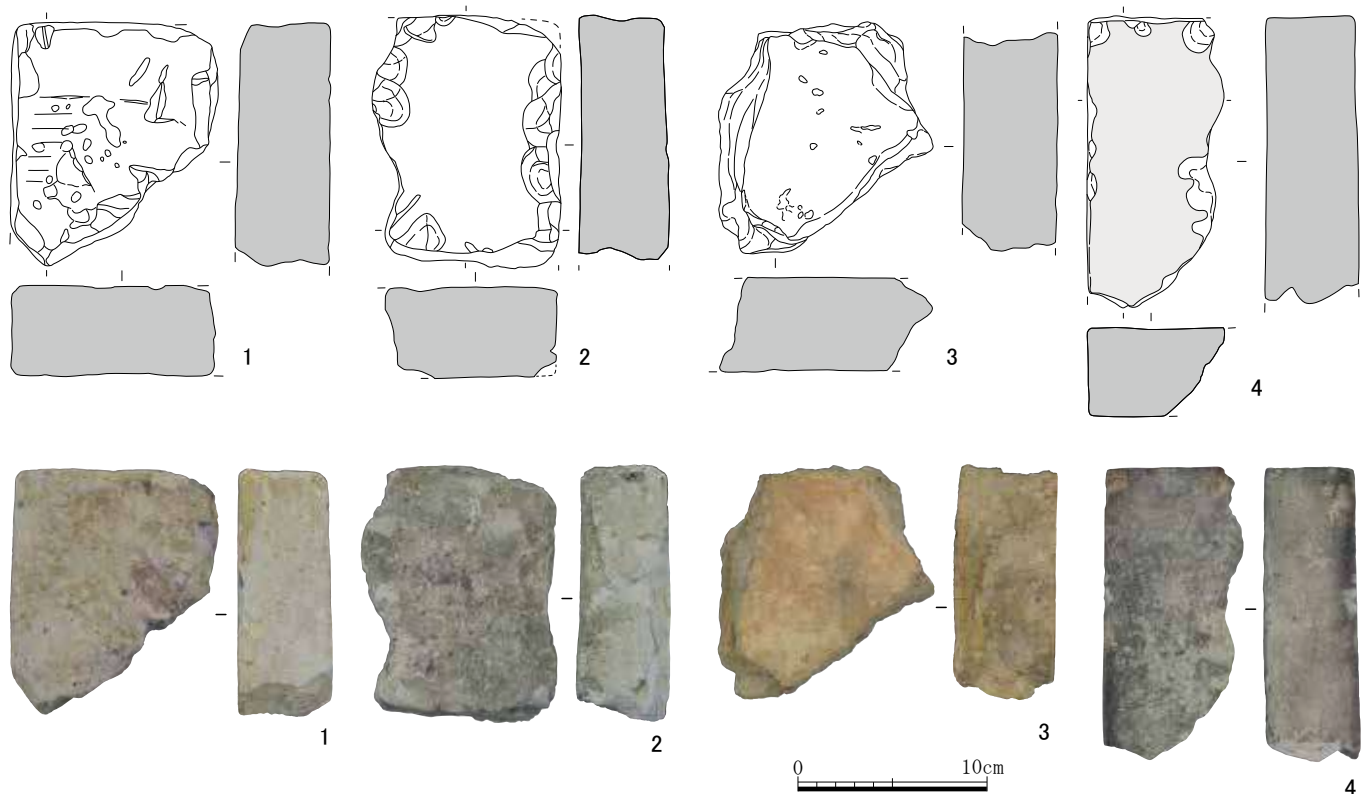
I：長方形で、長軸の側面か短軸の両側面に段を成形し、複数組み合わせ使用するもの。灰色を呈する。

II：長方形で、下駄状の突起を成形するもの。厚手はみられず、灰色を呈する。

III：正方形或いは三角形で、平面敷き用のもの。灰色と赤色のものがある。

IV：長方形で、積み重ね用のもの。灰色と赤色のものがあり、大量の漆喰が付着する。

今回の出土資料は、III. 平面敷き用タイプに当たるものと思われ、その中でも厚手であるa類、という分類がなされることになる。近世に帰属すべき遺物であるが、当該期の平安山において平面敷きの埴を伴うような施設があったとは、出土点数の面からも俄かには考えにくい。現状では何処からか何らかの理由で持ち帰ったもの、とするのが妥当と思われるが、今後その出自が明らかにしていくことが課題である。



第161図・図版109 埴

第99表 埴 観察一覧

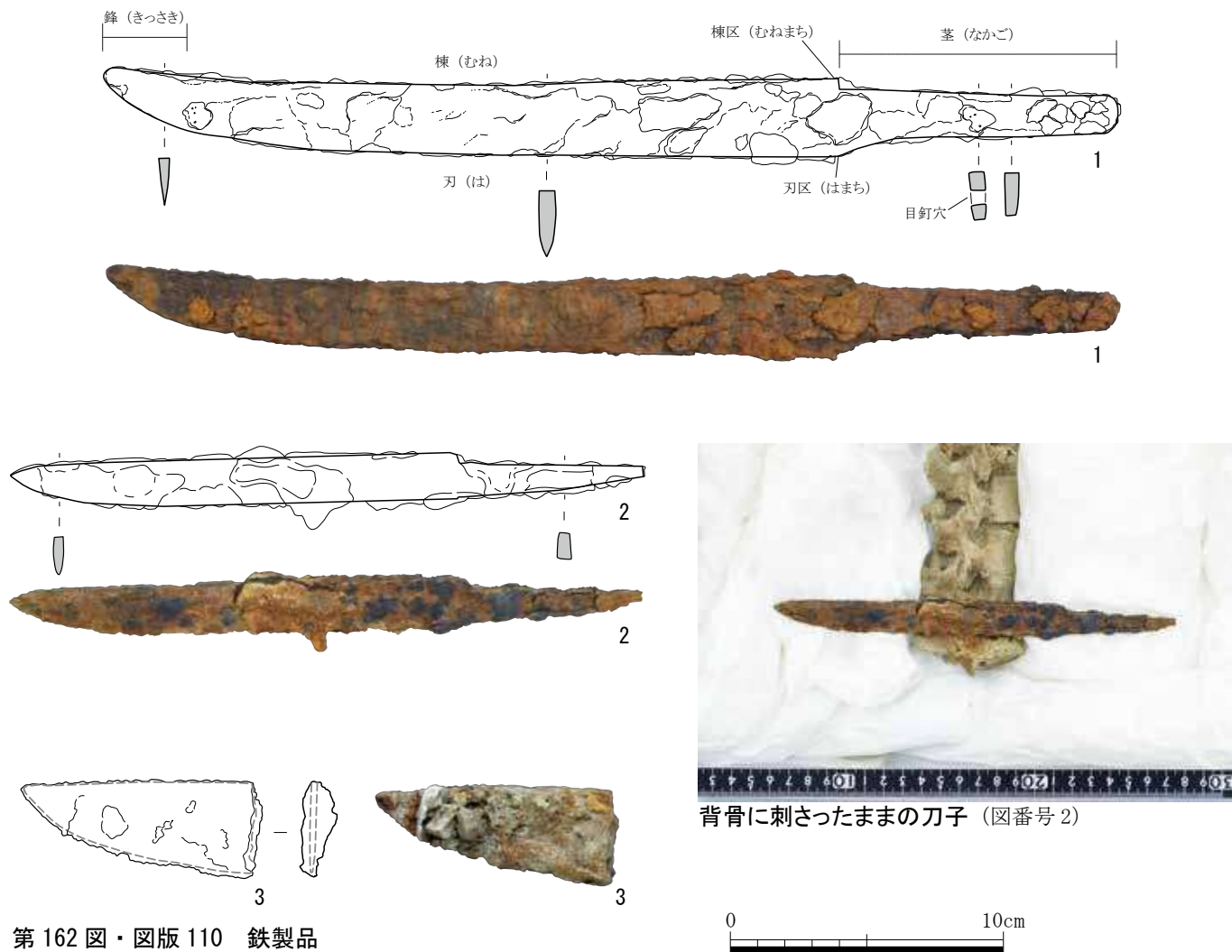
(法量単位：cm、g)

第図 図版	図番号	残存部位	長	短	厚	重量	観察事項	胎土混入物	出土地点
第161図 図版109	1	角1	12.9	10.7	5.0	813	表面に幅6～8mmほどのピッチで平行する線刻あり。	灰黒色・赤褐色粒	平A④F14SD42台284
	2	角1	13.0	9.1	4.9	804	表面がやや黒ずんでいる。	灰黒色粒	平A③B16Ⅱ台3320-1
	3	角無	11.5	10.3	5.0	709	表面赤化。裏面に煤付着。	灰黒色粒	平A②A1祝殿取148
	4	角1	15.2	6.9	5.0	590	表面・側面に煤付着。	灰黒色粒	平A③B16Ⅱ台3320-2

(26) 鉄製品

2点の鉄刀類が出土した。類例として参考にした今帰仁城跡・勝連城跡からは、刀子として分類されたものが多く出土しているが、最大のもは今帰仁城跡志慶真門郭出土の完品で、その刃長が15.3cmである(1983 今帰仁村教委)。今回出土した2点はいずれもそのサイズを凌駕している。1はHA④Ⅲ層(南北ベルト1-23層)から出土した完品形で、刃長が約27cmで全体の反りが小さいことから、「短刀」に分類できる。鋒(きっさき)付近は棟側に緩やかに反る。棟区(むねまち)には明瞭な段を有し、茎(なかご)はほぼ真直ぐ延びている。X線撮影により、茎中央に径5mmの目釘穴が1穴確認された。2は人骨12の背骨に刺さった状態で見つかった資料である。刃先棟側は僅かに内傾するが、棟はほぼ直状となる。刃区の段が殆どなく、茎が刃側に偏っている。目釘穴はX線撮影でも認められなかった。刃長は約16.4cmと長いものの、勝連城跡出土の刀子に類似した形態のものが散見されるため、現状では大型の刀子として取り扱うべきかと思われる。しかしながら、一般的に刀子の用途は小刀のような万能工具と捉えられることが多く、その意味において今回の出土状態は異常と言える。沖縄県内でこれまで刀子としてきたものにも武器としての性格があるのか、今回の事例が極めてイレギュラーなものなのか、今後検討を要するであろう。周辺での遺物出土状況から考えると、1・2ともにグスク時代～近世初頭の範疇に入る蓋然性は高い。3は過去の試掘調査出土のもので、既に鉄鎌として報告されている破片資料である(2008 北谷町教委)。旧ナガサ川本流域にあたる地点から得られたため帰属年代を推定することは難しいが、改めて形状を観察してみると、前述2点との類似性が強いため、本項で再掲載するものである。

※部位の名称は『図説江戸考古学研究事典』(2001)を参照した。



第162図・図版110 鉄製品

第100表 鉄製品 観察一覧

法量単位：(cm/ g)

第図 図版	図番号	器種	全長	刃長	茎長	最大 刃幅	厚	重量	観察事項	出土地点
第162図 図版110	1	短刀	37.1	27.0	10.1	2.8	0.57	253.0	鋒が僅かに反る。茎中央付近に目釘穴1つ。	HA④B3F15Ⅲ層 台4495
	2	刀子?	23.2	16.4	6.8	1.7	0.32	—	刃先棟側が内傾する。茎が刃側に寄る。目釘穴なし。	HA④B3H19 人骨12 背骨
	3	刀子?	(8.5)	—	—	3.3	0.38	(32.4)	刃先部だけの破片資料。刃先棟側は直状。	伊D 試掘3-5 (B4G~I20)

## (27) 石器

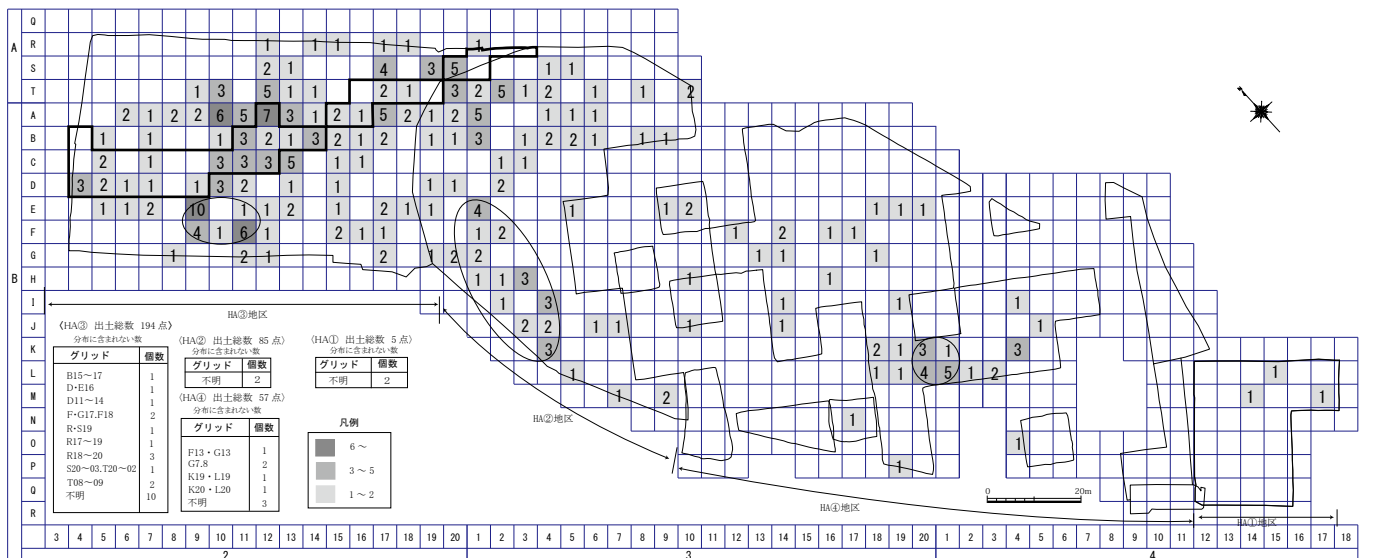
石器は石斧、敲石、敲石兼磨石、磨石、台石、石皿、砥石、クガニ石、石板などの器種が確認でき総数 333 点出土した。器種のうち最も多いものは磨石で 128 点、次いで砥石 54 点、石斧 52 点である。特徴としてこれまで本町の既報告には各遺跡に 1 点の出土であったクガニ石が、今回は 8 点と多く、それに反し石皿は 1 点と少ない。又、グスク相当期と考えられる砥石もこれまでより多く出土している。

地区別では HA ① 5 点、HA ④ 54 点、HA ② 83 点、HA ③ 191 点で、HA ③からの出土が最も多い。層序は相対的にどの地区もⅡ層出土が多く、個別にみると石斧は HA ③のⅡ層で最も多く 19 点、敲石兼磨石は HA ②のⅡ層で 16 点である。磨石も同様に HA ②のⅡ層 18 点、さらに、HA ③のⅠ層 10 点、Ⅱ層遺構 17 点、Ⅱ層で 57 点出土している。砥石は HA ③のⅡ層遺構 7 点、Ⅱ層で 18 点、HA ②のⅡ層 12 点である。第 101 表に全体の出土量を示した。

第 163 図は調査区における石器の出土状況を平面分布に示したものである。HA ③のグリッド A～C10～13 で一つのまとまり E・F9～11 で一つ、HA ③・②の S～B17～2 は集中部と捉えることができる。その他 E～K1～4 でも僅かに認められる。HA ④・①では出土量が極端に減少し 1 点から 2 点の出土で散見され、K・L20・1 で一つの小さい集中部とも考えられる。

第 101 表 石器 出土量

地区 層	器種	石斧							敲石	敲石兼磨石	磨石	台石	石皿	クガニ石	砥石		用途不明石器	石板	合計
		大型	中型-大	中型-小	小型	サイズ不明		粗加工							貝塚後期	グスク期			
						基部	刃部												
HA ③	I			1	1	1			3	2	10			2	1	1		22	
	II 上 遺構								1					1				2	
	II 遺構			3				2	8	1	17	1		1	5	2	2	3	45
	III 遺構	2	1	4			5	4	3	8	3	57		3	12	6	2	2	112
	III 下 遺構									1					1				5
	IV							1		1		4			1				4
小計		2	1	8	1	6	7	3	22	6	89	1	7	19	9	5	5	191	
HA ②	I				1										1			2	
	II 上			1						2	2			1	1			7	
	II 遺構		1	3					7	16	18	6		1	2	10	2	1	67
	III 遺構			1		1			1		2				1		1		7
小計		1	5	1	1	1		8	18	22	6	1	1	4	11	3	1	83	
HA ④	I									1								3	
	II 遺構							1	1		2							5	
	II 遺構		1	2					3		3								9
	III 遺構			1	1				1	1	4			2	4				14
	III 遺構	1	1	2	1	2	1		2	2	6				2				20
	IV			1							1						1		3
小計	1	3	5	2	2	1	1	8	3	17			3	6	1	1	1	54	
HA ①	I														1			2	
	II															1		1	
	III 下 遺構			1														2	
	小計			1											1	1		5	
合計		3	5	19	4	9	8	4	38	29	128	7	1	8	54	9	7	333	



## 1. 石斧

石斧は52点の出土で石器全体の15.6%を占め、磨石・砥石に次いで多く、石器のなかで帰属年代の基準になる器種である。完形31点、破損資料17点、(基部9点、刃部8点)粗加工品4点で、完形には若干の刃こぼれや、軽く刃の潰れた資料も含めたが、刃部形態が把握可能なものは少ない。又、刃の潰れのみられる資料は敲石に転用したと考えられるが、石斧として形態の判る限り分類し集計に含めた。転用品は8点で石斧の形状を留めつつ刃部が大きく潰れ、刃先の潰れた幅が1cm以上で面を成すもの、なお且つ敲きの痕跡や擦痕などが認められたものを転用品とした。

分類は全体の平面・側面観、刃部の平面・側面観とサイズで分け、形態分類は佐原真氏<sup>註1</sup>、サイズに関しては平口哲夫氏<sup>註2</sup>の報告を参考に一部変更した。

### I-1. 形態 (平面)

- A. 撥形—三味線のバチ形を呈し、基端頭部が小さく刃部に向かい比較的幅広になる
- B. 短冊形—長方形を呈し、幅広のものと幅がないものも有り、基部から刃部までほぼ同じ幅をもつ
- C. 柱状形—全体の形状が柱状を呈すもの
- D. 不定形・不明—撥形、短冊形、柱状形の間タイプ、或いは基部、刃部が破損により、形態不明

### I-2. 形態 (側面)

- イ. 基部が肉厚タイプ—乳房状石斧、太形蛤刃などの大型の石斧に多く両刃、蛤刃に多くみられる
- ロ. 基部が薄手タイプ—扁平石斧など、片刃が付くことが多い

### II. 刃部形態

#### 平面観

- 1. 円刃—刃の中心から左右にラウンド状に刃が付く
- 2. 直刃—刃の中心から直線で刃の左右に角をつくる
- 3. 偏刃—刃の付け方、長さが左右で異なる
- 4. 刃部破損 (分類不可)

#### 側面観

- a. 両刃タイプ—両面から均等に刃を研ぎ出す (蛤刃も含む)
- b. 両刃的片刃—両刃と片刃の間タイプ
- c. 片刃的両刃—両刃と片刃の間タイプ
- d. 片刃タイプ—刃の付方、研ぎ出しが片面から強く研ぎ出す

### III. サイズ分類

- 1. 大型—長さが13cm以上、又は重量が400gを超えるもの
- 2. 中型—大 長さが11~13cm、又は重量が300g程度のもの
- 3. 中型—小 長さが8~11cm、又は重量が200g程度のもの
- 4. 小型— 長さが8cm以下、又は重量が100g以下のもの
- 5. 不明・その他—基部、又は刃部のみ残存、平面形態の長さが二分の一以上破損している

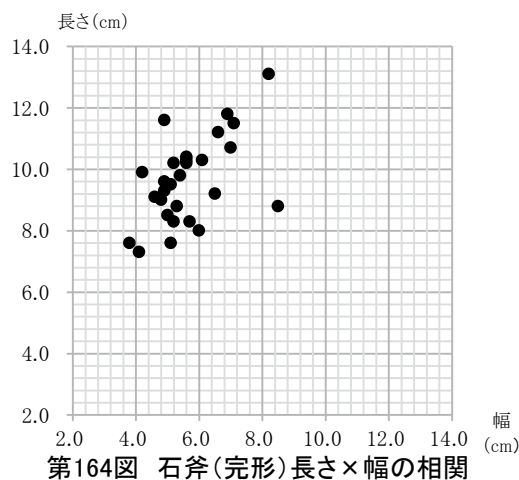
第102表に石斧の形態別にサイズの割合を比較した。形態では撥形が最も多く16点、短冊形10点、柱状形1点である。他に不定形10点、分類不可11点、粗加工品が4点認められた。不定形としたものには撥形と短冊形の間タイプや、どちらにも属さないものを含めた。サイズでは大型3点、中型—大5点、中型—小は19点、小型が4点、サイズ不明21点で不明資料を除き中型—小が最も多い。形態とサイズで比較すると大型は全て短冊形、中型—大はわずかに撥形が多く、短冊形、不定形は1点ずつである。中型—小も撥形が多い。

全体的に分類不可・サイズ不明が多く、明確な傾向は掴めていないが、撥形の中型—小が今回の調査では最も多く出土したことになる。

第164図に石斧の長さ・幅の計測を行い、大きさの傾向を示した。図に示した対象は基部、刃部の半欠資料は除外した。小型の資料は7cm台が3点で、8~10cm台が14点、10~12cm台が10点である。サイズの大きな資料では13cm台が認められる。長さ8.8cm、幅8.5cmとサイズ比が同じ値を示す資料は図2の大型に含めた資料で刃部の研ぎ直しを繰り返したと考えられ長さが極端に短い。

第102表 石斧形態別分類

形態	サイズ						合計
	大型	中型—大	中型—小	小型	不明		
撥形		3	10	3			16
短冊形	3	1	3		3		10
柱状形					1		1
不定形		1	6	1	2		10
分類不可 (基部、刃部破損)					11		11
粗加工					4		4
合計	3	5	19	4	21		52



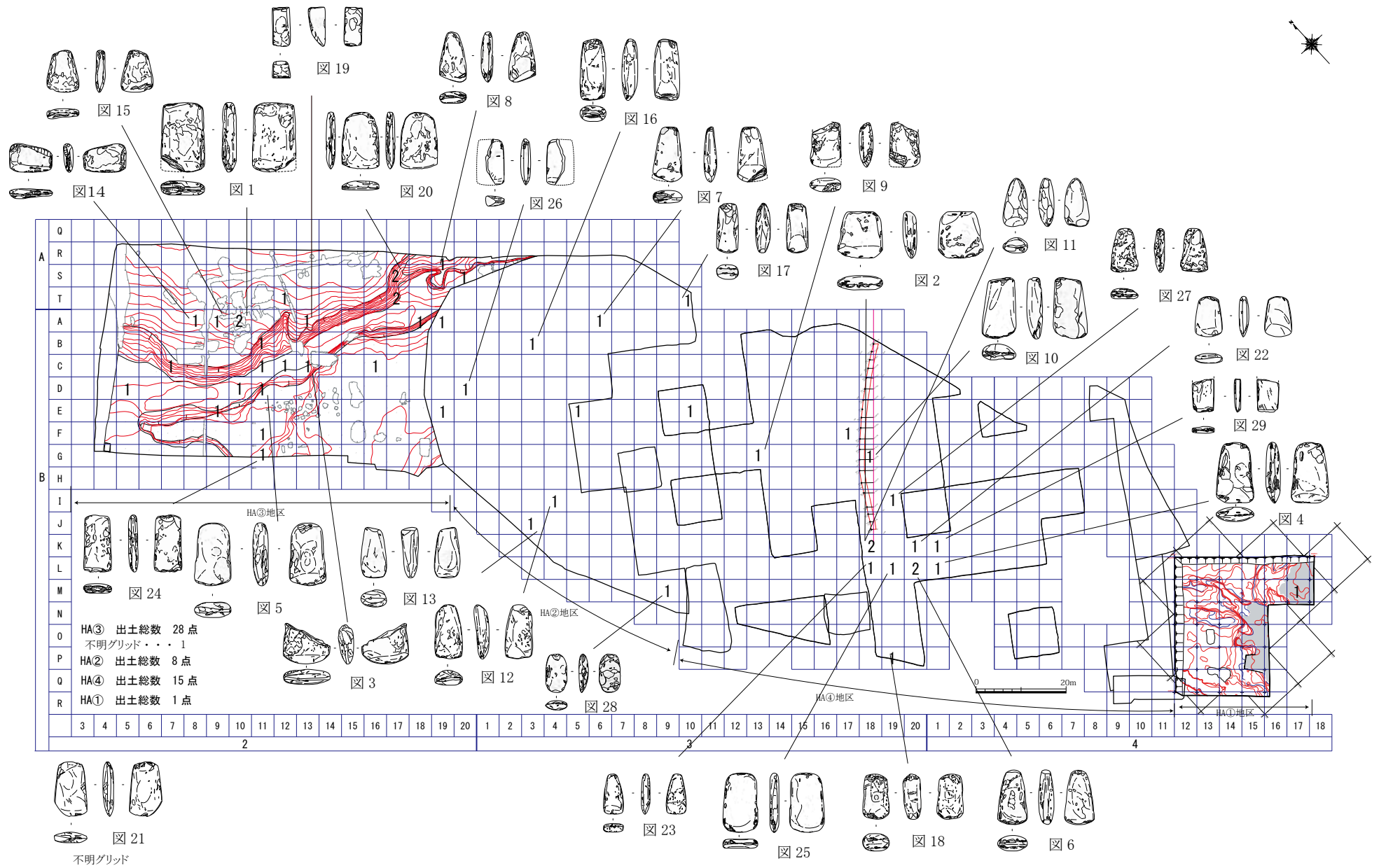
第103表 石斧観察一覧

法量単位 (cm, g)

第図版	図番号	器種	形態 平面・ 側面	刃部形態 平面・ 側面	サイズ 分類	完/ 破	加工痕/ 使用痕	石質	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層 遺構・台帳(取)番号
第170 図・ 図版 111	1	石斧	I-B.イ	II-2. a	大型	完形	成形痕 研磨	緑色岩	研磨箇所：表裏面、両側面、一部研磨至らず 刃部：大きく破損、刃線欠けと剥離痕	13.1	8.2	2.7	564.0	HA③ A10 II 台 3337
	2		I-B.イ	II-2. a	大型	完形	成形痕 研磨	斑レイ岩	形状：刃部幅広く長軸短い、研磨箇所：基部、刃部研磨良好 刃先：刃こぼれ数カ所あり、繰り返し研ぎ直しの可能性あり	8.8	8.5	2.7	350	HA④ K18 III 台 1324
	3		I-B.イ	II-2. a	大型 (刃部のみ)	破損	成形痕 研磨	輝緑岩	形状：大きく破損・刃部のみ、研磨箇所：表裏面、両側面、 良好、刃部：横幅8cm程度、刃面短い	7.3	8.8	2.9	235.5	HA③ C13 II 台 3461
	4	転用品	I-A.イ	II-1. a	中型-大	完形	成形痕 研磨	輝緑岩	形状：成形良好、基端頭部残存、研磨箇所：表裏面・両 側面明瞭刃部：刃こぼれ数カ所あり、刃先が鈍る	11.5	7.1	2.7	365	HA④ L01 II 台 1328
	5		I-A.イ	II-1. a	中型-大	完形	研磨 敲打痕	斑レイ岩	形状：撥りだけが基部・刃部幅直線的、研磨箇所：表裏面、 基部中央滑沢明瞭、刃部：刃は潰れ、敲きに転用	11.8	6.9	2.9	436.5	HA③ D11 II 台 3351
	6		I-A.イ	II-1. a	中型-小	完形	研磨 敲打痕	砂岩	形状：基端まで丁寧に成形、研磨箇所：各面不明瞭、刃部： 刃は潰れ、擦りの痕跡確認、敲きに転用	10.3	5.6	2.9	240	HA④ L20 III 台 1337
	7	石斧	I-A.イ	II-1. a	中型-小	欠損	成形痕 研磨	輝緑岩	形状：成形良好、基端頭部に比べ刃部厚手、刃部一部破損 研磨箇所：表裏面・両側面明瞭、破損により刃部形態不明瞭	10.4	5.6	2.4	222	HA② A6 II 晶 台 4256
	8		I-A.イ	II-3. d	中型-小	完形	成形痕 研磨	輝緑岩	形状：頭部の小さい撥り、研磨箇所：表面基端、裏面基 部中央まで研磨、刃部：刃の研ぎ直し有り、刃線歪む	9.5	5.1	2.2	171.0	HA③ R・S19 II 台 3029
	9		I-D.イ	II-1. a	中型-小	欠損	成形痕 研磨	緑色岩	形状：成形良好、研磨箇所：基部・刃部、刃部：一部破損 刃線鈍る、刃こぼれなし、よって刃部は一度で大きく破損	8.4	5.9	2.6	195	HA④ G13 III SP928 台 3884
	10		I-D.イ	II-4. a	中型-大	破損	研磨	砂岩	形状：裏面基部～刃部大きく破損、自然面露呈、研磨箇所： 表面・基部～刃部、刃部：形態不明瞭、刃線激しく刃こ ぼれ	11.6	6.4	3.0	370	HA④ G18 III 台 1280
第171 図・ 図版 112	11	石斧	I-A.イ	II-1. a	中型-小	完形	成形痕 研磨	輝緑岩	形状：基端・頭部先細り、成形：歪、研磨箇所：表裏面 部分的 刃部：刃潰れ	9.1	4.6	2.9	175	HA④ K18 III 台 1322
	12		I-D.イ	II-2. c	中型-小	完形	研磨	輝緑岩	形状：基端部分的欠損、研磨箇所：基部表裏中央・刃部 両面 刃部：刃こぼれ有り、刃先不自然な研ぎ直し	10.2	5.2	2.8	234.5	HA② I4 III SP017 台 2029
	13		転用品	I-A.イ	II-1. a	中型-小	完形	研磨 擦痕	斑レイ岩	形状：基端頭部破損、研磨箇所：基部研磨浅い、石質影響 刃部：擦りにより面をつくる、刃先：擦りで刃線欠失	9.6	4.9	3.3	250
	14	石斧	I-B.イ	II-2. a	不明 (刃部のみ)	破損	成形痕 研磨	輝緑岩	形状：破損品を二次加工？タテをヨコに？不明 研磨箇所：窪みは研磨が至らず部分的、刃部：幅やや広い	5.3	8.1	1.8	125.5	HA③ A08 II 台 3342
	15		I-A.ロ	II-1. b	小型	完形	成形痕 研磨	斑レイ岩	成形：良好、研磨箇所：基部研磨なし、刃部のみ 刃部：刃面一部欠け、刃先：刃こぼれあり、刃線鈍る	8.0	6.0	1.8	134.0	HA③ A09 I 台 3454
	16		I-B.イ	II-2. d	中型-大	完形	成形痕 研磨	斑レイ岩	形状：基端一部欠け、成形：基部丁寧、研磨箇所：両面 刃部 刃部：刃こぼれと敲き？刃部：裏面研ぎ直し？	11.6	4.9	3.0	314	HA② B03 II 取 177
	17	転用品	I-B.イ	II-1. a	中型-小	欠損	研磨 敲打痕	斑レイ岩	形状：基端頭部は破損、細長棒状形、研磨箇所：基部・ 刃部研磨良好、刃部：刃は完全に潰れ、敲きに転用	9.9	4.2	2.8	196.5	HA② T10 II 祝殿 SD08 台 4252
	18		I-D.イ	II-1. a	中型-小	完形	研磨 敲打痕	角閃岩	研磨箇所：表裏面、部分的に滑沢、敲きに転用 敲打箇所：中央・上下端・両側面に小さく浅い敲打と窪 み	8.5	5.0	3.4	255	HA④ P19 II 台 2889
	19		I-C.イ	II-2. d	不明 (刃部のみ)	破損	成形痕 研磨	斑レイ岩	形状：歪みあり、研磨箇所：表裏面、柱状片刃的、模倣品 刃部：研磨、表面片側のみ顕著	7.4	3.5	3.2	157.7	HA③ A13 IV 台 3024
第173 図・ 図版 113	20	石斧	I-A.ロ	II-2. d	中型-小	完形	成形痕 研磨	緑色岩	形状：成形良好、全体に整う、研磨箇所：基端・側面・ 刃部周辺研磨良好、基部・表裏面中央のみ研磨至らず	10.7	7.0	1.7	232.0	HA③ S17 II S-35 台 3449
	21		I-A.ロ	II-1. a	中型-小	完形	成形痕 研磨一部	輝緑岩	成形：基端まで良好、表裏・両側面・刃部整う、研磨箇所： 全体に不明瞭、中央一部研磨、刃部：片面の側刃角破損	10.3	6.1	2.0	214.0	HA③ I 台 3355
	22		I-A.イ	II-1. b	小型	完形	整形痕 研磨	輝緑岩	研磨箇所：基部、側面明瞭、稜線：明瞭 刃部：刃線歪み、研ぎ直し痕跡	7.6	5.1	1.8	145	HA④ K20 III 台 1326
	23		I-A.ロ	II-1. b	小型	完形	成形痕 研磨	斑レイ岩	形状：基部整う、研磨箇所：表裏面、両側面良好、刃部： 研磨明瞭、刃こぼれ：数カ所有り	7.6	3.8	1.7	82	HA④ L18 III SP1936 台 4435
	24		I-B.ロ	II-2. d	不明 (基部のみ)	破損	成形痕 研磨粗い	角閃岩	形状：平面観ほぼ短冊形、成形：ある程度整う、研磨箇所： 部分的、表裏面：部分的に欠け、刃部：破損するが片刃的	10.7	5.3	1.8	189.5	HA③ G11 II 台 3330
	25		I-D.ロ	II-1. a	中型-大	完形	成形痕 研磨	緑色岩	研磨箇所：表裏面明瞭、刃部：刃こぼれあり 刃部：両刃に含めたが刃は短く、薄い	11.2	6.6	1.7	260	HA④ L19 IV 台 1336
	26		I-B.ロ	II-2. a	中型-小	破損	成形痕 研磨	輝緑岩	残存形：縦断し大きく破損、形・大きさ：短冊形と想定 刃部：一部残存、側面一定幅、扁平と想定	8.7	3.5	1.9	91	HA② D20 II上 祝殿 台 4194
	27		I-A.ロ	II-2. d	中型-小	完形	粗加工 成形痕	角閃石 安山岩	研磨箇所：基部・刃部突出箇所のみ確認 刃部：刃の研ぎ出しなし	8.3	5.2	1.9	120	HA④ I19 II 台 1302
	28		I-D.イ	II-1. c	小型	完形	研磨	泥質片岩	成形：両側面に稜をもつ、二次的再加工の可能性 研磨箇所：風化で欠失？石質：脆弱	7.2	4.1	1.8	71.1	HA② M9 I 台 4244
	29		I-B.ロ	II-2. d	不明 (刃部のみ)	破損	刃部成形 研磨	緑色岩	形状：基端・頭部欠落、研磨箇所：表・裏・両側面明瞭 刃部：欠け有り、刃こぼれ顕著、煤付着	6.3	4.0	1.2	65	HA④ K1 III 台 1319

第165図に石斧の出土量と図化した資料を平面分布に示した。地区別では52点中HA③で28点出土したが、II層が24点と多い。I層からも3点認められるが、図19の柱状形の刃部は1点のみIV層で出土した。次いで多い地区はHA④の15点でIII層から10点、II層4点だがIV層で1点図25の石斧が出土している。HA②でもII層出土が4点と多く、I層1点、II層上部1点、III層2点で、IV層からは確認されていない。HA①は1点のみIII層下部から出土した。

大型とした図1～図3の3点のうち2点はHA③から、1点はHA④で出土している。転用品として扱った資料で図化したものは、図5・6・13・17・18の5点でHA③・HA②・HA④のどの地区からも確認された。図19・24・29は、半欠や刃部破損で不明点の多い資料だが、九州では弥生後期に出土する石斧類に形態等、類似点が認められる。



第165図 石斧 平面分布

## 2. 敲石

敲石としたものは38点で出土量全体の11.4%と敲きの用途のみに使用された資料は磨石に比較して少ない。地区別ではHA③が最も多く22点、HA②は8点、HA④も8点である。どの地区も層序はⅡ層及びⅡ層遺構からの出土が多く、Ⅳ層ではHA③で1点のみ確認された。形態では図35の石鱗状の資料、図30の球状に面を成すもの、図32のやや厚手のもの、その他、長楕円や楕円形、半円形、略円形なども認められた。

## 3. 敲石兼磨石

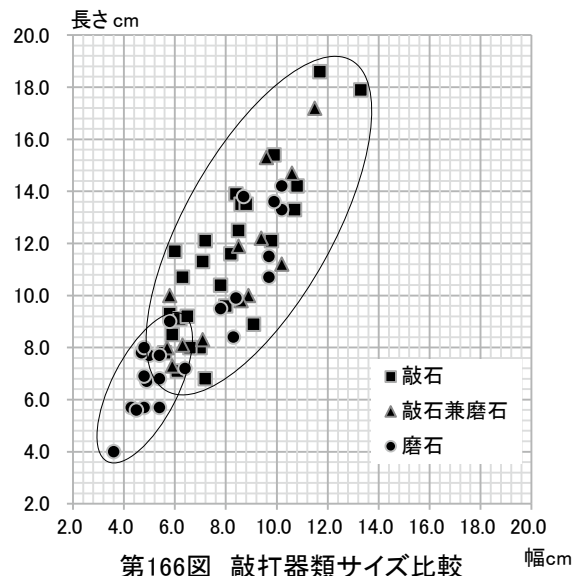
敲石兼磨石は29点と全体の8.7%程度で、今回は兼用で使用した資料は点数的に少ない。地区別ではHA①で2点、HA②は18点、HA④3点、HA③6点とHA②が多く、層序ではやはりⅡ層出土が多い。特にHA②のⅡ層は16点でそのほとんどを占める。形態は敲石、磨石と大きく変化はないが、磨りに使用後、研磨面の中心や側面に浅く敲打痕が認められる資料が多い。

## 4. 磨石

磨石は最も多く128点得られ、全体の38.4%を占める。地区別でHA③が89点と圧倒的に多く、次いでHA②から22点、HA④が17点である。層序ではⅡ層からの出土が57点と多い。形態は大別して石鱗状、球形、円形などの形態が認められたが、図42の磨石は他の資料に比べ、かなり大型を成すが破損し大きさが不明である。

上記3種類の敲打器類について長さ・幅のサイズ比較を第166図に示した。完形に近い資料を計測し、敲石27点、敲石兼磨石13点、磨石23点の合計63点を対象に扱った。

その結果、敲石は長さ6cm台から18cmと小型から大型の資料が認められた。長さ・幅の比率の範囲では全体に長楕円形の形状が多いことが判る。敲石兼磨石も又、長さ7cm台から17cm台まで、幅は5cm台から11cm台で大きさの基準が一定していない。磨石は最小の資料で長さ・幅ともに4cm台のものから、14cm台の範囲までで大きさにばらつきが認められるが、サイズは磨石で小型のサイズを使用していることが判る。全体では磨石が小型、敲石がやや大型の素材を選択していると考えられる。



第166図 敲打器類サイズ比較

第104表 敲石・敲石兼磨石・磨石 観察一覧

法量単位 (cm, g)

図版	図番号	器種	形態	側面形態	加工痕/使用痕	完/破	石質	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第173図・図版114	30	敲石	球形	厚手	敲打痕 窪み	完形	砂岩	形状:角の丸いサイコロ形、使用面:六面体を成す窪み:各面中央に有り、敲打痕:各面に有り	6.8	7.2	6.3	456	HA② K4 Ⅱ 三良取101
	31	敲石兼磨石	楕円形	厚手	敲打痕 研磨痕	完形	花崗閃緑岩	敲打痕:表裏面、中央に有り 研磨箇所:表裏面、石質:花崗閃緑岩は徳之島産か?	9.8	8.6	5.7	824.0	HA③ B10 Ⅰ S-37台3255
	32	敲石	略円形	厚手	敲打痕 窪み	完形	砂岩	敲打痕:表面、裏面、上下も明瞭に確認 窪み:表裏面、下面やや深い、研磨箇所:中央に一部浅い研磨	8.9	9.1	6.3	850	HA④ L01 Ⅱ 台1327
	33	敲石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	破損	斑レイ岩	敲打痕:表面中央に明瞭に確認、研磨:敲打周辺、裏面一部研良好自然面:両側面、上部自然面呈す	8.2	6.9	4.6	440	HA④ E19 Ⅳ 台1246
	34	敲石	半円形	厚手	敲打痕	破損	玄武岩	形状:裏面破損、自然面露呈、敲打痕:表面中央に浅く親指大 石質:硬質で良好	8.9	8.2	5.4	512.0	HA③ S17 Ⅱ S-35台3446
	35	敲石	石鱗状	薄手	敲打痕	完形	砂岩	敲打痕:表裏面中央明瞭、両側面、上下面も僅かに有り 研磨:僅かに有り	9.6	8.0	4.2	575	HA④ K4 Ⅱ 台1320
	36	敲石兼磨石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	完形	砂質片岩	敲打痕:表面中央浅く確認、研磨痕:表裏面に顕著 研磨方向:使用向き表面縦方向、裏面横方向	11.2	10.2	5.5	980	HA④ L20 Ⅲ SP1204台4053
第174図・図版115	37	敲石兼磨石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	破損	角閃石安山岩	敲打痕:表裏面中央、側面、周縁にあり 研磨:表裏面全面にあり	11.9	8.5	5.8	780.5	HA③ Ⅰ 台3309
	38	敲石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	完形	輝緑岩	形状:両側面にくびれ状窪み、敲打痕:表裏面、側面、上下面に僅か、研磨:表裏面明瞭、滑沢帯びる	14.2	10.2	4.7	1260	HA④ Ⅰ 台4597
	39	敲石	長楕円形	薄手	敲打痕 窪み	完形	砂岩	敲打痕:表裏面中央、側面に明瞭な凹み	10.7	6.3	3.4	373	HA② I4 Ⅱ 名嘉座取65
	40	敲石兼磨石	長楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	完形	玄武岩	形状:楕円形が異形、横断面:三角稜、敲打痕:表裏面、両側面窪み研磨:部分的で黒光り確認	10.0	5.8	3.3	253	HA② E1 Ⅱ 祝殿台4198
	41	敲石兼磨石	三角稜形	厚手	敲打痕 研磨痕	完形	角閃岩	敲打痕:裏面、側面、上面の3カ所、研磨:表裏面、下面一部に確認被熱:敲打、研磨、部分的に黒く焼けた痕跡	10.0	8.9	5.7	800	HA④ L1 Ⅲ 台1293
	42	磨石	球形	不明	研磨痕	破損	花崗閃緑岩	形状:推定球形、残存率完形の1/8以下、破損部:自然面露呈 研磨:破損面以外研磨有り	18.1	11.2	9.9	2000	HA② K4 Ⅱ 三良取100

## 5. 石皿

石皿は破損資料1点の出土で使用痕から石皿と判断したが、敲石や磨石の出土量と比較し、量的に少ない。形状はおそらく原形の二分の程度と推測され不定形で、使用面は表面のみ認められ裏面と上下面、側面片側は大きく破損する。残存する使用面の中央は緩やかな窪みを有し、拳大の磨石が填る大きさを呈す。出土地 HA ② E1. 瓦屋又吉小. II層上部、計測値：残存長 22.3cm、残存幅 13.0cm、残存厚 7.0cm、重量 2.3kg、石質：砂岩

## 6. クガニ石

クガニ石は本調査で破損資料含め8点と石器全体の2.4%にすぎないが、本町既報告の各遺跡に1点出土のところ、今回は比較的数量が得られた。地区別では HA ② 1点、HA ③ 7点で、層序の内訳は I層から2点、II層5点、IV層1点の出土である。図化した資料は5点でIV層資料は破損品のため除外した。遺構からは祝女殿内1点、S-7で1点、S-27で1点出土したがS-27は攪乱されておりI層扱いとした。石質の種類は角閃石安山岩2点、斑レイ岩2点、砂岩4点である。

図43は形状が半月状で図44に比べ平面観の縦幅が短く、上端の稜線は幅があり通常のものとは若干異なる。下部は弧状を呈し中央に敲打痕がみられる。石質が角閃石安山岩のため表裏面の研磨はかなり顕著である。

図44は平面観がやや半月状を呈し、上部が細く上端に1cm程度の稜線が認められる。下部は上部とは逆に5cm前後の幅をもち、敲きの痕跡はみられず表裏面は軽い研磨痕が認められる。石質は砂岩を使用し重量感がある。

図45はこれまでの資料に比べ小型で平面観は隅丸方形を呈し、側面は上端が細く稜線をつくる。表裏面は全体に浅い研磨が施され、中心の一部は研磨がさらに明瞭である。

図46は全体に細身の枕状の形態で、表面は研磨され両端から下面にかけて左右の形状がアンバランスなつくりを呈す。表裏面に小さく敲打痕が認められ又、下部には大きな敲打痕が明瞭に窺える。石質は砂岩を用いている。II層 祝女殿内 アサギ出土。

図47は平面観が楕円状で出土した資料のなかで最も大きく、裏面は上部から中心近くまで破損している。石質も特徴的で硬質の斑レイ岩を使用し重量も8点のうち3,400gと最も重い。S-27 I層 攪乱出土。

クガニ石は白木原氏が名称づけた石器で民俗資料のクガニシ（黄金石）<sup>註3</sup>が由来となる。奄美諸島に多く確認されており、北はトカラ列島の中之島、タチバナ遺跡から、南は沖縄本島中部、嘉手納町野国貝塚まで出土する。その他、各地の遺跡でも出土例があり北原貝塚（1995）、平敷屋トウバル遺跡（1996）でも出土している。白木原氏の分類では、A型：上辺に凸帯のあるもの（断面ピリケン形）、B型：上辺に凸帯のないもの（断面倒卵型）とする。今回は白木原氏の提唱する分類に従い同様に試みたところ、本遺跡の資料は、全てB型の範疇に収まる。以下観察表に詳細を記述した。民俗事例

クガニ石は奄美・徳之島でも多くの発見例があり村祭り、年中行事で使用されるという。クガニシは別名ムチタボレイシ、又はホマイシとも云うが、徳之島では部落によって呼び名が違う。往時7月の収穫後、若者たちがムチタボレをするのに「黄金と餅と替えて給われ」と歌いながら石を担いで家々を訪れ、歌の終わるのに合わせて地面に落とし餅を貰う。クガニシを持つのは男女問わず若者で、状況により4～7箇のクガニシを大きさの順に持っていくとの事。このことから白木原氏はクガニ石を差して考古遺物であり、民俗資料でもあると述べている。

第105表 クガニ石 観察一覧

質量単位 (cm, g)

第図版	図番号	器種	平面形態	側面形態	加工痕/使用痕	完/破	石質	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第175図・図版116	43	クガニ石	半月形	B型	敲打痕研磨	完形	角閃石安山岩	表裏面：二面研磨、表面：中央に敲打痕 下面：中央大きく浅い敲打、両側面：縁一部欠け	9.0	19.1	6.2	1877.0	HA ③ C10 II 台 3311
	44		半月形	B型	成形研磨	完形	砂岩	表裏面：研磨痕、上辺：細かい成形による無数の敲打 上端：稜線をもつ	12.2	20.2	7.0	3000.0	HA ③ A12 II 台 2336
	45		隅丸方形	B型	敲打痕研磨	完形	砂岩	色調：赤く変色、風化？表裏面：研磨 側面：稜線有り、上辺：1cm幅の稜線、下面：敲打有り	9.4	12.4	5.8	1000.0	HA ② C3 II 祝殿 台 4195
	46		横長枕形	B型	敲打痕研磨	完形	砂岩	成形：良好、表裏面：中央に浅い敲打痕 上辺：研磨により稜線、下面：やや深い窪み二カ所	8.1	15.3	6.0	1380.0	HA ③ C11 II 台 3269
	47		半月形	B型	敲打痕研磨	完形	斑レイ岩	表裏面：研磨、一部窪み研磨至らず 研磨：部分的に滑沢、裏面：上辺が欠落	14.6	20.8	6.3	3400.0	HA ③ D04 I S-27台 3260
図・図版なし	-		不定形	B型	成形・研磨	破損	角閃石安山岩	形状：半欠、上辺：幅広 研磨：表裏顕著側面：自然面呈す	11.5	8.3	6.7	875.0	HA ③ T12 II S-7台 3424
	-		不定形	B型	成形	破損	斑レイ岩	形状：半欠、上辺稜線：幅9mm、表裏：成形丁寧 研磨：上辺	8.0	12.6	6.2	472.5	HA ③ A10 IV台 3261
	-		不定形	B型	成形	破損	砂岩	形状：半欠、上辺稜線：幅：2.2cm、表裏：緩く面を成す	9.6	11.2	6.6	1168.0	HA ③ I 台 3267



## 7. 砥石

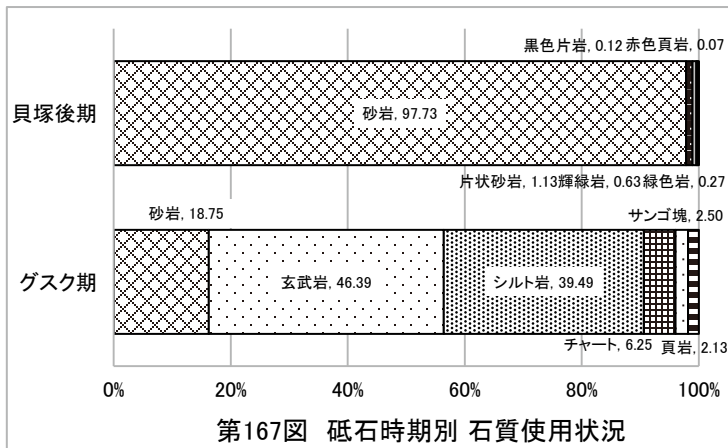
砥石は総数 54 点出土し全体の 16.2%で磨石に次いで多い。帰属時期により形態や使用痕が若干異なり、貝塚後期の砥石とグスク相当期と想定される砥石の 2 種類が確認された。貝塚後期と考えられる砥石は 27 点で、グスク相当期と考えられる砥石も 27 点出土した。出土地区は HA ① 2 点、HA ④ 9 点、HA ② 15 点、HA ③ 28 点である。

層序は I 層 4 点、II 層 38 点、II 層上部 2 点、III 層 9 点、III 層下部 1 点で II 層からの出土が最も多く、グスク相当期の砥石は II 層の屋敷跡から多く出土している。貝塚後期の砥石は形態が板状や不定形のものが多く、破片の為凶化した資料は全てグスク相当期の砥石である。特徴として細かい切り傷状の刃物痕が多く、金属（鉄、他）の研磨に使用したと推測され貝塚後期の砥石と比較して多面的に使用している点が上げられる。さらに携帯用に穿孔のある資料も確認できた。札状・板状・角柱状・扇状の形態など、全ての資料に該当しないが、分類した資料はどれも使用痕に共通点が多い。又、グスク土器の出土状況と兼ね併せてみるとグスク相当期の砥石も時期的に対応するかと推測される。

図 48～図 51 は形態が角柱形の範疇と捉えた。図 49 は、中心の使用頻度が高めで中央から外側に反る。図 50 は 48 と同形のやや大きい角柱形で使用痕が 3 面に認められ、細かな無数の切り傷状擦痕で石斧を研ぐための砥石と使用痕が違ふ。図 51 の石質は片状砂岩を使用し後期的である。図 52～図 57 は前者に比較し扁平状、薄手を呈す。図 52 は扁平・不定形で、図 53 は形が整い使用痕が顕著、図 54 も板状を成し図 55 は両面使用で中心がかなり薄い。図 56 においても表裏面が反り上がり、図 57 になるとさらに薄く、石質は特徴的なシルト岩を用いている。

図 58～図 60 は小型資料で、58 は横断面が正方形の角柱形を成し、59 は若干、短冊状を呈す。図 60 の砥石は小型札状で表面上部中央に穿孔痕が確認できるが、裏面まで貫通しない。図 61 は素材が異なりサンゴ塊（ハマサンゴ）を用いて上面中央に穿孔し裏面まで貫通、携帯用砥石と考えられる。砥石として馴染みのない素材で表裏、両側面、上面の五面に研磨が認められ形状は方形を成す。図 62 は破損し側面の厚みは一定、上面を穿孔し貫通する。図 63・64 は扇形の形状を呈し上部より下部が若干厚い。上端中央に穿孔痕が確認されるが、図 64 では貫通しない。両者はどちらも上端が破損、表裏・両側面とも使用痕が確認される。図 65 は表面から上面へ穿孔するが、上面の平坦面と穿孔以外に使用痕は認められない。

石質の点から考察するとグスク相当期の砥石の産地は沖縄産と考えにくい玄武岩が多いことが特徴的である。



第 106 表 砥石形態別 使用面比較

形態	1面		2面		3面		4面		5面		多面体	合計
	後期	グスク	後期	グスク	後期	グスク	後期	グスク	後期	グスク		
板状	1		1		1							4
扇形						1			1			2
角柱								4		1		5
札形										1		1
三角形	1											1
隅丸方形	1											1
楕円形						1						1
短冊形									1			1
長形				1								1
長台形								1				1
長方形									1			1
不定形	10	1	7		1	4	1					25
変円形				1								1
偏平・不定形	2			3		1			1	2		9
合計	15	1	8	6	2	7	2	8	4	1		54

第 167 図に貝塚後期と思われる砥石とグスク相当期の砥石を石質別に比較した。貝塚後期の砥石は砂岩が 97.8%を占め、圧倒的に多い。その他の数%には片状砂岩、輝緑岩、緑色岩、黒色片岩、赤色頁岩が使用されている。

グスク相当期と考えられる砥石には玄武岩が 46.4%と最も多く、それと二分する量でシルト岩が 39.5%を占める。次いで砂岩が 18.7%と若干少なく、他の石質はチャート、サンゴ塊、頁岩が使われている。

第 106 表に砥石の形態と使用面について分類を行った。形態は大別を試みたが不定形の資料が多く 14 形態に分類、使用面では 1 面から 5 面又、多面体の使用も確認された。貝塚後期の砥石は 1 面使用が 15 点、2 面 8 点、3 面 2 点、4 面 2 点の合計 27 点である。グスク相当期の砥石は 1 面使用が 1 点のみ、2 面 6 点、3 面 7 点、4 面 8 点、5 面 4 点、多面体 1 点の合計 27 点である。貝塚後期とグスク相当期の砥石が同数にも関わらず貝塚後期の砥石は 1 面のみの使用が最も多く、グスク相当期の砥石は複数面の使用が多い。貝塚後期の砥石は、置き砥石として使用面が表面、又は表裏面の 2 面に使用痕の認められる資料であり、グスク相当期の砥石は手持ち砥石と考えられサイズもそれほど大型ではな

い。又、穿孔があるものは携帯用と考えられる。グスク相当期の砥石は、浦添城跡でも確認され、伊礼原B遺跡・E遺跡(2008)及び伊礼原E遺跡(2010)では、戦前に使用したと考えられる砥石も出土している。

第107表 砥石観察一覧

質量単位 (cm, g)

第図版	図番号	器種	時期	形態	加工痕/使用痕	完/破	石質	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第176図・図版117	48	グスク期	角柱	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	完形	玄武岩	形状：上下両端未成形或いは自然面 砥面箇所：表裏面・両側面、線状痕：表裏面・両側面	9.3	4.3	3.7	170	HA④B3 F12 SP870台3834
	49	グスク期	角柱	研磨痕	研磨痕	完形	玄武岩	形状：上面破損痕跡有り、後再使用 砥面箇所：表裏面・両側面、四面に顕著、下面研磨僅か	4.0	6.1	4.7	156	HA②H3 II 名嘉座台1155
	50	グスク期	角柱	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	完形	玄武岩	形状：上下面未成形 使用痕：金属・刃物砥ぎ、細線状痕有り	10.0	5.9	5.1	330	HA①M14 II 取14
	51	グスク期?	角柱	研磨痕	研磨痕	完形	砂岩	形状：ハの字台形、上下自然面露呈、厚み：側面不均等 使用痕：表裏面・両側面有り	14.1	8.3	6.1	904	HA②D2 II 祝殿 台4199
	52	グスク期	偏平・不定形	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上下両端破損、自然面露呈 砥面箇所：表裏面・両側面の四角、線状痕：各使用面有り	6.6	5.1	3.4	156.5	HA②B9 II 祝殿小台1001
	53	グスク期	偏平・不定形	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上面破損、長さ不明 砥面箇所：上面有り、下面斜めに使用痕	7.5	6.8	2.8	164	HA②T8 II 島台4255
	54	グスク期	偏平・不定形	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上下・両側面大きさ不明、状態：表面中央反る 砥面箇所：表裏面、線状痕も有り	4.5	7.7	2.5	93.1	HA②C2 I 祝殿 台4240
第177図・図版118	55	グスク期	偏平・不定形	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：側面破損、中央薄く・左右厚い、反り上がる 使用痕：かなり高い、線状痕：各面有り、刃物痕?	7.5	8.7	3.9	163	HA④N17 III P39 台75
	56	グスク期	偏平・不定形	研磨痕	研磨痕	破損	玄武岩	形状：上下・両側面破損、形状推測不可 使用痕：表裏面、使用頻度：中央薄く、縁が反る	5.7	7.8	3.2	151.5	HA③R14 I S-90 台3397
	57	グスク期	偏平・不定形	研磨痕・線状痕	研磨痕・線状痕	破損	シルト岩	形状：上下破損、全体形状不明、薄手でへりが反る 使用痕：表裏面に明瞭、色調：青灰色のシルト岩	4.2	8.6	1.3	85.0	HA③E13 II 台3447
	58	グスク期	角柱	研磨痕	研磨痕	破損	玄武岩	形状：上下破損・長さ不明、四角柱 砥面箇所：四角、うち一面研磨滑沢、端が反る	3.1	2.1	2.0	19.6	HA③R15 II 台1279
	59	グスク期	短冊形	研磨痕	研磨痕	破損	玄武岩	形状：小型・短冊形、一面破損、手持ち砥石? 砥面箇所：上面使用痕有り	3.2	2.8	1.6	21	HA②G19 II 瓦屋 台929
	60	グスク期	札形	研磨痕・穿孔痕	研磨痕・穿孔痕	破損	砂岩	形状：長方形・薄く札形・下部破損・長さ不明 穿孔痕：上部に穿孔、線状痕：貫通せず	3.9	2.2	0.8	13.2	HA②J03 II SX-01 名嘉座取105
	61	グスク期	長方形	研磨痕・擦痕 穿孔痕	研磨痕・擦痕 穿孔痕	完形	サンゴ塊 (ハマサンゴ)	砥面箇所：四角有り、擦痕：表裏面・上面・片側面 穿孔痕：表面上部中央穿孔・裏面まで貫通	9.1	6.3	3.0	118.4	HA②E1 II 祝殿 台4211
	62	グスク期	偏平・不定形	研磨痕・穿孔痕 線状痕	研磨痕・穿孔痕 線状痕	破損	玄武岩	形状：上下・左側面破損、砥面箇所：表裏面・側面 穿孔痕：上部に穿孔、線状痕：表裏面	5.9	5.5	1.9	80	HA④K0・L20 III SP1223台4076
	63	グスク期	扇形	研磨痕・穿孔痕	研磨痕・穿孔痕	破損	玄武岩	形状：上面・片側面・下面一部欠損 穿孔痕：上面中央両側から穿孔、研磨痕：砥面明瞭	9.1	6.9	3.7	213	HA②B8 II 島 台1192
	64	グスク期	扇形	研磨痕・穿孔痕	研磨痕・穿孔痕	破損	玄武岩	形状：上端欠損、下端稜・面成す、研磨痕：表裏・両側面 穿孔痕：上面中央・裏面まで貫通せず	6.7	4.1	2.7	73.2	HA③C12 II 台3333
65	グスク期	楕円形	研磨痕・穿孔痕	研磨痕・穿孔痕	完形	砂岩	研磨痕：両側面部分的・上面顕著 穿孔痕：表面中央～上面向け貫通	5.9	4.5	2.8	140	HA④K20 III 台1326	

< 石質 >

石器・石材は石器 333 点、石材 383 点、自然礫 445 点の総計 1,161 点出土した。石質同定の対象は石器のみに限定し、今回は石材等の同定は行ってない。石器にみられる岩石は系統として火成岩 9 種、変成岩 7 種、堆積岩 9 種の 3 系統 25 種から成る。全体をとおり火成岩系統の岩石は重量比では少ないが種類は多く認められた。

第 168 図に出土した主な岩石の比率を示した。出土量の多い順に列挙すると砂岩 57.5%、斑レイ岩 11.0%、角閃石安山岩 5.0%、輝緑岩 4.9%、角閃岩 3.9%、玄武岩 3.8%、片状砂岩 2.6%、輝石角閃石安山岩 2.5%、花崗閃緑岩 2.0%、閃緑岩 1.4%、礫質砂岩 1.2%、シルト岩 1.1%、緑色岩 0.8%、石英安山岩 0.7%、砂質片岩 0.7%、泥岩 0.4%、チャート 0.2%、サンゴ塊 (ハマサンゴ) 0.1%、頁岩 0.1% である。

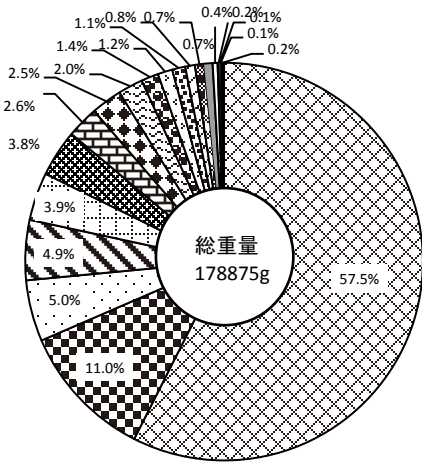
その他に含めた粘板岩、泥質片岩、黒色千枚岩、黒色片岩、黒色頁岩、赤色頁岩 (黄鉄鉱含む) 等の岩石は比率にして 0.1% に満たず、それらをまとめた合計が 0.2% となる。

堆積岩系統の岩石は砂岩、礫質砂岩、頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩、泥岩、シルト岩、チャート、サンゴ塊 (ハマサンゴ) などで、最も多いのは砂岩の 57.5% で沖縄本島に最も多い岩石である。同じ堆積岩系統の岩石にも、産出される地層の地質年代の違いで確認される産地がそれぞれ異なる。

変成岩系統の岩石は緑色岩、片状砂岩、砂質片岩、泥質片岩、粘板岩、黒色片岩、黒色千枚岩などが確認され、最も多いものは片状砂岩で全体の 2.6% を示し沖縄本島でも採取される。変成岩系統の岩石も変成作用の違い、変成度の高低差で採取される産地は異なり主に沖縄本島中部以北で産出される。

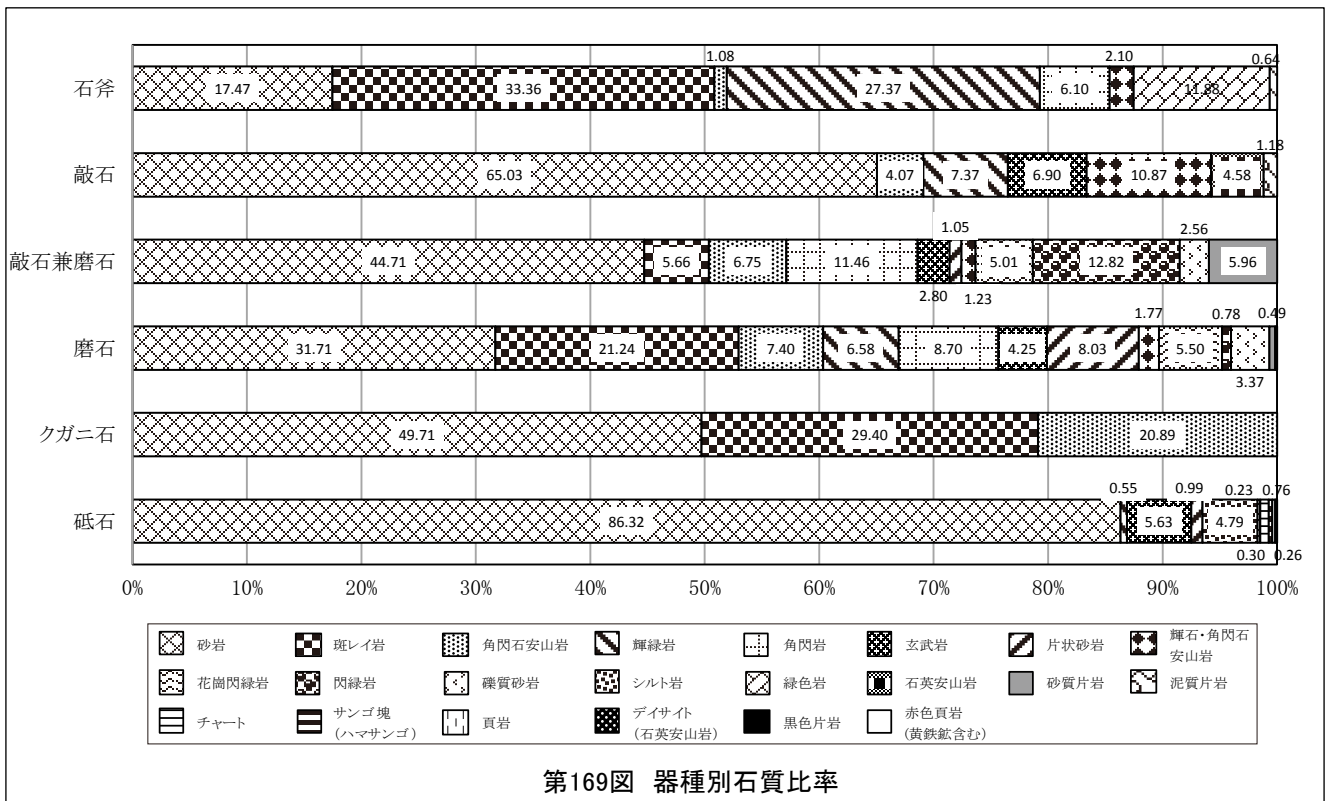
火成岩系統で出土した岩石は斑レイ岩、輝石角閃石安山岩、角閃石安山岩、輝緑岩、角閃岩、玄武岩、花崗閃緑岩、閃緑岩、石英安山岩で最も多いのは斑レイ岩の 11.0% である。火成岩系統の岩石には成り立ちで大きく分け深成岩、半深成岩、火山岩、火砕岩がある。火成岩系統の岩石は、八重山諸島、特に西表島、久米島では確認されるが、沖縄本島では堆積岩系統・変成岩系統の岩石に比較して最も産出されない種類の岩石である。半深成岩は恩納村、中新世紀の地質におけ

る火山岩は南部糸満周辺、名護から本部半島のごく一部の限られた地層に僅かに確認される。石器に使用される石質には火成岩など県外産と思われる岩石も多く、火成岩の産地は沖縄本島から程近い徳之島以北の産地という同定結果もある。火成岩の石器は本島外からの持ち込みとも想定されるが、産出地の確定は露頭した地層と比較検討が必要で安易に決定づけることはできない。



第168図 石質組成 (%)

	砂岩		砂質片岩
	斑レイ岩		泥岩
	角閃石安山岩		チャート
	輝緑岩		サンゴ塊(ハマサンゴ)
	角閃岩		頁岩
	玄武岩		その他
	片状砂岩	(その他詳細)	
	輝石角閃石安山岩		粘板岩
	花崗閃緑岩		泥質片岩
	閃緑岩		黒色千枚岩
	礫質砂岩		黒色片岩
	シルト岩		黒色頁岩
	緑色岩		赤色頁岩(黄鉄鉱含む)
	石英安山岩		



第169図 器種別石質比率

第169図に石器で集計した器種のうち点数の多い6器種について石質の割合を示した。石斧では斑レイ岩が33.36%で最も多く、次いで輝緑岩が27.37%、砂岩17.43%、緑色岩11.88%で上位を占める。斑レイ岩は石斧に多用される岩石で前回報告の平安山原B遺跡(2015)でも多く出土した。

敲石は砂岩が65.03%と大半を占めるしかし、輝石角閃石安山岩の10.87%、角閃石安山岩4.07%、玄武岩6.90%はほとんど沖縄本島では産出されない。

敲石兼磨石は砂岩が44.71%を占める。使用された岩石は11種類が確認され、堆積岩系統のうち砂岩や変成岩系統の片岩類が多い。

磨石は砂岩が31.71%、斑レイ岩が21.24%で5割以上を占め、岩石も13種類と最も多い。敲打器類(敲石・敲石兼磨石・磨石)は石器のなかでも出土量が多く、岩石の種類も他の石器に比較し多い傾向にある。

クガニ石は砂岩が49.71%、斑レイ岩29.40%、角閃石安山岩20.89%で3種類と最も少なく数量的なことも関係し、

限られた岩石を使用している。

砥石は砂岩が 86.32%と 8 割以上で、玄武岩 5.63%、シルト岩 4.79%の 3 種類が上位にある。これらの種類以外に片状砂岩 0.99%、チャート 0.76%、輝緑岩 0.55%、サンゴ塊（ハマサンゴ）0.30%、頁岩 0.26%、緑色岩 0.23%、黒色片岩 0.10%、赤色頁岩 0.06%などがわずかに確認された。砥石の項目でふれた貝塚後期とグスク相当期の時期別の使用状況では、明確に石材を選択していることが認められ又、この項目では時期別の比較とは別に砥石全体における割合を示している。

#### 小結

本調査で出土した石器は層序では上層からの出土も多く、遺物の帰属時期が曖昧な部分も多々ある。遺跡の主体が中世～近世、近代又、戦前の遺物が多いことや攪乱層が阻んでいるのが一因と思われる。石器以外の遺物で陶磁器類が大半を占め、石板の出土もあり遺物の内容は時期的に新しく、かなり近世寄りの様相を呈す。

石器の器種で判断できるものは、可能な限り分類を行ったが詳細な分析までは至らず不明な点も多く残った。石器の内容は貝塚後期とグスク相当期の遺物と考えられる。

石斧は石器全体のなかで点数自体が少ない。サイズの点からは中型から小型資料が多く、大型に属す石斧は少ない。特徴として石斧に刃部の潰れた資料が多く、敲石などに転用している点が挙げられる。又、粗加工だけのもの、再加工したと推測されるもの、刃部の研ぎ直しが曖昧なものが認められ丁寧に作られた資料が少ない。石斧のほとんどが作りの雑な在地産の石斧で、模倣品と思われる資料は数点認められたが、持ち込みの可能性のある精巧なつくりの石斧は今回全く出土していない。貝塚後期後半から石斧の出土が減少することは周知されており、石斧に代用される他の資料があると考えられる。

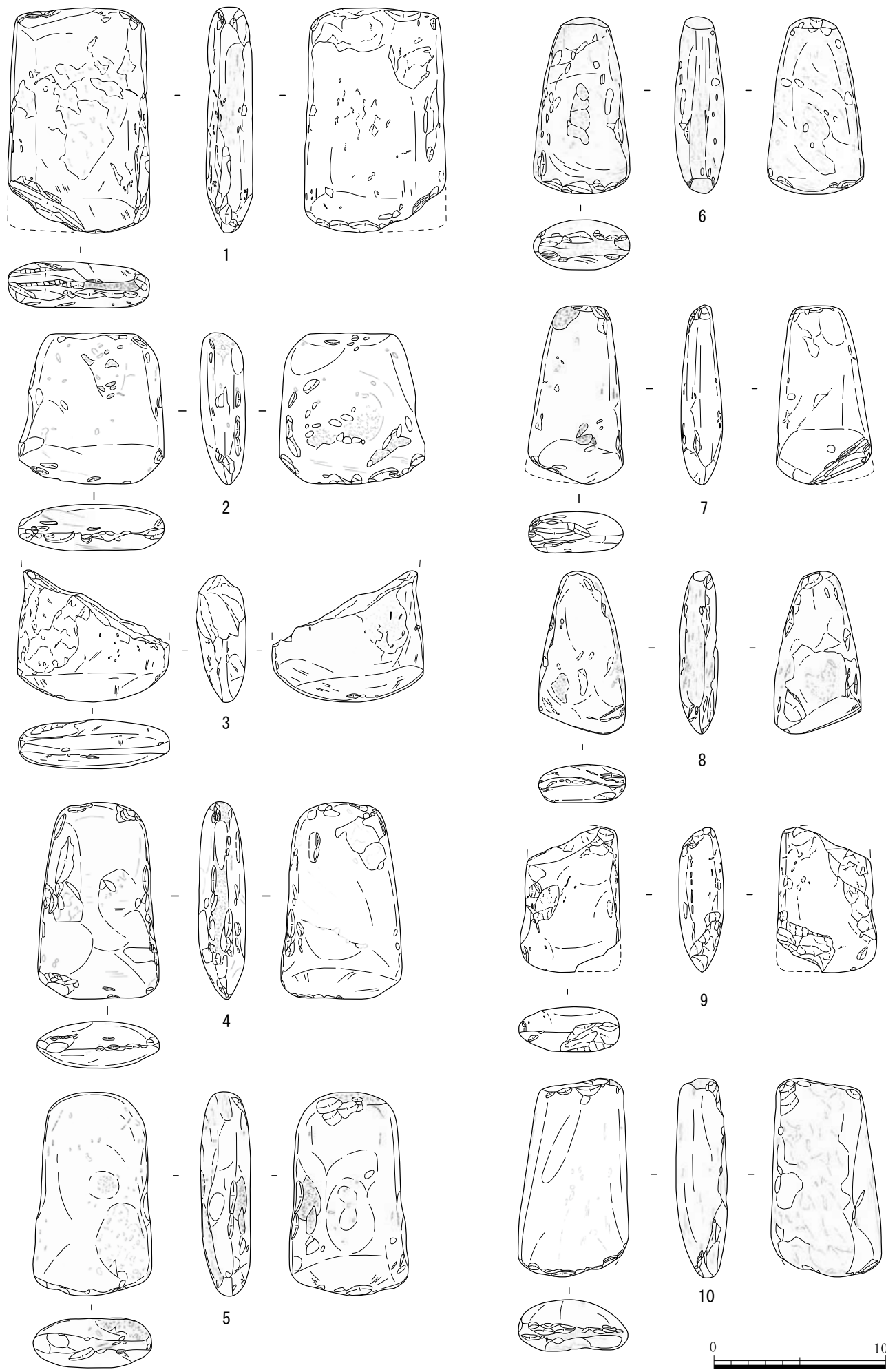
敲石、敲石兼磨石、磨石などの敲打器類は出土量も多く、石鱗状、厚手、扁平、不定形など数種類の形態が認められた。これらの資料は貝塚後期以降も使用されていたと考えられる。

クガニ石が 8 点も出土したことも挙げられる。クガニ石の用途は白木原和美氏の調査では、徳之島の祭りにおいて年中行事の際、かけ声や唄を歌いクガニイシ（黄金石）を用いるとする。与論島、沖永良部島、徳之島、奄美大島などで出土例があり、クガニ石の報告には軟質の砂岩、細粒砂岩以外に角閃石輝石安山岩、花崗岩などの石質の資料も認められている。砥石は貝塚後期の砥石に加え、グスク相当期の砥石がこれまでより多く確認できた。石質も沖縄本島外と思われる火成岩系統の玄武岩を用いた砥石が目立つ。使用痕やそれぞれの特徴からグスク期以降、近世時期まで使用していたとみられる。グスク相当期の砥石が多く出土したことで、鑄造初期の鉄などの金属類、刃物が存在したと推測される。砥石は現代でも使用する道具で形態や石質などに変化はあるものの、用途の変わらない石器である。

註 1：佐原真 1977 石斧論—横斧から縦斧へ—「考古論集 慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 別冊」松崎寿和先生退官記念事業会

註 2：平口哲夫 1991 「木製品を作り出した石器」季刊考古学 第 35 号 雄山閣出版 pp75-77

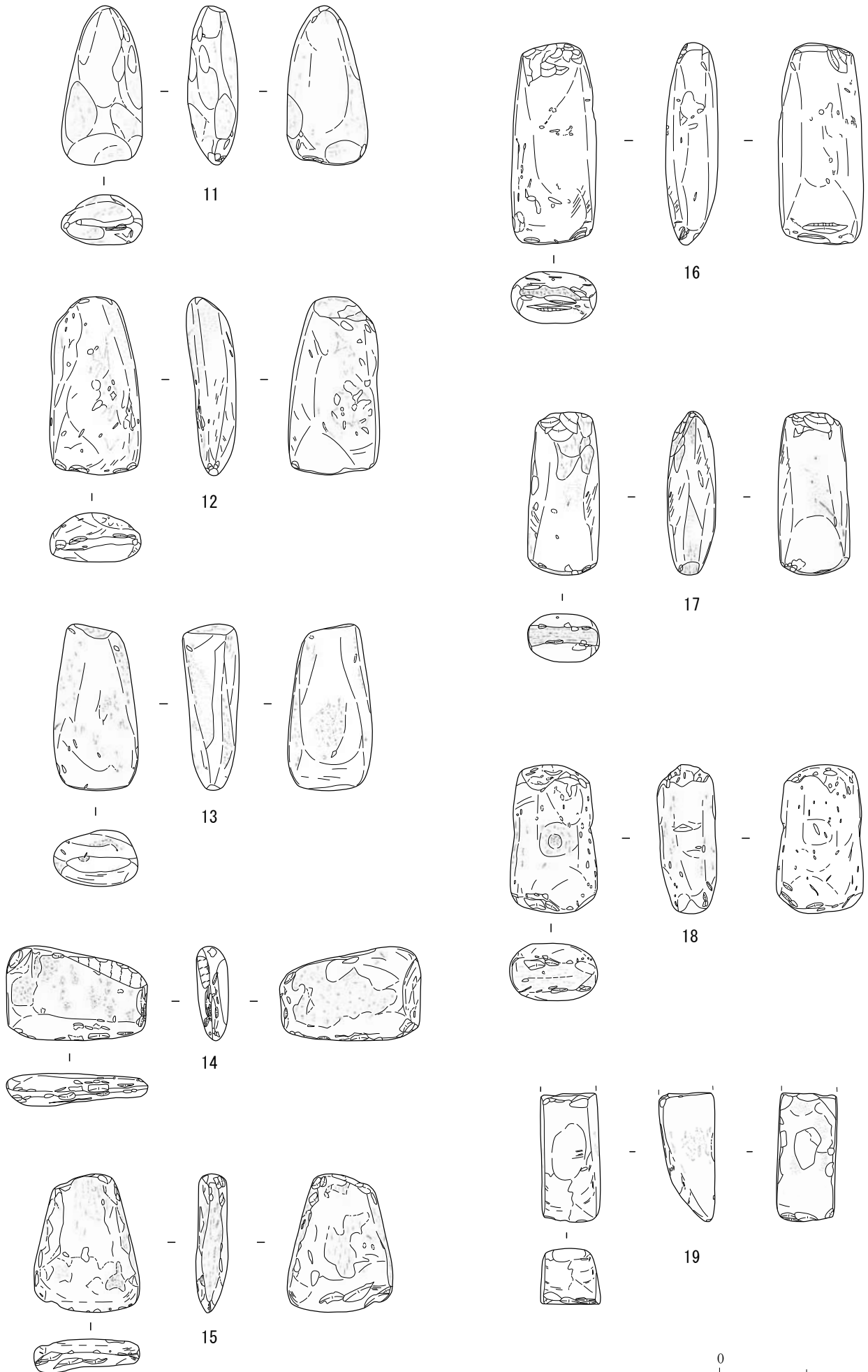
註 3：白木原和美 1978 「クガニイシ」 pp121-139 『法文論叢』 41 号 熊本大学 法文学会



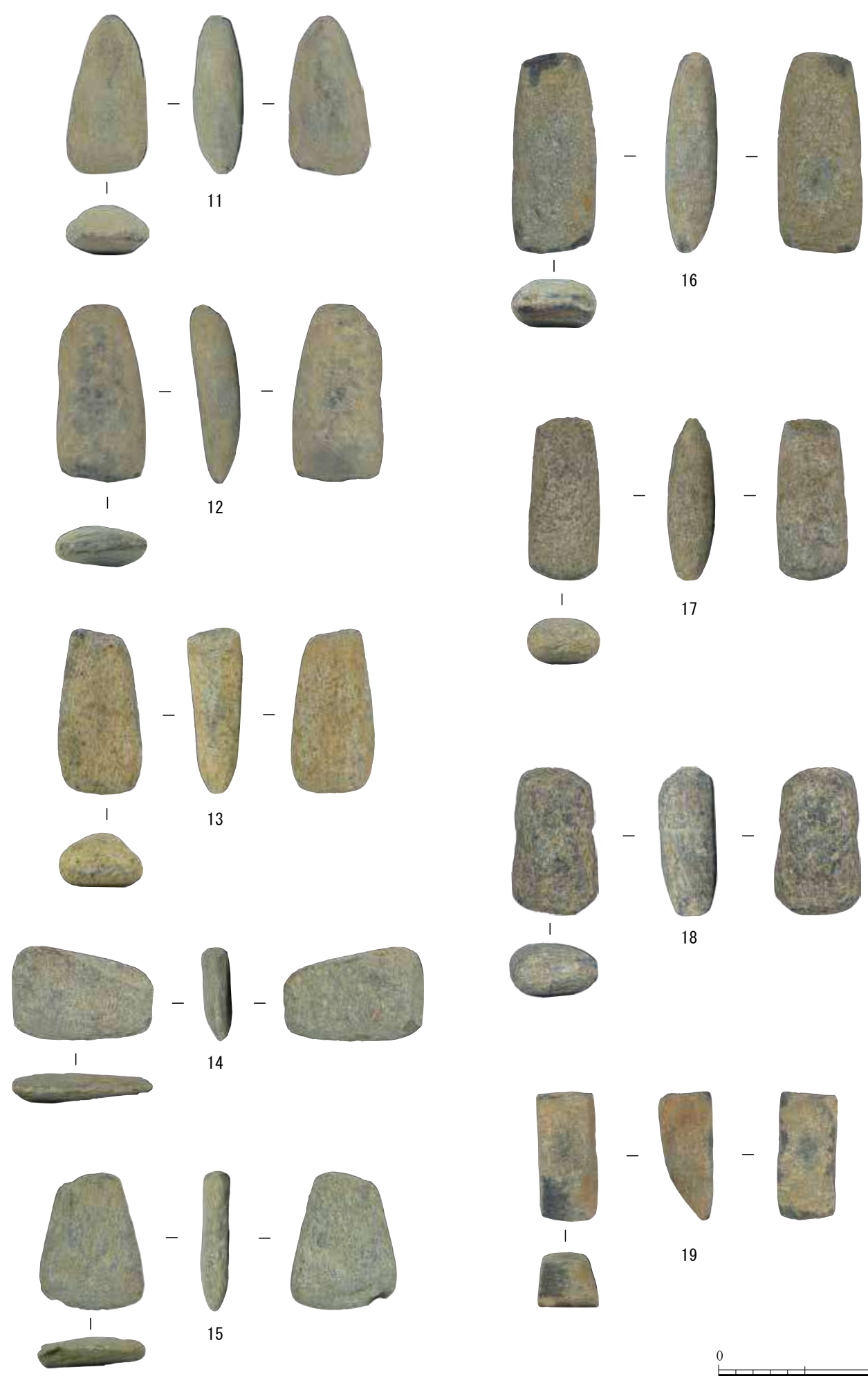
第170图 石器1



图版 111 石器 1

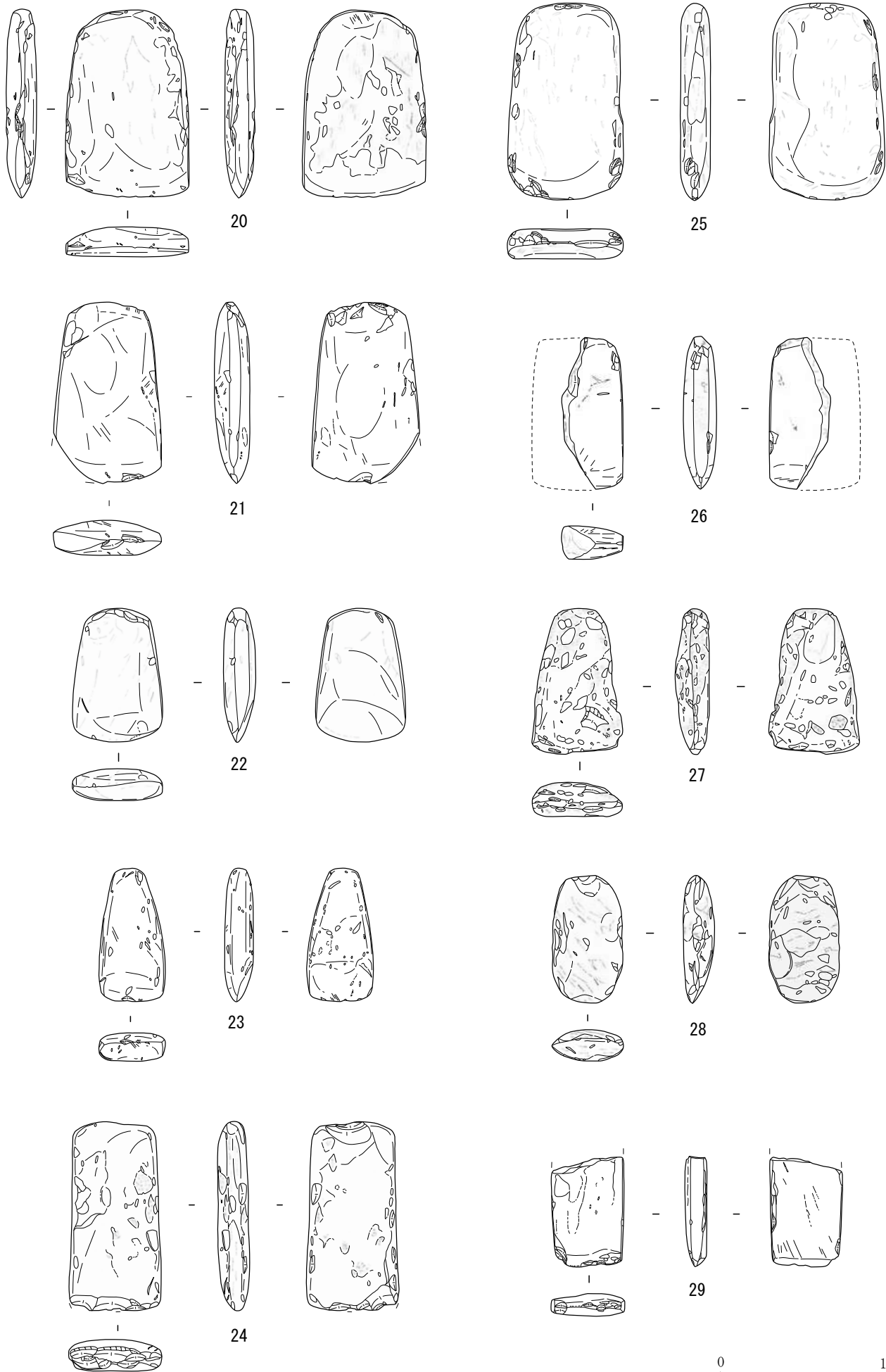


第 171 图 石器 2

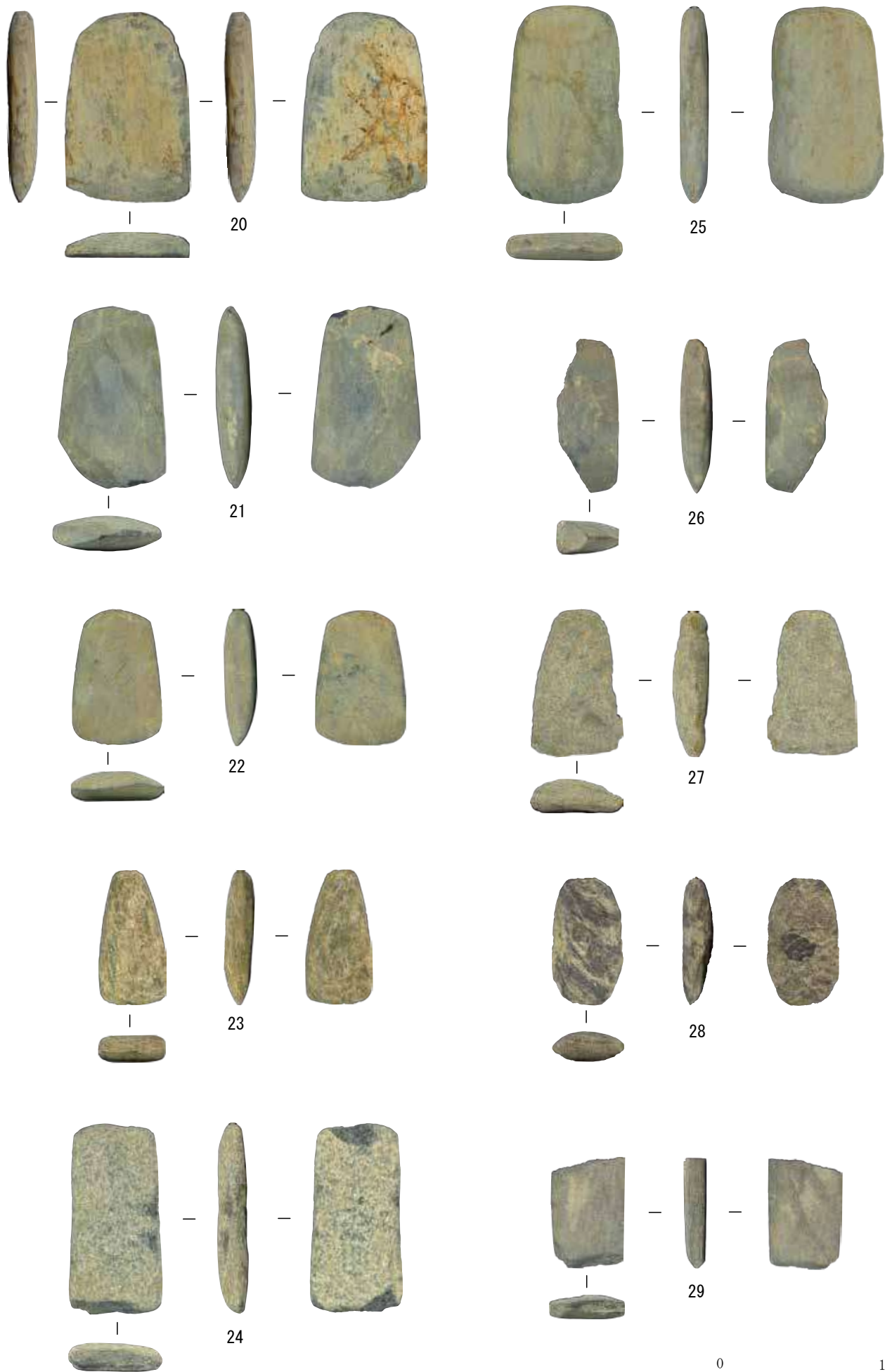


图版 112 石器 2

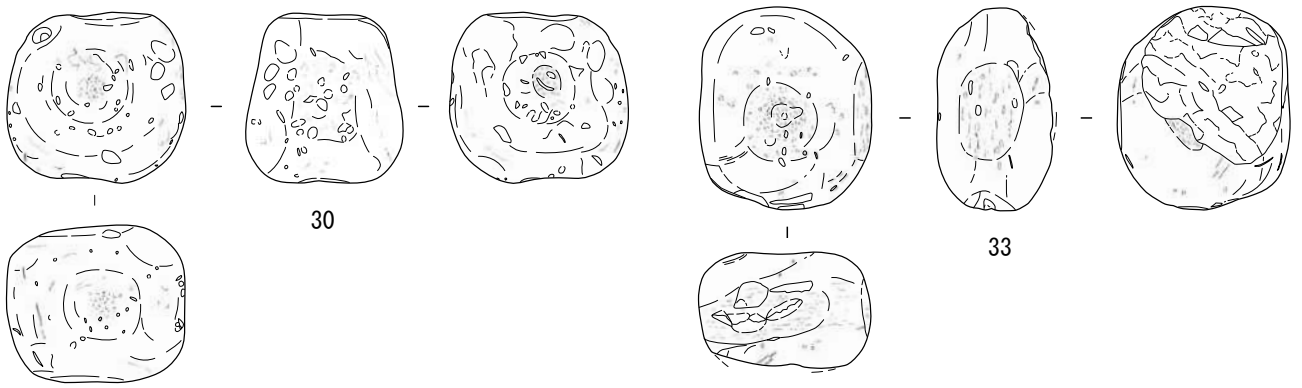




第 172 图 石器 3

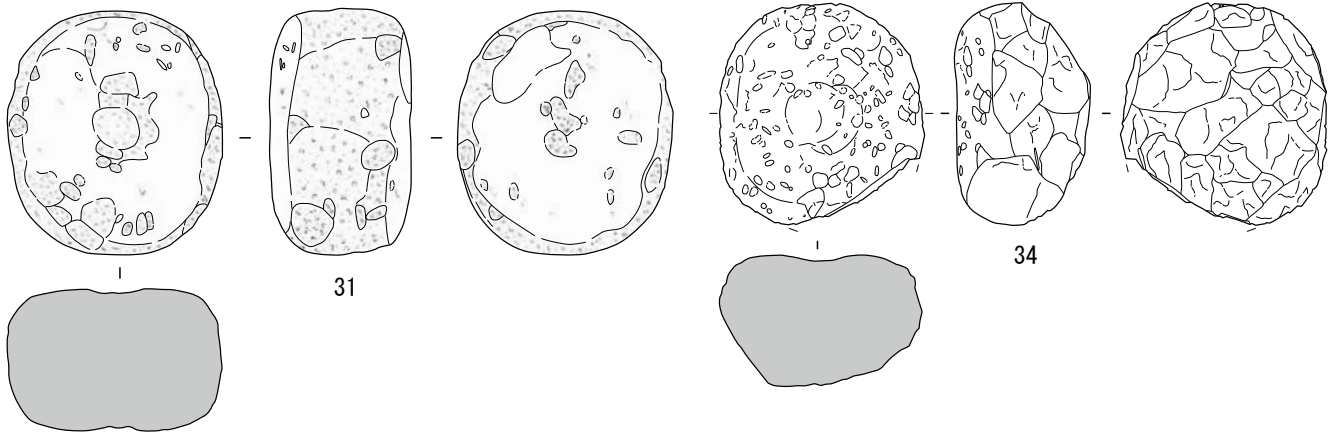


图版 113 石器 3



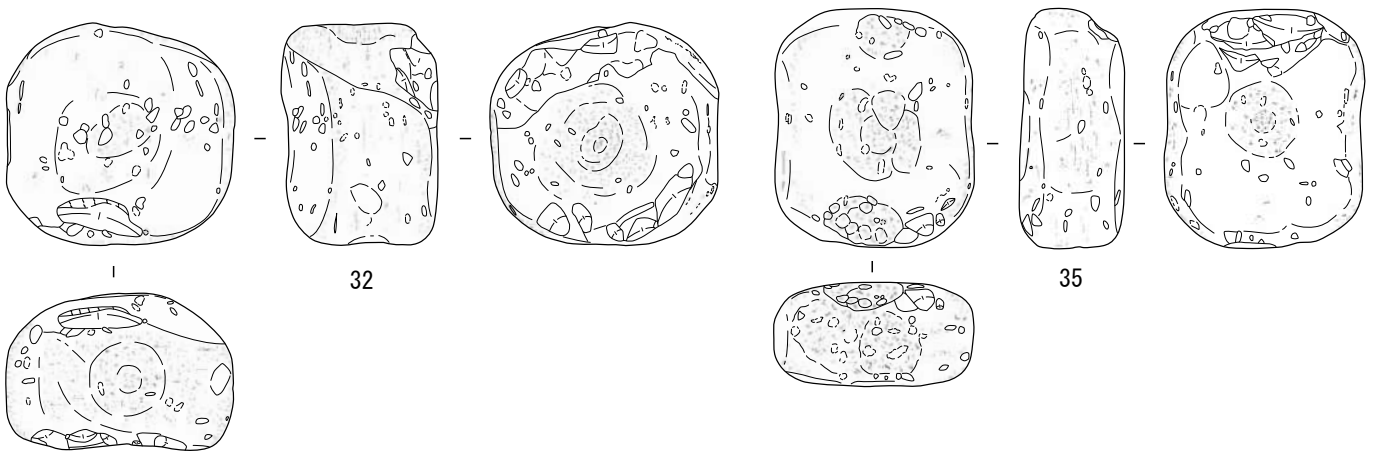
30

33



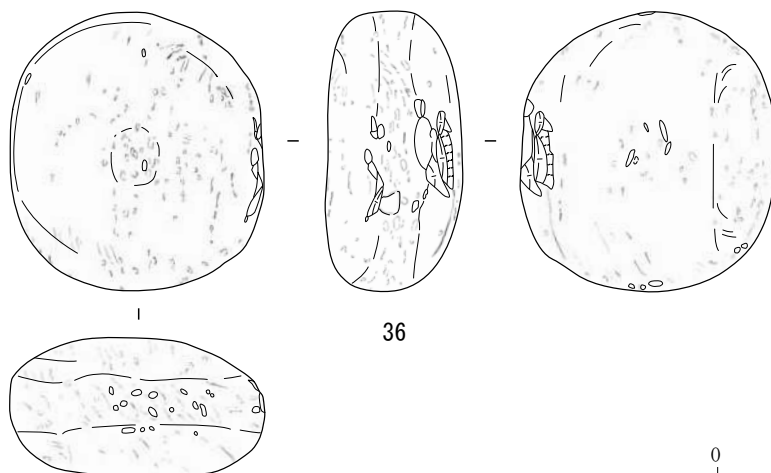
31

34



32

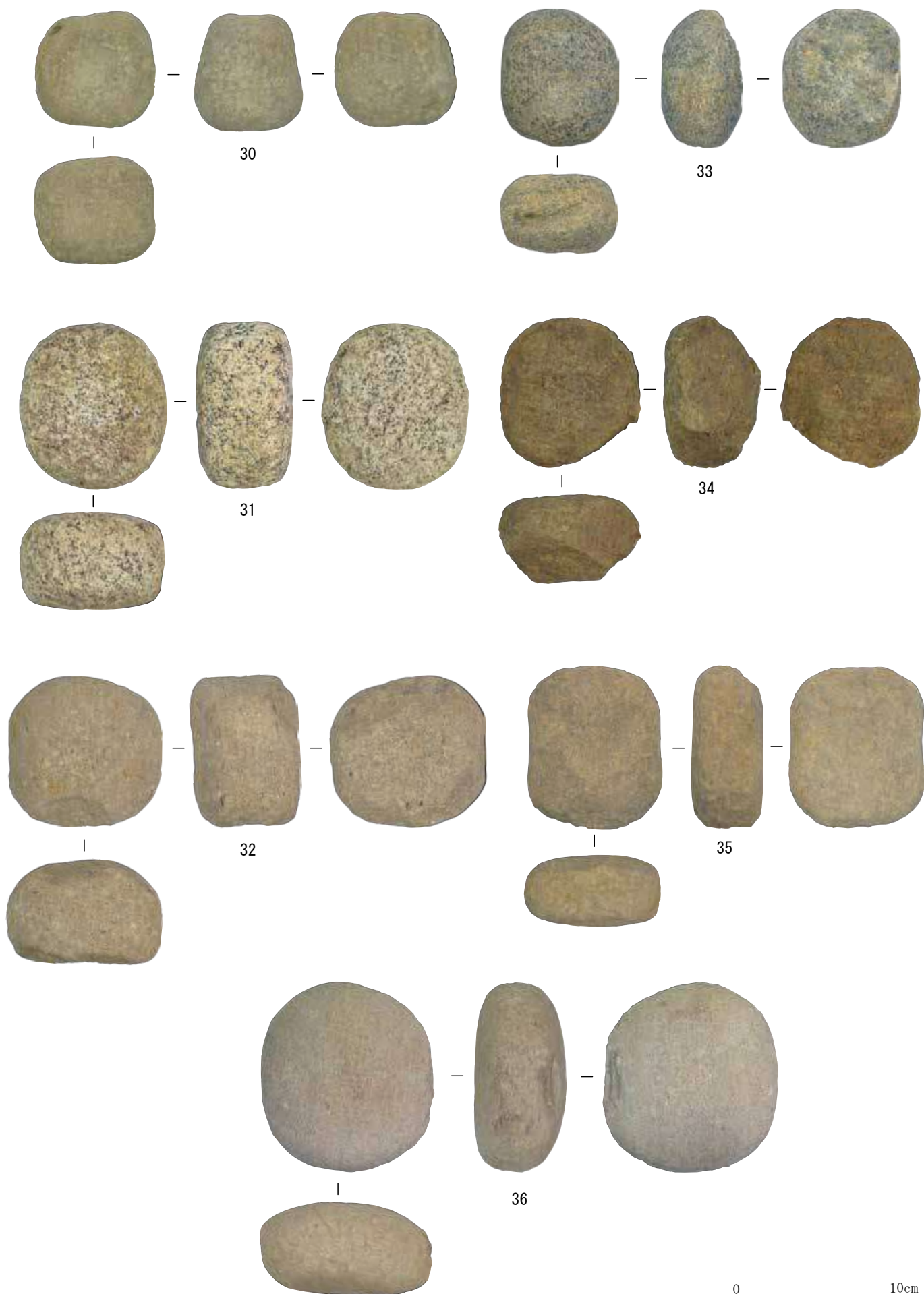
35



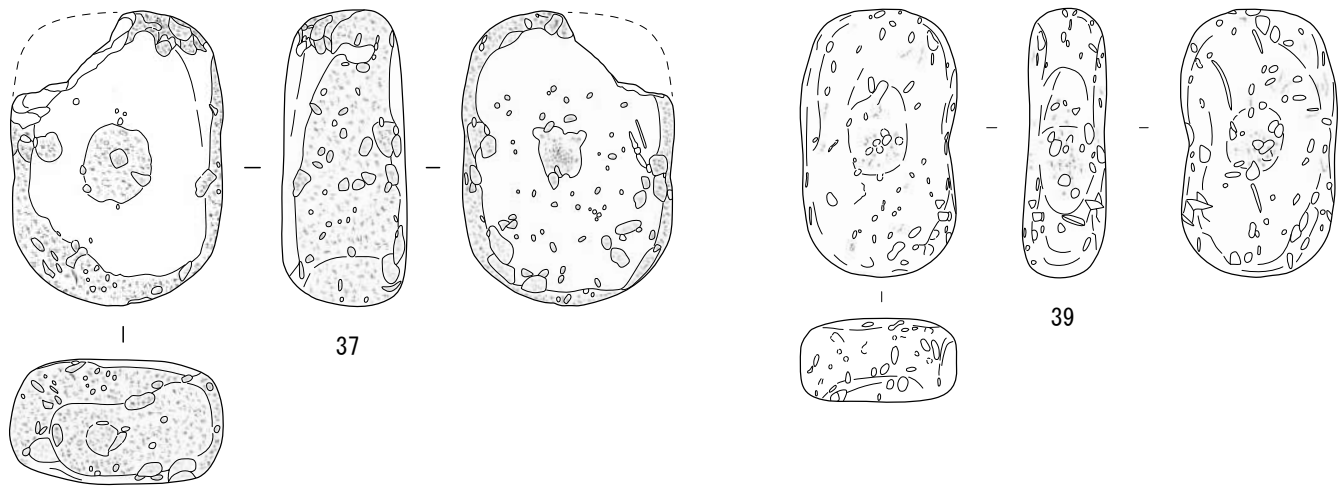
36



第 173 图 石器 4

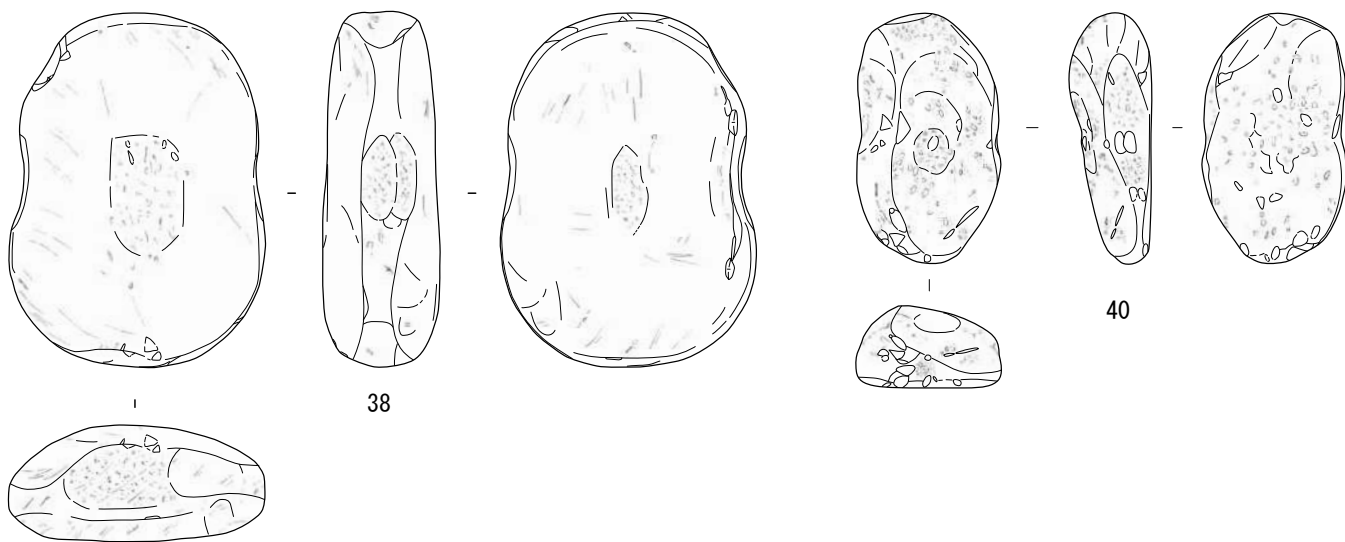


图版 114 石器 4



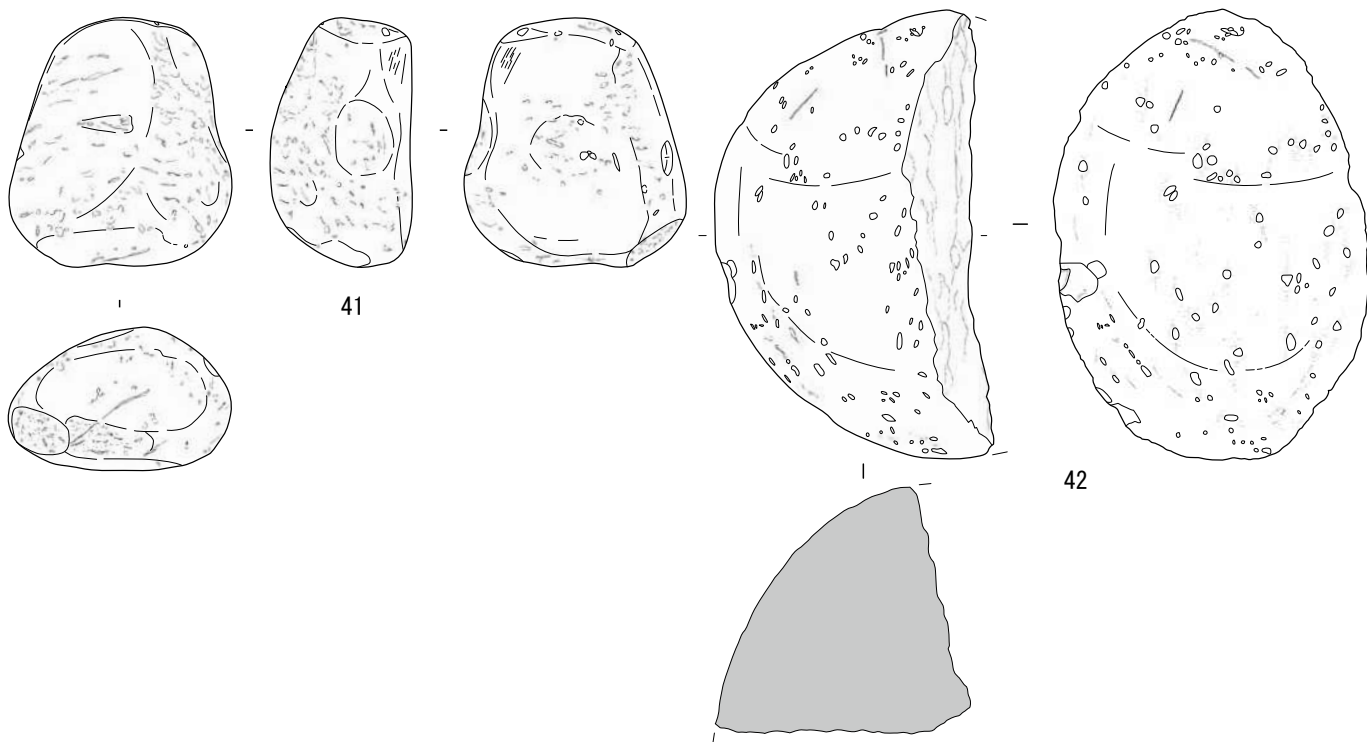
37

39



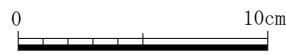
38

40

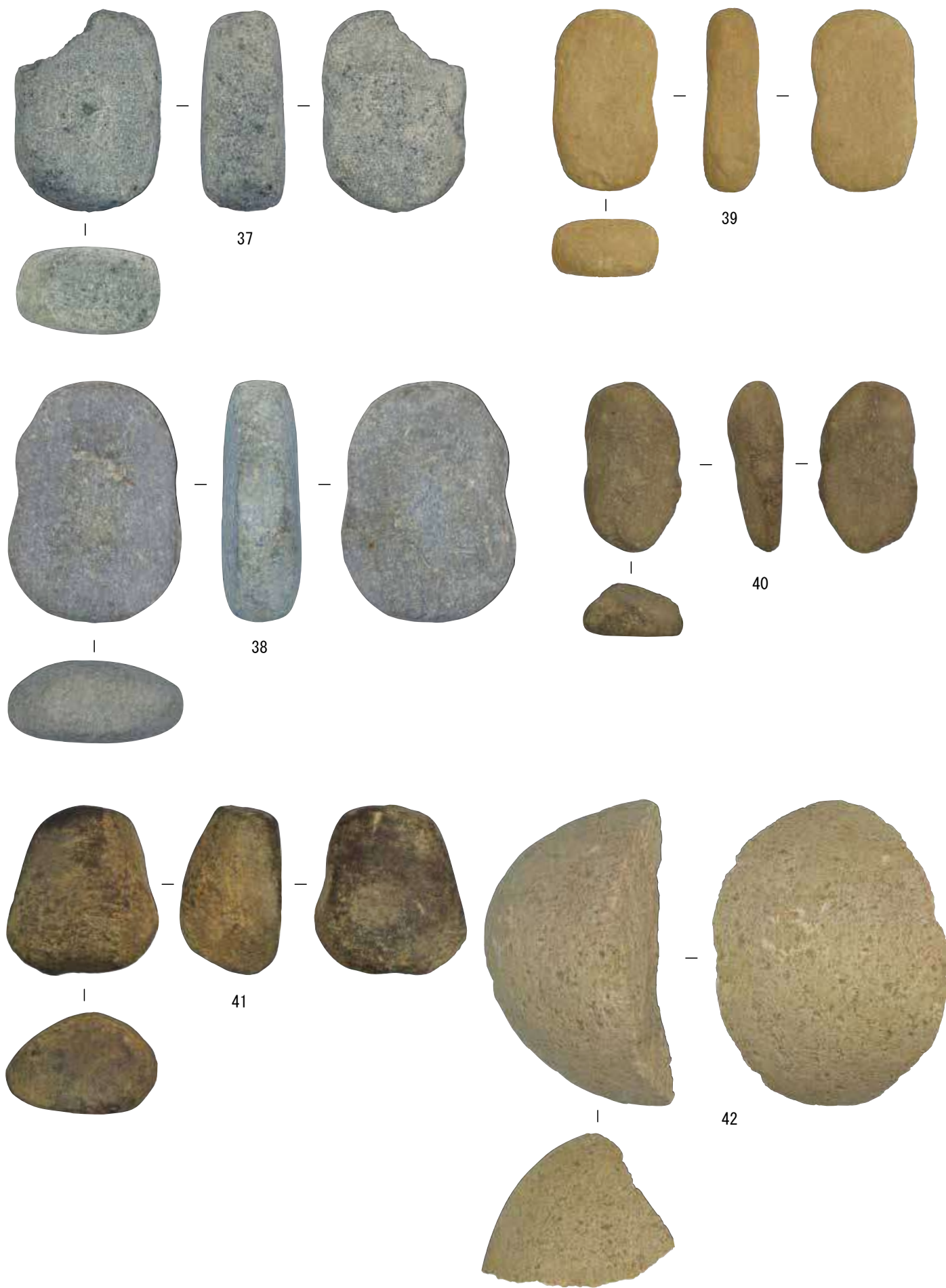


41

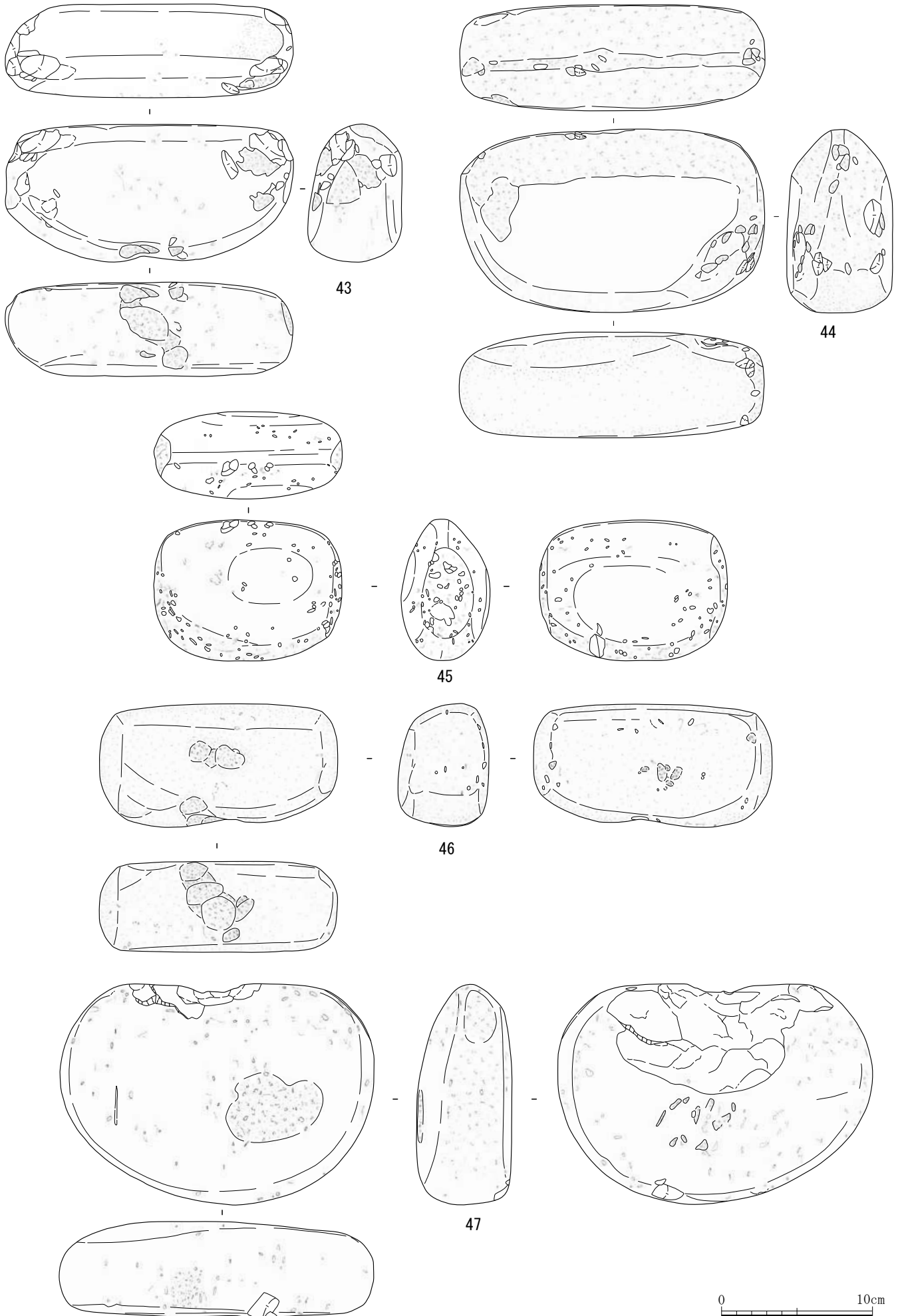
42



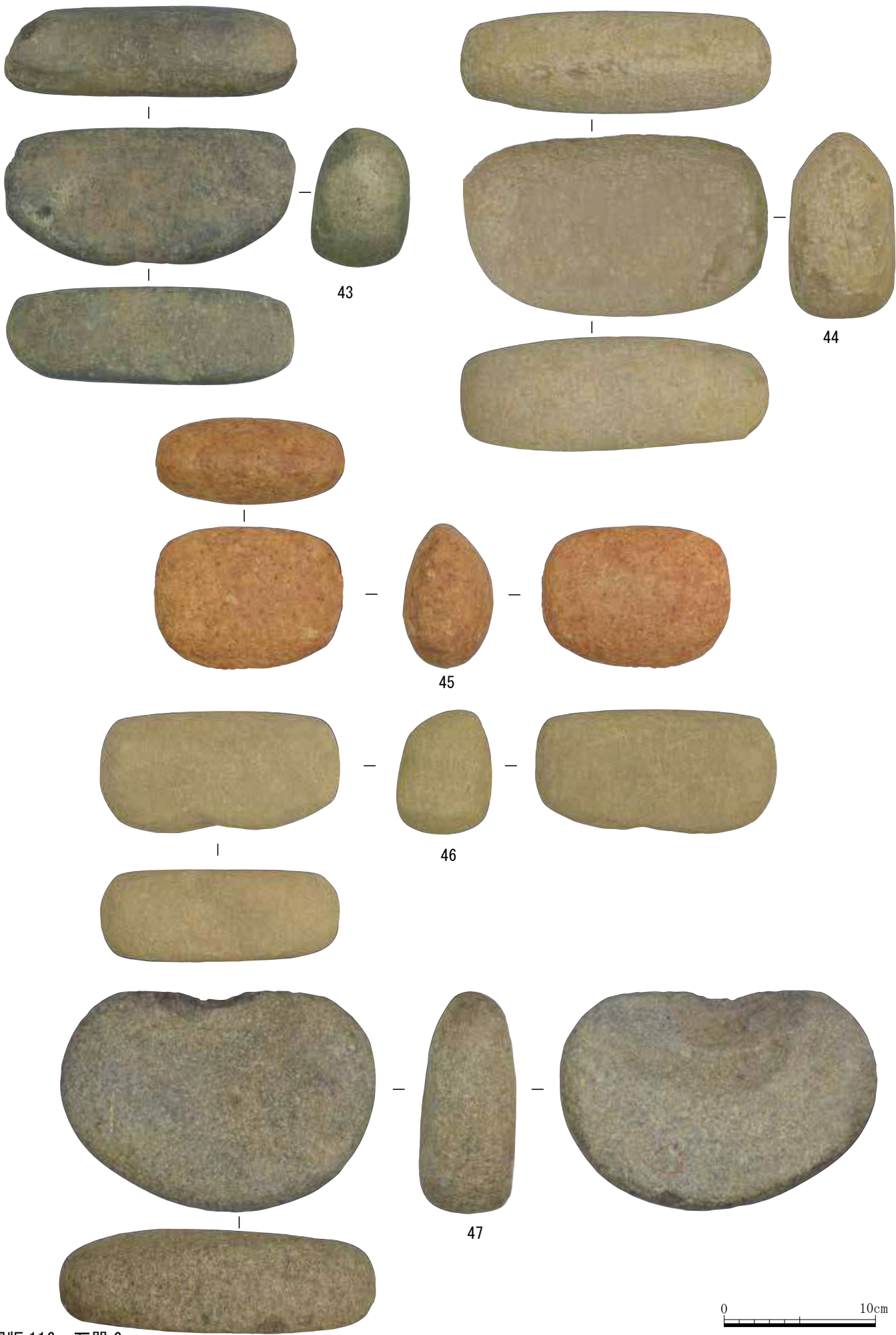
第 174 图 石器 5



图版 115 石器 5

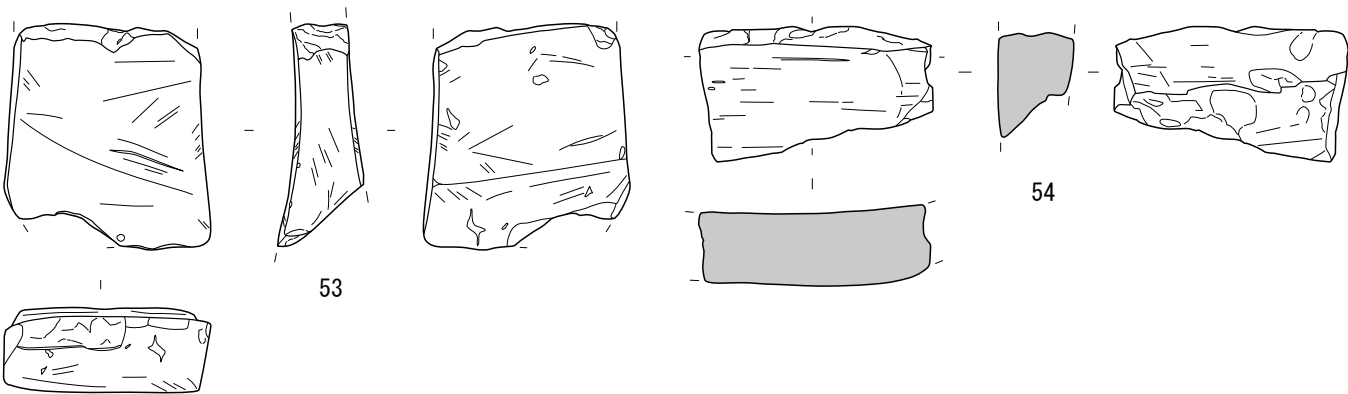
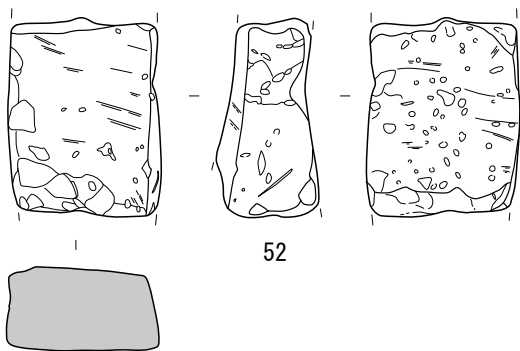
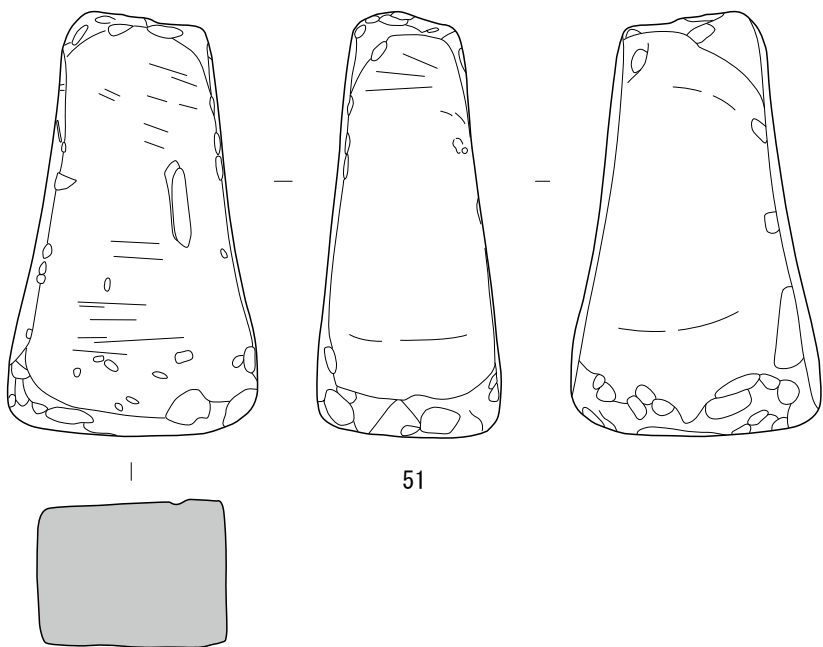
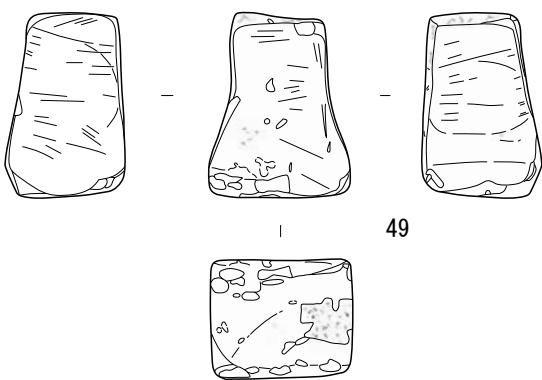


第175图 石器6



图版 116 石器 6





第176图 石器7



48

50



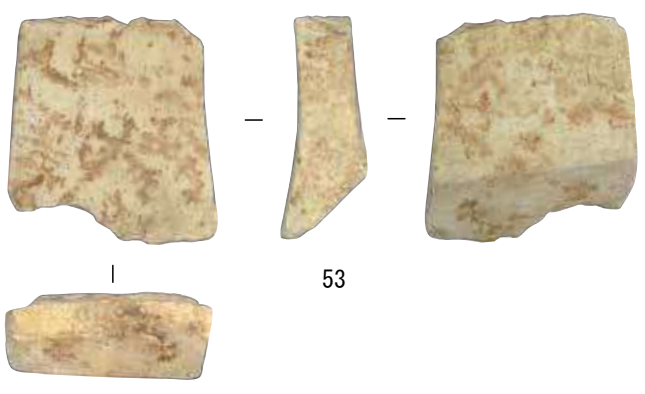
49



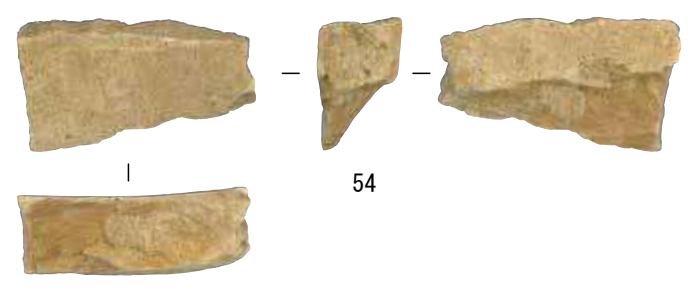
51



52



53



54



图版 117 石器 7



第177图 石器8



图版 118 石器 8

## (28) 貝製品 (第 181 ~ 184 図・図版 119 ~ 125)

貝製品は素材貝も含めてHA③ 161点、HA② 181点、HA④ 49点、HA① 6点の計397点の出土である。出土層は層序(第2節)や他の遺物でもふれたように近現代~貝塚時代後期の遺物まで数時期の遺物が混在するⅡ層に多い。出土分布をみるとHA③の自然流路(S-640)沿いに貝塚時代後期、HA②の内陸側と海岸側に分かれ、HA④にグスク時代相当期の製品が出土する傾向がみられる。また、これまで報告されたキャンプ桑江北側地区の遺跡の調査成果や、出土した土器・中国産陶磁器から概ね貝塚時代後期とグスク時代以降に分けられる。出土量の多い二枚貝有孔製品・タカラガイ製品については分類や集計を行い、図示したものについては観察一覧を示した。また、他の製品については図掲載以外も観察一覧を示した。以下、貝塚時代後期とグスク時代以降の2つの時期に分けて略述する。

### 貝塚時代後期

装飾品と考えられるもの(貝輪・円盤状製品・巻貝製品・札状製品など)と実用品と考えられるもの(ヤコウガイ製匙・ホラガイ有孔製品・二枚貝有孔製品など)、貝交易の素材貝(大形イモガイ・ゴホウラ・ヤコウガイ)が出土した。以下、略述する。

#### ・装飾品と考えられるもの

<貝輪> 1点出土した。図1はメンガイ類の外縁を幅1.0cm残し外殻を丁寧に研磨するもので凹部分のみに自然面を残す。HA① N13 IV層(白砂)の出土で近接する貝塚時代後期の遺跡からの流れ込みの可能性が高い。

<イモガイ円盤状製品> (図2・3) 大形イモガイ(アンボンクロザメ)の螺塔部を切り取り、円盤状に加工しもので2点出土した。図2は螺塔部、体層の切り取り部を丁寧に研磨、図3は体層面を打割し平らにするもので、殻頂に若干の研磨が確認されることから製作途中と思われる。大きさは前者が5.8cm、後者が5.7cmを測る。出土は前者がHA②、後者はHA③の出土で90mと離れている。

<イモガイ有孔製品> 図4は色残りの良いアンボンクロザメである。殻頂部に径2.0cmの孔、及び外唇に打割が確認され、殻径は6.0cmを測る。類例は伊礼原遺跡(2007・2014)に出土することから貝輪などの未製品であろうか。HA④の下層確認調査の出土で貝輪と同様、周辺遺跡からの流れ込みの遺物と思われる。

(自然貝) 後述するゴホウラと同様、南海産貝輪交易の対象貝である。貝集積遺構は検出されていないが、大形イモガイの計測を行い第108

第108表 大形イモガイ大きさ(殻径)別出土量

地区 貝種	HA③	HA②	HA④	HA①	合計
	アンボン クロザメ	アンボン クロザメ	クロフ モドキ	アンボン クロザメ	
3.5~3.9		5			5
4.0~4.4		1			1
4.5~4.9	2	1	1		4
5.0~5.4	3	2	2		7
5.5~5.9	2	1			4
6.0~6.4				1	1
6.5~6.9	1				1
合計	8	10	3	1	23

表に示した。HA③ 8点・HA② 13点・HA④ 1点・HA① 1点(製品)の計23点出土した。殻径の大きさを比較するとHA②は3.5~3.9cmが38%と多く、HA③は4.5~5.9cmの大きめが多い。前述したイモガイの製品に比べると小さい。

<巻貝製品> 小形の巻貝の加工品で、体層部を腹面と背面とから研磨するもの(a)、貝の原形を残し殻頂に穿孔するもの(b)、貝に敲打・打割を加えたもの(c)がある。

a: 図5ハブミナシ・図6マクラガイ(クチグロマクラ)がある。図5は背・腹面を研磨し断面から三角形を呈するもので殻軸はなく、殻頂も穿孔する。図6は背・腹面から厚さ0.4cmの均一に板状、殻頂にも研磨による穿孔がある。両者は断面形は異なるが同じような加工である。類例はくびれ平底を主体とする本部町兼久原貝塚(1977)・恩納村熱田貝塚(1979)で報告されている。図5・6はHA②のI4・5と近接して得られ、近くからは貝塚時代後期の人骨も出土している。b: 図7は殻頂に粗孔、体層に若干の研磨。図8はニシキミナシの殻頂を研磨し穿孔、外唇を打割したもの

第109表 貝輪・円盤・巻貝・札状 観察一覧

(質量単位: cm, g)

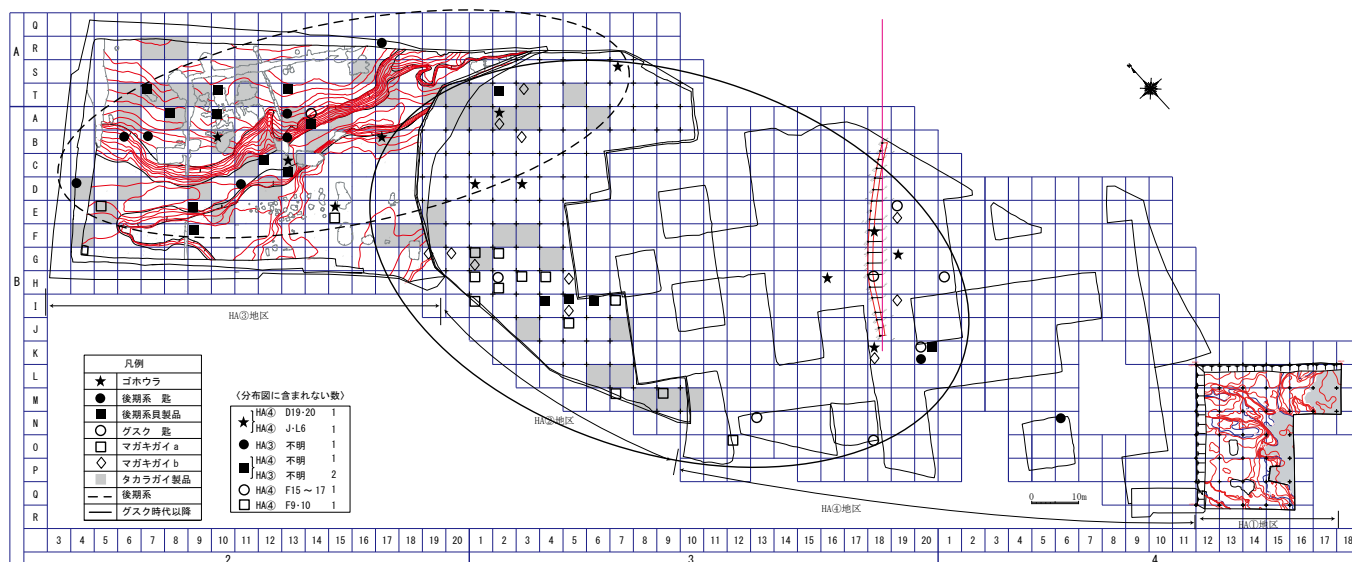
第図 図版	図 番号	製品 番号	製品	貝種	完破	殻高 (縦)	殻長 (横)	厚さ	重さ	観察事項	地区・グリッド・層 遺構・台帳(取)番号
第181 図・ 図版 122	1	7	貝輪	メンガイ	1/3	10.3	6.3	0.3	8.0	外殻及び内外縁は研磨顕著。凹部分は自然。色残△	HA① N13 IV 台220
	2	15	円盤	アンボンクロザメ	完	6.1	5.8	0.8	56.5	螺塔研磨顕著。体層面研磨顕著。色残○	HA② I6 II 取26
	3	14	円盤	アンボンクロザメ	完	5.7	5.7	0.9	52.8	体層、打割顕著。面平ら。色残△。風化△	HA③ E9 II 台1595
	4	30	有孔	アンボンクロザメ	完	11.2	6.0	6.4	239.0	殻頂、打割で穿孔。外唇打割で調整。色残○	HA④ V 台4622
	5	50	巻貝	ハブミナシ	完	2.1	1.7	-	4.8	腹・背研磨、断面-三角形。殻頂-研磨。殻軸+欠。色残○	HA② I4 II 井戸④ 貝228
	6	10	巻貝	マクラガイ	完	2.4	1.0	0.4	1.0	板状に研磨。殻頂-研磨穿孔。	HA② I5 II 取113
	7	31	巻貝	イモガイ	完	4.5	1.8	2.0	11.0	殻頂打割、穿孔。風化△	HA③ A14 III下 S-11 台2025
	8	35	巻貝	ニシキミナシ	完	3.1	2.9	-	31.0	殻口・殻頂-研磨、穿孔。	HA④ K20 III SP520 台3643
	9	1	巻貝	マクラガイ	完	2.1	1.8	1.6	6.0	貝全体を研磨。殻頂-有孔、肩部-摩耗。肩部も研磨。丸味帯びる-摩耗か研磨。外唇-色残。色残△	HA③ T13 III下 S-11 貝107
	10	3	巻貝	ハブミナシ	完	10.1	3.4	3.3	81.0	殻口に敲打痕顕著。殻頂丸味。色残○	HA③ F9 II S-32 台2054
図版 119	-	4	巻貝	ハブミナシ	完	9.0	4.7	4.0	31.9	打割調整6個の孔。外唇を直状に加工。	HA③ II下 台4697
図版 122	11	8	札状	イモガイ	完	1.4	3.9	0.3	4.6	大形イモガイの殻口利用。表裏面-研磨顕著。外唇側中央に「M」の挟り。広田上層の未製品?。色残△	HA③ T10 II 台618
図版 122	12	260	札状	イモガイ	完	6.6	2.2	0.4	8.6	周縁全研磨。外殻、研磨、一部表層残る。螺肋研磨顕著	HA③ A8 II

<凡例> ◎:多・強、○:普通、△:少・弱

第110表 貝製品出土量

時期	貝塚時代後期																	グスク時代以降					近代	グスク・近代合計	合計															
	大分類	小分類	有孔	巻貝製品			札状	ゴホウラ	ゴホウラ	環状	貝匙(背)	ヤコウガイ	ヤコウガイ加工	容器	螺蓋製利器	貝刃	貝包丁	二枚貝有孔	後期合計	タカラガイ	マガキガイ					巻貝粗孔	基石													
				a	b	c															a	b	c																	
HA③	I								1			2		1			2		6	11	1		1			13	19													
	II	1			2	1	1		3	2	8	12	1	2	2	1		20	1	7	3		2	69	1	37	1	6	1	2	48	117								
	III																		1		5										5	6								
	III下												1	1					1	1				6	8						8	14								
	IV												1						2		3				2	3					3	5								
	小計	0	1		3	2	1	1	3	1	2	8	15	3	2	3	1	23	2	8	0	3		2	84	1	64	2	7	1	2	77	161							
HA②	I																		1	1	1		1	2	6	3					3	9								
	II上								1			2								1				4	2							2	6							
	II	1		2	1			2	3			26					1	12	9	11	12	7	6	6	99	2	32	10	1	1		1	47	146						
	III											1						1		3	1		1	7		11						11	18							
	IV																2							2								0	2							
	小計	1		2	1			2	4			29				3	15	9	12	16	8	7	9	118	2	37	11	10	1	1		1	63	181						
HA④	I											1							1				1	3								0	3							
	II上											1												1									0	1						
	II											1					3						1	5	3								3	8						
	III				1			4		2							1	3			5	2	1	19	4	2	2	2	1				11	30						
	IV		1								1							2					1	6			1						1	7						
	小計		1		1			6		2	2			1		1	8				6	3	3	34	7	2	2	3	1				15	49						
HA①	I												1										1										0	1						
	III下												2											2		1							1	3						
	IV	1																					1	2									0	2						
	小計	1										2	1										1	5		1							1	6						
合計		1	2	1	2	5	2	1	1	2	13	1	2	10	48	4	2	4	1	3	1	46	11	20	16	17	10	15	241	10	104	15	13	1	9	1	2	1	156	397

R: リュウキュウの意



第178図 貝製品 平面分布

である。HA ④ K20 Ⅲ層、SP520 からの出土で貝色の残りが明瞭。図 9 は小形イモガイ(マダライモ) を磨き肩部及び全面に丸みを帯び、研磨面を持たない。同様な加工は奄美市マツノト遺跡(2006) で報告例がある。c : 図 10 はチョウセンフデガイを敲打により殻口の頂部を平らにして、さらに殻頂も丸味を帯びるもので加工途中と考えられる。図版 119 は、小形のイトマキボラで体層の螺肋の凹部に 6 個の孔を外殻→内殻に穿孔し、更に外唇を直状に加工するものでいずれも打割によるもの。先端を研磨するものは、シヌグ堂遺跡(1985) になど貝塚時代前 V 期に報告例がある。



図版 119 イトマキボラ製品

< 札状製品 > 板状に加工したもので大形イモガイとヤコウガイを素とするものがある。図 11 は大形イモガイの外唇近くを長方形の板状に切り取り、一辺のほぼ中央に「M」字状の挟りを施し全面研磨するもので、平面形は広田上層タイプに似るが文様は施されていない。HA ③ T10 の出土である。広田上層タイプの施文されたものや未製品が近接する伊礼原 D 遺跡(2008)、「M」字状に挟るものは伊礼原遺跡(2014) で報告されている。図 12 は完形でヤコウガイを板状に加工するもので、背面上部の螺肋を深く削り真珠層が露呈する。平面形は長楕円を呈する。HA ③ A8 Ⅱ層の出土で類例はなく用途は不明。



図版 120 ゴホウラ・アツソデガイ (番号は第 111 表と一致)

< ゴホウラ有孔 > 肉厚のゴホウラに径 0.2cm 前後の小孔を施すものが 2 点出土した。いずれも平面形は不定形で丸味を帯び風化が著しい。

図 13 はゴホウラの袖部に径 0.2cm の孔が施され、内面はアバタにより空洞となる部分に当たり、ほかに外面に未貫通の孔らしきものがある。図 14 は殻が肉厚なことからゴホウラと考えられるもので径 0.2cm の小孔を 2 個施が不定形。いずれも類例がみられない。

< ゴホウラ・アツソデガイ > 伊礼原遺跡(2014) や平安山原 B 遺跡(2015) で貝輪や貝集積遺構が検出され、「南海産貝輪交易」(木下 1996) の対象貝とされている。自然貝も含め、観察一覧(第 111 表) と写真(図版 120) を掲載した。HA ③ 4 点・HA ② 4 点、HA ④ 6 点の計 14 点で調査区の全面に散り、出土層は HA ③・HA ②ではⅡ層、HA ④はⅢ層で得られている(第 178 図)。HA ③では図 15 を含め S-640 (自然流路) 沿いで出土。背面欠 3 点、腹面のみ 4 点、ほぼ完形 2 点、背面頂部片 3 点、袖部 2 点である。加工が確認されたのは図 15 と製品 5・38 である。図 15 は背面の前溝近くを破損、風化が進む小形のゴホウラである。上袖部を打割して整え、背面の付着していたヘビガイを全て削り、腹面とさらに内唇部分に研磨が認められる。ヘビガイをクリーニングする 3 工程の資料は伊礼原 D 遺跡(2013) でも得られている。

第 111 表 ゴホウラ・アツソデガイ製品・素材貝 観察一覧

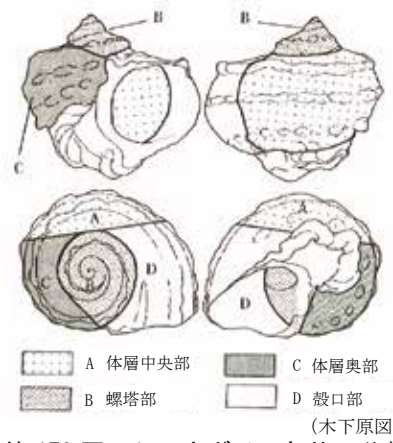
(法量単位: cm, g)

第 111 表	図版番号	製品番号	貝種	部位 b	完破	縦殻高	横殻長	重さ g	アバタ	色残り	ヘビ	風化	観察事項	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
図版なし	13	8	ゴホウラ	袖部	1/3	9.2	5.0	62.0	×	×	×	○	袖部。背面穿孔・1 個は未貫通。孔径 0.2cm、孔裏面はアバタ	HA ② A20 Ⅱ 祝殿 貝 1604
	14	25	ゴホウラ?	—	完	4.0	3.2	10.0	—	—	—	◎	内殻から穿孔。回転穿孔。孔径 0.2cm	HA ② T1 Ⅱ 貝 998
	15	1	ゴホウラ	完形	完	12.6	10.4	331.0	○	×	○	◎	背面一部欠。背面・ヘビガイ除去、研磨面、複数確認。外唇・打割欠。	HA ③ C13 Ⅱ 台 581
	—	2	ゴホウラ	背面欠	2/3	12.1	10.6	317.5	△	×	×	○	上袖欠。1 回割れ。	HA ③ B17 Ⅱ 台 583
	—	3	ゴホウラ	背面欠	2/3	14.9	11.5	459.0	◎	×	△	○	上袖欠(直状)。アバタ深い。死貝	HA ③ E15 Ⅱ S-4 台 615
	—	4	アツソデガイ	袖部	1/5	6.3	3.4	21.9	×	×	—	○	袖部のみ。	HA ③ B10 Ⅰ S-37 台 1951
	—	5	ゴホウラ	背面欠	2/3	13.5	10.6	37.8	△	×	×	△	上袖欠。背面欠・1 回割り。	HA ② D 1 Ⅱ 不建 貝 1001
	—	6	ゴホウラ	背面頂部	3	5.5	5.3	28.5	—	×	—	—	背面頂部・とくに人工なし。	HA ② D3 Ⅱ上 貝 1348
	—	7	ゴホウラ	袖部	1/4	11.6	3.3	113.5	○	×	—	◎	袖部のみ。加工なし。	HA ② S 7 Ⅱ 晶 貝 1690
	—	9	ゴホウラ	腹面	1/4	8.0	3.4	46.4	◎	×	—	○	腹面。褐色付着。	HA ② A2 Ⅱ 祝殿 貝 911
	—	37	ゴホウラ	腹面	1/2	14.1	7.5	205.5	—	△	—	○	幼貝か、薄い。背面欠、殻頂周縁に打割 3 回。殻薄い	HA ④ J16 Ⅰ 台 778
	—	38	ゴホウラ	完形	完	14.4	11.9	503.5	○	×	—	○	背面、前溝孔。上袖欠	HA ④ D19.20 Ⅱ上 台 4470
	—	39	ゴホウラ	腹面	2/3	13.0	6.7	256.5	○	×	—	◎	体層。顕著死貝	HA ④ F18 Ⅲ 台 319
	—	40	ゴホウラ	背面頂部	1/2	4.8	—	20.0	—	×	—	○	円形。腹面破片、1 回で割れる。加工か残存か不明。摩耗	HA ④ H16 Ⅲ 台 557
—	41	ゴホウラ	背面頂部	1/5	6.1	5.3	34.5	—	×	—	○	加工無。	HA ④ K18 Ⅲ 台 899	
—	47	ゴホウラ	腹部	1/3	10.8	6.4	112.0	◎	×	—	—	体層?。加工無。	HA ④ G19 Ⅲ 台 498	

(凡例) 完: ほぼ完、◎: 多・強、○: 普通、△: 少・弱、△: 僅少、×: なし、—: 不明・計測不可

< ヤコウガイ環状製品 > ヤコウガイの背面部を切り取り、環状に加工したもので 2 点出土した。図 16 は殻口近くで隅丸方形を呈し、図 17 は円形を呈するものである。後者は螺肋を削り込み、周縁も丁寧に仕上げるもので、残存から円形を呈するが内縁の加工についてははっきりしない。両者は平面形が各々異なるため、用途も異なる可能性がある。前者は孔の大きさから渡喜仁浜原貝塚(1978) に類似する。

<ヤコウガイ製匙> ヤコウガイの背面を用いたものであるが完形はなく、柄4点、身6点(未製品を含む)の10点の出土で、HA③のS-640(自然流路)の両側で得られている。また、自然貝も多く得られ、貝匙の素材貝の可能性が高く<sup>註1</sup>第112表に示した。身:図18は中でも最も残りの良いものである。ヤコウガイの背面を大きく割とり、外殻、螺肋と周縁をかなり研磨したもので、外殻は真珠層が露呈する。図19も破片だが、大形の貝を用いほぼ全面に真珠層を露出。図20は外表を残すものである。柄:図22は殻口を柄にし、中ほどに径0.6cmの孔を有するもので、周縁は丁寧に研磨される。柄の幅は5.5cmと匙でも大きい方である。図21は幅8.3cmと柄の幅が大きい。殻口の形状に合わせている。



第179図 ヤコウガイの部位の分類  
A 体層中央部 B 螺塔部 C 体層奥部 D 殻口部 (木下原図)

(自然貝) ヤコウガイは奄美諸島では7C頃から「ヤコウガイ交易」があったとされ、沖縄諸島でも貝塚時代後期に背面、グスク時代以降に腹面を用いた貝匙が出土する。また御細工所跡(1991)や首里城跡(2008)・湧田古窯跡(1999)・渡地村跡(2007)などで破片が多数出土する。遺跡から出土するヤコウガイはこれら交易の対象の可能性が考えられるため、自然貝も分類集計した。第112表によると自然貝は147点で完形は1点、他は破片で総重量10829.7g、平均73.7gである。ヤコウガイの完形の重さは853.5gを量り、個体数(B:殻頂+完形)は27個体である。地区別にはHA③52点、総重量7632.1g、平均146.8g、HA②86点、総重量3117.8g、平均36.3g、HA④7点、総重量129.9g、平均18.6g、HA①2点、総重量398.4g、平均199.2gでHA②出土のヤコウガイが細かい。HA①は0021SDの出土である。残存部位でみるとHA③では体層奥(A)25%・殻口(D)39%、HA②では体層奥(A)8%・殻口(D)58%と異なる。HA③では背面、HA②では腹面の匙が出土することから自然貝の出土はそれを反映することから食用ではなく製品の素材として捕獲していたと考えられる。

第112表 ヤコウガイ未製品・自然貝分類出土一覧

地区層	分類	加工痕					自然貝					合計		
		A	B	C	D	D+A	B+D	A	B	C	D		D+A	完
HA③	I				1	1					1	1		4
	II	9	1	1		2	5	7	3	8	5		43	
	III									1			1	
	III下					1		1	1		1		4	
	小計	9	1	1	1	4	2	5	8	4	10	7	52	
HA②	I								1	1			2	
	II上					2			1		1		4	
	II	3	6	1	8	5	1	4	15	1	23	10	78	
	III								1				1	
	不明									1			1	
小計	3	6	1	8	7	2	4	16	3	24	11	86		
HA④	II		1										1	
	III		2		2	1							5	
	IV		1										1	
	小計		4		2	1							7	
HA①	III下	1			1								2	
合	計	13	11	2	12	12	4	9	24	7	34	18	147	

A: 体層中央 B: 螺塔 C: 体層奥(腹) D: 殻口

第113表 ヤコウガイ環状・匙 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	器種	使用	部位	完破	縦	横	厚さ	重さ	観察事項	アバタ	色残り	へび	風化	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号	
第182図・図版123	16	6	環状	背面	—	1/2	8.2	5.4	0.4	35.6	隅丸方形。殻口。内外縁一打割後、研磨、丸味。螺肋は加工無し。	△	△	—	—	HA③ A11 II 台637	
	17	88			—	1/3	7.1	3.8	0.4	32.0	円形。体層側。螺肋一研磨、真珠層。周縁一研磨、丸味。	—	△	—	—	HA③ C6 II 貝4322	
	18	13			身	2/3	5.6	13.5	0.3	99.0	外表一部份残、研磨顕著。螺肋一研磨顕著。	—	△	—	△	HA③ C7 II 貝103	
	19	15			身	1/4	7.3	5.6	0.4	25.7	螺肋及び周縁、内側も丁寧に研磨、外表部分的に残る。殻頂側に厚くなる。	—	—	—	—	HA③ A13 II 台634	
	20	10			身	1/5	4.2	6	0.5	20.0	外表一残。周縁一研磨。	—	—	○	○	HA③ R17 II 台3092	
	21	14			柄	1/4	5.7	8.3	0.4	33.9	殻口。外表一残。周縁一研磨。螺肋一調整有り。	—	○	—	—	HA③ D11 II 貝322	
	図・図版なし	22	16	匙	背面	柄	1/4	8.2	6.3	0.3	41.1	殻口。外表一残、研磨。周縁一研磨。螺肋一研磨有り。	—	○	—	—	HA③ D4 II 台636
		—	9			身	1/3	7.2	9.2	0.4	87.6	体層。外表一残。周縁一内割残。	—	○	—	○	HA③ C6 II 貝4356
		—	220			身	1/3	6.1	3.9	0.4	12.3	真珠層。背面、前溝孔一肋、研磨顕著。	—	—	—	—	HA③ B13 II 貝1586
		—	267			柄	1/3	6.8	3.4	0.4	17.5	外殻一有。側縁一研磨か。柄のカーブ。	×	△	×	×	HA③ C18 II 貝88
		—	29			柄	1/3	6.6	5.6	—	46.4	周縁一打割。	△	△	—	△	HA④ N6 III 台1026
		—	33			身	1/4	5.6	4.5	0.4	12.4	周縁一研磨、外殻一研磨、真珠層、露出。	×	△	—	—	HA④ K20 III 台3673

(凡例) ○: 普通、△: 少・弱、×: なし

<ホラガイ有孔製品> ホラガイの腹面に穿孔するものでHA③で3点、HA①で1点得られている。図23は大きいめの資料である。第114表に示したように小さいサイズのものも出土しており、用途は細分される。

<ヤコウガイ容器> 2点出土した。図24はヤコウガイの殻頂及びへソ部、さらに螺肋を打割、外唇を研磨したものである。図25は小形ヤコウガイではあるが、前者と同様、外唇を割りとり、さらに打割調整するものである。腹面にも若干の加工がみられる。両者は大きさが異なり、前者は鍋、後者は杯などに用いたと思われる。

第114表 ホラガイ・ヤコウガイ容器 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	具種	分類	完破	縦(殻高)	横(殻長)	厚さ	孔径	孔口	重さ	観察事項	アバタ	色残り	摩耗	へび	風化	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第182図・図版123	23	1	ホカガイ	有孔	1/2	29	12.9	88	2.6	2.5	512.5	背面欠、殻頂欠一摩耗。1孔、摩耗。7mm。死貝(黒住)	◎	×	○	×	○	HA③ S13 II 台579
	24	133	ホカガイ	容器	完	要	要	—	×	×	839.5	外唇及びへソ部一打割、殻頂欠。螺肋一打割。	△	△	×	×	×	HA③ B16 II 貝100
	25	105	ホカガイ	容器	完	7.9	6.2	—	×	×	76.6	外唇一割取り。口唇一打割。	△	○	○	×	×	HA③ T11-12 II 台2841
図なし・図版	—	3	ホカガイ	有孔	完	14	5.7	4.4	3.1	2.7	41.2	殻頂欠。容量50cc。	×	○	×	×	×	HA③ S9 III下 S501 台2906
	—	4	ホカガイ	有孔	完	20.5	7.7	6	3.8	3.1	41.2	殻頂欠、外唇一打割△。容量150cc。	×	○	×	×	×	HA③ A13 IV 台2177
	—	14	ホカガイ	有孔	1/2	36	14.0	△	—	6.8	3.9	847.0	青のり。孔楕円。背面欠。	○	△	—	—	○

(凡例) ◎: 多・強、○: 普通、△: 少・弱、×: なし、—: 不明・計測不可



<螺蓋製利器<sup>註2</sup>> ヤコウガイの蓋の薄部分を打割したものでHA③3点、HA④で1点の計4点出土した。層別にはI層2点、II層2点で、図26はHA③A10 II層出土で附刃の範囲は2辺に分かれ、⑧と⑨の間で区切りがある。

<貝刃> 図27はチョウセンハマグリの腹縁を押圧剥離によりノコギリ刃状に加工したものである。貝塚時代前期の遺跡で報告例がある。この貝種はキャンプ桑江北側地区では初例である。HA③A14 II層で1点出土。

<貝包丁> 二枚貝の腹縁を研磨し附刃したもので、リュウキュウマスオ1点・クロチョウガイ3点の出土である。図28はリュウキュウマスオの腹縁を直線状に研磨したもので、裏面には剥離痕が残る。貝は殻長8.2cmと二枚貝有孔製品と比べると大きめである。HA④K1 III層で出土。図29・30のクロチョウガイはそれぞれ右殻と左殻で附刃の位置は同じ、研磨により附刃部分は弓状に湾曲する。後者は特に湾曲が強く、図29は内殻、図30は外殻に研磨面がみられる。左右殻の違いに関連か。類例は兼久原貝塚(1977)・熱田貝塚(1979)・伊礼原遺跡(2014)平敷屋トウバル遺跡(1996)で得られている。

第115表 螺蓋製利器・貝刃・貝包丁 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	貝種	完破	貝製品	縦(殻高)	横(殻長)	厚さ	重さ	観察事項	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第183図・図版124	26	5	ヤコウガイ(蓋)	完	螺蓋製利器	7.5	7.6	2.4	177.5	剥離範囲③~⑧、⑨~⑫。外→内。風化△。	HA③ A10 II 台2872
	27	268	チョウセンハマグリ	完	貝刃	4.9	5.6	-	18.1	腹縁に押圧剥離。色残り○。アバタ△後でついた。	HA③ A14 II 台2429
	28	44	リュウキュウマスオ	完	貝包丁	4.8	8.2	-	21.9	研磨。色残り○	HA④ K1 III 貝847
	29	3	加チョウガイ	完	貝包丁	5.5	6	0.2	15.5	腹縁研磨。内殻面に刃の研磨面。アバタ△。色残り○。	HA② D1 II 祝殿 台4128
	30	1	加チョウガイ	完	貝包丁	4.9	5.8	0.5	10.5	腹縁研磨。湾曲。外殻に研磨面あり。色残り。	HA② H1 IV 取247
図なし・図版	-	36	ヤコウガイ(蓋)	完	螺蓋製利器	8.1	7	2.1	172.3	剥離範囲⑦~⑩。	HA④ 表採 I 台4592
	-	1	ヤコウガイ(蓋)	完	螺蓋製利器	7.4	8.1	2.3	166.8	剥離②~⑧。色残り△。風化△	HA③ T7 II 貝44
	-	7	ヤコウガイ(蓋)	完	螺蓋製利器	6.3	6.8	2	109.8	剥離②~⑩。泥付着、泥炭層か。風化△。	HA③ C13 I 台622
	-	2	加チョウガイ	1/3	貝包丁	1.5	3.6	0.2	1.5	腹縁に研磨痕確認。色残り△。	HA② H1 IV 取247

<凡例> 完': ほぼ完、○: 普通、△: 少・弱、-: 不明・計測不可

<二枚貝有孔製品> HA③38点・HA②76点・HA④20点・HA①1点の計135点の出土で、貝種別にはシャコガイ科46点、メンガイ類20点、リュウキュウマスオ17点、リュウキュウシラトリ16点、リュウキュウサルボオ11点、カワラガイ

<二枚貝有孔製品の条件>

二枚貝の殻頂に1.0~2.0cmの粗孔を施すものである。  
 条件①孔の穿孔に複数の打割が見られるもの  
 ②孔に複数の切り合いが見られるもの  
 ③腹縁に複数の剥離あるいは摩耗(使用痕)が見られるもの  
 上記、2個以上の条件を満たすものを製品として扱った。

10点が主な貝である。地区別にはHA③ではシャコガイ科・メンガイ類が多く、HA②ではこれらに加えてリュウキュウシラトリやリュウキュウマスオが増加する。シャコガイ科・メンガイ類・リュウキュウサルボオは民俗事例や遺跡で一括して出土<sup>註3</sup>することから漁網錘の可能性が高いが、リュウキュウシラトリやリュウキュウマスオ、カワラガイなどは殻が薄く、重量も軽い。第117表に貝種と穿孔の位置を示した。これによると漁網錘の可能性の高いシャコガイやメンガイ類、リュウキュウサルボオは「上中」や「上前」が主体を示すのに対し、リュウキュウマスオ、リュウキュウシラトリは「中中」となり異なる。漁網錘の属性としては民俗事例から網の下縁に縛ることから「上中」あるいは「上前」に穿孔したものが想定される。これらのことからリュウキュウシラトリやリュウキュウマスオは重量も軽く、別の用途の可能性も示唆される。シャコガイ科はヒメジャコ・シラナミ(オオシラナミ含む)・ナガジャコなどがあり、その出土量はヒメジャコ28点、シラナミ12点、オオシラナミ4点、ナガジャコ1点、種不明1点の計46点出土している。重量別の出土をみると40g以下と100g以上に分かれ、使い分けが想定される。HA③とHA②は貝製品の出土が異なることからシャコガイ科の大きさ(殻長)を比較するとHA②は8.0cm以下(図31・33)が多く、HA③は7.1cm以上(図

第116表 二枚貝有孔製品 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	貝種	R・L	完破	殻高(縦)	殻長(横)	重さ	孔位置	孔形	穿孔方向	腹縁	状態・備考	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第183図・図版124	31	111	ヒメジャコ	R	完	3.9	4.8	11.2	上後	不定形	内→外	◎	色残△	HA② D19 II 上 貝1701
	32	25	ヒメジャコ	R	完	3.2	5	7.9	上前	楕円	内→外	△	色残△	HA③ D12 II 貝28
	33	153	ナガジャコ	R	完	3.2	4.8	7.7	上前	方形	内→外	○	摩耗△	HA② T7 II 貝1620
	34	17	ヒメジャコ	L	完	5.4	7.1	38.3	上前	方形	内→外	△	アバタ△。孔、上剥離○	HA③ B5 II 台619
	35	18	ヒメジャコ	L	完	8.3	10.3	155.9	上中	楕円	内→外	△	風化、アバタ△。孔の上縁剥離、紐ずれ?	HA③ A18 II 貝4606
	36	17	ナガジャコ	L	完	7.5	13.8	172	上中	横楕円	両面	△	風化△	HA④ I4 III 貝650
	37	18	ナガジャコ	L	完	10	16	295	中中	方形	内→外	×	風化○	HA④ C19 II 貝29
	38	23	リュウキュウサルボオ	L	完	4.8	6.8	3.7	上中	方形	内→外	×	色残△	HA③ T14 III 下 S-11 貝4680
	39	79	リュウキュウサルボオ	L	完	4.1	5.5	23.1	上中	円形	内→外	×	風化△	HA② L7 II 照屋先生 貝773
	40	38	リュウキュウサルボオ	R	完	4	7.9	35.5	上中	円形	内→外	×	風化△、摩耗△	HA② J5 II 取11
	41	101	ムガイ	L	完	3.5	3.7	6.6	上中	不定形	内→外	◎	色残・摩耗△。殻摩耗	HA② B2 II 祝殿 貝1976
	42	35	ムガイ	L	完	5.1	4.6	13.9	上中	隅丸	内→外	○	摩耗○。風化、ナゴ付着	HA③ C12 II 貝20
	43	124	カワラガイ	R	完	4.8	4.4	10.5	上中	楕円	内→外	後○	色残△	HA② K7 II 照屋先生 貝1281
	44	96	リュウキュウマスオ	L	完	3.3	5.1	5.5	上中	円形	内→外	△	色残△	HA② A20 II 祝殿 貝1997
第184図・図版125	45	58	マサガイ	R	完	2.3	4.5	1.8	上中	不定形	内→外	○	色残○	HA② T8 II 島 貝327
	46	12	ズシハマグリ	L	完	3.5	4	5.6	上中	方形	内→外	前△	色残△	HA① M14 IV 台222
	47	53	初スゲイ	R	完	2.5	3.4	3.5	中中	不定形	内→外	△	色残△	HA② G3 II 名嘉座 貝720
	48	45	加チョウ	R	1/2	6.6	4.3	16	中中	正円	内→外	△	新しい割れ	HA④ F20 II 台339

<凡例> ◎: 多・強、○: 普通、△: 少・弱、×: なし

34・35)が多いことから大きさの差がみられる。

第 118 表に本品の種類と大きさについて示した。図 37 は最も大きく、孔の上方から貝殻に摩擦があり、紐ずれの可能性もある。図 33 はオオシラナミ、図 31 はヒメジャコで腹縁のカットが顕著にみられる。

リュウキュウサルボオの腹縁の加工は少ない。メンガイ類は腹縁が破損している。

図 44 のリュウキュウマスオは軽く孔も小さく、孔の剥離が新しいことから自然の割れの可能性が高い。穿孔は「中中」が多く、腹縁に剥離がある。カワラガイは腹縁の先端部を欠き、孔は「中中」である。本品は貝の種類によって孔の位置や腹縁の加工など特性が見られる。クロチョウガイ(図 48)は欠損するが、孔は 0.9cm で丁寧に穿孔する。貝は真珠質で他の製品と様相を異にすることか別の用途の可能性も想定される。これらのことから貝種によって異なる用途を持つものと思われる。

グスク時代以降

ヤコウガイ製匙(腹面) 10 点、タカラガイ製品 104 点、マガキガイ製品 29 点、巻貝粗孔製品 12 点など基石 1 点を含む計 156 点の出土である。

<ヤコウガイ製匙> ヤコウガイの腹面を割とり、外表を剥ぎ研磨して真珠層を露呈、周縁の研磨も顕著である。身(図 49・51) 2 点と柄(図 50) 1 点、製作途中(図 52) 7 点の計 10 点出土した。地区別には HA ③ 1 点・HA ② 2 点・HA ④ 7 点で HA ④ に多い(第 178 図)。

身：図 49 は真珠層を露出、身の先端と柄を欠落するもので外面は研磨が顕著で真珠層を露出し、螺肋の稜が確認できる程度で完成度は高い。内殻は表層を残す。HA ④ K20 出土。

柄：図 50 は先端を魚尾のような形状を示す。図 51 の身と同一個体の可能性が高い。HA ② H2 II 層の出土。いずれもグスク～近世に属する。他に HA ④ III 層で、外表を研磨したものが出土。伊礼原遺跡(2014)や伊礼原 D 遺跡(2013)でも青磁や染付などと得られていることから 15C 以降に属すると思われる。図 52 は腹面利用の未製品で、螺肋の部分は打ち割り、周縁も粗割の状態で作成途中と思われる。

第 117 表 二枚貝有孔製品(孔位置)出土量

貝種	地区	孔位置	貝種														合計								
			Rサルボオ	メンガイ(類)	シラナミ	ヒメジャコ	ヒレジャコ	オオシラナミ	ナガジャコ	シャコガイ(大)	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	Rバカガイ	アラヌノメガイ		ユウカゲハマグリ	ウラキツギガイ	ホソスジイナミ	オオナデシコ	スタレハマグリ	チリボタン	ユウカゲハマグリ	クロチョウガイ
HA ③		上後			1	1																			2
		上前		1	2	4	1																		8
		上中	1	7	5	4		1						1											19
		中中			1	1								2		1									6
		殻頂	1																						1
		小計	2	8	9	10	1	2		1				3		1									38
HA ②		上前		1	2	5																		8	
		上中	7	11	1	7						5	6	5			1		1					45	
		中中									1	1	10	2	1		1		1			1			18
		殻頂	2								1	1		1											5
		小計	9	12	3	12					2	7	16	8	1		1	1	1		1	1			76
		HA ④ + ②		上前				2																	
上中						1		1						1					1					5	
中中						1								2		5			1					9	
小計						5		2	1				3		6			1						20	
HA ①	上中																					1			1
小計																						1			1
合計		11	20	12	27	1	4	1	1	2	10	16	17	1	1	2	1	2	1	1	1	1	2	135	

R:リュウキュウの意

第 118 表 二枚貝有孔製品(重量別)出土量

重量(g)	貝種														合計								
	ヒメジャコ	ヒレジャコ	シラナミ	オオシラナミ	ナガジャコ	シャコガイ(大)	Rサルボオ	メンガイ	Rシラトリ	Rマスオ	カワラガイ	Rザルガイ	Rバカガイ	アラヌノメガイ		ユウカゲハマグリ	ウラキツギガイ	オオナデシコ	スタレハマグリ	チリボタン	ホソスジイナミ	クロチョウガイ	
0~9	6			1			2	4	16	9	3	2	1		1	1				2		50	
10~19	4		1				1	10		8	6			1	1			1		1	2	36	
20~29	4						2	2			1											9	
30~39	5		1	1			1	4	2													14	
40~49	2						1	1														4	
50~59	1		1					1														3	
60~69			1																			1	
70~79	1		1	1																		3	
80~89	1										1											2	
90~99																						0	
100~	3	1	6	2	1																	13	
合計	27	1	11	5	1	1	11	20	16	17	10	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2	135

R:リュウキュウの意

第 119 表 ヤコウガイ貝匙(腹面)観察一覧

(法量単位:cm、g)

第図版	図番号	製品番号	使用	部位	完破	縦(殻高)	横(殻長)	厚さ	重さ	観察事項	色残り	風化	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
第 184 図・図版 125	49	43	腹面	身	1/2	(6.5)	6.5	0.4	20.4	外-真珠層、内-表層。周縁-外面から研磨。	×	△	HA ④ K 20 III 台 932
	50	12		柄	1/3	4.0	5.2	0.2	7.0	内外-真珠層。周縁研磨-角。螺肋-研磨顕著	×	△	HA ② H2 II 取 42
	51	11		身	1/2	2.6	3.8	0.2	3.0	外-真珠層、内-一部表層。周縁研磨-丸。螺肋-研磨顕著	×	△	HA ② H2 名嘉座 II 台 4105
	52	7		身	1/2	3.7	6.8	0.7	21.9	製作途中、外表-有。周縁-打割、整う。螺肋-打割	×	×	HA ③ A14 II 台 621
図版なし	-	27	腹面	身	完'	9.2	7.7	-	79.8	製作途中、周縁粗割	△	△	HA ④ N13 II 台 1033
	-	30		身	1/2	6.0	4.0	0.5	24.0	製作途中、外表-有。周縁-打割、一部整う	○	○	HA ④ H18 III 台 602
	-	34		身	1/3	6.1	4.7	0.3	20.8	周縁-粗割。	○	×	HA ④ F15~17 III 台 4515
	-	5		身	1/3	3.7	3.2	0.4	7.0	製作途中。周縁-打割、外殻-研磨あり。外-表層、内-真珠層	○	×	HA ④ O18 P80 III 台 107
	-	26		身	1/3	5.6	3.8	0.4	11.9	外-表層、周縁-打割後、一部摩耗。アバタ△	△	△	HA ④ E19 II 台 162
-	28	身	1/5	4.0	2.2	0.2	3.0	真珠層のみ。研磨顕著	×	○	HA ④ H1 II 台 513		

<凡例> ○:普通、△:少・弱、×:なし

<タカラガイ製品> タカラガイの背面を割取り周縁を整えたもので、民俗事例から漁網錘とされる。本品は殻軸を残すもの(A)と調整したもの(B)がある。地区別にはHA③64点・HA②37点・HA④2点・HA①1点の計104点で、HA③で61.5%、HA②で35.6%とほとんどを占める(第178図)。貝種別にはハナマルユキ76点、ハナビラダカラ20点、キイロダカラ5点、ヤクシマダカラ2点、ホシダカラ1点でハナマルユキが73.1%を占め民俗例と同じである。HA③ではS-640(自然流路)や遺構等で得られ(第178図)HA②ではHA③側と西側多く、HA④・①で少ないことから自然流路(S-640)が埋まった17C以降の遺物と推測される。タカラガイ製錘の使用上限はグスク期<sup>註4</sup>であるが民俗事例から近年までの使用が確認される。

Aタイプが58点、Bタイプが40点と前者が多い。(第120表)

第120表 タカラガイ製品出土量

分類	貝種	ハナマルユキ					合計
		ハナマルユキ	ハナビラダカラ	キイロダカラ	ヤクシマダカラ	ホシダカラ	
A①		21	4	2			27
A②		14	4	1			19
A③		9	1	1	1		12
B①		25	8	1			34
B②		3	2		1		6
空・不		3	1			1	5
軸無し		1					1
合計		76	20	5	2	1	104

第121表 タカラガイ製品 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	貝種	分類	完破	縦	横	厚さ	重さ	周縁	観察事項	色残り	風化	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号	
														HA	台帳番号
第184図・図版125	53	3	キイロダカラ	A①	完	2.6	1.8	0.8	2.7	整-	殻軸一有。周縁打割一細。	×	○	HA③ A13 II 台2201	
	54	17		A③	完	3.3	2.1	0.8	5.5	整+	殻軸一有。周縁打割一細。	○	×	HA③ S17 II S-35 台2060	
	55	16		A②	完	2.6	2	0.9	4.3	整+	殻軸一有。周縁打割一粗。	△	△	HA③ G8 II 台2196	
	56	9	ハナビラダカラ	B①	完	2.5	1.8	0.8	3.3	整+	殻軸一有。周縁打割一粗。	○	△	HA③ S17 II S-35 台1993	
	57	40		A①	完	3.3	2.5	1	8.1	整-	整一。殻軸一有、やや欠。周縁打割一粗。	△	○	HA③ B10 II 台2066	
	58	5		A③	完	3.6	2.8	1.2	11.2	整+	殻軸一有。周縁打割一粗。	△	△	HA① M14 III 下 0024SD 台109	
	59	54	ハナマルユキ	B①	完	2.9	2.2	0.6	4.8	整+	殻軸一有。周縁打割一粗。	△	○	HA② A6 II 晶 貝1636	
	60	12		B①	完	3.4	2.5	0.9	7.3	整+	整+。殻軸一有、周縁打割一粗。	△	△	HA③ T19 I S-34 台1975	

(凡例) 分類: ①②③は小分類(鳥袋1997参照)。○: 普通、△: 少・弱、×: なし

<マガキガイ製品> マガキガイの体層を打割して殻軸を残すもの(a)、螺塔部を切り取り平玉状にして上下面を研磨するもの(b)、マガキガイの形を残して殻頂及び体層面を研磨するもの(c)がある。HA③2点・HA②22点・HA④5点の計29点の出土で、そのほとんどはHA②の出土である。a: 15点出土でそのうちの3点を図示した。本タイプは貝小玉の製作工程の一部(勝連城跡1990、渡地村跡2012)、あるいは独楽(カイジ浜貝塚1994・首里城跡綾門大道跡2003)と報告されている。本遺跡出土のa(図61~63)は奄美の民俗事例(恵原義盛)<sup>註5</sup>から独楽と判断される。b(図64~67): 殻頂及び体層面を研磨するもので、特に体層面の研磨は顕著である。図66をみると体層を打割した後、研磨するもので製作工程が窺える。a・bの加工は外唇を割取りや体層を打割調整する点で共通の加工がある。これらの出土地はHA②の「SK」で出土する。c: 図68は螺塔部を研磨、外唇を打割するものでaの失敗か別の製品かは不

第122表 マガキガイ製品 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	分類	完破	縦	横	厚さ	孔好	孔口	重さ	観察事項	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号		
												HA	台帳番号	
第184図・図版125	61	9	a	完	3.4	2.7	-	-	-	15.2	体層・打割。軸一有。殻口一欠。色残り○	HA②	H2-SK2 III 台2143	
	62	5		完	2.4	1.8	-	-	-	3.2	体層・打割。軸一有。殻口一欠。色残り△	HA②	I7-SK1 III 台2015	
	63	1		完	2.7	2.1	-	-	-	9.3	体層・打割、やや摩耗。軸一有。殻口一欠。色残り○	HA②	H4-SK12 III 台2177	
	64	20	b	完	2.9	2.9	0.9	0.9	0.9	10.1	体層・研磨顕著。殻頂・研磨顕著。研磨。色残り○	HA②	F 20 II 貝1819	
	65	11		完	2.9	2.8	1.1	0.6	0.6	11.5	体層・研磨。殻頂・研磨。殻口一直状、研磨、彎曲。色残り○	HA②	H5 II 取77	
	66	12		完	2.8	2.6	1.4	0.6	0.5	12.5	体層・研磨顕著。殻軸一打割。殻口一打割。色残り△	HA②	I05 II 名嘉座 取114	
	67	9		完	2.9	2.7	1.1	0.5	0.6	9.5	体層・水平、摩耗。殻頂・摩耗。殻口一研磨、直状。色残り△	HA②	B3 II 祝殿 貝635	
	68	22	c	2/3	4.7	2.7	2.5	-	-	20.9	螺塔研磨○。体層もほぼ研磨、なめらか。外唇大きく割りとる。色残り△	HA②	B4 II 祝殿 貝1067	
	図版なし	-	6	a	完	2.6	2.1	-	-	-	7.0	体層・打割。軸一有。殻口一欠。色残り△	HA②	J5 III P3 台2041
		-	222		完	2.3	2.2	-	-	-	6.9	軸一有。外唇一打割。色残り△	HA③	E15 II S-4 貝1467
-		3	完		3.1	2.3	-	-	-	12.5	体層・打割。軸一有。殻口一割。色残り○	HA②	M7-SK1 III 台2060	
-		4	完		2.3	2.3	-	-	-	11.0	体層・打割。殻頂一有。軸一若干のこる。色残り△	HA②	G1-SK2 III 台2090	
-		7	完		1.7	2.0	-	-	-	6.2	体層・打割。殻頂一有。軸一欠。殻口一欠。色残り△	HA②	G2-SK3 III 台2062	
-		8	完		2.4	1.8	-	-	-	5.0	体層・打割。軸一有。殻口一欠。色残り○	HA②	H3-SK3 III 台2164	
-		10	完		1.7	2.3	-	-	-	8.9	体層・打割。殻頂一有。軸一欠。殻口一欠。色残り△	HA②	M9-SK4 III 台2059	
-		2	完		2.3	2.6	-	-	-	13.6	体層・打割。軸一有(半欠)。殻口一割。色残り△	HA②	I1-SK5 III 台1986	
-		2	完		2.5	2.7	-	-	-	13.0	周縁打割○。殻軸一有。外唇一打割。色残り△	HA④	F9/F10 III SK6 35	
-		11	完		2.0	2.9	-	-	-	13.8	体層・打割。殻頂一有。色残り△	HA②	H1-SK7 III 台2130	
-		21	b	完	2.4	2.4	2.8	0.9	0.8	4.3	体層・打割後、研磨顕著。殻頂・研磨顕著。殻口一直状。アバタ○。摩耗○	HA②	G 19 II 祝殿 貝1162	
-		18		完	3.0	2.9	1.7	0.5	0.4	18.6	体層・打割・後・研磨。殻頂・摩耗。殻口一欠。色残り△	HA②	A2 II 祝殿 貝520	
-		19		完	2.7	2.5	1.1	0.4	0.5	8.7	体層・打割。殻頂一研磨。殻口一欠。色残り△	HA②	T3 II 祝殿 貝565	
-		16		完	2.5	2.6	1.2	0.6	0.5	9.4	体層・打割。殻頂一打割。殻口一欠。色残り△	HA②	G20 II 瓦屋 貝144	
-		17		完	1.5	2.5	1.4	0.5	0.4	10.0	体層・打割。殻頂一打割。殻口一欠。色残り△	HA②	G20 II 瓦屋 貝167	
-		12		完	3.2	2.7	2.2	0.6	0.5	14.2	体層・打割。殻軸一欠。色残り△	HA②	G-1 II 瓦屋 貝2072	
-		223		a	完	2.5	2.3	-	-	-	9.5	軸一有。割れ・摩耗。風化○	HA③	E5 I 貝2083
-		23		b	完	2.7	2.5	1.7	0.6	0.6	12.8	殻頂一有孔一打割。体層・打割。やや不揃い。軸なし	HA④	I19 III 台748
-		24		b	完	3.1	3.0	1.3	0.7	0.7	14.2	軸なし。殻頂一打割。孔。体層・打割。水平。色残り○	HA④	K18 III 台903
-		25		b	完	2.7	2.6	1.4	-	-	11.3	軸なし。殻頂一潰れ一打割。体層・打割。水平。色残り△	HA④	E19 IV 台170
-	1	a	完	2.6	2.7	-	-	-	14.0	周縁打割△。殻軸一有。外唇一打割。貝→摩耗。色残り△	HA④	O12 III 台144		

(凡例) 完: ほぼ完、「-」: 計測不可。○: 多・強、○: 普通、△: 少・弱

明。前述の2タイプとは異なる製品の可能性も考えられる。平面分布をみるとHA②のGラインから西側、A・B3、HA④で出土することから上限を15C代に想定される。打割したマガキガイは伊礼原D遺跡(2013)や伊礼原遺跡(2014)でも出土しており、本遺跡の出土状況からほぼ同じ所属時期が推定される。

<巻貝粗孔製品> 中・大形タカラガイやクモガイに径1.0cm程度の粗孔を施すもので、民俗事例(恵原2016)から子供玩具と思われる<sup>註6</sup>。図69はハラダカラ・図70はホシキヌタで他にハチジョウダカラが2点出土している。穿孔の方向は外殻→内殻である。伊礼原D遺跡(2008)ではヤクシマダカラが出土している。他に、グスク期の遺跡や古墓からの報告例もある。

大形タカラガイに出土をみると貝塚時代後期の平安山原B遺跡や貝塚時代前IV期の伊礼原E遺跡ではホシダカラの製品が多く得られ、自然貝でもホシダカラが優勢である。本地域では、ハチジョウダカラの出土は少ないことから意図的にハチジョウダカラを用いたのであろうか<sup>註7</sup>。

図71はクモガイの背面と腹面に粗孔を施すもので、いずれも外殻→内殻に穿孔する。外唇の突起は欠落し丸味を帯びる。玩具ではないが他にスイジガイの突起がなく、腹面を穿孔するもの2個、背面をするもの1個、クモガイの腹面を穿孔するもの1個が出土した(図版121)。伊礼原D遺跡(2013)の巻き貝の穿孔と同様、食用のためと考えられる。

第123表 巻貝粗孔製品 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	貝種	完破	縦(殻高)	横(殻長)	孔径	孔コ	重さ	観察事項	色残	風化	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)番号
図版121	69	2	ハラダカラ	完	7.7	5.2	1.1	1.3	65.5	前端粗孔。孔一不定形、穿孔:外→内。	△	△	HA③ F4 II 貝4392
	70	4	ホシキヌタ	完	4.9	3	0.5	2.4	20.4	前端粗孔。孔一楕円、穿孔:外→内。	△	○	HA③ D9 II 貝261
	71	228	クモガイ	完	10.9	7.3	1.6	1.6	130.8	背面孔(水管溝近)一やや方形、穿孔:外→内。 腹面孔3.5×2.5。複孔(体層)縦楕円。	△	△	HA③ B14 II S-20 貝8612
図なし・図版	—	46	ホシキヌタ	完	4.8	2.9	1.0	0.8	18.4	前端粗孔。孔一方形、打割。	◎	—	HA④ K20 III SP1273 台4119
	—	264	ハチジョウダカラ	完	6.7	4.15	0.9	12	29.9	前端粗孔。孔一楕円。自然の可能性も	◎	△	HA③ E4 I 名嘉座 貝1586
	—	262	ハチジョウダカラ	完	8.7	6.4	0.6	0.7方形	108.4	前端粗孔。自然かも。自然の可能性も	○	△	HA③ 貝4371

<凡例> ◎:多・強、○:普通、△:少・弱、—:不明・計測不可

<碁石> 近現代に属するもので図72は貝を直径2.0cm、厚さ0.4cmの円形に加工したものである。表面に貝の成長線、裏面に内殻の乳白色が確認できる。HA②J4II層ワヅメの出土。伊礼原遺跡(2014)と比較すると0.4cmと厚く、断面は角をなす。

貝塚時代後期の二枚貝有孔製品135個、グスク時代相当期のタカラガイ製品は民俗事例などから漁網錘しているが、対象となる本遺跡出土の魚類をみるとHA③で7点、HA④で7点、HA④10点・HA①2点計32点(I~V層含む)と非常に少なく、「漁網錘」の用途や骨の保存状態など疑問が残る。

<註>

註1:ヤコウガイはサンゴ礁の礁斜面に生息する。本遺跡は礁斜面まで現海岸線でも4kmと距離があり、容易には捕獲できないことから製品などを作るため意図的に採集したと思われる。

註2:ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して剥離したものを「螺蓋製貝斧」で報告していたが報告例が多くなり、「貝斧」の機能以外の用途も含まれることから「螺蓋製利器」とした。

註3:シャコガイは民俗事例やクマヤ洞穴遺跡、メンガイ類は貝志原貝塚や長浜金久遺跡、リュウキュウサルボオは南洋諸島(海洋博公園海洋文化館展示)などで例がある。(島袋2004)

註4:勝連城跡(1964)の本丸で報告され、本製品の上限ととらえられている。

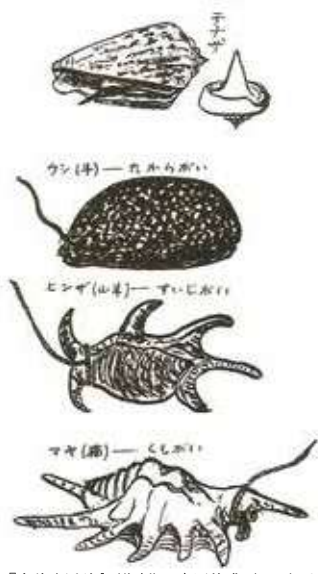
註5:奄美では「テナザ」・沖縄では「ティラジャー」と呼び、子供玩具。

(恵原2009・上江洲1972)

註6:上に同じ。

註7:大形タカラガイは貝製品に用いるのが多く、キャンプ桑江北側地区でもホシダカラの製品や自然貝の出土。ハチジョウダカラは出土数が少ない。

(呉屋・島袋2013)

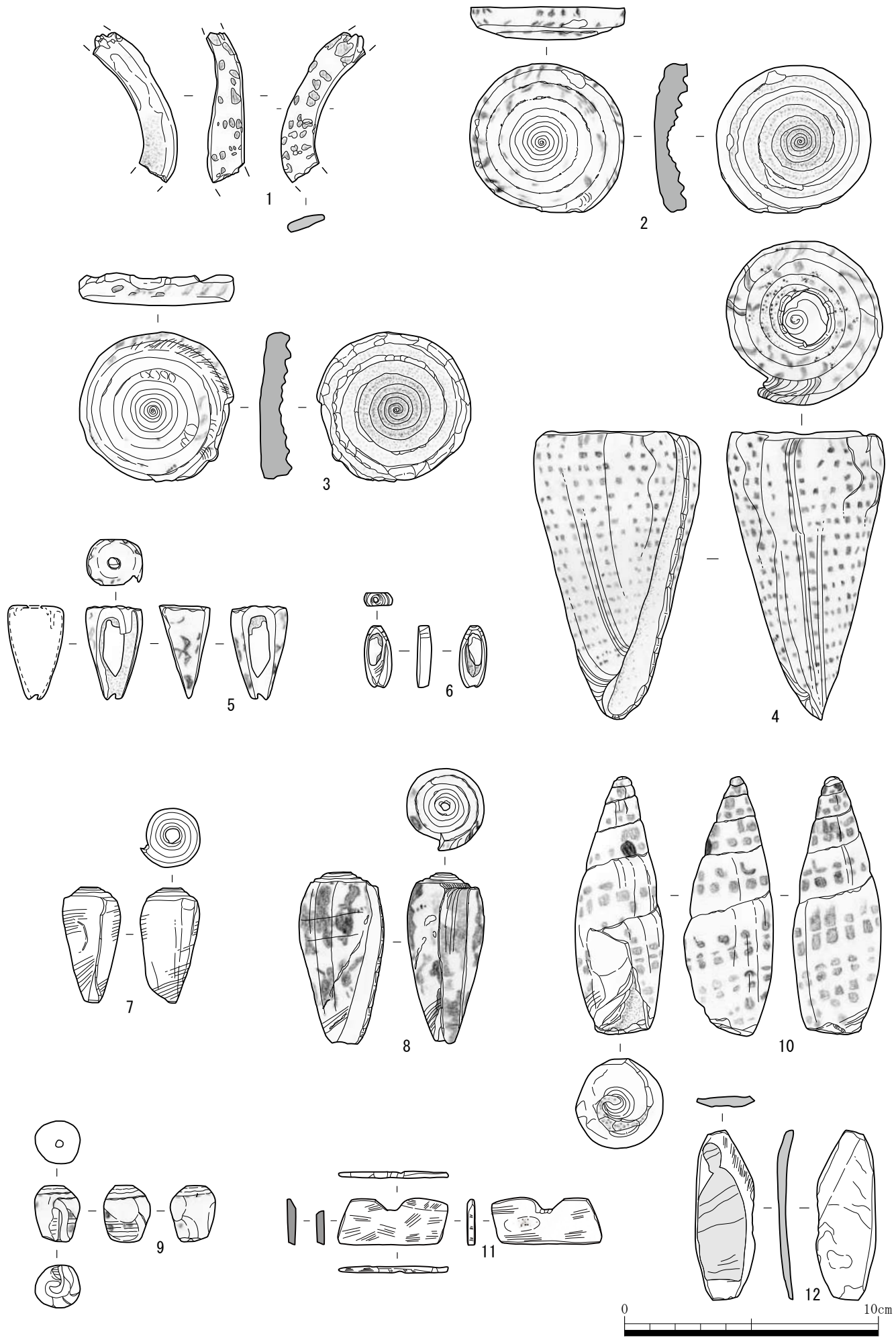


『奄美生活誌』(復刻) 恵原義盛(2009)より

第180図 民俗例



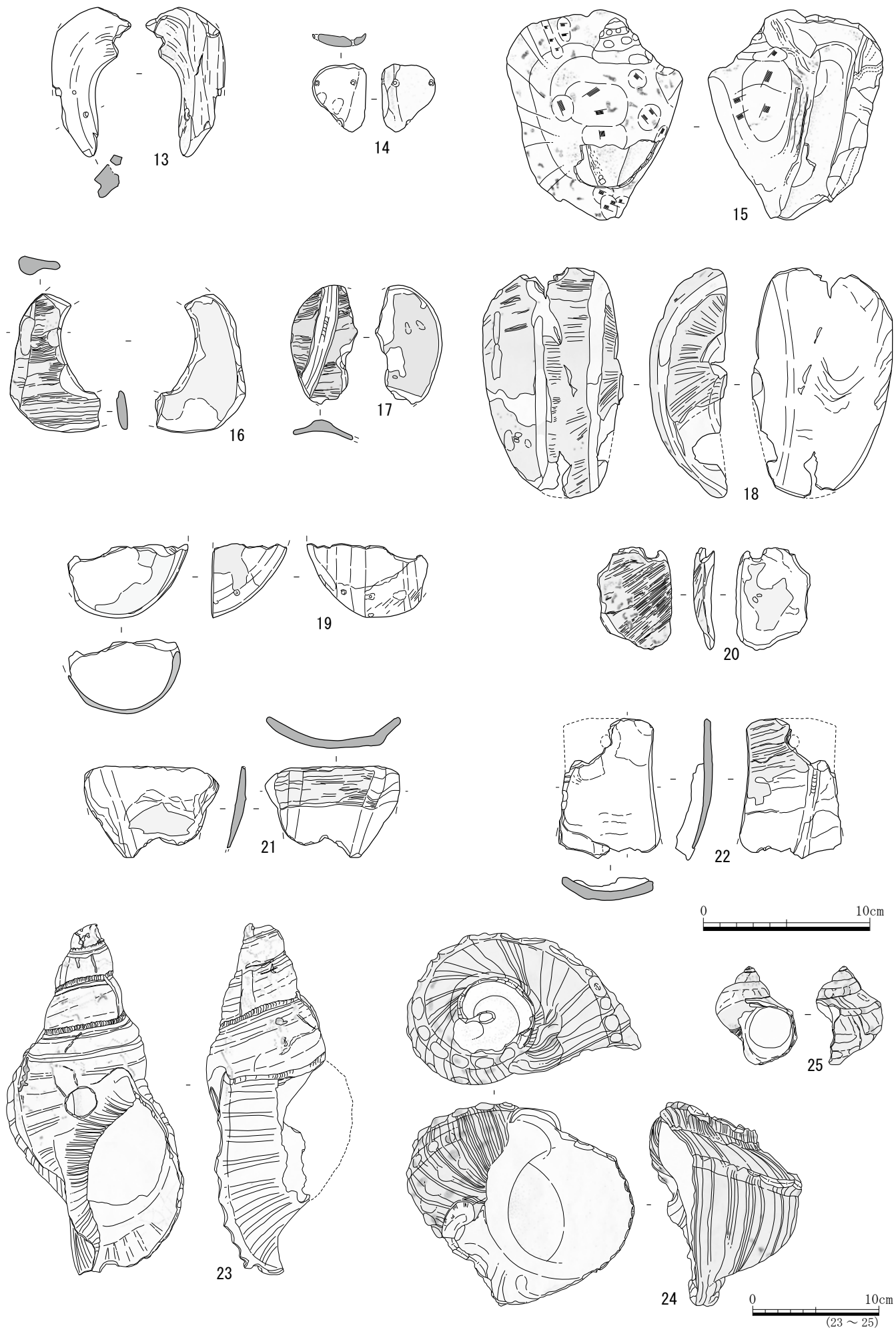
図版121 スイジガイ(穿孔貝)



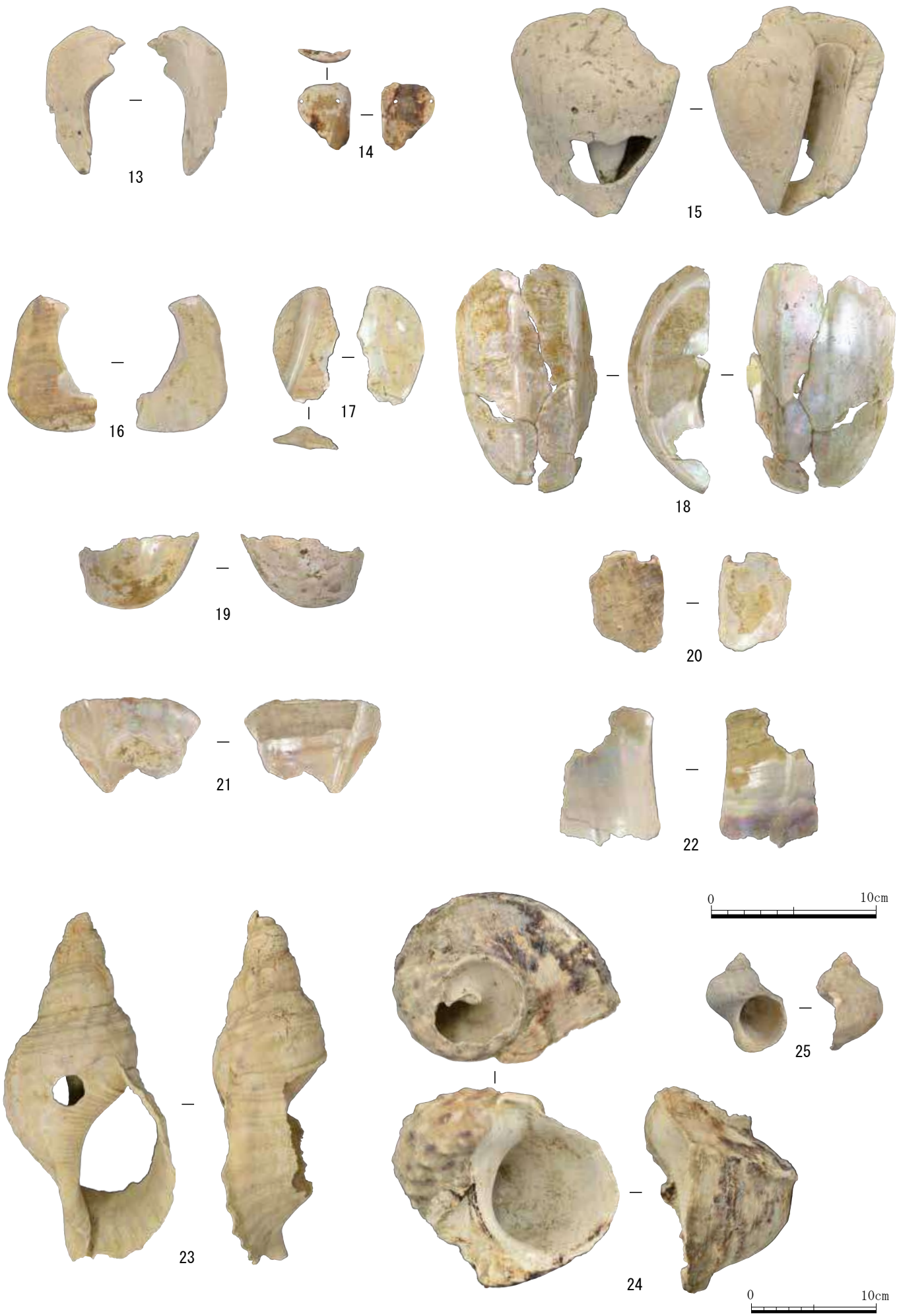
第181图 貝製品1



图版 122 貝製品 1

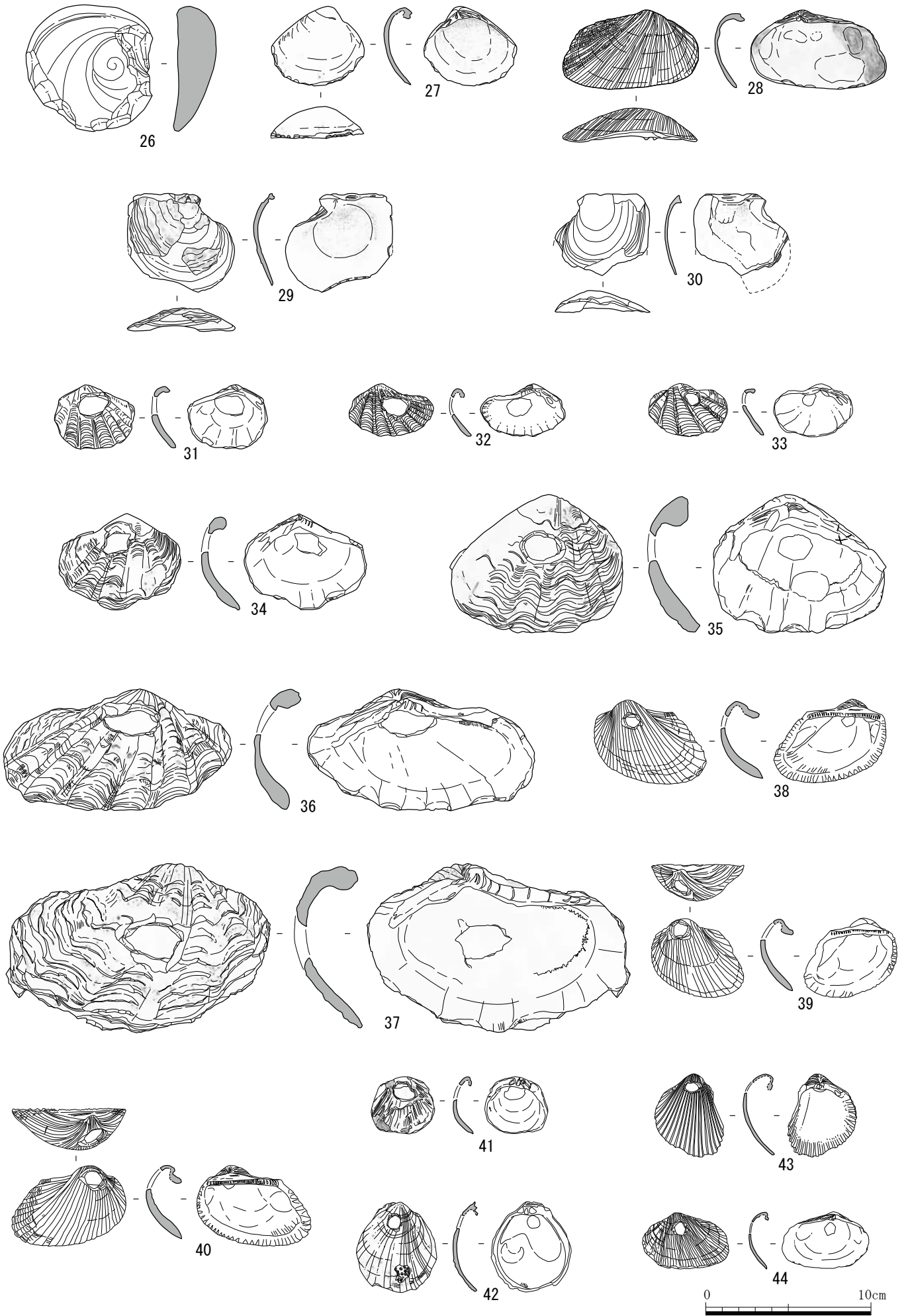


第 182 図 貝製品 2

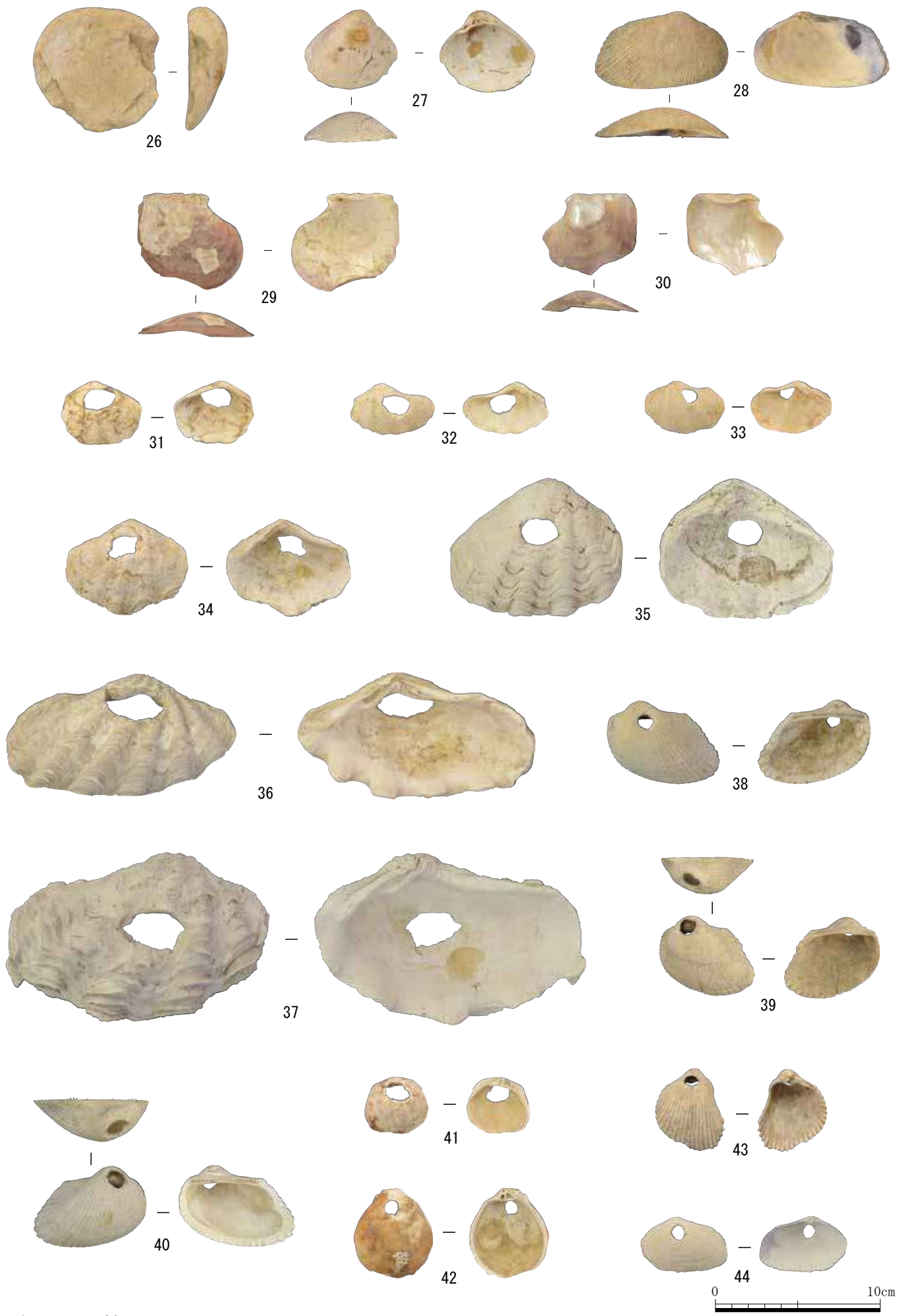


図版 123 貝製品 2

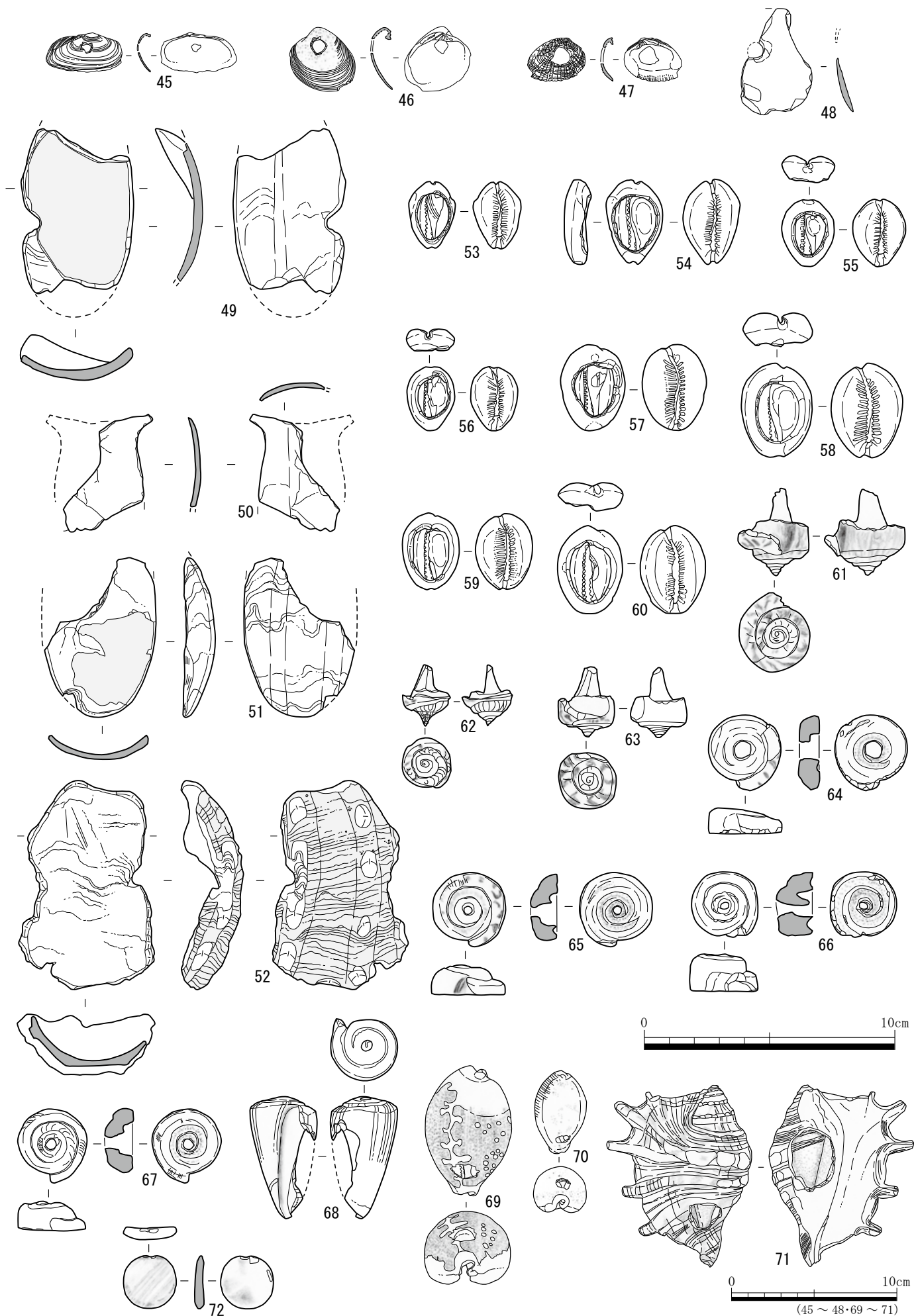




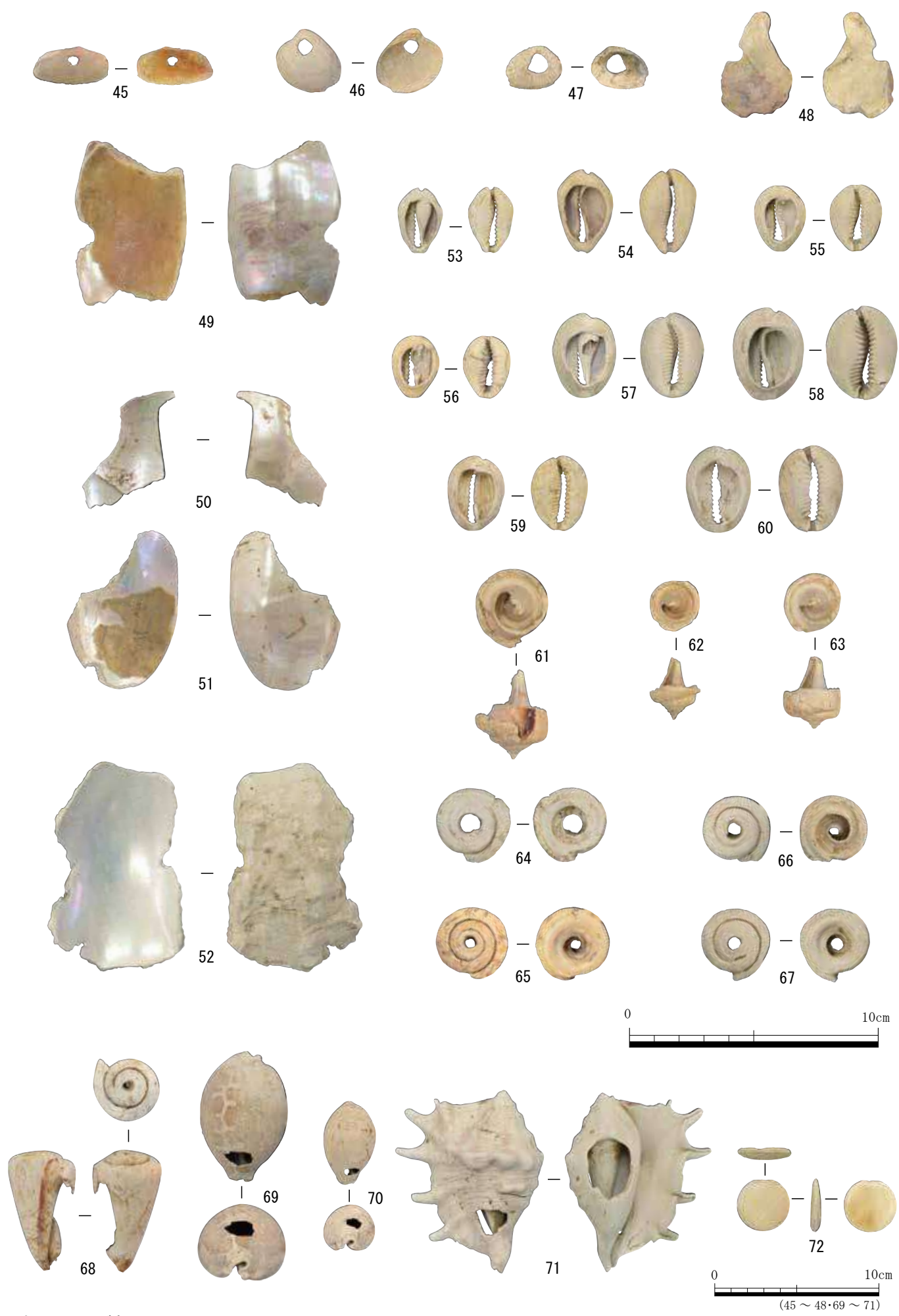
第 183 図 貝製品 3



图版 124 貝製品 3



第184図 貝製品4



図版 125 貝製品 4

## (29) 骨製品 (第 185 図・図版 126)

HA ③ 3 点・HA ② 6 点・HA ④ 1 点の計 10 点出土した。これらは形態によって貝塚時代後期以前とグスク時代以降に分けられる。概ね貝塚時代後期以前は HA ③ S-640 (自然流路) に沿うように出土し、HA ② では内陸側に偏るようである。出土量が少ないため、すべてを図示し、観察一覧と出土量を示す。以下時代ごとに略述する。

### < 貝塚時代後期以前 >

図 1 は小形のサメ歯である。基部の片面に穿孔が確認されるが貫通しない。孔は不定形で、自然の可能性も否定できない。図 2 はジュゴンの肋骨の一端を方形に加工し穿孔するもので、段を有することから棒状に加工して先端は尖るものと思われる。砂辺貝塚 (1994) やシヌグ堂遺跡 (1985) など貝塚時代前 IV ~ V 期に出土。図 3 もジュゴンの肋骨に加工したものであるが、太さが 3.2 × 2.8cm と他に比べて大きい。両端に切断痕と側面に粗削りを残す。長さ (8.0cm)

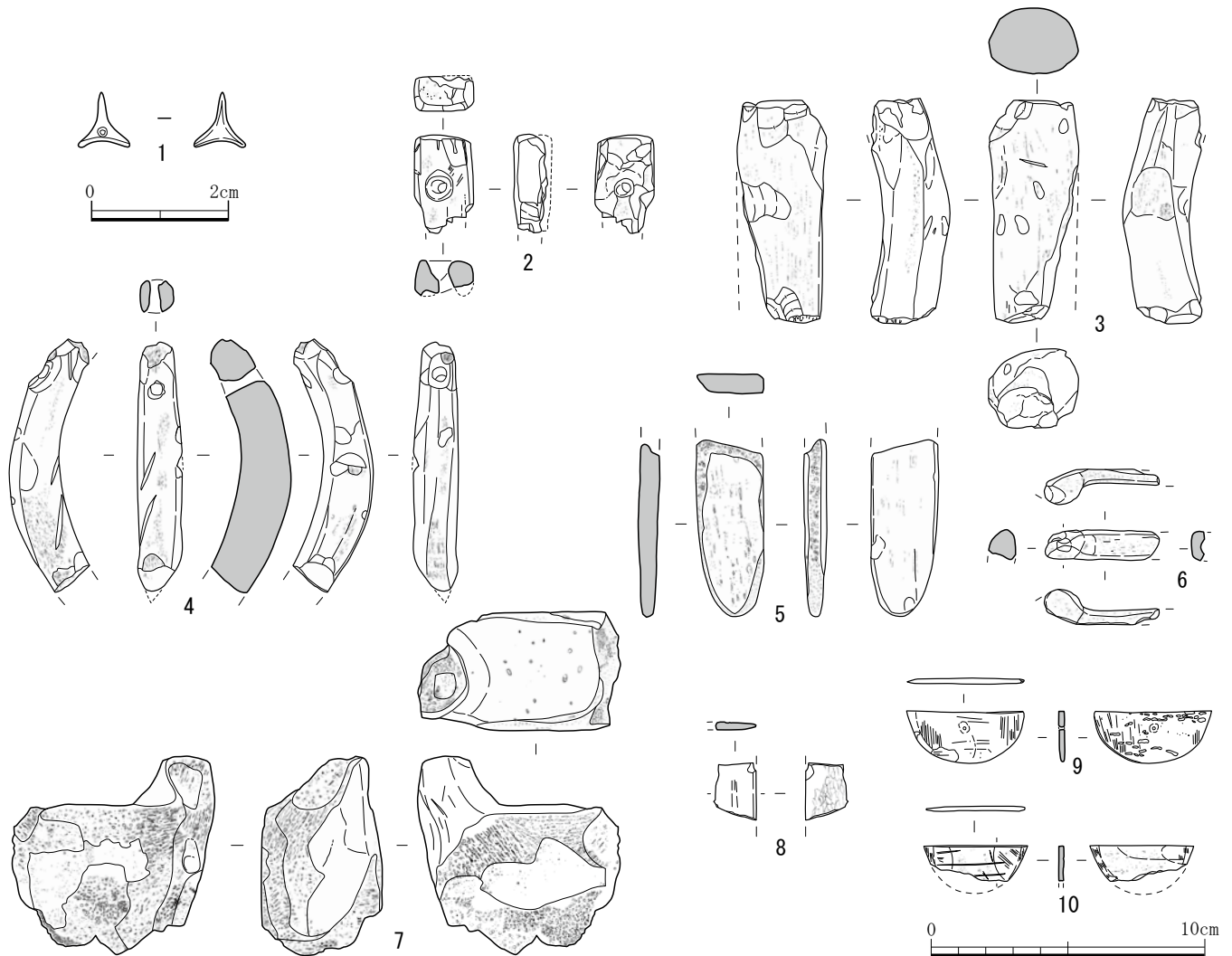
第 124 表 骨製品 出土量

製品種類	有孔	棒状	不明	板状	半環状	板状	半月状	合計	
	サメ	ジュゴン	海獣	ウミガメ	クジラ	ウシ?	ウシ?		
地区	部位	歯	肋骨	椎骨	甲板	肋骨?	四肢骨	四肢骨	
HA ③	II		2					1	3
HA ②	II		1	1	1	1	1		5
	III							1	1
HA ④	V	1							1
合計		1	3	1	1	1	1	2	10

第 125 表 骨製品 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第 185 図・図版 126	図番号	製品	種類	部位	完破	縦	横	厚さ	重さ	観察事項	地区・グリッド・層遺構・台帳 (取) 台帳
第 185 図・図版 126	1	有孔	サメ	歯	完	0.7	0.7	0.15	0.01	基部に穿孔。孔は不定形、未貫通。	HA ④ V 下層確認 台 4625
	2	棒状	ジュゴン	肋骨	1/3	3.4	2.3	1.2	10.9	一端を方形、他は破損、棒状。表面・研磨、裏面・破損。穿孔・両面。外径 1.0。内径 0.5。焼け、部分黒化。	HA ③ C10 II 台 642
	3	棒状	ジュゴン	肋骨	完	8.0	3.2	2.8	60.8	両端に切断痕。側面を粗く削る。石化	HA ② T1 II 貝溜まり 台 3764
	4	棒状	ジュゴン	肋骨	完	1.8	1.8	1.0	22.3	一端に穿孔、他端両面から削りへら状。孔は削ってから穿孔、孔は同じ大きさ。中程に沈線か 2 条。光沢あり。	HA ③ F6 II 台 3998
	5	板状	ウミガメ	甲板	2/3	6.5	2.5	0.7	8.3	板状、先端「U」字状。側面のみ加工。先端・1 面のみ削り。類例なし	HA ② A8 II 晶 台 3947
	6	半環状	クジラ	肋骨?	1/3	4.2	1.0	1.0	3.9	海獣などの肋骨、環状。先端は丸形。直線上に加工。黒化、淡白色。伊礼原。伊 E	HA ② T6 II 晶 台 784
	7	不明	海獣	椎骨	3/5	5.5	7.2	4.3	79.5	椎体の突起、表、裏面を削り、研磨。側面・自然。類例無	HA ② C5 II 7ガリ子 台 3718
	8	板状	ウシ?	四肢骨	破	2.1	1.5	0.6	1.3	板状。研磨顕著、光沢あり。裏面に海綿組織、周縁薄く海綿組織、粗い、黒化、光沢。	HA ② A2 II 祝殿 台 424
	9	半月状	ウシ?	四肢骨	完	1.9	4.3	0.2	2.0	三日月。やや幅広。中央に径 0.1 の孔。	HA ③ A12 II S-7 台 991
	10	半月状	ウシ?	四肢骨	完	2.0	3.8	0.2	0.9	三日月。表面は 2 面の研磨。裏面に海綿組織、周縁薄く。	HA ② F4 III P-2 台 2086



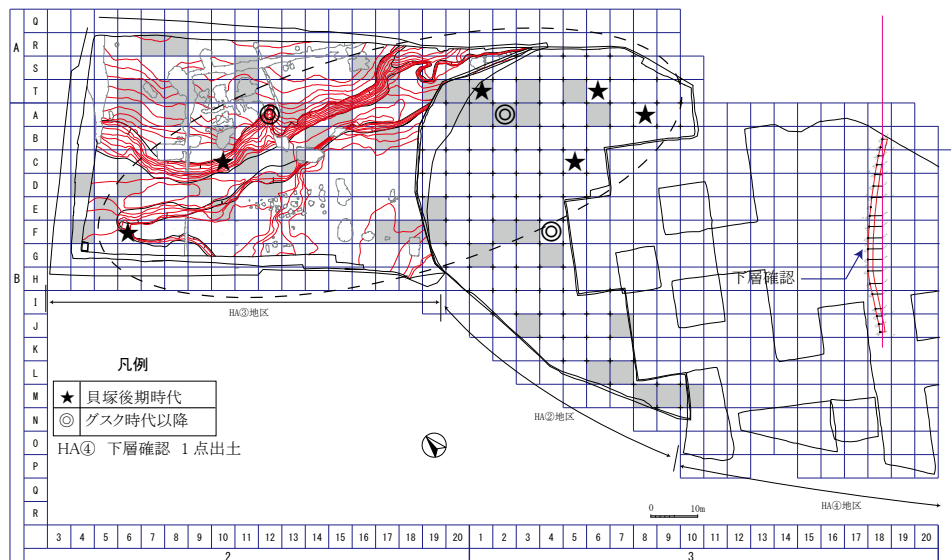
第 185 図 骨製品

から前述の製作途中と思われる。図4 ジュゴンの肋骨で横断面が  $1.82 \times 1.65\text{cm}$  と細い。小さい肋骨で弧状をなし、端部の外縁を抉り、孔を施す。孔は内径と外径がほぼ同じである。他端は両方から斜めに削りへら状をなす。穿孔の状況や骨の大きさを勘案するとグスク時代に属する可能性がある。グスク時代のジュゴン製品は豊見城村宜保アガリヌ御嶽(2003)で報告されている。

素材からここで記述した。図5はウミガメの甲板を「U」字状にかたどり、片面から削りへら状をなす。形状は実用的だが、厚さ0.7cmで骨質は柔らかい。図6はクジラなどの海獣骨の肋骨のたぐいを削り、半環状にしたものである。伊礼原遺跡(2007)や伊礼原E遺跡(2012)で類例があることから貝塚時代前IV期に属する遺物と思われる。骨は被熱ため黒化する。図7は前述と同様、クジラなどの海獣の椎体を加工したものである。椎体の棘突起、椎体の表・裏面を削り、平らにしたもので側面は自然を残す。加工途中と考えられる。

<グスク時代以降>

図8~10はウシなどの大形のほ乳類の四肢骨を板状に加工したものである。図8は一端を加工したもので、裏面は粗い海綿組織が残る。黒化し、光沢がある。図9・10はウシなどの四肢骨を半月状に型どり、へら状に加工したもので、弧状の縁は薄く削る。前者は完形でほぼ中央に径0.1cmの孔を施す。骨の厚さから骨端に近い部分を用いたものと思われる。類例は伊礼原D遺跡(2013)伊礼原遺跡(2014)にある。



第186図 骨製品 平面分布



図版126 骨製品

# 第IV章 科学的分析

## 第1節 平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要

樋泉岳二（早稲田大学）

### 1. 資料と分析方法

平安山原A遺跡ではH19・H21～H23年度の発掘調査において多数の脊椎動物遺体（魚骨・獣骨など）が出土した。ここではその概要について報告する。

調査区は東側からHA①地区(H19年度調査)・HA④地区(H23年度調査)、HA②地区(H21年度調査)、HA③地区(H22年度調査)に区分されている。骨類を出土した層準・年代は、下位からV層、IV層（貝塚時代後期の可能性大）、Ⅲ層（近世以前）、Ⅱ層（近代～終戦時）、Ⅰ層（攪乱・表土）である。

分析資料のほとんどは発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）であるが、HA③地区「埋喪(S-14)」の内容物については水洗選別による回収が行われている。分析方法は基本的に樋泉(2007)の方法を踏襲した。なお哺乳類の四肢骨については、骨幹の全周を残さない破片は原則として同定対象から除外した。遺体の予備的な同定は島袋春美氏の指導のもとに整理作業員諸氏が先行し、筆者が同定結果の確認と集計・図表作成を行った。ただし現時点では多くの資料（特に鳥類と比較的小型の哺乳類）が同定未了であるため、以下で述べる同定結果は暫定的なものである。

### 2. 分析結果

同定結果のローデータについては付録のCDに収録した（付表145～147）。組成の集計については、資料数が膨大であり、また同定未了の資料も多いため、ここでは最小個体数(MNI)の算出は見送り、同定標本数(NISP)のみを第127表に示した。

**出土数：**同定対象となった資料の総数は6023点で、このうちⅡ層出土資料が4542点（Ⅱ層上を含む。以下同様）と圧倒的に多く、とくにHA③地区が2700点、HA②地区が1547点と遺跡西半部（屋敷跡が明確に確認された範囲）に集中している。次いで多いのがⅢ層出土資料（1083点、Ⅲ層下を含む）で、とくにHA④地区が837点、HA②地区が129点と多く、Ⅱ層とは対照的に遺跡の東半部に分布が偏る。その他の層準ではⅠ層が278点とやや多いが、Ⅳ層は40点、Ⅴ層は19点と、いずれも少数である。

**脊椎動物遺体の概要：**資料数の多いⅢ層～Ⅰ層について脊椎動物遺体全体の組成をみると（図1）、各層準ともにイノシシ／ブタ、ウシ、ウマが主体をなす点で一貫している。その他に魚類、両生類、爬虫類、鳥類、小型哺乳類、海生哺乳類も確認されているが、いずれも少数である。

**魚類：**全層準を通じて出土数は少ない。硬骨魚綱（真骨類）15分類群が確認された。資料数が比較的多いⅡ層・Ⅲ層について組成をみると、ともにフエフキダイ科・ハリセンボン科が多く、Ⅱ層ではベラ科・ハタ科・ブダイ科、Ⅲ層ではブダイ科・クロダイ属がこれに次ぐ。その他にフグ科、モンガラカワハギ科、アジ科などが確認されている。

**両生類・爬虫類・鳥類：**両生類ではカエル類、爬虫類ではヘビ類、ウミガメ類、リクガメ類（おそらくリュウキュウヤマガメ）が確認された。ヘビ類は2つのタイプがみられ（ヘビ類A・Bとした）、ヘビ類Aはハブの可能性が高い。鳥類の多くはニワトリ（およびその可能性の高いもの）だが、それ以外の種類も混じる。Ⅱ層HA②地区では出土量がやや多い。

**陸生哺乳類：**全体的にイノシシ／ブタ、ウシ、ウマが多く、ヤギがこれに次ぐ。イヌも普通にみられる。層位的には、Ⅲ層とⅠ層ではウシ、Ⅱ層ではイノシシ／ブタ（ほとんどはブタと思われる）が多く、Ⅱ層HA②地区ではヤギもやや多い。その他にトガリネズミ科？、ネズミ科、ウサギ科、ネコが確認されている。

イノシシ／ブタについては詳細な形質学的検討を行っていないが、野生のリュウキュウイノシシに類するものと、明らかにブタと判断されるものがあり、前者については野生イノシシが含まれる可能性もあることから、前者を「イノシシ／ブタ」、後者を「ブタ」とした。Ⅲ層では前者、Ⅱ～Ⅰ層では後者が多い。

Ⅱ層では保存良好なブタの下顎骨が多数出土しており、とくにHA③の「石組12(S-5)」からは集中的に出土している。これらは形態的にみて明らかにブタと判断されるが、サイズは比較的小型で、現在の一般的なブタよりかなり小さい。歯の萌出状況に基づく推定年齢は、大半の個体が1.5歳前後（乳臼歯を残すか前臼歯が萌出中、M3は未萌出～萌出中）でよく揃っており、かなり画一的な屠殺が行われていたことがうかがわれる。

HA ③地区蒲伊礼小屋敷内 C-16 グリッドで確認された「埋嚢 (S-14)」の内部には多数の骨が含まれていたため、水洗選別によって内容物の回収が行われた。検出された骨の大半はブタで、ほかにヤギ・ウシ・小型哺乳類・魚類がわずかに混じる (小型哺乳類と魚類は同定未了)。ブタは全身の骨格が確認された。最小個体数については厳密な集計を終えていないが、主要四肢骨に基づく値は5～6個体前後である。左右のある部位についてはペアリングを試みたが、ペアになるものは少なく、各部位0～1組、まれに2組が確認されたのみである。ブタの骨には、一部の部位 (中節骨・末節骨など) を除き、解体痕 (カットマークやスパイラルフラクチャーなど) がきわめて頻繁に認められた。解体方法はかなり荒っぽく、切断はなた状の刃物による叩き切り (チョップピング) で行われており、四肢骨では打撃の衝撃で割断されているものも多い (刃物を使ってはいるが、「切る」というよりも「叩き割る」印象である)。ただしナイフ状の刃物による引き切り傷も普通にみられる。切断する位置などについての検討は今後の課題だが、四肢骨にはある程度の規則性がみられるようである。肋骨や中手骨・中足骨には現代の「ソーキ」や「テビチ」に類する切断方法も認められた。いっぽう頭蓋骨では前頭骨～頭頂骨付近に縦・横の切断痕が多数認められ、一撃で完全に切断された資料もみられる。同様の解体方法はHA ②・HA ③地区出土の他のブタ頭蓋骨でも確認された。こうした解体法は頭蓋骨を十文字状 (もしくはさらに細かい単位) に分割することを意図したものと思われ、脳の摘出などを目的とした通常解体とみるには念が入りすぎているようにも感じられる。この点についてはさらなる検討が必要である。

**海生哺乳類**：ジュゴンとイルカ・クジラ類 (大型ハクジラ類を含む) が確認された。いずれも出土数は少ない。

### 3. 付記

以上に記載した資料とは別に、HA ④地区のI17～I18グリッド境界付近からイヌの遺体が交連状態で検出されている。確認された部位は頭骨～胸椎前半と肋骨および左右前肢である。脊柱の胸椎後半以降と肋骨最後部および後肢は後世の掘削攪乱により欠失している。

**謝辞**：分析作業に際しては、島袋春美氏・山城安生氏・東門研治氏・松原哲志氏ほか北谷町教育委員会の皆様より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

### 参考文献

樋泉岳二 (2007) 「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」、『伊礼原遺跡－伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業－』 (北谷町教育委員会編)、沖縄県北谷町教育委員会、pp480-534。

第 126 表 平安山原 A 遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	爬虫綱	RRPTILIA
ウナギ属?	Anguilla sp.?	へび類 A	Serpentes A
ウツボ科	Muraenidae	へび類 B	Serpentes b
コイ科?	Cyprinidae ?	リュウキュウヤマガメ	Geoemyda spengleri japonica
ハタ科 (マハタ型)	Serranidae cf. Epinephelus	ウミガメ類	Cheloniidae
アジ科	Carangidae	鳥綱	AVES
クロダイ属	Acanthopagrus sp.	ニワトリ	Galus galus
キツネフエフキ	Lethrinus miniatus	哺乳綱	MAMMALIA
フエフキダイ属 (ハマフエフキ型)	Lethrinus cf. L. nebulosus	トガリネズミ科?	Soricidae ?
ベラ科 (シロクラベラ型)	Labridae cf. Cheredon shoeleninii	ネズミ科	Muridae
ベラ科 B	Labridae B	ウサギ科	Leporidae
アオブダイ属	Scarus sp.	ネコ	Felis catus
アイゴ属	Siganus sp.	イヌ	Canis familiaris
モンガラカワハギ科	Balistidae	イノシシ/ブタ	Sus scrofa
フグ科	Tetraodontidae	ヤギ	Capra hircus
ハリセンボン科	Diodontidae	ウシ	Bos taurus
両生綱	AMPHIBIA	ウマ	Equus ferus
カエル類	Anura	ジュゴン	Dugong dugon
(右段につづく)		大型ハクジラ類	Odontoceti (large)



第 127 表 -1 平安山原 A 遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISP)

\* 魚類の棘・カメ類の詳細位置不明の甲板破片は除外した。

種類	I 層				II 層上								II 層							
	HA ②	HA ③	HA ④	合計	HA ②							HA ④	合計	HA ①			HA ②			
					瓦屋 又吉小	三良 又吉小	祝女 殿内	照屋 先生	名嘉 座	晶	合計			0010 SD	他	合計	アガリ 子	ナカ子	味子	井戸 2
ウナギ属?				0								0	0			0				
ウツボ科			1	1								0	0			0				
コイ科?				0								0	0			0				
マハタ型				0								0	0			0				
ハタ科				0								0	0			0				
ハタ型				0								0	0			0				
アジ科				0								0	0			0				
クロダイ属				0								0	0			0				
ハマフエフキ型				0								0	0			0				
キツネフエフキ				0								0	0			0				
フエフキダイ属				0								0	0			0				
フエフキダイ科				0								0	0			0				
タイ型				0								0	0			0				
シロクラベラ型				0								0	0			0				
ベラ科 B				0								0	0			0				
ベラ科				0								0	0			0				
アオブダイ属				0								0	0			0				
ブダイ科				0								0	0			0				
アイゴ属				0								0	0			0				
モンガラカワハギ科				0								0	0			0				
フゲ科				0								0	0			0				
ハリセンボン科				0								0	0			0				
真骨類要確認				0								0	0			0				
真骨類同定不可			3	3								0	0			0				
魚類計	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
カエル				0								0	0			0				
ヘビ類 A				0								0	0			0				
ヘビ類 B			1	1								0	0			0				
リクガメ				0								0	0			0				
ウミガメ				0								0	0			0				
ニワトリ	1			1			1				1	1	1			0				
ニワトリ?				0	1		1					2	2			0				
鳥類 (同定未了)		1		1			1					1	1			0				
鳥類 (同定不可)				0			2					2	2			0				
両生爬虫・鳥類計	1	1	1	3	1	0	5	0	0	0	6	0	6	0	0	0	0	0	0	0
トガリネズミ科?				0								0	0			0				
ネズミ科				0								0	0			0				
ウサギ科				0								0	0			0				
ウサギ科?				0								0	0			0				
ネコ				0								0	0			0				
ネコ?		2		2								0	0			0				
イヌ		1		1			1				1	1	1			0		1		
イヌ?		1		1								0	0			0				
小型獣 (同定未了)		1	1	2			2				2	2	2			0				
小型獣 (同定不可)				0			5				5	5	5			0				
イノシシ/ブタ	5		4	9	1	3	14				18	18	18	1		1	1			
ブタ	13	49		62		1	12				13	13	13			0			6	
ブタ?				0			1				1	1	1			0	3			
ヤギ	2	2		4	1		28				29	29	29			0		1	1	1
ヤギ?	1	1		2			2				2	2	2			0				1
ウシ	7	91	7	105	1		3	4		1	9	1	10	7	4	11	1	1	2	
ウシ?		1		1							0	0	0			0				
ウマ	4	34	6	44			1			2	3	3	3	1	1	2			1	
ウマ?				0							0	0	0			0				
ウシ/ウマ	1	19	3	23		1	2	6			9	9	9	1		1	1		1	
ウシ/ウマ?				0							0	0	0			0				
哺乳類 (同定未了)	1	1		2				1			1	1	1			0				
哺乳類 (同定不可)	3	4		7		1	6	3	1	1	12	12	12		1	1	1	1	3	
ジュゴン	1			1							0	0	0			0	1			
ジュゴン?			1	1							0	0	0			0				
大型ハクジラ類			3	3							0	0	0			0				
クジラ類		1		1							0	0	0			0				
イルカ/クジラ類				0							0	0	0			0				
海獣				0							0	0	0			0				
海獣?				0							0	0	0			0				
哺乳類計	38	208	25	271	3	6	77	14	1	4	105	1	106	10	6	16	8	4	14	2
総計	39	209	30	278	4	6	82	14	1	4	111	1	112	10	6	16	8	4	14	2

第 IV 章 1

第127表-2 平安山原A遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISP)

\* 魚類の棘・カメ類の詳細位置不明の甲板破片は除外した。

種類	II層																			合計
	HA②																			
	瓦屋又吉小		三良又吉小	祝女殿内										名嘉座		東大屋小	石14 S-25	畠	他	
	貝溜8	他		アサギ	フール01	フール	貝溜り	不明建物	母屋	他	豚骨土坑	祝女殿内小	照屋先生	SX01	他					
ウナギ属?																				0
ウツボ科																				0
コイ科?																				0
マハタ型			1															1		2
ハタ科														1						1
ハタ型							1													1
アジ科																				0
クロダイ属																				0
ハマフエフキ型	1																			1
キツネフエフキ																				0
フエフキダイ属										1										1
フエフキダイ科										1			1							2
タイ型										1										1
シロクラベラ型										1										1
ベラ科B			1												1					2
ベラ科		1																		1
アオブダイ属			1							1					1					3
ブダイ科																				0
アイゴ属																				0
モンガラカワハギ科															1					1
フグ科										2										2
ハリセンボン科			<3>	1											1					2
真骨類要確認																				0
真骨類同定不可										1										1
魚類合計	1	1	3	1	0	0	1	0	0	8	0	0	1	0	5	0	0	1	0	22
カエル																	12			12
ヘビ類A		8																		8
ヘビ類B																				0
リクガメ																				0
ウミガメ							<3>			3				1				1		5
ニワトリ		1	1		3					9				1						15
ニワトリ?		1								8				1						10
鳥類 (同定未了)		1								1										2
鳥類 (同定不可)		1								3			1	3			3			11
両生爬虫・鳥類合計	0	12	1	0	3	0	0	0	0	24	0	0	1	0	6	0	15	1	0	63
トガリネズミ科?																				0
ネズミ科	1	6								1							137			145
ウサギ科										3							1			4
ウサギ科?										3							1			4
ネコ			1							1										2
ネコ?																				0
イヌ		1				1	2			8										13
イヌ?		1	2							3			2	1				1		10
小型獣 (同定未了)		2	1							8							3			14
小型獣 (同定不可)			1		1					8	2					1				13
イノシシ/ブタ		21	6		5	1	1	3		68	15		7	2	16			8		154
ブタ	1	24	6	1	9	4	4	1		137	9	2	10	2	17	1		18		252
ブタ?		2								1				1	1					8
ヤギ		6	1	2	4				1	62	14		2		3			6	1	105
ヤギ?		1	2							10	7		1			1		1	1	25
ウシ		30	7		3	6	21	2	1	117	7	6	3	1	9	3		6	1	227
ウシ?				1						1										2
ウマ		15	2			6	21	1	7	70		3	2		1			4		133
ウマ?																				0
ウシ/ウマ	1	9	4			2	8	3		60	1		3		4	2		2		101
ウシ/ウマ?																				0
哺乳類 (同定未了)							1													1
哺乳類 (同定不可)		10	7		3		1			58	16		6		15	1	2	10		134
ジュゴン							2			1										4
ジュゴン?																				0
大型ハクジラ類																				0
クジラ類																				0
イルカ/クジラ類																				0
海獣																				0
海獣?																				0
哺乳類計	3	128	40	4	25	20	61	11	8	620	71	11	36	6	67	9	144	56	3	1351
総計	4	141	44	5	28	20	62	11	8	652	71	11	38	6	78	9	159	58	3	1436



第 127 表 -4 平安山原 A 遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISP)

\* 魚類の棘・カメ類の詳細位置不明の甲板破片は除外した。

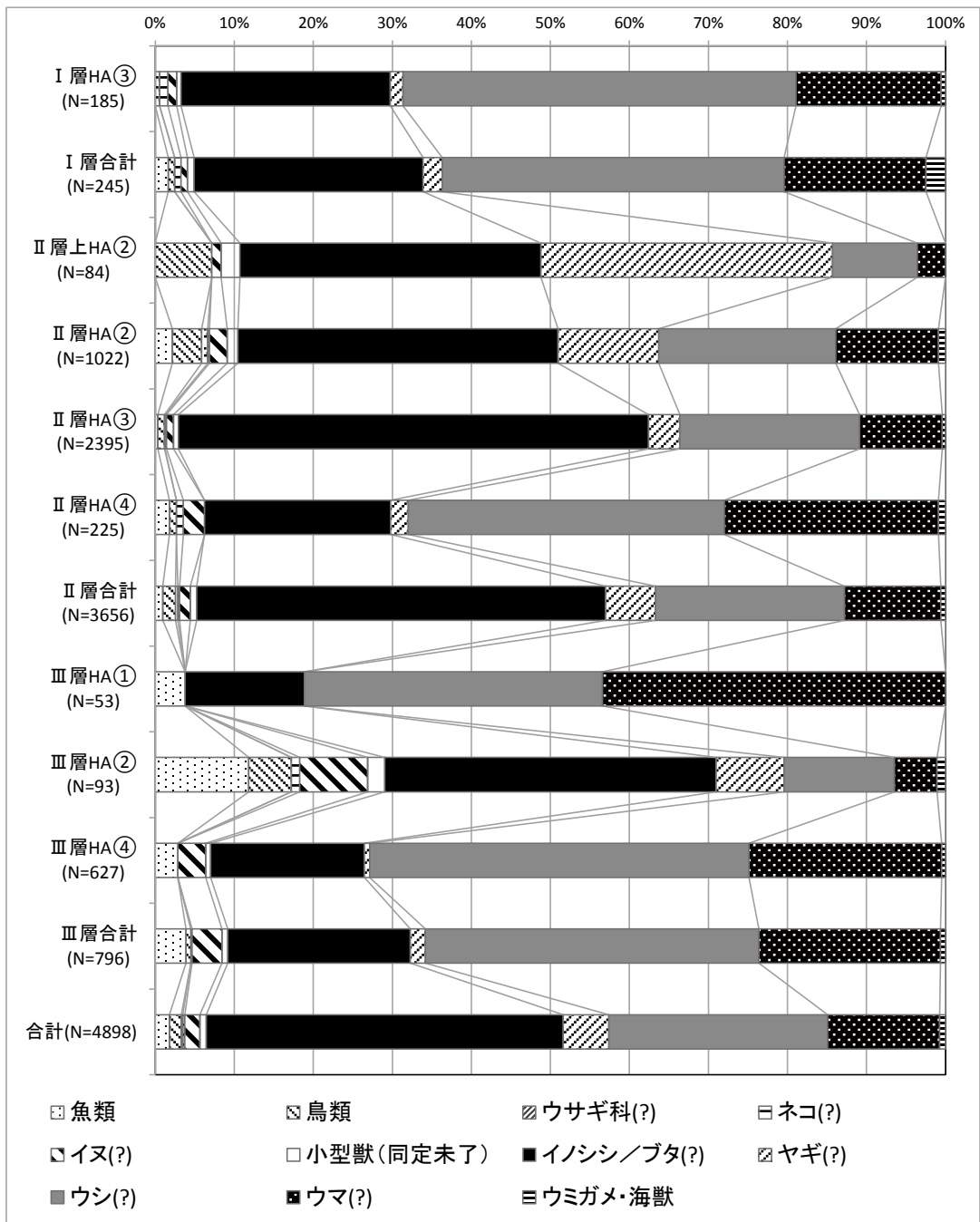
種類	II 層							II - III 層	III 層												
	HA ④						合計		HA ①				HA ②								
	SD5	SD41	SD42	SD43	他	合計			HA ④	0021 SD	0024 SD	他	合計	SK 001	SK 002	SK 003	SK 004	SK 005	SK 009	他	合計
ウナギ属?							0					0									0
ウツボ科							0					0									0
コイ科?							0					0									0
マハタ型							2					0									0
ハタ科							1					0				1					1
ハタ型							1					0									0
アジ科							2					0									0
クロダイ属					1	1	1					0							1		1
ハマフエフキ型							1					0			1						1
キツネフエフキ					1	1	1					0									0
フエフキダイ属							1					0			1						1
フエフキダイ科							3					0	1			1					2
タイ型							1					0				1					1
シロクラベラ型							2					0				1					1
ベラ科 B							2					0									0
ベラ科							1					0									0
アオブダイ属							3					0					1				1
ブダイ科							0					0									0
アイゴ属							0					0									0
モンガラカワハギ科							1					0								1	1
フグ科							2					2	2								0
ハリセンボン科					1	1	7					0									<1> 0
真骨類要確認							0					0	1								1
真骨類同定不可					1	1	2					0									0
魚類合計	0	0	0	0	4	4	34	0	0	0	2	2	2	2	3	1	1	1	1	1	11
カエル							12					0									0
ヘビ類 A							8					0									0
ヘビ類 B							0					0									0
リクガメ							0					0									0
ウミガメ							9					0		1	<1>					<3>	1
ニワトリ							21					0				2					2
ニワトリ?					2	2	21					0	2								2
鳥類 (同定未了)							5					0									0
鳥類 (同定不可)							13					0	1								1
両生爬虫・鳥類合計	0	0	0	0	2	2	89	0	0	0	0	0	3	1	0	2	0	0	0	0	6
トガリネズミ科?							0					0	1								1
ネズミ科							146					0									0
ウサギ科							6					0									0
ウサギ科?							4					0									0
ネコ					2	2	4					0								1	1
ネコ?							4					0									0
イヌ		1			3	4	34					0			1					4	5
イヌ?	1				1	2	16					0				1				2	3
小型獣 (同定未了)							29					0	1				1				2
小型獣 (同定不可)					10	11	31					0	1							1	2
イノシシ/ブタ	2	6	8		35	51	209	2		6	2	8	2	3		3	1	4	4	4	17
ブタ			1		1	2	1673	1				0	1	4		4	1			12	22
ブタ?							11					0									0
ヤギ		1			2	3	197					0	2	1		2	1				6
ヤギ?			1		1	2	33					0				1				1	2
ウシ	7	13	3	8	59	90	871	13	6	6	7	19	3	5	2				1	2	13
ウシ?							4			1		1									0
ウマ	1	8	2	2	48	61	445	10		11	12	23		2						3	5
ウマ?							1					0									0
ウシ/ウマ	1	2			23	26	312	7		3		3	3	2	1	3	1			2	12
ウシ/ウマ?					1	1	13					0									0
哺乳類 (同定未了)					1	1	30					0									0
哺乳類 (同定不可)	1	3			10	14	222	2				0	3	1	2	4	1			10	21
ジュゴン					2	2	9					0									0
ジュゴン?							0					0									0
大型ハクジラ類							0					0									0
クジラ類							1					0									0
イルカ/クジラ類							1					0									0
海獣							1					0									0
海獣?							0					0									0
哺乳類計	13	35	15	10	199	272	4307	35	7	26	21	54	17	18	6	18	7	4	42	112	
総計	13	35	15	10	205	278	4430	35	7	26	23	56	22	21	9	21	8	5	43	129	

第 127 表 -5 平安山原 A 遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISP)

\* 魚類の棘・カメ類の詳細位置不明の甲板破片は除外した。

種類	Ⅲ層						Ⅲ層下			Ⅳ層					Ⅴ層	不明			合計	
	HA ③			HA ④			合計	HA ①	HA ③	合計	HA ①	HA ②	HA ③	HA ④	合計	HA ④	HA ①	HA ②		HA ③
	S-582	他	合計	SP450	他	合計														
ウナギ属?			0		1	1	1			0					0					1
ウツボ科			0			0	0			0					0	5				6
コイ科?			0			0	0			0					0	1				1
マハタ型			0			0	0			0					0					2
ハタ科			0			0	1			0					0					2
ハタ型			0			0	0			0					0	1				2
アジ科			0			0	0			0					0					2
クロダイ属			0		2	2	3			0					0					4
ハマフエフキ型			0			0	1			0					0					2
キツネフエフキ			0			0	0			0					0					1
フエフキダイ属			0			0	1			0					0					2
フエフキダイ科			0		1	1	3			0					0					6
タイ型			0			0	1			0					0					2
シロクラベラ型			0			0	1			0					0					3
ベラ科 B			0			0	0			0					0					2
ベラ科			0			0	0			0					0					1
アオブダイ属			0		2	2	3			0					0					6
ブダイ科			0		1	1	1			0					0	2				3
アイゴ属			0			0	0			0					0	1				1
モンガラカワハギ科			0			0	1			0					0					2
フグ科			0			0	2			0					0					4
ハリセンボン科			0		6	6	6			0					0					13
真骨類要確認			0		2	2	3			0					0					3
真骨類同定不可			0		3	3	3			0					0	7			1	16
魚類合計	0	0	0	0	18	18	31	0	0	0	0	0	0	0	17	0	0	0	1	87
カエル			0			0	0			0					0					12
ヘビ類 A			0		35	35	35			0					0	1				44
ヘビ類 B			0		1	1	1			0					0	1				3
リクガメ	<1>		0			0	0			0					0				<1>	0
ウミガメ			0			0	1		1	1		1			1					12
ニワトリ			0			0	2			0					0					25
ニワトリ?			0			0	2			0			1	1	0					26
鳥類 (同定未了)			0			0	0			0					0					7
鳥類 (同定不可)			0			0	1			0					0					16
両生爬虫・鳥類合計	0	0	0	0	36	36	42	0	1	1	0	1	0	1	2	2	0	0	0	145
トガリネズミ科?			0			0	1			0					0					1
ネズミ科			0		5	5	5			0			1	1						152
ウサギ科			0			0	0			0					0					6
ウサギ科?			0			0	0			0					0					4
ネコ			0			0	1			0					0					5
ネコ?			0			0	0			0					0					6
イヌ			0	3	7	10	15	1		1			9	9						61
イヌ?			0	2	10	12	15			0			1	1						33
小型獣 (同定未了)			0		4	4	6			0			1	1						40
小型獣 (同定不可)			0		29	29	31		2	2			1	1						70
イノシシ/ブタ		1	1		117	117	143			0			5	5			4			390
ブタ	2	12	14		5	5	41		5	5			2	2			2	12		1811
ブタ?			0			0	0			0					0					12
ヤギ	2	1	3		1	1	10			0					0		1			241
ヤギ?			0		3	3	5			0					0					42
ウシ		2	2		301	301	335	1	5	6	1		2	4	7			2		1349
ウシ?			0			0	1			0					0					6
ウマ		2	2		153	153	183	1	1	2			1	4	5		2			694
ウマ?			0			0	0			0					0					1
ウシ/ウマ		7	7		108	108	130		12	12		1		4	5					498
ウシ/ウマ?			0			0	0			0					0					13
哺乳類 (同定未了)			0		1	1	1			0					0					34
哺乳類 (同定不可)	2		2		31	31	54			0					0			1		298
ジュゴン			0		3	3	3			0			1	1						14
ジュゴン?			0			0	0			0					0					1
大型ハクジラ類			0			0	0			0					0					3
クジラ類			0			0	0			0					0					2
イルカ/クジラ類	1		1			0	1			0					0					2
海獣			0			0	0			0					0					1
海獣?			0			0	0			0					0					1
哺乳類計	7	25	32	5	778	783	981	3	25	28	1	1	6	30	38	0	2	10	13	5791
総計	7	25	32	5	832	837	1054	3	26	29	1	2	6	31	40	19	2	10	14	6023

第IV章  
1



第187図 平安山原A遺跡における層準・地区別の脊椎動物遺体の組成(NISP比)

\* N≥50の層準・地区のみ表示。自然の遺骸と思われるカエル・ヘビ・トガリネズミ科?・ネズミ科は除外した。

\* ウサギ科・ネコ・イヌ・イノシシ/ブタ・ヤギ・ウシ・ウマはそれぞれ「?」付きの資料も含む。



ハタ科 (マハタ型) 1 前鰓蓋骨 (L) 2 歯骨 (L) ハタ科 3 主上顎骨 (R) フェフキダイ属 (ハマフェフキ型) 4 前上顎骨 (L) フェフキダイ属 5 口蓋骨 (R) フェフキダイ科 6 歯骨 (R) 7 主上顎骨 (L) 8 方骨 (R) ベラ科 (シロクラベラ型) 9 下咽頭骨 ベラ科 B 10 上咽頭骨 (L) 11 下咽頭骨 ベラ科 12 前上顎骨 (R) アオブダイ属 13 前上顎骨 (R) 14 歯骨 (R) モンガラカワハギ科 15 腰带 16 背鰭棘 フグ科 17 前上顎骨 or 歯骨 ハリセンボン科 18 前上顎骨 or 歯骨



ウミガメ類 19 肋骨板 20 縁骨板 21 頂骨板 ジュゴン 22 頭頂骨 23 胸椎 24・25 肋骨 ハクジラ類 26～28 歯 ヘビ類 (ハブ型) 29 椎骨  
 図版 127 脊椎動物遺体 1 (上段: 魚類、下段: ウミガメ類・ジュゴン・ハクジラ類・ヘビ類)



ネズミ亜科 (小) 1 下顎骨 (R) ネズミ科 (大型) 2 脛骨 (L) ウサギ科 3 下顎骨 (L) 4 脛骨 (L) ネコ 5 下顎骨 (R) 6 上腕骨 (L)  
 イヌ 7 下顎骨 (R) 8 下顎骨 (L) 9 環椎 10 肩甲骨 (L) 11 橈骨 (R) 12 尺骨 (L) 13 脛骨 (L) イノシシ/ブタ 14 下顎骨 (R) 15 下顎骨 (L・R)  
 16 下顎骨 (R) ウシ 17 前頭骨 (角芯)



ブタ 18 前頭骨 + 頭頂骨 (L・R) 19 前頭骨 (R) イノシシ/ブタ 20 側頭骨 (関節結節) (L) 21 後頭骨 (後頭顆) (L) 22 後頭骨 (後頭顆) (R)  
 23 下顎犬歯 (L (オス)) ブタ 24 環椎 25・26 下顎骨 (L・R) 27 下顎骨 (L) 28 肩甲骨 (R) 29 肩甲骨 (L) 30 上腕骨 (R) 31 上腕骨 (L) 32 橈骨 (R)  
 33 尺骨 + 橈骨 (R) 34 尺骨 (R)

図版 128 脊椎動物遺体 2 (上段: ネズミ科・ウサギ科・ネコ・イヌ・イノシシ/ブタ・ウシ、下段: ブタ・イノシシ/ブタ)





ブタ 1 寛骨 (R) 2 大腿骨 (R) 3 大腿骨 (L) 4 脛骨 (L) 5 脛骨 (R) 6 踵骨 (L) 7 距骨 (L) 8 第3中手骨 (R) 9 第3中手骨 (L)  
 10 第4中手骨 (R) 11 第4中手骨 (L) 12 第5中手骨 (R) 13 第3中足骨 (R) 14 第4中足骨 (L) 15 第5中足骨 (L) 16 基節骨 17 中節骨  
 18 末節骨 イノシシ/ブタ 19 寛骨 (L)



ヤギ 20・21 下顎骨 (R) 22 肩甲骨 (L) 23 上腕骨 (R) 24 上腕骨 (L) 25 橈骨 (L) 26 尺骨 + 橈骨 (L) 27 尺骨 (R) 28 中手骨 (L) 29 寛骨 (R)  
 30 寛骨 (R) 31 大腿骨 (L) 32 脛骨 (R) 33 脛骨 (L) 34 距骨 (L) 35 踵骨 (R) 36 中足骨 37 中足骨 (L) 38 基節骨

図版 129 脊椎動物遺体 3 (上段: ブタ・イノシシ/ブタ、下段: ヤギ)



ブタ 1 前頭骨 + 頭頂骨 (L) 2 頭頂骨 + 後頭骨 (R) 3 頭頂骨 + 後頭骨 (L) 4 上顎骨 (L・R) 5 下顎骨 (L) 6 頸椎 7 椎骨棘突起先端部 8 環椎  
9 軸椎 10 胸椎椎体 11～13 腰椎 14～16 肋骨 17 肩甲骨 (R) 18 肩甲骨 (L) 19・20 上腕骨 (R) 21 第3中足骨 (R) 22・23 橈骨 (L)  
24 脛骨 (R) 25 尺骨 (L) 26 尺骨 (L)



ブタ 27・28 寛骨 (L) 29 寛骨 (R) 30・31 大腿骨 (R) 32・33 脛骨 (L) 34 脛骨 (R) 35・36 腓骨 37・38 踵骨 (R) 39・40 距骨 (R)  
41 膝蓋骨 (L) 42 中手 / 中手骨 43 第2中手骨 (L) 44 第3中手骨 (L) 45 第4中手骨 (R) 46 第4中足骨 (L) 47 第5中足骨 (R) 48・49 基節骨  
50 中節骨 51 末節骨 ヤギ 52 肩甲骨 (R) 53・54 寛骨 (R)

図版 130 解体痕のある脊椎動物遺体 (上段: ブタ、下段: ブタ・ヤギ)

## 第2節 平安山原A遺跡の調査で得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

平安山原A遺跡は沖縄島中部西岸・北谷町に位置する沖縄貝塚時代後期から戦前までの遺跡であり、大面積の発掘調査が行われていた地域に存在し、本遺跡もそのひとつである。この平安山原A遺跡では、戦前の居住域が不幸な太平洋戦争による土地接収の結果、ある種パックされていた状況が想定され、この時期の人々の生活を考古学的に明らかにできる可能性が指摘されている。この興味深い遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに簡単にではあるが結果を報告したい。報告に先立ち、種々お世話になった北谷町教育委員会の島袋春美・山城安生・東門研治の各氏、大量の貝類遺体の同定・集計・入力を行って頂いた資料室の方々に御礼申し上げる。

### 対象サンプルと調査地点について

今回の報告対象サンプルは、平成19年度調査のHA①地区、平成21～23年度調査のHA②～HA④地区にわたり、ピックアップ法によって得られたもので、土壌サンプルから抽出された遺体は含まれていない。得られた貝類は種の同定・出土部位・生死等を記録して、各グリッドの包含層および遺構ごとに集計を行った。報告者は、大部分の種の同定を行い、一部の誤同定と考えられる種に関しては沖縄の類似種に修正したが、一部には未確認のものも残ってしまった。データが膨大であったため、前報の平安山原B遺跡と同様に（黒住，2015）、出土数は同定標本数（NISP）として処理した。同定標本数の場合、チョウセンサザエ等は殻とフタ・破片が、二枚貝では左右殻と破片が、それぞれ1として集計され、破片の多くなる大形種や二枚貝で、最少個体数よりも過大評価となってしまう。ただ、今回のデータ間での比較には大きな影響を与えないと考えられる。

各時代の土器や他の人工遺物等で分布集中域が認められており、貝類でもグリッドを単位として、第188図に示したイ～カの14区に区分して集計を進めた。その結果が第130表である。なお、これらの14地区以外からも貝類は出土しており、図版には14の区以外から出土した種も掲載している。

### 結果及び考察

今回、14の区の総合計として107,563個体と膨大な数の貝類遺体が出土しており、他の地点とも併せて本遺跡からは海産腹足類34科180種、海産二枚貝類21科81種、淡水産腹足類3科7種、陸産腹足類4科8種が確認された。

14の区の合計では、サンゴ礁のイノー内に生息するマガキガイが37.4%と最も多く、次いで内湾の砂泥底で見られる二枚貝のリウキュウシラトリが6.7%となっていた。その他、リウキュウシラトリと類似した内湾の二枚貝類も多く、それらはマスオガイ（5.1%）・ヌノメガイ（4.6%）・リウキュウマスオ（3.8%）・カワラガイ（2.6%）・ユウカゲハマグリ（2.4%）・ホソスジイナミ（2.2%）等であった。サンゴ礁の巻貝では、イノー内に生息するオニノツノガイ（3.4%）・クモガイ（3.3%）も多く、干瀬で見られるチョウセンサザエが3.4%、礁斜面のサラサバテイラが4.3%と目立っていた。これらの12種で全体の79.1%と大半を占めていた。ただ、発掘時の観察では、小形のリウキュウウミニナも極めて多くの個体が集中している地点もあり、小形であることからピックアップの対象とならず、もしかするとこの種の一部はオニノツノガイとされている可能性も否定できない。

今回はサンゴ礁の貝類としてマガキガイで、内湾の貝類としてリウキュウシラトリで代表させて、この2種の各区における頻度（%）から、食用貝類遺体の分析を試みた。第130表で、ある区の一つの層での出土数が極めて多い主体的な層が存在した場合には上下の層からの出土個体は主体的な層に由来する可能性が高いものと考え、一括して対象とした。一方、各層の出土数に大きな差のない場合には、層ごとに計算し、上下の層のものは含めなかった。

これらの過程を経て、リウキュウシラトリの割合を基準に示したものが第128表である。全体を通してみると、1）リウキュウシラトリとマガキガイはある程度、一方が多い場合には他方が少ないという傾向が認められる、2）同じ区の層ごとの割合は余りまとまらない、3）時代ごとの差は明瞭ではないものの、多少まとまる可能性もある、といった点が指摘できるようである。

1）の2種の割合に関しては、リウキュウシラトリの採集される内湾とマガキガイの採れるサンゴ礁を何らかの形で使い分けていた結果かもしれない。特に、第128表の下部に示した3つのものではマガキガイが半数以上を占め、リウキュウシラトリが2%未満と明瞭な差が認められた。表の上部のリウキュウシラトリの多い層でも、マガキガイの少ない傾向が存在するようであった。

一方で、2) の同じ区内の層ごとの比較では、ヌ区のⅡ層（近世）とⅢ層（貝塚後期～近世）のように2つの層の割合が極めて類似しているものは、一方の時代の貝類組成を反映している可能性も高い。しかし、ル区のⅡ層（近世）とⅢ層（グスク～近世）ではかなり相違が認められている。現場での観察では、チ区でリュウキュウシラトリやマスオガイが集中していたことを観察しており、その結果はある程度第128表に反映されているものの、この層ではマガキガイも多く、小さな単位での廃棄をどのように捉えるかも今後の課題と言えよう。

本遺跡で最も興味深いと想定される時代変遷を考えた3) では、貝塚後期以前の4つは比較的リュウキュウシラトリの多い第128表の上部に存在し、マガキガイの多いものは表の下部のグスク～近世にやや下部に多い傾向があるかもしれない。一方で、近代からの時期の堆積とされるチ区Ⅱ層主体とリ区のⅡ層では、かなり組成が異なっていた。

今回極めて明瞭に区や時代ごとの貝類遺体の変遷を示すことはできなかった。この要因には様々なことが想定されるが、一つには本地域が貝塚時代後期から戦前まで継続的に集落を含む人間活動の場であったために、過去の時代の貝類が掘削などにより攪乱を受けていることが考えられる。一方では、沖縄島のグスク時代の多くの遺跡では、内湾のカングクやカニモリ類、あるいは河口干潟のアラスジケマンが優占する貝類遺体群が知られている（例えば黒住，2002等）。しかし、本地域ではこのような傾向にないことも示してきた（例えば黒住，2008）。このように平安山原A遺跡でも、これまでに発掘されたグスク本体とは異なる集落の遺跡であることに起因するとも考えられ、またこの遺跡の人々が必ずしも農耕にのみ従事していない可能性も想定される。

本遺跡の一部からは土壌サンプルも採取されており、ホ区の西端ではリュウキュウウミナガが集中している状況も確認しているため、今後、そのサンプルの処理を含め、本遺跡の貝類遺体を再度検討する機会があればと考えている。

第128表 平安山原A遺跡におけるリュウキュウシラトリとマガキガイの頻度 (%)

地区	貝種	リュウキュウシラトリ	マガキガイ
カ	Ⅳ層/貝塚後期以前 (N=2288)	37.0	0.1
チ	Ⅱ層主体/近代～ (N=4968)	32.8	16.0
カ	Ⅲ層下/グスク～近世 (N=1776)	28.8	0.9
ヲ	Ⅳ層/貝塚後期 (N=345)	14.2	17.7
ト	Ⅱ層主体/近代～ (N=955)	12.3	18.3
ヌ	Ⅳ層/貝塚後期 (N=222)	9.0	9.5
ニ	Ⅱ層主体/近世～近代 (N=1904)	8.4	25.2
ヲ	Ⅲ層/グスク～近世 (N=14786)	7.6	17.6
リ	Ⅲ層/グスク～近世 (N=349)	5.7	24.4
ヘ	Ⅱ層主体/貝塚後期～近世 (N=3431)	5.7	24.4
ル	Ⅳ層/貝塚後期以前 (N=545)	5.3	23.5
ル	Ⅱ層/近世以降 (N=4464)	5.3	46.1
リ	Ⅱ層/近代 (N=693)	5.2	24.5
ロ	Ⅱ層/グスク～近世 (N=9984)	3.8	39.8
ヌ	Ⅱ層/近世 (N=2032)	3.2	43.1
ヌ	Ⅲ層/貝塚後期～近世 (N=2763)	3.1	31.0
イ	Ⅱ層主体/近世 (N=1904)	2.9	23.3
ホ	Ⅱ層主体/近世～近代 (N=28682)	2.3	44.2
ル	Ⅲ層/グスク～近世 (N=14786)	2.1	49.9
ハ	Ⅱ層/近世～近代 (N=1776)	1.5	57.7
ワ	Ⅲ層/グスク～近世 (N=1776)	1.5	57.7
ロ	Ⅲ下層/グスク～近世 (N=3553)	1.4	63.2

<引用文献>

黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子 (編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 67-86. 熊本大学文学部.

黒住耐二. 2008. 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体. 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 168-183, 197-200.

黒住耐二. 2015. 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体. 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (37): 388-404.

第 129 表 平安山原 A 遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型 .

和名	学名	生息場所 類型	図版 番号	和名	学名	生息場所 類型	図版 番号
軟体動物門 Mollusca				コモンダカラ	Cypraea (Erosaria) erosa	I - 2-b	83
腹足綱 Gastropoda				ハナマルユキ	Cypraea (Rav.) caputserpentis	I - 3-a	84
ツタノハ科 Patellidae				ハチジョウダカラ	Cypraea (Mauritia) mauritiana	I - 1-a	95
オオツノハ	Scutellastra optima	VI		ヤナギシボリダカラ	Cypraea (Luria) isabella	I - 2-b	
ヨメガカサ科 Nacellidae				ヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) arabica	I - 2-a	85
オオベッコウガサ	Cellana testudinaria	I - 1-a	3	ホソヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) eglantina	II - 2-a	86
ユキノカサ科 Lottiidae				エダカラ	Cypraea (Talostolides) teres	I - 2-a	
リュウキュウウオアシ	Patelloida saccharina	I - 1-a	2	タルダカラ	Cypraea (Talparia) talpa	I - 2-a	
ミミガイ科 Haliotidae				ホシダカラ	Cypraea (s.s.) tigris	I - 2-c	
イボアナゴ	Haliotis (Sanhalitos) varia	I - 2-a	4	ヒメホシダカラ	Cypraea (Lyncina) lynx	I - 2-b	90
マアナゴ	Haliotis (Ovinotis) ovina	I - 3-a	5	ホシキヌタ	Cypraea (Mystaponda) vitellus	I - 2-a	91
ミミガイ	Haliotis (Haliotis) asinina	I - 3-a		タマガイ科 Naticidae			
リュウテン科 Turbinidae				トミガイ	Polinices tumidus	I - 2-c	99
コシダカサザエ	Turbo (Marma) stenogyrum	I - 2-a	16	ヘソアキトミガイ	Polinices Flemingianus	I - 2-c	100
チョウセンサザエ	Turbo (Marma) angyrostomus	I - 3-a	7・8	シロヘソアキトミガイ	Polinices vabaosia	I - 2-c	101
リュウテン	Turbo (Turbo) petholatus	I - 4-b	15	リスガイ	Mammilla melanostoma	I - 2-c	102
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	I - 4-a	9・10	ネズミガイ	Mammilla simiae	I - 2-c	
カンギク	Lunella moniliformis	II - 1-b	11	コハクダマ	Natica stellata	I - 4-c	105
オオウラウズ	Astraliu rhodostoma	I - 2-a	13	ホウシュノタマ	Notochochlis gualtieriana	II - 1-c	104
ニシキウス科 Trochidae				アラゴマフダマ	Naticarius onca	II - 2-c	107
ニシキウス	Trochus (Trochus) maculatus	I - 2-a	18	ヤツシロガイ科 Tonnidae			
ムラサキウス	Trochus (Trochus) stellatus	I - 3-a	17	ウズラガイ	Tonna perdax	I - 2-c	109
ムラサキイチモンジ?	Trochus (Trochus) s. sacellum?	I - 4-a	24	スクミウズラ	Tonna cepa	I - 2-c	110
ギンタカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	I - 4-a	19	イワカワトキワ	Malea (Quimalea) pomum	II - 2-c	108
コシダカギンタカハマ	Trochus (Tectus) triserialis	I - 4-a	20	フジツガイ科 Ranellidae			
ベニシリダカ	Trochus (Tectus) conus	I - 4-a		ミツカドボラ	Cymatium (Mon.) nicobaricum	I - 2-a	111
サラサハテイラ	Trochus (Rochia) niloticus	I - 4-a	22	サツマボラ	Cymatium (Monoplex) aquatile	I - 2-a	112
オキナフイシダタミ	Mondonta labio	II - 1-b	23	シノマキ	Cymatium (Monoplex) pileare	I - 4-a	113
アマオブネ科 Neritidae				シノボラ	Cymatium (Gut.) muricinum	I - 2-a	115
イシダミアマオブネ	Nerita (Ritena) helicinoidea	I - 0-a	26	ヒメミツカドボラ	Cymatium (Turritriton) labiosum	I - 4-a	
ヒメイシダミアマオブネ	Nerita (Ritena) tristis	I - 0-a	27	オオゾウガイ	Cymatium (Ranularia) pyrsum (Linnaeus, 1758)	I - 4-a	116
アラシアマガイ	Nerita (Ritena) undata	I - 1-a	33	ホラガイ	Charonia tritonis	I - 4-a	117
キバアマガイ	Nerita (Ritena) plicata	I - 0-a	28	オキニシ科 Bursidae			
リュウキュウアマガイ	Nerita (Ritena) insculpta	I - 0-a	29	イワカフウネボウ	Bursa (Colubrellina) granularis	I - 2-a	125
アマオブネ	Nerita (Thelyostyla) albicilla	I - 1-b	30	オキニシ	Bursa (s.s.) bufonis dunkeri	I - 3-a	120
マルアマオブネ	Nerita (Thelyostyla) squamulata	II - 1-b	31	シワクチナルトボラ	Tutufa rebeta	I - 4-a	121
オオマルアマオブネ	Nerita (Thelyostyla) chamaeleon	I - 1-b	32	シオナルトボラ	Tutufa bufo	I - 4-a	122
ヒラマキオマオブネ	Nerita (Thelyostyla) planospira	III - 0-d		シオナルトボラ	Tutufa bufo	I - 4-a	123
ニシキアマオブネ	Nerita (Ampninerita) polita	I - 1-c	35	トウカムリ科 Cassidae			
カノコガイ	Clithon sowerbianus	III - 0-e	38	アメガイ	Casmaria ponderosa	I - 4-c	126
ニセヒロクチカノコ	Neritina siquijorensis	II - 1-b	39	ヒナズル	Casmaria erinaceus	I - 4-c	127
フネアマガイ	Septaria porcellana	IV - 5		アッキガイ科 Muricidae			
タニシ科 Viviparidae				ガンゼキホラ	Chicoreus burunneus	I - 2-a	128
マルタニシ	Chipangopaludina chinensis	IV - 6		テングガイ	Chicoreus ramosus	I - 4-a	
ヤマタニシ科 Cyclophoridae				テツレイシ	Thais (Stramonita) savignyi	I - 1-a	
オキナフヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	V - 8		コイワニシ	Thais (Semiricinula) squamosa	II - 1-a	140
オニツノガイ科 Cerithiidae				シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera	I - 3-a	131
オニツノガイ	Cerithium (Cerithium) modulosum	I - 2-c	41	ツノテツレイシ	Mancinella hippocastanum	I - 1-a	132
コオニツノガイ	Cerithium (Cerithium) columnum	I - 2-a	42	ツノレイシ	Mancinella tuberosa	I - 3-a	133
メオニツノガイ	Cerithium (Cerithium) echinatum	I - 4-b	43	レイシ類	"Cronia" sp.		134
トウガタカニモリ	Rhinoclavis sinensis	I - 2-c		レイシダマシモドキ	Muricodrupa fusca (Kuster, 1862)	I - 1-b	139
クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziana	I - 1-b	45	ハナワレイシ	Nassa vexillum	I - 3-a	138
カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata	I - 1-b	46	ムラサキガイレイシ	Drupa (s.s.) morum	I - 3-a	135
カニモリガイ類				シロイガイレイシ	Drupa ricinus albolabris	I - 3-a	137
ヘナダリ科 Cerithiidae				アカイガイレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidaeus	I - 3-a	136
フトヘナダリ (1科)	Cerithidea (Cerithidea) moerchii	III - 0-d	53	カイロイガイレイシ	Drupa (Drupina) grossularia	I - 3-a	141
カワアイ	Cerithidea (Cer.) djadjariensis	III - 1-c		オニコブシ科 Vasidea			
センニンガイ	Telescopium telescopium	III - 0-c	51	オニコブシ	Vasum ceramicum	I - 3-a	143
マドモチウミナ	Terebralia sulcata	III - 1-c	52	オニコブシ	Vasum turbinellum	I - 2-a	144
キバウミナ	Terebralia parstris	III - 1-c		フトコロガイ科 Columbelloidea			
ウミナシ科 Batillariidae				フトコロガイ	Euplaca vesicolor	II - 2-d	145
リュウキュウウミナ	Batillaria flectosiphonata	II - 1-c	54	エゾバイ科 Buccinidae			
イボウミナ	Batillaria zonalis	III - 1-c		シマベッコウバイ	Japeuthria cingulata	II - 1-b	151
ゴマフナ科 Planaxidae				オリレイロフバイ科 Nassariidae			
ゴマフナ	Planaxis sulcatus	I - 0-a	60	オリレイロフバイ	Nassarius arcularia	II - 2-c	150
トウガタカワニナ科 Thiariidae				ヒメオリイレムシロ	Nassarius sp. cf. nodifer	II - 2-c	147
トウガタカワニナ	Thiara scabra	IV - 5,6	224	イボフバイ	Nassarius coronatus	II - 1-c	148
ヌノメカワニナ	Melanoides tuberculata	IV - 6	225	アワムシロ	Niotha albescens	I - 2-c	149
スグカワニナ	Stenomelania uniformis	IV - 6	28	イトマキボラ科 Fasciolaridae			
ヨシカワニナ	Stenomelania plicaria	IV - 6	227	イトマキボラ	Pleuroploca trapezium	I - 2-b	153
イボアヤカワニナ	Tarebia granifera	IV - 6		ヒメイトマキボラ	Pleuroploca trapezium paeteli	I - 2-b	154
カワニナ科 Pleuroceridae				ナガイトマキボラ	Pleuroploca filamentosa	I - 2-a	155
カワニナ	Semisulcospira bensoni	IV - 5,6	230	ツノマタモドキ	Latirus belcheri	I - 3-a	157
スイショウガイ科 Strombidae				リュウキュウツノマタ	Latirus polygonus	I - 3-a	156
ムカシタモト	Strombus (Canarium) mutabilis	I - 2-c	62	マルニシ	Leucozonia smaragdula	I - 3-a	158
ヤサガタムカシタモト	Strombus (Canarium) microureum	I - 4-c		チトセボラ	Fusinus nicobaricus	I - 2-c	
オハグロガイ	Strombus (Canarium) urceum	II - 2-c		マフラガイ科 Olividae			
フトスジムカシタモト	Strombus (Canarium) labiatum	II - 2-c	75	サツマナビ	Oliva annulata	I - 2-c	163
ネジマギキガイ	Strombus (Gibberulus) g. gibbosus	II - 1-c	65	マクラガイ類	Oliva sp.		
マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuanus	I - 2-c	66	シヨッコウラ科 Harpidae			
スイショウガイ	Strombus (Laevistrombus) turturella	II - 2-c	69	ヒメシヨッコウラ	Harpa amouretta	I - 2-c	162
イボソデ	Strombus (Lentigo) lentiginosus	I - 2-c	67	シヨッコウラ	Harpa major	I - 2-c	
マイノソデガイ	Strombus (Euprotomus) aurisdianae Linnaeus, 1758	I - 4-c	68	フデガイ科 Mitridae			
ベニソデガイ	Strombus (Euprotomus) bulla	I - 4-c	76	チョウセンフデ	Mitra mitra	I - 2-c	168
アツソデ	Strombus (Tricornis) thersites	I - 4-c	70	ヒメチョウセンフデ	Mitra episcopolis	I - 2-c	170
ゴホウラ	Strombus (Tricornis) latissimus	I - 4-c		オオオビフデガイ	Mitra ambigua	I - 4-c	169
クモガイ	Lambis lambis	I - 2-c	72	コガネヤタテ	Nebularia chrysostoma	I - 4-c	171
ラクダガイ	Lambis truncata sebae	I - 4-c		シロオビヤタテ	Strigatella amphorella	I - 2-b	172
スイジガイ	Harpago chiragra	I - 2-c	74	イモフデ	Pterygia dactylus	I - 1-b	167
ムカデガイ科 Vermetidae				ミノムシガイ科 Costellaridae			
フタモチヘビガイ	Dendropoma maximum	I - 2-a	79	ミノムシガイ	Vexillum balteolatum	II - 2-c	
リュウキュウヘビガイ	Serpulorbis trimeresurus	I - 2-a	78	オオミノムシガイ	Vexillum plicarium	II - 2-c	166
タカラガイ科 Cypraeidae				イモガイ科 Conidae			
キイロダカラ	Cypraea (Monetaria) moneta	I - 1-a	80	マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus	I - 1-a	173
ハナビラダカラ	Cypraea (Monetaria) annulus	I - 1-a	81	サヤガタイモ	Conus (Virroconus) fulgetrum	I - 1-a	174
ナツメドモキ	Cypraea (Eronea) erronea	I - 2-b	82	ジュズガケサヤガタイモ	Conus (Virroconus) coronatus	I - 1-a	

和名	学名	生息場所 類型	図版 番号	和名	学名	生息場所 類型	図版 番号
ハナワイモ	Conus (Virroconus) sponsalis	I - 1 - a		ザルガイ科 Cardiididae			
ガクワイモ	Conus (Virroconus) musicus	I - 2 - a		リュウキュウザルガイ	Vasticardium flavum	II - 2 - c	38
キヌカツギイモ	Conus (Virgiconus) flavidus	I - 2 - a	178	カワラガイ	Fragum unedo	II - 2 - c	39
イボシマイモ	Conus (Virgiconus) lividus	I - 2 - a	180	オキナワヒシガイ	Fragum loochooanum	II - 2 - c	40
ヤセイモ	Conus (Virgiconus) emaciatus	I - 2 - c	181	オウヒシガイ	Fragum fragum	I - 2 - c	41
ベニイタダキイモ	Conus (Virgiconus) balteatus	I - 4 - a		リュウキュウアオイ	Corculum cardissa	I - 2 - b	43
イボカバイモ	Conus (Virgiconus) distans	I - 2 - c		シャコガイ科 Tridacnidae			
オトメイモ	Conus (Virgiconus) virgo	I - 4 - c		オオシラナミ	Tridacna maxima	I - 2 - a	44
ヤナギンボリイモ	Conus (Rhizoconus) miles	I - 3 - a	183	ナガジャコ(トガリナミ)	Tridacna noae	I - 2 - a	46
サラサミナシ	Conus (Rhizoconus) capitaneus	I - 4 - b	184	シラナミ類	Tridacna maxima & noae	I - 2 - a	
カバミナシ	Conus (Rhizoconus) vexillum	I - 4 - b	185	ヒレジャコ	Tridacna squamosa	I - 2 - c	47
アラレイモ	Conus (Chelyconus) catus	I - 3 - a		ヒメジャコ	Tridacna crocea	I - 2 - a	48
ハイイロミナシ	Conus (Rhizoconus) rattus	I - 2 - a	190	シャゴウ	Hippopus hippopus	I - 2 - c	51
ヤキイモ	Conus (Pinoconus) magus	I - 2 - c	191	シャコガイ類	"Tridacna" spp.	I - 2	49
サラサモドキ	Conus (Dauciconus) vitulinus	I - 2 - c	192	バカガイ科 Mactridae			
ヒラマキイモ	Conus (Dauciconus) planorbis	I - 2 - c		リュウキュウバカガイ	Mactra maculata	II - 2 - c	52
シロマダライモ	Conus (Hermes) nussatella	I - 4 - b	177	タママキ	Mactra cuneata	II - 1 - c	533
アジロイモ	Conus (Darioconus) pennaceus	II - 2 - c	193	ユキガイ	Meropesta nicobarica	II - 2 - c	54
ハナイモ	Conus (Darioconus) retifer	I - 4 - b	179	リュウキュウアリソ	Mactra mera	II - 2 - c	
タガヤサンミナシ	Conus (Darioconus) textile	I - 2 - c	194	チドリマスオガイ科 Mesodesmatidea			
ツボイモ	Conus (Darioconus) aulicus	I - 4 - c	197	イソハマグリ	Atactodea striata	I - 1 - c	56
ニシキミナシ	Conus (Strioconus) striatus	I - 2 - c	198	ナミコムマスオ	Davila plana	I - 1 - c	58
アンボイナ	Conus (Gastriodum) geographus	I - 2 - c	199	クチバガイ類	Coecella sp.	III - 1 - c	57
ナンヨウクロミナシ	Conus (s.s.) marmoreus	II - 2 - c	200	フジノハナガイ科 Donacidae			
ミカドミナシ	Conus (Rhombus) imperialis	I - 2 - c	201	リュウキュウナミノコ	Latona faba	I - 1 - c	59
アカシマミナシ	Conus (Leptoconus) generalis	I - 2 - c	202	ニコウガイ科 Tellinidae			
ナガサラサミナシ	Conus (Leptoconus) litoglyphus	I - 2 - c	187	ニコウガイ	Tellinella virgata	II - 2 - c	60
ゴマフイモ	Conus (Puncticulis) pulicarius	I - 2 - c	203	ヒメニコウガイ	Tellinella staurella	II - 2 - c	61
コモンイモ	Conus (Puncticulis) arenatus	I - 2 - c	204	リュウキュウシラトリ	Quidnipsys palatum	II - 1 - c	64
クロザメモドキ	Conus (Lithoconus) eburneus	I - 2 - c	208	ヌノメイチョウシラトリ	Pistris capsoides	III - 1 - c	66
アンボククロザメ	Conus (Lithoconus) litteratus	I - 2 - c	209	サメザラ	Scutarcopagia scobinata	I - 2 - c	67
クロフモドキ	Conus (Lithoconus) leopardas	I - 2 - c	210	モチツキザラ	Cyclotellina remies	I - 2 - c	68
クダマキガイ科 Turridae	Turridae gen. et sp.			ミギキヒメザラ	Pinguitellina pinguis	II - 2 - c	
クダマキガイ科				アマサギ	Macalia bruguieri	II - 2 - c	
タケノコガイ科 Terebridae	Terebra subulata	I - 2 - c	217	アサジガイ科 Semelidae			
タケノコガイ	Oxymeris maculatus	I - 2 - c	218	サメザラモドキ	Semele carnicolor	II - 1 - c	69
リュウキュウタケ				イソシジミ科 Psammobiidae			
ナツメガイ科 Bulliidae	Bulla vernicosa	I - 2 - c	220	リュウキュウマスオ	Asaphis violacens	II - 1 - c	70
ナツメガイ				マスオガイ	Psammonea elongata	II - 1 - c	71
タマゴガイ科 Atyidae	Aliculastrum cylindricum	II - 2 - c	219	シジミ科 Cyreneidae			
カイコガイ				シレナシジミ	Geloina erosa	III - 0 - c	72
アフリカマイマイ科 Achatinidae	Achatina fulica	V-9	231	マルスダレガイ科 Veneridae			
アフリカマイマイ				ヌノメガイ	Periglypta puerpera	II - 2 - c	73
ナンバンマイマイ科 Camaenidae	Satsuma (s.s.) m. mercatoria var.	V-8	232	オオヌノメガイ	Periglypta clathrat	I - 2 - c	74
シュリマイマイ	Satsuma (s.s.) m. katsurenensis	V-7	236	アラヌノメガイ	Periglypta reticulata	I - 2 - b	75
カツレンマイマイ	Satsuma (s.s.) "m." atrata	V-7		カノコアサリ	Glycydonta marica	I - 2 - c	76
ヤンバルマイマイ	Satsuma (Lichula) eucosmia	V-8		ホソスジナミ	Gafrarium pectinatum	II - 1 - c	77
オキナワヤマタカマイマイ				アラシジケマン	Gafrarium tumidum	III - 1 - c	78
オナジマイマイ科 Bradybaenidae	Bradybaena circhulus	V-8	238	ユウカゲハマグリ	Pitar striatum	II - 2 - c	79
バンダナマイマイ	Acusta d. despecta	V-8	239	オミナエシ	Pitar pellicudum	II - 2 - c	93
オキナワウスカワマイマイ				レモンハマグリ?	Pitar reeveanum?	II - 2 - c	94
二枚貝綱 Bivalvia				ウソハマグリ類	Pitar sp.	II - 2 - c	80
フネガイ科 Arcidae				ケシウオミナエシ	Pitar (pitarina) obliquatum	II - 2 - c	81
フネガイ	Arca avellana	I - 2 - a	2	マルオミナエシ	Lioconcha castrensis	I - 2 - c	95
オオタカノハ	Arca ventricosa	I - 2 - a	5	オイノカガミ	Bonartemis histrio	II - 2 - c	82
エガイ	Barbatia (Abarbatia) trapezina	I - 1 - a	1	リュウキュウアサリ	Tapes literatus	II - 2 - c	85
オオカリガネエガイ	Barbatia foliata	I - 2 - a	7	ヒメアサリ	Ruditapes variegata	II - 1 - c	86
オオミノエガイ	Barbatia lacerata	I - 4 - a	4	スダレハマグリ	Katelysia japonica	II - 1 - c	87
ベニエガイ	Barbatia (Ust.) amygdaloumstostum	I - 2 - a	6	トドムハリハマグリ	Meretrix sp. cf. lamarcki	II - 2 - c	88
クロミノエガイ	Barbatia (Ustularca) cruciata	II - 2 - b	3	ハマグリ類似種	Meretrix sp. cf. lusoria	II - 2 - c	89
リュウキュウサルボオ	Anadana (Anadana) antiquta	II - 2 - b	9	ダテオキシジミ	Cyclina orientalis	III - 1 - c	
ハイガイ(セウ効型)	Tegillarca granosa f. obessa	III - 1 - c	8	フジイロハマグリ	Callista erycina	II - 2 - c	
イガイ科 Mytilidae	Modiolus auriculatus	I - 1 - a	11	頭足綱 Cephalopoda			
リュウキュウヒバリ				コウイカ科 Sepiidae			
ウグイスガイ科 Pteriidae	Pinctada panasesae	I - 1 - a	14	コブシメ	Sepia latimanus	I - 2	
ミドリアオリ	Pinctada fucata	II - 2 - b		節足動物門 Arthropoda			
アコヤガイ	Pinctada margaritifera	I - 4 - a	12	十脚類 Decapoda	crabs		
クロチョウガイ				カニ類			
シュモクアオリ科 Isognomonidae	Isognomon sp.cf. perna	I - 1 - a	16	棘皮動物門 Echinodermata			
カイシアオリの一種	Isognomon isognonum	II - 2 - b	15	ウニ綱 Echinoidea			
シュモクアオリ				ハイブウニ(棘)	Heterocentrotus mammillatus (spine)	I - 3 - a	
ミノガイ科 Limidae	Lima vulgaris	I - 2 - a	18	生息場所類型(Habitat)			
ミノガイ				I: 外洋-サンゴ礁域			
イタヤガイ科 Pectinidae	Comptopallium radula	II - 2 - c	17	II: 内湾-転石域			
リュウキュウオウギ				III: 河口干潟-マングローブ域			
ウミギク科 Spondylidae	Spondylus spp.	I - 2 - a	20	IV: 淡水域			
メンガイ類				V: 陸域			
ベッコウガキ科 Picnodontidae	Hytissa hyotis	I - 2 - c		VI: その他			
シャコガキ				0: 潮間帯上部(Iではノッチ, IIIではマングローブ)			
イタボガキ科 Ostreidae	Crassostrea bilineata	III - 1 - a	25	1: 潮間帯中・下部			
シマ(シマ)ガキ	Saccostrea mardox	I - 1 - a	21	2: 亜潮間帯上縁部(Iではイノー)			
オハグロガキ	Saccostrea circumscuta	II - 1 - b	22	3: 干瀬(Iにのみ適用)			
オハグロガキモドキ	Dendrostrea sandwichensis	II - 2 - a	23	4: 礁斜面及びその下部			
ノコギリガキ	Ostrea fluctigera	II - 2 - b	24	5: 止水			
シロヒメガキ				6: 流水			
ツキガイ科 Lucinidae	Codakia tigersa	I - 2 - c	27	7: 林内			
ツキガイ	Codakia punctata	I - 2 - c	28	8: 林内・林縁部			
クチベニツキガイ	Codakia paytenorum	II - 2 - c	29	9: 林縁部			
ウラツキガイ	epicodakia bella	I - 2 - c	30	10: 海浜部			
ヒメツキガイ	Anodontia edentula	II - 2 - c	31	11: 打ち上げ物			
カブラツキガイ				12: 化石			
トマヤガイ科 Carditidae	Cardita leana	II - 1 - a	98	a: 岩礁/岩盤			
トマヤガイ				b: 転石			
キクザル科 Chamidae	Chama iostoma	I - 1 - a	34	c: 礫/砂/泥底			
カネツケザル	Chama dunkeri	I - 2 - a	35	d: 植物上			
ケイトウガイ	Chama brassica	I - 4 - a	36	e: 淡水の流入する礫底			
シロザル	Chama sp.	II - 2 - a					
キクザル	Chama spp.		37				
キクザル類							

第130表-1 平安山原A遺跡から得られた貝類遺体の同定標本数

地区 区 層	HA③地区																HA②地区														
	イ				ロ				ハ		ニ				合計	ホ				ヘ				ト							
	I	II	III	皿下	計	I or 流路	II	III	皿下	計	II	計	I	II		IV	計	I	II	皿上	計	I	II	皿上	計	I	II	皿上	計	I	
1	オオツタノハ																														
2	リュウキュウウノアシ						2			2								1		1											
3	オオベッコウガサ																														
4	イボアナゴ																														
5	マアナゴ			1		1																									
6	ミミガイ																														
7	チョウセンサザエ	13	68	8	10	99	33	263	3	61	360	78	78	53	1	54	591	4	1672	1	1677	27	27	5	5	3	3				
8	チョウセンサザエ(蓋)			7	4	11	1	36		14	51	4	4	8	8	74		58		58	11	1	12	1		1	3				
9	ヤコウガイ		6			6	4	17		4	25	6	6	1	1	38		1		1											
10	ヤコウガイ(蓋)									1	1	1	1			2		8		8	1	1									
11	カンギク		3	3	1	7		3		2	5	1	1			13		11		11	10	10	2		2						
12	カンギク(蓋)						1	3		4	8					8		1		1	1	1					2				
13	オオウラウス		1			1		1		1	1	1				3		7		7	1	1					1				
14	ウラウスガイ類																														
15	リュウテン		1			1										1															
16	コシダカサザエ													1	1	1		2		2											
17	ムラサキウズ		1			1		2		2						3	2	60		62	5	5									
18	ニシキウズ	2	8	3	13	19	133	1	46	199	8	8	11	11	231		121		121	19	19	1	3		4						
19	ギンタカハマ		13	2	15	12	55		19	86	1	1	1	4	5	107	1	74		75	13	13			2	2					
20	コシダカギンタカハマ																														
21	ベニシリダカ																														
22	サラサバテイラ	12	126	20	14	172	41	744	4	74	863	34	34	2	66	2	70	1139	2	2010	3	2015	110	110	4	18	1	23	1		
23	オキサワイシダタミ																														
24	ムラサキイチモンジ?							1		1						1															
25	ウズイチモンジ類																														
26	イシダミアマオブネ				1	1										1															
27	ヒメイシダミアマオブネ																				1	1									
28	キバアマガイ																				1	1									
29	リュウキュウアマガイ		1			1				1	1					2		7		7	4	4					2				
30	アマオブネ						3	3	6	1	1	1	1	1	8		2		2	6	6	2	2								
31	マルアマオブネ																	1		1											
32	オオマルアマオブネ																														
33	アラスジアマガイ																														
34	ヒラマキオマオブネ																														
35	ニシキアマオブネ				1	1										1		3		3	1	1									
36	アマガイ類																	5		5											
37	フネアマガイ																														
38	カノコガイ												1	1	1																
39	ニセヒロクチカノコ																	1		1											
40	アマオブネ科																	1		1	1	1									
41	オニツツノガイ	6	15	7	3	31	36	315	4	111	466	29	29	2	29	1	32	558	4	1246	3	1253	1	89	90	2	12	1	15	2	
42	コオニツツノガイ																														
43	メオニツツノガイ		1			1										1															
44	トウガタカニモリ			3	6	9	1	6		37	44							53		1	1										
45	クワノミカニモリ		3		3			2		1	3				103	103	109		8		8	4	4	1		1					
46	カヤノミカニモリ																														
47	カニモリガイ類1																														
48	カニモリガイ類2																														
49	ヒメクワノミカニモリ																														
50	カワアイ																		2		2										
51	センニンガイ																														
52	マドモチウミニナ							1		1						1	1	76		77											
53	フトヘナタリ																		1		1										
54	リュウキュウウミニナ			1		1										1		86		86	108	108	2		2						
55	イボウミニナ				2	2		1		1	2					4		8		8											
56	ウミニナ類1				2	2										2		13		13											
57	ウミニナ類2																														
58	キバウミニナ																		1		1										
59	ヘナタリ類																														
60	ゴマフニナ																				1	1									
61	コゲニナ?																		1		1										
62	ムカシタモト																		13		13	4	4	3		3		2			
63	フトスジムカシタモト		2		1	3		11		2	13	1	1				17		4		4	2	1	3							
64	サヤガタムカシタモト																														
65	ネジマギキガイ	1	50	11	13	75	12	188	1	56	257	12	12	50	2	52	396		373		373	124	3	127	1	21	1	23	4		
66	マガキガイ	14	356	72	64	506	499	3969	11	2244	6723	485	485	7	469	3	479	8193	43	12617	20	12680	1	815	20	836	15	149	11	175	33
67	イボソデ		3	1		4	14	68		38	120	7	7	7	7	138		178		178	9	2	11	3		3					
68	マイノソデガイ													1	1	1		4		4											
69	スイショウガイ						1			1				1	1	2															
70	アツソデ																		1		1										
71	ゴホウラ																														
72	クモガイ	6	49	8	9	72	40	399	3	109	551	24	24	11	123	3	137	784	5	952	4	961	114	1	115	6	54	5	65	17	

チ			HA④地区																				HA①地区					地区別 合計							
			リ				ヌ				ル				ヲ				ワ				カ												
II	II上	計	合計	II	III	IV	計	II	III	IV	計	II	II~III	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	II~III	III	計	合計	II	III	III下	IV	計	合計		
1		1	2					1			1										1	1					3							7	
				1			1																				1							1	
								1			1				1		1										2							3	
													1			1										1								1	
16	19	1728	18	11	4	33	61	82	3	146	89	11	257	25	382		9	94	5	108		9	7	10	26	695	4	5	15	9	33	33	3047		
6	1	10	81	7	3	10	10	4	1	15	20	4	57	2	83		11	69		80	1	2		6	9	197			1	1	1	353			
			1				3	2		5	4	1	10	1	16				4	1	5					26			10	6	16	16	81		
			9	2		2		2	1		2	1	7		8											12							23		
21	21	44	4	2		6		2		2	2		3		5	1	4	20	2	27	1	2		1	4	44	1	2	2	5	5	106			
7	9	11																															19		
	1	9					2			2	4		10		14		1	5		6		1		2	3	25							37		
																																		1	
			2										2		2				1		1		1		1	4							7		
7	7	74					7	5		12	7	1	46	1	55		3	11	2	16		1		2	3	86			2	2	2	165			
15	15	159		4	1	5	12	27	1	40	34	14	205	4	257		9	67		76	1	4	1	21	27	405	4	7	9	6	26	26	821		
4	4	94	3	2		5	5	14	4	23	13	5	85	2	105		1	21		22		5	1	4	10	165						366			
													3		3											3							3		
																			1		1					1							1		
53	2	56	2204	20	19	5	44	58	82	5	145	112	24	377	34	547	1	15	97	6	119	1	3	1	29	34	889	3	7	22	13	45	45	4277	
								1			1			1	1	2											3							1	
																																			3
2	2	2																																3	
			1																															1	
1	1	2																																2	
18	20	31																																33	
8	8	18											2		2		1	10	1	12		1		1	2	16							42		
1	1	2					2		1	3									1		1				4								6		
			4									1			1	2		2		2						4								9	
			5																															5	
																																		1	
			1																															1	
			2				1		1						1				1		1				4		1		2	3	3		9		
70	2	74	1432	23	8	1	32	106	96	5	207	208	22	617	25	872	1	24	126	8	159	3	8	10	64	85	1355	22	4	1	27	27	3372		
																																			1
			1											1		1										1								55	
542	542	555					4				4			1		1			3		3				8								672		
103	103	103																																103	
												1		1		2										2								2	
												1				1				2		2				3								3	
			2																																2
			77											1		1										1								79	
			1																															1	
842	842	1038					1		1																1									1040	
			8																															13	
			13				1		1	1			1		2										3									18	
																																			17
			1																																17
																																			1
5	5	6																																6	
			1																															1	
3	5	25					1	1		2	1	2	6		9				1		1					12							37		
			7																															28	
																																		15	
36	40	563	15	11	2	28	47	63	4	114	97	10	285	6	398		39	103	3	145	3	7	9	57	76	761						1720			
736	25	794	14485	170	85	12	267	876	856	21	1753	2056	262	7374	128	9820	4	241	925	61	1231	19	212	145	1025	1401	14472	2	48	22	2	74	37224		
6	6	198					11	23		34	23		2	113	1	139			15	1	16		4	1	4	9	198					534			
			4											1		1										1							6		
														1	1	2											2							4	
			1																															1	
59	2	78	1219	24	11	7	42	114	153	3	270	251	14	497	25	787		15	95	3	113		15	10	17	42	1254	1	6	9	6	22	22	3279	





チ			HA④地区															HA①地区						地区別 合計														
			リ				ヌ				ル				ヲ				ワ				カ															
Ⅱ	Ⅱ上	計	合計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ～Ⅲ	Ⅲ	計	合計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ下	Ⅳ	計	合計						
			3			1	1											1	1							2							5					
3		3	28	1			1	4			4	3		3		6		1	1		1					13	1		1		2	2	67					
			1											1		1										1							2					
																										1								2				
1		1	2											1		1										1							5					
								1			1			1		1										2								2				
1	2	4	10					1			1	2		4		6	1	3	1	5						12	2	2	2	6	6		36					
11	3	18	74	3	4		7	5	6		11	4	1	9		14	12	52		64		2	1	4	7	103	1	1	4	6	6		213					
1		2	6	2			2							1		1	2	2		4					1	1	8						20					
			4										2	3		5			2		2					7							11					
13	1	16	247	8	6	1	15	24	53	6	83	47	17	138	4	206	21	188		5	214		15	2	18	35	553					853						
8	1	9	46	2	2		4	3	9		12	6	1	31	2	40	3	12	1	16		2		3	5	77			1		1	1	150					
			5					1		1	2	1	10		13		2	2	1	5		1	1	1	3	22							35					
																		1		1						1								1				
1		1	29		2		2	1	9		10	2		10	1	13		5	5		2		1	3	33	1				1	1		84					
			6											2		2		1	1						3				1	1			10					
3		3	12					1		1	1		6	1	8		2	6	8						17		1		1	2	2		34					
																		1	1						1									2				
																							2			2	2								2			
																			1	1						1									1			
																		1	1							1									2			
1		1	8			1	1	2	3		5			4		4										10		4	3		7	7		28				
																														1		1	1		1			
			11															2	2					1	1	3								19				
2		2	10	1			1							1		1		2	2						3									16				
																										1									3			
9		10	62	4	4		8	1	2		3		1	6	2	9	4	14	2	20						40		5	5	6	16	16		134				
3		3	5											1		1										1								8				
																			2	2					1	1	4								4			
																		1	1							1									1			
			1																																1			
2		2	14	2	1		3			1	1			3		3		5	5							12								29				
			4	1			1											1	1						1	1	4								24			
14		14	63					6	6	2	14	14	3	51		68	1	17		18		2		3	5	105								211				
																		3	3							3									3			
			6										1		1	2										2									13			
1		1	19	2	1		3		2	2	4	4		2		6	4	12		16						29								54				
																																				3		
			38			1	1	2	5		7	6		20	1	27	2	3		5						40									93			
1		1	3											1		2	3	1		4						6		1			1	1		11				
3		3	101	1	3		4	13	7		20	13	2	62	3	80	2	31	1	34		2		7	9	147								291				
			1																																	1		
			13											1		1										1									14			
			2																																	2		
																			1	1						1										1		
																		1		1						1										1		
1		1	3																																	3		
3		3	79	2	1		3	4	2	1	7	8	1	13	7	29	1	1	3		5				1	1	45								141			
																			1	1						1										1		
								1	2		3							5	1	6					1	1	10									10		
			31		1		1	1	2		3	5		10	1	16	4	2		6						26			1		1	1			78			
			2					3		3	1		3		4			1	1							8			1		1	1			64			
8		8	128	6	2	1	9	7	5	2	14	11		37	1	49	9	44		53		1		1	2	127								285				
1		1	1																																	1		
			6					3	4		7	8		16		24			1	1						35									41			
1		1	44					6	9		15	13		35		48	2	11	1	14		2		1	3	78								162				
														1		1		1		1						2										2		
																																					3	
																																						3
1		1	10					11	8		19	6		11		17		4	4		2		1	3	43										98			
16		19	324	6	6		12	79	62	7	148	105	18	238	4	365	17	47	2	66	1	14	9	30	54	645									1042			







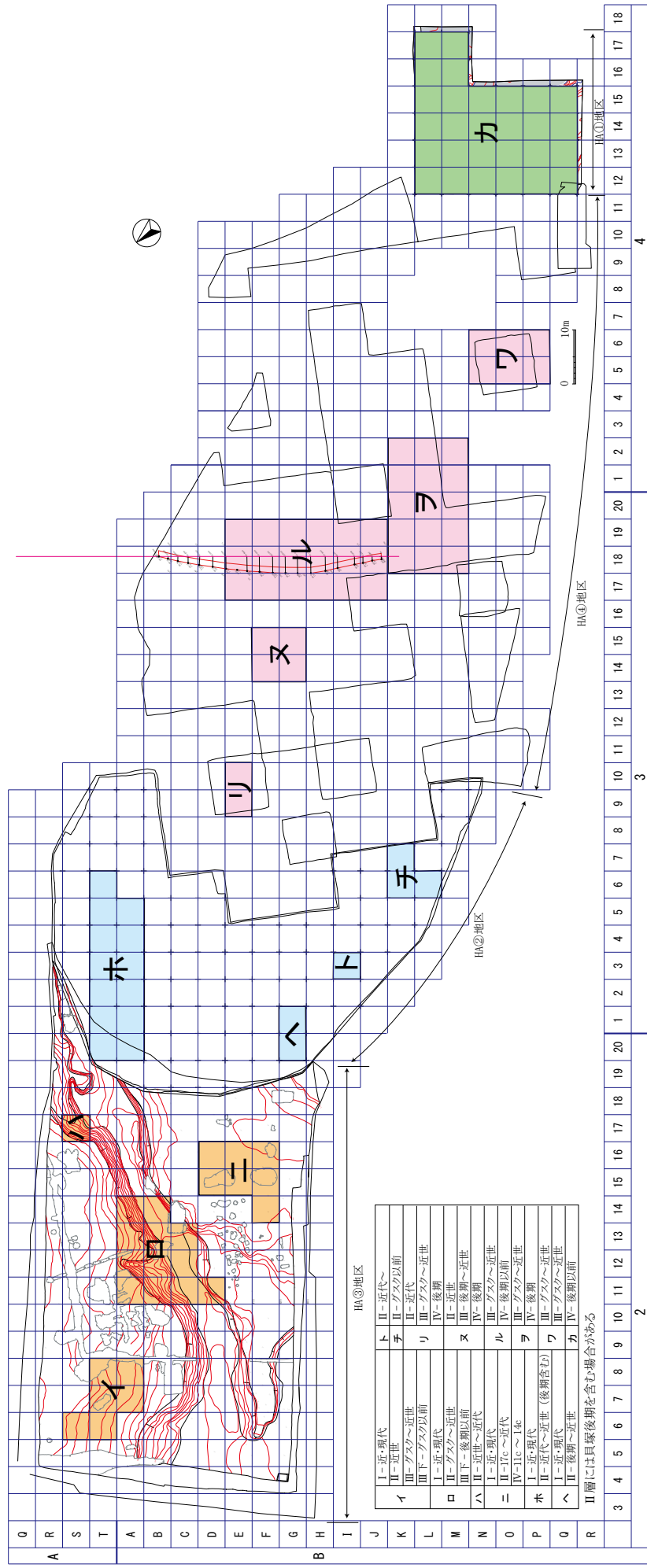
チ			HA④地区																		HA①地区					地区別 合計									
			リ				ヌ				ル				ヲ				ワ				カ												
Ⅱ	Ⅱ上	計	合計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	合計	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	合計				
			6																									7		1	8	8	40		
													1		1												1						1		
			1										1		1											1							3		
																																	1		
4		4	22		1		1	3			3								2	2	1			1	2	8			1	1	1	35			
			2																2	2						2	1	17	18	18		23			
5		5	20					1	1		1	2		3				1	1						5	1	2	3	3		90				
																																1			
			41																									2	45	47	47	126			
													1		1											1	1	12	13	13		25			
1		1	36										1		1											1		5	5	5	44				
																												6	1	7	7	7			
																												1		1	1	3			
			259																													259			
1		1	26									1		1				1	1						2	1	27	28	28		63				
8		9	31	2		2	2		2		1	1		2				1	1						7	16	20	5	41	41	130				
																																	1		
																													1	1	1		1		
			10		1		1											1	1						2							13			
8	1	10	86	1			1		3		3	3	2	12		17		8	8					1	1	30	7	14	17	2	40	40	176		
			1																														2		
			2		3																												3		
2876	44	3014	27688	363	215	40	618	1592	1725	80	3397	3325	454	11182	301	15262	10	532	2389	121	3052	36	345	213	1356	1950	24279	45	162	298	82	587	587	66515	
9		10	223	2	3	1	6	29	23	2	54	29	8	80	4	121		7	54	2	63		2	2	7	11	255	2	4	17	13	36	36	577	
														1		1										1							3		
																																	1		
1		1	3				2	1		3	1					1									4								7		
																																		12	
																													9	9	9		9		
84	2	91	541	24	9		33	37	50	4	91	72	17	249	23	361	1	11	101	5	118			10	6	22	38	641	2	8	21	11	42	42	1558
4		4	6							1	1	1		4		5										6			2	3	5	5	17		
																			1	1						1							4		
3		3	13		1		1		4		4	4	3	9	1	17		1	16	1	18	1				1	41		1		1	1	58		
																																	3		
4		4	49		1		1		4	2	6	2	1	18		21		1	38	3	42			4	4	74	31		1	32	32	207			
																																	1		
														1		1											1		6		6	6	8		
			1																														1		
			3																							1							4		
																										2							2		
21		21	311	59	13		72	25	30	3	58	83	11	147	4	245		1	1		2				2							2			
1		1	1																														1		
			1																	1	1						1						2		
																																	1		
																																	1		
																																		3	
1		1	5						3		3			4		4		1	3		4						11	7	33	16	65	121	121	132	
																											11							16	
53		53	111	4	3		7	1	3	1	5	7	4	15	3	29		3	97	6	106		3		3	6	153	6	40	160	60	266	266	557	
2		2	10		1		1							6	3	9					10					20	10	75	107	106	298	298	339		
37		37	45		3		3		1		1	1		2		3				23	2	25		2		3	5	37	11	45	132	193	381	381	478
8	3	12	27					1		1									1	1							2		17	3	25	45	45	132	
																																		2	
																																		1	
																																		2	
3		4	31					2	1	1	4	2		9		11								1		1	16		1	1	2	4	4	53	
20		21	185	1		1	2		4	1	5	6	1	24	6	37			40	2	42		1			1	87	10	32	22	64	64	389		
137	1	142	1057	26	9	6	41	16	55	6	77	43	12	200	29	284		19	260	22	301	3	3	1	41	48	751	25	96	193	152	466	466	2580	
			1																															14	
																																		2	
																													2	3	5	5		5	
																											1							1	
																																		1	
																																		2	18

第130表-5 平安山原A遺跡から得られた貝類遺体の同定標本数

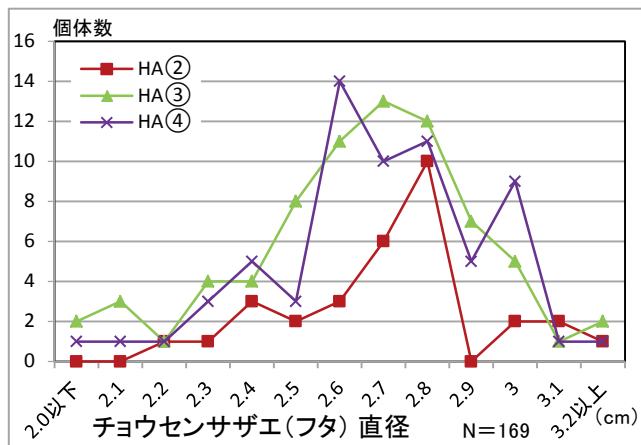
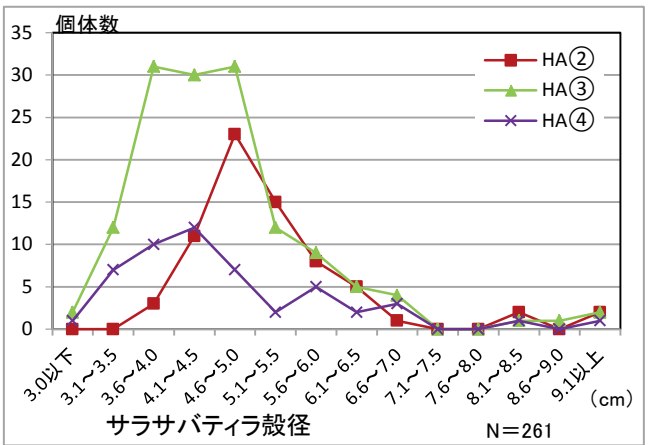
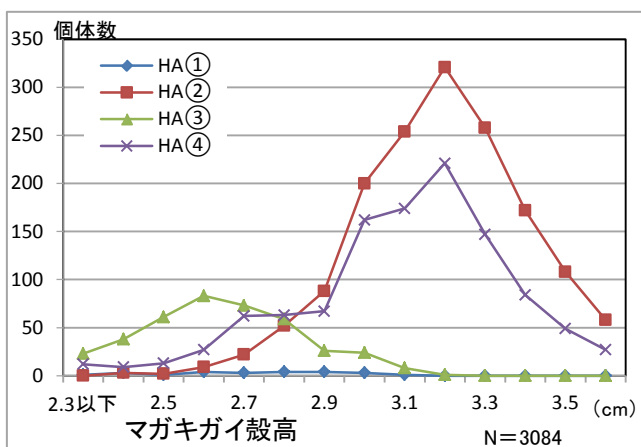
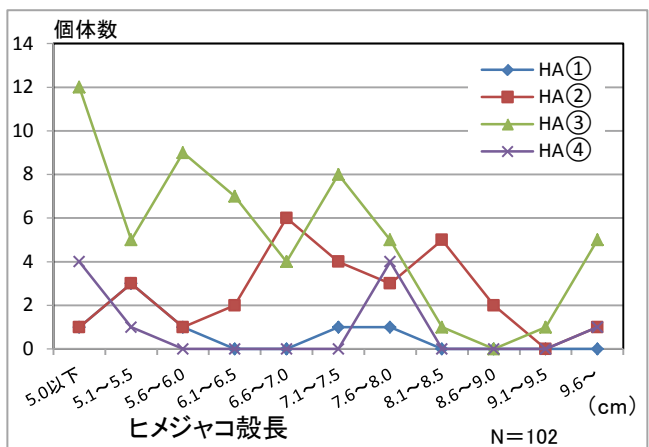
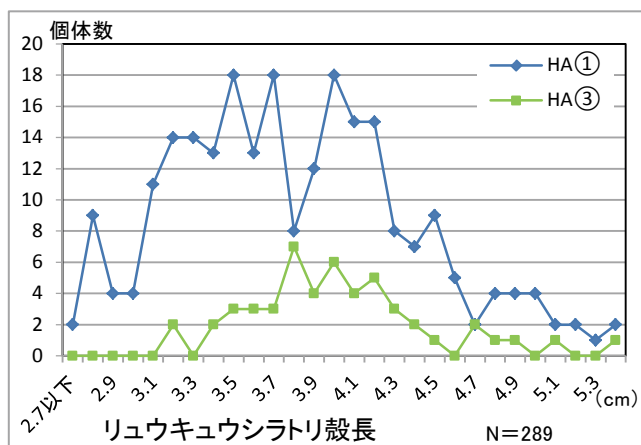
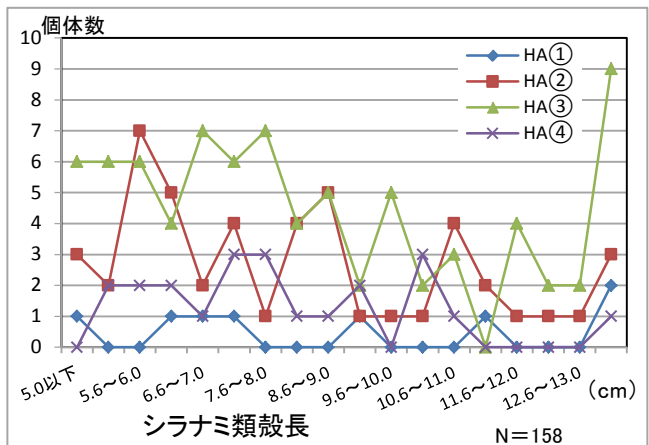
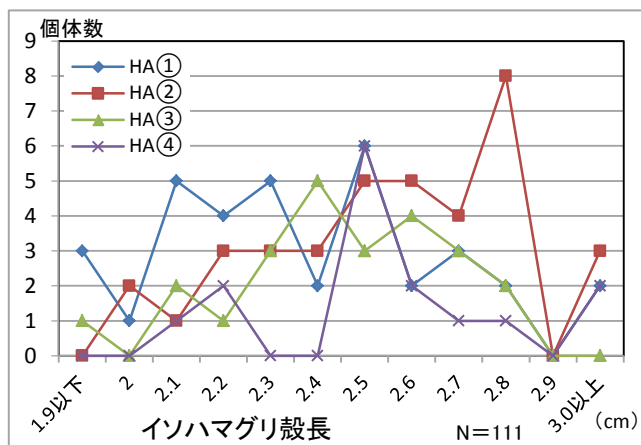
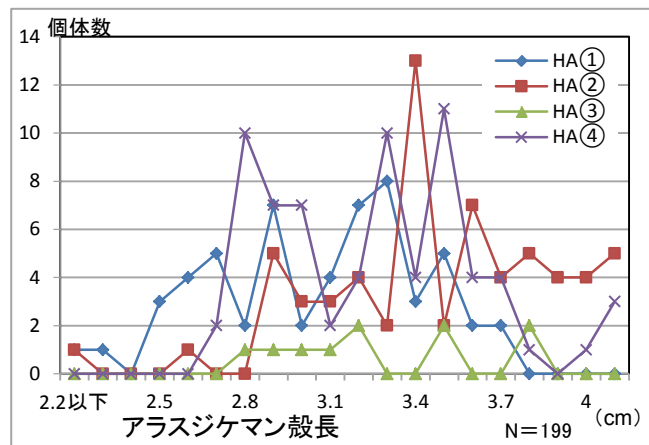
地区 区 層	貝種	HA③地区																	HA②地区												
		イ					ロ					ハ		ニ					合計	ホ				ヘ			ト				
		I	II	III	III下	計	I or 流路	II	III	III下	計	II	計	I	II	IV	計	I		II	II上	計	I	II	II上	計	I	II	II上	計	I
45	シラナミ類	4	54	5	6	69	16	126	1	21	164	28	28	1	34	2	37	298	2	318	1	321	29	29	18	1	19				
46	ナガジャコ																		31	31	3	3									
47	ヒレジャコ		5	1		6	7	27		9	43	7	7		6		6	62													
48	ヒメジャコ	2	39	2	2	45	9	58		17	84	8	8	7	32		39	176		161		161	25	1	26	2	10	12	1		
49	シャコガイ類	3	26	9	13	51	22	101	3	21	147	27	27	4	26	1	31	256	2	483		485	49	49	2	22	4	28	5		
50	ヒレジャコ?		1			1												1													
51	シャゴウ		14	2	1	17	3	19	1	15	38	8	8	1	3		4	67		82		82	9	9							
52	リュウキュウバカガイ		4	1	1	6		9		6	15				12		12	33		29		29	18	18	7		7				
53	タママキ		1			1		1		1				1	3		4	6		1		1									
54	ユキガイ																														
55	リュウキュウアリソ																														
56	イソハマグリ	1	17	18	16	52	3	6		5	14				21	1	22	88	1	173		174	22	22	9		9		1		
57	クチバガイ類							1			1							1													
58	ナミノコマスオ		1			1				1	1							2				1	1								
59	リュウキュウナミノコ			1		1				1	1							2		1		1									
60	ニッコウガイ																			4		4	2	2							
61	ヒメニッコウガイ														1		1	1		1		1									
62	ミガキヒメザラ									1	1							1													
63	アマサギ																														
64	リュウキュウシラトリ	5	48	4	7	64	30	381	2	49	462	15	15	7	147	6	160	701	1	660	1	662	196	196	14	100	3	117	3		
65	イチョウシラトリ類							1			1							1													
66	ヌノメイチョウシラトリ																						1	1							
67	サメザラ							3			3				1		1	4		12		12				1		1			
68	モチツキザラ						1	3			4				1		1	5		8		8	1	1							
69	サメザラモドキ																														
70	リュウキュウマスオ	4	22	7	8	41	38	979	2	156	1175	30	30		26	1	27	1273	1	963		964	58	1	59	22	1	23	5		
71	マスオガイ	8	99	22	11	140	50	1068	4	110	1232	15	15	4	169	8	181	1568	2	827		829	678	678	5	97	5	107	3		
72	シレナシジミ	1	10	1		12	1	13		2	16	4	4		2		2	34		43		43	1	1	2		2				
73	ヌノメガイ	4	40	21	19	84	40	334		161	535	100	100	4	37	1	42	761	1	1155	2	1158	107	107	1	25	26	10			
74	オオヌノメガイ																														
75	アラヌメガイ			2	1	3	2	23		7	32	1	1		1		1	37	1	239		240	6	6	1	1	2				
76	カノコアサリ																														
77	ホソズジイナミ	1	29	4	6	40	9	90		34	133	3	3	1	38		39	215	1	244		245	1	93	1	95	4	17	1	22	3
78	アラスジケマン	1	24	3	5	33	5	67	1	11	84				1	23		24	141	1	335	1	337	110	110	2	12	14	1		
79	ユウカゲハマグリ	2	25	3	6	36	3	34	2	9	48	2	2	3	104	1	108	194		140		140	45	45	10	61	1	72	2		
80	ウスハマグリ類																														
81	ケショウオミナエシ		1			1												1													
82	オイノカガミ		1			1		2			2				1	3		4	7		15		15	5	5	2	1	3			
83	ダテオキシジミ																														
84	オキシジミ類1																														
85	リュウキュウアサリ		1			1				1	1							2		15		15	2	2							
86	ヒメアサリ		4		1	5	1	14		2	17	2	2		10		10	34		21		21	4	4	4		4		4		
87	スタレハマグリ	5	72	6	5	88	1	19	1	3	24	1	1		37	4	41	154		31		31	15	15	8		8		1		
88	トゥデュマリハマグリ																			1		1									
89	ハマグリ類似種								1		1				1		1	2		1		1									
90	マルスダレガイ科1																														
91	マルスダレガイ科																														
92	マルスダレガイ科2																														
93	オミナエシ																														
94	レモンハマグリ?																														
95	マルオミナエシ																														
96	フジイロハマグリ?																														
97	オキシジミ類2																			1		1									
98	トマヤガイ						1				1							1													
二枚貝合計		49	722	142	128	1041	304	3781	28	738	4851	302	302	41	978	35	1054	7248	18	7787	9	7814	2	1779	5	1786	57	513	20	590	48
巻貝類・二枚貝合計		124	1588	383	336	2431	1089	10560	67	3783	15499	1073	1073	67	2087	52	2206	21209	90	30030	40	30160	33	3603	34	3670	99	891	44	1034	142
区(イ~カ)別合計		2431					15499					1073		2206					21209	30160				3670			1034				
地区(HA③~①)別合計		21209																	40807												

チ			HA④地区																		HA①地区					地区別 合計								
			リ				ヌ				ル				ヲ				ワ				カ											
II	II上	計	合計	II	III	IV	計	II	III	IV	計	II	II-III	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	II-III	III	計	合計	II	III	III下	IV	計	合計	
14		14	383	16	15	6	37	37	88	4	129	137	4	447	29	617	19	88	9	116	15	1	14	30	929	8	16	5	29	29	1639			
			34																														35	
				2			2	1	1		2	6	2	15	1	24			3		3				31		3		3	3	3	96		
9	1	11	210	11	2	3	16	14	14	1	29	7	7	81	17	112	4	24	3	31	1	5	6	12	200	1	3	18	7	29	29	615		
51		56	618	18		3	21	46	37	5	88	36	14	75	6	131	1	11	53	2	67			1	1	308		3	3	6	6	1188		
																																1		
5		5	96	1	3	1	5	10	8		18	22	2	49	3	76	2	13	1	16				3	3	118	2	1	2	1	6	6	287	
28		28	82	5	2		7	2	6	1	9	2	1	29	6	38	3	53	2	58	1			5	6	118	19	30	63	52	164	164	397	
				1	1		1																		1		6	5	19	30	30	38		
																			2		2				2							2		
1		1	1																													1		
29	4	34	239	5	4		9	4	8	2	14	15	4	19		38	1	11	60	2	74	2		7	9	144	8	23	43	39	113	113	584	
												1				1			1	1					2							3		
																																3		
														1		1									1		1			1	1	5		
5		5	11					1			1	1							2		2				4			4		4	4	19		
2		2	3																1		1				1			2	9	11	11	16		
																																1		
																			1		1				1							1		
1627		1630	2605	36	20	14	70	65	86	20	171	237	28	316	29	610	54	401	49	504	3	8		27	38	1393	122	279	702	846	1949	1949	6648	
													1			1									1				6	6	6	8		
								1			1														1			1		1	1	3		
								1			1		1	7		8			3		3				12	1		1		2	2	31		
3		3	12	1			1		3		3	3		5		8			4		4				16	1		1	2	2	35			
								1			1			1		1								1	1	3						3		
108		113	1159	13	9	3	25	33	186	27	246	64	69	483	11	627	1	50	215	13	279	2		17	19	1196	6	40	70	58	174	174	3802	
145	2	150	1764	55	20	4	79	27	222	20	269	97	82	425	25	629	25	304	16	345	8	4		53	65	1387	20	56	131	158	365	365	5084	
1		1	47	1			1	3	3		6	7	3	16		26			4	1	5	1			1	39	3	1		4	4	124		
99	2	111	1402	38	18	1	57	114	239	25	378	204	58	940	37	1239	1	67	475	36	579	9	10	11	88	118	2371	8	5	15	3	31	31	4565
													1			1									1							1		
6		6	254	4	1		5	12	23	1	36	24	11	174	6	215		4	68	1	73	1	4	1	14	20	349					640		
80	5	88	450	14	3		17	26	47	16	89	123	39	428	19	609	51	353	9	413	9	27	3	139	178	1306	5	30	61	109	205	205	2176	
37	2	40	501	3	14	4	21	41	35	2	78	88	14	139	6	247	1	23	188	15	227	10	2	12	24	597	7	35	99	59	200	200	1439	
189		191	448	14	8	8	30	4	20	10	34	9	3	46	12	70	8	265	36	309	2		4	6	449	22	150	512	616	1300	1300	2391		
												1				1									1		1	1	1	3	3	4		
7	1	8	31				3	7		10	4			3	2	9	2	26	3	31	1		3	4	54	6	16	28	30	80	80	172		
																										3	9	32	117	161	161	161		
																																1		
								1	4	2	1	7	2		5	1	8	3	16	3	22				38	3	3	8	14	14	71			
9	1	10	39	1	1	1	3	1	5	2	8	3	3	18	1	25	1	39	2	42	1		5	6	84	1	20	23	46	90	90	247		
13		14	68	4		3	7	2	9	1	12	8	1	25	3	37	1	17		18					74	9	18	13	40	40	336			
												2		1		3									3							4		
1		1	2									1	1	1		3	1	1	1	3					6							10		
																												1	2	4		7	7	7
																													3	3	3	3		
																			1		1				1							1		
																												1	8	1	10	10	10	
																																1		
2857	24	2929	13119	363	162	59	584	564	1230	160	1954	1356	407	4526	287	6576	6	396	3380	253	4035	34	113	33	487	667	13816	300	1103	2581	2881	6865	6865	41048
5733	68	5943	40807	726	377	99	1202	2156	2955	240	5351	4681	861	15708	588	21838	16	928	5769	374	7087	70	458	246	1843	2617	38095	345	1265	2879	2963	7452	7452	107563
		5943	40807				1202				5351					21838				7087				2617		38095			7452		7452	107563		
																																	38095	
																																	7452	
																																	107563	





第188図 平安山原A遺跡 貝類遺体分析地区名



第189図 優占種のサイズ組成変化

## 第3節 平安山原A遺跡より出土した人骨について

藤田 祐樹（沖縄県立博物館・美術館）

### はじめに

平安山原A遺跡では、ある程度のまとまりを持って出土した12ユニットの人骨（1号～12号）のほか、部分骨が各所から発見された。まとまりを持った12ユニットの人骨には、比較的保存がよく形態学的に同一個体と認識できる人骨（例えば5号、11号、12号）もあるが、多くは断片的で個体識別は難しい。本稿では、部位の重複や性別・年齢の相違など、明らかに別個体と認識されるものが含まれる場合には指摘するが、積極的に別個体であることを示唆できない場合には、基本的に同一個体に属すると考えることにする。

個体骨は、破損が著しく、細片化していたため、頭骨と主要な四肢骨は可能な限り接合を試みた。計測可能な状態まで頭骨を復元できたものが3点（5号、7号、12号）、顔面部（3号）のみを復元できたものが1個体ある。椎骨や肋骨にも接合できそうな細片が認められたが、作業時間の都合で実現できなかった。復元した結果、性別や年齢を推定できる場合にはこうした情報と、病変等を記載した。

接合に際して、竹串や歯ブラシで砂を物理的に除去し、破断面にこびりついた砂は必要に応じてアルコールを少量塗布して洗浄した。破断面の接着には、アセトン可溶性の接着剤Butvar（Polybinyll Butyral Resis, Eastman Chemical Company, USA）を用いた。馬場（1991）の定義に従って計測を行い、計測項目の番号（Martin No.）を表に記した。埋葬状態は、実測図と残存する骨片の状態に基づいて記載し、12号人骨については詳細な現地確認を行った。

まとまりのある12ユニットの人骨の他に、断片的に出土した部分骨が遺物収蔵コンテナ2箱分程度ある。保存のよい長管骨なども含まれるが、分析時間と紙面の都合により、本稿では一覧表への記載のみにとどめた。いずれも発掘段階で人骨と認識されたものだが、中には人骨であるか判断が難しい小破片も含まれている。これらについては、一覧表で分類群「不明」とした。

特筆すべきものとして、下顎切歯4本の抜歯が確認できた3体（うち1体は左側切歯2本の抜歯があるが右側は破損で確認できない）と、刃物共伴個体埋葬人骨（12号）がある。後者は20代前半と考えられる成人女性で、刃渡り16.4cmの刀子を伴っていたが、この刃物は左腹部に生前に刺されたものと考えられる。以下では、12ユニットの人骨の特徴を記載するが、特に刃物共伴の12号人骨は興味深い事例と考えられるために詳細に記載する。

### 1号人骨（人骨01）

成人の部分骨である。脳頭蓋の頭頂部付近（前頭骨の一部と左右の頭頂骨の一部）と後頭部付近（後頭骨と側頭骨の一部）、下顎骨の歯列部分、右上腕骨の骨幹部、右鎖骨、足根骨の一部などが保存されている。性別の判定は難しいが、鎖骨はかなり太く、肋鎖靭帯圧痕が発達している。上腕骨の骨幹は左右には細いが前後径が大きく、三角筋粗面の一部を観察する限り発達しているようである。歯列はほとんど残っていないが、下顎の右の切歯二本は歯槽部が閉鎖しており、抜歯の可能性はある。左の切歯部は破損しており確認できない。右の臼歯列の歯槽部は多孔質で退縮が認められ、歯周病による歯の脱落があったらしく第二小臼歯から第三大臼歯まで歯槽部が変形しているか、閉じている。左の犬歯から第一大臼歯は残されており、咬耗は中程度である。下顎切歯4本の抜歯は、琉球列島の先史人骨では女性に多く認められることから、本個体も女性である可能性が高い。

### 2号人骨（人骨02）

成人の部分骨で後頭骨、下顎骨の左側、軸椎、左膝蓋骨、左大腿骨の骨幹部（1/2程度）、右腓骨骨幹部（1/2程度）が残存している。下顎第三大臼歯が完全に萌出し、かつ、ほぼ未咬耗であることから若い成人と推測される。性別の判定は困難だが、下顎体は華奢で女性的な印象を受ける。注目すべき点として、下顎骨の切歯部分が左右とも歯槽部が完全に閉鎖している点である。残存する左小臼歯2本が健康であることを考えると、齶蝕などによる脱落とは考えにくく、生前に抜歯された可能性が高い。右側の顎骨は破損により確認できないが、おそらく下顎切歯4本の抜歯が行われたと推測される。

### 3号人骨（人骨03）

成人の部分骨で前頭骨から顔面部、右頭頂骨の一部、後頭骨の一部、左側頭骨の一部など頭骨破片のほか、下顎骨、

左肩甲骨の関節部、右上腕骨の骨幹破片、手部の骨少数が残存している。性別の判定は困難であるが、下顎骨の骨体は華奢で女性的な印象をうける。わずかに残る上腕骨も太くはない。左下顎第三大臼歯がほぼ未咬耗で萌出しており、右上顎第二大臼歯の咬耗もわずかであることから、若い成人と推定される。下顎骨の切歯4本が脱落して歯槽が閉鎖しており、抜歯と考えられる。残存する下顎小臼歯にはわずかに歯石の付着が認められるが、齶蝕は確認できない。

#### 4号人骨（人骨04）

成人の部分骨で、左下顎骨の一部、右鎖骨、右上腕骨、右撓骨、右尺骨、手部の骨数点、右膝蓋骨、左脛骨の骨幹、左肘骨の骨幹、左右の足部の骨一部が残存している。右腕の骨が頑丈で関節も大きいことから男性と考えられ、四肢骨は成人サイズながら撓骨の遠位骨端が未癒合であることから20歳前後と推測される。左上顎の中切歯も咬耗がわずかである。

#### 5号人骨（人骨05）

成人の頭骨、下顎骨、左右の肩甲骨、左上腕と尺骨、右撓尺骨の一部（1/3程度）細片化した寛骨と仙骨の一部、足部の骨が少数ある。大坐骨切痕の一部が残存しており、男性と判定される。四肢骨も骨幹が太くしっかりしており、関節も大きく男性的である。年齢は恥骨結合部が右側のみ残存しており、20代後半から30代後半と推測される。歯も右第三大臼歯のみ未萌出で、他の歯はすべて萌出しており、こうした年齢観と矛盾しない。咬耗は、Lovejoy (1985)の基準で上顎がE～F、下顎がG-Hである。上顎切歯と犬歯は死後消失で歯槽開放しているが、上顎右中切歯のみ歯根が残存し、かつ軽度の咬耗が認められることから、この歯は生前に折れ、歯根が歯肉から露出していたと考えられる。下顎の歯は全て残存している。臼歯列には上下顎ともエナメル質減形成が認められ、下顎の切歯と犬歯には歯石が付着している。齶蝕は認められない。

#### 6号人骨（人骨06）

複数体の部分骨が混入しているが、全てが断片的であり、個体識別をすることは困難である。部位の識別できる骨としては、右の撓骨の一部が2個体分、腓骨、中足骨などがある。撓骨はいずれもかなりしっかりと筋付着部も明瞭で男性的な印象をうける。断片的であるが、部位の重複があり、別個体が混入していることは疑いない。さらに腓骨の骨幹部（3cm程度）は華奢で、上述の撓骨と同一個体とは考えにくい。中足骨については形態的に個体を議論できない。

#### 7号人骨（人骨07）

成人の頭蓋骨、右尺骨と手の一部、右の脛骨が保存されている。頭蓋骨は前頭骨の眉間部が破損消失している以外は、ほとんど残っている。短頭、低顔傾向があり、琉球列島の先史時代人に一般的な特徴が見受けられる。

#### 8号人骨（人骨08）

成人頭骨の後頭部と、前頭骨を除く顔面部が残存している。全体的に華奢で、乳様突起も小さいことから女性的な印象をうけるが、性判定は難しい。歯は左右とも犬歯、第一小臼歯、第一・二大臼歯が残存しており、全ての歯にエナメル質減形成が認められる。失われた歯は全て歯槽が開放しており、右の第三大臼歯も歯槽開放していて萌出していたことがわかる。左側は破損により確認できない。

#### 9号人骨（人骨09）

成人の頭骨（後頭部）と、細片化した体肢骨、体幹骨がある。後頭骨は縫合線が内板・外板とも開放していて比較的若い成人と考えられるが、断片的であり、詳しい情報はわからない。体幹・体肢骨も同様である。同一個体に属するかどうかは、形態的には否定も肯定もできないが、出土状況の実測図では肋骨が解剖学的位置を保っているように並んでおり、頭骨との位置関係もおおむね解剖学的位置に近いと捉えられる。右肩甲骨の位置はやや乱れているが、やはり同一個体の一部が少し動いたと考えることができ、したがって出土状況からは個体骨とみなすことも可能である。

明らかな別個体として、乳児の上腕骨（全長67.7mm）が1点混入していた。

## 10号人骨（人骨10）

幼児の個体骨で、細片化した頭骨と遊離歯、左鎖骨、左撓骨、大腿骨片、肋骨片、尺骨片、椎骨片など各部の骨があり、部位の重複もなくサイズも似通っていることから同一個体と推定される。全体に破損が著しいが、体幹骨や上肢骨の破片が比較的多く、下肢骨片は少ない。出土状況の実測図を見ると、頭に隣接して肋骨が並び、さらに前腕の骨と思われる二本の長管骨が認められる。頭位を南東にして、仰臥位にあるように見える。

遊離歯は、上顎の左乳中切歯、左犬歯、左右第二乳臼歯、左第一臼歯（永久歯）の形成途中の歯冠、下顎の左右の乳臼歯と左右の第一大臼歯（永久歯）の形成途中の歯冠がある。第二級臼歯は上下顎ともほぼ未咬耗であり、また、第一大臼歯の歯冠がかなり形成されていることから、Ubelaker (1978) の基準で2歳±8ヶ月と判定される。

## 11号人骨（人骨11）

伏臥屈葬でほぼ全身の骨が保存されており、疑いようのない個体埋葬である。左右の上顎骨から左頬骨、下顎骨の大部分、そして体幹のかなりの部分が保存されているが、骨端の破損により全長を計測できる長幹骨はない。四肢骨はいずれも華奢で関節部が小ぶりであることから女性と考えられる。左の第三大白歯が上下とも萌出しており、成人であるが、咬耗はあまり進んでいない。右の第二、第三大白歯から後ろは破損消失しているが、その他の歯はすべて保存されている。全体的に歯石がわずかに付着し、左右とも上下切歯と犬歯にエナメル質減形成が認められる。齲蝕はないが、左上第二切歯はソケットが拡大しており、歯周病を患っていたと推測される。

## 12号人骨（人骨12）

成人女性の個体埋葬である。上下の第三大白歯が萌出しているが咬耗がほとんど認められず、腸骨翼や大腿骨頭の骨端線がわずかに残ることから、20代前半と推測される。身長は大腿骨長をピアソンの式にあてはめて、153.6cmと推定された。骨体は太くないが、粗線や上腕筋付着部が発達し、前腕・下腿部の骨間縁が発達する。右下顎骨頭に軽度の顎関節症が認められ、左右下顎第2・3大白歯の歯冠部、右下顎第2大白歯、左第2大白歯頰側に、それぞれC1段階の齲蝕が認められる。さらに左右下顎犬歯に3本のエナメル質減形成があり、Massler et al (1941) の基準で3.5～4歳、4.5～5歳、5.5～6歳に成長阻害となるような状況だったようである。

楕円形の土坑墓に埋葬されているが、人骨の解剖学的位置関係は部分的であり、白骨化の過程で遺体が埋葬（あるいは再葬）されたことは疑いない。脊椎と肋骨、下肢の膝関節、足部などはそれぞれ関節していたが、仙骨と寛骨が大きく異なる位置から出土したり、頭骨と頸椎もまったく異なる位置関係にあるなど、人骨は全体に大きく動いており、埋葬中にこのような移動が生じるとは考えられない。右尺骨や左足部が全て欠損していることも、埋葬ないし再葬の過程で取りこぼされたと考えれば説明できる。

共伴の刀子は、刃渡り16.4cmであり、刃部を上にして、第一腰椎の左横突起部分を破碎して、腹側から背側に貫通していた。椎骨の保存はよいが、第一腰椎の左横突起は半碎されており、ここに刀子が位置している。単なる副葬品が埋葬の過程でこのような位置関係になるとは考えにくく、遺体に刺さっていたものと推測するのが妥当である。脊椎は関節した状態であったことから、白骨化の過程で椎骨周辺に軟部組織が残っている状態で埋葬されたが、問題の刀子はこうした軟部組織と骨にしっかりと食い込んでいたために位置関係が動かなかつたと考えれば説明できる。

刀子の位置は生体では左腹部で肋骨の直下にあり、刃部を上、腹から背に向かって刺さっていたことになる。ちょうど肝臓をつらぬく位置であり、この傷が死因となったとしても不思議ではない。

## まとめ

断片的な人骨が多く、形態学的に議論できることは限られている。しかしながら、下顎骨が保存される1～3号は、いずれも下顎切歯4本の抜歯が行われている。琉球列島ではこれまでグスク時代以後の抜歯例は知られていないことを考えると、この3体は先史時代の集団に属する可能性が高い。また、特に、下顎切歯4本の抜歯は、沖縄貝塚時代後期の女性個体で多く知られているが（片桐ほか，2007；小橋川ほか，2009；徳嶺ほか，2009）、縄文時代晩期の仲宗根貝塚でも1例のみ報告されている（藤田 & 比嘉，2012）。頭骨を復元できた5号と7号は、いずれも短頭、低顔傾向があり、こうした特徴も琉球列島の先史時代人によく見られる特徴である。

これに対し、刃物を共伴する女性は、鉄器を伴うことから中世以後であることは間違いなさだろうが、形態学的にも中世以後とみなして矛盾しない特徴が認められる。すなわち、長頭、歯槽性突顎であり、これらの形態的特徴は琉球列島ではグスク時代以後の集団に一般的である。

したがって、本遺跡は、先史時代とグスク時代以後の両方において埋葬地としても利用されていたようである。埋葬当時の状況をとどめる人骨は少ないが、部分的に解剖学的位置関係を保った出土状況は、埋葬人骨が後世の攪乱によって乱されたことを推察させる。周辺から出土した多数の断片的な人骨は、こうした攪乱プロセスによって散乱、埋没していったものかもしれない。そうだとすれば、この遺跡には今回報告した12ユニットより本来はずっと多くの埋葬人骨があったことになる。

埋葬状況が確認された人骨の中で、特筆すべきは刃物共伴人骨(12号)である。先述のとおり刀子で左腹部を前方から刺されており、この刺傷が死因となった可能性は高い。刀子がある以上、こうした用途に使用されることには不思議はないかも知れないが、20代の女性が刺殺された理由や、当時としては貴重品であろう刀子がなぜ使用後に持ち去られず現場に残されたのか、そして、白骨化の途中で埋葬された理由は何かなど、数多くの疑問が残る。発掘された情報からこうした謎を解明するには幾多の推論を重ねなければならないため差し控えるが、このうち刀子が抜き去られなかった理由については、例えば骨や靭帯に深く刺さってしまい事件後短時間で抜くことが困難であったと考えることもできる。いずれにせよ、集落に程近い場所で、こうした事件が生じた事実は、グスク時代の社会環境を考えるうえで興味深い事例のひとつとなることだろう。

<参考文献>

馬場悠男 (1991) 人類学講座別巻1 人体計測法Ⅱ 人骨計測法. 人類学講座編纂委員会編, 雄山閣出版.

藤田恒太郎, 桐野忠大, 山下靖雄. (1995) 歯の解剖学 第22版. 金原出版株式会社.

藤田祐樹, 比嘉清和. (2012) 東京大学総合研究博物館所蔵の仲宗根貝塚出土資料. 沖縄市郷土博物館紀要あやみや 21: 31-36.

片桐千亜紀, 小橋川剛, 島袋里恵子, 土肥直美. (2007) 具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理. 沖縄県立埋蔵文化財センター紀要 沖縄埋文研究 5: 1-24.

小橋川剛, 片桐千亜紀, 徳嶺里江, 本村麻里衣, 大城歩, 天願瑞笑, 菅原広史, 土肥直美, 米田稷. (2009) 沖縄県読谷村大当原貝塚出土人骨について. 沖縄県立埋蔵文化財センター紀要 沖縄埋文研究 6: 27-40.

徳嶺里江, 片桐千亜紀, 小橋川剛, 本村麻里衣, 大城歩, 天願瑞笑, 菅原広史, 土肥直美, 米田稷. (2009) 沖縄県座間味村古座間味シル地区砂丘地出土人骨について. 沖縄県立埋蔵文化財センター紀要 沖縄埋文研究 6: 41-52.

Lovejoy C. O. (1985) Dental Wear in the Libben Population: Its Functional Pattern and Role in the Determination of Adult Skeletal Age at Death. *American Journal of Physical Anthropology* 68:47-56.

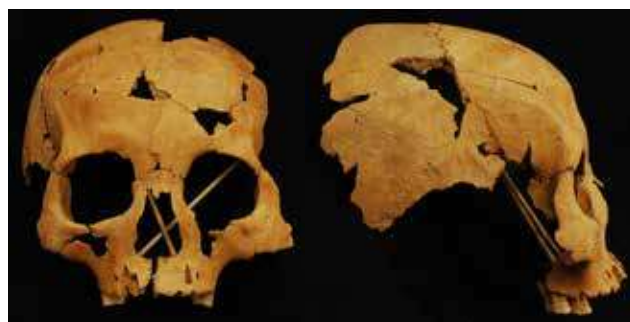
Massler M., Schour I., Poncher H. G. (1941) Developmental pattern of the child as reflected in the calcification pattern of the teeth. *Am. J. Dis. Child.*, 62: 33-67.

Ubelaker D. H. (1978) *Human skeletal remains: Excavation, analysis, interpretation.* Chicago: Aldine.

William M Bass. (1987) *Human Osteology -A laboratory and field manual-* 3rd edition. Missouri Archaeological Society.



図版 131 11号人骨の出土状況



図版 132 3号人骨の頭骨 (左:正面、右:左側面)



図版 133 7号人骨の頭骨（左から正面、左側面、上面）



図版 134 11号人骨の頭骨（左から正面、右側面、上面）



図版 135 12号人骨の頭骨（左から正面、左側面、上面）



図版 136 12号人骨の出土状況

ピットの中でまとまっており、脊椎や膝関節などは関節しているが、仙骨から骨盤が大きくはずれ、頭骨と脊椎も完全に離れるなど、ピット内の自然の移動では考えられない位置関係にある。



図版 137 刀子と椎骨の位置関係

脊椎の腹側左前方から撮影しており、刀子は写真右側が先端、左下が柄である。手前にある第二腰椎の横突起と比較すると、第一腰椎の横突起が刃物によって破碎されていることがわかる。



図版 138 刃物を伴う成人女性  
腹部に横たわる刀子は、腰椎の横突起を破碎して食い込んでいる。



第 131 表 平安山原 A 遺跡出土人骨の四肢骨計測値

	Unit No.	1 号		4 号	5 号	7 号		11 号		12 号	
		右	右	右	左	右	右	左	右	左	
上腕骨	1	最大長		293	279					301	299
	4	下端幅		62.16	64.26		(48)	50.1		48.65	(46.57)
	5	中央最大幅	22.98	23.46	22.65			18.06	18.66	19.31	19
	6	中央最小幅	13.63	16.44	19.02			14.56	14.86	13.46	14.32
	7	最小周	58	60.5	66.5			52.3	53	53	52
	7a	中央周	63	64.5	68			54	57	56	54
	6/5	体断面示数	0.59	0.70	0.84			0.81	0.80	0.70	0.75
	7/1	長厚示数		0.21	0.24					0.18	0.17
尺骨	1	最大長		(250)	251						240
	2	生理長		(220)	224						212
	3	最小周		37	36			30.5	32		31
	11	体矢状径		13.12	14.55			10.43	11.05		9.6
	12	体横径		15.44	17.21			15.73	16.65		13.92
	3/2	長厚示数		0.17	0.16						0.15
	11/12	体断面示数		0.85	0.85			0.66	0.66		0.69
橈骨	1	最大長		222		(240)				226	226
	2	生理長		216						216	217
	3	最小周		37		46	36	36	36	32	33
	4	体横径		16.94		17.67	13.85	14.8		14.62	14.78
	5	体矢状径		10.58		13.33	11.04	10.36		10.4	10.3
	5(6)	下端幅		33.92		(34)				29.74	2973
	3/2	長厚示数		0.17						0.15	0.15
	5/4	体断面示数		0.62		0.75	0.80	0.70		0.71	0.70
大腿骨	1	最大長								416	416
	2	全長								416	(414)
	6	体中央矢状径					24.89	24.63		26.89	26.09
	7	体中央横径					24.42	24.15		22.14	23.39
	8	体中央周径					77	75		78	77
	9	体上横径					28.43	26.56		28.57	30.37
	10	体上矢状径					22.97	22.59		21.32	21.45
	18	頭垂直径									38.92
	19	頭矢状径									38.47
	20	頭周径									122
	8/2	長厚示数								0.19	0.19
	6/7	長厚示数					1.02	1.02		1.21	1.12
	10/9	体上断面示数					0.81	0.85		0.75	0.71
(6+7)/2	頭丈示数								24.515	24.74	
脛骨	1	最大長								339	342
	8	中央最大径					25.88	25.66		26.77	26.47
	8a	栄養孔位最大径					29.01	29.87		28.79	28.18
	9	中央横径					18.25	18.88		17.32	17.92
	9a	栄養孔位横径					19.49	20.11		17.45	18.15
	10	骨体周					68.5	68.5		69	71
	10a	栄養孔位周					78	80		75	76
	10b	最小周					63	64		64	64
	9/8	中央断面示数					0.71	0.74		0.65	0.68
	9a/8a	栄養孔位断面示数					0.67	0.67		0.61	0.64
腓骨	1	最大長									
	2	中央最大径					14.27	14.77			
	3	中央最小径					9.48	9.02			
	4	中央周径					40	38.5			
	3/2	中央断面示数					0.66	0.61			

括弧つきの数字は推定値

最大長が計測不能の場合には、形態的特徴から中央位を推測して中央位での計測項目を参考値として計測した

第132表 平安山原A遺跡出土散乱人骨一覧

No.	グリッド	層・遺構	部位	分類群	年齢	残存部位					破片数	備考		
						近位	近位	近位	近位	近位				
						頭骨	頸骨	腕骨	手骨	指骨	趾骨	全体		
034	H03	II層	尺骨	ヒト	A	0	1	1	0	0	2	1	20	近隣埋合芯
035	H01	II層 (5号人骨周辺)	大腿骨	ヒト	Y	0	1	1	0	0	3	1	1	
035	H01	II層 (5号人骨周辺)	大腿骨	ヒト	A	0	1	1	0	0	3	10	1	
044	H3	II層	大腿骨	ヒト	A	0	1	0	0	0	1	1	1	
045	H4	II層	大腿骨	ヒト	A	0	1	0	0	0	1	1	1	
53	F9 F10 GR G10	002/ISD O上層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	骨病変で変形か?
57	H10	遺構埋合時	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
116	H4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
117	H4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
118	G4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
119	G4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
120	G4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
121	G4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
122	G4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
123	H4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
124	H4	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
125	G3	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
126	G3	Pt埋土層	頭骨小片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
151	B4013	S層	大腿骨	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
196	I03	砂礫	尺骨	ヒト	A	0	1	1	0	0	3	1	1	切離2本取離?
197	I04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	1	1	0	0	3	1	1	
198	G20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	1	1	0	0	2	1	1	
199	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
200	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
201	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
202	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
203	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
204	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
205	G01	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
206	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
207	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
208	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
210	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
213	H01	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
214	H01	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
215	H01	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
216	H01	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
220	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
220	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
221	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
222	H20	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
226	H02	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
227	F04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
228	G04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
229	H04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
230	H04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
231	H04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
232	I04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
232	I04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
232	I04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
232	I04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
233	I04	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
234	G06	砂礫	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
248	G01	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
252	G01	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
253	G16	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
646	G16	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
647	G17	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1524	G13	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1525	G13	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1530	G18	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1546	H16	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1720	H19	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1778	K02	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1793	K18	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1793	K18	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
1986	I4	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2012	I4	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2015	I7	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2034	F1718	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2035	L5	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2038	F19	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2087	F4	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2089	F4	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2112	H1	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2130	H1	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	
2171	H3	不明	不明骨片	ヒト	A	0	0	0	0	0	1	1	1	

年齢はA:成人、Y:未成年もしくは乳幼児  
残存部位は、各部位の有無を1:有、0:無で表し、全体の残存率は1 (全体の1/5程度) から5 (全体の5/5程度) で表した

## 第4節 平安山原 A 遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

平安山原 A 遺跡は、沖縄本島中部の北谷町に所在し、現在の北谷町役場の北西側に位置する。キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で発見され、戦前の遺構とグスク時代から弥生相当期の遺物が確認されている。

本報告では、平安山原 A 遺跡から出土した人骨 3 点と土器付着炭化物について、その年代観を得ることを目的とし放射性炭素年代測定を実施する。さらに土壌洗い出し済試料を対象として、炭化種実の同定を実施する。

### 1. 放射性炭素年代測定

#### (1) 試料

平安山原 A 遺跡から出土した、土器付着炭化物 1 点と人骨 3 点である。

#### (2) 分析方法

炭化材・炭化物は、土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット・超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

この試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30分) 850℃ (2時間) で加熱して CO<sub>2</sub> を発生させる。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO<sub>2</sub> を精製する。

骨試料はコラーゲン抽出 (Collagen Extraction) を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2M の水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで 1 時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れて 1M の塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃ に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させ、液体窒素とエタノール+ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで CO<sub>2</sub> を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO<sub>2</sub> と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に <sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C の測定も行うため、この値を用いて δ <sup>13</sup>C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0 (Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の <sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の <sup>14</sup>C 濃度の変動、及び半減期の違い (<sup>14</sup>C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ、2 σ 双方の値を計算する。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算・再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

#### (3) 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表 4 に、暦年較正結果を表 5 に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、SK100 土器付着炭化物 (第 141 図 163) が 240 ± 20BP、人骨 12 (巻首図版 9) 左腓骨片が 1,580 ± 20BP、人骨 05 (巻首図版 11) No. 2 左橈骨が 1,070 ± 20BP、人骨 11 (巻首図版 10) No. 4 肋骨が 830 ± 20BP の値を示す。

測定誤差を  $\sigma$  として計算させた結果、SK100 土器付着炭化物は calAD1,647-1,793、人骨 12 左腓骨片が calAD425-534、人骨 05 No. 2 左橈骨が calAD907-1,014、人骨 11 No. 4 肋骨が calAD1,191-1,250 である。

第 133 表 平安山原 A 遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料名 試料番号	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
SK100 土器付着炭化物	炭化物	240 ± 20	-20.51 ± 0.24	170 ± 20	IAAA-143593
人骨 12 左腓骨片	骨	1,580 ± 20	-16.91 ± 0.44	1,450 ± 20	IAAA-150210
人骨 05 No. 2 左橈骨	骨	1,070 ± 20	-15.55 ± 0.64	920 ± 20	IAAA-150211
人骨 11 No. 4 肋骨	骨	830 ± 20	-16.29 ± 0.64	690 ± 20	IAAA-150212

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第 134 表 平安山原 A 遺跡の暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.		
		$\sigma$	cal	AD	—	cal	AD	cal	BP			—	
SK100 土器付着 炭化物	239 ± 23	$\sigma$	cal	AD 1,647	—	cal	AD 1,665	cal	BP 303	—	285	0.775	IAAA-143593
			cal	AD 1,785	—	cal	AD 1,793	cal	BP 165	—	157	0.225	
		2 $\sigma$	cal	AD 1,638	—	cal	AD 1,675	cal	BP 312	—	275	0.660	
			cal	AD 1,777	—	cal	AD 1,799	cal	BP 173	—	151	0.305	
人骨 12 左腓骨片	1,582 ± 24	$\sigma$	cal	AD 425	—	cal	AD 435	cal	BP 1,525	—	1,515	0.112	IAAA-150210
			cal	AD 449	—	cal	AD 471	cal	BP 1,501	—	1,479	0.258	
		2 $\sigma$	cal	AD 486	—	cal	AD 534	cal	BP 1,464	—	1,416	0.630	
			cal	AD 418	—	cal	AD 540	cal	BP 1,532	—	1,410	1.000	
人骨 05 No. 2 左橈骨	1,072 ± 23	$\sigma$	cal	AD 907	—	cal	AD 914	cal	BP 1,043	—	1,036	0.084	IAAA-150211
			cal	AD 968	—	cal	AD 1,014	cal	BP 982	—	936	0.916	
		2 $\sigma$	cal	AD 898	—	cal	AD 924	cal	BP 1,052	—	1,026	0.186	
			cal	AD 944	—	cal	AD 1,018	cal	BP 1,006	—	932	0.814	
人骨 11 No. 4 肋骨	829 ± 24	$\sigma$	cal	AD 1,191	—	cal	AD 1,198	cal	BP 759	—	752	0.121	IAAA-150212
			cal	AD 1,204	—	cal	AD 1,250	cal	BP 746	—	700	0.879	
		2 $\sigma$	cal	AD 1,167	—	cal	AD 1,258	cal	BP 783	—	692	1.000	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は  $\sigma$  は 68%、2  $\sigma$  は 95% である。
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、2  $\sigma$  のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

#### (4) 考察

土器付着炭化物は、HA ④ K1・L1 グリッドに位置する SK100 から出土した土器に付着した炭化物とされる。補正年代は 240 ± 20BP、暦年代較正值は calAD1,647-1,793 で 17 世紀中頃から 18 世紀末を示した。発掘調査所見によると、出土地点は近世期の集落址とされおり、今回の結果は調和的と言える。

人骨 3 点についてみると、補正年代は人骨 12 が 1,580 ± 20BP、人骨 05 No. 2 が 1,070 ± 20BP、人骨 11 No. 4 が 830 ± 20BP で、暦年代較正值は calAD425-534、calAD907-1,014、calAD1,191-1,250 を示した。それぞれ、5 世紀から 6 世紀前半、10 世紀から 11 世紀前半、12 世紀末から 13 世紀中頃で年代幅のある結果となった。なお、年代測定結果を細かくみれば、人骨 05 No. 2 と人骨 11 No. 4 は貝塚時代終末からグスク時代と近い年代であり、人骨 12 は貝塚時代後期中葉と古い年代である。

発掘調査所見によれば、人骨はグスク時代を想定しており、人骨 05 No. 2 と人骨 11 No. 4 は概ね調和する年代とみることができる。一方、人骨 12 の年代は想定よりも古い結果となった。この試料については、コラーゲンの回収率が 1% 以下と低い値であった。南 (2013) によると、コラーゲンの回収率が 1% 以下の場合、得られた放射性炭素年代測定の信頼度が低いことが多いとされる記述がある。今回の結果は、これらの影響を受けた可能性が考えられる。

遺跡発掘調査は、考古学的手法で行われているのであるから、発掘調査での仮説や根拠の検討があってこそ利用する前提ができるのであり、年代測定の先行に関しては十分な考慮が必要であるという様態を示すものとなった。今回の結果から出土状況や共伴遺物を検討し、引き続き調査をすることが望まれる。

## 2. 種実同定

### (1) 試料

試料は、平安山原 A 遺跡の G19 石組遺構 10(HA ②台 3069、3072) と、C1 祝女殿内 (HA ②台 3167) より出土した種実遺体 3 試料で、全て乾燥した状態で袋に入っている。

発掘調査所見によれば、試料は、戦前の沖縄産無釉陶器 (図版 6) の甕から獣骨とともに出土し、大豆 (ダイズ) の可能性が指摘されている。種実同定は、2 試料 (HA ②台 3069,3072) は全てを対象に実施する。残りの 1 試料 (HA ②台 3167) は多量のため、保存状態が良好な 100 個を目処とした抽出同定と、全てを検鏡対象とし、他の種類の種実の確認を目的とした精査を実施する。

### (2) 分析方法

試料を粒径 4mm・2mm・1mm・0.5mm の篩に通し、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本および中村・戸部訳 (2009)、塚腰 (2013) 等を参考に実施し、個数と重量を計測し、結果を一覧表で示す。また、一部の種実を対象として、長さ、幅、厚さ等をデジタルノギスで計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体等を分類群別に容器に入れて保管する。

### (3) 結果

同定結果を表 6 に示す。全 3 試料を通じて、被子植物 3 分類群 (木本のヤマモモ、草本のトウゴマ・ソラマメ) 213 個の種実遺体が同定され、栽培種のトウゴマの種子が 109 個 (2.8g) と、ソラマメの炭化種子が 102 個 (20.1g)+78.8g 確認された。以下に、試料別出土状況を述べる。

#### ・G19 石組遺構 10(HA ②台 3069)

栽培種のトウゴマの種皮の破片が 2 個 (0.002g) 同定され、最大 9.2mm を測る。分析残渣は、炭化材や植物片・骨片・砂泥等が確認された。

#### ・G19 石組遺構 10 (HA ②台 3072)

常緑広葉樹のヤマモモの核が 2 個 (0.1g) と、栽培種のトウゴマの種子が 16 個 (1.4g)、種皮の破片が 91 個 (1.4g) の、計 109 個 (2.9g) が同定され、トウゴマの種子 16 個を計測対象としている。分析残渣は、植物片や砂泥等が確認された。

#### ・C1 祝女殿内 (HA ②台 3167)

炭化した栽培種のソラマメの果実・種子が 5 個 (1.1g)、種子が 95 個 (18.9g)、半分が 2 個 (0.1g) の、計 102 個 (20.1g) が同定され、全てを計測対象としている。分析残渣は、ソラマメの炭化種子主体が 78.8g、その他 (炭化材や岩片、砂泥主体) が 17.3g を量り、ソラマメの微細片を含む。

#### ・種実遺体の記載

種実遺体の保存状態は、ヤマモモとトウゴマは比較的良好で、ソラマメは全て炭化している。また、ソラマメの表面には果皮片が残る種子も確認された。各分類群の写真を図版 2 に、主な種実遺体の計測値を表 7 に示して同定根拠とし、以下に形態的特徴等を述べる。

#### ・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核 (内果皮) は灰褐色、長さ 7.9mm、幅 5.9mm、厚さ 4.0mm の歪でやや偏平な広楕円体。内果皮は硬く、表面には微細な網目模様があり粗面 (図版 2-1)。

#### ・トウゴマ (*Ricinus communis* L.) トウダイグサ科トウゴマ属

種子は暗灰褐色、主に倒卵状長楕円体を呈す。背面は丸みがあり、基部に Y 字状の稜状突起がある (図版 2-2c,3c で顕著)。腹面は平らで正中線がやや窪み、背線 (珠柄と珠皮が合着してできたもの) がある (図版 2-3b で顕著)。破片は Y 字状の稜に沿って割れた個体が多く、内部は中空で内乳や子葉を欠損する。種皮は薄く (種皮厚 0.4mm) 硬く、表面は粗面、断面は柵状組織が内側に湾曲する (図版 2-4)。

長さ、幅、厚さが完全な出土種子 15 個の計測値は、長さは、最小 9.3～最大 12.7 (平均 11.4 ± 標準偏差 1.1)mm、幅は 6.3～9.2 (平均 7.9 ± 0.9)mm、厚さは 4.3～6.9 (平均 5.9 ± 0.8)mm であった (表 7)。

#### ・ソラマメ (*Vicia fava* L.) マメ科ソラマメ属

果実 (莢)・種子は炭化しており黒色、種子はやや偏平な直方体状長楕円体を呈す。本分析では、臍が残存する完形 100 個と、子葉の合わせ目に沿って割れ、幼芽等が残存する半分 2 個を同定計測対象としている。

長さ・幅・厚さが完全な炭化種子 100 個 (19.7g) の計測値は、長さは、最小 8.4～最大 13.3 (平均 10.7 ± 標準偏差 1.0) mm、幅は 5.6～9.4 (平均 7.8 ± 0.8)mm、厚さは 5.0～8.4 (平均 6.8 ± 0.7)mm、重量は 0.09～0.35 (平均 0.20 ± 0.05) g であった。また、計測 100 個のうち、臍の保存状態が良好な種子 18 個の計測値は、臍長は 4.4～6.6 (平均 5.5 ± 0.6) mm、臍幅は 1.3～2.3 (平均 1.6 ± 0.3)mm であった (表 7)。

種子は、側面中央や腹面がやや窪み(図版 2-5a,b)、一端(臍側)が厚くなる個体が多い(図版 2-5c,dで顕著)。臍は一端にあり、細長い長楕円形を呈し、「露出タイプ」(小畑,2008;2011)に該当する。臍の一端には維管束が種子に入る部分がある(図版 2-5e 下側)。臍の反対側にも外側に細長く小さな穴(珠孔)がある(図版 2-5e 上側)。

種皮は薄く、表面はやや平滑で、内部の子葉は粗面である。子葉の合わせ目に沿って半分に割れた内部は粗面で、腹面の臍付近に短い幼根や胚軸があり、先端から幼芽が子葉内部に向かって短く延びる(図版 2-7,8)。

出土種子は、臍の位置や大きさ、幼芽等の位置等がダイズやアズキなどの他の豆類とは明らかに区別され、ソラマメに同定される。

また、一部の種子の表面には果実の破片が付着し、繊維状の部分が確認された(図版 2-6)。果実は、完形ならば、大粒種で 10cm 内外、幅 3cm、小粒種で長さ 4～5cm、幅 1cm 程度のやや扁平な紡錘体を呈し、長軸方向に 1 本の縫合線がある。果皮は数層から成り、外部は繊維状で内部には海綿状組織があり、1 果実内に通常 2～4 個つく種子を保護している。

第 135 表 平安山原 A 遺跡の種実同定結果

試料名				分類群	部位・状態		個数	重量(g)	備考
HA ②台 3069	G19	石組遺構 10	H22.01.14	トウゴマ	種皮	破片	2	0.002	最大 9.2mm
HA ②台 3072	G19	石組遺構 10	H22.01.14	ヤマモモ	核	完形	2	0.1	
				トウゴマ	種子	完形	16	1.4	
HA ②台 3167	C1	祝女殿内	H22.02.11	ソラマメ	炭化果実・種子	完形	5	1.1	計測 No.92-96
					炭化種子	完形	95	18.9	計測 No.1-91,97-100
						半分	2	0.1	計測 No.1-2
				分析残渣(ソラマメ主体)			—	78.8	
分析残渣(炭化材・岩片・砂泥)			—	17.3	ソラマメ微細片を含む				

注)HA ②台 3167 は多量のため、状態良好な 100 個を目処とした同定と、他の種実の確認を目的とした精査を実施している。

#### (4) 考察

平安山原 A 遺跡の G19 石組遺構 10 より出土した種実遺体は、栽培種のトウゴマの種子と常緑広葉樹のヤマモモの核に同定され、C1 祝女殿内より多量出土した種実遺体は、栽培種のソラマメの炭化した種子に同定された。

発掘調査所見によれば、試料は戦前の沖縄産無釉陶器の甕から獣骨とともに出土し、大豆(ダイズ)の可能性が指摘されていたが、分析の結果、ダイズとは区別され、ソラマメに同定された。

C1 祝女殿内より多量出土したソラマメは、種子が食用される植物質食料で、星川(1980)や堀田編(1989)によれば、大粒種がアフリカ北部原産、小粒種が中央アジア原産で、「聖武天皇の天平 8(736)年に、中国を経て渡来したインド僧が伝えたものを、僧行基が武庫(現、兵庫県)で試作したのが最初とされ、これが現在の品種、於多福の始まりと伝えられる」と記されている。

ソラマメの出土炭化種子群は、遺跡周辺で栽培されていたのか、近辺より持ち込まれたのかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、食用されることなく火を受けたとみなされる。また、一部の表面に果皮片が付着した種子が確認されたことから、果実(莢)の状態では火を受けた可能性がある。

管見の限り、ソラマメの遺跡出土例は殆ど確認されていない。今回の多量出土は、沖縄におけるソラマメ(方言名でトウマーミー)の系譜や戦前のソラマメ栽培・利用を考える上で貴重な考古資料である。

一方、G19 石組遺構 10 より出土したトウゴマは、種子が油料(ヒマシ油)や薬用に利用されるほかに、毒性タンパク質リシン、有毒アルカロイドであるリシニンを含むが、加熱によって分解する。出土種子は、遺跡周辺で栽培されていたのか、近辺より持ち込まれたのかは不明であるが、当時利用された油料植物と示唆される。

堀田編(1989)によれば、トウゴマは熱帯東アフリカ原産で、「古代エジプトで 6000 年前から利用され、日本には 9 世紀ころに中国から渡来した」と記されている。一方、柴田(1958)によれば、「支那では新修本草(659)に初めて記載され、日本では倭名抄(923-930)にカラカシワの名の記録があり、その時代から栽培されたらしく、種子を薬用とし、印肉用にし、時計の発明と共にこれに用いられた」と記されており、現段階では確実な渡来時期は不明である。管見の限り、トウゴマの遺跡出土例は極めて少なく、大阪市難波宮下層期とされる 6 世紀後葉の R331 や 7 世紀前半の R360 から確認される程度である(パリノ・サーヴェイ株式会社)。読谷村史の戦時記録(読谷村史編集委員会,2002)によれば、「戦時体制下の生活飛行機の油の基になる「チャンダカシー」(植物名ヒマ)の種子が配られ植え付けた」と、トウゴマの栽培が記録されている。

トウゴマとともに確認されたヤマモモは、高木になる常緑広葉樹で、現在の本地域にも分布する。また、ヤマモモは、果実が食用される有用植物で、現在でもイシムムやミジウムムの方言名で親しまれている。当時の遺跡周辺の照葉樹林内から採取され、食用のために利用された可能性は充分考えられる。

#### <引用文献>

- 伊達 元成・青野 友哉・大島 直行・松田 宏介,2009,陸産・海産の食料資源摂取率を人骨の炭素 14 年代から求める試み,総研大文化科学研究,第 5 号,73-79.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 堀田 満(代表)編,1989,世界有用植物事典,平凡社,1499p.
- 星川清親,1980,新編食用作物,株式会社養賢堂,697p.
- 橋本 真紀夫,2015,埋蔵文化財と自然科学,考古学ジャーナル 676,ニューサイエンス社,25-28
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 南 雅代,2013,骨試料の年代測定,フィッション・トラック ニュースレター 第 26 号,76p.
- 宮城 静雄,2002,渡具知. 読谷村史編集委員会編,読谷村史五巻資料編 4「戦時記録」上巻,204-211.
- 中村信一・戸部 博(訳),2009,植物形態の事典(新装版). ヴェルナー・ラウ(著),朝倉書店,340p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.
- 小畑弘巳,2008,マメ科種子同定法.「極東先史古代の雑穀 3」,日本学術振興会平成 16～19 年度科学研究費補助金(基盤 B-2)(課題番号 16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書,小畑弘巳編,熊本大学埋蔵文化財調査室,225-252.
- 小畑弘巳,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 同成社,309p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2010,難波宮下層の谷出土木材樹種および種実遺体の同定. 財団法人大阪市文化財協会編,難波宮址の研究 第十六,82-107.
- 柴田桂太編,1958,資源植物事典(増補改訂版). 株式会社北隆館,904p.,
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- 塚腰 実,2013,ソラマメのへそと珠孔. 大阪市立自然史博物館編,Nature Study,59 巻 10 号,大阪市立自然史博物館友の会,132-133.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

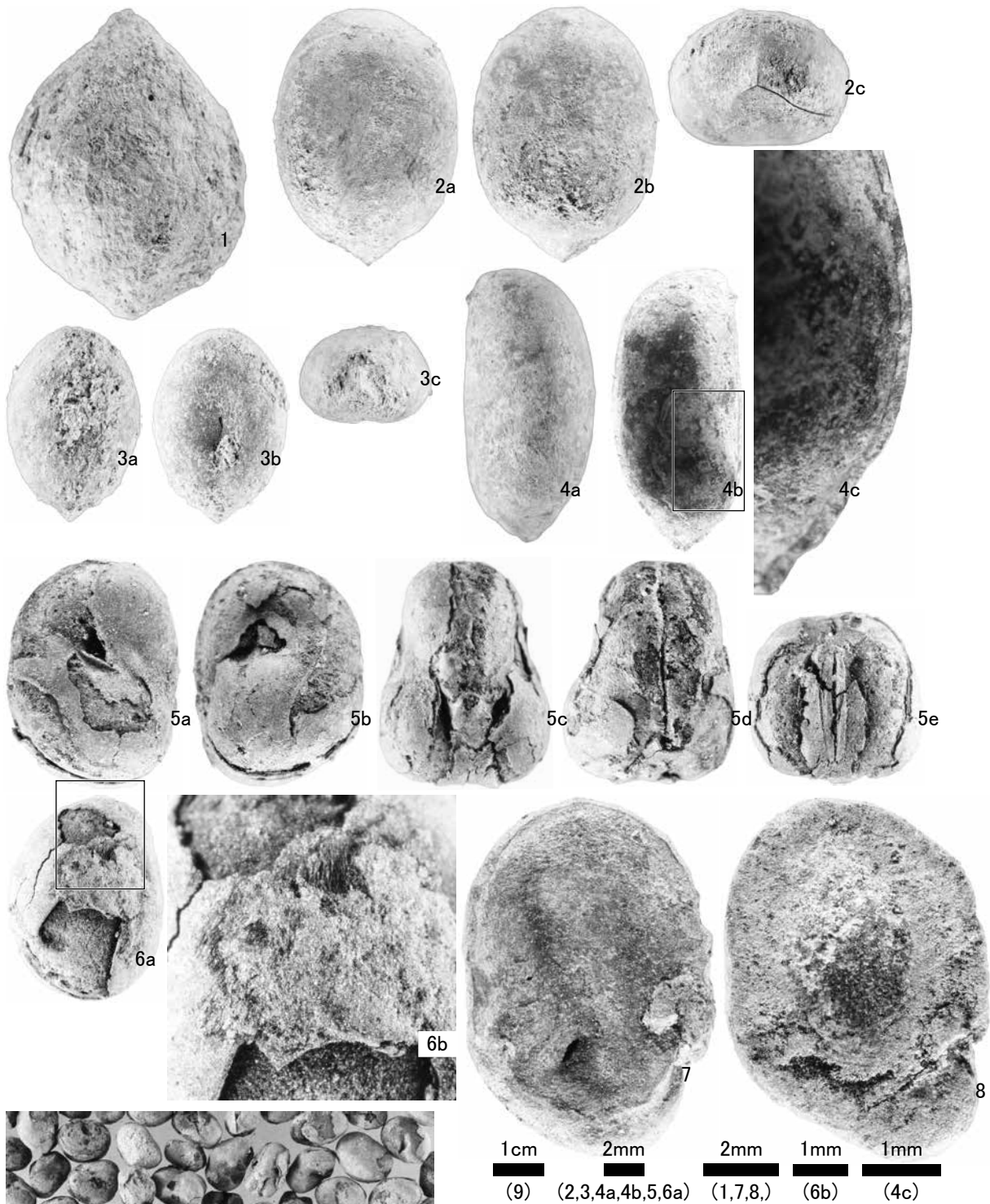
第 136 表 平安山原 A 遺跡の主な種実遺体の計測値

試料名	分類群 部位	No.	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	脛長 (mm)	脛幅 (mm)	備考
HA② 台 3072	G19 石組 10 ヤマモモ核	—	0.07	7.9	5.9	4.0	—	—	図版 2-1
		1	0.08	12.5	8.9	6.7	—	—	図版 2-2
		2	0.03	9.3	6.3	4.3	—	—	図版 2-3
		3	0.08	12.0	8.3	6.7	—	—	
		4	0.06	12.1	8.1	5.9	—	—	
		5	0.09	12.7	8.9	6.7	—	—	
		6	0.08	11.9	8.3	6.1	—	—	
		7	0.16	10.8	7.1	5.3	—	—	
		8	0.06	11.3	7.9	5.8	—	—	
		9	0.08	12.3	8.5	6.9	—	—	
		10	0.08	12.0	8.2	6.2	—	—	
		11	0.04	10.4	6.7	4.9	—	—	
		12	0.13	9.9	6.7	4.9	—	—	
		13	0.05	10.1	6.5	4.6	—	—	
		14	0.10	12.7	9.2	6.6	—	—	
		15	0.20 *	11.7	8.2	6.1	—	—	食痕? 砂泥充填
		16	0.07 +	12.6	9.2 +	6.4 +	—	—	一部欠損
HA② 台 3072	G19 石組 10 トウゴマ種子	標本数	—	15	15	15	—	—	
		最小	—	9.3	6.3	4.3	—	—	
		最大	—	12.7	9.2	6.9	—	—	
		平均	—	11.4	7.9	5.9	—	—	
		標準偏差	—	1.1	0.9	0.8	—	—	
HA② 台 3167	C1 祝女殿内 ソラマメ種子	1	0.04 +	9.7	7.1	3.1 +	—	—	図版 2-8
		2	0.09 +	9.3	6.7	3.2 +	—	—	図版 2-7
		1	0.17	11.1	8.5	8.4	5.8	1.3	図版 2-5
		2	0.24	11.6	8.5	7.7	6.1	1.4	
		3	0.20	11.4	8.3	7.6	5.8	1.6	
		4	0.17	12.1	8.0	7.6	6.6	1.4	
		5	0.33	11.3	9.2	7.6	5.7	1.8	
		6	0.15	11.3	7.9	8.1	5.1	1.6	
		7	0.25	11.7	8.6	7.4	4.4	1.4	
		8	0.22	10.4	7.7	5.9	5.4	1.5	
		9	0.17	10.0	7.3	6.3	5.2	1.7	
		10	0.18	11.2	7.6	7.1	5.7	1.7	
		11	0.15	10.3	7.4	7.4	—	—	
		12	0.21	11.2	8.5	7.1	—	—	
		13	0.23	11.7	8.3	6.3	—	—	
		14	0.21	9.6	7.3	7.2	—	—	
		15	0.16	12.2	8.1	7.4	—	—	
		16	0.12	9.1	6.0	5.6	—	—	
		17	0.16	10.6	7.6	7.4	—	—	
		18	0.26	11.5	8.3	7.5	—	—	
		19	0.16	10.7	8.1	7.4	—	—	
		20	0.23	10.8	8.6	7.2	—	—	
		21	0.09	9.8	7.4	6.0	—	—	
		22	0.22	11.1	7.5	7.0	—	—	
		23	0.15	10.1	7.5	6.9	—	—	
		24	0.19	10.2	8.1	7.4	—	—	
		25	0.20	9.5	7.8	7.5	—	—	
		26	0.24	11.8	7.9	7.5	—	—	
		27	0.16	10.6	7.9	6.7	—	—	
		28	0.33	12.1	7.7	7.3	6.3	2.3	
		29	0.24	12.6	9.3	8.0	—	—	
		30	0.14	10.4	7.6	7.3	—	—	
		31	0.22	12.4	9.1	7.5	—	—	
		32	0.23	10.2	7.4	7.0	—	—	
		33	0.28	12.2	9.2	7.8	—	—	
		34	0.16	10.9	7.3	7.6	—	—	
		35	0.22	12.4	9.2	8.0	—	—	
		36	0.26	11.2	7.5	6.1	—	—	
		37	0.17	9.7	7.3	6.4	—	—	
		38	0.11	10.6	7.2	6.6	—	—	
		39	0.17	10.1	8.0	6.1	—	—	
		40	0.26	11.3	7.0	6.7	—	—	
41	0.18	10.7	8.5	7.0	—	—			
42	0.23	12.3	9.0	6.9	—	—			

試料名	分類群 部位	No.	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	脛長 (mm)	脛幅 (mm)	備考		
HA② 台 3167	C1 祝女殿内 ソラマメ種子	43	0.26	11.2	8.3	7.0	—	—			
		44	0.23	10.7	8.9	7.3	—	—			
		45	0.15	11.2	8.4	7.4	—	—			
		46	0.14	9.6	7.2	6.9	—	—			
		47	0.10	8.9	6.1	5.6	—	—			
		48	0.35	11.4	7.2	7.3	—	—			
		49	0.20	9.8	7.7	6.3	—	—			
		50	0.16	9.1	6.4	6.3	—	—			
		51	0.23	13.3	8.3	6.2	—	—			
		52	0.20	10.4	7.3	6.0	5.2	1.4			
		53	0.28	11.7	8.7	7.0	—	—			
		54	0.25	10.8	8.1	6.4	—	—			
		55	0.16	10.2	7.4	6.3	—	—			
		56	0.30	11.6	8.6	7.2	—	—			
		57	0.18	10.7	8.3	7.6	—	—			
		58	0.25	10.7	7.4	7.3	—	—			
		58	0.25	10.7	7.4	7.3	—	—			
		59	0.14	9.0	6.8	5.4	—	—			
		60	0.17	9.7	7.1	6.2	—	—			
		61	0.21	10.4	8.1	7.1	—	—			
		62	0.15	11.2	8.8	7.0	—	—			
		63	0.24	11.8	9.0	7.4	—	—			
		64	0.23	11.8	9.3	7.8	—	—			
		65	0.18	10.2	7.9	7.7	—	—			
		66	0.13	10.6	8.0	7.2	—	—			
		67	0.19	9.8	7.2	7.0	—	—			
		68	0.19	10.6	8.5	7.0	—	—			
		69	0.13	9.4	7.0	6.7	—	—			
		70	0.14	9.3	7.2	6.6	—	—			
		71	0.09	9.5	7.2	6.9	—	—			
		72	0.25	10.8	7.3	6.4	5.0	1.6			
		73	0.25	10.4	8.4	6.4	—	—			
		74	0.17	10.3	7.4	6.4	—	—			
		75	0.18	10.0	7.3	6.6	—	—			
		76	0.12	10.4	7.9	6.9	—	—			
		77	0.10	8.8	7.0	5.8	—	—			
		78	0.12	9.1	6.1	5.5	—	—			
		79	0.17	9.2	6.9	7.2	—	—			
		80	0.12	8.4	5.6	5.0	—	—			
		81	0.31	11.4	8.2	6.3	—	—			
		82	0.20	11.5	7.2	7.1	—	—			
		83	0.23	10.7	7.4	6.1	—	—			
		84	0.23	10.4	7.4	6.8	—	—			
		85	0.14	11.8	8.1	7.3	—	—			
		86	0.24	10.9	8.2	5.7	5.1	1.5			
		87	0.20	10.3	7.7	7.1	—	—			
		88	0.18	9.6	7.4	6.5	4.6	2.0			
		89	0.20	10.5	7.2	5.3	—	—			
		90	0.14	9.0	5.8	5.7	—	—			
		91	0.22	10.6	7.7	6.6	—	—			
		92	0.21	11.1	8.3	7.3	6.0	1.3	果皮残存		
		93	0.20	11.6	7.8	6.9	5.3	1.7	果皮残存		
		94	0.32	12.0	8.7	7.7	—	—	果皮残存		
		95	0.22	10.9	7.9	6.3	5.0	1.7	果皮残存		
		96	0.16	9.4	6.5	5.7	—	—	果皮残存		
		97	0.16	9.2	7.4	6.0	—	—	果皮残存		
		98	0.20	10.0	7.6	5.6	—	—	果皮残存 図版 2-6		
		99	0.24	12.1	9.4	7.7	—	—			
		100	0.16	11.4	8.4	7.6	—	—			
		HA② 台 3167	C1 祝女殿内 ソラマメ種子	標本数	100	100	100	100	18	18	
				最小	0.09	8.4	5.6	5.0	4.4	1.3	
				最大	0.35	13.3	9.4	8.4	6.6	2.3	
				平均	0.20	10.7	7.8	6.8	5.5	1.6	
				標準偏差	0.05	1.0	0.8	0.7	0.6	0.3	

注) 計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値に「+」で示す。





1. ヤマモモ 核(HA②台3072 G19;石組遺構10)
2. トウゴマ 種子(HA②台3072 G19;石組遺構10)
3. トウゴマ 種子(HA②台3072 G19;石組遺構10)
4. トウゴマ 種皮(破片)(HA②台3072 G19;石組遺構10)
5. ソラメ 炭化種子(HA②台3167 C1;祝女殿内)
6. ソラメ 炭化種子・果実(HA②台3167 C1;祝女殿内)
7. ソラメ 炭化種子(半分)(HA②台3167 C1;祝女殿内)
8. ソラメ 炭化種子(半分)(HA②台3167 C1;祝女殿内)
9. ソラメ 炭化種子(HA②台3167 C1;祝女殿内)

図版139 平安山原 A 遺跡の種実遺体

# 第5節 平安山原 A 遺跡ビーチロックの年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

平安山原 A 遺跡は、沖縄県中頭郡北谷町に所在し、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。今回分析対象としたビーチロックは、下層確認トレンチから採取したもので、標高 1 m から 1 m 50cm の間に位置する。

潮間帯の砂浜に岩石状に固結した堆積物として認められるビーチロックは、日本列島における分布箇所の約 93% が珊瑚礁地域にあることから、珊瑚礁海岸に特有に見られる海岸微地形とされている (田中, 1990)。したがって、ビーチロックの形成年代を調べることによって、過去の海水準を推定するという研究もこれまでに多くなされてきた。ビーチロックは、これまでに確認されている混入した人工遺物の状況などから、数 100 年から数十年以内の極めて短時間に岩石として形成されるものであり、したがって、一般にその構成物や混入物の生成年代をもってビーチロックの形成年代とすることができる (田中, 1990)。

本報告は北谷町沿岸に所在したビーチロックの年代資料を得ることにより、ビーチロックの形成に関する情報の収集が目的である。

## 1. 試料

試料は、平安山原 A 遺跡から採取したビーチロックに含まれる貝類 6 点である。各試料の詳細は、第 137 表の年代測定結果に示す。

## 2. 分析方法

分析は AMS 法で実施する。試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット・超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料の表面を HCl を用いて約 30% 溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する (Edg 処理)。

試料中の炭酸カルシウム (CaCO<sub>3</sub>) を分解し、CO<sub>2</sub> を発生させる。その後、真空ラインで不純物 (水など) を取り除き、CO<sub>2</sub> を精製する。これを鉄で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に <sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C の測定も行うため、この値を用いて δ<sup>13</sup>C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma: 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0 (Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

第 137 表 放射性炭素年代測定結果

地点名	試料番号	試料の質	種類	処理	補正年代 BP	δ <sup>13</sup> C (‰)	測定年代 BP	Code No.
ビーチロック上部	①	貝殻	マスオガイ	Edg	3,110 ± 30	-4.12 ± 0.29	2,770 ± 30	IAAA-143224
ビーチロック上部	② or ③	貝殻	チョウセンサザエ	Edg	2,290 ± 30	4.02 ± 0.31	1,820 ± 30	IAAA-143225
ビーチロック上部	④	貝殻	イモガイ	Edg	4,120 ± 30	-1.88 ± 0.32	3,740 ± 30	IAAA-143226
ビーチロック上部	⑤	貝殻	リュウキュウマスオガイ	Edg	2,600 ± 30	-2.96 ± 0.30	2,240 ± 30	IAAA-143227
ビーチロック上部	⑥	貝殻	マスオガイ	Edg	2,630 ± 30	-4.67 ± 0.31	2,300 ± 30	IAAA-143228
ビーチロック上部	⑦	貝殻	サメザラ	Edg	1,620 ± 20	-0.73 ± 0.25	1,230 ± 20	IAAA-143229

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

## 3. 結果と考察

同位体効果による補正を行った測定結果を第 137 表に、暦年較正結果を第 138 表に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、試料番号①が 3,110 ± 30BP、試料番号② or ③が 2,290 ± 30BP、試料番号④が 4,120 ± 30BP、試料番号⑤が 2,600 ± 30BP、試料番号⑥が 2,630 ± 30BP、試料番号⑦が 1,620 ± 20BP の値を示す。

暦年較正とは、大気中の <sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の <sup>14</sup>C 濃度の変動、及び半減期の違い (<sup>14</sup>C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行

第 138 表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.							
		$\sigma$	cal	BC	978	—	cal			BC	888	cal	BP	2,927	—	2,837
ビーチロック 上部;①	3,109 ± 26	$\sigma$	cal	BC	978	—	cal	BC	888	cal	BP	2,927	—	2,837	1.000	IAAA-143224
		$2\sigma$	cal	BC	1,019	—	cal	BC	836	cal	BP	2,968	—	2,785	1.000	
ビーチロック 上部;② or ③	2,290 ± 25	$\sigma$	cal	AD	11	—	cal	AD	89	cal	BP	1,939	—	1,861	1.000	IAAA-143225
		$2\sigma$	cal	BC	29	—	cal	AD	128	cal	BP	1,978	—	1,822	1.000	
ビーチロック 上部;④	4,118 ± 27	$\sigma$	cal	BC	2,279	—	cal	BC	2,179	cal	BP	4,228	—	4,128	1.000	IAAA-143226
		$2\sigma$	cal	BC	2,329	—	cal	BC	2,125	cal	BP	4,278	—	4,074	1.000	
ビーチロック 上部;⑤	2,600 ± 26	$\sigma$	cal	BC	383	—	cal	BC	305	cal	BP	2,332	—	2,254	1.000	IAAA-143227
		$2\sigma$	cal	BC	393	—	cal	BC	225	cal	BP	2,342	—	2,174	1.000	
ビーチロック 上部;⑥	2,632 ± 25	$\sigma$	cal	BC	393	—	cal	BC	345	cal	BP	2,342	—	2,294	1.000	IAAA-143228
		$2\sigma$	cal	BC	462	—	cal	BC	297	cal	BP	2,411	—	2,246	0.994	
ビーチロック 上部;⑦	1,620 ± 23	$\sigma$	cal	AD	719	—	cal	AD	787	cal	BP	1,231	—	1,163	1.000	IAAA-143229
		$2\sigma$	cal	AD	691	—	cal	AD	835	cal	BP	1,259	—	1,115	1.000	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である。
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

う。また、いずれの試料も海棲の貝であり、 $\delta^{13}\text{C}$ の値からみても海洋由来の炭素によって構成されていると考えられることから、海洋炭素に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行う。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値(暦年較正プログラムのdefault値である約400年)を用い、地域による補正は考慮していない。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算・再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

測定誤差を $\sigma$ として計算させた結果、試料番号①がcalBC 978-888、試料番号② or ③がcalAD 11-89、試料番号④がcalBC 2,279-2,179、試料番号⑤がcalBC 383-305、試料番号⑥がcalBC 393-345、試料番号⑦がcalAD 719-787である。

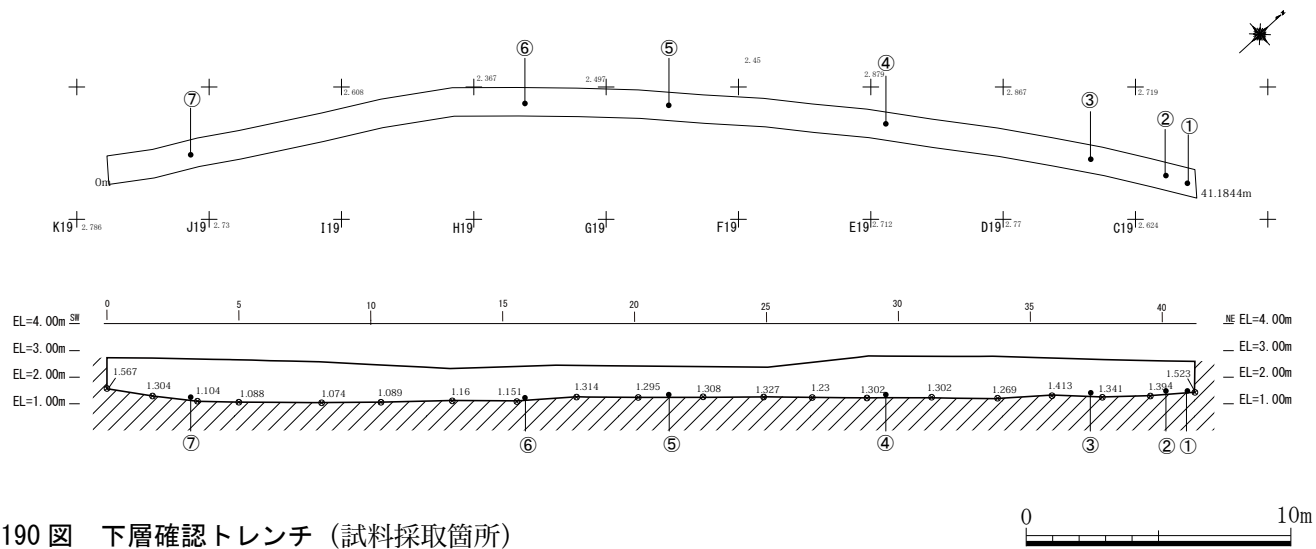
これまでに琉球列島各地で測定されたビーチロックの形成年代について、田中(1990)は、3,000～4,500年前、1,000～2,000年前、現在～500年前(いずれもBP)の3つのグループにまとめられるとしている。

ビーチロックから採取された貝殻の放射性炭素年代は、補正年代で4,120 ± 30BP～1,620 ± 20BPの値が得られ、この範囲内に入るものの大きな開きがあった。これらがビーチロックの生成年代を示しているとするれば、今回の結果に限るならば、複数の時期に生成されたビーチロックが混在している可能性がある。また、事前の予測ではサンプリング箇所の方山方向に古い傾向があるとされていたが、ビーチロック上部;④より海側においては合致するものの、陸側においてはビーチロックの形成の過程には単純ではないことを物語っている。もう一つ考慮すべき点として測定を行った貝殻は、流水や津波などにより周辺から流れ込んだのちに取り込まれた可能性も考えられ、必ずしもビーチロックの生成を示すものではない。このため、同一層準の貝殻に関して複数点の年代測定を行い、最も新しい年代を採用し層位的な検討をすることが、より詳細なビーチロックの生成年代の検討につながるものである。あわせて、これらビーチロックの堆積層位や標高、および貝類の生育環境などを考慮し、由来を検討する必要がある。

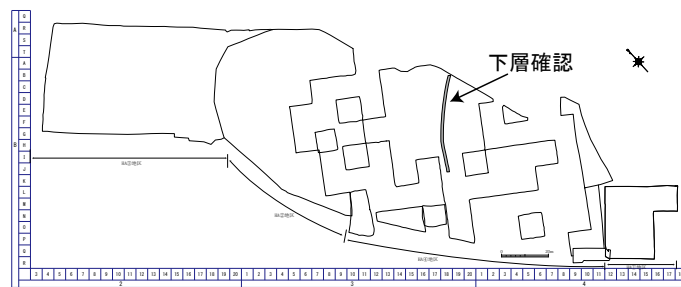
今後も、各地のビーチロックの形成年代の測定例を多数蓄積することができれば、より精度の高い完新世の海水準の状況が明らかになることが期待される。

<引用文献>

田中好國, 1990, 石になった砂浜 ビーチロック. 日本のサンゴ礁地域 1 熱い自然-サンゴ礁の環境誌, 古今書院, 137-151.



第 190 図 下層確認トレンチ (試料採取箇所)



第 191 図 下層確認箇所



全景 (東から)



断面検出



試料検出



試料検出

図版 140 下層確認状況

# 第6節 平安山原A遺跡鉄製品分析結果報告

株式会社 文化財サービス

## はじめに

平安山原A遺跡は、沖縄県中頭郡北谷町に所在し、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。分析試料は、遺跡より出土した人骨の腹部から背中に向けて刺さった刀子である。

### 1. 試料

試料はグスク時代のものと推定され、全長20cm程の刀子から採取された4破片である。いずれも全体が錆化し、金属鉄が残存しない状態であった。そこで金属顕微鏡で4破片の断面を観察した。その後最も残存状態の良い（内部に非金属介在物が確認できた）1点（HEI-3）を選択して、マクロおよび顕微鏡写真を撮影し、EPMAを用い非金属介在物の定性・定量分析を実施した。

なお、本分析は、日鉄住金テクノロジー株式会社の協力を得て行ったものである。

### 2. 分析方法

#### (1) マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡組織よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

#### (2) 顕微鏡組織

金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

#### (3) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子(株)製 JXA-8800RL (波長分散型5チャンネル)にて含有元素の定性・定量分析を実施した。試料電流は $2.0 \times 10^{-8}$ アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また各元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

### 3. 結果

#### (1) マクロ組織

図版141①に示す。観察面全体が錆化しており、金属鉄部は残存していない。また錆化に伴い内部に層状の割れが生じている。これは折り返し鍛錬が施された鍛造製品の特徴といえる。

#### (2) 顕微鏡組織

図版141②③に示す。素地部分は錆化鉄で、全体に金属組織の痕跡は不明瞭であった。ただし④の反射電子像をみると、パーライト (Peaylite) と推測される、層状組織痕跡が微かに観察される。炭素含有率の推定も難しいが、素地はフェライト (Ferrite:  $\alpha$  鉄) であった場合、この箇所は芯金 (軟鉄) の可能性が高いと考えられる。

また③の中央には鍛打によって、細長く展伸した形状の非金属介在物が確認された。その組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

#### (3) EPMA 調査

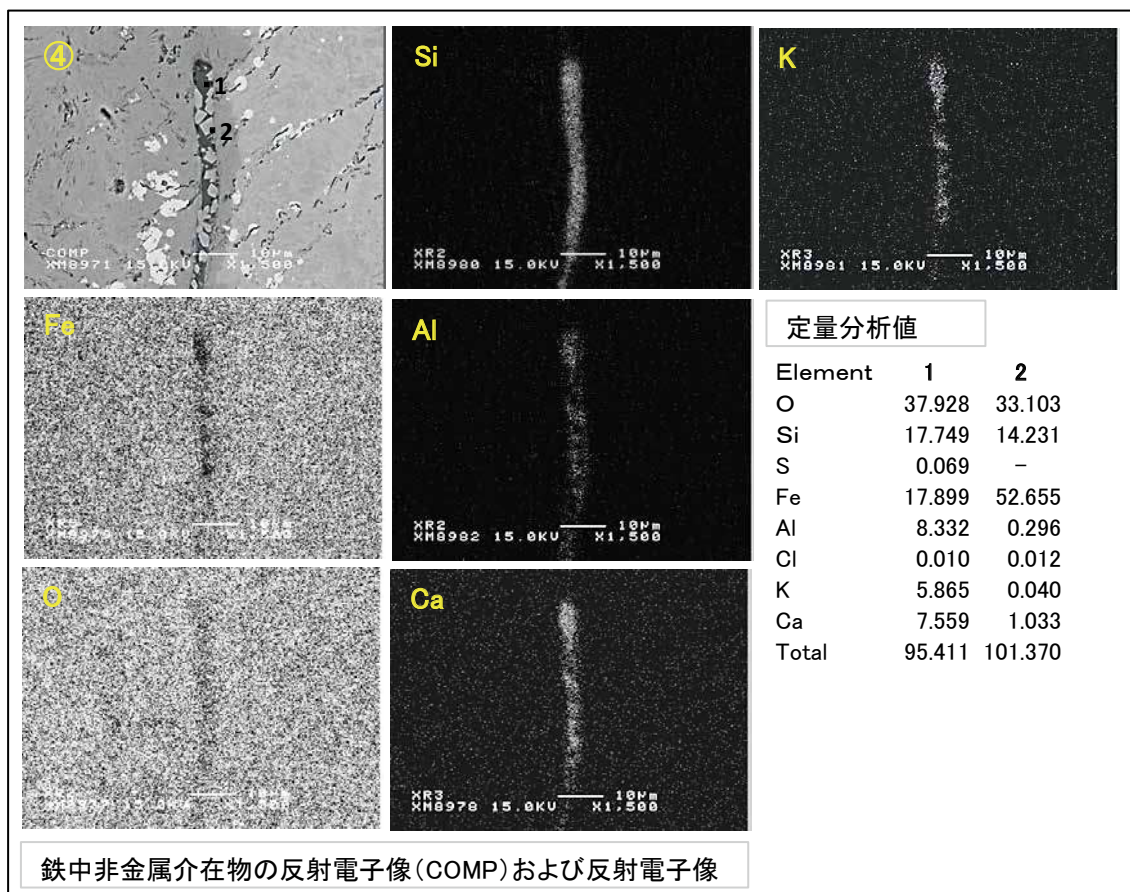
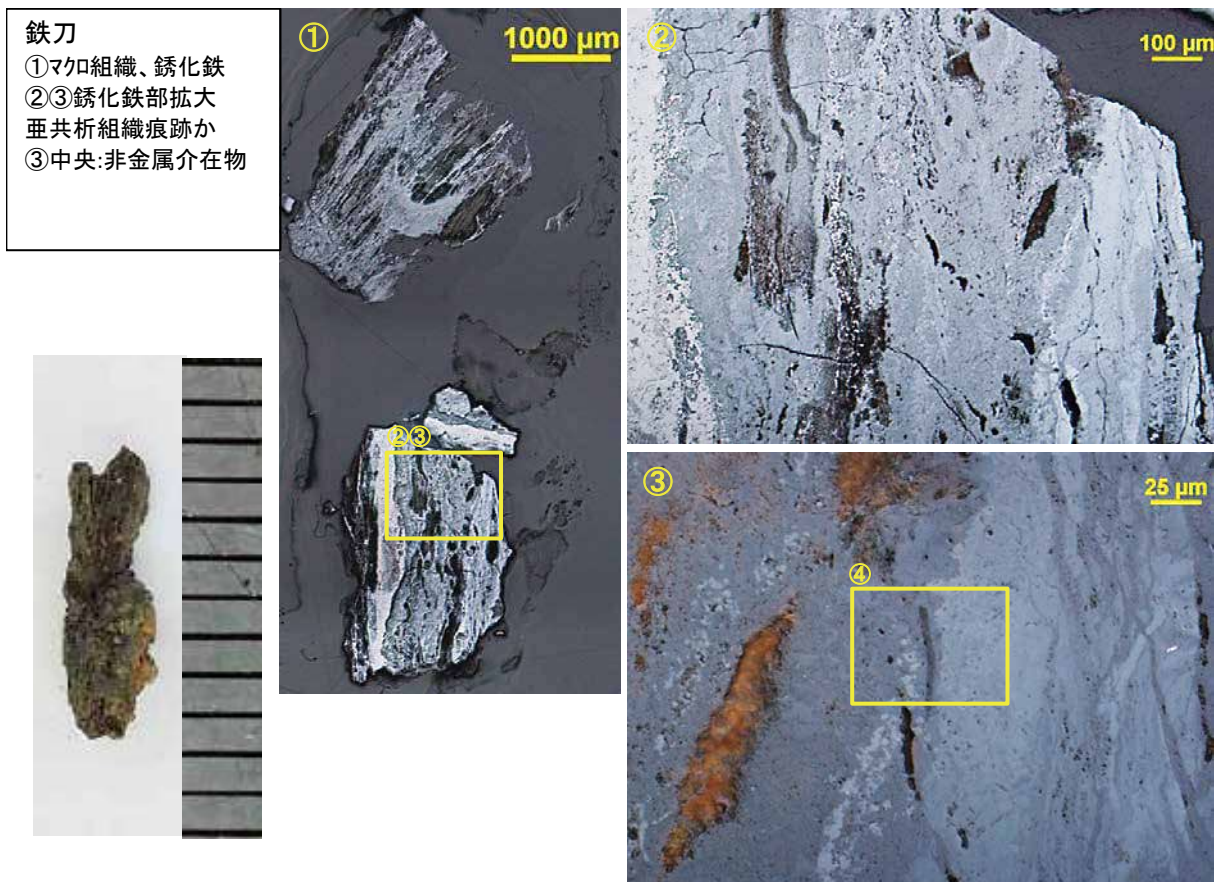
図版141④中央に鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。素地部分は特性X線像をみると珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K) に強い反応がある。定量分析値は $17.7\% \text{Si} - 8.3\% \text{Al} - 7.6\% \text{Ca} - 5.9\% \text{K} - 17.9\% \text{O}$  (分析点1) であった。非晶質珪酸塩である。また微細な淡灰色結晶は、特性X線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si) に反応がみられる。定量分析値は $52.7\% \text{FeO} - 14.2\% \text{Si} - 1.0\% \text{Ca} - 33.1\% \text{O}$  (分析点2) であった。ファヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) で、少量ライム (CaO) を固溶する。

### 4. 考察

刀子から採取された小破片4点は、いずれも錆化が進んでおり金属鉄が残存しない状態であった。最も残存状態の良い破片 (HEI-3) は、垂共析組織 (フェライト・少量パーライト) と推定される痕跡が部分的に観察された。この破

片は芯金（軟鉄）部分であった可能性が高いと考えられる。

また内部には鍛打に伴い展伸した形状の非金属介在物も確認された。EPMA を用いた定性・定量分析の結果、非金属介在物の素地はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、微細なファヤライトが晶出することが明らかとなった。この組成からは、鉄素材を熱間で折り返し鍛錬した時の鍛接剤（粘土汁・藁灰）による介在物と推定される。



図版141 鉄刀の顕微鏡組織・EPMA調査結果

# 第V章 まとめ

## 第1節 遺物・遺構が示す近代化

今回出土した近代遺物・遺構は多種多様である。製造販売・構築の実年代を辿ることができるものも多く含まれ、人々に与えた影響や生活変化を捉える上においては、非常に有効なアイテムと言えよう。また、『北谷町史』や郷友会が発刊した各「字誌」には、聞き取り調査による戦前の様子を伝えた証言が多く残されている。肉声が文書化されたものであり、戦前の生活ぶりを実感できる最良の記録と言えよう。この他、新聞記事・商品広告や民俗・文献研究等も参考にするとともに、個々の遺物・遺構が持つ社会背景をマッチングさせることで、つい70年ほど前まで存在していた平安山集落での生活実態に迫りたい。

なお、第Ⅲ章第3節：近現代遺物及び本節をまとめるにあたっては、多くの企業の担当者やその道の権威者に対して個別に問い合わせを行った。特に以下の方々にはご丁寧に対応していただき、非常に有益なご教示を賜った。深謝の意を表したい。

公益社団法人 日本装削蹄協会	蹄鉄
味の素株式会社 広報部 牛島康明氏	化学調味料
キッコーマン株式会社 国際食文化研究センター	醤油
株式会社ウテナ 広報宣伝部 八重樫亜弥氏	化粧クリーム
株式会社アサヒコーポレーション 受注センター	ゴム靴
日本歯科医史学会 日本大学松戸歯学部 渋谷鑛氏	入れ歯

### 1. 金属製品

#### 鉄鎌

草刈鎌が14点、稲刈鎌が1点見つかっている。戦前沖縄における草刈鎌は、殆どが高知県で作られた「土佐鎌」と呼ばれるものであったという。明治末期頃から熊本や鹿児島島の商人によって移入され、民具の中ではいち早く外来商品化したとされる。一方の稲刈鎌についても、一時期熊本からの移入があったものの、使いにくいのであまり普及しなかったとされ、今回の出土比率はこれらのことを裏付ける結果となった。いずれにしても、沖縄における鎌類については、これより前にはその存在が明確に確認されておらず、需要の空白を狙って南九州系の商人が介在したことが予想される。



鉄鎌刃部

#### ステンレス製菜切り包丁

刃の平（ひら）に「日満 神徳 登録 STAINLESS STEEL」の線刻が認められた。「日満」という対等国家的な表現からすると、少なくとも満州国が成立した1932（昭和7）年以降のものであり、満州に関連の深い場所で製造された可能性が高いように思われる。1933（昭和8）年には昭和製鋼所が満州に移転し、世界でも指折りの製鉄拠点となっていた。戦前においてステンレス鋼製造技術は既に確立されていたが、他の刃物はいずれも鉄製であること、かなり使い込んでいるところからすると、高価或いは稀少性のある代物であったのであろう。出征や満鉄従事のために大陸に渡った者は北谷村でも少なくなく、その彼らが持ち帰ったものとの想像も可能である。



包丁刃の平の線刻

#### 銀メッキスプーン

祝女殿内屋敷からの出土である。陽刻・デザイン・規格から、アメリカのWm.Rogers製「COTILION パターン（1937年）」のアイスティー／パフェスプーンであることが判明した。海外からの出稼ぎから戻った者から譲り受けたということも十分考えられるが、買い求めたものとするならば、当時の沖縄で入手可能な物品がかなり多様であったことが窺える資料となる。『琉球新報』1917（大正6）年記事には、那覇の並川商店が西洋料理用ナイフ・フォーク等を取り扱っていることが記載されている。また、購入目



アメリカ製スプーン

的が必ずしもアイステイー用とは限らないが、当時の紅茶については、『沖縄タイムス』1922（大正11）年の広告にて、那覇の丹下商店が他の嗜好品とともに取り扱っていることが分かる。

## 2. ガラス瓶

個体数の種別集計をするにあたって、分類は桜井（2006）に準じた。しかし、分類しきれないもの（例えば、飲料と調味料、酒類と清涼飲料、日常生活品と文具、それぞれの間で分類作業が難航した）も多数あったため、以下のような大別に留めた。併せて個体数と出土比率を示すが、この数値には米軍由来の可能性が高いもの（コカ・コーラ瓶やワンウェイボトルのビール瓶等）は含まれていない。

飲料・調味料瓶：50点（20.5%）    化粧瓶：86点（35.2%）    薬瓶：50点（20.5%）  
日用品瓶：21点（8.6%）            不明瓶：37点（15.2%）

化粧瓶が突出して大きな割合を占めており、これは学校・駅舎・病院等といった公共施設の遺跡や、軍壕・軍病院・共同墓地等といった県内の戦争関連遺跡には認められない傾向である。しかしこの出土比率と、当時の生活者が購入した品目の比率の間には、考慮すべき以下の事象がある。

- ① 飲料・調味料瓶については、既に「回収再利用（リターナブル）」がなされていた。『沖縄タイムス』1922（大正11）年の清酒広告にも、当該店印の一升瓶を持参するとその代金を支払う旨が記載されている。  
⇒1本の瓶に対して複数回の売買行為があった可能性を考える必要がある。
- ② 飲料瓶は「転用」されることが多かった。特に戦中の物資不足の際には、全く中身の異なるものを入れて販売した例もあり、1943（昭和18）年には丸善がサイダー瓶やビール瓶にインクを詰めて販売していたという。製造販売業者でなくとも、使い勝手の良い瓶は、個人が別目的でリユースしたことも十分に予想できる。  
⇒出土した飲料瓶の本来の中身が判明しても、最終的な目的が全く異なっていた可能性を考慮しなければならない。
- ③ ラムネ瓶は壊されて中からビー玉が取り出されることが多々あった。ラムネ玉を使ったビー玉遊びは、明治30年頃から始まったとされる。今回出土したラムネ瓶には完品がなく、それとは別に無色のビー玉が1点認められている。また手頃なサイズの瓶は円盤状に加工して、やはり子供たちの遊びに使用されることがあった。  
⇒ある種の瓶は意図的に破砕されるため、個体数集計に影響を与える可能性がある。
- ④ 明治末頃には、那覇西町に沖縄初となるガラス工場が創業し、その原料として屑ガラスが集められた。この屑ガラスには「白い瓶」「一升瓶」「醤油瓶」が含まれた。  
⇒カレット資源として回収されるため、購入されて確実に存在したはずの瓶が消滅することにより、本来購入された個体数に変動が生じる。

### 酒類

ビール瓶8点のうち、1点は王冠栓でエンボスなし、残りは全て1906（明治39）年設立の大日本麦酒製であった。更にこのうち1点は、コルク栓でキックをもつ古いタイプのものであった。この他に、キックがみられるものやエンボスが全くないものをワインと判断し、8点の資料を得ている。清酒として判断できるものはなかった。遺跡からの出土資料の中には、鉄製の「王冠抜き」も4点見つかっているが、王冠栓自体は1点も得られていない。



沖縄の人々とビールとの関わり合いは、当時の新聞記事・広告からも垣間見える。大正年間には、奥武山公園でビアホールが例年開業されていたこと、ビールの輸入が大きく増加してその8割が那覇で消費されていたこと等が掲載されており、都市部においてビールは非常に好まれていたことが分かる。北谷村におけるビールについての記述は少ないが、以下のような話が残っている。

「戦前、空手家が自宅を訪れた師匠をビールで接待した。師匠が帰り、片付けた残り物のビールを飲んだ台所の女性たちが、「アギジャビヨー、馬の小便だよ。」と、初めてのビールの味に吃驚した。」

この話から、男性にはある程度飲まれていたビールではあるが、女性たちにはどんな味がするのか全く認知されていなかったことが分かる。那覇のような都市部に比べると、ビール普及の程度はかなり低かったのであろう。



泡盛は一貫して沖縄の人に好まれていたようであるが、基本的には大甕からの量り売りや陶器瓶への詰め売りが主であった。泡盛を最初にガラス瓶詰売りにしたのは識名酒造とされるが、それも戦後の話であり、しかもソースの空き瓶を利用したとある。瑞泉酒造でも当初の瓶はビールや醤油瓶の回収で賄っており、王冠栓はコーラのを整形し直して使ったという。『戦記』にも「日本兵からもらった泡盛の一升瓶」という文言が出てくるが、これも何かの空き瓶に量り売りしてもらったものと考えるのが妥当であろう。

## 牛乳

5 勺瓶と 1 合瓶という 2 種類の規格が認められた。前者は明治から大正年間の牛乳瓶規格で、口部が確認できるものは全てスクリュウ栓である。日本における牛乳瓶の蓋は、初期の頃はコルク栓や紙巻であったのが、その後王冠栓や紙蓋になっていくことが知られているが、スクリュウ栓も少数ながら存在していた。北谷町上勢頭古墓群でも「九〇瓦入」即ち 5 勺瓶が 1 点報告されていて、これもスクリュウ瓶である。今回の出土資料には「上原牛乳店」のエンボスを持つものがあり、このような店名入り容器の製造が島外でなされたとは考えにくい。戦前の県内で飲料容器としてのガラス瓶が製造されたという記録は見当たらなかったが、スクリュウ口の牛乳瓶は島内で製造され、そのことが沖縄の地域性を示している可能性は高い。



牛乳瓶

1 合瓶は 1970 (昭和 45) 年に容量標準が 200ml に変わるまで続いた、昭和前半期の規格である。側面に「消毒」に関わる文言がエンボスされているものが多いが、これには 1900 (明治 33) 年の「牛乳営業取締規則」以降、消毒・殺菌の指導・義務化が段階的に強化されていったことが反映されている。

『沖縄毎日新聞』1914 (大正 3) 年記事に、前年中の県内牛乳搾取高等が記載されている。これによると、乳牛頭数は名護 6 頭・嘉手納 14 頭・宮古島 2 頭、また営業者 (搾乳業者のことと思われる) は名護 3・嘉手納 6・宮古島 1 とあり、嘉手納が大正年間には県内最大の牛乳生産拠点であったことが分かる。

更に昭和頃の話として、現北谷町域内には 2 軒の牛乳屋があったという記録が残っている。

- ① 北谷・乳屋崎原 (チーヤーサチバル) : 白と黒の混ざった乳牛が 6 頭おり、牛乳は搾ってから沸騰させて、一合や五勺毎に牛乳瓶に詰めていた。雇人二人が、「崎原牛乳箱」と記された約 50 本入りの箱を毛布のようなもので包んで配達していた。昭和の初めて一合が五銭の値段であった。(『町史 3』)
- ② 桑江又前屋取・チーチャー : 北谷、屋宜仲山から牛乳を仕入れていたらしい。自転車で配達していた。(『地名』)

小売・配達のを消費するだけでなく、搾乳量の減った乳牛を飼い、自分で搾乳・煮沸消毒したという例もあった。戦前の北谷においては既に飲乳の習慣が根付いてことが窺える。ただし証言記録を見る限り、これは母乳が出ない場合や大人を含む病人に対して与えられる場合が多く、現在のように恒常的に牛乳を飲む人はかなり少なかったようである。

## 化学調味料

【鈴木商店 (現・味の素株式会社)】の「味の素」が 4 点得られており、瓶の形状・サイズや底面エンボスから、「味の素」が宮内省御用達となった 1927 (昭和 2) 年以降の 15g (4 勺) 入り瓶であることが判明した。

『平上誌』に残る証言に、「戦前の一般家庭の調味料は、塩、味噌が主で、醤油、砂糖、酢などはめったに使わなかった。味噌はどの家庭でも作った。醤油、甘酒なども作る家庭もあった。」とあり、塩・味噌以外の調味料の使用については非常に消極的な印象を受ける。それでいながら、化学調味料瓶が複数出土することについては、些か意外な感がある。

しかし、味の素株式会社への問い合わせや、公表されている同社史の検討から、戦前の沖縄では「味の素」がかなり多量に出回っていたことが分かった。人気商品ゆえに集客のための安売り・乱売されることも多く、これを防ぐために特約店等からなる「沖縄県味の素会」という組織が 1930 (昭和 5) 年までに成立していた。

また、「味の素」と類似形状の資料が 1 点認められており、この底面には右書きで「味の鑑」とエンボスされている。味の素株式会社広報部によると、この商品は大阪の石川屋調味料製作所で製造販売されたもので、「味の素」の類似品は 1920 (大正 9) 年頃から関西を中心に登場し、その数 35 銘柄にも及んだそうである。余談になるが、沖縄では戦後



味の素・味の鑑

もこのような類似品が多く出回っており、1964（昭和 39）年頃にはうま味の主成分である MSG の人口あたりの使用量は沖縄が世界一だったという。

### 醤油

醤油瓶のうち 1 点にはロゴマークのエンボスがあり、【野田醤油醸造（現・キッコーマン株式会社）】の「亀甲萬醤油」であることが分かった。同社 35 年史によると、エンボスを持つ容器瓶の製造は 1931（昭和 6）年以降とされる。



亀甲萬醤油

前引用にあるように、北谷での醤油の使用頻度は低かったようであるが、篤農家に近いウフジネー（大所帯）では自家製造されていたという。しかしその一方で、バサムチャー（荷馬車業者）が那覇から運んでくるマチャニー（商店の発注品）の中にも醤油が含まれており、村内でも醤油を取り扱うマチャ（商店）が数軒認められる。

沖縄市開地屋取集落遺跡でも同瓶と思われるものが出土しているが、年配者への聞き取り調査ではそのような瓶を見たり使ったりしたという話はなかったとのことなので、小売の段階では泡盛同様に量り売りされていた可能性もある。

沖縄島内での本格的な醤油醸造は、1905（明治 38）年に浜田商店が久米町で開始しており、大正期には年間 1,000 石を生産できるようになった。しかし、まだまだ馴染みの薄いものだったようで、『沖縄朝日新聞』1925（大正 14）年の那覇西本町・慶田支店広告には、ビール・清酒・洋酒と併記されて醤油が宣伝されている。この醤油自体は「亀甲萬」ではないが、この頃の醤油が移入された移入酒類と同程度の価値をもつ存在であったことが窺える。

昭和に入ると、移入醤油も次第に沖縄で根付いていったようである。キッコーマン国際食文化研究センターによると、米軍統治下の沖縄にキッコーマン醤油を輸出できるようになったのは 1951（昭和 26）年であったが、これは沖縄の人々からの要望が非常に強かったためであった。現地産業保護政策により翌年輸入が禁止されるものの、島内需要者の要望は依然として強く、1953（昭和 28）年には禁止が解除されている。

### 整髪料

椿油・香油のうち来歴がはっきりしているのは 1 点のみで、【島村商店（現・株式会社シマムラ）】の「鈴虫香油」（1912～）である。その他「サハラ香油」のエンボスを持つものが 4 点、「白椿」のエンボスを持つものが 2 点得られており、前者は大阪市中央区上本町西で製造されていたらしいこと以外は詳細不明、後者は全く出自が分かっていない。

これらの髪油については、化粧クリーム等の白色瓶よりも早く出回っていた可能性がある。1887（明治 20）年には、有力寄留商人平尾喜八の甥・平尾巳之吉が独立する際、香油や歯磨粉等の小間物行商を始め、財を成している。当初髪油は、グマングワーウヤー（小間物売り）によって、櫛・糸・針・石鹼・マッチ等と一緒に販売または卵と交換されていたもので、その卵は那覇の市場で売り、その代金でまた小間物の仕入れをしていたという。北谷村内にも髪油や煙草等の行商から身を興し、マチャを開業した者もいた。しかし大正末頃からは、髪油は薬屋で店舗販売されるようになったという。

一方ポマードについては、【井田京栄堂】の「メヌマポマード」（1918～）が 2 点、出自不明の「メナミポマード」が 2 点得られている。前者はそれまで出回っていた海外製品と異なり、純植物性油を原料にしたことから全国的にヒットした商品として知られる。



メヌマポマード

戦前北谷の調髪事情については、『平上誌』に以下のような記載がある。「断髪屋で粘りのあるポマードを付けて自慢する者もいた。」「男性はダンパチャー（断髪屋）を利用するが、女性はカンパーを自分で結っていた。」「僅かではあるが、バリカンを購入して自宅で散髪する家庭もあった。」「女学生のオカッパは自宅で調髪していた。」これらの証言は、整髪料や調髪具の使用状況を何となく想起させものである。出土した鉄製品の中には、指掛けのある「理容鋏」2 点認められている。平安山集落にもケンドー沿いに断髪屋は存在していたが、この理容鋏は自宅での調髪用とも考えることができる。

### 化粧クリーム

【久保政吉商店（現・株式会社ウテナ）】の「ウテナ・バニシングクリーム」、【平尾賛平商店（1954 年廃業）】の「レートクリーム」「レートメリー」「レートフード」、【天野源七商店（現・株式会社ヘチマコロ）】の「ヘチマクリーム」の他、来歴不明なものもかなり多く認められた。最も点数の多かったのが「ウテナ・バニシングクリーム」の 11 点であったので、株式会社ウテナ広報宣伝部に問い合わせた結果、以下のような情報提供を得た。



ウテナクリーム

- ・出土したガラス瓶の形状等から、1928（昭和3）～1943（昭和18）年の間に生産販売されたものである。
- ・水谷八重子ら当時の人気女優をイメージキャラクターに、新聞・雑誌等で大々的に広告されていた。
- ・特段「ハイカラなもの」という区別はなく、手頃な価格設定で幅広い年代に好まれた。
- ・沖縄への正規流通ルートはなかったが、鹿児島島の卸が運んでいた「レート」商品とともに持ち込まれていたのではないかと推察される。
- ・最も早く沖縄進出を図った化粧品会社は「ナリス化粧品」で、訪問販売ルートでの顧客開拓をしていたらしい。

今回の出土遺物にこの「ナリス化粧品」製品と判別できるものは含まれていないが、同社の創業が1932（昭和7）年であることからすると、本土系化粧品の本格的な沖縄流通は、全体として概ね昭和10年代とするのが妥当であろう。

### 3. 北谷への島外品流入経路

島外からの品々の移入を担っていたのは、「寄留商人」と呼ばれる県外からの移住商人である。彼らが沖縄に姿を現し始めるのは1870年代後半頃からで、那覇を拠点に商業活動を行った。島外からの移入品である今回の出土資料が、郷里にも副拠点を置いていた寄留商人を通じてもたらされたことはほぼ確実であり、寄留商人の拠点である那覇が島外品の主たる受け入れ地であったことが推察できる。

那覇にもたらされた島外品は、バサムチャー（荷馬車業者）によって北谷村まで届けられたことが諸記録に残されている。彼らは、那覇への往路には砂糖樽を積み、復路はマチャニー（商店の発注品）を積んで帰ることが専らであった。マチャ（商店）からの買い出し要望は年中通してあり、バサムチャーはその商品を買出しして各マチャまで直接運んだ。マチャにとっては商品の購入が確実で安全性があり、バサムチャーにとっては往路の砂糖運搬だけでは少ない稼ぎを復路で補えるというメリットもあって、両者の間には長年に渡る信頼関係が築かれていたという。また、買い出しの要望はマチャだけでなく篤農家からも頻繁にあり、篤農家の多い上勢頭・下勢頭では、バサムチャーの家まで直接足を運んで品物購入の依頼する人もいた。

また、1923（大正12）年までの記録でしかないが、白米・大豆・昆布・素麺・石油については、嘉手納に近い比謝港からの移入があったことが分かっている。バサムチャーの中には那覇ではなく嘉手納との間で運搬行為をした者も存在しており、小さいマチャは嘉手納から仕入れることもあったという。このように全ての移入品が那覇のみからもたらされた訳ではないが、生活必需品ではない個人的嗜好品については、那覇の寄留商人が関わっていたと考えるのが自然である。今回特に出土点数の多かった化粧品類もやはり、那覇卸業者－荷馬車業者（或いは行商人）経由で北谷村のマチャ或いは個人にもたされたことは想像し易い。

### 4. 生活習俗に関わること

#### 風呂（入浴）

ここで言う「風呂（入浴）」とは、「容器に溜めたお湯に浸かる」行為を指す。現在の沖縄では「風呂（入浴）」の習慣は殆どないとされ、「シャワーを浴びる」ことが主流になっていることは、全国的にも知られている。亜熱帯の沖縄ではお湯に浸かって温まる必要がない、ということがその主たる理由であるならば、戦前においても「水浴び」「湯浴び」が、身体を洗うための通常のスタイルであったことになる。証言記録にも「当時の人たちは日頃、海や川で水浴びをしていたが、冬になると週一回程度、家庭で湯を沸かし浴びた。」（『平上誌』）、「夏だと村井戸で浴びたり、また自宅の井戸で浴びたりした。冬はお湯を沸かしてハンジリ（半切り＝たらい）に入れ、台所近くで浴びたりした。」（『町史3』）というのがある。

しかし同時に「風呂（入浴）」に関わる証言が散見されたので、以下に要約して示す。

- ① 「銭湯は桑江又前と野里又前の二カ所にあったが、嘉手納まで行くこともあった。正月の銭湯は大変な混みようで、夜の明けるまで営業していたが、先に入った人の垢が浮いて汚かった。」（『平上誌』）
- ② 「（昭和2年にマチャを開店した亀島家は）昭和7年頃に、店構えを大きくし、商品も増やしていった。その際風呂場を造り、母屋との間に大きな水タンクも設置した。」（『平上誌』）
- ③ 「ミーヤーの五右衛門風呂は、（寄宿していた）兵隊に占領され、家人は夜中を使用することになった。風呂に入る順番も、まず大佐が入り、大尉、少尉、将校の後に曹長、兵長、一等兵が入った。その後に夜遅くから家族の使用となるが、汚れているので炊き直して使用した。」（『平上誌』）
- ④ 桑江又前屋取のユーフルヤー：「風呂屋と鍛冶屋をしていた。」（『地名』）

⑤ 伊礼のチサバ：「風呂屋もしていた。ナガサ（※川の名前）から水を引いて風呂を沸かしていた。」（『地名』）

これらの記録からは、論理的に以下のような事柄を導き出すことができる。まず戦前の北谷村には、「銭湯」「風呂屋」という職業が存在した。そしてお湯の中に人が浸かったから「垢が浮いて」いたということになる。また「五右衛門風呂」をもつ家もあった。五右衛門風呂も中に人が浸かるものであって、浴び湯を沸かすための単なる釜ではない。従って、戦前の北谷には「風呂（入浴）」という行為が確実にあったことになる。しかしながら、風呂は全世界帯にあるものでもなく、その設置にはある程度の財力が必要であったようである。「風呂（入浴）」の頻度は低く、通常は「水浴び」「湯浴び」をしていた。だからこそ、「銭湯」や「風呂屋」が成立していたと考えられる。また、風呂を沸かすには「水」と「火」が必要である。「水」を得るために、②では「大きな水タンクを設置」して、⑤では「ナガサから水を引いて」いる。「火」については、④では鍛冶屋との兼業によって、火力を有効に使ったことが想像できる。

今回の平安山原A遺跡の調査では、祝女殿内屋敷から「風呂場」のような施設が検出されている。井戸から長く伸びた暗渠状の上水路が開口した付近に、コンクリート製の溜枡状構造物があり、燃烧痕跡も認められる。これが「風呂場」だとして、どのように湯を沸かしたのかは分かりかねるのだが、「水」と「火」という要素は揃っている。うるま市楚南村跡でも、「風呂」としてセメント製の溜枡状のものが報告されており、その外壁には「昭和七年度 旧九月設立」という刻字がみられた。

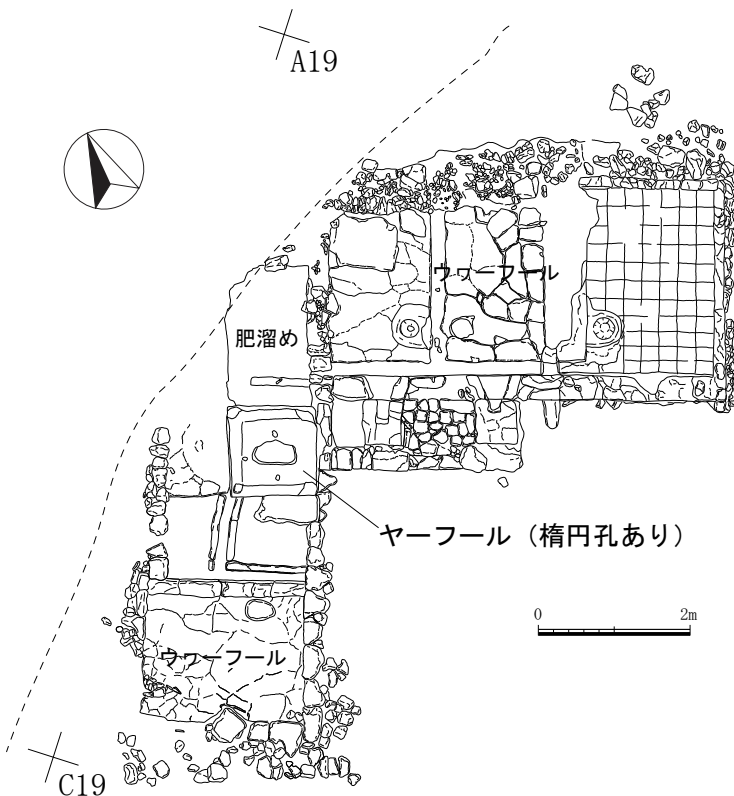
和式風便所

祝女殿内屋敷からは和式便所の痕跡が検出された。コンクリートに楕円形の穴が削り貫かれただけのもので、ウーパールと並置されてはいるが、明らかに別な空間として設けられている。排泄物は豚舎ではなく、直接肥溜めに行くようになっている。また、前述の楚南村跡でもセメント製和式便所が見つかっている。これもウーパールの横に位置しており、聞き取りによるとその築造は昭和初期頃とのことである。

この和式風への改良は、1944（昭和 19）年に日本軍が北谷村に進駐した際、一般民家にも一部の日本兵が寄宿したことと関連があるものと、本整理作業当初は捉えていた。『戦記』に残る浜川区長の証言を以下に要約する。

「戦前の便所はフルだったが、豚が供出物だったので、「豚に糞は食わずな！」という命令も出た。しかし生活は容易に変えられず、そのままフルを使用していた。内地の兵隊たちはそれを嫌がり、道端や民家の側などで用を足していた。フルである場合でも、仲間の兵隊に豚のしっぽを捕まえさせ、その際に用を足す有様だった。」

ウーパールを継続使用する地元民と、それになかなか対応できない内地の兵隊との間で、混乱が生じていたことが窺える。しかし、明治 30年代から始まった風俗改良運動の中で、1916（大正 5）年頃にはウーパールを新設することが禁止され、トウシヌミーも潰すこととされた。その結果、ウーパールの脇にはヤーフルと呼ばれる汲み取り式便所が設置されるようになるが、祝女殿内屋敷での検出状況は、まさにこの流れに適合する。なお、昭和に入っても改良運動は続いており、家畜防疫員は警察官と一緒に農家を巡回し、豚舎改善の指導を行っている。



第 192 図 祝女殿内屋敷の便所 (S=1/100)

『朝日新聞・銚後美談』1943（昭和18年）には、平安山集落について「中頭郡北谷村字平安山は昭和九年、生活改善特別指導部落の指定を受け、以来畦立植、竈の改善、改良便所等県下の優良部落として農業改善や生活刷新に字民一致協力の躍進をつづけ、県下に新興部落の名が高い。（後略）」との記事が掲載されている。結果として生活改善に成功したという内容ではあるが、1934（昭和9）年の段階で生活改善特別指導部落の指定を受けていることも事実である。従って、集落全体としての便所の改善化は1934～1943年の間に進められたことになる。

この改善化についてのもう1つの傍証となるのが、今回出土した長方形を呈する信楽焼の和式大便器の破片である。この形状はそれまでの木製を模したもので、その後、品質を高める為に高温で焼成するようになり、歪みの出にくい小判形に変化していく。祝女殿内屋敷のヤーフールの楕円孔も、この便器設置を前提として割り貫かれたもののようにも思える。



信楽焼の方形大便器片

## ウマへの装蹄

1890（明治23）年、蹄鉄工は国家資格とされ、その養成は獣医学校や農学校付属の蹄鉄専科で行われた。ただし、この場合の蹄鉄工とは装蹄・削蹄を行う者のことであり、「造蹄」自体には特に資格を必要とはしなかった。蹄鉄は、造り自体がそれほど複雑ではなく、しかも消耗品でもあるため、ムラの鍛冶屋で製造された可能性が高い。

今回出土した蹄鉄22点は、いずれも長方形を呈する6か所の鋳穴を有しており、鋳穴上に溝をもたない「無溝式蹄鉄」である。石垣島を含む県内各遺跡で確認できた出土資料も、ほぼこれと類似している。前方弧状部分には、殆どのが舌部をもってそれが上方に折り曲げられているが、舌部を有さずに湾曲部全体を反り返すものもみられる。公益社団法人日本装削蹄協会によると、舌部を有するものは小型ウマ用である可能性が高いとのこと。証言記録でも北谷で飼われていたのはナーク（宮古）・シマグワー（島小）・ザッス（雑種）で、ザッスのみが比較的大型とされる。出土した蹄鉄には少なくとも大中小3つのサイズがあり、後端部形状や全体的な湾曲度合には異同が認められる。これは、前肢・後肢の形状や馬の個体差の違いに加え、蹄鉄製作者が単一ではないことを感じさせる。

沖縄への蹄鉄技術の導入は1920（大正9）年以降、日本政府による家畜改良政策に伴ったものとされる。元来日本の在来馬は蹄が強く、蹄鉄がなくともさほど問題がなかったが、荷馬車・客馬車業の発生に伴い、多くの荷を引くことによる馬蹄への負担増もあって、以後「装蹄」が根付いていったことは想像に難くない。しかしその場合は必ず、処々に装蹄の有資格者がいたはずである。前述のようにその資格取得にあたっては獣医学校や農学校付属での履修が必須となるが、1916（大正5）年には既に嘉手納に移転していた県立農学校が、このことに無関係ではなかったと思われる。



大小の蹄鉄

## 入れ歯

出土した資料について日本歯科医史学会に問い合わせ、多くの情報提供を得た。日本における義歯の歴史は室町時代に遡る。「木床義歯」或いは「皇国義歯」と呼ばれるもので、人工歯には蠟石・象牙等を使用していた。明治に至るまでの約300年間使用されていたが、高価であったため一般庶民への普及はなかったという。1852年、アメリカのタイヤメーカーであるグッドイヤー社が高温・高圧で固めた蒸和ゴムの開発に成功、それが義歯の「床」に利用されるようになった。また人工の歯部については、1845年頃、アメリカのS.S.White社によって精巧な陶製品が開発された。これらの新素材によって作られた義歯は、1880（明治13）年頃に日本へ輸入され、それ以降、義歯の主流はこの「ゴム床義歯（西洋義歯）」となる。国産の「ゴム床義歯」は、1909（明治42）年頃に蒸和釜の開発に成功した山中卯八（現・株式会社吉田製作所の創設者）によって始まり、現在のレジン床に変わるのは第二次大戦後のこととなる。



入れ歯

県内での出土事例として、沖縄戦直後に設置された宜野座村内の共同墓地のものがある。上下顎用がともに複数得られており、サイズや形状は一様ではない。この中には人工歯の抜け落ちそうな部分に金具で補強されているものもみられるため、そのような義歯のメンテナンス技術を持つ者が存在したことになる。戦前の北谷村内には少なくとも歯医者が2軒あったが、通常の歯の治療以外にこのような義歯の提供やメンテナンスにまで関わっていたのかは不明である。

いずれにしても、流通した年代幅が限定できる近代遺物の1つであり、歯科医史学においても貴重な資料として捉えることのできる出土事例となった。考古遺物としては珍品と言えるが、今後の資料蓄積で施療・流通の実態が解明されていくものと思われる。

# 関係年表

西暦	元号年	世界・日本	沖縄・北谷	移入品	経済	貨幣	本磁	在地
1868年	明治元	明治維新。			王府支配期		流入制限期	
1869年	明治2							
1870年	明治3							
1871年	明治4	新貨条例制定、1円を単位とする。		東京でラムネの製造開始。				
1872年	明治5	琉球藩設置。						
1873年	明治6	砂糖の自由貿易が許される。						
1874年	明治7							
1875年	明治8			日本人製造による最初のサイダー「日の出鶴」発売。				
1876年	明治9		寄留商人が沖縄に現れる。					
1877年	明治10	西南戦争勃発。		開拓使麦酒醸造所「札幌麦酒」発売。				
1878年	明治11							
1879年	明治12	沖縄県設置。	島外から安価な焼物が大量流入。		貨幣経済導入期	1期	有田焼等の大量流入期	沖縄産陶器の低迷期
1880年	明治13			ゴム床義歯の輸入開始。				
1881年	明治14		ノロに対する新たな役俸支給の決定。					
1882年	明治15		北谷小学校設置。					
1883年	明治16							
1884年	明治17			明治屋「三ツ矢平野水」発売。				
1885年	明治18		酸化コバルト顔料の本格的な使用開始。					
1886年	明治19							
1887年	明治20			国産の玉ラムネ瓶の製造・発売。				
1888年	明治21			JBC・明治屋「キリンビール」発売。				
1889年	明治22	大日本帝国憲法発布。	敷地・家屋の制限令撤廃。	秋元己之助「日の出鶴」を「金線サイダー」に改称。				
1890年	明治23	蹄鉄工の国家資格化。		日本麦酒「恵比寿ビール」発売。				
1891年	明治24							
1892年	明治25			大阪麦酒「アサヒビール」発売。				
1893年	明治26							
1894年	明治27	日清戦争勃発。	玉那覇酒造工場が北谷で創業。					
1895年	明治28							
1896年	明治29							
1897年	明治30	貨幣法制定により、円の価値が倍に。						
1898年	明治31							
1899年	明治32		土地整理法発布。					
1900年	明治33			国産ビールへの王冠栓使用開始。 牛乳ガラス瓶が義務付けられる。				
1901年	明治34							
1902年	明治35							
1903年	明治36		土地整理事業終了。					
1904年	明治37	日露戦争勃発。		国産サイダーへの王冠栓使用開始。				
1905年	明治38							
1906年	明治39	南満州鉄道設立。	国頭街道改築工事が平安山村まで達する。	日本・札幌・大阪が合併し、大日本麦酒創立。				
1907年	明治40			帝国鉱泉「三ツ矢印平野シャンペンサイダー」発売。				
1908年	明治41		北谷間切から北谷村に改称。					
1909年	明治42			鈴木製菓所「味の素」発売。 新天堂山田安民薬房「ロート目薬」発売。				
1910年	明治43	帝国在郷軍人会発足。	沖縄県諸禄処分法発布。	肥後守ナイフ、商標登録。				
1911年	明治44		沖縄製糖株式会社嘉手納工場竣工。 北谷村役場が平安山ヌ上に移転。					
1912年	大正元			島村商店「鈴虫香油」発売。				
1913年	大正2							
1914年	大正3	第一次世界大戦勃発。 帝国在郷軍人会に海軍が加わる。	砥部焼の流入が始まる？	布引鉱泉所「ダイヤモンドレモン」発売。 桃谷順天館「白色美顔水」発売。				
1915年	大正4			天野源七商店「ヘチマクリーム」発売。 平尾賛平商店「レートフード」発売。				
1916年	大正5		ウーパール新造が禁止される。 沖縄県立農学校が嘉手納に移転。	那覇ピアホール営業広告（『新報』）。				
1917年	大正6							
1918年	大正7			平尾賛平商店「レートメリー」発売。 井田京栄堂「メヌマボマード」発売。				
1919年	大正8							
1920年	大正9		沖縄県に蹄鉄技術が導入される。	「味の素」の類似品が登場。				
1921年	大正10			日本麦酒鉱泉、帝国鉱泉を合併。				
1922年	大正11		沖縄県営鉄道嘉手納線の開通。	清酒瓶回収・紅茶の販売広告（『タイムス』）。 日本足袋「貼付式地下足袋」発明。				
1923年	大正12	関東大震災。						
1924年	大正13		「ソテツ地獄」始まる。 西表島北で海底火山爆発（軽石大発生）。					
1925年	大正14			ビール輸入増大記事（『沖朝』）。				
1926年	昭和元	民芸運動始まる。			恐慌不況期	砥部焼流入期	民芸運動による復興期	
1927年	昭和2			鈴木商店「味の素」（出土瓶）発売。				
1928年	昭和3			久保政吉商店「ウテナクリーム」発売。				
1929年	昭和4		北谷郵便局で電信業務始まる（二重碍子の使用）。					
1930年	昭和5	昭和恐慌（～1931）。		この頃までに「沖縄味の素会」が組織化。				
1931年	昭和6		那覇に百貨店山形屋が開店。	両口点眼瓶の発明。				
1932年	昭和7	満州国建国。 管理通貨制へ移行。		化粧品沖縄訪問販売の先駆者・ナリス化粧品創業。				
1933年	昭和8	昭和製鋼所が満州に移転。		大日本麦酒、日本麦酒鉱泉を合併。				
1934年	昭和9		平安山、生活改善特別指導部落の指定。	大日本除虫菊「キンチョール」発売。				
1935年	昭和10							
1936年	昭和11							
1937年	昭和12	日中戦争勃発。		出土スプーン製造。				
1938年	昭和13	補助貨幣の製造開始。						
1939年	昭和14	国民徴用令が公布。						
1940年	昭和15	ゴム履物統制令。						
1941年	昭和16	太平洋戦争勃発。 金属回収令公布。						
1942年	昭和17	食糧管理法制定。「供出」開始。	北谷小学校設置60周年。					
1943年	昭和18		平安山新興部落記事（『朝日』）。	「ウテナクリーム」ガラス瓶製造中止→統制。				
1944年	昭和19		沖縄守備軍・第32軍が創設される。 日本軍、北谷村に進駐。					
1945年	昭和20	終戦。	平安山集落ほとんどが焼失。→米軍上陸。					



## 第2節 戦前の平安山ノロについて

### 最後の平安山ノロ・島袋カナ

伝わっている最後の「平安山ノロ」は、島袋カナという人物である。『町史』や『ノロ』等の各文献に残る彼女についての記録を、以下に整理する。

島袋カナは「ノロ殿内」或いは「ノロ殿内小」の娘で、「大屋（ウフヤ）」に嫁いだ。ノロ職に就いた時期は不明であるが、それまでは前任のノロが途絶えていた。「ヌールパーパー」と呼ばれていたらしいが、平安山部落内では「ウフヤのおばあさん」という呼ばれ方もされている。1944年頃まで管轄地である平安山・桑江・伊礼・浜川・砂辺で祭祀を行っており、その巡拝には「ノロ殿内」の子供たちがピンシームチャー（祭具や荷物持ち）として同伴した。「ノロ殿内」での祈願後、「大屋」の神棚を拝み、次いで「大屋」の娘を同行させて平安山の殿へ赴いた、という。「瓦屋又吉小のおばあさん」と親しくしており、1945年3月28日頃の平安山爆撃の際も、他所から「瓦屋又吉小のおばあさん」の墓へ避難してきた。しかし運悪くその墓が爆撃され、他の人々とともに亡くなった。死亡時は高齢（80代）であった。

### 島袋カナの生家

カナの生家について、『町史3』では「ノロ殿内小」、『ノロ』では「ノロ殿内」と記述が異なっているが、これは聞き取りを行った話者による違いであり、どちらかが誤認しているものと考えられる。そこで、『町史5』に記載されている各字各世帯の家族数と戦死者の男女別人数を調べることにした。島袋カナは「大屋（ウフヤ）」に嫁いでおり、艦砲射撃で亡くなっているのであるが、その「大屋」に関する記録では戦死者が0になっている。この点について、『北谷町のノロ』執筆者である高江洲氏にご意見を伺ったところ、「もしかするとノロということで、ノロ殿内に含まれている可能性があるのでは」とのことであった。ところが、その「ノロ殿内」の戦死者はこれまた0であり、「ノロ殿内小」の戦死者が男1名・女1名となっていたのである。このことからカナの生家は「ノロ殿内小」の方であると考えるのが妥当であろう。

「ノロ殿内」と「ノロ殿内小」は混同し易いが明らかに別家であり、一連の発掘調査においても全く別の屋敷として存在する。しかし、屋号や屋敷の立地からすると、後者は前者にごく近い関係の分家であったことが予想される。ここからは、カナは「ノロ殿内小」の生まれで、その家は「ノロ殿内」の分家であるということを前提として稿を進めるが、両家のこれ以上の混同を避けるため、「ノロ殿内」＝「本家」、「ノロ殿内小」＝「分家」と仮称することにする。

### 平安山ノロの継承

カナの前任ノロは途絶えていたという。つまり、ノロを輩出すべき「本家」にノロを継承すべき女性がいなかったがために、「分家」出身のカナがそれを継いだということになる。ノロの継承については、父系親族内かつ三親等内（母→娘、姉→妹、叔母→姪、祖母→孫）という原則であったものが、近代になると一般的に婚入してきた嫁による継承、いわゆる「嫁継ぎ」に変化することが指摘されている。同じ旧村内の北谷ノロ殿内における継承は、まさにこの典型と言えよう。これに対して、カナのように分家からのノロ輩出ということであれば、父系親族による継承ということになり、伝統的なあり方であったと見ることもできる。

カナの死亡年から生年を逆算すると、1860～1865年頃となる。1903年時には30歳代後半～40歳代前半であったことになり、既に大屋に嫁いでいたものと考えられる。先代のノロがいつ途絶えたのかは全くの不明であるが、ノロが不在であれば各字の行事に支障をきたすはずであり、ノロ殿内一門にノロとしての資質を備えた適齢の女性がいたならば、ノロ職就任を要請されることもあったのではないだろうか。1903年時のカナの年齢からすると、既にノロ職に就いていたとしても不思議はない。

また、前述したカナの戦死が「ノロ分家」にカウントされていたことにも、このノロ職に伴った財産の流れが関係している可能性がある。ノロとして亡くなったからには、ノロを輩出して財産が引き継がれた生家の構成員と見なされるのは、決して不自然ではない。

### ノロ財産の継承

王府時代には公職であったノロには、ノロクモイ地或いはヌール地と呼ばれた知行・役地が支給された。しかし1899（明治32）～1903（明治36）年の土地整理事業において、村持とならない土地はノロの所有となった。同法は村が共有地にしていた叶掛（小作）にしていたもののみ共有地と認めため、殆どのノロクモイ地がノロ及びノロ殿内の所有地に帰した、と言われる（『ノロ』）。



北谷ノロの場合、1903年時にノロにあった者がヌルジー（ヌール地）を私有したという。このノロは他家へ嫁いでいたが、次のノロが姪（父系親族）であったことからすると、財産も生家であるノロ殿内に帰属したと想像できる。

同じ頃、平安山でも当然ながら、こうしたノロ財産の私有化がなされた、或いは試みられたものと推察する。「ノロ及びノロ殿内の所有地に帰した」ことを言い換えると、平安山ノロ財産はカナと「本家」の所有となった、ということになる。

### 「本家」の状況

しかしながら、「本家」がノロ財産を本当に継承したかについては、以下の聞き取り記録からは疑いが持たれる。『北谷町のノロ』の話者の1人に「本家」の娘がいる。大正7年生で、行事の時はカナのビンシームチャー（祭具や荷物持ち）として同伴したことがある人物である。彼女の両親は、「**浜川の屋号ヌルンチグワーから平安山ノロ殿内へ夫婦養子に入った**」とされる。この「**浜川の屋号ヌルンチグワー**」が指す家は不明であるが、「**夫婦養子に入った**」時期は彼女が生まれた後のことであるので、大正末頃のことであろうか。土地整理事業からは約20年の歳月が流れている。彼女の証言によると、この頃の「ノロ本家」は「**並々ならぬ困窮した状態**」で、「**家屋も人が住めるような状態ではなかった**」ということである。ノロ財産を継承したものの、後に全く別次元の理由で家勢が衰退したということも考えられるが、「本家」がノロクモイ地を継承しなかったということも可能性として残る。

また、「本家」が夫婦養子を取った理由は、「**子が無かったから**」だという。家勢が衰えていたとは言え、当主には「本家」を存続させる意識はあったということである。同じく子供がなくて血縁が途絶えたという知花のノロ殿内の場合、ノロの夫（婿養子）の血縁から養嗣子（男子）を取っている（1987上江洲）。ノロ職がどうなったかの具体的記述はないが、文脈からするとこの養嗣子の嫁が継承したものと思われる。このようにノロが不在であっても「本家」を存続させるという意識は、知花ノロにも共通して感じられ、将来的にはノロを再び「本家」から輩出させたいという目的が潜在していたものと思われる。事実、近年の平安山ノロ殿内の「**拝み**」については、『ノロ』の話者（「本家」の娘）と現当主の妻が担っている。

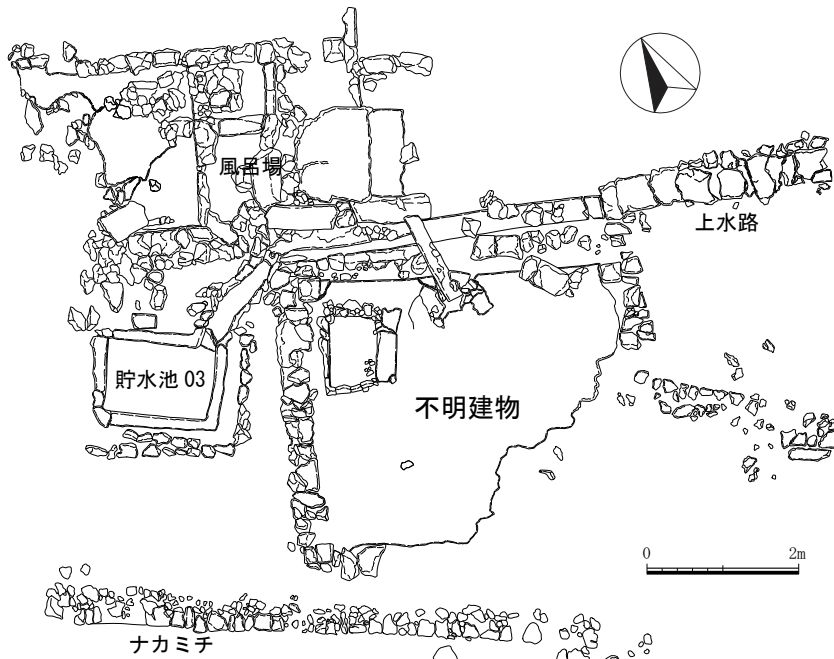
### 発掘調査から見る「分家」

当屋敷は、その大部分が調査対象地にならなかったため、詳細は不明と言わざるを得ない。しかし特記される遺物として、「分家」付近から出土した信楽焼の大便器片がある。長方形を呈するもので、陶製大便器としては古手のものである。鮮やかに施釉されており、当時は高級品であったとされる。生活改良運動の一環で、全県下で便器の和風改良が進められたが、平安山部落はそれに成功したとの新聞記事も残っている。一方の「本家」でも和風改良の形跡はあり、楕円形の孔を持つヤーフルが見ついている。この楕円形孔も陶製大便器をはめ込む用意があったように感じられるが、方形のものよりは便器の形式的には時期が遅かったと言える。いち早く高級な方形大便器を導入したと思われる「分家」は、カナがノロ財産を継承したことによって相応の財力をもっていたのではないかと推定できる。戦中は当家への日本兵の寄留もあったことから、屋敷が大きかったことも推定できる。

### 発掘調査から見る「本家」

大正末頃に困窮を極めたとされる「本家」であるが、発掘調査で検出された屋敷跡を見る限り、そのような印象は全く受けない。厚い盛土に伴って、精緻な作りの井戸から伸びた上水路・風呂場等が検出された他、重厚な基礎をもつ畜舎、豚4頭分のウーフル、石組の貯水池や排水路等、下部構造を見る限りでは平安山で随一の立派な屋敷である。また、銀メッキの舶来ティースプーンや化学調味料「味の素」瓶は当屋敷からのみの出土であり、純農村にあってはややハイカラさも感じられる。陶磁器類やガラス瓶の出土量も他家に比べて圧倒的に多く、屋敷の残存の良さを考慮しても余りあるものがある。当家を継いだ夫婦養子が、独力かどうかはともかく、昭和10年代までにここまで家勢を盛り返したということになる。

これら調査成果の中で最も難解であったのが、入り口の左側で検出された「不明建物」である。外周には6本の石製柱の残骸が認められ、床面は漆喰貼りである。建物隅にはバショウ葉脈痕のあるコンクリート製の箱のようなものも残っていた。長らくこの建物の用途が解明できずにいたが、出土遺物の平面分布を検討したところ、鍋・火炉・火取の出土比率が突出して高いことが分かった。また、近代日用品の項で掲載した「磁器製化粧クリーム瓶？」も、この不明建物からの出土であるが、その外底面には「平」字の墨書が残っていた。もし、この「平」字が「平安山」を示しているのであれば、この磁器瓶は個人ではなく部落の共有物とみなすこともできる。この不明建物が集落の主要道路（ナカミチ）に面して立地していることも考えると、部落の人々が出入り・集合するような共同施設であったのではないだろうか。



第 193 図 祝女殿内屋敷不明建物付近 (S=1/100)

その場合、建物内に残存していたコンクリート製の箱は、祭壇のようなものであったとも考えられる。

『ノロ』には、平安山ノロの祭祀の様子が伝えられている。各字の拝所を巡る前にまずノロ殿内で祈願したとされるが、この場所を連想されるものとして「**神屋**」或いは「**ノロ社**」という施設名が登場する。当時、部落の男性は「**本家**」屋敷に入ることを禁じられていたとの証言もあるため、神聖な場所は屋敷内にあったと考えられ、母屋の手前右側で検出された「アサギ」がこれに当たるとするのが妥当であろう。しかし、今回検出された「不明建物」にも部落における公共性が感じられるため、祭祀に関わる何らかの施設であったということ、可能性の1つとして提示しておきたい。

### 第3節 各期遺物の平面分布の検討

今回報告した平安山A遺跡の各調査区では、近代以降の攪乱の影響を大きく受けていたこともあり、複数種類あったであろう近世以前の土層を完全明確に判別・把握するに至らなかった。しかしながら豊富に得られた出土遺物からは、この地における貝塚時代後期からの継続的な生活痕跡を読み取ることができ、各時期の平面分布域に大まかな変遷があることが看取された。

人々の居住に密接に関連するものと考えられる土坑やピットについては、多くは砂層上面で検出されたものであったため、前節までの個別の報告は簡便なものに留めた。しかし、その立地には明らかな疎密を認めることができ、遺物の平面分布とクロスチェックすることにより、各期における居住域中心部の変遷を推定し得る。また、砂層中から検出された詳細時期不明な人骨や、形態からの時期判別が容易ではない遺物（鉄製品等）についても、より蓋然性の高い帰属時期を同様の手法によって推定し得る。破片数を基にした分析であること、時期分類に重なりが生じること、といった問題を含んでいるが、遺跡全体を巨視的に捉えるにあたっては、それほどの大過はないものと思われる。

指標となる各種土器の帰属時期を以下のように分類し、グリッドごとの出土破片数を基にして集計を行った。

平A - I期 (貝塚時代後期)	土器 (主にくびれ平底期)
平A - II期 (11 ~ 14C)	グスク土器・カムイヤキ・白磁
平A - III期 (14 ~ 17C)	白磁・青磁・染付・本土産陶磁器
平A - IV期 (17 ~ 20C)	白磁・青磁・染付・本土産陶磁器
平A - V期 (近代)	本土産陶磁器

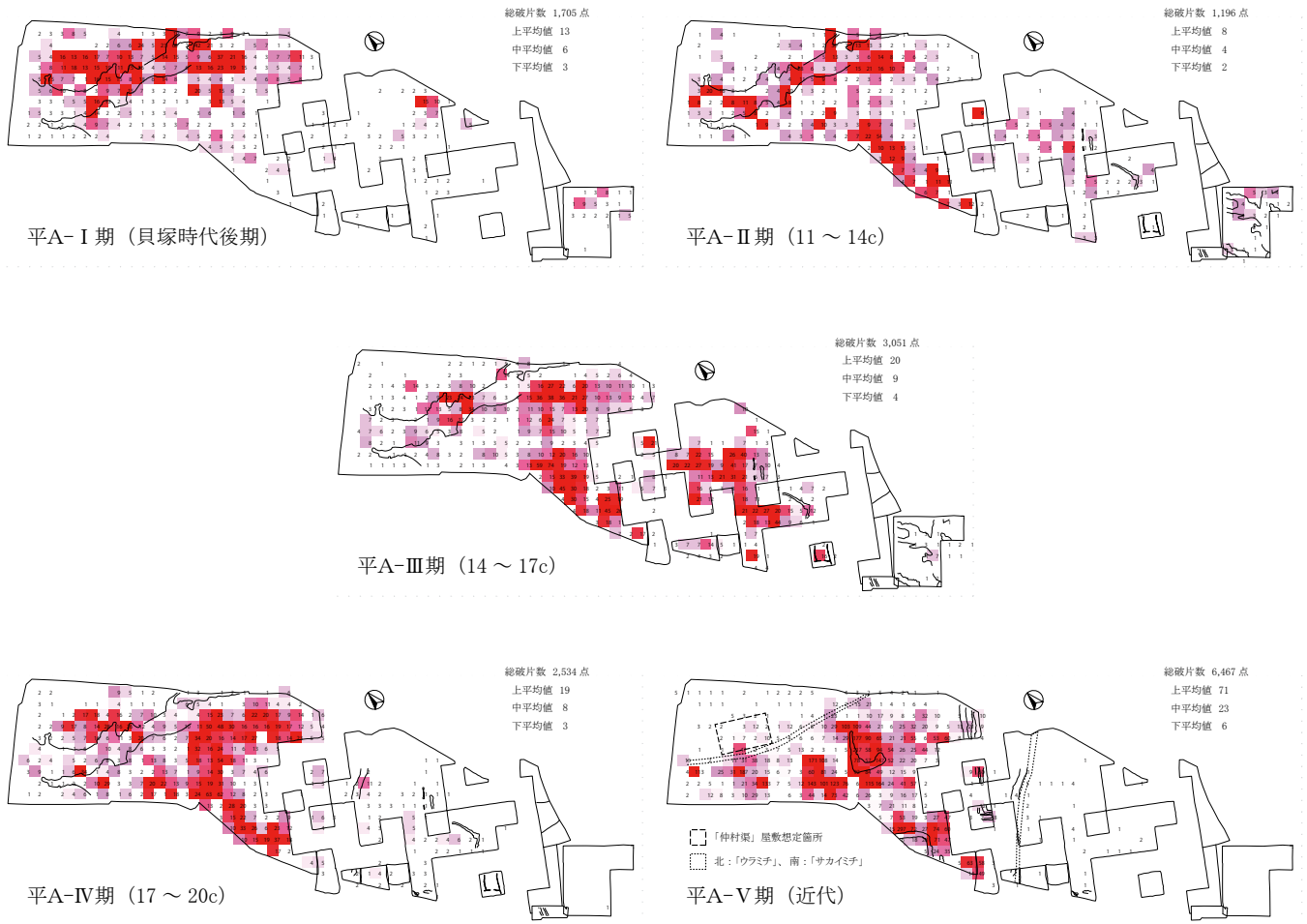
区分時期によって破片数の絶対量は大きく異なるため、平面的変遷を相対的に比較できるように、分布の疎密表示をするにあたって作為的な調整を行った。遺物の多寡に応じて各グリッド枠を塗り潰すのにあたって、各期の出土破片数に中平均値・上平均値・下平均値を設定し、塗り潰しの濃淡を決定している。

**中平均値：**集計対象とした破片総数を出土したグリッド数で除した平均値。

**上平均値：**中平均値を上回るグリッドの破片総数をそのグリッド数で除した平均値。

**下平均値：**中平均値を下回るグリッドの破片総数をそのグリッド数で除した平均値。

各期の様相



第194図 遺物 時期別平面分布

平A - I期 (貝塚時代後期) : 破片数 1,705点 (全て土器)

対象となった貝塚時代後期の土器の殆どは、くびれ平底期に比定された。HA ③地区の自然流路 (S-640) に沿うように、その内外に密な分布が認められている。この流路上流にあたる平安山原B遺跡 (2015 北谷町教委) では、大当原式期には湿地堆積が進行していたことが確認されている。このことから、流路の狭小な部分では既に閉塞していたことが推定され、下流側での流水はなかったものと思われる。各期中、最も北側に分布が偏在した格好を呈している。

平A - II期 (11~14C) : 破片数 1,196点 (グスク土器 802、カムイヤキ 110、白磁 106、青磁 178)

自然流路より北側での遺物分布は疎化し、全体的に分布域が南下する。HA ②地区西側に高密度な範囲が認められ、これはIV層から検出された人骨の密集域とも重なっている。人骨の中には抜歯が認められる個体もあるため、これらについてはI期に属する可能性が高い。しかし全ての人骨がI期のものと言える材料も揃っていないため、この分布域の重なりはひとまず留意すべきであろう。また、最も南側のHA ①地区でも遺物出土が認められており、この頃までにこの場所が完全に陸化していたことが窺える。

平A - III期 (14~17C) : 破片数 3,051点 (白磁 246、青磁 1,779、染付 556、本土産陶器 216、本土産磁器 254)

HA ②・③地区ではII期との大きな変化はみられないが、HA ④地区における遺物出土が格段に増加しており、この傾向は後述する青磁の分布に特に顕著である。この地区は、土坑・ピットが最も密に検出され、明瞭な居住痕跡が残る区域であり、また鉄製刀が2点出土したところでもある。各期の平面分布を比較する限り、これらの遺構・遺物の主体となる帰属時期は当該期である蓋然性は高い。

平A - IV期 (17~20C) : 破片数 2,534点 (白磁 265、青磁 89、染付 1,726、本土産陶器 323、本土産磁器 131)

遺物分布の主体は再度HA ②・③地区に移り、遺跡南方のHA ①・④地区、特に大型溝SD41・42以南では極端な疎化が認められた。当該期にはHA ①において石列が構築されており、これが契機となって耕作域が拡大したものと考え

られる。換言すると、平安山を「居住域」と「耕作域」とに南北半割するような空間設定がこの時期に始まったことを窺わせており、その結果人工遺物を伴うような人的働きかけが少ない耕作域において、遺物出土が減少したものと考えられる。

**平A - V期 (近代) : 破片数 6,467 点 (全て近代本土産陶磁器)**

当該期の遺物分布は、近代屋敷跡の配置とほぼ一致する。平安山南半での非分布という点はIV期と全く共通しているため、集落における居住域・耕作域の認識が、IV期からそのまま引き継がれていたことが推定される。「ウラムチ」以北での出土量も減少しているのは、ここに屋敷を構えていた「仲村渠」が早い段階で転居したことに起因するものと考えられる。

**器種ごとの様相**

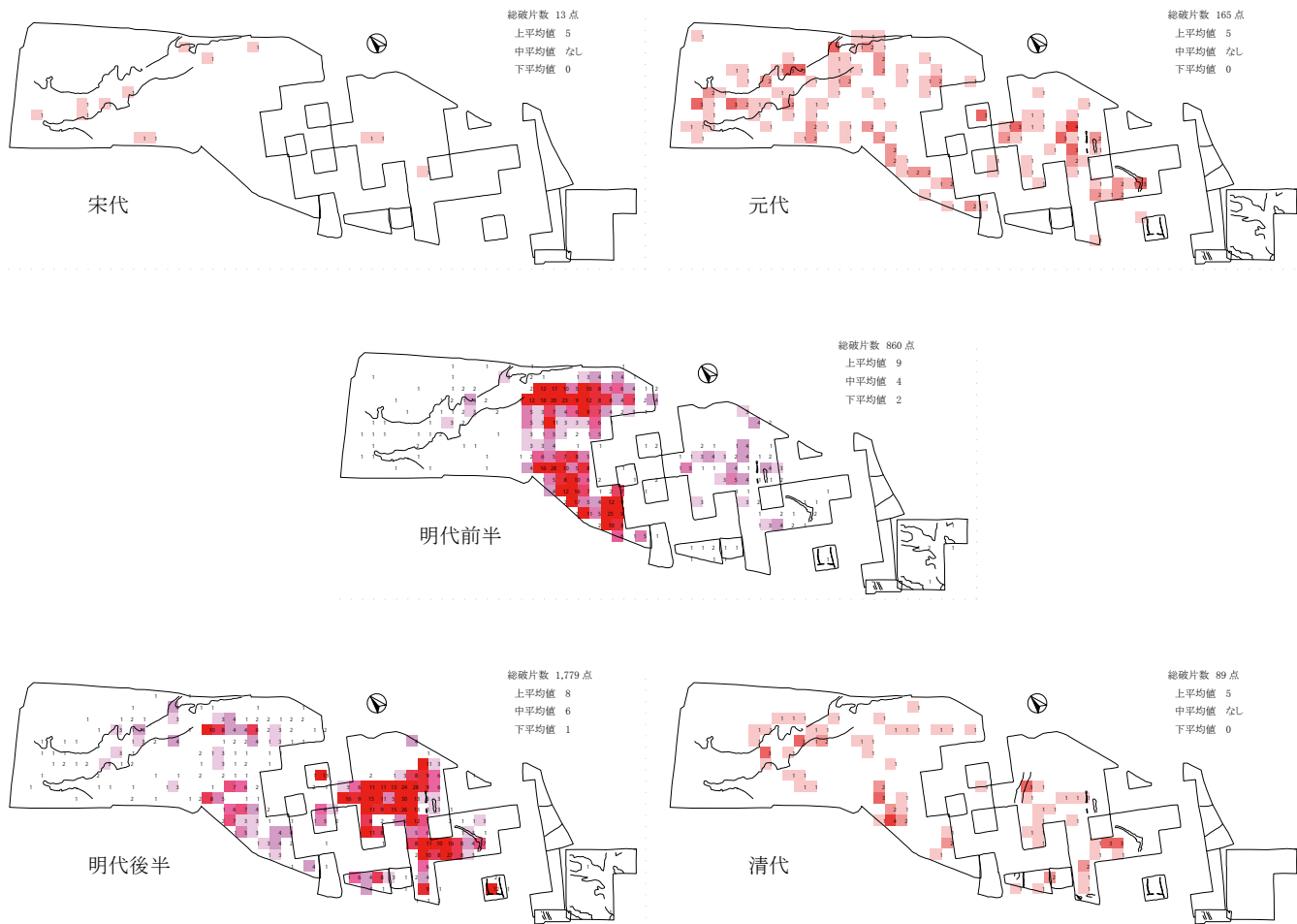
前項の各器種混在分布図を展開して器種ごとの分布図を示すのに加え、単体では時期決定が困難である器種（貝製品・鳥獣魚骨・沖縄産施釉陶器）も同様の手法で図示する。このことにより、各期における後者の出土傾向をある程度把握することができるものと思われる。なお、器種によっては前述 I ~ V 期に亘らないものもあるため、適宜時期細分のピッチを変えて提示する。

**① 青磁 : 破片数 2,066 点 (宋代 13、元代 165、明代前半 860、明代後半 939、清代 89)**

明代が突出して多く 87% を占めるため、これを更に前半 (14C ~ 15C 中頃) と後半 (15C 中頃以降) に分離して作業を行った。

その結果、第 195 図にあるように、青磁の分布域に明瞭な差異が認められた。明代前半期には HA ②地区に、後半期には HA ④地区に密集しており、それぞれに土坑・ピットの密集域が伴っている。特に後者の遺構密度は非常に高く、当該期の遺構構築の特性を暗示しているかのようである。

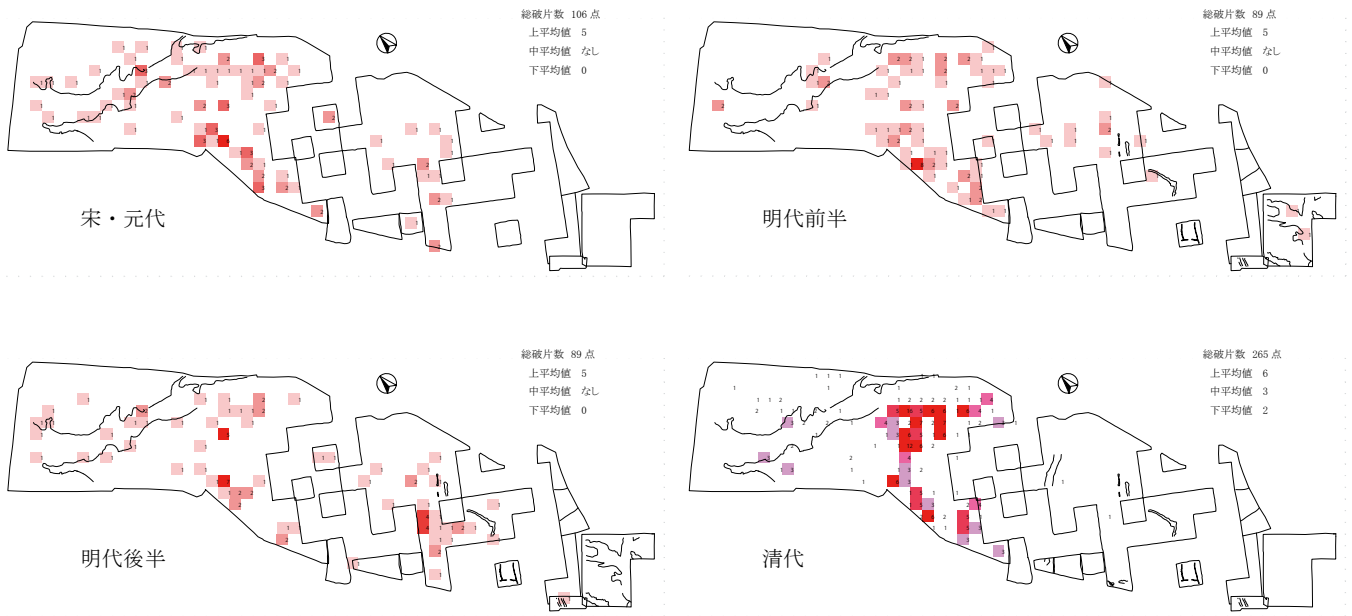
清代 (平 A - IV 期に相当) については、SD42 以南の耕作域にも分布が広がっていることが特に目立つ。耕作域という空間確定がなされたのが、清代半ばであったことの傍証とも捉えることができる。



第 195 図 青磁 時期別平面分布

② 白磁：破片数 549 点 (宋・元代 106、明代前半 89、明代後半 89、清代 265)

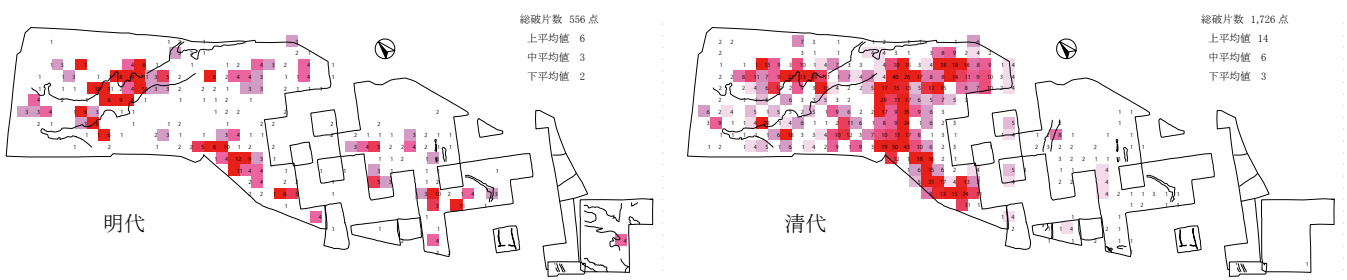
特に古手の白磁については点数が少ないため、宋代と元代を合算して図化した。明代も多くはないのであるが、青磁との比較のために分図したが、宋元代・明代前半・明代後半は平均値が 2 以上にならなかったため、今回の手法による分布図としてはあまり有意ではない。それでも青磁ほどの明瞭さはないものの、分布傾向は青磁に類似共通していると評価することは可能であろう。



第 196 図 白磁 時期別平面分布

③ 染付：破片数点 2,282 点 (明代 556、清代 1,726)

染付は破片点数においてで青磁を凌駕しており、全体分布を牽引する重要器種の 1 つとなっている。明代・清代のものに限られるため、2 期の分図となったが、当該期の変遷を如実に物語っている。



第 197 図 染付 時期別平面分布

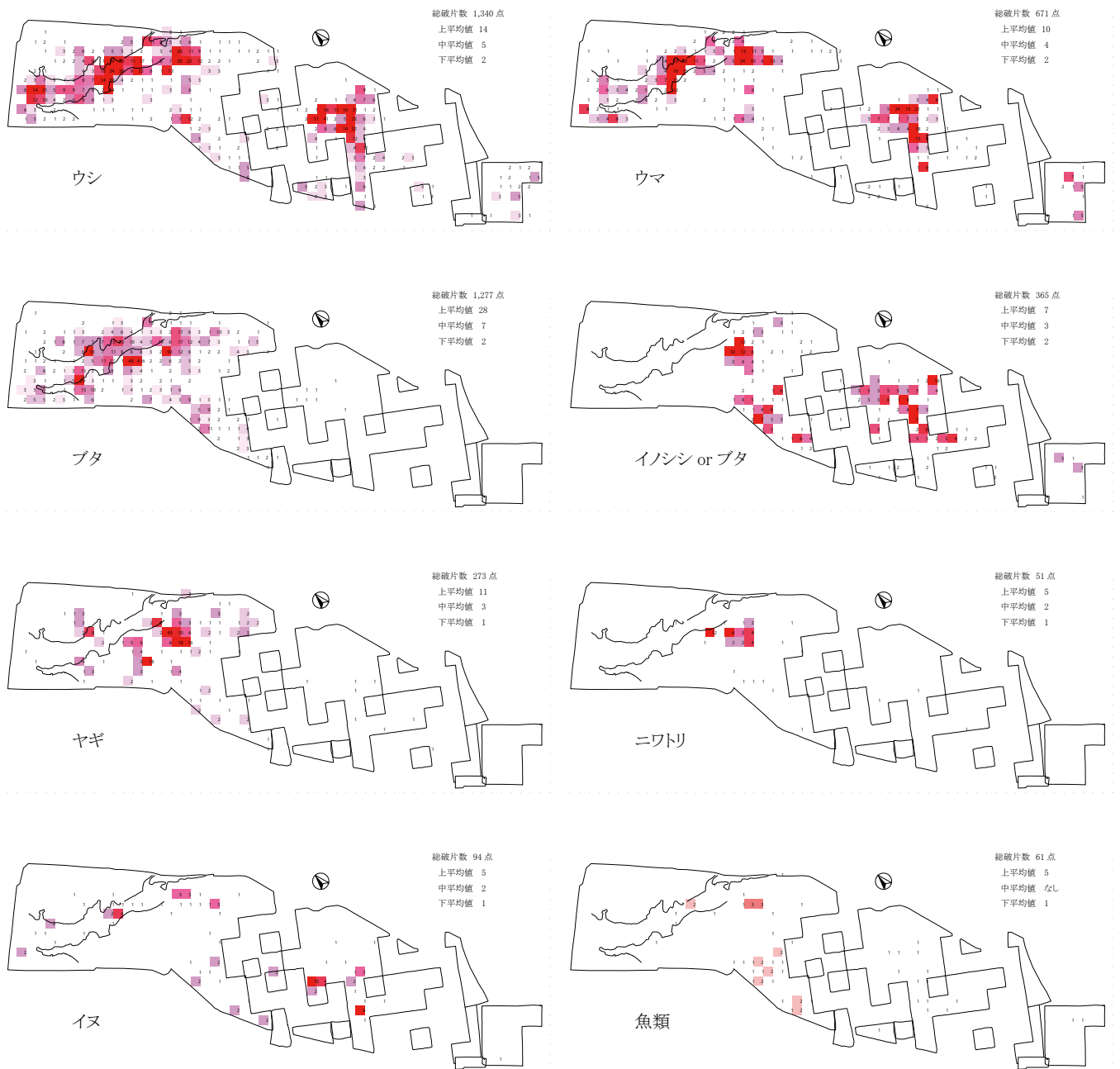
④ 脊椎動物骨：種同定破片数 4,132 点

遺物単体では帰属時期を示さない遺物のうち、貝殻に次いで点数の多いものが脊椎動物骨である。同定作業によって分別したものを分布図化したところ、極めて興味深い傾向が看取された。

まず「ウシ (1,340 点)」と「ウマ (671 点)」であるが、両者の分布は非常に似通った出土傾向にある。その特徴とし以下の事象が挙げられる。

- ・遺跡北側では自然流路 S-640 に沿うように出土している。
- ・遺跡中央の HA ④地区においても、高い出土点数・密度を誇っている。
- ・人工遺物の出土が少ない遺跡南側の HA ①地区においても、若干の出土をみる。

大型動物である上に、食用というより農耕用の動物であるため、例え最終的には食用として供されたにしても、他の食用動物とは廃棄のされ方に違いが生じることは留意しなくてはならないであろう。しかしこの出土傾向からは、少な



第198図 脊椎動物骨 種別平面分布

くともこれらの農耕用動物は、HA④地区の盛行期であるグスク時代～近世前半期から利用されていたことは、ほぼ確実であろう。

次に「ブタ (1,277点)」と「イノシシ or ブタ (365点)」を比較してみたい。文字通り後者にもブタが混在することが考えられるが、同定破片数においては「ブタ」としたもののほうが圧倒的に多い。「ブタ」の分布はほぼHA②・③地区に限定され、平A-IV・V期の分布に重なっている。沖縄では18世紀に豚の増産が始まり、豚食文化が発展していったこととまさに符号する。これに対して「イノシシ or ブタ」としたものは、HA③地区では認められず、代わりにHA④地区で目立っている。平A-Ⅲ期及び青磁-明代後半の分布傾向とよく類似すると言えよう。「イノシシ or ブタ」としたものに「ブタ」が混在しているにしてもそれはごく少数であり、主体となっているのはイノシシ或いはイノシシに形質的に近いブタである、という推論がこの顕著な分布の違いから導き出せる。

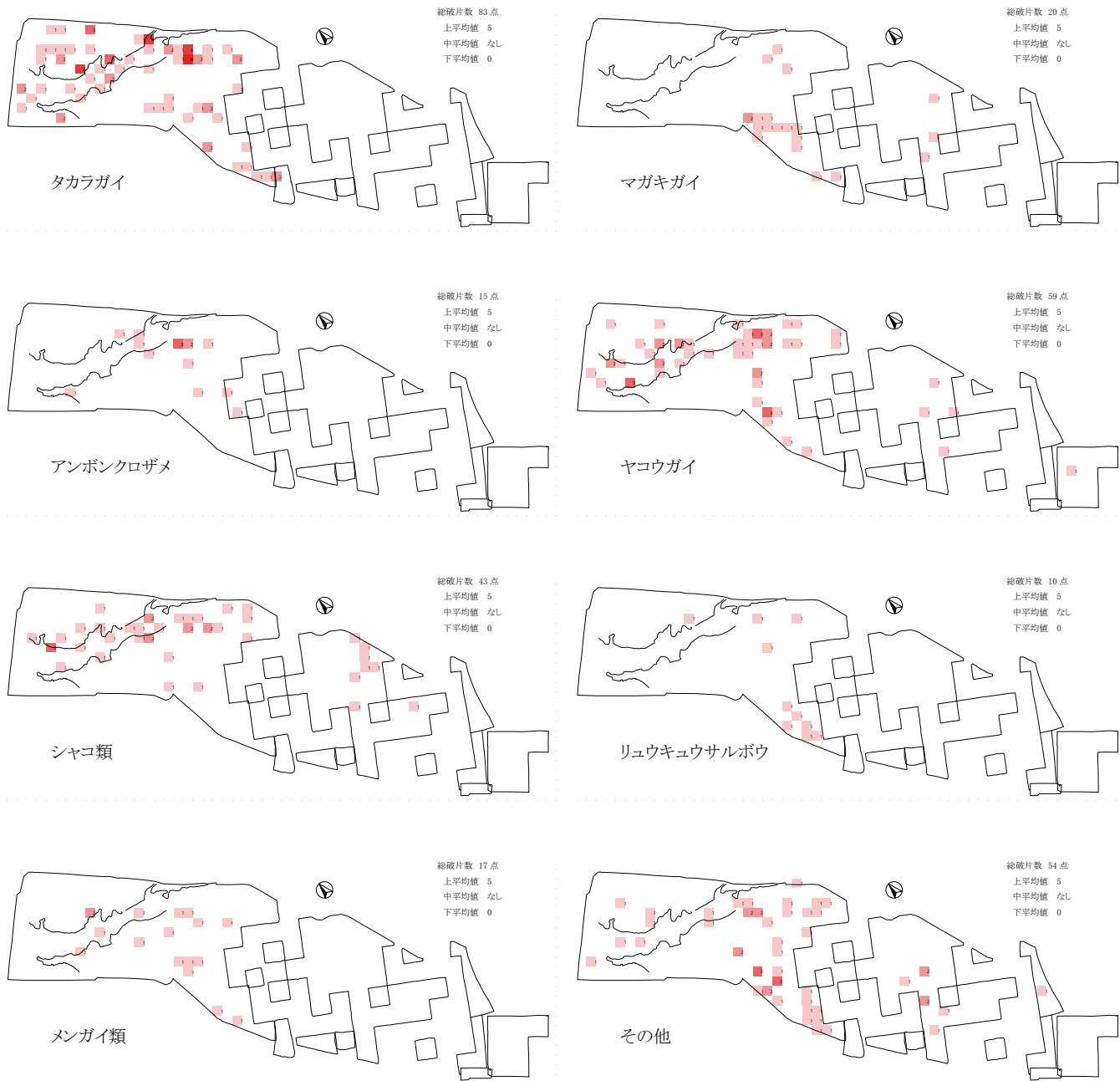
ブタと似たような分布傾向を示しているのが、「ヤギ (273点)」と「ニワトリ (51点)」である。戦前の北谷では、牛馬を飼育していたのは、中流以上の裕福な農家であったが、豚・山羊・鶏はヒンスー（貧乏）でも飼養していたという。ヤギが沖縄に入って来たのは本土より古く、一般的には15世紀中とされるが、この分布図からはグスク～近世前半期にヤギが存在していたという痕跡は辿れない結果となっている。

「イヌ (94 点)」は同定点数が少ないものの、これ以外にも HA ④地区において、埋葬された半身骨格がIV層中から検出されており、平安山原 A 遺跡においては最も古くから人間と関わっていた動物として捉えられる。埋葬されているあり方から、伴侶動物としての視点をもったの考察が必要となるが、単に分布状況を見るならば、「ウシ」「ウマ」に近い傾向を示している。

「魚類 (61 点)」については、点数が少なくあまり多くを語れないが、海浜近くの砂丘上に立地する遺跡としては、出土量が非常に少ない印象を受ける。

⑤ 貝製品：総点数 301 点

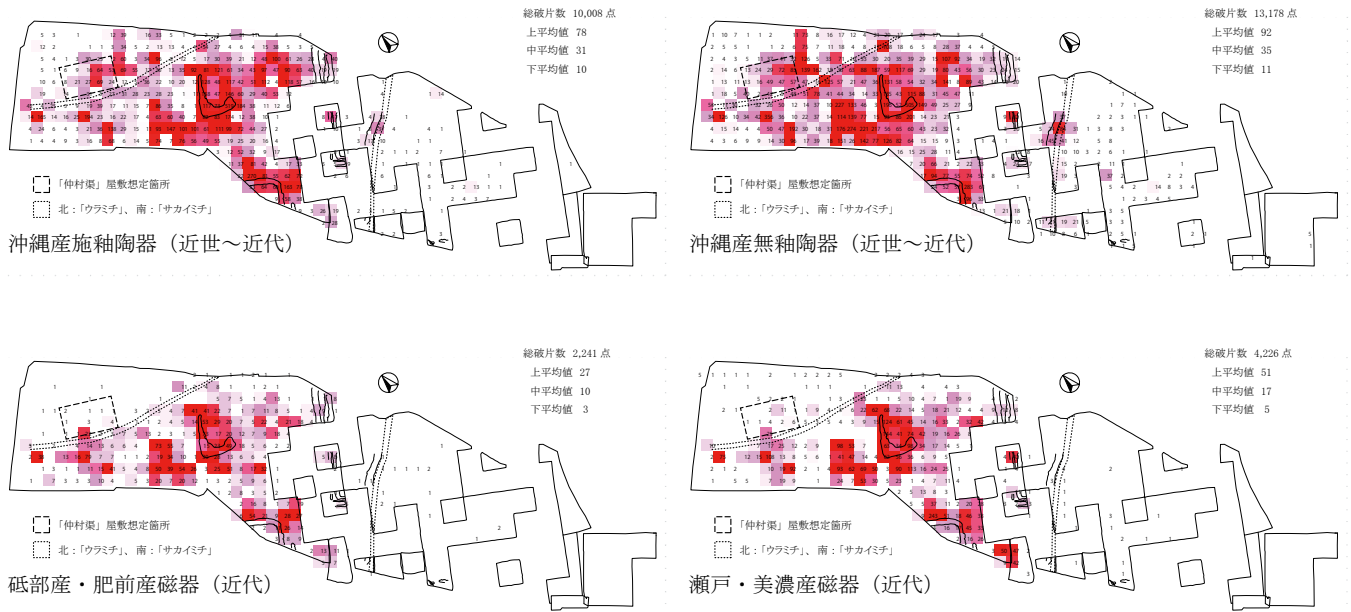
7 種を抽出の上、その他を一括し、8 分図した。全ての種の出土点数が 100 点を下回るため、他器種に比べると分布図の有意性は低い。しかしながら、それぞれの貝種が個性をもった分布状況を示しているように感じられる。特に貝錘主要 3 種 (タカラガイ・シャコ類・リュウキュウサルボウ) についてはそれが顕著であり、各種貝錘の盛行期を推定する上で、興味深い結果が得られた。



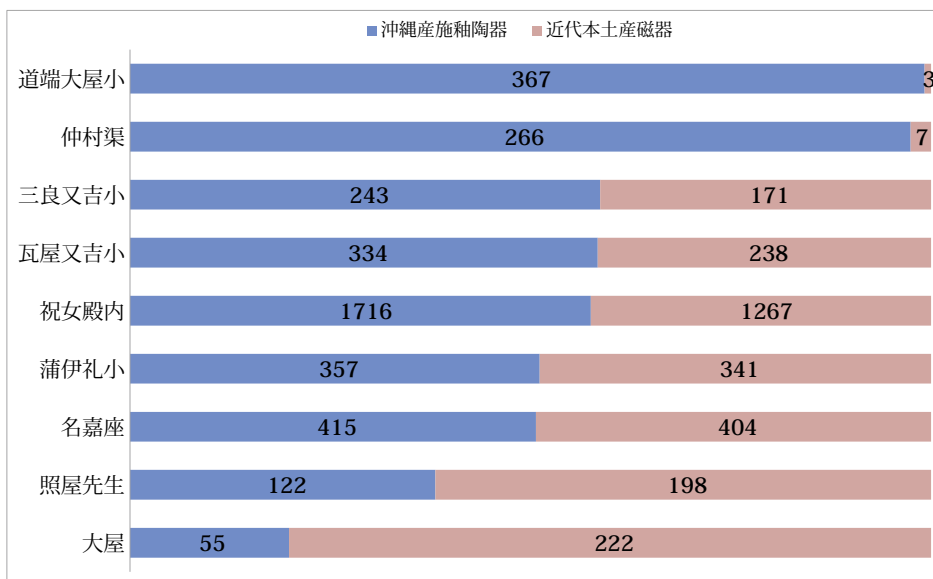
第 199 図 貝製品 種別平面分布

## 沖縄産陶器についての分布検討

これまで見てきたように、今回の調査成果に対しての遺物の平面分布検証を行うことは、巨視的な傾向を把握させ、考古的に考え得る様々な事象を想起させる有意な作業として捉えることができる。更にこの応用として、今回最も豊富に得られた沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器についても、その技法の新古等について論理的に導き出せる要素がないか、時間の許す限り模索を続けた。



第 200 図 沖縄産陶器・本土産磁器 平面分布



第 201 図 各屋敷における碗・小碗・皿の産地比率

沖縄産陶器は近世以降、即ち平 A - IV～V 期の範疇で製造・使用された遺物である。遺物分布図においてこの IV 期と V 期との間に認められる変化は、前節で述べた通り、「ウラミチ」以北における遺物の減少である。調査対象区内の中で「ウラミチ」以北に唯一屋敷を構えていた「仲村渠」は、沖縄戦を迎えることなく大阪に転居していた。転居の時期は不明であるが、以後の屋敷跡地では新たな物品の購入や廃棄がなかったと考えることができるため、この点を重視してみたい。

第 200 図上段は、沖縄産施釉陶器及び沖縄産無釉陶器それぞれ全部の平面分布である。平 A - IV～V 期というスパンの様相を示すもので、「仲村渠」屋敷にもその分布は及んでいる。これに対して第 200 図下段は、近代に限った砥部焼・肥前産及び瀬戸・美濃産磁器の分布図であるが、「仲村渠」屋敷からの出土比率は格段に減少していることが読み取れる。第 201 図では、沖縄産施釉陶器と近代本土産磁器の比率を、屋敷ごとに示している（対象器種は碗・小碗・皿に限り、調査面積が狭く破片数が少なかった「東大屋小」「小渡小」「祝女殿内小」は、対象から除いた）。「仲村渠」は「道端大屋小」

第 139 表 各屋敷出土のガラス瓶

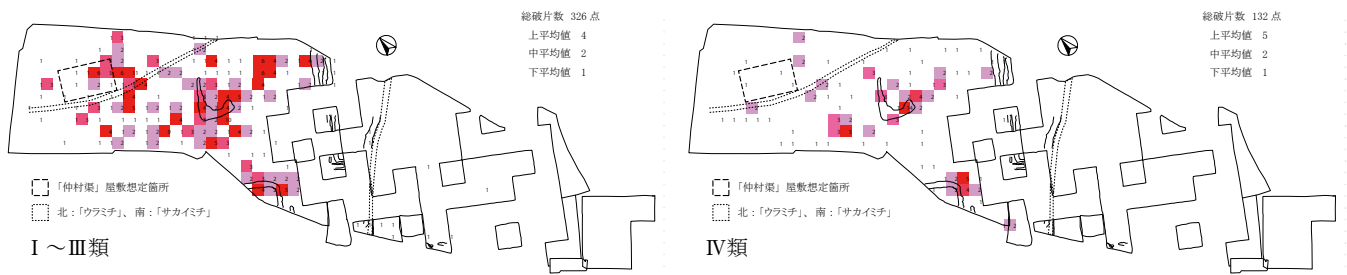
屋敷名	個体数
祝女殿内	124
照屋先生	17
蒲伊礼小	13
道端大屋小	11
大屋	8
三良又吉小	8
小渡小	7
名嘉座	5
東大屋小	5
西大屋小	5
瓦屋又吉小	2
祝女殿内小	1
仲村渠	0



とともに、近代本土産磁器の出土が極端に少ない屋敷であることが分かる。更に、第139表はガラス瓶の出土状況である。米軍由来のもの（コカコーラやワンウェイビールボトル）、或いはその疑いの強いもの（オーウェンズ・イリノイ社製瓶）を除くと、「仲村渠」以外の全ての屋敷から出土していた。今回出土したガラス瓶の殆どは大正以後、特に昭和期に購入されたものが目立つ。これらのことから考えると、「仲村渠」は近代集落の中に存在していたが、近代磁器やガラス瓶の購入・廃棄活動が非常に少ないまま、転居してしまった。或いは転居当時に使用可能なものは、大阪に持って行ったか近隣者に引き取ってもらったことも考えられる。いずれにしても、「仲村渠」周辺から出土した遺物は近代後半まで下らない可能性が高く、この前提に立つと、ある器種についての器形や技法の変化・変遷の顕在化が期待できる。

① 沖縄産無釉播鉢：分類対象点数 458 点

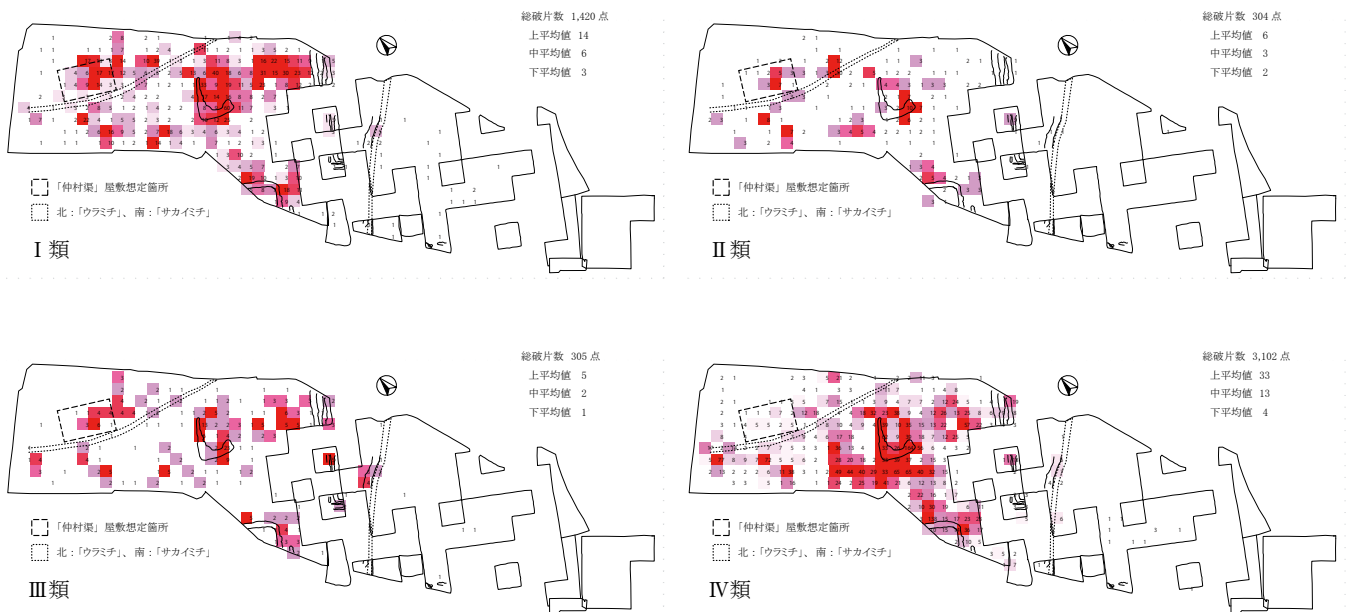
播鉢については、その器形変化に応じてⅠ～Ⅳ類に分類している。安里分類（1987）に則ったものであり、口縁部が逆「L」字形となり、胴部に丸みを帯びるⅣ類が最後出のものとされている。このことに基づき、Ⅰ～Ⅲ類とⅣ類とに分離して、分布図を作成した。この結果、播鉢Ⅳ類は前掲した本土産近代磁器の分布と似通った傾向を示している。「仲村渠」周辺からⅣ類の出土が全くない訳ではないが、Ⅰ～Ⅲ類との傾向の違いが明瞭であることは興味深い。



第202図 沖縄産無釉陶器（播鉢）平面分布

② 沖縄産施釉碗：分類対象点数 5,131 点

施釉碗についても播鉢と同様の図化を行った。白化粧を施す碗Ⅳ類が、技法上の最後出の群と考えられるのであるが、播鉢Ⅳ類同様に「仲村渠」周辺での出土が明らかに減少している。



第203図 沖縄産施釉陶器（碗）平面分布

上記の2器種のⅣ類資料がいずれも最後出であったであろうことは、分布図の上からも再確認できたと言えそうである。問題はその変化がいつ頃に起こったかということになるが、具体的な年代を挙げるには至らない。しかし、近代中においてある一軒の家が転居した場合、陶磁器の組成に影響を少なからず与えることとなる事例として提示しておきたい。今後の発掘調査において近代集落が検出された場合、このようなアプローチも蓄積すれば有望な手法となり得るものとする。

## 第4節 出土遺物のまとめ

今回の調査成果から平安山原A遺跡は標高3～5mの砂丘地に位置し、貝塚時代後期から近・現代まで継続的に生活していたことが判かった。しかし、近代以降の攪乱の影響を受けそれ以前の遺物包含層を把握するには至らなかった。前節で示したように各時期の遺物の平面分布から貝塚時代後期から近代までの時期的変遷を把握することができた。

本節ではほぼ同時期の遺跡と比較し(第140表)、村落遺跡の時代を象徴する遺物の出土量をまとめてみた。比較遺跡の基準として、

- ① ほぼ同時期であること。
- ② キャンプ桑江北側地区で本遺跡と同じような出土を示す遺跡。
- ③ 港(渡地村跡)や生産遺跡(湧田古窯跡)・寺(天界寺跡)など首里王府関連遺跡を除く。

第140表 遺跡別主な遺物出土量

番号	遺跡	標高(m)	所在	土器	滑石	カムイヤキ	青磁	白磁	染付	褐釉陶器	瓦質土器	近世磁器	近世陶器	沖縄産施釉	沖縄産無釉	陶質土器	近代磁器	合計
1	平安山原A遺跡	5	北谷町	4056	1	118	2802	1065	2507	1779		428	620	10491	13640	3721	7104	48332
2	伊礼原D遺跡	5	北谷町	5752			521	139	297	483	4	16	9	149	244	74		7688
3	安仁屋トゥンヤマ遺跡	20	北谷町	835	3	79	551	451	580	271	○	131	4	1770	1600	1044	17	7336
4	小堀原遺跡	5	北谷町	2100	526	224	28	244	22	23			5	693	656	206	272	4999
5	後兼久原遺跡	20	北谷町	626	89	649	2250	384	209	1048			2	60	4	○	32	5353
6	宜野座ヌ古島遺跡	32	宜野座村				3650	726	1369		1	564		10				6320
7	大山前門原第一遺跡	32.7	宜野湾市	205		4	189	93	168	69	3		18	175	229	60	255	1468
8	喜友名グスク	55	宜野湾市	7832	2	50	1507	322	370	899	5	1		1510	1623	981	895	15997
9	嘉数トゥンヤマ遺跡	69	宜野湾市	2955		172	3151	761	1039	1195	22	438		5515	6103	14439		35790
10	城間遺跡	15	浦添市	7350		7	92	40	586			8		1000	1327	3145	230	13785
11	小緑村跡	25	那覇市	175		5	21	8	22		52		19	882	894	694	523	3295
12	識名原遺跡	81	那覇市	771		10	211	40	218	163	4	2	2	1552	1904	804		5681
13	津嘉山古島遺跡	11	南風原町	6378		42	677	119	75	283	6	12	10	605	293	236	47	8783
14	仲間村跡B地点	11.5	南風原町				462	1335	4217	446	3	1394	8	1297	5888	587		15637

<凡例>小堀原遺跡(2009,2012の合算)嘉数トゥンヤマ遺跡I+IIの合算。タイ産褐釉陶器と中国産褐釉陶器は合算。土器は先史・グスク土器の合算。「○」は出土有。

表に示したように他の遺跡に比べると本遺跡は貝塚時代後期から近・現代までの遺物の出土量が卓越する。本遺跡と同じようにどの時期の遺物も多い遺跡としては宜野湾市嘉数トゥンヤマ遺跡(2009)、喜友名グスク(1999)、南風原町仲間村跡B地点(2005)がある。また、中国産陶磁器の出土の割合が低い遺跡としては城間遺跡(1992)、識名原遺跡(2001)、中国産陶磁器の出土の割合が高い遺跡としては宜野座ヌ古島遺跡(2010)後兼久原遺跡(2003)があり、大方3つのグループに分けられる。

遺跡の立地をみると、南風原仲間村跡B地点は標高11.5mの非石灰岩地域(島尻層)で、海岸まで距離があるが、1950年代までは潮の干満を利用して小舟で西の長堂川を那覇と結ぶ水運としていたようである<sup>(註1)</sup>。

喜友名グスクは標高55mと高く、ウーフルの検出や近代磁器の出土など本遺跡と宜野座ヌ古島遺跡は標高32mで、中国産の青磁・白磁・染付が得られ、沖縄産陶器はあまり得られていない。また、近世の本土産陶器が多く出土することから両遺跡共に近世までの集落の存在が想定できる。また、第140表に示された遺跡は標高10～81mの石灰岩丘陵や島尻層の微高地に立地する。標高5mの砂丘地に立地するのは本遺跡や伊礼原D遺跡などキャンプ桑江北側地区の遺跡のみで、特にⅢ期・Ⅳ期の青磁・白磁・染付など中国産陶磁器を主体とする遺跡で砂丘地に立地するのは稀である。

ここでは出土遺物についての特徴と他遺跡との比較を試みた。以下、遺物ごとに略述する。

**土器**：総数4056点得られ、後期土器(くびれ平底)1828点、グスク土器856点、近世の先島土器117点、不明112点が得られた。第140表の遺跡で後期土器が多く得られるのは北谷町のみで、他はグスク土器の出土が主である<sup>(註2)</sup>。後期土器は浜屋原式土器・大当原式土器などの尖底系が7.1%なのに対し、くびれ平底土器<sup>(註3)</sup>は91.8%と主体をなす。くびれ平底を主体とする遺跡はこれまでに報告されたキャンプ桑江北側地区では、伊礼原D遺跡(2013)の4409SX<sup>(註4)</sup>、平安山原B遺跡HB②口がある。後者は本遺跡に近接することから、延長上にあると思われる。

グスク土器のうち大形把手(第139図102・103)は後兼久原遺跡(1997)、安仁屋トゥンヤマ遺跡(1992)、浦添原遺跡(2005)など、グスク期の遺跡で数点、普遍的に得られ、この時期の土器と捉えられるが、その出自は不明である。それに伴う白磁玉縁碗やカムイヤキも出土する点で共通する。

図163はHA④の柱穴が集中する場所から出土しており、240±20BPの結果得られた。時期的にも符合し、近世期の土器の使用を示すものである。

石器：総数 333 点得られ、主なものは磨石 128 点、砥石 54 点、石斧 52 点である。石斧は平面分布から HA ③ S-640（自然流路）や HA ④ の柱穴が集中する K・L18～20 に出土するようである。後者の出土は二次転用品が多いようである。本地区はⅢ期以降の遺物が主体であることから、その頃まで石斧を二次使用していたことが判る。

砥石は 54 点と多く、そのうち貝塚時代後期が 27 点、グスク時代が 27 点である。貝塚後期の砥石の平均重量は 1224.7g、グスク期の平均重量は 182.0g と約 10 分の 1 で、使用の方法や研磨対象物が違うようである。石材は前者が砂岩、後者が玄武岩を主体とする。玄武岩を用いた砥石は現在のところ沖縄諸島では類例がなく、本遺跡のみで、16 点と出土量も多い。Ⅲ期の時期の搬入ルートとして中国産陶磁器との関連も想定される。

クガニ石は特異な形状の石で、本遺跡からは HA ③ S-640（自然流路）周辺から 8 点得られた。沖縄諸島では貝塚後期の平敷屋トウバル遺跡（1996）、野国貝塚（1968）、久良波貝塚（1994）、伊武部貝塚（1983）、清水貝塚（1989）、近隣では小堀原遺跡（2012）、平安山原地区（2011）で各々 1 点出土するが本遺跡の 8 点出土は久米島の清水貝塚の 12 点に次で多い。所属時期は土器や貝製品などを加味すると貝塚後期としても矛盾はない。用途については本文でも述べたように白木原氏の指摘する民俗事例を含め、検討課題である。

貝製品：総数 397 点得られ、貝塚後期以前とグスク時代以降に大きく分かれる。土器でもふれたようにくびれ平底期のものとしては貝符（図 10）、二枚貝有孔製品（第 183 図）、がある。しかし、大形イモガイの円盤状製品（図 2）やゴホウラの研磨（図 15）などはくびれ平底土器期以前の平安山原 B 遺跡の時期に近いものである。ヤコウガイ製貝匙については貝塚後期の背面利用のもの（図 18・22）とグスク時代の腹面利用のもの（図 49・50・51）が平面分布で面的に異なり、時代により異なる形状の匙を使用していたことが証左された。また、グスク時代以降のマガキガイ製品、網の錘と思われるタカラガイ製品が S-640（自然流路）と内陸側からも検出され、カムイヤキや古手の白磁・青磁と重なるようで、その上限を示唆しているようである<sup>(註5)</sup>。

骨製品：貝塚時代後期以前のジュゴンや海獣骨を素材とするものが主であるが、図 4・9 のようにグスク時代以降もある。特に図 9 について伊礼原 D 遺跡など近世以降の遺跡で出土例が増え、用途の解明が待たれる。

中国産陶磁器：青磁・白磁・染付（青花）の出土量は琉球王府関連の首里城跡・天界寺跡・湧田古窯跡・渡地村跡の遺跡を除くと本遺跡が最も多い（第 140 表）。器種別に見ると碗が 4747 点（79.7%）、皿が 740 点（12.4%）、杯・小碗が 262 点（4.4%）、瓶が 124 点（2.1%）、壺が 44 点（0.7%）、鉢が 34 点（0.6%）、他に急須や袋物が各々数点得られた。碗は明代には龍泉窯の青磁が主体で 75%、福建・広東系が 15% を占める。清代には福建・広東系の染付が 89%、龍泉窯は 1% で前者が多くなる。碗の出土点数は明代・清代ともさほど変化はないが、時代が新しくなると福建・広東に移行するのは対中国貿易に変化があったことが窺え、歴史背景を証左するものであろう。また、17C 後半からは沖縄産施釉陶器の生産が始まる<sup>(註6)</sup>。平田典通が中国に渡り、広東碗を真似て製作したようで<sup>(註7)</sup>、碗の需要に応えたものと思われる。

皿も明代には龍泉窯が 79.6%、福建・広東系が 13.5%、わずかに徳化窯が認められるが、清代には福建・広東系が 85.8%、龍泉窯が 5.5%、徳化窯が 7.1% と変わってくる。杯・小碗についてみると明代は龍泉窯 78.8%、福建・広東系 13.5%、徳化窯 5.8%、清代には龍泉窯 4.4%、福建・広東系が 0.6%、徳化窯 91.7% と徳化窯が大半を占める。出土数の少ない瓶は景德鎮などの上等品である。以上の状況から時代や産地、及び器種ごとに窯の組成に変化のあることがわかった。このような状況は平安山原 A 遺跡に限ったものでなく、中国と貿易をしていた琉球王府全体に関連する。中国や琉球王府の情勢から大方、村落遺跡と琉球王府関連遺跡とは異なる状況も想定されることから各遺跡の詳細な分析・検討が望まれる。

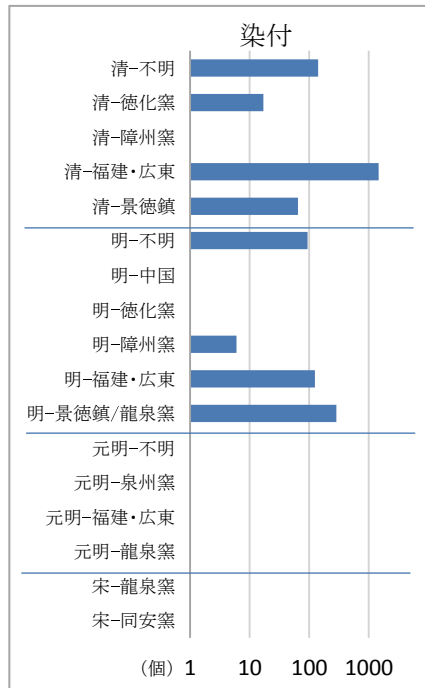
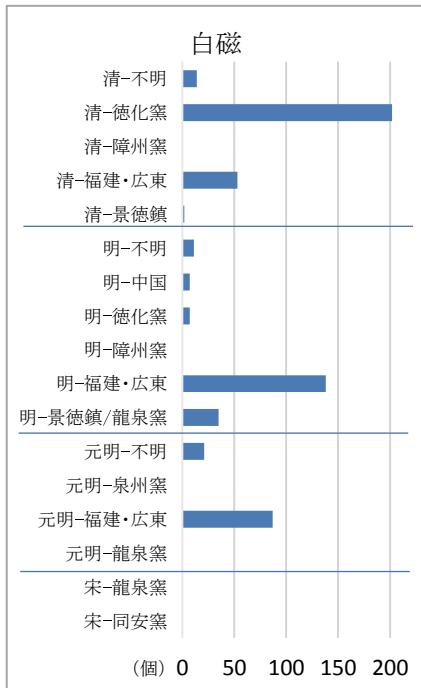
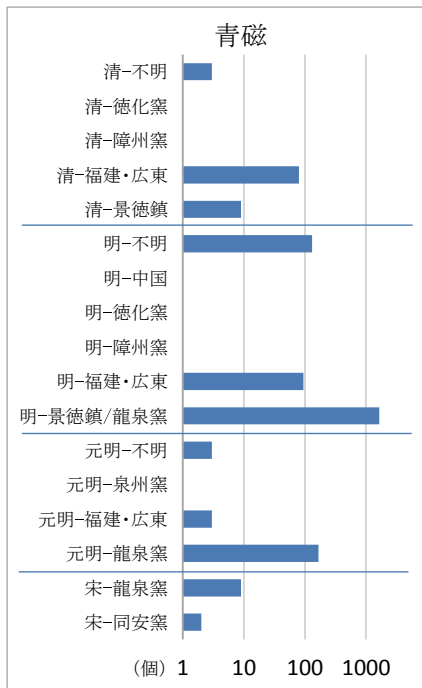
以下、青磁・白磁・染付の時代・窯ごとの変遷を第 204 図に示し、主な遺物の変遷を第 205～207 図に示した。  
青磁：2802 点の出土で、第 205 図に示したように 12～19C 代まで得られ、その中でも明代が全体の 65% を占める。

第 141 表 砥石遺跡・石質別出土量

番号	遺跡	発行年	石質													合計						
			玄武岩	石英閃緑岩	緑色岩	角閃石安山岩	輝緑岩	凝灰岩	流紋岩	黒色千枚岩	黒色片岩	頁岩	赤色頁岩	粘板岩	砂岩		細粒砂岩	礫質砂岩	片状砂岩	シルト岩	サンゴ	チャート
1	伊礼原 A 遺跡	2014									1			6	1							8
2	伊礼原 B 遺跡	2008						2														2
3	伊礼原 D 遺跡	2008	なし					3							1							4
4	伊礼原 D 遺跡	2013							1	1					1			2				5
5	伊礼原 E 遺跡	2008						1														1
6	伊礼原 E 遺跡	2010						1						6	1		1					9
7	伊礼原遺跡	2014							1					2	1	1						5
8	伊礼原遺跡（グスク）	2014		1			1	4		1				6	1							14
9	伊礼原遺跡（国外）	2014						1						2	1							4
10	後兼久原遺跡	2004											1									1
11	平安山 A 遺跡（グスク）	2016	16								1			2				5	1	1		26
12	平安山 A 後	2016			1		1			1		1		13			1					18
13	平安山 B 遺跡	2015						7			1				1							9

第142表 中国産磁器時代・器種別出土量

器種	窯	宋		元・明初			明					清				不明					合計				
		同安窯	龍泉窯	龍泉窯	福建・広東	泉州窯	不明	景德鎮/龍泉窯	福建・広東	漳州窯	徳化窯	中国	不明	景德鎮	福建・広東	漳州窯	徳化窯	不明	景德鎮	福建・広東		徳化窯	タイ	東南	不明
青磁	碗	2	9	140	2	1	3	1281	87				108	1	77			1	11	41		4	1	487	2256
	皿			3	1			234	4				3	2	3				8			1	1	20	280
	大皿			1				7																	8
	盤			20				59					1							1					9
	瓶							42											3	1					8
	蓋							14																	14
	鉢			2				5	3				2						3						15
	高杯							2																	2
	杯							4						3											7
	香炉							3						3					2						8
	碗 or 皿							1																	3
	水注							1																	1
	袋物																								4
	不明												17						1	2					36
合計	2	9	166	3	1	3	1653	94				131	9	80	0	0	3	26	45		5	2	567	2799	
白磁	碗				63	9		4	77			6	1	50		23	7		8					299	547
	鉢								1					1			1								3
	皿				20	12		27	48		5	3		1		5	2		1	1				69	194
	杯				1			2	7		2	1	1	1		158	1			3				19	196
	瓶							1				1												24	26
	壺				3				1			5	1							2				16	28
	壺蓋							1																2	3
	碗 or 皿								2			1				20								4	27
	瓶 or 急須								2									2							4
	合計				87		21	35	138		7	7	11	2	53	0	206	14		11	4			433	1029
	染付	碗							143	118	2		80	19	1368	1	2	127	1	9					74
皿								86	8	4		1	13	5	105		4		7	6				27	266
小碗													15	1			2								18
杯								33					4			8	5		4					2	57
鉢											1														2
瓶									25					4	5			2	2	1				5	44
壺												1	4				7							1	13
袋物								1																	1
水注								1																	1
蓋														1											1
レンゲ																	1	1							2
合計								289	126	6	1	1	94	65	1479	1	17	142	11	20				111	2363
時代別合計	11		281				2593						2071					1235						6191	





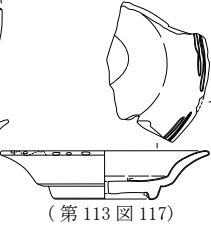


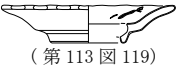
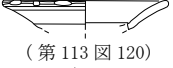



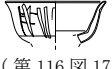
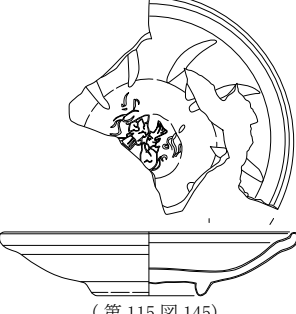


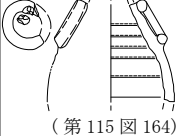




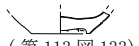
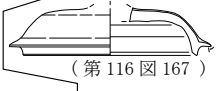
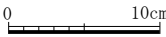
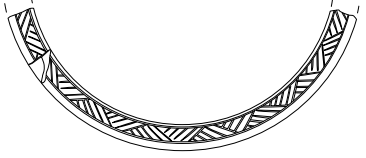
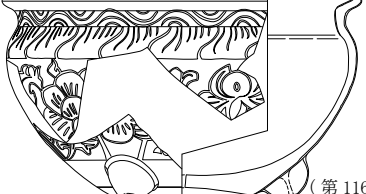


第204図 中国産磁器時代・窯別出土量

生産地	中国産			
生産年代	器種			
	碗			
12世紀～13世紀	(第107图8)	(第107图2)	(第107图6)	(第107图7)
13世紀～14世紀	(第107图10)	(第107图14)	(第107图11)	(第107图20)
14世紀～15世紀	(第108图24)	(第108图35)	(第110图73)	(第110图75)
	(第108图31)	(第108图32)	(第110图72)	(第109图45)
	(第108图25)	(第108图34)	(第110图71)	(第110图80)
	(第109图43)	(第109图49)	(第110图74)	(第110图84)
	(第109图46)	(第109图49)	(第111图92)	(第111图84)
15世紀～16世紀	(第109图58)	(第109图60)	(第110图78)	(第110图64)
	(第109图58)	(第110图67)		
16世紀～17世紀	(第116图177)	(第111图94)	(第111图95)	
18世紀～19世紀				


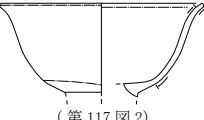

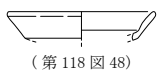
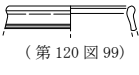

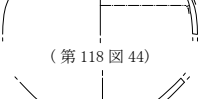
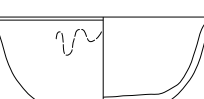
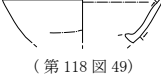
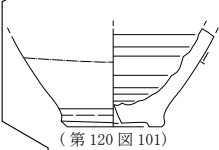

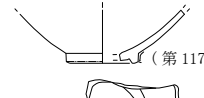


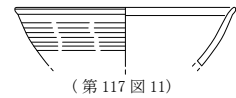

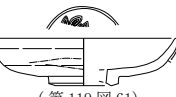

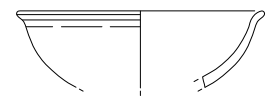

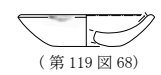

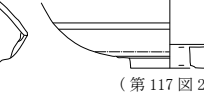


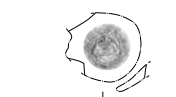

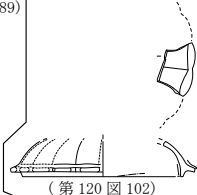
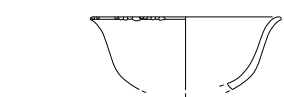
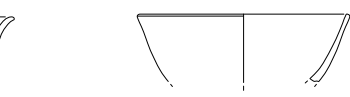
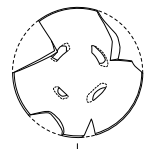


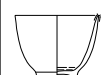

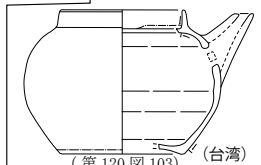

第205图 青磁 時代別変遷

中国産

皿	小鉢・小杯・盤	瓶	香炉	蓋
 (第112図 98)  (第112図 97)	 (第116図 169)			
 (第112図 101)  (第113図 117)  (第112図 114)  (第112図 110)  (第113図 119)  (第113図 120)  (第114図 135)  (第113図 115)  (第114図 136)	 (第116図 171)  (第115図 145)	 (第115図 151)  (第115図 162)  (第115図 164)  (第115図 154)	 (第116図 168)  (第116図 178)	
 (第113図 132)  (第113図 133)			 (第116図 167)	
			  (第116図 179)	

第V章 4

〈年代〉宋（南宋）：12世紀～13世紀／元：13世紀～14世紀／明：14世紀～17世紀／清：17世紀～20世紀

生産地	中国産				
生産年代	器種	碗	皿	杯	壺・蓋・急須
12世紀～13世紀	 (第117図1)	 (第117図2)	 (第117図10)	 (第118図48)	 (第120図99)
13世紀～14世紀	 (第117図18)	 (第118図44)	 (第117図22)	 (第118図49)	 (第120図101)
	 (第117図12)	 (第117図8)	 (第117図17)	 (第118図51)	
	 (第117図11)	 (第117図15)	 (第119図61)	 (第119図51)	
14世紀～15世紀	 (第117図25)	 (第117図27)	 (第119図68)		
	 (第118図31)	 (第117図30)			
15世紀～16世紀	 (第118図36)	 (第118図33)	 (第118図34)	 (第119図89)	 (第120図102)
	 (第118図38)	 (第118図41)	 (第119図74)		
16世紀～17世紀	 (第118図46)		 (第119図80)	 (第119図92)	
18世紀～19世紀				 (第119図93)	 (第120図103) (台湾)
				 (第119図95)	

0 10cm

第206図 白磁 時代別変遷

(年代) 宋(南宋): 12世紀～13世紀 / 元: 13世紀～14世紀 / 明: 14世紀～17世紀 / 清: 17世紀～20世紀

生産地		中国産				
生産年代	器種	碗	皿	瓶	杯	蓋
15世紀～16世紀		<p>(第97図8) (第97図22) (第97図5) (第98図31) (第97図28) (第98図29)</p>	<p>(第101図112) (第101図119) (第101図118)</p>	<p>(第103図160) (第104図180)</p>		
16世紀～17世紀		<p>(第98図45) (第98図46) (第98図51) (第98図47) (第99図54) (第99図55) (第99図71)</p>	<p>(第101図128) (第101図132) (第101図133) (第102図137)</p>	<p>(第104図198) (第104図209) (第104図205)</p>	<p>(第104図207)</p>	
17世紀～18世紀		<p>(第99図62) (第99図76) (第99図82) (第99図63)</p>	<p>(第102図135) (第102図136)</p>			
18世紀		<p>(第100図83) (第100図107) (第100図101) (第100図88) (第100図93)</p>	<p>(第103図152) (第102図147)</p>			
18世紀～19世紀					<p>(第104図188) (第103図170)</p>	

第207図 染付時代別変遷

(年代) 宋(南宋): 12世紀～13世紀 / 元: 13世紀～14世紀 / 明: 14世紀～17世紀 / 清: 17世紀～20世紀



器種 生産年代	碗	小碗	皿	鉢・急須	香炉・火炉・壺・瓶
I類 (白化粧無)	 (第57図1)  (第57図6)		 (第58図79)  (第58図75)  (第58図77)	 (第61図137)  (第61図141)	 (第63図212)  (第63図213)  (第63図200)
II類 (鉛釉)	 (第57図17)		 (第61図142)  (第61図143)  (第61図140)	 (第64図224)  (第64図228)	 (第64図227)  (第61図150)
III類 (かけわけ)	 (第57図22)  (第57図23)  (第57図24)		 (第58図83)  (第59図102)  (第59図107)	 (第59図90)  (第59図103)  (第64図231)	 (第61図156)  (第61図154)
IV類 (白化粧有)	 (第58図40)  (第57図29)  (第57図30)  (第57図31)  (第58図41)  (第58図44)  (第58図39)  (第58図42)  (第58図43)  (第57図36)	 (第58図66)  (第58図70)  (第58図65)  (第58図67)  (第58図68)  (第58図69)	 (第59図84)  (第58図73)  (第60図124)	 (第61図148)  (第61図144)  (第61図145)  (第60図122)  (第60図125)	 (第59図94)  (第59図97)  (第61図169)  (第61図162)  (第61図163)  (第63図206)

第208図 沖縄産施釉陶器 分類

層	遺構 C14 測定値	HA③	HA②	HA④	HA①
戦前・近代 (V期)	祝女御殿内 道端大屋小 三良又吉小 照屋先生 東大屋小 祝女御殿内小 小渡小 蒲伊礼小 名嘉座 瓦屋又吉小 大屋 仲村渠	<p>(第45図6) (第53図2) (第57図36) (第67図1) (第24図7) (第58図39) (第67図9) (第58図42) (第67図29) (第24図3) (第53図7) (第45図26) (第77図4) (第57図24) (第67図9) (第24図3) (第53図7) (第45図30) (第77図11) (第57図22) (第67図114) (第24図3) (第53図7) (第50図115) (第77図11) (第57図22) (第67図114) (第24図3) (第53図7) (第51図139) (第77図15) (第57図18) (第67図142) (第24図3) (第53図7) (第47図53) (第79図46) (第59図89) (第60図125) (第60図130) (第62図192) (第64図224) (第157図18)</p>	<p>(第45図5) (第49図90) (第155図2) (第57図4) (第67図12) (第67図20) (第73図130) (第47図48) (第49図94) (第53図6) (第58図41) (第58図69) (第58図79) (第60図124) (第61図154) (第47図56) (第50図111) (第78図21) (第60図124) (第61図154) (第48図65) (第50図130) (第79図51) (第61図154) (第62図180) (第62図193) (第64図243) (第63図202) (第62図193) (第71図103) (第71図103) (第72図125) (第73図128) (第75図174) (第71図103) (第72図125) (第73図128)</p>	<p>(第46図39) (第64図252) (第158図5) (第68図42) (第73図130) (第73図138) (第73図147) (第75図174) (第82図25) (第82図26) (第82図30) (第147図16) (第147図15) (第157図4) (第101図129) (第101図130) (第161図4) (第82図26) (第82図30) (第157図3) (第141図163) (第93図1) (第157図3)</p>	
		(IV期)			
近世 (III期)	土器附着炭化物 240±20BP (SK100)  HA④柱穴群	<p>(第82図18) (第88図30) (第94図28) (第89図57) (第89図58) (第93図11) (第95図65) (第99図62) (第119図80) (第100図93) (第141図167) (第99図62) (第119図80) (第100図93) (第141図167)</p>	<p>(第99図76) (第93図17) (第93図25) (第100図107) (第88図6) (第88図8) (第95図67) (第95図69) (第88図16) (第89図48) (第185図10) (第184図63) (第184図50-51) (第145図1) (第147図12) (第157図12) (第141図163) (第93図1) (第157図3)</p>	<p>(第161図4) (第82図26) (第82図30) (第157図4) (第101図129) (第101図130) (第141図163) (第93図1) (第157図3)</p>	
		III層			
グスク時代 (II期)	(人骨12号 1580±20BP 左腓骨片) 人骨11号 830±20BP No.4 肋骨 人骨5号 1070±20BP No.2 左橈骨	<p>(第117図10) (第107図2) (第101図128) (第158図1) (第184図67) (第120図101) (第97図5) (第139図102) (第185図4) (第140図110) (第140図131) (第172図20) (第175図43) (第117図10) (第107図2) (第101図128) (第158図1) (第184図67) (第120図101) (第97図5) (第139図102) (第185図4) (第140図110) (第140図131) (第172図20) (第175図43)</p>	<p>(第117図27) (第107図18) (第139図97) (第117図2) (第117図1) (第139図103) (第176図51) (第117図27) (第107図18) (第139図97) (第117図2) (第117図1) (第139図103) (第176図51)</p>	<p>(第117図22) (第108図25) (第162図1) (第117図30) (第109図58) (第170図2) (第119図74) (第111図95) (第177図65) (第119図89) (第140図122) (第173図36) (第117図22) (第108図25) (第162図1) (第117図30) (第109図58) (第170図2) (第119図74) (第111図95) (第177図65) (第119図89) (第140図122) (第173図36)</p>	
		II層			
貝塚時代後期 (I期)	自然流路 (S-640) 人骨1号 人骨2号 人骨3号	<p>(第137図11) (第138図56) (第181図11) (第137図13) (第138図38) (第138図47) (第182図18) (第182図15) (第182図22) (第171図19) (第175図46) (第185図2) (第137図11) (第138図56) (第181図11) (第137図13) (第138図38) (第138図47) (第182図18) (第182図15) (第182図22) (第171図19) (第175図46) (第185図2)</p>	<p>(第138図29) (第138図58) (第181図5) (第139図92) (第181図2) (第138図29) (第138図58) (第181図5) (第139図92) (第181図2)</p>	<p>(第172図25) (第173図33) (第172図25) (第173図33)</p>	
		I層			
V層				<p>ピーチロック上部 サメザラ (1620±20BP) チョウセンサザエ (2290±30BP) リュウキュウマスオガイ (2600±30BP) マスオガイ (2630±30BP) マスオガイ (3110±30BP) イモガイ (4120±30BP)</p>	

第209図 時代別出土遺物変遷



器種別には碗が2256点(80.6%)、ついで皿10. %、盤3.9%、瓶と続く。最も古いものは12～13C代で、同安窯、龍泉窯の生産である。内陸側の後兼久原遺跡でも出土している。

13～14C代の鎬蓮弁文(図18)は龍泉窯、櫛描文碗(図10)は福建・広東系で、前者は後兼久原遺跡・北谷城(2010)で確認されているが出土数は少ない。

14～15C代の出土が最も多く、蓮弁文碗(図24・25・31)、ラマ連弁文(図43)、人形手(図46)、無文(図74)、印花文(図84)等の碗、腰折れ皿(図101)稜花皿(図117)、輪花大皿(図135)、鏝縁の盤(図145)、杯(図171)、双耳瓶(図164)、蓋(図168)など種類も多い。図168の被蓋は珍しい。図74は福建・広東系でそれ以外はすべて龍泉窯のものである。これらはほとんど首里城で出土する。出土量も多く、伊礼原D遺跡(2013)、伊礼原遺跡(2014)でも多く得られ、HA④で多く得られる。

15～16C代の龍泉窯の線刻蓮弁文碗(図58・60・64)、若干崩れた福建・広東系碗(図67)などが出土する。出土量は少なく、湧田古窯跡や渡地村跡で出土する。皿は碁笥底(図133)、腰折れ(図132)で前者が龍泉窯、後者が福建・広東系である。他に蓋(図167)も出土。

16～17C代からは出土量も少ない。器種は碗が主で、福建・広東系(図94・95)が多くなる。

18～19C代は出土量も減少する。大形香炉(図179)は景德鎮窯産で祝女殿内の出土で、当時の経済力を窺わせるものである。

白磁：1065点の出土で第206図に示したように12～19Cまでのものが得られた。

12～13C代は玉縁口縁碗(図1)が得られ、近くの後兼久原遺跡や小堀原遺跡などグスク時代初期の遺跡に普遍的に出土するもので、HA③の内陸側で出土している。

13～14C代はビロースクタイプ(図18)や外反碗(図2)、口禿げ碗(図44)など福建・広東系が主体である。外反碗(図22)はやや新しいようである。皿は「く」字状に湾曲するもの(図48)、逆「ハ」字状に開くもの(図49)、見込みに印花文を施すもの(図51)、ビロースクタイプの皿(図61)、ほかに短頸壺(図99・101)などが得られた。そのほとんどは福建・広東系である。

14～15C代は口縁部が外反するビロースク皿碗(図25・27・30・31)、灯明皿(図68)など福建・広東系である。

15～16C代は線刻蓮弁文碗(図36)、見込みに印花文(図33)、「堂」と雷文(図34)は底部は兜絞り状の特徴がある。皿は切高台(図74)いずれも福建・広東系である。筒状の腰折れの杯(図89)、形押し輪花状の蓋(図102)は前者に比べて薄手で上質である。いずれも景德鎮窯である。

16～17C代は出土量が少ない。外反碗で型押成形(図38)、錆釉で覆輪を施す碗(図41)、逆「ハ」字状の碗(図46)など福建・広東系。型押成形の外反皿(図80)、同じく型押成形の口禿げ杯(図92)などあり、前者が景德鎮窯、後者が徳化窯である。

18～19C代は碗が少なく、徳化窯の口禿げ型成形(図83)など小碗の出土が多い。他に1866～終戦までの台湾産の急須(図103)が出土している。

総じて12～13C、13～14Cのやや古手の時期が器種は多いようである。

染付：2507点の出土である。青磁や白磁のように12～14C代のもはなく、15～16C代から出土が多くなる。

15～16C代は碗・皿・杯などの器種がみられる。碗をみると外反碗の亀甲繫文+松竹(図5)、宝相唐草文(図8)、直口碗は外面にアラベスク文(図22・29・31)、外面に図14芭蕉文、見込みに法螺貝(図28)がある。皿をみると外反し、外面に宝相花唐草文、見込みに玉取獅子文(図112)、碁笥底で内外面に芭蕉文を施す(図118・119)ものがある。杯についてみると馬上杯は外面に唐草文、見込みに「福」の字款(図180)、腰折れの有段を成す杯で、外面に折枝と虫を描き、腰に如意頭繫文を巡らす。見込みに草花文、高台内に方形銘款「角幅」を付す(図160)などの器種もある。

16～17C代は碗・皿・瓶・蓋など器種も豊富である。碗をみると外面に唐草文(図45・54)、外面に豹皮文(図46)、輪花口縁に外面に花鳥画(図47)、外面に竹に鳥文(図51)、見込みに蛇目釉剥ぎを施すもの(図54)、撥形碗で外面に半梅花文と略化した唐草文(図55)、逆「ハ」字状で口縁に圈線を施すもの(図71)がある。図55・71は福建・広東系、他は景德鎮窯の産である。皿についてみると見込みに蕉葉文を施す灯明皿(図128)、直口で内面の口縁に四方禪文(図132)、内面に雨龍文(図133)、端反り口縁で内面に花唐草文、高台に銘款を施すもの(図137)で、いずれも景德鎮窯である。

17～18C代は碗・皿が主である。略化した唐草文(図62)、腰部が逆「L」字状の印花の菊花と草花文(図76)、外面に草花文(図63)これらは素地も灰白色、呉須の発色悪く、福建・広東系である。図62は大ぶりの碗で内外面に牡丹唐草文を施す上質の碗で景德鎮窯。直口で福建・広東系、外面に草花文(図186)と圈線(図135)18C代になると

碗のほとんどが福建・広東系である。直口碗は菊花唐草文(図83)、丸文(図101)、端反碗は腰部に縦線で蓮弁文をなぞらえ、外面に龍文(図107)、半梅花と寿文の区画文(図88)、草花文(図93)を施すものである。高台内に「和美」(図88)、「金美」(図107)の銘款がある。皿は15.0cm前後と大きく、端反りで型押成形で内面に半梅花、唐草、龍文(図152)、「志在書中」の人物図(図141)を描くものがある。福建・広東系である。

19C代は碗はなく、景德鎮・徳化窯の杯が得られた。上等品であろう。

青磁・白磁・染付などの中国産陶磁器の出土量を第142表に示した。これによると宋代は全体で11点、元・明代は白磁と青磁が得られ、明代は青磁がそのほとんどを占める。清代は白磁が多く、染付はこれに続く。産地も福建・広東系が多くなる。

**沖縄産施釉陶器:** 出土総数10,491点で出土数の多い碗を中心に施釉の方法で4つに分けた(第208図)。I類の灰釉碗は17世紀後半から「湧田焼」として作られ始めるが、壺屋古窯群Ⅲ(1997)・壺屋古窯群Ⅴ(2008)でも窯跡から検出され、壺屋古窯群Ⅲでは灰釉碗の比率が高い<sup>(註8)</sup>。また生産地についても名護市古我知でも焼かれていた(松島)報告があり、その下限は不明確である。本遺跡では碗が5000点余と多く、調査面積も広い範囲で、平安山集落跡ということもあり、第3節で示したように分類した碗で、時期的な変遷が追えるようである。灰釉碗については多数の論考<sup>(註9)</sup>があり、湧田古窯跡をはじめ、多くの遺跡で分類が試みられている。沖縄では、近世・近代の遺跡が重なって検出されることが多く、上位に生活する人々によって、攪乱を受けているのがほとんどである。従って、層位による検討は困難と思われる。先学の研究や壺屋焼の伝承から灰釉碗(I類)→Ⅲ類(掛け分け)→Ⅳ類(白化粧)への変遷は技術史の観点から示されているが、前出の理由から発掘調査された遺跡での検証がされていないのが現状である。加飾においても灰釉碗に鉄釉で草花文を施す(第57図16)のが古手とされる。本遺跡では家田の指摘する肥前の写しの皿(第58図79)が出土し、平安山原B遺跡ではその原形とされる肥前の皿(平安山原B遺跡-第119図8~10)もあり、沖縄産施釉の初源を示す資料と思われる。本遺跡の出土状況を見るとI類が主体をなす仲村渠では小ぶりの三島手のトビガンナ(図41)の酒器が得られている。碗のイッチンの文様の加飾の変遷を第54図に示したが、その古手(図22)も仲村渠の出土である。碗以外の器種も詳細に検討すると沖縄産施釉陶器「上焼」の由来が明らかになるとと思われる。酒器(図137)や徳利(図212)、三島手の鉢(図99)、凝った形の火炉(図199・200)や瓶(図227・228)なども出土。逆に茶釜(図156)、羽釜(図154)など当時の先端をゆく焼き物も出土。沖縄産施釉陶器の器種も多種に及んでいる。技術史的な側面として酸化コバルト釉導入以前の呉須(図29・122)や線彫り(図31)、1885年には酸化コバルト釉が導入され<sup>(註10)</sup>、イッチンや呉須絵(図36・43・125)にも用いられ、さらに1920年代後半から棚板・棚棒が導入され、匣(さや)やハマを用いるようになった。このような変化は製品にもみだすことができ、イッチンも伏せて加飾していたが、その後、口縁を上にしたまま施文する(図68)ようになる。また、本土産近代磁器の加飾や鋳型などの影響を受けた小碗(図69)など壺屋焼の技術の変革を示している。

**沖縄産無釉陶器:** 13,640点と出土数は最も多い。壺や甕類の大型が多いことに起因すると思われる。平面分布でHA③・④に分布の中心がある。これは近代(V期)の遺物分布と重なる。今回はブタの油が入っていたもの壺(第22図5)、豆類のはいていた甕(第22図1)。ヤギ・ブタなどの骨を廃棄した甕(図版7)、ウワーフルの餌入れに使用した鉢(第22図3)など具体的な使用の確認されたものが検出されている。壺にブタ骨が入った状態は喜友名グスク(1999)でも報告されており、戦前の食生活の一端<sup>(註11)</sup>が窺える資料である。これ以外に出土量は少ないが碗や瓶などで小ぶりのものが出土する。碗類は初期壺屋<sup>(註12)</sup>とされるものもあり、平面分布でもHA④に見られる。また、緻密で薄手の壺類も確認され、喜名焼の可能性も考えられる。挿鉢の分類も口縁部形態、口唇幅、櫛目幅、方向など観察し、分類を試みた。古手とされるI・II類が若干多いようである。貯蔵具の壺や甕はHA②・HA③に集中し、HA④では少ない。褐釉陶器も貯蔵具の壺が多いが、HA④に多いようで、貯蔵具は褐釉陶器から沖縄産無釉陶器へ移行が考えられる。出土量が多く、時間的制約もあり、数量を提示するまでにはいたらなかった。今後の課題である。

**本土産磁器(近代):** 7,104点で、沖縄産陶器について多く、その中でも小碗の出土が圧倒的に多かった。生産地としては全体の約65%を瀬戸・美濃が占め、34.6%が肥前系(砥部産の21%を含む)である。施文技法別では銅版転写がやや多く、型紙刷り・クロム青磁・手描き・ゴム判・色絵・吹き絵・盛り絵が確認できた(第23表)。型紙刷りでは中碗が多く産地としては砥部産が99%近くを占めていた。砥部産の型紙刷り碗には直口碗と外反碗(四寸碗)があり、外面と見込み文様及びハマ痕の有無から15種の組み合わせを確認した。次に時期的変遷を試みるため、これらをさらに地文でまとめたところ、今回出土の型紙碗について3つの事が推測された。①直口碗では見込みに蛇の目釉剥ぎを行う時期(型紙碗の初期)から統制番号が賦される時期まで同じ型紙が使用され作り続けられたものもあった。②外反碗には主とする文様が同じでも、鹿の子・網代・四方襷を地文とするものと点描を地文とするものが見られたので地文の簡略化が想定できた。③花唐草を描く外反碗には五弁花と六弁花が見られ、他遺跡<sup>(註13)</sup>では砥部産の型紙刷り碗に中国染付に由来

を見ることのできる花唐草文様が見られる事から、点描とは別の文様変遷の可能性が想定される。

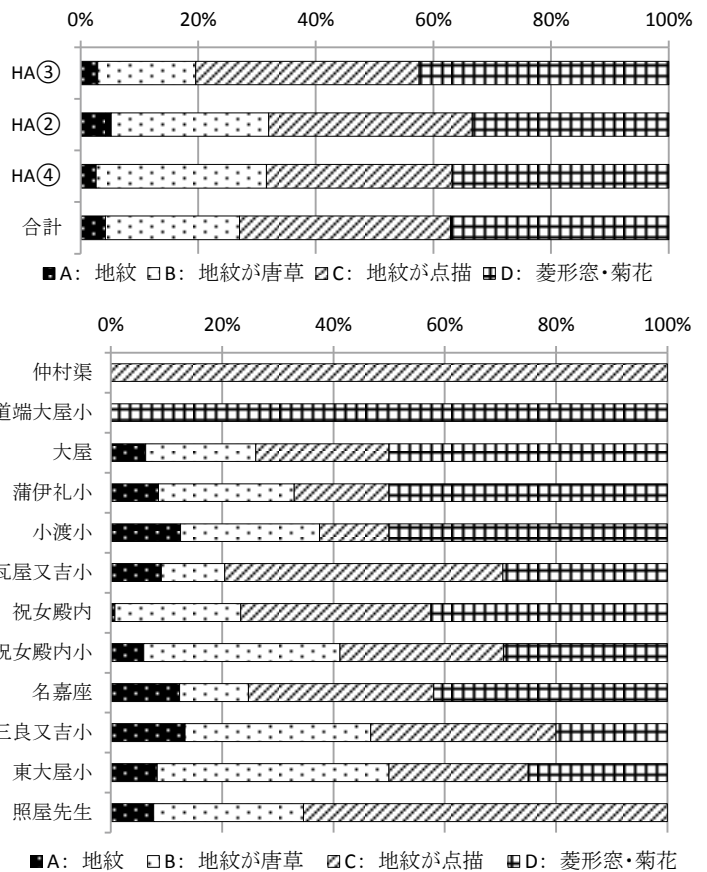
また、鹿の子文様(図45)や網代(図46)をAグループ、地文が唐草をBグループ、地文が点描をCグループ、点描のうち、民具事例や近代遺跡で普遍的に出土する「菱形窓菊花文」をDグループとし出土の割合を出した。Dグループの中には、外底に統制番号(図51)の賦された物もあった。その結果、全体ではAグループ4.1%、Bグループ22.8%、Cグループ35.8%、「菱形窓菊花文」のDグループ37.1%を示し、地区別にはHA③にC・Dの割合が高いようである。この分類を屋敷別に見ると仲村渠・道端大屋小は前節で示したように出土量は僅少で、Dグループが50.0%を占める蒲伊礼小、小渡小、祝女殿内、名嘉座、Bグループが多い東大屋小、三良又吉小、祝女殿内小、Cグループが多い瓦屋又吉小、Dグループが無い照屋先生となった。他遺跡を見ると喜友名グスクの一括資料はCとDグループにあたり、北谷町の古墓群などではDグループ、天界寺跡IではA～Dグループ全てが出土し、中でもDグループの古手タイプが確認されている。これらの遺跡は出土量もあり、分類も試みられているが量的な表示がなく、正確な比較は困難であった。

近代の遺跡からは多数の型紙刷りが出土しており、1914年の砥部焼きの流入以後の短期ではあるが、地文の分類を通して、その変遷あるいは遺跡の性格を知る手掛かりになるとと思われる。また、外反碗(四寸碗)が沖縄独自の器形(註14)であれば、近代沖縄の村落の分析に有効な遺物と思われる。また、型紙文様の比率は本遺跡の特性かあるいは沖縄全体の傾向なのか、今後の近代遺跡での型紙刷り碗の文様の分類が待たれる。出土量の分析は近代磁器の搬入と沖縄産陶器の生産との関連が具体的に実証できるものと思われる。

**陶質土器:**今回はHA③・②・④よりの出土であるが、いずれの地区でも鍋・急須・火鉢が多く出土し、各地区とも屋敷跡の範囲に集中していた。屋敷別では祝女殿内がどの器種も大幅に多く中でも不明建物から多く出土した。混和材のサイズに極微細から砂粒ほどの大きさまで幅が見られた。詳細な分析にはいたらなかった。

**瓦質土器:**赤色(a)と灰色(b)に分けた。aからは「馬蹄形焜炉」が多数出土した。第143表にまとめたように湧田古窯跡など近世から近代遺跡に確認されている。各々の遺跡報告書では「瓦質土器」あるいは「陶質土器」に分類され、遺物の扱いが曖昧である。火入れ部が方形、焜部が円形なものは本土の奈良・江戸の遺跡で確認されているが、本品のような火入れ部が大きく、焜部が開口(上面「U」字状)する馬蹄形状のものは見られない。現段階では沖縄独自の形状と判断される。胎土は粉殻を含み、瓦質土器に近いものと砂質の強い陶質土器に近いものがある。火入れの罫幅や形状にもバリエーションがあり、形態的分类も可能性がある。第143表に示した出土遺跡から、その上限は湧田古窯跡であるが、その生産地は不明である。

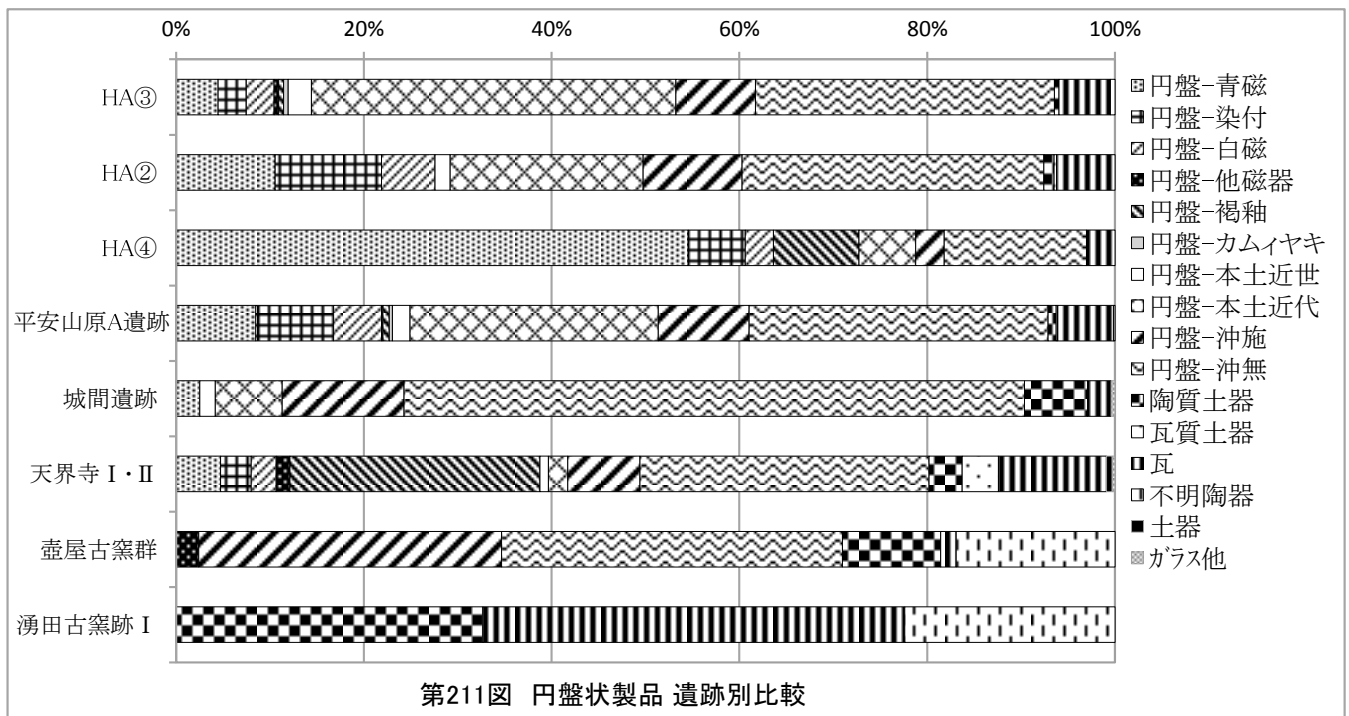
円盤状製品は出土総数590点で、湧田古窯跡I(1993)777点に次いで多い。



第210図 型紙地紋 地区・屋敷別比較

第143表 馬蹄形焜炉 出土遺跡一覧

番号	遺跡	所在	発行年
1	平安山原A遺跡	北谷町	2016
2	安仁屋トゥンヤマ遺跡	北谷町	1992
3	玉代勢原遺跡	北谷町	1993
4	大山前門原第一遺跡	宜野湾市	2012
5	嘉数トゥンヤマ遺跡	宜野湾市	2009
6	喜友名グスク	宜野湾市	1999
7	普天間古集落ほか	宜野湾市	2015
8	城間遺跡	浦添市	1992
9	喜友名前原第一古墓群	浦添市	2007
10	真志喜ウンサクモ	浦添市	2002
11	伊良波西遺跡	豊見城市	1996
12	(首)上の毛	那覇市	2005
13	(首)淑順門地区	那覇市	2006
14	(首)城郭南側下地区	那覇市	2004
15	(首)真珠道跡	那覇市	2006
16	(首)下之御庭	那覇市	2001
17	(首)御内原北地区	那覇市	2010
18	天界寺I	那覇市	2001
19	天界寺II	那覇市	2002
20	小緑村跡	那覇市	2014
21	壺屋古窯群I	那覇市	1992
22	湧田古窯跡II	那覇市	1995
23	湧田古窯跡IV	那覇市	1999
24	渡地村跡	那覇市	2007



100 点以上出土した遺跡としては首里城跡下之御庭（2001）318 点、天界寺跡 I・II（2001・2002）364 点、渡地村跡（2007）274 点などの琉球王府関連遺跡、壺屋古窯群 I（1992）104 点、湧田古窯跡 I（1993）777 点などの窯業関連遺跡、城間遺跡（1992）236 点、普天間古集落（2015）127 点で、本遺跡と同じ集落遺跡があげられる。遺跡別の円盤状製品の組成をみると琉球王府関連の天界寺跡 II では褐釉陶器、渡地村跡では青磁の割合が高く、窯業関連の湧田古窯跡では陶質土器と瓦が大半を占め、壺屋古窯群では沖縄産施釉・無釉陶器がほぼ同じ割合を示す。本遺跡では沖縄産無釉陶器と近代本土産磁器の割合が高いが、青磁・白磁・染付などの出土数も他より多い。地区別にみると HA ④では中国産が 50%、沖縄産無釉陶器 28%を占め、HA ③・HA ②では沖縄産無釉陶器。本土産近代磁器が大半を占めるが、HA ②では青磁・染付の割合が高くなるようである。首里城跡御内原北地区（2013）では 17C 前半とされる造成層からの中国産褐釉陶器が多いことなどを加味すると、本遺跡の円盤状製品は中国産を主体とする時期と沖縄産無釉陶器・本土産近代磁器を主体とする 2つの時期に分かれ、前者が HA ④、後者が HA ③・②に見られ、HA ②は他の遺物と同様に 2つの時期が重なると思われる。大きさをみると城間遺跡では大きさは 3～5cm 台が主、首里城跡 - 下之御庭（2001）では 3.0cm 台、湧田古窯跡 I（1993）では 4～5cm 台が多い。本遺跡も 3.0～5.0cm 台が多い。

脊椎動物遺体：前節の示したようにウシ・ウマの平面分布に偏りが見られ、他の遺物の分布から、Ⅲ期に居住域と耕作域の分かれるようである。これは島津侵攻後の時期とも重なり、自然派生的な土地利用の変化というよりは琉球王府の施策に起因する可能性が考えられる。また、近代のブタ骨の傷痕検出また、沖縄産無釉陶器の壺（第 22 図 5）からのブタ油の検出、ヤギ骨の出土などはⅣ・Ⅴ期の食料事情を具体的に示し、出土遺物から当時の証言を裏付けるものである。

人骨：HA ②と HA ④で検出された人骨は人骨の分析や検出の状態から 3つの時期の可能性が想定された。

a) 貝塚時代後期前半：1～3号（HA ② H4）人骨から下顎切歯 4本の抜歯、5号（HA ② H3）・7号（HA ② H20）は形質が短頭・低顔の持つもので、貝塚時代後期と考えられる。抜歯の習俗は貝塚時代後期の中でも宜野湾市安座間第一遺跡や木綿原遺跡・古座間味貝塚・大当原貝塚 C 地点など前半の時期で検出されている<sup>(註15)</sup>。

b) グスク時代：人骨 11（HA ② H 3）は埋葬形態からグスク期に属すると考えられ、伊礼原 D 遺跡と同様な形態がある。

c) 15～16C 代：HA ④人骨 12 は集落（南側の柱穴の集中）とは反対の北側で検出され、刃物を伴い、白骨化の途中で埋葬されたことなど謎が多い。

<まとめと課題>

① 本遺跡は近代平安山集落にあたり、近代遺物も多数発見され、祝女殿内及びその周辺の屋敷も確認でき、当時使用



図版 142 壺内検出ブタ油(1.5kg)

していた本土産近代陶磁器・沖縄産陶器も多数得られたことにより、『北谷町の地名』や『北谷町史』の記録された事象についても証左され、米軍基地摂取以前の村落の様子が明らかにされた。

- ② 本遺跡は貝塚時代後期から近代まで長期的に砂丘地に住み続け、近代以前の遺物包含層は明確には確認できないが、各時期の遺物の平面分布により、集落が展開していく様子が具体化された。近世期に遺物の平面分布から居住域と耕作地と区分が明瞭に分かれたことは本遺跡の成果といえる。
- ③ 特に脊椎動物遺体の平面分布は貝塚時代後期から近代までの食料の変遷もより具体的になり、移入されたとされるウシ・ブタ・ニワトリが近世、ヤギが近代であることがわかった。本遺跡は全体的に魚類遺体の出土が僅少で漁撈への依存度が低いことが窺えた。貝類遺体はⅣ・Ⅴ期にはマガキガイを主に採取していた。
- ④ 脊椎動物遺体の分析から近代のブタ・ウシ骨に解体痕から確認され、金属器の使用や解体方法が想定された。ブタ油の検出から使用された沖縄産無釉陶器の壺の形状が明らかになった。
- ⑤ 沖縄産無釉陶器のうち、ウワーフルで使用された鉢（第22図3）、ヤギ・ブタの検出された甕（図版7）など器種がわかり、遺跡から出土する器種がより具体化されるであろう。
- ⑥ 近世の湧田窯産の埴・瓦質の播鉢、煙管・ヤコウガイ製匙・簪などのほか、薩摩焼きの甕や肥前の陶磁器があり、その中には東南アジアあるいはヨーロッパ輸出用モデルの碗や皿が出土した。当時の平安山集落が、沖縄の村落集落の中でも財力があることを想起させる。
- ⑦ 近世・近代集落遺跡は第140表に示したように高いところに位置するが、標高5m前後の沖積低地に立地する平安山原A遺跡をはじめ、キャンプ桑江北側の遺跡など稀である。その原因一つとして、耕作地と水量のある河川（ナガサ）など、自然地形に起因するのでものであろうか、今後の課題である。
- ⑧ 鍛冶関連遺物（羽口・炉壁・鉄滓・焼土）得られており、鍛冶遺構のあった可能性が高く、農具の生産の可能性が想定される。
- ⑨ 遺跡からはあまり確認されていない植物の種子（ソラマメ・エゴマ）の検出があり、近代農業の栽培植物の一端が窺えた。
- ⑩ 清代には中国徳化窯の小碗が多く得られ、その後の沖縄産施釉陶器や本土産近代磁器でも小碗が多くなることに関連するのか。また、陶質土器の急須・本土産陶器の土瓶など喫茶関連遺物の時期や使用や変遷が今後の検討課題である。
- ⑪ 灰釉碗（Ⅰ類）は本遺跡・平安山原B遺跡・小堀原遺跡でみると<sup>(註16)</sup>碗の約3割を占めるが、HA③の内陸側に所在する仲村渠でも多く得られ、本土産磁器が僅少である等、古い様相が確認できた。しかし、窯跡である那覇市壺屋古窯跡Ⅲ・Ⅴでも溶着した灰釉碗が得られ、灰釉碗の製造期間の時期が不明瞭で、下限については今後の課題である。
- ⑫ 砂丘に含まれている貝殻からその形成は4118±27BPから1620±23BPまで幅があることがわかった。

#### <註>

- 註1：南風原町教委,2005,「津嘉山古島遺跡・仲間村跡A地点・仲間村跡B地点・津嘉山クボ一遺跡」,『南風原文化財調査報告書』第4集
- 註2：喜友名グスクでは貝塚前期・後期土器がわずかに得られている。
- 註3：くびれ平底系土器にはアカジャンパー式土器とフェンサ下層式土器があり、本遺跡のものは底部を厚さと大きさで分類を試みたが、明瞭な傾向は得られなかった、今後の検討課題としたい。
- 註4：4409SXは幅約8m、深さ1.2mの内陸側に深くなるもので泥炭層、主に貝塚後期の遺物が出土、性格は不明
- 註5：勝連城跡で出土、タカラガイ製錘の上限とされている。
- 註6：1617年に薩摩・島津藩に懇請し、3人の朝鮮人陶工連れて帰り、湧田において陶法を指導。
- 註7：平田典通は1670年に中国に渡り、1673年に帰国。
- 註8：平安山原B遺跡（2015）で壺屋古窯群Ⅲの灰釉碗が74.3%、平安山原B遺跡8.7%の比較がある。
- 註9：灰釉碗の生産年代は知念勇（1988）・池田榮史（2011）・津波古聡（1986）・家田淳一（2000）の論考がある。
- 註10：「壺屋焼近代百年のあゆみ」2008 壺屋焼き物10周年記念特別展、壺屋焼物博物館
- 註11：宜野湾市史、ウワーフルシー「行事の時などは、甕に保存してある豚のソーキ骨（アバラ骨）でだしを取った」壺の中のブタの骨が検出され、民具で「塩付け壺」と呼称されるタイプである
- 註12：「首里城跡「御内原北地区」発掘調査報告書Ⅰ」で提示。p177 沖縄産無釉陶器の中に初期壺屋「碗」、天目模倣碗もあり。
- 註13：沖縄県埋文,2001,『天界寺跡Ⅰ』,沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集の第44図15
- 註14：「鏡水土砂場原A遺跡」（2010）の報告で推察。
- 註15：新里貴之,2011,「南西諸島における先史時代の墓制（Ⅲ）—沖縄諸島—」,地域政策科学研究・鹿児島大学大学院人文社会科学研究所, No.8,P101-127 鹿児島大学大学院
- 註16：小堀原遺跡（32%）、平安山原B遺跡（21.8%）という結果がある。平安山原B遺跡（2015）P307



参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『沖縄県立博物館 復暦30周年記念特別展 港川入展』	2002	沖縄県立博物館	環境通史
『北谷町史 第二巻 資料編1 前近代・近代文獻資料』	1986	北谷町役場	環境通史
『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗上』 ※文中では『町史3』	1992	北谷町役場	環境通史・近代遺構遺物
『北谷町史 第一巻 通史編』	2005	北谷町教育委員会	環境通史
『北谷町の遺跡』	1994	北谷町文化財調査報告書第14集	環境通史
『キャンパスを返還に伴う試掘調査』	2005	北谷町文化財調査報告書第23集	環境通史
『北谷町の地名』 ※文中では『地名』	2006	北谷町文化財調査報告書第24集	環境通史
『伊礼原遺跡』	2007	北谷町文化財調査報告書第26集	環境通史
『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第27集	環境通史
『伊礼原E遺跡』	2010	北谷町文化財調査報告書第31集	環境通史・石器
『平安山原B遺跡』	2015	北谷町文化財調査報告書第37集	環境通史・石器
『平安山原E遺跡』 ※文中では『平上誌』	2010	平安山原土郷友会	層序・近世以前遺構他
『上勢頭誌 下巻 長春・人物編』 ※文中では『上勢誌』	1998	日子上勢頭郷友会	近代遺構遺物
『北谷町史 第四巻 資料編3 新聞集成』	1985	北谷町役場	近代遺構遺物
『北谷町史 別巻 近代統計資料』	1987	北谷町役場	近代遺構遺物
『北谷町史 第五巻(上)(下) 資料編4 北谷の戦時体験記録』 ※文中では『町史5』	1992	北谷町役場	近代遺構遺物
『戦時体験記録』 ※文中では『戦記』	1995	北谷町役場	近代遺構遺物
『北谷町史 第一巻附録』	2005	北谷町教育委員会	近代遺構遺物
『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』	2007	亘野湾市文化財調査報告書第39集	近代遺構遺物
『特東・琉球の伝統玩具/琉球の塗物』	1973	琉球文化社/「琉球の文化」第三号	漆器
『沖縄の伝統産業』	1981	琉球銀行調査部編/新報出版	漆器
『沖縄の暮らしと民具』	1982	上江洲均/慶友社/考古民俗叢書19	近代金属製品
『琉球諸島の民具』	1983	上江洲均・神崎宣武・工藤貞功/未来社/民族文化双書2	近代金属製品
『日本民具辞典』	1997	日本民具学会編/ぎょうせい	近代金属製品・石臼
『喜田盛遺跡』	2011	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第59集	近代金属製品
『平敷屋古島遺跡』	1991	勝連町の文化財第13集	近代金属製品
『屋取集落に生きる』	2008	沖縄市文化財調査報告書第34集	近代金属製品
『近代沖縄の新聞広告等による新たな酒類の登場と泡盛(予備的考察)』	2014	萩尾俊章/沖縄県教育委員会/沖縄史料編集紀要第37号	ガラス瓶
『琉球ガラス工芸の文化』	1989	高良松一/沖縄県立博物館紀要第15号	ガラス瓶
『盛岡の地中から発見されたガラス瓶』	2011	神原雄一郎/平成23年度遺跡の学び館学芸講座「発見された盛岡のまち」1	ガラス瓶
『わが街熊谷遺跡めぐり 遺跡出土品展』	2014	熊谷市立江南文化財センター/テーマ展解説書第16集	ガラス瓶
『ガラス瓶の考古学』	2006	桜井雅也/六一書房	ガラス瓶
『びんの話』	1990	日本孝造/社団法人日本能率協会	ガラス瓶
『リターンナブルびんの話』	2006	戸部昇/リサイクル文化社	ガラス瓶
『泡盛ブック』	2002	田崎聡/荒地出版社	ガラス瓶
『沖縄の神と食の文化』	2003	赤福政信/青春出版社	ガラス瓶・近代化・ノロ
『上勢頭古墳群』	1996	北谷町文化財調査報告書第16集	ガラス瓶
『宮国元島上方古墳群』	2013	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第66集	ガラス瓶
『第三軍司令部津嘉山壕群・津嘉山北地区旧日本軍壕群』	2008	南風原町文化財調査報告書第7集	近代日用品
『津嘉山北地区旧日本軍壕群II』	2010	南風原町文化財調査報告書第8集	近代日用品
『図説江戸考古学研究典』	2001	江戸遺跡研究会/柏書房	石臼・本土産陶磁器・鉄製品
『小堀原遺跡』	2012	北谷町文化財調査報告書第34集	石臼・石器
『磐石・海底火山からのメッセージ』	2009	加藤祐三/八坂書房	軽石製品
『御細工所跡』	1991	那覇市文化財調査報告書第18集	瓦・硯・円盤状製品・煙管・貝製品
『沖縄の遺跡から出土する近代磁器―浦添の遺跡を中心に―』	1994	下地安広/南島考古第14号	本土産陶磁器
『沖縄県の製品の編年』	2000	家田淳一/九州近世陶磁学会10周年記念誌『九州陶磁の編年』	本土産陶磁器・沖縄産陶器
『いわゆるスラングマカイについて』	2002	宮城弘樹/壺屋民俗博物館紀要第3号	本土産陶磁器
『考古資料(3)大正2年の火災で焼失したセトモノ屋の店先』	2000	沼津市歴史民俗資料館資料集17	本土産陶磁器

書名・稿名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『企画展 掘り出された壺屋』	2001	那覇市立壺屋焼物博物館	本土産陶磁器
『印刷手のわん・さら・はち 平成18年度テーマ展』	2006	愛媛県立歴史文化博物館	本土産陶磁器
『古伊万里』	1988	平凡社/別冊太陽 63号	本土産陶磁器
『近世日本国家領域境界域における物質流通の比較考古学的研究』	2015	渡辺芳典他/鹿児島大学法文学部/科研費報告	本土産陶磁器
『砥部』	1977	伊予陶磁器協同組合	本土産陶磁器
『古砥部陶片文様集』	1995	津守淳二/砥部焼研究会	本土産陶磁器
『海を渡った陶磁器』	2004	大橋康二/吉川弘文館	本土産陶磁器
『世界に輸出された肥前磁器』	2010	九州近世陶磁学会	本土産陶磁器
『伊礼原D遺跡』	2013	北谷町文化財調査報告書第35集	本土産陶磁器・陶質土器・青磁・土製品
『薄田古窯跡Ⅱ』	1995	沖縄県文化財調査報告書第121集	本土産陶磁器・瓦質土器・円盤状製品・煙管
『天界寺跡(Ⅰ)』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集	本土産陶磁器・円・円盤状製品・煙管
『中城御殿跡(3)』	2012	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集	本土産陶磁器
『壺屋古窯群Ⅰ』	1992	那覇市文化財調査報告書第23集	本土産陶磁器
『壺屋古窯群Ⅱ』	1995	那覇市文化財調査報告書第27集	本土産陶磁器
『壺屋古窯群Ⅲ』	1997	那覇市文化財調査報告書第38集	本土産陶磁器・沖繩産陶器
『垣花村跡』	2009	那覇市文化財調査報告書第78集	本土産陶磁器
『鏡水土砂場原A遺跡』	2010	那覇市文化財調査報告書第83集	本土産陶磁器
『渡地内跡』	2012	那覇市文化財調査報告書第91集	本土産陶磁器・貝製品
『城間遺跡』	1992	浦添市文化財調査報告書第19集	本土産陶磁器・沖繩産陶器
『堂平窯跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)	本土産陶磁器
『椿城跡』	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)	本土産陶磁器
『租原遺跡』	2009	和泊町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	本土産陶磁器
『大学院院理学研究所Ⅱ期棟地点』	1998	東京大学埋蔵文化財調査室/東京大学構内遺跡調査研究年報2	本土産陶磁器
『福鉢福年からみた近年琉球窯業の展開』	1987	安里進他/名議市博物館紀要『あじま』第3号	沖繩産陶器
『琉球近世窯業史考一築構造の検討一』	1995	池田榮史/琉大アジア研究創刊号	沖繩産陶器
『沖繩産陶器に関する基礎研究(Ⅰ)』	2010	木村謙介/壺屋焼物博物館紀要第11号	沖繩産陶器
『琉球陶器の来た道 合同企画展』	2008	那覇市立壺屋焼物博物館	沖繩産陶器
『琉球陶器の来た道 合同企画展』	2011	那覇市立壺屋焼物博物館・那覇市立壺屋焼物博物館	沖繩産陶器
『沖繩のやまもの』	1998	佐賀県立九州陶磁器文化館	沖繩産陶器
『シメグ堂遺跡』	1985	沖縄県文化財調査報告書第67集	沖繩産陶器・貝製品
『喜友名貝塚・喜友名グスク』	1999	沖縄県文化財調査報告書第134集	沖繩産陶器
『薄田古窯群Ⅳ』	1999	沖縄県文化財調査報告書第136集	沖繩産陶器・瓦質土器・貝製品
『沖繩の陶器類関係資料調査報告書』	2002	沖縄県教育委員会/沖縄県史料調査シリーズ第三集	沖繩産陶器
『壺屋古窯群Ⅴ』	2005	那覇市文化財調査報告書第101集	沖繩産陶器
『後兼久原遺跡』	2003	北谷町文化財調査報告書第21集	瓦質土器・青磁・土器
『15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』	1982	小野正敏/日本貿易陶磁研究会/貿易陶磁研究NO2	染付
『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)一』	2010	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集	染付・青磁・白磁・褐釉半練土器・埴
『天界寺跡』	2000	那覇市文化財調査報告書第43集	染付
『大宰府出土の輸入中国磁器について』	1978	森田勉・横田賢次郎/九州歴史資料館/研究論集4	青磁・白磁
『14～16世紀の青磁碗の分類』	1982	土田秀夫/日本貿易陶磁研究会/貿易陶磁研究NO2	青磁
『北谷城』	2010	北谷町文化財調査報告書第32集	青磁
『14～16世紀の白磁の分類と編年』	1982	森田勉・横田賢次郎/九州歴史資料館/研究論集4	白磁
『陶磁器が語るグスク時代の酒器』『琉球・東アジアの人と文化上』	2000	金武正紀/高宮廣衛先生古希喜念論集刊行会	褐釉半練土器
『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)一』	1998	沖縄県文化財調査報告書第132集	褐釉半練土器
『琉球列島における窯業生産の成立と発展』	2003	新里亮人/考古学研究会/考古学研究49-1	カムイヤキ
『カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群』特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島	2007	新里亮人/大和書房/東アジアの古代130号	カムイヤキ
『沖繩の陶器一技術と化学一』	2000	照屋善義/平山印刷 with なんくるプロ	カムイヤキ
『グスク時代開始期の土器編年をめぐる』	2004	池田榮史/琉球大学法文学部考古学研究室/琉球大学考古学研究集録第5号	土器
『沖繩』『概説 中世の土器・陶磁器』	1995	安里進/中世土器研究会	土器

書名・稿名	発行人	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』	2003	沖縄県教育委員会	土器
『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書』	1979	沖縄県文化財調査報告書第23集	土器・貝製品
『安仁屋トウヤマ遺跡』	1992	沖縄県文化財調査報告書第105集	土器
『喜如嘉貝塚』	1994	沖縄県文化財調査報告書第114集	土器
『渡地村跡』	2007	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集	土器・円盤状製品
『真志喜森川原遺跡』	1994	宜野湾市文化財調査報告書第18集	土器
『大山前門原第二遺跡』	1999	宜野湾市文化財調査報告書第30集	土器
『糸敷城跡』	1991	玉城村文化財調査報告書第1集	土器
『銘苅原遺跡』	1997	那覇市文化財調査報告書第35集	土器
『伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡』	2014	北谷町文化財調査報告書第36集	土製品
『琉球出土銭貨の研究』	2008	宮城弘樹/出土銭貨研究会/出土銭貨第28号	銭貨
『日本出土銭貨総覧』	1996	永井久美男/兵庫埋蔵銭調査会	銭貨
『今帰仁城跡発掘調査報告I』	1983	今帰仁村文化財調査報告書第9集	銭貨・鉄製品
『潮田古窯跡(Ⅰ)』	1993	沖縄県文化財調査報告書第111集	硯・円盤状製品・煙管
『首里城跡・壺泉門跡・福刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書一』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集	硯・円盤状製品・煙管
『円寛寺跡』	2002	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集	硯・円盤状製品・煙管
『知念城跡Ⅱ』	2010	南城市文化財調査報告書第8集	円盤状製品
『天界寺跡Ⅱ』	2002	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集	円盤状製品・煙管
『中城御殿跡』	2013	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第67集	円盤状製品
『首里城跡一御内原北地区発掘調査報告書(2)一』	2013	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集	煙管
『シンボジウム VOCと日蘭交流』	2010	たばこ塩の博物館・江戸遺跡研究会・東京都江戸東京博物館	
『三倉神社内遺址受相間水利工程影響範囲考古発掘工作計画』	2004	李匡敏/台南県政府の委託を受け中央研究院歴史言語研究所が執行した研究報告	煙管
『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗 下』	1994	北谷町役場	羽口等
『沖縄の鍛冶屋 第三十八回企画展』	2010	沖縄県立郷土博物館	羽口等
『浦添ようどわⅢ 金属工房跡編』	2007	浦添市教育委員会/浦添市文化財調査研究報告書	羽口等
『大謝名カマジャラーガマ岩陰遺跡の鍛冶関連遺物』	1998	宜野湾市文化財調査報告書第29集	羽口等
『首里城跡一御内原西地区発掘調査報告書一』	2007	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第44集	埴
『伊礼原D遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第28集	鉄製品・貝製品
『勝連城跡』	1990	勝連町の文化財第11集	鉄製品・貝製品
『勝連城跡』	2011	うるま市文化財調査報告書第14集	鉄製品
『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』	2005	今帰仁村文化財調査報告書第20集	鉄製品
『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』	2007	今帰仁村文化財調査報告書第24集	鉄製品
『今帰仁城跡発掘調査報告V』	2011	今帰仁村文化財調査報告書第29集	鉄製品
『野国海岸発見の石器について』	1960	高宮広衛/嘉数学園沖縄短期大学/沖大論叢第1巻1号	石器
『石器論一横糸から縦糸へ一』	1977	佐原真/考古論集 慶弼松崎寿和先生六十三歳論文集 別冊	石器
『ケガニイシ』	1978	白木原和美/熊本大学法文学会/法文論叢41号	石器
『木製品を作り出した石器』	1991	平口哲夫/雄山閣出版/季刊考古学第35号	石器
『沖縄奄美岩石図鑑』	1988	加藤祐三/新星図書出版	石器
『図説石器入門辞典一縄文』	1995	鈴木道之助/柏書房	石器
『考古資料の岩石学』	2006	五十嵐俊雄/バリノ・サーヴェイ	石器
『名護・やんばるの地質』	2011	速沢壮一・渡邊康志/名護博物館	石器
『平安山原地区試掘調査』	2011	北谷町文化財調査報告書第33集	石器
『伊武部貝塚』	1983	沖縄県文化財調査報告書第51集	石器
『久良波貝塚』	1994	沖縄県文化財調査報告書第116集	石器
『北原貝塚』	1995	沖縄県文化財調査報告書第123集	石器
『平敷屋トウバル遺跡』	1996	沖縄県文化財調査報告書第125集	石器・貝製品
『清水貝塚』	1989	貝志川村文化財調査報告書第1集	石器
『南島貝文化の研究-貝の道の考古学-』	1996	木下尚子/法政大学出版局	貝製品
『兼久原貝塚発掘調査報告』	1977	本部町教育委員会	貝製品

『マツノト遺跡』	2006	等利町文化財調査報告書第28集	貝製品
『琉球・中国・日本・朝鮮 年号対照表』	2000	財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室	年号
『近代沖縄の寄留商人』	1982	西里喜行 / ひるぎ社	近代化
『糸満の民俗』	1974	沖縄県文化財調査報告書 / 沖縄県教育委員会	調味料
『楚南村跡ほか』	2012	うるま市文化財調査報告書第17集	風呂
『沖縄大百科事典』	1983	沖縄タイムス社	トイレ
『沖縄トイレ世替わり』	2000	平川宗隆 / ホーターインク	トイレ
『南島の民俗文化』	1987	上江洲均 / ひるぎ社	ノロ
『北谷町のノロ』	1997	北谷町文化財調査報告書第17集	ノロ
『真志喜石川第一遺跡・真志喜ノロ殿内指所遺跡発掘調査記録』	2000	宜野湾市文化財保護資料第50集	ノロ

参考 web サイト

web サイトページ名	アドレス	参考箇所
『独立行政法人造幣局 ぞうへいいきよく探検隊 日本の貨幣の歴史』	<a href="http://www.mint.go.jp/kids/page02.html#asuka">http://www.mint.go.jp/kids/page02.html#asuka</a>	近代銭貨
『かつしかデジタルミュージアム 近代銭貨』	<a href="http://www.museum.city.katsushika.lg.jp/kdm/index.html">http://www.museum.city.katsushika.lg.jp/kdm/index.html</a>	近代銭貨
『SIVER PATTERN Cotillion silver pattern』	<a href="http://www.silverpattern.com/Cotillion%20Silver%20pattern.htm">http://www.silverpattern.com/Cotillion%20Silver%20pattern.htm</a>	近代金属製品
『肥後守 = Higonokami 総論』	<a href="http://www.teshima-hp.com/knives.html">http://www.teshima-hp.com/knives.html</a>	近代金属製品
『アサヒ飲料 130年の歴史』	<a href="http://www.asahinryo.co.jp/entertainment/historybooks/history/1881.html">http://www.asahinryo.co.jp/entertainment/historybooks/history/1881.html</a>	ガラス瓶
『AGC 旭硝子 旭硝子ヒストリー』	<a href="http://www.agc.com/company/history/">http://www.agc.com/company/history/</a>	ガラス瓶
『アサヒグループホールディングス 歴史・沿革』	<a href="http://www.asahigroup-holdings.com/company/history/">http://www.asahigroup-holdings.com/company/history/</a>	ガラス瓶
『味の素グループの100年史』	<a href="http://www.ajinomoto.com/jp/aboutus/history/story/">http://www.ajinomoto.com/jp/aboutus/history/story/</a>	ガラス瓶
『Uttenaについて ヴテナ変遷史』	<a href="http://www.utena.co.jp/about-utena/history/index.html">http://www.utena.co.jp/about-utena/history/index.html</a>	ガラス瓶
『キョコマングループの歩み』	<a href="http://www.kikkoman.co.jp/corporate/about/history/01.html">http://www.kikkoman.co.jp/corporate/about/history/01.html</a>	ガラス瓶
『KINCHO 大日本除虫菊株式会社 金鳥の歩み』	<a href="http://www.kincho.co.jp/kaisha/ayumi/index.html">http://www.kincho.co.jp/kaisha/ayumi/index.html</a>	ガラス瓶
『サッポロビール 歴史・沿革』	<a href="http://www.sapporobeer.jp/company/history/index.html">http://www.sapporobeer.jp/company/history/index.html</a>	ガラス瓶
『株式会社シマムラ 会社の歴史』	<a href="http://www.olivex.co.jp/about_history.html">http://www.olivex.co.jp/about_history.html</a>	ガラス瓶
『瑞泉酒造株式会社 語り部の庵』	<a href="http://www.zuisen.co.jp/aboutus/legend/article_00.html">http://www.zuisen.co.jp/aboutus/legend/article_00.html</a>	ガラス瓶
『セーラー万年筆株式会社 沿革』	<a href="https://www.sailor.co.jp/profile/history/index.html">https://www.sailor.co.jp/profile/history/index.html</a>	ガラス瓶
『株式会社 布引醸泉所』	<a href="http://yoshinari.hustle.ne.jp/groupwork/company.html">http://yoshinari.hustle.ne.jp/groupwork/company.html</a>	ガラス瓶
『不易剛工業株式会社 フェキの歴史』	<a href="http://www.fueki.co.jp/history_syuuwazen.html">http://www.fueki.co.jp/history_syuuwazen.html</a>	ガラス瓶
『丸善株式会社 丸善の歩み』	<a href="http://www.maruzen.co.jp/corp/history/index.html">http://www.maruzen.co.jp/corp/history/index.html</a>	ガラス瓶
『桃谷順天館 歴史ミュージアム』	<a href="http://www.e-cosmetics.co.jp/history_museum/">http://www.e-cosmetics.co.jp/history_museum/</a>	ガラス瓶
『ロート製菓株式会社 ロート製菓の歴史』	<a href="http://www.rohto.co.jp/company/history/">http://www.rohto.co.jp/company/history/</a>	ガラス瓶
『NCM 業界の歴史』	<a href="http://www.jncm.co.jp/cosmetics/history">http://www.jncm.co.jp/cosmetics/history</a>	ガラス瓶
『日本ガラスびん協会 ガラスびんの歴史』	<a href="http://glassbottle.org/what/index.html">http://glassbottle.org/what/index.html</a>	ガラス瓶
『一般社団法人全国牛乳流通改善協会 宅配牛乳歴史資料館』	<a href="http://zenkaikyuu.or.jp/">http://zenkaikyuu.or.jp/</a>	ガラス瓶
『一般財団法人日本清涼飲料検査協会 清涼飲料よもやま話』	<a href="http://seiryoken.jp/link_soft_drinks.html">http://seiryoken.jp/link_soft_drinks.html</a>	ガラス瓶
『瓶：熊本市文化財日記』	<a href="http://kumagayasibunkazai.blog.so-net.ne.jp/archive/c2304360122">http://kumagayasibunkazai.blog.so-net.ne.jp/archive/c2304360122</a>	ガラス瓶
『アサヒシューズ 沿革』	<a href="https://www.asahi-shoes.co.jp/company/history.html">https://www.asahi-shoes.co.jp/company/history.html</a>	近代日用品
『歯科医療機器の吉田製作所 吉田製作所 100年の歩み』	<a href="http://www.yoshida-net.co.jp/company/100years.html">http://www.yoshida-net.co.jp/company/100years.html</a>	近代日用品
『トイレ博物館』	<a href="http://www.woodsste.net/remodel/HAKUBUTUKAN.html">http://www.woodsste.net/remodel/HAKUBUTUKAN.html</a>	近代日用品
『特定非営利活動法人日本下水文化研究会 分科会 屎尿・下水研究会』	<a href="http://sinyoken.sakura.ne.jp/index.htm">http://sinyoken.sakura.ne.jp/index.htm</a>	近代日用品
『尾崎信用金庫 貯金箱博物館』	<a href="http://www.amashin.co.jp/sekai/pl1.htm">http://www.amashin.co.jp/sekai/pl1.htm</a>	本土産陶磁器
『日本硬質陶器株式会社』	<a href="http://nekonore.jp/korea/oid/fukei/ynd/ymsn/toki.html">http://nekonore.jp/korea/oid/fukei/ynd/ymsn/toki.html</a>	本土産陶磁器
『古銭の世界 雑銭記』	<a href="http://kosennosekai.sakura.ne.jp/">http://kosennosekai.sakura.ne.jp/</a>	銭貨

# 報告書抄録

ふりがな	はんざんぼるいせき							
書名	平安山原A遺跡							
副書名	桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・平成21・平成22・平成23年度）							
巻次	-							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	島袋春美・山城安生・松原哲志・上地千賀子・呉屋広江・比嘉優子・北條真子・土岐耕司 樋泉岳二・黒住耐二・藤田祐樹・パリノ・サーヴェイ(株)・(株)文化財サービス							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2016年（平成28年）3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃〃	〃〃		m <sup>2</sup>	
はんざんぼるいせき 平安山原A遺跡	沖縄県 北谷町 字伊平 小字 平安山原	473260		26° 19' 32"	127° 45' 23"	20080107 ～ 20080229	700	土地区画整理事業に伴う 発掘調査
						20091001 ～ 20100225	2,400	
						20100819 ～ 20110221	3,900	
						20110719 ～ 20120131	3,700	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
はんざんぼるいせき 平安山原A遺跡		近・現代	屋敷跡(祝女殿内等) 道路跡(溝・石列等) 井戸跡 石組遺構 収納坑 食料残滓の廃棄痕跡	銭貨・鉄製品・ガラス瓶 円盤状製品・骨製品 日用品・石臼・軽石製品 瓦・瓦二次製品		種実同定 ：ヤマモモ・トウゴマ・ソラマメ  SK100 土器付着炭化物試料 ：239 ± 23		
		近世 ～ 貝塚後期	自然流路 通路状石列遺構 土留状石列遺構 溝状遺構 ピット・土坑 食料残滓の廃棄痕跡 人骨 犬骨	土器・カムイヤキ・青磁 白磁・染付・陶磁器 陶質土器・瓦質土器 土製品・簀・銭貨・硯 円盤状製品・煙管・石板 滑石・石製品・石器 羽口・鉄滓・焼土・埴 鉄製品・貝製品・骨製品		人骨 貝塚時代後期：短頭低顔・抜歯 グスク時代：長頭・刀子共伴  ビーチロックに含まれる貝類試料 ：1620 ± 23 ～ 4118 ± 27		
要約	<p>平安山原A遺跡は平成19・21・22・23年度に合計4回の発掘調査が行われ、米軍接收以前の戦前生活面及び近世以前の遺構面が検出された。戦前面においては、字平安山集落が良好な状態で発見され、特に集落の中心であった祝女殿内では、多様な家内施設と共に多くの近代遺物が出土した。また、照屋先生屋敷では収納坑と呼ばれる土坑から、戦中安置された遺物が多数出土し、ロードが入ったままの油甕も確認できた。近世以前の遺構は、その帰属時期が貝塚後期～近世と幅広く、各期の遺構面を明瞭に区別することはできなかったが、くびれ平底期には遺跡北側に偏在していた生活範囲が、グスク期に入ると遺跡全体に広がっていくことが確認された。近世に入ると居住域と耕作域が明瞭に分けられるようになり、近代に至るまで踏襲されている。また、貝塚時代に形成された自然流路に対しては、石列等の構造物を設けることで、自然環境をうまく利用しようという姿勢も窺えた。合わせて、各期における墓域があったことも判明した。中には鉄製刀子が刺さったままのグスク期女性の人骨等、非常に特異な事情を孕んだ遺構も検出された。遺跡下に広がるビーチロックについても含有物の年代測定を実施したところ、その形成過程の一端を窺うことができ、ナガサ川以北の平安山原全体の環境復原をするための一助となった。</p>							

---

---

北谷町文化財調査報告書 第38集

は ん ざん ばる  
**平安山原A遺跡**

—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度）—

編集：北谷町教育委員会

発行年：2016年（平成28年）3月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3159

印刷：光文堂コミュニケーションズ株式会社

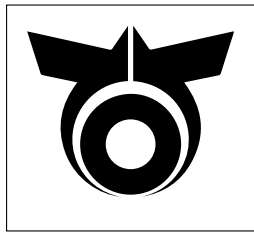
〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城577番地

TEL 098-889-1131

---

---





北 谷 町